伯爵の恋人

吉野華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
伯爵の恋人

【Ｎコード】
Ｎ１４７１Ｄ

【作者名】
吉野華

【あらすじ】
傲慢で冷酷なアディンセル伯爵と、その弟である温室育ちのアレックス。女遊びの激しい兄を軽蔑しながら、夢や純粋さを抱えて暮らしているアレックスなのだが……。

１２章では、ようやく取り戻した平穏な毎日を望むアレックスに、仕官予定の王子の愛妾候補シエラの純粋すぎる恋心が絡みつく。当惑しつつ、それほど悪い気がしない優柔不断なアレックス青年の前に、思いがけない客人が訪れ――。

第1話　伯爵の恋人

僕が初めて恋した相手は、伯爵である僕の兄さんの恋人だった。
彼女は金色の髪の綺麗な人で、譬えるなら芍薬の花。
勿論、僕は遠くから眺めているだけでよかったんだ。気持ちだって誰にも打ち明けなかったよ。
僕と兄さんは十二歳も年が離れていて、僕が子供の頃には兄さんはもうアディンセル伯爵家の若い当主だった。聡明で優秀で優しくて、皆に尊敬されていて、僕にとっても兄さんは本当に憧れの存在だったから、兄さんの大切な人を奪ってしまいたいだなんて、そんなことは想像することさえ憚られたんだ。
ときどき彼女と話をしたり、一緒に遊んだりできるだけで、僕はとても嬉しかった。
でもあるときから、彼女の姿を城で見かけることがなくなった。
不思議に思った少年の僕は、ある日庭園の花の庵でお茶を楽しんでいた兄さんにこうたずねた。

「兄さん、最近シェアを見かけませんね」

すると兄さんは答えた。

「シェア？　ああ…、あのあばずれか」

清廉であるはずの兄さんの唇から、あばずれなんていう不穏な言葉が返ってくるとは思わなかった子供の僕は、身じろぎもできずに息を飲んだ。
するとそのことに気がついた兄さんは、僕を安心させるために少し笑ってこう続けた。

「彼女なら、この城を去ったよ。何と言うか、まあ、別れたんだ」

だけど本当は、あのとき兄さんは彼女を始末したのだと、随分後になってから兄さんの側近が漏らしていた。

それは年末に恒例の連夜のパーティー行脚の最中、酒が抜けきらないうちに翌日の誰かのパーティーに出かけるという若い貴族たちにありがちな強行軍の合間に、あたかも何でもないことのように打ち明けられた話だった。

兄さんはそれまでにもシェアをはじめとする複数の女性と交際を重ねていたが、どの女性とも意外と長続きしないことは僕も知っていた。

兄さんの側近が言うには、兄さんは後腐れのない関係を好む割には、情が深く、丁寧で清楚で真面目な女性を好むために、女性たちは当然兄さんとの交際の先に未来を求めたがる。けれども兄さんはそうした女性たちの希望を面倒だと感じ、ある程度関係を楽しんでしまうと決まって彼女たちを捨てるのだそうだ。

僕にはあの優しい兄さんが、そんなことをするなんて、とても信じられなかったけど……。

「勿論、金を支払って解決した場合も多かったですよ。それも通常の手切れ金としては考えられない額の小切手をね。

でも彼女はそれでは納得しなかったんです。ですから、極めて後味の悪い顛末と相成った次第で」

その晩、同じ馬車に乗り合わせた兄さんの側近は、そう言ってうんざりだといったふうに肩を竦めてみせた。

「そうだったのか……」

爛れた大人の社会に足を踏み入れたばかりだった僕は、その残酷な

話の内容に、正直言ってとても戸惑っていた。
そんな僕を気遣うような調子で、側近は続けた。

「だったら娼婦を買えばいいだろうとアレックス様は思われるでしょう。私もどちらかと言えばそう思うんですが、しかしギルバート様はそうじゃないんです。あの方はどうにも、そうした女性たちを嫌っておいででしてね。潔癖と言うんでしょうか。それはまあ、あの方がお選びになる女性にもこよなく反映されるほどで。大抵、ギルバート様がお選びになるのは色も手垢もついていない純情な女性ばかりでしょう。世の中のことも、男のことも何も知らないようなタイプですよ」

「うん、シェアもそんな感じだったね。年上なのに素直で可愛かった」

「しかしそういうのは一度男を知ると、それ以外には何も見えなくなってしまう。彼女らはこちらの予想に違わず従順に、ギルバート様のことを白馬の王子か何かだと思い込んでしまうわけです。ギルバート様はそれがいいんだと仰せですがね。結局はそれが重くなって逃げ出すくせに……。ときには、その後始末をさせられるこちらの身にもなって欲しいものですよ。貴方の母親のときだって、貴方を出産されたすぐ後にギルバート様が、と……、ああ、いやいや、これは。弟君にお話しするべきことでもありませんでしたな……」

そして側近は、殊更に酔いがまわっているような素振りをしてみせたが、僕はその言葉を聞き逃さなかった。
そのとき僕は、十九歳だった。兄さんは三十一歳。
この側近は、いったい何を言っているんだ？
この僕は兄さんが、十歳かそこらの頃の子供だって言いたいのか？

わざとらしく酔いつぶれているような演技をする側近が、心底から酔っ払っていることを信じて、僕は馬車の外の夜景に目を移した。目的のパーティー会場はもう程近いようだ。雪が宵闇にちらちらと舞い、ライトアップされた古城が夜の中に浮かび上がって、幻想的な冬の情景が窓の外に広がっている。

「そんな馬鹿なこと、あるはずがないだろう」

世間には少なくとも温厚なことで通っている僕は、冗談めかしてそう呟いた。

この側近は名前をジェシカと言い、兄さんが幼少の頃から彼に仕えている昔からの腹心だった。

堅実にして忠実、滅私奉公という言葉が彼女ほど似合う人間を僕は知らなかったが、本当は彼女こそが誰よりも兄さんを愛しているということを、僕は知っていた。

彼女が兄さんが恋人だと言って時折連れて来る、すべての女を憎んでいることも。

瞼の裏に、今でも甦るシェアの姿……。

シェアはもう、彼女が言うように、本当に死んでしまっているのだろうか。

もしそうなら、果たしてあの美しいシェアを殺したのは、僕の知らない兄さんの非情さか、それとも浮名を流し続ける兄さんをそれでも想い続ける、ジェシカの哀しみのどちらだったんだろう。

僕は冷えた窓ガラスの向こう側に舞い落ちる雪の姿に、あまりにも世界が清らかだった少年時代の象徴である、恋しいシェアを重ねてため息を吐いた。

第2話　階下の庭園

春の日差しの降り注ぐ心地のよい午後のことだった。
二階の廊下の窓辺に肘をついて、ため息を吐くジェシカを見かけた。
重厚ながらも品よく体裁の整えられたアディンセル伯爵の居城には、何代か前の当主の手によって、花の咲く庭園が誂えられてある。
階下に広がるその美しい花の庭園に、兄さんが恋人の手をとって歩く姿が見えた。
金髪を背中に流し、薄桃色のドレスを着た、小柄で可愛らしい女性だった。
二人はときどき楽しげに笑いあって、少なくとも傍目からは、彼らが真実の恋人同士であるかのように見える。
どうせ夏が訪れないうちに、兄さんがあの女性を捨てるであろうことは分かっていたが、兄さんは何しろ貴公子然とした風体をしているし、誠実で甘い嘘を吐くことが得意であるようだった。
僕はジェシカの心情を察して、そっと彼女に近づいた。
何か気が紛れるような、気の利いたことを言おうと頭を巡らせたが、兄さんと年頃の変わらないジェシカがどんな話を聞いたら喜ぶのかということが思いつかず、気がつくと僕はこんなことを言っていた。

「兄さんが女ったらしだということを、予め教えてあげたらどうだろう。
つまりその、兄さんがああやって連れて来る女の人たち全部に」

するとジェシカは苦笑して、僕を見上げた。

「無駄ですよアレックス様」
「どうしてだい？
兄さんとつきあう女性たちは、そんなことは、実ははじめから承知

しているということ？」

するとジェシカは悲しげにかぶりを振った。

「なぜならば、彼女たちは閣下のことを心から信用しているからです。

以前……申し上げたことがあるかもしれませんが、ギルバート様は世慣れた女を好みません。ですから目の前の女が機知に富む計算高い女であるか、それとも心根の正直なうぶな女であるか、あの方は深い関係を持つ以前に見抜いています。

そして自分を心底から信じ、頼りにするそういう女性だけを、この城へと招き入れているのです」

「それでも兄さんは、すぐに嫌になってしまうんだよね。どんなに深く自分を愛してくれる女性であっても」

僕の言葉に、ジェシカは何も答えなかった。

ただ悲しげな眼差しをする彼女を、僕は見ていられなかった。

兄さんみたいな男をいつまでも想っているより、誰かもっと相応しい人をみつけてみたらどうだろうかということをここで言うべきかどうか逡巡とし、やっぱり言わないことに決めた代わりに僕はジェシカにこう言っていた。

「僕が兄さんなら、絶対ジェシカのことを選ぶのに。

だってジェシカは頭もいいし、仕事だってできるし、美人だし、それにとても……」

そう言いかけたとき、僕とジェシカの目があった。

それで僕は言いかけていた言葉を続けることがとても照れくさい気持ちがしたんだけど、ここでやめてしまったらあまり誠意というものがないように思ったので、僕は恥ずかしかったけれどもそのまま

こう続けた。

「……ジェシカは可愛いよ。すごく。
だからまるで自分が魅力的じゃないみたいに振る舞っているのが、
もったいないなって、前から思っていたんだ」

僕の言葉を聞いたジェシカは、最初少し驚いてみせ、それから笑顔
になり、吹き出して、そのまましばらく笑い続けた。
伯爵である兄さんの傍に仕え、普段は男顔負けの有能な武官でもあ
るジェシカが、まるで少女のように恥らって笑う姿はお世辞ではな
く本当に可愛かった。
それからやがて、彼女は目じりを手の甲で拭いながら僕を見上げた。

「アレックス様は、ギルバート様以上にお上手でいらっしゃる」
「え!?　いや、違うよジェシカ、僕は本当に……」
「ええ、分かっています。
アレックス様のお言葉、大変嬉しく、有難く、ジェシカの胸に染み
入りました。
あの小さなアレックス様に、そのように言って頂けるようになる日
が来たのだということを思いますと、自分が年を取ったのだという
ことを実感も致しますが、しかし嬉しいことに違いはありません。
ありがとうございます、アレックス様。
このお言葉を励みに……、私はこれからもギルバート様にお仕えし
ていくことができるでしょう」

そう言って清々しく微笑むジェシカの表情の端に、けれどもやっぱ
り拭えない哀しみがあることに僕は気がついてしまった。
誰かが悲しいことを抱えていたら、それをどうにかして取り除いて
あげたいと思うことは、人間として当然のことだろうと僕は思う。
だけど、ときにはそれが自分にはどうすることもできない問題であ

ることに気づかされて、落ち込んでしまうんだ。
そして僕らは並んで窓辺に寄りかかって、ぼんやり兄さんを階上から観察し、やがてそれに気づかれて叱責されるはめになった。
照れ隠しであろうとはいえ、恋人と手を繋いだ兄さんに悪し様に言われて、それでも笑顔でいられるジェシカのことを、僕は心から偉いと思ったよ。

第3話　初夜権（1）

「違うよ、そうじゃない」

執務机を挟んで対峙する兄さんに向かって、僕はかぶりを振った。

いま僕の心にあるものが、決して恋情なんかじゃないということを僕は言い張っていた。

僕の兄さんが初夜権を行使していることを知って、僕は少し取り乱していた。

昨今の世の中にあふれる不届きな道楽者たちのように、年がら年中その場限りの大して意味のない情熱に身を焦がし、偽りの愛を囁き、他人の女性を略奪することに喜びを覚える愚かな連中の仲間だと言わんばかりに僕を睨む兄さんの視線は鋭い。

「キャロルのことを、欲しいと考えているわけじゃありません。彼女のことを、兄さんが無理やり連れて来たって聞いたんです。だから……」

このとき兄さんと僕は、居城の兄さんの執務室で、珍しく言い争いのようなことを起こしていた。

僕が成人をしてからもう二度目の夏を迎えていた。アディンセル伯爵である僕の兄さんが、どういう人間であるかということを、否が応でも知らなければならない場面に遭遇するたびに、僕の心がどれほど傷ついていたかを説明しようとは思わなかった。

だけど、ローブフレッドをはじめとした六つの領地を所有する大規模領主である兄さんが、権力にものを言わせて無力な女性を次々と連れて来ては、一夜の相手をさせているということを知ってしまっては、僕には見て見ぬふりをすることはできなかったんだ。

僕は今回のキャロルという女性を速やかに解放することを、その要

求を何とか兄さんに承諾させるということを、先刻から頑張っていた。
僕は兄さんに、人々に憎しみを抱かれるような悪い存在になって欲しくないのだということを兄さんに伝え、彼を説得することを続けていた。
僕が子供の頃に信じていた、優しくて完璧だった兄さんに、戻って欲しい一心から。

「アレックス。女を無理やり連れて来たなど、それはとんでもない言いがかりというものだ」

誰もが聞き惚れる音楽的な調子で、兄さんは僕に言った。

「連中は率先して、娘どもをこの私に差し出しているのだよ。そもそもこの領内に生活する女のすべては、領主たる私の所有するものに他ならないということはおまえも知っての通りだろう。私は、只単に初夜権を行使しているにすぎぬ。アレックス、これは領主として然るべき正当な行為なのだ。だからそんなことを、おまえごときに非難されるいわれはない」

けれどもその声色とは異なり、兄さんの返答は、当初からまったく容赦のないものだった。
嘲笑交じりの当惑の顔を浮かべて、僕に敵意を示さないようにしてくれていることだけでも感謝をするべきだと、兄さんの傍らに控えているジェシカが目配せを送ってきている。分かっている。兄さんが、自分の気に入らない人間を、ときどき簡単に排斥してしまう残酷な領主であることを、僕だって子供じゃないんだからさすがにそんなことはもう分かっているんだ。
でも、ここでは僕が言わなければ誰も兄さんに意見を言うことなんてできない。兄さんの、ともすれば領民たちの人生さえも狂わせか

ねない所業を、その悪癖を正してあげることができるのは、僕しかいないということなんだ。
兄さんは長身で、所謂美男子と言って構わない容姿をしていたが、近頃の僕が何よりも兄さんから感じるのは、その流麗で涼しげな風貌とは表裏を共にする酷薄さだった。
両親の晩年の子供である僕は、彼らの顔を直接には知らないということもあって、子供の頃、僕の唯一の肉親である兄さんは、確かに僕にとって世界でもっとも頼りになる存在だった。
でも大人になるにつれて、兄さんが本当は僕が考えていたよりももう少し軽薄で、無責任な部分を持っている人だということを、成人してからはつとに実感しつつあった。
そして厄介なことに、そこには他者を征服することを生き甲斐にする強烈な支配者としての顔も共存しているのだ。

「でも、彼女はどう見たって、本気で嫌がっているじゃないですか」

ジェシカがやめろという視線を引き続き送ってきていることに気づかない懸命な素振りで、僕は兄さんに繰り返しそのことを訴えた。
そこにはキャロルという女性が、シェアに似ているということを、だから肩入れしているんだということを追求され、言っていることの正当性を疑われることを恐れている気持ちもあった。
しかし兄さんは黒髪を掻きあげ、多分に苛々した様子を見せながらこう言った。

「ふふふ、アレックス、アレックス……。
おまえという奴は、本当に幾つになっても困ってしまうくらい純情な奴だな。
嫌がって泣いている女に快楽を与え、最後には鳴かせてやることほど、甘美なこともないだろうに。
この年末には二十歳にもなるのにまだそのように甘いことをさも正

論のように平然と口にする、それだからこそ私としてはおまえのことが心配で、いつまでも手元に置いてやっているわけではあるがね」

「そのことには……感謝をしています、でも」

「であるならば、領民どものくだらん言いがかりを鵜呑みになどせぬことだよ。

何しろ連中は、ありもしない苦労をさもあったことのように語りたがる。自分たちがいかに不遇であるかということを、酒の肴に自慢しあうような連中なのだ。

おまえはよもや、兄であり主君であるこの私の言葉よりも、そんな下賤の輩どもの言葉を信用すると言うのか？

この兄の言い分は、連中の嘘泣きよりもおまえの心には伝わらぬかね？」

「いえ……」

「そうだろう。おまえはこの由緒あるアディンセル伯爵家の人間だ。子供のおらぬ私にもしものことがあれば、弟であるおまえこそがこの家の次の当主となる。

アレックス、幾ら子供じみた拙劣な正義感を振りかざそうとも、おまえとは、生来そういう立場の人間なのだよ。おまえは汚泥を這いずる奴らとは、生まれたときから違うのだ。その自覚を持ちなさい」

「……」

「アレックス、アレックス……子供のおまえの気ままをどれほど私が赦してきたか、内気なおまえが日々を安心して暮らしていくために私がどれほど心を砕いておまえの世界を守ってやっていたか、おまえはもう少し理解するべきだ。おまえが清らかで汚れない完璧な幸せの中で幼年期を過ごすことができたことが、誰のおかげであるかということをだ。

まったく、馬鹿な子ほど可愛いと言うが……。

さあ、分かったのなら、この話はもうおしまいだ。そうやって、いつまでも私の前で恨みがましい顔をしないでおくれ。

私は、聞き分けのない人間が嫌いなのだよ」

そして兄さんは優雅な動作で僕に背中を向けた。肩にかかる長い黒髪を払い除け、そのついでに、もうこれ以上話をするつもりがないというように、まるで子供をあやすかのような仕草で兄さんは僕に向かって軽く手を振ってみせた。

兄さんの僕に対する態度の中には、いまだに成人した一人の男に対するものとしては相応しくない、あたかも小さな子供を相手にしているかのような対応が多く見られた。この問題に関しては、僕がずっと以前から不満を抱くようになっていたことでもあった。

「……兄さんは、僕のことはいつまでも本当に子供扱いですね。年が離れているせいなんでしょうか。兄さんの僕に対する口ぶりというのは、弟に対するものと言うよりは、まるで自分の子供に言っているようにも感じます」

「何だと？」

僕が呟いた言葉がよほど彼にとって都合が悪かったのか、兄さんはその鋭い視線を再び僕に向けた。赤褐色の、普段は優しいけれどひとたびその気になれば、他人を威圧するということに慣れ切った目を。

僕はそれが少し恐かったが、大の男がそんなことで動じていては、いつまで経っても兄さんに一人前の男として扱って貰えないだろうと思い直し、勇気を出して兄さんを睨み返した。

僕は言った。

「兄さんは僕のことをいつまでも子供扱いしますが……。

でも、僕はもう兄さんが考えているような子供じゃない。

ねえ兄さん、僕は、兄さんが無類の金髪好きだということを知っているんですよ。偏執的な金髪好きだということをね……何しろ、兄さんがこれまでに連れて来られた女性のほとんどが、金髪女ばかり

なんだ。
だからそんなことには、嫌でも気がつく。
ねえ兄さん、初夜権なんてもっともらしいことをおっしゃっているけど、本当は単に金髪の女性あさりをなさりたいだけなんでしょう？
いえ……、本当はそれすら名目に過ぎないんでしょう。
本当は、兄さんは誰かの影を追っているんだ。綺麗な金髪をした、忘れられない誰かの影を」

僕はそう言って、さも兄さんのことを分かっているような口をきいたが、それは、兄さんの秘められた気持ちを見透かせるだけの洞察力が僕にあるということを言いたいわけではなく、実は単に僕のことだった。
僕こそは、今でも忘れられない初恋のシェアのことを、いつでも無意識に探していた。
シェアがもう生きてはいないんだろうということを、僕はそろそろ頭だけではなく、感情面においても理解し始めていた。恐らく兄さんの命令で、ジェシカが手にかけたんじゃないかということも、ちゃんと飲み込んで消化しているつもりだった。
兄さんに対しては腹立たしさを覚えることもあるけど、兄さんの命令に抗うことの許されないジェシカを恨むつもりはない。
僕が生きているこの世界では、権力のある者がすべてのことを思い通りにできるということ、家族も、恋人も、人間の生死さえも好きなようにできるということを、僕はもう理不尽だと喚き散らして拒否するだけの幼い者じゃなかったからだ。
だけど、それでもシェアと似た背格好の、長い金髪の女性を目にするたびに、僕はその人がシェアなんじゃないかと思わず確かめずにはいられなくなるんだ。
そのたびに彼女かもしれないと期待を抱くことが、どれほど自分を落胆へ導くことであるかを思い知ってからは、シェアに似ていると感じる目の前の女性が、きっと違う人であろうことを前提とするよ

うにはなった。心に予防線を引いて、その人がシェアでないことが当然であることを予め自分に分からせるんだ。
でも、シェアを探すこと自体は、これからも当分やめることはできそうになかった。

第4話　初夜権（2）

「アレックス……」

兄さんは、苦しげに顔を歪めていた。
それは兄さんの、僕に内心を言い当てられたことに対する動揺が、表情を隠しきれないほどであったことを意味していると思われた。

「誰にそんなくだらない話を吹き込まれたんだ……？　ジェシカか……？」

兄さんの怒りの矛先が、彼の傍らに控えるジェシカに行きそうだったので、僕はそれを慌てて阻んだ。

「いいえ、違います。ジェシカは関係ない。
だって兄さんが金髪好きであることは、見ていればすぐに」

僕の言葉を遮って、兄さんはめずらしく感情を露わにしてこう言った。

「だったらどうだと言うのだ。仮におまえの言う通り、私が誰か忘れられない女の影を追っているとして、だったらどうだと言うのだ。アレックス、おまえは私を笑い者にするつもりか？
いつまでも手に入らない女の尻を追いまわす、愚鈍な男であると指を差したいのか？
それとも私の弱みでも握って、勝ち誇りたいのか？　私を罵りたいのか？」

「いっ、いえっ、違います、そうじゃ……」

「だが生憎だなアレックス。生憎とこの私は、おまえが後生大事に

抱え込んでいるような生温い世界の住人ではないのだよ。
アレックス、私はおまえとは違う。
私はこちらが思い通りにできない女を追い続けるなどということはしない。断じてな」

そして兄さんは憤然として執務机を叩いた。
僕はもう小さな子供ではないので、その程度の脅かしに怯えるわけではなかったけど、それならどうしてそんなにも態度を取り乱されているのかについて、更にたずねる勇気はなかった。

兄さんの部屋を出てすぐ、ジェシカに呼び止められた。
彼女は兄さんの機嫌が頗る悪いということを、少々恐がっている様子だった。
確かに、兄さんは滅多に声を荒らげるような人ではないから、さっきのような態度は単純に恐いというだけではなく、女性であるジェシカにとっては身の危険さえ感じてしまうものなのだろう。
頬にかかるジェシカの茶髪が震えているので、僕は彼女を安心させてあげるために少し彼女と話をした。
勿論、さっきの話が兄さんを慕っているジェシカの気持ちを考えない内容であったことを、彼女に対して申し訳なく感じている気持ちもあった。

「ごめんよジェシカ。兄さんが、あんなに憤慨されるとは思わなかったんだ。
忘れられない女の人がいるという指摘については、あれは本当は兄さんのことじゃなくて、僕のことだったんだよ。僕は、自分のこと

を当てはめて言っただけなんだ。
だから、ジェシカはあんまり気にしないでね。
兄さんだって、自分を僕なんかと一緒にするなって言って怒ったんだし」
「いえ……、私のほうこそ申し訳ありません。お急ぎのところ、大した用もないのにお呼び止めを致しまして」
「いいんだよ」
「アレックス様は、やはり牢の女性を解放されるおつもりなのですか？」
「うん、これからすぐに。
日が暮れるまでには、村落のほうに送り届けてあげようと思う。
何しろ、彼女にはもうじき結婚を控えている恋人がいるんだ。生涯を共にすることを、約束している相手がね。
それなのに初夜権なんて、僕に言わせればとんでもないことだよ。
いつの時代も、寝間を共にするのは、愛しあう者同士でなくてはいけないものなんだから。
とにかく何かが起こってからでは、遅いからさ」
「左様ですね」

それから僕は、その足で城の地下牢に閉じ込められているキャロルのもとへ向かった。あんなやり取りをしてしまったからには、兄さんが今夜にでも彼女を寝室に呼ぶどころか、僕への見せしめに彼女を殺してしまうかもしれないと思ったからだ。
兄さんに逆らうことは心苦しかったが、泣いて嫌がる女の人の存在を知りながらそれを見捨てておくことは、僕にはできなかった。
堅牢な石造りの地下牢の衛兵や拷問吏が僕に対する敬礼の姿勢を取り続ける中、僕はキャロルの入れられている独房の鍵を開いた。金髪の愛らしい女性が一人、この部屋に閉じ込められていることは確かなのに、扉を開いてもどうしてか彼女が僕の前に姿を現すことはなかった。

「キャロル？　僕だよ、アレックスだ。寝ているのかい？　実は、今夜にもアディンセル伯爵が君をお召しになるかもしれないんだ。だから、今のうちに君を逃がしてあげるから……」

灯りひとつない暗い部屋の片隅に、返事の代わりに何かの物音が聞こえた。

僕は側にいた衛兵にランプで室内を照らすように言いつけ、そちらのほうに目を凝らした。

その闇の中には白い脚が……女性の太股と思しき美しい両脚が浮かび上がっていた。それらはあまりにも大胆に開かれていて、両脚ともが何かよほどがっしりしたものを抱え込み、絡みついているように見える。

それが人間の……成人男性の胴であることに気がつくまでには何秒かかかり、それからその身体の主が僕の見知った人物であることに気がつくまでには、もう数秒かかることになった。

「あっ…、あっ……」

熱を帯びた女性の声と、生々しい息遣いが室内に満ちていた。

「伯爵様っ……、伯爵様っ……」

「そう、いい子だ」

窓ひとつない暗闇の中で衣服をつけたままキャロルに覆い被さっている男、それは紛れもなく僕の兄さんだった。

「女はそうでなくてはいけない」

僕はそれを目の当たりにしたことで、呆然と口を開けたまま立ち尽くした。
兄さんの不興を買うであろうことを分かっていながら、それでもキャロルをひと目見て助けてあげようと思い立ったのは、何よりも彼女がシェアに似ていたから。
そしてキャロルの金色の綺麗な後ろ髪や、彼女の何気ない横顔を見かけたとき、僕はやっぱり初恋のシェアのことを思い出していたから。
キャロルがシェアに、僕が好きだったシェアにとてもよく似ていたから――――。

「兄さん……」

僕は、頭に血がのぼっていくのを感じていた。

第5話　初めての恋人

あるとき僕は、恋をした。
彼女に出会ったのはアディンセル伯爵である兄さんが主催した盛夏のパーティー。
居城一階の厳かな広間には、通常通り兄さんの取り巻きの貴族の姿が多かったが、その日は兄さんが所有する主だった都市の商工会議の面々や、通商関係者の姿も目立った。
手軽に食べられる料理や酒が次々と振る舞われ、あちこちでは上品な歓談の輪ができあがっていた。兄さんの周りには様々な理由から彼の歓心を買おうとする人々が集まっていて、人の流れが入れ代わり立ち代わり途切れることがなかった。給仕係たちはそれらを含む広間を流動するすべての客人を追跡し、彼らの皿やグラスが空にならないために忙しく動きまわっていて、楽士たちは近頃の兄さんのお気に入りである、南国情緒漂う異国の楽曲を延々と奏でていた。
周囲の勧めもあって少々酒を飲みすぎてしまった僕は、オールダス卿との会話が終わったのを区切りに側近のカイトとも別れ、夜風に当たって頭を冷やそうと一人広間の横のテラスに足を運んだ。
仄白い色調の古いテラスには、パーティーに疲れた客人が一息つくこともできるゆったりとしたテーブルセットやベンチがあって、庭に続く階段を下りれば城内の薔薇園に続く小道がある。
もしテラスに先客がいるようなら、薔薇園にあるベンチのところまで散策しようと考えながら、僕はテラスに続くアーチを潜り抜けた。
そこに、彼女はたたずんでいたんだ。
彼女はテラスともよく調和した白と薄紫色のパーティードレスに身を包み、癖のない金色の髪を背中に流した可愛らしい女性だった。
その女性が、名のあるどこそこのご令嬢と言うよりは、恐らく兄さんのご機嫌を取りたい、彼の心象をよくしたいグループの誰かに連れて来られた哀れな犠牲者なんだろうことは分かっていた。

伯爵のパーティーに呼ばれることを栄誉と思っている貴族たちの中には、自分たちと時間を共有する人間として相応しくない身分と思われる人間に対して辛辣な態度を取ることがある。彼女は他でもない主催者がもっとも歓迎する客人である若い女性であるために、それほどあからさまな目にはあっていないようだったが、それでも彼女が貴族間の暗黙のルールを理解しきれずに、時折密やかな失笑を買っている様子は見受けられたからだ。

つまり僕は、このパーティー会場でひと目彼女を見たときから、彼女のどことなくシェアを思わせる風貌に惹かれるものを感じていて、ときどき彼女が無事であるかどうかを横目で確かめながら過ごしていた。

兄さんに選ばれる女性たちはいつでも金髪とは限らないが、しかし大抵は金髪だったので、僕は彼女が兄さんの一夜の相手に選ばれはしないかということを、内心では少しはらはらしていたというわけだ。

だけどその夜、兄さんはその女性よりももう少し落ち着いた感じの、別の金髪女性を選んでいて、今夜の彼はその真面目そうな女性に合わせた誠実で物分りのいい男を演じるのに夢中になっていた。

だから、僕の目の前にいる彼女が何事もなく無事に家路につけることが、その時間頃にはそろそろ確定していた。

と言って、僕に見知らぬ女性に声をかけるなんていう勇気があるはずはなかった。

テラスの石塀に肘を預けている彼女の背中は、僕の登場に気づかないようでいて、僕に声をかけられるのを待っているようにも思えた。

僕としても、この可愛らしい女性とせめて気軽な会話くらいはしてみたかったけど、挨拶をして、それでもし話が続きそうになったとしても、僕は兄さんのようには気の利いたことはできないだろうし、言えないだろう。きっとみっともないところを見せて、すべてを台無しにしてしまうことは分かっていた。

たぶん、声をかけなかったほうがましだったと思うような、一生心

に傷が残るような些細なミスを――。

「こんばんは、アレックス様」

だけどテラスにいた先客は、僕の姿を見つけると、あまりためらうこともなくそう声をかけてきた。
僕は、いきなり自分の名前を呼ばれたことに驚いて、それから、手の中の飲み物を取り落としそうになって少し慌てた。
その夜の客人は少なく見積もって軽く三百人を超えていたし、僕は生来の人見知りのせいもあって、本当に顔見知りの数人にしか挨拶をしていなかった。
少なくとも、僕は彼女を誰かに紹介された憶えはなかったからだ。

「どっ、どうして僕の名前を？」

けれども僕がそうたずねると、彼女は仔猫のような仕草で小さく笑った。

「あら、誰だってみんな知っていますわ。アレックス様のこと。だって貴方は領主様の弟君ですもの」
「あ、そ、そうか。そうだよね。
えっと……君は？
たぶん、お互いまだ紹介して貰っていなかったと思うけど」
「わたし、エステルです。エステル・ベケットと申します。アディンセル伯爵様のご友人のハミルトン様と兄が友人で。
こういう私的なパーティーにお招き頂いたのは初めてなので、どうしていいか分からなくて……」
「ああ、そう、そうか。ようこそ、いらっしゃい。……」
「……」
「……」

僕は、目の前の女性が何かを僕に期待しているということ自体は分かっていたけど、いったい何を期待されているのかについてはまるで考えが及ばなかった。
もし見当違いなことを言って女性を失望させるのは嫌だったし、僕自身も失望をされたくなかったので、結果として僕は黙り込んでしまったのだが、実はこれがいちばんまずいということにすぐに気がついたけどもう遅かった。
何しろ僕には女性経験というものがないんだと、勿論そんな突き抜けた言い訳をジョークに絡めて笑い飛ばす技術なんて持ち合わせていない。

「……、……あ、あのっ、ギルバート様って、本当に素敵な方ですのね」

しまいには、女性に場をフォローさせてしまうという最悪の事態に陥ってしまったが、救いだったのは彼女がそれで気を悪くしたりしないでくれたということだった。
彼女は僕の機嫌を損ねさせまいとしているかのように一生懸命おしゃべりをしてくれて、僕は初対面の女の人に気を遣わせてしまったことに少なからずショックを受けていたけれども、それで苦しいながらも少し息を吐くことができた。

「ええ、もう、本当に素敵な方だわ。兄たちが、優秀な上に美青年伯爵だって話しているのを子供の頃から聞いていて……だから今日はその、あの方がどのくらいお美しいのかちょっと期待して来たんですけど、期待以上に素敵な方でした。すごく格好よくて。どんなに機嫌よく笑っていらしても、あの近寄り難いような、クールな感じがいいんでしょうね。
ローブフレッドの年頃の娘たちは、みんなあの方の花嫁になりたく

てたまらなくて、そのために、ここ十年くらいは婚期が随分延びているほどなんですって」

「へ、へえ、そ、そうなんだ、知らなかったよ。ああ、でも、身近にもそういう人が一人いるから、やっぱりそうなのかな」

「身近な方……？

あ……、もしかして、アレックス様の大切な方、ですか……？」

「えっ？　あ、いや、違うよ。まさか。

ジェシカは僕のこと、未だに子供と思っているみたいだし」

「ジェシカ、さん……？」

そう言いながら、不意に彼女は僕に近づいてきた。

どういうわけか、戸惑いと不安の瞳で僕をみつめながら。

僕はたった今まで笑って話をしていた彼女が、どうしてそんな表情で僕に近寄って来るのかが分からなかったけど、そもそも女の人が何を考えているかなんていうことは、想像してみようとしたところで僕には分かるはずのないことだった。

夜風は彼女の長い金色の髪を緩やかに弄び、僕は少し酒が入っていてこともあって、彼女の可愛らしい姿をただ黙って見つめていた。

彼女は僕のすぐ側までやってくると、驚きと緊張、いったい自分の身に何が起こっているのか把握できないこと、それに手の中の飲み物のために身動きできずにいる僕の肩に手を添えて、僕に突然キスをした。

「えっ、えっ？」

指先で唇を押さえ、瞬きをし、うろたえる僕に、エステルは言った。

「アレックス様、驚かせてごめんなさい、でも驚かないで。

わたしね、ひと目見たときから、アレックス様のこと素敵な方だな

って、思っていたんです。ギルバート様なんかより、貴方のほうがずっと素敵な方だって。

だってわたし、今夜は貴方のことばかり考えていたんです。

どうしたらアレックス様と親しくなれるかしらって、パーティーのあいだ中、頭の中はそのことばかり……。

だから……ねえ、アレックス様。

貴方のことを、好きになっても……いいですか？」

僕はそのときのことを、実は相当浮かれてしまっていてはっきりとは思い出せないんだけど、分かっていたのは、僕は何だか彼女に……エステルに運命みたいなものを感じているということだ。

それで、それで近頃の僕は、毎日がとっても楽しいということだ。

第6話　兄さんはなんて分からず屋なんだ

だけど兄さんは、僕たちの交際を知るや頭ごなしに反対した。

「アレックス、あんな娘が、おまえに相応しい道理がないだろう。只の遊びだと言うならそれでも構わないが、深入りはするな。妊娠もさせるなよ」

そして兄さんのこのようなあまりにも身勝手な言い分には、当然ながら僕は憤りを隠すことができなかった。

キャロルの一件以来、兄さんに対する不信感というものが、もう払拭できないくらい僕の心を占めているということを、まるで気がついていないかのような兄さんの態度には余計に腹が立った。

近頃では、兄さんに対して以前ほど従順な態度を取らなくなった僕の変化に、気づかない兄さんではないだろうに。

「どうしてですか。彼女が、アディンセル家に釣り合わない家柄だからですか」

食卓を挟んだ向かい側、兄さんがご自分で仕留めたという大鹿の剥製の壁飾りを背景に、いつもの自信たっぷりな表情をしている兄さんを僕は睨みつけた。

すると兄さんは、僕の態度にいささか手を焼いているとでも言わんばかりに軽く唇を曲げ、相変わらずの美声と苛立たしいほどの余裕さでそれに応えた。

「それもある。だがそれだけじゃない」

「でも、兄さんの意見なんかどうせ関係ないですよ。だって僕が、彼女を好きなんですから。

兄さんは、この国の名だたる諸侯の中でも、その存在を知られる洗練された紳士だ。
だから、貴方は他人の色恋沙汰になんか口を出すような方ではない。そうでしょう」

そう言って、僕は早々に夕食の席を立ち去ろうとした。食事が終わっているのに引き続き兄さんなんかと無駄な会話を続けるくらいなら、部屋に戻って乳姉のタティとでも話していたほうがましだと思ったからだ。
けれどもそんな僕を、兄さんは少々声を鋭くすることで強引に呼び止めた。

「待ちなさいアレックス。だからこそ、私は言っているのだ。純情なおまえには、あのての女は似合わない」

兄さんが、僕を未だに叱られることの恐怖で支配しようとしていることには屈辱感さえ覚えるところだったけど、僕は兄さんと口論になっても、どうしても迫力で負けてしまうことが多いのは確かだった。
だから僕は、そのときは兄さんとは目をあわせず、僕は別に兄さんを恐れているわけではなく、これは仕方なしに応じているだけなんだということをはっきり兄さんに示すために、それまで腰かけていたダイニングチェアを手持ち無沙汰に整えながら無関心に返事をした。

「どうしてです。エステルは純粋ないい娘ですよ。見た目だって、兄さんが連れて来るどの女性たちにも負けていないでしょう。それに性格だって、可愛くて、素直で、ちょっと子供っぽいところもあって」
「違うな。アレックス、一見純粋そうな女にも、二種類ある。

本当に心根の清純な女と、その皮を被っているだけの女と。
この両者の見分けは至難だが、私には経験がある分よく分かるのだ。
おまえの女はあれは後者だ。現在は伯爵の弟であり、順当に行けばいずれ私が所有するすべての領地と爵位を譲渡されることになるおまえの、地位と財産がその狙いだ。気弱なおまえを思い通りに操って、一族ごといい思いに与ろうと企んでいるのだ。
まだ年齢が若い分、確かに恋愛に夢見ている部分もあるように思うが、あれは年を取ると化ける女だぞ。馬脚を現すと言ってもいい。
少なくとも、おまえの手に負える女ではない」
「何ですって？」
「ふっ、いきがって、それで私に反発でもしているつもりなのかアレックス。
遅い反抗期も結構。私はおまえのあまりに毒気がなさすぎる性格には、かねてより少々心配もしていたのでな。
そうやって私に歯向かうことで、他人と敵対する際の練習くらいにはなるんだろう。
だが、私がおまえの為にならないことをおまえに伝えるはずがないということだけは、肝に銘じておけ。
いいか私は親切にも、愚か者のおまえが人生を踏み外さぬようついでもおまえを保護していて、今はおまえにあれはあばずれだということを教えてやっているんだよ。
だからおまえは私に感謝をしなくてはいけない。そうだろう？　アレックス」
「……」
それからも呆れるほどのしたり顔で、僕の愛する人を侮辱し続ける兄さんを、僕は許せなかった。
だから僕は、この一方的で独り善がりの兄さんに、とうとうこう言ってやったんだ。

「兄さん、兄さんがどんなに反対しても、言いがかりをつけても、僕は彼女と結婚するよ！」

「何…、結婚だって？

待て待て、アレックス、アレックス。ああ、まったく……言うに事欠いて何という軽率なことを言い出すのだおまえは。

私を驚かせることが今のおまえの目的だったならば、それが大成功だったことを褒めてやる。おまえがジョークを思いつく才能を私に認めさせたいと言うのなら、少々悪趣味な嗜好ではあるようだが、それを認めてもやろう。

だがもしそれを本気で言っているとしたら、とても正気のものとは思えん。アレックス、おまえは初めて恋人ができた喜びに浮かれて、頭の中まで舞い上がっているだけなのだ。

しかし実際のおまえは自分一人の力ではいまだ何もできない子供であり、私の承認がなければ何ひとつ決めることさえできない半人前だ。

よっておまえが結婚を考えるなど、少なくともまだ十年は早い。ばかげた戯言を言うのはやめなさい」

「兄さん、お言葉ですが、僕はもう大人だよ。成人だってしているんだ。

自分一人の力で何もできないなんてことはないよ、だって、僕はちゃんと責任をもって兄さんの執務を手伝うことだってあるじゃないか。

兄さんには頼りなく見えるかもしれないけど、世間に出れば、僕だってちゃんと成人として扱われるんだ」

「ああ、そうか。分かったから私に向かってつまらん屁理屈を言うな」

「屁理屈じゃないよ、ちゃんとした理屈じゃないか」

「分かった。おまえの言い分は分かったが煩いぞアレックス、もう黙りなさい。そうやって生意気を言うな。相手がどんな女か知りもしないくせに、すぐに結婚を連想する単細胞の何処が大人だ、莫迦

を言うものではない。
一途も純情も結構だが、そんな愚行がいつまでも許されるのは女のみだ。男のおまえが冷静で理性的な判断力を持たずしてどうするのか。
アレックス、物事を何もかも疑いもせずに受け入れるというのは、非常に危険な行いなのだぞ。それは対象が人間であればなおさらそうだ。
そんなものは、優しさでもなければ美徳でもない。只の馬鹿のすることだ」
「そうだね、その通りだよ兄さん。
確かに兄さんはそうやって、いつも僕の言うことを批判するものね。兄さんにとって、目の前にあるものそれが正しいかどうかなんて問題じゃないんだ。兄さんはただ、いつでも議論に勝ちたいというだけなんだ。僕には分かってる。
だからこそ、僕はエステルが兄さんの言うような女だなんて絶対に信じない。
だから兄さんが何と言おうと、どんなに彼女を貶めようと、僕は絶対にエステルと結婚するよ。
だって僕は兄さんみたいに女の人を玩具みたいに扱う最低な差別主義者にはなりたくないし、それに兄さん、ご存知ですか？
僕は……僕は、そういう連中を心底軽蔑しているんだ！」

第7話　打算と偽り

「アレックス様、アレックス様、どうか、お気持ちを確かに」

ジェシカが先刻から僕に纏わりついていたが、僕は気にしなかった。

「どうか、ああ、どうか。

閣下は、あの女性がまさかアレックス様の大切な方だとはご存知なかったのです」

「嘘を吐け！」

僕は、どうにかして僕の行く手を阻もうとするジェシカの呼びかけにも一度も足をとめることなく、そのまま床を踏み抜かんばかりの勢いで居城の廊下を急いだ。

今から思い出してもそのときの僕というのはこの世界のどんな者の怒りも及ばないほどの烈火のごとき怒りに満ちていて、傍から見たならばきっと荒くれ者の山賊の類か、手がつけられない悪鬼のような有様だったことだろう。

「アレックス様、閣下は、決して悪気はなかったものとおっしゃっております」

「煩い、黙れっ！

そんなことが信じられるか、どうしておまえが兄さんのお考えなんかを知っているって言うんだ。

ジェシカ、おまえは兄さんのためなら、どんな汚いことだって平気でやる人間なんだからな。

キャロルのときだって、あのときおまえは僕を謀って、足止めして、平気な顔で兄さんが彼女を襲うための時間稼ぎをしたくらいだ。

そんな嘘を吐くことくらい、おまえには朝飯前なんだろう！」

「誤解です！」

ジェシカは叫んだが、僕はそれを無視した。

そのまま兄さんの私室前に到着すると、重厚なアディンセル家の楓の紋章入りの扉を押し開け、室内に踏み込むなり迷わず寝室に突入した。

交際を重ねて数週間が経過していたが、かねてよりエステルの行動を不審に思っていたふしはあったんだ。

誠実な女性だと信じていたのに、裕福なアディンセル伯爵家の当主であり、いかにも信頼する対象として相応しい三十代の兄さんとこの城で対面する度、エステルの兄さんに対する媚を含んだ視線には実は気がついていた。

でもそれはエステルに限ったことではなく、兄さんを見る多くの女たちが、貴賤を問わずそうであるという現実もあった。顔見知りの貴婦人も、年老いた召使いも、ときには純朴そうな下働きの少女ですらそうだった。

だから僕はエステルがそうであることにも、面白くはなかったけど目をつぶってきたつもりだった。兄さんが魅力的であることは彼女たちの責任じゃない。そんな理由でエステルを責めるなんて、そんなのあまりに嫉妬が過ぎると思っていたからだ。

だけどそこへほんの半刻前、二人が関係しているという決定的な密告があった。

それで僕はいても立ってもいられずに、兄さんとエステルとの逢引の証拠を押さえるために、こうしてわざわざ見たくもない現場に乗り込んだわけなのだ。

寝室の中央にある天蓋つきの寝台の上には、寄り添う男女の薄影があった。

僕は気後れしそうな自分を励まし、いつか本で読んだことのある粗野で礼儀知らずな男の野蛮さを思い出すと、力いっぱい絹の垂れ幕を引っ張ってその正体を確認した。

案の定、そこには兄さんと、僕が運命の恋人だと信じていたエステルの姿があった。
エステルの全身の衣服ははだけていて、彼女の細い腰には兄さんの手が遠慮なく置かれていた。それなのに彼女はそれを少しも嫌がることなく、それどころか兄さんを頼りにして彼を見上げるその姿勢が、絹糸のような金色の髪と白い頤が、記憶の中のシェアと重なって見えて僕の視界は悔しさににじんだ。

「……何か用か？　アレックス？」

少しも動じることなくこちらを見下した嘲笑を浮かべる兄さんを目の当たりにすると、僕の心は煮えくり返ったが、こんなとき、いったいどんな態度を取るべきなのかが分からなくなって立ち尽くした。分かっていたのは、兄さんがエステルと関係しているという件の密告ですら、恐らく兄さんが指図して、わざと僕に伝えさせたことなんだろうという計略の予感だけだった。
エステルは、兄さんの胸に縋りついて、まるで自分が絶対的な被害者であるかのような顔で僕を見ている。
彼女は僕を、非難しているのだ……。
兄さんの恋人におさまった途端、まるで僕とエステルが出会ったこと自体が、僕の彼女に対する罪であるみたいに！
僕の後から遅れてやって来たジェシカが、この場面を見て一人青ざめていた。
兄さんみたいな人間の側近として長く仕えていれば、よほどの心臓の強さや狡猾さを備えていて当たり前で、近頃では、ジェシカの態度の何もかもが演技なんじゃないかと思えることも多い。
しかしこういうとき、確かにジェシカの本心が覗いているというような気もした。

「アレックス」

兄さんは、さも僕に同情しているような顔で僕を見た。

「可哀想にな。いまだ純情なおまえは、女にもおまえと同じだけの誠意を信じたかったんだろうに……」

兄さんはそう言うと、自分の胸に従順に頬を寄せているエステルの金髪を撫でて、こう続けた。

「しかし残念ながら女とは、すべからくこういう生き物なのだよ。思慮がなく……愚劣で……生まれながらの残忍な詐欺師であり……そして己だけがもっとも可愛いのだ。

だから自らの幸福のためであらば、他人を裏切るということが……これは無論、男の私にとってしてみれば推論でしかないが……苦痛でもなければ、罪悪でもない、という結論になる。

しかしアレックス、彼らを敵だと考えることは間違っている。

我々は、女とは心底から哀れな生き物だと憐憫を感じるべきなのだ。より条件のよい男に愛されるためならば……連中は、我が子をも捨てるが……、しかしそれこそが女という生き物の本質であり、性なのだろう。

そして見ての通り……、このエステルもそうした女のうちの一人だ。アレックス、おまえにとっては残念なことだろうが、エステルは最初からおまえよりも私を愛していて、おまえに近づいたのは慕わしい私と何とかして接触を図りたいがための手段に過ぎなかったとのことだ。

欠片も好意など抱いていないおまえに愛敬を振り撒いてまで、私に愛を伝えようなどとはなかなか健気な行いではないか？

だからおまえもこの女のことは、今このときをもってすっかり忘れてしまうんだ」

「……」

「……、そう悲しそうな顔をするな……、私はおまえが憎くてこんなことを言っているわけではない。私にはおまえを傷つけようなどというつもりはないのだ。
アレックス、おまえがもし、本気で結婚をしてみたいと望むのであれば、いずれ相応しい時期に相応しい娘を用意してやらないでもない……、私が用意するからには世々にあふれる売女どもよりは幾らかましな女であることを保障もしよう。
だがそのときまでに、おまえはこの汚らわしい連中が、そのような性質を持つ救い難い存在であることを予め理解しておく必要がある。もう二度と、おまえが悲しい思いをしないために、私は言っているのだ……」

これは後からジェシカから聞いた話だが、そのとき兄さんは、エステルが心から僕を愛しているのかどうかということを、試したのだということだった。
もしもエステルの僕に対する愛が本物ならば、決して自分の誘惑に乗ったりはしないだろうからと。
勿論とってつけたようなそんな言葉を僕はすぐには信じなかったし、エステルが兄さんの誘惑にまんまと乗ったからといって、僕がまだ一度も触れたことのないエステルの肉体を、これ幸いと愉しんだことに対しては憎しみを覚えないではいられなかった。
だけど兄さんの言葉には、言い表せない重みがあった。
それにエステルがもし、本当に僕を愛していてくれたのなら、やっぱりどうしたって、他の男と寝たりはしないものだろう。

「アレックス様……、わたし……」
「さようなら、エステル」

僕は兄さんの腕の中にいるエステルに別れを告げた。
怒りの気持ちが消えてしまったわけではなかったけど、エステルを

目の前にしてしまうと、それをいったいどう表していいのかが僕には分からなかった。

彼女の表情が物語っている通り、やっぱり僕なんかでは、彼女の恋人役として相応しくなかったということなのかもしれない。

だけどそれならそうと、きちんと僕に話してくれればよかったのに、せめて僕の何がいけなかったのか、教えてくれたらよかったのに……この残酷な裏切りに対する口汚い謗りの代わりに、そんな考えがふと脳裏に思い浮かびもしたが、でもそれを言ったところで、エステルが僕のところに戻ってくれるとも思えなかった。

彼女がまるで悲劇のヒロインめいた顔をしていることが、僕には最後まで理解できなかったけど……、女っていうのはみんながみんなこうであるわけじゃないということを、思い直すためにはもう少し時間がかかりそうだった。

第8話　アレックスと夢見るタティ

「別に、それほど好きってわけじゃなかったんだ。
確かにエステルのことを、可愛いと思っていたけど……。
でも、よく考えてみたら、たぶんそんなに好きなわけじゃなかったよ。
それに兄さんの言うことを信じるわけじゃないけど、彼女って見かけよりずっとおしゃべりな女の子でね。
楽しいけど、一緒にいると疲れるって言うのかなあ、上手く言えないんだけど、僕はどうも、もう少し物静かな感じの女の人のほうがあっているかなって思うんだ」

その日、僕が口にしていたのは明らかな負け惜しみであり、言い訳だった。
ただでさえ広大な領地を所有する伯爵であり、容姿端麗な兄さんが人々の注目を集める存在であることは言うまでもないことだ。だけど人々の注意を引くという意味では、この僕もまた、兄さんに劣らない存在だった。
それと言うのも僕という存在が、兄さんと僕の父上である前アディンセル伯爵、誰からも愛され慕われていた温厚で年老いた人物の、晩年に遺した子供であるということが大きく影響している。
彼は六十歳を過ぎてから迎えた四番目の妻との結婚翌年に、ようやく彼の初めての子供である兄さんを得たが、その数年の後、彼の若い妃は不幸にも肺病に倒れることになった。どういうわけか彼の妻がいずれも夭折してしまうことを、父上がどれほど気に病み悲しんでおられたかについては、想像に難くないことだと思う。
以降、彼女は徐々に身体を衰弱させながら何年か病床にあり続けていたが、その彼女が遂に亡くなる前年に僕が生まれたということを、ローブフレッドやヴァエリムス等のアディンセル伯爵家を崇拝して

いる人々は、神々の恩寵と称えるべき奇跡のような出来事として捉えていた。

だから、僕が僕の母上……ギゼル妃によく似た面差しをしていることは、彼らにとって非常に歓迎すべきことで、子供のないまま次々と妻女が身罷るというアディンセル伯爵家に降りかかった悲しみの後に訪れた希望のように思っているふしがあるわけだ。

兄さんの色に対する奔放を誰もが黙認しているのも、兄さんが現在の王宮の主流であるウィシャート公爵の覚えもめでたい有能で力強い当主であるというだけではなく、兄さんの後ろに非業と言うべき人生を送った前伯爵や、歴代の妃たちの存在が見えるからではないかと僕は思う。

父上が天寿を全うされ、アディンセル伯爵の城から死の影が消え失せてしまうと、時代は完全に兄さんのものとなった。

兄さんの生来の勝気で外交的な性格を映しているかのように居城には活気があふれ、若さと喜び、それに未来に対する確かな期待と野心とが城内の隅々にまで満ちあふれた。

人々は、この信頼を寄せるに足る若い伯爵と、彼をこの世に生み出してくれた女性によく似た幼い僕のことを、自分の家族にも等しい関心をもって常に見守り続けていて、それは僕が成人した今でもずっと、続いていることなのだ。

……善くも悪くも。

だからこそ、あのギルバート様が気まぐれに弟の恋人を寝取ったなんていう傍からみれば最高に面白可笑しいこのゴシップが、僕らが住まうこの城内に、広まらないはずはないことだった。

実際ものの数日もしないうちに、少なくともこの城の噂好きな使用人たちとか、伯爵の城を出入りする兄さんの部下たちの間には、確実に話の一部始終が広まってしまっているようだった。

特に僕と年頃の変わらない若い侍女たちが集まって、僕のことを横目で見ながらくすくすやっているのに遭遇してもなお正気を保っていられるほど僕の神経は図太くない。

それで、僕はあまりにも恥ずかしくて、男として、これはもう本当にみっともないことで、兄さんにエステルを横取りされた日からずっと部屋に閉じこもって、膝を抱えて鬱々と日々を過ごしていたわけなのだ。

この世界から消えてしまいたい気持ちで、そんな生活力などないくせに、窓外の、誰も知らない土地にまで逃げ出すことをため息と共に夢想するばかりだった。

この一連の出来事に対するほとんどの人たちの意見は、僕に対して同情的なものだと乳姉妹のタティは教えてくれていた。

アディンセル伯爵のほぼ唯一にして最悪の欠点である女好きは、余程の世間知らずを除いてはこの界隈では誰もが周知のことだ。それなのに、明白な浮気者であることが分かっているのに次々と女性が彼の手に落ちているという現実を見れば、女にこなれた兄さんにかかればどんな女の人だって靡いてしまうということを示している。だから僕に落ち度はないのだと、タティは繰り返し慰めてくれていた。

そして勿論、そんなことはタティに言われなくても僕には分かっていることだった。

僕にしてみれば生涯の汚点になることがまず確実であるほど悲劇的なこの出来事だが、しかしほとんどの人たちには、現在のアディンセル伯爵家の見違えるような繁栄と健康、下手をすればユーモアさえ象徴する、微笑ましいエピソードとして受け取られているんだろう。

僕が十歳以上も年上の、今では中年に差しかかった兄さんにまんまと恋人を寝取られた、無様で侮りやすい男だと世間に印象づけてしまったことを死ぬほど悩んでいることなど、誰も思いつきもしないに違いないんだ。

「タティ、僕、本当はもう死んじゃいたいくらい酷い気分なんだ」

僕は何だか子供みたいに情けない声で、目の前にいるタティにとうとう本音を吐露した。

「それなのに僕ときたら、エステルを取られたのがつらいのか、恥をかかされたのがつらいのか、そんなことさえもうよく分からないんだよ。

今はとにかく混乱していて……、ただ、死にたいくらいつらいんだ。どのくらいつらいかって言うと、星空を見ていると、飛んで行きたくなるくらい……」

「アレックス様……」

「駄目だね僕って、こんなことくらいで何日も落ち込んでさ。

タティにも、迷惑をかけちゃったよ。

ああ、何かすっかり気分を変えられるようなことがあればいいんだけど、今はあんまり本を読めるような気分じゃないし、と言って、兄さんみたいに誰かに八つ当たりしたり、無意味に動物を狩るなんて残酷なこと絶対したくないし……」

そう言って、僕は窓の外に視線を移した。空は高く、強い日差しはまだ十分に夏のものだったけれど、雲の流れはそろそろ秋めいてきている昼下がりだった。

僕は部屋の片隅の黄色いソファに身を投げ出して、朝からずっと頭を掻き毟っていたおかげで、何だか寝坊をした朝みたいに頭の中が渦巻いていた。

何か気分転換のためのいい方法をタティから引き出せないかという甘えが自分の中にあることには気づいていたけど、何かに困ったとき、僕は幼い頃からやっぱり乳母の娘であるタティのことを頼ってしまうところがあった。

タティは僕より半年誕生日が早いだけの同い年の娘だったけど、赤ん坊の頃からずっと一緒に育ってきた仲なので、家族みたいに遠慮がなかった。

「そうですねえ、ううん……」

タティは、くるくるの黒髪を後ろに束ね、度の強い眼鏡をかけたお世辞にも美人とは言えない顔立ちをしていたが、それがかえって僕に異性を意識させず、身内の女性という安心感だけを僕に与えてくれていた。

タティは少しの間おっとりと考え、それから僕に視線を戻した。

「葡萄狩りなんていかがですか？

このお城の裏手に、料理長さんの小さな野菜畑があるんですけど、そこには果樹園もあったんじゃなかったかしら。

とにかく伯爵家の方の健康に対して真剣な方で、何でも手作りしなくては気が済まなくて、どんどん畑が大きくなっているの。伯爵様やアレックス様に、美味しい食事をお出しするためだと言って。

アレックス様が収穫したいとおっしゃれば、料理長さんも喜んでそうさせてくれますよ」

「葡萄狩りかあ……、うん、いいね。楽しそうだ。

でも、もう実はなってるかな？」

「確か、早いものは夏の終わり頃には収穫できたはず。

どうしましょう、わたし、見て参りましょうか」

「ううん、いいよ。僕も一緒に行く。

もし葡萄がまだでも、トマトが残っているかもしれないし。

それで、久しぶりにトマトスープを作ろうよ。胡椒とハーブをきかせて、じっくり煮込むんだ。お肉は入れないでね、野菜だけで」

「お夕食に伯爵様にお持ちしたら、きっと喜ばれますね。

伯爵様はアレックス様のお作りになられたものなら、塩味のケーキだって平らげられますもの。

あの気の強い方が目を白黒させて……うふふ、思い出します、子供の頃のこと」

そしてタティは口許に手を当てて小さく笑った。
僕はいつも男らしくありたいと思っているけど、女の人の前ではそれはなおさらのことで、それは幼なじみのタティの前でもそうだった。だから僕はいつもより少し偉そうにして、まるで彼女より年上の男みたいに威張った感じでこう言った。

「だめだめ。兄さんは肉が入ってないと機嫌が悪くなるから面倒だよ。彼は何でも食べるけど、食べながら文句は言うんだからおんなじさ。
だいたいタティ、僕、できるだけ兄さんと顔をあわせたくないんだよ。
そこのところ、分かってる?」

第9話　不機嫌なアレックス

それから僕とタティは城内のできるだけ目立たないルートを通って、一階厨房まで足を運んだ。近年料理長に就任したというパーシーに葡萄狩りの交渉をすると、鼻の頭が真っ赤になるくらい日焼けをした、さえない風貌の彼は少々申し訳なさそうな顔でこう答えた。

「それが、アレックス様。せっかくのお申し出なのですが、葡萄のほうはどの種類もまだ実が硬く、とても食して頂けるような状態ではないんですよ」

「そうか、残念」

「他に、何か収穫できる果物はありますか？」

そうタティがたずねると、この二十代半ばの料理長がやけに嬉しげに彼女に微笑みかけたので、僕は何だかそれが少し面白くなく感じたけど黙っていた。

「ええ、それでしたらブルーベリーがたくさん実っておりますよ」

さえない料理長はそう言うと、まったく基本が身についていない、見よう見まねであることが丸分かりの不恰好な会釈でタティにそう答えた。

作法も分からないのにわざわざ女性の気を引こうとして馬鹿を晒す男っていうのが世の中には存在しているが、そういう無様なのを目にする度に、何も苦手なことをして気取らなくてもいいのにと僕は思う。

何しろ、パーシーみたいなのにはそんなのちっとも似合わないんだから。

……勿論親切心から、黙っていたけど。

「ブルーベリーですって、アレックス様。どうしましょう、行ってみましょうか？」

タティは僕を見上げて僕にその意向をたずねた。
タティの関心の中心には常に僕がいることが誇らしく思え、僕はちょっとパーシーに視線をやってからタティに答えた。当主の弟である僕に対し、パーシーが何か言い返してくるわけではなかったが、彼が明らかに悔しそうな素振りを覗かせたので、僕は少しいい気分になった。

「ううん、ブルーベリーかあ。ジャムにできるかな」
「まあ、それは美味しそうですねアレックス様。とっても素敵な考えです」
「うん、えへへ。まあね」
「ああ、ええとアレックス様」

そこへ、どういうつもりなのかまたパーシーが口を挿んできた。
このパーシーというのはその田舎臭い外見に似合わずどうもでしゃばりな男のようで、まるでそうするのが当然であるように堂々と話に割って入ってくるのが僕は何とも気に入らなかった。
僕はタティと話しているのであって、こんな奴と会話をしている覚えはないというのにまったく邪魔な男だった。

「アレックス様、ジャムにして頂くのも結構なんですが、ブルーベリーは摘みたてをそのまま食べて頂いても美味しいんですよ。
何と申しましても、俺が丹精込めて育てたのです。
最初は木が上手く育たず、収穫の時期になっても実がならないという事態に見舞われたこともございましたが、今年はようやく思うような収穫を望めるようになりました」

「ああ、そうなんだ。その…、頑張ったね」
「はい！　ですからどうぞ、是非、その場でとりたてを味わってみてください」

自信満々にそう言い、パーシーはいそいそと近くの棚からかごを取り出してタティに手渡した。そのときの彼の、またしてもタティに対するにやけ顔が僕はものすごく気に入らなかった。さっきから、この男はいったいどういうつもりなんだろう？
タティは誰にでも親切だから、君にもついでに親切にしているだけで、何も気があるわけじゃないんだということを言いたい衝動にかられたが、何で僕がそんなことを思うのかが分からなくなって頭を掻いた。
タティはあんまり美人なほうではないから、僕以上に異性に縁がないような感じだと思っていたけど、実は彼女って、結構もてるんだろうか……？
言われてみれば、声だって話し方だってとっても可愛いし、気立てだっていいし、何より一緒にいるととっても温かい気持ちになる。タティは誰よりも純情な女性だと思うけど、金髪でも美女でもないから、変態の兄さんがまず相手にしないだろうと思って僕もあんまりタティのことを心配していなかった。
でもよく考えてみたら、兄さん以外の常識的な男たちは、年頃の彼女のことをばっちり恋愛対象として見ているのだ。
でも、タティはこれでも貴族のお嬢さんなんだ。
伯爵の弟である僕の乳母を任せられていた女性の娘なんだから、平民のパーシーなんかきっと問題にもしないに違いないさ……。
ところが厨房から出て一階廊下を歩きながら、何となくパーシーに嫌な印象を抱いた僕の気分を察したのか、タティがつまらないことを言い出した。彼女としては執り成したつもりなんだろうが、僕にあの男への賞賛に同意しろなんてまったく無神経にもほどがあって、僕はますます憮然とした。

「アレックス様、料理長さんってとっても明るくて、積極的な感じがして、素敵な方だと思いません？」
「……そう？　別に大したことないと思うよ」

それから僕とタティはブルーベリーとトマトを摘みに、城の裏手の料理長の畑まで向かうことにした。
城の裏扉を出て、花壇や水路や乙女像のオブジェの広場を抜け、今は城の敷地の端のほうにあるという目的地までの低木に飾られた道を歩いている。
その道すがら、僕は自分が何だか面白くない気分であることをタティに分からせたくて、不機嫌な調子でこう呟いた。

「ねえタティ。僕、無意味に自信満々な男って嫌いだな。それは兄さんにも言えることだけど、兄さんは大人だからまだいいさ。でもあのパーシー、奴は僕と幾つも変わらないのに生意気だよ」
するとタティは心底意外そうな顔をして僕を見上げた。

「あら、さっきから何だか口数が少ないと思っていたら、そんなことを考えていらしたのですか？」
「先代の料理長のほうが、僕は好きだったな。彼はどうしてあの若さで厨房を任されているんだろう。あの人、先代の息子じゃないよね。誰か、兄さんに顔の利く人が身内にいるのかな」

僕は自分でも、すごく嫌なことを言っている自覚はあった。だけど、これはたぶんこういうことだと思うんだ。自分の姉妹に変な男が目をつけていたら、普通の男なら、誰だって嫌な気分になるものだろう。世の中には、娘の恋人にけちをつける父親や兄が後を絶たないって言うけど、たぶんこれはそれと同じことで、決して悪意から言っているんじゃないんだ。僕はタティが心配なだけなんだ。だけどタティは僕の言い分を随分不思議そうな顔で聞いていて、次には特に気を悪くした様子もなく、いつものおっとりした様子でこう答えた。

「先代の料理長さんは、アレックス様のお母上様と同じ病でお亡くなりになったでしょう？
肺の病は、この地方にときどき流行するものなので、珍しくはないものだけど先代の料理長さんは伯爵様や、幼いアレックス様にうつしはしなかったかということをずっと気にしていたそうです。
だから、コリンさんはそういうことが二度とないように、自分で畑を耕すところから徹底して、伯爵様やアレックス様の健康管理に生命を賭けているんですって。先代の料理長さんの甥御さんなんですよ。後を継ぐはずだった先代の料理長さんの息子さんは、後を追うように肺病で亡くなってしまったので、まだ少し若いけどみんなが推薦したんですって」

「……」

ああ、僕は、自分にがっかりして言葉も出なかったよ。

第１０話　野菜畑と男の意地

件の料理長の畑は、農業に従事している人たちに言わせればそれほど広いわけではないんだろうが、僕からするととても一人で管理するのは難しいんじゃないかと思うほど広かった。
きちんと手入れがなされ、雑草ひとつなく整然と並んでいる野菜畑。ざっと数えただけで二十種類以上ある夏野菜は、幾つかの株は枯れ始めていたけどまだ半分以上が実りをもたらしてくれる様子だった。それに葡萄や別の蔓性の果物は、野菜畑の脇の三本の木々の間に上手く組み上げられた支えの下に、まだ熟れてはいないもののたくさんのたわわな果実を実らせている。
この畑ひとつで城内の人間のすべての胃袋を満たすことは到底無理だろうが、兄さんや僕の食事には優先的にここの収穫物を使っているそうで、余程神経を使って兄さんや僕の健康を考えてくれているんだろうと思うと僕は何だか申し訳ない気分になった。
胡瓜畑の横のブルーベリー畑の木々には、少し枝に触っただけで果実がこぼれて地面に落ちるほど青い実がなっていた。タティに促されて恐る恐るそれを口の中に入れると、その実はとても熱かった。もしかしたら舌が火傷するんじゃないかと思うほどの熱さで、僕は驚いてタティの顔を見た。
するとタティはくすくす笑って、空に手を翳して言った。

「まだ秋と言うには、お日様が強いですからね。
でも、瑞々しくて、甘くて、とっても美味しいわ」
「うん、美味しいね……」

僕らはまずブルーベリーの実を山ほど摘み、それから近くの枯れ始めているトマトの木からも、まだ鳥に啄ばまれていない実を選んでかごの中に収穫した。

「季節的に、もうトマトは終わりなのかもしれませんね。何だか傷んでいるのばかりですよ、アレックス様」

タティはそう言って、気が進まないような顔をしたけど、僕はこう答えた。

「平気さ、煮ちゃえば分からないよ」

何しろ僕は野菜が好きだけど、その中でもいちばん好きなのはトマトだとはっきり主張できるくらい好きだったからだ。

トマトの数がもう少ないことと、他に目移りしたくなるほど野菜があるので、タティと話して、作るのはトマトをベースにした野菜スープにすることにした。風味の問題で、そこに鶏肉を入れるか入れないかで僕とタティが更に話しあっていると、城のほうからパーシーが走って来るのが見えた。

彼は息を切らしてすぐに僕らのところまでやって来て、僕が手にしているかごの中にトマトが入っているのを見つけると慌ててこう言った。

「ああ、やっぱりトマトですか。しかし、いけません。それはもう、アレックス様のお口に入れるべきものじゃないんです。日焼けしていたり、傷みかけておりますから。

今年はもう、トマトは終わりなんです。それは枯らしてしまう予定なので」

「でもトマトが食べたいんだ」

「ええ、貴方様がトマト好きなのは俺もよく存じております。ですからこうして走って来た次第で。

午前中に、最後の収穫をしたものがあるんです、そこにあるよりは多少は状態のいいものが、あのう、自分用に……ですからそれをご

提供できたらと思いまして」
「まあ、ありがとう料理長さん」

タティがお礼を言うと、パーシーは照れたように笑って、それからそのまま城壁の向こうに出て行こうとした。厨房も食料保存のための保冷室も間違いなく城内にあるのに、いったい何事かと思って僕が呼び止めると、彼は立ち止まって答えた。

「ああ、いえ。近くの清流に冷やしているんですよ」
「冷やす？」
「ええ、これが意外といけるんです。でも勿論、アレックス様は構わずスープにしてやってください。生食できる品種と言っても、そっちのほうが胃腸にもずっと安全ですし。
とにかくそういうわけで、今からひとっ走り、ちょっと取って来ますので」

そして再び走り出そうとするパーシーを、僕は呼び止めた。

「待って。それなら僕が取ってくるよ。君は夕食の下拵えとか、することがあるんだろう？」
「いえ、しかし」
「僕はどうせすることないんだ」
「ですが……、今は護衛の方がどなたもいらっしゃらないのでは」

そう言ってパーシーが、お節介にも僕の周りをみまわしたので、僕もさすがに少しむっとして答えた。

「平気だよ。君がたった今、丸腰で出て行こうとしたような場所だろう。僕は君と同じ成人男性で、僕の腰には剣がある。
分かったら、場所だけ教えてくれる？」

「は、はい」

そして僕は、パーシーからトマトの在り処を聞き出して、それを取りにいくことにした。

「あっ、わたしもお供します」

タティがそのままパーシーと話し込んだりしないで、僕の後を追いかけて来てくれたことには少しほっとした。

城の裏手には少々規模の大きい森林があって、そこには川が流れている。幅も狭ければそれほど深くもない小川なので、万が一足を滑らせたって、溺れるなんてことは考えられない。

何より子供じゃあるまいし、誰からも保護対象として見られていることから、僕はいい加減脱却を図りたかった。

これと言うのも兄さんがいつまでも僕を子供扱いしているせいで、パーシーみたいな奴にまで心配をされるような、こういう格好悪いことになっているのだ。

第１１話　秘密の話

実際のところ、僕はあまり剣というものが得意ではない。
勿論騎士の家系であるアディンセル家の男が、正統剣術を身につけないなどということは考えられることではなく、僕も一通りのことは習いもした。
けれど近年この王国は平和そのもので、領主やその家の人間が自ら武器をとって戦争に行くなんていうことは、僕の人生には一度も起こったことがない。
アディンセル伯爵家はその家柄も古く、兄さんはローブフレッド伯爵の他にも全部で六つの爵位を所有する国内でも力を持つ貴族のうちの一人だ。
また伯爵は公爵や侯爵同様所領に多くの自治権を許されているのが基本だが、アディンセル家はその血統のよさと建国以来の武官という家柄から、独自の騎士団を所有することも認められていた。これはすべての伯爵に許されていることではないので、アディンセル伯爵がいかに陛下に信任をされ、国内でも重要な地位にあるかということを示していることだと思う。
その兄さんが所有する騎士団は当然ながら誇り高く、平時にも練習試合はしょっちゅう行われているみたいだけど、厄介なことに僕は自分から率先して彼らの中に混じって、戦争の真似事をするようなことは嫌いだった。
騎士は大事な家族や国家を守る存在だから、いつか何かが起こったときのために、腕を磨いておくことは大切なことだとは思う。
だけど昨今の、取り分け若い貴族たちの間には、単純に自分がいかに強くて暴力的であるかを誇示しあうような風潮があり、僕はそうした考え方を好ましいものだとは思えなかった。本末転倒のような気がするからだ。
こういう考えの僕のことを、臆病者だと笑っている連中がいること

も知っている。アディンセル家の男でありながら武勇を望まないなどということは、いかにも許し難い、伝統を軽んじる行いであるということも。

兄さんは、僕の性格がそもそも争い向きではないことから、気にするなと言ってくれているけど、笑われるのが悔しいばかりに今でも練習をしていて思うのは、やっぱり僕にはそうしたことが向いていないということなのだ。

もっとも、兄さんは僕にいざというときの領主の代理としての責務を放棄させてくれるほどには甘くない。

兄さんは、ご自分のこめかみの辺りをつついて、僕にこう言ったことがあった。

「騎士としての腕前は二流でもいい。その代わり、おまえは頭を鍛えろアレックス。

おまえみたいなのは、前線で殺傷行為を指揮するにはいかにも向かない人種だ。恐らく神経が持たないだろうからな。だから机上で地図や資料を広げ、報告を受け、おまえの駒となる人間を巧みに使うことで血を見ずして戦争に参加できるほどの頭脳を持てるようになることだ」

「……でも、兄さんは知勇どちらもお持ちじゃないですか。何も僕がやらなくたって」

「私にもしものことがあったときはどうする。そのときは、否が応でもおまえこそが直ちに全権を委譲されることになるのだぞ。長らく戦時は遠ざかり、もしかするとおまえが生きているうちには起こらぬかもしれないが、そうでないとも限らないのだ」

「……僕は戦争は嫌いです。それに、もし兄さんがご結婚されて、御子ができれば、その子こそが兄さんの跡継ぎになるでしょう」

「アレックス、私は恐らく結婚をすることはないだろう」

「どうしてですか？」

「どうしてもだ。……何故おまえはそう、女子供のようなくだらん

質問をしたがるのだ。
では私が結婚をして子供をもうけたとして、その子供がまだ幼かったらどうするんだ。女だったら。おまえよりも内気だったら。病弱だったら。誰がそれの面倒を見るんだ。アレックス、確かにおまえは優しい子だ。だが優しいだけですべてが許される時代はもう終わりつつあるのだ。
現在のおまえのその裕福な生活が、何の代償も支払わずに供給され続ける当然の権利だと思っているとしたらそれは大間違いだぞ。権利には、それ相応の責任がつきまとう。責任を持つからこそ、領民は我々を尊敬し、信望を寄せ、権威も光る」

「兄さんは、ご結婚されないおつもりなのかな。僕をここに置いておくのは、彼がまだ家族を持っていないからだよね。僕を跡継ぎにするおつもりなんだろうか」

生い茂る木々の中を歩きながら、僕はタティにそう切り出した。
居城から目的の小川までは、徒歩で半刻といったところだった。久しぶりに外出をして、なまっていた身体を動かすのは気分がよく、タティと交わす会話にも花が咲いた。もっともタティは、どんな話題であろうと僕を拒絶したり、嫌ったりしないで応じてくれるので、僕はいつでも安心して、思いついたことを何でも彼女に話すことができた。

「どうなんでしょう。確かに伯爵様は、あまり特定の女性に執着なさいませんね。
伯爵様のお側に長くいる女性と言えば、フィーロービッシャー家の

ジェシカ様、それに魔術師のルイーズ様くらいのものかしら。
巷には、お二人のどちらかと、或いは両方と実はできているなんていう噂もあるんですけど、たとえばジェシカ様ならお妃様になってもおかしくない家柄ですのにそうならないのは、やっぱり違うってことなんでしょうか」

それに対して、僕は訳知り顔でこう答えた。

「ジェシカもルイーズも、金髪じゃないからなあ」
「あら、金髪じゃないと、何かご都合がお悪いのですか？」
「いや、ううん、都合が悪いってことはないんだけど、兄さんってつまり、金髪フェチなんだよ。
見ていて気づかない？　連れているのはだいたい金髪の女性ばかりだってこと。たまにそうじゃないときもあるけど、でもだいたいはそうだ。
つまりまあ、エステルも、そうなんだけど……」
「ああ、ええ……」
「何が兄さんをそうさせるんだろう。やっぱり初恋相手の影を追っているとしか、僕には思えないんだけどな。よっぽど酷い失恋をして、プライドの高さのために、妄執に取り憑かれちゃっているとしか思えないんだよね。
だからそれが解決さえすれば、女遊びなんてやめて、そろそろ結婚しようって気持ちにもなるかもしれないと思うんだけど」
「そうですねえ、そう言われてみれば、もしかするとそういうことがなかったと、言えなくもないかも……。
でも、人間の気持ちって、本当に難しいですからね……」
「でもねタティ、これは去年の年末のことなんだけど、酔っ払ったジェシカがびっくりするようなことを言っていたんだよ」
「びっくりするようなこと、ですか？」
「うん、そうなんだ。あのね、ジェシカが言うには、僕は兄さんの

弟ではなくて、本当は息子だって言うんだ。
計算したら、僕は兄さんが十一歳のときに作った子供ってことになるんだよ。びっくりだよね。
僕が十一歳の頃なんて、毎日フルーツパイやケーキを食べることしか頭になかったのに。子供の作り方なんて、疑問に思ったこともなかったんだよ。
だから、あれはさすがにジェシカの冗談とは思っているんだけど……。
でも、仮にもしそれが本当なら、兄さんの初恋相手って僕を産ませた女の人ってことかなって思ったんだ。
だって、兄さんはその……別れた恋人が妊娠したと言ってきたら、問答無用で始末しているって聞いたことがあるからさ……。だからその基準で言ったら……、普通は僕のことを生かしておこうなんて考えないだろうし……」
「アレックス様！
伯爵様は……、アレックス様のことをとても愛していますわ。
とても、とても愛していますわ。
ですからアレックス様、そんなこと、お考えになってはいけないわ」
「うん、だから……、僕が兄さんにとって特別なのは、彼にとって本当に特別だった女性が産んだからじゃないかなって、ちょっと思ったんだ。
ちょっと思っただけだよタティ、僕が兄さんの子供だなんてこと自体、そもそもこれは、仮定の話なんだ。だからそんな顔しないで」
「はい……」

第12話　水の中のタティ

木々のざわめきの中に微かに水のせせらぎの音が聞こえてきて、やがて僕らはトマトの漬けてある森の中の小川に辿り着いた。
途中から人の歩いた小道をはずれ、ときには下草を踏みしめることを疑問に思いながら、しかしパーシーに言われた通りに進んで来た道筋は正しかったのだろう。木漏れ日の降り注ぐ中、赤いトマトの入れられたかごが、緩やかな川の中の大きめの岩に、縄を使ってくくりつけてあるのがすぐに分かった。
さっそくタティが靴を脱いで、川の中に取りに行こうとするのを僕は止めた。

「待って、僕が取って来るよ。タティはここで待ってて」
「いえ、でも、アレックス様が水の中で転ばれたり、石で足をお切りになっては大変ですから」
「じゃあなおさらそうだ。怪我したらいけないから、タティはここで待っててよ」
「いえ、そうではなくて、アレックス様がお怪我をしてはいけないという意味です。
アレックス様に少しでも怪我をさせるようなことがあれば、わたしが伯爵様に叱られてしまいますわ」
「タティが怪我をしたら僕が運んで帰れると思うけど、僕が怪我したら君が僕を抱えて帰るのは無理でしょ？
そのときは、誰かを呼びに行って貰わなくちゃいけないから、タティのほうが怪我したら困るよ」
「アレックス様、それではあべこべですっ」
「まあまあ、いいから」

僕はそう言いながらタティを制すると、ブーツを脱いで、裸足にな

って、ズボンをたくし上げて小川の中に足を踏み入れた。
川の流れは見た目の通りに緩くても、深さは思っていたよりはあったみたいで、脛の辺りに流れていたはずの水位は川の中心に進むに連れてすぐに膝上にまで嵩を増した。
水温も、昼下がりのものとは思われないくらいひんやりと冷たかったけど、まだまだ日中の気温は高く、この日も歩いているだけで軽く汗ばむような陽気だったので、それはかえって気持ちがよかった。
僕は清流の中のトマトのすぐ前まで難なく歩いて、それからタティを振り返って手を振った。

「おーい、タティ！」
「アレックス様、どうか、どうかお気をつけてくださいませっ。ああ、お足もとから注意をそらさないでっ」

すぐそこの川岸で、小さなことで慌てふためいて僕を心配するタティが、僕は今日はちょっと可愛いと思っていた。細い指先を口許に添えて、僕のことではらはらしている様子は、遠目にもなかなかキュートだった。

「へいき、へいき。もう、タティは心配性だなあ、あっ、わっ！」

けれどもそう言った傍から、僕は足の裏の滑る石を踏みつけ体勢を崩して、ほどなく水の中に尻餅をついてしまった。ぐらりと視界が揺れて、それから激しい水音と共に青空に届きそうなほど豪快に水飛沫が跳ね上がり、僕はそれを被ってびしょ濡れの濡れねずみになった。それでタティは自分のスカートが濡れるのも気にせず大慌てで水の中に走ってきたけど、僕は何だか楽しくなって声をあげて笑ってしまった。

「アレックス様っ！　お怪我はありませんか！？」

タティは僕の側まで来ると、僕の水滴のしたたる金褐色の髪を撫でつけ、それからハンカチを取り出して僕の目や顔全体を丁寧に拭ってくれた。

「うん、大丈夫。あははっ、滑っちゃったよ。失敗、失敗」
「もうっ。アレックス様ったら。だからわたしが取りに行くって言いましたのに」
「だってさ、紳士は女の人にこんなことさせないものだよ。タティは鈍いとこあるから、きっと転ぶと思ったしさ」
「でも、転ばなかったかもしれませんわ」

タティはそう言って唇を尖らせながら、僕の腕を取って僕を水の中から救い出そうとした。
でも水を吸った僕の衣服が重いのか、そもそもタティが非力なのか、僕の身体は少しも浮かび上がらず、代わりに間もなくタティが僕の上に倒れて来た。
再び派手に水飛沫が上がり、頭から水面に突っ込んでしまったタティがずぶ濡れになったのを見て、僕は可笑しくてまた笑ってしまったんだけど、ふと見ると、目の前にいるタティが、タティじゃないみたいであることに気がついて息を飲んだ。
髪留めがはずれたんだろう、いつも後ろにまとめてあるだけの洒落っ気のない黒い巻き毛がタティの肩や背中にこぼれ出し、これまで考えたこともなかったロマンティックな雰囲気を彼女にもたらしていたし、それに、それに何より……。

「すみませんっ、あのっ、わたし、眼鏡が……」

そう言って、情けない顔で手探りをするタティの顔が、予想外に可愛いことに驚いて、僕は彼女のことを半ば呆然と見つめていた。

子供の頃からずっと分厚い眼鏡をしていたから全然気づかなかったけど、タティは、実はかなりの美人だったのだ。それも相当甘くて優しい、男好きのするベビーフェイスだった。
それに僕はふと、別に変な気持ちがあったわけじゃなかったんだけど、タティが転んだ拍子にどこかへ吹き飛んでしまった眼鏡を一緒に探してあげようとして、計らずも彼女の胸元に釘づけになった。
タティは今日も、いつも通りの無地の白いブラウスを着ていたんだけど、それが水に濡れて、彼女の肌に張りついて、童顔にはそぐわないほど大きな胸の形がはっきりと分かってしまっていたんだ。それで僕は何と言っていいのか……、とにかくしばらくの間、視線がそこから動かなかった。

「眼鏡がないと……」

タティが、眼鏡を探すのに必死になっていて、僕が彼女の正体に激しく動揺しているということに、まったく気づかないでいてくれることは幸いなことだった。
さもないと、僕が彼女の瑠璃色の大きな瞳や、可愛らしい顔立ちや、豊満な胸や、他にも身体のラインの端から端までをこれでもかと言うほど凝視していたことをもし彼女に知られてしまったなら、きっと気持ち悪い奴だと思われて、今後確実に敬遠されることがうけあいだったからだ。

「は、はい、眼鏡……」

僕は、自分の気持ちが少し落ち着いてから、近くの木の根に引っかかっていたことをとっくに気づいていた眼鏡をようやく掴み取って、タティに手渡してあげた。
するとタティは心から安堵した様子でそれを受け取り、耳にかけ、いつも通りの無邪気な笑顔を僕に向けた。

「ああよかった、わたし、これがないと本当に何も見えなくなってしまうんです。
色くらいは判るんですけど、でも物の輪郭が全然分からなくなってしまって……。
アレックス様がいてくださって、本当によかったわ。
ありがとうございます、アレックス様」
「ううん……いいんだよ、そんなこと。
タティ、立てる？　いや、僕が手を貸すから……待ってね」

僕はまず自分が水の中から立ち上がり、足場を確保して体勢を整えてから、水に漬かっているタティに手を差し伸べた。
タティはそれをそっと掴んだんだけど、彼女の手が僕の手に触れた途端、僕の心臓がそれまでよりもずっと激しく早鐘を打ち出してしまい困ってしまった。こんな変な感じを、僕は今まで味わったことがなかったからだ。
昔シェアに憧れていた頃、僕は彼女を見るたびにこれに近い感覚や気分を味わっていたことはあったと思う。だけどそれはいつでも優しくて、夢を見ているようで、ここまで強烈なものではなかったんだ。
気がつくと僕は、握っていたタティの手を引き寄せ、彼女を自分の腕に閉じ込めていた。
どうしてこんな大胆なことをしてしまったのか、敢えて説明をするとするなら、それはいま僕が彼女のことを愛しいと感じていることを、何だかタティに伝えてみたくなったとしか言い様がなかっただろう。
こんなことを、僕はこれまで一度も考えたこともなければ想像してみたこともなかったんだけど、そのときの僕はなぜだかタティが愛しくてたまらなかった。
その気持ちのままに彼女の身体をぎゅっと胸に抱きしめると、密着

するタティの柔らかな髪と、もっと柔らかな彼女の身体の感触は、思った通り僕に幸福感を与えてくれるものだった。
ところが、僕はタティが恥ずかしがることはあっても、でも絶対抵抗なんかしないだろうと思っていたのに、彼女は僕の腕の中にいることを嫌がって、遂には僕を突き飛ばしてでもそれを拒否した。

「タ、タティ？！」

僕は心底驚いて、彼女を見やった。
再び水の中に尻餅をつくなんて最悪にみっともない事態にはならなかったにしても、予想外の彼女の拒絶は、僕の心身にとてつもなく重く響いていた。

「どうして？？」

僕は、女性の同意も得ないで勝手に彼女に触れた男の台詞としては考えられないほど頓珍漢な言葉を口にしていた。

「わたしのことを好きじゃないのに、なぜこんなことをなさるのですか？」

タティは、両腕で胸の辺りを庇いながら、震えながら僕に抗議の視線を向けていた。
あの仕草が心理的な拒絶を意味していることを何かの本で読んだことのある僕は、更に驚いて慌てて言い訳をした。

「そんな……つもりじゃないよ。
僕ね、タティのことをすごく可愛いって思ったんだ。それにね」
「そんなの嘘です。わたしが可愛いなんて。
アレックス様だけは、こんなことをなさらない方だと信じていまし

たのに……」
「嘘じゃないよタティ、どうして嘘だなんて思うの？
ね、落ち着いてよ。そして自分の姿を、鏡で見てみたらいい。そうすれば僕が言っていることが、タティにだって分かるはずだから」
「いいえ、嘘です。嘘です。
だって……、アレックス様の心の中には今でも誰か特別な女性が棲んでいて、貴方が毎日のように彼女を想っていることを、わたしは知っているんですもの。
繊細で情の深いアレックス様だからこそ、あなたが彼女を手放すことなんて、絶対にないって知っているんだもの。
エステルさんという方が、アレックス様のことを裏切ったことはいけないことだと思うわ。
彼女がしたことは、非難されて当然の行いだわ。
でも……彼女が気づかなかったとでも思っているんですか？
アレックス様の心に他の特別な女性がいることを、貴方がいつもその人を想っていることを、彼女が一度も気がつきもせず、傷つかなかったとでも思っているんですか？」
「タティ…」

第13話　夕餉

それからずっと、僕とタティは気まずかった。
僕は、女の人に振られるという経験を味わったのはエステルに続いて二度目のことで、初めてのことじゃなかったはずなのにとてもつらくてその帰りにはあまりおしゃべりをする気にもなれなかった。
僕がシェアのことを毎日思っていることを、タティが知っているということに驚かされた反面、だったらどうなんだというやり場のない気持ちを、僕は結局口に出すことさえできなかった。
まだ陽の高い帰り道、タティは黙ってうつむいたまま、僕の少し後ろを歩いていた。
僕はときどきタティがちゃんと僕について来ているのかを確認しながら、この問題について、本当はタティと話し合いたいと思っていた。けれどもこれ以上僕らの仲がこじれてしまうのは嫌だったし、ましてや言い争いになったり、喧嘩になったりするのは嫌だったから、できればタティのほうから話を切り出してくれるのを待っていたけど彼女はとうとうそうしてはくれなかった。
ほとんど何も話をしないまま連れ立って居城の城壁のところまで戻ると、タティは着替えをすると言って僕に一礼をして、足早に鉄製の門をくぐって行ってしまった。
僕は、もうあんまりスープを作ろうなんて気分じゃなくなってしまって、持っているトマトのかごを持て余していたんだけど、健気にも城壁の内側のところで、ブルーベリーのかごを待ったまま直立していたパーシーの姿をみつけてしまうと、放り出すのも無責任な気がしたので濡れた服を着替えてから改めて厨房へ向かった。
パーシーは僕とタティの服が濡れていたことがどうも気がかりだったとみえて、それについて調理場で何度か僕に質問をしていた。せっかく心配してくれているのに邪険にするのも悪いので、最初は言葉を選んで彼に事情を説明していたが、あんまりしつこく聞いてく

るのでしまいにはそれが鬱陶しくなって、僕は最後には彼を睨みつけずにはいられなかった。

「だから、小川で転んだんだ。いったい何度言ったら納得するんだよ。君、人からよくしつこい性格だって言われないか？
とにかく僕らがびしょ濡れだったのは、小川で足を滑らせたからだ。でも心配はいらないよ。怪我もないし、水も飲んではいないしね。久しぶりに水遊びをしたみたいで、楽しかったよ」

「本当ですか？　それならどうして、タティ様は走って行ってしまわれたんでしょうか？
着替えをすると言ったきり、戻って来られる様子もありません。だいたい遠目からは、泣いているようにも見えましたが……」

「何だ？　もしかしておまえは僕を非難しているのか？
まさか僕がタティに何かおかしなことをしたって、そう言いたいんじゃないだろうね？」

「いえ、そうは言っていません。が、俺の見ている限りそう取られても仕方ないご様子でしたよ」

「……それはどうもご親切に。
別に身分をどうこう言いたくはないけど……、君は人を苛つかせる方法を心得ているね。そのお節介ぶりには恐れ入るよ」

その夜、僕が作った野菜スープを食べてくれたのは兄さんだった。
夕食のテーブルには、せっかくだからといってジェシカも招待されていた。
通常の夕食とは別に、湯気をあげた僕の作ったスープの皿が運ばれてくると、兄さんやジェシカは喜んでそれを食べてくれたが、僕は

スプーンをつける気にもならなかった。
我ながら几帳面に刻んだ何種類かの野菜が、トマト色をしたスープの中に美味しそうな輝きをもってゆらゆらと揺れているのを、僕はお腹が減っているのになかなか飼い主から食事の許可を貰えない犬のように黙ってじっと見ていた。

「何だアレックス、よくできているのに食べないのか」
「とっても美味しゅうございますよ」
「となるとジェス、これには鉛なり水銀なり入っているのかも分からんぞ」
「まあ、伯爵様、そんなご冗談を……うふふ」

兄さんの冗談は、結構つまらないものが多いというのは今に始まったことではないのだが、ジェシカや周りが甘やかすので本人には未だにそれが分からないのだろう。今も自分が何か面白いことを言ったと思って、僕の向かい側の席でジェシカと笑いあって、いい気分になっている兄さんが少し恨めしかった。
とはいえそれには関係なく、その夜僕の唇から漏れるのはため息ばかりだった。
やがて僕の浮かない顔を見た兄さんは、その切れ長の目を僕に向けてこう言った。

「タティが美少女だということに、やっと気がついたが時既に遅しといったところか」

核心を言い当てられたことに動揺して僕が顔を上げると、兄さんは呆れたような顔でこう続けた。

「せっかくいつでも手を出していいように、あの無能な娘をいつまでもおまえの側に置いてやっていたというのにな。おまえの所望を

拒否するとは、さては他に男がいるのか何なのか。
しかしおまえがあれを抱きたいと言うなら、今夜にも私が言ってそうさせてやるがどうするね」
「どうして兄さんがそんなことを知っているんですか？」
「何も驚くことはない。先刻、ルイーズから報告があったのだ。私の有能な乳姉妹からな。
ルイーズの魔術が私の第三の眼となっていることを忘れたか？　私はこの居城や、私が所有するすべての城や邸、他にも要所に起こったあらゆることをこの場に居ながらにして知ることができる」
「そんなのやめてよ……、これ以上タティに嫌われたら困るんだ」
「女の機嫌などおまえの知ったことではないだろう。そもそもあれは、武官の才があるわけでも、魔術に通じているわけでもない只の女だ。おまえの妾にするために飼っておいたような女なのだぞ。無理やり抱いてしまえばいいのだ。
一度抱いてしまったなら、その後は女など容易いもの。すべてはこちらのものだ。
それとも身柄を買い上げて、逃げられないようにしてやるか」
「兄さん、お願いだから余計なことはしないで」
「アレックス、まったくおまえは何たる弱気だ。たかだか小娘相手に……。
それにしてもおまえも少々疎すぎたな。おまえの退官した乳母は、あれはなかなか美人であったろう。となればその娘の容姿くらい、容易に推定できるだろうに」

僕は、兄さんと話しているとときどき頭がおかしくなりそうになった。それとも領主とはこのくらいでなければいけないものなのかもしれないけど、それでも僕には今のところ、兄さんとこうした価値観を共有することはできそうになかった。

「兄さん、お言葉ですが、普通の人間が自分の母親代わりの人の品

定めなんか、するわけないじゃないか。
僕は兄さんみたいに、変態じゃないんだ」

僕が苛々としてそう言うと、兄さんは少し眉の辺りを動かした。それで僕は、本人を目の前にして少し言葉が過ぎたかと思い、そっとジェシカのほうを窺うと、ジェシカも僕のその懸念を肯定するように少々気まずそうな表情で僕を見返した。
その夜の兄さんはとてもご機嫌がよかったのでうっかり油断をしていたが、僕の兄さんは大変誇り高い人物で、彼はたとえ冗談でも、それを傷つけられることを好まない。
何秒かの間、僕は非常に緊迫した状況を味わわされることになった。けれども僕のそうした恐れは、幸いにもすぐに払拭されることになった。
兄さんが気を取り直したような顔で、それまで通りの快活な調子でこう続けたからだ。

「ふっ、この私を変態呼ばわりするとはいい度胸だなアレックス。どんなに取り澄ましていようとおまえも男である以上、多かれ少なかれ私と同質の人間ということを棚に上げて自分は聖人気取りか？だが、まあいい。今夜の私はとても気分がいいのでな」
「そう、よかったじゃない。エステルとは上手くいっているんですか？」

図らずも口をついた言葉が嫌味であったことに後から気づき、僕はさすがに顔色を失くしたが、兄さんはそれをも鼻で笑っただけだった。

「アレックス、目上の人間に対し、そのように皮肉を言うものではない。
おまえがそのことを気に入らんのは分かるが、過ぎたことだ、もう

忘れなさい。
その件に関しては、今後我々の間で話題にすることは控えようではないか。お互いにとって何もいいことはないし、いい気持ちもしない話だ。そうだな？」
「……はい、兄さん」
「……、タティと言ったな、あの乳姉妹のことが気になるなら――」
「兄さん、すみません、でもいいんです。そのことはどうか放っておいてください。
彼女が嫌がっているならもういいんだ」

第１４話　月夜

私室に戻ると、室内にはまだタティがいた。
窓の外にはとうに夜の帳が降り、大窓から薄暗い室内にはその夜の清らかな月の光が注ぎ込んできていた。
しかし僕の帰室に気がつくと、窓際にいたタティが慌てて近くの壁やエンドテーブルの上のランプに灯をともし、すぐに部屋の中には赤みを帯びた温かい光が広がっていった。

「あの、申し訳ありませんアレックス様……、さっきは……」

タティは、いつも通りの分厚い眼鏡と白いブラウスと、踝まで隠れてしまう地味な茶色のスカート姿をしていた。
貴族の娘なのに、考えてみればタティが着飾っているところを僕は今まで一度も見たことがない気がした。タティの母親は美人だったのかもしれないが、彼女もまた控えめで、似たような服装をしていることが多かった。飽くまで僕より目立ってはいけないという考えのもとで、タティのことを教育していたのに違いなかった。

「あ、いや……。
いいよ……、僕も驚かせてしまって悪かったね。……月を見てたのかい？」
「はい、あの……、今夜は満月みたいで……」

タティは、窓の外のほうに指先を示しながらそう言った。
その態度は柔らかく、僕は彼女と意思の疎通が図れそうな予感がしていた。
何と言っても僕らは本当に兄弟のような関係だったし、その認識はある意味では、ずっと年が離れている兄さんよりも僕の中では強か

った。僕もタティもどちらかと言うと積極的な物言いをする性格ではなかったので、僕たちが喧嘩になるようなことは滅多にあることではなかったものの、ごくたまに気持ちがすれ違うことが、これまでにだってまったくなかったわけじゃない。

だけどそういうときだって、僕らはいつの間にか仲直りをしていたものなんだ。どちらからどうっていうことがよく思い出せないくらい、僕らはいつも、いつの間にか笑いあっていた。

つまりそれは、とにかく僕たちはいつだって分かり合えていたということを表しているし、それは勿論、今だってそうなんだ。

それで僕は、頭の中ではすっかり仲直りを済ませた気持ちで、いつも通りの気楽さで部屋の中のタティのところまで行こうとしたのだが、しかしどういうわけか、タティが微妙に緊張して身体を強張らせるのが分かった。まるで信用ならない男が近づいて来たとでも言わんばかりの彼女の態度に、僕は少なからず傷ついた。

それでも、どうにかそれを気にしないふりをして僕が更に窓辺に近づいて行くと、それにつれてタティはそれまで彼女が立っていた窓際から、明らかに何歩も後退りして離れて行った。

僕は立ち止まり、自分のブーツのつま先を何となく見つめた。

僕らはつい最近まで、ついこの朝まで、本当の兄弟みたいに過ごしていたのに、どうしてこういうことになっちゃうのか、僕にはまるで分からなかった。

もしかしてタティは、僕がタティを襲うとでも思っているのだろうか。

僕は一緒に月を眺めるなりして、昼間のことを、何事もなかったようにしたかっただけなのに、タティのこうした態度こそが僕らの仲をこじれさせている最大の原因であるということに、彼女は気がつかないのだろうか？

「あの…、アレックス様、椅子をお持ちしましょうか……？」

仕方がないので、僕が一人で窓際で夜空の満月を眺めようとすると、少し離れた場所からタティが遠慮がちにそう声をかけてきた。だけど僕は、笑顔でそれに応じる気分では既になくなっていた。

「いいよ、要らない」

「あ、はい……、すみません、出すぎたことを申しまして……」

タティの消沈した声を、僕は無視した。

そのまま怒った素振りで月を見上げているふりをして、僕はタティから僕に歩み寄って来ることを待ちわびていた。これが、僕の彼女に対する甘えであることは分かっていた。

僕だって、たとえば何だか腹を立てている様子の兄さんに近づいたり、声をかけるだけでも相当の勇気がいるということは分かっているくせに、僕は彼女にその勇気と譲歩と問題の解決の責任を一度に要求していたわけだ。

さもなければ、この気まずい空気が延々と続いていくことを彼女のせいだと言わんばかりの態度を続ける気でさえいた。

本当はこんなことがしたいわけじゃないのに、僕はどうして自分が意地を張っているのかさえ分からないまま、聞き分けの悪い男の振る舞いを続けていた。

本当は、こうすればいいことは分かっていたんだ。今すぐどうしてそんなにびくびくしているのかをタティにたずねて、彼女を非難したりしないで、恐がらせないように優しく話して一緒にその問題を分かち合えばいいということは。

それでなくてもタティがつまらない理由でおどおどするのはしょっちゅうあることなんだから、そんなことは、何も僕がむきになるほどのことじゃない。何をそんなに恐がっているのかをたずねればいいだけなんだ。

恐らく彼女は昼間に僕がしたことを過剰に恐がっているんだろうが、まっとうな家庭で育った娘なら、恋人でもない男に抱きしめられた

りしたなら、差異はあってもこんな反応をすることくらいまったく普通のことなんだろう。よく考えてみたら、遊び慣れた兄さんやその仲間たちが集まるパーティーなんかにやって来るそれなりに勇敢な女性たちとは違って、普通の一般的な年頃の女性っていうのは、きっとみんなこのくらい臆病で内気なものに違いないんだ。

だから僕が今すべきことは、こんなふうに意地を張ることじゃなくて、親切でおおらかな態度でこの馬鹿馬鹿しい誤解を解くということなんだ。

僕が安全で信用できる男であることをタティに話して、それから昼間のことを素直に謝ればいい。そうすれば、タティはきっと僕の言うことを分かってくれるはずだし、機嫌だって直してくれるだろう。簡単なことだ。分かっている。そうとも、頭の中ではよく分かっているんだ。

……それなのに、実際の僕というのは何かとても面倒な心の動きによって身動きが取れなくなってしまって、結局はただ黙って、タティに対して終始意地を張り続けているだけだった。

やがて背中のほうで、パタン、という扉の閉まる音がして、僕はタティが部屋を立ち去ってしまったことを知った。

子供の頃はともかく、何年か前からタティは僕の私室とは完全に別の一室で暮らしているので、自分の部屋に帰ってしまったのだろう。

「……何だい、お休みなさいもなしなのか。

タティは僕が甘いと思って、僕のことを軽く見ているんだろうな。兄さんになら、間違ったってあんな態度なんか取らないくせに……。

でも、僕だって男なんだ。あんまり無礼なことをしていたら、もしかしたら押し倒すことだって、あるかもしれないんだからな」

僕は取り残された情けなさを強がるために一人悪態をつき、それから頭を振った。

そして思った、僕は心のどこかで、自分が少なくとも世の中の若い

男たちよりは細やかな思いやりや、丁寧な気遣いを持っているという自負心があったけど、でもそれはとんでもない間違いであったことを。

事実、こういうときの僕は自分が思っていたよりも、確かにずっと意地悪で嫌な人間なのだ。

「……お、お休みなさいませ……」

その上、背後でタティの声がしたことに驚きすぎて、もう少しで粗相をしそうになるほどの小心者なんだ。

第１５話　四階テラスにて

「もてないからどうすりゃいいかって、そんなの俺のほうが聞きたいことですよ」

数日後の正午前。

僕の救い様のない質問に対し、同じく救い様のない様子でカイトは言った。

その日僕らは空と風景の美しい居城の四階テラスに寝そべって、夏の終わりの穏やかなそよ風を肌に感じているところだった。テラスにある何組かのテーブルセットを端に寄せ、今ではそれなりの図体の男が二人、大胆にも床に転がっているのである。

カイトというのは僕より二歳年上の従者であり、公私を問わず外出や、こうした暇つぶしの時間などをよく一緒に過ごす子供の頃からの僕の側近だ。彼はアディンセル家を取り巻く軍属の家柄の出の騎士で、立ち位置としては兄さんで言うところのジェシカということになる。

「アレックス様、本日はまた一段とほんわり上の空ですが、まだエステル嬢のことを引きずっていらっしゃるんですか。

しかし、こう言っては何ですが、ああいうタイプは所謂強い男に弱いんじゃないかと思うんですよね。俺は少し話しただけでしたが、おとなしそうに見えて、意外と一筋縄では行かないような印象を受けましたよ。善くも悪くも頭の回転が速いと言うか。

温室育ちのアレックス様にはちょっと強すぎる性格な気がしたし、なんかいかにも振りまわされそうで、貴方がそれでもいいっておっしゃるならそれでもいいんでしょうけど、俺は伯爵様に横取りされてちょうどよかったと思ってるんですよ。

じゃなけりゃ、貴方も変に媚びたりしないで、ああいう女にはもっ

と偉そうにしてりゃいいんです。
どうやるかって言うと、そういうのは恐らく、閣下を見習えばいいんです。あの方の横柄さを真似るだけでも、だいぶ違うんじゃないですか。自分を大きく見せる技術、世の中を渡っていくには身につけておいて損はないものでしょうしね。
もっとも、相応の実力を持ってもいない奴がそれをやったら、同性からは失笑ものなんですがね」

僕は雲の流れをぼんやり眺めながら、エステルのことなんてとうに頭から飛んでしまっていたことを、カイトのこの言葉によって気づかされたところだった。言われれば思い出して、まだつらくなるんだけど、とにかく僕は、今はタティのことを考えていたんだ。
ここ数日、僕がとにかくタティのことが気になってしょうがないなんてことを、ここでこの口の減らない友人に言い出すべきかどうかを悩んでしまっていたのは、当然僕の配下であるカイトが、同じく僕の乳姉妹のタティと面識があるどころでは済まない仲だからに他ならない。
カイトはジェシカとは違って、そう生真面目な性格でもないので、僕がもしタティを好きかもしれないなんてことを言い出せば、当然それをねたにしたジョークくらいは言い出すに決まっていた。それでもまだ見込みがあるなら、からかわれたって平気なんだけど、僕はもう既にタティに拒否されているし、ここのところ僕らの関係はどういうわけか更に悪化していて、今朝だって顔をあわせても信じられないくらいぎこちなかった。
要は恥をかかされるのは、エステルのことで僕はもう懲りていたんだ。
あんなに情けない気持ちを味わうくらいなら、やっぱりもう、こんな気持ちは忘れてしまったほうが得策なんだろう。
そのほうがずっと面倒がないし、だいたい僕には、こうした問題に係る厄介ごとを受け止め得るだけの器がないんだから。

「噂じゃ、閣下は現在四人の女と日替わりでお楽しみだそうですよ」
カイトは男のくせによく口のまわる奴で、今日も今日とて次から次からどうでもいい話題を僕に提供してくれていた。
兄さんが他の気に入った女性たちをもてなすのと同様に城内にエステルを引っ張り込んで、ときどき昼や夜を楽しんでいることが僕の脳裏を横切り、僕は殊更に不快な気持ちで相槌をうった。

「へえ、お盛んなことだね」
「身体もでかけりゃ態度もでかい、でもって金と権力と美貌まで持っていらっしゃる。
ああいう嫌味みたいな美男が女を独占しているから、俺のところにまで女がまわって来ないのかね……」
「そんなことはないんじゃないの。君にだっていいところはあるさ」
「いいところ？　たとえば何ですか？」

半開きの、ほとんど諦めきったような目線をカイトは僕に向けた。
カイトは自分で言うほどもてないようには僕には思えないんだけど、どういうわけか年中女がみつからないということを嘆いていた。
本当は恋人がいるのに、わざといないということにしているだけじゃないかと僕は睨んでいるんだけど、敢えてそこを追求しようと思わないのは、何と言っても僕にほとんど女性経験がないってことを、構われたくはないからだ。

「そうだね、カイトはまあ……よく口がまわる」
「それ、女に対しての売りになるんですかね？」
「いや…でも兄さんは弁が立つから、やっぱりポイント高いんじゃないだろうか。
それにほら、君はなかなか顔立ちだって……」

「美少年にそんなことを言われても説得力ないんですよ。貴方、ご自分がどれだけ可愛い顔をしているか分かって言っていらっしゃるんですか。
その美少年というアドバンテージを利用しない貴方を見ていると俺はもどかしい。それに引き換え俺はどう見ても十人並みですからね」
「まあ、それでも君だってジェシカに負けない、いいところの出なんだから」
「……アレックス様、そいつは、俺が女を捕まえるためには家柄をちらつかせるしかないと仰せなので？」
「いや、そうじゃないけど」

カイトは床に寝そべったまま快晴の青空に向けて大あくびをし、それから僕に対して更なる不平を言った。

「ああ、いっそ、アレックス様に妹君でもいればよかったんですよ。そうすりゃ知り合うにも手っ取り早かったんだろうし、貴方ですらその女顔なんだから、妹君ならばさぞかしたおやかな、花のような美少女だったんだろうに。
それに子供の頃から接してりゃ、年上のお兄さんの粗なんかそうそう見え難いもんなんでしょうし、上手くすれば恋に落ちて貰えたかもしれないのに。
ああ、いいじゃないですか、姫君と下僕のラブロマンス」

カイトはそう言って、両手で顔面を押さえて少し悶えた。しかし僕はカイトの、僕に対する美少年などという発言がそろそろ癇に障っていたので、それに対して適当に返事をするにとどめた。何故なら僕は、どう考えたってもう少年なんて侮られるべき年ではないからだ。美少年なんて言われて喜ぶ奴は男じゃないんだ。

「ラブロマンスねえ。残念ながら、僕にはあの強力な兄さんが一人

いるだけだよ。
そんな妄想するくらい飢えているなら、今晩あたり娼館にでも行って来なよ」

するとカイトは今度は頬杖をついて、少々僕を嘲るような表情をした。

「おや、娼館なんて言葉を貴方がご存知とは思いませんでしたね」
「馬鹿にするな、何年あの兄さんの弟をやっていると思ってるんだ」
「確かに。しかし、嫌ですよ娼館でなんて、だって俺は……だ、第一、まともな紳士はそういう場所には行かないもんです。それにそんなところに行ったところで、恋人ができるわけじゃない」
「カイト、そうだよ。君忘れているかもしれないけど、今は僕がもてるための方法を聞いているんだ。君がじゃなくてさ」
「ああ、そうでしたね。それでしたら貴方こそ娼館にでもお行きになれば、アレックス様のような美少年はそれこそもてまくりなんじゃないですか」
「カイト、僕はもう少年じゃない」
「おっと、これは失敬。お気に障りましたか」
「カイト、君に聞くんじゃなかったよ」
「ええ、そいつは貴方が聞く相手を誤ったんですよ」

少し会話が途切れた。僕らはそれなりに気の置けない間柄なので、少々辛辣なやり取りもこの沈黙も、僕は気にならなかった。
西の空へ向かって雲が流れて行くのを僕は見ていた。
タティは今頃何をしているんだろう、なんてことを考えながら。
一緒にお菓子作りをしたり、裁縫をしたりするのがとっても楽しかったのに、もし僕らがこの先ずっとこのままなら、もうそんなこともできなくなっちゃうんだろうか。

「そう言えばタティの奴が」

しばらく黙っていると、カイトが再び、まるでどうでもいいことのようにそう切り出した。

タティと聞いて僕の心臓はにわかに騒ぎ出したが、僕はそれを悟られないように極めて冷静な態度で、殊更に興味のないような、何でもいいような相槌を打った。

「あ、ああ、う、うん」

「男と揉めていたのを見ましたよ」

「男？　誰だ？」

「たぶん、あれはこの城の料理長ですね。料理長のパーシーでしたっけ？

二人が話しているところは前々からよく見かけていたんですが、アレックス様の乳母が料理人と仲がいいって話だったんで、最初は俺としても、タティもそれを踏襲してるのかと思って見ていたんです。でも、先日は何だか様子がおかしくて、あれはどう見ても修羅場っぽかったんですよ。うん、どう見てもあれは業務上の内容を話している様子じゃなかったんです。

タティも男のほうも、何か深刻そうな感じだったな。見様によっては、恋人の痴話喧嘩のような。それであんなブスでも男がいるもんなんだなあと思ったんですよね。

それなのに俺ときたら生まれてこのかた……」

「それ、いつのこと？」

タティがパーシーと痴話喧嘩をしていた。この伝聞だけで、僕はもう、胸の中がざわざわして落ち着いていられなくて、寝そべっていた身体を起こさずにはいられなかった。

僕が起き上がってまで反応をしたことに、カイトは少々戸惑った顔をした。

「え、いや。つい何日か前のことですよ。そのときも、いつもとだいたい同じ時間帯だったかな。午前中、俺がアレックス様をお迎えにお部屋に向かう途中の廊下です。一階厨房前の。美人の召使いはいないかと思ってときどき」

それだけ聞いて、僕の頭の中では何もかもが繋がったような気がして、もういてもたってもいられなかった。

僕は立ち上がり、そのままカイトを顧みることもなく足早にテラスを後にした。

「うおっ、突然どうしたんですアレックス様、どちらに!?」

第16話　夢見る頃を過ぎても（1）

廊下を急ぎながら、僕は自分の鈍さを嫌というほど痛感しなくてはならなかった。

恐らくタティとパーシーは、ずっと前からできていたんだろう。だから何日か前、トマトスープを作ろうと厨房へ押しかけたとき、あのときパーシーは、タティにあんなに好意的な笑顔を向けていたんだ。

と言うよりは、今から思い出してみるに、あれはあの男なりの僕への牽制だったんだろう。立場がずっと上である僕を睨んだり、悪い態度を取ったりすることは絶対にできないことだから、ああいう形で自分がタティと親しい仲であることを僕に知らせようとしていたんだ。

タティが奴のことを、会話の途中でファーストネームで呼んだことを、僕は聞き流していたけどちゃんと憶えていることだった。とても嫉妬を感じたからだ。

でも嫉妬と言えば、あのときトマトが傷んでいるからと言って奴が慌てて僕らの後を追いかけて来たのだって、あれこそ本当は僕の健康なんかより、僕とタティが二人きりでいることへの嫉妬心からだったんだろう。

小川から戻ってきたとき、城壁のところで直立して待っていたのだって、そのあと僕にうんざりするくらい小川であったことを質問していたのだって、そう考えればあれは僕への忠義やお節介なんかではなく、単にタティが心配だったからに違いなかった。

そして勿論、タティが僕の抱擁を拒絶したのは、彼女が既にパーシーを愛していたから……。

二人がもう既に恋人だというなら、僕に入り込む隙なんて最初からないじゃないか。だからこんな馬鹿げた行動は今すぐ取りやめて、カイトのところに戻って、それまで通り高みから、管でも巻くよう

な態度に戻るべきじゃないかという考えが一瞬脳裏をかすめたが、僕は立ち止まらなかった。

だって、タティは他の女の人とは違う。彼女は、僕が生まれたときからの家族なんだ。だからもしタティがパーシーを好きだと言ったって、僕はそんなの認めるわけにはいかないんだ。

僕はタティより半年誕生日は遅いけど、精神的には僕のほうが大人なはずだし、僕は男だから、世間知らずの彼女を守ってあげなくちゃいけない。

それに男とは、女性が間違いを犯そうとしていることに気づいているのに、黙って見過ごすなんて無責任なことをしてはいけないものだ。ましてや僕は騎士の家系に生まれた騎士であるのだから、いかなる理由があろうと女の人を守るという行為にかけて手抜かりがあるようではいけない。

けれども物事の道理としてはともかく、一時的な感情面において、いまいち僕の立場の弱さは否めないところだったので、僕は自分のこの行動を肯定するための理論武装を始めることにした。要は二人がもしお互いを好きだとしても、これから彼らを何とかして引き離そうと考えている僕のこの行動を正当化するための言い訳をだ！

まず、パーシーは平民だ。僕と比べて、その点だけでも明らかに奴は劣っている。そうだ、あいつは僕より劣っている。それも、何もかもだ。門地も、身分も、財力も、将来性も。あまりにも明白すぎてこっちは同情心さえ起こるくらいだ。これを聞いただけでほとんどの女の人は、あいつより僕のほうがいいと思うに違いないだろう。

でも、これらは僕の実力によるものではなく、今のところは全部兄さんに与えて貰っているものだ。では、個人の資質についてはどうだろうか。身長も、教養も、外見的な魅力も、やっぱり全部僕が奴に勝っているぞ！

しかし、そこまで考えて、僕は自分の中に潜む慢心に気がついた。僕は今では兄さんを完全に傲慢な人間だと思っているし、彼を酷い差別主義者だと罵ったことさえあったけど、僕だって同じなんだと

いうことを思い知った。

タティが僕を嫌だと感じているとしたら、そういうところなんじゃないだろうか。だって、僕は明らかに兄さん以外の周りの人間を自分よりも下に見ているんだ。それは、そのように育てられたからということも勿論ある。これが世の中というものだし、貴族なら誰だってそういう価値観の中で概念の中で生きている。でも果たして、一対一のつきあいでもそれでいいんだろうか？　僕はタティに、要求ばかりしていなかっただろうか？

結局何ひとつ考えが纏まらないまま、僕は一階厨房前に辿り着いてしまった。

だいたい何日か前の午前中にここにいたのをカイトが見たからといって、今タティたちがここにいるとは限らなかったけど、僕はこの際タティのことは置いておいて、厨房にいるであろうパーシーを脅かしてでもタティから手を引かせようと考えていた。そのことで、後でタティは僕をなじるかもしれないけど、あんな男と係わっていたってろくなことはないということを、彼女は後になって分かって、僕のこのときの判断を感謝するときが来るだろう。

何だかやり方が兄さん的だと思わないではない気がしたが、兄さんなら、気に入った女性を手に入れるためなら恐らくもっと酷いことを平気でするだろうから、僕だって脅かすくらいしたっていいんだ。別に女性や子供にやるんじゃないんだから、糾弾されるべき卑怯者には当たらないだろう。

訪れた一階厨房前廊下には、兄さんや僕といったこの城の家人の生活圏とは違いあまり高価な装飾品があるわけではなかったが、かといって殺風景なわけではなくて、名画や品のいい置物の代わりに庶

民的な花の壁掛けやら、手作りの織物なんかが飾られてあった。ここでは使用人の姿が途切れることがなく、すぐ側の窓辺では、日差しの中を窓ガラスを熱心に磨く若い召使いの姿が見られた。それに厨房入り口横の壁には、そこによりかかってうなだれている若い女性の姿もあった。よく見てみると、それはタティだった。

僕はそのまま厨房のパーシーのところへ勢いに任せて怒鳴り込もうとしていたところだったが、大きく深呼吸をしてから、あまりにもわざとらしいことを承知の上で、まずはタティに歩み寄ることにした。カイトの話や僕の悪い想像を鵜呑みにしたくはなかったが、彼女がこんなところで何をしていたのか、気になったからだ。すると、タティはすぐに僕に気がついて僕を見上げる。その表情は明らかに弱っていて、無気力なものだった。

「……アレックス様。どうしてこちらに？」

弱々しく、タティは囁いた。

「いや、あの……、カイトが見かけたって言うから。つまり、君がよくここにいるって……」

「そうですか」

タティはそう言って、次には泣きそうな、迷惑がっているような表情をした。

「どうしたの？　何かあったのかい？」

「そんな……、とっくにご存知のくせに」

僕がたずねると、タティの声に少し皮肉っぽい響きが混じったので、僕は驚いて彼女の顔を覗き込んだ。

「待って、僕は知らないよ……何があったの？　例えばその、パーシーと……喧嘩でもしたとか」

するとタティはこう言って、眼鏡越しに僕を睨みつけた。

「……料理長さんなら、殺されました」

「えっ、こ、殺された!?　殺されたって……、それはどういうこと？」

「アレックス様が、伯爵様に何かおっしゃったんでしょう？　そうとしか思えないわ、だって……」

タティの口から兄さんの名前が出てきたことで、僕は何か嫌な予感がして、その言葉の先を聞くのが恐かったが、勿論タティが話をするのを阻むことはできなかった。

タティは今にも泣きそうな顔でこう続けた。

「先日、伯爵様が……、アレックス様と小川までトマトを取りに行った日の翌日のことです、わたしは伯爵様に呼び出され、アレックス様のお妾になるように言われたんです。今後正式にそうしろと。これまでのように、身のまわりの世話をするだけの乳姉妹ではなくて、アレックス様の……要求があったときには二度と断ってはいけないと……叱られて……。

でも……でもわたしではアレックス様には到底相応しくないので、お妃にすることはできないことも同時におっしゃいました。将来、アレックス様が然るべきお妃様を貰うことを、覚悟しておくようにと。

そしてその上で、これを承諾しなければわたしの家族の身柄を保証しないということでした。

その次の日の朝のことです、料理長さんと話したとき、わたしがこのことを悩んでいることをつい打ち明けてしまって……そしたら彼

はこれに怒って、あんまり酷いって、わたしのために……伯爵様に抗議してくれて……。

でもそうしたら、伯爵様がお怒りになってっ……、そのまま、その場で殺されてしまったのよ！　すぐドアの向こう側でっ……！」

第17話　夢見る頃を過ぎても（2）

タティの声にも目にも、はっきりと涙が帯び始めていた。
パーシーが殺されたということ自体には、僕は特に何の感想も持たなかったというのが本当のところだった。こういうことが起こったとき、悲しみと不条理を感じて騒ぎ立てていた僕の少年時代は、もう少し昔のことだ。今は世の中の仕組みをある程度分かっていて、こんなときにはただ黙って印を切る。他の人たちと同じように。
そもそも柔らかな人当たりを心がけてはいても、本来が気性の激しい兄さんに抗議をするだなんてことは、兄さんの側近連中でさえ憚っているほど恐怖をともなうことであるのは、ここでは周知のはずだった。
僕はときどき兄さんのやり方に文句を言いに行くけど、それは実は、兄さんに目をかけて貰っている身内であるからこそ無事で済んでいることであって、他の人々からすれば考えられない特権的な行いなのだ。
それなのに、それでも敢えて兄さんに挑戦するということは、パーシーの身分からして殺されたって文句が言えないくらいのことなのだが、それにしたって本当に殺してしまうというのは、やりすぎであるとは僕は思う。
タティはパーシーの死を悲しんで、僕の目の前で涙をこぼしていた。眼鏡の隙間から覗く彼女の長い睫毛に涙の粒が宿っていて、それで僕の胸はいっそう締めつけられた。
去来するのは、兄さんというのはまったくなんてことをしてくれたんだという当惑。それに飽くまでパーシーを擁護する姿勢のタティへの不満や悲しみが混ざって、僕は何とも言いようのない気持ちになりつつあった。気がつくと、こんな言葉が僕の口をついていた。

「その……君は僕の乳姉妹なのに、僕の側仕えなのに、他の男と…

…パーシーなんかと交際するから、兄さんはそれをきっと不純だと思われたんじゃないかな……」

するとタティは弾かれたようにこう答えた。

「交際なんてしてませんっ…！」

「えっ？」

その勢いに負けて瞬きをする僕に、タティはいつものおっとりした彼女らしくなく、声を荒立てて言い募った。

「どうしてですか、誰がそんなことを言ったんですかっ？料理長さんはただのお友だちです、アレックス様の好き嫌いのことで相談しているうちに、確かに親しくはなったけれど、それだけのことだわ。

それなのに伯爵様もそのことをおっしゃって、とうとう信じてくれなかったわ！　どうして？　どうしてなのですか！？」

「そ、そうだったのか……、僕はてっきり、君たちが好きあっているものだと思っていたよ……でもタティ、それが違うと言うならよかった。僕は」

「……でも」

そこでタティは不意に、敵意さえ感じられる眼差しで僕を見上げた。

「わたしは好きだったかもしれません……あの人のこと」

その絶望的な一言に、僕はもうなんて言っていいか分からなくなって、黙ってうつむいてしまった。

僕は何だか、頭の中も心の中も収拾がつかなくなって、酷く疲れてしまっていた。

だからこのまま部屋に戻って、少し休みたかったんだけど、悲しみと怒りで気が立っているタティは、それを許してはくれなかった。

「アレックス様、わたし、貴方のお相手をしたらいいんですか？」

投げやりな上に、棘のある言い方でタティは言った。

「そんな、そんなことは……」

「アレックス様はこの間の腹いせに、あの小川でのわたしの態度のことを怒っていらして、それでこんな酷いことを思いつかれたんでしょう？

でも、それならわたしにだけ仕返しをすればいいのに、わたしの家族や、コリンさんまで巻き添えにするなんてあんまり酷いわっ……。

アレックス様、貴方のつまらない勘違いのせいで、コリンさんは殺されてしまったのよ！？

アレックス様はご自分がどれほどの権力をお持ちなのか、まるで分かっていらっしゃらないのよ。貴方の気まぐれな言葉ひとつで、どれだけの人間に理不尽な被害が及ぶか、まるで分かっていらっしゃらないのよ。

さもなければ、アレックス様だけはそんな方じゃないと信じていたけど、やっぱり貴方もあの伯爵様とおんなじなんだわ。

そうして、そうしてわたしを散々弄んだ後に、貴方はしれっとして、知らん顔で、あのエステルさんみたいな金髪美人のお姫様と、幸せな結婚をされるおつもりなんでしょうっ……！？」

目の前のタティは、これまで見たことがないほど取り乱していて、いまや僕に向かって喚き立てていた。

そして彼女と同じくらい混乱している僕もまた、タティが何を言っているのかを、理解することができなくなってしまっていた。

ただ僕に向かってこんな態度を取るタティのことが、パーシーのこ

とを庇うタティのことが、次第に憎らしくて許せない気分になっていた。

「な、何だよっ、どうして人の話も聞かずにそこまで勝手に決めつけるんだ！」

気がつくと僕もまた、タティに負けないくらい声を荒らげていた。

「全部兄さんが勝手に言ってるだけのことじゃないか、そんなことで……。

だいたい、コリンさんって何だよ……！

タティがあの男をコリンさんなんて気安く呼ぶから、兄さんだって二人が交際しているって誤解されたんじゃないのか。

こんなことになったのは、タティが不用意なせいもあるんじゃないのか！？」

僕が腹立ち紛れに胸に引っかかっていたことを口にしてしまうと、タティはとうとう声をあげて泣き出してしまった。

彼女は自分のせいでパーシーが殺されたと言って大泣きをした。すると当然、彼女を泣かせてしまった酷い罪悪感が僕を襲った。

でもどうしてこんなことで自分が罪悪感を覚えなければならないのかが分からなかった僕は、僕の目の前で、パーシーが死んだことを、まるで世界が終わったみたいに悲しんでみせるなんて酷いじゃないかということを、もう少しで更にたたみかけそうになっていた。

「おっ！？　アレックス様、誰を泣かしているのかと思ったらタティですか。

おやおや、いったい何があったんですか？

ううむ、暇だし、ここはひとつ、俺にも事情を教えて貰えませんかね？」

そこへ、これは救いと言うべきなのか、いつの間にかカイトが現れ、彼は僕と泣きじゃくるタティの顔をかわるがわる見て茶々を入れ始めていた。
そのおかげで僕は少し理性を取り戻し、近くで窓拭きをしていた召使いの少年も、廊下を通行する使用人たちのいずれも、各々が興味深そうにこちらを見ていることに意識を向けることができた。
冷静になってみると、僕の目の前で泣いているタティは、僕なんかより当然背丈も低く、か弱く、立場も弱く、彼らの目にはどう見たって、僕がタティを一方的に苛めているようにしか見えないのだろう。そして苦しいことに、事実もだいたいは、その通りだった。
僕は心に湧き上がってくるすべての煩雑な感情をこの際自重し、タティに言いたかった不満すべてを胃の中に無理やり押し込んで、ただ深く、深く息を吐いた。

第１８話　所詮は僕もお仲間なのか

「撤回も何もない。あれは当初からおまえの女にすることを予定していたのだ」

その夕方、僕はルイーズの魔法によって遠方から居城に帰還した兄さんを白大理石の正面玄関で捉まえて、タティに妾になれと命令した件や、パーシーを殺害した件を抗議した。
すると、それに対する何とも素っ気無い兄さんの返答だった。

「それからあの料理人には、身の程を弁えぬ者がどういうことになるかということを、その生命をもって教えてやったまでだ。当然だろう、たかが下男の分際で、伯爵であるこの私に対し、僭越にも意見しようとしたのだからな。これは道義的に見ても許される行いではない。誰が見ても処刑は相当だ。
分かったら、くだらんことでいちいち突っかかって来るんじゃないアレックス。私は疲れているんだぞ」

そして兄さんはルイーズを引き連れて立ち去ろうとした。ルイーズは男のように短い黒髪に色気を纏わせたうっとりするくらいの大変な美女で、しかもいかにも兄さん好みの顔立ちをしている女だった。もし彼女が金髪であったなら、恐らく今頃はアディンセル伯爵妃にして貰えていたかもしれないというほどの美貌。兄さんの隣にいても見劣りがしない女性というのは正直に言って稀なのだが、彼女は確実にその中の一人というわけだ。愛人説に関しては、寧ろジェシカよりもルイーズのほうが有力なのだが、本当のところは僕にも分からなかった。
しかし、魔術師なんていう人種はなかなか得体の知れないもので、僕にとってルイーズとは、いつも妖しく微笑んでいるばかりの謎め

いた女だった。そもそもは兄さんの乳妹で、年齢だって確か兄さんと同い年であるはずなのに、そのみてくれはとてもそうとは思われないくらい若々しかった。

「兄さん！」

僕は、マントを翻し颯爽と階段を上って行く兄さんの背中に声をかけたが、兄さんはそれには応じず、代わりにルイーズが振り返った。彼女の真っ赤な口紅や色気過剰の振る舞いは、兄さんはあまり好ましくは思われない素行だと思うが、僕としてもあまり好きにはなれなかった。彼女の服装はいつも大抵露出が多く、今だって白い胸元や大腿が黒い衣服の隙間から露わになっているが、色気や性的誘惑で男を思い通りにできると思っている浅はかな意図が見え隠れして、それがとても馬鹿にされているように感じるからだ。

と言うよりは、そんな簡単なものに目が行ってしまう自分の恐ろしい単純さに嫌悪を覚えると言ったほうがいいかもしれない。

事実、目の前で微笑むルイーズはとても魅力的で、僕は不愉快に感じながらもそんな彼女から目が離せないのだから……。

「アレックス様、貴方はどうしてそんなに怒っていらっしゃるのかしら。

貴方のタティが、これでようやく貴方だけのものになったというのに何故かしら。

アレックス様だってご存知だったのではありませんか？

あの若いシェフが、貴方のタティに激しい情熱を持っていたことは、彼の伯爵様の執務室に単身飛び込んで来ると言う無謀な行動からあまりにも明らかだった……。

でも、彼はもう死んでしまいましたのよ。それなのに貴方はどうして……そんなに不機嫌にしていらっしゃるのかしらね」

「ご自分のやっていることはどうなんですか！」

僕は気を抜けば思わず吸い込まれそうになってしまうルイーズをわざと無視して、困ったような微笑みを浮かべるルイーズの向こうの兄さんに向けてもう一度声を投げつけた。
すると兄さんは手すり越しに、面倒そうな仕草でようやく振り向いて僕を見下ろした。

「アレックス、煩いぞ、おまえはそうやっていつもいつも子供じみた綺麗ごとばかり言って、よくも飽きないものだな。
それを言うならおまえこそどうなんだ、ルイーズの言う通り、あの料理人がこの世から消えてなくなったことを、内心で喜ぶ気持ちがないと言い切れるのか？
少なくとも、微塵も悲しんでなどないくせに、そうやってありもしない道徳心を掲げて私を非難する資格がおまえにあるとでも思っているのか。
いい加減、自分に正直になれアレックス、あの男が死んで、おまえが感じているのは悲嘆でもなければ義憤でもない。純粋な歓喜だ。
アレックス、何ということだろうな、おまえの心は人が死んでいるにも係わらず、表面的な戸惑いと形ばかりの弔意の奥に、言い知れぬ喜びを潜ませているのだ。それも自覚ができるほど明確にな。
それを否定したいがために、或いは免罪符のためにこうして私に抗議をしているのだろうが……、アレックス、私にはお見通しなのだよ。子供の浅慮など、この私に解らぬわけがない」
「僕はそんなことを思ってない。僕は人が死んだことを喜んでなんかいない！」
「そう思いたいのならばそれでもよい。そういうことにしてやってもいい。私は寛大で、融通が利き、自分の感情の醜さを直視することもできない幼く拙いおまえのことを、この上もなく愛しているからな。
だからアレックス、今度もあの小娘を手放したくないという切なる

おまえの願いを、私は聞き入れてやったのだ。幼い頃、おまえは私によく訴えていたな。それから乳母が退官するときにも。タティのことをやめさせないでと。違うか？」

「だからって妾って……、そんなのあんまり滅茶苦茶じゃないか。僕はただ、タティとずっと一緒にいたいと思っていただけだよ。姉弟として育ったのに、大人になったら他人みたいになってしまうなんて、そんなの嫌だったんだ。

兄さん、彼女は僕の大事な家族なんだ。妹みたいなものなんだよ。兄さん、僕はタティにそんなこと……そんなことは望んでいないんだよ！」

「いや、アレックス。おまえはそれを望んでいたよ」

第１９話　疎外感

ある晴れた晩秋、僕はアディンセル伯爵家の居城の敷地内にある代々の墓地に出かけた。
兄さんは晩年の父上との関係が、なかなか難しかったこともあったようで、うっかり父上のことを話題に出せば、露骨に不機嫌なお顔をされることもある。
だから季節ごとに墓を訪問する役割は、いつしか必然的に僕が一人で引き受けることになっていた。
僕の父上は僕にとっては勿論、兄さんにとっても祖父のような年代の老人だった。
大柄で穏やかな老紳士であった僕の父上のことを、僕は悔しいことにほとんど何も憶えていない。だけど僕が幼児の頃までは確かに側にいて、僕のことを可愛がってくださっていたと、思い出を人づてに聞かされるだけでも心の中が温かくなる、そんな魅力の持ち主だった。
その父上にはその生涯に四人の妻があった。
最初の三人との間には、子供が出来なかった。
四人目の妻になってから、やっと兄さんが出来た。
この地方特有の風土病であり、不治の病と言われている肺病に罹っても数年生き長らえることができたほど、若くて美しいばかりではなく、ギゼル妃は生命力の強い女性だった。
老齢になった前アディンセル伯爵の余命を考え、家柄は前の三人には少々劣っていても、とにかく伯爵家の跡継ぎを産める女性をあらゆる魔術、占術を駆使して選んだのだという。

引き連れてきた家令や神父らをともなって、父上と母上、それに父上のそれ以前の妃たちの墓前に花と祈りを捧げ、花園であるかのごとく花々のあふれる霊園に整然と居並ぶ百以上ある墓石群のすべてにも礼を尽くした。

係るすべての予定を終えても太陽はまだやっと深秋特有の橙色を帯び始めた時刻だったが、ここのところの僕というのはいつでも黄昏時のような傷心に耽りたい気持ちで暮らしていた。

僕の母上は僕が一歳にならないうちに病床にて息を引き取られていたので、僕は自分の母親だという方のお顔をやっぱり肖像画や伝聞でしか知らないし、声を聞いたこともなければ、父上がそうしてくださったように何か特別のお手紙なんかを遺して貰ったわけでもなかった。

何かのときに、母上は兄さんには大切な形見の品やメッセージをたくさん遺されていることを知ってからはなおさら、僕の中の母上の存在というのは、とても遠くて、常に悲しい疎外感を僕に思い出させるものになってしまった。だから僕にとって母親と言えば乳母だったタティの母親のコンチータということになるのだが、それだって本当の母親ではないということを、彼女とタティの親子ならではの特別な関係を見せつけられていた者としては幼い頃からきちんと知っていて、弁えていた。

勿論、だからといって母上をお恨みする気持ちはなかった。きっと死の前年には病気が重くてどうにもならなかったのだろうし、そもそも肺病で死ぬ前年に子供を産めるのかということを思えば、奇跡を信じるアディンセル伯爵家の信奉者以外の人々が支持しているもうひとつの僕の出生の噂、老伯爵が気まぐれに他の女に手をつけて産ませたのではないかという話のほうが、よほど単純明快で信憑性に満ちているだろう。

そして彼らは影ではこう言っているのだ。他の女に産ませたのに、どういうわけかギゼル妃に似ているという事実こそが、奇跡そのも

のであると……。
ギゼル妃について知っているのは、僕よりも若いうちに六十歳を過ぎた伯爵に嫁がされ、兄さんを生み、それから重い病気になってしまったということだけだった。
父上がお優しくて聡明な方だったという話は誰にも周知の通りだが、十代の少女が夫とするにはあまりにも過酷すぎる相手であることは僕にも分かる。ほとんど子供を産まされるためだけに利用された我が身を思うとき、ギゼル妃がどれほど悲しかったかを想像するのはそう難しいことじゃない。
その上不治の病気にまでなってしまって……彼女はどれほど自分の人生を嘆き悲しんだことだろう。

「……タティだって、同じ気分なんだろうな」

母上の墓前に立ったまま僕が呟くと、側に控えていたカイトが呆れ顔で相槌を打った。

「ええ、そりゃ、貴方の頭の中ではそうなんでしょう。何しろアレックス様っていうのは、繊細な割には意外に意地っ張りでいらっしゃいますからね。
せっかく閣下にお許しを頂いて、後はタティの機嫌を取ればいいだけだったっていうのに、何をやっていらっしゃるんだか」

カイトの言い方は、まるでこの頃の僕の苦悩が全然大したことないものだと言わんばかりに親身でなく、いい加減だった。彼はときどき年下の僕のことを簡単に考えているように感じることがあって、僕は常々そのことを腹立たしく思っているが、その無礼な態度には僕は思わずむっとしないではいられなかった。

「何だよ、そんな言い方ってないだろう。僕が真剣に悩んでいるこ

とを知りもしないで、分かったような言い方するなよ。
だいたい、あれは僕が悪いんじゃない。どう考えたって、あんなのタティが悪いんだ。
だいたい、僕はもうタティには関心がないんだ」
「本心ですか？」
「そうさ。とにかく僕は、僕のことを好きになってくれない女の人を、無理やりどうこうしようなんて乱暴なことはしない良識的な男のつもりだ。だから、もうタティのことは考えないことにしているところだ。
おまえも僕の部下なら、余計なことを言うな」
「まあ、貴方がそうおっしゃるなら。俺はお言葉に従うのみですがね」

それから僕は墓参りに同行していた者たちに、先に居城に戻るように指示した。
秋の日差しは暖かくて気持ちがよく、僕はこのまま少し、考えごとついでに城内を散策しようと思ったからだった。

「俺は残りましょうか？」

気を取り直したように、殊更に明るい口調でカイトは僕にたずねた。

「つまり、散歩のお供をしましょうかってことです。お一人でいては、あんまり退屈でしょう。そうそう、とっておきの面白い話があるんですよ」

カイトというのは本当にお調子者と言うのか何と言うのか、年中朗らかと言えば聞こえはいいが、いつもおちゃらけていて、無意味なおしゃべりや冗談を欠かさないし、おおよそ人生の複雑さや深遠な悩みとは無縁の人生を送っている軽薄な男だった。

彼は僕が十三歳のときから僕に仕えているが、それでも少年時代にはもう少し影があって、思慮のありそうな奴だと思っていたのに、最近ではその影も形も消え去ってしまった。ときには意識深くに沈み込んで思うままに思索したいという僕の願望を、カイトが理解することはなさそうだった。

彼がいい奴だということは勿論分かっているし、こういうあつかましい性格だからこそ僕の側近なんかをやっていられるんだろうが、僕の傷心を分かろうとしない押しつけがましい社交性は、ときに僕の神経に障った。

カイトの提案を、僕はすげなく断った。

「いいよ。城内だし」

「また、そんなことをおっしゃって。そんなに暗くしてないで、もっと前向きに考えましょうって。女なんか、この世の中に星の数ほど存在しているんですよ。

そうだ、今週末、まあ今夜なんですが、身内でちょっとしたパーティーがあるんですよ。若い奴らだけの集まりなんで、本当に気軽な感じなんですが、どうです、アレックス様もおいでになりませんか。アレックス様があまりそういう場がお好きでないことは分かっていますが、ときには酒でも飲んで、パーッと騒いで、嫌なことを忘れましょうって」

そして、そのまま僕の後をついて来ようとするカイトを、僕は振り返って再びぞんざいに追い払った。

「悪いけど、ついて来ないでくれないか」

「アレックス様……」

「おまえだって知っているだろう？　僕は一人でいるのが好きなんだ」

第１９話　疎外感（後書き）

今回、「伯爵の恋人」を纏めるにあたって、頂戴していた評価や感想をくださった方に予告なく消してしまいましたことを心からお詫び申し上げます。

この欄をご覧頂けているといいのですが……、消してしまったとはいえ、作者は頂いたお言葉をとてもとても有難く受け取り、感謝をしております。

第２０話　伯爵の魔女（１）

楓の葉の舞い散る霊園の小道を歩きながら、僕は一人静かに考え続けていた。
思考することは、子供の頃から慣れ親しんだ誰よりも親しい友人そのものだった。
僕は同年代の同性の子供たちと走りまわって遊ぶということをしたことがなく、その代わりにいつも一人で本を読んだり、日がな一日考え事をしている子供だった。空想することも大好きだった。心の中の世界は、僕にとっては居心地のいい故郷のようなものだった。そこにはいつでも優しい物語があふれているし、シェアだって棲んでいるのだ。
だけど最近は、あまり上手くシェアのことを思い出すことができなかった。彼女のことを考えようとすると、タティのことがまず脳裏に浮かび上がって来るからだ。

そうだ、僕はあのとき、確かにタティと結婚したいと思っていた。
花の庭園を階下に臨む、昼下がりのいつもの廊下。
兄さんに対し、妾になるくらいなら暇を出して欲しいと訴えているタティの嘆願を兄さんが一蹴していたことを、極めて私情を挟まない彼女らしい言い方でジェシカが教えてくれていた。

「残念ながらあの子の身分では、閣下はアレックス様の妻になさるおつもりはないのでしょうね」

タティが兄さんに暇を請求していた話の流れから、ジェシカはそんな感想をもらしていた。

「と言うのも、ギルバート様やアレックス様の母君様というのが、私が申し上げるのはおこがましいことではあるのですが、アディンセル家の妃となるには少々家柄の劣る方だったという経緯があるんです。ですからあの方は、血統というものに少し敏感になっていらっしゃるところがあるのですよ。よって閣下の周辺の人間の間では、アレックス様のお妃にはアディンセル家と同等以上の家の姫君を考えていらっしゃるのではないかと専らです。もっとも、今のところは何か具体的なお話があったわけではないんですがね」

「くだらないご自分の劣等感の解消に僕の結婚を使われてはいい迷惑だ。だったらご自分の結婚相手にこそこだわったらいいのに、どうして兄さんはそうも横暴なんだろうか」

「アレックス様を愛すればこそなのです」

ジェシカは自嘲的に笑った。

僕は気まずさを誤魔化すために頭を振った。

「まあ、僕には兄さんの言いなりになるつもりは毛頭ない。ただ……ジェシカ、僕がタティと結婚をすることで、アディンセル家の相対的な家格が落ちるということはあるんだろうか？」

僕がたずねると、ジェシカは先ほどのことにさして気を悪くした様子もなく、軍人らしく愚直で礼儀正しい口調でこう答えた。

「いえ、そこまで影響することはまずないでしょう。アディンセル伯爵家は家柄が古く、我が国の数ある地方領主の中でもその順列は

高位に位置しています。
それに、ご存知のようにそもそも我が王国は古くよりの男系社会です。ですから妻の身分が多少低かろうと男性側の身元が確かであれば、タティ自身はつらい思いをすることにもなるでしょうが、世間的な評価としては大した問題にはならないと思います。ときには下働きの娘が、領主に見初められたなんて話もあるくらいですからね」
「じゃあ、タティとのことを……、兄さんを説得する余地はあるわけだ」
「アレックス様は、タティのことがお好きなのですね」
ジェシカは普段はあまり会話に自分の感情というものを差し挟まない人間だったが、その言葉を口にしたときは、道理を重んじる騎士らしく少しだけ批判的な彼女の思想と、悲しみのようなものが読み取れた。
だけどそれが僕には、彼女が兄さんを想っているが故なのだと分かって、憎めなかった。
「……うん、たぶん。でもよく分からないよ。こういうの、慣れてないんだ。
ただずっと一緒にいて欲しいと思っていた。それはタティだけじゃなくて、兄さんや、ジェシカ、カイト……大事な人たちが、ずっと変わらずにこのままでいてくれるのが僕にとってはいちばんなんだ。できれば誰ひとり年を取らないで、父上みたいにいなくならないで……みんながずっと、このままでいてくれるのがいいと思っている。でもそれはできないことだよね……、僕はもう兄さんと話しをするとき、彼を見上げる必要がなくなっているし、カイトはいつの間にか女の話ばかりするようになった。そして僕はタティを失いたくないんだ……」
それから僕はジェシカと別れ、そのまま兄さんの私室に押しかけた。

それは居城の厨房前でタティと酷い喧嘩になった日から、更に何日かが経過した頃のことだった。そう、まだ暑い日が続いていた頃のことだ。

兄さんはその頃アディンセル家の各所領間を毎日慌しく動きまわっていて、やっとその午後になって時間が空くという情報を仕入れた僕は、午前中から彼がプライベートな時間をとるのを待ち構えていた。

兄さんがお留守の間、兄さんの執務の一部であるローブフレッドの行政を預かっていた僕は、その報告を口実に部屋に割り込み、彼との面会をちょうど果たそうとしていた金髪の女性を少し強引に人払いした上で、兄さんが踏ん反り返るソファの前に歩み寄った。

豪奢でありながら過ぎ去った懐かしい時代を感じさせる代々のアディンセル伯爵当主の部屋は、現在の持ち主の気性に相応しく、また我が家の紋章にも使用されている楓の赤と金色が調和して独特の高級な雰囲気を醸成していた。ここに父上がいらした頃、このリビングの色調は青く整えられていたという話を聞いているが、兄さんはそれを嫌って、伯爵となるやカーテンから絨毯から変更できるものをすべて取り替えてしまったのだそうだ。

書棚近くのカナリアの金時計が置かれた机のところには、兄さんの魔術師であるルイーズがそのカナリアの化身みたいに腰かけていた。彼女はとても美しく、僕が知っている他の女の人たちとは美しさの格が違っていた。髪が短いために小ぶりな顔の輪郭や、細くて真っ白な首がすっかり覗いていることもあるんだろう。彼女は黙っているとき、そしてもう少し化粧を薄くしてさえいるなら、人形みたいに可愛い人だった。

それにしてもルイーズがどうして兄さんと女性との逢瀬の場にいるのかが分からなかったが、彼女はまるで兄さんの側にいることが当然の顔をして微笑んでいた。

そのことが余程気に入らなかったのだろう、僕が立ち去るように言いつけた兄さんの女性は、退室際に僕ではなく、ルイーズのことを

恐ろしい形相で睨んで行った。
その背中が扉の向こうに消えてしまってから、ルイーズは彼女の形のよい深紅の唇を、飽くまでも上品にほころばせた。

「あら……ふふふ。彼女、よっぽど気を悪くされたようですわよ。伯爵様にお会いして、せっかく身体が熱くなっていたところだったのでしょうに、可哀想に。
アレックス様も少しはご登場の間合いを考えていらっしゃればよろしいのに、そんなに貴方のお兄様が恋しかったのかしら」
「……用があったから来たまでだよ。悪かったね」
「いいえ、悪いということではありませんのよ。ただそうすれば、もうちょっと面白いものが見られましたのにということですの」
「面白いもの？」
「ええ、面白いものよ。貴方もご覧になりたくはありませんか？いろいろと後学のために。
今の女性、お顔と態度はいまいちですけれど、とっても激しいのよ」
「……」

悪趣味だと、言うべきかどうか悩んだ末に結局は言わなかったのは、何やら楽しげに微笑みあっている兄さんとルイーズが単に僕をからかっているのか、それとも彼らに倒錯した性嗜好があるのかということを、いずれにしろ知りたいとも思わなかったからだ。

第２１話　伯爵の魔女（２）

それからタティの立ち位置に関するしばしの問答が、兄さんと僕との間で行われていた。
その数日前、居城の正面玄関にてタティを妾にすることを兄さんに重ねて宣告されたとき、僕は何しろ呆気に取られていたし、まっとうな平常心を失っていて、彼にきちんとそれが受け入れられないことだということを伝えることができていなかった。勿論考えを伝えたところで簡単に兄さんがお考えを翻されることはないけど、僕はまだその努力をしていなかったんだ。
だからそのときの僕は兄さんに向き合って、やっと自分が何を考えているかということを兄さんに訴えていた。僕はタティを妾にするつもりがないことを、兄さんに主張していた。
僕はこの問題に関して絶対に引き下がるつもりはなかったし、だから兄さんの弁舌の巧みさに幾ら言い含められかけても気にしないで要求をし続けた。つまりタティを妾にするのではなくて、彼女ときちんと結婚をしたいということを。

「またしても結婚か……、やれやれまったく、何故おまえはそうも単細胞なのか」

兄さんは始め、僕の言うことにただ頭を抱えていらした。

「アレックス、性欲と愛情を履き違えることは、若いうちには特にありがちなことなのだぞ。性急に事を決め、後から我に返って後悔しても遅いということが何故分からんのか。
女と寝るのにいちいち結婚をしなければならないという考え方は、まさしく狂気の沙汰だ。相手が王女とでも言うならおまえの言い分はもっともなことだが、小娘を妾にしておくことのいったい何が不

満なのだ。どうせおまえの手元に置くことに変わりはないだろう。これはおまえにとって、まったく悪い話ではないはずだ」

だけど僕があんまり真剣に、どれほどタティが僕にとって大切で必要な人であるかを訴え続けていると、恐らくは煩い僕を部屋から追い払いたかったのだろう、とうとう兄さんの口からそれを許すような含みを持った言葉が出始めた。上手い具合に、その日の彼の機嫌は良好で、少しは聞く耳を持ってくださっていたわけだ。それで僕は、せっかく兄さんから引き出した譲歩の言葉を、少しも逃すまいとして更に何度も追求し続けた。

とにかく僕は、タティを妾なんていう不名誉で日陰の存在にしたくなかったんだ。姦淫は男女双方の罪であるにも係わらず、いつの時代も女性ばかりが罪人のように扱われて後ろ指をさされている現実があった。実際女性の不義だけを吊るし上げるための偏執的な姦通罪が、我が国には存在していた。

勿論アディンセル家のような貴族の妾となれば裕福で気ままな生活が約束されるが、それでもふしだらな女であるという世間の誹謗を免れることはできないのだ。ある種の慎重で良心的な人々はそれを表面には出さないだろうが、それでも潜在的には他の人々と同じようにそうした女性のことを軽蔑するだろうし、少なくとも二度と彼女をそれまでのように尊重することはなくなるだろう。気の弱いタティが、そんな世の中のレッテルを気にしないで生きられるとは思えなかった。

だから僕はタティと結婚をしなくてはいけなかった。本当は妾にするのを兄さんに撤回させるだけでいいのだが、結婚に持ち込もうとしているのは僕が彼女を手放したくないからだった。

その僕の姿勢に、兄さんはやがて大柄に脚を組み、左手を迷惑そうに額に添えた上で、諦めたようにこう答えた。

「ああ、まったく煩い奴だ。……分かった分かった。分かったから

そう噛みつくな。
アレックス、近頃のおまえは何故斯くも私に逆らおうとするのだ。まるで私を非難すること自体が、おまえの趣味と化してはいないか。あの程度の女が妻だろうと妾だろうと、いずれ大差のないように思うのは私だけか。
だがまあ……、そうまで言うなら場合によってはそうしてやらんでもない。そんなにおまえが望むのであればな」
「本当ですか？　では、僕はタティと結婚しても構わないとおっしゃるんですね？」
「まあ、な。まったく……。未だに小娘に手をつけてないことを叱ってやろうと思えば、逆に私が責められるとは思いもよらなかった。なかなか女に声をかけられない内気なおまえのために、わざわざ手近に専用の女を用意してやったというのに、おまえというのは何という恩知らずな奴だ。しかしなアレックス」
「何ですか」
「タティ、あの娘は少し目が悪いようだな……。話によれば、眼鏡がなくては新聞を読むにも事欠くというではないか。それが本当なら、それを子孫に遺伝させて貰っては困るのだがね。
我が家系が、本来戦場を駆ける騎士であることを考慮すれば視力のよさは重要だ。劣悪な身体条件を、わざわざ子供に付加してやることもあるまい？」
「……何がおっしゃりたいんです？」
「楽しむ分には、あの身体はなかなか具合がよさそうだということだ。
それに性格は温柔で純情、良識は備えているが策謀を巡らす頭脳はない。若い娘らしく性的知識に乏しく、控えめで、いかにも御しやすそうなところがいい。私をあからさまに恐がる話しぶりと態度からしても、あれはもう正真正銘の処女だろうしな。処女はいいぞアレックス。女は処女に限る」

そして兄さんは、革張りのソファに腰かけている彼の目の前に用意されていたハーブティーのカップに手を伸ばし、上品に唇をつけた。彼がいちいち人目を惹きつけることには、長身で身体が大きいということや、美貌という以外にも、彼の動作それ自体に同性の僕でさえ魅了される何かが備わっていることも大きかった。それが威厳か、威圧か、威嚇か分からないが、とにかく見るものに貴族としての品位と彼の性格の強さや攻撃性を同時に納得させる何かだ。

僕は兄さんとつかみ合いの喧嘩をしたことはなかったが、成人をし、幾ら背格好が兄さんのそれに近づいたとはいっても、本気のやりあいとなれば僕はまだまだ彼に勝ることはできないだろう。

しかしだからと言って、このまま兄さんの思うがままに、何もかもを押しつけられることを甘受するわけにはいかなかった。僕の人生は、僕のものであって、兄さんの思惑通りに動かされてはたまらなかった。

僕は兄さんが言わんとしている言葉の残酷な意図を感じ、彼のことを睨みつけた。僕にはまだ何時間でも兄さんと議論する用意があり、しかも幾ら論破されても引き下がらないだけの熱意があった。

いずれ議論でなく、自分の意志を主張するだけの怒鳴りあいになるだろうが、それでも構わなかった。僕が兄さんに口論で勝てないことは今に始まったことではないし、年の離れた兄である彼に言い負かされることで僕の自尊心が傷つくことはないからだ。ここは要求さえ通せれば何でもよかった。

「兄さん、貴方は結婚を許すようなことを言って僕を安心させておいて、結局はこの話をなかったことになさりたいんですね。でなければ、いずれ難癖をつけて彼女を始末しようという腹なんでしょう」

「……、まあ、そう露骨なことは言っていないだろう。アレックス、まったくおまえはこの兄を疑うつもりなのかね？」

「そうです」

「いい加減、しつこいぞアレックス」

「兄さんの日頃の行いから、最悪の事態を想定したまでです」
「ははは、これは手強いな。そうだ、男たるもの相手の言葉をそのまま信用するようではいかん。いつでも疑ってかかり、自分の頭で情報を判断し、最悪の裏切りに備える。アレックス、これはよい傾向だ。
が、主君にあからさまな猜疑心を向けることはやりすぎだぞ。覚えておきなさい、物事には、程度というものがあるということをな」

第２２話　伯爵の魔女（３）

兄さんはそう言うと、僕の相手をするのを持て余したように、そのとき傍らに控えていたルイーズに視線を送った。そしていつまでも僕が食い下がっていることにたぶんもう面倒臭くなったのだろう、ご自身は革張りのソファに身を沈め、うんざりしたように眉間を摘んで息を吐き出していた。

その様子を見て、連日のご公務にお疲れのところを申し訳ないとは思ったが、しかし僕には引き下がる気持ちはなかった。

美貌のルイーズは兄さんに一礼して微笑み、それから相変わらず露出の激しい黒いドレスの裾を揺らして僕に近づいて来た。より厄介な相手に発言権を渡された予感がして、僕は内心でたじろいでいた。その日の彼女のドレスは腹部が覗くほどに胸が大きく開いていて、豊かで形のいい胸が、そうであることが目視できるほど露わになっていた。それにスカートの丈は一見脛の辺りまであるのだが、しかしそれはよく見てみると左側だけだった。従って、彼女がその見事な白い太股を半分以上も覗かせていることを恥じる様子もなく歩く様はとんでもなく艶っぽく、その腰つきは魅力に満ちていて、僕はにわかに緊張して、目をどこにやっていいか分からずにとうとう視線を宙に泳がせた。

「それ、さ、寒くないのかい？」

僕は近づいて来たルイーズにどう接していいか分からず、彼女に関心がないことを示すためにわざと無関心な言い方でそう言った。

「寒い？　ああ……、もしかしてドレスのことですの」

「う、うん、そう。脚が……丸出し」

「あら……うふふ、気になります？　男の子ですものね」

「そっ、そういうことじゃないよ」
「ええ、承知しておりますわ。お気遣いを有難うございます。でも季節はまだ夏の終わり。それに私は魔術師ですので、いざというときには魔術を用いて体温調節をすることができますのよ」
「あ、ああ、そう」

つまらないやり取りを経て、気がつくと、呼吸をするのを忘れるくらい美しい顔が目の前にあった。長い睫毛に縁取られた、ルイーズのスカイブルーの魅惑の眼差しが、僕の心の奥までも見透かしているように僕を捉えていて、僕はもうこのことを認めざるを得ないと思った。
つまり、ルイーズはその容貌がどうしようもなく僕の好みの女性だということを。

「アレックス様、タティを抱いておやりなさいませ」

ルイーズは、まさかそんな僕の心情に気づく様子もなく、僕を見上げてそう言った。
彼女も兄さんやジェシカ同様、未だに僕のことを半人前と考えている節があるようで、僕をまるで子供のように侮る意識が言葉や表情の端々から窺えた。それがとても不快で、僕は彼女に自分が大人の男であることを思い知らせてやりたい気持ちに駆られたが、兄さんの御前であることを思って何とか気持ちを落ち着かせた。

「あの娘は子供の頃から、貴方を慕っておりましたのよ。タティは本当に小さな頃から、ずっと貴方のことだけを愛していましたの。あら、驚いていらっしゃる？　もしかして、そのことをちっともお気づきでなかったとか？」
「……何を言っても、僕はおまえの言うことなんか信じない。タティが僕のことを好きだと言うなら嬉しいけど、妾の身分のまま

にしておかなければならないというなら僕は抱かない。そんな扱いをされて、彼女の家族がどれほど悲しむか、タティがどんなに悲しいか、おまえは女でありながらそんなことも分からないのか？」

「真面目すぎる」

すると後ろの革張りのソファで、兄さんが唸り声をあげた。

「もう少し楽にしろ、アレックス」

その兄さんを見据えて、僕ははっきりと自分の考えを口にした。

「ではタティを妻にすることを認め、彼女の身の安全を保障してください。そうでなければ僕は彼女と関係を持つようなことはしない。これまで築いてきたタティとの友好的で家族のような関係を犠牲にしてまで、彼女の気持ちを踏み躙ってまで自分の欲望を満たしたいとは思いません。

兄さん、僕は貴方とは違う。女の人を品物のようにしか思っていない貴方とは」

僕の言葉に、不意にルイーズが吹き出した。まるで兄さんの御前にあるということを弁えていないかのように、彼女の笑い声は高らかで楽しそうだった。一方、ソファにいる兄さんはそれを叱るでもなく、髪を掻きあげ憮然としていた。

「うふふふっ、言われてしまいましたわね、ギルバート様。

確かに私もアレックス様のご意見には同意ですわ。ギルバート様はあんまり自分勝手が過ぎますよ。貴方というのは普段から、邪魔になった女の排除ひとつにしたって、私や哀れなジェシカ様にさせて、ご自分では手を汚すということをなさらないんですもの。

でもそれは、無責任な卑怯者と言うよりは、女を手にかけるという

ことが、貴方はおできにならない方なんですよね。圧倒的な弱者を自分の都合で害する罪悪感に飲まれて死にそうになるから。

だったら、もうそろそろ真剣にご自分の人生に向き合ってみたらよろしいのよ。初恋の女を忘れられずに殻にこもってなんかいないで、適当な火遊びで満たされない心を慰める日々を送るくらいなら、もう一度本気で恋のひとつもなさってみたら？

貴方を真実の恋人と信じたまま死んでいった、死してもなお貴方を求めて城内を彷徨う女の魂を、私が何度天国へ送ってやったかお分かりになって？　あの可哀想な女たちの中の誰かひとりでも、本気で愛してやればよろしかったものを」

「黙れルイーズ、おまえはいったい誰の部下なのだ。

いかにおまえであろうとも、この私に対し無礼は許さぬ。生意気に、女がきいたような口を聞くものではない」

「あら、それはまた随分なおっしゃり様ですこと。ご自分だって、その生意気な女の腹から生まれていらしたくせにね。それに乳母に乳を含ませて貰い、たっぷり面倒を見させてお育ちになって、大人になってからだって、貴方は相変わらず女が大好きなくせに。強がっちゃって」

「ルイーズ、ルイーズ」

「いいえ、私は黙らないわ。だって貴方が私にアレックス様にお話しするようにおっしゃったのじゃありませんか。

アレックス様、貴方のお兄様はこう見えて、実はとても臆病で傷つきやすいの。それと言うのもね、愛する者がいなくなるということが、この方は何よりも恐くていらっしゃるの。

最愛のお母様がお亡くなりになったときの悲しみを思い出されてしまうと言ったら、そのお気持ちがアレックス様にもお分かりになるかしら？

だから……弱虫の彼は、未だに妃を娶らないの。彼女がいなくなってしまうことが耐えられないから。愛する者が自分の人生から否が応にも消失していく、その恐怖を味わいたくないからなのよ。

アレックス様、彼は貴方に望んでいらっしゃるわ。意地でも結婚したくないご自分の代わりに、このアディンセル伯爵家を繋いでいって貰いたいということをよ。

タティのことを、確かにこの方は貴方の妻には相応しくないと考えていらっしゃるわ。せいぜいで、アレックス様の夜伽の練習台にするのが相応しいと思っていらっしゃるの。でも誠実な貴方は関係を持つからにはタティを妻にしたいとおっしゃっている。

それなら、貴方はただご自分を通せばよろしいのよ。貴方の根幹を揺るがすような問題においてまで、お兄様の言いなりになって主義主張を曲げる必要なんかない、貴方はただ、伯爵様にこうおっしゃればいいだけだわ。もし貴方がタティを排除するようなことをすれば、自分も死ぬと。それでもう、この方は何もおできにならない。だってギルバート様にとって、この世でアレックス様ほど大切な者はいないんですもの。それがどれほどの脅しになるかを、私はこの際貴方に教えて差し上げるわね。

もしこの聞き分けの悪いお兄様が、今後何か貴方に理不尽な要求を突きつけるようなことがあれば、貴方は澄ました顔でそうおっしゃって。それだけでこの方は、きっと黙っておしまいになるから」

僕はルイーズという女が分からずに、彼女を黙って見ていた。兄さんは、弟の僕にご自分の弱さに関する打ち明け話をされたことを、受け入れたくないかのように頬杖をついてよそ見をしていた。

「兄さん」

僕は名前を呼ばれても一向にこちらを見ようとはなさらない兄さんに向かって、はっきりとこう告げた。

「僕はタティを妻にします。いいですよね」

第２３話　未練（１）

僕が兄さんのお部屋から退室する際、兄さんは悪あがきのようなこんな一言を僕におっしゃっていた。

「いいかアレックス、結婚をするにしても、それはあの小娘に男子を産ませてからの話だぞ。妻になるということは、子供を産む義務を負うということだ。

よってそれが成せなければ、我が系譜に加えることも、当然籍に記載することもまかりならん。いつまででも、妾は妾のままということだ」

だけどそれは、僕にしてみれば脅しどころか、願ったりのことだった。何しろ僕には家族が兄さんしかいなかったから、自分が寂しかった分、結婚をしたら子供は多めに欲しいと思っているので、そんなことは不都合なことでも何でもなかったのだ。

まあ確かに今から思い出してみると、子供を産ませるなんて兄さんの表現は少々過激で、僕は頬が熱くなったのを感じていたが、そのときはタティと結婚できることになったことが嬉しくて、僕は勝ち誇ってこんなことを答えていた。

「分かりました、期待していてください」

「まあっ、男らしいわ」

兄さんが怒っているすぐ横で、彼の機嫌をまったく意に介することなく、ルイーズが暢気に拍手をしていたのが可笑しかった。

けれども兄さんにはそうは言ったものの、肝心のタティがうんと言ってくれるのでなければ、結婚するなんてことができるはずもない。そしてそのとき僕は、そのことをどうやってタティに切り出していいものか、皆目分からなかった。

何しろ僕と彼女はあの喧嘩の日以来ほとんどまともに口を聞いていなかった。タティはそれまで通り僕の身のまわりの世話を続けていて、まるで普通通りに接してくれているように思えても、実際にはびくびくして、目をあわせようとしてくれないほど僕のことを嫌っているのだ。

結婚して欲しいということを告げるということは、つまり、俗に言うプロポーズをするということになると思うけど、でも、考えてみたら僕がタティのことを一方的に好きなだけで、彼女のほうでは僕のことを好きなわけではないだろうに、果たしてプロポーズなんか受け入れようと思うだろうか？

タティが子供の頃から僕を好きだったなんてルイーズが言っていたことがもし本当ならこんなに嬉しいことはないけど、これまで毎日顔をあわせていても、僕は全然そんなことには気づかなかった。根拠がないものを、伝聞だけで舞い上がれるほどには僕はおめでたくないつもりだし、それを生真面目なジェシカが言ったならばともかく、あのお気楽そうなルイーズが言ったのでは、兄さんの御前でさすがに嘘は言わないだろうけれどもその信憑性には些かの疑問が生じてくる。

だいたいタティが、パーシーが好きだったかもしれないなんて言っていたことも、僕の心には棘のように引っかかってはいた。

もっともタティは彼とは只の友だちで、それ以上何かあるような感じにも見えなかったし、別に彼女が汚されたわけでなし、僕はそのことは気にしないでいることにしていた。

もしタティの心の中に、僕がシェアを想っているような形で奴の汚

らしい残像が残っているのだとしたらこれは僕にとって戦慄すべき話だが、そのときはどうにも確かめようがなかったからだ。
こんな馬鹿げた喧嘩をしているのでなければ、タティは基本的には僕のことを嫌いではないだろうから、ちゃんと話をすれば納得して、僕と結婚してくれると思う。
それに僕は自分で言うのも何だけど、結婚相手にするには悪くない部類だと思っている。だって僕には身分があるし、普通の男よりもきっと女性を大事にするからだ。そりゃあ相手が王女様だって言うなら、僕なんか何のうま味もないつまらない男だと思うけど、タティは王女様じゃないので大丈夫だ。
だからそのときはいかにすればタティのご機嫌を取れるかということを、僕は兄さんの私室を退き、廊下を歩きながらひとり思案していた。
こんなことなら、たまに兄さんのパーティーなんかに顔を出したときくらいは、冷たくされるリスクを怖がったりしないで、もう少し積極的に女の人に声をかけたり、話しをしておけばよかったと思っていた。
その点、兄さんは女性の機嫌を取るのが上手くて、女なんか人間以下だという発言を憚らない割には、自分の恋人をお姫様のように扱っているのを僕は知っている。もっともそれは兄さんが彼女を気に入っている間だけのことで、口先だけの嘘なんだと思うけど、美男で金持ちの貴族が、自分に贅沢をさせて、大切にしてくれるっていうのは、女性たちが夢見る最高の夢なんじゃないだろうか。

「そうだ、宝石……」

兄さんは女性に宝石を贈るために、わざわざ専属の宝石商を呼びつけて、ケースの中から彼女に好きなものを選ばせていたのを僕は思い出していた。同時にそれを贈られた女性が、輝かんばかりに微笑んでいて、ものすごく嬉しそうだったことも。

それから彼女は兄さんにとても感謝して、愛の言葉を囁いて、女の人が自分から積極的に兄さんに熱い口づけなんかしていたものなのだ。

そう、確かに兄さんは、女の人はお金や、ロマンチックな演出がとても好きだとおっしゃっていた。

タティはいつも地味な服装をしているけど、あれはコンチータの躾が厳しかっただけのことで、彼女だって本当はやっぱり可愛いドレスや宝石が好きなんじゃないだろうか。

だからそういう高価なものをプレゼントしたら、タティだって僕のことを今よりもっと、いやそれまでとは比較にならないくらい一気に好きになるかもしれない――。

そう思いついたとき、先刻僕が追い払った女性とは別の金髪女性が召使いに案内され、兄さんの部屋に向かって楓模様の長い廊下を向こう側から歩いて来るのが分かった。

だけど彼女は僕にとって見覚えがある人だったのに、僕は声をかけられるまでそれには一切気づかなかった。ちょうどタティの誕生石が何だったかについて、考え始めていたからだった。

召使いと女性は僕の近くまで来ると、道を開けて礼をした。僕はそれが僕に対して払われる当然の敬意なので、特に彼女たちに注意を向けるでもなくそのまま通り過ぎて行こうとした。金髪女性が兄さんの周りにいることは、ごく日常的な有り触れた風景だった。

「アレックス様、甘い言葉です」

そこへ、すれ違おうかというときに突然そう言われて、僕がそちらに目をやると、そこにはエステルが立っていたのだった。

彼女は相変わらずの長い金髪を背中に揺らし、そのときは少し勝気な笑顔で、僕のことを睨んでいた。

「あっ、エステル……」

「こんにちは、どうか甘い言葉を忘れないで、アレックス様。伯爵様の領地にある採掘場から取れる鉄鉱の品質についてなんて話をデート中にして、女の子が喜ぶとでも思っているとしたら大間違いなんですから」

「えっ？　あ、ああ」

「しかも貴方の場合はその辺の男みたいに、自分がいかに頭がいいかってことを自慢するというよりは、それが楽しいと思って話してるものだから……、わたしはほんとに話をあわせるのが大変だったんですから。

女の子といて会話に詰まったなら、彼女を誘惑するとか、キスするとか、そういう甘いののほうがいいんですっ」

第２４話　未練（２）

「ああ、なるほど……、そうか」

思いがけない突然のエステルのアドバイスだったが、僕は思わず感心して手を叩いた。

「確かにそれは、ロマンチックな演出だね」

「貴方に足りないのはそこですわ、アレックス様。だって貴方って、黙っていたら自分からはキスもしないんですもの。手を繋ぐのだって、いつもわたしからだったわ。

それでいつもだいたい、すっごく楽しいお話ばかり。洞窟の蝙蝠がどうとか。お庭の蟻の巣穴の話とか。後は、隣国の通貨の話。戦争の歴史とか。でも、星空のお話はお世辞じゃなく素敵だったけど」

エステルはそう言って、以前僕とデートしたときのことを扱き下ろした。

彼女には悪気はないのかもしれないが、僕はエステルの相変わらずのおしゃべりさと、それから見かけによらない気の強いところに、少し苦笑いした。

「それは君に喜んで貰おうと思って話していたんだ。別に僕が……その全部にものすごく興味があるわけじゃないよ。ただその中に君の好きな話があれば、話を広げられるかと思って、つまり共通の話題を探していたんだ。

僕だって、エステルが大抵つまらなそうにしてたことには気づいてたよ。城の中で、兄さんをみつけたときの君の反応と、すぐ後の僕への落差には心底傷ついていた。今から思えば、君は最初から兄さん目当てだったんだろうから、なるほど合点がいくけどさ。

だからキスもしなかったんだ。君に催促されない限りはね。好きじゃない男とするのは嫌だろうと思って。つまり自分からそうする度胸がないわけじゃないんだ、ただ君がとても積極的で……自分を売り込む才能のあることにはとても驚かされたけど。でもまあ、ありがとう。今のアドバイスは今後の参考にさせて貰うよ」

「アレックス様って、意外と意地悪なことも言うのね……」

僕がお礼を言うと、エステルは唇を尖らせて何か呟いていた。

「兄さんと会うんだね」

あまりエステルと話すようなことは、少なくとも僕のほうにはもうないんだけど、せっかくいいアドバイスを貰ったのにこのまま立ち去るのも悪い気がして、挨拶代わりに僕がそうたずねると、エステルは頷いた。

「ええ」

彼女は今でもやっぱり少しも僕に対して悪びれる様子がなかったけど、エステルは少し背が小さくて、そのくせ意外にも物怖じしない性格が僕は可愛いと思っていて、それに彼女の唇から顎にかけてのラインや、さらさらの長い金髪はやっぱり懐かしいシェアのそれを思い出させた。だから彼女を目の前にしてしまうと、僕はあんまり怒り出す気持ちにはなれなかった。

「宝石がどうのっていうことは、アレックス様も新しい恋人ができたのですか？」

エステルの質問に、僕は何と言っていいか分からず、頭を掻いた。

「いや、まだ全然……、恋人になって貰ってないんだ」
「あら、本当に？　じゃあ、これから愛を告白されるんですか？」
「まあ……、でも、彼女はあんまり僕のことが好きじゃないかもしれないんだ。
そこをどう上手いこと言ったら、結婚を承諾して貰えるかと思ってさ……」
「結婚！？」

僕の言葉に、エステルは目を丸くした。

「交際もしていないのに、もう結婚を考えていらっしゃるの？　彼女が、貴方のことを何とも思っていないかもしれないのに？」
「う、うん、変かな……？」
「いえ、変じゃないわ。変じゃないけど……驚いた。アレックス様って、本当に伯爵様とは真逆ですのね。
あの方は、こちらがどんなに上手く迫っても、会話に結婚のけの字も出てこないのに……。
ねえ……アレックス様」

エステルは、仔猫のような仕草で僕のことを見上げた。

「うん？」
「アレックス様はわたしとおつきあいをしていたとき、やっぱり結婚を……、考えてくださっていました？　ほんの冗談でも……、少し、想像するだけでも」

エステルの質問に対し、僕は頷いた。

「勿論だよ。会ったその日から、ものすごく真剣に考えてた」

「そ……、……」
「……」
「……」

しばらく、何とも言い様のない沈黙が続いた。
何だか気まずいのとも違う、本当に変な空気が僕とエステルの間にあって、僕はどうしていいか分からず前髪を触ったり、鼻が詰まっているふりをして何度か無意味に鼻を吸い込んだりした。
少しの変な空白の後、消沈した笑顔でエステルはこう言った。

「はあ……、わたしって……。でも仕方、ないですよね、わたしが……。
じゃあ……、わたし、もう行きますね」
「ああ、うん」
「今度……、アレックス様のその恋がもし上手くいかなかったら、そのときはまた、わたしとデートしてくださいね」
「えっ？　でも、君は兄さんと交際を……」
「いいんです。おつきあいして、すぐに分かったもの。ギルバート様、きっとわたしのことが遊びなんだって。
毎回ね、信じられないほど高価なプレゼントをくださるの。わたしなんかじゃ、家族みんなで働いたって、一生買えそうもないものを何でも買ってくださるのよ。
普通の人なら、絶対招待されないような王都の劇場の特別席、姫君御用達のファッションプラザ、最高級のレストラン……、あの方はわたしにとっては、まるで別世界みたいな日常を持っていらっしゃるの。
お話も楽しいし、お洒落だし、あの方といると、他の女性からの嫉妬の視線がものすごいんだから。居合わせたそこかしこのご令嬢が、本気で歯軋りしているんですよ。それに彼の周りの貴族たちまでわたしにちやほやしてくれて、それがどんなに気分がいいことか。

でも……、でも彼はわたしを見てないわ……、まるで別人みたいに優しく微笑みながら、ただ甘い夢を見ている……、でもそれはわたしも同じ、だから、まだ……お別れするつもりはないですけどね。でも……どうしてもきっと遊びだって分かってしまう。いつか終わってしまうって……」

「そ、そんなものなの？」

「そうですよ。だから、ねえ……、きっとですからね」

僕はエステルが、彼女のほうでも兄さんのことなどまるで本気ではないみたいなことを言っていることに戸惑って、思わず彼女を見た。でもその目を見て、すぐにそれが強がりであることが分かった。目は口ほどに物を言う。彼女の茶色い瞳には悲しみが宿っていて、震えているじゃないか。

恐らく兄さんがそろそろエステルに飽きているということが僕にも分かって、彼女に対して少し申し訳ない気持ちになった。飽きた女性に対する兄さんの態度の変わり様を、僕も少しは知っているからだ。

「以前、エステルとデートしたとき……、あまりプレゼントをしなくて悪かったね。兄さんほど使えるお金がないってこともあるんだけど……、女の人がお金が好きだって、そのときはまだ知らなかったんだ」

僕がそう声をかけると、エステルは笑って、それから切ない瞳で僕を見上げた。

「アレックス様のそういうところ、本当はすごく可愛いと思っていたのに。

わたし……、どうして馬鹿なことしちゃったんでしょうね……」

第２５話　気がかりな過去

兄さんがエステルを見ていない。
それは、それだけだったなら、女ったらしの不埒な男の行状からして至極当然の行動と言えるだろう。彼は女性との精神的な交流よりも、肉体的な交流だけが目的なのだろう。
だけどその前にルイーズが言っていた言葉が気がかりだった。
兄さんが今でも初恋の女性を忘れられずにいることや、愛する女が人生から消失していくのが恐いなんて話を、だから結婚したくないなんて我侭を、もし穿った見方をしないで正面から捉えるならば、何だかこれはどう考えてみても、僕でさえ及びもつかないような純愛の気配が漂っては来ないだろうか？
ルイーズは兄さんの乳姉妹だから、本当に幼い子供の頃から兄さんの側に仕えている。
それなりの貴人が魔術師を幼年期から共に育てて仕えさせることはこの国では当然の習慣だし、僕の乳姉妹であるタティだって、本来ならば僕の魔術師になるはずの娘だったのだ。タティの場合は成長の途中で魔力が消えてしまったけど、今でも彼女が僕の側で女官のような役割をやっているのは、やっぱり本当に兄弟のような信頼関係というものが、僕らの間に存在しているからだ。
兄さんとルイーズの間に、ジェシカには可哀想だけど、幼い時分から慣れ親しんだ人間の間だけにある親密な空気というものが存在していることは、やはりどうしたって否めないことだった。
ルイーズは兄さんの人生を、僕が知らないうちから、兄さんと彼女がお互い赤ん坊だった頃からずっと長い間、間近で見てきているはずだった。
色気過剰でとっつき難い感じがするから、僕は何となく彼女を遠ざけていたし、彼女のほうでも自分から僕に近寄って来て、取り入ろうとするようなことはしなかった。でも、彼女こそたぶん、すべて

を知っているんだろう。
僕の本当の母上について、間違いなく――――。
今更本当の母上のことを知ったところで、勿論何があるわけではなかった。僕は別に母上を恋しいと思っているわけじゃない。
確かに子供の頃には僕だって、他の人たちには当然のように存在している母親が自分にはいないということがとても悲しかったし、寂しかった。
僕にも自分を愛してくれる母上が欲しくて、泣いたことだってあったけど、でも僕には兄さんがいるし……、だいたい僕はもはや母親の愛情を必要としている小さな子供じゃない、大の男なのだ。
それに有力伯爵という権力を持ち、あれだけ強引な性格である兄さんが、自分が執着している女を身近に置けないということは、この問題の前には、きっとそれなりの事情というものが横たわっているんだろう。
ジェシカが以前、自分の手で僕を産んだ女性を殺したと言っていた。それはどう考えてもギゼル妃のことではないだろうし、それこそがきっとすべての疑問に対する答えなのだろう。
本当の事情を、知りたくないと思わないわけじゃなかった。
自分という存在がどういう歴史を持ち、どういった流れの中に属しているのか、知りたくないと思わない人間はいないだろう。
更に好奇心をくすぐることには、両親がいなくて寂しい思いをしている子供の僕に、せめて暖かな思い出話をすることに何か都合の悪い問題があるとしか思えないほどのわざとらしさが、僕の人生に登場する人々を度々支配していたということだった。

「母上の話？　……ああ、そうだね。なかなか気性の激しい方だっ

たと聞いたことがあるな。だからたぶん、そういう人だったのではないかな。

何だアレックスその不満そうな顔は、仕方ないだろう。母上はご病気が重く、亡くなられるまで何年も城の離れで暮らしておられた。だから、私もほとんどお会いしたことがないのだよ。

母上に会いたいだって？　アレックス、アレックス、今日はそうやって乳母の手を焼いていたのか。あんまり困ったことを言っては駄目だろう？　死んだ人間には、もう会うことはできないんだ。

そうやってむくれたって駄目だ。男がそんなことで駄々をこねるものじゃない。面倒なことを言わず、聞き分けなさい。ああ、泣く奴があるか」

子供の頃、僕がねだることでやっと兄さんが話してくださった母上の話は、ギゼル妃が亡くなられたとき、兄さん自身も子供だったせいもあるんだろうが、いつも大抵あやふやで、推測で言っていることも多かった。

どうにも輪郭の見当たらない、しかも兄さん自身があまり関心のなさそうな話題の中から、更に僕が母性を見出すことは難しかった。

その頃の僕は、ギゼル妃以外の母親の存在を考えてみることさえなかったけど、やっぱり僕にとって母親というのは、いつも希薄で、秘密めいていて、絵画の中の知らない女性の微笑みのようによそよそしい存在だった。

それが兄さんにとっても同じだったということを、僕が考えてみたことはなかった。

「そうだアレックス、そんなに母上に会いたいと思うなら、ルイーズは幽霊が見えるらしいから、おまえも今度彼女に霊園に連れて行って貰うといい。

幽霊になった母上に、会えるかもしれないぞ？　アレックスー、とか言って墓から這い出て来たりしてな。ははは、……冗談だよ、

本気で泣いてどうするんだ……、アレックス、男がそう簡単に泣くものじゃないぞ。アレックス……。アレックス、心配しなくても母上が幽霊になられていることはないから、安心しなさい」

「ほんとう？」

「ああ、本当だよ。だって、母上は天国にいらっしゃるからね。聖なる父の御許で、お幸せにしていらっしゃるはずだ。そして私とおまえのことをいつも見守っていてくださる。だからほら、これで鼻水を拭きなさい。そう、いい子だ」

そして兄さんは身を屈めて僕の顔を覗き込み、頭を撫で、結局ハンカチで僕の鼻を拭ってくれたのだった。あれはたぶん、兄さんが僕より若いくらいの年頃で、僕が六つかそのくらいの頃のことだ。その頃の兄さんは、今より余程優しくて大人だったと思うのは、若い伯爵として、何より子供の僕の前できちんとするために、常に気を張って人格者の演技をしていらしたのだと思う。

年端のいかない少年の頃からアディンセル伯爵家の当主なんて重責を背負って、兄さんがどれほど大変だったか……、僕だって分からないわけじゃないんだ。

兄さんが今のような不遜な態度を取るようになったのは、ごく最近のことだ。僕が十代後半になった辺りから、彼はその本性を隠さずに見せるようになった。

だけど女遊びが激しかったのはそれよりもずっと前からのことだ。だからたぶん、女好きというのは彼の傲慢さよりももっと強力な、彼の持って生まれた性格なんだろう。

酷いときには、夕食時に僕に美しく教訓的な話をしたすぐその後に、女性を城へ引っ張り込んで節操なくいちゃついていた。

だいたいは、金髪女性だった。

シェアやエステルみたいな、長い金髪女性が特にお気に入りのようだった。
それから清楚な感じの……、まるで華美なルイーズとは真逆の、清純な感じの女性ばかり。
繰り返し、同じような女性ばかり。
やっぱり兄さんは誰かの影を追っているじゃないかと、僕は思った。
僕がシェアを心の何処かで探しているのとは比較にならないくらい、彼は特定の誰かに執着しているんだ。
可哀想なくらい……。
やっていることが何しろ滅茶苦茶だから、同情の余地はないけど。
彼がどういう経緯で初恋の人を失ったのか、これは勿論想像に過ぎないが、それが仮に僕を産んだ人だと言うなら、兄さんが彼女を想い続けてもう二十年にもなろうかという年月が経過しているはずだった。
それなのに未だに彼女を忘れられずに、結婚もできない兄さんというのは、兄さんの性格を知っている僕にしてみれば何とも情けなく、少し信じ難い話だったが、きっと側にいるときには雑に扱って、彼女がいなくなってしまってから、たぶん殺してしまってから、激しい後悔をしているということなのだろう。
もしかしたら、人生の最初で愛情と性欲を履き違えたのは、他でもない兄さん自身だったのかもしれない。
だから僕はそれを反面教師に、最初からきちんと誠実にして、一人の女性だけを、一生大切にしていけたらいいと思う。
それが僕にとってはタティなのだ。

第２６話　ムーンストーン

そして僕は何とかしてタティに結婚を承諾して貰うために、彼女を喜ばせるための方法を講じたんだ。
タティのために、壮麗なる王都のゴールドローズ・アベニューから通りを一本入ったところにある老舗宝飾店まで出向いて、相当緊張しながら彼女の誕生石である月長石の婚約指輪を注文した。石は勿論いちばん上等のものを用意させたし、デザインも、もし他の女の人が同じ指輪をしていたら嫌だから、わざわざデザイナーを呼び出してタティのための特別の指輪を作らせることにした。
気取った感じの店員とデザイナーは、僕がアディンセル伯爵家の人間だと知るや、それまでのあたかも宝石店に迷い込んだ子供を相手にするかのような慇懃な態度をがらりと改めて下手に出た。兄さんが、この店の上得意であるためだろう。

「太陽と月のようにムーンストーンとダイヤモンドを飾り、台座はプラチナですね。お坊ちゃま、周りに魔法石をこう鏤めますと、一段と輝きが増し、魔除けにもなりますがいかが致しましょう？」
「いいよ、じゃあそれも」
「いいよって、まったく金持ちはこれだから……、それが仮にもティーンエイジャーの言うセリフなんですかね。
こんなあちこちがキラッキラした店で、よくもまあ落ち着いてられるもんですよ、それでまったく指輪は幾らなんですか……げえっ」

同行していたカイトは、店員が示した金額を見て大袈裟な悲鳴を上げていたが、僕にしてみれば、確かに安くはないと思うけど好きな女の人に喜んで貰えるのなら苦にはならない値段だった。
タティの指輪のサイズが分からなかったが、擦り寄るべき相手を嗅ぎつけることに長けた親切な店員によれば、そこは後から調整でき

るということだった。
その指輪と一緒に、僕は最初はドレスをプレゼントしようと思っていた。けれども同じく王都の高級洋品店の針子が言うには、ドレスを誂えるにはやはりどうしても着用者の身体の寸法を測らないことには作れないとのことだった。
僕はタティにいきなりプロポーズして、驚かせることを予定していたので、今回は生地や飾りの種類だけ予めよさそうなものを僕が見ておいて、後からタティを連れて来て可愛いのを何着でも作ってあげることにした。
僕はタティにはルイーズのような派手な格好は絶対して欲しくないけど、彼女のまるで老婆が着ているような地味な服装についてはかねてより少し不満を持っていたので、年齢相応の可愛いらしい格好をさせてあげるのはとても楽しみだった。
結局先だって用意できたのは、婚約指輪と、他には店先でみつけた髪飾りとか、辛うじてサイズを心得ている靴とかの小物ばかりだったものの、でも考えてみればそれだってどれも若い女の人が集めたがりそうなものばかりだし、それもいちいち宝石や金細工が施されている高品質なものを選んだので、きっとお金がかかっていることが分かって、タティも喜んでくれるだろう。
渋々ながら兄さんにお許しを頂いたことで、僕はタティと公然と愛し合い、結婚することができる。この事実が、僕の心を軽やかにしていた。
確かにタティは今は機嫌を悪くしているけど、きっと何かきっかけさえあれば、仲直りすることができないほどに酷い関係であるわけじゃないと思う。今は何だか気まずい日々が続いているけど、でもきっと未来の僕らからしてみれば、こんな喧嘩は些細で他愛ない、笑い話にでもなっているだろう。
実際僕はタティと結婚できるということが嬉しくて、もう喧嘩の原因なんかほとんどどうでもいいような気分になっていた。
僕らが仲直りをする、そのきっかけがプロポーズならこれほど素晴

らしいことはないと思うので、その演出のために引き続き何だか怒っているふりをして暮らしていたが、心の中では指輪が出来次第タティに求婚することを考えていて、僕の気分は俄然盛り上がっていた。

タティが僕の妾にならなければいけないという兄さんの命令が解除された今、つまり兄さんのお言葉を借りるなら「男子が出来た時点で」結婚をすることが許された今、僕たちはきっと、今度こそちゃんと仲直りをすることができるだろう。

そして僕はタティに言うんだ。

僕のお嫁さんになって欲しいっていうことを。

先だっての婚約指輪が届いた秋の日、僕は高揚する気持ちを我慢することができずに、午後の執務をカイトや秘書官のロビンに押しつけて、指輪を握り締めてタティの待つ僕の部屋へと向かった。

僕は自分の身分や財産の有用さを信じていたし、タティが僕のことを嫌いではないはずだということを信じていた。だからタティが僕の求婚を断る要素などそもそも思い浮かばなかったので、彼女が微笑んでこの指輪を受け取ってくれることを信じて疑っていなかった。だからそのときの僕というのは、どちらかと言えばプロポーズをすることよりは、それから後のことを思い浮かべて興奮していたと言ってもいい。

若い男という、ある種の単純で分かり易いとされる生き物に括られる人間たちを、僕はどちらかと言えば遠目から軽蔑している種類の人間だったが、そのときは確実に、その単細胞で情熱的な連中の範疇に入っていただろう。

だけど部屋にはタティはいなかった。何の変哲もない中秋の夕暮れ。

僕は引き続き胸を躍らせながら、少し部屋の中で待っていた。タティは兄さんから僕の部屋に常駐することを命じられているので、どうせすぐに戻って来るだろうと思っていた。

でも夜になって、タティは戻って来なくて、不安になった僕は部屋の灯りをともしている召使いに、タティの行き先をたずねた。

そして僕は慌てて部屋を飛び出し、廊下を走りながら、どうしてすぐにこのことを召使いにたずねなかったのかということを自問した。

僕はここのところ、喧嘩の延長から自分の部屋へは寝るためだけに戻っていたような生活だったので、タティが一日をどのように過ごしていたのかを、まったく知らなかった。

だけど召使いが言うには、彼女は僕が部屋に寄りつかない以上、日頃からすることがない様子で、またお妾となった好奇の目線もあったんだろう、泣いてばかりいたというのだ。

僕がタティを庇ってあげなかったから、彼女はこの城に仕える貴族出身の使用人たちに随分な嫉妬を向けられ、また平民出身の使用人たちの間でも、影ではいい笑いものになっていたのだという。

召使いの話では、ここのところタティは毎日のように一階厨房まで花を持っていくことを日課にしているということだった。召使いは特に理由までは説明をしなかったが、それは言うまでもなく、ひと月以上も前に死んだパーシーの奴に手向けるためだということが僕には分かった。

そのせいで、僕の高まっていた気持ちには理不尽なまでに失恋の寒風が吹き込み、すっかり盛り下がっていたが、僕はタティに会うために急いでそこへ行き、厨房前の廊下にいないと見るや厨房内に踏み込んで、只でさえ慌しい時刻の厨房を傍迷惑にも一通り引っ掻きまわした。

タティが未だにパーシーのことを引きずっていることが気に入らず、僕の態度は彼らに対してあまり友好的ではなかったことも少しはあるのかもしれない。その間、料理人たちは過剰に僕に平伏し、平伏と言うよりはほとんど命乞いをしているかのような反応だったが、

しかしそれのほとんどの原因は、先だっての料理長殺害事件のことが、彼らの間ではまだ尾を引いていたということで、僕のせいではないだろう。

やがてついさっきタティを見かけたという給仕係の証言によって、僕は速やかにその場所へ移動した。

給仕係の案内の通り、間もなく一階厨房横の階段の裏、高い窓から月光の差し込む薄暗い夜の片隅で、タティが膝を抱えて嗚咽をあげている姿を見つけた。

僕がそっと近づいて行くと、苛立たしげに瞼を押さえている彼女の細い薬指を伝う涙に月の光が宿って、それがまるで堂々とした結婚指輪のように思えて、これにまず目が行ってしまったこと自体が、僕にはこれが死者の国のパーシーからの警告のように思えた。

「そんなに好きだったの……？」

僕にしてみれば、その頃にはもうすっかりパーシーのことなんか頭になかったから、ここへきての使用人たちの萎縮した態度や、タティが未だにそのことを悲しんでいる姿には輪をかけて戸惑わずにはいられなかった。

使用人の一人が死んだことなど、結局は僕にとって悲劇でも何でもなく、過ぎ去った日常のどうでもいい出来事に過ぎなかった。それは喩えるなら新聞紙面の片隅に記載されている、遠い国の悲劇にも似た他人事に過ぎなかったのである。

だけどタティにとってはそうではなかったのだろう。

彼女は涙を拭いながらゆっくりと顔を上げこう答えた。

「いけませんか……？」

それで僕の心には、以前に厨房前で大喧嘩したときの、あの嫌な記憶が甦ってきて、にわかに気分が悪くなった。

僕はたった今まで、心無い連中に笑われ、悲しい思いをしていたタティに、可哀想なことをしたことを謝りたいと思っていたはずだったのに、彼女がパーシーへの執着を覗かせた途端、その気持ちは沸騰するような不快感と怒りに変わってしまった。
それは兄さんが反対されていたのを押し切ってまで、タティと結婚することを考えている僕の気持ちを、踏み躙られた強い屈辱感でもあった。
それ以上声をかければ、タティはまた僕のことを責めただろう。確かに僕はタティに少し冷たかったかもしれないけど、彼女は僕がこうして今すまないと思っている気持ちを知ろうともしないで、僕が罪悪感を抱いたことさえない悪人のように喚き立てるつもりなんだろう。僕の話や、愛の告白に耳を傾けることよりも、パーシーが死んだことを、これみよがしに悲しんでみせることを優先するだろう。そして内容のない口喧嘩の挙句、僕をまたしても拒絶するつもりなんだろう。
だから僕はそれ以上何も彼女に声をかけず、彼女のやっていることを咎めもせずに、手の中の指輪を握り締め、ただ気配を殺してその場を立ち去った。
僕は苛立っていて、残酷な気持ちに支配され、この世界の誰のことも許したくない気分だった。
振られる上に恥をかかされるのは、もう本当に、二度とごめんだったんだ。

第27話　君が望むなら

狂気のように花の咲く伯爵家の霊園から小道を辿り、城内の薔薇園を散策した。

薔薇の花を女性に贈ることには興味があっても、植物を育てたり愛でたりすることにはまるで関心を持たない現在の城主は、いま自分の薔薇園にどのような薔薇が咲いているかさえ知らないんだろう。

冬に咲く、酷く尖っていて残酷な色をした薔薇にふと手を伸ばすと、その棘の鋭さに僕の指先は赤く染まった。タティに花を贈ったら、僕のことを好きになってくれるだろうかという微かな考えが、それによって思索の彼方に吹き飛んで行った。

母上もタティも、結局誰も僕を好きになってはくれないのだろう。

城内の中庭に辿り着く頃、夜の天空にはいつの間にか星々が輝き、晩秋の満月が昇っていた。

いつも大抵の週末がそうであるように、今夜は兄さんが誰かしら女性を連れ込む予定だと聞いているので、夕食は僕は一人で取ることになっていた。

カイトが暇そうにしているなら、彼を誘ってサウスメープル市の何処か、食事ができて時間も潰せるような場所に出かけてみてもいいと思っていたが、彼の姿は午後からずっと見ていない。そう言えば先刻自分の仲間とパーティーがどうのと言っていたことを思い出し、僕はため息を吐いた。

カイトは近頃の落ち込んでいる僕を励まそうとして、夜遊びに誘ってはみたものの、やっぱり後から僕のような陰気な性格の男がいては、せっかくの楽しい夜がつまらなくなるとでも思ったんだろう。

万が一そうじゃないとしたって、彼だって僕と一緒にいれば相当気を遣っているものなんだろうから、いずれにしても週末の夜くらいは解放されたいと思っているはずだった。

考えてみれば、幾ら身分が上であるとは言っても、年下の人間に常

に頭を低くしていなければいけない環境というのも、なかなか想像するだにしんどい状況ではあった。
僕は兄さんの庇護のもとにいるのでそんな必要はなかったけれども、もしもっと位が上の人間のもとに仕えていたとしたら、相手が子供だろうと理不尽だろうと何だろうと、黙って跪いていなければならないものなんだろう。
僕は私室に戻り、外出のための着替えをすることにした。僕の部屋付きの召使いたちが集まって来て、手慣れた様子で言われたままに僕の衣装を調えてから、また所定の壁際に戻って行った。

「こんな時間からお出かけなさるのですか？」

タティが、僕の藍色の外套を手に僕に近寄って来た。

「うん、ちょっと」
「どちらに？」
「何処だろうと、それを君に報告しなくちゃいけないのか？」
「いえ……夜は冷えます、どうかお風邪など召されませんように。それに夜道は危ないですからあまり」
「カイトは？」

僕はタティの言葉をわざと遮って、冷たく彼女を見下ろした。

「いえ、存じません……」
「そう。じゃあ行って来る。君は先に寝ていていいよ。お妾のふりをしているのも、難儀だろうけどね」
「アレックス様っ……」

タティは信じられないという口調で僕を非難したが、僕はすぐに目をそらしたので彼女の表情はよく分からなかった。

タティは僕に外套を着せようとしたが、僕は彼女の手からそれをもぎ取るとそのまま部屋の外に出た。

定期的に装飾的な意味合いの兼ねられた金の燭台の設置された廊下を渡り、階段を下り、甲冑の居並ぶ正面玄関からそのまま扉を抜けて城前広場に踏み出す。冷たい夜風が頬をなぶり、明るい月光が広大で芸術的な白い広場に降り注いでいた。空は晴れているようだ。

頼みもしないのにいつの間にか三名ほど護衛の騎士が僕の後ろを歩いていたが、子供の頃、居城裏の森で遊ぶのに二十名以上の護衛を僕につけて、遊び自体を台無しにしていた兄さんの暴挙を思い出せば、随分数が減ったものだと大人になった自分を実感し、こんなことで自分の成長を実感するということに対して妙な笑いが起こってくる。

本当は、行くあてなんかないんだ。

僕は秋の夜の肌寒さと孤独を感じ、恐らくとぼとぼと広場の石畳を歩いていた。

何しろ僕には友人がいないんだ。子供の頃に教わっていた教師連中が、強いて言えば僕の友人になってくれているし、兄さんの周辺の人間の誰もが、僕のことを自分たちの仲間のように歓迎して、大切に扱ってくれることは分かっているけど、そこには当然異なる嗜好の人間の間に生じる違和感というものが存在する。

カイトにしたって、彼のどちらかと言うとひょうきんな性格からして、本来ならば僕とは違ったタイプの人間なんだろう。今は必死で僕に打ち解けようとして、私的な悩み事まで話してくれてはいるが、もし僕が彼にとって仕えなければならない人間でなかったとしたら、対等の立場で、単なる騎士仲間だったとしたなら、きっと彼は僕のことをわざわざ友人に選んでくれはしなかったに違いない。

僕はこれまで自分で友人を作ったことはなかったんだ。寂しい夜に、一緒に気持ちを紛らわせてくれるような、苦悩や悲しみを共有してくれるような、そういう仲間っていうものが、僕には一人もいなかったんだ。

もし敢えて僕に友人がいると言えるとしたら、それはタティだったんだ。

でも今は、僕にはどうすればいいか分からなくなってしまった。

タティは僕を見ると怯えた顔をする。

襲われるんじゃないかと身を固くする。

誤解だとどうして言うことができるだろう？

だって僕は、彼女が嫌がっていたとしたって、タティを抱きたいと思うんだ……。

でももしこの気持ちを押し隠して、君が嫌がることを絶対しないって約束したら、神様の前でそう誓ったなら、タティはこれまで通り、僕の友だちに戻ってくれるだろうか。

僕がタティのことをとても大切に思っていることを、彼女は分かってくれるだろうか。

……せめて僕のことを、嫌いにならないでくれるだろうか。

僕は胸の中の悲しみを吐き出すために夜気に冷えた空気を吸い、ふと見上げた星空が美しいことに感動し、その場に蹲った。

僕はとても寂しくて、今にも泣いてしまいそうだった。

だけど僕は男だから、それを誰かに言うことはできないんだ。

男っていうのは、いつも兄さんみたいに毅然と、強くしていなければならないんだ。

第２８話　貴公子たる片鱗

頭上には大きな満月が出ていた。
ときどき確実な冬の到来を予感させる容赦のない風が吹いて、それほど自分の身なりにこだわりを持つ男ではなくとも、思わず髪を整えずにはいられないほど僕の頭髪を撫でまわして行った。
アディンセル家は古くからの騎士家系であり、陛下の騎士であることを誇りにしているが、いつの時代もその婚姻に必ずしもその偏狭さが適用されていたわけではないのだろう。僕は生まれつき少々の魔力を備えていて、この世の中には目には見えない何某かの力が流れていることを感覚的に知っている。
しかし厳格な兄さんのお考えによって、魔法を行使するための専門的な教育を受けたことはなく、ルイーズなどはこれが宝の持ち腐れであると散々兄さんに話したようだが、とうとう僕は柔軟性のある子供のうちに魔術師となるための幾つかの逃し難い訓練を受けなかった。だから今となっては当然魔法を使うことも、吹き荒ぶ風を司る精霊を見ることもできないのだが、夜風が今、僕が孤独だということを、煩いくらい僕の耳元に囁いていることを肌で感じることはできた。
事実、夜空には幾多の星々が星座を描いているというのに、ここでは孤独が世界を満たしていた。
既にその全景を視界に捉えられるほど遠ざかった居城を振り返ると、数え切れない窓辺は明るく、人々の笑いさざめく声が聞こえるかのようで、まるで知らない誰かの住処のように僕の寂しさに無関心だった。
僕はあまり外出を好むほうではないが、塞いだ気持ちをどうしていいか分からないとき、馬を走らせて気分転換を図ることがあった。
子供の頃には馬に鞭を打つのが可哀想だと思っていたことは確かだが、今ではあまり考えなくなってしまったことからも分かる通り、

僕は自分が考えているよりもきっと思いやり深い人間ではないのだろう。

もし思いやり深ければ、ああやってタティを泣かせるようなことをしていないだろうし、たぶん、もう自分がどうしたいのかさえ分からないようなことには、なっていないに違いないのだから……。

今夜はだいぶ視界がよく、慣れた道なら存分に速度を出すこともできそうだった。悪い冗談のように何処へでもつき纏って来る護衛の連中を撒く意味でも、馬に乗るのは悪い選択ではなかった。

僕を逃せば彼らは兄さんから手酷い懲罰を下されるだろうが、そんなことは僕の知ったことじゃない。何しろ僕は彼らを知らないし、生活するために労働を提供しなければならないような下級貴族である彼らとは、そもそも住んでいる世界が違っている。

もし僕が彼らに近づいて行って、友人になれと命じたなら彼らは承諾するだろうが、そんなことはいかにも馬鹿馬鹿しい茶番だった。どうせ僕は独りでいることのほうが気が楽なのだし、少し冷静になってみると、友人なんかいなくたって、そんなことは取り立てて問題ではなかったのだ。

友人がいることで、もしかすると人生にとって何某かの利点というものが存在するのかもしれないが、幸いと僕はそれを知らなかった。これまで十九年間そうやって過ごしてきて、さしたる問題があったわけでもないのだから、これからだってそれで大丈夫に違いない。

友人がいないなんてくだらないことで劣等感なんか感じる必要はないじゃないか、何しろ僕は裕福で、健康で、しかも幸せだった。使用人たちが僕に友情を示すことはないが、彼らは僕の周囲に傅いていて、何でも命令に従うだろう。

大袈裟でなく、僕はそれ以外のものを何でも持っているのだから、安っぽい友情なんかを今更欲しがったりして、わざわざ僕がいま手にしているこの一人で過ごす美しい時間や、果てしない空想や、いま僕がせいせいしているこの清々しい気持ちを手放すことなんかないんだ。

「タティが友人だって？　ふん、彼女は只の泣き虫さ……」

僕は石畳の城前広場から少々急な正面階段を下りながら、タティのことを早急に頭の中から掻き消した。

いまや彼女は存在するだけで僕の気持ちを掻き乱す不愉快な存在だった。

それに僕の感情を僕以外の人間が支配するなんて、そんなことは到底考えられない越権行為だった。別に僕といつまでも距離を保っていたいなら好きにすればいいのだが、僕はどんなに嫌われようともはやタティを解放する気はなかったし、僕のほうから許しを乞うような真似をするつもりもなかった。

だからと言って無理やりどうにかするわけではなく、タティの気が変わるまで僕の部屋に閉じ込めておけばいいと思っていた。

そうすればそのうちタティも頭を冷やして、自分がどんなに愚かで失礼なことをしていたかが分かるだろう。そうなったら、そのときにまた改めて話をすればいい。既に結婚の許可は下りていて、彼女は僕の愛人と周知されつつある。当主の弟である僕の愛人にちょっかいをかけようなんて人間はここにはいるはずもなく、タティの父親ですら兄さんの決定に逆らうことなどできないのだから、何も急ぐ必要などないのだ。

酷いことをしているなんて思う必要はない。

階段の上から見渡す夜の城下は広く、敷地を囲む高い城壁は居並ぶ建物や木々や青い芝生の遥か向こう側にあった。

我がアディンセル伯爵家は領地収入と鉱山による強い財源があり、戦争となればまず矢面に立つことになる侯爵に準じる騎士団を維持することができる。従って騎士を志す人間が押しかけるのに暇がなく、整然とした城内のどこに視線をやっても衛兵の姿が視界から消えることがなかった。

兄さんが拠点とされているこのサンメープル城は、建国当初のまだ

我が国の治世が不安定だった時期、反乱に備えた内地の防衛拠点の一つとして建設されたものではあるそうだが、現在では軍事機能よりは住み心地や外観が重視された、アディンセル伯爵の裕福さのひとつの象徴のような役割を果たしている。
居城から馬車で半刻もしないところにあるサウスメープル市は、貿易物資の流通と交通要所から発達したそれなりの規模を持つ地方都市で、かつてはこの城の城壁内にあった小規模の市街は、利便性と居住者の増加の問題からすべてそちらに移されていて久しかった。
居城の広大な敷地内に現在も機能しているものとして、各種行政施設や兄さんが所有する赤楓騎士団及び一般兵士のための訓練場や宿舎等があるが、それらはやはり当家の家族の生活圏とは切り離されていて、城前広場から何十段と階段を下りたところにあった。
僕は衛兵が規則正しく巡回しているのを横目で見ながら、正面階段の下まで到達し、そこから軍馬が収容されている厩舎に向かおうとした。僕が所有しているいちばんの駿馬を引っ張り出し、自棄のように馬を走らせるためにだった。

「アレックス様」

しかし、そこで僕は誰かに不意に声をかけられた。

第２９話　いじけ虫と梟

呼ばれたほうを見ると、城前階段を下りたすぐ横の切り立った高い石壁に寄りかかって、腕組みをしながらこちらを見ているカイトがいた。偉そうにしているというよりは、寒そうにしていると言ったほうが適切だっただろう。

「カイト……、おまえ何してるんだ？」

僕が不審感からそうたずねると、カイトは相変わらずの気楽な調子で肩を聳やかした。

「アレックス様がここで待ってろっておっしゃったんじゃないですか」

「僕が？」

僕にはそんな覚えがなかったのでつい訝ると、カイトは僕に敵意がないことを示すかのように大袈裟に両手を広げてみせた。

「そうですよ。昼間、霊園で、アレックス様を遊びに誘うのにつき纏っていたら、分かったから夕方になったらこの階段のところで待ってろとかって。
あれはまさか俺を追い払うために適当なことを言って、そのまま忘れていたってんじゃないんでしょうね」

「ああ…、そう言われれば、そういうこともあったかな」

カイトが恨めしそうに僕を見るので、僕が何となくそう答えると、彼は全身で脱力感を表現するかのように、その場にしゃがみ込んだ。いちいち感情表現が大仰なことを今更責めるつもりはないが、虫の

居所がよくないとき、カイトの明朗さにはうんざりだった。

「でも、そんなことを本気にすることはないだろう。外套もなしに、いったい何時間ここに突っ立っていたんだか知らないけど、君も少し言葉の内容を考えて行動したほうがいいね。でないと、大事な局面で判断を誤ることになるよ」

「またそんな可愛げのないことを言って。閣下があんなんだから、アレックス様っていうのは余程世間の人には温和でおとなしいように見られていますけど、貴方も意外とあれなところがありますからね。本当、貴方はそういうとこ閣下にそっくりですよ」

「そんな馬鹿な。僕ほど善良な男もそうはいないだろう」

「その、自己評価の高めなところとかね。

もっとも、何だかんだ言って貴方は根っからの支配階層ですからねえ。使われる側の立場ってものが、いまいち分からないんでしょうけども。こっちはどんな内容であれ、下された命令に従わないわけにはいかないものなんですよ」

兄さんが自分に自信を持っていることは今更疑うべくもないが、自分が偉いだの寛大だのということを堂々と恥ずかしげもなく口にできる彼の精神構造は僕にとって奇異なものであり、一緒くたにされることはどうにも納得がいかなかった。だから僕はカイトに文句を言い返したかったが、しかし僕の命令でもなければカイトがこんなところに何時間も立っている道理はなく、もし僕が今ここを通りかからなかったら彼は一晩中でもこの場所で僕が来るのを待っていたのだろう。それを考えると、さすがに不用意なことを言ったかもしれないと思い直した。

「悪かったよカイト。無責任なことを言って、何時間も待たせてさ」

「本当ですよ。俺もう、風邪ひきそう」

「だったら早いところ家に帰ったほうがいい」

気遣いから僕がそう言うと、カイトは少々困惑したように視線を僕に向けた。

「お言葉は有り難いんですが、俺はすぐそこの、赤楓騎士団の宿舎暮らしですよ。部屋に帰ったって、寒くて暗くて埃っぽい部屋があるばかり。

いつでも部屋を暖めていてくれる召使いを実家から連れて来ている奴もいるにはいますが、生憎と俺は、実家からはとことん冷遇されてますからね」

そしてカイトは僕の前まで近づいて来るや、右手を額に添え、突然水夫か何かを模したような、ふざけた態度で高い壁の遥か向こう側に聳える居城を仰いだ。

それからまるで何時間も待たされていたことなど忘れてしまったみたいな好意的な笑顔で、僕を振り返った。

「おやっ、窓辺にタティを発見。彼女はアレックス様が戻って来るのをじいっと待っているようです。忠犬みたいに」

「何だよ、またつまんないことを……。

おまえは魔術師でもないのにそんなことが分かるわけないだろう。あんな遠い窓に人間がいるかなんて、ここからじゃ昼間だって肉眼で分かるわけない。だいたい僕の部屋は正面からは見えないんだぞ。でたらめ言うなよ」

「いえいえ、分かりますとも。こうなってしまったからにはアレックス様だけには打ち明けますが、実は俺は梟なんです」

「梟？」

「ええ。昼間は人間で、夜は梟」

「じゃあ僕の目の前にいる男は何なんだ？　人間じゃないのか？」

「梟人間です」

真顔で打ち明けるにしても、突飛すぎる内容だった。

「カイト……どうしてだろう、おまえがもてない理由が、今はちょっと分かるよ」

不本意ながら思わず笑ってしまったことを悔しがりながら、僕は答えた。

「あ、受けましたね。ふふふ、そうですか、面白かったですか」

「まあね。夜目がきくって言いたいならそう言えばいいのに。君にはかなわないな」

「ふむ、ちょいとご気分が上向きになっていらしたようですな。それではそこでご提案なんですが、ホットミルクをご馳走してくださるんでしたら、タティとの仲直りを手伝ってあげてもいいですよ」

カイトがまるで僕の願望をお見通しだと言わんばかりに言うので、僕は再び眉間に皺を寄せた。

「君はいつも自分のことをもてないって言ってるくせに、そんな器用なことができるのか？　梟のくせにさ」

「確かにね。でも梟なだけに、人のことはよく見えるんですよ」

「君にタティの何が分かるんだよ。前なんか、彼女をブスだなんて言っていたくらいだ、何も分かってなんかいないだろう」

「はて、そんなこと言いましたっけ？」

「言ったよ。ほら、料理人が死んで、タティが妾にされて泣き喚いていたときに。

君の話し方はもとからあまり上品じゃないけど、あれは完全にタティに対する侮辱だった。内心むかっときたからよく憶えてるんだ」

「ああ…、そう言われれば、思い出しました」
僕が指摘すると、カイトは苦笑した。
「そりゃまた貴方も随分細かいことを憶えていらっしゃるんですねえ。
でもそれはほら、俺としてもあの前後辺りから、もしかしたらアレックス様がタティに気がありそうかなと思っていたんで、従順なる配下と致しましては、一応明確な線引きを示したまでですよ。
別に本当にブスとは思っちゃいませんが、アレックス様は何気に嫉妬深そうなので」
「何だよ……」
カイトが、思っていたよりも細かいことで僕に神経を使っていたことを知って、僕は憮然とした。
「で、どうします、仲直り。手伝いますよ。夕食つきなら、もっと有り難いかな」
「金がないなら、夕飯は僕が奢ってあげるよ」
「意地を張っちゃってまあ」
「別に意地なんか張ってない。僕はもうタティに関心がないだけなんだ。
そんなことよりおまえ、友人はどうしたんだ。パーティーがあるって、言っていなかったか？」
兄さんが数ある貴族の子弟の中から彼を選び出して僕の側近に据えた以上、以前から分かっていたことではあったが、カイトというのは馬鹿のふりをしていても、やはり頭の切れることは疑う余地がなかった。下手に出ているようで、気を抜けばどうにもやり込められそうな感じが気に入らず、僕が強引に話を変えると、カイトは頷い

た。

「そうです。なじみの貧乏人が集まるパーティーです。ほとんどが叩き上げの赤楓騎士団員です。遅れたって大丈夫。どうせ週末の夜に他にすることのない面々が、安酒を飲むだけなんですから。気のいい奴らですよ。

アレックス様もいらっしゃいますか？　いらっしゃいますよね？

俺を寒い中ずっと立たせていて、しかも薄情なことに、それを忘れていらしたんですから」

「そんなの、梟なら平気だろう？」

「いやいや、梟だって寒いんですよ」

第３０話　カイトの話（１）

兄さんの騎士団の連中には、剣術の訓練よりは頭脳労働を好む僕のことを、軟弱者だと思っている奴らが多いことは事実だった。
我々がお仕えする輝ける国王陛下の治めるサンセリウス王国では、大きな戦争はもう四半世紀ほど起こっていないのだが、兄さんが幼い頃、西部の国境線を巡って一度中規模の紛争があったそうだ。
しかしそのとき父上は既に七十歳過ぎのご高齢で、兄さんは子供だったために、先の戦争ではアディンセル伯爵家の当主の家からは出征する者がいなかった。騎士団を擁することを許されながら、一軍の指揮官たるべき当主が不在というのは、陛下の覚えにとって非常に悪印象だったということだ。
そのことで、その後アディンセル伯爵家が大きく宮廷における発言力を失くしたのは言うまでもないことだった。
兄さんは現在宮廷の主流であるウィシャート公爵の有力な配下となっているが、戦争という分かりやすい活躍の場のない時代に、そうなるまでには余程のご苦労がおありだったと思う。
そして代々の軍属の家系の出身者たちは、そうした悲惨な状況から立場を取り返した兄さんの政治にも明るい聡明さや強気さ、しかも長身で大柄な主君を熱狂的に崇める、つまりは強さの信奉者たちなのだ。
ときには温厚だった先代伯爵である父上のことを、無能と罵るほどに。
彼らは僕にも兄さんと同じようにあることを要求していて、兄さんの右腕たることを強く望んでいた。そして理想通りでない現実の僕に、失望し始めているのを僕は知っていた。
僕はそうした連中の巣窟である赤楓騎士団の宿舎での集まりに出向くというのが、一度格好をつけて部屋を飛び出してしまったからにはタティへの意地があるためにすぐには戻れないにしても、相当気

分が重かった。
するとそれを察したように、カイトが笑ってこう言った。

「平気ですよ、そんな鼻息の荒い奴らは今夜はいませんから。何しろ俺は、そんなご立派な連中からは相手にされないひと山幾らの部類ですからね」

居城の正面門から煉瓦道を左へ進んだところに、一般兵士及び赤楓騎士団員のための宿舎が連なっている一画がある。建物によっては側面に蔦が絡まり、長年の風雨に晒された感はあるものの、どれも余計に大きく立派な建物だった。
サンメープル城の一部としての統一感を持たせるために、居城と同様三百年前当時の古い建築様式が採用されているが、こちらはあまり飾り立てられていないせいなのか、重厚で古めかしい厳粛さだけが際立っていて、好感が持てた。
けれどもカイトに案内されるままいざその中のひとつに踏み込むと、外観の印象よりも更に異なった世界を垣間見ることになった。
至る所に品物のいい調度品や照明、お伽話調の美しい絨毯や凝った装飾床の敷き詰められた居城の華やいだ雰囲気とは大きく違っている、これは確かなのだが、それだけでなくここはどうにも貧乏臭いのだ。
廊下の燭台の蝋燭がどういうわけかひとつおきに途切れていて薄暗く、蝋燭の煤汚れが壁を這うようにこびりついている。タイルはところどころひび割れ、通路にときたま置かれている年代物の彫像は、黴を身につけ灰色にくすんでいることを気にとめられてさえいない様子だった。

廊下の隅に埃が積もっているほどには状態が悪いわけではなく、長らく清掃が行われていないとは言わないが、空気は澱み、誰か気の利いた人間が空間に対して配慮をしているようには思えず、建築の立派さの割にはそこはかとないわびしさが漂っていた。
そのことを指摘すると、ときどき夜の闇が染み込んでいる廊下を先導しながら、カイトは気軽な調子で自分は貧乏人だから気がつかなかったと笑っていた。
カイトの謙遜が意味不明だと思った僕は、彼にこう文句を言った。

「ウェブスター男爵家の子息が何を言っているんだ。君はジェシカに劣らないいいところの出じゃないか」

するとカイトは答えた。

「でも俺はジェシカ様と違って、養子なんです。実際はウェブスター男爵家は、男爵様のご令嬢が継ぐんですよ。
けれども我が国は男系男子じゃないと家督を継げませんからね。だから遠縁の貧乏貴族の俺が、名目上引き取られたってわけでして。
しかし俺が九歳まで育った家庭っていうのは、本当に貧乏で、貴族なんて名ばかりの、爪に灯をともすような生活ぶりで……だから貧乏暮らしは板についているってわけです」

そしてカイトは僕を振り返って、話の内容を殊更に茶化すかのように笑って肩を竦めてみせた。
カイトが養子であるという話は、僕もそれとなく兄さんから聞いている話だった。
カイトが言っている通り、我が国では跡継ぎにする男子が生まれないと、家系を存続させることができない。従ってそういうときは親戚の次男三男を連れて来たり、妾腹の男子を取り立てて補う場合も少なくない。だから僕としては、カイトの場合もきっと本家の甥と

かその辺りの立場だと思って、これはずっと以前に自分の中で納得していた話だった。
それなのに、カイトが実は遠縁の貧乏貴族というのは、僕にとってはまったくもって寝耳に水の話だった。
それはカイトが、本来であれば僕と口を聞けるような立場でない、言わばあの護衛の連中と同じか、ともすればそれ以下の下級貴族であることが問題なわけじゃない。
確かに僕は自分でも他人と距離を置いていたい種類の人間だと思うし、ましてや恋人でもない人間の過去に関心なんかないのだが、だからと言って十三歳のときからかれこれ七年近く側仕えしているカイトの生い立ちを知らないなんて、いったい自分は何をやっていたんだと、思わず愕然としたわけだ。

第３１話　カイトの話（２）

「だからって……、蝋燭が切れているのをそのままにしておくのは不便だろう」

多分に居心地悪い気持ちで、僕は呟いた。

「たまに蝋燭が切れていたって、廊下は十分歩けますからね」

「予算が足りないのか？　兄さんは金払いはいいはずだけど」

「まあ……貴方には理解できないかもしれませんが、この宿舎を利用している人間の大部分が、節約が染みついているんでしょうな。会計係がまた厳しい奴なんですよ。蝋燭を買うくらいなら、上等な武器や馬を持つべきだってこだわりのある奴ではあるんですが。現在は長らくの平時ですから、騎士団の仕事と言ったら専ら領内の治安維持でしょう。ですから日程がはっきりしているもんですから、本当にいいところの子弟は、非番の日にはまずここには住んでいないんですよ。近場に実家があるなら通っているのもいるでしょうし、サウスメープル市に家を借りているのも多いでしょう。貴族という身分以外には何も持っていない貧乏なのや、平民上がりの連中が、ここに住んでいるんです」

「……兄さんが僕の側近に選んだからには、カイトはお坊ちゃん育ちだと思っていた」

「とんでもない、本来は名も無い末端貴族ですよ。ウェブスター男爵家の遠縁と言っても、男爵家とは何代も隔てているから、今じゃ本家とはまったく係わりもなかったんですよ。でもある日、まるで仔犬でも持って行くみたいに俺だけ家族から引き離され、男爵様のお邸に連れて行かれたってわけです。不細工な姫君の形式上の夫になるよう言い含められて、でも扱いは下働きの下男同然でした」

「下男……」

その真っ暗な言葉の響きに僕は呆然とした。

「ええ、そうですそうです。ほら、サンメープル城にも小汚いのがいるでしょう？

それでも周囲への体面があったんでしょう、俺も一応は男爵様の小姓ということにはなっていましたが、内実は男爵様の鬱憤晴らしのために殴られるのが仕事でしたねえ。

そのまま十四になっても従士にもして貰えなかったんですが……、でもそんなある日、たまたま俺を見かけた閣下が、これは使い物になるとおっしゃって、なんと俺を閣下の従士にしてくださったんです。

それから一年しないうちに、こうしてアレックス様に仕えるように計らってくださったわけです。そのときに騎士の叙任を頂きました。だから閣下に目をかけて頂かなかったら、俺は今頃も下男のままだったでしょうね」

カイトはまるでゴシップ話か、さもなければ天気の話でもするみたいな口調で自分の過去を話していた。そのことから彼はたぶん、この話を僕に隠していようと思っていたつもりはないんだろう。

何しろカイトはおしゃべりだし、自分が貧乏人であるなんてことを恥ずかしげもなく言ってしまえる性格からして、誰かに自分の話を聞いて貰うことを厭うはずもない。そのことから、これはどう考えても僕がこれまでカイトにまったく無関心で、彼の話に聞く耳を持っていなかったのだと言わざるを得ない。

僕は自分の男としてあるまじき内向さ加減にもはや肩を落としながら、言い訳がましくこう言った。

「僕はカイトが……すごく腕が立つって兄さんが言ってたんだ。兄

さんはカイトは家柄もいいって言ってた。家柄がいいから性格が明るくていいだろうって。だからそんなことは想像もしなかった……」

「いいんですよ、俺としても、こういう話はやはり貴方にはしづらかったと言うか」

「やっぱり僕のことなんか……信用できないってことか？」

「いえいえ、そうではないですよ。それは絶対違います。ただ何と言いますか、んー、貴方があんまりお幸せな子供だったのがその……自分が惨めだったという時期もあったということですかね。要は貧乏人の僻み根性です。

伯爵様や周りから宝物扱いされているアレックス様を見ていると、六つも州を治めているアディンセル伯爵家の方である貴方と、所詮は荘園主上がりの田舎男爵、しかも養子の俺とでは違っていて当然なのですが、やはり自分の悲惨な子供時代が酷く情けない気分になると言うか。

心の整理をつけるのに、少々時間が要ったんです。我ながら辛気臭いことなんですがね。

勿論隠しているつもりはなく、たずねられればいつでも答えるつもりではいましたよ、ですが……貴方にお仕えしていると、当然のように誰もが俺に対してもいい態度を取るでしょう。養親から死ぬほどぶん殴られていた者としては、まさに別世界に足を踏み入れたような気持ちがしましてね。

特に貴方は、俺を仲間だと信じて疑いもなく接してくださいましたし、それでまあ……本当のことが知れて、それが崩れてしまうのが恐かったというのもありました」

カイトの告白を、僕は黙ったまま聞いていた。何と言ったらいいか分からなかった。

だからずっと黙ったまま、先を行く彼の後ろ頭を見ていた。黒髪と言うにはやや茶色がかっているカイトの髪だが、薄暗いこの廊下ではやはり黒髪に見えた。

少年の頃には僕がカイトを見上げなければならなかったが、それはいつしか逆転して、今では僕のほうが彼よりも少し背が高かった。アディンセル伯爵家は長身家系なので、僕も所謂世間で言う長身男の部類だった。兄さんにはまだ少し及ばないので、もしかしたら彼よりは背が高くならないかもしれなかったが。

「だから……伯爵様には俺、すごく感謝しているんですよ。勿論、アレックス様にもね。

俺が何を言いたいかって言うと、そういうわけですから貴方はもう少し俺のことを信頼して頂きたいということです。

何て言うかな、今は背中を向けているから言えるんですが、貴方は内向的と言うか、どこか人間を信じていないんだ。俺が思うにたぶん、恐がりすぎているんです。

でも貴方はもう、誰かに容易に力を奪われる幼い子供じゃないんですよ。その気になれば、相手を捩じ伏せることもおできになるでしょう。ですから恐がる必要なんてないんです」

「うん……分かった」

本当はよく分かっていなかったが、僕はカイトにそう答えた。

第３２話　引っ込み思案（１）

ひんやりと冷たく暗い廊下をしばらく歩き、やがて連れて来られたのはカイトの私室ではなく、その宿舎内の比較的規模の大きなホビールームのような場所だった。

カイトの分かりきったような言葉を納得ができているにしてもできていなかったにしても、僕の性格がそんなもので克服できる道理もないことだけは確かだった。何せ、僕は彼のように過去を清々しく割り切れる気持ちのいい性格ではないのだから。

彼のことを、ともすれば単純思考が行動原理のすべてである享楽的な男であると決めつけていたことに対しては申し訳のない気持ちがないわけじゃないが、だからと言って、そうじゃなかったことを、彼の話を僕がとても悲しく受けとめているこの気持ちを、手下の人間に素直に告げることができるわけもない。

だから僕はずっと黙って歩いていたが、先を行くカイトの足取りは軽く、打ち明けた話を深刻に考えている様子を微塵も感じさせないことが、僕には分からなかった。

ひとつだけ分かっていることは、僕がもしカイトの立場だったとするなら、今こうして生きていることなどなかっただろうということだけだ。これは価値観の問題なのかもしれないが、僕はもし自分に彼の人生をあてがわれていたなら、たぶん一秒だって、到底耐えられはしなかっただろうから。

アーチ型の開放的な入り口の向こうの広間からは楽しげな、そして少々猥雑な感のある歓談の音や光が廊下にまで漏れ広がっていた。

「パーティー会場です。貧乏騎士たちの」

カイトは何事もなかったような明るい声で、広間を指差してそう言った。

パーティー会場とやらには、ざっと見て数百名の人間が談笑をしたり、誰かが奏でる軽快なギターやタンバリン、調律をされていないことがよく分かる微妙な音色のピアノ、それに即席の打楽器に合わせて歌ったり踊ったりしているのが見えた。
手前のビリヤード台にも人が集まっていて、その誰もが声を出し合ったり、歓声を送ったり、囃し立てたりしている。
会場にいるのはその多くが十代後半から二十代半ばほどまでの若い連中ばかりのようで、僕はさっそく旧来の持病である人見知りと気後れを発症した。僕は同年代の同性の人間ほど苦手なものはなく、できることなら生涯係わり合いを持ちたくないものの上位に位置しないことはないほどだったからだ。
でもそれは僕に落ち度があるわけではない。
子供の頃、兄さんが僕の遊び相手をさせようとして集めた貴族の子弟たちの無礼な振る舞いが、僕の心に耐え難い傷をつけ、以後僕は連中のような乱暴で浅はかな奴らが大嫌いになったわけだ。
この感情を誰かに打ち明ければ軽く鼻で笑われることが分かっているから言わないが、あんな話を聞いたからにはカイトにだけはもう絶対こんなことは打ち明けられないが、心の痛みというものが必ずしも相対的な問題ではないことを前提に言わせて貰えば、僕はあの苛めっ子連中のことを、今でも憎んでいると言ってもいいと思う。
何しろ連中というのはいつでも軽薄で思慮に欠け、礼儀知らずであることも多く、自分たちの流儀を押しつける割には僕に対する敬意や配慮が根本的になっていないのだ。
だから僕が彼らを同じ人間だとみなすためには、奴らがカイトのように最低限の礼節を身につけるか、さもなければ少なくとも後十歳くらいは年を取り、僕が誰であるかをとくと思い知る必要があった。

「うわっ、アレックス様では……？」
「おおっ、さすがに美形だなあ」

更に悪いことには、僕とカイトが広間のすぐ前に来ていることに、入り口付近でビリヤードに興じていた連中が、気づいてしまったということだった。

彼らは口々に野太い驚きの声をあげて僕の周りに集まって来たのだが、味方でない男の集団というものは、男の目からしたって十分に脅威を感じるものだ。しかもそれが夜に浮かれているともなれば、往々にして嫌がらせにも等しい破壊力を持つ。

僕は自分が馬鹿馬鹿しい危機に晒されていることを知った。

彼らは愚かにも菓子のかけらをみつけた軍隊蟻の群れみたいにどんどん僕の周りに集まっていたし、しかも旺盛な好奇心を隠そうともしていなかった。

また部屋の中にいた他の人々も、彼らが熱中していたそれぞれの行為を中断して、次第にこちらに注目しつつあった。部屋の奥のほうのテーブルでも、だらしなく食事をしていた人間たちがその異変に気づき、その場でやはり敬礼をしたり、床に跪く者までがいた。或いは急いで僕の足下に走り寄って来て、わざわざ深々と頭を下げたりした。

思いの外、連中が僕に畏敬の念を覗かせていることは予想外のことではあったが、しかしすぐに態度が変わるかもしれない危険性を排除するべきでないことは分かっていた。

これをもし好意的に解釈するなら、僕は自分の登場によって、彼らの楽しいひとときを台無しにしていることがすぐに分かったので、早々にこの場を立ち去ろうと思った。僕自身の心の平和のために、つまり奴らの恐縮が攻撃性に転化されるその前にだ。

それに広い室内には騎士ではない、ゲストらしい女性たちも多く混じっていた。

勿論世の中には女性騎士というものが存在するが、後ろ盾となる家柄があるか、男性に負けない余程の才能があるかしないと女性が騎士になることは難しいので、この場にいる女性のほとんどは、騎士ではないだろう。身なりの程度と僕に対する躾の行き届いた対応か

らして、たぶん居城の使用人たちだと思われたが、召使い女と酒を飲むなんていうのは、僕の身分を考えればまず考えられないことと言ってよかった。

「カイト、悪いがやっぱり僕は帰らせて貰うよ。あんまり歓迎されてないみたいだし」

「そんなことはありませんよ。ただほら、ここにいる連中は閣下直属の中でも成り上がりの……、閣下は才能のある者はあまり身分を問わずに騎士団入りをさせていますからね。だから騎士たちの間では、感謝と尊敬の的なんですよ。それで、彼らは閣下の弟である貴方にも同じような気持ちでいるってわけです。ま、あの方は基本的に恐いですからね。半分びびっちゃってるのも事実ですけど。半刻もすればなじみますって」

「でも居づらいんだ」

「適当にすればいいんですよ。誰も貴方をとって食いやしない。ほら、女の子もたくさんいるでしょ。こういうところにやって来る彼女たちっていうのは大抵、下っ端でも貴族の旦那を貰いたいって下心を持ってますから、積極的なんですよ」

「何だ、それじゃあこれはあの……そういう集まりなのか？　結婚相手を探すっていう……」

「いえいえ、そんな堅苦しく取らないでください。ただの週末のお遊びですよ。飲んで騒ぐだけ。そんな深刻なもんじゃない」

「お遊びなら、なおさら不純じゃないのか。だいたい日が暮れているのに、女性が外を出歩くものじゃないだろう。こんな、飢えた男がうようよいるような場所に無防備にいさせて、何かあったらどうするつもりだ。解散させるべきじゃないのか」

「まあまあ、そんなことおっしゃらずに、お願いしますよアレックス様」

カイトはそう言うと、僕の背中に腕をまわし、半ば強引に僕のこと

を部屋の奥へと連れて行った。

第３３話　引っ込み思案（２）

連れて行かれた奥にはテーブル席の他にもたくさんの長椅子があって、カイトはそのうちのひとつに僕を座らせた。僕はすぐに立ち上がろうとしたが、カイトは僕の両肩を抑えて再び僕を椅子に押し戻した。
それで無礼だと僕が文句を言うと、カイトは生意気にも僕を見下ろしてこう言った。

「いいから。難癖つける元気があるんなら、急いで帰る必要もないでしょう。ここまで来ておきながら、酒の一杯も飲まないで帰ってご覧なさい。それこそ貴方の沽券に係わりますよ。逃げ帰ったと思われかねない」
「おまえが連れて来たんじゃないか。僕はおまえが身内だって言うから、せいぜい数人だろうと思っていたのにこんな馬鹿みたいに人がいるなんて思っていなかったんだ」
「かえって人が多いほうが気安いでしょうに。ここにいる奴らだって、何も一枚岩なわけじゃない。別の館から迷い込んだふりをして、晩酌つきの夕飯に与ろうなんて輩さえ幾らでもいますよ。何しろ赤楓騎士団は人が多すぎて、俺だってよく知らないのほうが多いくらいです。学校か、大衆食堂だとでも思えばいいんですよ。
とにかく影で坊やなんて笑われたくないんなら」

カイトは少々不敵に僕を見やった。

「観念なさい」

手前の小ぢんまりしたテーブルには赤や桃色の飾り蝋燭が輝き、せめてものパーティー気分の演出の意図を感じたが、僕はこういうことが意外と好きなので微笑ましく思った。タティなら、きっと蝋燭の周りにもう少し可愛い小物を置いただろう。光に映える金の天使の置物とか、色とりどりのキャンディーを詰めた箱なんかを。彼女は部屋を飾りつけるのが、とても好きだから。

僕はこんな場所にいるよりもタティと過ごしているほうがずっと楽しいと思うのに、いったい何をやっているんだろうかとしばらく考えていた。僕は学校に通ったことはないし、大衆食堂なんかに立ち入るわけもない。こんなことになったのは、そもそもタティが聞き分けなく泣いたりして、僕を嫌がるから悪いのだが。

それにしたってどうせ時間を潰すなら、やっぱり書庫か、自分の執務室にでも引きこもって、本でも読んでいたほうが余程有益な時間を過ごすことができるだろう。

それで僕はカイトが他所に注意を向けている隙を見て、再びここを立ち去ろうとしたのだが、そう思ったときにはもう僕の前には僕へ挨拶をしに来る騎士たちの列ができていて、それどころではなくなっていた。

それで僕は仕方なしに自分から椅子に座り直し、譬え様のない居心地悪さを感じながらそれに応じるはめになった。

「アレックス様がこんな場所におみえになるなんて、感激です」

「アレックス様はたいそう頭がよろしくて、勉強家でいらっしゃると評判ですよ」

口々に分かり易い世辞なんか言っているが、彼らの本質が子供の頃、僕を苛めて追いかけまわしたあの悪質な性悪であることは分かって

いた。

今は上辺だけ取り繕い、自分の名前を僕に告げるなどという図々しい売名行為を僕が軽蔑しているとも知らないで、彼らは延々とくだらない、無教養なおべんちゃらを僕に言い続けていた。

うんざりした気分を隠して、僕がいい対応をすれば目に見えて喜んでみせ、気まぐれに無愛想にしてやれば生命を取られるんじゃないかというほどの怯えが浮かんでくるのが面白かった。

厨房の料理人たちほどじゃないが、彼らは明らかに僕の機嫌を窺っていて、僕は自分が彼らよりも上等の人間であり、考えひとつで彼らの生存権を取り上げることもできるのだと思うことでこの無意味な時間を何とかやり過ごしていた。

しかしそのうちそんなことを考えている自分が、何やら矮小でみっともない男のような気がしてきて、子供の頃に僕を苛めたくらいのことをいつまでも恨みに思っている自分のほうが、連中よりもずっと情けないんじゃないかという気分になってきた。

一方で、生活のためか名誉のためか知らないが、僕と年頃の変わらない若者でありながら、主君を得て精進をする彼らのほうがまっとうな人間であるように思えてきて面白くなかった。

僕だって、何も騎士としての鍛錬から逃避しているわけではないが、少年の頃、剣術の練習中に間違って自分の脚を傷つけて流血騒ぎを起こし、傷自体は大したことなかったのだが僕は自分の血を見てひっくり返ってしまった。駆けつけた兄さんは何だか複雑そうな表情で僕を見ていて、彼は結局僕を叱らなかったが、それ以後無理やり武芸の訓練をさせられるということがなくなった。

そしてその分野においては未だに兄さんが甘いのをいいことに、手を抜いていることには違いなく、今もって実戦を経験したこともないことが恥ずかしく思われた。

僕は騎士の叙勲を成人すると共に受けているが、我ながら主君が兄さんでなければとても騎士とは名乗れないような内容であることを自覚しているんだ。

けれども、と言ってここで僕に会えて嬉しいなんて、本心じゃ思ってもみないことを言っている奴らに少しでも弱みなんか見せようものなら、また棒切れを持って追いかけられるなんてことが起こりかねないので、ここは伯爵家の人間らしく偉そうにしているのが無難だろうと思って、僕は殊更に澄まして、そういうふうに振る舞っていた。

横でそれを見ているカイトが時折苦笑していたが、僕は気にしなかった。

第３４話　将来的な展望として

やがて騎士たちによる挨拶の列が下火になった頃、カイトは少し側を離れたかと思うと、飲み物を持って僕の側にやって来た。
僕は同性の挙動なんかを逐一観察する趣味などないのだが、近くのバーから飲み物を持って近寄って来るカイトというのは、彼は僕とは違ってきちんと欠かさず騎士としての務めを果たしているのだから当然の話ではあるのだが、均整の取れた身体や手足には筋肉がつき、僕よりずっと頼りになりそうな感じがした。
僕の父上が大柄な老紳士だったことに加えて、実際に兄さんもがたいがいいものだから、いずれ自分も彼のように広い背中やしなる肉体、つまり理想的な男らしい男になれるだろうと高をくくっているのだが、僕はもうじき二十歳になるという割には、どうも未だ少年じみた体格をしている気がする。まるで兄さんのそれが日々の鍛錬の賜物であることを、僕に言いたいみたいに。

「まま、おひとつどうぞ。……ん、俺の腕に何かついてますか？」

飲み物を僕に手渡そうとするカイトの腕の辺りを僕がひたすら凝視していたのは、それほど僕らの筋力に違いなどないはずだと、せめて信じようとしていたところだったからだ。
痩せっぽちなどという形容からはまさか程遠いはずだが、しかし少なくとも僕の身体は手練の騎士連中がそうであるような、がっしりとして、目に見えて筋肉が隆起している身体ではない。
つまりもし僕の現状を肯定的に表現するとすれば、いずれ確実に男らしく力強い肉体になることを、潜在的に秘めている状態ということなのだ。だから僕は断じてひ弱ではないし、頼りないわけでもない。今だって十分に男らしいということになるだろう。

「あ、いや……。
ねえカイト、君は武芸の訓練をだいたい何日おきくらいにやってるんだ？」
「何日おきって、それは毎日ですよ」
「ああ、そう……あ、でも僕の執務の日は？　君も一日執務室にいるじゃないか」
「夜やってます」
「知ってたさ」

僕はばつが悪いのを知られたくないので、間髪入れずに両手を広げてみせた。
何しろ執務は僕が主体であることと比較して、カイトのやっていることは所詮手伝いみたいなものなんだから、疲労度というものが違うわけだ。

「僕は寝る前に経済書を読んでいるよ。兄さんのお古や……それに最新のやつをね。これは何？」

僕は急いで話題を変えるために、さもカイトの手の中のグラスに興味があるようなふりをした。

「酒ですよ。蒸留酒です」

カイトは答えた。
確かに、差し出されたグラスの中には透明な液体とミントの葉が入っていた。

「少し辛口かも。アレックス様、大丈夫ですかね」
「莫迦にするな」

カイトがこれ以上僕を気弱な少年扱いするといけないので、僕はそれをひったくると強気に口に流し込んだ。不純物の味と香りが鼻と喉を通り、安い酒であることはすぐに分かったが、そのとき僕の心は強く逞しい男そのものだったので、そんなことに構ってみせるよりはそのまま一気に飲み干して、そのことを彼にも証明する必要があった。

「おお、いけますね」

カイトは僕の気持ちを知らずか、素直な調子で喝采した。

「当然だよ。僕は大人の男だからね。それに騎士なんだ。今はちょっと……休業してるだけのことで」

僕が言うと、カイトは次にはやや含みのある笑いを浮かべた。

「ああ、なるほど。ここへいらして、若い騎士連中をご覧になって、さっそく触発されたってわけですか」

「ち、違う。何だよ、偉そうに。分かったようなことを言うな」

「そりゃすみません、お気に障りましたようで。

でも、確かに貴方はその気になればかなりいい線いくと思うんですよ。背丈があるし、腕も長い。それに閣下を見る限りでは、貴方も体質的に筋肉がつきやすいかもしれないですしね。古くからの騎士家系なんですから、素質は充分ってわけです」

「う、うん。そうなんだ」

カイトはなかなかいいことを言うと思い、僕は頷いた。

それから僕らは並んで椅子に腰かけ、取り留めのない話をした。カイトが話すのは相変わらずの幾つかのゴシップ、最近ジェシカにつき纏っている男がいるらしいとか、家令が銀食器の数が足りないと

騒いでいたエピソードのこととか、秘書官のロビンの話。それから酒の種類、今年の国内産のワインの出来、いま飲んでいる蒸留酒の原材料である穀物の相場のこと。だいたいはカイトが話題を提供していた。

カイトはエステルがうんざりしていたような僕の話を、タティほど楽しそうでも喜んでもくれないが一応は聞く耳を持ってくれるほうだ。でも、どちらかと言えば彼は自分がしゃべりたい人間であるようだった。

その点、僕は聞き役でも別に構わないし、そっちのほうが次に何を話すべきかいろいろ考えなくていいので、そのほうが楽だったのでそうしていた。

第３５話　古き善き保守主義（１）

僕らの眼前に広がる室内はオレンジ色で薄暗く、いつしか部屋の中央にある巨大な暖炉の前には多くの人々が集まっていた。家族でもない男女が夜遅くまで時間を共有し、お互いの気持ちを探りあうような場面がときどき見られていたが、気安く話している彼らを見ていると苛々してくるのは、何も下っ端の騎士のくせに女性と仲よくしていることを、妬ましいと思っているからじゃないんだ。

連中は手に手にカードを持って、何かのゲームに興じているらしく、一応僕も声をかけられはしたが、ルールもよく分からないゲームに参加するのはごめんだったので断った。この場でもし僕が負けることがあれば、兄さんの面子に係わるなんてカイトには言い訳をしたが、本当は女の人の前で恥をかいたり、よく知りもしない人たちと、否が応にも口を聞かなければならない状況というのが嫌だったからだ。

カイトは笑って同意し、閣下の名誉は守らなければなんて頷いていたが、あの様子ではたぶん本当のところは分かってしまっていただろう。

次々と話しかけてくる女の人たちを、愛想笑いを浮かべるだけで徹底的に無視したのは単に恥ずかしいからで、彼女たちが使用人であることを差別したわけじゃなかった。本当はものすごく話してみたいんだということを言い出せないだけだったが、彼女たちは辛抱強く僕のことを待ってはくれず、僕は何度もその後姿を目で追うことになってしまった。

女の人っていうのは、みんなタティみたいにおっとりしているものとばかり思っていたのに、彼女たちはせっかちすぎると僕は思った。きっと後になって、仕事の合間にでも、僕がたいそういけ好かない気取り屋だなんて話を、得意の早口で噂しあうつもりなんだろう。

「いやいや、ありゃアレックス様が迷惑がっていると思ったんですよ。そうやって黙り込んでうつむいているんじゃ、取りつく島が…、んー、何でもいいから髪型を褒めるとか、口紅の色を褒めるとかどうです。でなきゃいっそ相手を女だなんて思わないで話すとか」

カイトが横で何か言っていたが、まともな男なら、名前も知らないような女性相手にそんなその場凌ぎの軽薄なことを言えるはずもない。

ほんの少しの間に、僕は完全にカイト以外の人間から孤立することになったが、こんなことはいつものことだった。余程気心が知れているか、気の利いた大人でもなければ、僕の相手をするなんてことはできることではないんだ。

すぐそこのテーブルではこの建物の厨房で拵えたらしい山盛りの料理や、市街で買ってきたのであろう食事が次々と振る舞われていた。湯気を上げているトマトリゾットについては美味しそうだと思わないではなかったが、先刻無作法な輩が自分のスプーンを大鍋に突っ込んで味見したのを見たので、食べたいという気持ちは既に消え失せていた。

無秩序であるとまでは言わないにしても、この場は兄さんの開く上品なパーティーとはかけ離れていて、パーティーとも呼べないような代物だと思っていた。音楽と言えば誰かの下手糞な演奏だったし、上質の招待客の機知に富んだ振る舞いや感心の気遣いが見られることもなければ、給仕係もいない。もっとも居城で給仕係をやっている娘たちなどが参加しているパーティーなのだから、他に給仕係がいるわけもないのだが。

あちこちで、大声で話してははしゃいでいる喧騒が鬱陶しく、彼らの若さと教養のなさが時間を追うごとに露呈していくのが分かった。半刻だけここにいて、それでなじめなければ帰ろうと僕は考えていたが、恐らくそういうことになりそうな気がしていた。

それにこの場にいる娘たちの中には、全員ではないにしても何とも

慎み深さのない服装をしているのがいて、僕は戸惑っていた。もうじき冬であるにも係わらず肌を露わにし、似合いもしない化粧をし、振る舞いもあけすけでまるで町の女みたいに下品だった。
若い女の人っていうのは多少容姿がどうであれ無条件に可愛いものなのに、どうしてああいう余計な色仕掛けをしたがるのか僕には分からなかった。あんなことをしても、わざわざ自分の価値を下げるだけで、いいことなんか何もない。もし自分を娼婦と勘違いされたくないのなら、女の人はお淑やかにしているほうがずっと有益で、しかも安全なのだ。
そのことを僕が言うと、僕の隣で可笑しそうにカイトは言った。

「まったく貴方は頭が堅いんだから、困ったものですね。まだお若いうちからそんなに真面目にしていたら、年を取ったら貴方っていうのはどれほどの頑固者になってしまうんでしょう」

二杯目の酒を飲み終えてしまってから、僕はむっとしてカイトに目を向けた。
その酒は琥珀色をしていて、先ほどの酒よりアルコールがずっと強かったが、甘かったのでかえって飲みやすかった。

「真面目だって？　何言ってるんだ、僕はまっとうな人間なら、当たり前に感じることを言ったまでだよ」
「当たり前ねえ」
「そうさ。結婚した女の人が、夫と一緒に出かけるっていうならまだ話は分かるけど、女の人が夜に一人で出歩くものじゃない」
「ま、確かに正論ですが」

カイトは僕を横目で見ながら小さく笑った。彼は僕のことを頑固者だなんて言うが、カイトのほうこそ真面目ぶった髪型をしているせいか、それとも顔立ちのせいなのか、僕なんかよりよっぽど気難し

そうな風貌をしていると思った。

「貴方も最近は、微妙に言うことが閣下に似てきましたよね。まあ、これは前から感じていたことではあるんですが、近頃はつとに」

「まさか。どうして僕が兄さんみたいな差別主義者と似ているって言うんだ。これは兄さんが言っていることとは全然違うよ。兄さんは、女は自動的に男に傅くべきだという乱暴な考え方だ。でも僕は、単に常識を言っているんだ」

「まあ、俺もどっちかって言えば保守的な考え方の人間かもしれないから、おっしゃることに異論はないですけど。でもアレックス様が言っていると、何やら可笑しくて」

「何だよ。僕が言うと、何か可笑しいのか？」

僕が聞くと、カイトは笑って頷いた。

「ええ、だってほんのこの間まではタティと一緒になって真剣に押し花やらクッキー作りやらしていた人がですよ。ここへきて女は慎ましくしろだなんて、貴方はなかなかジョークのセンスがおありになる」

そしてカイトは拳を口許に持っていき、笑いを堪えているような仕草をした。ときどき兄さんが僕に呆れているときなどにやっているような、そういう笑い方だった。

「何だよおまえ、なんか上から物を言ってないか？　でも僕だっていろいろ言うさ。女について、考えていることだってあるんだ。

それにこういう考え方を、何もつい最近身につけたわけじゃない。僕は物心ついた頃からこうだったよ。君は気がつかなかったかもしれないけど、だって僕は男なんだからね」

「確かに、傾向としてはありましたけどもね」

そしてカイトは慣れた様子でグラスを口に運んだ。

おちゃらけていないときのカイトが、どうも僕より精神的に成熟しているということを、今夜はいやに思い知らされていて僕は焦りを感じていた。彼はもしかしたら、僕と打ち解けるために三枚目のふりをしているだけで、実はとんでもなくしっかりした大人なんじゃないだろうか？

それで僕は何とか精神的優位に立ちたいために、以前兄さんが踏ん反り返って言っていたことをそのまま言いなぞってみた。

「いいかいカイト、女っていうのは、処女がいちばんなんだ」

それにカイトは同意した。

「それはまあ、男なら誰しも思うでしょう。できることなら、妻にするのは処女がいいってね。

だからタティみたいな貴族の娘は、結婚するまで純潔であることが義務なんですよ。将来、それなりの地位のある夫を得る見込みのある娘はみんなそうですね。さもないと、夫の顔に泥を塗ることになる。ですから、アレックス様のその願いは叶うと思いますよ。

しかしここにいるような平民の娘の間には、それほど堅苦しいルールなんかないんだそうです。特に昨今のあまり信心深くない娘たちなんかはね。だからこういう場では、みんな楽しくやっているんですよ」

第３６話　古き善き保守主義（２）

そしてカイトは周囲に視線を巡らせ、今夜のこの集まりを僕に認めさせようとでもいうのだろう、冗談めかして再び僕に微笑みかけた。

「で、おまえはいつも女がみつからないなんて泣き言を言っているくせに、実際はこういった場に乗じているわけか。どうせお得意のおしゃべりで上手いこと言って、適当な相手と遊んでいるんだろう？いつもは僕のレベルに合わせて、くだらないことを言っているってだけで」

僕が眉を顰めると、カイトは頭を振った。

「乗じるにも、男の絶対数が多い以上、話術だけじゃ心許ないですよ。俺の場合は身分も借り物だから、引け目があるし……顔だって、ご覧の通りですしね。
それに俺も、女としゃべること自体どうも気後れしちまって……だから口説けないんですよ。すいませんね」

「へえ、日頃あれだけおしゃべりなくせに？」

「ま、そうです。それにどうせ、俺は不細工なご令嬢と結婚しなけりゃいけないんでね。言うなれば首輪をつけられた犬みたいなもので、我ながら惨めなもんですよ」

「ウェブスター男爵の娘は、幾つなんだ？」

単純な好奇心から僕はたずねた。

「アレックス様と同い年かな。うん、確か今年二十歳におなりだったはず」

「なんだ、じゃあもう問題なしに結婚できるじゃないか。僕はまた、

君より随分年下なんだろうと思っていたよ。だからまだ結婚できないものとばかり考えていた」
「頭の中はお子様ですよ。お嬢様は男爵様に、甘やかしに甘やかされていますからね」
そう言うカイトの口調や表情が、あまり好意的でないことは僕にもすぐに分かった。
自分を散々殴っていたという男の娘に愛情を持てと言われてもそれは難しいものなのだろうが、カイトの表情は彼らしくなくどこか冷めていて、冷淡ですらあった。
「だからまあ、結婚するのはもっと後になってから……」
「余程不細工なのか？」
僕がたずねると、カイトはまた少し笑った。
「いえ。美人なんじゃないでしょうかね、恐らく一般的には」
「なのに不細工呼ばわりするのは、照れているのか？」
「いえいえ」
「その人と、本当のところ結婚したくないのか？」
「世の中に、結婚したい男なんて果たしてどれだけいますかね？」
「僕はしたい」
たずね返されたので僕が断言すると、カイトは軽く唇を曲げた。
「そいつは、貴方は特殊なんですよ。
それでアレックス様、貴方は本気でタティと結婚するおつもりなんですか？」
「そうだよ」

僕が頷くと、カイトは冷やかしの視線を僕に向けた。

「ああ、ほら貴方、本当はやっぱりタティに関心あるんじゃないですか。関心ないなんて言って、まったく素直じゃないですね。もしかするとアレックス様は、自分が気に入った女性には、冷たくしてしまうタイプなのかもしれないですね」

「違う。カイト、そういうふうに僕を定義づけするような言い方はすごく不愉快だ。僕は君が思っているような人間じゃない。それに、これでもタティにはすごく気を遣っているつもりなんだ」

「それは分かりますが、ただ何にしても、あんまり意地は張らないほうがいいと思いますよ。少なくとも俺が見ている限りでは、あの料理人の一件以来、ほとんど貴方が一方的に彼女に冷たく当たっている感じでしたからねえ。可哀想に、しまいにゃタティだって萎縮しちまうでしょうよ。いつまでもそんなことをしていたんじゃ、纏まる話も、纏まらなくなっちまう」

カイトに上手く話をはぐらかされたばかりでなく、思いがけずタティのことまで持ち出されて、僕は悔しくなってとうとう歯噛みした。

「何だよっ、分かったようなことを言って、嫌な奴だな。おまえの言い分じゃ、まるで僕がタティとあの料理人の仲に僻んで、タティに意地悪していたみたいじゃないか。でも事実はそうじゃないって、おまえだって知っているはずだ。僕はタティと結婚することを兄さんに承諾させた上に、婚約指輪まで用意しているんだから」

「おや、俺はただタティと結婚するおつもりなのかと質問をしただけのことですよ。腹が立つってことは、事実を言い当てられたからだったりしてね」

「引っかけたじゃないか。それに余計なことまで言った」

「ええ、少しね」

「ああっ、なんか普段と態度が違うな。なんか調子が狂うよ。だいたい、おまえの結婚相手の話のはずが、どうして話題がすり替わっているんだ？

この話題、あまり触れて欲しくないってことなのか？」

するとカイトははぐらかすような感じで頷いた。

「ええ、まあできることなら」

「もしかして、他に好きな女がいるとか」

思いつきで適当に言ってみると、カイトの表情が微かに動いたので、僕は心の中でそれが理由かと納得した。

「どんな女だ？　僕が知っている女性なのか？」

カイトの私生活には、僕にしては今夜は珍しく興味が湧いていることもあって、身を乗り出してでも聞きだそうとした。

いつもは聞いていないことまでしゃべりまくる上に、自分の酷い生い立ちすら他人事のように笑って話せるような男が、どうして自分の恋愛話となるとこういう反応になるのか、人間の心理を考察する意味でもこれは非常に興味深いことだったからだ。

そこで僕は、カイトの意中の女や、なぜ彼女のことを隠したがるのかということについて聞き出したいと思い、それを白状させるべく彼に迫ったが、それに割り込むようにカイトの友人らしい人間たちが僕とカイトの前にやって来て次々に僕に挨拶をした。

するとカイトの奴はこれ幸いと彼らを僕に紹介し始め、そのまま僕は連中と社交辞令的な会話を交わすはめになり、カイトの意中の女について追求する機会を失った。

僕は不満だったし、それにカイトが好きな女というのがもしタティ

だったらと思うと不安で仕方なかったが、それを察したらしいカイトが話の途中で僕にこう耳打ちした。

「誓ってタティじゃないですから、どうぞご安心を」

第37話　誘惑の夜（1）

四杯目の酒を飲み始めている頃、僕に対して物怖じをせず、また恐縮することもせずに寄ってきて、親しげに微笑みかけてくれる女性がいた。

他の人々は遠巻きに僕を見ていることはあっても、僕が少しばかり煩そうにしていたせいもあるのかもしれないが、もうあまり近寄ってさえ来なかったので、僕は本当にもう帰ろうかと思っていたところだった。

それなのに腰をあげずに四杯目の酒をカイトに持って来させたのは、実は若い連中がたくさんいる、夜の片隅にいるっていうつまらないことが、思っていたよりもずっと心が躍ることだと感じ始めていたからだった。

僕には友人はカイトだけだったけど、何となくこの場所に対して、奇妙な帰属意識みたいなものを持ち始めていたと言えば果たして適切だろうか。

「またお会いしましたわね、アレックス様」

「あっ、エステル……」

その女性は金色の長い髪を揺らして、僕に近づき、そっと僕の隣に腰を下ろした。それを見計らうように、カイトが僕の側から立ち去って行った。僕は慌てて彼を引き止めようとしたが、それを阻むようにエステルが僕の腕を引っ張り、僕の顔に顔を近づけた。真っ直ぐに僕に向けられた彼女の瞳と、好意的な笑顔が、悔しいけど僕は可愛いと思ってしまった。

見つめあう目を急いでそらしたが、僕のそんな様子を見てエステルが唇を綻ばせたのが分かった。僕らの関係はいつもだいたいこんな感じで、僕はどうもエステルに強気に出られなかった。

シェアの瞳の色は綺麗なはしばみ色をしていたのだが、考えてみるとエステルの瞳はそれに近い色をしているせいなのかもしれなかった。

「アレックス様、お食事はなさったのですか？　何か持って来ましょうか。何も食べないでお酒を飲むと……、貴方、あまりお強いわけじゃなかったはず」

「う、うん、いや、いいよ」

「そんなこと言って、もう酔っていらっしゃるみたい」

「全然酔ってないよ。大丈夫」

「本当かしら。油断してると、またキスしちゃうかも。出会ったときみたいに」

そしてエステルは膝を寄せて僕を仰いだ。ぴったり身体を寄せてくるのが、どういうつもりなのか分からなかった僕は、自分の身体をずらして彼女から少し離れた。エステルはすぐに不満そうな顔をしたが、僕は取り合わなかった。

「そんなに嫌がらなくてもいいのに。わたしのことがお嫌い？」

「い、嫌がってるわけじゃないよ。嫌いってわけじゃ……、そんなことより君、こんなところで何してるの？　あの、こんなところにいることが兄さんに知れたら……、お怒りを買うよ……」

するとエステルはきょとんとした顔をし、何回か瞬きをして、それから笑って僕を見た。

「伯爵様となら、もう終わりました」

「えっ？」

「本当に、わたしも驚いちゃうくらいあっさり。二週間くらい前だ

ったかしら、あの方のお部屋で、本日を限りに関係を終了させることにする、なんて堅苦しく言われちゃいましたの。
呆気に取られていたら、これまで自分につきあってくれた報酬だとおっしゃって、すごい額の小切手をくださったの。それがもう、サウスメープル市のあの気取った一等地に、家が買えちゃいそうな金額なのよ！」
「それで君は……、納得したのかい？」

金で清算して関係を終わらせるというのは、兄さんにしてみれば後腐れを持ちたくないことや、兄さんなりに彼女の今後の生活を思ってのことなんだろう。
女の人が、もしその後結婚をしないで暮らしていくことになった場合、自分で生きていくのはとても大変なことだ。だからこれを好意的に考えるなら、彼女が一生暮らしていくのに充分な金を渡してあげているんだと思うが、でも僕は前から、この行為がどうも買春めいているようで、疑問を拭い切れないことでもあった。女の人を明らかに馬鹿にしているとでも言ったらいいだろうか。
しかし僕の懸念とは裏腹に、エステルはまるで素晴らしい幸運を手にしたかのような、ご機嫌な様子でこう言ったのだった。

「くれるっておっしゃるなら、貰っておこうと思ったの。
そうすればこれからはずっと楽に暮らして行けるし、お金持ちの仲間入りができるもの。
今だから言ってしまいますけど、本当は少し玉の輿を狙っていたの……わたし、若いし、それに巷ではこれでもかなりの美人だって言われてて。実際、伯爵様のパーティーなんかで見かけた貴族のお嬢さん方なんかより、わたしのほうがずっとずっと可愛かったわ。
今だって、この集まりの中でわたしがいちばんの美人だって、お思いになるでしょ？
でも……、美人なだけでは伯爵様はわたしを選んでくださらない。

おつきあいの終盤のギルバート様の無関心な、あの冷ややかな感じを見ていたら、これはもう、無理だなって。

本当は、お別れしたくないですって、泣こうと思ったんですよ。だってわたしはいつも可愛らしくしていたし、お行儀よくしていたわ。いつもきちんと、伯爵様が望む通りにしていたんです。それなのにいったい何がいけないのか、全然分からないんですもの。

でもひとつだけ分かっちゃったことは、これ以上押したら、きっと怒り出してわたしが困った立場になるってこと……。だから、だから……」

それまで笑っていたと思ったエステルが、今度は急に泣き顔になった。それで僕は慌てて彼女をフォローした。

「な、泣かないで。ほら、こんなところで泣いたら、大勢見てるよ」

「いいえ、今夜はどうか泣かせてくださいっ。これでも、結構、本気だったんですよ」

「うん、そうだったんだろうね」

「夏のパーティーでお見かけしたとき、初めて目の当たりにした噂の伯爵様は、お美しいだけじゃなくて、ときどき寂しそうなお顔をされていて目が離せなかったの。いつも大勢に囲まれて、あれだけ強気な方が、まさかパーティーの最中にあんなに寂しそうなお顔を覗かせていたんですもの。

わたし、なんて切ないお顔をされるんだろうって思って……。だからわたし、あの方を助けてあげたいと思ったんです。どうにかあの方の孤独を癒してあげたい、誰にも理解されていないあの方の寂しさを、わたしが助けて、支えになって差し上げたいって」

僕は正直に言うと、それが一度は恋人だったことのある僕に対して話す内容なのかと、エステルに苦情を言いたい気分だった。タティといいエステルといい、他の男に対する思慕をなぜ僕に見せつける

必要があるんだろう。
だけどエステルは僕の悪い気分なんてお構いなしに、ひたすらしゃべり続けていた。

「だけど、だけどねアレックス様、わたしと同じように考えている女が、まさかあんなにたくさんいるなんて思わなかったわ……！わたしだけが彼の孤独に気づいていて、彼を理解しているって思っていたのに、同じことを考えている女があんなに、あんなにわんさかいるんですよ。それも恋人の座を射止めた人たちだけじゃなくて、他にも取り巻きの女がたくさん！
本当はちっとも寂しがる環境なんかじゃないくせに、それならどうしてあんな寂しそうな顔をしているのよ。まるで詐欺だと思ったわ。ギルバート様は、根っからの女ったらしだと分かったときにはもう遅かったわ。
わたしの気持ちは弄ばれ、酷い男に夢中にされて。気まぐれで、強引で、意地悪で、だけどきっと冷たいと思っていたらとっても優しくしてくれて……、あの方は本当にひどい女ったらし！
いきなり忘れろってお金を渡されたって、納得できるわけないじゃないですか。わたしを本気にさせておいて、あの方は涼しい顔をしているのに、もう憎むこともできないのよ。
こんなに好きなのに……、どうして忘れられるって言うの？
ねえアレックス様、わたし、どうしたらいいの？
こうやって無理やり元気にしているけど、本当はすっごくつらいんですからあっ」

第３８話　誘惑の夜（２）

そしてエステルは僕の胸にしがみついて、勝手にわあわあ泣き出した。僕は困って、おろおろ取り乱して、それから取り合えず彼女を落ち着かせてあげようと、彼女の頭を撫でてあげた。

勝手なエステルは子供みたいにしばらく泣き続け、僕は周りの連中に、まるで僕が彼女を泣かせているみたいに取られていやしないかということを心配していたが、周囲の視線からもはやそれが逃れようのないことだと知ると、諦めて手の中に残っていた赤い酒を全部煽った。

触れている彼女の金色の髪はとても綺麗で、手触りがよく、僕にシェアを思い起こさせて少し切なかった。

エステルは、僕がエステルのことを好きだったことがあるということを、まったく忘れてしまっているみたいに自分が兄さんのことをどれだけ好きだったかをしゃべり続けた。にもかかわらず、僕はやっぱりエステルに対して怒ることができなかった。

だって、彼女はとても可愛くて、とてもシェアに似ているんだ。

それにエステルの手はびっくりするくらい小さい手で、女の人の手足が男より小さいことは僕だって知っているけど、でも彼女のそれは本当に小さかった。そんな小さな手で、僕の腕やなんかにぎゅっとしているのは、なかなか男として保護欲をくすぐられたりもした。

気がつくと周りの人々は完全にそれまで通りの夜の時間を過ごし始めていて、僕はいつの間にかこの特別な夜の空間になじんでいた。

「あらら、懐かれちゃって。ああ、閣下と終わったんですか。馬鹿らしいほど結末は見えていたとはいえ、そりゃお気の毒にねえ。そのガッツは評価しますよ」

カイトは再び僕の側に来てくだらないことを言い、ついでに僕とエ

ステルの分の食べ物や飲み物を持って来てくれた。
エステルは何人かの友人と一緒にこの集まりに、半ば自棄になって参加していたそうで、タティのことで自棄になりかけていた僕とくしくも同じ心境を味わっていたことを知った。
好きな相手が自分のことをまるで想ってくれない悲劇的な状況について話し合うほど僕はエステルに心を許していなかったが、悲惨な連帯感はひととき僕らを結びつけ、夜半をまわる頃には僕らはいつの間にか楽しくおしゃべりをしていた。
僕は何だか呂律がまわらないくらい酔っ払っていて、しかもここのところないくらいご機嫌だった。
僕らはたぶん流行の服について話をし、僕が繊維の種類について話そうとすると、エステルは僕の口にチョコレートを放り込んで黙らせた。僕にそんな無礼なことをする人間を僕は知らなかったが、彼女の悪戯っぽさはこなれていて、許して貰えることが当然のように媚びた瞬きをして僕を見上げる仕草が可愛かったし、それも何だか楽しかった。
エステルのペースに巻き込まれていることは分かっていたけど、彼女は性格はともかく外見がシェアに似ていて、そんな女性に親しく甘えられるっていうのは、それはなかなか気分がいいことだった。
だから、たぶんその夜の気分は上々だった。

「わたし、貴方の目が好きなの」
「目……？」
「そうよ。誠実そうで、それにとっても優しそうで。ねえ、なんて綺麗なのかしら。青空。スカイブルー。でも優しそうだけど、ときどきちょっとだけ迫力があって……」

「そう、そうなんだ。僕は昔、完璧な金髪碧眼だったのに、髪の色が途中から……成長途中で綺麗な金髪じゃなくなっちゃったんだよ。そのことを、兄さんがすごくがっかりしてたんだ。ああ、アレックス、何てことだなんて言ってさ」

「貴方のお兄様は貴方に構いすぎね……、男色なんじゃないかって思うくらい」

「甘い言葉……？」

飲み物がずっと酒だったせいか、僕はときどき記憶が途切れてしまっているくらい酔っていた。僕の唇に指先を這わせて、甘い言葉をしきりにねだるエステルに、僕はそんなことを言っていたことを微かに憶えていた。

「ああ、ええと……愛してる。愛してるよ……」

「だめ、そんなんじゃ……。もっとちゃんとおっしゃって、アレックス様……」

「愛してる……」

「だめ……ちゃんと考えて」

「だって……、思いつかないよ。それにあまり頭がまわらない。だって……」

僕はそこが何処であるのかをはっきりと思い出すことができなかったが、薄暗く、埃っぽくて、狭苦しい部屋だった。それで、僕はその部屋の寝台の上でエステルとキスをしていた。キスをしていたから甘い言葉なんか言えるはずがないということを、僕は考えていた。だって唇が塞がっているんだから、おしゃべりなんかできないんだ。

「言ってくれなくちゃいや、でないと……あっ」

ああ、それにそれだけではなくて、僕はエステルと全裸に近い格好

で、何だか絡み合っていた。僕は彼女の脚を持ち上げて、何をしているのかは、決まっていたが、僕は一度も経験がなかった割には、上手くできていたと思う。エステルは僕の下で可愛い喘ぎ声を出していたし、僕は征服欲を満たしていた。

ただ、何て言うか、甘い言葉を言えっていうのが、煩かったと思っていた。

集中できなくて、煩いと……。

そんなこと言えるわけない、だって僕はエステルのことを好きなわけじゃないんだから。

確かに前は好きだったと思うけど、今はそれほどでもない。ただ彼女はシェアに似ていて、だから、性行為をさせてくれると言われたら断る理由が……。

え？　僕は本気か？

僕は好きな人にしかそういうことをしたくないと思っていたのに……。

愛してるって言葉だって、好きな人にしか……。

第３９話　当惑の朝

いつか神学の教師が言っていた。
誰の人生にもひとつずつ、真実の愛が用意されているものなのだと。
我が国の国教たる太陽神は、常に正義と公平と愛を重んじ――、それなのに現在のこの王国においては、神聖なる神の教えが捻じ曲げられていることを神父である彼は酷く悲しんでいた。
裕福な男はさして悪びれもせずに愛人を囲い、有閑貴族たちは夜な夜な酒宴と乱交を繰り返す。夫に貞節を尽くすべく教えられた大切な娘たちの犠牲であるかのごとく、貧しき娘たちの貞操は野辺の花よりもあっけなく踏み躙られていく。
僕は嘆かわしくも風紀の乱れたこの風潮をとても嫌っていたはずだ、それで僕は生涯の伴侶以外の女性と関係を持つべきではないと考えていた。確かにそうした考え方は、男の多くには受け入れられないことだろう、少なくとも進んでそうした堅実な思想を打ち明けることには誰しも抵抗があるはずだ、特に自らの若い体力を信じている血気盛んな時代を生きている男たちの間には。
けれども僕はそうじゃなかった……、そりゃあ僕は神学の教師が期待していたほどには敬虔な人間ではなかった、経典を諳んじることができるわけでも、神聖魔法を扱えるわけでもない。完全に肉食を断つわけでも清貧をよしとする人生でもなかった、それでも、関係した女性の数を自慢しあうような連中を心底下劣だと感じているほどにはまっとうな人間であるはずだった。
それなのに僕の人生は一夜にして一転してしまった。
奇しくも男性としてこの世に生まれた者たちが生涯闘い続けなくてはならないこの意味のある闘争に、僕はあえなく敗北を喫したのだ。
この罪悪を語るのに世間や良識を引っ張り出すまでもない、自分自身を裏切ったことに対するこの失望感たるや計り知れず……、もしこの世界に本当に愛というものが存在すると言うなら、それは僕の

しでかしたことを決して許さないだろう――。

その証拠に、翌朝目覚めた僕は、意識が戻ると同時にさっそく酷い頭痛に見舞われていた。

「おはようございますアレックス様。ゆうべはお楽しみでいらしたようですね。
いやあ、ベッドを汚してくださって、持つべきものは清く正しいご主人様ですよねえ」

寝台に気だるい身体を投げ出して、いまいち現実感のない奇妙な感覚を味わっている僕に向かって、カイトがあからさまに含みのある笑いを投げかけていた。
視線を巡らせるとそこは知らない天上で、僕は知らない部屋の知らない寝台の上で、裸で毛布に包まっていた。

「カ、カイト……」

自分が全裸であることに改めて気づいた僕は、毛布を被ったまま慌てて飛び起きて、途方に暮れた気持ちで寝台の脇に控えているカイトを見上げた。

「こ、これはね、あの……その……」

すると彼はニヤニヤして、さっそく僕をからかった。
現実は斯くも無情、せめてすべてをなかったことであるかのごとく

振る舞うには、僕は目覚めるのが少々遅すぎたようだった。

「いやはや、今更純情ぶらなくたっていいじゃないですか。貴方がむっつりなことは、俺は前から分かってましたよん」

「うっ…。エ、エステルは……？」

「仕事があるからって早朝帰りましたよ。家業の手伝いがあるとかで」

「あ、ああ、そう……」

エステルがもうこの場にいないことに心から安心した僕は、まさしく最低な男の標本となることができるだろう。

何しろ僕は彼女を愛してない。確かに可愛いとは思うけど、彼女のいちばん魅力的なところは何処かと言えば、外見がシェアに似ているところという、本当にどうしようもなく失礼な事実の認識を、僕は今更ながらに確かめていた。

自分の気持ちをこれ以上分析するのが恐いので今はまだそうすることができないが、昨夜のことは、要はタティが相手にしてくれないことで気持ちが荒んでいて、鬱憤を晴らせるなら誰でもよかったといったところだったのだろう。

エステルのほうでも、兄さんと別れることになって、たぶん同じような気分だったと信じたいが……、気軽に他の男と寝るような真似をする女を兄さんがどれほど嫌いかを知らないわけではないだろうに、彼女もそこのところは分かっていそうなものなのに、失恋の痛手で自分を見失っていたということなのだろうか。

カイトはそんな僕を更にからかうべく、しばらく待ち構えていた様子だったが、やがて僕が気落ちしていることに気づいたのだろう。

今度は騒がしくも切実な様子で僕を羨ましがり始めた。

相手を持ち上げるために必要以上に自分を貶めるのは彼の悪い癖だと思った。日常的に虐待を加えてくる彼の養父の機嫌を取るために、カイトはそうやって涙ぐましい努力を続けていたのだろうか。

こういう鬱陶しいことが、カイトなりの気遣いなのだと分かってしまうと、僕は腹を立てる代わりに何だか泣きたくなった。

「はああ、二十歳を目前に。いいなあっ、いいなあっ。
それに引き換えアレックス様、俺が幾つだか知っていますか？　もうだいぶ前から二十二なんですよっ！
それなのに未だに女を知らないなんて……。
で、アレックス様。やっぱりあれっていうのは、気持ちいいものなんですか？　どうでした、気持ちよかったですか？」
「……、そんなこと言えない」
「いいじゃないですかっ、教えてくださいよおっ」
「カイト……、君は下品すぎる」
「ああっ、いいなあっ。いいなあっ」
「カイト……」
「いいなあっ」
「タティに……」
「いいなあっ、んん？」
「タティにだけはこのことを絶対、絶対言わないって誓ってくれないか……」
「ええ？　何でまた。アレックス様は、彼女にもう関心ないんでしょ？」
「……そ、そうさ。だけどほら、可哀想だから……」
「可哀想？　ふむ、タティがですか？　それとも童貞な俺がですか？」
「……僕がだよ。僕が……、だって、もし僕がこんな軽率で簡単なスケベ男だってタティに知られたら、僕はもう死んじゃうしかないだろう……」

第４０話　君を支配したいんだ（１）

エステルと寝てしまった。
ほんの少し前までは、恐ろしいことに兄さんの女性だったエステルと。
兄さんと、いろいろなことを比較されたんじゃないかと思うとそれだけで具合が悪くなりそうだったが、僕は彼女と何も交際をしているわけじゃないし、彼女だってまさか兄さんと交際しておきながら処女だったってことはないんだろうし、もう会わなければさして問題になることもないだろうと、少し薄情なことを考えていたのは何しろあの夜のことを今もって激しく後悔していたからだ。
僕はエステルに対して気持ちがないのに、本当に、とんでもないことをやらかしてしまった……。
酔っていたからなんてことが、言い訳になるだろうか？
いや、ならない。僕ならタティが酔っていたからって他の男と寝たりしたら、きっと発狂してしまうだろう。
冷え込んだ朝の窓辺から差し込む清々しい、あまりに清浄なる光が、一昨日のあの夜を機に汚れてしまった僕の罪深さを僕に思い知らせるのはあまりに容易いことだった。
僕は自分の寝室で両足を布団の中に突っ込んだまま、上半身だけ起こした状態で、そのまま放心していた。
エステルとのことが、何かの間違いであることは確かなのに、どうしたことか何度寝直してみても一向に悪夢から覚める気配がなく、僕は泣きそうだった。まるであの夜の出来事が、違えようのない現実であるかのようなのだ！
やがてノックがして、僕は慌てて布団の中に潜り込んだ。
何故ならば、毎朝僕を起こしに来るっていうのが、だいたいはタティだったからだ。
たまに違う召使いであることもあるので、僕は今朝だけはそうある

ことを願っていた。さもなければ乳母のコンチータに戻って来て欲しかった。とにかく誰でもよかったんだ、タティでさえないならば！

「おはようございます、アレックス様」

だけどあのちょっと間延びしたような、おっとりした声はどうしたってタティのもので、僕は布団を顔までかぶりながら、別にタティと寝たってわけでもないのに心臓が爆発しそうなほど緊張していた。ここのところ、せっかく朝起こしてくれたタティに嫌味を言ったり、朝の挨拶がなかったほど険悪だった自分を、僕は心の底から神様に詫びた。姦淫……いや、そもそも僕たちは結婚さえしていないのだから姦淫も何もないのだったが、でもとにかく僕は彼女にとても悪いことをした気持ちになっていて、自分の最低さ加減が憎かった。それに比べて何人もの女性と同時に交際して、どれだけ女遊びをしても悪びれる様子さえない兄さんの度胸、あれはやはりとんでもないものだったのだ。僕の記憶が確かならば、彼は交際する女性が鉢合わせをすることがあったときにも、まったく動じていなかったように思う。いがみ合う女性たちを、兄さんが顎を撫でながら面白がって見ていたのを、僕は子供心に憶えていた。

そしてあのように、何かあっても居直っているかのようなふてぶてしさを持てないような男は、こういうことはやってはいけなかったのだ。いや、本当は居直るほうが最悪に性質が悪いんだけど……。

「アレックス様？　……今日もまだお休みなのですね……」

タティが、僕のベッドサイドまで近寄って来たのが分かった。布団を頭まで被っている僕は、寝たふりをしていることがタティにばれやしないかという、実際にはばれたって全然構わないことに怯えつつ、何だか呼吸が苦しくなっていた。

「アレックス様……、わたしね……」

タティの気配が、僕の顔のすぐ側まで近づいたのが分かって、僕は息を殺した。

彼女は少しの間黙っていたかと思うと、布団越しに小さくこう囁いた。

「わたし…、貴方のことが大好き……」

僕は嬉しさと恥ずかしさと罪の意識で眩暈がしていた。

僕らは完全に両想いだったのかと思うと、自然と口許に笑みがのぼってくるのだが、次にはタティを裏切った一昨日の夜のことが思い浮かんで、存分に僕を罰した。

もう少し、ほんのもう少しだけ早くタティが僕にそう言ってくれていたら、たとえ酒を飲んでいたとしても僕はエステルとあんなことをしなかったのに、この酷いタイミングの悪さは何なのだと、壁に頭をぶつけて僕は呻いた。

タティはさっき、僕が眠っていると思ってあんなことを言ったんだろうが、それが本心だって言うなら、どうして起きているときにはっきりそう言ってくれないんだろう?

タティがいつ頃から僕のことをそういうふうに思っていたのか知らないが、そうなら、どうしてそのときにすぐそれを僕に伝えてくれなかったんだろう?

彼女さえ最初からそういう大事なことを僕に言ってくれていたら、せめてエステルみたいに好意を態度で示してくれていたら、こういう面倒なことにはならなかったんだ。

「おはようございます、アレックス様」
「おはようございます」
「どうぞこの素晴らしい秋の一日に神のご加護があらんことを」

収まらない胸の動悸をもはや自分で収拾がつけられないことに見切りをつけて、ドキドキしながら着替えを済ませて自室のリビングに行くと、タティが召使いらと一緒にいつも通りの一礼をして僕を出迎えた。必要があるときには、ここにカイトや秘書官のロビン等が加わっていることもあるが、今朝は彼らの姿はない。
だけどいつもと違うのは、タティは誰もが認める美女であるルイーズは勿論、ジェシカよりもエステルよりも、一見ずっとぱっとしない女の子なのに、でも僕の目には彼女の姿は光って見えるということだった。

「アレックス様、伯爵様は昨夜からお出かけで、王都のお邸にご滞在とのことです。
朝食は秋葡萄の間か、それともお部屋にご用意致しましょうか？」

タティが僕の世話係としての、いつも通りの業務を遂行していた。
兄さんが居城をお留守にされたときや、兄さんがご自分のお部屋にお気に入りの女性を泊めた翌朝などには、僕はだいたい自分の部屋に朝食を運ばせていた。

「じゃ、じゃあ、ここに運んでくれる」
「畏まりました」

僕の言葉を受けて、係りの召使いたちがいそいそとリビングを出て行った。僕の起床時に挨拶のために集まっていた他の使用人たちが、それぞれの持ち場に戻り始めていた。

そして僕はリビングの壁際に立って、相変わらずどこかおどおどした態度を取っているタティと、何とか仲直りをしたいと思っていた。でも最近では声をかけてもちっとも微笑って貰えないという些細なことが、もうしばらくの間続いていて、その度に僕は酷いショックを受けていた。だからこの朝もそういうことになったら嫌だと思って、僕は結局タティに声をかけられずに、黙って食事が運ばれて来るテーブルについた。

テーブルの上にはレースがかかっていて、中央には丈を短く切ったノコンギクが飾られていた。

僕は、僕のことが好きだと言ったタティの言葉がとても嬉しかったので、その紫の花を眺めながらそれを反芻して、もうしばらくは心の中でいい気分を味わっていようと思った。

それは穏やかな晩秋の朝だった。朝晩には、そこかしこの山野でそろそろ朝靄が立ち込めているであろうほど気温が下がっていた。僕の部屋のすべての暖炉やストーブには火が入り、いつの間にか周囲の冬支度は万全だった。

タティは、すぐそこの掛け時計の下に立っていて、近くの花瓶の花を直したり、落ち着かないようにときどき大きく深呼吸をしている様子だった。

その様子を、僕がこっそり見つめていて、とっても可愛いと思っていることを、どうして彼女は分からないんだろう?

僕がタティを見るたびに胸をときめかせていることを、なぜ彼女は理解しようとしないのか、僕には分からなかった。僕を好きなら、僕がいつも視線の先にタティを捉えていることを、分からないわけはないはずなのに。

僕は、ここのところずっとタティに冷たくしていたことを静かに後悔していた。確かにタティは僕に対しておどおどしていたが、少なくとも彼女は僕に冷たくしていたわけじゃない。一昨日の夜にカイトが指摘したことは当たっていて、ほとんどは僕のほうが、タティによそよそしくしていたんだ。

僕は、彼女のために婚約指輪を用意しているのに、このままでは渡せる日が来るのはいつになってしまうか分からなかった。
兄さんはタティとの結婚を承諾してくれはしたものの、あれはあのとき恐れを知らないルイーズが、どういうわけか機転を利かせてくれたというのが大きいから、半分以上は兄さんの本意ではないことは分かっていた。だから、いつ兄さんがこのお考えを翻されたとしてもおかしくはないし、そのときはルイーズだって、また僕の味方をしてくれるという保障などないのだ。何しろ彼女は見るからに奔放で、気まぐれな女の見本みたいな姿をしていた。
それを回避するただひとつの方法は、事実を作ってしまうということだった。それは具体的に言えば、兄さんが僕とタティとの結婚を許可するにあたって提示されている条件である、伯爵家を継げる男子をあげるということだ。勿論それだけでは十分ではなく、兄さんが容易にその子を抹殺できないように、その存在を世間に発表してしまうことも必要であるだろう。
でも赤ん坊は、キャベツ畑になるわけじゃないってことを、僕はもう、分かっていた。
一昨日の晩、エステルとしたようなことを、しなければできないものなのだ。
でも困ったことにタティは、そういうことをいかにも不潔だと思っていそうな女の子だった。
兄さんが僕のお妾になれって言ったことを、泣いて嫌がるほどに……。

第４１話　君を支配したいんだ（２）

僕はテーブルに肘をついて、頭を抱え込んだ。
ついさっきまでは何となく気持ちが浮かれていて、物事が万事上手く運びそうな感じがしていたんだけど、何だかそれはあまりに楽観的な現状の捉え方であって、事実はもう少し大変なんじゃないだろうかという考えに僕は再び支配され始めていた。
それにさっきから脳裏にエステルとのことがちらついて、その記憶は小悪魔みたいに僕の気持ちを掻き乱してもいた。
僕は女性を切らさず遊んでいる兄さんのことをあれだけ軽蔑していたくせに、自分もやっぱり女の人と関係を持つことが、たぶん、すごく好きな男なんだっていうことが、あの一件によってはっきり分かってしまったことは、僕にとって悪い意味で衝撃だった……。
いや、はっきり認めてしまうと、僕は前々からたぶん自分はスケベなんだろうと思っていた。何と言ってもあの性欲旺盛な兄さんと血が繋がっているんだし、そうならないほうがおかしいというものだ。
だから、そういう自分がいるってことに、僕だって男なんだから、そりゃあ気がつかないわけじゃなかったんだ。
だけど僕はその男の中でも、きっとものすごくいやらしい部類であるに違いないんだ。
その証拠に、今だって気を抜くと頭の中がそのことでいっぱいになって、自分では本当にどうにもならないほどなんだから。

「あの…、アレックス様、もしよろしければ少し……、お話があるのですけれど……」

頭上からタティの声が降り注ぎ、僕は反射的に自分を恥じた。彼女は未だに性の穢れを知らない清らかな処女であり、その汚れない彼女と比較して、僕は自分の汚らわしさに、何ともいたたまれない気

持ちでゆっくりと顔をあげた。
頬が熱くなっていて、それにそのときはたぶん、とても情けない顔をしていたと思う。

「アレックス様、どうされたのですか？　……お顔が真っ赤だわ。もしかして、お風邪を召されたのではありませんか？」

タティが、まるで僕らがただの乳姉弟だったときみたいにごく自然に僕の額に触れてくれたのが、僕にとっては下心に直結してしまうのが何とも申し訳なかった。

「お熱があるかしら、お待ちくださいね、いまお医者様を呼んで来ますわ」
「いや、待って、違う…、違うんだ」

僕はタティの服の裾を摘んでそれを引き止めた。

「違うんだ、タティ、これはその……何でもないんだ」
「でも」
「仮に熱があったとしたって、平気だよ。僕は兄さんに似て身体が丈夫なんだ。
それより君は何か僕に話があるんじゃないの？　今、何か言いかけなかった？」

僕がたずねると、タティは頷いた。
彼女は胸の前に頼りなさそうに左手を添え、少しの間を置いて、それからこう言った。

「……あの、アレックス様。何か、わたしにお手伝いできることは、ないでしょうか」

「お手伝い？」

僕がたずねると、タティは身を乗り出して更に何度も頷いた。

「はい……あの、わたし、考えたんです。
アレックス様も、最近では立派に執務を任せられるようにだっておなりでしょう？
もうわたしがお側にあっても、あまりアレックス様のお役に立てることがないですし、私は貴方の魔術師にもなれませんでしたし、本当に……役立たずなんです」

僕は、タティが何を言いたいのか分からなかったが、彼女の表情は深刻で、思いつめてさえいた。僕は少なくとも、タティのことを役立たずだなんて思ったことは一度もなかったので、タティの度の過ぎた謙虚さをなだめようとこう答えた。

「そんなことはないよ、僕は……、タティがいてくれて、すごく助かっているよ」

僕はそのとき、もしかしたらタティが乳姉妹という役目を離れたいことを、つまり僕の側から離れたいということを、真剣に僕に相談しているんじゃないかと思って、その意味で内心で慌てていた。
彼女はかつて彼女の母親の仕事だった、僕の私室の管理や僕の生活の世話をする役割を担っているのだが、実際は僕はもう手のかかる子供ではないし、確かにそれは召使い程度で代役のきく内容であることは確かだった。悪く言えば誰だろうと代わりがきく内容だ。
でも僕にしてみれば、僕の世話を焼いてくれるのは、それはやっぱりタティじゃないと困るんだということを、彼女に言いたかった。
けれどもタティはかぶりを振った。

「いいえ、いいえ。わたし、本当に、本当に役立たずなんです。せめてお勉強ができれば、カイト様みたいに、アレックス様の執務のお手伝いができたかもしれませんが、わたしは行政とか、よく分からないし……。お妾でも、アレックス様のお役に立てるなら、いいって……最初はそう思っていたんです。でも……、アレックス様はそれすら必要ないみたいで……」

その言葉を聞いて、僕は一瞬、タティが僕とエステルとのことを知っているんじゃないかと勘ぐって、全身の血が一気に引いていくような酷い感覚がした。

「ひっ、必要ないわけじゃないよ」

僕はさっきとは一転して真っ青になっていることを自覚しながら、うろたえながら僕のテーブルの脇に控えているタティを見上げた。

「で、でもそれはあの、ええと、タティ、落ち着いて。つまり、つまりね、だって君がそういうことは嫌だろうと思っていたんだ。それだけだよ。だから君がいいって言うなら僕は全然……、その……、いつでも歓迎……」

言いながら、また顔や頭がどんどん熱をもってきて、僕はコントロールのきかない自分のことを、もはや持て余していた。それを聞いたタティも赤くなっていたが、彼女はそれでは納得できないというふうに、更にこう続けた。

「で、でもっ、アレックス様、それだけじゃなくて、わたし……貴方の傍で、何か貴方のお手伝いがしたいんです。

何かないでしょうか、執務室でお茶を淹れたり、お掃除したりするだけでもいいですから……。

ずっと一日ここのお部屋の中にいて、アレックス様が夜遅く帰って来たり、帰って来たと思ったらまた何処かにふらっと出かけてしまうのを見送るだけの生活なんて、わたし……、嫌なんです……」

「う、ううん？」

僕はタティが僕と関係を持つことを、別に嫌がっていないらしいということにばかり関心の焦点がいっていて、タティが訴えていることについては半分は右から左へ流れてしまっていた。でも何とか理解するに、要はあんまり僕が自分の部屋に寄りつかないから、最近は一緒に遊ぶこともなくて、やることがないと言いたいのかと、僕は解釈した。

「それは、暇ということ？」

「いえ、そうじゃなくて、わたしも貴方のお役に立ちたいんです、アレックス様」

「お役に立ちたいって……、それは……、ああ、いやそんなわけないよね、ええと、働きたいということ？」

「はいっ、そうです、お傍で……」

「んー」

僕は、兄さんのように女性を見下すようなふうには考えていないが、でも、女の人はあんまり外に出ないで、家の中にいたほうがいいと思うので、タティが言っていることには反対だった。

確かに世の中には、誰がどう見たって外向きな性格の女性もいる。家の中に閉じ込めておいたら、暴れ出しそうな強気なタイプのことだ。でもほとんどの女性はそうではないだろうし、タティは特にそうではなく、それどころか僕よりも人見知りなんだから、どう考えたって家の中にいることが向いているだろう。それに、またあのパ

ーシーみたいな男に、目をつけられてはかなわなかった。

「駄目だよ」

僕は、召使いたちが僕の朝食をテーブルの上に慣れた手つきで用意するのを目で追いながら、タティに答えた。

「タティはここにいて、好きなことをしていたらいいんだ。そっちのほうが、絶対に君のためになるよ。僕の執務室には、いろんな人間が出入りしているよ。ときには柄の悪いようなのが、やって来ることだってある。君は何も苦手なことをしなくたっていい」

「アレックス様……」

「それよりもねタティ、僕も君に大事な話があるんだ」

第４２話　君を支配したいんだ（３）

僕はテーブルの空いている椅子にタティを座るように促した。タティは黙ってそれに従い、僕に向き直った。僕は彼女がどうも不満そうな様子であることは気がかりだったが、でもタティと久しぶりにまともに会話ができていることだし、彼女は僕のことが好きだということが分かった以上、もうこれ以上馬鹿げた距離を取っている理由もないことだし、ここは機会を逃してはいけないと思ったので、思い切ることにした。

「あのね、あの……つまり、僕と結婚して欲しいんだ」

「……え？」

タティは少しの間、僕の言葉を理解できないような表情をしていたが、やがてそれが分かったのだろう。遠慮がちに僕を見た。

「で、で、でも……、そんな」

「本当だよ、僕のお嫁さんになって欲しい」

「でも、伯爵様は……」

「兄さんのことなら心配ない。ちゃんと話はつけたんだ。兄さんは条件つきで、僕らの結婚を認めてくださったよ」

「条件……？」

「うん、男子をあげること」

僕がそう言うと、タティは頭上から湯気をあげるんじゃないかというほど真っ赤になって、視線を彷徨わせた。

確かに自分でも、朝っぱらからなんて会話をしているんだと思わないではなかったので、僕も少し恥ずかしくなって鼻を触った。

でもこれはアディンセル伯爵家にとってとても大事な話なので、取

り敢えず僕は続けた。

「タティも知っていると思うけど、我が国は男子じゃないと家系を継いで行く資格がない。だから、兄さんもこの点だけは譲れないとおっしゃっていた。

これは本当は兄さんがご結婚されていれば、もう少し気楽にもできる話なんだけど、どういうわけか彼はそれを嫌がっているみたいなんだ。結婚することを。事情は分からないんだけど……、たぶん、過去に何か痛い目にあっているんだろうと思う。

だからタティがね、その……僕の赤ちゃんを生んで、その子が男の子だった時点で、兄さんは君を我がアディンセル伯爵家の一員として迎えるという、そういう話なんだ。

タティをお妾のままにしておくなんて嫌だから、僕はこれでも……君のために頑張ったんだよ。

だからそのことを、タティに分かって貰えると嬉しいんだけど……」

僕はそう言って、少し身を屈めてタティの顔を窺ってみた。

ところが彼女はうつむいているばかりでにこりとも笑おうとはしなかった。それどころか、僕と目さえ合わせようとはしなかった。

せっかく勇気を出してプロポーズしたにも係わらず、彼女がちっとも嬉しそうじゃないことが、僕は悲しかった。

タティはさっき寝ている僕に、僕のことを好きだなんて言っていたが、こうなると、あれはパーシーの次にという但し書きが入っているものだったのかもしれない。少なくとも、やっぱり彼女は心のどこかであのさえない男のことを想っているのかもしれないと思うとつらかった。

だけど僕はタティを愛しているし、兄さんにもタティと結婚させて欲しいと頼んだ手前、死んだ人間なんかに遠慮をして、身を引くような真似はしたくなかった。

でもタティのこの反応は、男としてはやはりプライドを傷つけられ

るものだった。

「まあ、これは決定事項だから」

タティがおどおどするばかりで、いつまでもこの結婚を嫌がっているみたいな態度なので、そのうち僕の心には再びタティに対する不満、僕の誠意を分からないで、パーシーのために泣いていたことに対する怒りが湧き上がりつつあった。

「……タティが戸惑う気持ちは、僕も分かっているつもりだよ。貴賤婚とまではいかないけど、君が僕の妻になることを問題視する人間もいるにはいると思う。
それに男子をあげなければ結婚させないなんていうのは、まさに貴賤婚に対するやり方だし、君としてもこの先面白くないこととか、悩みとかも出てくるだろう。だからよく考えて、後からこの件についての、君の考えを聞かせて。
でも僕が君と結婚することは、もう決めたことだから、それはいいよね？」

「アレックス様……、どうして……？　どうしてなのっ……？」

「何がだい？」

タティは、目に涙を浮かべて僕のことを見ていた。
彼女がいったい何が不満なのかが分からない僕は、いい加減混乱して、誰かに助けを求めたかった。

「どうして……」

だけどタティが、涙をこぼすほど僕を嫌がるから、僕は結局また声を大きくしてしまった。

「ああもう……、そっちこそ、どうしてそうなんだ」

僕は苛立って、とうとうタティを叱責した。

「タティ、考えてご覧よ、君は少しおかしくないか。君は僕のことが好きだって言っておきながら、なんでそこで泣くんだよ。君がお妾が嫌だって言うから、僕は兄さんと交渉して、結婚の許可まで頂いたのにどうしてなんだ？

ねえ、わけが分からないよ、僕はいつでも君のためを想って動いているのに、どうして君はそうやって僕の気持ちを踏み躙ることばかりするんだ……。

……そんなにパーシーが好きだったのか？

僕と結婚するのを泣くほど嫌がるくらい、彼を愛していたってことなのか！？」

「そんなっ、違います、どうしてそこでコリンさんが出てくるんですか……？」

「だからコリンさんって、それは何なんだよっ…！

僕はこのことがとても引っかかっていて、彼は僕をすごく不快にさせるんだ。名前を口にするだけでも吐き気がするし、もう存在していたことさえ忘れてしまいたいほどにね。

それなのに、君はまったく僕のことを分かってないよ。

タティ、もうはっきりさせよう。本当のところ、彼は君の何なんだ？　恋人だったってことなのか！？」

「コリンさんはただのお友だちですっ」

「只の友だちのために、あんな、あんな夜まであんな場所で泣いていたりしないものだろう！？」

「普通のことよっ」

「普通なもんかっ」

「お友だちが死んだのを悲しんでいて何が悪いんですか？」

「悪いよ！　まるで兄さんのなさったことへの当てつけみたいだし、

それは同時に僕に対する侮辱ということにもなるんだ。少なくとも僕はこのことをそう捉えている。酷い話だ。僕に対してあんまり思いやりがないよ。だから奴のことはもう忘れて欲しい」

「どうして……、そんなことをおっしゃるなんて、まるでアレックス様じゃないみたい。

アレックス様、彼はね、とっても優しくて楽しい人だったのよ」

「ああ、もう煩い……。そんなつまらない話を聞かされるほうの身になってよ。

タティ、僕は君がそんなに分からず屋とは知らなかったよ」

「アレックス様、本当よ。わたし、彼のことが大好きだったわ」

「だから煩いと言っているんだ」

「アレックス様、わたし」

「それは僕よりもってことなのかっ！？」

その僕の言葉と同時に、タティはうつむいてまた本格的に泣きべそをかきはじめた。

「いいえ……、いいえ、わたしは貴方のほうが大好きだわ……」

第４３話　解読不能

女性に泣かれることほど後味の悪く、問答無用で罪悪感に苛まれることもないものだ。それが好きな相手となれば筆舌に尽くし難く、僕はタティの態度に腹を立てて、結局朝食も取らずに席を立ったが、本当は腹が立っていた以上に僕を支配していた感情と言えば恐るべき難題にぶち当たった混乱と言ってよかっただろう。

僕はタティを泣かせたことだけでなく、タティがどうして泣くのかが分からないことに恐れおののいていた。僕に理解できない何か恐るべき問題が潜んでいるのか、それとも僕が、彼女が泣くような単純なことを理解できないほど頭の出来が悪いとでも言うのか……。

せっかくプロポーズしたのに、どうしてタティが嬉しそうじゃないのかが分からず、本当のことを言えば僕のほうが泣きたかった。

彼女はパーシーのことを友人以上には思っていない、僕と関係を持つことや、結婚することも嫌じゃないと言うんだ。それならどうしてあいう態度なのか、女心というものはまったく難解で、わけが分からなかった。

何処かに対応マニュアルとか、解読書のような本はないものかと、僕は本気で頭を悩ませていた。姉弟として接している分には何も不都合などなかったのに、恋愛対象になると赤ん坊の頃から二十年暮らしていたってこうなのだとしたら、結婚生活とやらを送るのにはどれほどの混乱が待ち受けているんだろう。

我が国では基本的に離婚ができないが、配偶者と死別した場合はその限りじゃない。どこそこの貴族が古女房を殺害したなんて事件が、ときどき新聞紙面を賑わせることがあった。

兄さんだったらこんなとき、いったいどうするだろうと考えて、思い浮かぶのは二通りだった。

言うことをきかない女のことなど、彼は放り出すか、腹が立っているなら悪びれもせずに殺すだろう。

「全然参考にならない……」

朝からもう何度掻き毟ったか分からない髪を撫でつけ、僕は執務机に頬杖をついた。

その日、僕はアディンセル伯爵の居城の僕の執務室で通常事務をこなしていた。机の上に積まれた通商許可書にサインをするのが、その午前中の僕の仕事だった。

兄さんは最近少し僕が執務の役に立つようになったということをお喜びになっていて、これまでは補助役が多かった兄さんの執務の何割かを、実際に僕が最終的な裁定者として受け持つことも多くなっていた。もっとも、今のところ任されているのは所領の内政に係わるうちの、それほど重要でない案件ばかりではある。

煩わしい陳情の中で、面会を要するものの処理を任せられるのも近頃は僕だ。兄さんは一見人当たりがいいようにも見えるが、根があの通りなので気分によっては訪問者を恐がらせてしまうこともあるのだそうだ。

僕がこうした執務を行う日には、カイトは僕の側に控えて、慣れない秘書のようなことをやっているが、当然ながらここでは専門の文官が僕の下にも配置されていた。ときにはジェシカが顔を出して、僕の補佐官をしてくれることもあった。

それと比較して、兄さんの腹心であるジェシカを持ち上げたい誰かによって、タティがもう少し使い物になればいいという話題が失笑と共に聞こえることもあった。

本当はタティは勉強ができないわけではなく、我が国では何処の家庭にも有り触れている通り、女だからという理由で与えられる教養が限定されてしまっただけのことだった。けれどもそれを女には知性がないという社会通念を持つ人々に説明するというのは、いかにも実りのないことだった。彼らは若く未熟な僕の言い分を、恐らくは上辺だけ分かったふりをするだろうがまず信じないことが分かる

からだ。
そして何より問題なことは、妾といえどもいまやタティが多方面の人々にとって嫉妬の対象になっていることだった。このままでは誰もが彼女を花嫁として認めそうもないことを思うと、僕は憂鬱だった。
僕は飽くまでもアディンセル家の当主ではないし、兄さんのような宮廷をときめく美男でもなかったが、それでもある程度は予想される妬みや嫌がらせに、タティが耐えられる性格であるようには思えなかった。
相応の男と結婚したほうが、彼女にとっては幸せなことなんじゃないかと、自然とため息がこぼれてきた。

「えっ？　俺ですか？
いや、アレックス様のお勧めとあらば、勿論有難いんですが、俺は男爵家の姫君と政略結婚する運命なんです。目下、美少女の主君にさらわれたい乙女の心境でして」

気まぐれに、近くにいたカイトにタティとの結婚を勧めると、彼は手を振ってそれを拒否してくれたので僕は少し安堵した。

「ああ、そうだったね。タティが結婚するのが君なら、僕も安心できるんだけど」
「タティと結婚したら、俺はただの貧乏貴族です。妻を養わなけりゃならないんじゃ、暮らすにも大変だ」
「その点は僕が面倒みるよ。そうだ、そうすれば……」
「そんなことを言って、貴方は彼女がお好きなんでしょ。俺は貴方に嫉妬を買ってまでタティと結婚したいほど彼女に興味はありませんねえ。
ま、あのでかい胸は、なかなか触り心地がいいかなと思いますが……おっと、睨まないでくださいよ。ほんの冗談なんですから」

「冗談に聞こえないんだよ」

そして僕は再びため息を吐いた。

タティとの今朝の経緯を、カイトに少し話してみたものの、それについてはカイトも終始首を傾げるばかりだった。

「まさかエステル嬢とのことが耳に入っているってことでもないんでしょうし、貴方の求婚を喜ばないってのは確かに不可解ですな。彼女にとっても彼女の一族にとっても、身に余る栄誉でしょうに」

「誰か、口の軽い奴がいたのかもしれない……、だからタティは僕を汚らわしいと思って嫌がっていたのかも」

「いや、その点は。アレックス様、俺の危機管理能力を甘く見ないでください。アレックス様がエステル嬢と俺の部屋を使ったのを見たのはいなかったはずですよ。

それに、タティは貴方が好きだって言ったんでしょう？　だったらまあ、いいのでは？　女が機嫌を悪くすることに、大した理由なんてないもんですよ」

「そうかな……。例えば、実は兄さんが好きなんてことはないんだろうか」

僕がそう呟くと、カイトはそれに同意するように頷いた。

「それはまあ、あり得ないと言い切れないところが何とも。そんなふうに悩んでいるくらいなら、本人に聞いたらいいじゃないですか」

「聞いたさ。だけど、何だか言わないんだ」

「ふむ…」

「カイト、僕はどうすればいいと思う？」

「どうすればって……何をです？」

「だから、僕はタティと結婚したいんだよ。でも嫌がっているもの

を無理やり結婚するなんて、まるでとんでもない悪役みたいじゃないか。人さらいもさながらだ。世の中に憚る悪党のすることだよ。だからどうすればいいか、こうやって君に相談しているんだ」

「それは分かりますが、でも嫌がってないんでしょ？」

カイトは執務机の近くの書棚の片づけをしながら、片手間に僕に返事をした。

「確かにそうだけど、でも厳密には、喜ばないってことは嫌がってるってことだろう？　僕を歓迎してないってことだ。と言うことは、僕のことが嫌だということだ」

「只単に、恥ずかしがってるだけなんじゃないですかね？」

「そういう感じじゃなかった」

「じゃあ、嫌だと言われたんですか？」

「言われないけどさ……」

カイトは手にしていた本を本棚に押し込んでから、振り返って多少面倒臭そうな調子でこう言った。

「んー、そこは貴方が察してあげないといけない部分なんじゃないんですかね？

何つうか、女の中には、あんまり自分の意思表示をしたがらないのがいるでしょう。俺が言うのも何ですが、多くの保守的な家庭では、女はそのように仕込まれるもんなんです。物事は、男のほうから仕掛けさせるよう仕向けたほうが万事上手くいくってことを。

何せ、生意気な女は男からも女からも叩かれる世の中だ。だから母親たちは自分の娘にこう教えるんですよ。明確な意思表示をするなんてのは非常に危険で、恥知らずで、背徳の証明みたいなもんだってね」

「……おまえ、ガチガチじゃないか」

「そうですか？」
「でも、言われてみればタティの母親はいかにもそういう考えを持っていそうな感じだった。年頃になっても、タティに可愛い服ひとつ着せなかったくらい。
じゃあタティは、僕と結婚するのが嫌ってわけじゃなくて、それどころか本当は飛び上がって喜びたいってことだったのか。ただそれを、人前でするのが悪いことだと教えられていただけで」
「きっとそうですよ。よかった。解決ですね」
「馬鹿を言えよ、そんなわけないだろう。僕は目の前で泣かれたんだぞ……」

朗らかに微笑むカイトを、僕は睨みつけた。

「あらら、泣かれたんですか。それじゃあ話は違いますね。それならそれはきっと完全な拒否ですよ。
さてはアレックス様、何か嫌われるようなことをしでかしたんじゃないんですか？」
「……ああ、しでかしたよ。知ってるだろう」
「ありゃ、いけませんねえ。貴方いったい、何をやらかしたんでしょうか？　まったく悪い子がいたものですね。もしかすると、彼はとんでもないスケベ男かもしれません」

そしてカイトは近寄って来ると、僕の御託が煩いとばかりに執務机の上の積み上げられた書類を指先で叩いたのだった。
無駄口よりも手を動かせと、まさかカイトに言われるとは思わないことで、僕は何だかいたたまれなくなって机の上に顔面から突っ伏した。

第４４話　大事なこと

午後が深まりかけた時刻、ジェシカが僕の執務室にやって来た。彼女は本日王都に滞在されている兄さんには、同行していなかったようだった。
僕は午前と午後をずっと机の上に突っ伏して過ごしていたために、そろそろ書類の山に埋もれ始めていた。

「何かお悩み事ですか？」

ジェシカが僕の執務机に近づいて来ていることを示しているように、彼女の踵の高いブーツが床を鳴らす音が近づいて来た。
僕には顔を上げる気力がなかったが、それと言うのも好きな人にプロポーズを嫌がられたダメージが大きすぎたからだ。
もしこのまま結婚を強行したとしても、タティは二度と僕に微笑んでくれないんだろう。だいたい結婚するには男子をあげなきゃいけないのに、そんなことまで強行したらタティはショックで死んでしまうかもしれない。
かといってこのままタティと結婚できなかったり、エステルと寝たなんてことがもし今後タティに知られたりしたら、そのときは僕のほうがきっと確実に死んでしまうことだろう。

「それは恋のお悩み？　ロビン・ウォーベックはなかなかの美人でしょう？」

ジェシカの口ぶりは、いま僕を悩ませているのが秘書官のロビンでないことを承知しているような感じだった。

「タティは……お元気ですか？」

次にはジェシカは、探りを入れるようにそう質問をしてきた。僕が顔を上げると、彼女は執務机のすぐ真ん前で僕に視線を注いでいて、僕らはすぐに目が合った。
僕は慌てて目をこすったが、これは目にゴミが入っていたせいだった。
ジェシカは姉のような気遣わしい様子で微笑んだ。

「もう、プロポーズなさったのですか？」
「……うん」

素直に僕は答えた。
確かに兄さんの本性が分かるにつれ、ジェシカのそれも必ずしも善良なものではないことには気がつきつつあったが、それでも兄さんが僕に対して基本的には愛情を持って接しているように、ジェシカの僕に対する態度もまたそれに準じる誠実なものではあった。
その証拠に、ジェシカの問いかけは大抵親切で、僕の中の子供心をくすぐるのが上手かった。

「でも、芳しくない」
「……どうして分かるの？」

僕がたずねると、ジェシカは少しわざとらしい動作で僕に頷いてみせた。

「それは、お顔を見ればだいたいのことは」
「そう……、でも君は、僕がタティと結婚することには反対なんだよね」
「ええ、そうです」

ジェシカは動じることなくそれを認めた。
その彼女の率直さが今はとても不愉快で、僕は親切な彼女に対してまるで兄さんが理不尽なことを言うときみたいに顔を歪めた。

「でもすべては君の思い通りに運びそうだよ。何もかもね。何しろ、タティは僕のプロポーズを喜んでくれないんだ。だからたぶん、結婚はできそうにない」
「喜ばないのですか？」

ところがジェシカは僕の嫌味をものともせず、優しい口調でそれを繰り返した。
それで僕は、再び素直になって頷いた。

「タティは僕のことが好きだって言うんだ。確かに大好きだって言ってくれた。
それで、結婚も性交渉も受け入れるつもりのようだ。でも……」
「でも？」
「嬉しそうじゃない。何故なんだろう」

するとジェシカは少し考え、それから少し笑って僕に視線を戻した。

「それはたぶん……ねえ、アレックス様はどうなのですか？」
「僕？」
「タティのことを、どう思っていらっしゃるのです？」
「そ、そりゃあ好きだよ」
「女として？」
「勿論さ、僕はタティのことを愛しているんだ。そう思うようになったのは最近だけど、でも彼女のことを誰よりも愛している気持ちは本物だよ」
「それを、貴方は彼女にお伝えになりました？」

ジェシカに言われて、僕はぽかんと口を開けた。
ジェシカは人差し指をこめかみに押し当て、多少僕のことをからかっているような様子を覗かせながらも、通常通りの飽くまで生真面目な話し方でこう続けた。

「タティの反応は、たぶんそれが……よく伝わっていないからでは？確かに、求婚されれば立場上彼女がそれを断ることは難しいのですが、あの娘がアレックス様に好意を持っているのは見ていてよく分かりますし……。
彼女は恐らく、アレックス様が自分を愛しているという可能性についてさえ、考えたことがないんじゃないでしょうか？
貴方が思いやりによって、あの娘を妾という立場から救済するために結婚することを思いついたとでも考えているという見方が妥当でしょうね。まあ、ボランティア的な意味で。
確かにそれは、女としては落ち込みますね。少し思慮のある娘なら、それで貴方の将来の一部分を潰してしまうかもしれないなんて健気なことを考えるかも。
貴方にプロポーズされて嬉しくないことはないんでしょうが、泣きたくはなるでしょう」

僕は執務椅子を立ち上がり、ジェシカの頬にキスしてそのまま部屋を飛び出した。

第４５話　大好きだよ

すべての業務を放り出し、僕はそのまま走って私室に戻った。その途中の廊下でカイトとすれ違ったが、僕は背中のほうで何か言っているカイトのことを、振り向かなかった。そんな余裕などなかったからだ。部下は黙って僕の恋の成就を祈るべきだった。

部屋に戻ると、タティはリビングの暖炉の前で編み物をしていたが、僕の帰室に気がつくと慌てた様子でそれを中断し、急いで僕を出迎えた。

「お…、お帰りなさいませ、お早かったのですね」

タティは作り笑顔を浮かべていたが、相変わらずおどおどして、それに近頃はそこにまるで僕の顔色を窺っているみたいな態度が加わっていた。

タティがよくおどおどしているのは昔からのことだったが、少なくとも僕を恐がるなんてことはなかったのに、今は作り笑顔が張りついていて痛々しかった。朝のやり取りが、僕にしてみれば只の喧嘩のようなつもりだったにしても、タティは余程恐ろしい思いをしたのかもしれないと僕は思った。

考えてみれば、僕だって兄さんが怒り出しても耐えられるようになる前は、やっぱり叱られた後には兄さんの顔色をどうしたって窺っていたものなんだ。それはどちらに非があるかとかいうことではなくて、立場や体力が絶対敵わない相手が機嫌を悪くしていれば、弱いほうの人間がやはり気を遣わざるを得ず、またどんなに恐ろしいかということに通じている。

そしてタティが僕を恐がっているという事実は、その何たるかを理解できるだけに、僕を激しく落ち込ませた。

「うん、いや、まだ途中だから……、また執務室に戻るんだ」

僕はタティを恐がらせないように、できるだけ優しい声と態度でそう言った。

「そうですか……、お仕事、大変なんですものね……」

「うん、そうなんだ」

僕が頷くと、タティは消沈した様子でこう呟いた。

「……ロビンさんって、可愛い方ですよね。彼女、アレックス様の新しい魔術師なんでしょう？　わたしが役立たずだから……」

「ロビン？　ああ、兄さんの領地は広いし拠点が多いからどうしても、ほら別の州なんかに行くときはどうしても魔法で移動の必要があって、それで……」

「美人だわ」

タティが何を言いたいのか分からなかったが、僕はもう喧嘩をしたくなかったし、取り敢えず逆らってはいけないと思い、彼女の意見に同意した。

「そう言われればそうかな？」

「……、わたし、何にも取り柄がないわ。本当に……」

するとタティはますます悲しげな様子で睫毛を伏せてしまった。それでまたしても泣かれるんじゃないかと思い、僕は慌ててこう言った。

「どうして僕は別に……、ああ、タティ、僕はそんなどうでもいい

話をしに来たんじゃないんだ。僕は君に取り柄がないなんて思ったこともない。
それにロビンが美人だろうと僕はそんなことは気にしてないよ。と言うか僕は彼女が美人かどうかなんて考えてなかった。つまりカイトとおんなじさ。僕はカイトの外見なんか気にしないだろう?」
「……」
「そんなことより、僕は君に大事な用があって来たんだ。だから、ちょっといいかな」

僕の問いかけに、タティは頷いた。
その両手がやっぱり胸の前にあるのが気になったが、これは僕を警戒しているわけではなく、単にタティの癖なんだろうと思い込むことにした。

「あの、あのね、これは僕の本心なので、是非君に信じて欲しいんだけど……」

僕は、ほとんど竦んでいるようにも見える彼女に無理やり目線をあわせて、勢いのままにこう言った。

「タティ、僕は君のことを愛している」
「えっ、ア、アレックス様」

タティはまた困っているような表情をしようとしたが、話の途中で拒否されるのだけは嫌なので、僕はタティがそれ以上口を挿む間を与えずにたたみかけた。

「世界でいちばんタティを愛してるんだ。
僕はタティを妾にしておくのが可哀想だから結婚するんじゃなくて、結婚したいから結婚するんだ。結婚したいと思うのは、愛してるか

ら！」

するとタティは、しばらく僕の目を見つめたまま、やがてまた目の端からぽろぽろ大粒の涙をこぼし始めた。

僕は、また彼女を泣かせたことに動揺し、ジェシカの解説が壊滅的に間違っていたんじゃないかということを疑い始めたが、タティは僕をみつめて、それまでとは見違えるような顔をして、涙に潤んだ瞳で僕にこう言った。

「ほ、本当に……？」

頼りない声で、僕にたずねた。

「わたしを……？」

僕は急いで何度も頷いた。

「うん、そうだよ。君を」

「夢じゃなくて……？」

僕はタティに、できるだけ優しい声と態度で今度こそはっきり伝えた。

「ごめんタティ、僕、大事なことを言うのを忘れてたんだ。忘れていたと言うか、僕の気持ちはちゃんと君に伝わっているものだとばかり思い込んでいたんだ。

何て言うか、とにかく僕は、タティのことが大好きなんだよ。タティが大好きなんだ。だから君に結婚して欲しいって……言ったんだよ。決して同情とか、ボランティア精神なんかじゃなくて、君のことが大好きだからなんだ」

「アレックス様……、本当に？　本当に？」
「うん、本当に」
「わたし、わたしも貴方が大好き。大好き……」
「本当かい？
じゃ、じゃあ……タティ、僕のお嫁さんになってくれる？」

好きだけど結婚はできない、なんてひどい返事が返ってきやしないかと思って、僕がおずおず問いかけると、タティは頬を染めて頷いた。

「はい、わたしで、こんなわたしなんかでよかったら……」

それで僕は一気に気持ちが高まって、手放しにこう叫んだ。

「君じゃなくちゃ駄目だよ。僕はタティがいいんだから！
ね、キスしてもいい？　僕、君とキスしたい」
「アレックス様……」

涙をこぼしながら僕を見上げ、僕を信頼して頷くタティは最高に可愛かった。
僕はその最高に素晴らしいムードのまま、彼女を抱き寄せて彼女にキスした。タティは少し震えていて、たったキスをするなんていう程度のことを不安がっている様子だった。それなのに僕を頼りにして、僕を受け入れてくれているのがとても健気で愛しかった。

「タティ、大好きだよ」

キスを終え、恥らってうつむこうとするタティの顔を覗き込み、僕はそのままもう一度彼女にキスをした。

第４６話　誕生日の贈り物

冬の妖精が歌う吹雪の歌の旋律を知る術がないとしても、空から舞い降りる白い来訪者を視覚することはできるものだ。

居城より望む東部の山々には、もう随分雪がかかっていた。一年の最終月を迎え、華やいだ庭園の煉瓦道も、ほの白く染められる季節が訪れていた。

日毎に空気は冴え渡り、吐く息は太陽のもとでさえ白く凍えた。美しい昼は遠慮がちな乙女のような慎み深さを一層増して、午後にひとときオレンジ色に花開いた後、すぐに長い夜に空の覇権を譲り渡していた。

ローブフレッドは内陸に位置しているが、東側の山脈が西風を塞き止め平野部にも毎年確実に降雪する。もう少しもすると生まれながらの征服者である兄さんが、愛用の猟銃を手に取り巻きを引き連れ、嬉々として処女雪を分け入って行く姿が見られることになるだろう。

そして僕はつい先日、とうとう二十歳の誕生日を迎えていた。

しかしひとつ誕生日を経たからといって、日常が何か変わるわけでもなかった。友人でなくともほんのささやかに僕に対して好意的であるか、さもなければ下心や野心のある人物なら、さっそくカードや贈り物を届けて来た。ジェシカは今年も気の利いた贈り物をくれたし、カイトは少し値の張る酒を僕の部屋まで持ってきた。彼は実家からまったく仕送りを貰っていないはずだから、僕は申し訳ない気持ちがしたが、好意は素直に受け取るべきなのでそうした。

「アレックス様にしてみれば、安物でしょうけど。我が主へ祝福を込めて」

置物にして飾っても構わない綺麗な琥珀色のボトルを、包装もなくそのまま持って来たカイトは、それを僕に手渡して恭しい一礼をし

た。ラベルを見ると、それなりに名のある銘柄の上等の酒だった。
僕が酒に酔った挙句にエステルと寝てしまったことを悔やんでいたら、練習すれば強くなるかもしれないという話になっていたのだ。
でも僕は、酒に強くなるべく鍛えるよりは、この際飲酒から遠ざかる決心を固めつつあった。もともと酒に対して執着はないほうだし、僕としては成人男性の嗜みとして、大人の演出のための小道具として酒を飲むということをしていたわけだが、自分がともすれば意志薄弱な醜態を晒してしまう人間であることが分かった以上、ここは手を切ることが肝要だろう。
とは言えカイトの気持ちは有難かったので、僕はお礼を言った。

「どうもありがとう。嬉しいよ」
「他の方からは、何か貰いましたか？」

カイトの問いかけに、僕は頷いた。

「うん、ジェシカからは何冊か本を貰った。あの、例の北東の新興国の資料をね」
「ああ、クーデターで国王の首を挿げ替えたとかいう」
「うん。地理的には隣接しているわけでもないし、敵対的な歴史があるわけでもないけど興味があってさ」
「そんなもんに興味を持つってのが、俺にはいまいち分からないところですよ。はっきり言って俺は、自国の政情さえ理解しているとは言えないから」
「本当に？　それは困るよ。男なら、政治に興味がなくても把握はしておくようにしないとね。自分の国と、周辺諸国の動向くらいは」
「またこれ閣下と同じことを言ってからに。上流社会の人間と交際していくには教養が不可欠だなんて言われて、これでも結構詰め込んだんですが……、この上まだ勉強しなくちゃならないなんてことは、俺にとっちゃ、まったく頭の痛いことですよ」

「それについては諦めるんだね。君は僕の側近として、もうこういう世界の住人になっているんだから。だから、あの宿舎住まいもいい加減にしないとね。兄さんの話じゃ、君に贅沢をさせるなと父君から未だに苦情が来るそうだ。デイビッドも本当に君が憎いんだろうか。それとも、こんな生活には飽き飽きかい？」

僕が言うと、カイトは大袈裟にかぶりを振った。

「とんでもない。俺は男爵様のところで過ごしたあの惨めったらしい人生に戻るくらいなら、何でもしますよ」

「頼もしいね」

「ところで閣下は何をくれたんですか？　誕生日に。あの方が大事なアレックス様に何を贈ったのか、すごく興味あるなあ」

「現金だよ」

僕は答えた。

「そりゃまたワイルドなことで」

身も蓋もない僕の返答に、カイトは理解を示すように何度か頷いた。僕はそれを認めた。

「兄さんは、男には適当なんだ。この時期はデートも立て込んでいるみたいだしね。

でも誕生日の贈り物とは違うけど、気が向いたときに剣なんかをくれるときもあるよ。武器の収集は、兄さんのご趣味のひとつだから。腕が二流なんだから、せめていいものを身につけておけなんて言わなくてもいい嫌味を言うけどね。でも僕は滅多に使うことがないから、もう何本もたまってる。よければ君に好きなのを分けてあげる

よ」

「えっ、本当ですか？」

カイトが嬉しそうな顔をしたので、僕は満足して頷いた。

「剣のほうでも、使い手の物になったほうが嬉しいだろう。君は十五歳で騎士の叙勲を受けるような使い手だからね……、十五歳なんて、まだ身体も出来上がってないのに、その時点で兄さんが認めるというのは、相当ということだ」

そして僕はカイトを自分の部屋に招き入れ、剣を保管してある書斎に連れて行った。その途中で、カイトは僕にタティからは何を貰ったのかを質問したが、僕は気がつかなかったふりをした。

第47話　何を貰ったかって？

「俺の存在っていうのはもうね、生物として間違ってるんですよ。二十二ともなりゃ、もう親になってるのだっているのに」

人肌の恋しくなる寒い時期であるか否かに係わらず、カイトは相変わらずの泣き言を言っていたが、僕としては彼の悩みが人生に圧迫を加えるほどのものとは思えないことを話していた。

「そういうのは、大事な人にとっておくんだ」

カイトを連れて室内を歩きながら、僕は手短に言った。

「そのほうが、絶対正しいって僕は信じてるよ。安易に捨てるなんてもったいない」

「そら、女ならそれでいいでしょうけどね」

カイトは憮然として言った。

「でも娼婦相手は嫌なんだろう？」

「嫌って言うか、何つうか……、金で人間を買うって時点で人として終わってる上に、作業のように相手して貰ってもねえ。愛がないじゃないですか」

「じゃあ、どうしたいんだい」

「そりゃあ、閣下みたいに何人もの女に愛を捧げられて、望まれてですね。お願い抱いてえ、なんて女たちにせがまれて、俺はよしよし仕方ないな、それじゃあ順番だよってな具合に……」

「……、それは愛なのか？　どっちかと言うと、ハーレム？　乱交っぽくないか？」

「いや…、まあその、儚い妄想です」
「楽しそうだ」
僕が言うと、さすがにカイトも多少恥ずかしそうにしていた。
「こういうの、閣下なら実現できるんじゃないかと思いますけど、彼はハーレムはやらないんですね。男の夢なのに」
「そりゃあ、兄さんなら黙っていても君の妄想のように女が寄っては来るだろうけど……、実際にはそういうのって、いろいろ大変な部分もあるんじゃないか？　少なくとも、僕はそれで心まで満たされるとは思わない。
兄さんだってそう思うから、そういうのを設けないんだろうし、それどころか半年やそこらで女を次から次から替えるんだろう。まあそれもどうかと思うけど、もてる男っていうのも傍から見ているほどには、幸せじゃないのかもしれないよ」
「そりゃ、幸せかどうかなんて、他人からは分からないもんですけどね」
「それに兄さんっていうのは、弟の僕が言うのもなんだけど、やっぱり何処か破綻してるよ。例えば初夜権とかね。あれはひどい。ほとんど狩りだからね。ジェシカによると、どうも中央で嫌なことがあると、鬱憤晴らしにやってるみたいなんだ。
あんなことしなくても女に困らないのに、僕には意味が分からない」
「んー、まあそれは、やっちゃいかんですよな。閣下も宮廷なんかじゃいろいろとストレスの溜まることがあるとは推測されますが……」
「こんにちは、カイト様」
リビングを通りがかるとき、そう言ってフリルの可愛いドレス姿でタティが出て来たのが、僕は気が気じゃなかった。豊かな黒い巻き毛をおろし、白地のドレスなんか着ていると、お淑やかな彼女はひ

たすらに清らかで甘く、なかなか聖女然としているように思えるのは僕だけだろうか。

それにきちんとした服を着ると当然ながら、身体の細いわりに胸が大きいってことが強調されていて、そのいかにも危なっかしい様子は大いなる魅力でもあるのだが、それだけに僕の心配はいまや倍増していた。

男という生き物が、この若くて自分の魅力の半分も理解していないような娘のことを、どういう考えで見るかということを、勿論僕は完全に理解できるだけにタティを人前に出すことが嫌でたまらなかったのだ。

このときは、カイトが彼の脳内のハーレムにタティを加えるんじゃないかと思って、僕はにわかにカイトを警戒していた。

「やあ、タティ」

カイトは手を振って、さっそくタティに軽々しく微笑みかけていた。その態度は陽気で、かつて彼の人生が陰惨だったことを窺わせる余地もない。カイトは日頃から身なりを真面目そうにしているし、またそういう雰囲気でもあるのだが、ひとたび口を開けば過剰におちゃらけだすから、その印象は百八十度変わるわけだった。

「おっ、今日は何やらお洒落してるんですね。お洒落しているせいかな、何だかいつもより色っぽい感じがするな。最近、調子はどうですか？」

「えっ、調子ですか？　えっと……はい、調子、いいですよ」

カイトの問いかけに、タティはぱあっと頬を赤くした。あんまり分かりやすい態度だったので、僕は知らないふりをしていたが内心でひやひやした。

「それはよかった。それにしても、見違えちゃったな。何か心境の変化でも？」
「あっ、ええ、あの……」
タティがうつむいてもじもじすると、カイトはご機嫌に笑って親指を彼女に突き出した。
「可愛いですよ」
女を口説けないなんてことが、疑わしいほどこなれた様子が油断ならなかった。僕はむかっとしてカイトの腕を引き、急いで彼を僕の書斎に引きずり込んでから、タティに対する今のなれなれしい反応についてさっそく釘を刺すべく向き直った。
「可愛くなってる！」
「いいか、あれは僕の物だ！」
お互いがほとんど同時にそう言い、それから僕がこう続けた。
「そりゃね、僕好みの服装をさせているんだ。タティは残念ながらお洒落のセンスがないことが分かったからね。センスがないって言うか、あの地味な身なりは、どうやら母親の躾のせいというだけじゃなくて、タティ自身があんまり着飾ることに興味がないみたいだった。
だからこの際僕の好きなようにすることにしたんだ。髪型も今どきの姫君方の間に流行のプリンセス仕様だ。地味過ぎず、派手過ぎない。可愛いだろう。童顔だからもともと可愛い格好が似合うんだ。それなのに胸が大きいから、僕はそのギャップが結構」
「んんっ、今なんておっしゃいました？　胸が大きい？！」
「う、うん」

「アレックス様、むっつりやめたんですか？
これまでは、幾ら俺が下ネタを振っても、断固として無関心なふりをしていたのに。貴方ともあろう方がおっぱい大好きを公言するなんて！？」

驚くカイトに、僕は恥らって目をそらしつつ頷いた。

「も、勿論さ。あれはいいよ……」
「それじゃ、彼女はいまや何でもかんでも貴方の言いなりってわけですかい」

カイトは唇を尖らせてふて腐れた。

「勿論だよ」

その様子に、僕はつい勝ち誇って、再度頷いた。

「僕の誕生日を契機にね……、ふふふっ」
「な、何です？」
「……、話の流れで察しろよ。そんなことを、人に教えるわけないだろう」
「結婚もしてないのにもう花嫁の処女を頂いちゃったんですか！？」

カイトが何のためらいもなくはっきり言うので、僕は慌てて両手で宙を掻きまわした。

「ば、ばば馬鹿っ、声が大きいよっ。
それにしょうがないじゃないか、こ、子供が出来なきゃ結婚させて貰えないんだからさ……。そうだろう？　これは兄さんが言うので仕方なくのことなんだ」

僕が言うと、カイトは呆れた顔をして僕を見た。

「この期に及んで閣下のせいにするんですか？　自分がスケベなのを棚に上げて。単に彼女と、乳繰り合いたかっただけでしょ？」

「煩いよ」

「どうしてもタティと結婚したいってんなら、結婚させてくれないなら駆け落ちする、とかでもよかったような」

カイトに言われて、僕は思わず手を叩いた。

「なんでそういういいアイデアをもっと早くに出さないんだ」

「そんなの、駆け落ちしたところでたぶん騎士団を派遣されて終了でしょうからね。あの閣下が貴方を逃がすとは思えない。彼は何事も自分の思い通りにしなきゃ気が済まないところがありますからね。だから血眼になりますよ」

「だったらつまんないこと言うな。

ほら、どれでも好きなの選んだらさっさと帰れよ」

僕は書棚の端の収納扉を開いて、しまってある剣鞘の束を指差した。飾ってもいないし、あんまり有難がって扱ってもいないのは、僕は武器の収集なんか趣味じゃないのに何しろ数が多すぎるからだ。それに中段の引き出しの中には、優れた殺傷能力があると嬉しそうに言って渡された拳銃まであったが、そんな物騒なものはとてもじゃないけどタティの目に触れるような場所に置いておけない。だからこういうものは手入れをして、後は片づけておくほうが部屋も気持ちも広々するわけだ。

兄さんは僕と趣味を共有した気になって、楽しい気持ちになっているようなので、こんなことは絶対言い出せないが。

「俺に詳しくお話を聞かせてくださいっ！」

カイトは急に両膝を床につき、大袈裟に両手を組み合わせてまるで巡礼者が礼拝の際にとるようなポーズをしたが、僕は手を振ってそれを軽くあしらった。

「駄目だね。タティをおかずにしようったってそうはいかないんだ」

「そうやってご自分だけ幸せになるんですね。俺は懐も心も真冬なのにっ」

「だから、君に剣をやるって言ってるだろう。宝石飾りがついてるやつを、幾つでも遠慮なく持って行けよ」

「わあんっ、ものすんごい余裕の表情してからに、まるで嫌味ったらしいこと言ってるそこらのすかしたイケメンそのものじゃないですか。純情でラブリーなアレックス様は、何処に行っちまったんです？

しまいにゃ俺だって泣いちまうからっ。ぐすんぐすんっ」

「煩いぞっ。大の男に対して何がラブリーだ、男が泣いたって駄目なんだ」

第４８話　孤独を嗜む者（１）

カイトは一通りの悪ふざけが済むと、兄さんから贈られた僕の刀剣のコレクションの中から剣を一振りだけ選んで、そのまま機嫌よく帰って行った。

彼の性格は単純なようでどうも掴みどころがなく、冗談を言っているのか本気なのか、僕はいまいち見極められないことがあるのだが、僕らの性交渉の内容を聞きたいなんていうのは、いつものおちゃらけの延長だったようだった。もっとも本気でそんな話を聞かれても困るのだが、あれだけ大袈裟にしておいてあっさり引き下がられると、僕としてもどう反応をしていいものか分からなくなる。

僕は年齢の近い人間との距離の取り方が未だに分からなくて、戸惑ってしまうことも多かった。つまり、折り合いのつけ方が分からないんだ。何処までが冗談で何処までが本気なのか、何処まで心を許すべきなのか、上手いバランスが分からない。

カイトはああ見えて人間が出来ているようなので、いかなる場合でも結局は僕に合わせてくれるのだが、僕は兄さんが遊び相手に用意した貴族の子弟たちにことごとく馴染むことができず、連中に苛められた過去があるわけだから、この辺りのことにはどうにも神経質になってしまう。

それに毎年の年末に王都で開かれる陛下の夜会への出席を控え、毎年のことながらその時期僕はとてもナーバスになっていた。

国王陛下が主催し、国中から裕福な貴族が集まり、ローズウッド王家と王国の繁栄を祝うあの晴れやかなパーティーに、重篤な理由もないのに欠席するわけにもいかない。しかも夜会はその一件に限らず、王都に城や邸を所有することが許されている貴族主催のパーティー巡りは、その後数日の間続くのだ。

僕は一人で静かにしているか、そうでなければタティと二人きりで時間を過ごすのが好きなのに、知らない人間と毎晩毎晩顔を合わせ

なければならないこういう社交的なイベントは、僕にとってはまるで拷問のようだった。

しかもタティの身分はこうした場所に出席できるほど高くなく、彼女はまだ僕の正式な妻ではないから、現時点では同伴することもできない。

使用人の内容も、勝手も違う王都の伯爵邸にタティを置いて出かけるのはいかにも心配なので、今回のところはタティは居城に留守番をさせることにしているのだが、そうなると僕は本当に話し相手にも事欠いてしまうのだから、やり切れなかった。

だからたぶん深夜にはカイトと二人で管を巻くか、去年のように兄さんに雲隠れされ、かといって見知らぬ男の誘いになんか乗れる性分でないジェシカあたりと行動を共にすることになりそうな気がしているが、そうなるまでの、姿勢を正していなければならない時間というのが、僕は思うだけで本当にしんどくてならなかった。

「アレックス、繊細で美しいおまえならば幾らでも女を手に入れられるのに。何故にそうも内気なのか」

ある寒い夜、珍しく晩酌につきあったとき、兄さんはブランデーを楽しみながら僕のことをあれこれ詮索していた。

天上が高いためにいつまでも底冷えする居間の暖炉のすぐ側で、兄さんはソファで足を組み、テーブル越しの席にいる僕のことを眺めていた。

肩に届く黒髪に、文句のつけようのない綺麗な顔。そのときは兄さんの白い横顔に暖炉の火が映っていて、彼の容姿をいっそう情熱的で美しいもののように際立たせていた。アディンセル家が美しい容姿を誇る家系であることは知っているが、代々の当主の青年期、もしくは壮年前期頃の肖像画を眺める限りにおいて、やはり兄さんの美貌は飛び抜けていると思われた。少なくとも、もしこの直後に鏡を覗き込んだとしたら、僕はそこに映り込んだ自分の容姿が彼のそ

れには及ばないことに一晩ほど落ち込んだだろう。
その夜の兄さんのご機嫌はあまりよくなく、僕はその場にいることを少し後悔し始めていた。幼い頃の経験の中には成人してもなお条件反射のようにつき纏うものがあり、兄さんの神経がぴりぴりしていることについて、僕は今でもとても敏感だった。
僕はそのとき酒ではなく、暖めたミルクを飲んでいたが、居心地が悪かったのは、そのことについて一通り兄さんに笑われた後だったから余計にそうだったのかもしれない。

「女遊びのひとつぐらいしなくては、一人前の男と言えぬものなのだぞ」

弟に訓示するにはいささか問題のある発言を、兄さんがするようになったのはいつ頃からだったろうと僕は考えていた。

「僕は兄さんのように美しくはないですよ。母上の面影があるとは言われますが。でも美しさについて、わざわざそれを取り立てて賛美されるほどじゃない。
美しいと言うなら、それは兄さんです。誰がどう見ても、貴方には他の人間にはない華があります。弟の僕の目から見ても、兄さんは美貌です。だから女性がひっきりなしなんだ。
兄さんのことを、確かに怒らせれば恐ろしいかもしれないが、従順にしていれば……女性にとっても貴方と関係を持つことは悪い話ではない。だから幾らでも寄って来るのでしょう。僕はそう思います」
「なるほど、それは結構な分析だなアレックス。私の容姿について、おまえが関心を持ってくれているとは光栄だね」
「関心と言うか……、それくらい美男なら、きっと世界が違って見えるだろうと思うことはあります」
「世界など変わらんよ。私は美しさを売って生きている世界の住人ではないからな」

「そうでしょうか？　集まって来る女性の数がまるで違ってくると思うけど」
「それで、アレックス。小娘とはどうなっているのだね」
兄さんはそんな話には興味がないといったような顔をして、不意に話を変えた。
「……上手くいっていますよ」
「まだ妊娠したという話が、聞こえて来ないが」
「今は冬だから、キャベツの時期じゃないんでしょう」
「ふっ、キャベツか。なるほど」
兄さんの眼に鋭さが増していることは分かっていた。彼がその夜僕に言いたかったことは、まさにそれだったのだろうと僕は感じていた。状況報告、それに跡継ぎの催促。それでも何とか平静を装う僕の言い草に、兄さんは意地悪く笑った。
「いいともアレックス、では待つことにしよう。可愛いおまえの言葉を信じて、春先までは……、私は黙っていてやるよ」
「春先まで？」
兄さんの言葉にある不穏な含みを僕が訝ると、兄さんはいよいよその大柄な身体ごと迫ってくるような不機嫌さを僕に向けた。顔を歪めて兄さんは言った。
「アレックス……、この私をみくびるなよ。私がいつまでもおまえの甘ったれた考えにつきあうことはないということだ。ルイーズごとき女の調停に伏される私だとでも思うのか？
アレックス。言っておくが、この私が女子供の戯言に左右されることはない。だからあの娘を妊娠させることに、期限を切るとこう言

っているのだ」
「期限……？」

僕は勿論、兄さんのお言葉の意味をすぐに理解できていたが、理解することを躊躇われるほどの恐ろしい条件の提示だったので、反射的に知らないふりをした。期限内に妊娠をさせなければ、この結婚をなかったことにするおつもりなのか、それともタティを役立たずとみなして排斥するという意味なのかまでは僕には分からなかったが、どちらにしても考えられない暴挙だったからだ。
しかし兄さんが、僕のとぼけた態度に余計に顔つきを厳しくしたので、僕は子供のふりをしてこれを切り抜けようとすることを諦めた。

「期限って、そんな無茶を言わないでください。兄さん、女の身体がそんな思い通りにいくわけがないでしょう……」
「アレックス、何を言っている。この私に分からないとでも思っているのか？　おまえはどうせ、まだ手をつけてもいないんだろう？　アレックス、おまえのことだからな」

第４９話　孤独を嗜む者（２）

兄さんの洞察は正しく、そのご指摘については、悔しいことにほぼ正解ではあった。

けれどもそのときはもう誕生日を何日か過ぎていたので、何とか言い逃れられるだけのことを僕はタティと済ませていた。

だから僕は、初秋からつい最近まで何ヶ月ももたもたしていたことは一切言わず、胸を張ってその部分だけを主張した。多少誇張のあることとはいえ、事実に裏打ちされていることを話すことに後ろめたさは少なく、すると兄さんは随分意外そうな顔をして、それからその端整な顔をまだ神経質そうに歪めてはいたが、もう僕に対する怒りは収めてくれたようだった。

「そうか。ならばいい……、そうか」

兄さんは独り言のように何度かそう言い、それから僕とタティのことになんか興味をなくしてしまったみたいにして再び話を変えた。期限を切るという横暴をどうやら取り下げてくれたようだったので、僕としてもそれ以上この話には触れずにおいて、そのまま話を流した。

そんなに跡継ぎが必要なら、兄さんが誰かお気に入りの金髪女とでもお作りになればいいという言葉が何度か喉まで出かかったが、火に油を注ぐだけの行為であることは分かっていたので言わなかった。

それから、兄さんと僕は他愛のない世間話をした。近年の周辺諸国の情勢について、出仕と執務と女遊びで時間がいっぱいのはずなのに、兄さんはいつ勉強をされているのかと思うくらい話の内容はいちいち詳しかった。王国西部の情勢が今後流動的になるというお話をされているとき、兄さんの勝気な表情がより増していた。何か利益になりそうな話があるのかと僕がたずねると、彼は皮肉な笑いを

浮かべて曖昧に返事をした。
そう言えば兄さんはジェシカのことをどう考えているのだろうと思い、以前カイトが言っていた話を少し持ち出してみた。

「ジェシカにつき纏っている男がいる？」

兄さんは特に興味のなさそうな声でそう言った。
少し酔いがまわったのか、グラスの中で揺れるブランデーを見つめながら少し考え、それからこう答えた。

「それは実家が用意している件の結婚相手ではないか。どうも従兄妹婚になるらしく、彼女は乗り気ではないようだったが。どうせ家は弟が継ぐから独身でいいのだと言っていた。
それに、我が国は近親相姦にとって寛大な風潮ではないからな。四親等までは厳格に禁忌としている宗派もあり、よって従兄妹婚では近すぎると考える人間も多い。だから、人によっては嫌悪感があるものなのだろう」

「兄さんが魅力的なせいで、婚期が遅れている女性は多いそうですよ」

「またそんなたわけたことを。カイトにでも吹き込まれたか？
そんなものは、誰も彼も私を言い訳にしているだけのことだ。女とはさかしいもの。気に入らない相手に嫁がされるのが嫌だということを、私にかこつけているだけのことだよ」

ふと、それまでの機嫌の悪さが吹き飛び、酔いのためにはっとするほど艶やかな悪戯っぽさが兄さんの美しい顔にのぼった。

「ところでアレックス、おまえこそ女を手に入れるにはどうすればいいか知りたいとは思わないか。そこらのごろつき女ではない。年末の陛下の夜会には、国中から血統のいい女が大勢やって来る。血

統や育ちがよく、その必然として美しい女たちが。
そうした女どもと遊ぶにはどうすればいいか、おまえもそろそろ知っておいてもいい頃だろう」

僕が苦手とする年末の夜会の話題に話が移ったことを、僕は憂鬱に感じていたが、兄さんはそうではなかった。女の話題になるとき、兄さんが本当に楽しそうなお顔をされているのを見るにつけ思うのは、確かに兄さんは本当に女好きなんだろうということだ。
もし彼に妃がいたとするなら、今頃彼女の人生は一時も心の休まる暇のない、悲惨なものになっていたかもしれないと思った。

「血統のいいというのは、王女様なども含まれるのですか？」

僕の問いかけに、兄さんは頷いた。

「無論、過去には遊び好きな王女もおられたそうだよ。姫君が王宮にて、あちこちの貴公子らと御乱交をなされたなんて話も、まことしやかに残っている」
「フェリア王女もですか？」
「フェリア王女はそのような方ではない。あの美しい方は……、そのような方ではなかったよ。私のデートの誘いにも、とうとう一度も首を縦に振ってくださらなかった」
「兄さんの誘いを断る女がいるんですか」

僕が驚いた声を出すと、兄さんは自嘲するように頷いてそれを認めた。

「アレックス、おまえは私をいったい何ほどと思っているのだ？
私は只の伯爵だよ。
それに、殿下には誰か想う男がいたのだろう。もっとも、その恋は

とうとう叶わなかったようだが……。
しかし世の中には、彼女のように分別を弁えた姫君は多いが、同じだけ奔放なのも多いのだ。貞潔を守ることよりも、目先の恋や快楽を優先するあばずれ女は実は多い。知らぬはまだ見ぬ夫ばかりなり」
「……どうするんです？」
単純な好奇心から僕は聞いた。
それを見て、何故か兄さんは笑った。

「夜半をまわったら外に出て、馬車に乗るといい。王城前に、予め用意されたギース公爵家の馬車だ。目印は桜の紋章。それに乗れば、乱交会場へ直行だ。さすがに陛下の宴を乱交場にとって変えることはできないからな」
「ギース公、あの紳士がそんなことを計画されているのですか？」
「いかにも。真に変態というのは、しばしば常人のような顔をしているものだ」
「……兄さんも、参加されるんですか？」
「いや、私はしない。他の男の体液にまみれた女を抱こうという気が知れないからな。
ああいうところにのこのこ行くのは、余程の好きものだ。そのての性癖の。そう例えば、自らの性交を他人に公開したいとか。夜毎に偏執的なテーマが決まっていることもある。略取した未成年、まだ女とも言えないようなのをよってたかって――」
「じゃあそんなことを、僕に勧めないでください。何を考えているんですか」
耐え難い内容の話になりそうだったので、僕が憤慨して言うと、兄さんは可笑しそうに笑った。

「なんだ、動揺しているのかアレックス？　こんな程度の話でうろ

たえるとは、まったくおまえはいつまでも子供だな。恥ずかしがって、まるで処女と話しているような反応だ。
それともおまえはとてつもない妄想力の持ち主なのか……何を想像したのか気になるな、うん、耳が赤くなっているぞ？
まあ、無理に行けとは言わない……、あまりの汚らわしさに、おまえのような純粋培養は卒倒してしまうかもしれないから――、それに現実的に言って病気の心配もあるしな。
だが性交とは、所詮その程度のことだということだ。女などというものは、所詮は……我々が執着するほどのものでもない。連中はか弱く、愛でるべき存在だが、しがみつくべきものじゃない。
アレックス、おまえにもそれが、やがて分かるだろう」

勿論僕としては、兄さんのそうしたお考えに同意できるはずもなく、そんな彼の言い分をただ理解したような素振りでいただけだった。
世の中というものが、兄さんが言うほどには汚らわしいものであるとは僕は思いたくなかったし、たとえ夜毎何処そこで乱交が行われているなんて話を僕がもう知っているにしても、それに加わりたいとは思わなかった。
しかし断ち切れない好奇心というものは否定しきれず、どうにか詳細を知りたいために、噂に名高い貴族の乱交会場への確かな道筋を仕入れた話をその後カイトにすると、意外にも彼は潔癖になってそれを批判していた。

「乱交がお望みの君なら行きそうな気がしたから、後から話を聞かせて欲しかったのに」

僕が文句を言うと、カイトは眉間を寄せて怒っていた。

「心外ですね！　幾ら何でも俺はそこまで飢えちゃいないですよ」
「そんなに言うなよ。カイトって、本当は真面目な奴なんだな」

「俺が真面目じゃなかったことがありますか！？」
「その怒った態度は真面目なのかい？」
「いいえ。言ってみただけです」

第５０話　蜜月（１）

世の中の女性たちが結婚に甘い夢を見ている頃、僕は現実というものの世知辛さを嫌というほど味わうはめになっていた。兄さんや僕が下級貴族と呼んで一緒くたにしている人々の間にも、厳格に順列というものは存在しているのだ。

タティの父親は兄さんに仕えている文官なのだが、彼は爵位を持っておらず、言わば取るに足らない存在だった。タティの父親より序列が上の人間たちは、何か理由をつけては、自分は極めて客観的で紳士的な人間であることを装いながらタティがアディンセル家に相応しくないということを事あるごとに話題にした。

もしタティが僕に気に入られて妻という立場を手に入れるようなことにでもなれば、当然タティの父親や兄弟はアディンセル家と姻戚関係を持つことになるわけだから、我が所領におけるそれなりの地位を兄さんから与えられることになるだろう。そして誰もが僕が女遊びなんかしない性格だということを知っていたことと、タティが僕の乳姉妹であるという他にない親密さから、タティがそのまま妻に格上げされるであろうことを見越してしまっていたというわけだ。しまいには兄さんの側近たちでさえこの問題について渋い顔をし始め、普段から温厚な人柄であるらしいタティの父親は、それによって神経が参ってしまっているという話を耳にしたが、これが少しも大袈裟な話でないということくらいは、貴族社会というものを知る僕にはだいたい分かることだ。

それでも大した問題じゃないと兄さんは僕をあしらったが、タティが僕の妻になることに皆が表立って反対していることは、当主である兄さんがタティを明確に支持してくれず、そもそも人から軽んじられる妾なんて立場に据えたからこそ起こっていることだった。

この問題を完全に解決とまではいかないかもしれないが、兄さんに僕らの結婚を認めさせ、こうした厄介な人々を少なくとも黙らせる

ためには、とにかくタティに男子を生んで貰わなければならなかった。

でも無邪気にしているタティを見ていると、こんな問題に彼女を人生ごと巻き込んでしまっていいものかどうか、僕は不安に駆られることがあった。子供なんか生んでしまったら、彼女はもう二度と自分の思い通りに生きることができなくなってしまうのだ。

僕はさすがに王子様とはいかないが、国家における富裕層の中でも上層にいる金持ち男とは言えるかもしれない、だけどそれでも結婚したら待ち受けているのは、夢のお伽話のようなハッピーエンドとはいかないものだ。

タティは僕と結婚したら、どう考えてもそれまでよりずっと大変な人生が待っていることだろう。所謂玉の輿に乗った女性たちが、夫側の親族や社交界で仲間はずれにされたり、いびり倒されることはあまりにもよくある話だったし、それ以前にタティよりも家柄のいい配下や使用人たちが、タティを女主人として受け入れるかどうかさえ疑問だった。それなのに、虫を見ただけで泣くようなタティが、そういう底意地の悪い世界で生きていけるのだろうかと、僕の悩みは深くなっていた。

その夜僕らはいつものように寝室のベッドに横たわり、タティはさっきから何かを話していたのだが、僕はその朝からいよいよ夜会のために王都へ出かけるということもあいまって、それには上の空だった。タティの身体の感触のよさを味わうということ、今は彼女の頬を触ったり髪を撫でたりしていた。

ふと、タティは拗ねたような声を出した。

たぶん僕に何かをたずねたのに、僕がそれを聞いていなかったせいだと気づいたので、慌ててたずね返した。

見るとタティは不満そうな顔をして頬をふくらませていた。

「もう……、アレックス様は昔からよく考え事をされるけれど、こんなときにしなくてもいいのに……」

「ああ、うん、ごめん。ちょっとね。今なんて言ったの？」
「……」
タティが両手の指先を絡ませて恥ずかしそうにするので、僕は彼女の顔を覗き込んでそれを促した。
するとタティは僕からは目をそらし、やっと囁くようにこんなことを言った。
「……わたしは、小さい頃からずっと好きだったんですって、言ったんですよ。物心ついた頃から、ずっとだったんですからって……」
「本当？　誰のことを？」
からかうためにちょっと意地悪を言うと、タティは頬を染めて恥ずかしがった。
それで僕は途端に愛しくなって彼女を抱きしめた。柔らかいタティの感触が腕と身体に気持ちよかった。こんなに可愛い女の子が僕のものだなんて、これはとても素晴らしいことだった。しかも僕はタティのことを、好きなようにすることもできるのだ。
「あっ、アレックス様……」
「ねえタティ、君、本当に僕と結婚していいと思ってるの？　それで幸せになれると思ってる？
あんまり考えなしに決めちゃったけど、と言うより僕が押し切っちゃったような気がするんだけど、タティはそれでいいと思ってるの？」
僕はそのままタティの上にのしかかり、おでこを撫で、顔を近づけて彼女をみつめた。
「いろいろ冷静になったら、僕らの結婚には大変な問題がたくさん

あるよ。すごく大変なことがたくさん。何が大変かについては、あんまり詳しく話すと君に逃げられそうだから言わないけど」

するとタティは笑った。

「アレックス様、教えてくださらないの？　どうぞおっしゃって…」

…何が大変なのか教えてください」

「えっ、それは駄目だよ。言ったら僕と結婚するのが嫌になるから」

「ならないわ」

「いや、なるよ。だって……大変なんだ」

「アレックス様……、わたしね、可愛いお嫁さんになるのが夢だったの」

「可愛いお嫁さん？」

タティは頷いた。

「貴方の可愛いお嫁さんになって、ずうっとずうっとアレックス様のお傍にいられたらいいなって、子供の頃から思っていたの。だから、大変なことなんて全然平気です。貴方が一緒にいてくれたら、どんなに大変なことがあったって全然へいき」

「ほんと？」

僕がたずねると、タティは微笑んで頷いた。

「ほんとにほんと？」

「ええ」

第51話　蜜月（2）

「じゃあ、兄さんの周りの連中が、僕らのことに……あんまり賛成じゃない感じなことは、平気？」

「皆さんに認めて頂けるように、アレックス様のお傍にいても恥ずかしくない女性になれるように、至らないかもしれないけれど、わたし、頑張ります」

「じゃあ、実は兄さんが男子を生むことを僕らに催促してるって聞いても平気？

正直言って、僕は相当怖いよ。いや怖くはないけど気分が悪い。これから何度も呼びつけられて、そのことを嫌味混じりに言われるんだろうなって思っただけで具合が悪くなりそうなんだ。まるで子供を作る行為自体を兄さんに監視されているような気がしてさ」

僕が言うと、タティは頬を赤くしてこう呟いた。

「へいきです……わたし、少しでも早くアレックス様の赤ちゃんを生めるように、頑張ります」

「う、うん……頑張るの？」

「それに監視と言うなら、わたしたちのことはルイーズ様がたぶん見ていらっしゃるわ。

ルイーズ様は千里眼っていう、すごく高度な魔法を扱えるんですもの。あれを使うと、何でも見えてしまうんですって。とっても特別な魔法よ。見ようと思えば、遠くの場所からコルセットの中まで何でも見えちゃうから」

「……ああ、そうだった」

それで僕は苦々しい思いで呟いた。

それから先日暖炉の前で話をしたとき、僕とタティの関係がこの何

ヶ月もまったく進展がなかったということを、どうも兄さんがご存知ないようだったことを思い出して不思議に思った。兄さんともあろう方が僕の即席の言い訳を信じていたし、納得もしていたからだ。ルイーズが気を利かせて兄さんには言わないでくれたのか、何なのかは分からなかったが。

「タティ、ねえ、僕のことが好き？」

「アレックス様……、はい、大好きです」

「僕もだよ」

僕はタティの前髪を撫でて、それから彼女のおでこにキスした。その間タティは途方に暮れたような、嬉しいような、恥ずかしいような顔をして僕を見ていた。

近頃のタティは僕の要望通り普段から髪をおろしているけど、眼鏡をしていないときの彼女の愛らしさと言ったら言葉で言い表せないほどだった。勿論、眼鏡をしていても可愛いとは思うけど、僕は眼鏡をはずしているときのほうが断然お気に入りだった。

それにそのときは薄い寝巻きだけで、あんまりこんなことを考えていることを女性に悟られるわけにはいかないので僕は知らん顔をしていたが、豊満な胸や腰の線なんかに目がいって仕方がないような格好だった。

それに何と言ってもタティの身体の感触の素晴らしいことといったらなかった。しかも僕の頭の中がこんなにいやらしいってことを、もう僕たちは何度もそういうことをしているというのに、彼女はまだ分かっていないみたいな清純さを保っていた。

そしてタティの左手の薬指には、僕があげたあの婚約指輪が嵌めてあって、彼女はその指輪をとても気に入ってくれているようだった。最初はタティは、傷つけたりなくしたりすると嫌だからと言って、指輪を引き出しの中にしまい込もうとしていたようだけど、僕が身につけているように頼んだんだ。彼女は僕のものだって、他の誰の

目にも分かるようにしておきたかったから。

「やっと二十歳になったのはいいけど、あと半年したらまた君が年上になっちゃうんだよね」

僕とタティはベッドの中で、うんと顔を近づけたまま話をした。うんと顔を近づけていると、眼鏡がなくてもタティは僕の顔が見えるみたいだから、そうしてあげると安心するみたいだった。

「ええ」

「僕のほうが先に生まれていたらよかったのにな。身体だって僕のほうが大きいんだし、そのほうがいいのに。でないと、何だかいつまでも弟みたいで格好悪いったら」

僕が言うと、タティはくすくすと小さく笑った。

「それは仕方がないです。わたしのほうが先じゃないと」

タティは瑠璃色の大きな瞳で、今も優しく僕のことを見ていた。

「どうして？」

彼女の髪を耳にかけてあげながら僕がたずねると、タティは答えた。

「だって、わたしのほうが先に生まれていないと、わたしの母はアレックス様にすぐにお乳をあげることができませんもの。乳母ができないわ。

アレックス様のときは本当に急遽……、あの、本当はもっといいお家の方を用意しておくはずだったと思うんです。わたしの母は本当は只の繋ぎのようなもので、アディンセル家は立派なお家なので、

ルイーズ様のところみたいに、でも……、とにかくもうすぐ赤ん坊を生みそうな魔術師や、赤ん坊を生んだばかりの魔術師が他にみつからなくて、それで……」

「でも僕はコンチータでよかったよ。そのおかげでタティに会えたんだからね」

「アレックス様……」

「コンチータには随分よくして貰ったと思ってるんだ。謙虚すぎて、あんまり母親代わりとはいかなかったけど、二人がいてくれたおかげで僕は家族というものを理解することができた。

これがもし兄さんと二人だけで暮らしていたとしたら、僕は今頃きっとものすごく荒んでいたと思う。彼は何て言うか、いろいろな意味で大雑把だからね。

だからタティがいつも傍にいてくれてすごく……感謝してる。細やかな心配りとか、そういうことに僕はいつも助けられていたと思うんだ。だから」

タティが今にも涙をこぼしそうな顔で僕を見ていることに気がついて、僕は少し笑ってみせた。

「これからは、僕が君を守ってあげるからね。僕たちのこと、誰にも反対なんかさせない」

「はい…。嬉しいです、アレックス様」

「うん」

そして僕らは横になったまま、お互いにしばらくみつめあった。

タティはまさに、白馬の王子様でも見ているような夢見る顔で僕のことを見ているので、僕はいつもこういうことをなかなか言い出しづらかったのだが、やがて再びタティにのしかかった。

「……ところでタティ」

「はい？」

「……、僕、あの……、つまり、したいんだけど……いいかな？」

第５２話　貴方を慕って（１）

気分の切り替えというのは、大変なのだ。僕はタティと過ごしているときと、それ以外のときの気持ちの切り替えをするのに、今のところ四苦八苦していた。

特にタティと夢のような気分を味わった後、正気に返るときっていうのが……、僕は何しろ伯爵の弟として権威的でいなくてはいけない。

翌朝、気を引き締めてサンメープル城の城前広場に行くと、年末の陛下の夜会へ赴く兄さんの周辺の人々や、護衛たちがもう集まっていた。まだ当主である兄さんがお出ましになっていないこともあって、彼らは年の瀬の浮き足立った笑顔であれこれと雑談を交し合っていた。たとえ王のパーティーそのものに参加することはできないとしても、多くの金が惜しげもなく消費されるこの時期、何かといい目に与れるものなのかもしれないと思った。

彼らは僕の姿をみつけると、一人残らず挨拶や敬礼を欠かさなかったが、やはり兄さんを間近にしているときとしていないときの彼らの反応の違いは、苦笑いが起こってくるほどあからさまに違っていた。勿論彼らは僕にも納得がいくだけの敬意を払っているのだが、兄さんを目前にすると、誰もが命懸けになったからだ。

城前広場の足元の石畳には、ルイーズが作成したものと思われる大規模の魔法陣が描かれていて、その文字盤は魔力を帯びていることを証明するように青白く明滅を繰り返していた。これはそれなりの階級にある魔術師たちには身につけることが要請されて然るべき魔法で、遠距離移動をするのに用いられるものだった。

マジックスペルとも呼ばれている古代魔法語が、古えの時代の特別な方程式と芸術性を持って羅列しているその様はとても美しかった。魔法というものは、同じ魔法でも術者の力量や知性によっていかようにも可能性を左右されるものだが、才能の高いと評判のルイーズ

の場合、魔法陣を用意することで一度に数百名もの人間を遠方へ運ぶことも可能なようだった。これをもし軍事転用されれば、考えひとつで一国を揺るがしかねない危険性が生じてくることは誰しも分かることだろう。

しかしこれらの反則的な能力を反乱等に利用されないために、我が国では魔法の知識の流出に関しては非常に厳格な統制がなされていた。簡単に言うと、財産や権力が一部の裕福な人間によって独占されているのと同じ状態ということだ。

そして例えばアディンセル家に所有を許されている魔法の知識を供与されるとき、彼に仕える魔術師は高い懲罰性を持つ呪術契約で自らを縛ることを前提とする。これによって、危険な魔法を識る代わりに、主人に不利益のある行動を取ることが絶対にできないように、予め身の破滅を担保させられるわけだ。

そもそも魔術師というのは、高い位にある人間を呪術や災厄から護るための機関なので、才能が高ければ高いほど、裏切ることが絶対にできないための方策が幼少の頃より何重にも施されることが普通だった。

彼らが主人と共に育てられることが習慣化していることも、幼い頃から主人に対して肉親の情に近いものを植えつけることによって、感情面でも離反できないようにするためなのだ。タティは僕のことが子供の頃から好きだったと言ってくれているけど、もし、こうした感情の発生すら誰かによって予め計算されているのだとしたら、これはとても恐ろしいことだった。

ルイーズはいつでも気楽な顔をしているが、魔術師として優秀な彼女はその人生の手綱を生涯兄さんに握られ続ける立場にあるわけで、となれば兄さん以外に優先するべき人間を見つける行為である結婚さえも難しいということになる。

それを思えば、派手な服装や挑発的に色気を振り撒くくらいのことは、兄さんとしても許してやらざるを得ないものなのかもしれないと思った。

「顔が上気してますよ」

外套を着て澄まし込んでいる僕を見つけると、さっそくカイトが近寄って来て僕をからかった。

「実家に帰らなかったのか」

僕が言うと、カイトは曖昧に首を振った。

「あそこには、居場所がないんでね。
それに、俺はアレックス様にお仕えしている身ですしね」

僕は頷いた。

「まあ、何だかんだ言い訳してジェシカもいつもこの城に居るからね。ここには年寄りがいないせいか、兄さんの側近の中でも独身者なんかは結構居ることが多い。広間のひとつには、年末年始用にカードゲームの得点表ができてたし。避難所になってるのかも、だから君も好きにするといいよ。騎士団の宿舎はいかにも冷えそうだし、適当な部屋で寝泊りもするといい」

「有難いです」

「でも僕はタティと遊ぶから、いつも君の相手はしてられないけどね」

「分かってますとも。
今だって朝からタティとイチャイチャしてたんでしょ？　何日か会えないもんだから」

いつもの通りの軽い調子で、カイトは言った。

「いや、朝からじゃないな。アレックス様、なんか寝不足っぽくないですか？
ああ……、こりゃまた。俺なんて薄汚い騎士団員どもとビール代を賭けてポーカーしてたってのに、貴方ときたら。夜通し励んだんですね？」
「な、何だよ出し抜けにっ。
いいかい、お、憶測で物を言って貰っては困るね。僕は別にそんなことは……」
「何を今更。貴方はね、分かりやすいったらないんですよ。朝っぱらから緩んだ顔しちゃってるんだから、どうしようもないですね。
ああ、この間までは俺の仲間だったのに……」
緩んだ顔をしているなんて侮辱されてまさか腹が立たないはずもなく、僕はカイトにすげなくした。
「ふん、仲間？　僕と君が？　友だちかどうかさえ怪しいのに」
「童貞仲間ですよ」
そしてカイトが白けた顔で頭を振ると、更に何処からかルイーズが湧いて出て来た。
「あらん、そういうことなら」
彼女はそう言ったかと思うと軽い足取りでカイトに近づき、彼の首に手をかけカイトにキスをしようとした。
公衆の面前で唇に接吻しようなんて、それは傍で見ている僕でさえうろたえるような、破廉恥極まりない行為だった。
「なっ、何なさるんですっ！？」

カイトが驚いた声を出して彼女の肩を掴み、丁寧に離すと、ルイーズは両腕を後ろに組み、何やら楽しそうに彼を見上げた。

「あら、突き飛ばさないなんて、貴方って見かけによらず紳士なのね」

「そ、そりゃ、女相手ですから……。こほん。俺はこう見えてなかなか紳士なんです」

「うふふ。可愛いのね」

「か、可愛い？」

ルイーズのお世辞を真に受けたカイトは動揺して自分を指差し、それから近くにいる僕のほうを見て相手を間違えたんじゃないかとルイーズに言った。まあ確かに、カイトは可愛くないと僕は思うので、そうなると僕のほうが可愛いことになるかもしれなかった。

しかしルイーズは、断然カイトのことを見てこう言った。

「いいえ。貴方のことよ。貴方、とってもキュートだわ。アレックス様がお仲間じゃなくなって寂しいって言うから、私でよかったら、お相手をして差し上げようと思ったのよ」

「お、お相手！？」

一瞬カイトが涎を垂らしかねないような、ものすごく嬉しそうな顔をしたのが、僕はどうも気に入らなかったが、黙っていた。

カイトはいい奴だと思うけど、僕はこの場を立ち去るよりは見張ったほうがいいと思った。

「い、いや、いいです。なんか、悪いですし」

カイトはすぐに我に返って、恥ずかしそうに両手を振ってルイーズの申し出を断った。

「あら、でも。恋人はいらっしゃらないんでしょ？」
「そら、恋人はいませんけども……」
「じゃあ、いいじゃない？　年の瀬なんだもの。独り者同士、楽しくしましょうよ」
「いやっ、だ、駄目です。それに第一、貴方は伯爵様の魔術師なのに。そんなの閣下に叱られてしまいますって言うか、たぶん殺されますから」
「伯爵様は、そんなことでお怒りにならないわ。だって他でもないご自身が、自由恋愛を日々謳歌なさっているんですもの。この問題に関して、彼は寛大よ」
「いや、しかし」
「試してみれば分かるわ」

そしてルイーズは甘い調子でカイトの耳元に囁いた。彼女の赤い唇の動きは艶かしく、異性という異性の関心を惹きつけるために存在している媚薬であり、僕はそれに吸い寄せられるように魅了されて視線を動かすことを躊躇った。
勿論僕にはタティがいるし、別にルイーズとどうにかなりたいなんてことを考えているわけではないのだが、やっぱりこれほどの美人に好意を寄せられるというのは、男としては純粋に羨ましいことだった。
ルイーズがカイトに何か囁いているその言葉が、僕にはまるで世界の重大な秘密であるかのように思えた。それなのにこの魅力からの誘惑に対して、敢然と拒否を提示できるカイトの意志の強さもまた、僕は妬ましかった。
彼が立場上、ウェブスター男爵の娘に操を立てなければならないという事情は僕にだって分かっていた。それでも一度きりのこととはいえ、簡単にエステルに傾いてしまった僕よりも、カイトのほうがずっと男としての価値が高いことを、いかにも男慣れしていそうな

ルイーズが一瞬で見抜き、暗に僕にあてつけているかのようでその意味でも気に入らなかった。

第53話　貴方を慕って（2）

「そんなこと言われても、駄目なものは駄目なんですって」
「あらどうして？」
「それはだから、俺には結婚相手がいるんですって……」
「随分、忠節を尽くしていらっしゃるのね。そんなに愛されているなんて、彼女が羨ましいわ。ねえその方、貴方にとってそんなに魅力があるの？　私よりも？」

冗談めかしてそんなことを言うルイーズのほうが、カイトよりもよっぽど未練のありそうな顔でカイトを見ているので、僕はとうとうこの不届きなやり取りに苦言を呈さなくてはならなくなった。
僕は別に、ルイーズが僕には一向に興味を示さず、抱きついても来ないなんてつまらないことで嫉妬をしているわけじゃないのだが、伯爵家の居城の玄関前で、朝からこんな、風紀を乱すようなことを認めるわけにはいかなかったからだ。
僕はカイトとルイーズの間に割って入って、ルイーズに文句を言った。

「ルイーズ、君は朝から何なんだ？　兄さんがおみえになっていたら、きっと雷が落ちているところだろう。
だいたい、女性から男にあ、相手をしていいなんて誘うなんて、恥を知ったほうがいいんだ。
君ももういい年なんだから、冗談も大概にしたほうがいい。確かに君が綺麗な顔をしていることは認めるけど、それにちょっとは若く見えるにしても――」
「あら、嬉しいわね。それは褒めてくださっていると受け取ってもよろしいの？」
「ナイス、プラス思考」

ルイーズが言うと、カイトがすかさずそう言って茶々を入れて、それまでの危ういやり取りが何だったのかというくらい、二人は楽しげに笑いあった。まるで僕だけが大人の会話から取り残されているようで、それで僕はまた怒り出さなければならなかった。

「褒めているんじゃないよ！　ふしだらだと言っているんだ」

「アレックス様、そんなに大きな声を出さなくても聞こえていてよ。まったくどなたに似たのやら、頭の堅いところは困ったものね」

ルイーズは自分が僕に怒られていることが分かっていないのか、右手を頬に添えて、考え深げにそう言った。

「先代伯爵様じゃないですかね？　俺は直接には存じませんが、相当に真面目な方だったのでしょう？
特に女性関係なんかは、若い頃からいつも奥様を大切にしていらしたって。その辺閣下とは正反対だったって評判、耳にしますよ」

「そうね。そう言われればそうかもしれないわね」

カイトの言葉に、ルイーズは曖昧に頷いた。

「カイト様がそう言うなら、そういうことに、しておいてもいいわ」

ルイーズはそうつけ加えてから、カイトの腕に素早く腕を絡ませた。

「ねえ、だからこのことについて、今夜あたり二人っきりでお話しませんこと？　ベッドで。ああ、バスタブでもいいわね。王都の夜は冷え込むから、温かいお湯の中で」

「勘弁してくださいって、ほんとにもう……」

「私ね、貴方の身体ってすごくセクシーだと思うの。それにすごく」

「それじゃ何ですか、貴方は俺の身体めあてなんですかい」
「あら、うふふ。それじゃあご不満？　勿論、性格だって気に入っていてよ……」

そしてルイーズが、僕を完全に無視したままカイトの胸の辺りに白い手を這わせ始めたので、僕は爆発してしまった。
僕は再びカイトとルイーズの間に割って入って二人を強引に引き剥がし、それからルイーズの二の腕を取って彼女を思い切り睨みつけた。

「もういい加減にするんだ。ルイーズ、僕はこれまでにもいつも思っていたけど、服装といい、とにかく君は爛れ過ぎだ。これ以上酷い言葉で君のことを表現されたくないんだったら、少しは自重してくれ。朝から男を誘うなんて、幾ら何でもあんまり酷い」

するとルイーズは、ようやく少し反省したような顔で僕を見上げた。

「そんなにお怒りにならないで。何も、ここで服を脱いだわけでもないのですもの」
「ふ、服？　そんなことをしてご覧よ、僕は……」

僕は何か罰を加えたいという意図のことを言いたかったのだが、服を脱ぐなんて酷いことをあっさり口にするルイーズの破廉恥さのせいで、言葉が出てこなくて口を虚しく開けたまま彼女を見つめてしまった。
それを見てルイーズが可笑しそうに笑った。信じられないことに、彼女は主君の弟である僕のことを、からかって遊んでいたのだ。

「あらん、可愛い。思わずエッチなこと考えちゃったのね。もしかして、私の裸かしら？」

「かっ、考えるわけないじゃないか、なんでそうなるんだ、君ほんとおかしいよ！」

「あら、怒られちゃった。うふふ、急にそんなに機嫌を悪くなさるなんて、アレックス様ったら気分屋さんね。赤ちゃんみたい」

「あっ…？　赤ちゃんって何だよ、僕のいったい何処が赤ちゃんだって言うんだ！

機嫌を悪くしてるのは、君の素行があんまり酷いからだろうっ。それに僕はタティに赤ちゃんが出来るのを待ってはいても、自分が赤ちゃんであるわけが……、君よりでかい男を相手になんて失礼なことを言うんだ……、ああルイーズ、僕は君には本当に心底――」

ルイーズのせいで、僕はとうとう本気でイライラしていたが、僕が本当に腹を立てているということが、ここへきてようやくルイーズにも伝わったんだろう。彼女は今度こそやっと少し悪びれたと思われる顔をしてこう言った。

「アレックス様、そんなにお怒りにならないで。だって、カイト様は何処となく似ているんですもの。だからつい構いたくなってしまうのよ」

「似ているって、誰にさ」

僕はたぶん、ものすごく冷たく言ったと思うが、腹立たしいことにルイーズはそれを恐がるどころか、気にした様子すら見受けられなかった。

「初恋の人。彼、とっても明るくて元気で、それに可愛い人だったの。一緒にいると、私まで元気になれたわ」

ルイーズが別にカイト自身に関心があるわけではないと知って、僕は少し態度を和らげた。

「そ、そう。その人とは、駄目だったの？」

僕がたずねると、ルイーズは頷いた。

「いなくなってしまったわ。今でも忘れていないけれど」

「死んだの？」

「ええ」

「ふうん……」

僕はそう答えてから、ちょっとだけ気になってルイーズに言った。

「……僕はカイトほど明るくはないかもしれないけど、結構元気だと思うんだけど」

するとルイーズは明るく笑って、僕の言葉をまたしても下品にとって煙に巻いた。

「いやだわ、アレックス様のエッチ。タティだけじゃ、満足おできにならないの？」

決してそんな意味で言ったんじゃないと、僕は僕の名誉のためにこれを訂正しようと思ったが、そんなことをしたほうが余程男の了見が狭く、しかもエッチであることを強調するような気がして僕はジレンマに陥った。

そこへ、兄さんが城内からジェシカや数名の部下を引き連れてご登場されたことで、その場の空気は急激に引き締まり、この馬鹿馬鹿しいやり取りはお開きとなった。ルイーズは急いで兄さんの傍らに行き、小鳥のような仕草でいつものように彼を見上げた。

ルイーズは女性としては身長のあるほうなのだが、何しろ兄さんが

大きいので、彼の側にいるとそれまでよりもずっと小柄で華奢に見えた。

第５４話　夜会

実に五十余年もの在位を誇る国王陛下の御世にあって、忠実なる我々臣下が年末に催される彼の夜会に招かれることは、何をおいても優先するべき栄誉だった。

その日、太陽が冬空の向こう側にこぼれ落ちてしまうと、世界は一年でもっとも煌びやかな夜を迎えることになった。

陛下の栄光と国家の繁栄を祝う盛大な祝賀の夜は、この日を皮切りに数日間、連日連夜王都を賑わせることになる。

僕が例年通りアディンセル伯爵である兄さんのお供をして、壮麗にして厳粛なる王城一階の白と金色の絡み合う輝きの大広間に足を踏み入れると、眩しい光の洪水と、兄さんのお名前や兄さんが所有する爵位名を声高に詠唱する声、それから甘く攻撃的なワルツがさっそく僕らを出迎えた。

その人の心を高揚させてなお余りある力の調べは、国内随一を誇る国立楽団による、建国歌劇の一場面だった。建国王セリウスと、彼の即位を祝福するために神が遣わした天国の住人である美しい乙女とが、運命の恋に落ちるその瞬間の激しさを描かれたものだ。

神の娘を妻に娶ったセリウスの子孫は当然ながら神の血を引き、以後人並みはずれた知性とありとあらゆる才能、それに神の美貌を手に入れたと言われていて、それが現在広間の奥の壇上におわす老王陛下ということになる。

もっとも齢七十を越えられた陛下のお顔の半分は、今では白い髭に覆われていて定かではないのだが、伝聞と、若き日の肖像画を拝見する限りにおいては、素晴らしい美丈夫であったことは語るべくもないことだった。陛下は知勇に優れ、その長い人生のうち、三度の戦役を戦われた勇猛果敢なる我が国の英雄でもあった。特に長年の因縁である北方王国との戦争では、相手方の王太子を御自らその手で討ち取られるという形で輝かしい勝利を収められ、氷に閉ざされ

る北国にとってはあまりにも重要な小麦の産地である南部領を収奪しおおせた功績は後世に語り継がれることになるだろう。

「アレックス、今宵はフレデリック殿下がおわすようだ」

陛下の隣に座している、若き日の陛下の面影を実際に映した美少年を示して、兄さんが僕の耳元に囁いた。

僕らがいる夜会会場の入り口付近から陛下や王子がおいでの場所までは、賑々しく飾り立てられ招待客のひしめく長い距離があるのだが、彼が金色巻き毛の世にも美しい少年であることは遠目からでもはっきりと見て取ることができた。

少年王子は青色の立派な衣装で姿勢を正し、少々傲慢な様相で、編み上げられた薔薇と金細工の壇上より会場を睥睨していた。

「十六を迎えられたので、そろそろこうした場にお出ましになったのだろう。噂に違わぬ美少年だとは思わないかね」

生まれついての社交家である兄さんは、華やかなる夜を前に少し興奮気味であり、彼の言葉はいつにもまして躍るような響きを持っていた。兄さんの小声での問いかけに、僕は素直に頷いて感想を述べた。

「はい、あの、美貌とはかねがね……、ああ、薔薇君とは本当に美しい方ですね。僕は本物の天使かと思いました」

「ふっ。確かにな。確かに彼はよく天使と称される。確かにあの方は聖なる父の御使いに見える――、もっとも殿下におかれては、そんなふうに言われることをまず好んでいないだろうが。

あの美しい方が姫であったなら、私はおまえを花婿に売り込んでいたところなのだがね」

兄さんは皮肉でも言うような顔をして言った。

「だがあれで、御気性の激しさはなかなかのものでいらっしゃるのだ。アレックス、おまえなどよりも余程な。実際に宮廷でも、若き王子に御世が代われば、再び戦争の時代に突入するだろうと囁かれている。私もそう思うよ。人並みはずれて顰蹙を買うほどに気位が高いわけではないのだが、何しろ劣等感の強い方なのだ」

「劣等感？　彼は……あんなに御立派なのに？」

「あの妾腹の王子の動向には、今後注目すべきだろうな」

「だから力を示したがっていると？」

この優雅な場に相応しからぬ物騒な言葉に、僕は眉を顰めた。しかし兄さんはご機嫌に微笑むと、それ以上は何も言わずに僕の肩を叩いた。それと言うのも、いつの間にやら兄さんの姿をみつけた女性たちが何人も彼の周りに集まって来ていて、彼女たちは誰しも熱に浮かされた顔をして兄さんを出迎えていたからだ。

兄さんが堂々とした足取りで女性たちの中に進んで行くと、女性たちはあっという間に彼を囲い込み、もう誰も兄さんの側に近寄れるような隙間さえなくなってしまったその人気については、見事の一言だった。

外見のよさに関しては非の打ち所がないのかもしれないが、ここには兄さん以上に権力や財力を持つ家の当主だって何人もいるだろうし、そろそろ年頃になりつつある美貌の王子だっておわしている。それなのに、彼女たちっていうのはいったい何だってあの不誠実な遊び人がお気に入りなのか、僕にはよく分からないのだが、あれだけ熱狂されているのだから、たぶん女性にとってみれば兄さんの何かがとてつもなくいいんだろう。

「ギルバート様、お待ちしておりましたのよ！

わたくしがどんなにこの夜を待ち焦がれていたか、ギルバート様はお分かりになりまして？　背の高い貴方に相応しいレディであるために、今夜は少し背伸びを」

「ちょっと、貴方、邪魔だから退いてくださらない？　伯爵様、それよりどうぞ私を見てくださいな。とっておきの紅をつけて参りましたの。ゴールドローズアベニューのあの化粧品店で、貴方がいちばん好きだとおっしゃったお色ですのよ」

「あら可哀想、それじゃ貴方は伯爵様に遊ばれただけに違いないわ。だって、本当に愛しい女性とデートをするのに、伯爵様がお連れくださるコースはそんな場所じゃないんですもの。劇場は欠かせないのよ。彼のご趣味なの」

「何よ貴方、しったかぶって嫌な女ね。劇場こそどうでもいい女を連れて行くのに最適の場所よ。無駄話をしないで済むって、彼が私に教えてくれましたもの」

「ギルバート様、私、とても不穏な噂を聞きましたの。ウィスラーナ侯爵の妹姫とのご交際の噂、本当なのですか？」

「それならわたしもお兄様から聞きました。候女だなんて……、あまりに現実的すぎるわ。貴方のお心が動いてしまいやしないかと眠れぬ夜を過ごしました。

ねえギルバート様、その方と結婚なんて、なさらないわね。そんなお話は只のデマだとおっしゃって」

いつの間にか、僕は兄さんではなく、彼に群がる女性たちの後ろ姿を見て立ち尽くしていた。僕はアディンセル伯爵のみを出迎えるべく待ち構えていた女性たちの歓待からものの見事に爪弾かれた我が身に、しばし呆然とした。

また兄さんの後方両脇に添え物のようにつき従っていたジェシカとルイーズに至っては、群がる姫君方によって恋の障害とみなされたのだろう、力ずくで押し退けられるという手酷い洗礼を受けていた。

「まあっ、なんて下品なの？　ここは市場か、それとも場末か何かだったのかしら！」

誰かのそんな言葉と同時に、兄さんを巡ってたちまち押し合いが始まった。

誰もが夜会用の大変豪華なドレスを着ていたし、それに歩くにも一苦労ありそうな細いヒールを履いているのもいたりして、少し押されただけでも次々バランスを崩しかけ、女性たちの各々を非難するための大袈裟な悲鳴が上がってちょっとした騒ぎとなった。

「ちょっとその大きなお尻をお退けになって」

「貴方、誰に口をきいているのよ。わたくしはギース公の従姉妹の……」

「ここで問題なのは父君様やご兄弟の身分ではなくて、個人としての美しさよ。誰がこの方に釣り合うだけ美しいかということだわっ！」

「あっ、伯爵様、腕を組んでいる女性は何処のどなたですの！？」

「誰かあの抜け駆け女を八つ裂きにして！　ゴードン、あの女の髪を燃やしてしまうのよ！」

押し退けあう女性たちのうちの誰かが、自分の魔術師に命令するために手を叩き出すと、魔術師を連れることが許されている身分の女性たちは皆が皆手を叩き始めていた。

兄さんにエスコートされる権利を奪い合うべく巻き起こった騒乱なのに、兄さんは涼しい顔をして誰かに肩入れするようなこともなく澄ましていた。

自分がどれほど兄さんを愛しているかを訴える女性の群れと、陛下の御前で魔法なんか使用できるはずもない哀れな魔術師の群れが入り乱れる混乱を、僕とカイトは指を銜えて眺めていた。

毎年だいたい似たようなことが起こるとはいえ、まだ宵の口からこ

れとは、今年は一段と兄さんを巡る争奪戦は過激になりそうだと思った。

「ううむっ、あれが女の戦いってやつなんですね。権力がある女ってのは、やることがダイナミックだ。こんな場所で魔法を使えなんて、とても男にゃ言えないことですよ。いやはや、恋に目が眩んだ女ってのはすごいもんだ。

俺も一生に一度くらいは、あのくらいもててみたいけども……」

「兄さんがハーレムを持つと、たぶんああなるんだね……、だから一人ずつなのか」

第５５話　適性がない

白の垂れ幕の下げられた輝きの大広間の正面中央、国王陛下と王子殿下が座していらっしゃる玉座の高みには、人間の王に恋と純潔を捧げた天上の聖女の像が装飾の一部として掲げられてあった。光の翼を持ち、星の名前を持つかの聖乙女は、黄金と白金が交互に入り混じった光の輪を背中にその両腕を広げていて、穏やかな表情をし、今はこの場に集うすべてのものを抱擁しているかのようだった。

老年の国王陛下は夜会への招待に対する感激を伝えるべく慕い寄って来る者たちと代わる代わる会話を楽しみ、王子殿下と言えば静かに腰かけていることにもう飽きているのか、時折あくびをしては側仕えらしい青年にたしなめられて、余計に気分を悪くしたように頬杖をついていた。彼が話をするときの攻撃的な様子は兄さんに通じるものがあり、その振る舞いには確かに内気さの片鱗も見えず、たぶんこうした場ではどうにもならないような何か無理難題を言って、側近の青年を困らせているのが見て取れた。

僕はこの夜、カイトとロビンを引き連れて賑わう広間を漂っていたが、ロビンは僕より年下で、僕は自分より年下の人間とあまり係わりを持ったことがなかったので、ましてや女で年下の彼女とはどう接したらいいかがよく分からず、これまであまり私的な会話をしたことがなかった。だからこのときも話し相手は専らカイトだった。それから会場内にできあがっている幾つかの集団に加えて貰っては、半ば義務的に取り留めのない会話をするということを繰り返していた。誰とも話をしていなくても、僕もカイトもそれぞれが立派な夜会服を着ていたし、使用人であるように見られることはないとは思うが、まともな貴族なら最低限、しがらみのある人間を見つけたならば挨拶を交わしておく必要があったからだ。

僕は母上の腹の中にでも置き忘れて来てしまった社交性を搾り出し

ながら、毎年繰り返される同じような社交辞令、ジョーク、政治談議、それから噂話に興じるふりをして時間を過ごした。今年も例年通り誰もが兄さんの様子を聞きたがるので、求められるままにアディンセル伯爵の細々した話を披露すると、彼らはそれを褒めちぎったり、さもなければ皮肉と言って構わないような感想や愛想笑いを浮かべた。いつもなら、上位伯爵の弟である僕に対して好意的な年配の紳士ほどそうだったので、それが何を意味しているのか、僕を翻弄して楽しみたいのか、考え込んでしまう反応だった。

また別の何人かの紳士たちと話しているとき、何か密やかな思惑の存在を感じることがあった。そこで僕はその正体を探りたかったが、彼らはそれに気がつくと僕のことだけを使い古されたジョークであしらった。親しい人間だけにしか教えられない暗黙の領域には、僕のような部外者が踏み込むことはお断りだという意思表示だということは分かっていた。

彼らは引き続き友好的な顔をしていたが、目の前には決して突き崩せることのない壁が存在していることを疑う余地はなく、別に議論に負けているわけでもないのに、こんなことが何度か続くと、僕はとても惨めな気持ちになり精神的にぎりぎりだった。側にいるカイトはこういうときあまり役に立たなかった。彼は僕よりもずっと話し上手ではあったが、相手が名家の当主級の人間ともなると、男爵程度ではそもそも会話に加えて貰えないからだ。それに話すとぼろが出るからと言って自粛していたようだった。

それから、貴公子が取るべきそうした模範的な行動にやがて一段落をつけて、僕らはパーティー会場の隅のほうに移動したというわけだった。

僕は僅かの間にとても疲労し、どんな些細なことにも傷ついていて、国王陛下が宴席を退場されたならばその瞬間にここを飛び出て伯爵邸に帰ろうと自分を励ましていた。そして今後予定されている他のパーティーへの出席は全部キャンセルして、できることなら今すぐタティのいる自分の部屋の寝室へ逃げ込みたかった。

「大丈夫ですか？　上流の人々ってのも、人間が出来ているとは限らないですからねえ。あまり気にしないことです。ああいうのは、何処にでもあるもんです。たぶん、単にアレックス様が若いからってことだと思いますよ」

カイトが壁にもたれかかって落ち込む僕に声をかけたが、僕はとても立ち直れなかった。

「あそこには僕より若いのがいたよ。いや、いいんだ、僕が人づきあいってやつに、絶望的に適性がなく、いつまでも馴染めないせいなんだ。

ジョークもいまいちついていけない。ブラックジョークが多すぎる。女とか、農民とかを酷い目にあわせて笑う種類のが……、それによく知らない人の悪口に参加しなくちゃいけないのもきつい。政治や経済の話も語り過ぎると、たちまちマイナーな哲学者の思想を通した意見を求められる。経済学者じゃないんだよ。哲学者の思想で何を語れって言うんだ。あんなの嫌がらせもいいところだ。自分だって答えられないくせにだ。

それに今夜はどうしてか兄さんのことを話題にされて参ったよ。女性はいつでも兄さんの話を聞きたがるけど、今日は古株の紳士たちが……どういうつもりか、ただ、とにかく関心を持たれているようだ。何なんだろうね」

「閣下は実力者だから、やっかみが多いんじゃないでしょうか」

僕は頷いた。そして顔を上げて苦笑した。

「兄さんは、少年の頃からこういう世界に生きているんだ。こういう、他人の揚げ足を沼地に引きずり込むような意地悪な場所にいて、しかも目立っている。しかもああして平然と女性に囲まれてね。女

が絡んだら、周りからの妬みは容易に何十倍にもなるだろう。どれだけきついか分かったものじゃないのに。よく切り抜けていらしたと思うよ。少なくとも、僕には耐えられる場所じゃないよ。ウィシャート公爵っていう強い味方がいるにしても、父親ってわけじゃないからね。こんなことを、庇ってくれるわけじゃないだろうし」

僕が混乱していることに気づいたらしいカイトは、通りがかった給仕係に近づき、水を貰って来て渡してくれた。
僕はそれを受け取り、喉を潤して、一息ついた。

「ま、落ち着きましょう。
一応アディンセル家の人間として挨拶を交わすべき人物にはだいたいそうしたんですから、後は帰るまでぶらぶらしていればいいだけですよ」
「うん、そうだね」

第５６話　恋の主役

「でもやっぱりフレデリック王子の話題が多かったかもしれない。王子の美貌について、それに国王陛下が近頃では王子のことをとてもお認めになっていらっしゃること。

陛下はフェリア王女にはそれは甘い父親だったらしいが、フレデリック王子にはとても厳しくされているそうなんだけど、それは母親の身分による差別ではなくて、男子たる王子を見込んでいるからこそなんだそうだ。僕が耳にした限りでは。つまり親しくもない相手と話をするときの便利な話題ってことだけど」

少しして、やっと気持ちのバランスを取り戻し、肩の力を抜いて僕がまともな感想を言うと、カイトは頷いた。

「そりゃあ、今夜は世継ぎの王子様の酒宴初登場らしいですからねえ……、誰もが興味津々だし、話をしやすいんですよ。しかも近い将来確実に、とんでもない美青年になりそうな感じだから」

「とんでもない美青年か……」

僕は呟き、それからカイトを見てわざとらしく笑顔を作った。

「悪いけど全然興味がないな。王子様なんて」

するとカイトも笑った。

「そりゃまあ、そういう次元ではね」

「でもどうやらそう好意的な意見ばかりじゃないようだ。実際、彼には姉姫を害したという噂がつき纏ってる。母親がフェリア王女づ

きの侍女だったんだ。だから、王妃や王女の縁者や、王女を慕っていた諸侯は今でも彼を憎んでいるし、そうでない者の間にも憶測や陰謀論が後を絶たない」

「どうしてフレデリック王子が悪者にされるんでしょうか？」

腑に落ちない顔でカイトは言った。

「フェリア王女が亡くなられたとき、彼はまだとても幼かったでしょう。陰謀とは何等無関係のはず。

それにそもそも、フェリア王女に王位継承権はなかったのに？」

「だから余計に腹が立つ人間もいるんだろう。正当なる王妃の生んだ姫君には、女であるために王位を継ぐ権利すらなかったのに、妾腹の彼にはあるんだから……」

「おいたわしや。完全に逆恨みじゃないですか」

そう言って、遠くの薔薇君に視線をやるカイトが、未だ一部の諸侯の反感を買って微妙な立場にある少年王子の境遇に、自分を重ねていることは分かっていた。

「君、妙に王子に肩入れしているんだね」

「そうですか？」

「ウェブスター男爵家のお家騒動に似ているからかな」

僕が言うと、カイトは惨めそうな顔をして僕を見た。

「俺は別に……、男爵家が欲しいなんて思っているわけじゃないですよ。まるで俺が家を乗っ取るみたいに言う連中もいますが、こちとら大人の事情で、振りまわされている被害者なんです。

確かに、そのせいで俺は昔からフレデリック王子に自分の状況を重ねて、彼にある種の親近感を持っていることは認めますけどね」

その言葉に、僕は頷いた。

「うん、知ってる。ごめん、悪気はなかったんだ。確かに王子はその……でも熱狂的に人気があるよね。つまり一般大衆には大人気だそうだ」

カイトは苦笑いしながら同意した。

「御生母様が王女の侍女と言っても、貴族の出には違いないそうだから、厳密には血筋的にも、恐らく思想的にも、どう考えても王子様は平民側の人間じゃないんですけどね。しかし大衆にしてみれば、強権主義者たちによって虐げられている者という印象が強いんでしょう」

「ところでねえ、ウェブスター家の令嬢は、今日は来ているんだっけ？　そうなら是非紹介して欲しいな。いや、僕としては遠くから見てみるだけでいいんだけどね。

年がら年中女に飢えてる君が、結婚するのを嫌がるのがどんななのか興味があるんだ」

「完全に面白がってますね。タティが従順だと思って」

僕の問いかけに、カイトはしぶしぶ頷いた。

「いいですよ。でも気をつけてください、お嬢様は本当にとんでもなく……」

そのとき、すぐ近くの女性たちの集団から只ならない歓声が上がった。それまでは壇上のフレデリック王子の姿を見て、あれこれ恋の噂をしあっていた若い娘たちの群れだ。何事かと思って僕が振り向くと、彼女たちはたった今まで興味の的だったフレデリック王子か

らは完全に顔を背け、いまや広間を賑わせている別の貴公子に色めき立っていた。
それを見たカイトは、すぐに自虐的な調子で不平を言った。

「アレックス様、まったくこんなに近くに若くてピチピチした男がいるっていうのに、女どもときたら、まったく分かってない。分かってないですよ」

僕はそれに対し、何とも言えずに苦笑いで応対した。
確かに我が国では主役は言うまでもなく常に王家の方々、今なら国王陛下であり、王子殿下であることに違いはなかった。
しかし壇上の、高貴なる方々に預かり知らない恋の世界においては、今年も主役は兄さんだったわけなのだ。
女性たちの歓声の理由というのは、どうも兄さんが広間の中央で催されているダンスの輪の中に何処かの姫君を連れて加わったために、会場にいる女性という女性の熱い視線が注がれてしまったということのようだった。
こうした場所で主役となる人間と言えば、国中の美姫たちの中でも美貌の抜きん出た姫君方であり、彼女たちに釣り合うだけの貴公子たちとなるのだが、親族の欲目というものを承知で言わせて貰えば、はっきり言ってしまえば、人々から美しいと絶賛されている近年の若い貴公子たちでさえ、兄さんの堂々とした華麗さに比べると風采の上がらない若造に過ぎなかった。上背があり、力強く、しかも容姿端麗な兄さんは、間違いなく当代一の美男子だっただろう。
あまつさえ、兄さんは何をやらせても完璧にこなせる憎たらしい種類の人間で、趣味事に過ぎないダンスでさえも手抜かりのない一級品だった。会場中の視線を浴びながら、絶え間なく女性をリードする立ち振る舞いは、同性の僕から見ても感嘆して余りある優雅さであり迫力だった。

「幾ら何でも目立ち過ぎでしょうに。公式デビューの王子より目立ってますよ」

うっとりするほうぼうのご婦人方とは対照的に、カイトが妬ましそうに言っていたが、周辺の男性たちもだいたい似たり寄ったりの顔をして兄さんを見ていた。見まわしてみると、主に性別によって観衆の表情は様々だったが、言えることは誰もがダンスの輪の中のアディンセル伯爵に注目をしてしまっているということだった。皆が兄さんを知っているという顔をしていて、彼に釘づけになっていて、僕は兄さんが思っていたよりもずっと宮廷における知名度の高い有名人であることを改めて思い知った。

この異様な注目の度合いに気づいたんだろう。しまいには、楽団の指揮者までがときどきダンスの輪のほうを振り返り、兄さんの動きにあわせて舞曲を動かしつつあるほどで、最初は誇らしい気持ちでいっぱいだった僕も、こんな大それた様子を夜会の主催者である陛下や殿下がどうお考えになるのかが次第に心配になり、動悸がし、それに少し悪い汗を掻いた。

それなのに、こんなに注目をされて、僕だったらきっと上がってしまって足が縺れてしまうところだろうに、兄さんはますます得意げな顔をして大胆に踊りを続けているという有様なのだ。兄さんの度胸のよさについては、僕としても重々承知しているつもりだったが、こういう場面を見せられるたびに、僕のほうが生きた心地がしなかった。

ダンスを終えると、賞賛と喝采に包まれながら兄さんが僕のほうにやって来た。手を取って同伴している女性はジェシカでもルイーズでもない、見知らぬ女性だった。金色の髪を高く結い上げてから背中に流した、おとなしそうで、それにとても可愛らしい女の人だった。清楚で、兄さんの好みそのままというタイプだ。

アディンセル伯爵に見初められたばかりにうっかり会場中の注目を浴びるはめになり、可哀想に彼女は一人で息が上がって、しかも顔

が真っ赤になっていた。
兄さんはそんな彼女を労わるように、到底信じられないくらい優しく微笑みかけ、手慣れたように顎に触れ、こっそり耳元にキスをした。それで兄さんを取り巻くべく集まっていた周辺の他の女性たちからは怒りの悲鳴が上がり、キスを貰った女性は嬉しそうに恥らって、それから少し誇らしそうな顔をした。

「あんなにして、大丈夫なのですか？」

僕は兄さんが陛下や殿下の御前で目立ちすぎたことを心配してそう問いかけると、兄さんは肩を聳やかした。

「何がだアレックス」
「ですから、陛下の御前であんなに……目立ってしまって。さすがに場所と分を弁えるべきだったのでは」
「いいんだよ、これは単なる余興だ」

兄さんは僕にも、微笑んだままの顔を向けた。

「しかし。今夜は何かと兄さんを妬む声も聞こえましたし、陛下の御前なのですからやはり多少は」

僕が言いかけると、兄さんはふと表情を引き締めて僕を見据えた。

「アレックス。おまえも私の弟であるなら、そう小さいことを言うな。
第一、只の余興でいちいち目くじらを立てるような者に、国家君主は務まらんよ。我らが陛下はこの私が唯一の忠誠を捧げる偉大なる御方。そのように狭量な小物ではない」

第57話　スタープレイヤー

兄さんはそれからも相変わらずたくさんの女性に囲まれ、一方で国内の様々の人物たちと出くわす度に社交的振る舞った。兄さんは普段の傲慢で横柄な振る舞いをおくびにも見せなかったし、他の人々も極めて善良で素行のいい態度が、その人間のすべてであるような顔をして談笑を楽しんでいた。

勿論、笑顔なのに辛辣な皮肉が飛び交っている場面があることを容易に想像することはできた。でも兄さんのことだからたぶん相手をやり込めているだろうし、長年の応酬の末に獲得した友人というものも、もしかするといるものなのかもしれないと思った。

他方、特に旧交を温めるべき友人も、誘惑したい意中の女性が密やかに群集に紛れているわけでもない僕は、ときどきそんな兄さんを視界に置きながら、もう誰かと係わりあいを持つこともなく、果実水を飲んだり、カイトと他愛ないおしゃべりをして、時間を潰すということだけを目的に夜会会場を彷徨っていた。

僕は兄さんのように会場の花となれる存在ではなかったが、何をしていても人の注目を集め、女性を引き寄せるような人生が僕のものではなかったことを、こうして気ままに歩いていられる我が身を思うにつけ、僕は心密かに感謝したい気分でもあった。

何故なら、もし僕が誰しも放っておかないそれこそ兄さんのような魅力的な人物であったとしたなら、きっと到底考えられないほどの社交性を、養っておかなければ切り抜けられないような状況に、立たされることも多かっただろう。何せ世の中には人気者を陥れるために、人前でわざと意地悪な質問をして、恥をかかせようと待ち構えているような人間は後を絶たないものだ。

そして実際にそうした悪意をやり返せるような強さと機知を持ち合わせていないために、能無しの烙印を押され、女性たちの失笑と失望を買い、酷いときには父親や主君の面目まで失うはめになった美

青年を、僕はこの目で何人も見たことがあった。
男の嫉妬というものは、ある意味では女性たちのそれが可愛いと思えるほどに、凄まじいものなのだ。だからそういった同性からの嫉妬心と闘えるだけのものを持っていないならば、こんな場所ででしゃばって、得をするということはないのである。
しかし現実として、僕という男は自分の外見を女のように気にかけている気持ちの悪い自己愛主義者たちに常に目の仇にされるような存在ではないにしても、たまにその種の難癖をつけられるような目にあうということが、ないわけでもなかった。そしてそんなときは、やりあうよりは無視をするという選択は、今のところ上手くいっていた。
「あの気取りきったアディンセル伯の弟が逃げるつもりか、この野郎」
到底馬鹿としか思えない価値観を持つ、何処かの地方伯爵の息子が、自分のほうが金髪が綺麗だなんて話を女性たちにふって、彼女たちがその通りだと認めたからと言って、何だというのか僕には分からなかった。

「えっ、この方、あの伯爵様の弟なの！？」
「ああ、道理でね。わたしは最初から何かが違うと思っていたところだったのよ。
ねえ、こちらの若い方の金髪のトーンが暗いのは、あの素敵なお兄様に似たからなんだわ。ギルバート卿は黒髪だから。素敵な黒髪よ。わたし、黒髪っていちばん好きだわ。勿論、あの方がブロンドなら、ブロンドがいちばん好きになったと思うけど」
「君たち、たったいま僕のほうが綺麗なブロンドだって言ったじゃないか。それを何だい」
「それは事実を言っただけで、お顔は最初からこちらの若い方のほうがよかったと思ってたわ。背も高いし」
「ああ、そうね。背が高いって、いいことよ。一緒に歩いたり、抱

きしめられるときには特にね！」

それで彼は悔しそうに僕を睨んだようだったが、僕はぞろぞろ後ろをついてくる女たちの目的が、たぶん僕が兄さんに合流することなのだろうと思ったので、何だか嬉しくもない気持ちでそのまま夜会会場を取りとめもなく歩き続けた。

「おかしいな。どうして誰も俺の存在に気づかないんだろ。髪の色が問題なんでしょうかね？」

カイトが僕の横で自分の髪を撫でつけながら、更に焦点からずれたことを言っていたので、僕は現実を教えてあげた。

「ゲームにはスタープレイヤーっているだろう。それで、大抵の女性はスタープレイヤーが好きなんだ。カッコイイし、目立つしね。でも僕も君も、そうじゃないってこと」

「さっきのナルシスト野郎もですか」

「あいつは試合にも出られない補欠だ」

「あはは、そりゃ俺もだな。笑えない」

楽団の奏でる切なく甘い音楽が、ひととき僕を感傷的な気分にした。人間である以上、セリウスは年老いて死んでいく定めにある一方で、太陽神の娘はいつまでも若く美しい娘のままであること、その嘆きを謳ったものだ。神の王国で暮らしてさえいたならば、永遠に悲しみのない人生が約束されていたはずの彼女が、人間の王に恋をし、やがて恋人が死に逝くという悲劇に気がつく。それでも愛しい男の

傍を離れる決意もできずに悲嘆に暮れる場面である。
僕は先刻の女性たちの群れを撒くために少し早足で歩いていたが、結局いつの間にかシェアを探している自分に気がついて、少し寂しい気持ちで苦笑いをした。
シェアは貴族だったのか、それとも平民だったのか、考えてみれば僕は知らなかった。シェアは僕が子供の頃、既に兄さんの恋人だったから年上であることは分かるけれども、僕は彼女のはっきりした年齢も知らなかった。ファーストネームしか知らなかったし、子供だったので、そこまで頭がまわらなかったということなのだが、今からしてみると、もう少し彼女のことについて何か手がかりを得ていればよかったのにと思う。
今ではぼんやりした輪郭でしかないよく知りもしない女性のことを、未だに心の隅に置いていることを、とても馬鹿らしいことだと思うことも今ではよくあることだ。事実タティと過ごしているとき、僕はシェアのことをあまり考えなかったし、今ではもう、彼女のことなんてすっかり忘れてしまったんじゃないかと思う瞬間もある。だけどこうして、何でもないときにふとシェアのことを思い出してしまうのは、どうしてなのだろうと思って僕はときどきとても悲しくなった。
この恐ろしい考えについて、僕はずっと長いこと蓋をして生きてきたのだが、神学の教師が言っていた僕の真実の愛というのが、本当は、シェアだったのではないかということが、僕の脳裏をよぎらなくなることはなかった。
僕が生まれて来るのがもう少し早かったなら、シェアと出会ったとき、僕は少なくとも子供ではなかっただろう。そうだったら、少しくらい年下だったとしたって、兄さんの恋人だった彼女を僕のものにすることもできたかもしれない。
でも現実には、僕は子供だったのだ。兄さんに夢中だったシェアが、油断して微笑みかけてくれるような、男として、到底認知もされないような他愛無い存在に過ぎなかった。

僕は彼女にこの気持ちを言わなかったが、もし好意を伝えたとしても、シェアは子供に慕われているとしか思わなかっただろう。
たぶん、歯車が最初からおかしかったのだと思う。
こんなに長い間忘れられずにいるということは、僕たちはきっと何か重要な結びつきを持っているに違いないが、何かの理由で絶望的にすべてが食い違ってしまったんだ。
そしてそれができなかった無意識の後悔が、さもなければ前世から繋いできた大切な約束のようなものが、本来であれば何某かの係わりを結ぶべきだった彼女のことを手放さずに残っていて、それがずっと僕につき纏っているのではないかと……。
でも、そんな自己中心的な感傷を、いつまでも引きずっていてはいけないということも分かっていた。そんなことを考えること自体がタティへの裏切りのように思って、僕はこの考えを急いで頭から追い出した。

第５８話　夜会の片隅にて（１）

そして僕らは相変わらず女性をエスコートするわけでもなく無意味に時間を過ごし、やがて真鍮の器に輝くような様々の料理が盛られている立食場の中でも隅のほうの一角で、たむろしている人々に紛れるに至っていた。

長方形のテーブルの上にあるのは、古くからサンセリウスに伝わる伝統的な定番料理を、ずっと豪勢にしたものが多かった。牛肉の煮込みや仔羊のオリーブオイル焼きには最上級の肉が使われているようだったし、見栄えもよかった。七面鳥の中に何種類もの豆や木の実を詰めて焼く料理、それにハーブで飾られた金の林檎も用意してあった。香辛料のきいたソーセージ、それにパスタやパンも多種揃えられていたが、僕としてはパスタの中に肉を包んだものを、トマトで煮たのが特に美味しそうだと思った。

周囲にはいかにもいいところの出であることが分かる正装した男女がいて、場所によっては混み合っていたが、会場の他の場所にあるようなおしゃべりの輪ができあがっているわけではない。それで、彼らが立場上仕方なくこの夜会に参加をした、言わば僕と同じような人種であることはすぐに分かった。

有閑貴族だからと言って、パーティー好きの人間ばかりではないということを、世の中の人々は分からないのだろうが、僕はこういう場所よりも本がぎっしり詰まった部屋だとか、植物の植えられた庭園にいるほうがよっぽど好きだった。この辺に追いやられている恐らくはそうした似通った嗜好の人々が、結託して友人になったりする動きが少ないのは、彼らがもう人間関係なんてものにはうんざりしている、生まれついてのそういう人々である所以ということを証明してもいた。

「もて過ぎでしょうよ」

そんな中、たぶん幾らかは僕らのような人間とは毛色の違うカイトが、僕の横でもう何度目になるか分からない何か文句を言っていた。僕は我に返って、彼にそのことを聞き返した。

「だから、閣下ですよ。いったい何だってあんなにもてるんですかね」

カイトはどうも僕らの視界の先、もう少し賑やかな人々が集まっている辺りで、相変わらず女性に囲まれている兄さんのことを、また言っているようだった。

「そりゃあ美男で、金持ちで、ルックス抜群……、ああ、そりゃもてますか。
でも顔ならもう少し、王子のほうがよさそうなもんなのにな」

そう言いながら、カイトは皿に取った仔羊を頬張った。もし女性にもてたいなんて本気で思っているなら、食べ方をもう少し上品にしたほうがいいと僕は思ったが、それ以前に、今夜は舞踏がメインのパーティーだというのに、こんな場所でたっぷり食事をしてしまう神経の据わり具合がかえって女性に受けるんじゃないかと思い直して口を噤んだ。

一方の僕と言えば、エステルとの一件以降こうした場所でさえ酒を飲むことにすっかり躊躇するようになってしまった我ながら見事な小心ぶりだった。

万が一口の周りに食べ物の欠片が残っていてはいけないし、人と話をするときに食べ物の臭いがしたら嫌だと思って、その夜僕は食べ物は一切口にしていなかった。伯爵邸を出る前に軽めの食事は済ませて来たものの、懐中時計の針は午後十時を示していて、さすがにお腹は空いてきていたが、何杯目かの果実水のグラスを手に取って

誤魔化していた。

「君もいい加減、僻みすぎなんだよ」

空腹の不機嫌さも手伝って、僕は言った。

「そうですかね。たぶんこの会場にいる独身男は、誰も似たような心境でいると思うんですけど」

「それは……否定はしないけど。でもそんなこと、考えたって虚しくなるだけだ。僕は自分は兄さんとは違う人生だってことを、もう何年も前に自分に言い聞かせたよ。さっきも言ったけど、僕は現実を知っているんだ」

「でも王子も思ったほど女性に見向きされてない感じですね。さっき会場に降りられたときも、王子に熱中しているのは、ティーンエイジャーの娘くらいのもんだった」

「フレデリック殿下にはいろいろ事情があるから」

僕は答えた。

「それに殿下は天使って言うか、色が白くてほっそりしていて、彼自身がお姫様みたいな感じだし。だから女性としては、もう少し頼れる男がいいんだろう。

白馬の王子が自分より細くて可愛かったらきついってことじゃないか？」

「上手いこと言いますね。女心の核心ついてるかも」

「でもこういう状況は、実は誰よりも僕のほうがきついんだよ。それに比べたら、君なんて問題になりもしない。だって僕は現在女性たちにとってもっとも魅力あるかの伯爵の弟なんだからね。

だからきっと僕は、この会場にいる多くの人たちに今まさに嘲られている存在なんだ。兄さんと比べて、さぞ出来の悪い弟だと思われているんだろう」

「そんなことはないでしょ。貴方だって、美少年……おっと、美青年なんですから」

「真に美少年と言うのは、あの方のようなのを言うんだ」

僕は、今はまた壇上におわす王子を示してカイトに言った。

カイトは同意した。

第59話　夜会の片隅にて（2）

「だからそうやきもきしなくたって、兄さんの天下だってそういつまでも続くわけじゃない。兄さんが不老不死とでも言うならともかくね。

今にファンである君が絶賛する殿下が世間を惑わす絶世の貴公子ともなれば――、母親の出自の悪いと難癖をつけて彼を軽視する諸侯の目も変わってくるだろう。女性は彼を下にも置かず、彼に視線を注がれる一瞬のために、生命を賭けて闘うだろう。殿下に処女を奪って欲しいって王宮に殺到するんだ。

そして僕にはまるで関係ないこの勢力図も、後十年もしたら、僕とは関係ないところでまた違って来るだろうさ」

「王子と閣下、同時期じゃないのが惜しいですよね。同世代じゃないから比較が難しい。幾つ違うんでしたっけ、そう、倍違うのか……」

「そう。そして子供でもなければ中年でもない青春真っ只中のはずの僕らは、まともに女にありつけることもないってわけさ。嫌になるね」

僕が言うと、カイトはそんな気なんてないくせにと言って僕のことを笑った。

「そんなことはないよ」

僕はシェアのことを探していたことを根拠にそう答えた。

「素敵な女性がいれば、いいなって思ってるよ」

「そんなことを言って。さっきから、何度か声をかけられているのに、まったく素っ気無くしているじゃないですか」

「そんなことはないよ。大して声はかけられてない」
「でもかけられているでしょ」
「少しはね」

カイトがしつこいので、僕はそれを認めた。

「駄目じゃないですか、もったいないことをして。せっかくこういう場なんだし、少しくらい話をしたっていいんじゃありませんか。女のほうから声をかけてくれるなんて、よっぽどってことなんだから」
「よっぽど？」

僕がたずねると、カイトは頷いた。

「よっぽど貴方が気に入ったってことです。常時女に囲まれてる閣下のあの状態が異常なんであって、普通はね、女から男に声なんかかけやしないものなんですから」
「本当に？　なんでそんなことが君に分かるんだ？」
「俺が声をかけられたためしがないからです」

カイトの憮然とした言葉に、僕は妙に納得した。

「あ、今ものすごく納得されましたね」

カイトに睨まれ、僕は首を竦めた。

「とは言え幾ら貴方が女たちに比較的好ましく思われる傾向にある美青年であったとしてもです。都会の姫君なんてのは、連日のパーティーが普通で、何しろ場慣れしているそうですからね。はっきりしない男なんか、歯牙にもかけて貰えないですよ。

何と言っても、彼女たちは強い男が好きなんです。これは俺の持論でもあるんですが、女ってのは親切で、綺麗で、しかも強い男が大好きなんですよ。女ってのはだいたいそうでしょう。そしてその中でも貴方に決定的に足りないのは強引さです。だから、もっと強気で行かないと」

「そうやって炊きつけないでくれ。それに、僕にはタティがいるんだ。他の女と話しなんかしたら、タティを裏切ることになる」

「話しぐらいで裏切りになるわけない」

カイトは呆れたように言った。

「そうかな、だって僕はタティが他の男と話すのだって嫌なんだ。すごくイライラする。最近じゃ執務のときは、夜に僕が帰るまで本当に部屋に鍵をかけて閉じ込めておきたいくらいだよ。まあそんなことをしなくても、幸いとタティは出歩く性格じゃないからね。さすがにそこまではしてないけど心配でさ。僕って何処かおかしいんだろうか」

「ううむ、そいつは独占欲ってやつでしょうな」

カイトは腕組みをして偉そうに唸った。

「無論だ。女性を所有することは、一人前の男として当然の義務だからね」

「所有って。しまいにゃ貴方、執務中は彼女に貞操帯を強制しそうな勢いですな」

「この王都滞在の数日の間は、本気でそれを考えたよ」

僕がため息混じりにそう言うと、カイトが悲鳴をあげた。

「アレックス様ってきっとサディスティックだって思ってましたっ」

カイトはフォークを握ったまま手を胸に添えると、まるでタティみたいな言い草で僕をからかったのだった。
すると、近くにいた何人かの人々が彼のふざけた態度を見て、僕らに失笑するのが分かった。周囲には国中から集った大勢の貴族がいるのに、彼の傍若無人さには閉口する思いだった。

「タティが大事だからだ。この気持ちを君に理解して欲しいとは思わないよ」

僕は、カイトがまたおかしな真似をやらかしやしないかと思って、彼とは他人の振りをしたい気持ちでそう言った。

「太陽神は独占欲を捨てなさいと説いていますよ」

カイトは打って変わって真面目な態度で言葉を続けたが、カイトのおちゃらけた性格は天性のものであり、僕のような男には理解不能の性質だ。従っていつ突発的に発揮されるか油断がならないので、僕は二度と彼への警戒を解かなかった。

「こんな場所で君と神学の話なんかしたくないね。まったく、ふざけるのか真面目にするのか、どっちかにしてくれ」
「神学がどうしたって？」

そこへ不意に、僕は背後から声をかけられた。

第６０話　筆頭公爵（１）

振り返るとそこにはいかにも立派な身なりの男がいた。カイトはそれに素早く気がつくや急いで平伏すような姿勢を取ったが、僕としても慌てて畏まった。
兄さんがすぐそこにいるのにまさか国家の重要人物が僕のほうに声をかけてくるとは思わなかったのだが、彼こそは我がサンセリウス王国の重鎮中の重鎮、ウィシャート公爵だったのである。

「なかなか、楽しそうな話をしているのだね、アレックス」

ウィシャート公爵はそう言い、忌憚のない笑顔で僕に微笑みかけた。適度に日焼けした肌、やや濃い色をした金髪を後ろに束ね、金色の口髭を蓄えた立派な紳士に対し、僕は恐縮しながら会釈をした。

「そう強張らなくてもいい。普通に接してくれ。おまえも名門出の立派な男子なのだから、従者のようにすることはない。もっと堂々としていなさい。私を若い人の話に混ぜてくれ」
「トバイア様、おいでになっていらしたのですね。すぐに挨拶に伺わず申し訳ありません」
「いや、たった今しがた来たんだよ。少々野暮用があってね。陛下の夜会などとは言っても、何、陛下としたって今では惰性で行っているだけのパーティーなのだ。招待されることに生命をかけ、名誉だの何だのと有り難がる連中の手前、やめることができないだけでな。フェリア王女を亡くされてからと言うもの、陛下もすっかり気落ちされてしまった。それに、戦争中はこうもいかなかった。開催されたところで、王国の繁栄を祝うどころか戦線戦死者の報告会になってしまった年もあった。
この夜会がもっともその名目に相応しい盛大な華やぎを持っていた

のは、あの美しい方がいらした二十年足らずのことだ。フェリア王女、そう、あの美しい姫君が年頃でいらした数年の間だけ――、すべての夢がこの場所につまっていたよ」

公爵のお出ましに気がついたんだろう。器用にも、すぐ近くで十数名の女性に囲まれ彼女たちと同時に会話をしていた兄さんの態度もほどなく一変し、それまでは女の人たちに一人残らず愛敬を振り撒いていたのにまるで人が変わったように真剣な顔をしてこちらにやって来た。

側まで来ると、兄さんは大柄な身体を折って公爵に従順な一礼をし、兄さんの後をついて来ていた女性たちも雰囲気を察したのか兄さんの周りから遠ざかった。

何しろウィシャート公爵は国王陛下の甥に当たり、王位継承権第二位を保持されているこの国で最も高貴な一族に属する方だからだ。継承権第一位には、現在は当然弱冠十六歳のフレデリック王子殿下がおられるが、彼が誕生するまでは老王は長らく男児に恵まれず、王位については随分長い間夭折された王弟の息子であるこのトバイア公が継承順位一位となっていた。

そのために、この公爵様には王子殿下のことを好ましく思っていない等の噂が今もってつき纏っているのだが、兄さんがこの方を信望している以上、もし何か事態があるとすれば僕としても王子よりはトバイア様を支持しなくてはいけない立場にあった。

もっともフレデリック王子のある以上、殿下よりも三十も年長の公爵様が王位の移譲される可能性はもはや低いと言って間違いないことだったし、これまでの十六年間に一度も不穏なことが起こっていないのだから、公爵様としてもあの美しく可憐な従弟の王子のことを、お認めになっていらっしゃるということなのだろう。

「やあギルバート、このような晴れやかな場でそう畏まることはない。今ちょうどアレックスに会ったのだ」

そう言って兄さんに微笑みかけるウィシャート公爵は、陛下や王子と血の近い王族であるだけあって、兄さんと並んでいてもまったく引けのない美貌だった。年月を重ねた壮年であるせいか、それとも生まれ持った顔立ちのせいか、酷薄そうな印象があることは否めないが、彼はその厳格そうないでたちからはなかなか想像がつき難い、気さくな様子で兄さんにそうおっしゃった。

「閣下。我が不肖の弟は未だ中央に不慣れです。アレックスが、閣下に何か失礼を致しませんでしたか」

兄さんが言うと、公爵は親しげに笑った。

「いやいや、そんなことはない。よく育ったものだと感心していたところなのだ。

これは何年か前だったか、彼がまだ声変わりをしていなかったときのことだ。私は彼を思わず姫かと勘違いをしかけたことがあったろう。白くて細い、美しい姫かとね。それがどうだ、今では立派な青年になっているのだからね。

うん？　私は毎年こんなことを言っている気がするな。しかし、それはあのときの衝撃が強すぎたことと笑ってくれたまえ。いや本当のことだ。

だがこうして見たところ、今では彼もなかなか利口そうな若者の面構えをしておる。何とも頼もしい青年ではないか。ギルバートのような迫力はないが。人当たりがよさそうなのはいいことだよ。女子供の好意を集めやすいからな」

見るからに老獪そうな四十男である彼は、会場の他の誰よりもひと際威儀のある紳士であったが、近くで見ていると温厚ささえ窺えるような表情の動かし方をした。

王族であり、兄さんの後見役でもあるこちらの公爵様と対面をすることは、僕にとってはいつも非常に緊張を強いられることで、僕は兄さんの傍らに立ちながらどうにか失礼のないようにするのに全神経を集中させていた。

本当は人見知りを発症したかったが、そんな身勝手を言っていられない状況というものがもし存在するとしたら、それはこのときのような場合を言うのだ。失礼があれば僕ばかりでなく兄さんの首が飛ぶ恐れがあり、僕は呼吸することさえ負担に感じるような緊張状態をしばらく続けることになった。

一方兄さんは僕の隣で、僕のことを公爵に売り込むような内容の話を運んでいた。名のある貴族である以上、僕もいつかは宮廷に登らなくてはならないことは分かっていた。僕は未だにあまり宮廷におけるルールを知らないのだが、たぶん、誰か強力に助けてくれる人がいるのといないのとでは、全然都合が違うんだろうと思っていた。

「アレックス、おまえの兄君は、おまえに近々副伯を授けたいと考えているそうだよ」

ウィシャート公爵は、外見の印象よりもずっと優しい話し方をされるが、それは彼が子供を持つ父親でもあるからなんだろう。

公爵様の後方には、先ほどから長身痩躯の兄さんと同じ年頃の魔術師と、十六、七歳ほどの黒髪の少年が控えているのだが、少年のほうは彼のご子息で確か名前をオーウェル様と言った。

僕はオーウェル様にはこうしてお会いするのは、少年の彼がこうした場に顔を出すようになったここ最近のことで、ほとんどないと言ってもいいくらいのものだった。

だから僕は彼と話したことはなく、彼がどんな方なのかをまるで知らないのだが、公子様というのはいつもだいたい不機嫌そうで、世界を拒否しているかのようなやさぐれた雰囲気が伝わってきていた。父親であるトバイア公から愛想と端麗さを取り去り、その代わりに

冷酷さ酷薄さを増したような容貌をしているために、目つきが悪く、冷淡でつき合い難そうな印象だった。僕とはまた別の次元で、とことん人づきあいが悪そうな、そういう性格が垣間見えていた。

第６１話　筆頭公爵（２）

「副伯……ですか？」

僕が恐る恐る伺うと、公爵様は機嫌よく頷いた。

「正式な伯爵の後継者ということだ。ギルバートには子供を持つつもりがないのか、これは彼の問題なので私には何とも言えないが。その際には、私からもおまえに何か贈り物をしよう。だから、精進しなさい」

「は、はい。有難きお言葉を頂戴致し、感激にございます」

僕がどうにかそう答えると、公爵様は親しげに笑った。

「うむ。ふふふ、それにしてもこれは、おまえの弟とはとても思えぬなギルバートよ。何ともうぶで奥ゆかしい。まるで仔犬のようではないか。

我が息子にも、これくらいの可愛げがあればいいのだがね」

「公子様は閣下に劣らぬ利発な方。今は少しばかり照れていらっしゃるのでしょう」

兄さんが言うと、公爵様の後ろにいるオーウェル公子は鼻を鳴らして兄さんを睨み、それを嘲笑した。

兄さんに対してまさかそんな態度を取れるその度胸と立場を羨ましくも思ったが、僕にできることは只黙って控えているのみだった。

兄さんの側にはいつの間にかジェシカとルイーズがいるように、僕の後ろにはカイトとロビンがいるはずだが、僕はカイトが、まさかこの場でおちゃらけはしないかということを、彼としても当然きちんと分かっているとは思うけれども、内心で少々気を揉んでいた。

いささか高圧的な口調で、公子は言った。

「アディンセル伯は顔に似合わず世辞のお得意な方らしい。一介の地方領主が、どんな汚い手を使って父上に取り入ったのやら。悪質極まりない我が父に取り入るなど、ギルバート、おまえも余程骨が折れたろうにな。果たしてこの野心家の伯爵は、何が狙いなのか」

それに対して、兄さんは悲しげに胸を押さえて即座にこう応えた。兄さんは誰が見ても美しい顔をしているので、どんな表情であれよく似合うのだが、その表情が本当に胸を痛めているふうで、僕は彼の身内であるのにも係わらず思わず視線をとめてしまうほどだった。

「なんと……、それはあまりに惨い申され様ではございませんか。私はいつでも公子様をお慕いし、ご聡明な貴方様にお近づきになりたいと日々願っているのですが」

情感のこもった言葉遣いも、普段の横柄な兄さんをよく知る僕としては何やら聞き慣れないものではあるが、実に感動的だった。

「……、白々しいことを。おまえがそんな殊勝なことを考えるわけがない」

しかし公子が少し戸惑った末にそう呟くと、兄さんはにやりと笑ってそれが嘘であることを認めた。

「おや？　貴方様も少しは美辞麗句をご理解できるお年になられましたか。それは結構。ご成長のほど、お喜び申し上げますよ」

それで公子は悔しそうにして兄さんを再び睨みつけたが、それはた

ぶん、若い彼が兄さんの演技を半分信じかけてしまったせいなんだろう。

「俺が公爵になれば、おまえなどすぐに左遷してやる」

憤慨する公子の言葉を公爵が引き取り、肩を聳やかしてこう言った。

「このような場で済まぬなギルバート。まったく、オーウェルめは権力を笠に着て礼節を欠いた態度は、いずれ己の為にならんということが未だに分からんらしい。これは果たして誰に似たものか、生意気でならんよまったく。

幼い頃には散々ギルバートに世話になっておきながら、何という口をきくのか」

「構いません」

兄さんはまるで普段とは別人であるかのように、公爵に対し愛想よく微笑んだ。これは昔兄さんが僕に対しても見せていた、完璧な人格者の微笑み方だと僕は思った。

兄さんと公子が、僕が思っていたよりもずっと親しげな様子であることが少し気になったが、そんな気持ちを正直に顔に出すほどには僕は子供ではないので知らん顔をしていた。

公爵は兄さんに言った。

「だがアレックスには、是非とも我が息子の友人になって貰いたいと考えているのだ。二人は年頃が近いし、貴公が私のためによく働いてくれているように、彼にもゆくゆくはこの聞き分けの悪い息子に仕えて貰えたらと考えている。

筆頭公爵家の跡継ぎにして、王位継承権第三位を所持しているという思い上がりがあるためなのだろうな。誰にもこのような態度だから、なかなか手を焼くだろうとは思うのだが……、どうだろうか」

そしてウィシャート公は僕に視線を向けた。僕にこの依頼に対する拒否権はなく、僕はただ、深々と頭を下げてそれを受け入れた。公爵は頷いた。

「それにしても……」

それから公爵様はふと視線を巡らせ、兄さんの後方に控えているルイーズに視線をとめた。

ルイーズは偉大な相手に驚くこともなければ恐縮するでもなく、いつものようにしなを作って公爵に微笑みかけた。すると公爵のほうも、それに頷いてルイーズに微笑みかけた。ルイーズが兄さんの魔術師である以上当然なのだが、二人は旧知の間柄であるようだった。

「相変わらず、彼女は美しいものだね。実に魅力的だ。この場にあふれる良家の姫君方に、まったく見劣りがしないどころか、それにも優る美しさなのだから素晴らしい。私はこのルイーズを私の傍らに欲しかったが、ギルバートに断られてしまったことがあるのだ」

公爵様は僕に語りかけてくださっているようだったので、僕は慌てて相槌を打った。

「彼女はとても才能があるからね。だから、私の魔術師にしようかと思ったのだが……ギルバートに断られてしまった。仕方がないので、今では諦めているけれどもね」

「そうでしたか」

「ああ、私は美しい女というものに目がなくてね……、女性とはいずれも美しいのだが。しかし特に造作の整った女というのは、まさに芸術だ。神々がこの世界にもたらした至高の芸術品。もはや感動

的でさえある。
だから彼女らはいつでも私の胸を熱くするのだよ。まるで恋のようにね」
「仰せの通りです」
兄さんは清々しく公爵に同意した。
「女とは、いいものだね」
そして公爵様と兄さんは微笑みあった。

第６２話　お嬢様の意図（１）

それからしばらくして、僕はカイトの結婚相手ということになっているウェブスター男爵家の姫を紹介されることになった。
さっき後で紹介するとは言っていたものの、一望するにも一苦労ある王城の広間のうちの、大勢の賑わいの中から、彼女のことを何もカイトが引っ張って来たということではない。カイトは僕に結婚相手と会わせるなんて話をしていたことすら忘れているように、何時間もの間そのことをまるでとぼけ続けていたのだが、やがて彼女のほうから僕らに近寄って来て、それから突っかかって来たのだ。

「アレックス様！　ああ、貴方、アレックス様ですわね！」

何処かで何となく見たことのある若い騎士にエスコートされる形で、彼女は僕たちのところへやって来た。
最初親しげに微笑んでいた彼女は、背中に流れる黒髪のサイドを後ろに編み込んだ、高貴な女性がよく採用している昔ながらの髪型をしていた。
明らかによく知らない女性が、目の前で古くからの知り合いのようにしているのだが、僕がそれに見合うだけの社交性を持ち合わせているはずもない。かといってカイトの手前素っ気無くするわけにもいかないし、僕はせいぜい赤っ恥をかかないために気をつけながら、いつもの通り少し緊張をしていた。

「わたくし、ウェブスター家のヴァレリアと申します」

勝気な笑顔に相応しい物怖じのない発音でそう言い、お嬢様は僕を見上げた。

「僕はアディンセル家の……」

僕が自己紹介を言う前に、彼女は勝手に言葉を続けた。

「ああ、わたくしね、常々貴方にお会いしたいって思っていましたのよ。

だから貴方にお会いしようとあちこちのパーティーに出席してみるんですけど、貴方はいつもいらっしゃらないんですもの。アレックス様はあまり社交場にお出ましにならないそうですけど、収穫祭の伯爵様のパーティーですら会えなかったときにはがっかりでしたわ。貴方を最後にお見かけしたのはこの夏のパーティーだったんですけど、声をかけるつもりがわたくしあのときカイトを叱りつけるのに忙しくて。何しろ、この下男は滅多に家に寄りつきもしないんですもの。しかもわたくしの誕生日をまた無視した直後だったので、もう頭に来てしまって！　カードの一枚も寄越さないなんて、信じられますか？

ああそれに、わたくしにとって今度が初めての陛下の夜会だって言うのに、わたくしをエスコートしようなんて気を利かせもしない。アレックス様に引きあわせてくれるでもない」

お嬢様が早口でそう捲くし立てたことで僕が理解できたことは、彼女にとって僕の自己紹介なんかどうでもいいということだけだった。それから、お嬢様は僕の横にいるカイトをつんけんした態度で一瞥し、再び僕に視線を戻した。

「ねえアレックス様、わたくしが貴方の花嫁候補だったっていうお話、ご存知でいらっしゃるわよね？」

「花嫁候補？　ああ、そう……」

ヴァレリアお嬢様が何を言いたいのか分からなかった僕は、取り敢

えず話を合わせておくことにした。

「花嫁候補よ」

お嬢様は繰り返した。

「ああ……」

「何、聞いてなかったの？」

「うん、いや、どうかな、そういう話は……僕はどちらかと言うとあまり得意じゃなくて」

「得意じゃなさそうなのは、見た目からしてよく分かりますわ。でもサンセリウスが幾ら社会が成熟しているって言っても、わたくしもう二十歳なのよ。お嫁に行っている人は、もう行っているわ」

「うん、そうだろうね」

「分かっているなら、早くしてくださらない？」

「えっ？　何？」

「結婚よ。わたくし、待ちくたびれているのよ。プロポーズはまだ？」

「いや、でも君はカイトの……」

いったい何が起こっているのか、一瞬考えてしまう状況に、僕は言葉を飲み込んだ。

何処かのパーティーですれ違う程度のことはあったかもしれないが、こうして会話をすることにかけてほぼ初対面なのに、ろくに自己紹介も済んでいないのにそんな話をしてくる女性を僕は知らなかったので、どう対応をするべきか戸惑っていた。

「これはその……つまり君はお嫁に行きたいっていう、そういう話なのかい？」

僕の横には彼女の婚約者であるカイトがおり、お嬢様の横には彼女を今夜エスコートしている男がいた。それなのにどうして、誰がどう見ても第三者であるはずの僕にプロポーズを要求しているのか、僕は困り果て、それから微妙に会話の軌道を歪めてみた。

「女の人は、花嫁さんには、憧れるものだよね」

「別に。憧れやしませんわ。自分よりも優れた男が相手だと言うならともかく、かえって立場が悪くなるような結婚をするなんて賢い女のすることじゃないもの」

ヴァレリアお嬢様が、カイトに嫌味を言っていることは何となく分かったが、僕の軌道修正に乗ってくれたので、僕はほっと息を吐いた。

しかしヴァレリアお嬢様もそれほど愚か者ではないようで、すぐにそれに気がつき、たちまち僕を睨んだ。まるで僕が彼女を陥れたと言わんばかりだったので、僕はとても迷惑な気分だった。彼女が常識はずれなのが悪いからだ。

それからお嬢様は自分が興味を持っていることに対する話をしていた。彼女が何に興味があるかなんて、僕には興味がないのだが、今は旅行が好きであるようなことを言っているようだった。旅行が好きなのに外に出して貰えない不満と言ったほうが適切だったかもしれない。

そしてその話を棒立ちになって仕方なく聞いている間、僕はヴァレリアお嬢様の容姿をそれとなく眺めていたが、こちらは多少は僕の興味をくすぐっていて、確かに以前カイトが言っていたように、彼女はそれなりの美人だった。

この場に華やぐ他の姫君方と比較して、器量自体が飛び抜けていいというわけではないのだが、活発そうな性格のためなのか、彼女には何かしら他人を惹きつけるものがあるようだった。

ただ細いだけではない締まった身体つきからして、恐らく武芸を嗜

んでいるお転婆姫なのだろうということが分かった。髪の色や、それに彼女のちょっときつい感じのする目つきなんかは、遠縁と言ってもカイトに似ていると思った。だけど彼女の場合は物の言い方までもが、命令調で本当にきついのが、僕はとにかく苦手だと思っていた。

それにお嬢様の側に控えている若い男、これがまた不快極まりないもので、昔僕を苛めた貴族の子弟の一人だったのだ。

しかも無礼なことに、彼は僕に対して一言決まりきった挨拶をした以外には僕に敬意を払うでもなく、カイトばかりか僕のことまで敵対心のある目で睨んでいた。立場は勿論僕のほうが上であるはずなのに、その態度は不親切で不適切、くだらない者を蔑むかのような嘲りと悪意に満ち、僕はとても心細くていたたまれない気持ちを押し殺すのが大変なほどだった。

それでカイトに助けを求めるべく横を見ると、彼は彼で普段の陽気さが何処へなりを潜めたのかと思うくらいおとなしくなっていた。もっともカイトはこういう場ではあまり率先しておしゃべりをしないようにしているようだったが、そのときの表情は何処か翳り、カイトには僕が今まさに助けを求めていることなど眼中になく、しかし弱った表情ながらも彼のお嬢様を見る目は冷ややかで、少なくとも将来の自分の妻女に注ぐべき親愛さなど何処にも見当たらない。

将来の夫にこんな態度を取られているのでは、お嬢様としてもさぞ悲しいんじゃないかと思いきや、お嬢様はお嬢様でカイトを汚い物でも見ているとみて余りある軽蔑的な表情をしていた。

双方がこの殺伐とした雰囲気なのでは、到底自発的に結婚になんか結びつくはずもないということを、周りの人間に一瞬で理解させるだけのものがあったのだ。

第63話　お嬢様の意図（2）

そうしている間にも、ヴァレリアお嬢様はますます挑戦的な顔をし、やがて思いつきのように不意に僕に言った。

「ねえわたくし、父から貴方の花嫁になるように言われて育ちましたの。少しでも早くからお近づきになるために、まずはアレックス様の騎士に選ばれるために、一生懸命剣術だって磨きましたのよ。それなのに、騎士の役目はそこの下男に取られてしまったのよ」

「ああ、そう、それについては悪いと思うけど、でもあの、当時僕にその人事権はなかったんだ。兄さんがお選びになることなので、そこは君の父上も納得していると思うよ」

「じゃあ今からわたくしを選んでくださいませんこと？　側近の騎士、別に一人だけと決まっているわけじゃないでしょう」

「いや、それはその……、カイトはよくやってくれているから。だからちょっと……」

「じゃあこの男をはずして」

「いや、それはできないよ。彼はよく尽くしてくれているんだ。君は彼を馬鹿にしているようだけど、カイトっていうのは意外と……」

「じゃあ花嫁でいいわ。貴方の花嫁。とにかく貴方の側にわたくしを置いて頂戴」

「いや、だから……」

「ねえ、わたくし、悔しいのよっ」

不意に、ヴァレリアお嬢様は焦れた声を出した。

「貴方、最近情婦をこしらえたって言うじゃありませんか」

「情婦？　情婦って……」

「あらそうでしょ。わたくしの言うことに誤りがありまして？　情

婦！　あの見るからにださい田舎娘って感じの乳姉妹のことよ。地元の社交界じゃ、誰もがそう思っているのよ。カティス家の当主でさえそう言っていたわ。それなのに、誰があんな芋娘を認めるものですか。売春婦って言わないだけましだと思ってくださらないと」

「……」

僕は別に、このヴァレリアお嬢様と何も関係もなかったし、今後も何か関係を持つつもりもなかった。だいたい僕はタティと結婚するんだから、誰にも非難されるようなことはしていないはずだった。確かにタティは今は愛人かもしれないが、それもきっと少しの間だけのことだからだ。

だけどこのヴァレリアお嬢様が、まるで僕を弾劾するみたいな口調で物を言うので、僕はこんなに攻撃的な女性と接したことだってなかったために驚いてしまっていて、何だか反論することができなかった。

すると彼女はどんどん言いたいことを言い始めた。

「ほんと、これだから男は嫌いなのよね。美形だろうと偉かろうと、人間性の低さに疑いの余地がない。勿論そこの下男は言うまでもないことだけど、お父様といい、伯爵様といい、貴方といい、本当に不潔。本当に最低。野蛮でどうしようもない」

僕は、思い当たる節があるために、何も言えずに下を向いた。

「でも、アレックス様の情婦があの程度のお顔の下級貴族の娘と聞いて納得しましたわ。となればどうせ、わたくしとの初夜のための練習相手なのでしょうから。

所詮、爵位もないような家の娘など、アディンセル家の別荘の女主人にだって、道義的に考えてもなれるはずもないですから、今度のことだけは許してあげます」

「ゆ、許……？？」

ヴァレリアお嬢様が言っていることが分からず、僕がいよいよあたふたすると、それまで沈黙を守っていたカイトが、意を決したように顔をあげた。

「お嬢様、父君様のご主君であるアディンセル伯爵の弟のアレックス様にそんな口の聞き方はありません。許してあげるなどと……今すぐ非礼をわびるべきです」

するとヴァレリアお嬢様はそれを一笑に伏した。

「はあ？　ちょっとカイト、何を生意気なことを言っているの？おまえも偉くなったものね。おまえみたいなのがまさかわたくしに対して物を言うなんて……、平民風情が、何か勘違いしているんじゃなくて。ねえ、おまえ何様？　おまえやおまえの親兄弟がどれほど落ちぶれていたか、アレックス様にお聞かせしたら、彼のおまえに対する評価だってさすがに変わるかもしれなくてよ。少なくとも、これをお父様がお聞きになったらどんなお顔をなさるかしら。下男がわたくしに物を言うなんて。きっと驚いて、おまえの背中を鞭で引っぱたくわね！

そうだわカイト、もしわたくしに言うことを聞かせたいって思うなら、そうしてくださいませんと今後当家で自分の面子が立ちませんから、謝ってくださいお願いします、そう言って靴でも舐めてよ？」

そしてヴァレリアお嬢様が本当にドレスの裾から自分の足を出して見せたので、僕は驚いて彼女を見た。するとお嬢様は少し場所を間違えたといった顔をして、すぐにそれを引っ込めた。

「とにかく、この汚らしい下男が、生意気に人間の言葉をしゃべるんじゃないわよ。
おまえは平民の血のほうが濃いくせにほんと図々しい。最悪よ。男だっていうだけでこんな下品なのが男爵になれるなんて世の中間違ってる。ああ、平民臭くってたまらないわ！
何よその目は……。なんて嫌な目でわたくしを見るの？
もういい加減にして、顔を伏せていて頂戴。おまえの顔を見ていると、わたくし虫唾が走るのよ」

第６４話　お嬢様の意図（３）

ヴァレリアお嬢様の言い草は、仮にも将来夫となる男に対して向けられるべき言動ではなかった。彼女のカイトに対する罵声は一言ごとに一層激しく、僕は思わず耳を覆いたくなったが、しかしこんな無礼なことを言いたい放題させておくわけにもいかない。女性というものはいつでも慎み深くあるべきものだが、夫に対しては特にそうあるべきなのだ。

だからここは僕としてもアディンセル家の人間として、とうとう彼女を叱責することにした。

「何言ってるんだ。カイトは君が仕えるべき相手だろう。だいたい女性が……、とにかく、幾ら何でも言葉が過ぎるんじゃないのか」

ところが間髪置かずにヴァレリアお嬢様は一歩踏み出し、僕にまで凄んだ。

「何ですってっ！？」

「えっ、な、何ですって、って……？」

僕は、僕のほうが明らかに身分が上なんだし、ウェブスター男爵は年がら年中兄さんにへいこらしている人物だし、少し強気に言えば、彼女がきっと恐縮するだろうと思っていたのだ。

それなのに、ヴァレリアが一向に謝らないどころか、態度を軟化させないで、それどころか僕のことまで軽蔑の対象のように睨むので、僕はそれから先の対応をまったく考えておらず、困ってしまった。

だいたい僕は彼女に何も悪いことをしていないのに、どうしてこんなに怒られなくちゃならないんだろう。

だからヴァレリアに睨みつけられただけで僕は慌てふためき、そしてそれをいいことに、ヴァレリアお嬢様はますます強気な態度でこう続けた。

「アレックス様、お言葉ですけれど、このカイトはまだウェブスター家の当主でも何でもありませんのよ。只の養子。年齢上、仕方なく義兄とは申せ下賤の生まれのね。ですから、立場を言わせて貰えば、わたくしのほうが上なんです、そこはお分かりですか？」

「えっ、あっ、うん……」

「ウェブスター家の実子であるわたくしが、下の者をどう扱おうと、それは家の中の問題だわ。それを、どうして貴方にとやかく言われなくてはならないのか、わたくしには全然分からないことだわ。アレックス様というのは、前々から伯爵様に甘やかされてお育ちになったお坊ちゃまと聞き及んでおりましたけれど、まさか貴方、感情論で物をおっしゃっているのではありませんこと？」

甘やかされたお坊ちゃまなんて酷い侮辱に、僕はさすがにむっとして彼女に文句を言った。

いったい僕の何処が甘やかされたお坊ちゃまなのか意味が分からないこととか、女好きで尊大な兄さんと暮らすということがいかにどれだけ大変かということを、ここで訴えるほど僕は世間知らずではないので言わなかったが。

「かっ、感情論って、どう考えてもそれは君じゃないか……。いいかい、段階的に話をすると、理性的に考えれば、カイトは君の夫になるんだから――」

「そんなこと、まだ決まったわけじゃないでしょう！」

ところが僕の言い分を、ヴァレリアお嬢様はぴしゃりとやった。

「まるで決まったことであるかのようにおっしゃるなんて、貴方どうかしているわ。

わたくしはこんな男のことは大嫌いなのよ。話し方も下品だし、いつも適当なことばかり言って人の話しなんか真面目に聞きやしないし、後からはじめたくせに剣術が上手くて……だからいつだってわたくしを馬鹿にしているの、敬うべきこのわたくしをよ！

それにカイトは泥水なのよ。お父様だってそうおっしゃっているわ。香りのよいワインの樽に一滴でも泥水が混じってしまったら、それは樽ごと二度と口をつけられない泥水になってしまうって。だからこんな男は、わたくしには、到底相応しい男じゃないわ。

お父様だっていつもおっしゃっているわ、おまえにはアレックス様が相応しいって。本当は伯爵様のほうが格好いいし断然優秀だけど、伯爵様は性格が悪質すぎて、我々じゃ手に負えないから弟のほうにしておけって……、弟のほうはおとなしいからきっと我々の言いなりにできるからいいって。

だから……、それなのに貴方がそんな酷いことをおっしゃるなんて思わなかった。アレックス様がそんな、酷いことをおっしゃるなんてっ！」

「酷いこと、僕、言ったかな……。どっちかって言うと君のほうが……」

「言ったわ！　こんな、汚らわしい下男と結婚しろなんて……、そんなことをしたら、わたくしの身体が汚れてしまうじゃないっ。それを貴方、どう責任を取ってくれるおつもりで言っていらっしゃるの！」

「責任って……僕が取るの？」

「それに身体だけじゃないわ、ウェブスター本家の大事な血筋が汚染されてしまうことになる。そんなの、まるで獣姦させられるも同じでしょうっ！」

結局僕らはヴァレリアお嬢様の前から逃走することになった。幸いと夜会会場は広く、大勢の貴族がいて、あのお転婆お嬢様がドレスをたくし上げてまで僕らを追いかけて来るということは起こらなかった。

「カイト、何なんだあの……つまり君の婚約者は」

僕は少し胸がドキドキするのを感じながらカイトに言った。印象のすこぶる悪かったことを否定するつもりはないのだが、あんなに自分の考えていることを躊躇いもなく口にする女の人を、僕は知らなかったからだ。

「婚約してませんっての。あの方の頭の中じゃ、俺は下男以外の何者でもないんです。そんなことをすれば、血が汚れるって本気で思っているんですから」

「若い娘なのに、フレデリック王子を不承認の諸侯と同じ思考回路ってあたり、頭のいい娘なのかもしれないけど厄介だね」

僕が言うと、カイトは不満そうな顔で僕を見た。

「……、なんか貴方、微妙に彼女を評価してません？」

「いや、そうじゃないよ。評価なんかしてない。仮にも夫となるべき相手を下男呼ばわりする女なんて最悪だ。おまけにタティのことを情婦だの芋だの、救い難いよ。

ただ、女性にしては話が面白いかもしれないと思っただけさ。無茶苦茶加減が。だって普通獣姦なんて言葉、女性が言わないだろう」

「そいじゃ、あれでも何だかアレックス様と結婚したいそうだから、

応じて差し上げたら。そうすりゃ俺も解放されます」
「嫌だよ。本当は兄さんのほうが好きだけど、兄さんじゃ遊ばれるから仕方なく僕にしておくなんて言い草だったのに」

しかし後からジェシカに聞いた話では、ヴァレリアお嬢様が僕の結婚相手の候補に挙がっていたことは一度もなかったのだ。
確かに僕と同じ年頃の娘を持つウェブスター男爵が、勝手にそれを願望していただろうことは確かだろうが、しかしそれを兄さんが取り合うことはまったくなかったらしい。
となると何故彼女があんなところでそんな作り話を言い出したのか、僕に突っかかって、カイトを罵倒していたのか、そもそも彼女が何をしたかったのか僕にはもうよく分からなかったが、たぶん彼女は我侭で見栄っ張りなんだろうと思った。

第６５話　魅力（１）

僕の懐中時計はいつの間にか深夜の時刻を指し示していた。
国王陛下に続き、未成年の薔薇君が会場を後にされてからも、例年通り陛下の夜会は賑やかに続行されていて、広間からおしゃべりの輪が途絶えることはなく、楽団による演奏が途切れることもなかった。
姿勢を正しているための最大の理由である王家の方々が退場されていて、ほとんどの招待客は上等の酒を飲むことを欠かさないとなれば、時間が遅くなるにつれて次第にその振る舞いが上品で気取ったものからだんだんとくだけた感じに移りつつあることは仕方のないことだ。そうした雰囲気を嫌って、女性をともない冬空のテラスに出てはすぐに凍えるようにして戻って来る者や、いっそ今夜には見切りをつけて、そろそろ会場を後にする貴族の姿もあった。
一方、兄さんは彼を慕う女性たちと満遍なくおしゃべりを楽しんだ後、どうも王都のアディンセル伯爵邸に滞在される際に逢引きを繰り返している女性がいるらしく、いつの間にか会場から姿を消していた。
相変わらずの手際のいい雲隠れに、取り巻きの女性たちが翻弄されて彼を探しまわり、団子になって、それから途方に暮れている様子が何十人と見受けられたが、何よりも兄さんが女を同伴して立ち去ったことを証明していたのは、ジェシカとルイーズの少々哀れな取り残され具合だっただろう。
夜会の立食場のテーブルの一角に陣取っていたジェシカは、酒に酔って赤ら顔な上にあからさまに不機嫌になっていたし、ルイーズはいつものことだと少し投げやりに笑っていた。
僕が彼女らに近寄り、兄さんを一人で行動させてもいいのかということを、まだそれほど酔いのまわっていない様子のルイーズに問いかけると、護衛騎士は連れて行ったことを話した上で、デートにこ

んな美女がいては邪魔になるでしょうと相変わらずの物言いをした。

「それにあの方を護るために幾つかの魔法をかけましたので、一晩くらい離れていても平気ですの。でないと、用を足すのにもついて行かなくてはならないことになってしまいますでしょう？　それはあんまりだわ。

もっとも、私としてはあの方のそういうの……見ても構わないけど」

そしてルイーズは彼女も少し酒が入っているのか殊更に色っぽく笑った。

しかし、たとえどんなに可愛い微笑みであってもルイーズの下品な話を覆い隠せるものではなく、僕は自分が感じたよりもずっと大袈裟に顔を顰めてみせた。でもすぐに彼女の美しさに引き込まれてしまった。

ルイーズは、やっぱり本当に綺麗な顔をしていたからだ。

僕はルイーズといるとき、どうも調子が狂うということには気がついていたのだが、それなのに彼女は僕になんかまるで無関心であるか、それとも子供扱いをするばかりなので、僕はそのときもそのことがものすごく気に入らないと感じていた。

ルイーズっていうのは、普段からジェシカみたいに僕に優しくしたり、ちょくちょく機嫌を見に来てくれたりするっていうことがないのだが、僕はたぶん、それが面白くなかったのだ。

当主である兄さんの弟である僕の顔色を気にしないところが……、とにかく何よりも面白くないことは、僕はルイーズに、何も影響力を持たないのだ。

ルイーズは僕のことを、まるで馬鹿にしていいくらい取るに足らない人間だと思っている様子があって、僕はそれがとても悔しかった。

「その点、アレックス様は便利なのよ」

僕のこうした気分を知ってか知らずか、ルイーズは話し続けた。

「貴方には、魔力がおありになるから。それも結構強い魔力がね。だから、基本的にはアレックス様は魔術師要らずなの。対呪術という意味ではね。タティの魔力が消えてもすぐに代替役を用意しなかったのはそのためよ。

それには貴方が内気で、なかなか他人と打ち解けないものだから、タティの代わりの人間が私生活に入り込んだら幼い貴方が混乱しそうだからってお話になったからでもあるけれど。魔力が強いと、呪術を受けつけ難いの」

そしてルイーズは、でも僕にも一応と言って、守護の魔法を僕にかけるために印を切っていた。陛下が退場されているので、公の場であってもこのての魔法を使うことは暗黙の了解となっていた。

と言うのも、サンセリウスの王侯貴族の間では、人々は呪いというものに非常に敏感なのだ。ここでは本格的な呪術はもちろん、人間の念というものも十分に呪いと呼ばれるものの範疇だった。

多くの人々が無意識的に感じている通り、誰かの怒りや悲しみ、恨みつらみは、ときに誰かの人生に強力に悪い影響を与えるものだ。ひとつひとつは小さな念に過ぎなくても、それが集まれば恐ろしい作用を持つ。

だからこの国の貴人たちが魔術師を連れて歩く理由には、魔法による実際的な襲撃を避ける以外にも、誰かの怨念から常に身を護るということがあった。

もっとも僕は誰かの憎しみを買う以前に、あまり人間関係というものを持っていないのだが、兄さんのような人間はそれでなくても多くの人々から身に覚えのない嫉妬なんかを向けられることも多いだろうから、こうした護りは欠かせないものだった。

ルイーズが僕の側に近寄っていると、彼女が身につけている香水のいい香りがして、僕は彼女に魔法をかけて貰う間、更に複雑な気持

ちでルイーズを見下ろしていた。
呪文を唱えるルイーズの赤い唇や胸の谷間に目がいっている自分に気がついて、僕は少々焦りながら顔を横に背けた。
すると油断も隙もないことに、僕のすぐ横にいるカイトと目があった。カイトは僕とみつめあいながら、たったいま僕がルイーズに見惚れていたことを理解すると言わんばかりに唇をわざとらしく微笑みの形にしたが、僕はかぶりを振って断じてそんなことはないことを訴えた。
何故なら僕にはタティがいるからだ。それに僕がルイーズの胸とかに目がいっていたことに気づくということは、カイトだって日常的に、同じようにそういうところを見ているということを意味していた。それなのに僕のことだけ冷やかすのは、これは非常に間違ったことだったし、フェアじゃなかった。
それにだいたい僕は単に唇や胸を見ただけだし、だから僕にはまったく後ろめたいことはなく、そんなのと紳士の僕を、一緒にして貰っては困るからだ。

第６６話　魅力（２）

「僕も君みたいに魔法を習いたかったな」

それから僕は、自分がルイーズと対等の大人であり、しかも大人の男であるということを彼女に分からせるべく、少し澄まして話をした。

頭の中では少なからず兄さんを意識して、彼の仕草なんかを真似てみたりするのは、別に彼女の気を引きたいからじゃない。とにかく僕が尊敬に値する男であることを、この際ルイーズに理解させる必要があったからだ。

「そうすれば、きっと今頃はいろいろできたんだろう。書物に埋もれて人生を過ごすことにこれまでよりもずっと意義を見出せそうだし、実際に魔法で遠地へ飛んでいくとか、そういうのはすごくいいよ。特権的で」

僕が言うと、ルイーズはふと眉を寄せて、文句でも言うように僕を見上げた。その様がとても可愛らしく、僕はすぐに釘づけになった。僕はルイーズが気に入らないはずなのに、どうしてか彼女に目がいってしまうのが、自分でもよく分からなかった。

「私もそれを薦めたんですのよ、とても一生懸命にね。今の時代、魔法を使えて損になるようなことはないし、この限られた人間しか手にすることのできない魔法を行使するという特技は、魔力というものを持って生まれた者だけに与えられる言わば神からの恩寵でもあるはずだって、それに……、ところがギルバート様が駄目だって」

「どうして駄目だっておっしゃったんだろう？　自分が扱えないから嫉妬したのかな」

僕が言うと、ルイーズは吹き出し、それから頷いた。

「確かにそういうお気持ちも無きにしも非ずかも。彼、とっても負けず嫌いだから。

でもギルバート様はたとえ内心で何を感じていようと、嫉妬なんて浅ましい感情だけで大事な物事を判断される方じゃないから、理由はもっと別のことよ。

アディンセル家の嫡男じゃない貴方が優秀な魔法使いともなれば、きっと幼いうちから出仕させられてしまう可能性があったからじゃないかしら。もっと偉い人の魔術師になってお仕えするために。

でも彼は、どうしてもアレックス様を手放したくなかったのよ。

貴方が大きくなったので、彼も素直な性格ではないから、昔のような猫可愛がりとはいかなくなっているけれど……、気持ちは今も変わらないわ。貴方をいつでも目の届くところに置いておきたいと思っていらっしゃるの。そしていつも手や口を出したいのよ。貴方の生活や、人生そのものに。それでアレックス様に煩がられても構わないと思っていらっしゃるわ」

「兄さんは、確かにどうしようもなく煩いと思うよ」

僕が何となく気取ったふうに言うと、ルイーズは屈託なく微笑んだ。

「愛すればこそよ」

それがとても可愛くて、僕はもっとルイーズと話をしたいと思った。

彼女は昔から僕に取り入ろうとして来なかったから、僕は随分ルイーズのことを得体の知れない女だと思っていたけど、よく見てみると、それにこうして話していると、彼女はとっても可愛かったのだ。

勿論、同い年のタティの可愛さとはまた違っているのだけど、僕はシェアのこともあって、女性が年上だろうと別にどうでもよかった

し、このときはもっとルイーズと親しくなりたいと思っていた。
さっきカイトも言っていた通り、他の女性と会話をすることは、決して悪いことじゃなかったのだ。それにルイーズは会話にユーモアがあって面白かったし、彼女と話していると、何故だか自分がとても立派な男になったような気持ちになった。
こうやって僕に年上ぶっている女の人が、もし僕のことを好きになったら、甘えてくれるんだろうかと思うとわくわくした。
彼女が兄さんの女性だったらどうしようかと思うと気分が暗くなるほどだったが、でも兄さんはルイーズを差し置いて他の女性とデートに行ってしまうということは、はじめから恋人ではないかもしれないし、少なくともずっと優先順位の低い女には違いなかった。

「ところでルイーズ、僕の魔力についてどう思う？」

僕はふと、前から疑問に思っていたことをルイーズにたずねた。

「どうって？」

「つまり、誰から貰ったものなんだろうね。父上も兄さんも魔力はないし、母上に魔力があった話も聞かない。
でも魔力って確か、遺伝性が強いよね。突発的に出ることもあるけど大抵は血によって伝わるものだ。だから、僕は自分は先祖返りかなと思ったりもしてたんだけど、君は何か知らない？」

僕はとにかく、自分とルイーズの間だけに何か共通の話題を持つことができれば、ルイーズが僕に失礼であるとか、生意気であるとかいうこうした悪い行き違いが改善されて、仲よくなれるんじゃないかと思い、魔法の話をしようとしていたのだ。
ところがルイーズは、少し酒を飲みすぎたのか、立ち眩みがしたようだった。
彼女は具合が悪そうに手の甲を額に乗せて、ふらふらっとして僕の

横にいたカイトにしなだれかかった。そのままカイトの肩に頭をもたせかけ、ルイーズの綺麗な横顔をカイトが覗き込んでいたが、二人のそうした姿は何となく似あっていた。それで僕は最初少し彼女のことを心配に思ったのだが、倒れかかるのがまたしてもすぐ目の前でおしゃべりをしていた相手である僕ではなく、少し離れたところにいるカイトであったことが僕は内心でかなり面白くなく、はっきり言えばこの態度にはむかっとした。

「私、酔っちゃったかしら？」

「またまた、いきなり何です。ざるのくせに」

そうは言っていても、カイトが満更じゃなさそうなのは分かっていた。

ルイーズは悪戯っぽく舌を出して、それから僕の質問はほったらかしでそのままカイトを構おうとしたようだったが、僕が怒りの咳払いをしてやるとしぶしぶこう答えた。

「……ギルバート様の祖母に当たるお妃様が、魔力を持っていらしたって記録があったと思うけど……どうかしら。何せ先の伯爵様自体が、ギルバート様の祖父であっておかしくないお年でいらしたでしょう。だからお祖母様となると随分前のことになるから、私にはよく分からないわ」

「……、ところでルイーズ、今のものすごくわざとらしくなかった？　思いっきり僕を避けなかった？　僕に触りたくないってこと？」

「親に魔力があっても必ず子供に遺伝するわけじゃないし、魔力持ちの方って、世の中に本当に少ないから、いずれにしてもアレックス様は運がいいわよ」

「ルイーズ……、おまえはそんなに僕のことが嫌いなのか？」

第67話　魅力（3）

ルイーズの無礼のおかげで僕は完全に苛々していた。
あんなに分かりやすい拒否の仕方もないだろうと、僕はルイーズと、それから僕よりルイーズに優先されたカイトにも腹が立っていた。さっきの高飛車なお嬢様に比べたら、外見も、たぶん内面もルイーズのほうがずっと上等の女だということは明白だった。だから年が十歳も上だということをカイトがもし気にしない性格だったとしたら、彼は今夜にでも童貞卒業というわけだ。

「ほら、案の定むくれてますよ、何なんですか、俺まで睨まれたじゃないですか。
何だか懐かれてるの、分かってるんでしょ？　アレックス様は閣下の弟なんだから、もうちょっと煽ててやってくださいっての。ちょっと取り持ってくださいよ、こちとら生活かかってんですから」
「困ったわねえ。坊やなんだから……」

一方、またしても兄さんに置いて行かれたジェシカは、僕らのこうしたやり取りなどお構いなしで、一人で完全にふて腐れていて、しかも荒れていた。
珍しくドレスを着ているジェシカは美しく、それなのに火を吹くような強い酒を喉に流し込んで咳き込む彼女の後姿は、痛々しいものがあって見ていられなかった。
ジェシカは以前、僕にタティに対して自分の愛情を伝えたことがあったのかとアドバイスをくれたことがあったが、自分はそれを兄さんにしてみたことはあるんだろうか？
それとも、遊びまわる兄さんにそんなことをしても到底報われそうにないことを、彼女もそろそろ気づいているんだろうか……。

「あらアレックス様、世界から取り残された私たちにご同情くださっているの？」

やがてルイーズが再び、ジェシカの背中を見つめる僕の顔を覗き込んで色っぽく囁いた。

彼女が僕に興味があるわけではなく、飽くまでもつい今しがたの険悪さの穴埋めにやって来たことは分かっていたので、僕はその質問に答えなかった。カイトにちやほやして来いなんて言われて、仕方なく近寄って来たことを、分からない僕ではないからだ。

それなのに間近で彼女を見ていると、僕はどうにも胸の中が落ち着かなかった。

「ねえ、まだ、怒っていらっしゃるの？」

ルイーズは僕を見上げて言った。

「……」

「ご機嫌を直して頂けないかしら。さっきのことは、決して悪気はなかったんですのよ、本当よ。

ただ、アレックス様に触るのが嫌ということではないのですけれど、貴方は私よりも偉い方なんですもの。だからそんなことをしては、失礼に当たってしまいますでしょう？

貴方だって、先ほど公爵様とお話されていらしたとき、もしバランスを崩しても……まさか公爵様に向かってお倒れにはなられないはずだわ。

だから私はアレックス様に触るのが嫌ということではないのよ。ほら、ね？」

そしてルイーズは僕の二の腕にそっと手を添えた。僕がどきっとして触られたところに目をやると、彼女は微笑んで僕にウィンクした。

「別に怒ってないよ……」

僕は本当のことを言っていた。

「ならよかったわ。そうよね、アレックス様は、もう立派な大人なんですものね。私、アレックス様みたいにお優しくて、それに理解のある男性って憧れてしまうわ」

確かに僕は優しいし理解があるので、ルイーズのその言葉には賛成だった。

「……本当にそう思う？」

僕が言うと、ルイーズはそれまでよりももっと微笑んだ。

「ええ。それに貴方って、とっても格好いいわ。近頃では、ギルバート様より格好いいかもしれないって、思っていたのよ」

「えっ、兄さんより？」

「ええ、ギルバート様より素敵」

「本当かな……、兄さんより格好いいなんて。お世辞じゃなくて？」

「お世辞じゃないわ。本当によ」

「……、……カイトより？」

「ええ。カイト様より素敵よ。私は貴方のほうが好みなの」

「そう……、そうか、何だよ、別に怒ってないってば。僕はただその……でももういいよ。僕は理解があるからね……」

「まあ。男らしいのね」

「まあね。君も、その辺をもっと分かるようにするといいよ。僕は君よりちょっとは若いかもしれないけど、大人の男だってことをね。そうだ、あんなに飲んだくれて、ジェシカは大丈夫なの？」

「ええ、ご心配には及びませんわ」

ルイーズは僕が言わんとするところをやっと分かったのだろう、にこやかな態度で僕に応じた。

「私とジェシカ様は、いつだってこういう役まわりなんですもの。ギルバート様の身勝手に振りまわされて、結婚もできずに年を取っていくさだめなの。あら惨めだなんて目でご覧にならないで。悲しくて、うっかり河川に身を投げてしまいたくなりますわ。ねえ？」

そしてルイーズはジェシカにも微笑みかけた。しかしやっと咳の収まったジェシカのほうでは、それをあまり好意的に受け取らなかったようだった。彼女は不快そうにルイーズを見やった。

「ルイーズ。まさか私を、色ボケの貴公と一緒にするつもりではないのだろうね。その説明ではまるで私までが物欲しげな女に取られかねない。勝手に仲間にするな」

「あら、お気に障りまして？　ふふふ、いやだわ、この方本格的に酔っていらっしゃるみたい。彼女酒に弱いくせに、毎年こうなんですもの。困ってしまうわね」

そしてルイーズは僕に同意を求めたが、すぐその後ろにいるジェシカのほうは僕に向かって否定を示した。ジェシカの機嫌は悪く、しかも頭と身体は酔いのためにふらふらしていた。

「いえ、私は酔ってなどおりませんよアレックス様。何しろ私は、男勝りの武官にございますからね。いかな年末の宴席とは申せ……」

「うふふ、ご自分で男勝りだなんて」
「貴公、さっきから、目上の人間を笑うものではない。
それに、いつも狸のように素知らぬ顔をしているが、本当はルイーズ、貴公だって他の女どもに劣らぬほどあの方を慕っているくせに……。
いったいいつまでそうやってみすぼらしい奴隷女のように髪を切り、自慢の金髪を黒く染めているのだね。だがそんなことをしても、私はすべてを知っているのだよ。私はすべてを……、すべてをね……」

いつの間にか、話が深刻な方向へ向かい始めていた。
ジェシカは酒に酔って据わった目を向け、ルイーズに何かとても言いたいことがあるような顔をしていた。

「いいえ、貴方は何もご存知ないわジェシカ様。貴方はお嬢様ですもの」
「お嬢様？　共に苦境を乗り越えてきた私を、貴様はお嬢様と言うのか？
ああ、そうとも……だがそれがどうした、それとこれとは何も関係のないことだ。問題なのは私があの方に貴公ほどには信認すら頂いていないことが――、二人の親しげな内緒話を私がいつもどんなふうに感じているか、それでも私はギルバート様を支持しなくてはいけない、何事も、どうしても、貴公のように気安くして貰えなくてもだ」
「ギルバート様は貴方を大切に想っているわ。
取り返しのつかない過ちを犯した私なんかよりずっと……、ずっとね。
だからなのよ、だからなの……それが分かっていらっしゃるから、貴方だって彼のお傍にいらっしゃるんでしょう？」
「……」
「ね、今はもうこのお話はやめにしません？　それはこのような場

所で話題にする性質のお話ではないわ。
それに、アレックス様たちが不思議なお顔をしていらっしゃいましてよ」

そしてルイーズは、思わぬ内容に発展してしまったこの話を、急いで終わらせたいというようにジェシカをなだめたが、ジェシカはそれには乗らなかった。
彼女はいっそう苛立たしげにルイーズを見やり、普段冷静な彼女としては珍しいくらい大きな手振りをした。

「上から物を言うなと言っているのが聞こえないのか、だいたいからしてあの方の嫌悪する不埒で恥知らずの女のふりをして、貴公はいったい何を企んで……、そう、私は知っていると言ったはずだ、つまり真実はこうなのですアレックス様。私が……」

けれどもそこでこの話は突如終了することになった。ルイーズは妖しげな女の足取りでジェシカに近寄り、呂律のまわらない口で何かを言いかけていたジェシカの唇を手で押さえると、ジェシカは瞬時に彼女の腕の中にぐったりと倒れ込んだ。僕にはそれが、ルイーズが魔法を使ったからだということがはっきり分かった。
僕やカイト、他にも周囲に大勢の人々がいるこのような公式の場所で、彼女は公然と魔法を使って立場が上の人間を黙らせたのだった。

「酔ってお休みになったのよ」

それからルイーズはあまりにも華やかに微笑んで、まるでジェシカが自発的に眠ったことを、信じているようなことを主張した。

「そうでしたわね？」

僕とカイトは顔を見合わせて、それから揃って首を縦に振った。ルイーズはそれまで通りの優しい笑顔だったが、しかしそこには有無を言わせない気迫があったからだ。

第６８話　深夜に恋する

眠り込んだジェシカのことを介抱するために、僕らは取り敢えず広間の壁際に移動した。

ルイーズは態度こそ柔和だったが、そのまま眠ったほうがいいなんて言って意地でも魔法を解こうとしないので、僕はこれを口実にそろそろ夜会から引き上げて、ジェシカを伯爵邸まで運んでそのまま休もうと思っていた。

ところがそこへ、王城の衛兵が気を利かせて呼び寄せた救護班の連中に紛れて近寄って来た男が、いきなりジェシカを抱き上げて行ってしまった。

彼は自分をフィーロービッシャー家に仕える騎士だと言っていたし、それに彼の並々ならない勢いのようなものに気圧されたこともあって、僕はついそれを許してしまったのだ。

けれどもそのすぐ後からジェシカの弟が慌ててやって来て、彼は僕をみつけると姉の醜態がどうとか何やら言い訳をしていたが、僕はジェシカがルイーズの魔法によって寝てしまったことをこの目で見て知っているので、彼の謝罪を笑って許した。

「ジェシカなら、さっき君の家の騎士が連れて行ったよ。彼は例の結婚相手かい？」

けれども僕がそう言うと、二十代後半のジェシカの弟は慌てた顔をして、ジェシカの結婚相手は今夜は参加していないと言った。

実姉のことなのに、まるで自分の恋人を盗られたかのような反応であることを奇妙に思ったが、僕がそれに干渉することはできなかった。何しろ彼は顔を青ざめさせ、恐らくジェシカを連れ去った男の名前を呪わしく口にすると、勢いよく夜会会場を出て行ってしまったからだ。

その背中を見送ってから、僕はカイトを見た。

「ジェシカを持って行ったのって、ほら、前に君が見かけたっていうつき纏っている男？」

僕の質問に、カイトは頷いた。

「ええ、確かにあいつでしたよ。どうやって入り込んだのやら、以前も居城の柱にしがみついて、ジェシカ様を凝視していたんです。頭のおかしい奴だと思ったので、一応追い払ったんですけどね」

「と言うことは、つまり婚約者じゃないのがつき纏っていたのか」

僕が言うと、面白半分にカイトが答えた。

「そいじゃ、奴は第三の男ってことですね」

「ジェシカ様はもてるのよ」

そこにルイーズが口を挿んだ。

「彼女とても真面目だし、一見するときつそうなのだけど、性格は逆なところがいいのよね。お嬢様が、そのまま大人になったような人。不器用で可愛い人だわ」

「世の中には、外見通りにきつい性格のお嬢様もいらっしゃいますが」

カイトは私情を漏らしつつ、僕とルイーズを見た。

「弟のクライド様は、ジェシカ様がさらわれちまったのを取り返しに行ったみたいですけど、応援に行かなくてもいいんでしょうか？寝込んでいる女をさらって行って、やることとって言ったらまあ、

ひとつでしょうし」

カイトの言葉に、僕も我に返って賛同を示したが、ルイーズはかぶりを振った。

「いいわよ」

「でもさ」

「クライド様が助けにいらしたから、たぶん何事も起こらないわ。それにあの人たちは、もうずっと長いことああなのよ。さっきのあの従者は、確かにジェシカ様のことがお好きみたいなのですけれど、ジェシカ様に輪をかけて不器用で、好きとも言えずにもう十年、いえ二十年あんなことばっかりやっているの。でも、結局は病的にシスコンの弟がその度に邪魔するから成功したためしがないのよ。

クライド様がお家の実権を握るようになり始めて、長いこと遠ざけられていた時期もあったのだけど、まだ諦めていなかったのね」

「二十年って、そりゃまた不毛な」

カイトが率直に感想を言った。

「じきに貴方にも分かるわよ。人生って、意外とそういうものだってことが」

ルイーズの言葉に、カイトは頷いた。

「いえ、もう分かりますよ」

「あら、そうなの？」

それからルイーズは自分の周囲にも、会場にてずっとルイーズに目をつけていたらしい男たちが、集まり始めていることを示しながら

僕たちに言った。

「でも人生には、ときには熱い夜がないとね」

ルイーズが彼らに向かって微笑み始めると、まるで街灯に群がる汚らしい蛾や羽虫のような男たちが、ようやく接触のきっかけを得たとばかりにわらわらと集まってきて、ルイーズを口説き始めた。確かにルイーズは、ウィシャート公爵に名指しで褒められるほどの目立つ美人ではあったのだ。

「伯爵様がいらっしゃると、殿方が恐れをなして誰も声をかけてくださらないんですもの。やっと夜を楽しめそうだわ」

そしてルイーズはそう言って、群がる男たち全員に八方美人に応対しながら、僕とカイトには手を振って見せた。

それが僕らに立ち去れと合図を送っていることは分かっていたのだが、僕は少し居残りたかったのでもじもじしていると、カイトが僕の服の袖を引いた。

「ルイーズ様が、あっちへ行けって言ってますよ」

「何言ってるんだ。変なのが大勢湧いて来たのに、女性を置いて行けるわけないじゃないか。あいつらが、下心を持っていることは分かっているんだ。と言うよりは、男が女に声をかける理由なんて、それがすべてだろう。

それにだいたい僕はルイーズに追い払われる立場じゃないぞ」

「でも追い払われているんですよ」

「違う。僕は心配しているんだ」

「まあまあ、いいからいいから。野暮なこと言うもんじゃないんですって。

大丈夫、ルイーズ様は大人で、しかも手練の魔法使いだ。いざとな

りゃ、あの細腕で男をなぎ倒すことだってできるんですから」

それでカイトは僕の背中に腕をまわして、僕は半強制的にその場から退場させられることになったのだった。

第69話　複雑なる男心

分かっていたこととはいえ、ルイーズが結局は僕をまったく男として見ていないという現実というのは、僕の気持ちを傷つけるには十分だった。

ルイーズが僕のことよりも、他の名前も分からないような男たちのほうをずっと優先したことを、まったく面白くないと感じているということは、僕はルイーズに対して、もしかするとあわよくばなんて気持ちがあったということなのだろうか？

でもそんなことをまさかカイトにも、誰にも言い出せるはずはなく、僕は単純にルイーズの素行が許せないという態度をもって、会場の別の片隅でしばらくの間憤慨し続けていた。

「ルイーズの奴、本当にはしたないよ。日頃から娼婦みたいな格好して、おまけに男好きだなんて最悪だ。とにかく彼女には、恥じらいってものがないんだ。僕は、ああいう女は好きになれないね。年下だと思ってこっちを小莫迦にしている態度も苛々する」

「そうですか？　そんなに小莫迦にゃしていないと思いますけどね」

「年上ぶってる」

「いいじゃないですか、年上ぶったって。だって彼女、閣下と同い年なんでしょ。さすがに貴方を同輩とは思えないんですよ。年上ぶる女を可愛いと思えるくらいになってこそ、大人の男ってものなんじゃないですか。アレックス様、大人の男になりたいんでしょう」

「そうだよ」

「だったら、そんなことで腹を立てたってしょうがないですよ。もっとでっかく構えていないとね」

時刻はとうに遅く、カイトがそんな話よりも、もっと明確に愉快な

気持ちになれる、女性についての話や、彼女たちの素肌の話なんかをしたがっていることは感じていたが、僕は譲らなかった。

「おまえは今朝、ルイーズに誘われていたくせに、あっさり鞍替えされて悔しくないのか？」

僕が言うと、カイトは唇を曲げた。

「あんなの、最初から本気じゃないですよ。彼女は単にどぎついことを言いたくなる種類の人間なんじゃないですか？」

「本気じゃないって、どうして分かるんだよ」

「どうしてって、説明は難しいけど……、とにかく今朝のことなら、単にからかっただけだと思いますよ。

俺が思うに、基本的に自分を捨て切れてないお嬢さんでしょう、あの人は。さっきジェシカ様をお嬢様なんて言っていましたが、俺に言わせりゃ彼女だって十分そうですよ。

まあ、閣下の魔術師ともなればいろいろ難しい場面を目にしてはいるんでしょうけどもね。

だから本当に俺の相手をしようなんてつもりははなからないんです。ありゃ俺が話に乗らないってことを見越して、言っただけ」

「なんでそんなことが分かるんだ？　ルイーズと親しくもないくせに。

僕にはそんなの、全然分からないよ」

「分からなくていいんですよ」

「何だよ、おまえまで僕を莫迦にするのか？」

僕が言うと、カイトはやれやれといったような反応をしたが、すぐに真面目に返答をくれた。

「んー、つまり演技してるんですよ。彼女は自分を偽ってる。ジェ

シカ様も言っていたじゃないですか、本当は髪の色が金髪なのに染めているとか何とか。世の中に、ブロンド女ほど需要の高い人種もないでしょうにね。
本当に見たままの人物なら、彼女は今頃自分が金髪美女だってことを最大限に利用しているところでしょう」
「つまりおまえは、ルイーズが本当はあんなじゃないって言いたいのか？」
「たぶんね」
「真面目なのか？」
カイトは笑った。
「真面目って……、んー、まあ、考え方はかなり堅いでしょうね。だからさっきの男たちのことも、たぶんすぐに追い払うんじゃないかな。あれはまあ……」
カイトはそう言って僕を見て、曖昧に何度か頷いた。
「じゃあ、なんでわざわざあんなにしてるんだろう？
例えば……ルイーズは金髪フェチの兄さんに迫られたら嫌だから、身を窶しているとか」
僕の半信半疑の言葉に、カイトは頷いた。
「まあ、なんであんな格好しているかって考えたら、たぶんそんなところでしょうね。身を守ってるんじゃないかと思いますよ。閣下はそういう人ではないと俺は信じたいところなのですが、でも確かに、金髪女と見ればあの方の見境のないことも確かだ。となりゃ、あの美人が金髪なら、三秒でベッドルーム行きでしょうからねえ。いつも身近にいるんじゃ、やっぱりあれの頻度も高くなって、そう

なりゃぽんぽん子供もできちまうかも」

そしてカイトはおもむろに身体の重心を倒し、まるで妊娠している女性が自分のお腹を撫でるような、ある意味生々しい手つきをしてみせた。そのおかげで僕は無駄な想像力を掻き立てられ、げんなりして頭を振った。

「……確かに、迫られたら断れない相手が身近にいるっていうのは、それは女性としては耐えられない状況だろうな。ルイーズは兄さんの魔術師だから、兄さんが嫌だからと言って、他の人間のようには役目を離れるわけにもいかない。

だからわざと兄さんが嫌いな女みたいに振る舞って、兄さんを拒否しているのか……。

カイトは、人のことよく見てるんだな」

僕の言葉に、カイトは笑った。

「まあ、ご存知の通りの境遇でしたから、俺は否が応でも人の顔色を見なければならなかったってことも大きいかも。でも事情が明確でない以上、推測が当たってるかどうかは保障できませんけど」

「まったくルイーズの奴、兄さんのスケベが嫌で困っているなら、僕に相談すればいいのに……」

「そらま、その…、貴方は閣下のご身内ですからね。遠慮なさったんでしょ」

「じゃあ兄さんのことはどう思う？　ルイーズによると、兄さんは初恋の女を忘れられないでいるらしいんだ」

「まあ、誰にでもあるんじゃないですか、そういうこと」

「君にはあるのか？」

僕がたずねると、カイトは両手を広げてまた笑った。

「どうでしょう？」
「また自分のことははぐらかすんだな」
「ま、人に歴史ありですよ」
「偉そうに。君は僕と大して年が変わらないじゃないか。たった十年前を思い出しても、僕らは子供なのに。語る歴史なんかあるって言えるのか？」
「そら、そう言われちまえばそうですけどもね。それでも、子供なりに苦労はあるもんでしょ」

カイトに言われ、僕は頷いた。

「まあね」
「ところで前から思っていたんですが、これは閣下とルイーズ様の話とは別の話としても、年頃の主人と従者がいつも一緒にいたりすれば、やっぱりお互い妙な感情が出てきたりするものなんですかね。貴方とタティみたいに」
「さあね、君が何を言いたいのかは知らないが、その辺はよく分からない。結局は、人によるんじゃないか」
「アレックス様はロビンちゃんのこと、どう思います？　ここだけの話、彼女、なかなか可愛いと思うんですけど」
「それは……、可愛いかもしれないけど。どうかな、つまり、僕はロビンのことはまだよく知らないんだ。お互いまだ何も……そのうち打ち解けられればいいと思ってるよ」

僕は後ろのロビンを気にしつつ、カイトのゴシップ好きにうんざりして言った。

「そりゃ、貴方から話しかけられるのを待っているんですよ。俺の見立てでは、ロビンちゃんってこっそり貴方に気がありそうな気が

するんですよね。
アレックス様のこと、ときどき恋する瞳でじっと見てたりするんですよ。ああ、いいなあ」
「カイト……」
僕は再び頭を振った。
「何です？」
「君が常に誰かとコミュニケーションを図ることが大好きなのはよく知っているし、そうせずにはいられないことも分かってる。僕もそれに助けられることはある。だから君の無駄話には僕としてもなるべくつきあうようにしているけど、でも本人がすぐ後ろにいるのに君はどうしてそうデリカシーがないんだ。すべての人間が、君のように大雑把だとでも思っているのか？」
「いや、後ろにゃ誰もいませんよ？
いやだなアレックス様、まさか幾ら俺だって、本人がいたらこんなこと言いませんって」
「えっ、いない！？」

第７０話　運命の少女（１）

そして僕たちは急遽王城内をロビンを探して歩くことになった。
僕につき従っているべき魔術師のロビンと、どれくらい前からはぐれていたのかについて、思い出すことができないくらい僕はまったくそのことに気がつかないでこの夜を過ごしていた。
夜会の会場内を、そろそろ酔いどれ始めた貴族たちの衣装の隙間を縫い歩きながら、僕らはロビンを探してまわった。
彼女は魔法を使って僕の身を護るべき立場の人間でありながら、普段からタティ並に危なっかしい感じがしていたのだが、それが、こちらが気にしてやらなければならないほどだったことを思うと、僕はこの人事を少し不満に思っていた。
これがタティであったなら笑って許せただろうということを思うと、彼女を叱ることについては躊躇う気持ちが生じないわけではないのだが、妻と部下とでは扱いに違いがあって当然なのだし、これはやはり、後で少し厳しく言ってやらなければならないだろう。
僕らはそのまま広間をくまなく歩きまわったが、ロビンの姿はどうにも見当たらず、そのまま夜会会場の外の廊下に出た。
王城の廊下はそれ自体が素晴らしい部屋の一部であるように何処も一様に絢爛豪華、壁には絵画や金細工の薔薇の燭台、建国譚の壁紙と、足下は深紅の上等な絨毯、そして直立する衛兵や行き交う召使いの衣装にさえ上品な薔薇柄があしらわれてあった。
廊下に飾られた白薔薇のリースを囲んだり、金縁の手すりに何となく寄りかかったりしながら、広間からあふれ出た貴族たちがそこでも輪を作っておしゃべりの花を咲かせている姿があった。しかし夜が更け始めていたせいなんだろう、そこでは恋人らしい二人が人目を憚らずに何やら親密な様子で寄り添いあっていたりする姿なんかも、割と目についた。
それで僕とカイトはなかなか気まずい思いをしながらその集団の中

にロビンの姿を探したのだが見当たらず、あんまりカップルの側にいるっていうのもいたたまれない気持ちがするので、ひとまずは人気のない廊下の十字路の向こうのほうに避難してから、これからどうすべきかを話し合おうとしていた。
国中の役目のない貴族が集う今夜、王城の警備は何にもまして万全だとは思うが、時刻はもう夜中だった。女性を騙して、さもなければ力ずくで何処かへ連れて行こうなんてことは、少し世慣れた人間にとっては、何とも容易いことだろう。
先日兄さんが話してくださった、ギース公の乱交会場の話が頭を過ぎり、僕はよからぬことを考えてため息を吐いた。

「参りましたね」

少し足早に廊下を進みながら、カイトは言った。

「思い出してみると、ウィシャート公爵様と話したときにはもういなかったですよ。と言うのは、あの公爵様ってのもなかなか女に執着のあるお方のようで、男の従者には見向きもしませんが女は必ずチェックしますからね。ジェシカ様ルイーズ様のことは、今夜もばっちり観てらした。
ロビンちゃんはかなり正統派の美少女だと思うから、あの場にいればまず無視されるってことはなかったと思われます」
「そうなのか……、君はよく見てるもんだな」
「いえいえ。としますと、それより前に……ということになりますね。たぶん、アレックス様がお知り合いの方々とご挨拶をなさっていた頃にはもういなかったかもしれない。はぐれたのは会場に入って割とすぐだったんじゃないでしょうか、そんときゃ特に、貴方も俺も場に馴染もうと必死だったから。俺がもう少し気をつけていればよかったんですが」
「いや、君のせいじゃないよ。魔術師が主人の側を勝手に離れるっ

ていうことは、考えられないことなんだからね」
「どうします、ここは衛兵に探させたほうがいいでしょうかね」
「大事にしたらこのことが人に知られてしまうけど……、まったく王城で迷子なんて。彼女はアディンセル家の名前に傷をつけたいのか。
兄さんによればロビンは身元もしっかりしているそうだし、一生懸命にやってはいるんだろうけど、悪いが部下としてはあまり優秀じゃないみたいだ。
僕に何の断りもなしに勝手にいなくなるなんて、さすがに良識を疑わなくちゃならないよ」
僕は少々うんざりして頭を振った。
「ま、我々も彼女をずっとほったらかしにしていたってのもありますよな。あんまり相手にされないんで、むくれちまったのかもね」
「だって、何を話したらいいのか分からなかったんだ」
僕が言うと、カイトも気まずそうにしてそれに同意した。
「それは俺も右に同じです。なんつうか、彼女はあまり冗談好きな性格でもなさそうだし、あんまり人を寄せつけないって言ったらいいのか、とにかく普段からして周りの人間と打ち解けようとするところがなかったんですよね。まあ、そこら辺はアレックス様の女版とでも言いますか。
それで、暇さえあればアレックス様をじっと見ているしで、俺としても日頃からどう扱ったらいいやらというのが本当のところでした。でもま、女ってのはそもそもあまり社会的な動物じゃないですからね。今回のことはしょうがないですよ。ましてや彼女は若いんだし。きっとその辺にいると思いますよ」
「ロビンは幾つなんだっけ。年下っていうのは分かるんだけど」

「十八って聞いてますよ」

それで、思わず僕はにやりとした。

「それは若いね。まだ子供だ」

するとカイトは僕の言った言葉にどういうわけか少し笑ったのだが、たぶん、僕の言うことが正論だとでも思ったのだろう。

そして僕らは二人して広間の入り口に詰めている衛兵に、この事情の説明をするために来た道を引き返そうとしたのだが、ふとカイトが、衛兵に言うよりもルイーズに言ったほうが手っ取り早いんじゃないかと提案した。

「ああ、そうだよ。それがいい」

僕はそれに賛同した。

「自分が魔法を使えるわけじゃないから、なかなか思いつかないんだよね。魔法って感覚がさ。遠くが見えるとかそういうの。でも言われてみればそうだよ。迷子を捜すには千里眼がうってつけだ」

それで僕は、すべてのことがすっかり解決した気持ちになって安心した。

「どういう感じなんでしょうかね。何でも見渡せるって」

「さあね、何でも見えるって言っても、意識を集中しないといけないはずだから、常に全方位何処でもってわけにはいかないと思うよ。ルイーズは、所領の要所に常時意識を置いているらしいんだけど、それってすごいことなんだ。普通は一度に一ヶ所とか二ヶ所なんだって」

「へえ、何だか分かりませんがそりゃすごい。公爵様に言われても、閣下が手放さないわけですね」
「うん。でもトバイア様が連れていた魔術師は、僕が見てもルイーズより実力が上だったよ。あの背の高い痩せた魔術師。名前はなんて言ったっけな。とにかく、だからトバイア様にしてみれば、無理やり兄さんから取り上げるほどでもなかったんだろう」
「ときに、服の中も見えるんですかね」
僕は頷いた。
「そうらしいよ。タティが言ってた。コルセットの中も見えるんだって。タティは僕の魔術師になる予定だったから、ある時点まではその訓練をしていたから、確かだよ。……と言うかカイト、今の質問の意図を聞いていいかい」
「分かってるくせに」
カイトはほとんど真顔で言った。
「お嬢様の裸を見たいの？」
僕は少し意地悪を言ってやった。
それでカイトはなかなかジレンマに陥ったようだった。
「ふん、否定しないってことは、ヴァレリアは好きじゃないけどちゃっかり裸は見たいのか。まあ確かに、彼女はなかなかいい身体つきをしていたと思うけど、君もとんだスケベ男だな。好きでもない女の裸を見たいとは、それとも裸を見たいと思う程度には好きなのか知らないが、どっちにしても僕には理解に苦しむね」
「何をおっしゃいますか、アレックス様だって似たようなものでしょう。さっきだって、ルイーズ様の胸を見てらしたくせに。まった

く、純情可憐なアレックス様は、もう完全に過去のものなんですね」
「ルイーズは胸と唇がいいんだ」
僕はカイトの皮肉をものともせずに答えた。
「うなじもいいですよ」
するとカイトも言った。
「首が細くて。そそる」
「ふうん、なかなか通だね。でも君、自分の女じゃないんだから、あんまりルイーズのことそういう目で見るのは感心しないな」
「アレックス様……、そりゃ勿論、ご自分に対しておっしゃったんでしょうな」
「いや……、僕はいいんだ。僕は別にいやらしい目で見てるわけじゃないからね」
「んじゃ、どんな目で胸やら唇やらを凝視してらしたんです？」
「えっ？　そ、そりゃあ、それは……よく分からないけど。でも、君が思ってるようなことじゃないよ。これは確かだ。だいたいルイーズは日頃自分で露出してるんだから、やっぱりちょっとは見られたいと思ってるんだよ。だから見てもいいんだ」
「じゃあ俺も見てもいいですね」
「いや、それは違うと思うよ」
「アレックス様……」
そこへ、何やら画材を抱えた痩せた男が急に走り込んで来て、彼は十字路のちょうど真ん中でカイトと衝突して絵の具だの筆だのを廊下にぶちまけた。せっかく愉快な話をしているところに何なんだと僕は腹を立てたが、カイトはもっとだっただろう。

第71話　運命の少女（2）

何しろ男は最初は僕に突っ込んで来たのだが、すんでのところで僕の護衛役を兼ねてもいるカイトが僕を庇ったからだ。しかしどうしようもない協議をしていたために自分の身まではかわしきれず、カイトの衣服は運悪く絵の具にまみれた。

それで、恐らく宮廷画家らしい男は真っ青になってカイトの夜会服から絵の具を拭き取ろうとしたのだが、悪いことに彼がカイトの服を拭った布とは、既にたっぷりと色鮮やかな絵の具を纏いすぎて汚れている布だった。

その結果として汚れはより拡散し、カイトはこの画家が恐ろしいほど気配がないから反応が遅れたということを僕に言い訳していたのだが、次にはいま着ている衣装を廃棄しなければならないことをぼやかなくてはならなくなった。

「あんた何てことするんだよ、こいつは俺にとっちゃ一張羅なのに……」

「あああっ、すみませんっ、お坊ちゃま！」

カイトのことを、何処の誰だかは知らないだろうが、少なくとも陛下の夜会客であることを悟った画家は、血の気のない顔でカイトの足下に這い蹲り、そう命じられたわけでもないのに今度は自らの顔面を廊下の絨毯に擦りつけ許しを乞うた。

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

矢継ぎ早にそんな行動を取られては、カイトも怒るに怒れないらしく、彼は戸惑ったように頭を掻いていた。

「この通りですからどうか生命だけは、生命だけはっ！」
「いや、生命なんか取らないから……、そうやって大袈裟にしなさんなって。なあ、ちょっとやめてくれ」

十字路の右手、夜会会場前の廊下にいる暇を持て余していた貴族たちが、やがてこの様子を見てざわめき始めていた。その視線に耐えられなくなったカイトが騒がしく平謝りする画家に顔を上げさせると、色白の、意外にも整った顔が露わになった。
僕はあまりしげしげと眺めたわけではなかったが、年頃を言うなら二十代前半、ともすれば僕と変わらないような印象だった。芸術家とはそういうものなのかもしれないが、鳥の巣のようなボサボサの髪といい、絵の具にまみれた身なりといい、他人事ながら、あまり自分の外見に関心や注意を払っていない様子なのが惜しいほどだ。

「王城じゃ、こんな小汚い画家でさえいっぱしの美青年ってか」

それを見て、カイトは僻みっぽく呟いていた。

「ゴーシュさんっ」

そこへ不意に、鈴の音の鳴るような愛らしい声が聞こえて来た。
聞き覚えは勿論ないが、何かに導かれるかのような引力を感じてそちらを向くと、長い金色の髪を揺らしながら小走りにこちらへ向かって来る少女の姿があった。
彼女は夜会会場にいる裕福な姫君方のような素敵なドレスを着ているわけでもなく、大して飾り気のない白いローブを纏っているだけの娘だった。陛下の夜会という晴れやかな日にドレスを着ていないということは、彼女の身分は高く見積もって地方男爵以下ということになるだろう。
少女はその細い身体には少々大きすぎる、太陽を模した飾りつきの

錫杖を手にしていた。そのためなのか、その頼りなくも神秘的な風情に、僕は釘づけになった。
その透き通るような透明感と魅力に魅せられ、僕は頭の先からつま先までの全身全霊を雷に打たれたかのような気分だった。

「ゴーシュさん、急がないと殿下がいらっしゃいます……」

僕の視線や関心のすべてを一瞬にして絡め取った少女は、僕らの存在を内気な様子で気にしながらも画家のところまで走り寄って、彼の耳元に小声で何か話をした。
すると少女に耳打ちされた画家は、更に慌てた様子で散らばった画材を拾い集めようと床の上をもがきまわった。
僕が我を忘れて陶然としている間にも、足下ではカイトが仕方なくそれに手を貸していた。
やがて彼ら三人が散らばった絵筆やら絵の具やらをすっかり鞄に掻き集めた頃、怒号と言って構わないような大変な声量の呼び声が聞こえて、画家だけでなく廊下に居合わせた貴族や使用人、そして僕たちをも竦み上がらせることになった。

「ゴーシュッ！　みつけたぞ！」

目を向けると、そこには数名の従者を引き連れた細身の美少年が、非常に憤慨した様子で足を踏み鳴らしていた。
サンセリウス王国王位継承権第一位をお持ちになる、世継ぎのフレデリック王子殿下の突然の御登場だった。
王子は僕のすぐ目の前にいる画家の青年めがけて進んでいらしたので、僕はまだ夢を見ているような気分をどうにか理性で押し込めて、慌てて最上級の敬意を払うために廊下に跪く姿勢を取った。
深夜であるせいなのか、それなのに薔薇の燭台の光が昼間のように明るいからか、それとも夢の少女に出会ってしまったせいなのか、

僕は頭がぼうっとして、そのときの僕にはあまりにも現実感がなかった。しかしそれでも、王子殿下の御登場がたとえ夢であったとしても、臣下が採らなければならない行動は身体に染みついていた。カイトや画家も僕に従う形で、同じようにして王子殿下に敬礼をした。

そして僕は、突如強い真夏の日差しにさらされているような奇妙な感覚で、殿下とその一群が近づいて来るのをただ見ていた。

先刻彼を姫君だと形容した自分の浅はかさを失笑したくなるほど、間近で目の当たりにするフレデリック様というのは強力で力強い王子だったのだ。

まだ十六歳という若年ながらその存在感は名だたる武将の比ではなく、神々しく、剛毅でありながら典雅、凛として清冽、気品という気品……、彼は本当に、神々の住まう天の領域の住人であるかのごとく強く美しい人だった。

だからすべての人々はいまや彼に注目し、彼の輝くような生命力に魅了され、関心のすべてを彼に奪われていた。誰もが彼を熱望し、未来の君主を崇拝していた。

だけどその中で恐らく只一人、僕だけが、その美貌の王子以外のものにより心を奪われていたことを自覚していた。

その危うげな魂に。

確かに王子はこの場にいる誰よりも美しい。

だけど彼は、彼女ほど魅力的ではなかった。

少女の夢のような気配、そしてその美しい金色の長い髪や不安定で儚げなその風情が、僕の心を一瞬にしてさらい、その甘い姿を二度と再び忘れ得ないほどに僕の心に焼きつけてしまっていた。

他でもない、彼女がそうさせたのだ。あまりにも甘美な彼女の存在が。

「フレデリック様」

そう言って、王子を頼るように走り寄る少女の癖のない金髪が、一瞬金色の翼のように揺れてからおとなしく華奢な背中に戻って行く何気ないその後姿でさえも、僕の心を揺さぶるのに余りあった。運命的な導きを感じ、その直感のままに目を凝らしてでも確認した瞳の色は、この素晴らしい奇跡を重ねて肯定するかのようにシェアと同じはしばみ色だった。

彼女はまるで、僕の心の中に今でも棲んでいるあの美しく尊い女性を、ほんの少し若くしただけの姿をしていた――。

第７２話　運命の少女（３）

この世界のすべての場所に芍薬の花が咲いていることを、僕以外の人間が誰ひとり気づいていなかったとしても、いまや少女の姿は僕の心の中にある夢の庭園の住人とぴたりと重なって、僕の目の前に現れたのだった。

彼女はこの世界の誰よりも清楚で愛情に満ち、優しく僕に接してくれていたあの素晴らしい女性の生まれ変わりのように、いま再び僕の人生に舞い戻っていた。

廊下の金の装飾が夢の光彩を演出し、すべての風景が僕たちの再会を祝福しているかのように光り輝き、それから淡い光の粒子となってやがて色褪せていった。

そして僕はまるで夢を見ているかのように、その少女のことだけを見つめていた。

世界にはほどなく僕と彼女しかいなくなり、目の前に展開されているすべての動きが、まるで現実世界とは完全に隔たれた世界の出来事であるかのように、ゆっくりと流れていた。

胸を張って、軍隊でも率いているかのように堂々と、敢然としている王子に誰もが首ったけになっているのに、僕は王子に傅きながら、しかし心はその少女の存在に釘づけになり、今やサンセリウスの世継ぎの王子など眼中になかった。

僕は長い間探し求めていた大切な女性を遂に見つけ出したその感動に、打ち震えていた。

「ゴーシュ！」

あの細い身体の何処から、そんな大声を出せるのかというほどの迫力のある声で、王子は床に這い蹲るようにしている画家を叱った。

「マリーシアの肖像を描けと言っている。我が麗しの姉上によく似たこの娘の絵を。
貴様、何故そうやって私の言うことを聞かぬのだ。いちいち私に逆らいおって」

王子は画家のすぐ前までやって来ると、傍らの白いローブの少女を示し、それから再び怯えた顔をする画家を見下ろした。
そのおかげで彼女の名前がマリーシアということを図らずも知ることができ、僕はその素敵な名前を胸の中に深く深く刻み込んだ。

「分からん奴め。いったい、何が不満なのだ。報酬か」

僕の心に漂う甘く切ない気分などお構いなしに、尊大な態度で王子が問うと、画家は胸に鞄を抱えたままこう答えた。

「お許しくださいフレデリック様。でも、これから寝ずにマリーシアさんの絵を描けだなんて無茶過ぎますよ。フレデリック様っていうのは、本当に無茶なんだから。もう三枚も描いたのに、まだ描けだなんて。僕、死んでしまいます」
「それでもだ。おまえもそれが本職なら、ここは根性を見せろ」
「フレデリック様は根性って言葉、お好きですよね。僕それ、暑苦しくって嫌いなんですけどね。ねえ、絵の具が足りないかもしれないんです」
「安心しろ、すぐに業者を呼びつけてやる」
「ええぇ、あっ、急に右手が痛いかも……、だから少し、休まなくちゃ」
「ゴーシュおまえ、王子である私が命令しているのだ。男なら、どんなことでも気合いで何とかしろ。そうすれば、大抵のことは何とかなるものだ」

フレデリック王子は線が細く涼しげな見かけとは裏腹に情熱的なことを仰せになり、痺れを切らしたように画家に詰め寄ると彼の腕を引っ掴んだ。
それで画家は一瞬弱々しい態度で僕らのほうを一瞥し、それからまだ諦めがついていない子供の仕草でしょんぼりして王子を見た。

「分かりましたよう、分かりましたからそんなに引っ張らないでくださいフレデリック様。そんなだから、いつまでもおもてにならないんですよ。せっかく綺麗なお顔をしているんですから、もっと愛想よくなさったらいいのに。
ねえ、貴方が微笑むだけでいいんですよ。そうすれば世界が薔薇色に輝くってことを、どうして分からないんでしょう？　きっと素敵なことが起こるのに」

若い画家が言っていることは、いかにも芸術家らしい言い草ではあったが、明らかに出すぎた一言だった。でも王子は特にそれで怒り出すこともなく、ただ真正面から堂々とそれを無視した。

「ねえフレデリック様ってば。そうやって真面目にして、恋もしないつもり？」
「ああ、煩いな。ふん、恋ね、恋ならしているではないか。私の可愛いマリーシアに。私はマリーシアが可愛くてたまらない。私は彼女にぞっこんだぞ」

観念した気恥ずかしさで王子が言うと、彼の傍らにいたマリーシアがたちまち頬を染め、嬉しそうに恥らった。
その様子を見て画家は拗ねたように頬をふくらませていたが、僕はそれよりも、何と言うか、自分の気持ちがこの上ないくらい絶望的に萎んでいくのがよく分かった。
マリーシア、彼女とは、あろうことか王子の愛しい人だったのだ…

…。

「馬鹿言ってないで、いいから来い」

王子はそんな僕の気分なんかお構いなしに再び乱暴に画家の腕を引き、それで画家はよろよろとそれに引きずられかけたが、ふと彼はまた僕たちのほうを振り返って、往生際の悪いことに王子に持っていかれているその足を絨毯の上に踏ん張った。この画家の言動や行動は年下の王子よりも随分子供じみていて、どちらが子供なのか分からなくなる無邪気なものだった。

「何だ！」

それで王子は今度こそイライラとした様子で手の先の画家を振り返った。

すると画家は、少々わざとらしいくらい哀れっぽい口調で言った。

「ああ、どうかお待ちになってくださいフレデリック様。大事なことを忘れるところでした。

実はたった今、僕、画材をばら撒いてしまって……、そちらの方の衣装を台無しにしてしまって……、おわびをしなくてはいけないんです」

「何、おわび？」

するとフレデリック王子が、やや芝居がかったような態度で、興味を惹かれたというように僕とカイトを見た。

第７３話　運命の少女（４）

「ああ、なるほど。絵の具をぶちまけたのか、失礼。それは悪いことをした。
このゴーシュは、これで我が宮廷一の画家でね。絵描きとしての腕前は陛下をも唸らせる絶品なのだが、それ以外のことがどうにも中途半端なのだ」

画家の腕をその手から一時的に解放した後、フレデリック様は少々上擦ったような調子でそうおっしゃった。
殿下のお目にとまってしまったあまりの恐れ多さにひたすらまごまごする僕らに対し、意外にも殿下の態度は友好的だった。
彼は颯爽と歩き、僕たちのいる場所のすぐ近くの壁に寄りかかって腕組みをしてから、絨毯の上に跪いている僕とカイトをじろりと見た。
そのとき周辺にいた他の夜会客たちは、殿下が引き連れていた数名の取り巻きたちによって綺麗に追い払われていて、遠くからまだこちらを未練たらしく見ている者はいるものの、会話が聞き取れるような距離にはもう他の人間は誰もいなかった。
そのフレデリック王子の数名の従者の中には、よく見てみると先刻のオーウェル公子が混じっていたのだが、彼はどういうわけか僕のことを、割と不快そうな目で見ているのが僕をいっそう心細くさせていた。
一方王子はまるで新種の昆虫でも見つけたような、非常に興味深そうな顔をしてこちらを見ていた。目の覚めるような美少年が、ときどきはっとするような美しい顔をして、何かを思案しているようでもあった。
ともすればマリーシアの魅力に吸い込まれ、現実を忘れそうになる自分を押し殺して、僕は自分の中に叛意がないことや、王子に対し

て敵意がないことを、心の中を洗って何度も確かめていた。
僕らがアディンセル家に属している、つまりウィシャート公爵派の人間であることを殿下がもし御存知であるとしても、トバイア様の息子であるオーウェル公子と親しそうな御様子からして、さしたる咎めを受けることはないとは思う。でも、それでも心情的には俄然面白くないだろうと思うからだ。だからもしかすると嫌味くらいは言われるかもしれないと、僕は呼吸を整えながら覚悟していた。

「まったく、何かと思えば、こんな奴らにわびる必要などないのでは？」

ふと、側に控えるオーウェル公子が言った。

「この男は確か私の父の手下の……手下です。左にいるのは更に手下。殿下が話をする価値もない、ゴミみたいな連中だ」

するとオーウェル公子の説明に、フレデリック王子は彼を見た。

「つまりオーウェル、彼らは要は、おまえの知り合いということなのか？」

「いえ。知り合いではありませんね。取るに足らない連中という意味ですよ」

少なくとも表面上は僕らに友好的である王子とは対照的に、公子は僕を見る切れ長の目を更に残忍そうに細めて言った。

「ですから、こんな奴らに何を言い訳する必要があるんです。たかが絵の具をかけたぐらいのこと。殿下も、酔狂が過ぎます。貴方はときどき、周りに気を遣い過ぎるのだ。
もっとも俺は、そういう貴方だからこそ生涯お仕えしたいと思った

わけだが。何事も残酷になりきれない殿下の腹心には、俺のような男が不可欠でしょうからね。

まったく母親の出自が何だと言うのか、ここで重要なのは父系がどれだけ高貴であるかということのみ。極論を言えば、母親が奴隷だろうがそんなことは大した問題ではない。女など、どれだけ血統がよかろうと、連中はそもそも人間ではないのだから。我らは一時その腹を借りるだけ。所詮は子供を産ませることのみが存在理由の知性も体力も我らに劣る家畜なのだ。

そして建国王セリウスの直系男子である殿下こそは、我らが君主と頂くべき唯一の存在なのです。殿下、貴方は選ばれし者なのだ。ですからもっと自信をお持ちになることです。

例えばこんな奴……、貴方の権限で、いっそこの場で消してしまったほうがいいと思うんですがね。

殿下を未だ妾腹などと軽んじる連中にとっても、これはいいみせしめになるでしょう。我が父も、それで目を覚ますかもしれない。ためらうことなどありません。こいつはたかだか地方領主の次男……それに、ちょうど目障りな奴だと思っていたところだ。生贄にはもってこいですよ」

公子が言う目障りというのが、完全に僕のことだけを言っているのは分かっていた。オーウェル公子の思想はかなり極端で乱暴だったが、この国の根底を支配しているものでもあった。

確かにオーウェル公子と僕との間にはほとんど交流はなかったが、彼は少なくとも、僕がアディンセル家の人間であることを知っているはずなのに、これは何とも薄情な提案だった。

しかし幸いにも、薔薇君は公子ほど極端な人間ではないようだった。フレデリック王子はふと表情を険しくして、オーウェル公子に向き合った。

「オーウェル、それは本気で言っているのか？」

「本気ですよ。ここで冗談を申し上げる理由がないでしょう」
「馬鹿を言え、彼らはおまえの父親の部下なんだろう」
「だったらどうなんです？」

オーウェル公子が、高貴な方に向けるにはあまりにも礼節を欠いた、挑発的な視線を王子に向けると、王子はそれに対して驚くことも怯むこともなく、御自分も真っ向から彼と視線を合わせた。

「オーウェル、私は無闇に部下の生命を軽んじる者が、部下に慕われる道理はないと言っている。おまえが内心でどのような主義主張を持っていたとしてもそれは結構。私を慕ってくれることも有り難い、だがもし本気で私の意向を酌める人間になりたいと考えているのであれば知ってくれ。少なくとも私が目指しているものは、断じてそういうものではないんだ。私とは、言わば人々を領導する正義の剣だ。私は我がサンセリウスのすべての国民の安寧のためにのみ生きることを神に命じられた者だ。

私は信心深いことを自称するほどに信仰に熱心であるわけではないが、日々このことを自分に言い聞かせながら毎日を生きている。だから私は間違っても弱き者たちに刃を手向けるような真似はしない。女子供や、それに建国王の男系男子でない者たちもそうだ。

オーウェル、私はそのような選民思想を決して歓迎しない。おまえの言うようなことを、私は私の信念において、絶対に選び取ることはない。これは私の出自こそが、私に学ばせてくれたことだ」

公子に向けられるフレデリック王子の口調は、飽くまで冷静で、間違ってもオーウェル公子を非難するようなものではなかった。

確かに王子は勝気な御性格には違いないのだろうが、僕が想像していた無鉄砲な直情さは持たない人物のようだった。気位の高さはその仕草や表情からよく分かったが、兄さんが言っていたような過剰

なほどの劣等感も窺えなかった。少なくとも、同じ年頃の公子よりもずっと落ち着いていて理知的な感じだった。

公子は言われた内容に対するものとしては悲劇的に傷ついた顔をして黙ってしまったが、フレデリック様にはそれを微笑して受け入れるだけの度量があったのだ。

「だからおまえも学んでくれればいい。

何が正しいことなのか、私もまだ学んでいる途中なんだよ」

第７４話　運命の少女（５）

それからフレデリック王子は、恐れ多くも僕のやや後方に控えているカイトに歩み寄られた。僕も人のことは言えなかったが、カイトが足下に跪いて、柄にもなくがちがちに緊張している様子が、傍目にも可笑しいほどだった。

「おまえ、名前は？」

殿下がそう仰せになると、カイトは呼吸をするのと息を飲むのとを一度にやろうとしたようだった。そのために、まるでお決まりの喜劇のように言葉につまったのに顔を赤くしながら、ようやくしどろもどろに自分の名前を名乗った。

殿下はそれを嘲笑うでもなく頷いた。

「カイトか……、まあ何にせよ、ゴーシュが失礼をしたね。こいつは困った悪戯者でね、ときどき考えも及ばないような悪さをする。おまえは今夜は、たまたまそれに巻き込まれたというわけだ。恐らく彼がおまえに突撃したのはわざとだろう。だからおまえに落ち度はない。粗相を許してやってくれ。代わりにおまえにはこれをやろう。たぶん、売るといい金になるはずだ」

そして殿下は胸につけていたブローチをはずすと、カイトに手渡した。

それは一見するだけでも細工の見事な黄金のブローチだった。カイトはそれを取り落とさないために両手を捧げて恭しく受けとめると、即座に普段の彼からは考えられないほど慎重な感謝の意を口にした。家宝にするとか何とか、そういうことを言っているようだったが、

緊張が酷すぎて無惨な発声になってしまっていた。

「いや、構わないよ。遠慮なく売っていい」

しかしフレデリック様は気分を害するでもなく涼しい顔でそう仰せになり、それからほとんどついでのように僕にも目を向けられた。

「立ち位置からして、おまえはカイトの主人らしいな。さて、ここはおまえにも一応名前を聞いておくか」

「は、はっ、アレックスと申します、アレックス・アムブローズ・パリス・アディンセル」

「ほう、あのアディンセル家か。アディンセル家は私もよく知っているよ。そのアムブローズ、と言うことはあのでしゃばり伯爵の弟か。それではオーウェルと顔見知りのわけだな」

殿下はそう言って、ちらりとオーウェル公子を振り返った。それで公子は憮然として顔をふいと横に背けた。

王子は肩を聳やかし、再び僕に視線を落とした。

「まあ……、このようにおまえの兄は、オーウェル公子に大変に慕われているというわけだ。私としても、悔しいがあの伯爵はいい男だと思うよ。幼少のみぎりには、純粋に彼のような色男になりたいと願っていた。

もっとも最近は妬ましさが先に立つ。私は見ての通りあまり体格に恵まれているとは言えないからな、ないものねだりというやつだ。いつかも、でしゃばりすぎだからそろそろ身を固めておとなしくしろと言ってやったのだが、恐ろしい愛想のよさでかわされた。食えない奴だよ。いや誤解するな、私はあいつを評価しているよ。父上も、その点は同じお考えのようだ――」

ふと、フレデリック王子はそれまでの何処か翳りのあった表情をいきなり笑顔に戻した。

「いずれにせよアディンセル家の人間となると、おまえとは今後様々の機会に接することもあるだろう。そのときはまた、ゆっくり話をしたいものだな」

それからフレデリック王子は、律儀なことにカイトにも同じことを言おうとなさったのかもしれない、再び彼のほうを向いたのだが、そこで何やら動きが止まってしまった。殿下が瞬きをされているので、何だと思って見てみると、カイトは殿下から品物を頂戴するという栄誉に余程感激をしたのか、そのまま感極まって泣き出してしまっていたのだ。

それを見た僕は驚き、これをどう言い繕おうかとそれこそ焦りに焦ったが、王子は更に唖然として、それからどう反応を取るべきか少々迷われた後、恐れ多いことに御自身も床に手をついてしゃがみ込むと、カイトの顔を下から覗き込んだ。

「何だおまえ、こんなことで泣く奴があるか。本当に泣いているのか……、これは驚いた。

まるで王族を見ただけで泣く旧時代の人間みたいだな。それともどうした、何かつらいことでも抱えているのか？

そうなら遠慮せず、私に何でも言ってみろ。私は私の目の前で涙に暮れる者を決して見過ごしはしない。私がおまえを助けてやるぞ」

「い、いえっ、ただ、あまりに有難く……、夢のようで……」

「夢？　夢とはこれはまた……、ははは、大袈裟な奴だな。こんなことは、泣くようなことじゃないだろう？」

そして王子は泣きながら傅くカイトの頭を、揉みくちゃに撫でて笑ったのだった。

殿下のこうした親身で好意的な態度が、カイトが後から主人である僕に叱責されないための配慮だろうということが、僕には何となく伝わってきていて、僕はとてもたまらない気持ちになった。

国家君主となる者は、その時代のすべての国民にとって父なる存在となる。その訓練が既になされていることを証明するように、彼は若いのに、まるで周囲の誰よりも年長であるような振る舞いを崩さなかったのだ。

それは子供の時分から伯爵なんて重荷を背負わされていた兄さんにも通じるものがあって、僕はこの若い王子が当然ながら無理をしていることには気づいていた。だけどその心の持ち方や包容力こそが、女性を、マリーシアを惹きつけるのかと、これまでの人生をずっと、兄さんの庇護を頼りに生きてきた僕は敗北感にも似た思いを抱きながら、やっぱり最後までマリーシアから気持ちを離すことができなかった。

僕が長い間心の中に想い続けていた夢の女性は、僕よりも若いが僕よりも優れた男のものであることを、思い知らされて茫然としていた。

僕は彼女のことを何も知らず、これから先も尊い方の傍にいる彼女とひとこと言葉を交わすことさえ許されないだろう。

それなのにマリーシア、美しいマリーシア、僕は美しい貴方が現実に存在していたこの素晴らしい奇跡を、きっと生涯忘れることはないことを、今宵貴方の存在に、真実の貴方の存在に、誓うことができるのだ――。

第75話　恋とマリーシア

それから数日間に及ぶ王都での年末の日程のすべてを、僕はパーティー会場ごとにマリーシアを探すということだけに費やしていた。甘い囁き声のような話し方と、あの夢のような気配を頼りに、僕は賑やかな夜毎マリーシアのことだけを求めてさ迷い歩いていたのだ。きっと一晩眠れば忘れてしまうだろうと思っていたあの夜の憧憬が、思っていたよりもずっと僕の心に侵食し、浸透し、あっという間に僕のすべてを支配してしまったことを、自覚したときにはもう遅かった。

恋がこんなにも狂おしいものだったことを、僕は知らなかった。僕は立ち竦み、泣き喚き、胸を掻き毟って夜空を見上げ、彼女のことをただ想った。眠れない夜、僕は鳥になって、夜風になってマリーシアのもとへ駆けつけたい衝動に駆られてはそれが叶わぬことであることを知り、幾度も窓辺に朽ち果てた。僕はまるで病気のようになってしまったが、それでも構わなかった。彼女という光がこの世界に存在していることを、知らなかった暗闇に戻るよりは。

今では何をしていても、何も手がつかないほどにあの夢の少女のことばかりが僕の心を満たして、僕のそれ以外の人生のすべてを空虚で無意味なものにした。彼女の存在しないこの退廃的なまでに刺激のない人生のことを。

僕はあの女性に出会った瞬間に、真実の恋と、そして世界を知ったのに、彼女が僕のものじゃないなんて、そしてこれからもきっと僕のものになりはしないなんて、まるで悪夢の中に生きているようだった。

何故なら、彼女は紛れもなく僕のシェアだったのだ。

シェアという女性は、確かに兄さんのものだった。彼女は僕より年上で、そして美しい人だった。だけど、僕が彼女に出会ったその瞬間から心の中で作り上げてきたシェアという女性は、兄さんが抱き

寄せていたあの女性とは異なる、誰よりも兄さんを愛し慕っていたあのシェアとは別人の、僕だけの女性だったのだ。
そして僕の心の中にだけ生きていたシェアは、本当は、実際にはマリーシアという名前だった！
今は王子の傍にいるとしても、彼女は本来なら僕の傍にいるべき女性なのだ。
ひと目見た瞬間にそれが分かったのに、僕は彼女に会うことも、この気持ちを伝える手立てさえも持たないことが悲しくてならなかった。一瞬で誰かを強烈に愛してしまうなんて感覚を、僕は生まれて初めて体験していて、マリーシアを想うだけで身体の奥が真実の愛情と興奮で震えるようだった。
一方で、マリーシアと出会って以降僕の日常は目に見えて色褪せていき、退屈と惨めさ、そして酷い後悔が延々と僕を苛んでいた。兄さんが以前言っていた言葉が、ようやく僕にその事実を教えるべく再三に渡って脳裏を駆け巡っていた。他でもないこの僕もまた、愛情と性欲を履き違えたのだ。
勿論タティのことは今でも大切だと思うし、一緒に育ってきたという意味での情もある。彼女は僕にとってかけがえのない家族には違いないが、マリーシアを想うときのような充実感や輝きはなく、正直に言えば近頃の僕はタティと顔をあわせることさえ少しつらかった。
タティのことは愛している。
でも、マリーシアのことはもっと、もっと愛している……。
そのことを、タティの顔を見るたびに、泣きたくなるほど思い知らされて苦しかった。ここにマリーシアがいないことを、そして無邪気に僕を慕ってくれるタティが、マリーシアではないことを……。
僕が罪深い人間だということは分かっていた。

新年には大雪が降り、それからひと月以上の日々が瞬く間に過ぎていた。

ローブフレッドではごく当たり前の、冬の有り触れた雪景色さえも、マリーシアの清楚で頼りない風情を思い出させて僕の胸を締めつけた。

僕はこの心にマリーシアだけを抱き、タティにそれを悟られないために愛想笑いで応対をして何とか日々を平穏にやり過ごしていた。タティと結婚をするために男子をなさなければならないことも、少し前まではあれほどの情熱をもって臨んでいたことだったのに、今となってはもうあまり意味を持たない事柄になってしまっていた。気持ちの変化を知られるまいとして、身体の関係を持つことはしていたが、もう心はともなわなかった。そして僕は自分自身とタティを裏切り続けるこんな人生に少し疲れ始めていた。

僕はただ、マリーシアに触れたかったのだ。あの清らかな手に。愛らしい唇に。彼女が今頃王子に抱かれているのかと思うだけで、僕は気持ちが荒れてどうにもならなかった。あのあどけなく細い身体を、金色の長い髪を、王子にどれだけ好きなようにされているのかを思うと、叫び声をあげてしまいたいほどだった。

これはまさに身を切られるような気持ちだった。王子は未来の国王で、あれだけの美しい容姿をしているのだから、それこそ自由になる女など星の数なのだろう。好きなだけ女性を選べることにかけて、兄さんでさえ比でないに違いない。

そして愛する人が、そんな男の一時の快楽のためにいいようにされていることを思うとき、それなのに僕にはどうすることもできないことを思い知るとき、人生においてこんな酷い気分もそうないものだろうとつくづく思う。

そんな酷い日には、タティが話しかけているのに聞こえないふりをして、僕は本のページをめくっていた。視線は文字を意味もなく辿

るが、内容は頭に入らない。心はここにはなく、僕はただ耐えていたのだ。この苦しみに。現実に。恋の狂おしさに。マリーシアへの耐え難い愛慕を抑えるのに、ただ必死になっていた。

「アレックス様、あのね、ランチを作ったんです。一緒にお庭の雪を見ながら食べようと思って……」

そう言って親しげに微笑みかけてくれるタティの存在を、煩わしく感じているなんて酷い現実から、僕はもうそろそろ目をそらし続けることができないほどに心の中がマリーシアのことで占められていた。

ああ、こんなにも残酷な自分が存在していたことを、僕は信じられるだろうか？

僕はもう、タティが邪魔だったのだ――。

「ああ……、ごめんタティ。聞いていなかったよ。これからちょっと、やることがあるんだ。だから悪いけど、ランチは今度にしてくれるかい」

「……」

もう少しで、以前みたいに冷たい態度を取ってしまいそうになるところを、堪えているなんて言い方はおかしいのかもしれないが、僕はタティといることが、もう絶望的に退屈でならなかった。

「ほら、カイトが来ている。そう、彼と約束しているんだ。遠乗り、そう遠乗りの」

僕はリビングの開かれた扉の向こうに、たまたまカイトがいるのを目敏く見つけると、彼と約束なんかしていたわけでもないのにさっそくそのことを利用した。

「はい、分かりました……」

タティはしゅんとして頷き、そして気持ちよく僕を送り出してくれた。

「どうぞお気をつけて。昨日の夜も随分雪が降って……、お外は何処も雪が積もっておりますから、お足もとに注意されてくださいね」

「ありがとう」

第76話　不協和音

いそいそと部屋を出た僕に対し、カイトは暇だからご機嫌伺いに来たと言った。けれどもタティを振り払うようにして部屋を出てきた僕のことを、カイトはとても冷ややかな目で見ていた。

「よそよそしいな」

廊下に出ると、さっそく不満たらしくカイトは言った。

「な、何が」

「タティにですよ。貴方、最近はまったく彼女の目を見て話してないですね」

「随分、変なところを見ているんだね。僕に気があるの？」

僕は微笑し、上手い冗談を言ったつもりだったが、カイトには受けなかった。

「彼女、気づいていると思いますよ」

「気づいている？　いったい何のことだよ」

「貴方の最近の明確な心変わり。何せ、貴方は分かりやすいほど顔に出ますからね。

タティは貴方ほどには態度に出しませんが、ありゃあ見ていて不憫に思えるくらいだ……。

ねえアレックス様、まったく何だって、そういうことになっているんです？」

「だから何が言いたいんだ」

痛いところを突かれたことを誤魔化すために、僕はわざと怒った声

を出したが、カイトはそれに動じることなくこう言った。

「マリーシア」

さり気なく言われた言葉だったが、その意味は当然分かっていた。
さすがに逃れようがなく僕はうつむいて黙り込んだ。

「あのお嬢さんのことが、頭から離れないんでしょ。俺が思うに、あれはアレックス様の好みにがっちりストライクだった」

「……」

「まあねえ。確かにあの娘は可愛らしかったですよ。何せ、あのフレデリック王子のお側に置いて貰えるような娘ですからね、並みの姫君なんかよりよっぽど美人で気立てだっていいんでしょうが……、でも貴方はタティがお好きだったんじゃなかったんですか？
まあ俺としても、アレックス様っていうのはどうも、閣下に似て女好きの素養はあるかなとは思っていました。どうも惚れっぽいと言うか、何と言うかね。しかし基本的には一途なもんだとばっかり……、ところが思いの外、気が多くていらっしゃる」

カイトが皮肉を言っているのが分かったので、僕はにわかに腹を立てた。

「そんなことは、おまえに言われる筋合いの話じゃない。部下なら黙っていろ。
僕が少しばかり他の女性に見惚れていたからって、それが何だって言うんだ。不倫したわけでもない、話をしたことだってない相手のことを、ただときどき思い出すっていうことのいったい何が問題なんだ。
確かにマリーシアは可愛いかったさ、でも手が届かない相手だってちゃんと弁えている。彼女は誰がどう見たって王子の物だったから

ね。王子の女性さ。我が国の輝ける薔薇君の。
だから彼女のことは、そのうち忘れてしまうだろう。でも今はまだ印象が強すぎるんだ。どうしても気持ちを消化しきれないんだよ」
「まま、そうむきにならず。俺は何も貴方を責めているんじゃないんです。アレックス様がおっしゃることは、俺にだってよく分かりますとも。まるで自分のことのようにね。
ただですね、それでもやっぱりタティに対する態度は、上辺だけでも改めてやらないと。
ほら、結婚するにあたって、今のところ彼女には貴方しか味方がいないような状況なんですから、そこで貴方が邪険にされていると、周りが」
「僕が何をしたって言うんだよっ」
「明らかに邪魔者扱いしてるじゃないですか」
「そんなことはないよ。僕は極めて冷静だし、ちゃんとタティに優しくしてる」
僕が言うと、カイトはそれまでの冗談めかして困惑した顔を少し真面目にした。
「いや、最近のアレックス様は、やっぱり少しおかしいですよ。昨年末、夜会に行くまではあんなにタティに張りついていたじゃないですか。執務室を抜け出すのに口実が見つからなくなって、しまいにゃ編み物をしなきゃいけないとか、暖炉の様子を見ないといけないとか、訳の分からない言い訳してらしたのに。
でも今は、思いっきり邪魔にしてます。彼女が側に寄ると、貴方さっそく逃げていますしね。部外者の俺が思わずタティに同情しちまうくらい」
「何だよそれ、酷い言いがかりだ。君は女のことなんか何も知らないくせに煩いんだよ」
「そりゃ……、確かにおっしゃる通り。俺はもてませんけど。でも

人間を洞察する目はあると思っています。
ほとんど通りがかった程度の相手のことを、そんなふうにいつまでも憶えているっていうのはね、それは一目惚れって言うんですよ。人生にそうそう起こることじゃない。ましてや、周りが見えなくなるほどのそんな出会いは天文学的な確率かもしれない。
貴方、あのとき王子が連れていた他の人間のことを誰か思い出せますか？」

僕は鳥の巣頭の画家と、オーウェル公子のことを辛うじて思い出すことができたが、それ以外には誰が何人いたのかすら分からなかった。

「だ…、だったら、思い出せなかったらどうだって言うんだ、確かにこれは自分でもおかしいと思うよ。ひと目見ただけの女のことが頭から離れないなんて、でも仕方ないだろう、だって、だって、ものすごく好みだったんだから！
まるでシェアが……、僕の理想が服を着て歩いているみたいだったんだ、僕はずっと、生まれてこのかたずっとずっと、マリーシアを探していたという気さえしているのに、これを忘れられるわけがないよ……、忘れられるわけが……」
「もしかして、あのお嬢さんがエステル嬢に似ているから？　貴方、本当はエステル嬢のことが切れていない？」

思い出したくもない名前を言われて、僕はさすがに気分を害した。

「エステル？　ああ、彼女のことは別に何とも思ってないよ。おまえが名前を出さなければ、あんな女のことはすっかり忘れていた」
「……、情を交わしておきながらその言い草もないでしょうに。アレックス様らしくもない」
「何だよ。僕らしくないって何だ。おまえにはまだ分からないんだ

ろうが、あんなことは別に大したことじゃないのさ。男なら、性行為なんてごく自然なことだ。女は愛でるべき存在かもしれないが、でもしがみつくようなことじゃない。もっとも、童貞の君には分かるべくもないだろうが。もしかしたら一生分からないかもね」

そして僕が腹立ち紛れにカイトをせせら笑うと、彼としては珍しくかっとなったのが分かった。

カイトは僕の胸倉を掴み、それは物凄い力で僕は驚いてもがいたが、やがて急激に腕から力を抜いて頭を振った。

「……すみません、ご無礼を。俺としたことが、少々冷静さを欠きました。

俺は少し席をはずしますよ。貴方はちゃんと話し合ったほうがいい」

それでカイトは僕の後ろのほうに顎をしゃくった。手下に胸倉を掴まれた腹立たしさを隠しきれずに服を大袈裟に調えながら振り返ると、そこにはタティがいて、彼女はバスケットを持って震えていた。

「ごっ、ごめんなさい、立ち聞きするつもりはなくて……。

あ、あの……、遠乗りをされるって、だから、ランチを……」

タティは例のごとく涙をこぼしていた。

「ごめんなさい……、許してくださいアレックス様……」

第77話　独善と純情

僕は再び僕の部屋のリビングのソファで、頬杖をついていた。
話し合いと言っても、どうすることができるだろうか。
タティは意図せず僕とエステルが身体の関係を持っていたことを知っても、怒り出すでもなければ僕の不貞を非難するわけでもなく、それどころがまるで自分に落ち度があったかのように涙を流す始末だ。
もっとも、それが消極的な攻撃であることは分かっていた。面と向かって激しく罵られたほうがまだましである、あの、目前で被害者顔をされる嫌な責め方を、タティはずっと僕に対して向けているのだ。
口喧嘩すら行われていないので、僕には彼女を責めることさえも許されない。そして僕は、僕がこの場における圧倒的な悪者であることを、暗に責め立てられ続けているのだ。
しかし、それは確かに事実ではあったが、僕がこんな状態にいつまでも我慢できるようなお人好しでないことを、タティは知るべきだった。誰が人生の主導権を握り、主人であるかを彼女は知るべきなのだ。

「そんなに僕のことが嫌だって言うなら、僕は別に、君と結婚しなくたっていいんだよ」

長らくの沈黙を打ち破り、僕が言うと、タティは泣きながら無言でかぶりを振った。

「結婚したいって言うなら、もっと機嫌よく過ごしてたら？　エステルとはもう二度とない。それで話は終わってるだろう。
タティ、君の悪いところはさ、そうやってその……とにかくそんな

に陰気な顔を見せられるんじゃ、僕もたまらないんだよね。おとなしいのはいいんだけど、すぐ悲劇のヒロインになるのはどうなのかな」

「悲劇のヒロインにもなるでしょうよ」

何も言えずにうつむくタティに代わって、カイトが口を挿んだ。彼はさっき席をはずすと言っていたが、僕がそれを認めなかった。タティと二人だけになってしまったら、きっと喧嘩になってどうにもならないだろうと思ったから、仲介役が必要だと思って引き止めたのだ。

タティがいつまでも僕に歯向かって来ないのが、もしかしたら別の異性であるカイトがいるせいなのかと疑わしく思う気持ちが僕の中に燻っていた。この期に及んでタティが他の男に気を向けることに激しく嫉妬してしまう自分自身が、僕はもう分からなかった。

この酷い混乱状態を絶対に目下の人間であるタティやカイトに知られるべきではないと思ったので、僕はまるで兄さんみたいに足を組んで、横柄な態度で、それぞれがソファに座っているカイトやタティの間に視線を巡らせた。

「他の女と浮気はするわ、別の女に関心が向くわじゃ」

カイトはそんな僕を見て、面倒そうにため息をついた。彼は男でありながら、どうも僕ではなくタティの側に立って意見を言っているようだった。

「待て、それは全然違うだろう。僕がエステルと寝たのは、確かに非は認めるけどタティにプロポーズするよりも前のことだから、浮気にはならない。だいたいエステルとのことは、おまえだって幇助したじゃないか。責任の一端がないとは言わせないぞ。ベッドを提供したのは誰なんだよ。

それにだいたい、美人に見惚れて何が悪いんだ。綺麗な女がいたら、誰でも目がいくだろう。

カイト、おまえなんかその際たる存在じゃないか。おまえはルイーズから召使い女に至るまで、見境なしに目がいってるんだからな。僕に言わせればそれこそ、不誠実にもほどがある」

「論旨をずらそうったってそうはいきませんよ」

カイトは澄まし込んで言った。

「とにかく、貴方こそがタティに対する態度を改めるべきです。その、閣下の真似事みたいな態度をね。貴方はそんなのが似あう柄じゃないし、だいたい貴方、そんな横暴な振る舞いの責任を取れやしないでしょう。俺が言いたかったのはそれだけですよ」

「なんで僕が責められるんだ……」

僕はうんざりして言った。カイトの言い分がまったく分からなかった。

「マリーシアと寝たわけでもない、ただ見惚れただけのことを何でそんなに責めるんだ？　僕はタティをご主人様とでも思わなくちゃならないって言うのか？　婚約したら最後、男は他の女を見ることさえ許されないのか？」

「アレックス様、閣下でも言わないような屁理屈でしょう、そりゃ」

カイトは言った。彼が、僕の部下の癖に何だってタティ側についているのかということも、そもそも僕は気に入らなかった。

それに先刻彼が身分を弁えもせずに僕の胸倉を掴んだことにも、ものすごく腹が立っていたので、僕は顔を歪めてカイトに言った。

「カイトおまえさ、前言ってた好きな女って、もしかしてやっぱり

タティなんじゃないのか？　だからそうやってタティを庇っているんだろう。
だとしても、僕は別に構わないけどね……」
「違いますよ」
「じゃあおまえが僕を責めていることがどういうわけなのか、そうやってタティの味方をしている理由についても、僕に分かるように説明してくれよ」
「それをここで、タティの前で言わせるんですか？」
「そうだ」
「彼女に席をはずして貰ったら？」
「いいよ。それともタティがいると何か都合でも悪いのか」
僕が睨むと、カイトは諦めたように息を吐いた。
「……分かりました。そいじゃ、はっきり要点を言いますとね。俺が問題だと言っているのは貴方がエステルと寝たことでもなければ、他の女に見惚れることがあることでもない。
貴方が、あのマリーシアっていうお嬢さんにあまりにも本気であることが問題なんですよ。貴方が、あのマリーシアって娘が運命の相手だってもう完全に信じていることが問題なんです。
あまつさえタティとの婚約を、間違えたと思ってしまっていることが顔や態度に出ていることが問題なんです。
貴方があんまりあからさまなのでこっちは見ていられないんですよ。だから俺はせめて態度には出すなと申し上げているわけです。浮気をするにしても最低限の分別をつけろと。タティが好きだからじゃありません、はっきり言って哀れだからです。
俺はアレックス様だけでなく、タティのことも昔から知っていますからね。子供の頃から知っている人間がおざなりにされるのを黙って見ていられない。悪いことにタティはよく躾が行き届いていて、貴方に何をされたって不平ひとつ言わないし、言える性格でもない

でしょうからね。
これが俺が言いたいことのすべてですよ、お分かりですか？」
「そんなことを言って、タティが好きだから同情しているんだろう！」
「そんな分からないことをまだおっしゃいますか！？」

僕が怒鳴り声を出したのに、カイトが更に強い口調で負けずに僕を怒鳴ったので、僕はこの無礼が信じられずに顔を背けた。カイトがどちらかと言えば積極的な性格で、しかも図々しいということを差し引いても、主人である僕を怒鳴るなんて、いったい何様なのか腹立たしくてならなかった。

「ウェブスター男爵のご令嬢が可哀想だな。ヴァレリア。彼女が可哀想だ、こんな無礼な男と結婚させられるんじゃ」

僕は肘をついたまま、カイトを非難するべく大袈裟に呆れてみせた。

「彼女は由緒ある家に生まれながら、落ちぶれた下級貴族の、生意気で、無教養で、物事の順列を弁えず、しかも自分にはまったく気持ちがない男と無理やりに娶わせられるわけだ。可哀想な話だよ」
「アレックス様……、俺のことをそんなふうに考えていらしたんですか」
「事実だろう。僕が言ったことに、何か間違いでもあるって言うなら反論は聞くよ」
「いえ、おっしゃることは間違っていませんよ。俺は落ちぶれていて、生意気で、無教養。しかも貴族の血は恐らく八分の一。しかもこの年でまだ女を知らないし、だから情けないことに俺はこの問題に関して反論することさえできない、しかもそのことで年下の貴方に笑い者にされていていまや立つ瀬もないこれは確かです」
「……、おまえはタティが好きなんだろう、だからそうやって……」

「悪いですが、お話になりませんね。貴方ははっきり言って滅茶苦茶だ。少し冷静におなりなさい」

カイトはそう言うと、前髪を気障ったらしく撫でつけながら席を立った。

「待て、カイト。おまえこそ冷静になれよ、逃げるのか！」

僕がそう言うと、カイトは僕には目もくれずにタティを振り返ってこう言った。

「タティ、お気の毒ですが、貴方も今のうちに身の振り方を考えておいたほうがいいかもしれませんよ。
残酷なようですがこういった場合、アレックス様は閣下とは違い真面目なだけに、恐らく複数の女性にいい顔をしない。本気か関心がないかの二択です」

「だからそうやって僕を定義づけるな。おまえなんかに僕の何が分かるんだ。たった二つ年が上だってだけのことで、兄貴風を吹かせるなよ！　それに、頭のよさなら僕が上だっ！」

「でもわたしはアレックス様を愛していますっ」

弾かれたようにタティは答えた。

「だから……、喧嘩なんてなさらないでください。どうか、問題を大きくしないで……。
わたしが好きならいいんですっ……。
何があっても、わたしはアレックス様を責めるつもりなんてないんです。だって、いつかこういうことになるって、頭の何処かでは、最初からちゃんと分かっていたんですもの。
アレックス様は身分がおありだし、それにとても素敵だから……、

だからきっと誘惑だって多いって。
それにわたしなんかが本気で好きになって貰えるはずなんてないもの。
でもわたしはアレックス様のお傍にいられるだけでいいんです、結婚なんてして貰えなくたっていい、お傍にいられるだけで、それだけで……、だから……」

タティの様子は健気で、卑屈ですらあり、カイトは非常に切なげな顔で彼女を見下ろしていたが、僕の胸だって罪悪感に痛んでいないわけじゃなかった。
僕は何もタティのことが嫌いなわけじゃない。少し邪魔臭いと思いはしても、嫌いになったわけじゃないことは確かだった。
だからそれは違う、僕は君が好きだと言おうと思ったが、結局は言い出すことができずにうつむいた。嘘なんて言えない。
僕はマリーシアのことが、好きになってしまったみたいだから……。

第７８話　恋多き人生

兄さんにつき随って王宮を歩けば、そこでは僕が知らなかった素晴らしい人生が毎回のように展開された。通りすがる女という女が、兄さんの容姿の美しさに目を奪われて、うっとりしているのが分かるのだ。

さも気のないように振る舞う女だっていないわけではなかったし、実際彼女たちは兄さんのような遊び人を嫌う堅実な女性だったりするのだろう。それでも、誰もが目を向けるのだ。兄さんが歩くと、女という女が振り返る。まるで引き寄せられるように、恋しているみたいに、あまりにもあっけなく色めき立つ。

長い生涯のうち、せめて誰か一人の女性くらいには愛されたいと願い、必死になっている世間の男たちがこの馬鹿馬鹿しいほどの現実を体験したとしたら、どんな気分がするものだろう。僕は兄さんの横を歩いているとき、こうした気分を何度も味わった。僕が自殺したくなるほどには悲しくならなかったことだって、僕は兄さんの血縁だから、彼を基本的には愛していたし、兄さんが持っている女性に愛される要素のうちの、幾つかを持っているはずだという慰めがあるからだった。

でも実際には、僕はいつでも兄さんのおまけだった。アディンセル伯爵の弟と知ると、いつもの通り余計に大切に扱って貰えたが、女性たちの意図は見えていたので僕は気落ちした。僕が一人で歩いていたら、まず相手になんかされないであろう気取りきった上等の女たちが、絡みつくように兄さんに媚を売っているのはもはや痛快だった。

用事を済ませた夕刻の帰り際でさえ、廊下を歩く兄さんをみつけたルイーズクラスの美女たちが、花のような微笑みで兄さんの関心を引こうと次から次へと寄って来た。世の中にほんの一握りであろう、女性の気を惹く努力をまったく必要としない人種が、こんなに身近

に存在していることというのは、ある意味ではとても切ない。

「ああ、さっきの綺麗な人たちは公女様たちだったんですか、お茶会があったんですか」

浮ついた、歯の浮くような甘い社交辞令で女性たちを撒いた後、兄さんは彼女たちの正体を僕に教えた。

「何故結婚しないんです？　出会う女性は誰もがみんな兄さんが好きみたいだったのに」

すると兄さんは困惑した顔で僕を見た。

「アレックス。おまえは幾つだったか」

「二十歳ですよ」

兄さんは頷いた。

「そうか。では寝言は寝て言え」

それからしばらく黙って廊下を歩いた。僕らから少し離れたところを、ルイーズがまるで他人の振りをして歩いていた。ルイーズが兄さんから距離を置いて歩いているのは、王宮で出くわす女性たちの妬みを買わないようにするためだった。兄さんはそうした気苦労などものともせずに、女性に愛嬌を振り撒くのをやめなかったが、それをやめたとしてもたぶん嫉妬を買う意味では同じなのだろう。

僕が後ろを振り返ってルイーズを見ると、ルイーズは笑顔になってひらひらと手を振ってくれた。今日はジェシカはいなかったが、彼女たちはこの意味で日頃からなかなか苦労をしているようだった。

「それにしてもアレックス。これはどういう風の吹きまわしなんだね」

兄さんは通路をすれ違う召使い女の声援にさえきっちり視線で応えつつ、僕に言った。

「何がですか？」

「どうしてまた急に私の出仕について来た。それも一人で」

「別に……兄さんについて、勉強したくて。伯爵見習いですよ……」

僕は適当なことを答えた。

兄さんは苦笑した。

「滅多に領地の外どころか、城の外にさえ出かけないおまえが、どうしてまたそんなことを思いついたんだか。それに勉強をしたいなら、カイトも連れて来いと言ったはずだぞ」

「カイトなんて要りませんよ。あんな奴」

即座に僕は答えた。

「そうか？　あいつはおまえの仲よしグループだろう？」

「全然違いますよ。僕にそんなのいないんだ」

「ああ、そうなのか？　でも彼は何かと必要だろう」

「必要ないですよ。煩いし、年上ぶるし」

「年上ぶるか。ふっ、なるほどな。しかし実際彼はおまえより年上ではなかったかね」

「でも大した違いなんてないですよ。十歳違うと言うなら配慮をしてやってもいいけど、一つ二つなんて誤差の範囲だ。

それどころか、あいつはガキみたいに煩いんだ。生意気だし、何にも分かっていない癖に訳知り顔で、鬱陶しいったらない。兄さんは

僕よりカイトがお好きなんですか？」

すると兄さんは一瞬微笑し、それから僕を見た。

「アレックス、アレックス。おまえのほうが好きに決まっているだろう。まったく何という幼稚な応答だね。二十歳が聞いて呆れるな、うん？」

それから兄さんはこうつけたした。

「だが幾ら年上ぶって口数が多いとは言っても、カイトはおまえより如才ないからな。公務を学ぶのにくだらん私情を挿んで貰っては困る。今度は連れて来なさい」

それからしばらく靴音の響く大理石の廊下を歩き、もう少しで薔薇の王宮を出るというところまで来たとき、何処からか只ならないざわめきが伝わってきて、僕はにわかに緊張をした。

実は僕が兄さんについて王宮に出入りしようなんて思い立ったことには、マリーシアにひと目会いたいという、不純な動機があってこそのことだったからだ。

僕はおいそれと陛下に謁見の叶う身ではなかったので、同様にフレデリック王子とお会いする機会もなかった。しかしマリーシアはたぶんフレデリック王子の魔術師だと思われる以上、僕はどうにかして殿下にお会いする必要があり、思いついたのがこういう場所をうろついていれば、もしかしたら王子殿下がお出ましになることもあるかもしれないということだった。その機会はなかなか訪れなかったのだが、今日は三度目の訪問だった。

冬の夕刻は既に窓外を暗くしていたが、建物の中は何処も赤みのかかった柔らかい光に満ちていた。見ると、廊下を行く召使いや衛兵は勿論のこと、高官連中までが足下に平服を始めていた。僕が兄さ

んの顔を窺うと、兄さんは僕の予想が的中したことを僕に知らせた。
僕も兄さんに倣って、やはり廊下に跪いた。
そして間もなく殿下は御登場されたのだ。僕らの目の前の廊下のすぐ先、通路が交差しているところから彼は現れた。でもそのときお目にかかった殿下は、どうしたことか年末の夜会にて拝見したときとはまったく雰囲気が異なっていた。華麗な容貌は相変わらずだったし、殿下の横顔はため息の漏れる美しさだったが、その顔色は青白く、表情は疲弊していて、まったく揚々としたところがなかった。
先日お会いしたときには、名うての貴公子のごとくあまりにも颯爽としていらしたのに、今日は御体調が優れないのかその華奢な御身体さえ引きずるようにして歩いていた。そのとき彼は二名の従者を連れていたが、そのどちらもマリーシアではなかった。
そしてフレデリック様はそのまま廊下を通り過ぎてしまわれただけだった。
フレデリック殿下御一行が行ってしまわれてから、僕は殿下の御様子がどうにもおかしかったことを兄さんに話した。
すると兄さんも頷き、さすがに思わしくない表情をした。

「おいたわしいことだが、先祖の罪業を背負っていらっしゃるのだろう」
「先祖の罪業？　近親相姦のことですか？」
「それもあるだろうが――」

第７９話　禁止令

冬の庭園は雪に埋もれて、夢の面影を消失させてしまうのだ。
それでも雪の中に踏み入ってしばし庭を引っ掻きまわす。花壇に積もった雪を押し退け、しかし現れるのは、枯死した植物の残骸と凍りついた土ばかり。
シェアとの時間は終わったのだと、もう何度思い知らされたことだろう。彼女は兄さんの玩具にされた揚句、伯爵の愛情を真実と信じて金を受け取らなかったばかりに、消されてしまった愚かな女たちのうちの一人に過ぎない、そのことを、簡単にタティを邪魔だと思ってしまえる今の僕にならば、理解できないことではなかったのに――。
分厚い冬の雲間からしばし差し込む陽を見上げる。雪にまみれた手はかじかんで、息を吹きかけてもそう易々と感覚は元に戻らない。
タティをぞんざいに扱って、せいせいしたのはその瞬間のことだけで、すぐに酷い後悔が僕を苛むようになった。僕の心とは意外にも欲張りなもので、僕はまるで兄さんが複数の女にちょっかいをかけるごとく、タティにもいい顔をしていたかったのだと知った。
僕とはもっとずるくて、不誠実な男だったのだ。兄さんのように悪びれもせずに楽しくそれを実行できているわけではない分、僕の人間性はまだましであると思いたかったが、マリーシアを好きになりながら内心ではタティへの愛着を切り捨てられない自覚のある以上、たぶん大差はないだろう。
でもタティの態度はあれからさすがにぎこちなくなってしまい、僕はあまり彼女に声をかけることができなくなってしまった。
そして僕の恋に舞い上がっていた狂おしい気持ちは何日かの無気力な沈静を経ていつしか深淵の孤独に取って代わってしまっていた。
こんな混乱を巻き起こしてでも恋したマリーシア、彼女に会いたい一心で王宮に出向くという作戦が、遂に功を奏することはなかった。

それでも、僕はどうしても、あの夜以降一度だって会うこともできないマリーシアへの恋しさに、耐えるということができなかったのだ。

暇さえあればフレデリック王子が彼女を独り占めするために隠しているのではないかと妄想し、この数週間を、僕は自分の気持ちを絶え間なく傷つけ続けてもいた。恋とはときに人間から愛や幸福感を奪い、判断力さえ狂わせる恐ろしい魔物だった。そしてとうとう僕は愚かにもアディンセル伯爵である兄さんに、マリーシアについての情報収集をしに行ってしまったのだ。

今から思えばそれは禁じ手だった。色恋沙汰に慣れ親しみ、多くの女性たちと危うい駆け引きを繰り返し、ほんの少しの恋の気配だって見逃さない彼にすべてを見破られることを、そのときの僕はまったく考慮することができなかった。

僕はただ、きっとマリーシアほどの美少女ならば、将来の恋人候補として兄さんが目をつけていてもおかしくないだろうと踏んだのだ。僕の兄さんというものは、良識か、それとも単なる趣味によるものかは分からないが、未成年の少女たちを相手にしているところを見たことはなかった。それでもいずれ目の覚めるような金髪美女に成長するであろうことが確定的なマリーシアの存在に、彼が気がついていないわけがなかった。

だからマリーシアとは何処の誰で、いったい殿下とはどういう関係なのか、もう愛を誓いあってしまっている関係なのか、王宮に出入りしていて、広い交友関係を持ち、しかもいつでも金髪女を探している兄さんであれば、もう少し詳しい話を知っているだろうと思った。

恋に心を蝕まれていたそのときの僕は、藁にも縋りたい気持ちだった。特に関心もないフレデリック王子の話題にかこつけて、彼の魔術師であるマリーシアのことを何とかして探り出そうとした。

すると兄さんは、僕の予想に反してあれはフレデリック王子の魔術師ではないと言った。

「そうなのですか？　では、彼女はいったい……？」

僕がたずねると、兄さんはまずもって何故に僕がそんなことを知りたがるのかと言いたげな顔をしていたが、やがて面倒臭そうに答えた。

「あれはオーウェル公子の魔術師だ。公子の乳姉妹ではないがね。才能を見込まれて、途中から彼の側仕えになったようだよ。オーウェル公子はあの年で一端の野心家でね。彼はあの娘が王子のお気に入りであることを利用している。勿論そうさせているのはトバイア様だが、フレデリック王子は彼女に会いたいために、よくオーウェル公子ごと王宮へ招いているようだ。だから、あの娘は到底私が懸想をしていい相手ではないというわけだ。これで納得か？」

「マリーシアの身分階級は？」

「さあてね。まあ、貴族なのではないか……」

兄さんは曖昧に言って、それから僕に何とも言えないうっとりした視線を向けた。

「何です？」

「アレックス。おまえ、彼女に興味が湧いたのか？」

兄さんは、明らかに呆れた口調で言った。

「さては私についてやたらと王宮に行きたがったのも、そのためか」

真相に気づいた兄さんの表情に、微かながら失望と憤慨の色が差したことに慄き、僕は反射的にその問いかけを否定した。

「そ、そんなんじゃありません」

結婚の許可を要請しているタティというものがありながら、他の女に興味が移ってしまっているなんてことを、まさか知られるわけにはいかなかったからだ。

それに僕はタティのことを手放そうと思っているわけではなかった。僕は別に彼女に飽きているわけではないし、嫌いになったわけでもない。タティは僕の言うことをよくきく従順な可愛い女だった。それに彼女は一緒にいて神経に障る性格でもないし、僕の生活の上で必要なことを誰よりも心得ていた。

今だって、言われた通り可愛く着飾っているし、ぎこちないながらも僕の注文通り笑顔でいることも心がけているようだった。それに僕はタティに尽くされると満足できたし、だから彼女には僕に手をつけた女性の面倒を見る義務を放棄しようと思わせる点がなかったのだ。

「アレックス」

ふと兄さんは、よく通る声で僕を呼んだ。そのとき気がついたのが、彼は最初からまったく微笑んでなどいなかったことだった。

兄さんは僕の気持ちを見透かすような厳しい目で僕を見ていて、彼は確かに僕の動揺を見過ごさなかった。

しかしまるでそれに気づかなかったかのように頷いた。

「そうだな。よもやおまえに限ってそんなことはないとは思うが、臣下がフレデリック王子の物を横取りするような真似は、褒められないね。

おまえが何を考えているか私は知らない。しかしながらおまえの主君として、ここは感情に流されやすい若輩者のおまえに一応厳命を

与えておく。
アレックス、己の立場を弁えよ。我らが世継ぎの王子の御機嫌を損ねさせるような浅薄な行動は、絶対に許されんことだ。慎みなさい。おまえには残酷だが、あの娘は王子の女だ。もっと言ってやろうか。あの娘はもう身体の隅々まで王子に荒らされている。汚らわしい淫売に成り下がっているぞ」
「……」
「まあそれはさておき、あの若い王子には、いずれ遠からずして地方領主を破滅させることすら造作もない権力が与えられることになる。公爵家でさえも、彼は考えひとつで捻り潰すことができるのだ。無論、そうした専横に反感を覚えた諸侯の結託やそれによる情勢不安、反乱、それに暴君の謗りを恐れないならばだが、私の態度が気に入らないという言いがかりで――、彼はこの私を処刑することもできる。
だからもしアディンセル家を没落させたいとでもおまえが思っているのだとしたら、私は我が所領の守護者として、おまえをそれ相応に処分しなくてはならんよ」
「処分……？」
僕はまだ食い下がろうとしたが、兄さんはそれを認めなかった。心底から苛々した様子で、執務机を指先で叩き、ため息混じりに僕に言った。
「アレックス。私が言っていることが分からないか。この問題に議論の余地はないのだよ。あの娘のことは諦めなさい」
「兄さん」
「諦めなさい。アレックス、私は物分かりの悪い子供は嫌いだな」

第８０話　冬に想う（１）

別の日、僕は秋葡萄の間で一人で朝食を取った。
気まぐれに召使いと世間話をし、彼女が僕に好きな食べ物を聞いてくるのでトマトだと答えた。好きな季節、好きな本、嫌いな食べ物、でもこうした会話に何の意味があるのか分からず、結局話は長続きしなかった。
早朝からちらちらと雪が舞っている白い景色を眺め、そのままその部屋の暖炉をつついて過ごした。一人で過ごす時間はとても快適だった。誰とも無駄話をしないで済むからだ。
召使いたちが、朝食を終えた後ずっと一人で暖炉をつついている僕のことを、奇妙な顔をして眺めているのが分かっていたが、僕は気にしなかった。今が冬でなければ、こんなときは蟻でも観察しに行くのだが、今は何処も雪が降り積もってどうにもならなかった。
それからすっかり朝食の片づけられたテーブルに戻って、何社かの新聞をいつもよりもたっぷりと時間をかけて読んだ。
昨晩は兄さんが女性を泊めたらしいので、そういうとき、僕は普段なら朝食は私室で取るし、新聞もやっぱり私室か執務室で読むのだが、少なくともこの二週間の間、僕の生活スタイルはがらりと変化していた。
午前十時をまわっても、いつもよりずっと几帳面に読み終わった新聞紙を折りたたんだり、温かい飲み物をおかわりして時間を稼いでいたが、やがてロビンが僕を呼びに来たので僕はのろのろと腰を上げた。
そのまま彼女を連れて執務室に顔を出し、僕の遅い登場を待ち構えていたカイトや何人かの行政官たちと打ち合わせをし、そこで出た問題点を持ってさっそく逃げるように兄さんの執務室に向かった。
しかし兄さんの執務室に行くと、そこでも廊下には十名ほどの行列ができていた。待ちぼうけを食らわされているのは、やはりアディ

ンセル家に仕える文官たちだった。
屋内とは言え、廊下なんかに突っ立っていたのでは、じんとした冬の寒さがたちまちのうちに身体に染み込んでしまうのに、どうしたことかと僕は思った。執務室前に詰めている護衛騎士が、これらの行列を前に、何ともやり難そうな顔をしているのも見える。
ややもして、彼らの会話の内容から、これは兄さんが女を連れ込んでいて、公務に支障をきたしているのだということを悟った。どうも昨夜の女を彼は昼近くになっても帰していなかったのだ。
ここでは兄さんに意見を言える年長者はいても、実質親のように叱れる人間はいないから、生活態度にしろ所領の統治方針にしろ、兄さんはごく若い頃から自分の考えだけで物事を決められる立場にあった。
それにしてもこれは兄さんが見せる久しぶりの執着だと思い、僕は顎を掴んだ。
文官たちが僕に挨拶するその相手をしながら、ふと見ると、廊下の奥のほうには恐らく執務室から閉め出されたのであろうジェシカもいた。彼女は彼女の弟と話をしているところだった。
二人もまた僕の姿をみつけると、呼吸を合わせたように僕に対して恭しく挨拶をしたが、ジェシカの顔にはいつもの余裕がなかった。

「女性を連れ込んでいるのか」

僕は彼らに近づき、ジェシカに対する配慮の意味もあって、少し兄さんを非難してみせた。
するとジェシカは苦々しさを表情にほんのりと出しながらも微笑して、それを認めた。

「結婚するつもりもないのに手を出すなんて、どうかしているね……」
「もはやライフワークですね」

ジェシカは冗談を言う余裕はあるようだった。それとも扉の向こうで女といちゃついている兄さんの姿が目に浮かんで、やけくそなのかもしれなかったが。

「舞踏会でひっかけたそうです」

するとジェシカの弟、フィーロービッシャー家の次の当主となる予定のクライドが、場違いとも思えるような清々しい笑顔で僕に説明をした。

「ついこの間も、閣下に御用達のお店にご一緒させて頂いたとき、久々の上玉をみつけたのだとおっしゃっていましたよ。ほら陛下の夜会でダンスを踊るとき、何度か選んでいた女性がいたでしょう。長い金髪の」

僕はあまりそんなところは見ていなかったが、そう言えば金髪美人を連れていたことを思い出した。でも兄さんの相手は、いつでも大抵金髪美人なので、特に感慨はなかった。たまに気まぐれに髪の色にこだわらないこともあるようだったが、こんなことを観察している自分はいったい何なんだという気分にさせられるので、僕はもう兄さんが誰を連れていようと気にしないことにしているのだ。もし、まかり間違って妻にしたい女性がいるというお話を兄さんが持ってきたなら、そのときは僕としても彼女の名前や人となりを知ろうと思うが、大抵はそんなことをしても無意味だからだ。半年もすればほぼ確実に、彼女たちは飽きられる運命にあった。

「何でもいいけど、業務に支障をきたすのは迷惑な話だね」

僕はまた、ジェシカの心情を思ってそう言った。

それに気づいたらしいジェシカが、また苦笑いを浮かべた後、僕に小さく微笑み返した。

「伯爵様は、この時期はおつらいのですよ」
「つらい？」
「ええ」

ジェシカは頷いた。

「つらいって、冬が嫌いって意味じゃないよね、猟銃持ってはしゃいでいるんだから……」

でも僕がたずねても、彼女はそれ以上何も答えなかった。
代わりにクライドが僕に話しかけた。

「それはそうとアレックス様、あれなんですって、最近カイト殿と派手にやらかしたんですって？」
「カイトとやらかした？」

身に覚えがなかったので僕が首を傾げて言うと、クライドは頷いた。

「ええ、この城の召使いたちの間で、噂になっているのを聞いたのです。掴み合いの喧嘩をなさったってね。
貴方にもカイト殿にも、結構ファンが多いようですよ。羨ましい限りです」
「ああ、そう……」

それで僕は彼の言っていることを理解した。それはたぶん、二週間くらい前に僕がカイトに胸倉を掴まれたのを、誰かが見ていて大袈裟に流布したのだろうと思った。

「いや、やらかしたってほどじゃないよ」

僕は、特に親しくもない相手からの問いかけに対しもごもごしながら答えた。

情けないことに、一方的に僕が胸倉を掴まれただけなのが真実なのだが、それを知られるのはいかにも恥ずかしかったこともあった。

「ちょっと喧嘩になっただけさ。男同士の」

「いい傾向ではありませんか」

すると、たたみかけるようにクライドは言った。

クライドというのは、ジェシカの弟だけあってそこそこ見られる美青年なのだが、日頃から男のような服装をして、化粧以外には必要最低限のお洒落しかしない姉よりもずっと話し言葉や服装が垢抜けていて、しかも三十近い男の割には非常に人懐っこい笑い方をした。兄さんとはまた別の次元で、女を誘惑することに、まったく苦労しないだろうなという社交的な雰囲気を持っていたのだ。

だからこれは相当に女性に好かれそうな感じだと思うのだが、意外にも彼も未だに独身だという話だった。

「喧嘩もできないような関係は、本物の関係とは呼べませんからね」

クライドは微笑んだ。

「そうかな……」

「そうですよ」

第８１話　冬に想う（２）

そしてクライドは何かを言いたげにジェシカをちらりと見た。
それでジェシカは少しむっとした顔をして、彼女の弟を睨み返した。

「いいえアレックス様。私は、主に口答えをするような真似は、あまり褒められたものだとは思いませんね。ましてや掴み合いだなんて、想像を絶します。理由が何であれ、その件については私はカイトは出過ぎたと思いますよ。
アレックス様が生まれて初めて喧嘩をしたと聞いて、伯爵様が笑っていらっしゃいましたので、それ以上問題になるようなことにはなりませんでしたがね。
しかし私に言わせれば、彼は無礼にも程がある。前々から、アレックス様のお側につけるにしては少々礼儀が身についていないとは思っていたのです。
もしウェブスター家のデイビッド卿の子供が男子であったなら、そもそも彼はこのような日の目を見ることもなく打ち捨てられていた存在。それを拾って貰った大恩がありながら……、それに悪いが三代前の駆け落ちした三男の子孫という話も、何処まで信じていいのか分からない話なのです。どうあっても男子を授からなかったデイビッド卿が、苦し紛れに農民の子供を引っ張って来て、でっち上げたという疑念は拭い切れない。そもそもが、成り上がりの家系ですからね、あそこは」

ジェシカは基本的に公平な考えの持ち主だとは思うが、やはり彼女の意見は兄さんに仕える多くの人々と同じように、カイトに対して厳しかった。平民を家系に入れるということは、即ちこういうことでもあるのだと思った。父系が確かでも母親の血が劣っていると、場合によっては子供までが差別対象になりかねない。貴族と平民と

の間には大きな身分の壁があり、生理的に平民を受けつけない人々は多いのだ。

「カイト殿は貴族の血が入っていると思いますよ」

ジェシカを窘めるようにクライドが言った。

「平民にしては随分背丈があるでしょう。それに彼は器用ですよ。伯爵様が目をかけていらっしゃるのだからそう悪く言ったものでもない。出自の悪さに優る評価点が、あるということなのでしょう。何せ、てのひらに乗せて愛でているアレックス様とやりあって無事で済んでいるのですからね。この話を聞いたとき、私は今後、彼とは是非仲よくしておきたいと思いましたね。

それに姉上、もし本当に血筋に疑いがあるのなら、それこそデイビッド殿はカイト殿を最初から実子ということにしているのではありませんか。可能性を疑われないために。養子などとまどろっこしいことをしては、誰かしらがいずれそういった疑問を呈することにもなるでしょうし」

クライドの言い分に、ジェシカは同意しかねると言う顔をした。

「いや、デイビッド卿というのは、おまえの考えている以上に良心とか、温情とかいったものを欠いた人間だ。カイトが遠縁の子供であれ拾った子供であれ、彼を養子としたのはそのような慮りなどとはおよそ無関係のこと。単に実子にすれば自動的に家ごと乗っ取られるからそれを避けたかったのではないか。

それに出自の劣る養子であれば、扱いが多少粗雑であっても誰も疑いの目は向けない。だが実子であれば、嫡男としての待遇というものが必要になってくる。娘と婚姻させる余地も生じない」

「確かに。父親も母親も共通する兄妹となれば、結婚させるなんて

ことはさすがにおぞましい。神すらもその例外をお認めにはならないでしょう……。

ですが養子だからとて、本当を言えば現在だってその余地はないでしょう。継承権はカイト殿にあるのであって、どのみち娘にはない」

そしてクライドはジェシカを見た。その視線には言葉にして余りある含みがあり、それで僕は、クライドがこの議論にかこつけて、ジェシカにも家系を継ぐ資格がないのだということを暗に彼女に言いたいのだと気づいて、少々当惑した。

単純に仲のいい姉弟だと思っていたのに、こんなところにまで権力闘争が潜んでいたのだ。

「血統というものは、我が国では決して違えられてはならんものだ。浮浪児を簡単に実子にしてしまえなどと言える辺り、おまえにはこの問題の重大性がいまいち理解できていないように見受けられるが、これは妾を作ってでも産ませるほどに重視されるものなのだよ」

しかしジェシカはそれに窮した様子もなく、そう言ってクライドを見返した。

それでクライドはお手上げというように苦笑した。

「ああ、これは。姉上は私が妾腹だとおっしゃりたいのですか。だから貴方よりも血が劣っていると」

「それは被害妄想というものだ」

澄ました様子でジェシカは言った。

「おまえは我が家の列記とした男子だ、だから家はおまえが継ぐといい。我が父上も、そのつもりでおまえをもうけたのだ。愛してもない女を囲って家の存続のためだけにわざわざおまえを製造した。

だから、遠慮することはない。だが私の生き方に口出しをするなという話だ」

「姉上に結婚を勧めて何が悪いのです」

クライドの笑顔の中に、険が生じ始めていた。

「何か不都合でも？」

「私の夫にとおまえが父上を言いくるめて用意した男……、母方の従兄とは呆れ果てる。もっとも妾腹のおまえには他人だが、私にとっては近い血縁者だ。私がそれを忌み嫌うことを知っていておまえはそうした」

ジェシカが弟に蔑むような目を向けると、彼はまるで冗談をかわすように吹き出したが、それすらも悪意に満ちていることが僕にも分かった。

クライドは続けた。

「姉上、貴方もご自分の年齢をお考えください。そろそろ、贅沢を言えるようなお立場ではないのです。それに、彼の何に問題でも？　初婚、子供はなし、財産もあるし」

「血縁者と交わるくらいなら死んだほうがましだ。汚らわしいにもほどがある」

ジェシカが本当に嫌そうにして弟を睨んでいるので、僕はこんな話に口出しするべきか迷ったが、ちょっと口を挿んでみた。

「……クライド、ジェシカは結婚するのを嫌がってるのに、なんで君はそういうことを勝手に決めようとするんだ？」

「私を排除して、自分がギルバート様の腹心になりたいのですよ」

すると吐き捨てるようにジェシカが言った。

「いいえ、そうではないですよ」

にこやかに笑って、クライドも続けた。

「分かっていらっしゃる癖に……、姉上は素直じゃない。愚直なのはいいですが、愛想がなさすぎるのは……困ったものです。アレックス様、私は単に姉上に、幸せになって頂きたいだけなのです」

「でも、あんまり喜んでいるようには見えないけど」

僕はクライドの言うことが分からなかったので、頭を振った。

「独身でもいいじゃないか。結婚しない女の人だって世の中にはいるものだよ。確かに変な目で見られることはあるかもしれないけど、死ぬほど嫌がってるのを結婚させるのは好きじゃないな。身売りみたいで」

「それを分かって貰いたかったのです」

クライドは大袈裟な口調で僕に言った。

「年上の汚らわしい男と結婚するくらいなら、何が次善かということをです。

私は何も、姉上を無理やりに結婚させようなんて思っているわけではないんですよ。只いい加減、ギルバート様だの何だのと少女のようなことを言って、贅沢を言うなということを、分からせたかっただけのこと。

そして誰がフィーロービッシャー家の次の当主となるかということを。今後誰に頼るべきかということをです。

ねえアレックス様だって、そうお思いになるでしょう」

そしてクライドは僕に同意を求めたが、僕にはやっぱり彼が言っていることがよく分からなかった。確かに当主には頼るべきだと思うが、それが父親や兄ならともかく、妾腹の弟となれば心情的にどうなのだろうと思ったのだ。

でもそうなると僕としてもジェシカより年が若いが、でもやっぱり女性には頼られたいと思ったので、彼の言うことに頷いた。

「でしょう？」

するとクライドは勝ち誇ったように微笑み、視線をまたちらりとジェシカに向けた。

「アレックス様もそう仰せですよ、姉上。だからそろそろ、真剣に考えて頂かないと。

その昔、いえつい最近まで、サンセリウスの王侯貴族では近親婚が当たり前に行われていたのです。無論、親子や実の姉弟と言うならともかく――、これは、そう毛嫌いするほどのものでもないんですから」

ジェシカは顔を背けて腕組みをし、弟の言うことを拒絶していた。

「もっとも姉上がどうしてもと言うなら、この結婚を取りやめにしても……、私としてはまったく構わないんですよ、アレックス様」

「そうか、そうならいいんだ」

僕は頷いた。

「それならよかったよ」

第８２話　城内放浪

先日のマリーシアの一件で、僕はカイトに胸倉を掴まれたことが、どうしても許容することができずに険悪な気持ちを抱くに至っていた。
そしてそれからというもの、僕はタティだけでなくカイトとも顔をあわせづらく、タティが常駐している私室にも、カイトが常駐している執務室にも居づらくて、できるだけ近寄らないようにこそこそして時間を過ごしていた。
僕こそが二人の主人であるはずなのに、どうして僕が小さくなっているんだろうと気がつく瞬間もあるが、気がついたからと言って僕の性格が変わるわけじゃない。
ジェシカとクライドの会話が、姉弟なのにまるで対等であることを少し羨ましく感じながら、僕は二人と別れた後も、居城二階の廊下をぐるぐる歩きまわっていた。本当は執務室に戻らなくてはならないのだが、戻ればカイトがいるからどうにも足が向かないのだ。
僕は廊下を歩きながら壁に意味もなく手を沿え、ジェシカとクライドは兄さんと僕ほど年が離れていないから、あんなに意見を言いあえるのだろうということを考えた。
兄さんと僕だと、兄弟と言うよりはほとんど親子に近いんじゃないかと思った。基本的に兄さんが僕に対して上から物を言ったり、叱ったりして、僕は別に兄さんが恐いわけじゃないけどその顔色を見ながら対応をするのだ。兄さんの機嫌がいいかどうかを、いつもものすごく気にしている自分にうんざりする。
勿論僕は兄さんが恐いわけじゃないけど……兄さんは未だに僕に子供らしさや従順さを求めていて、そこからはずれ過ぎると子供らしくしろなんて理不尽な内容で怒るのだから対等になんかなりようがない。
それとも普通の男なら、いい年になったら、兄には力ずくでも対抗

を試みるものなのだろうか？　家の中における自分の立場を確保するために。兄弟が他にいないので僕には想像もつかないが、体格で負けていても君臨する兄に挑む弟なんてものも、世の中には存在しているものなのだろうか。

僕がこんな性格になってしまったのは、そもそも兄さんが横暴で強すぎるから、こうしないといけなかったんじゃないかと思うこともあった。幾ら何でもタティやカイトから逃げまわるなんて、これは我ながら最悪だった。

でもカイトは酷い養父のもとで育っても、ああいうふてぶてしい性格なんだから、やっぱりこういうのは持って生まれたものなのかもしれない。

フレデリック王子はきっと周りからちやほやされているだろうに、しかもまだ子供のくせにまるで人格者のようだった。もしかしたら兄さんのように外面のいい演技をしているだけかもしれなかったし、彼にはきっと優れた教師がたくさんついているのだろうが、それを勘案して余りある寛大さや、思いやりを持っていたのだ。彼はきっと年齢を十歳年上に言ったとしても、顔さえ見せなければ誰にも気づかれないだろう。

そしてマリーシアは可愛かった……。

あのとき、彼女はフレデリック王子に終始見惚れていたのだ。あの夜僕に出会ったことなど、僕が目の前に存在していたことなど、彼女にとっては無意味なことだったことは明らかだった。

あの夜の場面を、どれだけいいように解釈したとしても、マリーシアにしてみれば僕の存在なんて、目の前に見慣れない置物があるのと同じようなものだっただろう。彼女は僕に、気がつきもしなかった。只の一度も。興味も示さなかった。

どう考えてもこれは、僕の一方的な横恋慕にすぎなかったのだ。

それなのに僕の頭の中は、あの日以降、マリーシアのことでいっぱいなのだ。

諦めなければいけないと、あの女たらしの兄さんにさえ命じられて

いるのに、どうしてもどうしても吹っ切れないのだ。

「……」

僕はとても情けない気分でその場にしゃがみ込んだ。泣き出したい気持ちで。こんな気持ちを抱えていても、僕はきっと報われることなんてないだろう。何せ相手がフレデリック王子では、僕には勝てるところなんて何一つ見当たらない。家柄も、血統も、外見さえも完敗なのだ。

それにフレデリック王子は、兄さんやトバイア様でさえ少々手を焼いている様子だったあの性悪のオーウェル公子を黙らせる気の強さだって持っていた。初対面の僕やカイトに尊大な態度を取ることもなく、立ち去り際までとても親切にしてくださった。

彼はまるで僕が理想とする強さと優しさを併せ持った人間である上に、おまけに彼は、彼のほうが僕より四つも若いのだ！　もっとも男の場合、若さが必ずしも魅力に結びつくわけではないことは、兄さんが証明してくれていたが。

敢えて僕が明確に勝っていたものを挙げるとすれば身長だ……、でもあの若い王子はこれからも当分は成長期だった。

僕は叶わない恋と、逆立ちしたって勝ち目のない完全無欠の恋敵のことを思い出し、そのまま本当に泣きそうになったが、やがて気を取り直したように立ち上がった。本当はまったく気を取り直してなんていなかったのだが、たまたま近くにいた召使いたちが、慌てて近寄って来たからだ。

「これはアレックス様、お具合が優れないのですか？」

「まあ大変。この寒さですもの、お風邪を召されたのではありませんか」

「いや、大丈夫。僕は丈夫なんだ……、そう、いまやそれだけが取り柄と言っていい……」

僕はてのひらを彼らに向けながら立ち上がると、そのままあてもなく歩き出した。

のらりくらりと遠まわりをしていたが、とうとう執務室の前に到着してしまった。

胸倉を掴まれて以降、僕はカイトの顔もまともに見ていなかった。暴力に纏わる恐怖心というものは、じわじわと後からやって来るものだ。目をあわせればまた喧嘩になるんじゃないかという気持ちが、僕を普段以上に臆病にさせていた。

それに言っては何だが、僕には同じ年代の同性とつきあうことなんて、やっぱり本当に無理なことだったのだ。

同性の人間でつきあいのある者と言えば、兄さんとか、教師とか、後は兄さんのご機嫌を取りたいばかりに確実に僕に親切な兄さんの取り巻きくらいのものなのだ。取り巻きと言っても側近から出入りの業者まで様々だが、だいたいは若くても先ほどのクライドくらいには年上の人間ばかりだった。

だから彼らはきっと人づきあいの何たるかを心得ているのだろうし、僕としても自分が若くて、権力者の身内で、甘えが許されるという環境のもとで接していたから、まさか喧嘩なんていうものをしたこともなければ、その後処理をどうすればいいかなんて、本当にさっぱり分からなかった。

子供の頃、苛めっ子連中に苛められたときは、子供だったから兄さんを頼ることもできたのだが、まさかいい大人になってカイトと仲違いしたその尻拭いをしてくれとは、口が裂けたって言えなかった。

それにこれはあまり認めたくないことではあるのだが、カイトはた

ぶん喧嘩が強いのだ。
それは、兄さんに武芸を見込まれるくらいだから当然の話ではあるのだが、別に武器を持っていなくても彼は戦い方を知っているものと思われた。御託を並べる言い方をすれば急所の押さえ方とか、切断すべき血管だとかを身体でもって心得ているのだろう。
先日胸倉を掴まれたとき、腕力の強さもそうだが、その手際のよさに僕は半ば呆然としていたものだった。彼は僕を殴ったりはしなかったけれども、明らかに喧嘩の仕方を知っている手慣れたやり方だった。僕にはそれがすぐに分かって、本当のことを言うと恐かった……。
兄さんであればどんなに怒っていても僕に乱暴したりしないというある種の信用のようなものが、他人であるカイトには望めない恐さと言えば適切だろうか。
僕は同年代の人間と向き合って、正面から戦ったことがない引け目と言えばいいのか……。
とにかく男同士の喧嘩には、その後暴力が予定されている影がちらつくのが何とも不快でならなかった。何もカイトが乱暴者だとは言わないが、タティとなら確実に口喧嘩で終わるところを、カイトの場合はその後の更なる暴力による諍いを想定しなくてはならない、これが平和主義者の僕にしてみればとんでもない脅迫だったのだ。
でも、どんなにカイトが腕力を振るうかもしれないことが恐いと思っても、僕はカイトより立場が上なので、弱みなんか見せてはいけないのだ。本当は怯えているなんてことを、ほんの少しだってあいつに感じさせてはいけない。僕は彼をひれ伏させてやらなければならないのだ。どっちが上かを分からせてやらなくてはならないのだ。
そうとも所詮はカイトだって、昔僕を苛めた奴らと大差がないのだ。あいつらは狂犬と同じなのだ。乱暴でがさつで良識が欠損し、意地悪で恥知らずで最悪の人種なのだ。だから僕は奴らには常に権力を振りかざして誰が主人かを理解させ続けなくてはならないのだ。家畜に教え込むみたいに。分からせなくてはならない。

でも僕は彼らと違って成熟した大人なので、基本的に暴力反対なんだ。決して取っ組み合いになったらカイトに勝てそうもないから、それを恐がってるわけじゃない。あのときカイトに胸倉を掴まれたことが、ショックだったわけじゃないんだ……。

第８３話　お坊ちゃまと苦労人騎士（１）

胸倉を掴まれたことで、僕の態度がぎくしゃくしていることを、カイトとしても分かっているんだろう。僕らはそれからも淡々と通常業務をこなしながら、近年にない距離感があった。

実はカイトは無分別にも僕の胸倉を掴んだその翌日には、プライドのないことに僕の機嫌を取ろうと謝罪したり、冗談を言ったりして笑わせようとしていたのだが、僕はその機会をことごとく潰していた。当然だ、伯爵家の人間であるこの僕に対してあんな無礼をするとは、これはどんなに謝ったって許されることじゃなかったし、僕の心が負った傷はそれくらい大きかったのだ。

ジェシカがカイトを批判していたことは本当に正しくて、これは喩えるならジェシカが兄さんの胸倉を掴むようなものなのだ。そう考えれば、これが絶対に考えられないことであることが誰にも分かるだろうし、兄さんだったらたとえ相手がジェシカであってもその場で斬り捨てていることだろう。

だから僕はここのところずっと彼の謝罪を受け入れずに放置し、くだらない冗談には凍えるような視線を送ってやったりしていた。

僕にとっては誰とも会話をせずに一日を終えることなど苦でも何でもなかったが、他人と騒ぐことが生き甲斐のようなカイトにしてみれば、渾身のご機嫌取りさえ無視される状況はさすがに堪えているとみえた。するとカイトはやがて冗談すら言い出そうとしなくなり、それでもこのお調子者はどんな状況であっても目に見えて落ち込むということがないのが実にふてぶてしくて憎たらしかったのだが、それでも心なしか元気がないような顔をして今に至っていた。

本日も天候は悪く、窓の外はいつしか吹雪いていた。

酷い天気のために訪問客はないし、兄さんも好きなことをやっているのでその午後はまったくやることがなかった。

部屋に帰ってタティと顔をあわせることを想像し、僕はすぐにその

選択を取りやめた。彼女の笑顔は痛々しくて見ていられなかったからだ。そうさせたのは僕なのだが、だから余計に見ていられなかった。

たぶん僕がタティに酷いことをしているのだということは分かっていたし、逆のこと、もしタティが他の男に気が向いて僕をおざなりになんかしようものなら、僕は彼女を寝室に押し込んで一生外に出さないだろうと思った。反省したと泣いても許さないだろう。タティが誰の物かを毎晩思い知らせてやるだろう。自分がそんなことをされたら最悪だろうが、でも僕はアディンセル家の人間だから、逆の場合なんてものはないのだ。

「……カイト、青本を持って来い」

ふと僕は執務机についたまま、横柄な態度でカイトにそう命令した。カイトとしてもたぶん胸中穏やかではないだろうが、それでも僕が声をかければ、機嫌よく応対した。勢いで僕に喧嘩を売ってしまったまではいいものの、やがて頭を冷やして自分の立場というものを思い出したのだろう。

カイトの処遇を決めることができる僕に首を切られて、ウェブスター家へ帰されるのが何しろ怖くて、とにかくこれ以上事態を悪化させまいとしている見苦しい意図が彼の態度から分かりやすいほどにじみ出ていた。

間もなくカイトは本棚から本を選び出し、従順で友好的、それに少々腰の低い態度で僕に指定された経済理論書を持って執務机の前までやって来た。

「どうぞ。またお勉強ですか」

「……そうだよ。悪いか？」

差し出された分厚い本を受け取りながら、気難しく僕は答えた。

「いえ、ああ……、熱心だなと思いまして」

僕の冷たい態度に恐れをなしたのだろう、カイトは困惑気味に微笑し、それからさっそく得意のおべっかを言い出した。

「アレックス様は、本当に勉強家でいらっしゃる。何ヶ国もの外国語の本が読めるんですから、賢い証拠ですね。俺なんて母国語で精一杯なのに」

「へえ、そうなんだ。でもこれは公用語だから、まったく外国語の本じゃないけどね。

カイト、もしかして君、公用語が分からないなんてことはないんだろうね。まさかそんなことはないだろうと思うけど、もしそうなら、貴族の男子としてはちょっと問題あるんじゃないか。

まあ、僕には関係ないけどね。暇なだけだよ。外は吹雪いているしね」

僕が気まぐれに嫌味混じりの返事をしてやると、馬鹿にされたことなんて気にもしなかったのか、水を得たようにカイトは勝手にしゃべり出した。

「ほんと、ここのところ天候が悪いですね。出かけるにも一苦労です。居城前階段とか、それに広場の辺りは油断するとスケートリンクなんですよ。まあ今朝は若いご婦人方がこぞってひっくり返って、なかなか見応えがありましたけど。

俺はあのひらひらしたカボチャみたいな下着は反対ですね。スカートがめくれても中がさっぱり分からないから。もっとぴったりしたのがいいと思うんですよ。俺が近づく前に当番兵が助けていたのでよく分からなかった」

「……君も大概にするといいよ。男がみんな君と同じだと思われた

ら迷惑だから」
「俺の故郷は南部なので、そこでは真冬でもこれほど吹雪いたりはしないんですよ」
「ふうん」
「でも朝起きると、やっぱり水たまりには氷が張っていました。家には使用人を使う余裕は当然なかったですし、俺は長男なので、毎朝家の横にある小屋に薪を取りに行くんです。でも、貧乏だったから、どうしても薪が湿って」
「ああそう、じゃあ家族に会いたいだろうね」
僕は苛々してカイトの話を遮った。
「休暇が欲しいならやるから、家族に会って来たら？　そんな遠まわしに言わなくてもさ、僕は話の分からない男じゃない。里帰りしたいならそう言えばいいじゃないか、それとも僕がおまえをこき使っていることへの反発のつもりか？　本ぐらい自分で取れって皮肉とか？」
「お気に障ったのならすみません、でも、そんなわけじゃないんですよ」
「だいたい家族の話なんて……僕は大嫌いなんだよ。団欒とか、そういう自慢を聞くのは鬱陶しいんだ。故郷に帰りたいならどうぞ何日でも気が済むまで行って来たらいいだろう。僕は構わないよ」
そして僕はカイトを睨みつけた。何しろカイトの身の上話なんかには、僕はまったく興味がなかったのだ。それに、ウェブスター男爵のところで酷い扱いを受けたことには確かに同情するが、でもそれまでは彼は家族というものに囲まれて暮らしていたのだ。
僕はたった一人の家族である兄さんが、僕よりも女を可愛がっているとき、いつも城の中でぽつんと取り残されていた。一人で夕食を取ることも多かった。とても孤独で荒んだ気持ちで、時折使用人が

自分の子供たちを可愛がっているのを、両親のいない僕はいつも独りで眺めていなければならなかったのだ。僕は父上や母上がいる生活というものがどういうものか、具体的にはまったく知らなかった。それなのに、両親と過ごした幸せな経験なんか、そんな話は聞きたくもなかった。

ところが僕がそう言って腐っていると、カイトがこう言った。

「いえ、もう死にましたので」

第８４話　お坊ちゃまと苦労人騎士（２）

「え？」

それで僕は広げていた本から顔を上げた。

「死んだって両親とも？」

「ええ、両親も姉妹も。下に妹が二人いましたが、全員」

「どうして？」

カイトの境遇を知っている以上、この時点で僕は何やら悪い予感がしていたが、会話の行きがかり上たずねずにはいられなかった。するとカイトは特に表情も動かさずに答えた。

「ウェブスター本家の目的は幼い男子だけでしたからね。始末されたと言えばいいんでしょうか。後から家族だと言ってしゃしゃり出て来られると困るということだったのだと思います」

予想通りの酷い内容に、僕は頭痛がした。

「始末って、君、さすがに目の前でとか、言わないよね……」

「いえ、目の前でですよ。ウェブスター家の私兵に、家屋を襲撃されたんですから。

何にせよあのときは、妹たちが幼くてよかったです。七歳と六歳だったので、只殺されるだけで済みましたからね」

「……」

僕は何も言えずにまたカイトの顔を見た。

彼は引き続きまったく平然とした顔をしていて、何故そんな悲劇を

何事もないような態度で話せるのかが僕には分からなかったが、取り敢えず、生まれながらに贅沢な生活をして、側にはいつもコンチータとタティがいてそれなりに楽しくやっていたが、ときどき僕を可愛がってくれる兄さんが女といちゃついている間は寂しかったという僕の主張を、口にしなくてよかったと思った。

「どうしてそれを今まで言ってくれなかったんだ……」

本を閉じ、頭を振りながら僕は言った。

「前に身上を話してくれたとき、家族から無理やり引き離されたとは言っていたけど、殺されたとは言わなかったじゃないか。僕はまた、君は単に貰われて来たんだとばっかり思っていた。それなのにそんな、そんな酷いことをどうして……」

するとやっぱり世間話でもしているような調子でカイトは答えた。

「いやあ、何しろ内容が酷いですからね。一部始終に、割と救いがないんですよ。だから、アレックス様が聞いたらショックなんじゃないかと思いまして……、正直、想像もつかないでしょ？」

「想像つくわけがない」

僕は愕然としながら言った。

「君、どれだけ苦労しているんだ。そんなの、あんまり酷すぎるよ……」

「そうですかね？　まあ、そうかな？」

僕はカイトの話を聞いただけで、本気で目の端の涙をこすらなければいられなかったのに、当の本人は僕に久しぶりに相手にされたことでかえっていつもの調子を取り戻して、まったく飄々とした態度でいるのが理解に苦しいほどだった。

カイトはもしかしたら図太いんじゃなくて、図太くならなければ生きられなかったんじゃないかとさえ思ったが、それはたぶん、あながち間違ってはいないのだろう。

「それにしても、デイビッドがそんな男だったとは知らなかった。さっきジェシカたちが、たまたま彼のことをあまりよく言っていなかったんだけど、それはそういう人間だったからなのか……」

僕が言うと、カイトはただ黙って肩を聳やかした。

僕は気遣わしくカイトを見た。

「そんな経緯があったのでは、デイビッドのこと、罰して欲しいだろうね。本当に本当に、許せないだろうね。親兄弟の仇じゃないか、それじゃあヴァレリアと結婚するのだって嫌なはずさ……。

カイト、僕としてもこんな話を知った以上は、できる限りのことをしたいと思っているよ。

兄さんに言えば、彼を厳罰に処することができると思うんだ。ウェブスター家なんか潰してしまえばいいんだ。それで、君が新しく名前を引き継げるようにして貰おう。そうすればいい。だって、こんな酷い話はないんだから……」

ところがカイトはきっぱりとかぶりを振った。

「いえ、きっとアレックス様のお話を聞いたところで、閣下は何も

なさらないと思います」
「そんなことはないよ。兄さんは……」
僕はそう言いかけて、兄さんが必ずしも正義に篤い人道的な人間ではないことを思い出した。僕はついそのことを忘れそうになるのだが、アディンセル家に仕えるあらゆる者たちが、必要以上に兄さんを畏敬している理由はまさにそれなのだ。
「無駄です」
カイトは僕の思考を理解するように頷きながら繰り返した。
「でも、そんなのって、あんまり酷すぎるよ……」
僕はまるで自分こそが家族を殺された被害者のような気持ちでカイトを見た。
「カイト、君はまるで平気な顔をしているけど、本当はたくさん、泣いたんだろう？　今だって、悲しくて生きていられないくらい悲しいだろう？
こんな、こんなことってないよ……。
だからカイト、僕は君のために何かしたいんだ。僕はこんなこと、絶対許せない。見過ごしたくない……」
するとカイトは少しの間目を伏せて、それから再び僕に視線を向け、少し冗談めかしたような感じで微笑んだ。
「じゃあ…、アレックス様。ひとつだけ」
「うん、何でも言ってくれ。僕にできることなら何だってするよ」
「ありがとう……、では先日、俺が貴方の胸倉を掴んで、逆らって

しまったことを水に流してください。うん、これで決まりっ」

第85話　いじけ虫と梟と現実と（1）

まだ午後三時をまわったばかりだというのに窓の外は薄暗く、そこに世界があることを覆い隠すほどに大気は荒れ狂っていた。サンセリウスは大陸最北の国ではなかったが、冬場寒気の吹き荒れる地域は国土の半分にも及んだ。

僕はその窓辺に立って、誰かのように清々しい心と精神を持たない僕は、只ひたすらに傷心に浸っていたのだ。

それは自分の人生に起こったわけでもない対岸の他人事ではあった。世界のどんな場所よりも安全であることが望まれる場所、自分が暮らしている家の中に、見知らぬ他人が踏み込んで来てある日家族を殺すなんてことがこの世にあるものかと――、僕の想像力では、それは到底再現しきれない光景だったのだ。恐らくそれは恐ろしい出来事に違いないのに、僕にはそれを想像するということさえ困難だった。

だけどカイトが嘘を言っていることはなかったのだ。彼の話には、その場にいる人々の同情心を煽ったり、驚嘆に巻き込むための浅はかな誇張がなかった。そもそもカイトは無駄話は抜群に多いが、しかしそこに作り話を挟み込むようなほら吹きの性格はなかったし、彼の極めて平然とした表情からその心情を読み取ることはできなかったが、でもカイトが人よりずっと苦労をしていて精神的に人よりずっと老成しているように見える部類の人間であるとしても、でも彼もまだ若かったのだ。彼の物語を語るとき、ほんの些細な声の震えまでを完全に自制できるほどには、彼もまだ感情というものをコントロールできていなかった。

そして僕はカイトの殺された妹のうち、上の妹の年齢が、僕やタティと同じだったことを知った。

カイトは終始、まるで他人事のような素知らぬ様子を崩さず、またその酷い悲劇の詳細な事柄や感想については、もうあまり憶えてい

ないということだった。
だから彼はそのことについて特に何も言わなかったのだが、先日カイトがタティを庇ったことには、僕に無下にされて泣いているタティに妹の姿を重ねて、それでどうにか妹を庇いたいような、そういう心理もあったんじゃないかと密かに僕は思った。
僕としてもこうした事情を知ってしまった以上は、いつも世話になっているカイトのためにも、僕の力で何とかしてあげられるものならしてあげたいものなのだが、アディンセル家の当主でない僕には、所領内に暮らす貴族といえどもウェブスター家の処遇に口を挿めるような権限はなかった。それでも兄さんがご機嫌のいいときを狙って、どうにか話を動かせないかということを、僕は考えていた。

「……ぼーっとして、さてはまた何か考えてますね」

窓外の吹雪を眺める僕の背中の向こう側から、カイトのため息が聞こえていた。
僕がこうしてカイトのことに親身になっていることが、面倒臭いと言わないばかりの、そういうため息だった。

「俺のことならいいんですよ、何も貴方が気に病むようなことじゃない。
さっきの話はね、アレックス様があんまり許してくれないから、取りつく島がないもんだから、つい言っちゃっただけで……つまり貴方の同情を引くためにね。
でもこれは、今では本当に思い出すことさえないような、何でもないことなんです。俺も幼かったので、当時の記憶はだいぶ薄れているんだし。
それに今は、かつてないほど幸せなんですよ。食べる物にも着るものにも困ってないし、理不尽に殴られることもない。寝るとこはまあ、埃っぽいですけど、寝るために帰るだけですし。あそこに住ん

でりゃ家賃もかからないんだから言うことはありません。
こうして責任のある役割を授かり、貴方の側近騎士としての立派な装備も無償で頂けるし、そうすると羨望の眼差しで見られることもあるし、充実した人生です」
「僕は生まれたときからそんなの当たり前だったよ。寧ろ君の生活はまだ酷いと思う」
「そら、そういう人生もあります」
「……」
「だから、気になさらないでくださいって。そんなことでそんなに深刻になったってしょうがないですよ。ねっ、ほら」
「気にするなって言うのはおかしいじゃないか」
僕は背中のほうでどうにも騒がしくしているカイトのことを、我慢できずに振り返った。こんなときくらい、落ち込んで泣いたって構わないのに、どうして朗らかにしているのか分からなかったのだ。見ると、どういうわけかカイトが笑顔でいたので、僕はますます彼というものが理解できずに頭を振った。

「まったく、君はどうしてそう……、とにかくこんな酷い話を聞かされて、気にしないでいられるわけない。僕は家族を殺された君の過去を聞き流せるような冷たい人間じゃないんだ。
それに、僕はこれを相談と受け取ったんだ。僕も君の主人である以上、君が困っているなら、それを何とかしてあげたいと思ってる」
「そんなこと言ったってねえ……、俺はそのお気持ちだけで十分嬉しかったんですよ。これまでこの話を聞いて、そんな反応してくれる人間はいなかったですもん。感動して、涙がでちまうくらい」
「だったら、その思いっきりへらへらした態度は何なんだ。
だいたいからして君はそうなんだよ、積極的に働きかける割には一歩引いてると言うか。何事においても君はそうなんだ。前から何考えてるか分からないって思ってたけど、それは僕が年下だと思って

甘く見てるんじゃないだろうね」
「いやいや、そういうわけじゃないですけども。んー、弱りましたねえ、そいじゃ、気分転換になんかして遊びましょうよ。あっ、ダーツなんかどうですか。ひょいっとね」

カイトはそう言うや、さっそくダーツをやっているような陽気なジェスチャーをした。それがまるで機嫌を損ねた子供に向けられた少々横暴なご機嫌取りに思えて、僕は憮然とした。

「君が勝つからやらないよ」
「んん、そいじゃ、負けますよ」
「わざと負けて貰ったら、僕が惨めだろう？」
「ふむ、じゃあ雪遊びはいかがです？　たまには身体も動かさないとね」
「カイト、外は吹雪いているんだぞ？　それに、僕は子供じゃないんだ。雪遊びなんて、そんなの子供のやることだ」
「そうですか？　結構楽しいと思いますけどね、童心に帰れて。きっと楽しいと思うけど」

そう言って、カイトがまたあんまり笑顔を見せるので、僕もつられてつい笑顔になりそうになるところを、しかしそんな単純さに引っかけられてなるものかと思い、殊更に眉を寄せた。下に姉妹がいたのなら当然なのかもしれないし、カイトとしても意識的にやっているわけではないのかもしれなかったが、彼のやり方はまるで幼い人間を懐柔しようとするようで、まったく面白くなかった。
既に恋愛関係にある女に対してなら分からないでもなかったが、只のご機嫌取りでまっすぐ笑顔なんか向けられても、かえってこっちが恥ずかしくてしょうがなかったのだ。

「まったく君は無邪気だね。でもいいかい、大人の男っていうもの

は、雪と戯れるものじゃない。ブランデーを片手に雪景色を眺めるものなんだよ」

僕は例のごとく頭の中に兄さんを思い浮かべて、ちょっと気取って言った。

「ブランデー片手にねえ」

「そうさ。そして過ぎ去りし日々に思いを馳せ、暖炉の前でこうグラスを傾けて、酒の色なんかじっと眺めるんだ。夢の中を覗き込むようにね。すごくロマンを感じるだろう？　僕はそういう男になる予定なんだ」

「なるほど、そうですか。じゃあカードゲームはどうです？」

するとカイトが僕の話をあっさり流したので、僕は文句を言った。

「カイト、僕の話、ちゃんと聞いてた？　僕いますごく格好いいこと言ったんだよ」

カイトは頷いた。

「ええ、勿論。すごくいい考えだと思いましたよ。それが貴方の美学なんですね。何とも切ない情景が思い浮かぶようでした。でもアレックス様、今は遊ぶ相談をしているんでしょ？」

その台詞に、僕は呆れて言った。

「違う、遊ぶ相談じゃないよ、君の境遇を改善しようって話じゃないか。君は人の話をいったい何だと思って聞いているんだ。デイビッドをやっつける方法を考えるんだよ」

「雪合戦で？」

「だから違うってば、どうしてそこでふざけるんだ」

さすがに僕が焦れながら言うと、カイトはふと真面目な顔になって、ついでに声色も少々咎めるような感じになって、こう応じた。

「だって男爵様は、アディンセル家に先代伯爵様の時代から二代に渡って仕えている人物ですよ。現役で閣下の側近の一人ですし、現実的に言って、俺より存在は重いです。

閣下はどちらかを選ぶというならまず男爵様をお選びになるでしょう。その辺りのことはね、閣下はとてもシビアですよ。たとえアレックス様のお願いだとしてもね」

第８６話　いじけ虫と梟と現実と（２）

カイトが言ったことは恐らく正論だった。そして僕はむっとしていた。

カイトに正論を言われたことでむっとするということは、僕はやっぱり彼のことを少なくとも脳みその分野では自分より劣っていると思っている、そういうことなんだろうと、また窓外の吹雪を見ながら思った。

でも問題なのはそれだけではなくて、それよりもずっと問題だったのは、僕の気持ちをカイトが理解しないということだった。

僕はカイトの話を聞いて、心底彼のことを可哀想だと思ったし、それは高い身分にある貴族たちが平民の暮らしぶりを嘲笑するようなものでは決してなく、そういう上から他人の不幸を見下ろすような気持ちではなくて、仲間を思う純粋な気持ちだったのだ。仲間を助けたいと思うそういう気持ちだった。

それなのにカイト自身にそれを否定されるなんてことが、果たしてあっていいのだろうか？　ここはデイビッドを罰してやろうという主人の言葉に、感謝するのが筋なのではないのか？　それともカイトはここのところ彼に冷たくしていた僕に、仕返しをしているということなのだろうか？

そうなら僕は彼と上手くやっていく自信なんてなかった。そんな意地悪なことをやるような人間と、とてもこの先やっていくことなんてできない。素直にずっと年上の人間を配置して貰ったほうがまだ気が楽だった。そのほうが気兼ねしなくてもいいし、僕には向いているということは分かっていた。もしかするとカイトはカイトで僕のことを生意気だと思っているのかもしれないが、でも僕はどうしたってカイトのことを兄さんのように思うことはできないのだ。

どうやってバランスを取ればいいのかが分からなかった。他人とのつきあい方が分からなかった。特に、よかれと思って好意からした

提案を、こうやって真顔で否定された直後には。
子供の頃、幾ら連中が低劣だったからと言って、軍属の子弟の奴らとまともに向き合わなかったつけが、ここにきて巡って来ているような気もした。勿論、全面的に奴らが悪いのであって、僕は悪くなかったが。
僕が執務机の後ろの窓のところで考え事をしていると、カイトがまたちょっと機嫌を取ろうとするように調子よく声をかけて来た。

「アレックス様、吹雪の中に、何か視えるんですか？　精霊とか。雪の精霊は、イメージとしては女性って感じがありますけど、実際にはどうなんです？」
「……姿は必ず決まってるわけじゃない。等級もあるだろうし。僕には視えない。魔法の契約をしなかったからか、それとも僕には最初から視る力はないのかもね。興味があるならルイーズにでも聞いたらいい。ルイーズは……いろいろ視えるそうだ。ついでにバスタブに誘って貰えるかもしれないよ」

僕が皮肉を言うと、後ろでカイトが微笑したのが分かった。

「いやいや、俺は相手にされてないですよ。かえって貴方のほうが好かれています。彼女の貴方を見る目は、ときどき見たこともないような親愛に満ちていますから」
「世辞を言うなよ。ルイーズは君には抱きつくけど僕には抱きつかない。それがすべてを物語っているじゃないか。
まあもっとも、気持ちがある相手には、かえって恥ずかしくてそういうことができないって考えもあるけどね」
「きっとそうですよ」
「やっぱりそうかな……、実は僕もそうじゃないかなとは思っていたんだ、よく考えてみると彼女はやっぱり僕に気があるとしか……、いや、でも駄目だよ、僕はマリーシアが好きなんだから……、第一、

勘違いだったら格好悪すぎる……。
そのての話は、ここではきっと一晩で笑い種になるよ。僕がエステルに振られたときみたいに。最近では、君が僕の胸倉を掴んだ話みたいにね。この城の連中ときたら、本当に暇人ばっかりなんだ」
「我ながら、何ということをしてしまったのかと思います。本当に申し訳ありません」
ふと、カイトが神妙に言った。
「……別に、その件はもう水に流すって言ったんだ」
僕は背中を向けたまま答えた。
「あの話は、色々と脚色されつつありますね。昨今のアレックス様は、使用人の間でも人気者ですから。特に女の使用人に。貴方の一挙手一投足に、皆興味津々なんでしょう」
カイトがまた明るい声を出した。
「クライドの話じゃ、君も割と人気があるようなことだったけどね」
「俺が？　ほんとに？」
吹雪に目をやりながら僕は頷いた。
「クライドっていうのは、性格がいいのか悪いのかいまいち分からない奴だけど、この件で嘘を言っても彼に何の得もないからね。本当だろうと思うよ。
君はいつも女にもてないなんて言ってるけど、高望みしなければ結構相手はいるんじゃないかと思うけど。
はっきり言って生涯ヴァレリアだけなんていうのは、過去のそうい

う経緯があるのでは、僕に言わせれば拷問に近いよ。君、本当に愛する人を別にみつけたほうがいいかもね。でないと人生ってやつに救いがなさすぎだ」

「アレックス様が、俺に浮気を勧めているんですか？」

「カイト、僕は理解がある男だよ。不貞は男としたって許されないことだと思うけど、君の場合は神様だって許してくださるだろう。親兄弟を殺した男の娘と夫婦になれなんて狂気の沙汰だ。勿論僕としては諸悪の根源を――、つまりデイビッドごと潰すべきだと思うけどね……」

しばらくの沈黙があった。僕はまた窓外の吹雪に目をやり、カイトの反応を気長に待った。できることならこの件に関する建設的な意見を。僕の提案を彼は無視するべきじゃなかったのだ。

「しかしまあ、そんなことを言っても始まらない。ここはひとつ男らしく、女の話はどうですか」

でも少しして聞こえてきたカイトの返答に、僕は静かに失望した。

「女の話か。まったく……、まあいいよ。例えば？　カボチャみたいな下着が気に入らないってことかい」

また皮肉を込めて言うと、カイトはそれには気づかずに笑いながら頷いたようだった。下着は小さいのがいいとか、彼なりのこだわりを言っていた。

僕はそれを聞き、何となく首を撫でた。

「そんなこと、君が気に入らなくたってどうしようもないと思うけどね。恋人でもない女のスカートの中身を見たいなんて考えが、そもそもせこいんだ。ほとんど変態だよ。しかも安い変態。世も末だ。

そのうち結婚したら、自分の妻に好きな下着を穿かせればいい……」

僕はそう言いながら、カイトの結婚相手であるヴァレリアお嬢様が、到底夫の言うことなんか聞きそうにない性格だったことを思い出した。あれに言うことを聞かせるのは至難だろう。少なくとも僕には無理だと思った。

「娼館に行けばいい」

僕は静かに言い直した。

「女を買って、服を脱がせればいいんだ。買春はポリシーに反するにしても。ヴァレリアにできないなら、他の女に見せて貰えばいい。ああいうところは、ちょっと聞いたところによると、行くのであれば高い金を払う店のほうがいいらしいよ。上等の店のほうが。そのほうが女の質がいいらしい。どんな美人でも、使い古された女たちっていうのは、二、三年もすると格下の店に払い下げになるそうだ」

「おやまあ、そんな内情を何処で聞いたんです？　誰に？」

腹立ちついでに最近仕入れた知識をひけらかしてやろうと思ったのに、カイトが既にそれを知っているような様子だったので、僕はむっとした。

「ああ、君は知ってるってわけか」

カイトはそれを認めた。

「そりゃ、まあ。多少はね」

「僕だって、何もこういう話をまったく知らないってわけじゃない。兄さんの側近連中の間じゃ、そんな話題に事欠かない。僕はこれま

で気づかなかったけど、ちょっと注意して聞いているだけで、誰かしらがとんでもないことを言ってるものだよ」

カイトは黙って頷いたようだった。

「それにこの前も兄さんが、そういう店に行ったり、女を買うなって言ったんだ。病気を貰ったら困るってね」

「なるほど」

「僕がそんな人間に見えたのかな……」

「そうでなくて、ご心配をされたんでしょう。ああいうところはほら、そういう場所である以上、どんな高級店でも清浄な女ってわけにはいかない。向こうも商売ですからね。やっぱりいろいろあるわけで。例えばそう金のない男でも、大勢で一人の高級娼婦を買って、一晩かけて順番にとか……」

聞いたことがない話に僕が唖然としてカイトを振り返ると、カイトは何かまずいと思ったような顔をして、それ以上内容を教えてくれることはなかった。

僕がまた窓辺でうつむいていると、カイトが横に来てまた明るい声で僕に話しかけた。

「ま、ま、そんなお顔をなさらずに。大丈夫、そういう場所に行きさえしなけりゃ、まず貴方が係わり合いになることはない世界なんですから」

「僕を子供だと馬鹿にしているんだな」

僕は呟いた。

「君、本当は僕のこと馬鹿だと思ってるんだろう」

「ええっ、どうしてそうなるんです？　風俗街の知識がちょっとだ

けなかったなんてことで。全然いじけちゃうようなことじゃないじゃないですか。

寧ろ俺は、貴方の育ちのよさに憧れますけどね。だってこんなことは、一度話を聞いちまえばもう分かることなんだし。アレックス様、もう俺の話を聞いてそのことを分かったんでしょ？」

「……いじけてないよ」

「だったら。できれば、そろそろご機嫌を直して欲しいなあ。ねえねえっ」

「……、兄さんに、僕に余計なことを教えるなって言われたのか？　そろそろ僕が興味を持ったり、調べに行くといけないからって」

「ああ、いやあまあ……、そうだ、じゃあ例のマリーシアって娘の話はどうです？　彼女、可愛かったですね、結構な美人でしたよね。たぶん十五か十六かそのくらいだったですかね。

そんな年齢であれだけ美人なら、もうちょっともしたらすごいことになるんじゃないでしょうか」

「まったく君は誰の部下なんだよ」

第87話　いじけ虫と梟と現実と（3）

カイトの態度が朗らかすぎて苛つくのは、ずっと前からのことなのだから、今更目くじらを立てるほどのことではないと自分に言い聞かせていた。
マリーシアなんて名前を出せば、僕がすぐに話に乗るとでも思っている辺りがとても気に食わなかった。それに、カイトの境遇を改善するという本題からはいよいよ話をそらされた感はしないでもなかったのだが、一応、僕は黙ってそのまま話題に応じることにした。それは、カイトに対する好意によってということだった。今では兄弟さえ一人も残っていないカイトに対する同情ということだ。マリーシアのことを、この可愛い名前を、ためらいなく会話にのぼらせるということにさえ飢えているからそれに飛びついたということではなかった。

「やっぱり君も美人だと思ったのか」
「ええ、そりゃ思いましたよ。か弱そうで、おとなしそうで」

カイトはまるで手に負えないいじけ虫の機嫌を取りたいとでもいうように、大袈裟に頷いた。

「……そんな話題を突然振るなんて、まさか君も気に入ったなんて話じゃないだろうね」

僕が警戒して睨むと、カイトは両手を振って全力でそれを否定したのだが、それがますます怪しかった。だって、マリーシアはとっても可愛かったのだ。彼女を好きにならない男なんて、この世に存在するわけがなかったのだ。

「ないです、それは誓ってないですよ」
「なんでそんなことが言えるんだよ。すごい美人だと思ったんだろう？
マリーシアみたいな美人は、地方じゃ滅多にみかけないし……、好きにならないわけがないんだ」
「んー、まあ、確かに美人でしたけども……」

カイトは困ったように頭を掻き、それから一段と愛想よく笑った。

「彼女は俺が相手にするには、ちょっと雰囲気が幼かったかな？
それにアレックス様とのほうが、お似合いだと思いましたし」

それは確かにその通りなので、僕は納得した。

「……そう？　お似合い？」
「そりゃもう、ばっちり！」
「ふうん…、実はマリーシアに会いたいと思って、何度か王宮に行ったんだ。彼女はきっとフレデリック王子の魔術師だと思っていたから、兄さんについて歩いてたら、そのうち殿下に会えないかと思って」
「えっ、ああ……、そうなのですか」
「うん」
「それで、フレデリック様にはお会いできたんですか？」

僕は何度か小さく首を縦に振りながら言った。

「まあね、でも御姿を見ただけ。王子殿下となると、そうそうこちらがお呼びとめするわけにもいかないから。親しければ別だろうけど、僕はそうじゃないし……、とてもそんなことはできなかった。
それに結局マリーシアには会えなかったんだ。マリーシアはフレデ

リック様ではなくて、オーウェル公子の魔術師なんだってさ」
「あらら、オーウェル様ですか。そりゃまたえらい展開ですね」
「うん。厄介なことになったと思ったよ。マリーシアがどういう女性か、もうちょっと彼女のことを知りたいと思ってさ、兄さんに探りを入れたらそういうことだった。
僕はオーウェル公子とはまったく交流がない上に、彼は僕のことなんか虫けらとしか思っていないような態度だっただろう。もし僕が彼の魔術師が気になっているなんて知ったら、どんな意地悪をされるか分かったものじゃない」
僕が言うと、カイトも僕に同調する形でオーウェル公子のことをこう評した。
「意地悪どころか、夜会のときも彼は我々のことなんか血祭りにしてやれってなこと言ってましたもんね……、あの目は完全に本気でしたから、あんときゃ俺もどうやって切り抜けるべきか冷や汗を掻いていたもんです。
ですから俺としては、アレックス様があの公子様に迂闊に近づくことに賛成することはできません。
あの方はなんつうか、思想といい、不安定な精神といい、どちらかと言うと悪い意味で独裁者の素質を持っていると思いましたよ。王位継承の上位にフレデリック王子がいてくださってよかったとしか言い様がないような。
もっともこれは、あの若い公子様があのご性格のまま成長してしまったらという前提の話ですけども」
「ああ、独裁者っていうのはぴったりだ」
僕は吐き捨てた。あの夜会の晩、そう言えばオーウェル公子が僕をゴミ扱いしたことを思い出して、何だか胸の中がむかむかしたのだ。

「大きな声では言えないけど、どんなに身分が高くたって、ああいう性悪の人間っていうのは弱い者虐めとかを平気でするから大嫌いだよ。
マリーシアが、酷いことをされていなければいいんだけど……」

僕が呟くと、カイトはそのときの情景を今まさに思い浮かべているような少しの沈黙の後、答えた。

「そこはたぶん、大丈夫かと」
「どうして？」
「思い出してみるに、マリーシアは特別オーウェル様を恐れている様子も、彼から離れた立ち位置を取っているわけでもなく、見たところ身体に瑕もなかったですから。
それに何より公子様は、王子様を見るときは素直な顔になるんです。信頼している親とか、年上の兄弟を見るような感じでしょうかね。あれはかなりフレデリック様を慕っているってことだろうから、彼の想い人なら丁重に扱っているというところなのでは」
「いま思い出したの？」

僕が訊くと、カイトは頷いた。

「得意なんです。場面を映像として憶えておくのが」
「君、ほんとよく見てるな」

僕が感心すると、カイトは笑った。

「それが俺の仕事でもありますからね」
「じゃあ、本当は昔のこともよく憶えているんじゃないのか……？」

でも僕が家族を殺された件を持ち出すと、カイトはおちゃらけて無

理やりとぼけた。

第８８話　いじけ虫と梟と現実と（４）

「何だよ、やっぱり憶えているんじゃないか。まったくもう、どうして僕はそう信用がないかな」

やがて結局はカイトが悲惨な彼の過去のことをほとんどすっかり憶えていることを悟って、僕は再び憤然とするに至った。
それまでに幾つかのジョークをはずしたことと、また僕の機嫌が悪くなったことでカイトはうろたえていたが、僕の気分はもっとだった。結局カイトは僕のことを、まったく信じてなんかいないということだったのだ。

「いやいやいや、そういう話ではなく……、これは単にもうどうしようもないことだからですよ。アレックス様だけでなくて、誰に言っても仕方がないからです」

カイトは幾らか不本意そうに答えた。

「だってそうでしょう？　悲しいけど、どうしようもない。だから言わないだけです。信用していないとかいう次元ではなくて」

「それで、そのまま諦めてしまうのか？」

「諦めるんじゃなくて、単にどうしようもないんです。例えば俺が過去に戻ってその場面に立ち会えるなら、たぶん、十人くらいの私兵でしたから、母親や妹たちを守れたかもしれないでしょう。父親と協力して、いえたぶん協力なんかしなくても、俺一人で何とかすることはできたかも。でも過去に戻るなんてことはできやしないことです。そして当時は九歳ですから」

カイトは何気なさを装って、またさらっとそんなことを言っていた。

でも僕には、そんな言葉が大して考えもせずに出てくるということは、カイトがきっと何度もそうやって心の中で過去に戻って、泣きながら家族を助けようとしたんじゃないかということが分かって、思わず涙ぐんだ。

「……僕、九歳のときはクリームパイを……どうやったら夕飯を食べないでお菓子を食べられるかを考えていたんだ。それが僕の関心事だった。

摘みたての野苺でババロアを作って貰おうと思って、裏の森に行こうとすると、護衛がたくさんついて来て、僕の周りを歩くんだ。野うさぎ一匹僕に近寄らせないためにね。彼らを君に貸し出せればよかったのに……」

僕が目を押さえると、カイトは僕の顔を覗いて僕を慰めた。

「あああ、泣かないでくださいって。ねっ。貴方はお優しいから。俺のためにそんなふうに泣いてくれた人は初めてですよ。そういうご性格だから、閣下も、閣下の周りも貴方を大事に扱っているんです。必ずしも子供扱いじゃなくてね」

「君は諦めることに慣れすぎなんだ」

僕は呟いた。目を拭って顔をあげ、目の前で僕に泣かれてさすがに困惑しているカイトの顔をみつめた。

「やっと分かったよ。君はいつもいつも、いろんなことを諦めて来たんだ。君の掴みどころのない態度だって、つまりそういうことだったんだ。そうなんだろう？　でも、どんなことだって、諦めるべきじゃないんだよ」

「でも諦めるってことを学ばないことには、気持ちに折り合いをつ

けられないものですよ。
貴方だって、そういうのはもうお分かりのはず。お父上様やお母上様のことを、貴方だってちゃんと諦めているでしょう。マリーシアのことにしたって」

僕は苦い顔で頭を振った。

「分かってるさ。君に言われるまでもなく、マリーシアがオーウェル公子の魔術師なのでは単純に側に近づくことさえ難しいだろうし、それができたところで性悪公子を相手に神経をすり減らすはめになるだろう。
だいたいそれ以前の問題として、僕がマリーシア目当てでいることを、兄さんに読まれてしまって……、怖い顔して諦めろって睨まれたんだ。マリーシアは王子の女性だから、馬鹿なことをしてアディンセル家の立場を悪くするつもりかって。厳命だって言われたよ。もう八方塞がりさ」

「厳命ですか、それは……閣下が貴方にそんな言い方をされるってことは、よっぽどってことでしょうねえ」

「カイト、僕だってそれは分かっているんだ。この問題が意外にもとても重大で、僕にはもう、諦めるしか選択肢がないってことは」

カイトは理解するように親身になって何度か頷いた。

「ああ、どうして世の中って、こう上手くいかないんだろうね」

僕は理由の分からない居心地悪さを感じて、息を吐き出しながら言った。

「マリーシアの身分じゃ、どう考えても王妃になんかなれっこないから、どんなにフレデリック様に気に入られていたってお妾になる

のが関の山なんだ。フレデリック様はそういうのを囲うタイプには見えなかったけど、殿下御自身が母方の血統に問題があるから、彼は好きな女性を妻にすることは認められないだろう。国内基盤を固める必要もあるだろうし、お妃はまず確実に有力公爵家の姫君たちの中から選ばれると思う」

「ふむ」

「僕ならマリーシアをお嫁さんにできるのに……」

「それは……つらいところですね。お話をお聞きしても、俺には何とも妙案が思いつかないのですが、それでも、貴方が本当に彼女をお好きなら、ずっと心の中に秘めていらっしゃればいい。恋は叶わないからこそ美しいとも言います。そういう生き方もきっと悪くない」

「諦めろってことか？」

「諦めるのとは少し違います」

「……タティを捨てる気かって言わないのか？」

僕が問うと、カイトは頷いた。

「だって貴方はたぶん、タティを捨てやしないでしょう。結婚するかどうかは分かりませんが、そういうことのできない方だと思ってますよ」

「……僕は、自分の正体が分からないよ。自分では、もっとましな男だと思っていたんだ。良識的で誠実で、他人を思いやれる感受性、親切な自分というものを頭から信じていた。

兄さんみたいに遊んだりしないで、一人の女性だけを一生大事にしようって子供の頃から思っていたんだ。聖なる父と良心に恥じない生き方をしようと思っていた。それなのに……」

そして僕は再びすぐ横にいるカイトを見た。とても情けなくていたたまれない気持ちで。

この時点でやっと僕は、カイトに話の内容をすり替えられて、誘導されていたことに気がついたからだ。カイトの境遇の話が、いつの間にかまたしてもマリーシアの話にすり替わっていたのだ。誰にでも土足で踏み込まれたくない領域というものがあり、僕がシェアのことを誰にも秘密であるように、僕はカイトにとってはこれがその一つなのだとようやく理解した。

でもまた意図もあっさり扱われたことには僕はとても遺憾な気持ちでもあった。自分の単純さ加減に少しばかり傷つきながら、頭を振って彼に言った。

「君ならどうする？」

「ん、俺ですか？」

「そう。君が僕の立場なら、どうするだろう。やっぱり手の届きそうにないマリーシアのことは諦めて、タティと結婚するか……それとも別の考えがあるなら聞かせて欲しい」

「んー」

カイトは腕組みして少し考えた後、ふと僕に笑った。

「俺ならどっちも欲しいかな？」

僕は不満を訴えた。

「それができるなら僕だってそうしてるよ。世間がそれを許して、マリーシアもタティも機嫌よくしていてくれるなら僕だってそうしたいさ……。

でも実際にはそんなわけにはいかないだろう、二人の女性に調子のいいことを言うなんて、それは相手のことを不真面目にしか考えてない女たらしのすることだ。僕は現実的な意見を求めているんだ、脳内ハーレム在住の男の意見じゃなくて」

「それなら答えは出ているでしょう、マリーシアは貴方のものにはなりません。マリーシアは王子様に夢中で、王子様もマリーシアが恋しいと証言されている以上入り込む隙がない上に、閣下には禁止命令を施行されちゃったんでしょ。逆らったら、怒られちゃいますよ」

「分かってるよ、そんなこと。兄さんは二十歳にもなる僕の恋路に口を挿むとは、本当につくづく鬱陶しい性格だと思うけど、彼が言いたいことは分かっているつもりだ。

でも僕はマリーシアに運命を感じたんだ、タティというものがありながら、マリーシアと出会うことがずっと昔から決まっていたことのように感じたんだ。

彼女こそが僕の運命の人なんだと思ったんだ。こんな言い方はおかしいって思われるかもしれないけど、僕は彼女のことをずっと前から知っている気がしたんだよ。なんて言うか、すべてがとても偶然とは思えなかった。僕はあの夜、確かにあの場所で、見えない力が働いているように感じたんだ」

「じゃあ、そこまでマリーシアを想っているなら、タティを解放してあげたらどうです？

アレックス様がそうやって延々マリーシアを想っているのを、間近で見せられ続けるのはさすがにつらいでしょう」

カイトの言い分を、僕は否定した。

「いや、それはできないよ、タティは……僕の物なんだし……、タティだって僕の傍にいたいって言ってるんだから手放す理由は何もないだろう？

それに手放したらこの領内の誰もが後ろ指をさすよ、彼女が結婚前に傷物にされたことを知らない人間がいない状態なんだ、放り出せるわけない。タティの性格からいってそんなのまず耐えられないからね。そんな可哀想なことはできない」

「んー、じゃあ、しばらく両方を貴方の脳内ハーレムに移住させてですね」
「カイト……、その発想は幾ら何でもないよ。あんまり非現実的すぎる。それに惨めだよ。もうちょっと真面目に考えてくれ」
「惨めって……、ぐすん、ぐすん」

第89話　訪問者

「失礼します」

そこへ、ほとんどノックと同時に足早に室内に滑り込んで来た者がいた。

紅茶にたっぷりとミルクを注いだような色合いの長い髪を背中に揺らした、十八歳の美少女秘書官だった。

甘い香水の香りがして、彼女の存在はいつも僕に対応を困らせた。

年下の女なんていうものは、僕にしてみれば何を考えているか分からない、言語さえ異なる外国人にも等しいものだったのだ。女の人には丁寧に接するのが紳士というもの、そのことさえきちんと遵守していれば、間違いはないだろうと思うが、もし変なことを言って機嫌を損ねさせたらどうしようとか、不用意に泣かせたらどうしようとか、そういう不安が常に頭の中にあって落ち着かなかった。

ロビン相手にこれでは、もしマリーシアと話ができる立場にあったとしても、僕はきっと何を話したらいいか分からないだろうという現実に気づかされる。

ロビンの気配は高貴だった。その日、彼女はまるで夜会の夜にフレデリック王子が纏っていたのと同じような色の服装をしていた。思い出してみると、彼女はいつも大抵そうだった。只の偶然なのかもしれなかったが、彼女はよくそういう色の服を好んで着ていた。

まだ少し夜の闇が残る黎明の青い上着とスカート。耳には薔薇の花を模った金のピアス、膝丈のスカートの裾から覗く白いレース、可愛いブーツにも薔薇、そして香水の香りはいつも決まってオールドローズ――、薔薇の紋章を掲げる王家に忠誠を誓う者ならば彼に心酔していたとしても不思議はないが、関心を持って見てみると、何だかやたらとあの若い王子を連想させる服装ではあった。

薔薇の夜会で僕らを振りまわした挙句が、実は兄さんに許可を貰っ

て早々に伯爵邸に帰っていたなんて顛末をふと思い出した。
何故それを僕に報告しないんだと叱ったら、彼女の言い草はこうだった。

「少しは心配してくださると思ったのに……」

心配していたから探したんだと僕は思ったが、ロビンの雰囲気がそれを押しとどめさせた。
彼女は確かに凛としていて、少女ながら、男に軽く扱われることを許さないような気品があり、しかもそのときはどういうわけか僕に心底がっかりしたような顔をして僕を見上げていたのだ。
どうして僕が君にがっかりされなくちゃならないんだと、僕は心の中でまた思った。ロビンが僕に何を期待していたのか知らないが、扱いづらい娘だというカイトの評価は非常に的を射ていた。何しろ年下の癖にどうにもお高くとまっている感じがして、僕に取り入って来ようとしないので、僕としてもどう接していいかが未だに分らない、少々厄介な存在というのが本音だった。
しかしロビンは彼女を見た人間が異口同音に美人だと評するだけのことはあって、その場にいるだけで何かと人目を惹く人気者ではあったのだ。それがどれほどの威力かと言えば、彼女はあまり愛嬌を振りまく性格でないにも係わらず僕の執務関係の人間の受けがとてもよく、ここではいまやアイドルのような扱いとなっていた。
タティが僕の妻になるかもしれないことについて、気に食わないだ何だとボロクソに言っているような連中さえ、ロビンのことは素直に称賛していた。

「どうしたんですロビンちゃん?」

ロビンをちやほやする男の筆頭として、カイトが挙げられた。
ロビンが僕の側近として着任した当初や、恐らく年末の夜会の頃ま

ではカイトがロビンをこれほど気にすることや、ましてやちやほやすることはなかったように思うのだが、どうしたことか近頃では、若い女性と話をするだけでも喜んでいる中年男もさながらの態度が目に余った。

カイトが女に親切なのはいつものことだったが、しかしこれほど過剰に特別扱いすることも珍しいので、僕はカイトの好きな女というのは、このロビンのことだったのではないかと思っていた。

本来おしゃべりな彼がそれをいつまでも僕に言わない理由も、ロビンのほうではまるでその気がないということが、分かり易いほどに分かる態度しか取らないから、とても言い出せないでいるということなのだろう。何しろ、見込みのない恋をひけらかすことほど惨めなこともないものだ。マリーシアのことで、僕はその惨めさを日々味わっていた。

カイトが非常に親切に彼女に問いかけると、ロビンは困った顔をして小さくかぶりを振った。僕に用があるからここへ来たのに、カイトがしゃしゃり出てきて迷惑がっていると言っていい態度だった。

「あの、待合室のほうに、アレックス様にお会いしたいという人がいらしているんです」

「ふむ、お会いしたい人？　こんな吹雪の中を、何事でしょうね？」

ロビンの困惑をどうにか酌み取りたかったのだろうが、カイトの声色がますます優しくなったのが、何とも現金なものだと思いながら、僕はその様子を見つめていた。

ロビンはカイトの態度になおさら困惑の度合いを深めながら、視線をカイトから僕に移し、それから何だか恨めしそうな顔をして僕を見た。

僕は、ロビンのことは生憎と何とも思っていないのだが、女の人に潤んだ瞳でみつめられるということに耐性のない僕は、その何とも魅力的な態度に少々動じた。確かに彼女はとても端整なのだ。視界

に入れば、思わず視線をとめずにはいられないほどに。これで髪の色がもし金色だったなら、恐らく僕のところに配置される以前に一通り兄さんの餌食にされていたことを断言できるほどの大変な美人だった。

もしかすると、ルイーズにも負けていないんじゃないかと思われるほどの美貌なのだが、その上に彼女には少女特有のあどけなさや幼さがあった。

それで僕は、ロビンのサファイアのような瞳にふと吸い込まれそうになったが、たぶん横でカイトが妬ましい顔をして僕を見ているんだろうなと思って、急いで我に返った。

確かにロビンは可愛らしいのだが、僕はそれ以上にカイトには幸せになって貰いたいと思っているから、もし彼がロビンのことを好きだということなら、上手くいかせてあげたいと思う気持ちのほうが強かったのだ。

ロビンはカイトのことをあまりそういうふうには思っていないのかもしれないが、彼がどんなにいい奴で、信頼のおける、健気で、何と言うか愛おしい男なのかということを知れば、きっとカイトに対する今のような中年親父を見るような誤解を改めてくれることだろう。

カイトはそれまでの酷すぎる人生を思ったら、このくらいの美人をお嫁さんに貰う幸運に恵まれてもいいと僕は思うし、二人が相思相愛になってくれたら、僕は何としてでも兄さんを説得して、カイトの政略結婚に関する問題くらいは解決してあげようと思ったのだ。

ところが彼女は僕が考えていたことなど意に介さぬと言わんばかりに、やがてこう言って僕を一気に顔面蒼白にさせた。

「アレックス様の子供を妊娠したって、だからどうしても会わせて欲しいってお話なのですけれど、それ……どういうことなんですか？」

第９０話　冬季前夜（１）

ロビンがカイトに説明を求めていた。

「あの、どういうことなんですか？　どういうことなんですかっ？」

「いやあ、どういうことなんでしょうねえ……、なにぶん俺にもさっぱりでして」

「つまりアレックス様はあの女性と、そういう……いけないことを……、したっていうことなんでしょうか……」

「ぎえーっ、いえいえいえっ、そんなことはありませんよ、そんなことは断じてありません。それにいけないことって何です？　いけないこと、いけないこと？　はてさて俺にはとんと思いつかないな。ロビンちゃん、そもそもそれは聞き間違えっていうことはないんですか？」

「いいえ、こんなことを聞き間違えるはずはありません。私だって……」

「ああ、そうですよねえ……」

そして未熟な僕は心を込めて真っ先に神様に祈っていた。

頭が混乱してまったく思考が纏まらないその頭で、必死に許しを乞い、そんなつもりじゃなかった、そういうことを……。

冬の嵐、そう呼ぶに相応しい出来事だと、随分後になってから僕はこの午後のことをそんなふうに考えたものだった。

行動には常に責任がともなう。特にこの種のことには重い重い責任が。僕はこの日、そのことを身をもって、ほとんど激痛を持って思い知らされることになったのだが、そんな簡単なことが、そのときの僕には意外にも理解できていなかったのだ。

僕は若く、ひたすらに無責任でもあり、たとえ相手が妻にしようと考えている女性でなくても性交を行えば当然の帰結として起こりう

るこのような事態のことを、生物学的に当然のことと分かっているのにも係わらずまず想定していなかった。いや、想定できないわけではないのだが、まさか我が身に起こるなどとは、ゆめ思ってもいなかったのだ。

顔をあげると、たぶんややこしい展開になるだろうと判断して、カイトが予めロビンに執務室を出て行くように言った直後だった。

「あの女性は、きっと嘘を言っているんだわ。そうに決まってる。だってアレックス様に限ってそんな、そんなことっ」

好奇心なのか社会正義のつもりなのか、自分も是非居残って、議論に参加したいという意思を表明するロビンのことを、少々てこずりながらカイトが部屋から追い出したのだ。

「酷いわカイトさん、お願いよ。私だってもう子供ではないのよ」

「すみません、でも何でもないんですよ。これは貴方が心配されるようなことじゃない。

こういうことはなんと言いますか……、そう、たまにいるんです、アレックス様をものにしようって浅はかな女がね。きっと何か勘違いをしているんだろうとは思うのですが、なにぶん金持ちの独身貴族には宿命なんでしょうね。

そうそう貴方はお部屋にでも戻って、紅茶でも飲んでいらしたらいかがです？　いえ大丈夫、お気遣いをどうも、しかし夜にはすべて解決していますから。ええ」

その扉を閉ざした後で、さすがのカイトも少し余裕のない表情で僕を振り返った。彼は頭を掻きながら、参ったというような素振りを隠さなかった。場の空気は緊迫し、僕にはもはやまったく余裕がなかった。

「いやあ、まったくこんなときに限ってロビンちゃんが応対に出ちまうとはね。間が悪いにもほどがある。
取り敢えず当番の騎士に頼んで部屋に連れて行かせましたけど、こりゃもう無茶苦茶なことになっちまうところだ。
いやはや、それにしても子供って、本当ですかね……」
「……」

僕は真っ青になっていて、言葉が声にならなかった。
別の人間がエステルを執務室まで連れて来るのを待っている間、僕はゆったりと机につき、兄さんみたいに毅然としているつもりだったのだ。だけど僕はどうしても兄さんのようにはできなかった。どんなに大丈夫だと自分に言い聞かせようとも、指先や、それに全身の震えが止まらなくて、こんなことで震えが止まらない自分自身に対して更に動揺し、幻滅して、とにかくまったく冷静な気持ちを保てなかった。

「大丈夫ですかアレックス様。ぶるっちまってるそのお気持ちは分かりますが、あんまり態度にゃ出さないようにしてくださいよ。でないとつけ込まれる」
「……」
「んー、まあその何つうか」
「たった一回で……、そんな馬鹿な……。
カイト、僕はどうすればいい……、こっ、子供だなんて……」
「いえ、貴方の子供かどうかは分からないですよ」

僕が呟いていた弱音に被せるように、カイトはいきなりそう言った。

「えっ？」

それで驚いて僕が顔を上げると、カイトはともすればまったくふて

ぶてしいとさえ取れるような態度で、思ってもみないことを僕に進言した。

「どうぞ冷静になってください。これは単にエステル嬢が妊娠したというだけの話なので……アレックス様は、彼女の妊娠とは何等無関係かもしれない。無関係かもしれないのに、貴方がご自分で落ち度があるようなことを認めちまってはいけません。それはとても奇妙なことでしょう。違うかもしれないのに。

これは飽くまでもエステル嬢が妊娠したというだけのことで、貴方の子供と確定した話じゃないんです。

それなのに最初からそれを認めるようなことを言っては駄目です。冷静に。数学の数式のことでも頭に思い浮かべてください。経済論でも、何でもいいですが、とにかく世界が終わったようなお顔をしていてはつけ込まれます」

「でもカイト、僕はエステルと……」

「それでもです。目に見える証拠がない以上、貴方の子供ではない可能性を信じてください」

カイトはそう言って、しばらく黙って僕のことを見ていたようだったが、僕はどうにもカイトの言うことが正義に反していて、しかも薄情に思えて飲み込めずにいた。

僕が困り果てていると、彼は静かに言葉を続けた。

「これはね、こういうのは、世間で言うところの所謂強請りって言うんです」

「強請り……！？」

「ええ」

第９１話　冬季前夜（２）

「エステルが、僕を強請りに来たって言うのか？」
「そうです」

カイトが何を言い出すのかと思い、僕はぽかんと口を開けた。戸惑って彼を窺うと、カイトは特に躊躇うこともなく頷いた。誰かを中傷したい意図は彼の表情にはなかったが、僕はカイトの言いがかりのような懸念にはさすがに同意できかねた。僕は憶測で他人を悪く言いたくなかったのだ。エステルがそんなことをするとは思いたくなかった。そしてカイトの言うことはあまりに誠意に欠けていた。

「アレックス様は、お気づきになりませんでしたか？　彼女を見ていて」
「気づかなかったかって、何？」
「まあいろいろありますけど、強いて挙げるなら貪欲さ」
「僕は想像で人を悪く言うのは好きじゃない……」

僕は彼の言うことが分からずに首を左右に振った。
するとカイトはそうですかと言って、彼の考えを淡々と話し始めた。

「エステル嬢ってのはね、あれはまずアレックス様に恋愛感情は持ってないです。まあその辺は貴方としてもお分かりだったと思いますが。もし彼女が貴方を愛しているなら、あの夜貴方と関係を持った後、まったく音沙汰がないなんていうことはまずあり得ないです。控えめな女なら男からの連絡をいじらしく待つなんてこともあるでしょうが、あれはそういうタイプじゃない。ものにしたいと思った男を、逃さないでしょう」

それで僕は、エステルに最初に出会ったとき、いきなりキスされたことを思い出した。思えばあれが僕のファーストキスだったのだが、見知らぬ男にいきなりそんなことをするなんて、確かに彼女は僕が知っている他の女性たちならば、さすがにやりそうもないことを僕にしたのだった。

「貴方より閣下のほうが上等の男と見て態度を変えた、そういうこともありましたね」

思い出したくもない酷い仕打ちと苦い記憶を思い出し、僕は眉を寄せた。

カイトは相変わらず僕を注意深くみつめながら、冷静に続けた。

「ですから本日の要件とやらも、貴方が恋しくて来たわけじゃないでしょう。子供が出来たので金や生活保障を寄こせと、十中八九こういう話なのだと思います」

「で、でも……、それって強請りになるのか？　通常のことじゃないのか？」

僕が言うと、カイトは答え難そうな、何とも曖昧な表情をした。

「いえ、まあ、良識で考えればそうです。それが人として正しいですよね。

でもよく考えてみてください。それは貴方の子供ではないかもしれないでしょう。一緒に暮らしているのでもないし、交際して、愛しあっているのでもない。何処にも証拠がないんですよ。エステル嬢が嘘を言っているのかもしれない。妊娠しているということさえ嘘かもしれない。彼女が身ごもっているのは他の男の子供かも。それなのに貴方が補償を与えるのはおかしな話です。

しかし寝たのは事実だから、百歩譲って、彼女の勇気ある行動も分からない話じゃない。が、その場合、やはり本来抗議や要求を向けるべきは閣下であって貴方ではないんですよ。子供が出来たと言ってその支援なり補償なりを要請するべきは、定期的に肉体関係を持ち交際相手であった伯爵様だ。

それなのに、交際相手でなかった、酔った勢いで一晩寝ただけの貴方のところに来たというのが、彼女の人間性と言いますか……、誠意によって動いているのではないという姿勢が見えるのです。

彼女は間違いなく貴方の人のよさにつけ込もうと考えていると言っていいでしょう」

「……でもそれは、兄さんと別れた後に、僕と寝たからじゃないか……？」

「だとしても、どの面下げて来られますか？　交際相手の弟のところへ。俺には、鋼の神経を持っているとしか思えない。

そうそう、彼女は伯爵様から手切れ金を貰っていることを、あの夜自分で認めていたでしょう」

「ああ、うん」

「ということは、既に金銭面では困っていないはずなので、彼女の背景に生活苦という悲劇はないということを覚えておいてください。無駄に同情をしないように。はっきり言って俺より金を持ってます」

「確かに……」

僕は話を聞きながら、カイトは随分冷たいことを言うものだと思ったが、やがて交渉のために、動揺している僕に強制的に理論武装をさせているのだと気がついた。彼はもう、僕の側近としての仕事に入っていたのだ。人間は、直前に見聞きしたものを引用しやすい。やっぱり彼は頭がいいのだと思った。少なくとも頭の回転は抜群だった。

それともカイトの家族を殺された話を聞いて、主人であればこそ力強く彼の支えとなるべきところを、みっともなく泣いたのが余程頼

りなかったせいだろうかとぼんやり思った。

「俺の考えではね、あのてあいは、簡単にいい思いをしたのが忘れられないんです」

否定とも肯定ともとれる態度で、考え深げに彼は言った。

「閣下も罪なことをなさるもので、安いドレスを着てパーティーに潜り込むのが精一杯の平民女を、ある日突然上流貴族の娘並みの待遇で扱うもんだから、こういうことになっちまうんですよ。彼女のこれまでの行状から言って、はっきり言って誰の子供か分かったものじゃないんですが、妊娠という重大事由を言い訳に、またいい思いができると踏んで近寄って来たんでしょう。しかし一度手切れ金を渡された以上、そうそう閣下にゃ近づけないことは彼女も重々理解しているってわけです。だからより容易に陥落できるであろう貴方のところへ来た、この線が妥当です。繰り返しますが愛情からではない。目的は厳然たる物欲。そして更なる金です」

「……」

「まあ何にせよ、アレックス様じゃきっと彼女に押し切られる気がしますから、話のほうは基本俺がするのでいいですね?」

僕は情けない顔のまま頷いた。

「では、俺はこれからエステル嬢と交渉をするにあたって、この件に関するアレックス様のご意向を聞いておく必要があります。俺はそれに従って話を進めますが、貴方はこの話をまったく歓迎していないというスタンスで……いいんですよね?」

僕は胸の中に湧き上がってくる泣き出したい気持ちを堪えながら、

再び頷いた。

「了解しました」

カイトは執務机に手を置き、身を屈ませて不安な僕に視線を合わせた。

「お任せください」

第９２話　姦淫問答（１）

僕は自分の私室に他人を入れることが好きではなく、本当のことを言うと召使いたちが出入りしていることさえ気に障ることがあるほどだった。子供の頃から彼らなしの生活は送ったことがなかったので、いなくなる不便は想像するのも難しかったが。

でも執務室に関しては、いろんな人間が出入りすることを諦めていた。だからここには本当に大事な本は置かなかったし、大事な物を持ち込むこともなかった。

高価で品はいいが大して思い入れのない調度品と、部下や来客たちが若い僕を甘く見ないようにわざわざ重厚な装丁の外国語の辞典なんかを、ふた抱えもあるほどの本棚に詰め込んで並べていた。僕は自分に兄さんのような威厳がないことを知っていたからだ。不逞の来客を脅かしてでもこちらの言うことを聞かせる迫力というものを持たなかった。だからこれは言わば武装だった。

そして高い教養や知性を重んじる者ほど、こうしたものに価値と威力を見出す傾向があった。家柄とそれに付属する権力だけでは、僕が若いということは補い切れない欠点となってしまう場合は多かったのだが、けれども知性があるということは、人間としての地位の高さの証明となってくれるものなのだ。

そしてこの国の貴族社会では、それが共通の価値観だった。貴族の男子が互いの無教養を晒すべく足を引っ張り合うような場面が見受けられることも、教養というものが、いかにその人間の価値を左右するものかということを物語っているだろう。ここでは知性を磨いた者こそが、大いに尊敬されるものなのだ。賞賛され、喝采を送られ、女性たちだって頭のいい男に惚れるものだ。馬鹿な男では到底世の中を渡っていかれないから、彼女たちは男の教養の高さについて敏感なはずだった。

だから僕はエステルに確かいろんな話をして、僕が頭がいいことを

分からせようとしたことがあったはずなのだが、何故か退屈な反応をされて泡を食った記憶が甦った。タティに話したときはすごく喜んでくれていた話のほとんどが、エステルには通用しなかったのだ。そのとき僕は単に興味が違うのだろうと解釈をした。確かに女性というものは、あまり虫等の生き物を好まないものだからだ。大陸史は愚か、サンセリウス史にさえまるで見識がないことには驚いたけれども。それからしばらくして、タティは僕のことを好きだから、どんな話でもああして喜んで聞いてくれていたのかと、解釈することもあった。

でも今から思うとそれは、根本的なところで違っていたのではないかと思い始めていた。

つまりエステルは僕が他者と係り合いを持つにあたって大前提としているこの共通の価値観と思っているものを、最初からまったく持ち合わせていなかったのだ……。

彼女は男の知性なんかには、たぶんまったく興味なんてなかったのだ。彼女はそんなところに魅力なんか、全然感じない人種だったのだろう。

だからこそアディンセル家の居城内執務室、所領六州における行政活動の本拠地であり、こうして難しい本が意味もなく壁を占めている部屋にいてなお、まったく動じることも媚びることもなく、自らの主張を展開できているのだ。

ロビンを部屋から追い出した後、間もなく別の文官によって執務室に連れて来られたエステルの要求とは、先刻のカイトの猜疑心に満ちた失礼とも思える予想よりも遥かに高かった。

そのあまりの内容に僕は硬直をしたが、それを聞いたカイトが、僕の執務机の左側に立ったまま失笑している姿が見えた。

「ですから、結婚してください！　アレックス様の赤ちゃんが出来たのよ！」

ああ、きっとこの世界のいかなる秘境を生涯をかけて探索したところで、これほど容易に相手を恐怖に陥れる呪いの文言はみつからないだろう。これは恐らく蛮族の秘宝の中に眠る怪しく魅力的な太古の呪いに匹敵した。そして僕はその恐るべき呪いに実際にやられてしまったごとく、完全に血の気を失っていた。

室内に通されたエステルは、少々厚かましいと言ってもいいような強い態度で最初からその一点張りで、僕は妊娠させられたと言って被害を訴え怒っている女性に、結婚の要求を突きつけられていたのだ。

「だから、責任を取ってください。だって貴方の子供なのよ！　私のお腹の中に、貴方の赤ちゃんがいるのよ！　だから責任取って、わたしと結婚してください！」

僕はもはや頭の中が真っ白になって、エステルに何を言えばいいのかということを、考えることさえもできなくなってしまっていた。よりにもよって何とも思っていないどころか、もう縁が切れたとすら考えていた女の腹に自分の子供が宿ってしまったというこの酷い状況によって、日々の細々した悩み事も、タティを傷つけてしまったことや、マリーシアへの恋心さえもすべて吹き飛んでしまったそのときの僕は、たぶん見るも無惨な抜け殻だったことだろう。

たとえ恋敵が絵に描いたような白馬の王子様だろうと、それでも心の中に淡く思い描いていたマリーシアとの様々の幸福な場面が、二度と修復不能な瓦礫と化して、音を立てて崩れ落ちていくのをそのときの僕は感じていた。

まともに話をすることさえもできずに、執務机についたまま呆然としている僕に代わって、カイトが妊娠した女性に対して発するには少々辛辣すぎる幾つかの質問をしていた。

例えば日頃の素行とか、経験人数、それは直前まで交際していた兄さんとの子供ではないかとか、僕と関係を持った前後に他の男と寝

ているんじゃないのかとか、その類のことだ。

「アレックス様の子供だわ！」

エステルはとうとう気色ばんでカイトに抗議した。

「どうしてそんな失礼なことをあんたに聞かれなくちゃならないって言うの？
わたしがアレックス様と寝たのは確かだわ、それはあんただって知っているでしょうっ！？
わたしはアレックス様と寝てから最後、誰ともしてないんだからこれは間違いなくアレックス様の子供なのよっ！
それなのに、どうしてわたしの言うことを信じてくれないのよっ！」

カイトによって辛うじて僕に施された理論武装は、エステルのその生々しくも強烈な証言によって呆気なく崩壊し、僕は自責の念に押し潰されそうになって両手で顔を覆った。
もう逃れようがなかったのだ。もうどうしても逃れようがない。
僕が彼女を妊娠させてしまった！

第９３話　姦淫問答（２）

もはや頭も心も機能しない僕に代わって、カイトが引き続き冷静にエステルに応対していた。
彼は心臓が縮むようなエステルの訴えを、最初からまともに聞いている様子はなく、エステルが話している間中、カイトの顔には苦笑と嘆息が入り混じっていた。

「そうは言うけどね、あんたもご承知の通り、男にゃそんなもんを確認する手段はないんだよ。だから、女の言う言葉を鵜呑みにするしかないってわけだ」

落ち着き払った様子で、カイトは言った。

「普通なら、関係を持った女の言葉を信じるのが男ってもんだろうよ。それが人間ってもんだし、誠意ってもんだ。自分の子種を身ごもった女には、なおさら愛着も湧くってもんだろう。
だけどアレックス様とおたくとの間にゃ、信頼関係もクソもない。恋人関係ですらない。あんたのやったことっていうのは、言うなればほとんど行きずりの男に身体を許したのと同義だろう。それを、そんなほいほい男に身体を許すような品の悪い女の言葉をだ、信用して、ましてや責任を取るなんてことを、この方はそう気軽におできになる立場じゃないんだ。
だいたいからしてそんな言葉を信じる男が何処にいる。あんたの生活を把握しているわけでもない、行きずり女の言葉の何を信じられるって言うんだ。
これにはあんただって同意見のはずだ、ある日一度寝ただけの男が赤ん坊を抱えて目の前に現れて、二人の子供だと言ったらどうするね。普通受け入れないだろう。真っ先に頭がおかしいか、詐欺を疑

うだろう。
だから悪いがおたくの言うことをこちらが信用するということはない。
まして閣下と別れてすぐその弟と寝るなんて、俺は正直言って、最初からおたくの倫理観や神経を疑っていたしな」

カイトは飽くまで静かな語り口でそう言い、僕の執務机の前にいるエステルを見下ろした。
するとエステルは当然のことながらカイトの言ったことに抗議したが、カイトは彼女にはっきり目をやっていながらそれにはまったく応じなかった。目の前で彼女を見ていながら、エステルを無視しているのだ。ときどき薄く笑って、まるでエステルを馬鹿にしている素振りもあった。それによってエステルの頬が怒りに紅潮し始めてもお構いなしだった。
僕は日頃カイトのことをなんと神経の太い、図々しい奴だろうかと思っていたものだが、このときほどこの神経の座った部下を持っていることを、心強く感じたことはなかった。
やがてカイトは憤然と怒りの表情のままでいるエステルに対して後方の出口を指さし、先ほどからの彼女の剣幕を恐れるでもなく、帰るように指示した。

「あんた、まさか妊婦をこのまま追い返すつもり！？」

エステルが怒鳴っても、カイトはその方針を変えなかった。彼は極めて事務的な立ち振る舞いで、彼女に重ねて執務室からの退去を促した。

「その通り。言いたいことはだいたい吐き出しただろ。そろそろ気も済んだだろうから、暗くならないうちにどうぞお引き取りを」
「あんたねえ、人を馬鹿にするのも」

「こっちの考えとあんたの考えは相容れない。平行線だってことが、あんたにも分かっただろう。しかもあんたの言い分は、常識的に言って到底通りゃしない代物だ。どう考えてもアレックス様のところに怒鳴り込んで来るなんてのはお門違いもいいところなんだからな。そもそもおたくがここに通されたのだって、以前あんたが閣下の女だったってコネが残ってなきゃ無理なことなんだが、今後は二度とこの方に面会できないように手配するから覚えておけ。とにかくアレックス様には、おたくの私用につきあっている時間なんかないんだ。

妊娠したとか言ってな、この方を引っ掻きまわすのはやめてくれ。本当に妊娠したってんなら、そういう苦情は伯爵様に言え」

「何よっ、そんなのって酷いじゃない！」

「どっちが酷いんだよ」

「恨むわよ！」

「自分の行動を省みろよ」

「赤ちゃんがいるのよっ！」

「おやおや、やっとお帰りですか。よかった。そいじゃ足もとにお気をつけて」

カイトの対応はしなやかで嫌味に満ちており、僕は心底彼の社交性を見習いたいと思った。

そしてカイトは皮肉な笑顔でまた出口を示したのだが、しかしカイトにあしらわれても、エステルは言われるまま立ち去るようなことをしなかった。

彼女は対峙するカイトの肩にさえ身長が届かないくらいなのに、怒りに身体を震わせ、まるで臆することもなく彼を睨みあげた。

「……何がっ、偉そうに。あんたの話なら聞いたことがあるわよ。アレックス様に取り入ることに成功している、下品な男がいるって、若い貴族たちが噂している……それはきっとあんたのことね。名前

までは知りませんけど。
わたしは平民だけど、どこそこの貴族のパーティーに紛れ込むくらいのことはできるのよ。
だから聞いたことがあるけど、あんただって本当はこっちのお仲間なんでしょ？　同じ平民のくせに、偉そうな口をきかないで欲しいわ。
それに知ってるのよ、あんたがどっかの未亡人をたらし込んで出世したんだって話。ギルバート様に口を利けるような権力のある貴婦人の愛人になって……、あんたの出世を妬んでいる人から直に聞いたのよ。あんたはそうやって男娼のような真似をして、それでその未亡人に口利きをして貰って、アディンセル家のアレックス様の側近なんて立場を手に入れたんだってね。
あんたはわたしのことをとやかく言えないくらい汚い男じゃない。
それを、わたしを非難するなんて、おかしな話だと思わない？　お仲間じゃないの」

エステルがいきなり何を言い出したのかが分からないし、別にエステルの言うことが本当だとは思わなかったが、僕は何となく気になって僕の横に立っているカイトを見た。
するとカイトがそれまでの何処か飄々とした態度とは打って変わった険しい顔をしてエステルを睨んでいたので、僕は慌てて顔を元に戻した。
とても問いただせるような状態じゃないと思ったのだ。確かにカイトは真面目ぶったお坊ちゃん風の服装や髪形をしていても、その通りの人物には見えないところがあったのだが、このときはまるで世間の裏側までを知り尽くした、俗悪な人物であるようにさえ思えた。

「なるほど、いい根性をしているな。俺をも脅迫すると言うわけか」

苛々したような仕草と、呻くような低い声でカイトは言った。

「それならこっちとしても遠慮はいらないというわけだ。女だと思って優しく言い含めてやろうと思っていたのにな。
それを、言うに事欠いて人様を男娼呼ばわりとは……、まったくあんたにはつくづく驚かされる。そんな中傷をこの場に持ち出して来るとは、人間たる以上最低限備わっているべき品性ってやつがないのかね。何事にも意欲的なのは結構だが、女の本分を忘れるべきじゃないな。さもないと、痛い目にあう。
おとなしくしてりゃ手加減して貰えるお得な立場を自分から捨てるとは愚かとしか言い様がないが、それでこそあばずれと言うべきか。底なしの馬鹿だからこそ簡単に男と寝ちまうんだろうが、ほんとどうしようもないな、このあばずれ女」

カイトの豹変とも言うべき発言の粗暴さに僕は耳を疑ったが、カイトがまさかこんな反応をするとはエステルとしても思わなかったのだろう。彼女はびっくりしたように表情を強張らせ、それからか弱く泣き出した。
エステルは小柄だったし、そんなふうにうなだれる姿がいっそう小さく思えて、僕は思わず彼女のことを庇いたくなるくらい胸が痛んだ。
カイトは幾ら頭に来たからといって、さすがにあんまり酷いことを言い過ぎていた。それでは君は女にもてないはずだと、もう少しで言いたくなるほど口調も冷たかったのだ。
しかしカイトは特に反省の色もなく更にエステルに毒づいた。

「なんだ？　突然そんな傷ついた顔をして同情を買おうって作戦か？　そんな与太話を持ち出せば、俺がびびって遠慮するとでも思ったのか知らないが、俺は売られた喧嘩は買う主義だ。なめたことを言った以上、相応の罵声を浴びせられることくらいは覚悟するんだな。

だいだい俺はその態度も気に入らないんだよ。結婚してくださいお願いしますとでも頭を下げているならばともかくだ、来て早々怒鳴りつける、そして今度は泣き真似ときた。
これはどう考えたって、気の優しいこの方につけ込んでやろうって態度だよな。やることなすこと誠意のかけらもない。恐ろしい女だ。あんたそんなふざけた態度を一度だって伯爵様に取ったことなんかないだろう」

カイトは僕の執務机の横から離れ、エステルに歩み寄った。身体を屈め、怯えてうつむく彼女の顔を覗き込むなり更に脅かすような声を出した。

「自覚がないようだから教えてやる。いいかおたくは誰にでも股を開く淫乱で、快楽と虚飾に溺れる頭の弱いチンピラだ。
そんな女がこの俺を男娼だと？　ふざけやがって、自分がやっていることはまさに売春だってことが分からない安っぽい女風情が、責任を取れとはお笑いだ」

カイトはそう言い、彼女の顔の前でいきなり指を鳴らした。それで泣いているエステルはびくっとし、僕はその手慣れた挑発行動に舌を巻いた。

「おい、馬鹿が見え透いた泣き真似なんかするな。人と会話しているときは顔を上げろ。
こんなところまで堂々と強請りに来られる毛の生えた心臓を持っているくせに、ここでか弱い女のふりとは、あんたもよくやるな。
だがおたくは上手く化けたつもりなんだろうが、俺には最初から見えていたよ。あんたはこの上もなく下品な類の女だってな。
どんなにお嬢様然として装っていたって、残念なことに、分かる人間にはひと目で分かるもんだ。本物と、まがい物との違いがね。世

の中の男が、すべてアレックス様のようにうぶで純粋なわけじゃない。

少なくともこの俺を、猫なで声を出しゃころっといっちまうような間抜けと思って貰っては困るんだ。だからその姑息な泣き真似はよすんだな。それともアレックス様に対する嫌がらせのつもりなのか？」

第９４話　姦淫問答（３）

すると泣いているとばかり思っていたエステルが、いきなり顔を上げてカイトを怒鳴った。
驚いたことに、泣いていると思ったエステルは、実は泣いてなんかいなかったのだ。

「人がおとなしく聞いていればっ……、あんたね、わたしのいったい何処があばずれだって言うのよっ！」

エステルは叫んだ。

「わたしは一度だって男と簡単に寝たりしたことなんかないわよ、ちゃんと相手のことを見ているわ。だからあんたみたいなその他大勢のクズみたいな男となんか話だってしないくらいよ。結婚してもいいと思える相手とでなくちゃそんなことしない。これでも身持ちは堅いほうなんですから勝手なことを言わないでよ！
それに何ですって、売春婦ですって？　チンピラですって？　あんたはわたしのことなんか何にも知らないくせに、よく知りもしない女を掴まえていきなりあばずれ呼ばわりだなんて、そっちのほうが下品すぎて話にもならないわよ、この恥知らずっ！」

「何だと？」

「はん、馬鹿じゃないの。そうやって恐い声で脅したって無駄よ。あたしはあんたなんか怖くも何ともない。アレックス様の子供かもしれない赤ちゃんがお腹にいるのに、手下に過ぎないあんたがあたしに手をあげるなんて、できるわけがないことだもの。そのくらいのことは分かってるわ」

「……」

「ほら見なさい、頭の中じゃ本当はそうかもしれないと思っている

くせに、そうやってとぼけて、人のことを誠意がないとか言って悪者にしてさ！
あんたはとんだ食わせ者だわ。でも妊娠させられた女の立場にもなってみなさいよ、怒鳴りたくなるのも当然でしょっ！？　他でもないあたしがアレックス様の子供だって言ってるんじゃないの。あんた、奥さんは？　子供でも持ってるの？」

カイトは首を横に振った。
エステルは話にならないというようにカイトを鼻で笑った。

「だったらあんたに女の身体の何が分かるのよ。女のあたしが妊娠したって言ってるんだから、それを信じなさいよ。やることやっておいて逃げるなんて、それこそ人間に備わっているべき品性ってやつがないってことなんじゃないの？
それにわたしはアレックス様と話しているのであって、あんたみたいな下っ端となんか話してないのよ。あんたはあんな噂を立てられるくらい貴族仲間から馬鹿にされているみそっかすのくせに、もっと謙虚にしたらどうなのよ」

エステルはそう言うと、今度は逆に自分から堂々とカイトににじり寄って、彼を見上げた。

「あんた、男娼って言われたことがよっぽど気に入らないみたいだけど、でもカチンと来るということは、きっとあの話もある程度は本当のことなんでしょうね。
ところがそんな努力の甲斐もなく、周りは結局誰一人あんたのことなんて認めていないのね。それどころか姑息な手段で出世したことを見下されて、聞いてびっくり男娼呼ばわり！
あんたのポジションが、よく見えるお話だわね。あんたはいつも誰からも相手にされず、馬鹿にされて生きてきたんでしょうね。そし

てそれを唯一の理解者であるアレックス様に知られて、恥ずかしくてたまらずにぶち切れてるってわけなのね。偉そうなことを言ってても、本当はアレックス様のためじゃない、まったくの個人的な別件で、あんたは怒ってて……でもそのせいで全部ばれちゃったおバカさんってわけ！

あーあ、惨めな自分を知られないために、きっとこれまで一生懸命隠してきたんでしょうにね。あはっ、可哀想っ！　ざまあないわねっ！」

カイトが顔を歪めると、間髪置かずにエステルは続けた。

泥仕合のようなこの展開に、僕はすっかり唖然としていたが、そうする以外にもうどうすることもできなかったのだ。

「ねえ、せっかくだからわたしもあんたにいいこと教えてあげるわ。あんたってのはね、平民のくせにいきがってるからいけないのよ」

まるでカイトを言い含めるような、しかし嫌味のある口調でエステルは言った。

「貴族の皆さんも、平民なんかが偉そうにアレックス様にくっついて歩いてたらそりゃ面白くもないわよ。

だってアディンセル家のお城で働く平民なんて、ほとんど下働きの召使いなんでしょう。だったらどうしたって面白くないわ。本来なら自分の靴磨きをしているような身分の男が、アレックス様について威張って歩いてるんじゃやってられないでしょうよ。想像してみればすぐに分かることだわ。わたしだって、大事なお腹の子供の側近に、将来卑しい平民がつくなんて考えられないことだし。

あんた、貴族に混じって暮らしていたって、自分が惨めになるだけなんじゃないの？　平民なら平民らしく、もっと頭を低くして、卑屈になってさ、身の丈にあった暮らしをしなさいな。どうせあんた

なんかじゃ一生仲間になんか入れて貰えないんだから。あんたにはそれがお似合いだわ。

男のあんたには、誰かの愛人にはなれても、その女と結婚して出世するなんて方法はないんだしね。だから最初からそうやって分不相応に自分を高く売ろうなんて思わないことだわよ。あんたはくだらなくて価値のない人間って弁えなくちゃね」

「それだけ口が聞ければ上等だ」

多少傷ついたような顔で、カイトは言った。

「平民なのはお互い様なのに、あんたはよくもまあ自分を棚に上げてそこまで人を貶められるもんだ。呆れ果てる。よく口がまわることだけは褒めてやるが、あんただってそのことが理由で、痛い目にあってきたことだってあるだろうに……」

「お互い様じゃないわよ」

しかしエステルは胸を張った。

「わたしには、アレックス様の赤ちゃんがいるもの。だからわたしの人生は、これから劇的に変化するのよ。わたしは貴族になるの。わたしはこれからあんたや、わたしを馬鹿にした連中を見返してやるのよ」

「無理だね」

カイトは請け合った。

「平民女にゃこの方と結婚するなんてことはできない。あんたがどんな手管を使おうが、この方の赤ん坊を十人産もうが絶対に無理だ」

「どうしてよ！」

「アディンセル家は過去に王女が降嫁されたこともある家柄だから

だ。おたくが嫁ぐには、さすがに家格が高すぎるんだよ。男系ではないにしろ、この方は先祖を辿れば歴代国王や建国王に連なる。そんな家系に平民を入れるわけがない。そんなことが許可されるわけがない。

彼は機会が合えば王子の学友にだってなれる立場だ。年頃の王女がいれば、彼女と結婚することも夢の話ではないだろう。つまりそういうことだ」

「そんなこと関係ないわよ」

エステルはきっぱり言った。

「だってわたしはアレックス様の子供を妊娠しているんだもの。貴族になれるのよ」

「まだ分からないのか……」

カイトは息を吐いた。それからまた顔と声を険しくした。

「これだからあんたはあばずれだって言うんだよ。何にも分かっちゃいないくせに、何が貴族だ。

じゃあはっきり言ってやるが、あんたは絶望的なまでのど庶民で、生まれたときから厚遇されているお姫様連中と本気で張り合えると思っている身の程知らずの馬鹿娘、しかしそんな夢を見ている割には二十歳そこそこで女を使うってことを身につけちまってる可愛げのないあばずれな上に、救い様がないほど根性がひん曲がっているからまったくアレックス様にゃ相応しくないってことだよ。

結婚前に妊娠したなんて非常識なことをな、こうやって堂々と話している時点であんたは女として終わってるんだ。これは結婚前の女がする会話じゃないだろうが。どれほど恥ずかしい話をしているのか自覚がないようだが、こっちはいったい何処の飲み屋の商売女と話しているのかと錯覚するほどだ。身の程を知れ。このドブス。大

概にしろ」

「なっ、ドブスって何よっ、人を馬鹿にしてっ！　わたしが女だと思って、平民だと思って、こう言っているのが貴族のお嬢さんなら、同情のひとつもしたくせに……！

だけど幾ら偉そうにそんな御託を並べたところで、わたしがアレックス様と寝た事実は変わらないのよ。

だいたいね、平民女を日頃畜生も同然と扱ってるのはあんたたちでしょうっ！？

そしてアレックス様がわたしを妊娠させたのよっ！

そうよ、わたしをあばずれって言うなら、アレックス様はどうなの？　兄弟で同じ女を共有するほうがよっぽど神経を疑うわっ！」

第９５話　姦淫問答（４）

「確かにそれは……、あんたも痛いところを突いてくるもんだね」

カイトは苦笑した。

「さすがに伯爵家の方を手玉に取ろうとたくらむあばずれだけのことはある。これだけ言われて引き下がらないとはすごい度胸だ。尊敬するね。本当のところ、伯爵様すら初めての男ってわけじゃないんだろうに、おたくときたらあたかも純潔を奪われたと言わんばかり。いやはや、堪らんね」

「はん、何とでも言えばいいわ。この腐れ男娼。でもお生憎様。動かし難い事実として、わたしのお腹にはアレックス様の子供がいるのよ！」

エステルはそう言って、自分の下腹部にそっと手を添えた。それを見た僕はとうとう罪悪感に耐えかねて、嗚咽をあげそうになった。しかし構わずカイトは続けた。

「しつこい女だな。だから何を根拠に。腹の子供がアレックス様の子供である確かな証拠でもあるって言うなら話は別だが、そんなものが存在するわけもない。

どうせ財産狙い、地位狙い、それともあんたが誰かの間者で、この一連の問題がアレックス様やひいてはアディンセル家を陥れようという何某かの魂胆かもしれない可能性のある以上、こちらがおたくの馬鹿げた要求に応じることはない。今すぐ帰れ」

「責任を、取りなさいよっ！」

「責任？　どうして。誰の子供かも分からないのに恐ろしい言いがかりを言うもんだ」

「言いがかりじゃないわ、あんたも知っているじゃない、それを、それを何なのよこの馬鹿男！」

「どうとでも罵ってくれ。あんたの妊娠が、この方には関わりのないことだってこちらの主張を、理解して貰えればそれでいい。いいかおたくが泣こうが喚こうが何を言おうがだ、アレックス様がわざわざそんなでたらめな話を真に受けることはないってことだよ。ともかく、ここはお引き取りを願うしかない。まったく何度も言ってるだろうが。さっさと帰れ。それともおたくは尻だけじゃなく頭も軽いってわけか？　ぶん殴られたくなかったら、もういい加減にしておけよ」

カイトは埒が明かないことに痺れを切らしたのだろう。たぶん本気ではないだろうが、実際に胸の前で拳を叩き、最後には暴力を辞さないことを表明してエステルを脅したのだった。女が男の暴力に対抗できるはずもないのだが、日頃鍛錬を欠かさない騎士である男が相手であればなおさらだった。

騎士が女性を殴るなんてことはあってはならないことだったし、このやり方は紳士にとって禁じ手ではあるが、聞きわけの悪い女を従わせるには手っ取り早いことでもあった。性質の乱暴さを容認できないことと、その後の関係悪化を思うと僕なら絶対持ち出せないが。しかし効き目は絶大なようだった。どうにも抗い様がない手段をはっきりとしかも陰険にそう言われると、エステルにはなす術がないようで、彼女は悔しそうに地団駄を踏んだ。

「フン、実力行使ともなると、辛うじて理解できるようだな」

カイトは拳を引っ込めて腕組みをし、エステルを見下ろして冷たく言い放った。

「分かったんならさっさと帰れ。もっと酷い目に遭いたくないなら、

そのほうが賢明だ」

「このごろつき！　ろくでなし！」

「そいつもお互い様だろうが。ったく猿みたいにギャーギャー喚きやがって。野生育ちの猿女はとっとと消えろ。死にたくなければな」

「はん、それはアレックス様の赤ちゃんごと？　できもしないくせに口だけ達者！」

「いんや、できるとも。許可さえ下りればな……」

そしてカイトはおもむろに僕に視線を向けた。

その目つきと声色が普段からは考えられないくらい意地悪なので、カイトは実はかなり性格が悪いのかとも思ったが、言っている内容は僕の利益を守るためのことだったので、カイトとしては僕のために、こちらの落ち度を認めない目的で徹底して悪役を買って出てくれているということなのだろう。

それでもかなり口が悪くて、性格がきついことにはショックだが、僕のことをサディスティックだなんてそれで言えた義理かと思ったが……、そして僕は自分のしでかしたこの罪の重さや申し訳なさに、本当に慙愧に堪えない思いだった。

それなのに、女のエステルがこうやって妊娠を訴えているというのに、僕はそれに応じる勇気を持たなかったのだ。僕は自分一人が被害者の顔をして取り乱し、混乱して、この嵐が過ぎ去ってしまうことを期待してこうして椅子に座っているだけだった。

僕は彼女の人生を狂わせてしまった罪の意識に押し潰されかけてはいたが、それでもなおエステルが伸ばしている手を掴んであげようとは思っていなかった。

ここは僕が声をあげて、エステルに対して責任を取らなければならない場面だということはもう分かっているのだ。カイトに頼って、彼に体よくエステルを追い払って貰おうなんて考え自体が間違っていることはちゃんと分かっていた。

だけど僕はそうするのが怖くて両手を握って震えていた。エステル

を妊娠させておきながら、どうしてもその決断ができなかった。だってそんなことをすればこの先僕の人生はまったく違うものになってしまうのだ。そんなことをすれば、もうマリーシアに会うことができなくなってしまう。安心して空想に耽ったり、安息の眠りに微笑む機会も失われるだろう。愛していない女とその子供に、人生を丸ごと乗っ取られる絶望感は想像を絶していた。

僕は兄さんのように結婚から逃げまわる男の気が知れなかったのに、手を出しておきながら結婚をしない彼のことを心底卑怯で身勝手だと思っていたのに、今はその気持ちが痛いほど理解できていた。

僕は本当に、一時の快楽の代償の大きさというものに震えがとまらない思いだった。

「アレックス様、お願い、信じてください……、赤ちゃんがいるのよ……」

カイトから言われた通り素直に退室するでもなく、彼の非難から逃れるように、弱った顔でまだ僕に助けを求めて来るエステルが邪魔臭かった。

とても可愛いと思っていたはずのエステルが、そのときの僕の目には、僕の人生に無理やり入り込もうとする侵入者のようにさえ映っていた。

エステルが悪いわけじゃない、彼女は当然望むべきことを望んでいるだけだと分かっているのに、僕には彼女の要求が鬱陶しく、しかも不届きなことに思えてならなかった。

「本当に、僕の子供なのかい……？」

僕は自分でさえもよく分かる憔悴した声でそうたずねた。

すると僕の気分を見抜いたのか、途端にエステルは眉を怒りに吊り上げて叫んだ。

「ええ、そうよアレックス様。貴方の子供よ！
貴方までわたしを疑うつもりなのっ！？　いいえ貴方はそこの馬鹿男と違って、わたしのことを信じてくださるでしょう、そうよねえ！？」

そのどすの聞いた声と突然の態度の変わり様に、僕は身体を震わせた。
できれば信じたくない気持ちで、恐る恐る、一生懸命彼女のご機嫌を窺うようにして再度同じ疑問をエステルに投げかけた。
行為をしておきながら言っていることが汚いということは分かっていたが、でもこれはどうしても確かめなくてはならないことだった。

「で、でも、一回しかしてないのに、そう簡単に妊娠するものなのかな……？
ねえ、それは本当に僕の子供なのかな、本当に……？」

するとエステルは目を細めて顎を上げ、どうにかして責任から逃れようとしている僕のことを、いよいよ軽蔑するような目で見た。

「アレックス様、貴方も、随分酷いことをおっしゃるのね。
貴方だけはそこら辺の不埒な男どもとは違うと思っていたのに。貴方も所詮は低俗な男っていうわけね。
わたしにあれだけのことをしておきながら、わたしのことを疑うなんて貴方正気なの？」
「だっ、だって、だって、タティには出来ないんだよ。タティにはなかなか出来ないんだ、それなのに君に出来るなんて、そんなの変だよ、タティには出来ないのに……」
「タティ？　タティって誰よ」
「アレックス様の恋人だ」

エステルの質問に、カイトが横からまた陰険に答えた。

「おたくとは違って、アレックス様を一途に愛している清楚な貴族の女性だよ」

わざわざ言わなくてもいい余計な一言のせいだったのだろう。それでエステルの顔がますます怒りに歪んだのが分かった。

「そういうこと」

エステルは笑い、それから僕の執務机に近づき、両てのひらでばんと叩いて、激しい口調で僕をなじった。

「貴方もわたしを玩具にしたってことなのねっ！
わたしはこんなに美人なのに……、貴族じゃないというだけで人間扱いもされないんだわっ！」

第９６話　姦淫問答（５）

それでまたしても目の端に熱いものがにじんできて、もう僕は泣きだすのに一秒だって耐えられなかった。何もかもがあまりにも汚れていて、何もかもがあまりにも酷すぎた。すべてのことが僕の対処能力を超えていて、僕はもう、こんなことは耐えられなかったのだ。

「ごめんなさいっ……」

「玩具にしたって、おいおい馬鹿を言うな。まさか被害者面するつもりなのか？」

その僕の謝罪を遮って、カイトが厳しい声でエステルを批判した。彼もこのときばかりは僕のことを無能とばかりにきつく睨み、執務机に近寄りすぎだとエステルの肩を乱暴に押して、彼女を僕から遠ざけさせた。そのまま王女の騎士もさながらに僕の机の前に立ち、壁になってエステルの視線から僕を守った。

それは何よりもこれ以上僕に弱気を言わせないための措置だった。そのおかげで僕は急いで目もとを拭い、また人前で泣くという最悪なことをしないで済んだのだが、僕はカイトの行動を頼もしいと思うよりも前に、とても複雑な気分になり、別の意味で頭を抱え込まなくてはならなかった。

僕は所領における最高責任者ではないのだが、それでも領主やそれに準じる立場にある者が交渉の場で軽々しく謝罪なんか口にしたら、何重の意味で終了なのだ。

「まったくおたくってのはどういう厚かましさだ。州領主の弟相手に恫喝とは。

さっきも言ったが、この方は国内でも家格の高い名門貴族の男子だ。この方と対等に口がきける貴族は数えるほどしかいない。国内の九

割の貴族が無条件で頭を下げて傅く相手だぞ」

何処かでは僕にも言い聞かせるように、呆れた口調でカイトは言った。

「アレックス様に想う女がいることは、あんたも最初から知ってたはずだ、恥ずかしげもなく妊娠をネタにこうして男を強請りに来れるあんたみたいな世慣れた女なら、その程度のことに感づかないわけもない。

それに、あんただって自分でよく分かっているんだろう。すべてはあんたが自分で劣等感を丸出しにしている通りだ、平民女が本気でこの方に相手にして貰えるとでも思っていたのか？　伯爵様は勿論、アレックス様のような育ちのいい方がおたくみたいな女のことを本気にするとでも？　馬鹿な、そんなことあるわけがない！

いいか、彼はあんたが誘ったから応じたまでだ。あの夜あんたにやらせてくれるって言われたから、仕方なく相手してやったんだよ。

あんただって、楽しみたかったんだろう？

だがそれが結婚に発展するなんて、どう考えたってそんなことは起こり得ないだろうが。

ったく、遊びで妊娠をしたんなら、自分で始末するのが筋なんだよ。石榴が何のためにそこらじゅうに生えていると思っているんだ」

「何よっ、あんたもしかしてあたしに堕胎しろって言ってるの！？」

「うっ、いや…、……ああそうだ。その通りだよ。仮に腹の子供がアレックス様の子供だったとしてだ、そんな子供を産んで貰ってはこの方に迷惑がかかるってことくらい分かるだろう。おたくはこの方の正式な恋人か？　妊娠を待望されている婚約者か？　それともおたくは清純なお姫様か？　どれもまったく違うだろう。

その辺りのことは、自分で常識で考えろ。第一、そんな子供をアディンセル伯爵家が生かしておくとでも思うか？　伯爵様がこの方を溺愛されているのは知っているだろう。

どんなに隠しても、伯爵様には腕利きの魔術師がいて、所在なんてものは一発でばれちまうんだ。産んだらかえってあんたが家族ごと危ういことになるんだよ。

おたくほどのあばずれなら、何が自分にとっていちばん得になるか、打算するのはお得意だろうが。誰とでも寝る遊び人のくせに、これ以上気分が悪くなるようなことを言わせるな」

「はあっ！？　だからあたしは誰とでも寝てなんかいないって言ってるじゃない、黙って聞いてりゃ、あんた、何様よっ！」

「そうだ、それがおたくの本性だろう。そうやって人の忠告には耳を貸さない、しかも男を相手に恫喝できるあんたってのはな、まったくお里が知れているんだよ。どんなに着飾っても、悲しいかな育ちってのは隠せないもんなんだ。それはこの俺が誰よりもよく知っている。

だいたいが擦れてるくせに、夢を見過ぎなんだよ。自分を見ているようでつらくなるから、もう諦めて帰ったほうがあんたのためなんだ。金なら既に伯爵様から、たんまりと貰ってあるんだろ？　上手くやったじゃないか。引き際を間違えるなよ」

「エステル、妊娠したって、ねえ、それは間違いないことなのかい……？

そんなに簡単に妊娠なんてしないよね、だってタティはしてないんだから……」

「アレックス様、こんなに訴えているのにまだわたしを疑うんですかっ？」

「だって、だって、一回しかしてないのにそんな……」

「今更情けないこと言わないでよっ、前からもしかしたらって思っていたけど、アレックス様貴方って、頼りないだけじゃなくて、一回でもしたら出来るかもしれないことも分からないほどボンクラなの！？」

「でも、でも……」

「それに、だいたい、一回じゃなかったわ！」

エステルは捲くし立てた。

「もしわたしの言うことを信じないって言うなら、それでもいいわ。だけどわたしはこの話を知り合いの新聞社へ持って行くわ。泣き寝入りなんか、絶対するもんですかっ！見ていらっしゃい、あのアディンセル伯爵の弟のことなら、大衆紙じゃなくたって、偉い人が読んでるような真面目なところだって、たぶん記事にしてくれると思うから！」

机の前で、カイトが額を押さえているのが分かった。
この逃げ場のない酷い会話の内容に、僕の意識は朦朧の挙句に空の高みへ飛んで行きそうな感じがしていた。

第97話　決断

カイトとエステルが、新聞社に話を売るとエステルが言い出したことについて、いっそう激しく言い合いをしていた。
カイトは相変わらずエステルの言い分を全否定し、エステルは新聞社の話を盾に意地でも自分の要求を押し通すべく食い下がっていた。
でもすぐに交渉の体はなさなくなってしまった。カイトは一方的に強弁を続けていたし、エステルは外聞もなく泣き喚いていたからだ。
そしてとにかくいま僕にできることは、冷静になることだった。
もしかすると冷静になれてはいなかったかもしれないが、僕は動かない頭を動かし、彼らの怒鳴りあいに急かされた感を否定はしないが、自分の良心と信念に基づいて性急に結論を出した。
本当はエステルのお腹に子供がいると聞いたそのときに、たとえかけらでも良識や良心を備え持っている男であれば、僕はすぐにこの決断を自分の人生に下さなくてはならなかったのだ。
まだ自分を納得させることはできなかったが、もうこうするより他に、僕には自分にできることを思いつかなかった。

「新聞社に話を持って行かれては困る……、アディンセル家を中傷するような記事を、彼らは書けないと思うけど……、でも知り合いに記者がいると言うなら、そんなことをすると言うなら、僕は領内の地方紙の全部に圧力をかけないといけない……」

僕は言った。

「でも僕の力が及ぶのは、やっぱりせいぜい所領内の新聞社だけだ。だから他の地域や、中央の新聞社に話を持って行かれては僕ではどうすることもできなくなる。政治的影響力を持たない僕では対処ができなくなる。兄さんに言って、手をまわして貰わなくては……、

でもこんなことを兄さんにお願いするなんて……。こんなことで兄さんの、アディンセル家の名前に傷をつけるような真似はできない……。

だから、妊娠しているって言うなら、僕はエステルを妻に迎えようと思う……」

「アレックス様!?　そりゃ正気ですか、こんな、誰の子供か分かりゃしないものを!」

カイトは弾かれたように叫び、僕を考え直させようと思ったようだったが、僕は応じなかった。

「エステル、君がとんでもない女の人だってことはよく分かったよ、それに僕は正直に言って君のことを愛していないんだ。悪いけど、身体の関係を持っておきながらこんなことを言うのは残酷だって知っているけど、僕はこれからも君のことを愛せそうにはない……。だからこれはお互いの利害関係の一致の上で成り立つ契約婚のようなものだということを分かって欲しい。愛によってじゃないということは、ちゃんと弁えていて欲しい。

この結婚による僕の目的は子供の保護この一点のみだから、君と夫婦のような生活を送りたいとも思わない。でも子供の養育や君の今後の生活については、僕が一生面倒をみようと思う……」

「アレックス様、待ってください、そんな全面的に応じる必要が何処にあるって言うんです。吹っかけられているだけってことがお分かりになりませんか」

「カイト、僕はずっと父上や母上がいなくて寂しかったんだよ。親がいてくれるっていうことが、どれほど有難いことか、これでもね、これまで何度も思い知る場面に直面して来たんだ。

君の人生とは比較にならないほど生温い環境であったかもしれない、年の離れた兄さんがほぼ保護者としての役割を補完してくれていたし、兄さんで至らないところは兄さんの周りの人間が助けてくれた。

僕には乳母も、タティもいた。だから僕は何不自由なく育つことができた。十分な教育、安全、裕福さ、でも、でも感情的には、どうにも解決のならない寂しさがあった……そしてそれと同じ思いを、我が子にさせるべきでないというのが、子供の頃から僕が考えていた家庭像のひとつなんだ。だから……」

「だからってそりゃあまりに短絡的な」

カイトの言葉を、僕は声を大きくして遮った。

「これはそういう次元の問題じゃないんだ、僕がエステルを突き放すかどうかで、赤ん坊の人生が大きく変わってしまうんだよ！アディンセル伯爵家の一員として育つか、それとも父親のいない私生児となるか！

この国では父親のいない子供がどんな扱いを受けるか、僕は知っているつもりなんだ。結婚を経ずに生まれた子供っていうのはね、まずまともな人間として扱われないんだよ。だから、この責任は大き過ぎるんだ。僕はこれを見過ごすことはできない。

それに幸い、タティにはまだ赤ん坊は授かっていないんだ。でもエステルはそうじゃない。これから生まれて来る、一人の人間の未来がかかっているんだよっ！」

「落ち着いてくださいアレックス様、いいですか、俺はさっきから、貴方の子供かどうか分からないって言っているんですよ。

うん、どうやら話が噛み合っていないらしい。だから少し冷静になりましょう。

いいですか、俺が言っているのは貴方がおっしゃっている以前の問題についてで、まずこの女の言うことは信用するに値するかどうか分からないと言っているんです。私見では、信用できないと思っている。何故なら、いいですか、そもそも彼女は閣下目当てで貴方に近づいてきて、貴方を踏み台にして閣下の関心を得たっていう無茶な前科がある女だからですよ。失恋で真っ暗になってる貴方を尻目

に、城内で平然と閣下といちゃつける女だからなんです。それをする閣下もどうかと思いますが、女も女だ。
妊娠したって泣いてるのが只の善良な女なら俺もここまで何か言いやしませんけど、これは絶対性質が悪すぎます。だから今は深呼吸をして、それから」
「でも赤ん坊がいるんだよっ！　僕はエステルと寝て、エステルに赤ん坊がいるんだっ！　僕に赤ん坊を捨てろって言うのかっ！？」

第９８話　愛のない結婚

僕は、僕のために僕を弁護してくれていたカイトのことを最後には怒鳴りつけ、結局僕はものすごく混乱していたのかもしれないが、とにかくエステルと結婚することを決めた。
それによってエステルは今まで泣き喚いていたのが嘘のように、非常に満足な表情をしていたが、僕は道義的に見てとてもいい選択をしたはずなのに何故か気持ちが浮かなかった。

「それは本当ね！？」

弾けるような笑顔になって、エステルは言った。

「うん…」

僕は頷いた。

「わたしと、結婚してくれるのね！？」
「そうだよ」
「わたしをアレックス様の花嫁にしてくれるってことよね？」
「そう」

僕が言うと、エステルは両手を組み合わせて嬉しそうに微笑んだ。

「わあっ！　すごいっ、すごいわっ。じゃあわたし、伯爵家の一員になれるのねっ！
でも、わたしはこれからちゃんと貴族として扱って貰えるのかしら？　平民出だからって、馬鹿にされたり、召使いみたいに扱われるようなことがあったら嫌だわ。

ねえアレックス様、そこら辺のことって、どうなるんですか？」
「大丈夫だよ。分かっているみたいだけど女性は結婚で……、貴族籍に入れる。そういう出世の仕方は、サンセリウスでは男は絶対無理だけど。女は階級さえ飛び越せるんだ」
「あはっ、わたし、女の子に生まれてよかった！
じゃあ、じゃあ、わたしって本当に貴族になれるのね。それも領主様の家族の仲間入りなのね。
アレックス様にはもうご両親がいらっしゃらないし、姉妹もいないから、わたしを目の仇にして意地悪をするような人たちもいないっていうことだし。
ギルバート様はわたしを妹同様に守ってくださるかしら……。ねえ、わたし、アディンセル家のプリンセスっていうことになるのですか？」

何というどうでもいいことを聞いてくるのかと思ったが、女の人はお姫様に憧れるものらしいので、僕は一応頷いた。

「それでいいと思うよ。名乗りたければ……、でも夫人という気もするけど」
「あっ、そうですね、結婚するんですものね。つい浮かれちゃいました」
「好きにしていいよ」

僕は呟いた。

「わたしがアレックス様の奥さんになったら、そこの馬鹿男より偉くなるってことかしら？」

さすがに有頂天になってはしゃいでいるエステルがそろそろ気障りだったが、僕には彼女を振り払う余力はもうなかった。エステルが

カイトを指差したので、僕はそれに応じて質問に答えた。

「そう。偉くなるよ。偉いって言うか……、階級の上ではそうなるね」

「彼は何者なの？」

「ウェブスター男爵家の嫡男」

「平民じゃないんですか？」

「違うよ。ちょっとだけ平民の血を引いてるってだけだよ。さっきの話はたぶん誰かが大袈裟に言ったんだろうけど、彼はちゃんとした貴族の家の男子だよ」

「ああ……、そうなの。じゃ、よっぽど性格が悪くて嫌われ者ってことなのね。確かにこの男の根性はひん曲がってるもの。それで、男爵様になるってわけ。でも、男爵ってそんなに偉くないんでしょ？平民のお金持ちより全然お金なんて持ってないくせに、貴族だってだけで威張ってる奴らがいるけど、そういう連中とはどう違うの？」

「確かに我が国では男爵は数が多いから、そういうことになっている場合もあるけど、やっぱり爵位の威力は大きいよ。彼は王様のパーティーにも出られるよ。君が言ってるのは底辺の下級貴族だろうね」

「ああ……、なるほどね、底辺の。貴族様にもいろいろあるんですね」

「そのようだね」

「ねえ、この男に、わたしって命令できるのかしら？」

「できるけど……、身分があるからって横暴なことをやるのは褒められない。慕われないよ」

僕が言うと、エステルは非常に挑戦的な顔をしてカイトを見た。

「あらあ、慕われる必要なんて全然ないわ。こんな奴には、これっぽっちもね。

わたしのことを馬鹿にしたこと、絶対許さないんだから。
あんた、取り敢えずわたしに謝ってよ。失礼なこと、言いまくったんだから」

エステルがカイトに言うと、カイトはきっぱりとそれを拒否した。

「誰があばずれに頭なんか下げられるか。冗談は顔だけにしろ」

カイトは不機嫌な様子でそう言って僕とエステルに背を向け、そのまま執務室を出て行ってしまった。
彼が立ち去るのをしばらくの間睨んでから、エステルは僕を見上げて言った。

「ほんと、つくづく失礼な性格ね。冗談は顔だけにしろって、どっちがよ。
きっとアレックス様が自分よりわたしの言うことを信じたから、ああいう反抗的な態度を取っているんでしょうけど、ほんとに性格が悪いこと。
ねえアレックス様、あの男、わたしに逆らったわ。逆らわれたらどうすればいいの？　罰を与えるとかできるのかしら。
きっとわたしが平民だからって、失礼な態度を取る奴は、これからも出てくると思うのよ」

そしてエステルは僕の服の袖に触れ、甘えたような態度を取ったが、僕はだんだん頭痛がしてきていた。エステルの振る舞いは無邪気と言えないこともないが、どう考えても下品だった。権力を手に入れる話を聞いただけでこれなら、実際にその立場になったら何を言い出すだろうと不安になった。

「そういうことは、兄さんに習ってよ。僕はそういうのは得意じゃ

ないんだ……」
「ギルバート様に!?」

エステルは途端に感激したような顔をした。

「いいんですか!?」
「いいんじゃないだろうか。たぶん……」
「ああっ、ギルバート様、わたしとお話してくださるかしら。お食事とかも、一緒にしてくださるかしら。
ああ、どうしよう。どういうふうに接したらいいかしら。とびきり可愛くしておかなくちゃだわ。髪も整えて、お化粧に爪に……、これからは、義理の兄妹になるのよね」

そんなことはどうでもよかったし、兄さんの機嫌次第だと思ったが、僕はもう答えるのが面倒になってふらふらと執務机の椅子に戻った。僕はエステルのこういうおしゃべりが苦手だと感じていたことを思い出していた。女特有の中身のない会話が。
彼女のくるくる動く表情は非常に可愛いと思うのだが、せめて考えを纏めてから話してくれると有難かった。すべての女がそうだとも、中身がないとも言わないのだが、彼女の場合はそうだった。
僕は椅子に座り、くたびれた老人のように息を吐き出して、何度かマリーシアのことを考えた。
それから、タティのことを。
窓の外は相変わらず冬の嵐が続いていて、まだ午後四時をまわったばかりなのに既に夜みたいに暗かった。
雪の降る夜は、真夜中でも空がずっと明るいことを僕は知っていたが、でもそのときは自分の心情を反映しているみたいにどこもかしこも真っ暗だった。
そして僕の気持ちも真っ暗だった。僕は結婚生活に夢ばかり見ている若い女性ほどには結婚に夢ばかり見ていたわけじゃないのだが、

少なくともきっと胸躍るものだろうとは思っていたのに、そのときはこんなはずじゃなかったのにという思いが、頭の中を暗雲のようにぐるぐると巡って止まらなかった。

第９９話　偽りの愛の代償

「ギルバート様って、どうして結婚なさらないのかしら。不思議だわ。相手に困るようなことはないはずなのに……、もっとも、あんなに素敵な方を独占しようなんて図々しい女が現れようものなら、わたし、絶対許さないけど」

「……、たぶん理想が高いんじゃないかな。彼はあれで、意外とロマンチストなのかも。運命の恋人を今でも探している口とかね、まあそれはないか……」

「あら、ロマンチストなのは本当ですよ。わたし、断言できるわ。彼は見かけよりずっと繊細で感受性の強い方よ」

「ああ、そう……」

執務机に頬杖をついて、エステルとつまらない会話をしていた。彼女は執務室内の調度品や絵画を眺めたり、批評をしながら、今後の生活のことや、お腹の子供のこと、それに兄さんのことを話題にしていた。

金色の癖のない髪だけ見ていれば、マリーシアに見えないこともないと無理やり自分を説得していたが、顔を見れば明らかに違うのがやっぱりどうしてもつらかった。

おまけに彼女はシェアみたいに優しくない。優しいふりをしていただけだったのかと、僕は今日初めてエステルの本当の性格を知って愕然としていた。

そう言えば僕がエステルを兄さんに紹介した当初から、兄さんはエステルのことをあばずれと言っていたし、カイトもやっぱりあばずれ呼ばわりしているところを見ると、エステルはきっとあばずれなのだろう。

服装以外では、どこら辺を見たら女性があばずれかどうか見分けられるのか、未だによく分からないのだが、それは僕が絶望的に女の

人を見る目がないということなのかもしれなかった。いったいどうやって女の人の本性を見抜いたらいいのか、そういうことはあまり本には書いていなかったので学習のしようがないのだが、ほとんどの女の人を可愛いと思ってしまう僕というのは、たぶん致命的に何かが間違っているのだろう。

でも、たとえエステルがあばずれだろうと、これからあばずれをやめてくれればそれでいいとは思っていた。人間は変わることができるものだし、女の人の生き方としては、あばずれでいるのは何かとリスクが大きいんじゃないかと思うから、おとなしくお淑やかにしていたほうがいいと思うからだ。

お淑やかにしていたら、エステルだってたぶんあばずれでいることがあまりいいことじゃないことだと気がつくだろう。彼女は自分は簡単に男と寝てなんかいないなんて言っていたが、最低でも婚約をしていない相手とそんなことをすること自体が間違っているという貞操観念を、身につけたほうがエステルのためにもなるはずだった。キスするだけで震えていたタティと比べると、エステルの育った家庭はいったいどれほど荒廃していたのかと、憐れむ気持ちさえ湧きあがって切なくなった。家族や周りに大切に扱われた女の子が、自分をそんなふうに安売りなんかするはずがなかったからだ。きっと僕には計り知れない背景というものがあるのかもしれないと思えば、彼女がやってきたことを頭ごなしに否定してはいけないような、そういう気持ちにもなった。

でもひとつとても気がかりなことがあって、それはエステルの性格が、気が強くて恐いほうであるということだった。

となると、僕はこれから兄さんだけでなくエステルの顔色も見ながら暮らさないといけないのかと思うと、自然と気力が抜けていく思いがした。

そこへ、何処に行っていたのかしばらく席をはずしていたカイトが、執務室に戻って来た。

室内に入ったカイトは、そのままっすぐこちらに近づいて来た。

「本当にこれでいいんですか？」

机の前まで来ると、すぐそこの棚の飾り物を見ているエステルを肩越しに親指で示しながら、不満そうに言った。

「あれは誰がどう見ても、完全に金目当てですよ。アレックス様よりも金品の物色してるほうが楽しいって態度はどうにかならないのかね。ここはお世辞でも貴方に擦り寄るのが筋だろうに、大胆不敵と言うか、本能の赴くままに生きていると言うか。まあそれこそが女って言っちまえば、そうなんでしょうけどもね。ほら見てくださいよ、金目の物を見ているとき、目の色が違ってる。それにギルバート様なんて言葉を口にしたときのあの悦び様……、あの様子じゃ、閣下目当てでもあるのは確定ですね。貴方はいい鴨にされたんですよ」

僕はかぶりを振った。

「だとしても、子供がいるんじゃどうしようもない……。君も一応気をつけて。ここは階級社会だ。腹は立つだろうけど、上辺ではいい顔をしてくれないと。妻に対する態度は、僕に対する態度でもある」

「そいつは分かってますけどね。しかし、少々あれなことを言いますが、女を妊娠させたからと言って貴方には必ず結婚してやる義務はないんですよ。しかも誰の子供だか分かったものじゃない。それも貴方が惚れた女ならまだしも、強請って来るような女じゃ、貴方はこの先どれだけつらい目にあわされることか。

早まることはありません。正直に言ってあれは、貴方には手に余る女ですよ。子供の将来が心配だとしても、はっきり言って認知で事

足りることじゃないですか？」
「だって……、赤ちゃんがいるのに……」
「では、タティのことはどうされるおつもりなんです？」
「タティのことは……、後で考える……」
僕は答えた。
「でも妊娠させた女性を放り出せるわけがないから……、それは人間のやることじゃないから……、僕にはできないよ、そんなの……」
「まあ……、ロビンちゃんがこの話を持って来た時点で、アレックス様は最後にはそういう選択をされるとは思いましたけどもね。まったく、貴方はお優しいから」
カイトは後ろ髪を撫でつけ、やれやれというふうにため息を吐いた。
「人生って、こういうものなのかな」
僕は消沈して呟いた。
「僕は兄さんに勝手に結婚相手を決められるのが嫌だったんだ。それで、タティと結婚しようと思ったのに、結局……、でも考えてみれば、好きな相手と結婚しようなんて、なかなか難しいことだ」
カイトは同意した。
「それはそうです。それが普通ですよ。こんなことがなくたって、所詮貴族に政略婚はつきものだ。結婚に愛なんて必要ないんです」
「言い切るね」
「そりゃもう」

カイトはしたり顔でそう言い、僕は苦笑いしたままうつむいた。

「厳しいね……、こんなはずじゃなかったんだけどな……」

「……、……しかし、このことはすぐに閣下にご報告申し上げないといけませんよ。

そういうわけで今さっき、これから閣下にお目通りをする渡りをつけましたので」

僕は驚いて机の前にいるカイトを見上げた。

「えっ、もう？」

「ええ。アレックス様も、まさか閣下に無断で結婚なんてものができるはずもないことは、お分かりでしょう」

僕は戸惑って視線を膝に落とした。

「でも、まだ何を話せばいいか、考えていないんだ。頭の整理も心の整理もつかなくて。何日か考えようと思っていたんだけど」

するとカイトは極めて事務的な口調で言った。

「いえ、こういうのは時間を置かないほうがいいですよ。大丈夫、ありのままをお話してください。飾ることはない。閣下はどうせアレックス様にそういうのは望んでいません。取り繕うようなことをすれば、かえって怒りを買いますよ」

僕は確かにその通りだと思って、ため息を吐いた。

「君っていうのは、いつでも冷静だね。まったく羨ましいや……」

「そりゃ、仕事ですからね」

「やっぱり、怒られるかな……」
「たぶんね」
「兄さんは結婚を許してくれるだろうか」
「波乱は必至かと思います。ご自分が手をつけた女が弟嫁じゃ、どんな反応が返ってくるやら想像するだに恐ろしいですね。俺としちゃ、こんな日は厄日としか言い様がない――、上手く乗り切ったとしても、先が思いやられますよ……、ま、と言って秘密にしておける性質の話ではありません。
もはや貴方じゃどうにもならないんですから、さっさと話してご判断を仰ぐ……っと、ここは上手く折り合いをつけるしかないってもんでしょう」

エステルはカイトのことが気に食わない様子で、執務机を挟んで話しているカイトのことを、後ろからしきりに睨んでいた。
エステルっていうのはもっと可愛らしい女の人だとばかり思っていたのに、さっきの剣幕といい、そういうときの態度はとても悪く、すれっからしという表現が適切かどうか分からないが、僕の知っているエステルとは別人のような顔をしているのが僕は少し恐かった。
本当は、僕はエステルと結婚したくないんだという自分の気持ちに気づいたが、赤ちゃんがいるのにそんなことを言えるはずもない。
子供を路頭に迷わせることは、絶対にできないことだからだ。

兄さんに事の次第を報告するべく、僕たちは執務室を出て居城の冷え込む廊下を歩いた。

「いいか女、アディンセル伯爵ってのは、あんたが考えている以上

に非情な方だ」

僕の腕に腕を巻きつけて歩くエステルに、カイトが冷たい口調で釘を刺した。

「アレックス様や自分の女には甘い顔も見せるが、凍りつくように冷酷な思考をお持ちでいらっしゃる。

だからこれは最終警告だ。もし、腹の子供がアレックス様の子供じゃなかったりすれば、おたくの生命はまずないと言っていいだろう。

だから、白状するのなら今のうちってもんだぞ。

今ならすべてをなかったことにしてやれるが、話が閣下に渡れば二度と言い逃れはできやしないんだからな」

ところがエステルに動じる様子はなく、もっと冷たくて陰湿な態度で、こう言い返す始末だった。

「わたし、あんたのこと大嫌いだわ。アレックス様の腰巾着のくせに偉そうに。

今だって、ギルバート様やアレックス様の権力を笠に着なくちゃろくに意見だって言えないくせにね。さすがにちょっと生意気だと思うわよ。

わたしがアレックス様の子供を妊娠しているのは真実よ。どうしてそんな嘘を吐かなきゃならないの？　だって、そんなの赤ちゃんが生まれて来たら分かることじゃない。きっとすごく綺麗な顔した赤ちゃんのはずなんだもの……。

ギルバート様が恐ろしい一面を持っていることは承知しているけど、でもわたしは嘘なんて吐いていないから平気よ。

見ていなさい、あんたはいつか酷い目にあわせてあげる。わたしにこんな態度を取ったことを、必ず後悔するような目にね。

ああ、伯爵家の血を引くお腹の子供が生まれて来るのが楽しみだわ」

第１００話　冷酷なる伯爵（１）

そして僕とカイトとエステルは、アディンセル伯爵執務室を訪れた。楓の紋章の扉をくぐると、アディンセル家当主のための広くて豪華な部屋が視界に開けた。

兄さんはちょうどお出かけになるところだったようで、大柄な身体に黒い外套を羽織り、兄さん専用の一際立派な執務机の前のところで同じように出立の準備を整えてあるジェシカやルイーズと何かを話し合っていた。

それに何か問題が起こったことを思わせるようなとても緊迫した空気が流れていて、僕は気後れした。エステルとのことが、ルイーズの千里眼の魔法によって予めばれている可能性は高かったのだが、しかし三人揃って出かける支度をしているというのが、何か他の理由の存在も示唆している。

いずれにしても、これは報告を後日にしたほうが円滑に事が運ぶのではないかということを、確信できるほどのご機嫌の悪さだったのだ。

それで僕はカイトに引き返すべく目配せをしたが、兄さんが僕の訪問を見逃すつもりはないようだった。

「帰らんでいいぞアレックス」

重々しく、北風のように厳しい調子で兄さんは言った。その兄さんのお言葉に従うように、執務室前に詰めている護衛騎士たちが、僕らの後方の扉を固く閉ざしてしまった。

「おまえが何しに来たのかは分かっている」

兄さんは傍らで微笑みを浮かべているルイーズを示しながら言った。

「が、ここは一応、話を聞く。言い訳をな。しかし私はこれから急ぎウィシャート公領へ発たねばならん。手短に済ませるぞ」

そして兄さんは目を細めて、僕のやや後方にいるエステルにも視線をやった。

彼の威圧感はいつもにも増していて、兄さんが完全に頭に来ていることは分かっているのだが、何に頭に来ているかなんてことを、考える必要もないほどにすべてに頭に来ているような恐ろしさだった。僕がジェシカの顔を見ると、すべてを諦めているかのような虚しい視線だけが返って来た。僕のことを、少し軽蔑しているニュアンスが窺えたのは、僕がエステルと何をしたかということについて、ルイーズによって既に知らされているということを如実に表していた。それで真面目な彼女は呆れてしまっているというところなのだろう。こうして僕は、さっそく兄さんに言い訳をするための大切な味方を一人失ってしまったことを知ることになった。

「ウィシャート公爵様のところにお急ぎなら、僕の話はまた改めてということでいいです。急ぐ話ではありませんから。兄さんの用事を優先させてください」

僕は怖々として言った。

「トバイア様が危篤だ」

兄さんはその強い視線を僕から離さずに、彼のほうに起こっている問題を口にした。

「まだ詳細な事情は分からないが、暗殺未遂と思われる」

言葉の内容とは裏腹に、それはさも何でもないことのような言い方だった。

「暗殺未遂ですって？　そんな、いったい誰が……」

僕が言うと、兄さんは艶やかな微笑みを浮かべた。

「多方面から恨みを買っているからな。あの男も。いっそ死ねばよかったのだが」

「えっ…」

僕は兄さんがウィシャート公爵を慕っているものとばかり思っていたのに、兄さんの口ぶりは冷淡で、公爵様の不幸を楽しんでさえいるようであり、そこからは彼に対する同情の欠片さえみつけられなかった。

「犯人は、奥様かしら。それともあの素敵な王子様かしらね」

まるで楽しい旅行の計画でも話しているかのような口ぶりで、ルイーズがしゃしゃり出た。

それを、兄さんが少々わざとらしいような口調で窘めた。

「いかなる理由があろうとも、我らが崇敬するフレデリック殿下を貶めるようなことを言うべきではない。たかだか傍系王族を害したのが、我らが唯一諸手を挙げて推輓する輝けるセリウス三七世、次期国家君主たるフレデリック王子殿下かもしれないなどとそんなことを、軽々しく口にすべきではない」

「承知致しましたわ、伯爵様」

「それに、部外者が約一名混じっている。こうした情報を知る必要

もなければ、理解できる頭もない部外者が」

そして兄さんはエステルのことを冷たい、本当に凍るような目で再び見下ろした。エステルは普段の彼女そのものの態度で、可愛らしく僕の背中に隠れたが、それすらも兄さんの神経に障ったようだった。

エステルのここに到着するまでの強気は、完全になりを潜めていた。彼女には彼女なりの何か考えがあったのかもしれなかったが、兄さんがこんなに怒っていたら、下手なことは何も言えなくなってしまったのだろう。僕も似たようなものなのだが、可愛く振る舞う以外には、何も思いつかないに違いない。

「エステル……だったかな？」

兄さんは、白々しい口調で言った。

「そうまでして財産にしがみつきたいのか？　この、売女が……」

兄さんの口調に怒りが帯びた。それでもなお音楽的な美しい声であるだけに、それは否が応にも人の心に響きやすかった。

長らく兄さんの側に仕えているジェシカが、危険を察知するレベルだったのだろう。彼女は室内にまだ残っていた文官や召使いたちに対し、速やかに退室するよう人払いを始めた。

その姿を目で追いながら、僕がどれほど逃げ出したかったかについて、語るべくもなかっただろう。

第１０１話　冷酷なる伯爵（２）

「アレックス」

兄さんはまた僕に鋭い視線を向けた。

身長だけなら僕とそう違うわけではないのに、ただそこに存在しているというだけでどうしてこれほどまでに相手を威圧し恐怖を与えることができるのか、その場にいる全員に、彼には敵わないと速やかに確信させるものが何なのか、僕にはまだ分析することができずにいた。

「申し開きをせずそうやって突っ立っているのは、もはや言い訳ができんほどに、自分のしでかしたことに罪の意識を感じているということなのか。それとも、小賢しいおまえのことだ、私の叱責や事態の紛糾を回避するべく、今まさに計算の最中なのか。

だが無駄なことはするな。私にはすべて分かっている。おまえがこのあばずれとどういう関係を持ち、今まさに何が起こっているかということも。

事態に窮したおまえが、馬鹿の一つ覚えのようにまたしても結婚を思いついたことも」

「兄さん、僕は……」

「まったく私が手をつけた女に手をつけるなどとは、おまえも浅はかなことをする。

アレックス、私はおまえというのはもう少し思慮分別のある子供だと思っていたのだがね。

目立った反抗期もなく大した悪戯もしないおとなしい子供だと私はときに不満に思っていたが、これはいきなり大きな問題を起こしてくれたものだ。アレックス、おまえも雄だったということなのかね？　だがこれはあまりに不快だ」

兄さんはこめかみに指先を置いて、僕を見た。

「不快だな。そうだろう」

兄さんの態度が強いので、僕は同意させられた。

「そう、不快だ。不愉快ではなく、不快。私はこの種の汚らわしいことが嫌いでね。どうにも。虫唾が走るほどに」

兄さんはほとんど独り言のように、しかし心底嫌そうに言った。

「この間までおとなしく人形遊びをしていたかと思えば、これはやらかしてくれたものだね……、これはお仕置きものだなアレックス。私はおまえと女を……」

ふと、上品な兄さんともあろう方が舌打ちをしたのを、僕は聞き逃さなかった。何ということか、彼は苛立っていて、本気でこれを不快だと思っていたのだ。舌打ちのとき、兄さんがその綺麗な顔を、非常に憎々しげに歪めたのも僕は見逃さなかった。そう言えば兄さんが以前、乱交は汚らわしいとか何とか語っていたことを思い出した。あれは紛れもなく彼の本心だったのだ。

となればもしかすると、これは兄さんの踏み込んではいけない領域だったのではないか、そう思った僕は不安に駆られ、もはや怯えを隠さない子供の上目遣いで兄さんをみつめた。

それがカイトですら胸倉を掴みたくなるようなことなら、気性の激しい兄さんであれば何をするだろうと思ったのだ。

すると、どうやら僕が単純にお仕置きという言葉にでも反応したと思ったらしい兄さんが、多少僕に保護者のような目を向けてこう続

けた。

「……とにかくだ、不本意な結婚をすることはない。よもやおまえと女を共有するはめになるとは思わなかったが。まったく汚らわしくてならん。であるならばなおさら結婚などとんでもない」

「でも兄さん、僕は……」

「駄目だ」

「でも、でも僕には責任が」

「アレックス。私が駄目だと言っているのだよ。だからこの結婚はなしだ。そうだな」

兄さんは僕が言う前に、また僕に対して強力に念を押した。

それで僕は更に戸惑って、とにかくエステルが僕の子供を妊娠していること、だからどうしても結婚の必要があることを順を追って兄さんに説明しようとした。

しかし兄さんはそれよりも先に、僕の側にいるカイトに視線を移した。それはまるで僕の話など、所詮子供の戯言とでも言うような素振りだった。

「カイト」

「はっ」

突然名前を呼ばれて、カイトは全身に緊張を走らせ素早く恭順の姿勢を兄さんに示した。

兄さんはこれまでの経緯を弟の僕にではなくカイトに訊ね、カイトは概ね客観的にこの午後の出来事を兄さんに報告した。

兄さんの僕に対する子供扱いは、しばしば見られるものではあるのだが、僕を目の前にしていながら僕よりカイトを信用する気なのかと、これにはかなり面白くないものを感じた。でもきっと当事者外の意見を知りたいのだろうと自分に言い聞かせた。

「ルイーズの報告以上に酷いな。ルイーズはアレックスに甘いということを勘案してもだ。反論のひとつもできんとは……」

カイトから話を聞いた兄さんは、やがて苦い顔で僕を一瞥した。

カイトは僕が謝罪を口にしたことや泣きかけたことは言わなかったが、執務机について終始うつむき加減であったことや、臨機の処置が取れず、カイトに何等建設的な指示命令ができなかったこと、毅然とした態度を保てなかったこと等を兄さんにばらしてしまったのだ。僕は頭に来て、おまえは誰の部下だと言いたかったが、それより先に兄さんが僕を見て言った。

「アレックス。教えられたことしかできんというのは、そろそろ卒業しなければな。いつでも自分の頭で考えろと言ったろう」

「カイトが任せろって言ったんだ……」

「本当に全部任せてどうするのだ。話の内容から、これはカイトには裁定できん問題だということが分からなかったか。おまえの命令がなくてはどうにもならんということが。

それともアレックス、おまえは生涯保護を要する姫君なのかね。馬鹿者」

兄さんの言い分はまるでカイトを庇ってさえいるようで、僕はもう少しでカイトのほうが可愛いのかという言葉が出そうになったが、さすがにそれは飲み込んだ。

「僕は馬鹿じゃないんだ……」

兄さんは僕の呟きを目の前で無視した。

「カイト、おまえもアレックスに強く進言するという形をとるべき

だったな」

次に兄さんはカイトにも鋭く目を向けた。

「これには問題の荷が重いと判断した時点で……、おまえのことだ、どうせすぐにそう判断していたのであろう。であるならば、アレックスにおまえの意見を全面的に採用させるその努力をするべきであった。

この汚らわしい問題をどう対処するが最善か――、私はおまえにそうした献策行為を認めているはずだな。

第一、この程度のことをいちいち持ち込んで来られては、私を煩わせることになると思わなかったかね。その甘さが、おまえの生命取りになることを自覚せよ」

兄さんが言うと、カイトは恐縮して頭を下げた。

「申し訳ありません、閣下。しかしながら平民出である私の判断では問題があまりに重大……」

「私は有能な人間の出自を問わない」

兄さんははっきり言った。

「それは資源の浪費というものだ。私は合理的でないことが嫌いなのであって、階級制度によって虐げられている者たちの味方というわけでは断じてないがね。

おまえが裁くには重大すぎる問題であるからこそ、アレックスにそれを促せと言っているのが分からんか。私はおまえの判断を信用すると言っているのだ」

カイトはいっそう深々と頭を下げた。

それを見て兄さんは短く息を吐いた。

「おまえの貴族階級への帰属意識のなさは課題だな。謙虚さが美徳とは限らんぞ。特におまえのような出自の者は、何をしても叩かれる。まして同年代の中では出世株だ、不当な誹謗中傷に神経を擦り減らしていることも知っている。

だが所詮連中はおまえ以下ということだ。この私が選抜した以上、おまえには己の能力に自信を持って貰わなくては困る」

そしてまた兄さんは僕に注意を向けた。

「アレックス。聞いていたか。おまえは親友の言葉に耳を貸さなかったようだが、これは勉強しかできないおまえにとって諮問役となる男だ。お調子者だからとて、只の協賛機関だと思ったら大間違いだぞ。

おまえの得意な綺麗事だけでは物事が通らないとき、カイトの意見は役に立つ。おまえの精神面の脆弱さについても同様だ。学ぶべきところは学ぶのだ。彼は何も腕が立つだけのボディガードじゃない」

「兄さん、でもエステルは妊娠しているんだ。僕が……させたんだ……」

「そうか。だったらどうなんだ？　そんなことはまったく大したことではない。

平民女が妊娠したところで何故おまえが思い悩む必要があるのだ。豚が妊娠したのと変わらんよ。おまえが深刻になる理由が、私には皆目分からんのだがね」

僕は、改めて兄さんのこうした価値観についていけないと思った。女性を妊娠させたことが大したことじゃないという兄さんの価値観をどうやったら覆せるのか、そんなふうに考えている兄さんにどうすればこの重大な問題を理解させられるのか、何も分からなくなっ

て僕は黙り込んだ。

第１０２話　冷酷なる伯爵（３）

「あら、伯爵様。女が妊娠するって、そんなに軽いことではなくてよ」

その沈黙を破るように、ルイーズが兄さんに意見した。

「豚と一緒にするなんて随分だわ。殿方にはお分かりにならないでしょうけど、とってもつらいものよ」

「それは知らなかった」

それに対し、また白々しい口調で兄さんが応じた。

「初耳だな。つらかったなどという話は」

それで僕は、タティとの結婚の話のときのように、ルイーズがまた助けてくれるのではないかと思い、一縷の期待を込めて彼女に視線をやった。目があうと、ルイーズは僕ににっこりと微笑んでくれた。彼女というのは本当に、何にも勝るような美しさだと思った。だからきっとこの状況を助けてくれるものとばかり思って、僕は縋る思いで彼女の次の言葉を待ち望んだ。

だけどルイーズの次に続く言葉は、僕の期待とはいささか異なったものだった。

「アレックス様が怯えていらっしゃるわ。可哀想に、よっぽど心細い思いをなさったのよ。彼女に妊娠を告げられて。困って、子羊みたいに罪の意識に震えて……、きっとどうしていいか分からなかったのね。

確かに女性を妊娠させるというのは、とても重大なことだものね…

…、もし、本当に妊娠しているならのお話ですけれど」

ルイーズは悪戯っぽく兄さんを見上げた。

「ほう、ルイーズ。ではおまえはこの売女が妊娠していないと言うのかね。只の狂言であると？」

既に結論が分かっているかのような顔をして、兄さんは言った。

ルイーズは頷いた。

「狂言とまで言っては可哀想だわ。彼女は本気でご自分が妊娠してしまったと思っているんですもの。きっと何日も思い悩んだのじゃないかしら。

つまり妊娠をしてしまったと勘違いをしていらっしゃるの。思いやりのない殿方による性交渉は、本当に困ったもの。遊び好きのお嬢さん方には、そういうことって、ときどきあるんじゃないかしら」

それに対して、エステルは悲鳴のような声をあげた。

「そんなっ、何言ってるのよ、そんなの嘘よ！」

「あら、本当のことよ」

ルイーズが微笑むと、エステルはまたカイトと言い合いをしていたときのような強い調子でルイーズを怒鳴った。

「何がっ……、勝手に人の身体のことを決めつけないでよ、お婆さん！

わたしは本当に妊娠しているわっ、それをどうして、だって悪阻だってしたのよ……！」

「貴方の信じられない気持ちは分かるわ。でも、可哀想だけれどそ

れは嘘ね」
「嘘じゃないったらっ、そんなにすぐばれるような嘘で、わたしがこんな場所に来られるほど浅はかだと思うのっ？」
「ええ。残念だけどそう見えるわ」
ルイーズが左手を頬に添えておっとり頷くと、兄さんがふっと噴き出した。それが何よりエステルを傷つけたようで、彼女は顔を真っ赤にしていっそう声を張り上げた。
「何よっ、わたしが言っていることは真実よっ、決まっているじゃないっ！
あんたは単に嘘だってことにしたいだけのことなんでしょう、わたしには分かるわ。あんたはわたしが平民だからそうやって馬鹿にして、話をまともに聞かなくてもいいと思っているんでしょうっ！
それともそうだわ、あんたはわたしがすっごく可愛いから、それに嫉妬しているんだわ！
ああ、ようやく分かったわ、あんたはわたしがあんたより若くて美人だから、ギルバート様やアレックス様の関心を盗られたくないからそう言っているのね！
これだからババアの僻みってほんとに醜くて嫌になるのよ、だからわたしを気に入らないってことなんでしょうっ！」
「困った方ね…、そんなふうにご自分の意地悪で底の浅い考えを喧伝して、後で恥ずかしい思いをするのは貴方だということが、貴方はまだお分かりにならないのね。
でも誰もが貴方と同じ世界で生きているわけじゃない……、それにね、そんなふうに大声を出しても――、残念ながら事実が貴方の思った通りにはならないのよ」
「そんなことはないわよ、わたしは妊娠しているんだから。だからわたしはアディンセル家の一員になるのよ」
「あら、強情な方。

ね、貴方、人からよくそう言われるんじゃありません？」
「何があらよ、ババアが気取っちゃって。ほんとは悔しくてたまらないくせに、わたしに気安く笑いかけないでよっ！
あんた、今に見てなさいよ。ギルバート様の前でわたしを馬鹿にしたこと、絶対許さない。後であんたにも、たっぷり罰を与えてやるからっ！」
「困ったお嬢さんね。でも貴方、妊娠していらっしゃらないのよ」
「しているわよっ」
「いいえ。だって、もししていたら、今頃は貴方、そうやって生きていられないわ。アディンセル家の胎児を身ごもったら、大抵女性は死んでしまうもの」

ルイーズは言うと、それまでの何処かエステルをからかっているのではないが、エステルの口汚い罵りを右から左へ受け流すような気軽な微笑みを浮かべていた表情を、いきなり引き締めた。
するとそれまでは色気過剰なだけの、大した重要人物でもない、確かに類稀な美貌ではあったが兄さんの権威があるからこその女という顔をしていたのが、突然羨望すべき知性を持つ魔術師の顔となった。

第１０３話　冷酷なる伯爵（４）

ルイーズは言った。

「アディンセル家には酷い罪業が取りついていて、そうなると魔術師の全面的なサポートなしではまず生きられない。それでも、とても苦しい思いをするのよ。もう二度と味わいたくないような、死ぬような思いを」

「はん、罪業ですって？」

エステルは相変わらず軽蔑的な顔をしていたが、それに飲まれることのない真面目な態度でルイーズは頷いた。

「ええ。呪いと言っても構わないわ。建国以来の家柄なんですもの、七百年という長い歳月を、一地方の支配者として君臨して来た家系に取りついた重い罪業。

アディンセル伯爵家というのは、そういう家系なのよ。貴方も、伯爵様と交際していらっしゃったのなら、聞いたことはないかしら。ギルバート様の父君様の、歴代のお妃様たちが立て続けに亡くなられているお話について。

彼女たちというのはね、その全員が、そのために死んでしまったのよ。アディンセル家の男子は性交によって女の生命力を奪い取るの。酷い呪いだわ。悲劇と言っていい。愛する女を、その愛によって殺してしまう呪いなんですもの。

だから彼女たちは性交渉の度に生命力を奪われ続け、その弱った身体で赤ん坊を身ごもったから、そのまま死んでしまったの。

でもお嬢さんは元気溌剌ね。だから残念ながら、これはひと目で嘘だと分かるのよ」

「そんな……、あんた、何言ってるのよ、そんなふざけた話を急に

言われても、あんたの言うことなんか……」
「ならば私の言葉なら、信じられるか」
兄さんが長めの黒髪を掻きあげ、ルイーズの言葉を引き継いだ。
「私の魔術師が言っていることに偽りはない。これまでにも何人かの女が、おまえのように私の子供を身ごもったと嘘を吐いて、健康ななりをして近寄って来たものだ――、無論、中には本当に身重になっているのもいたがね。
そういう場合は決まって恐ろしいことになっているからすぐに分かる。選りすぐりの美しい娘だった者が、骸骨のようになってすがって来たときには……、さすがの私も恐ろしい思いをした。その点は私も若かったということだが」
兄さんは昔を思い出すように遠い目をし、それから苦笑した。
「だがいずれにしても全員殺してやった。私も慈善家ではないのでね、豚のように子供を孕まれてもいい迷惑だ。分からないか？　売春婦に子供が出来たと言われて喜ぶ男がいないのと同じことだよ。それにエステル、私は欲深い女が酷く嫌いでね。特に、妊娠などと……、こちらの弱みにつけ込むようなことを言って来た女の顔は、私は二度と見たくないものだと思うわけだ。
汚らわしくてならんのだよ、その……心根がね。卑しくてならん。女の分際で、ましてやアレックスを利用するような女のことは――、この子供が私の最大の弱みであることを当然計算しているであろうことが、私には透けて見えるから余計に堪らんのだ……、分かるかね？
妊娠しているか否かが問題ではない。要はこの私を操ろうと考えているその浅知恵がということだ。たかが女が、傲慢にも、この私を思い通りにしようというその思い上がりが我慢ならない」

「生命力を奪い取るとはどういうことですか？」

僕は兄さんにたずねた。

「それはどういう意味ですか？　僕は、そんな話は聞いたことがありません」

「無論だ。まだ教えていない」

兄さんは答えた。

「あの小娘が弱ってきたら、おまえにも教えてやろうと思っていた。ルイーズの占星術によれば、あれはあまり生命力が強いほうではないから、おまえと性交を持ち始めればすぐに健康を損なうということだからな。

だから、あれがおまえの子供を生むということはまず不可能だ。我が家の胎児を身ごもれば……、あれだとその時点で即死かな」

「何ですか、それは……」

兄さんが何を言っているのか、僕にはよく分からなかった。

それに応じるように兄さんは言った。

「我が父上が――、愚昧なるアムブローズが、自分のせいで女が死ぬのを恐がって、三人の妻に死なれて以降結婚を先延ばしにした挙句、晩年に私の母が酷い犠牲を払うはめになったことはおまえも知っているだろう。

おまえは奴の歴代の妃たちが、偶然早世したとでも思っているのか？　我が家は裕福で、優れた医者、栄養のある食事、高度な衛生環境、何でも揃えることができるのに、健康で若い妃がそうも次々と死んでいく理由はそうそうあるまい。

すべては奴が、快楽によって女たちの生命を奪い取った挙句に子種

を植えつけたその結果なのだ。
運悪く三人が三人とも生命力の弱い女だったので、呪いに対応する魔術師だけでは生命がこぼれ落ちていくのを止められなかったというわけだ。
しかもだ、年を取れば取るほどその業が増すのに逃げまわるから、最後には若く可憐な母上が死ぬはめになった。それでも、私を生んだ時点で逃がしてやれば、星に恵まれた母上ならば死なずに済んだものを、久方ぶりの女の肉体に溺れ、欲を掻いた老い耄れのために……。
ともかく我が家系は、古くからそういう業を背負っているということだ。関係を持った女の生命を、我々は我々の意思に係わらず強奪するという業をな。そしてアレックス、おまえもその例外ではないということだ」
「だから兄さんはご結婚を嫌がっていらしたということなのですか？　短期間のつきあいばかりを繰り返していたのはもしやそのため……？」
僕の質問に、兄さんは答えなかった。
その代わりに厳しい顔をして、彼は再びカイトを見た。
「他言するな。以後花嫁のなり手がなくなっては困る。特にシエラ候女には、話してくれるなよ」
「はっ、心得ました」
「シエラ候女……？」
僕がそう質問しかけたところで、エステルが口を挿んだ。

第１０４話　冷酷なる伯爵（５）

「ギルバート様、わたし、わたしなら、貴方にどんな問題がつき纏っていようと構いません。たとえ死んだって構いません。貴方のお傍にいられるのなら、わたしはこの生命をすべて貴方に捧げますっ……！

貴方にどんな事情があってもいい、貴方がどんなに冷たくて、残酷だって構わない。わたしだけを愛してくれなくたって構わない、でもわたしは、これからもずっと貴方のお傍にいたいの、貴方を愛しているの……！」

エステルは、先ほど妊娠したと言って僕の前で泣いていた顔とはまた違う、何とも健気で献身的な女の顔で兄さんに訴えていた。

「言い訳をすれば、アレックス様と寝たことだって、本当は貴方の傍にいたかったからなんです！

アレックス様の子供が出来れば、彼ならきっと結婚してくれると思ったから……、アレックス様と結婚できれば、一生貴方のお傍にいられるかもって、貴方の妻にはなれなくても、家族にはして貰えるって、そんなことを思って……、だからいけないと分かっていたけど一晩だけ……。

でも、でも後からすぐに考え直したんです、アレックス様に抱かれても、ちっとも幸せじゃなかったから、それに気持ち悪くて、わたしはギルバート様じゃない人では本当に駄目で、だから一生こんなことは耐えられないって思って……。

でも……、もう貴方のことを忘れなくちゃって思っていたある日、体調の変化に気づきました。正直に言えば、ギルバート様の子供か、アレックス様の子供か、わたしにもよく分からなかったけど、でもわたしはきっと貴方の子供に違いないって思ったら、もう気持ちを

抑えることができなかったの。
このことをアレックス様に言ったことは、自分でもずるかったと思うわ。
でもそれは、そんなことを貴方に言ってもきっと取り合って貰えないと思って、だからっ……、だからアレックス様に言ったの、それだけのことなの……。アレックス様を愛しているからじゃないわ、単に話を聞いて貰えると思ったから。
ギルバート様、わたし、貴方を騙すつもりじゃなかったんですっ、ただ貴方のお傍にいたかったんですっ。本当に子供が出来たと思ったんですっ、今だって想像妊娠だなんてそんなことを信じることはできないわ。だって本当にわたし……、貴方を愛しているんですもの……！」

僕との性交渉が、兄さんに劣るどころか、気持ち悪いと断言されて、僕がどれほどショックを受けたかなんてことを、表明できるような場面じゃないことだけは確かだった。
エステルは兄さんをみつめ、いまやこの場所に兄さんと彼女の二人きりであるかのような顔をして、兄さんを見上げていた。
そして兄さんに対して向けられている彼女の言葉は、それこそが彼女の真実の言葉なのだろう。結局は僕のことを何とも思っていないことが端々から窺えたし、今度もやっぱり僕を利用したのかと思うと少し悲しかったが、こんなふうに自分の愛情を誰かに訴えることを恐れないエステルのことを、僕はどう受け止めていいかさえ分からない気持ちで、ただ眺めていた。
あまりにも潔く兄さんだけを愛していることや、そのために僕を利用したことを認めているエステルに対し、確かに腹立たしいものがないと言えば嘘になるが、外見がシェアに似ているからという理由で彼女と寝た僕に、エステルを責める資格なんてあるはずもない。
汚れてしまった自分を自覚しながら、僕は黙ってこの問題の行く末を見守っていた。

「ギルバート様、貴方がときどき寂しそうなお顔をされていたその理由が、そんな悲しい事情のためだったとするなら、正直に話してくだされればよかったのよ」

エステルは、勇ましい顔で、笑顔で、不安に瞳を震わせながら、それでも一生懸命になって兄さんに語りかけていた。

「きっと逃げ出す女だってたくさんいたでしょうけど、わたしなら、たとえどんなことがあったって、貴方の傍から離れるようなことはしなかったわ！

ギルバート様、貴方は人間を……女を信じることを恐がっているのよ。だから女を馬鹿にするようなことを言ったり、気持ちを試すようなことをして、すぐに心を閉ざしてしまうの。本当は悩んでいることを打ち明けたり、もっと親しくなったりしたいと思っているのに、どうせ信用できないって諦めて、そして本当の愛情というものから目をそらしているんだわ……。

ねえ、それは、貴方のお母様が幼い頃に死んでしまったことが今でも重く響いているからなんじゃないかしら。誰かに見捨てられるって気持ちが、お強いはずの貴方の心の中に、今でも残っておいでだからじゃないかしら。

でも……、そんなふうに誰にも心を閉ざさなくたっていいのよ！

わたしは貴方にとっては未熟かもしれないけど、誰よりも貴方を信じているし、誰よりも貴方を愛しているわ。

貴方にどんな事情があっても、わたしは貴方の傍を離れない！

だから、どうか心を開いてください、わたしは貴方を愛しているんです……！」

兄さんはそんなエステルの訴えを、まるで意外なお顔をされて見つめていた。

僕は兄さんが強くて完璧な大人だと思いはしても、弱いはずがないと思っていた。だから兄さんもまた母上に見捨てられたような気持ちをお持ちだなんてことを何度聞かされたところで、これはにわかには信じられないことだった。

兄さんが父上よりも、母上のことをずっと愛しているということについては知っていたが、いつでも誇り高く毅然としている兄さんが、僕のように寂しかったり、悲しかったりすることなんて、そんなことは僕は考えてみたことすらなかった。

だけどエステルはそのことをずっと深く知っているようだった。本当に愛していなければ、赤の他人の心の事情なんかをそこまで深く想像し、分かち合おうと働きかける理由なんかないだろう。

だからエステルは、本当に兄さんを愛しているんだろうと思った。兄さんの心の琴線に触れる言葉であったに違いないエステルの訴えは、しばしの沈黙を兄さんや、執務室にいる僕や他の人間たちの間にもたらした。

だけど、僕はもしかしたら兄さんがエステルの愛情を受け入れるんじゃないかとさえ思っていたために、兄さんの次の反応には本当に言葉を失うことになった。僕の兄さんの血の色は、赤いのかどうかさえ分からなくなるほどだった。

兄さんは愛を訴えるエステルの言い草に噴き出し、それから軽蔑に耐えない目で彼女を見た。

「ああ、そうか」

兄さんは、エステルの嘆願などどうでもいいことのような顔でそう返事をした。

「それはそれは。まるで純愛だ。なるほど運命の恋とでも言うのかね？　ロマンチックで甘ったるい恋愛物語のような展開がこの先の未来に潜んでいることに胸を熱くしたくなる感動的なお話だ。そう

例えば、私がおまえの手を取り悔悛の涙でも流すストーリーをお望みか？　真実の愛に気づかず心を凍らせた男の人生を、おまえがその手で救うというわけだ。
慈愛の皮を被った吐き気がする自己愛に満ち……、まったく、これだから女は！　くだらん自己満足を私に受け入れろとは心底吐き気がする！
エステル、おまえが私のことをどのように勘違いしているか知らんし、そんなことは私の知ったことではない。おまえが何を考えていようと、それはもはや私の問題ではないからな。
只ひとつ言えることは、おまえが相当に無教養な馬鹿女ということだ。私が他人に操られることやそれと感じることが嫌いだとたったいま言ったことを、まるで理解していないのだから呆れ返る」

兄さんは澄まし、部屋の中を少し歩いた。

「おまえと関わりを持ったことは、当初よりアレックスについた悪い虫を、取り除いてやろうと思っただけのこと。
少なくともこの子供に最初にあてがうべきは、何でも従順に言うことを聞く、自我のないような女でもなければ負担になるだろうと思っていた。それなのにおまえのような厚かましい女では、アレックスに悪い影響を与えかねないからな。
だがおまえの金髪は素晴らしかったぞ。魂胆は見え透いていたが、アレックスから引き剥がすついでに、素知らぬ顔で少し相手をしてやろうと思ったほどだ。
しかし悪いが最初からそこに深い意味などない。若い肉体は堪能させて貰ったが……、女の身体などというものは、所詮どれも似たようなもの。
会話を楽しめる知性も、鑑賞に堪える美貌も、尊敬すべき人間性もないおまえのような下品な女には、それ以外には何ひとつ価値などないからな。

よってこのまま立ち去れと、言ってやりたいところなのだが……」

エステルは、顔を歪めて彼女の愛を嘲笑う兄さんのことを、非難するでもなく、涙をためた目でただ見上げていた。

兄さんは、どちらかと言えば兄さんの冷淡さにこそ当惑し、呆然として兄さんを見ている僕の顔をちらと見てから、こう続けた。

「この子供の傷ついた顔を見ろ。可哀想に、我が弟の人生に、この私が大切に育ててきたこの繊細で美しい子供にだ、私の許可もなしに二度も耐え難い苦痛を与えたおまえを、もはや逃がすということはない」

第１０５話　冷酷なる伯爵（６）

兄さんはカイトに目をやると、エステルを視線で示して言った。

「カイト」

「殺せ」

その命令を受けると、カイトはまるでそんな命令が下されることを最初から理解していたとでもいうようにすぐに恭しく一礼をした。
彼は主君である兄さんに対して常に絶対服従を旨とするアディンセル伯爵家の騎士だった。
カイトが兄さんに命じられるままにスラリと腰の剣を抜いたので、僕は驚いて僕の背中にエステルを庇い、彼の前に立ち塞がった。

「まっ、待てカイト、何するつもりだ、そんなの駄目だ、今すぐ剣を収めろ！
今の話を聞いていなかったのか？　兄さんの頭のおかしさが分かっただろう！
彼女は単に妊娠したってことを、勘違いしただけのことじゃないか。
そうさ、すべては勘違いだったんだ。だからそれで話は終わったはずじゃないか。
それも、エステルをこんな目にあわせたのは僕でもあるんだ。それなのにそんなことで女性を殺すなんて、とんでもない！
おまえは兄さんの言われるままに人殺しをするつもりなのか！？」

「アレックス様……、いえ、貴方のほうこそ、そこを退いて頂けませんか。
この手で貴方を傷つけるわけには、参りませんので」

「カイト駄目だ、剣を収めろ！　僕の命令だ、僕の言うことを優先

しろ！

こんなことで殺せなんて、無抵抗な人間を殺せなんて、まともな人間の考えることじゃないよ！

それに考えてみてくれよ、これはデイビッドが君の家族にやったことと、まったくおんなじことだよ！

それなのに君は……、君は彼と同じことをするって言うのかっ！？

そのことに、何も感じないって言うのかっ！？」

「……感じません」

「どうしてだよっ…！　そんなの、そんなのおかしいよっ……！」

僕の命令のほうがカイトに対して建前上は強制力があるので、カイトは少し戸惑った顔をしていた。しかしカイトがそれ以上の意思表示をする前に、兄さんは言った。

「カイト、どうした。殺せ。アレックスの代わりに泥を被るのがおまえの人生だ。

デイビッドのところからおまえを引き取ってやったとき、私はまずおまえにそう教えたな。それともまたあの地べたを這いずるような人生に戻りたいのなら、それでも私は構わんよ。おまえは薄汚い溝ねずみもさながらだったな。卑屈に這い蹲って、義妹の靴を舐め、尊厳のない人生。哀れなものだった。

そして我が家のアレックスと違い……、おまえ程度の代わりは、幾らでもいる」

兄さんにそう言われ、カイトが表情を引き締めた。それで僕は、彼が覚悟を決めてしまったということが分かった。

これ以上はカイトに言っても無駄だと思った僕は、カイトにエステルを殺すことを指示している兄さんに直接、カイトが行おうとしているこの殺人の罪の重さについて訴えようとした。

ところが兄さんは呆れた顔で僕を見た。

「アレックス。おまえは何を思い違いしているのだ」
「思い違い……？」
兄さんは僕の未熟さを嘲笑うような表情をしていた。
「そうだアレックス、思い違いをするな。
確かに手を汚すのはカイトだが、責任を持つのは主であるおまえなのだ。この殺人をカイトに命じるのはおまえだ。そしてその罪や咎を引き受けるのもカイトではなくおまえだ。おまえがエステルを殺すのだ、カイトではなく、おまえが殺すんだよ。おまえがこの女の不実を断罪するのだ。カイトは只の駒に過ぎない」
「僕が…？」
「そうだ。おまえがだよアレックス。それが人の上に立つ人間というものだからだ。
まさかそんなことも分からずに、おまえは騎士を名乗っているのではあるまいね」
「そんな……、そんなの嫌だ。僕がそんなことを命じるわけがないよ！
僕は兄さんとは違うんだ。僕は兄さんみたいにはならない！」
「嫌じゃないんだ、アレックス」
「嫌だっ、嫌だっ」
「アレックス。男なら、しでかしたことの責任は取れ。おまえはエステルが私の女だったことを知りながら遊んだ。私の不興を買うことを予想できなかったとは言わせんぞ。
私はおまえの優しい兄ではあるが、主君でもあるのだ。主君に不快感を味わわせ、働いた無礼の弁済する必要があることは分かるな」
「だったらどうなんだっ、主君だの兄だの、そうやっていつもいつも勝手を言うなっ！
僕は兄さんの思い通りにはならない。絶対にならないからなっ！」

「アレックス」
「僕は兄さんの思い通りにされる子供じゃない！」
「アレックス、これ以上増長することは許さんぞ」
「それはこっちの台詞だ。これ以上言うなら、僕が死んでやる！」

僕がエステルを庇って兄さんを睨みつけると、兄さんは忌々しそうな顔をして深く息を吐いた。

「まったく、この子供は……。さすがの私も今は甘やかしすぎた自分を責めたい気分だ。
いいだろう。主君の意に逆らえばどうなるか、おまえも一度、しかと思い知る必要がありそうだな」

兄さんはそう言うと、こんな状況であるにも係らず自分の傍らで妖しく微笑んでいるルイーズの頭越しに、少し離れた場所で冷静にしているジェシカに目をやった。
何をするつもりなのか、僕が息を飲んでいると、兄さんはジェシカに対してこんなことを言い出した。

「ジェシカ、あの小娘を殺して来い」

第１０６話　冷酷なる伯爵（７）

小娘というのが誰を指しているのか、僕には分かっているつもりだった。
だから僕は即座にジェシカに向かって身を乗り出して叫んだ。

「駄目だっ！　ジェシカ、そんなことは僕が認めないっ！」
「畏まりました、伯爵様」

しかし兄さんの騎士であるジェシカは最初から僕の怒鳴り声はまったく無視して、兄さんの命令にだけ恭しく一礼をした。そしてそのまま足早に執務室を出て行こうとした。彼女の中の優先順位が自分の生命よりも兄さんであることは分かっていた。僕は泣き喚きそうになるこのあまりの状況を前に、ただ身体を震わせた。
すると兄さんが言った。

「それが嫌ならそこを退きなさいアレックス。そしてカイトに処断の命令をしろ。
おまえがエステルを庇うのをやめなければ、タティが代わりに死ななければならないよ。何故か？　エステルを妻にするなら、タティの存在する意味がないからだ。
アレックス、そうだろう？　これは冗談を言っているのではないのだ。
おまえも人の上に立つ人間なら、このくらいの厳しさを持って物事に臨むことだ。どうするね。どちらを取るのか、今すぐ判断しなさい」

兄さんが手をあげて制すると、部屋の出口に向かうジェシカが一時的に足を止めた。僕は、親に自分の言うことを聞かせたい一心で暴

れまわる幼児のように、今にも大声で泣き叫びそうになっていたが、そんなことをしても兄さんが僕の頭を撫でてあやしてくれるわけではないことは分かっていた。僕はもう、泣けば許して貰える小さな子供ではなかったからだ。

兄さんは僕にタティかエステルを選択することを迫っていた。それはとても残酷で、考えられないほどひどい要求だった。どちらかを助けるためには、どちらかを見殺しにしなくてはならないだけじゃない、この僕にどちらかを、殺すことを選ぶように言っているのだ。泣き言が通用しないことは、兄さんの鋭い言葉つきや目つきによって嫌というほど思い知らされていた。しかも悪いことに、突きつけられたこの問題は僕にとって難問でも何でもなく、間もなく僕の頭に冷酷な打算が駆け巡って僕を失望させた。

考え込むことも、迷う必要もなかった。くしくもこの残酷な状況こそが、馬鹿のようにマリーシアに目が眩んでいた僕に、タティが僕にとってどれほど大事な存在であるかということを思い出させる好機ともなった。

恐らく僕は、タティのためならきっととても多くの犠牲を払うことを厭わないだろう。たぶん、今こうして選択を迫られているのがエステルではなく、マリーシアだったとしても、現実にはどんな人柄かさえよく知らない偶像同然のマリーシアよりも、僕は一緒に育ってきたタティを選ぶだろう。もしいま僕の背中にしがみついているのがタティだったなら、僕は自分が斬られることになろうとも、そうしなければ他の誰かが代わりに殺される状況であったとしても、それでも絶対に退いたりしなかっただろう。

でもエステルのことは、そうでは……なかったのだ。

僕はうなだれて、これから自分が列記とした殺人者の仲間入りをすることに恐れおののきながら、がくがくする足を動かしてエステルを守るべく立ち塞がっていた場所から退いた。

「そんなっ……」

エステルが僕に助けを求めているのに、僕はその声を振り払った。

「アレックス様貴方、わたしを見殺しにするのっ……！？
貴方は、わたしが……、その女より価値がないって……！」
「それで、いいんだなアレックス？」

兄さんの問いかけに、僕はうなだれたまま頷いた。

「アレックス様っ！　どうしてよっ！　どうしていつもわたしばかり大切にして貰えないのよっ！
ねえっ、お願いよ、わたしの話を聞いて、これからは貴方の言うことなら何だって聞く、どんなことでも、ギルバート様よりも貴方を好きになるって約束するからっ、だからっ、だからお願い、わたしを見捨てないでえっ……」

運命に見捨てられたエステルが悲しい悲鳴をあげたが、僕にはどうすることもできなかった。
兄さんが愉快そうに嗤った。

「ふふふ、これはアレックスによる初めての人命に係る決定だな。
素晴らしいぞ。
ジェシカ、アレックスはタティを生かしておきたいそうだ。おまえは動かなくていい」
「畏まりました」

ジェシカは極めて実直に返事をした。

「カイト、おまえの主人はエステルを殺せと言っているぞ。アレックスはその売女は目障りなのだそうだ。おまえの忠誠心を示しなさ

い」

カイトの極めて無感情な返事から間もなく、肉を断つ鈍い音と、聞くに堪えない女の断末魔がして、血飛沫が部屋の中に飛び散り、手を叩く兄さんの歓声が聞こえた。

生暖かいエステルの返り血が近くにいた僕の頬や、服にもかかった。僕は血の匂いがとても嫌いだったが、それをいつまでも嗅ぐことなく意識が遠のいたことには、エステルの身体から噴水のように血が噴き出すのを、見てしまったというのが大きかっただろう。

でもそれはもしかしたら幸いなことだったのかもしれなかった。

「なんだ、アレックスは気絶したのか？　まったく……、この子供の神経の細さはどうにもならんな。

カイト、手間をかけるがアレックスを部屋まで運んで、介抱してやってくれ」

「はい、閣下」

「ギルバート様、これは少し、やり過ぎだったのじゃありませんこと？

それにこのお嬢さん……、とても生命力の強い方だったみたい。母体のエネルギーが強いから、仮に妊娠をしていても――、妊娠初期では、骸骨にはならないわね」

「ああ、そうか」

「まったくお優しいお兄様ね。アレックス様はとんだとばっちりだこと」

「何のことだか分からないな」

「可哀想に、涙の筋がたくさん。恐かったのね。今夜はきっと悪い

夢に魘されるわ」
「いい加減、煩いぞルイーズ。終わったことだ。甘ったれにはいい薬になったろう」
「それはそうと、そろそろウィシャート公のお見舞いに参りませんと」
「ああ、ジェス。そうだった、忘れるところだった。まったく、難儀な。既定路線とは言え、奴はしぶといにも程があるな。
ははははっ、さてどんな感動的な口上を申し述べてやるべきか。アレックスを見習って、ここは涙のひとつも流しておくかな」
「うふふ、悪い方」

第107話　バニーガール（1）

僕はいつでも何処か遠い世界に出かけて行きたい子供だった。
城の外に出ることさえも憚るような内向的な少年だった僕が、実際に出かけていたのは空想旅行だった。地図を携え、四階テラスから飛び出して、青い空を何処までも飛んで行ったりするのはその定番だ。魔法が扱えず、翼も持たない僕が空を飛ぶことなど不可能なことだという常識的な制約が、少年時代には今よりももう少しだけあっけなく緩和された。
空を飛んで、僕はいつでも幸せの国に出かけて行くのだ。
太陽神がこの世界で最初に御創りになった天の王国――、光があふれ笑いさざめく神様の王国の存在は、何も子供のためのお伽話に限ったものでもない。太陽神の経典にも、古い伝承の中にもそれを匂わせる記述は存在し、現実的な日常生活上において平然と語られるレベルではないにしても、多くの人々の心のうちに、何となくそうなのではないかという程度の認識として、今でも引き継がれている夢物語なのだ。
僕はまだ見たことがないし、きっとこれから先も見ることはないかもしれない。
でも空の上の天の王国なんてものがたとえ実在するものではなかったとしても、皮肉なことにこの世界には、確実に悪魔が実在することを、僕は知っていた。

そう言えば僕は生まれて初めてキャバレーというところに行ったのだ。

あの日以降、僕が兄さんと口を聞かないようにしていたら、兄さんは僕の機嫌を直させようと最初はジェシカを派遣して来ていた。でも僕は、何の躊躇すらなしにタティを殺しに行こうとしたジェシカにも頭に来ていたので、彼女のことも無視していた。すると、今度はジェシカの弟がでしゃばって来て、僕を夜遊びに連れて行った。キャバレーと言ってもその内容は様々あるようだが、そのとき僕が連れて行かれたのは、ほんのりと色気の楽しめるダンス上演が中心の店だった。完全に貴族しか入場できない仕様とあって、高級でシックな店内装飾ではあったが、驚愕すべきは給仕娘がほとんどあられもない下着のような姿をしているということだった。

お洒落な流行の髪型にカフス、ネクタイやリボン、それからまるでシルクの下着一枚であるような有り様の女たちが、カクテルなんかを銀のお盆に乗せて店の中を歩きまわっていたのだ。

僕はなんていかがわしい場所なんだと眩暈を起こし、いかがわしい店じゃないと何度もクライドが主張していた。

彼はいつも軽やかで、人あたりがいいのだが、所詮は女を買うようなことを平然とできる男だったのだ――、と思いきや、確かにそこはクライドが言うようにいかがわしい店ではなく、つまりそういう店ではなく、客は主に観劇と飲食を楽しむという店だった。舞台の前に客のためのテーブルや椅子が並んでいて、レストランに専用の小劇場があるというような具合だ。

銘柄のいい葉巻を銜え、金貨を積み重ねて給仕娘を誘惑している者の姿もあった。店の中には、何処かで見たような身分ある紳士の姿もちらほらとあった。

「風俗営業だ」

それでも僕は悪い誘惑に対して、敢然としてそう警告を発し続けていた。

視界にいつも肌を露出した女性たちが入るのでは、おちおち目も開

けていられなかったのだ。

「退廃だ」

「そんなに真面目にしないで、気楽にしましょうって」

その夜は、カイトがいつにもまして楽しそうだった。

彼が楽しそうなのは言うまでもなく、下着みたいな格好をして歩きまわっている女の人たちが、美人ばっかりだったからだろう。

この男はまったく動じずに何食わない顔をしているのだが、彼が何を見ているかなんていうことはお見通しだった。お見通しなのは僕がスケベだということではなく、カイトがスケベなのを知っているからということだ。

「王侯貴族御用達の店ですよ」

クライドがめげずにまだ僕に場所の説明をしていた。

「お気に召して頂けるといいのですが。よろしかったらまたいろいろお連れします。伯爵様は貴方をまだ子供だと考えておいでのようですが、ときには殻を破るべきです。私はいつでも貴方のお力になります。カイト殿も、どうぞ私をあてにしてください」

「俺もいいんですか！？」

「ええ。是非。ウェブスター家の次期当主様とはかねてよりお近づきになりたいと思っていました。貴方の難しい立場は承知していますが……、今度、私の友人たちをご紹介しましょう。将校クラブの中でも特に私と親しい面々です。貴方は味方を得るべきですよ」

彼は何をしていても妙に爽やかなのだが、こんな場所に僕を引っ張って来たからには彼だって勿論スケベなのだろう。内面はきっとろくでもない人間に違いない。

「アレックス様、ここはね、私もメンバーになるには閣下の保証が必要なくらいの高級な店なんです。でもアレックス様ならじき顔パスになります。州領爵からは扱いが別格ですから。気に入った子がいたら、呼ぶこともできます。ほら、二階のラウンジでお酒を飲めるので」

「呼ぶって……？」

カイトがさっそく馬鹿なことを聞いた。

クライドは微笑んだ。どうでもいいが、この男は愛想がよすぎる気がした。上手に立ちまわって敵を作らない感じは確かに素晴らしいと思った。兄さんのような大人の横暴さもないし、年下で序列も下のカイトにも対応が丁寧で好感が持てた。

つまり振る舞いにあんまり欠点を見せない性格が、僕は何か面白くなかった。

第108話　バニーガール（2）

それから僕らは舞台のよく見えるテーブル席について、一通り食事をした。クライドもたぶん若者と言っていい範疇だとは思うのだが、注文するときの手慣れた様子はさすがに僕やカイトとは違っていた。テーブルいっぱいに料理や酒が運ばれて来ると、クライドはそれを僕らに勧めた。彼はまるで僕だけでなく、カイトのことも接待しているような調子だった。

でも僕が何よりも気になったことは、給仕係の女の人たちが、料理を持って来る度に僕にすごく微笑みかけるということだった。初対面なのに、まるで僕のことが好きなんじゃないかと思うほどで、僕は恥ずかしくて下を向いた。

「下着みたいな格好で、恥ずかしくないのか……」

僕は白身魚のサラダを食べながら、彼女の後姿を目で追った。もし僕に気があるなら、ちょっと話してみたいと思わないことはなかったが、そのときはどうしても気持ちが浮かなかった。

「ほんとにね。アレックス様、実は舞台のショーなんかよりも、給仕娘たちのほうがよっぽどエロい格好していると思いませんか？」

カイトは愉快な口調でちょうど僕らの横を通り過ぎた女性のなめらかな太股を示し、僕に取り入った。

「君は絶対そういうところを見ていると思ったよ」

僕は眉を顰めた。

「またまたあ、女の脚はいいもんですよ。挟まれたいって思いませんか？」
「思わないよ」
「でもアレックス様だって、さっきから目で追いまくってませんでした？　ほらさっきの金髪娘の胸とか、尻とか」
「違うよ」

無礼で見当違いな指摘に、僕は頭を振った。

「下着で歩いてるから心配で見ただけだ。可哀想だと思って。風邪をひくかもしれないし……、誰だってそうだろう。カイトだって」
「んん、今夜はむっつりさんなんですか？　こいつは本格的にご機嫌ななめですねえ。
でもクライド様の接待でもなければ、俺なんかじゃこんなところに来られないし……、今夜は嫌なことは忘れて、パーっとしましょうって。ねっ」
「パーっとなんて……、僕はこの店で働いている女の人たちが、どういう経緯で人買いに買われたのかが気になって楽しむどころじゃないよ」
「人買いって……、そりゃまた、そんな言葉を何処で覚えていらしたんです？
でもアレックス様、真面目な話をすれば、彼女たちはそういうんじゃないですよ。と言うのも、この店では給仕係にも、女優の卵とかがバイトしてるのが多いんですって。権力者に名前を売ったり、成功するためのパトロンを見つけやすいってこともあるようです。貴族専門店だから高給だろうし、だから割り切ってやってるはず」
「違う。きっと身柄を売られて、嫌々させられているに違いない。ここの経営者は誰なんだ。呼び出して文句を言うべきだ」
「ええっ、頭が堅すぎますっての」

カイトが呆れた。

「ここは所謂ナイトクラブですから、確かにアレックス様のおっしゃる通り内容のすべてが健全健康とはいかないでしょう。中には悲しい境遇の娘さんもいるのでしょうね」

それまで上品に食事をしていたクライドが、ふと僕の意見を理解するような顔をして口を挿んだ。

「でもアレックス様、そんなふうに小さなことをあれこれ想像して傷ついていては、貴方は疲れてしまうでしょう。

ここは王政府の免状を掲げてある正規店ですから、貴方がご想像されているほどの悲劇的なケースは稀で、多くはカイト殿がおっしゃるように、劇場だけではまだ食べて行かれない、でも野心ある駆け出しの女優たちですよ。女優の卵に会えるというのがこの店の売りのひとつでもあるので、確かな話です。

ねえアレックス様、もしよろしければ、どうでしょう。あの金髪の娘さんをお誘いしてみませんか？　彼女に身の上のお話を聞いてみれば、貴方の心配も幾らかは解消されるはずです」

そしてクライドは僕に笑いかけたが、僕は主張した。

「きっと嫌々させられているんだ」

「アレックス様……」

「それなのに、どうして君たちは平然としていられるんだ。不特定多数の男たちに、例外なく嫌らしい目で見られて、気分がいいわけないじゃないか。

どうして助けてあげないんだ！　可哀想じゃないか！　エステルだって、いつも大切に扱われないって泣いてたじゃないかっ！　どうして助けてあげないんだっ！

僕はエステルを見殺しにしてしまったんだ、僕が彼女を殺してしまったんだっ……、助けてあげられなかった、助けを求めているのに、泣いているのに、兄さんを説得もできなければ黙らせることも、僕にはっ……！」

僕が両手で顔を覆うと、カイトとクライドが顔を見合わせた。

「まだ混乱をされている。早すぎたんです」

やがてカイトが真面目な声で、クライドに話しているのが聞こえた。

不甲斐ない僕を、軍属の子弟たちが笑っているという話を聞いた。たった一度、この手を血で濡らしたわけでもない、平民女の処刑を命じただけのことで、神経をやられてしまったのだと僕を嘲笑っているのだ。

兄さんが過剰に僕を守り過ぎたのだという意見も聞いた。

そのことで、僕がだらしないことで、兄さんまでが批判にさらされかねないとカイトが言った。あのキャバレーには国家の要人が出入りしていることを分からない僕じゃないから、カイトの言うことにただうなだれていた。

「国内には、些細なことでも閣下の足を引っ張ろうと機会を窺っている人間もいるでしょう。ウィシャート公という後ろ盾があったとしても、盤石な立場にあるわけではないんです。

それに昨今の公爵様の暗殺未遂、これだって公爵様自身の権力の揺らぎを意味している出来事ではないでしょうか。

閣下が現在どのようなスタンスでおられるのか、俺には測りかねますが……。
言えることは、本人に弱点がなくても、身内の行動だって叩かれる要因になるということです。まだ跡目の子供がいない以上、弟の貴方がそれでは――」

僕を部屋に送り届けたカイトが立ち去った後、僕は何よりも感情を処理できない自分に苛立った。
照明の落とされた部屋ではタティが心配そうに、しかし僕を遠巻きにしていた。

「……僕に優しくしないのか？」

僕が言うと、タティは囁いた。

「貴方が望むなら、わたしはいつだって……、マリーシアさんの身代わりに……」

僕は噴き出した。

「そんな嫌味を言うなんて……、タティ、君も随分だね。僕は君のために身体を張ったって言うのにさ。
ねえ、君のために女が一人、犠牲になったんだよ。
それなのに、僕の気も知らないで、そんな嫌味を言うなんてね……」

翌朝タティがうさぎのように泣きはらした目をしていて、僕は前日の夜の自分の言い草を後悔することになった。大の男が公共の場で泣き叫んでしまった恥ずかしさを、タティにぶつけてしまった、その自覚はあったのだ。
僕は二度と彼女に声をかけられなくなった。

第１０９話　夢や理想を抱え込んで

真冬の季節は続き、僕はエステルが死んでいったあの瞬間の残像が瞼から離れずに、重苦しい気持ちで何日も塞ぎ込んだ。他の誰も理解してくれないとしても、僕はあの酷い日を忘れるために、気持ちを切り替えるために、そのための努力をしていたんだ。

そして人を殺すことを平然と命じて、しかもそれを見て大笑いできるような兄さんの破壊的な人格を目撃してしまったことを。確かに僕の兄さんはずっと前から残酷ではあった、それは勿論分かってはいたのだが、それでもそういう兄さんの一面をも、忘れてしまうために……。

空を飛ぶことが出来ない僕は、穏やかな薄闇の中にこもるのだ。

ベッド脇のテーブルに熱い飲み物を置き、平日の昼間から終日読書に耽る。これはすべて酷い現実を忘れるための努力だ。

そしてときには傷つき倒れた僕を諭しに来たカイトに、当たることもあった。本来であれば兄さんにぶつけるべき憤懣だということは分かっていたが、僕は兄さんの逆鱗が怖くて、彼に直接言うということが、できなかったからだ。

「軍隊ってのは、そういう機関なんです」

すべての現実と部下の鬱陶しい説教を拒否するべく、寝台の暖かな毛布に包まっている僕に向かって、カイトは話していた。

人が本を読んでいるというのに、先刻から勝手にしゃべっているのだ。それに彼は僕に無許可で僕の部屋に入り込んで来ていた。僕の私室の管理者であるタティは、おとなしい性格だし、身分的な問題もあってこのての邪魔臭い人間に対する番人としては機能しない。

それにしたって寝室までずかずか上がり込んだりする奴はそうそういないのだが、この男のことだから、タティに上手いことを言って、

強引に入って来たのだろう。

「つまり我々は言わば国家の暴力装置ですよ。我々騎士とは、命令があれば躊躇をせずに人を殺さなければなりません」

「そんなの言い訳だ。君は女子供が相手でもそうだと言えるのか？　赤ん坊や、足腰の立たない老人でも？」

僕は言った。できれば早く帰って欲しいのだが、カイトが何を言いに来たのかということは、一応分かっているつもりだったので僕は少し分が悪かった。

「良心が咎めないのかとおっしゃっているなら、勿論死ぬほどきつい仕事です。

でもどのような内容であれ、命令違反は軍の規律に係わります。閣下の面子にも。そしてそうした行為には常に厳重な処罰がつき纏います。アレックス様、ここでは上官の命令が絶対なんです。貴方がおっしゃっていることは、所詮詭弁でしかない。

いいですか、貴方だからこそあのときあんなふうに閣下に盾突くことをしても殴られることもなかった。でももし俺がそんなことをすれば、俺には軍法会議にかけられる価値もない、あの場で閣下に殺されておしまいなんですよ」

「でも人間には、言葉があるじゃないか。どうして皆、そんな簡単なことが分からないんだ。話し合えば、どんなことだって話し合えば……」

「それは相手によりけりでしょう。エステル嬢が話が通じる女だったなら、そもそも俺は最初から閣下に通報なんてしなくて済んだんです。あの結果を招いたのは、彼女自身の落ち度です。過剰な強欲、それに……、つまり諦めの悪さ。

アレックス様、彼女はつける薬がないほど不誠実だった。貴方だってそれは骨身にしみているはずです。彼女の閣下を愛する気持ちは

なるほど確かに真剣で、本物だったかもしれない。でもそれ以外の人間に対する対応こそが、残念ながら彼女という人間の本性ですよ。よく言うでしょう。恋人ができたら、自分以外の人間に対する態度をよく見ろって。特に召使いとか、店員とか、それほど重要でない人物に対する態度を――、それこそが、その人間の本質だからって。熱い恋愛期間が冷めれば、恋人はいずれ自分にもそれと同じような態度を取り始める。これはね、人間観察の基本ですよ。劣等感の裏返しに、他人を軽蔑してかかるのがあの女の本性だ。自分より下とみなした人間には、どんな侮辱をしても問題がないと思っている」

「だとしたって、君が変な気を利かせるから悪いんだ。何も兄さんに言いつけなくたって、もっと他に方法があったかもしれないのに……」

「あれ以外にどんな方法があるって言うんです？　貴方は言いなりになって結婚を決めちまうし、しかも腹の中にアレックス様の子供がいると喚いているとなりゃ、俺には独断で彼女を排除することができないとくる。

閣下は貴方にエステル嬢の処刑を判断することを、期待していたとおっしゃっていたではありませんか。となれば、いずれ消されていたのです。閣下は恐らく彼女を逃がすつもりは最初からなかったでしょう。

平民女が伯爵家に乗り込んで来て、只で済むはずがないという極めて一般的な常識がない、徹底的なまでの自分本位と言うか……とにかくあの非常識さについては俺も哀れだと思います。周りは誰も彼女に教育をしなかったのかと、正直言って同情を禁じ得ない。

ですがこれはどう譬えたらいいか、まあそう、貴方が王城に乗り込んで、この場合国王陛下とはいかなくても、フレデリック王子に怒鳴り込むようなものなんです。理由は思いつきませんが、とにかく何かの責任を取れと貴方が彼を怒鳴ったらいったいどうなるでしょう。どういうことになるか、簡単に想像がつくと思いますが……、これを実行するなんて恐るべきことだ。

そして彼女が貴方にしたこととは、まさにそういうことなんです。しかもあれはまさに貴方の温和な性格につけ込んだ行為でした。殺されても自業自得としか言い様がない。完全に、誰が聞いても完全に彼女の落ち度です」

「でもっ……、泣いてたのに……」

「アレックス様、貴方はそういう物の見方をしちゃいけない」

カイトは僕の言葉を遮った。

「君は冷たすぎるよっ」

「貴方だってエステル嬢を憐れんでいると言うよりは、自分を憐れんでいるって俺には思えますけどね。自己憐憫。貴方にはそういうところがおありになる。

確かに酷い場面を目の当たりにして精神の均衡を保つのが難しい状態に陥っていたことは分かりますが、それだって何日か前までですよ。先日キャバレーに行ったときのような不安定さは、今の貴方にはもう見られない。

ねえ、本当は彼女なんか、貴方にとってどうでもいい女だったというのが本心でしょう。

だいたい貴方、あのときタティを選ぶのに、躊躇さえなかったじゃないですか」

「どっちかを選べって、兄さんが言うからだっ……」

「そうです。そして貴方はタティを選んだんですよ。必要に迫られたからとはいえ、貴方がご自分でね。貴方にはエステル嬢を助ける選択も許されていたのに、そうしなかったのはご自分でしょう。

それなのにこうやって何日も執務をサボるなんて、さすがにちょっとばかり無責任すぎる。

それとも俺に、お可哀想なアレックス様って、言って欲しいんですか？」

「そんなこと言ってない」

「執務も手につかないくらい、そんなに傷ついてお可哀想にって？」
「違う！　黙れ！」

僕が大声を出すと、カイトは少しの間沈黙した。
頭に手をやって、髪を撫でつけていたが、やがてまた懲りることなく僕に意見を言い出した。

「ねえアレックス様、貴方、エステル嬢がその後どうやって処理されたか、知ろうともしませんよね。おかしいですね。それって、おかしいと思いません？　貴方は彼女の死を悲しんでいるはずなのに。花さえ手向けてあげないなんてね。これじゃあ本当に彼女に同情しているとは思えない」

僕は目をそらした。

「いい厄介払いができたというのが、当たらずしも遠からずというところなんじゃないですか。
貴方は閣下が誰かを処刑するたびに、そうやって泣き叫んでいたりはしないでしょう。大抵はまたかという顔で、そうやって目を伏せて通り過ぎている、違いますか？
閣下が期待されている、純粋で繊細なアレックス様。閣下は確かに貴方をそのように見ておいででしょう。彼はどういうわけか……あの自分にも他人にも厳しい方が、確かにアレックス様にだってときには注意したり叱責したりしておきながら、でも彼は貴方に未熟で幼いままであり続けることを期待している。
しかしいつも身近にいる俺に言わせて貰えば、貴方はそうでもない。特に近頃では、割と現実に即して物を考えていらっしゃる。貴方はちゃんと大人になっているんです。貴方は割り切るということがもうおできになる方だ。だから本心ではあんな女の死なんて、心底どうでもいいと思っていらっしゃるのに、依然として悲劇のヒロイン

気取り。
でもアレックス様、そういうのはね、偽善って言うんですよ。知っていましたか？」
「違うっ！　僕はそんなんじゃない、エステルのことを心から悲しんでいるよ！」
「違いますよ。今の貴方はご自分に酔っているだけ。可哀想なご自分に」
「おまえの勝手な解釈を僕に押しつけるな。僕は君みたいに図々しくはないんだ。だからあのことを思い出すだけで、つらくて、つらくて……」
「それで。ではそれが本当だとして、貴方はエステルではなくタティを選んだその選択に後悔があるんですか？　何ならタティが死んだほうがよかった？」
「それは……、でっ……、でもっ、でもっ、死んだ人間をそんなふうに言うなんてっ！
それにだいたいエステルを殺したのは僕じゃない、おまえだったじゃないかっ！」

僕はカイトの言い方が堪らずに、毛布を撥ね上げて怒鳴った。
するとカイトは僕のベッドの脇に立って、僕に話しかけていた口調よりもずっと厳しい顔をして僕のことを見下ろしていた。
僕に注がれているその視線の冷たさに、僕は少し弱気になった。カイトが僕に失望していることが読み取れたからだ。
でもそれも頷ける話ではあった。何しろあの酷い日以降、確かに僕は執務さえ放り出して何日も寝室に閉じこもっていた。

「ええ、そうですよ」

カイトは僕の糾弾を否定しなかった。

「それなのに後悔もない。君は最低だ」
「ええ。殺人ってのは、自分の中で確実に正当化でもしないとね、こんな商売はやってられないんですよ」

カイトは静かに言った。

「アレックス様、貴方はいつもご自分は騎士だとおっしゃっていますが……、貴方にとって騎士とは何なんです？　単にご自分のステイタスのための肩書きなんですか？
だったらこれからはもう騎士だなんて名乗らないほうがいい。人が殺されるところを目の当たりにして、貴方が苦しんでいること自体は否定しません。俺だって過去に家族が目の前で殺される場面を目撃している者だ、そのお気持ちは自分のことのように分かる。でもこうやってまともに俺と議論できるくらいには気持ちが回復しているのに、貴方の一連の態度は騎士として確実に間違っている」
「違う。分かってるよ。騎士とは国家国民を護る者だ。故郷や家族を護るために戦う者だ。
でもずっと昔に家族を殺されたのと、この間エステルが死んだのを見たのでは、全然痛みが違うんだ。おまえは図太いからどんなことだって平気でも……、僕はおまえなんかとは違うんだ」

僕が言うと、カイトは真顔でそれを認めた。

「ええ、そうです」

カイトは無表情で僕を見て、それから何か言い返してくると思いきや、踵を返してそのまま僕の寝室を出て行ってしまった。
また兄貴風を吹かせて、説教なんかしに来てと思いむかむかしていた僕は、あっさり引き下がられて消化不良を起こした。

第１１０話　問題点

それからしばらくまた毛布を被っていた。僕があの口達者に議論で勝ったと満悦する気持ちもないわけじゃなかったが、やがて何となく、カイトに見切りをつけられたような気がして、慌ててベッドから転がり落ちた。

何故ならカイトが本当は平気じゃないことくらい僕には分かっていたからだ。僕が言ったことはさすがに彼への思いやりに欠いていた。そして彼の僕を見る目は明らかな軽蔑に満ちていた。カイトとはつきあいが長いのだが、彼はそんな目で僕を見たことなんてなかったのだ。

支度もそこそこに私室の居間を横切るとき、タティとすれ違ったが、急いでいたことと、僕は彼女になんて言って声をかけたらいいか分からなくて、そのまま突っ切ってしまった。

タティが不安そうな顔で僕を見送ったのが分かった。声をかけてくれれば立ち止まるのに、喜んで彼女を抱きしめるのに、そうしないのは浮気な僕にうんざりして、嫌っているからに違いない。

悲しみが胸に込み上げて僕は振り返らなかった。振り返ることができなかったのだ。そんな現実に直面する勇気なんてないから。

これが僕の問題点なのだと、思わされる瞬間でもあった。何が間違っているのか、自分ではよく分からないが、昔からどうすればいいか分からないとき、もし僕が兄さんだったらと思えば、悔しいけど分かり易い……、彼はどんなに嫌なことがあっても、カイトがこんなふうに執務のサボタージュの苦情を言いに来るまで部屋に閉じこもったりはしないのだ。

それに悲しげな顔をしている女がいたら、すかさず笑いかけて薔薇を差し出すような男だ。そこには下心や人気取りという裏の目的があったとしても、そうでなくては顔がいいだけのことであれだけ女性たちに想いを寄せられたりはしないだろう。

でも僕はタティに薔薇を差し出したら、振り払われはしないかと心配して、行動をすることができない。
でもそれは僕だけが悪いんじゃない、先日もちょっと嫌味を言っただけで、タティが目に涙をためて震えていたせいでもあった。
僕には悪気なんてなかったのに、まるで僕がタティに酷いことをする悪い男だと言わんばかりの態度だったのだ。
だからこそ僕が声をかけられずにいることを、タティはそこのところをもう少し分かるべきなのだが、この行き違いはもはや収拾がつかない様相を呈していた。
こんなことになったのも、そもそもカイトがうっかりタティの前で僕の浮気の話なんかをするから悪いのだ……、しかし廊下に出ると、カイトが扉の前で待ち構えていて、状況が分からずに立ち尽くす僕に対してにやりとした。

「なんだ、起きられるじゃないですか。またショックで寝込んでいるなんて言って、ここん家はアレックス様のことになると、だいたいが大袈裟なんですよね。
ですが貴方はね、ご自分で思っているほど弱くないですよ。昔はそうだったかもしれませんが、今はもう違う。ただちょっとばかりお坊ちゃまなだけ。
でも幾らお坊ちゃまでも、貴方のサインがないと動かせない仕事が机の上に山盛りだって言ったら、もうベッドに戻ったりはなさらないんでしょうね」

カイトは偉そうに言った。

「あらん。本当に起きていらしたわ。カイト様はアレックス様のことを、操ってしまえるくらい仲よしさんなのね。妬けちゃうわ」

カイトの横には、しなを作っているルイーズもいた。生地は厚手だ

がやっぱり大きく胸の開いたドレスだった。先日の給仕娘たちの露出には及ばないが。
マスカラに縁取られた彼女の空色の瞳は、ときどき僕を奇妙な気持ちにさせた。
挑発的な服装ではあるが、特別若づくりしているわけでもない割には、相変わらずカイトと並んでいても大して年の差がないように思えた。

「お友だちに見捨てられたら、悲しいものね」

しかしルイーズは僕と彼女の間には厳然とした隔たりがあるとでも言いたいような、子供にでも話しかけるような生意気な調子だった。
彼女は悪戯っぽく僕に笑って、それから両手で抱え込むほどの大きなキャンディの袋を強引に僕に押しつけた。

「ギルバート様からのお見舞いよ。アレックス様が一緒にお食事してくれないって、あの方、今日もため息を漏らしていらっしゃいましてよ。
あの吹雪の夜からだから、アレックス様に無視されて、もう二週間ですもの。お元気に振る舞ってはいるけれど、結構堪えていらっしゃるみたい。
アレックス様はあの夜とてもつらくて、悲しい思いをなさったわね……、でも、そのお気持ちは分かるけれど、貴方ももう少し」
「兄さんが悪いんだ。僕は彼の顔も見たくない。食事なんて、もう二度と一緒になんか取らないよ」

僕はルイーズの言葉に被せて言った。

「勝手に堪えていればいいんだ。どうせ只のポーズだろうけどね。
兄さんがそんなことで落ち込む柄じゃないことくらい分かってるん

だ。だいたい似たようなことをジェシカもときどき言いに来てるけど、兄さんはどうせ心の痛みなんか感じない人だ。ルイーズ、おまえだってどうせ兄さんに命令されて、言わされているんだろう？　本当はそんなこと心にも思ってないくせに、さも僕を心配しているみたいに言ってさ。これだから大人は嫌いなんだ」

それからカイトに目を向けた。

「勘違いするなよ。僕はステイタスのために騎士を名乗ってるんじゃない」

カイトは飄々と軽く両手を広げた。

「ええ。そう願いたいですね」

第１１１話　迫り来る伯爵

アディンセル伯爵家は国王陛下より賜る六つの領を領有し、地方領主として比較的多くの権限を授かっている。もともとアディンセル家は建国当時から存在する古参の家柄だからだが、兄さんの代になってその発言力は更に増した。王宮では多くの貴族たちによる派閥が存在し、兄さんは言わば最大派閥であったウィシャート公爵派だったからだ。

ウィシャート公爵がそんな強い力を持っていたのは、彼が華麗な血筋によって裏打ちのなされた現王の甥であることによる。

今でこそフレデリック王子を擁立する大きな派閥ができあがっているのだが、それは本当に近年になってからのことなのだ。

まるでウィシャート公爵に王統を乗っ取られまいとする陛下の苦肉の策のように生まれたフレデリック王子殿下は、母親が王女の侍女という、曰くつきの出生歴を持つ。

婚姻を経ずに生まれた子供は、我が国では神への敬虔と愛によってではなく、汚らわしい姦淫による交わりの結果であるという思想から軽蔑対象となり易いが、それは王の子供であっても例外とはならない。勿論、そこには婚姻を経ずに子供をもうけた女に対する侮蔑が大きな要因として加算される。

もっとも父親に権威があれば、そして彼の庇護下に置かれている場合、父親に遺棄されるような子供ではない証明となり、成長によってそうした蔑視は比較的薄らぐのだが、幼少の時分には……、幼児と母親はとかく同一視されがちなものだ。

しかも陛下が溺愛されていたフェリア王女の侍女に、国王陛下御自身が手をつけたということだ。娘の侍女に――、それはあたかも陛下が、その哀れな侍女をフェリア王女の身代わりとした結果なのではないかと、かつての近親相姦の時代もあいまって、暗い憶測と嘲笑が、妾腹の王子殿下に向けられる時代は続いた。

それがどれほどの不遇かと言えば、おいたわしいことに、フレデリック王子は国王の嫡男でありながら、王太子を名乗ることが許されていなかったほどだ。

そうした彼への軽視が、王子殿下の御身が取るに足らない、価値のないものだとされることが、実は殿下のことを護っていたという側面もあるにせよ。

だが下賤腹の幼い王子も、来年には御立派に成人を迎えられる若き王子となった今、その見方は変化しつつある。それがたとえ売春婦の産んだ私生児であっても、成人男子を一人前の人格としてみなさないことはないからだ。

不当に苦境に置かれた者が必ずしもそのまま苦しみの中に置かれることはなく、状況は変化をするものだ。

「ウィシャート公爵様のご容体は、その後どうなったのでしょうね」

ウェブスター男爵、立派な顎髭を蓄えた黒髪の男が言った。貴族の男子としては体格がいいほうではない。カイトやヴァレリアを見る限り、きつそうな目つきはこの家系の色濃い遺伝なのだろうが、デイビッドの場合は人相そのものが悪いようにも思えた。やや頬が削げていて、意外にも色白なためか、五十代半ばの彼の頬にはしみが浮かんでいた。

「大事には至らなかったと公式発表があって以降、表向きにはまるで何事もなかったかのようになっていますが。実際は、かなり酷いことになっていた。とすれば……」

「私が駆けつけたときには、泡を吹いていたよ。せっかくの美男が台無しだった」

兄さんが明快に笑った。

「オーウェル公子のご様子は？　筆頭公爵ともあろうものが、暗殺者を身近に寄せるなど、しかもそのような有様を内輪とはいえ公開されてしまうなど……、私の憶測が確かならば、閣下は早々に取り入る相手を変えておいたほうがよろしいかもしれませんぞ……」

「オーウェルに取り入れと？」

「左様です。今のうち、傷心の公子様にご親切になさっておくが後々よろしいかと。あの子供はかねてより、閣下に懐いておいでではありませんか。現状を考えれば、公子様の更なる信任を獲得しておくが肝要。彼は確か今年十六でしたか」

「今年十七だな。王子殿下と同年生まれだ」

「左様ですか、まあいずれにしろ、彼は若い。閣下も早急に、幼い公爵を意のままに操るためのご算段を。アディンセル家の更なる栄華のために。

しかし此度のことを考え併せると、これは非常にようございました。天がギルバート様の長年のご苦労を御照覧あったのです。トバイアめの目が黒いとあっては、こうはいかんかった。ともかく公爵家直属の連中が、公子様の周りを固めてしまうその前に手を打つのです」

「ふっ、そうだな……」

兄さんは顎を撫で、含みのある笑い方をした。

デイビッドは眉を寄せて、更に話を続けた。

「それにもう一つ懸案が。フィーロービッシャー家の若造めが、しきりにカイトを手懐けようとしているようなのです。奴は自分の派閥にカイトを取り込み新たな権力基盤を作ろうとしている。カイトに私を追い落とさせる気なのかもしれん、あれはけしからん男です。古い序列を何だと思っておるのか」

「ふっ、いいではないか。あいつは姉に血筋の点で引け目を感じている。野心がその発露なのだ。デイビッド、私は無能な人間に用はないが、野心ある部下は歓迎だ」

「閣下」

「何、我が配下間のパワーバランスを壊すような真似はさせんよ。私とてフィーロービッシャー家に権力を集中させることは望まない。ジェシカもクライドもリーダーよりはその補佐にこそ適性があるとはいえ、二人とも能力は低くない。しかもカイトはクライドの救済に恩義を感じて一生それを抱え込む恐れがある。あいつは幼少時の不遇のためか些細な温情でさえ二度と忘れぬ性質だろう。だからおまえはいい加減カイトに地位を与えてやれ」

「閣下、ですが――」

「デイビッド卿。これはサービスだ。アレックスの腹心に相応しい地位と待遇をあいつに与えてやれ。

ウェブスター男爵、貴様は私が二度も同じ言葉を口にしていることの意味がお分かりか。

おまえには男子がおらず、おまえはじきに還暦だ。となればウェブスター家としても今後は徐々にあいつ頼りになるだろう。恩賞を与えずに飼い殺しておけるほど、あれは莫迦者ではないぞ。寧ろ頭は切れる。何より、これはアレックスの権威に係る。いい機会だ」

「は、ははっ、主君命令とあらば……。

しかして我が直系が農奴となる、か……、……ややっ」

そこで突然デイビッドが声を上げたのは、廊下を歩く兄さんが、すぐ後ろにいる僕の気配に気づいていきなり後ろを振り向いたからだ。

「アレックスか！　待ちなさい！」

僕は別に兄さんに用があるわけじゃなく、たまたま僕が廊下を歩いていたら、廊下の十字路のところから兄さんとデイビッドが出て来て僕の前を歩き出したので、僕は彼らの話を聞いていただけのことだった。

「アレックス、その子供じみた態度は何なのだ！」

それなのに、兄さんは僕に歩み寄りながら、さっそく僕を叱った。

「何をむくれているのか知らんが、私に顔も見せに来ず、二週間も一緒に食事を取らないとはどういう了見だ！」

僕は条件反射的に後退りしていたのだが、しかし兄さんがまさかそのまま追いかけて来るとは思わなかった僕は、少し驚いて、それからこれまで歩いて来た廊下を走って引き返した。

「待ちなさい！　返事をしなさい！」

僕は兄さんの言いなりにならないので、待たないし、返事をしないで廊下を全力疾走した。

「どっちが子供だ……」

僕は兄さんを撒いてから、しばらく階段の手すりに手をかけて呼吸を整えた。

伯爵が弟を追いかけて廊下を全力疾走した話は、また新たにこの居城内で語り草となるだろう。三十過ぎのいい大人が、僕を追いかけて来るとは……。

あの上背のあるでかい図体で襲いかからんばかりにこちらに向かって来るのが、どれほど恐ろしいか、兄さんは一度同じ目にあってみればいいと思った。

兄さんは何度も停止命令を発していたが、僕はそれを聞き入れないで城内を走った。僕は日頃あまり運動らしいものをしていないのに対し、兄さんは武芸の修練を欠かさない男なので、もしかしたら息が上がるのは僕のほうが早かったかもしれない。疲労と、伯爵が影のように迫り来る恐怖と闘いながら、どのくらい使用人を掻き分けて廊下を走り、階段を駆け上がったか分からなかった。

そのまましばらく城内を逃げまわった後、僕が兄さんを撒けたのは、兄さんに用があった兄さんの手下か誰かにぶつかって、彼を怒鳴り散らす声が聞こえたのでたぶんそんなところだろう。

もし捕まっていたら何をされたんだと思うと、僕は静かに顔色を失った。

彼はやっぱり何処かがおかしいのだ。

だから僕は、兄さんとは係わり合いにならないほうが賢明なのだ。

しかも思った通り全然落ち込んでないし。

第１１２話　悩める平和主義者（１）

まあ確かに、僕は男らしいと自分でも思っていたのだ。
少なくとも、鏡を見ればどう見ても、僕は大人の男以外の何者でもない。顔はちょっと女っぽいが、気にするほどではないだろう。母上に似てると言っても、まるっきり女に見えるなんてわけではないわけだから、これは寧ろ美形という形容が当てはまることかもしれない。用事もないのに兄さんと並んで歩く気はないが。
鏡に映っているまっ白い僕の上半身は、断じて痩せっぽちなわけではないが、確かに少々頼りない気もした。勿論そんな気がするのは只の気のせいだと思うけど、僕は謙虚なのでそんなふうに思ってしまうこともある。おまけに二の腕が細い気がしないでもないが、これはきっと僕が若いせいなのだろう。だから、たぶんそれほど貧弱ということでもないだろう。大丈夫、僕はかなり男らしいに違いない。
その証拠に、僕の着替えを手伝う召使いたちは、いつも僕のことを男らしくて立派だ素敵だと褒めていた。女性の褒め言葉は信じるべきだ。もっとも普段他所の女の人には、そういうことはあんまり言われないのだが、慎み深い彼女たちはきっとシャイだったのだろう。
身支度を済ませると、兄さんと顔をあわせるつもりはないのでその朝も私室の居間でそのまま朝食を取る。熱いスープとサンドイッチだが、苦手なピクルスを丁寧に摘まんで皿の端に除けてから、パンをかじる。僕がこの変な味のする漬物が嫌いだと料理人には言ってあるのに、こんなものを混ぜて来るのはきっと兄さんからの嫌がらせに違いない。自分だってあんまりお菓子を食べないくせに、筋の通らないことを平気でする人間は軽蔑に値する。
その後しばらく物陰からこっそりタティを見たり、部屋の中をうろうろして、彼女が僕に話しかける機会を窺うのだが、結局その朝もタティは僕に話しかけて来なかった。

僕の姿をみつけると、うつむき加減になってしまうのだ。やはり僕が薔薇を差し出すべきかと思い、近くの花瓶からガーベラを抜き取ってみたこともあった。でも近づいてこれを差し出したとして、どんな反応をされるのかということを少し考えてから、静かに花を花瓶に戻した。人間慣れないことをすると、痛い目にあうということを、僕はエステルの件で学んでいたからだ。

これはやはりタティの機嫌を取るために金目のものを贈ればいいのか……、何しろ、女の人はロマンチックとお金が好きなのだ……、でもタティはろくに宝飾品を身につけるということがない。

そう言えば僕があげた指輪はどうなっているんだと思って、出がけにタティの左手の薬指を凝視したら、そこに嵌っていたので今日のところはよしとした。

あれをはずしていないということは、タティは僕が好きだということだからだ。

僕に命令されたから立場上はずせないだけではないかと、後からちょっと思ったが、そこは深く考えるべきではないのでやめておいた。

執務室に行くと、部屋の中にいた数名が一斉に僕に敬礼をした。

ロビンが近寄って来て、手帳から今日のおおまかな予定を僕に説明していた。

手帳を熱心に読み上げているロビンは、相変わらず美人でお洒落にしていた。オールドローズの甘い香り。今日は件のフレデリック王子スタイルではないようだ。茶色の上着に白いブラウス。襟元は流行の形だ。個性的なフレアスカートも可愛いし、それにそのときは長い髪を高く結い上げて金の髪留めをしていた。

それがフェイクであれ、金という素材は割と使いどころが難しい物だが、彼女の髪の色と金の髪留めは、華美な印象を抱かせないでよく合っていた。

それからピアスは太陽を模った小さなエメラルドで、ロビンが動くたびに耳元で可愛く揺れていた。彼女は毎日のようにお洒落を楽しんでいるのだ。それを見た僕は、タティにもっと着飾って欲しいと

思った。
それは僕が着飾る女が好きというわけではなく、タティが着飾るのが好きになったら、宝石とかを贈ることで機嫌を直させやすいと思うからだ。仲直りにドレスを一着とか、そういうことで済む女のほうが、ある意味では扱いやすい気がした。

「えっ？　このピアスが何処に売っているかですか？
嬉しい。アレックス様が、私に関心を持ってくださるなんて……」
「タティにあげるんだ。それタティにも似合うと思って」

僕が言うと、ロビンは何故だか黙り込んで、急に執務室を出て行ってしまった。

「サボりだぞ」

僕はロビンを追いかけろという意味を込めて、そこら辺にいたカイトに言った。
文官たちと打ち合わせしていたカイトは、苦笑いをして僕を見た。

「アレックス様、今のでどうしてそういう解釈をなさるんですかね……、いやはや」
「カイト、僕は友情と好意から、君に業務を中断して彼女を追いかける権利をあげたんだよ。この前僕にも煩く言ったように、ロビンのことも注意して来ていいよ。
……、何だったら、彼女とそのままデートしてもいいと思うし」
「すぐ戻りますよ。アレックス様じゃあるまいし」
「そんなこと言って、ほんとはロビンが好きなくせに。無理しちゃってさ……」

僕は呟き、執務室のいちばん奥にある執務机についた。

机の上の僕のペン立てやシートがいつも通りの位置であることを確認して、目の前の新聞を手に取る。紙面を広げ、ふと気になって、近くで引き続き立ち話をしているカイトの腕を見たのだが、冬服を着ていても何となくがっちりしているのが分かった。おまけにこいつは確かにスタイルがよかった。立ち姿とか、割と背が高いから余計に見栄えがいいのだ。まあ顔は僕のほうが絶対格好いいと思うけど、ルイーズが僕よりカイトに抱きつくのは、これがめあてということなのだろうか……。

まったくルイーズは単純すぎると思いつつ、僕はちょっといたたまれない気分で自分の二の腕を触った。

「お気にされるくらいなら、鍛えられては」

やがて近づいて来たカイトが目敏くそんなことを言ったので、僕はむっとして言った。

「ふん、僕は平和主義者なんだよ。君のような乱暴者じゃないからね」

「乱暴者って。俺だって仕事以外では殺人なんてしやしませんよ」

「そうかな。でもカイトって、結構喧嘩っ早いんじゃないか。君、売られた喧嘩は買うって言ってたじゃないか」

「買いますよ」

カイトは認めた。

「でも女子供は殴りません。そのくらいの分別はつけています。まあ、ときには脅かしはしますけどね。だから乱暴者というのは心外です」

「じゃあ男は殴るのか？」

「そりゃ当然でしょう。やらなきゃ、こっちがやられちまう相手に

は容赦しない。喧嘩を売って来た相手に背中は向けない。弱きを助け、強きを挫く。それが騎士道ってものでしょ。俺の考えって、何か間違っています？」

「じゃあ……僕は殴るのか？」

「殴らないですよ」

「どうしてそんなことが分かるんだ？」

「愛してるから」

「タティが僕を無視してるんだ」

僕は今朝のことを思い出し、目を伏せてしょんぼり言った。

「無視？　ありゃどう見ても委縮ってんじゃ」

「口聞いてくれない。無視されてる」

「そうなんですか？　んー、まあ、でもどっちかっつうと、最初にタティを無視してたのはアレックス様な気がするんですが、そりゃ俺の気のせいですか？」

「気のせいだよ」

僕は言った。

「そうですか」

「僕は無視してないんだ」

「はい」

「タティは本当に……、さっきのロビンにしても、女っていうのは何を考えているか分からないよ」

僕は悩ましく息を吐いた。

「なんでこういうことになってるのかなあ。ちょっと嫌味を言ったくらいのことで」

「そりゃ嫌味ってより……」

僕が睨むと、カイトは言葉をとめて愛想笑いをした。

「いえいえ。んー、アレックス様、なんかまだ不機嫌ですねえ。まるで俺のこともイラついているみたい。ピリピリしてる」

「別に。そんなんじゃないけど」

僕は頬杖をついて、そっぽを向いた。だがそうだったのだ。

何せカイトにステイタスのために騎士を名乗っていると図星を突かれて頭に来ていたので、僕は随分しばらくの間不機嫌に過ごしていた。

騎士としての僕をあまりに軽視した発言だと無言の抗議を続けながら、だが実際のところ僕は騎士という立場が好きだったのだが、でも騎士という役割は嫌いだった。

武芸の修練も嫌いだった。どうせ戦時じゃないからそんなことは無意味だし、つまりは人生の浪費なのだ。確かに騎士団を機能させることで利益の還元はあるのだが、そんなことはやりたい者がやればいいことだ。運営だって兄さんみたいな血の気の多いのが、趣味でやっていたらいいことだった。

「肉体労働は趣味じゃないんだ」

僕は兄さんの受け売りだけで生きているわけではないが、彼と同じように自分の人生を他人に口出しされることが嫌いだし、はっきり言って苛つくので、午後になって、わざわざ僕のところに武芸の修練を勧めてくる赤楓騎士団の汗臭い面々に、はっきりそう言ってやった。

第１１３話　悩める平和主義者（２）

これがもし国家間の問題であるなら、間違いなく内政干渉として波風が立っているところだろう。いや、僕が兄さんだったなら、こうした出過ぎた行為にはまず間違いなく血の雨が降っていたはずなのだ。

それも只の手下に過ぎないような連中が、僕に指図をするなんて、頭がおかしいとしか言い様がなかった。武芸が立つことがそのまま人間の順列であるかのような思想には疑問を感じるし、武力で何もかもを解決しようという思考回路も受けつけない。

だから執務室から連中を追い払った後、僕はカイトにも言ってやった。

「腕が立つからっていい気になるな」

「ぐはっ、何も俺にまで八つ当たりしなくても」

カイトは冗談のつもりなのか、大仰な身振りでよろめいてみせた。

「しかし、彼らの言い分は正当でしたよ。言いに来たのだって、各々名家の当主級ですし、貴方に苦言を伝えることに何も越権すぎることはなかったですよ。態度もへりくだったものでしたし、だから、血の雨は降らないです」

「でも、僕が訓練を怠っているなんて、奴らは何様なんだ」

「んー、でも、アディンセル家ってのは元来、王家に仕える武官の家柄でしょ。代々男子は武器を取って戦うという軍人家系なんです。王家の方を御護りするのが役割なので、アディンセル家のアレックス様は軍人になって活躍するってのが筋っつうか……」

「僕は戦争が嫌いなんだ」

僕は馬鹿らしいので、カイトの相手をするのをやめた。
これは別に正論を言われたから悔しいということじゃない。

「世界平和こそが、国家目標であるべきだ」
「終局的にはね。でも人間はまだそこまで利口じゃない。周辺に侵略目的の国々があるってのに、武器を捨てるのは間違いですよ。性善説で物を考えるのは女子供のすることです。
たまたま二十年ばかり戦争がなかっただけのこと……、でもウィシャート公爵暗殺未遂なんてことがあったんだし、もしかすると今後、情勢は変化するかもしれない。さっき彼らがアレックス様に赤楓騎士団への参加を促したのも、それを察してのことかもしれません。アレックス様、閣下にそこら辺のことを、聞いてみてくださいよ。簡単に真実の情報が手に入るのに、まだ意地を張って口をきかないおつもりなんですか？」
「おまえは僕が黙ったら黙れよ、なんでしゃべり続けるんだ。それだと、まるで僕が言い負かされたみたいじゃないか」
「ええっ、アレックス様ってば、言い負かされたんですか？」
「……」

カイトの奴、上手いところで三枚目ぶって場を和ますのはさすがだと思うが、僕は生憎と冗談が通じる人間ではないのだ。
だから僕は怒って執務室を飛び出した。
僕にはいろいろと考えなくてはならないことがあるのに、どうも近頃のカイトはやたらと言うことが説教じみていた。まあ確かに、あいつも頭は馬鹿じゃないんだろう。兄さんがカイトの頭脳面を買っていたとは意外だったが……、つまりあいつは護衛としても参謀と

しても使えるということのようだった。
惨殺された彼の家族が、独り残され苦境に立たされた小さな息子に、一族が受けるはずだったすべての恩恵を譲り渡したとでもいうように……、でも僕がむっとしているのに僕の顔色を窺うということをしないのは生意気だった。
僕がこんなに悩んでいるのに、煩いことを言うなんて非常識なことなのだ。一応、カイトは友だちのような気もするので、僕はあいつの無礼を咎めたりはしていないのだが、あいつが僕に生意気な口をきくとき、たまにそうではなくなるし、今はまさにそうだった。
悩んでいるのはタティのことだ。
僕はタティが大事なんだって、マリーシアのことは今でも可愛いと思うけど、やっぱりすごく憧れているけど、でもタティを犠牲にしてまで貫き通せる気持ちではなかったんだって、それに気がついたんだって、タティに……だけど僕にはそのことを上手くタティに伝えられなかった。
彼女はいつも悲しげにしているばかりで、僕を見るたび泣き出しそうな顔をする。だから、これをどう話すべきなのかが……、とにかく僕はこれ以上タティに嫌われたくなかったし、だから上手いことご機嫌を直させたかったのだが、そのためにはいったいどうすればいいかが分からないのだ。
それに兄さんの干渉も怖かった。エステルが殺された日、兄さんは「この子供に最初にあてがうべきは」と言っていたことが胸の奥に引っかかっていた。最初、つまりそれは次があるということだ。
前々から、何でも思い通りにしたがる支配的な男だとは思っていたが、まさか僕の恋愛や人生に、まだ口出しする気が満々なのではないかと思うと、今度は何を企んでいるのかと警戒せずにはいられなかった。
アディンセル家の男が、関係を持った女の生命力がどうのなんていう話について、僕は遅ればせながら調べてみたりもした。あの話がもし本当で、父上の生涯の四人の妻たちも、兄さんの恋人の中にも、

その被害者がいるのが事実なのだとすれば、僕はタティとの関係を見直さなくてはならないからだ。彼女を手放すつもりはないのだが、とにかくいろいろと対策を考えなくてはならなかった。

でも埃をかぶった先祖の手記を辿っても、それに対する苦悩が書かれていることはあっても、問題の原因や何故、そしていつからそんなことが起こり始めたのか、詳細が記されていることはなかった。

結局は古くからそんなことがあり、しかしいつの時代も何とか対処が取れて子孫を残しているという事実があるのだが、それには母体が生まれながらに生命力が強い女性である必要がある、つまり畑を選ぶということだ。

タティでは駄目であるようなことを言って、兄さんとルイーズが悪質な冗談でも言うみたいに笑っていたのを思い出した。それだって本当かどうかは分かったものではないのだが、リスクがある以上、僕はタティをそんな危険に晒したいとは思わなかった。

この問題のひとつの解決法としては、僕が妾を持つことだ。身分のある妻が石女だったり、女子しか生まなかったとき、その打開策として若い妾を持つことが往々にしてあるものだ。

でもそれは間違いなくタティが悲しむ選択だろう。彼女はきっと笑顔で送り出してくれるだろうが……、それに悲しい思いをするのはタティだけじゃない、明確に子供を産まされることだけが目的の妾にされる女だって、きっと酷く悲しいだろう。どう転んでもどうにも爛れた人生の選択であるような気がして、僕の気分は重たくなった。

それにそもそもタティ自身が男子をもうけないと、結婚を許さないと言われていたのだ。

我が国では結婚とは、両家の家長と領主承認をもって有効とされるものだが、この場合タティの父親の意見はまず無視されるにしても、アディンセル家の当主であり、領主でもある兄さんが首を縦に振らない限りはどうにもならないことだった。

この難局を乗り切るには、やっぱりタティに赤ちゃんを生んで貰う

しかないのだが、それをしようと思っても、そもそもタティとの仲自体がこじれていて、にっちもさっちもいかなかった。
それどころかもしうっかり話しかけて、下手に会話なんか持ってしまって、僕と結婚なんてもう嫌だなんて言われたらどうすればいいのか……。
エステルは僕との性交渉を、あんなに人がいる前で気持ち悪いとはっきり言ってくれたのだが、本当はタティだってそれを言わないだけで、僕に気を遣って黙っていてくれるだけで、もしタティもそう思っているのだったら……。
本心では、僕を駄目な男だと思っているとしたら……。

第１１４話　或る冬の休日（１）

ある休日にはカイトが部屋に来ていた。

「脛毛が濃いったって……、だって男の子ですもん」

私室の居間の暖炉前のソファの辺りには、使う予定など一切ないのに例によって兄さんが誂えてくれた僕の甲冑が一揃い転がっていた。カイトはその魔法銀製の脛当てを調整するのに、スラックスを膝までめくって脚を出していた。それをタティが側に寄って、物珍しそうに見ていた。

「アレックス様の脛は、もっと脛毛がないんですよ。人によって違うんですね」

僕と二人でいると、いつも真っ暗な顔をしているのがどういうわけなのか怒り出したくなるくらいの明るい顔で、タティが何ともくだらないことを感心していた。

「そりゃ、でも俺だってそんなに濃くはないでしょ。薄いほうだと思うけど。濃い奴は地肌が見えないくらい生えてるんですよ。それに胸毛もボーボーですよ」

「ええっ」

「腕毛もボーボー。そんで顎も割れてる」

「顎は関係ないじゃないですか、うふふ、カイト様ったら」

そう言って、意図も容易くタティの笑いを取っているカイトを、僕は隠しおおせることができないほどに妬ましい目で見ていた。彼は容易にタティの信頼を得て、彼女をすっかり和ませていたからだ。

もてないとか童貞だとか言うのがどうしても疑わしく思えるほどに、彼の女と絡む能力は、やはり高いと言わざるを得ないのだ。

それにしたって何故脛毛をタティに見せる必要があるのか、体毛を語って何が目的なんだと僕は難癖をつけようと思ったが、脛をさらしているのはあの魔法銀製の脛当てが僕のための特注品であり、むかつくことにカイトの脚が僕より太いからそうしないと嵌まらなかったようだ。

タティの前で男らしさを披露する機会を得て、何やら得意になっているようにも見えるカイトが憎たらしかった。

でも僕はタティの素直な笑顔を久しぶりに見た気がするし、あんなふうに簡単に女性を笑わせることができない僕としては、ここはこうして部屋の片隅で、黙って膝を抱えているしかなかったのだ。

僕にとって本当は誰が大切だったかを、先日の惨い出来事によって、僕は改めて思い知ったところだった。

だから僕はここのところずっとずっと、本当はタティと速やかに仲直りがしたかったのだが、僕は相変わらず対人スキルが低すぎて、何と言って声をかけたらいいのか分からず、上手い言い訳も思いつかず、かと言って押し倒すなんて野蛮な真似もできなくて、タティと二人きりでいるともう間が持たなかった。

勿論、その件に関して僕は何も努力をしなかったわけじゃない。タティが僕に話しかけるようにするために、引き続きわざと目の前をうろうろしたり、タティの視界に意味もなく立っていたりしたのだ。

鈍い女じゃなければ、僕の意図するところが分かると思うが、いかんせんタティは鈍かった。

僕は何日か彼女のイライラするほどの鈍感さに悩み、それから出入りの宝石商に言って、幾つかアクセサリーを揃えたりした。すべてはタティに喜んで貰うためだ。でも考えてみると、それを渡すためにはやっぱり会話がないとならないのだが、タティはなかなか僕の思惑通りにはしてくれなかった。

彼女は僕をおちょくっているのか、それとも僕のことを本当に嫌い

になってしまったのか……、ある午後僕はタティが窓辺の掃除をしている背中をみつめながら思った。
昼間から執務室を抜け出して、私室に何度も出たり入ったりしていたら、何が目的なのかくらい分かりそうなものだからだ。
振り向いて、アレックス様大好きくらい、言ってもいいんじゃないかと思うのに……。
何だったら、寂しかったと言って、僕にキスをおねだりしたらいいのに……。
でも現実のタティは僕の頭の中の妄想通りにはいかなかった。
結局どうにもならなくて困った挙句、思いつきで休日にカイトを部屋に引っ張り込んでみたら、意外にもいい具合に打ち解けてくれていた。だからそれを利用したいと思ってこうして先ほどから猛禽類のごとく仲間に入る機会を探っているのだが、今のところタティとカイトが仲よくするばかりで、僕は入り込めなかった。

「閣下はあれはいい素材ですよね」

二人の話題が男の体毛から兄さんに移っていた。

「三十過ぎてあの美貌でしょ。全然おっさん臭くないし。やっぱりあれが効いているんですかね」
「あれって？」
「王家の血。かなり傍系でしょうけど、太陽神の子孫ってことになりますよね。まあ、本当に神様なんてものがこの世に存在しているのかどうか、俺には分からないですけど……、何せローズウッド王家の美貌は、桁はずれっつうか何つうか」
「なるほど。伯爵様がお綺麗なのは、それが理由だったのかしら」

そんなことより僕はどうなんだと、タティに問い詰めたかったが、僕が容姿の点で明らかに兄さんに見劣りしているのは知っているの

で黙っていた。

「ね、いいなあ。俺もあれくらいの顔がありゃ、人生が違っていたのかなって思いますよ。
でなけりゃせめて王宮で名前を憶えて貰えるくらいのいいとこに生まれたかった」

「カイト様って、そんなことを考えていらっしゃったの？」

「そりゃ、男と生まれたからには出世を夢見ることだってありますよ。もっとも地方男爵だって、俺には大出世ですけど。でもねえ。やっぱり華やかな世界には憧れます。俺もいつかは一国を動かすような、表舞台ってもんに立ってみたいなんてね」

カイトが寝言を言っているので、おまえは身の程を知れと言って、割り込んでやろうかと思ったが、彼は意外にも切実な顔でため息を吐いていた。するとお人好しのタティがすぐに同調するような表情をしたので、僕は悪役になりたくないので言葉を引っ込めた。

第115話　或る冬の休日（2）

「だからアレックス様を見ていると、ときどきじれったいですよ」

カイトはぼやいた。

「そうしようと思えば、幾らだって活躍できる立場なのに。勿論いきなり中枢に食い込むことは無理でしょうが、アレックス様は何と言ってもお勉強ができますからね、割と若いうちに登用して貰えると思うんですよね。

アディンセル家の出なら血筋には言うことがない。どんなに文武に優れていようと、血筋の悪さのために生涯出世が頭打ちなんて連中にとって、喉から手が出るほど欲しいものを、彼は最初から持っているんです。

それに閣下の人脈を利用すれば、あっと言う間に中央の偉い方々とお知り合いにだってなれるでしょう。それも初めからある程度の待遇でね。そういう人たちに面白い話や珍しい物を見せて貰ったり、更にその友人を紹介して貰ったり、将来のためのご自分の人脈を作ることだってできる……それなのにどうして部屋の中に引っ込んで、終日じっとしていらっしゃるのやら」

「アレックス様は、物静かなの」

タティはいいことを言った。

「物静かな男のほうがもてるんでしょうか」

カイトは脛毛を出している自分の格好を忘れて、深刻な顔でまたぼやいた。

「ううん、それは人それぞれかしら。
あっ、もしかして、カイト様……」
「はい？」
「王宮に、お好きな方がいたりして。だからお名前を憶えられたいってことかしら」

この会話でどうしてそういう発想になるのか、タティの考え方はまったく突飛で僕は内心で失笑した。女というものは、まったく愚かで勘違いし易い生き物なのだ。
まあ僕はタティのそういう、まったく論理的でない幼稚な考え方も、可愛いと思うのだが。
タティはおっとりしていて鈍いから、やはり頭のいい僕が、いつでもフォローしてあげないと駄目なのだろう。

「や、やあ…、そんなことはないですけどね」

案の定、カイトは笑ってそれを否定した。

「まあ……、そう、俺も閣下みたいな色男になりたいなあってね。誰しも憧れるような……そうすりゃ何処に行っても目につくし、モテモテでしょ」
「カイト様は出世して、伯爵様みたいに女の人に好かれたいんですね」
「ええ。そりゃもう」
「男の人は、すぐに何人も好きになってしまうのね……」
「ん、いや。まあ、それはどうでしょうね。そこはそれこそ人それぞれだと思いますよ。そういうことができない男もいるし……」

タティが僕のことを思って表情を翳らせたと思ったのだろう、カイトは僕のほうをちらっと見て、それからフォローをした。

「すぐにあやまちに気がついて、反省している男もいます。それにほら閣下だって、ありゃどう見ても誰も好きになんかなっちゃいないでしょ。面白おかしく遊んでるだけで……、まあそれが罪深いんですが……。

あの方もいい加減、身を固めたらいいんでしょうけどもね。もっとも女好きっていうのを自覚して、妻子を悲しませないために敢えて結婚しないのかもしれない。あのライフスタイルが、実は彼なりの思いやりってやつなのかも」

「伯爵様は、春に三十三歳になられますね」

タティは思い出したように言った。タティが大して兄さんに関心を示さないのはいいことだった。彼女は本物の男とは何かということを分かっているのだ。

「カイト様も、春で二十三歳ね」

タティの言葉に、カイトは小さく笑った。

「ええ。早いものでね」

「結婚はなさらないの？」

「えっ、結婚ですか？　んー、何つうかその、その件については、俺にはことごとく決定権がないんですよねえ。ああ、でもいい加減、させるみたいなことを先日男爵様に言われたので、まあ、近いうちするんじゃないでしょうかね。今年するかな？　具体的に期日が決まれば、報告しますよ」

「まるで他人事みたいにおっしゃるのね」

「何せ、それに近いようなもんでして。今後もどうせ立場はないでしょうし……、俺にとってはまだ自分の誕生日のほうが関心があるかな。

そう、誕生日と言えばタティ、あの……毎年カードをありがとう。手作りの可愛いのを。いつも楽しみにしているんです」

「いいえ。わたし、時間だけはたくさんあるから……、今年は是非お誕生日をお祝いしたいわ」

「ほんとに？　それは嬉しいな」

そして二人は微笑みあった。

さすがに放置しておけない親密な雰囲気のような気がして、非常に面白くない気持ちになった僕は、この不愉快さを彼らにアピールするべく二人が向かい合って話しているソファめがけて突進した。二人とも主人の僕が不機嫌でいるんだから、何をおいても僕のことを気にして、僕を大事にするべきなのに、あまりに身勝手が過ぎるのだ。

「うおっ、何ですいきなり突っ込んで来て？」

「君、毎年カードを貰ってるって？　そんな話は僕は聞いたことがなかったよ」

僕は気難しくそう言って、タティとカイトが向かい合って座っているソファとソファの間のラグの上にタティに背を向けて座った。そうすると目の前にカイトの剥き出しの脚があって、僕の目の前に脛毛をさらすなんてあんまり無礼で腹が立ったのでカイトの脛毛を毟ることにした。脛毛を何本か摘まんで一気に引っ張ると、ブチッと小気味のいい音がした。

「ぎゃあっ、痛てて」

「痛くないよ。僕が脱毛してあげるよ。感謝するといいよ」

第１１６話　上手く言えないんだ

僕はタティに背中を向けたまま、彼女のことを見ることができずに少しの間カイトの脛毛を毟った。
僕はカイトを構いながら、意識のほとんど全部が背中のほうにいるタティに向かっていて、僕はタティが僕に声をかけてくれることを今か今かと待っていたが、いつまでも声はかからなかった。
僕の部屋の絨毯の上にカイトの脛毛が散らばるのは気持ち悪くて嫌だったので、横のテーブルに毟った脛毛を並べていたが、やがて何も言わずにタティが立ち去ってしまうと、僕は悲しくなって脛毛を毟る手を止めた。
本当はタティと話したいのに、タティとどうやって仲直りしていいか、僕には分からなかったのだ。
この社会に浸透している理想的な男というもののイメージ像が問題なのだと、僕はそれがまるで別の問題であるかのような難しい言葉をして、少しの間その問題をカイトと議論した。
つまり男とは常に積極的で、能動的で、責任を引き受けることを喜びとする人格と、どんな逆風にも立ち向かう力強さがなくてはならないという固定観念があることが問題なのだ。
僕らはある一定の年齢に達すると、誰からも、個人が属するどの集団においても完全であれと要求されることになる。その通りに出来る男はいい、兄さんのように強気で、最初から人より何でも上手に出来るようなタイプの男は――、だがサンセリウスは男性社会である一方で、出来ない男には容赦がない。男性とは優秀で当たり前という、ある意味では非常に寛大でない、一方的な価値観を押しつけられながら生きなければならないのだが、誰もがその通りに振る舞えるわけじゃない。
それでも人々が抱く理想的な男のイメージ像からはずれることは、即ち恥ずかしいことであり、駄目な男であるというレッテルとなっ

てしまうのだ。
男が弱かったり駄目だったりすることは、あってはならないことだという狭量な思想が、この社会には蔓延っているのだ。
そしてそれがときに僕のような性格の男を追い詰めていると、僕は主張した。
カイトは言いたいことはお見通しだという顔をしていたが、彼のいいところは他人の心情を慮って発言を自粛できるところだ。
でも詰めは甘かった。

「どうせなら異論があることも顔に出すなよ。得意だろう、とぼけるのは。それだと、まるで僕が格好悪い言い訳しているみたいじゃないか」

僕は言った。

「ちょっと勇気を出して話しかけたらいいだけのことなのに、なんでそう他愛のない問題を、何と言うか壮大にしてしまうのかと思いまして」
「失敬な。思慮深いと言ってくれ」

僕が注文をつけると、カイトは恨みがましく僕を見た。

「それにしたって。ご自分の毛を毟りゃいいじゃないですか。まったくもう……」

カイトは脛毛を毟られた自分の左足をさすって文句を言っていた。
しかし、文句を言いたいのは僕のほうだった。

「君、なんでタティとの仲を取り持たないんだ」

僕は小声で言った。

「せっかく呼んだのに」

「ええ？　アレックス様……、そんなことを期待して、俺を呼びつけたんですか？」

「それ以外に、休日に君を部屋に呼ぶ理由が何処にあるんだよ」

「魔法銀製の防具を見せてくれるって言うから。友情を深めたいのかなと」

「それは君をおびき寄せる餌だよ。君も空気を読むべきだね」

僕が言うと、カイトは僅かに苦笑してから何とも言えない顔で絨毯の上にいる僕を見下ろした。

「アレックス様、あのね」

その表情から、カイトが兄貴ぶったことを言おうとしていることが分かったので、僕は警戒した。

カイトは息を吐いた。

「やれやれまったく……、仲直り、手伝って欲しいんですか？」

僕は頷いた。そういう当然のことを、カイトはもっと早く分かるべきだった。

するとカイトは奥のほうに行ってしまっていたタティのことをいきなり呼んだ。まさか、幾ら何でも何の前置きもなくいきなりタティを呼ぶとは思わなかった僕は慌てて立ち上がり、どうしようかとあたふたしているうちに、すぐにタティが側までやって来てしまった。

カイトは笑顔で僕を急かしていたが、僕は何も準備ができておらず、そのせいですぐ側に来たタティの顔を見ることさえできずに、彼女に背を向けてその場で黙ってうつむいた。

カイトは僕のことをつついたり、ちらちら合図を送っていたようだったが、気の利かない取り持ち方が腹立たしくて、僕はそれに応じなかった。

「タティ、アレックス様がね、貴方にお話があるんですって。ちょっと聞いてあげて貰えますか？」

カイトは僕に何を期待しているのか、勝手なことを言い出したが、そんなことを急に言われても、何を話していいのか分からないので僕は黙っていた。
だいたいタティが僕に話しかければいいのに、そうすればすべて解決するのに、タティが僕のことを無視しているのが悪いのだ。
カイトがまた僕の肩をつついたが、僕は彫像のように動かなかった。

「ああっと、えー、なんかちょっと照れているみたい。ねっ、恥ずかしいんですって」

やがてカイトは場を誤魔化すように言った。
でも僕は恥ずかしいわけじゃなくて、何を話していいか分からないだけなのに、そういう解釈の仕方はとても間違っているし、ともすればタティに僕が幼稚な男だという誤った印象を与えかねない。僕に対する礼儀に欠いていると思い、僕はむっとした。
すると今度は、カイトは僕の耳元に口を寄せて言った。

「何でもいいから、普通に接したらそれでいいと思いますよ。無視されてるなんてのは、アレックス様の思い込みですよ。タティはつんけんして口をきかないような、そういうことをする子じゃないじゃないですか」
「……」
「男なら、やっぱりここは貴方からいかないと。理想的な男のイメ

ージ像が悪いったって、じゃあ貴方、弱気でうじうじする男が理想かって言うと、そうでもないんでしょ？
そうやって背中を向けて拗ねていると、貴方がタティを拒否しているように見えているんですよ。アレックス様ね、長身男が周囲に与える威圧感について自覚したほうがいいですよ。只でさえ人を寄せつけないオーラが全開なのに」

カイトは小声で何かくだらないことを言っていたが、そんなことに気をまわしている暇があるならさっさとタティと仲直りさせてくれればいいのだ。僕に説教するなんて無駄なことをするしか思いつかないなんて、結局役立たずだった。やっぱりカイトはもてないというのは本当なのだろう。

「んんー、タティ、できれば貴方から何かアレックス様に……」

やがて場には気まずい沈黙ばかりが多くなり、対処に困ったというような顔をして、カイトはタティを振り返った。

「いいえ……、わたし、全然気にしてませんから……」
「あ、そうです？　うん……」

タティが僕と話す気がないと分かって、僕は悲しくなってますます下を向いた。

「きっと恥ずかしいだけなんです」

背中のほうで、カイトがタティに言い訳をしていた。

「あんまりそうは見えないかもしれないですが、アレックス様は、貴方と仲直りしたいそうですよ。仲直り……、そう、いえいえ、ほ

んとですって。この方はそうなんですよ、なんでしょうねえ……、しょっちゅう男としてなんて言ってるのも、ありゃ威張りたいんじゃないんですよ、そこを察してくださると……、ええ……」

カイトとタティは小声で何か話していたが、タティはほとんど相槌をうっているのか、あまり声がしなかった。

昔から僕がこういう態度を取っていると、兄さんとか、カイトとか、ジェシカとかは必ず僕をちやほやするのに、そう言えばタティにはあんまりこのやり方が通じないことを思い出した。

カイトは今は僕よりタティをちやほやするのに一生懸命になっていた。泣くことじゃないんですよなんて、焦っている声がしていた。

彼はさっきまでタティが座っていたソファの席に置いてある包みを指差すと、一段と愛想よくタティに話しかけた。それはカイトがさっき部屋に来たときに、持って来た焼き菓子の包みだった。傍目からはお菓子が好きなタティの機嫌を、食べ物で釣っているのがよく分かる態度だった。

しかしタティはなんと単純なことか、彼の口先の話術に乗って割と簡単に気をよくしているような態度を見せ始めた。

そうして話題は僕とタティの間を取り持つという、この重要不可欠な案件とは係わりのないまったく別の内容になってしまい、カイトはタティにまで臍を曲げられてはたまらないとでもいうように、タティをちやほやするのに終始した。

「じゃ、タティ、あの、アレックス様のことは本当に何とか……、さっきも言ったと思いますが、おみやげ、お茶うけに食べましょうね」

小さな両手を頼りなく胸のところに持ってきて、カイトになだめられている不安そうなタティの様子を横目で見て、僕は自分があれと同じことをやっているのではないだろうかと、ふと考えたりもした。

第117話　親愛なる君

カイトに上手いことを言われて機嫌を直したタティがまた向こうに戻ってしまったのを確認してから、僕はカイトの無能さに文句を言った。責任転嫁ではない、これは純然たる事実だからだ。彼は僕とタティの仲に関する切なる依頼を達成していなかった。

「仲直りできてないじゃないか」

カイトはそれを理解するように何度か頷いた。

「僕は怒ってるんだぞ」

「アレックス様の異性に対する対応が、十歳児並みということを想定できなかったんですよ」

「何だよそれっ。僕を馬鹿にするのか」

「いや、馬鹿にゃしてませんけどもね。頭がいいんだから、もうちょっと上手に立ちまわれないものなんでしょうかね。まあ、それと言うのも閣下に猫可愛がりされてお育ちになったせいなのかもしれませんね」

「兄さんの何処が猫可愛がりだ。いつも無茶苦茶言ってるし、偉そうだし、僕のやることに口出しするし、でも僕が兄さんに何か言っても子供は黙っていろで終わるんだ。兄さんほど自己中心的で身勝手で冷酷な人間もいないよ」

しかしカイトが引き続き呆れたようにして僕を見ているので、僕としても確かに自分の対人能力の低さには自覚があり、自分のとても苦しい胸の内を、まるで頼りない言い訳のようにカイトに打ち明けた。

「仕方ないだろう、だってタティが悪いんだ。タティが僕に話しかけてくれないからだよ。タティは僕を嫌いなんだ。だからどうしていいか分からなかった。今だって、悪気があって黙っていたんじゃないんだ、ただタティはさっきから、カイトにばっかり優しくしてる……」

「そりゃ貴方が話しかけないからでしょ。彼女もどうしていいんだか分からないんですよ。話しかけて冷たくされたらどうしようって顔してるじゃないですか。きっと貴方がまだマリーシアに夢中だと思っているんだろうし」

「でも僕はもう、マリーシアのことは忘れるって決めたんだ。タティと結婚だってするんだよ。もう二度とこの気持ちが動くことはないだろう。それなのに、どうしてタティはそれを分かろうとしないんだ？」

「そら…、言わなきゃ分かりませんわな」

ソファに座った格好で、カイトは頬杖をついて僕を見上げた。その態度がちょっと偉そうだったので、僕は嫌味を言った。

「君、そんなに女心が分かるのはどういうわけなんだ？　男娼だったのか？」

それで、カイトの表情が一瞬固まった。もしかしたら、また僕の胸倉を掴みたくなるような、あんまり触れてはいけない話だったのかと思って僕は内心で慌てたが、どうして主人である僕がカイトなんかを怖がらなくちゃならないのかと思ってすぐに気を張った。

するとカイトが苦笑した。

「いえね、あれはデマ」

「デマ？」

僕が言うと、髪を撫でつけながらカイトは頷いた。

「養子の俺に対する悪意ですよ。アレックス様なら知っていらっしゃるでしょうが、上位伯爵である上に、あんな強いご性格の閣下に口を利ける未亡人なんて、領内にゃいやしませんよ。国内にだって僅かでしょう。

それにあの方が、人事について女に口出しさせると思いますか？貴方にさえ、そんな権限は未だほとんど与えていないっていうのに。まして女に斡旋なんかさせません。

まあ、依頼主が公爵夫人辺りだって言うなら話は別でしょうけど、それだって余程弱みを握られているか、惚れているかしなけりゃ無理ですよ。まして、俺が愛人になって取り入れるような範囲のご婦人にそんな権力をお持ちの方はありません。だから、俺が男娼っていうのはあれはデマです。

十四まではウェブスター家でご存知の通りだし、その後はアレックス様にお仕えしながら昼夜詰め込み勉強をして、俺が買われたのはそもそも剣術でしたから当然閣下に見放されまいと武芸の修練、ときどき赤楓騎士団の遠征にも参加しなけりゃなりませんでしたし、さすがに誰かの愛人をやってる時間はありませんでした」

「つまり、やっかみか……」

「たぶんね」

カイトは僕を見て片手をあげた。

やがて僕は静かに納得した。

「そういうことなら、これはさすがに酷いな。君に対する酷い名誉棄損だ。エステルが知っていたということは、かなりの範囲に広まっている話ってことになる」

「ま、でも成り上がりの平民ってところは当たってますからねえ……。平民なんてものは、普通まともに相手になんかされやしません

から。
三代前に男爵家のお坊ちゃんがいたとしたって、もし俺が彼の男系男子じゃなけりゃ、今頃は農作業でもやっていたかもしれない。自分たちの邸で使っている、家畜同然の召使いたちと大差ない出身の人間が、自分より取り立てられているのが許せないって心情は、俺としても理解できますしね」

半ば他人事のようにカイトが呟いた。

「疑うわけじゃないけど、どうして君がその子孫だって分かったんだ？」

僕がたずねると、カイトは腕組みをした。

「彼の形見の品が我が家に残っていたことと、貴族様が駆け落ちして来てあそこに住んでるなんてことをいつまでも憶えている村落の老人の証言……」

彼の表情は断然自信がなさそうだった。

「だから実は全然関係ない、赤の他人っていう可能性を拭えないです。形見の品があるって言っても、厳密には確実な身元の証明にはならない。俺が件の駆け落ち三男の子供ってんならともかく。俺はその曾祖父の顔を見たことさえないですから」

僕は頷いた。

「それで君は自分が平民だなんて言ってるわけか。変なところで律義と言うか、図々しくないんだな」

「何たって八分の一ですからね。もっと貴族の血が濃くたって、平

民とみなされてる人間は世の中にゃいるでしょうし。例えば金持ち商家に嫁いだお嬢さんの子供とか、どんなに生活が豊かだろうと、彼らは区分けとしちゃ立派に平民ですからねえ。
だから……もし違っていたら、俺、首を刎ねられちまうかな」
「でも違うという証明もできないんだし、仮に間違えていたとしても、それはデイビッドが間違えただけで当時子供だった君に責任はないと思うんだけど……」

そうはいかないのがこの社会だ、という言葉を飛ばして、僕はこう続けた。

「でも幸いと兄さんは君を買っているようだし、僕もその考えには賛成だ。君の身柄は僕が引き受けているので、悪いようにはしないから大丈夫」

カイトは息を吐いた。

「ほんと、アレックス様ってのは上流貴族様にしちゃ珍しい温和な方ですよな。
俺は貴方に出会って本当に人生が変わりましたよ。待遇もそうだし、本当に……、俺は貴方の幸福のためならいつでもこの生命を捧げられます」
「嬉しいね。嬉しいけど……、僕は君には自分の幸福を追求して欲しいよ。君の家族の分まで」

僕はそう言って、カイトを見た。
するとカイトはぽかんとして、それから酷く居心地が悪いような、困惑したような顔をした。

「アレックス様、そういうことを、普通偉い人は手下にゃ言わない

もんですよ。俺は貴方の手駒なんです。いざとなったら、俺を切り捨てるくらいのシビアな気持ちを持っていて頂かないと」
「うん、でも親友だからね」
「親友？」
カイトは不意に僕に明るく微笑みかけた。
僕はちょっと照れ臭くなって兄さんを引き合いに出した。
「兄さんも言ってるじゃないか。僕らのこと、仲よしグループとか親友とか。
兄さんは人づきあいが好きなのか得意なのか知らないが、とにかく交際関係が手広いからね。僕に友だちが誰もいないっていうことが、理解できなかったんだろう。納得できなかったと言うか。だから無理やり僕にカイトは友だちだって刷り込ませようとしていたところがあったと思う」
「ふむ」
「だから……、勿論、今では僕もそう思ってるよ」
「親友って？」
「うん」
「それはすごく…、ああ、アレックス様がご自分でそんなことを言ってくださるなんて、こりゃ八年もお仕えしてきた甲斐があったってもんですよ。俺、泣いちゃうかも」
「まったく君は大袈裟なんだ」

第118話　僕を許してくれる？

やがてタティが、お茶のセットを銀のお盆に乗せた召使いを連れてやって来た。
カイトは言わなければ気持ちは伝わらないなんて言っているが、僕とタティの仲は、そんじょそこらの即席のカップルとは訳が違うのだ。何しろ生まれたときからずっと一緒にいるのだから、僕が何を考えているかを、全部は分からないにしても、それでも大事なところはタティはやっぱりちゃんと分かってくれていると思っている。少なくともそうあるべきだと思うので、僕はひたすらタティが僕に話しかけるのを待っていた。無視されていると言ってむくれるつもりはもうなく、僕は男らしく、ただ静かに待っているのだ。僕は女みたいにうじうじしていないから、タティの目の前で堂々と待っている。でも自分から話しかけるのはできない相談だった。何故なら、タティに拒否されたら僕はきっと死んでしまうからだ。

「どうぞ、ゆっくりなさってくださいね」

タティはカイトにそう声をかけ、向かい合うソファの真ん中にある低いテーブルで、白い陶器のポットからカップに丁寧にお茶を注ぎ始めた。香ばしい香りがいっそう漂い、カイトがその香りを鼻で追いかけていた。
僕はぶつぶつ言いながら、ソファの隅っこでカイトが持って来た円柱のお菓子の缶を引っ張っていた。タティが僕を嫌がっているかもしれないから、彼女が逃げないように遠慮して、僕はこの部屋の主であるにも係らず隅っこにいるのだ。それにまるで缶が開かない振りをして間を持たせているようにも見えるかもしれないが、実際に蓋が開かないのだから仕方がない。
だからタティが僕に話しかけてこないのは、僕が缶を引っ張るのに

夢中になっているからで、僕がタティに嫌われているということにはならないのだ。

「やあ、美味しいです。いい香り」

カイトはお茶を一口飲むと、カップを軽く上にあげて、タティに愛嬌を振りまいていた。

彼は殊にプライベートな空間では、女主人の機嫌を取っておくべきだということを分かっているのだろう。

「よかった、これ、実家から送って来たもので……」

タティがお茶の説明や淹れ方の手順を、頭を寄せてカイトにしている間も、僕は一人で孤独に開かないお菓子の缶と格闘するはめになっていた。

タティはカイトに構っている暇があったら早く僕に関心を向けるべきだし、お菓子の缶が開かないことに気づいてどうしたのかと声をかけるべきなのに、本当に変なところで意地っ張りな性格はよくないと思った。女とは、僕に親切でなくてはならないのだ。

「安物だな」

タティは話しかけてこないし、缶もびくともしないので、遂に僕は文句を言った。

「長期保存用です」

しれっとした顔でカイトは軽口を叩いた。

「遠征軍御用達。マッチョな容器です」

「まったく変な物を持って来るなよ、ここを何処だと思っているんだ」
「アレックス様もたまには身体を鍛えるべきだと思ったんですよ。貴方、男らしくありたいんでしょ？」
「何を」
すると、タティが僕を見てくすくす笑った。
それを見て、僕は途端に情けない顔になり、それから恐る恐るもう一度タティを見た。マリーシアにのぼせあがって、結婚しなくてもいいなんて言い放ったり、意地悪したり、それだけのことをしたのだから当然だったし、覚悟だってないわけではなかったが、それでも僕は彼女に拒絶されるのが恐くて、ずっとタティの目を見ることができなかったのだ。
でも目があうと、タティはいつもみたいに僕に優しく微笑ってくれた。
「タティ、あの……」
僕はなんて言っていいか分からなくて、手を伸ばしてタティの手を握った。
「あの、僕ね……」
「はい……」
タティはそれを振り払ったりしなかった。僕らはただお互いを愛しく見ていた。言葉なんて、必ずしも必要じゃなかったのだ。
それで、それまでのささくれ立っていたような気持ちが一瞬にして引っ込んだ僕は、とても嬉しい気持ちになり、取り敢えずタティにすごくキスがしたかった。だからそのままタティをみつめ、僕としてはそうしようとするところだったのだが、身を乗り出して顔を近

づけたところで、どうしたことかタティがそれを嫌がるみたいに慌てたので、僕は血の気が引いた。
一瞬、僕のことを拒否するつもりなのかと冷たいものが胸の中を満たしたが、タティはどうも過剰に恥ずかしがっているだけのようだった。

「どうしたの？　僕が嫌い？」
「いっ、いいえっ」

僕の質問に、タティはものすごく熱心に首を横に振った。と言うことは、彼女は僕が好きだということだ。
初めてキスするのでもないのに、こんな純情な反応があるだろうか？　恥じらいのある女とはいいものだ……、僕はそういうのはかなり好きだった。
だからまたタティにキスしようと顔を寄せたのだが、タティは顔を真っ赤にして僕に抵抗した。僕の肩を触って、頼りなくいやいやをした。

「タティ、恥ずかしいの？　恥ずかしいなら目をつぶって」
「アレックス様……、でも、でも……」

タティは眼鏡の向こう側から潤んだ瞳で何かを僕に訴えかけていた。大人の男であり、紳士でもある僕は彼女の言わんとするところを的確に理解し、僕の肩に触れていたタティの左手を指輪ごと握ると、彼女に囁いた。

「分かってる。もっと高い宝石を買ってあげるよ。ドレスも、髪飾りも、靴も。君に嫌な思いをさせたおわびに、何でも好きな物を買ってあげる。タティが欲しい物を、欲しいだけプレゼントしてあげるよ」

「アレックス様、いえ、そうじゃなくてっ……」
「遠慮しなくていいよ。僕は最近、女心が分かるんだ」
「で、でもっ」
「タティに何でも買ってあげる。お菓子でも指輪でも何でも。でもキスが先だよ」
「みんなが見ています……」

タティは弱った顔をして、上目使いに僕に言った。
僕はそこでようやく、この部屋の中には常時数名の召使いや、カイトがいることを思い出した。我が国ではそれがたとえ夫婦であれ、人前で唇にキスするなんて、とんでもなく大胆で、勇気がいることだ。勿論、良識ある人々からは確実にいかがわしいと眉を顰められること請け合いの恥ずかしい行為なのだ。
もっとも僕からすれば、召使いなんていうのは人格を意識する対象ではなかったのだが、タティからするとそうもいかないのだろう。僕はそれほど周りが見えなくなっていたつもりはなかったのだが、タティと二人だけの秘密であるべき一連のやり取りを、彼らにまんまと観賞されてしまったわけだ。
僕は振り返って、この不届きな連中全員を次々と睨んだ。
それによって召使いたちは蜘蛛の子を散らしたように逃げて行ったが、カイトは素知らぬ顔で引き続きとぼけた。

「最近は女心が分かるんですか？　すごい」

彼は両手を広げて微笑んだ。
この男は、本当にふてぶてしい、いい度胸をしているのだ。
僕は開かない缶をテーブルに投げ出し、早急にカイトに言った。

「君、そろそろ帰っていいよ」
「ええっ、またそんな。まだいいじゃないですか」

「駄目だよ」
「何だったら半刻ほど別のお部屋に行ってますが」
「いや、自分の部屋に帰ったら？」
「貴方が俺を呼んだんですよ」
「でももう帰っていいよ」
「まだ何もしてないのに。三人で遊びましょうよ」
「脛毛を毟ったろう？　十分だ」
「だって、今日も雪なのに俺の部屋には暖房がないんですよ。この時期、休日はいちばんきついんです。だって真冬ですよ。俺、あの部屋にいたら凍死しちゃうかも」
「ストーブくらい買えばいいだろう。それか、家を一軒借りたいって言うなら、金ならいつでも融通してあげるよ。とにかく邪魔なんだ」

僕は言った。

「邪魔！？　親友を追い出すんですか？」

カイトはカップを持っていたが、僕はカイトの腕を持って彼を立たせた。

「前から思ってましたけど、アレックス様、男に相当冷たくないですか？」

僕はカップを持ったカイトをそのまま部屋の出口へ向かって追い立てた。僕の頭の中は、取り敢えずタティにキスして、それから彼女を寝室に連れ込むことで占められていたのだ。
アディンセル家に纏わる罪業、あの恐ろしい話を聞いていてなお、そのときの僕にはまだ、いまいち当事者意識がなかったと言っていい。となれば、午後の予定は決まったことだし、カイトなんかと遊

んでいる暇はなかった。

「じゃあまた月曜日にね」

僕は言いながら、部屋の扉の取っ手に手をかけた。

「ねえ、この世界に愛は存在しないんですか？　梟の雛は愛に飢えて今にも凍えかけているのに。この哀しい鳴き声が貴方には聞こえないんですか？　ぐすんぐすんっ」

未練たらしく非常に鬱陶しいことを言いながら、しつこく泣き真似をするカイトの背中を押して、彼を廊下へ放り出そうと扉を開くと同時に、しかし思いがけない出来事が起こった。

「ここねっ、ここにいるのは分かっているのよっ！」

ヴァレリアお嬢様が乱入して来たのだ。

第１１９話　恋の成就は程遠く（１）

ドアのところで揉み合っていた僕らは、どちらからともなく彼女の登場に愕然としていた。
いったいどうやってサンメープル城に入り込んだのかという疑問については、すぐに愚問だと気がついた。彼女の父親であるウェブスター男爵は伯爵家直属の貴族であり、当主である兄さんの側近だ。彼女の立場ならば父親について易々と入城することは可能だった。
もっとも、それでもアディンセル家の人間の生活区域に無断で立ち入って来るというのは、尋常なことではなかった。ウェブスター男爵の実娘という、丁重に扱われる材料があったとしても、厳重な警備を抜けなくては許可のない部外者がここに立ち入れることはないからだ。
いったいどんな理由を使ったのか分からないが、これには彼女の人並み外れた非常識、もとい行動力が垣間見えた気もした。

「いったい、どうやってまたこんなところに……」

ヴァレリアの行動を窘めようとしたらしいカイトに、ヴァレリアはさっそく険しい顔をして噛みついた。

「ちょっとカイト！　何よその反応は！
おまえこそ、今日は朝からわたくしが来ることを分かっていて、避けまくっていたのはどういうつもり！
まったく信じられない無礼者よ。このわたくしが来たら、何か問題でもあるってこと？　迷惑だとでも言いたいのっ？」

呼ばれてもいないのにこんなところに乗り込んで来るなんて、どう考えても問題だったし、迷惑に決まっているのに、その自覚がない

彼女の強気に僕は恐れ入った。

「いえ、そうではないですけども……」

「だったら嬉しそうな顔のひとつもしなさいよ。おまえは本当に気が利かないんだから。これだから平民っていうのは駄目ね、無教養で、卑しくて。

ねえカイト。まったく平民風情がいいコネクションを掴んだものね。こうやって好きなだけアディンセル家のお城に入り浸れるんですもの。結構なご身分じゃないの、さぞいい気分なんでしょうね？

本来なら、わたくしがその立場に立つはずだったのに……、女だというだけでこんな野良犬よりも実力を低く見積もられて……！

おまえ、内心ではわたくしを馬鹿にしているんでしょ？　分かっていてよ、そんな殊勝な顔してたって、おまえの考えそうなことくらい」

「いえ……」

「ちょっと。分かっているでしょうけど、わたくしはおまえの吐く息なんか吸い込みたくもないのよ。それに臭いから、あんまり側に近寄らないで頂戴。ほら、退いて！」

お嬢様はそう言ってカイトの胸板に手をやって乱暴に彼を押し退け、勝手に僕の部屋に入り込んで来た。僕はカイトのすぐ横にいたのだが、彼女は僕には注意も向けずにそのまま目の前を素通りした。

しかし僕はヴァレリアを僕の部屋に招待した覚えはなかったので、この訳の分からない展開をヴァレリア本人にではなくカイトに無言で抗議し、彼女を廊下に連れ出すようにと目線で指示した。

ところがカイトはかぶりを振るばかりで僕の言うことを聞かなかった。それどころか、僕に何とかしてくれと言わんばかりの反応を返して来たので、僕は困ってうつむいた。

自己主張の強い女の人のことは、エステルのことでトラウマにもなっていた。しかもヴァレリアの気の強さは率直に言って、もしかす

るとエステルよりも手強い気がしたのだ。
二人の対決がもしあったら、いったいどっちが相手を泣かせるか……、まあ、そんな恐ろしいものは見たくもなかったが。
そうしている間にも、ヴァレリアお嬢様は長い黒髪を指で背中に流しながら、勝手に僕の居間を歩き、まっすぐタティに近づいて行くのが分かった。
僕はソファのところにいたタティに、急いで奥に引っ込むように指示した。タティは焦っているようだったが、僕の指先の指示に気がついたようだ。
けれどもそれを逃さないとばかりに、タティに近づきながら、高圧的にヴァレリアが言った。

「おまえが噂の芋娘ね。ふふん、何度か見たことはあるけど、相変わらずなんとまあ残念な容姿だこと。
あの生意気なカティス家のハリエットだって、幾らかはおまえより可愛げがあってよ。まあハリエットだって所詮、わたくし以下ですけど。
まったくおまえはあんまりださくて地味だから、わたくし侍女たちと見分けがつかなかったわ……、ねえおまえ、ちょっとお話があるのよ」
「お話……ですか？」

タティが例によってびくびくしたように応じると、ヴァレリアは命令調でいきなり言った。

「おまえ、アレックス様の愛人の座を降りなさい。彼はわたくしと結婚するのよ。
わたくしこれでも良家の頭領娘ですもの。夫に愛人がいるなんて、そんなプライドを踏み躙られる状況には、我慢ができない性質なのよ。おまえも女なら、わたくしの言っていること、分かってくれる

わよね」
「えっ…？」
「アレックス様と別れて、さっさと消えろと言っているのよ」
「えっ、そんな……」
「分からない娘ね。このわたくしが、アレックス様の妻になることに決めたとこう言っているのよ。
平民と馬鹿な結婚をするくらいなら、彼のほうが幾らかはましだと気がついたの。何がましかは聞かれても困るけど、そうね、血筋だけは確実にましだわ。だからおまえは今すぐ荷物を纏めてここを立ち去りなさい。お役目ご苦労様。お手当は、アディンセル家からでなく、わたくしの実家であるウェブスター家から出してあげます」

タティが、泣きそうな顔で僕に真意を確かめる視線を向けて来た。
僕は慌てて両手を振って、ヴァレリアの言うことを否定してみせた。
そんな話は聞いたこともなければ、誰かの冗談の中にさえ出たためしもないからだ。

「で、でも……、アレックス様は違うとおっしゃっています」

タティが言うと、口許に手をあててころころとヴァレリアは笑った。
僕とカイトのいる場所からは、毛皮つきの赤いコートを着た背中しか分からないが、恐らくあんまりいい笑顔なんかではなかっただろう。

「あんな気弱で他愛もない男、これから幾らだって納得させるわよ。
このわたくしにかかれば、そんなことは造作もないわ。
でもそれはもうおまえとは係わりのないこと。
とにかくこれは命令よ、おまえは今すぐここを出て行きなさい！」

ヴァレリアが声を大きくし、タティがいよいよ泣きかねない顔をし

たので、僕は急いでソファのところに行って、二人の間に割って入った。

「待ってよ、君はいったい何の話をしているんだ。タティに変なことを言うのはやめてくれ。僕は君とは結婚しないよ。タティと結婚するんだから」

僕が言うと、タティが安堵した顔をして僕を見上げた。その仕草が非常に可愛いので、僕は頼りにされて男として気分がよかった。しかし同時にヴァレリアのほうでは、まるで僕に愛を裏切られたとでも言いたいような、傷ついた顔をした。

僕とヴァレリアは友だちですらないというのに、なんで僕が裏切り者みたいに睨まれなくちゃいけないのか、訳が分からないが、そのままヴァレリアは感情的になって、本当に怒り出した。

「ちょっと貴方！　どうしてそんな女を選ぶのよっ！　酷いじゃないのっ！」

「えっ、酷いって何なんだ……」

「アレックス様、貴方はわたくしのことを捨てるおつもりっ！？」

「いや、そういう言い方は……、誤解を招くじゃないか……、まるで僕らの間に何かがあったみたいな……」

第１２０話　恋の成就は程遠く（２）

僕はお嬢様の言い分に当惑しつつ、僕のやや後ろにいるタティをちらっと見たが、案の定、握った両手を胸の前に持って来て、たちまち不安そうにしていた。エステル、マリーシアと続いて、これ以上僕に浮気の容疑がかかるのは、僕の望むところではなかった。

僕はふと思いつき、居間の扉のところにいるカイトに目をやったが、彼も何だか、面白くはないような顔をしていた。

「ヴァレリア、そういうのは、よくないと思うよ。分かっていると思うけど、僕らは断じて無関係だ。君とは年末以降一回も会ってないだろう……、僕は君と個人的なつきあいはないし、君には手紙すら書いたことがない。何かあったみたいに言わないでくれ」

「あら、いいじゃありませんの、だってこれからあるんですから！」

ヴァレリアは言葉の内容に反して、僕を見上げて凄んで言った。

「ないと思うよ」

僕は保証した。

「いいえ、わたくしがあると言ったらあるのよ！」

ヴァレリアは強気で押した。

「わたくし貴方と結婚することを希望していますの。これを貴方は否定できて？」

まるで正義は自分にあるとでも言わんばかりの自信が理解不能なの

だが、生憎と僕はヴァレリアの脅迫に応じる必要のない立場にある人間なので、きっぱり答えた。

「否定できるよ。だって僕、タティと結婚するから」

するとヴァレリアは眉を吊り上げ、それから全身で怒りを表現した。

「ちょっと、だからどうしてそこでその芋娘を立てるのよっ！　アレックス様、貴方、頭おかしいんじゃなくて!?　ここはわたくしの立場というものを考えなさいよっ！」

「なんで僕が君の立場を考えるんだ」

「煩いわね！　とにかく、貴方はそうやっていつまでもガキみたいな我侭を言わないで頂戴。貴方は黙ってわたくしと結婚すればいいのよ。

アレックス様、貴方は道を歩いていて盗賊に襲われている女がいたら、助けに入るでしょう。当然そうじゃなくてっ！?」

「勿論だよ」

僕は頷いた。

「じゃあわたくしを助けなさいよ。わたくしはまさに今、それと同じか、それ以上の危機に瀕しているのよ!」

ヴァレリアは大袈裟に自分の胸に手をあて、もう片方の手を広げて力説した。

「盗賊?」

僕が首を傾げると、ヴァレリアは僕の背中のほうを指差した。

僕は振り返って、ドアのところで腕組みをしているカイトをまたち

らっと見た。

「彼がってこと？」

ヴァレリアは強く頷いた。

「ええそうよ、あいつは強盗だわ。卑しい賤民の分際で、ウェブスター家に押し入って、何もかもを掠めて行こうとしている」

「ああ、そういうことか……」

「だから、分かったら貴方はおとなしくわたくしを助けるべきよ。しのごの言っていないで、さっさとわたくしをアディンセル家の花嫁に迎えると言いなさい！　あの男の目の前で、はっきりと言ってやって頂戴！」

ヴァレリアは強気に言った。

「そうすればすべての問題が、綺麗さっぱり解決するんですから。ウェブスター家の持つ財貨や荘園とかを全部あいつにくれてやったって、全然問題にもならないような身分も土地も財産もある男のもとに嫁ぐことができれば……、わたくしはこの苦しみから解放される。ねえっ、外堀を埋められて、もうこれしか方法がないのよ！」

ヴァレリアは焦っているようだったが、僕にとってはどうでもいい話だった。

要するに彼女は僕と結婚したいのではなくて、カイトと結婚するのが、嫌で仕方ないということらしい。しかもどうも彼女の頭の中には、無理やりカイトに迫られて困っているとでも言いたいような、奇妙な設定があるような気がした。

勿論これは空想好きの人間の推測なのだが、あながち間違ってはいないような、そんな滑稽な緊張感がヴァレリアにだけあった。

「じゃあ、兄さんに結婚を申し込んだらいいんじゃないかな。君が希望するような地位と財産を持ってるし」

僕の穏便な提案を、ヴァレリアは激しく一蹴した。

「馬鹿ね！」

そして自分の癖のない黒髪に手を入れると、更に邪魔臭いほど自己主張した。

「わたくしの髪をご覧なさいよ、この豊かで美しい黒髪を。毎日侍女どもにたっぷり時間をかけて手入れをさせて、最高の状態を保っている美しい自慢の髪よ」

「うん。素敵だね。つやつやしてる」

僕は答えた。

「あ、ありがと、……まさかここで褒めてくるとは思わなかったわ。貴方、なかなかやるわね。貴方のいいところはあの下男と違って、美しい女を素直に美しいと褒められるっていうところだわね……。だけどそんな程度じゃ駄目ね。わたくしが美しいなんて、そんなこと当然のことだから、その程度のことでわたくし煽てられたりしないわよ。

常識的に考えて、悪いけど、今の時点では貴方よりは伯爵様のほうがわたくしの夫とするのに相応しいと思っているのよ。仕方ないでしょう、どう考えても、貴方なんかじゃわたくしに釣り合わないもの。

でも彼は金髪女しか相手にしないってお話じゃない。誰もが表立っては言わないけど、伯爵様は誘拐してでも金髪女を確保する、金髪

好きのど変態なんでしょう。ブロンド女っていうだけで興奮するなんて、いったいどんな変態よ。おまけにどSだそうじゃない」

「それには同意せざるを得ない」

僕は何と言うか身内の痴態が恥ずかしく、頬を染めて素直にそれを認めた。

「だからわたくし、考えたのよ。今の貴方でなくて、五年後、十年後の貴方と結婚すればいいんじゃないかって。そうすれば、今よりは多少はましな男になっているでしょうから。

いいこと、これは勘違いしないでよね。わたくしは仕方ないから貴方で妥協してあげることにしたのよ。決して貴方なんかがいいってわけじゃないってこと。

まあとにかく、そんなわけだから貴方は素直にわたくしと結婚しなさいよ」

「嫌だよ」

「どうしてよっ、貴方ね、たった今レディの髪を褒めておきながらその返答はどういうことよ。乙女を口説いておきながら、それはあんまり無責任じゃないの。これだからお坊ちゃま君は頭に来るのよ。レディに恥をかかせるおつもり！？」

「いや、でも……」

「煩いわね！　とにかく、そういうことですから。

わたくし今日からここで暮らしますから、その芋娘のことは今日中に追い出してくださいね、貴方」

ヴァレリアお嬢様は、どう考えても僕に好意を持っているようには思えないのだが、妻になるという話を引っ込めなかった。

彼女はそのまま勝手にソファに腰かけ、脚を組んだ。彼女がタティに挑戦的な視線を向けると、タティは召使いのように縮こまって下を向いた。

いきなりやって来たヴァレリアのほうが、女主人としての風格と言うか、そういうのがあるというのも奇妙な話ではあるのだが、実際そうで、彼女はそのまま僕の部屋に落ち着いてしまった。

第１２１話　腕の中の僕のタティ（１）

ヴァレリアはまったく僕の妻女気取りでソファに陣取り、最初はタティに命令して、お茶を淹れさせていた。タティは僕のお嫁さんになったら身分がうんと上がるんだし、別にヴァレリアの言うことなんか聞かなくてもいいのだが、まるで召使いみたいに言われた通りにしていた。

しかもヴァレリアは不愉快な言葉でタティをいびろうとするので、さすがにタティがいたたまれないと思い、僕は早々にタティに近寄って、彼女に奥に引っ込んでいるように言った。

するとタティに逃げられたヴァレリアは、僕の部屋の召使いたちをみつけると、今度は腹立ち紛れに彼女たちを掴まえて何か小言を言い出した。

使用人に対するヴァレリアの態度は確かに堂々としたものだった。召使い相手にさえ何処か遠慮があるタティとは振る舞いがまるで違っているのだが、逆らうならおまえを頭から暖炉に押し込んでやるとか、悪い貴族の見本のような言葉が出てくるのはある意味では大したものだった。勿論悪い意味でだが。

しかしウェブスター家ではどうか知らないが、少なくとも僕は使っている使用人をそんなふうに酷く扱ったりはしない主義だった。だから僕の部屋の召使いたちは皆ヴァレリアを恐がってしまい、何かと理由をつけて部屋を出払ってしまうか、タティのように奥に逃げてしまった。

さして時間がかからないうちに、静まり返って閑散とした休日のリビングで、この部屋の主人である僕は一人で虚しく先ほどのお菓子の缶を引っ張っていた。

僕はこの部屋の主人として、この馬鹿げた状況に立ち向かうべきなのだろうか？　ある種の人々は勿論そうするだろう。しかし僕は、あまり争い事は好まない性質だった。

それにそう、夏辺り、窓を開けっ放しにしていると、部屋の中に虻なんかが迷い込んで来ることがあるだろう。女の人たちは大抵悲鳴をあげて過剰に怖がったりする。でも彼らは、構わなければ襲いかかって来ることはないのだ。ああいうのには、近づいたりしなければいいのだ。そのうち放っておいたら、勝手に窓の外に出て行ってしまう。ヴァレリアもたぶん、そういう虫とかと同じなんじゃないかと僕は思ったのだ。

まあヴァレリアは、自分から攻撃対象を見つけるのが得意なようなので、虻よりは蜂かもしれない。危険度は、スズメバチくらいだろうか。そしてか弱く嫌がらせが通用する人間がことごとく逃げ出してしまったとなれば、まあ当人としてはごく当然の振る舞いをしているだけなのかもしれないが――、この好戦的なお嬢様の次なる目標は、おのずと決まってくるのである。

「この馬鹿下男っ！　どうしてくれるのよっ！」

お嬢様は高飛車な態度で仁王立ちになり、今はリビングのドアのところにいるカイトをどやしていた。

「昨日お父様が、お父様がおまえと結婚させるなんて言い出したのよ！　それも聞いて驚かないで、今年ですって！

伯爵様が、これからいろいろ立て込むから今年の後半以降にしろっておっしゃるから、今すぐってことにはならないみたいだけど……でも結婚させられるわ！

ねえっ、こんな酷い仕打ちがあって？　このわたくしに農民の血を引く子供を産めって言うのよ！　カイト、汚らしいおまえの子供をよ！

ああっ、考えただけで汚らわしくて、おぞましくて、わたくしもう死んでしまいたい……！

お父様は所詮男だから、こんな下男の子供を産まされる女の気持ち

なんか、訴えたって聞いてさえくださらないし……」

相変わらず本人を目の前にして何という言い草かと思うが、カイトにいちゃもんをつけているときのヴァレリアというのは、普段に輪をかけて活力に満ちているように見えるのは気のせいだろうか。またヴァレリアがいると、カイトもカイトでいつもの明るくて冗談好きな性格を出さないのだ。カイトはヴァレリアが僕の部屋に登場してからずっと、警戒していると言っていい顔をして、まるで衛兵みたいに部屋の入口に突っ立っていた。

ヴァレリアからすると、他の女には愛想がいいくせにどうして自分には冷たいのかという思いがあるかもしれない。しかしカイトからすれば、両親や妹たちを殺した仇の娘であり、しかも自分につらく当たる女に微笑みかけろというのは、他に好きな女がいないとしたって、幾ら何でも無理な相談だろう。

まあそれでもカイトはヴァレリアより体格の大きい彼女の婚約者なので、タティのように庇ってやるまでもないだろうと、僕は静観を決め込んでいた。

ヴァレリアは両手の拳を握り締めると、更にカイトに向かって捲し立てた。

「こんな酷いことになったのは、カイト、全部おまえのせいよっ！　どうせおまえが分も弁えずにお父様に上手いことを言ったんでしょう。そのおかげでもうわたくし、恥ずかしくて社交界に出られやしないわ！

夫が平民なんて、あんまり酷いわよ！　夫が平民だなんて、こんな、臭くて地べたを這いずる蛆虫だなんてっ……！

こんな男と結婚したら、もう誰もわたくしとまともに口を聞いてくれないでしょうし、お友だちだって離れて行ってしまうのは目に見えているわ。いい笑い者よ。それどころか、今後皆さんがどんな蔑んだ目でわたくしを見るかと思うともう外も歩けないわよ……、ね

えっ、それなのにこんなのってあんまりよ、おまえときたら今日だって、本当に狡賢くて下品なんだから。いやらしいっ！　大嫌いよっ！」

カイトは入り口横の壁に寄りかかり、相変わらずカップを両手で握ったまま、ヴァレリアに侮辱されても何か言い返すでもなく、傍目にも哀れに思えるほど大きな身体を小さくしていた。

彼はまるで世界一気弱な男のように、彼女に怒鳴り散らされるままになっていた。

僕のことを説教する割に、自分だって肝心なときにはてんで情けないじゃないかと、僕は少し思った。誰にでもそういうところはあるだろうが、カイトの場合は特に、時と場合によって人格さえ使い分けているとしか思えない対応を取っていたのだ。

虐待された子供の過酷な精神状態について、幸運にも僕には幼少期に学ぶ機会さえなかったのだが、もしそのときの僕がそれを知っていたなら、カイトのそれが有無を言わさぬ暴力から身を守るための哀れな条件反射だったと、理解することができただろう。

でもそのときの僕に分かったのは、彼の反応には女に対する遠慮や配慮だけで行われているわけではない、苦痛が垣間見えるということだけだった。

そしてそれをいいことに、ヴァレリアの言葉の暴力は度を過ぎていた。

僕は仲裁に入るべきかどうか迷ったが、しかしせっかくヴァレリアの関心が僕から離れたというのに、下手にこの話に口出しをして、問題に巻き込まれたくなかった。

それにヴァレリアがどんなに喚こうと、僕と結婚すると言い張ろうと、彼らの結婚はもう決まった話なのだ。彼らは近いうちに婚約をするだろう。実質婚約しているも同然だったし、周りもそのように見ていたのだが、最近デイビッドが兄さんにそういう報告をし、兄さんが承認したのは事実のようなので、年内結婚は本決まりのよう

だった。
こういうことにならないために、好きな女を僕に言えば、手を尽くしてやったのに……、僕は横目でカイトを見て、心の中で呟いた。

「おまえ、本当は他に好きな女がいるんでしょう」

ふと、ヴァレリアが核心を突くようなことを言ったので、僕は缶を引っ張る手を止めた。
僕がそっと振り返ってみると、ヴァレリアになじられて壁に背をつけているカイトが、何とも言えない顔をしていた。彼は否定も肯定もしないで、微かに顔を歪めているだけだった。こんな状況自体が不快でならないという気持ちを、噛み殺している表情とでも言えばいいのか――。

「結婚してください、お願いしますと頭を下げなさい」

カイトのそうした考え自体も気に入らないのだろう。ヴァレリアは僕のいるソファからは背中しか分からないが、その声色は悪意に満ちていた。

「おまえはみすぼらしい村落生まれの下男なのよ。何をおいてもこのわたくしに、頭を下げるのが当然でしょう。うちで使っている使用人どもは、わたくしの命令ならば自分から肥溜の中にだって飛び込むし、石だってかじってみせるって言うのに。ましてやおまえが、わたくしの命令にそんな反抗的な顔をするなんて許し難いわ。
昔は素直に靴の裏を舐めたくせに、今はアレックス様に飼い慣らされてこのていたらく。お父様の鞭を恐れて逃げまわっていた野良犬は何処へ行ったのかしら。
でもね、わたくしはアレックス様のように甘くはなくてよ。
おまえは分不相応な野心を持って、まったくどうしようもない男だ

わ。さっき伯爵様は他人事のように笑っていらしたわ、憎らしいわたくしと結婚をしてでも、ウェブスター家の所有する爵位と、確かな地位が欲しいんだろうって……、いいことだって彼は言っていたけど、わたくしがいったいどんな気分だったかおまえに分かるかしら！

この卑しい物乞い。乞食。おまえはそうまでしても権力を手に入れたいんでしょう。だったら、お願いしますヴァレリア様って言いなさい。わたくしへの屈従を誓うのよ。さあ、言いなさいよ」

カイトは無言で首を横に振った。

すかさずヴァレリアはカイトの頬を勢いよく撲った。

「言いなさいよっ！　この下男っ！　薄汚いドブネズミの分際で――」

「何をするんだっ」

結局、ヴァレリアがあんまりカイトをこきおろすのを見ていられなくなった僕は、カイトのために口を出した。

「カイトは君の夫だぞ！　夫を殴るなんてどういうつもりだよ」

僕は後ろから彼女を叱責した。

第122話　腕の中の僕のタティ（2）

「君は頭がおかしいのか？　幾ら何でもそれはやりすぎだ。あまりに酷いよ。
駄目だ、こんなんじゃ。僕はこういうことに口出ししたくなかったけど、これはもう見ていられないよ。
ヴァレリア、僕は君がカイトの妻になることには反対だ。悪いけど、カイトが不幸になるのを見過ごせない。だからこの結婚はなしだ。
カイトには別の、もっとおとなしくて優しい、カイトを大事にしてくれる女をやりたいから、君も適当な縁談をみつけて」
「はあっ！？」

ヴァレリアは振り返って抗議の目を僕に向けたが、僕は怯まなかった。

「アレックス様貴方、貴方にそんな口出しができるとでも思っていらっしゃるの？」
「できるよ。兄さんとデイビッドには僕から言うよ。すんなりとはいかないだろうけど、僕はこの件に関しては、駄々を捏ねてでも訴えたいくらいだ。とにかくこれはないよ、君。そんなことじゃ、カイトが安らげる場所がないじゃないか。
まったく酷い女がいたものだよ――、呆れて物も言えない」
「ふざけないで！　だって、これは下男なのよ。わたくしとこの男とでは、まったく対等な関係じゃないのよ。
貴族に逆らう反抗的な平民に対する対応としては、こんなことは寧ろ甘いくらいだわ。主人に逆らうなんて、殺されたって文句が言えないことなのよ。このくらいのこと、当り前じゃない！」
「違う。カイトは貴族で、君の夫になる男だ。君がカイトの主人だったのは過去の話だろう。彼がウェブスター家の籍を得る前の一時

期そういう上下関係にあったかもしれないが、でも基本的にはそもそもカイトは君の義兄だったはずだ。その考え方は最初からおかしい。

そして、これからは彼が君の主人になるんだよ。次の男爵様だよ。何を言っているんだ」

「いいえ、平民よ！」

「ああそう、君の中ではそうなんだろうね。じゃあそれでいいじゃないか。君は一生そう思っていれば。

でもここでの評価はもうそうじゃないんだよ。カイトは僕より優秀で、弟の僕より兄さんに気に入られてるくらいさ。彼がもし金髪女だったら、今頃はベッドに引きずり込まれてるだろうってくらいね」

「いや、それは勘弁してください」

カイトが撲たれた頬を押さえながら、真面目に言った。

「何ですって？」

ヴァレリアが浮気を疑うような顔をしてカイトを見た。

「おまえまさか、伯爵様と寝たってことっ！？」

「それくらい評価が高いっていうことさ……」

そのせいで想像力が豊かな僕は、憤慨する気持ちを殺がれたのと、ちょっと気分が悪くなって発言を訂正した。

「とにかく、そういうことだから……、結婚を破談にされたくなかったら、ヴァレリアはもっとカイトを大事にするべきだよ。そうやっていつまでも可哀想な扱いをするなよ。彼が周りから嫉妬混じりとは言え平民だって馬鹿にされている、これを君が一緒になってやってどうするんだ。

カイトの妻になる女なら、彼を庇って、励ましてやるのが本当なんじゃないか。

タティは僕のことをそんなふうに酷く言うことなんてないよ」

「あの芋娘は、玉の輿に乗ろうと必死だからよ！」

「タティはそんな女じゃないよ」

僕はむっとして言った。

「とにかく、デイビッドがカイトを女婿に決めた以上、彼は君の夫になるんだ。何にしても君はこれからはカイトを頼らなくちゃいけないようになるんだから、そうやってカイトに意地悪なことを言うのはやめて、もっと優しくなったほうがいいよ。女の人は優しいほうが可愛いんだから」

「そんなこと、わたくしは認めないわ！」

ヴァレリアは叫んだ。

「どうしてわたくしの結婚なのにわたくしの意見が無視されるのよ！」

「君の将来を思えばこそじゃないか。カイトと結婚をさせれば、デイビッドは君をずっと自分の手元に置いておけると考えたんだろうし、自分の血筋を家系に残すこともできる。

それに君は今後もウェブスターの名前を名乗って、お嬢様として君臨していられるんだからいいこと尽くめだ」

「だからって、どうしてカイトと結婚しなければいけないのよ！」

「どうしてって、だからいま理由を言ったじゃないか……」

「それにわたくしは貴方と結婚するって言ったはずよ！」

「いや、それはどう考えてもあり得ないよ。僕は証書にサインしないし」

「世間知らずのお坊ちゃまのくせに、分かったようなことを言わな

いでよ！」

ヴァレリアは理不尽なことを言って、いっそう声を張り上げた。

「わたくしはボンボンの貴方なんかと違って、いつだってまともなことを言っているわ。

そうよ、本来わたくしはすべてのことにおいて並みの男より、カイトより上なのよ！

だけどわたくしは女だから、実力を正当に評価して貰えない。でもわたくしが男だったら、絶対こんなことにはなっていない！」

「それはどうかな」

ヴァレリアの言い分に、僕は思わず笑った。

「僕、君の考えって変わってて面白いと思うけど、ヴァレリアは男だったとしてもあんまり社会に出るのは向いてないと思うよ。だって君、びっくりするくらい自分の都合でしか物事を考えられないだろう。

それが何であれ、相手の心情を考えられないそういうやり方は、他の人間の気分をとても悪くさせることだ。第三者のことすらね。君に侮辱されて、まさかカイトがいい気分でいるとは思わないんだろう？

つまり君は気が強くても、まったく世間向きじゃないんだ。だから親族に若い男子が皆無のウェブスター本家の娘で、武芸さえ身につけているのに、招集がかからなかったんだね。

そのままお嫁さんになって、カイトに養って貰ったほうがいいと思うよ」

僕は親切心で言っているのに、ヴァレリアは何がそこまで悔しかったのか知らないが、唇を噛んで僕を睨んでいた。

でも僕は、この聞きわけの悪いじゃじゃ馬に道理を言い聞かせるために、引き続き優しく言った。

「社会に出る能力がないからと言って、女の人はそんなことを恥じる必要はないんだよ。女の人は、父親や夫に守られていることが当たり前なんだからね。僕らは妻子を養い守ることが当たり前なんだし、それがこの社会なんだ」

「貴方……、このわたくしをそうまで侮辱した挙句にっ……、このわたくしに子守りをして暮らせって言うのっ!?」

「そんなに嫌がることじゃないだろう。それに子供と遊んだり、世話したりするのって、楽しそうじゃないか。僕はそういう女の人のほうが好みだよ」

「じゃあ貴方がやりなさいよ!」

「いや、僕はやらないよ。だって僕は男だから子供を生めないし。君がやればいい」

「そんなの嫌よ!」

悲鳴のようにヴァレリアは言った。

「君、女の人なのに本気で赤ちゃんが欲しくないの?」

「当り前じゃない! 女なら誰しも子供好きと思ったら大間違いよっ!

まったく冗談じゃないわよ、それもこんな、薄汚い男の子供なんて、汚らわしいったらないわっ! 汚物も同然じゃないのっ!

そんなのを産んだら最後、わたくしの人生の破滅だわっ!」

ヴァレリアは腕を振って主張した。

「貴方、いったい女を何だと思っているのよ。アレックス様、貴方には女性に対する思いやりも、デリカシーの欠片もない! 本物の

最低男だわっ！」

ヴァレリアが僕を見て最低なんてはっきり言ったので、僕はまたむっとした。僕が女性に対する思いやりがないなんて、まったく心外なことだったからだ。

女の人というのは、基本的に人生のすべての場面において保護を必要とするものだと僕は思っている。彼女たちは弱く、ほとんどの人は男より体格が小さいし、昼間だって独り歩きすることが危険なくらいか弱い。悪い人間の標的にだってなりやすいだろう。だから子供同様守ってあげなければならないのだ。それが紳士というものだし、良識ある男の採るべき行動であって、僕は女の人を馬鹿にしたことはないし、おかしいことは何も言っていないはずだった。

「何だよ、何をそんなにむきになっているんだ」

僕は分からずに首を傾げた。

「君、じゃあいったい何がしたいんだ。だいたい、ここに何しに来たの？

僕と結婚するって宣言しておきながら、カイトをいびっているのは意味が分からないし……。

それとも君、実はカイトのことが好きなんじゃないの？　だから苛めているとか？

だとしたら、君はまったく信じられない幼稚さだね。頭が十歳児並みなんじゃないか。好きな人を苛めるなんて、僕なら考えられないことだよ」

「ちっ、違うわよ、貴方、どさくさに紛れて何言ってるのよっ！

誤解のないように言っておきますけど、わたくしはこんな奴、大嫌いだわっ！

世界でいちばん、憎んでるって言っても言い過ぎじゃないわっ！

カイトに比べたら、貴方のことは愛しているような気がするくらいよ。だからわたくしはこんな下男と結婚なんて、まっぴらごめんなのよっっ！」

「ああそう……、分かったよ。分かったけど、でもそれをカイトに言ったって、どうにもならないと思うんだけど。

そんなことが分からないわけはないと思うけど、直談判するなら、やっぱり兄さんのところに行かないと無意味だよ。ここでそうやって主張してても」

「な、何よっ、そんなこと、当然、分かっているわよ！　当り前じゃないっ！

わたくしはただカイトに会いに……じゃないっ、ああっ、本当に、貴方はなんてイラつく男かしら！　さすがに口答えが多すぎよ！」

「口答え？」

「男社会の上部にいる奴の認識は、こんなにも不公平で残酷で一方的なのねっ……、いわれのない被差別者の苦しみが、これほどまでに分からないなんて！」

「何言ってるんだ。少なくとも君にそんなことを言う資格があるのか？

差別と言うなら、君だって散々カイトを平民って……」

「お黙りなさいよっ！」

しかし、それで僕は本当に黙らされてしまった。

ヴァレリアが、僕の足を勢いよく踏んだからだ。

第１２３話　腕の中の僕のタティ（３）

彼女は僕の足の指を思いっきり踏んだのだ。靴の上からとはいえ、まったく酷い女だった。それで僕は黙るどころか、この痛さに耐え切れずに、その場に蹲ってしまった。

指先がじんじんと痺れるようで、こんな乱暴な仕打ちは未だかつて兄さんにだってされたことがないほどだった。これはまったく酷すぎる気の強さだった。

そうしているうちにも、頭上からカイトが遠慮がちにヴァレリアお嬢様を非難する声が聞こえてきた。

「ああ、なんてことを。お願いしますよお嬢様、幾ら何だって相手を考えて……、アレックス様はね、貴方より偉いんですよ。貴方のお父上様よりも階級が上なんですよ。

そんな相手に普段俺にするようにして貰っては、彼の一存で俺どころか男爵様の首だって飛びかねないんです。これは脅しじゃないんですよ……」

「煩いわね！　カイトのくせにわたくしに口答えするつもり！？」

「いや、口答えではなく、お嬢様にもそろそろ常識的振る舞いってものを……。

とにかく、今すぐアレックス様に謝罪をしてください。ウェブスター家の邸の外では、貴方の道理は通らないんです。貴方が使用人たちにしているようなことを、アレックス様もまた貴方に対しておできになるんですよ」

「平民はお黙りなさいよ。下男に説教される覚えはないわ。それとも何？　おまえまさか夫気取りなわけ？

だとしたらふざけないで、わたくしはそんなに落ちぶれていないのよ。お父様が結婚を決めたからと言って、わたくしが素直に応じるなんて思わないで頂戴ね。とにかくわたくしはおまえごときと結婚

なんて、絶対ごめんなんですから！」

そこにタティまでもがばたばたと危なっかしく駆け寄って来るのが分かった。

こんな凶暴な女を相手に、か弱いタティが勝てるわけはなかったので、彼女には奥の部屋に隠れておいて欲しかったのだが、痛さのために声が出せなかった。

「アレックス様っ」

タティは僕のすぐ側までやって来ると、何を思ったのかお嬢様に対して文句を言った。

「何をするんですかっ！？　貴方は、貴方はどうしてこんなことをするんですかっ！？」

でも案の定喧嘩腰どころか、今にも泣きそうな、怯えて震えているような声だったので、ヴァレリアお嬢様に対しては何の脅威にもならなかった。僕はとにかくタティを庇わなければならないと思って、顔をあげた。

すると目に飛び込んで来たのは、お嬢様がこの上なく不機嫌な顔をして、今まさにタティに言い返すところだった。

「出たわね芋娘！　だっさい芋娘の分際でこのわたくしに、何？」

ヴァレリアは腰に手を当てて、傲慢な口調で言っていた。僕がちょっとばかり言い過ぎてしまったせいなのか、彼女の怒りは頂点に達しているような様子だった。

ヴァレリアは手を伸ばし、タティの髪を指先で弾いて鼻で笑った。

「ほんと、おまえって可哀想なくらいの田舎娘よね。あんまり芋臭いので呆れちゃったわ。
そうやって髪型やドレスで誤魔化したって、所詮は下級貴族。おまえも、三代前辺りは農民だったんじゃありませんこと？　ほら、頬っぺたが赤くなっていてよ」
「アレックス様に、謝ってくださいっ」

ヴァレリアはタティの頬の辺りを指差して嘲笑っていたが、タティはまた言った。

「嫌よ」

ヴァレリアは貴族的に手を振って、それを撥ねつけた。

「おまえの指図は受けないわ。おまえはいったい何様よ。この頭の悪そうな芋娘風情が。
まったく冗談じゃないわね、誰がどう見てもわたくしほうが家柄がいいし、わたくしのほうが賢そうだし、わたくしのほうが美人じゃないの。
ねえおまえ、こうやって男に囲われて性の捌け口にされているご気分はどんなものなのかしら。おまえみたいな下女に道徳やモラルについて説教をしても無駄だということは分かっているけど、結婚もしないで男の相手をするなんて、なんてふしだらな女なの？
この恥知らず！　そういうのはね、世間では売春婦のすることって相場が決まっているのよ。まともな家庭なら、平民女だってもっと慎みというものを知っているものだわ。
しかもそのことを皆が知っているなんて、わたくしだったら耐えられなくて、懐剣で心臓を抉り出しているところね！
なのにこんな芋みたいなのがそのまま妻になるだろうなんて……、爵位もない家の娘が……、まったくどうしておまえみたいな芋娘が

副伯夫人で、このわたくしがみじめな平民男の妻だなんてこんなの世の中間違ってるっ……！

だいたいね、アレックス様だって情けないのよ。今だってわたくしには言い負かされるし、武官の名門出のくせに自分のところの騎士団にさえ出て来ないし、いっぱしにおまえみたいな情婦は囲うし！ほんと情けない。ほんとださい。彼はまさに身分以外には取り柄がない男の典型よね！

だいたい連れている女を見ると、その男の程度が知れるって言うけど、おまえを見ているとアレックス様の程度も知れるというもの……」

するとタティがヴァレリアの頬をばちんと叩いた。

「アレックス様のことを、悪く言わないでくださいっ」

あの減らず口には、僕やカイトが恐らく何度そうしたいと思ったか知れないが、でもどうにもすることができなかったことを、タティが、あの気弱なタティがいきなりやってのけたのだ。

タティは顔を真っ赤にして、今にも泣きそうな顔でヴァレリアお嬢様を睨んでいた。

この信じられない光景に僕もカイトも唖然としていたが、いちばん驚いていたのはヴァレリアだっただろう。彼女はさすがにそんな反撃をされるとは予想だにしていなかったという顔で、叩かれた頬を押さえて、呆然と口を開けていた。

「わたしのことは何と言ってもいいけど……、でも、でもアレックス様のことを悪く言わないでっ！」

タティは叫んだ。

しかしすぐに我に返ったヴァレリアが、それまでよりもいっそうき

つい顔をしてタティを睨んだので、僕はまずいと思ったがもう遅かった。

「……何するのよっ！　このわたくしの頬を叩くだなんてっ……、おまえは下女の分際で、生意気に調子に乗るんじゃないわよっ！　わたくしを誰だと思っているのよ。おまえ程度の女が、対等に口をきける相手とでも思ってるのかしらっ？　ほんと、見てて苛々するわ、こういう男社会に飼い慣らされた馬鹿女のことは。自分が侮辱されたことを怒るならまだしも、アレックス様を悪く言わないでですって？　おまえみたいなのがいるから、この社会では女の地位が低い上に、女全般が馬鹿だと思われることになるのよ。何がアレックス様よ、男の奴隷にされてることにも気づかないで馬鹿じゃないの！　でもね、幾ら馬鹿だと言っても身分くらい弁えたら、このど田舎娘っ！」

ヴァレリアはそう言って、タティのことを両手で突き飛ばした。突き飛ばされたタティは足を縺れさせ、そのまま仰向けに倒れたので、タティの足元に丁度しゃがみ込んでいた僕はとてもヴァレリアを怒っている余裕などなく、急いで彼女を受け止めることで何とか事なきを得た。

「お嬢様っ、なんっ、何つうことをするんですかっ、人間を一人ぶっ倒すなんて、何つう腕力ですかっ」

カイトがさすがにヴァレリアを叱っているかのような声を上げたのだが、確かにそれは異常なことだったのだ。

ヴァレリアはタティとは違って武芸を嗜んでいるにしても、そう体格差があるわけでもない娘を一撃で昏倒させるなんてことは、そうそう普通のことではなかった。

「タティ？」

僕は腕の中に倒れ込んだタティを揺すったが、既に意識がなかった。彼女の身体は熱く、実際に熱があって、呼吸は弱々しかった。

「や、やだ、何よカイト、そんな目で見ないでよ、そんなに力なんて込めてなかったわよ。だいたいその娘のほうが先に手を出して来たんだからわたくしは悪くないわっ、こっちは単に脅かすつもりで……」

タティの異変に気づいたヴァレリアが、さすがに弱気な声を出していた。

第１２４話　アディンセル家の悪夢（１）

もしこの世界に本当に愛というものが存在すると言うなら、それは僕のしでかしたことを決して許さないだろう――。

その言葉が、念を押すように、夢から覚める間際の僕の心に重たく響き渡った。

それは雪の深い午後のことだった。

その日は風がなく、灰色の虚無の無音のその中に、しんしんと雪だけが降り続いていた。

銀世界などではなかったのだ。まるで世界の終わりを肌で感じているかのようだった。起き抜けに感じた悪い予感に気づかなかったふりをして、僕はその日を過ごしていた。でもあの日はいつもとすべてが違っていた。

あれは絶望的なまでに、狂気のように、白い日だった。

あのとき僕は時間をどのように過ごしていたのか、窓外の雪景色と重なる記憶の白い光の中を、影のように行き交う使用人たち、僕に敬礼する文官たち、でも、僕には分かっていたのだ。魔力を持っていても、今となっては精霊を使う術など持たない僕だが、世界に漂う空気の感触が違うということを、僕には恐らくその報せが届くことを、たぶんもう分かっていた。

「アレックス様、悪いニュースです」

執務机についていると、カイトのいつもよりトーンの低い声がした。いつものおふざけが完全になりをひそめていた。
僕はその存在にずっと気がつきたくなかったが、その呼びかけに応じて顔をあげると、カイトは静かに言った。

「タティが肺病に罹りました」

カイトの口調は冷静で厳粛、表情には苦悩があった。そして僕は握っていた羽根ペンを指先から取り落とした。床に滑り落ちたペンが、乾いた音を立てた。
僕は心底驚いていたが、不思議なことに頭の何処かでは納得してもいた。
前日、あの馬鹿げたやり取りの後、僕はすぐに医者を呼びつけてタティを診させたのだ。僕の腕の中にいるタティの身体は、不安になるくらい軽かった気がする。結果は風邪をこじらせたのだということだった。彼女の熱は高く、安静にさせなければならないという理由から、別室に運ばれて行った。
そして僕はタティの具合がずっと悪かったことに気づいてあげられなかったことを後悔していた。僕がマリーシアに浮かれている間、タティはずっと精神的に参っていただろうから、それが影響をしているということは分かっていたのだ。
僕はタティを不安にさせてしまった。もう身体の関係を持ってしまったのに、僕に結婚して貰えなかったらと思うだけで、貞潔を守るべく厳格な教育を受け、しかもそれが世間に知れ渡ってしまっている状態で、タティがどれだけ心細かったかを思うと、僕は静かに胸を痛めた。
けれどもその時点において、僕はまだ本気でタティのことを考えているとは言えなかったのだ。僕の主だった考えとは、年末から現在まではふた月と少ししか経過しておらず、これは長い人生という視点から考えれば、若い時代の他愛のない出来事に過ぎない、という

ものだった。
確かにひとときマリーシアに関心が向かってしまったことが浮気だとタティが言うなら僕はその責めを否定するつもりはないが、僕はマリーシアと寝たこともなければ、まともに会話を交わしたことすらなかったのだ。
エステルと関係を持ったことは恐らく浮気に当たるのかもしれないが、でも厳密にはタティにプロポーズをする前のことだった。そして僕は突きつけられた選択によって明確にエステルよりもタティを選んでいた。
となれば、これは劇場のアイドル女優だの売春婦だのに現を抜かしている世の中の男たちなんかとは比べ物にならないくらい健全なことだったし、もっと瞬間的で、罪とも言えないような些細な出来事に違いない。そして僕はマリーシアと何か間違いのようなことをしでかすよりもずっと早く、自分にとってタティが大事な存在であるということに気がついていた。
確かに僕は今もってルイーズやロビンに見惚れてしまうことがあるし、今でもマリーシアに対して憧れる気持ちはあった。確かにマリーシアのことを、心の中からきっぱり手放すことができているわけじゃない。でも、それはきっと大した問題ではないのだ。もっと積極的で軽薄で良識を欠いた男であれば、今頃は彼女たちにアプローチをするべく動いているところなのかもしれないが、僕は結局は眺めるだけで自己完結しているのだから。
だから僕はタティに少し悪いことをしたかもしれないが、そんなことはきっと小さな問題で、将来に禍根をもたらすような重大な問題なんかではなく、僕たちはまたそれまでのように親しく日々を過ごせるだろうと確信していた……。
僕は黙ってカイトを見上げていた。
彼がまたくだらないジョークでも言っていることを、笑って僕に打ち明けてくれるのを待ち望んでいたのだ。
けれども極めて実直な口調でカイトは言った。

「実は昨日の時点で、肺病の疑いがあるとのことだったのです。確定ではなかったので、一応、アレックス様から遠ざけさせただけで内容についての報告は控えたそうなのですが。けれども本日午前、専門の医者による診断によって、それが確定であることが分かりました。残念ですが……」

肺病に罹った。――これは只の病気報告ではなかった。

この地域にときどき流行る肺病は、所謂不治の病に分類されているものだった。体力や病気の進行によって余命にかなりの個人差は出てくるが、この病に罹って生還した人間は未だかつていなかったのだ。

つまりこれは事実上の死亡宣告を意味していた。

第125話　アディンセル家の悪夢（2）

僕は執務机についたまま、呆然としていた。
あまりにもあっけなくて、実感さえ持てない半面、朝から感じていたそうなるのではないかという悪い予感が、的中してしまったことに言葉を失っていた。
僕はきっと精霊魔法を習っていたのなら、割と高位の魔術師になれたのではないかと思われるほどの――、こんなことは、あまりにも信じ難いことなのだが、肺病に罹ったらそれでその人間の人生はおしまいなのだ。彼らはもう二度とそれまでの人生に戻ることはできない。他人に感染することを防ぐために、死ぬまで病室に閉じ込められることになるからだ。
貧しい階層の人々の間では、感染の危険と長患いの負担から残された家族を守るために、肺病患者を間引いてしまうことすらあるらしい。
そして遺体は火葬されることになる。
僕は机の前で厳しい顔をしているカイトの顔をみつめたまま、何か言葉を発しようと思ったのに、胸が詰まってすぐには言葉が出てこなかった。
確かに肺病は患えば必ず死に至る死病ではあったが、健康な成人が矢継ぎ早に罹るほどの強力な感染力はなく、疫病としての威力は弱いものだったからだ。体力が低下していたり、体調が悪かったりしている悪条件が重なっているのでもなければ、若い人間がこれに罹ることは珍しいと言えた。
それはつまり、マリーシアにのぼせていながらタティと何度も関係を持ち、その度に生命力を掠めていた僕のせいであるということを、物語っていた……。

「ご心中、お察し申し上げます」

悲しげにカイトが囁いた。

「間違い、ないのか？」

「ええ……」

「それ、本当にタティのことなのか？
君はうっかりして、他の誰かと……、間違えているんじゃないか？」

僕は笑顔を作ってカイトに事態の訂正を求めたが、カイトは首を横に振るだけだった。

「残念です……」

「……」

肖像画の母上の姿が脳裏に浮かんだ。若くして肺病になり、そのまま悲しく死んでいった、お会いしたことのない母上の姿が。
母上はアディンセル伯爵妃だ。子供を生むことを明確に期待されていた、少し家柄の劣る娘だったとはいえ、彼女は肺病にかかったとき、既に兄さんを生んでいた。
老齢の伯爵を最後に直系が途絶えかねない危機的な状況下において、見事男子を上げることに成功した母上のことを、当然伯爵家としては大切にしただろう。彼女に最高の療養と治療を施しただろう。
でも助からなかった。
彼女が老人の夫を愛していたかは知らない、ただ独り病室で、病に苦しみながら、会うことも叶わず、腕にも抱けない子供の兄さんに、手紙を書いて暮らした。
肖像画の母上は少女の姿だ。
遠からず自分の時間が止まることを知っていたかのように、不安でいたいけな瞳で、まるで祖父のような年齢の夫と並んで、今でもぎこちなく笑っている――。

これほどまでに残酷なことがあるだろうか？
こんな酷いことが、あっていいのだろうか？
タティが死んでしまうことを、肺病に罹って確実に死んでしまうことを、他でもない母上が、僕の母上が身をもって証明していたのだ……！
それから僕は思い出したように狼狽し、自分でさえ何を言っているのか分からないことを言いながら、とにかくタティのところへ行こうと執務机を立ち上がったが、そのまま部屋を飛び出して行くことはできなかった。カイトが僕を捕まえて、暴走を阻止したからだった。

「落ち着いて、落ち着いてくださいって。貴方が行ったところでどうにかなるわけでもない。それより貴方はご自分のことを考えて頂かないと」
「離せっ！　タティが死んでしまうっ！　タティが死んでしまうんだっ！」
「分かっています、それは俺だってよく分かっている。この病に罹った以上、残念ですが彼女は死ぬしかない……」

カイトが相変わらず冷静でいることが分からずに、僕は身の毛が逆立つような思いで息を深く吸い込んだ。
それを制するようにカイトは僕の目を見て繰り返した。

「とにかく落ち着いてください。ここで騒いでもどうにもならないことを理解してください。貴方がそんなふうに取り乱していると、周囲への示しがつかないことをです。
叫びたいのは分かります、でも貴方は常に誰よりも泰然と構えていなけりゃならない……、閣下が常にそうあるようにです」
「兄さんは心臓が鋼鉄製なだけだよ！　僕はまだ……、タティとちゃんと仲直りもしていないんだ！」

「それに、彼女は午前中のうちに城の離れに隔離されました。その昔、アレックス様のお母上様が隔離されていたという離宮です。タティの実家に引き取らせることも考えられたそうですが、家族に老人がいるという話もあり、そこは閣下がご配慮くださいました。事後報告になったのは、貴方が恐らく飛んで行きかねないと思ったからです。しかし伯爵様のご命令により、今後貴方がタティと面会することは一切許されません。貴方は大事なこのアディンセル伯爵家の人間で、たとえ僅かな確率であっても肺病に罹る危険性のある以上、患者の側に寄ることはできません」

「僕のせいだっ、僕のせいで、タティがっ、タティがっ……！！」

「落ち着いてくださいアレックス様。貴方もこれから医師にかかって頂くことになります。ここのところ、あまりタティとは接触していらっしゃらなかったかもしれませんが、それも今となっては運がよかったと言えるのかもしれませんね。一応、とにかく半刻後にここへ診察に来ることになっていますので、どうぞ落ち着かれてください」

「離せカイトッ、どうしておまえはそんなに冷静でいられるんだ、タティはおまえにとっても子供の頃からのつきあいだろう！？僕はおまえがそんなに冷血だとは知らなかった！さすが、エステルを顔色ひとつ変えずに斬り殺しただけのことはあるよっ……！」

僕が酷い錯乱のために、また見当違いの罵りを言っていることを、カイトは理解してくれたようだった。

「……アレックス様、それからもうひとつご報告が。タティは妊娠をしていなかったそうです。これは不幸中の幸いのことです。もし腹に胎児が宿っていながら肺病ということになれば、最悪の場合、一度に二人を失うことになったかもしれない。それは

もう、目も当てられない状態でしょうから……」

第１２６話　希望の残骸

専門医による僕の診察結果は良好。大して鍛えてもいないくせに、僕は身体が強いのだ。

その上女から生命力を吸い取るなんて、まるで処女の生き血をすする吸血鬼のような話だが、この奇妙な法則がもし本当のことなら、僕は生涯現役を貫けるんじゃないのか？　女たちをさらって来ては貪ることで、僕は世にも残虐な貴族の仲間入りをすることができるだろう。

アディンセル家の当主の弟の妾が肺病に罹った話は、それこそ伝染病のように人々の間に広まって行った。タティを心から心配する声など聞こえるべくもない。同じ城内に出入りしていた誰もが、その情報を仕入れるや、その日のうちに当直医師のところに殺到するか、ほうぼうの診療所に駆け込んだはずだ。肺病は風邪同様の感染経路を持つと言われているからだ。

僕がカイトから話を聞かされた午後には、サンメープル城から年配の貴族たちが退避する姿が見受けられた。神経質になり過ぎの行動だと思うが、彼らにも支えるべき家族があり、確かにそんなことで寿命を縮めたいとは思わないだろう。これは絶対に流行をさせてはならない病なのだ。一人被害者が出たら、患者の隔離は勿論のこと、高齢の者や子供、妊婦はだいたいこのような防衛措置を取らされる。これは流行したら最後、体力のない老人や子供から真っ先に罹る病だった。

昨日のヴァレリアお嬢様ではないが、本当は城内の誰もが、サンメープル城の空気なんか吸い込みたくない気分だっただろう。

その午後は兄さんが留守だったこともあり、遅れて話を知らされた城内の一部では機能が麻痺し、パニックさえ起こっていた。

感染力の低いとはいえ、疫病指定されている肺病が、厳密には使用人の一人であるとは言っても昔から僕の乳姉妹として優遇されてい

るノーマン家の娘に取りついたのだ。
タティは暖かい部屋で僕の帰りを待っているのが主な仕事だった。
これは貴族の女が就く役目の中でも、待遇としては非常に条件のいい内容だった。僕がいないときには、無断外出は禁じていたが、部屋の中で好きに過ごしていい自由を与えていたので、気の合う召使いたちとお茶でも飲んでいればいいからだ。だがサンメープル城内には、立っているだけでもつらい寒空の下で過酷な労働に従事している者も多くいるのだ。
兄さんには妃がないので、こんなとき人々を纏め上げるべき女主人がいないことの不都合が痛感させられた。家令は一人で走りまわっていたが、僕にはそれを手伝う気力は起こらなかった。
逃げ出したい者は、逃げ出せばいいからだ。
城の中がどうなろうと僕の知ったことじゃない。

空には月が昇り、僕は暗い部屋の中にいた。
アディンセル伯爵家の男が、抱いた女の生命力を奪うというあの荒唐無稽な話を、夜更けの部屋の暗がりで、震えながら思い出しているところだった。
しかも悪いことに、その話はどうやら嘘ではないらしい。
肺病はこの冬まったく流行をしていない。流行もしていないのに、これは二十歳の健康な貴族の娘が、突然患うような病ではない。
幼い僕は大して気にとめていなかったことだが、そもそも若くて健康な父上の妃たちが、新婚から何年もしないうちに次々と息を引き取っていったことが、正常なことのはずはなかったのだ。僕はこのことにまったく疑問を感じていなかった自分を責めた。
考えてみれば、あまりに不自然な話ではないか。気に入らないから

という理由で妻を殺害したり、虐待死させている貴族の話を聞いたことだってあるはずなのに、僕は自分の父親のことについては、現実に妻が四人も死んでいるのに、何か問題が潜んでいることを疑いすらしなかった。

父上がお優しい方だという偶像を手放したくなかったのか……、だって僕に手紙を遺してくれたのは、父上だけだったんだ。母上は僕のことなどまるでお忘れになっていたけど、父上は兄さんと同じように、兄さんと平等に、同じだけ、僕にも心のこもった手紙を遺してくれた方だから。

僕の記憶に彼の姿はなかったが、どんな人柄かを僕は誰よりもよく知っていた。そして実際に彼の評判はよかったのだ。軍人としての能力を叩かれるほど性格の優しい父上だったのだ。

でも優しい性格などこの奇妙な問題にはまったく関係がない。相手を愛しているかどうかも、たぶん関係ない。きちんと結婚を果たしていた父上にも、適当に摘まみ食いを繰り返す色狂いの兄さんにも、平等にこの災厄は起こるのだ。

寧ろやり方としては兄さんのほうが賢いくらいだ。女の立場を考えないならば、いちいち妻にしてその度に目の前で死なれるよりは、短期間のつきあいの代償に金を握らせて後腐れなくできるのなら、そちらのほうがずっと気分が楽なことだろう。

僕は小切手の正確な金額を知らないが、サウスメープル市の一等地に家が買える金となれば、そこそこには纏まった金であるはずだ。短い交際期間の女に手切れ金として握らせるには、さすがに高額すぎる小切手の理由も、そこにあったのかもしれない。

僕の兄さんは生まれついての悪魔だった。それは女の今後の生活のためなんかではなく、恐らく幾らか寿命を毟り取ってしまったことへの代価だったのだ。

「誰のせいでこんなことになった……？」

狂おしい深夜。

部屋の灯りは僕の胸中の憎悪のように、赤々と輝く暖炉の光だけだった。

そのときの僕は、その午後遅くにあったことを思い出して、果てるとも知れない憎しみに駆られていた。

「誰のせいで……」

僕は今にも力尽きそうな自分の中に燃え盛る殺意を抱え、絨毯に爪を立てていた。

世界を呪いたい気持ちとは、このような気分を言うのだろう。

人類の歴史にときどき登場する、危険視される憎むべき独裁者たちの心の闇を知る術はないが、彼らの闇がもしつらい喪失や理不尽な悲しみによって作り出されたものであるのだとするなら、今の僕はその専制に諸手を挙げて賛意を示すことができるだろう。

僕の周りの絨毯には、僕が所有する医学書という医学書が散乱していた。タティを助ける術がないかと、我を忘れて調べた希望の残骸。どの本も頁が開き、考えられない散らばり様だった。それに魔術書もあった。先祖の手記。薬学。化学。ヒントにならないかと引っ張り出して来た歴史小説や、出所不明のまじないの本もあった。

でもそれらが僕にもたらしてくれたのは、タティの病を治す方法でもなければ、何か別のやり方でタティの生命を助ける方法でもない。タティの死を食い止める手段がない、ということを僕に知らしめ確信させることだった。

それは言うまでもないことだった。僕としても結果は分かっていた。何しろ、もし肺病を治してタティを助ける手段があったなら、そも

そも母上は今でもお元気でいらっしゃったはずなのだ。
母上が、もし今お元気でいらっしゃったなら……。
お元気な母上は、僕のことも、きっと可愛がってくださっただろう。
今では誰も止めることができない兄さんの横暴を、きっと叱ることだってあっただろう。
そしてこんなときには優しく背中を撫でてくださったに違いない。
しっかりしなさいアレックス、タティもきっと大丈夫よ、わたしが大丈夫だったんだからと――。
ありもしないことを想像して、こぼれる涙を拭った。
現実はそうじゃなかった。
この世界は愛する人が次々といなくなってしまう地獄なのだ。

第１２７話　悪魔のような男（１）

タティが肺病に罹ったことをカイトによって知らされたその午後遅く、僕は女といちゃつきながら暢気に居城へ帰還した兄さんをみつけた。

相変わらずの外見のよさは、僕の憎しみを増幅させるのに役立った。もしあんな容姿をしてさえいなかったら、兄さんだって女たちからちやほやされる楽な人生ばかりでなく、普通の男の悲哀というものを、少しは理解できる人生を味わっただろうからだ。

僕は臆することなく彼らに近づき、女だけを乱暴に追い払った。そして兄さんだけを自分の執務室に連行すべく、無理やり彼を引っ張って行った。金髪女は抗議の声を上げたが、こっちには見知らぬ女に義理立てしてやる心の余裕なんかない。

我が国の建国王は金髪翠眼の王だった。そしてサンセリウスでは今でもそれこそが民衆に熱望される懐かしき英雄像ということがある。金髪王の雄々しき姿こそが、サンセリウス人の渇望する父なる者の姿、神聖なる守護者、強力なる救済者――、ここでは金髪は王家の権威の象徴でもあるのだ。

しかし兄さんの金髪好きは権威への憧憬とはあまり関係がなさそうだった。いったい何が彼を駆り立てるのか、金髪女ならばそれでよく、彼は女の門地も教養もさしてこだわらない。あるのは欲望のみだ。彼はただただ動物的な本能で、金髪女に執着する。飽くなき劣情。まったく兄さんの病的な嗜好は失笑ものだ。この色狂いの変態が。僕は心の中で毒づいた。

「何だ何だ、何の騒ぎなんだアレックス」

僕が怒り狂っていることが分からないわけではないだろうに、心なしか浮き浮きした兄さんの声がなおさら神経に障った。

「アレックス。おまえは意地を張って随分私の前に顔を出さなかったが、とうとう寂しくなって自分から会いに来たとみえるな。今回はかなり長い闘いだったが……、この勝負、私の勝ちだな。ふふふ、そう強く引っ張るな、まったく、この甘ったれめ。そんなに私に可愛がって貰いたいなら素直に甘えたらどうなんだ。おまえも昔はよく女どもに嫉妬して、私の足に纏わりついて来たのに……最近では私のことなど毛嫌いして、寄りつきもしない。思春期になってからだったかな、そういう可愛げのない子供になってしまったのは。

それまでは、おまえというのは本当に私の周りをうろうろしている可愛い子供だった。おまえの乳母が、卑しい考えを持って自分を母親同然に扱うよう、おまえに教え込まないのがよかった」

兄さんの逃走を防ぐため、僕は彼の腕を掴んで廊下を先行していた。その間、後ろを歩く兄さんは何か言っているようだったが、頭のおかしいのがくだらないことを言っていると思ってそれを無視した。

「何日か城を空けて戻って来ると、おまえはいつも泣きながら私を出迎えていたのを憶えているか？

仏頂面のくせに私にしがみついて離れないのだが、キャンディをやるとご機嫌になってな。ところがそんなにキャンディが好きなのかと思って箱ごと買い与えてやると、意外とほったらかしなのだ。ああ、そうそう、食が細いからそれは随分心配もしたんだ、肉は食べない、魚も食べない。例えばそう小魚のスープだったかな、おまえはこう、魚とみつめあっているわけだ。何をしているのかと思って私が観察していると、魚が自分を見ていると言って泣き出すこともあったな……ははは、可愛い奴だと思ったものだ。

結局料理人に言って、肉や魚の原型をとどめない料理を出させ、騙し騙し食べさせたのだ。今から思えば、おまえをここまで育てるこ

とには、苦労も多かったな」

僕の執務室に到着し、部屋の中で控えていたカイトに目配せをして部屋の扉を閉めさせた。

それから、こんな状況で無神経にも思い出話を語っている兄さんを僕は睨んだ。

「そんな妄言を聞きたいわけじゃないんだ、兄さん」

僕は言った。

「僕が何を言いたいのか、お分かりだと思うけど……。兄さん、貴方は貴方の大事な女性が肺病に罹った日に、そんな話をされて笑顔で相槌を打てるような寛大な人間じゃないでしょう？だったら黙るんだ」

すると兄さんはむっとして、こう言った。

「何を言っている、私ほど寛大な人間があるか。おまえがそんな無礼な態度でいてもなお、私はおまえを可愛がってやっているではないか。

何でも買い与え、勉強をしたいと言えば優秀な教師をつけ、騎士業が苦手だと思えばこそ大目にもみて、今だってこうして言うなりになってやっている。これが寛大でなければ何を寛大だと言うのだ」

「じゃあ貴方は無神経すぎるんですよ、大雑把で、無神経。他人の痛みを分からない！」

僕は声を大きくして兄さんに言った。

兄さんの背中よりずっと後ろ、執務室の扉のほうにいるカイトが、さすがに僕の態度がまずいと言わんばかりのジェスチャーをしてい

たが、僕は気にしなかった。

「何だアレックス、たまに近寄って来たと思えば結局批判なのか。まったく、可愛げのない。そういう話なら私は帰るぞ。さっきの女、あれは落とすのに少々骨だったのだ。子供は子供同士で遊んでいろ」

そして兄さんはカイトを振り返ったが、そこへ僕は怒鳴り声をぶつけた。

「タティをどうしてくれるんだっ！」

「何だと？　それが兄に対する物言いかアレックス」

すると兄さんはすぐに僕のほうに踵を返し、厳しい表情で僕を見た。僕が怒鳴ったせいで、彼はだいぶ苛々した様子だったが、僕はもっとそうだったのでそんなことは気にならなかった。

「タティが肺病になったのに、兄さんは僕に謝りもしないのか！？タティを抱けばこういうことになるって、予想できていたにも係わらずしらを切るつもりなのか！？」

「アレックス……、ああ、なるほどな。おまえの言いたいことは分かった。

だがいいか、私はしらなど切っていない。そんなことは、私にとってはどうでもいいというだけだ。他愛のない。あんな小娘ひとりが何だと言うのだ。あの小娘は魔力が消えた時点で、我がアディンセル家にとっても、またおまえにとっても用なし同然だ。

あれの母親には魔力がなかったが、あの小娘自身は下級貴族の娘にしては魔力が高いという話で母子を雇い入れたのだ。父方の祖母が魔力を持つカティス男爵家の出ということだったので、血筋としてもぎりぎりおまえの使用人に堪えられるかと判断した。だが消えた。

血が薄まりすぎたのか何なのかは知らんが、魔力持ちの子供の半数は思春期でその能力を失うという話なのだから仕方がない。
本来であればその時点で役目を終わらせてやるところを、おまえが我侭を言って手放さないから今の今まで側に置いてやったのではないか。それを逆恨みされては堪らんよ。
それにだ、あの娘に夜伽を行わせたのは何処の誰なのだ？　私か？
　いいやアレックス、おまえ自身ではないか。
だからこういうことになったという事実を見落とすな。それを人のせいにするとは、馬鹿も休み休み言え」

第１２８話　悪魔のような男（２）

そして兄さんは子供をあやすように手を振り、再び僕に背中を向けて執務室を出て行こうとした。カイトが兄さんに恭順の一礼をし、召使いのように振る舞って出口の扉を開こうとした。

「あんたがそうしなければ結婚させないって言ったからだ！」

その背中に、また僕は怒鳴った。

「アレックス、おまえがタティから生命力を奪ったからだよ」

兄さんは髪を掻きあげて振り返り、面倒そうに僕に応じた。

「我が家に取りつく業の話については、この間したと思うが――、多かれ少なかれ、何処の家系にも業というものは存在する。アディンセル家のそれは確かに重いが、皆がそれを抱えて、今日を生きているのだ。

アレックス、これはどうしても逃れようのないことだ。長い年月人間や土地を支配し、敵対する多くの者どもを奪い殺してきた我らサンセリウスの古い貴族ならば誰しもな。

アディンセル家を呪いながら死んでいった連中の怨念が、子孫に取りついているというわけだそうだ。理不尽な話だ。顔を見たことすらないような先祖の積年の罪の支払いが、現在を生きる我らの人生に求められているというのだからな。

何も私が望んでこんなことを仕組んでいるわけではないし、おまえはまるで私のせいだと言わんばかりだが、私とて犠牲者の一人なのだぞ」

「つまり兄さんはどうしても……こう結論を持って行きたいという

わけだ。
兄さんはタティを殺すのが、僕だっていうことにしたいらしい」
「事実だろう？」
兄さんは僕を見た。
「……、でも僕が望んだことじゃなかった」
「ああ、そうだなアレックス、おまえはそんなことは望んではいなかったのだな。そしてそれはもう終わったことだ。あの小娘が死んで、それですべて終わる。それ以上何を話す必要があるのかね。大事な女が身近にあってはかえって足枷になることもあるもの……、幼い時代の幸福な思い出だけで、生きていくには十分なものだ。だからもう忘れなさい。いいね」
「どうしてそれを、僕と関係を持てばタティが弱ってしまうことを、そしてきっと死んでしまうってことを、もっと早くに僕に教えてくださらなかったのですかっ……？」
僕は兄さんにたずねた。声が、怒りに震えているのが分かった。
「知っていれば、僕はタティを抱かなかったのにっ……！」
「知っていればアレックス、おまえのことだ。おまえは生涯女に近寄りもしなかったろう？
それでは何のために生まれて来たか分からんではないか。肉の快楽を知らずして……男と言えるべくもない。だが一度知ってしまった以上は――、もうそれなしで過ごすのは難しいことになる」
「馬鹿なっ……、僕は貴方みたいな無節操な人間じゃないんだ！
性欲に支配されているけだものの貴方とは違う！
僕はタティをそんなことのための道具にするつもりはなかったんだ！」
「青臭いことを言うな、アレックス。女など、あんなものは道具に

過ぎんよ。
おまえは知らないかもしれないが、連中とはとにかく浅慮軽薄なる者が多い。それに物忘れが激しい。こちらが情を持って接すれば、後で取り残され、痛い思いをするのはこちらなのだ。だから道具と思っておいて間違いはない。同じ人間とは思うな。そうすれば逃げようが死のうが、また別の物を見繕えばいいと考えることができる。だが私は断じて性差別という括りのみで女を切り捨てる無分別者ではないぞ。女の中にも、当然ながらましな者はある。男にも度し難い者があるようにな。
だが忘れてならないのが、そういう価値ある女をみつけたら、それには手は出さないということなのだ。そういう者とは、最初から最後まで対人間としてつきあうことだ。女とは厄介な生き物で、一度でも関係を持てば、どんなに聡明な淑女も例外なく女に成り下がってしまうからな。これは鉄則だ。
アレックス、おまえもこれをいい機会とし、今後は女には入れ込まず、ほどほどにしておくことだ。おまえは感傷的で繊細だから、こんなことがある度にダメージを受けてしまう。
だが、そうやっていちいち悲しんでいては、それだけで人生が終わってしまうぞ。うん？」
そして兄さんは僕に歩み寄り手を伸ばしたが、僕はそれを払い除けた。
「ふざけるなっ、あんたがタティをそうするように仕向けたんだろうっ！
それを、今更訳知り顔で説教をするのかっ！」
兄さんは僕に叩かれた手をもう片方の手で撫でながら、恨みがましく僕を見た。

「まったく酷いことをする」
「どっちがだ！」
「昔はこうではなかったのに」
「それは僕の台詞だ！
貴方を誠実で立派で、誰よりも尊敬に値する素晴らしい人だと信じていたのに！」
「今でもそうだよ。私は昔から何も変わらない」
「違う。最近じゃ、僕は兄さんには失望させられてばかりだよ。あんたには心底がっかりだ！」
「それにアレックス、おまえは跡継ぎを残さなければならない」
兄さんは僕が怒っていることなど意に介さず、飽くまで穏やかに言った。
「兄さんの役割を、僕に押しつけないでください。貴方がいつも正しいわけじゃない！」
僕は、こんなときでも憎らしいくらい涼しい顔をして僕を見ている兄さんを睨んだ。
「こんな会話は最低だっ！　僕は、女なんか知らなくたって構わなかったんだ。こんな酷いことになるくらいなら、タティを失うくらいなら、こんなっ……」
「アレックス。綺麗事を言うな」
今にも泣き崩れそうになる僕に、兄さんは呆れた顔をした。
「まるで夢の世界に生きている処女のようなことを言いおって。どんな言い訳をしようとも、小娘を抱いてさぞかし気分がよかったろう。

それに、何も嫌がるものを無理やりしたわけでもないのだ。何を罪悪を感じる必要がある？　小娘とておまえとひとつとなることは、本懐だったはずだ。おまえが気に病むことはない。彼女は単に――、おまえの相手をするには身体が弱かっただけのことだ」

「はじめからタティが死ぬってことを、分かっていたんでしょう！？」

「ああ、そうだよ」

「結婚を許すようなことを言って、きっとそんなことにはならないって、兄さんは分かっていたんだ……」

「その通りだよ。血筋といい器量といい、あの程度の娘ではアレックス、遊ぶ相手ならばともかく、おまえの花嫁には相応しくないからね。

私が、そんな相手との結婚を最初から認めるわけがないだろう？」

「そんなことは、あんたが決めることじゃない！」

「いや、アレックス。私が決めるんだ。

おまえはウィスラーナ侯爵家の末姫との結婚が決まっている。だから、これからはタティではなく、彼女と仲良くやりなさい。今度はルイーズがフォローに入るから、姫君が病気になったり、死ぬことは当分ないはずだ。……男子を産むまではだが」

「ウィスラーナ侯爵家の末姫？」

覚えのない女のことを言われ、僕は訝った。

兄さんは笑った。

第１２９話　悪魔のような男（３）

「ああ、そうだったアレックス。おまえにはまだ教えていなかったよ。おまえはウィスラーナ侯爵の妹姫のシエラと結婚をすることが決まっているのだ。

おまえももう西部国境のウィスラーナ侯爵に関する一連の話を知っていると思う。あそこは今から二十五年前、我がアディンセル家が出征し損ない陛下の御不興を買った因縁の土地でもあるな。

この話はフォイン王国が、その国境線を再び東に進めようと策動しているという話に発端する。フォイン王国というのは、北方コルヴァールと縁が深く、北のハイエナどもと同種の蛮族の土地というわけだが、何度撃退されようと土人に道理は通じぬ。道徳という概念のない野蛮人どもは、何でも盗み去ろうとする――、先代ウィスラーナ候は非常によく働く有能なる国境領主だったのだ。

ところが現在のウィスラーナ侯というのは、少なくとも国境防衛にとって当代きっての無能者と評判でね。フォインの斥候が国境をうろつきまわっているのに、彼はそれにろくな対処をすることもできないというわけだ。

もっとも国境を破られたわけではない。彼の指揮官能力は甚だ疑問ではあるが、前候の遺産とも言うべき側近連中はまだ何名か残っている様子だ。本来であれば取るにたらない幾つかの些細な失敗を失脚にまで繋げてしまったのは、侯爵自身の王宮における処世術のなさだったのだがね……。

代を継いだ若い侯爵が場所の規範も分からず、味方もなく、怯えて震えている場面を身につまされる者としては、哀れと思わんでもなかったが――、彼は男でありながらそれと戦わずに出仕を拒むようになってしまった。そして我らが老王陛下は何よりも軟弱な男を忌み嫌う。断じて甘い方ではないということだよ。侯爵の不幸は、己以外に男兄弟がなかったことだが……、無能な自分の代役がいなか

った」

兄さんは一瞬僕に視線をやり、それから話を続けた。

「まあ、そのような経緯があり、後は当主であるロベルト候が処刑されれば、新たにこの私が当地を与る侯爵となることが決まっているのだが、ここは諸般の政治的な事情というものがあってだ、末の姫君を我がアディンセル家と縁組させる話が生じているわけだ。本来であれば我らより格上であるはずの侯爵家の姫が、生き延びるために頭を下げて我々の軍門に下るべく汗を掻いている。間もなく後見人を失い、身分も失う零落の姫だが、当面の間は当地を治めるにあたって利用価値があると踏んだ。それに彼女の血筋のよさと美貌は、打ち捨てるには惜しいと思ってな。だからおまえは、彼女を娶って男子を産ませなさい」

「そんな、会ったこともない女と、どうして僕が……」

僕は、兄さんが何を言っているのか分からずに、兄さんの顔を見た。僕がまだ話を飲み込めていないことを理解したらしい兄さんは、こう続けた。

「会ったことならある。いきなり婚約者だと言って紹介したところで、おまえが反発して逃げまわるだろうことは分かっていたからな。馴染ませる期間が必要だと思ったのだ。

おまえの側に何ヶ月か前から、若い娘が配置されていたろう。ロビンと名乗っていたか。

ロビン・ウォーベック。それは偽名だ。ウォーベックと言うのは、母親の旧姓だったかな。本名はシエラ・ウィリアム・ウィスラーナだ。おまえの花嫁だよ。清純そうな美しい姫君だろう？　可愛がってあげなさい」

「そんなことは僕は聞いていない」

僕は怒りを超え、もはや笑いが込み上げてきていた。

「いま言った」

「僕は認めない」

「好きにしろ。だがおまえはシエラと結婚するのだ。私が決めたからな」

「違う。僕はタティと結婚するんだ」

「ははは、アレックス。それは無理というものだよ。あの小娘は我がアディンセル家に相応しくないし、それに肺病だ。だからもう、おまえは彼女に会うこともできない。アレックス、タティは死ぬんだよ。生命力が弱く、体力もない女だから、そうそう長くは生きられまい。もし一年持ったら御の字というところらしいが、いずれにしても結婚は無理だ。

これは、ちょうどよかったのだアレックス。内気なおまえをそこまで感情的に昂らせるほど大事な女だったとするなら、タティは完全におまえの弱点だろう。あの小娘が殴られようが殺されようが平然としていられる度胸がおまえにあればいいのだが、おまえは残念ながらそういう線引きができない性質だ。それどころか、あの小娘のために喜んで生命を投げ出しかねない。そんなことをされてはこちらが困るからな。

そろそろ、タティは舞台を降りる時期だったのだ。おまえの更なる人生の発展のために、残念ながらあの小娘は不必要だ。役にも立たない、飼っていてももはや何の利得もないつまらん女だ」

兄さんは僕に微笑みかけた。

「しかしアレックス。可愛いおまえにいかに罵られ胸張り裂けようとも、私とは誰よりも寛大な男なので、今はおまえが馬鹿げた感傷に引きずられて蹲っていることを許すぞ。

だが、気の済むまで泣いたら立ち直りなさい。今後おまえには任せる仕事も増えるだろう。それにもしかすると、別の新たな任務に就かせなくてはならなくなるかもしれんのだ。
父上が高齢すぎたこともあり、我らには父系に信頼の置ける血の近い親族がないからな……、おまえ以外には到底、私の名代になり得る者がおらんのだよ」
「あんたはどうしてっ……！　どうしていつもいつもそんなに冷酷でいられるんだっ！
あんたはどうしてこの会話を笑いながら話せるんだ、どうしたらそんなに冷血になれるんだっ！」
「アレックス。私がまだ話をしているんだよ。目上の人間の話を遮るとは、作法に反することだ。黙りなさい」
「煩い、何が作法だ。ねえっ、タティを返してくれっ！
お願いだから、タティを助ける方法を探してよっ！」
「ないよ」

兄さんはきっぱり言った。

「小娘は死ぬ」
「でも、でもそんなの嫌なんだ！　ねえっ、兄さん、助けてよっ！
可愛いおまえなんて本気で思っているなら、こんなときくらい真面目に僕のお願いをきいてくれてもいいだろうっ！？」
「そんなにタティを助けたいのか？」

兄さんはふと、昔の優しかった頃のような仕草で僕の顔を覗き込んだ。
僕は彼の本性を知りながら、それでもまだ兄さんが僕の願いを聞き届けてくれたことを信じて、彼を見た。
兄さんはゆっくりと、あでやかに微笑んだ。

「ではアレックス。いい方法がある。おまえがその手でタティを処分してやりなさい。彼女が病に苦しむことがないように。肺病は次第に呼吸が阻害され、息を吸い込めば肺に痛みが走り、しかして呼吸をせねばいられずに、大層苦しい思いをするそうだ。だがおまえがとどめを刺してやれば、小娘は病状が悪化するその前に、楽にあの世に行けるぞ。うん、そうすれば、見事彼女を助けてやれる。名案だね」

僕は立ち尽くした。

この男の理解不能なまでの情のなさに、静かに青ざめた。

「あんた、何言ってるんだ……。兄さんあんたはいったい人間を何だと……、助けてって……、助けてってそういう意味なわけがないじゃないかっ……！」

僕は頭を抱えて堪らずに悲鳴を上げた。

それを見て、兄さんは可笑しそうに笑った。

「ははは、アレックス、何も泣かなくてもいいだろう。まったくおまえは。これは只の冗談だよ。即興にしてはなかなか上出来だったろう？

しかし、おまえというのは相変わらずどうにも子供だな。この私のジョークの面白さがまだ分からんとは、少しユーモアが足りないのじゃないかな」

「――この人でなしっ！　人殺しっ！

あんたはっ……、あんたは分からず屋の悪魔だっ……！！」

僕はとうとう耐えられなくなって兄さんに飛びかかった。兄さんに掴みかかり、思いつくだけの口汚い罵り言葉を叫び続けた。

ところが兄さんは唇を薄く歪ませたかと思うと、足を払って容易く

僕を床に倒した。激しく背中を打ちつけて、惨めに呻く僕の顔を高みから見下ろし兄さんは言った。

「悪い子だ。私の胸倉を掴むなど――、幾らおまえでもしていいことと悪いことがあるぞ。

アレックス、これは決まったことだ。それを分からなくては」

第１３０話　護れなかった幼い恋

兄さんによって無様に床に転がされた後、大人ぶって正論を唱えるカイトの制止を振り払い、タティが閉じ込められている離宮に行った。

誰ひとりとして僕らの愛を認めようとしない悪夢のような現実に見切りをつけ、この手でタティを連れ出そうと考えたのだ。

タティを暗い牢獄から助け出し、愛しい彼女の手を取って、もう兄さんの目の届かない外国へ、それこそ空の上の天の王国にでも逃げて行くつもりだった。

サンメープル城内の端にある池に囲まれた装飾の美しい小さな屋敷は、その建築様式が古く、小さな宮殿を思わせた。かつて僕の母上がお暮しになっていた場所だ。これは当然ながら病人の隔離施設として建設されたものではない。用途は知らないが、ずっと昔の伯爵が、愛人を囲うために作ったなんて話が残っていたりする建物だった。

春には花に満たされて、お伽話のお姫様が住んでいるような、そんな風情にもなるのだが、僕が駆けつけたときには何とも鬱陶しいことになっていて僕は気分を害した。

兄さんの命令を帯びた数十名もの騎士たちが門番のように立ちはだかって、僕を離宮の敷地にさえ立ち入らせてくれなかったのだ。美しい庭園のような離宮に、薄汚い男どもがわんさか踏み入り張りついていたわけだ。

下級貴族の娘を一人守るにしては、あまりにも馬鹿げた人数構成だった。アディンセル伯はいつだって頭が切れるのだが、僕を苛めることに関しては天才的だ。信じられないことに、兄さんは僕が採るであろう行動を予見して、このためだけに専用の部隊を組んだのだ。

二階建ての建物の窓に向かってタティの名前を叫んだが、閉ざされた窓辺に人影が現れることはなかった。

どうしてこんなことになってしまったのか、僕にはもう、どうしていいのかさえ分からなかった。僕の人生は、何もかもを僕が思い通りにできるはずなのに、実際には兄さんの影響力があまりにも強すぎた。どの場面でも彼の意思こそが優先され、反映されて、僕には好きな人の傍に寄り添うことさえ許されない。

「そうだよ、あいつのせいだ……」

僕は努めて冷静であろうとしていたが、世間では温厚で通っている僕という男にだって、我慢には限界というものがある。

僕は最後まで手にしていた医学書をとうとう投げ出し、深夜のリビングの闇の中で、タティがお気に入りだった暖炉の前に蹲って、あの悪魔への憎しみを募らせた。

「何もかもあいつのせいでこうなった」

憤りを殺すために絨毯を何十回と引っ掻いたせいか、爪が傷んで血が出ていた。

「あいつが、タティを虫けらのように考えたせいでっ……！」

窓の外には月が輝いていた。淡い色合いをした優しい月が。

それをしばらく眺めていると、僕はタティのことを思い出した。小さい頃からいつも身近にいて、何をするにも一緒だった彼女のこと。顔に合わないような大きな眼鏡をしている幼い頃のタティの姿が、僕の心に甦った。

子供の頃から僕らはとても気が合って、お菓子作りが大好きだったが、それだってお飯事をしているとき、実際に食べられる料理を作ったらもっと楽しいだろうという話になったのだ。僕らはとても向上心のある料理人だった。裁縫を始めたのだって、人形で遊んでいたら、仲間たちの服を作りたくなったのだ。僕らはいつだって優れたアーティストだった。

でも僕はときどきタティと仲よしじゃない気分のときもあった。タティが嫌がるのを分かっていて、虫をタティの手に乗せて彼女をからかうのは密かにお気に入りだった。てのひらに乗った虫のことを、タティが怖がったり悲鳴を上げるのを見て、幼い僕は自分が強い者であるように錯覚することができたからだ。タティは素直だからいつも僕に言われるまま手を出していた。子供の僕は、タティが過剰に反応してくれることが嬉しかったのだ。

でもあれは、今から思えば苛めだった。だからヴァレリアのことは、たぶん僕には言えないだろう。

それからタティに指輪をあげたり、初めてキスした日のことを思い出して、僕は耐え切れずに大泣きをした。

あのとき僕は、彼女をどんなに愛しいと思ったか、彼女と心を通わせたことがどれほど特別で、重要で、尊いことだったか。タティを一生大切にしたいと思ったあの日の気持ちが、タティが死んでしまうという状況になるまで思い出せなかった自分の馬鹿さ加減が許せなかった。

僕はそれまで、きっと自分は女性を大事にする男だと思っていたが、実際に女性と係わりを持つようになってみると意外とそうではなく、いつも泣かせるようなことばかりを繰り返していた。

僕はただ、タティを大事にしていればよかったのだ……、馬鹿をやっていないで、彼女が好きだと気がついた夏の終わりに、さっさとそれを伝える勇気が僕にあったら。男子を上げろなんて酷い条件をつけられなくともいいだけの、兄さんに敢然と立ち向かい結婚を認めさせるだけの男としての中身があったら。せめてアディンセル家

に付随する問題に早くから気づける機微があれば。
タティを失ってしまったら、僕はきっと生きてはいられないだろう。何故なら彼女は僕の人生のすべてだった。僕のこれまでの人生のすべての場面に、タティがいないことなんて一度だってなかったのだ。だって生まれたときから、最初から僕らは一緒にいたのだ。これがどれほど途方もない確率の奇跡であるか、どれほどの恩寵だったか、僕はそれを失うことが分かってからようやく気がついて頭を抱え込んだ。
月光の差し込む深夜、僕は泣きながら膝を抱え、頭を掻き毟った。すべては僕がいけないんじゃないかと、認めてしまうことが恐かった。
もし僕がエステルと寝たり、マリーシアに気持ちを奪われたりしなかったなら、もっと誠実にタティにだけ向き合ってさえいたなら、こんな酷い出来事が降りかかるなんてことを、回避することもできたかもしれない。
本当なら、タティは只の風邪というだけで収まっていたかもしれないと思うと……、運命論者たちはこれも神がお決めになったことだと口を揃えるかもしれないが、僕は運命というものに人間の行いや徳というものが関与するということを、当たり前のように信じていたからだ。
僕がもっと身を正してさえいればこんなことにはならなかったという気がしてならなかった。僕が彼女を大切にしていれば、事態はこれほど最悪な状況に転がらなかったという気がしてならなかった。それも、ばちを当てるのなら僕自身に当てるべきところを、どうしてタティが肺病に罹らなければならないのだろうか！
感情は心の中を暴れまわり、心の世界で居心地よく暮らしてきたはずの僕だったが、今は憎々しげに僕を苛む感情の正体さえも分からず、僕は翻弄され、その苦しみから逃れたい一身で這って書斎に辿り着いた。収納扉を開き、兄さんから渡された刀剣のコレクションには目もくれず、僕が掴み取ったのは拳銃だった。兄さんが雇って

いる鉄砲鍛冶に作らせたという楓の装飾つきの上等な銃と、それに火薬の詰まった薬莢。

剣術でも腕力でも、僕は兄さんに敵わなかったのだ。悔しいが、彼は幾つもの素晴らしい能力や才覚の持ち主で、何事においても、他人の人生を支配する能力においても、僕にとっては唯一の拠りどころである知性でさえも、結局僕は何ひとつ彼に勝てるものがなかったのだ。

だけどそんな僕でも容易に兄さんを殺してやることができるのだということを、その手段を僕は知っていた。

「あいつを殺してやる」

手の中の銃を握り締め、僕は呟いた。

第１３１話　生命の番人

そして深夜の居城内を独り歩いた。途方もなく長い冬の廊下を。
だがこの酷い気分を彩るには、僕の住まいはあまりにも華やかではあった。行く先には色彩があふれ、真夜中であるために使用人たちの笑い声はしないが、今にも音楽が流れて来そうな美しい光景が広がっている。静寂の夜の中に、女性でも連れて歩いたらさぞかしロマンチックだろうという体裁は十分だった。
だがそれすらも今の僕には怒りの理由となる。財力のある貴族の城には無駄なものが多すぎるのだ。廊下の金の燭台からは赤い光がこぼれ、夜中でも過剰なほどの灯りが途切れることがない、だけど僕にとっては暗い夜道を歩いているも同じだった。
僕は兄であるアディンセル伯爵の殺害を決意し、彼を確実に一発で仕留め得るだけの武器を手にしていた。
父系重視の我が国では、父親殺しは首を刎ねられ家系断絶の大罪なのだが、兄殺しの場合はどうだったろうかと考え、それからそんなことはどうでもいいと思い直した。何故なら、兄さんを地獄へ送ってやった後に、僕はこの銃を使って自分も死んでやるつもりでいたからだ。
アディンセル伯爵家の領地は遠縁の誰かの手に渡るのか、それともウィスラーナ侯爵家のように一度国家に召し上げられた後、まったく別の一族の手に渡るのか、それは僕には分からないけれどもそんなことはどうでもよかった。
僕はただ、自分をこの世から消してしまいたかったのだ。しかしその前に、是非とも成し遂げておかなければならないことがあるので、こうして屍のようになって廊下を歩いているのだ。
シェア――、貴方も兄さんに消された哀れな女の一人だったのでしょう。
純粋に兄さんを愛したばかりに、あの悪魔の本性も知らず、あの男

の綺麗な顔と偽りの愛の言葉だけが彼の真実だと騙されて、ささやかな未来を求めたばかりに。

一時の肉体関係だけが目的だったなんて知らされたときの、シェアの悲しみはどれほどのものだっただろう。綺麗な金色の髪を震わせて、か弱い彼女はどんなに泣いたことだろう。

それでも邪魔にされて捨てられることを、手切れ金を渡されるなんてことで納得できはしないほど、貴方はきっと清らかで高潔で、深く兄さんを愛してしまったばかりに……。

僕は今でも貴方の姿が瞼から消えない。忘れられない貴方の残像が、生涯僕につき纏うでしょう。いつか日差しの庭園、幼かった僕の視界で微笑ってくれた、甘く切ない貴方の姿が。

それなのに僕はタティも愛してしまった。僕はタティにも真剣だった。これが僕の罪業だったのかもしれない、シェアに区切りをつけられないまま、タティを愛したりしたから……。

だけど元凶はやはり兄さんなのだ。

僕はタティやシェアや、多くの女性たちの人生を弄び、殺すことさえ平然とやってきた兄さんに、その痛みを思い知らせてやらなければならなかったのだ。そしてこの世界でも最悪の災厄であるあの男を、この世から消し去ってやる義務というものが僕にはあった。

少し考えれば分かることだった。痛みを味わったのは、蔑ろにされた女性たちばかりではなく、彼女たちの家族もまた、一生忘れることのできない悲しみを味わわされてきたはずなのだ。伯爵の権限によって結婚を控えた恋人を連れ去られ、陵辱された男の悲しみはどれほどのものだったろう。大切に育ててきた娘が、見ず知らずの男の一時の性欲を満たすためだけの道具にされたことを知った父親の気分はどうだ？

兄さんの身勝手な振る舞いによって、多くの人々の人生が踏み躙られてきたということを、生まれつき地位と才能に恵まれていながら、それを与え愛してくれたお優しい父上を今もって罵倒し、タティを死に至らしめることを分かっていながら僕にあてがい、弱者の痛み

というものを鑑みることもなかったあの男こそは、誰よりも思い知る必要があるのだ。

だけど情けないことに、僕は正攻法では兄さんに太刀打ちができず、夕刻の掴み合いひとつにしたって腕力そのものさえ到底勝ち目のない軟弱ぶりだった。兄さんが相手では、彼を崇拝するこの城の騎士も兵士も使えないだろう。

となると、僕が兄さんを倒すための方法としては、銃殺してやることが選択できる最善というわけだった。

兄さんの私室前に行くと、騎士が二名詰めていた。城内でも、最も厳重な立ち入り制限のある区域において、更に寝ずの番を置いているわけだ。これは州領主という立場だからなのだが、そのときの僕は率直にこう思った。人に恨まれるようなことばかりしているからだ、この臆病者め。

射撃訓練は数えるほどしかしたことはなかったが、寝込んで静止している男の頭を打ち抜いてやるくらいの腕はあるつもりだった。でも勿論無関係の人間を犠牲にしたくはなかったので、僕は拳銃を懐に隠したまま当直騎士たちに近寄って、居城の敷地を十周して来るように言いつけた。

けれども僕の様子に異変を感じたのか、彼らはまごまごして、いつまでも応じようとしなかった。やがて業を煮やした僕は、不本意ながら命令に従わないと家族を処刑すると言った。兄さんとまったく同じやり方なのが腹の中では噴飯ものだった。ところが騎士たちは首を傾げながら更にまごまごしていつまでも従わないので、僕は自分の権威をこんな連中にさえ馬鹿にされているのかと感じて頭に血がのぼった。

兄さんという後ろ盾がなければ、所詮僕なんていうのは誰からも尊敬も尊重もされない、恐れる必要さえない他愛ない存在なのかと爆発し、衝動のまま僕は彼らの足下に一発、銃を発砲した。

夜の静寂の中に、思った以上に銃声が響いた。

騎士たちは青ざめ、辺りに火薬の匂いが立ち込めた。僕も幾らか我

に返り、僕はこれによって兄さんが起きてしまったかもしれないことを苦慮した。あいつが扉を出て来た瞬間に撃ち殺さなければ、また掴み合いになって銃を取り上げられかねないことを頭の中で想定した。

そこへ、窓から差し込む月光の影から突如ルイーズが現れた。彼女は兄さんの生命を守護する番人だから、僕としてもそろそろ現れるのではないかと思っていたところだった。

彼女は魔女もさながらの服装と物腰で、いつものように妖しく微笑んで言った。

「こんばんは」

「……」

「今夜は随分、恐いお顔をしていらっしゃるのね」

僕は容赦なく銃口をルイーズに向けて言った。

「近寄るな。ルイーズ、おまえ、こいつらを退かせろ。この気の利かない騎士たちを」

「アレックス様……、ねえ、どうぞそれをしまってくださいませんか？」

「嫌だ」

「あら、困った方。でもどうせ私には当たりませんのよ。そんなことで立場のある方の魔術師が葬り去られることがあってはならないので、常に風の上級精霊を纏っていますから。弓矢も銃弾も弾きます。

ねえ、そんなおいたをしては駄目よアレックス様。貴方にそんなことは似合わない。それを私に預けて頂けないかしら」

「命令だ。こいつらを退去させろ」

「それはできない相談だわ。私と彼らとでは指揮系統が違うんですもの。

それにそもそも貴方が命令して動かない者が、私の命令で動くはずはないでしょう?
当主のお部屋を、何があっても死守するのがこの方たちのお役目ですの。尊敬、愛情、恐怖……ギルバート様はいろいろな意味で人心を掌握するのがお上手なのよ。だから、誰が何を言っても退かないわ。
ねえ、ギルバート様のお生命のほうが、貴方のそれよりもずっと重たいのよ。
貴方は所詮、ギルバート様のスペアなんですもの。ご自分でも、その点は分かっていらっしゃるんでしょう?」

ルイーズは、僕のほうが兄さんよりも価値がないと、神経を逆なでることを平然と言っていた。
この女の生意気さがその晩は特に神経に障り、兄さんもろとも殺してやろうかと思わないでもなかったのだが、どう考えても騎士とは武器も持っていない女を銃殺するものじゃない。
僕が顔を歪めると、彼女は笑った。

「でも、どうやら貴方も切羽詰っていらっしゃるみたい。いいわ、私がギルバート様に代わって、お話をお聞きしましょう。どうぞ私のお部屋にいらっしゃって」

ルイーズはそう言うと、僕に指先を向け、魔法で強制的に僕のことを別の空間に連れ去った。

第１３２話　罪業（１）

ルイーズの私室。そこは僕が日頃からルイーズに対して抱いている印象とは、まったく異なった部屋だった。

彼女はアディンセル家の当主に仕える高位魔術師としての特別な訓練を受けているために、知性という面では一般的な男たちよりも格段に優れているだろう。しかし高い知識と特別の魔法を与えられる引き換えに、結婚をすることが難しい人生を強要されている身でもある。

だからその鬱憤のために、小悪魔的な服装をして、男をかどわかすのが趣味のいかれた女だと……、悪いが僕はそんなふうに彼女を見ることもあった。悪意からではないが、無意味に露出の多い服装をしている女に対して抱くには、これはまっとうな評価だろう。

それに兄さんが僕にタティをあてがったのと同様の意味のことを、当然ルイーズもまた兄さんと結んでいるに違いないのだが、僕と兄さんが倫理的な思想の点で決定的に違うことは、言うまでもないことだ。

よってこの女は、目新しい他の女をしょっちゅう取り換えている節操のない兄さんに、ろくに相手にして貰っていない欲求不満だろうと――、しかし部屋の中を見まわす限り、あるのは本棚ばかりなのだ。部屋の半分は本棚で埋まっていると言っていいだろう。調度品は幾らか洒落ているが、タティが集めたがるような小物なんてものは一切見当たらない。

僕は日頃から学術書の類をよく手に取っているが、ルイーズの本棚にあるそのほとんどは魔術書だった。まさに魔術師のための、魔法に特化した書籍ばかりが並んでいる。

意外にも、香水の匂いのする衣装まみれの部屋ではなかったのだ。

それどころか、僕ですら読めもしないような文字の書物が散見されて、僕は自分が同じような仕掛けを自分の執務室にしているだけに

少々圧倒された。これは魔法学者の部屋、そう言って構わない蔵書の多さだった。
それから、奇妙な薬品のたくさん詰め込まれた棚やガラスケースがあった。瓶に入った液体から枯れた薬草まで、奇妙なものがたくさん、しかし目障りなく整頓されて並んでいた。

「ようこそ私の私室へ。ここへいらっしゃるのは初めて……でもないけど。お小さい頃だからきっと憶えていらっしゃらないわね」

ルイーズは右手を広げて室内のリビングを指し示した。
ルイーズがてのひらに息を吹きかけると、眩い光が発生し、それは微かに燐光を振り撒いて、さざ波のように室内に広がっていった。光の精霊を召喚したのだと、聞いてもいないのにルイーズが勝手に説明をした。

「光の精霊を操るのは、随分難しくなってしまったわ」

ルイーズは勝手にしゃべった。

「子供の頃には、割かし得意だったんですのよ。まるで自分の手足のように、光を操ることができたんですの。神聖魔法が得意で……、才能って言うのかしらね、誰にも習いもしないのに、独学で簡単に身につけることができたものだわ。
でも最近は思うようにいかない。きっと私の性質が、光とか、聖なるものからは遠ざかってしまったのでしょう……」

僕はルイーズが、どういうつもりなのか分からないまま黙って彼女を見ていた。
ルイーズは微笑んで僕に言った。

「ねえ、お飲み物は何になさる？　チョコレートを温めましょうか？　それともそうね、紅茶にブランデーなんていかがかしら。あら、深夜だからって遠慮しなくてもよろしいのよ。私の場合、召使いがいなくても平気なの。魔法ですぐにお湯をご用意できますから」

「……」

「本がたくさんって、お思いになって？　ええ、本は好きよ。あら意外というお顔。でも私ね、他に趣味がないのよ。悲しい人生なの。着飾ることは好きだけど、見せる相手がいないでしょう？　ダンスが好きだけど……、やっぱり一緒に踊ってくれる殿方がいないのよ。ギルバート様に遠慮して、本当に私を誘ってくださる方は滅多にないの。私にはジェシカ様のように縁談も来ませんし、熱心に想ってくださる方もいないから、もう少し年を取ったら、人生に諦めがつくのかしらね。あら、同情していらっしゃる？　貴方、憐れんでいるのね。貴方はすぐにお顔に出るから。ねえ、アレックス様がダンスに誘ってくださったら嬉しいわ。貴方は背が高いから、きっと絵になるわね」

「タティを助ける方法はないのか？」

僕は言った。

「おまえなら、何か知っているんじゃないのか。これだけ魔法に通じていて、神聖魔法がお得意なら、神の奇跡みたいなものはないのか……」

ルイーズは首を横に振った。

「残念ですけれど、存じ上げないわ。伯爵様の魔術師である私が知

らされている魔法には、怪我を癒したり、解毒したり、そちらのほうは充実していますけれど……、病は、そのての魔法をかけるとかえって進行させてしまう場合があります。
先代様の魔術師が、ギゼル様をお助けできなかったことがすべてを物語っています」
「でもそれは、可能性を否定する返答じゃないな。おまえは知らないとしても、国内にはもしかしたら……、肺病を治せるような特別の魔法を扱える者が、存在するということか？」
「アレックス様。残念ですけれど、これは可能性を否定する返答ですわ。
アディンセル伯爵家に属する我々が、それ以上を識ることはできないからです。たとえあるとしても、誰もそれを与えてはくれない。ご存知のように、我が国の魔術に関する基本的なルールなのです。
我々はアディンセル伯爵家より上位の家柄に伝わる特別の魔法を識る手段はありません。
特に我々魔術師は、主に従属契約をする際の条項として、供与される魔法の知識を他に広めることを呪術を介して禁止されます。代償は己の死です。ですから、仮にそんな魔法があったとしても、魔術を嗜む者たちはそれを外部に漏らしはしないでしょう」
「……」
「貴方をここにご招待したのはね、貴方と少しお話をしたいからなの」
「悪いが僕にはおまえと話すことなんてない」
思惑を無下にされ、僕は無愛想に答えた。
「兄さんの狗と話すことなんてあるわけない。もう帰るよ」
僕が踵を返そうとすると、ルイーズは言った。

「伯爵様を、殺しにいらっしゃったんでしょう？」

そしてそのまま部屋の中央にいる僕に歩み寄って来て、首尾よく僕の退路を塞いだ。

「駄目よ。それはまかりなりません」

ルイーズは、彼女よりも上背もあり体格だって大きいこの僕がこの上なく不機嫌になっているのに、それを恐れるでもなく僕に近づいて来たのだ。一人前の男である僕を自分の部屋に入れていてなお、僕をまったく恐れないその余裕の態度が、癪に障った。

ルイーズは僕を見上げて言った。

「貴方がそういうお気持ちでいらっしゃる限りは、私はこのお部屋から貴方をお帰しするわけにはいかないわ。ですから、ここはお通しできません」

「何言ってるんだ、僕に命令する気か？　そこを退けよ、おまえにそんな権利があるわけないだろう。いったい何様なんだ」

「ギルバート様の魔術師よ」

ルイーズは答えた。

「彼のお生命を守るお役目を司る者。私はそのためにのみ存在することを主に誓約した者」

「だから何だよ。退けって言ってるんだ」

「いいえ、退かないわ。貴方が、主と仕えるべき伯爵様に対するその反抗的で礼儀を欠いたお気持ちを改めない限りはね。アレックス様、貴方もよくそんなことをおっしゃっているわね。身分を弁えろって。今も私におっしゃったわ、だったらご自分も弁えなくちゃ。そうやって睨んでも駄目よ。

ギルバート様に歯向かうなんてことが、貴方ごときに許されると思って？　貴方にそんな権利があるとでも？　ないということくらい、頭のいい貴方にはお分かりになるわね」

「煩いんだ……」

「アレックス様……、貴方はあまりに精神が未熟な子供過ぎるわ」

魅力的な唇で、ルイーズは息を吐いた。

「ギルバート様を殺そうだなんて、そんなことをなさればアディンセル家はおしまいよ。貴方なら当主殺しが、たとえ誰の手によってであれ、只で済むことはないと知っていらっしゃるでしょう？　貴方、次の当主になれなくなってしまいましてよ。いい子にしてさえいれば確実に転がり込んでくるすべての恩恵を、ご自分で放棄なさるおつもりなの？

何より……、そんなことをなさればギルバート様に仕えている者たちだけじゃない、多くの領民たちの人生に多大な影響があるということを、たくさんの者たちがそれによる騒乱や紛糾に巻き込まれ、家や土地を失い路頭に迷うことになる、そういうことを、お考えになってみたことはないのですか？

そもそもアレックス様、貴方は……、そういう視点で物をお考えになってみたことが、これまでにありましたか？」

ルイーズの口調はいつもの彼女よりもやや真面目ぶった、ため息混じりのものだった。

僕はその態度が、更に僕の神経に障ったことを、嘲笑うことで表明した。

第133話　罪業（2）

「何だって？」

僕はルイーズを冷ややかに見た。

「おまえは、今なんて言ったんだ？　僕を何だって、精神が未熟な子供だって？」

僕はルイーズに大股で近づくと、その細い両肩を強引に掴み、彼女を馬鹿にするように顔を近づけた。

「もう一度言ってみてよ、僕が何？」

「貴方は子供過ぎて、お話にならないと言っているのよ。私はいつも貴方を見守ってきたけれど、貴方は幼い頃から本当に心が繊細で、それにとても傷つきやすくて、上手く育ってくれるかどうか心配していたほどだった。

それでも、近頃は上手くやってくれていると思っていたわ。カイト様は貴方にとって本当にいい友人になってくれているし、貴方もやっと一人前の貴族としての自覚が出てきたものだと喜んでいたの。

それなのに……、私情で伯爵様を殺害しようなんて。一時の混乱について、落ち着いて考えてみるということもせずに、後先さえ考えずに衝動のままに動くなんて。

アレックス様の考え方は、子供と同じなのよ。全体を見ていないわ。よくお勉強ができる頭のいい子だから、多くの人がそこに気がついていないけれど、貴方は感情的にはとても未熟で幼いわ。

だから普段はお勉強で養われた利口さが助けていても、ストレスが加えられると極めて拙い行動に走ってしまう。ギルバート様が、過保護にし過ぎたのがいけなかったのね」

僕はルイーズのこの無礼に、黙ってはいられるわけもなかった。怒りのままに彼女を近くの本棚に押しつけると、声を荒立ててこう言った。

「ルイーズ、おまえはいったい何様なんだっ……？　たかが女が、この僕に対してそんな口をきいていいとでも思っているのか？」

「そういう、どうしようもないところばっかりギルバート様に似ちゃって。

温和でお優しい貴方の根底にあるものが、本当はよっぽど権威を重んじる男尊女卑思想であることは分かっていたわ」

「おまえには良心ってものがないのか？　おまえは僕がタティを抱けば、タティが死んでしまうってことを分かっていながら、あの初秋、兄さんにタティとの結婚を許して貰おうとする僕の気持ちに理解を示したふりをして、僕を騙したんだ。それがどんなに罪深いことか分かっているのか？

それにエステルのことだってそうだ。彼女が妊娠していたかどうか、あのときは結局、誰一人確かめるということをしなかった。この城には医者が常駐しているのに、彼を呼ばなかったんだ。

あまつさえおまえが想像妊娠だと決めつけるようなことを言うから、兄さんがそれを信じてしまった。もしかしたら、本当は妊娠していたかもしれなかったのに、誰もそのことを疑おうともしなかった。結局は、エステルに妊娠されていては困るから、真偽を確かめるということをせずに抹殺したってことなんだろう？　僕の子供であれ、兄さんの子供であれ、そんなことが起こっては厄介だったんだ。だからおまえはジェシカが兄さんのために手を汚しているように、精神面で兄さんの罪を被ったんだ」

僕の言い分に、ルイーズは同意も否定もしないような調子だった。

「精神面で罪を被るくらい、何ということはないわ。私はあの方のためならどんなことだってする。それは、忠誠心でもあるし、私のあの方へのせめてもの贖罪でもあるからよ。
あのお嬢さんが本当に妊娠をしていなかったかどうか、確かめることをしなかったことに正義を見出せずにそんなことをおっしゃっているのか、それとも単に自己の精神衛生のために気になるだけなのか分かりませんけれど、私がギルバート様に嘘を申し上げることはないわよ。どうしても都合が悪いことは、黙ってやり過ごします。
先日の吹雪の日、あの威勢のいいお嬢さんが貴方のところに妊娠したなんて訴えに来て、騒ぎを起こしたりしなかったならば、貴方があのお嬢さんと一夜を過ごしたことを、私は私の裁量で黙っているつもりだった。タティに対してだって、貴方が何ヶ月も結婚して欲しいと言い出せずに、ずっと日々を浪費していらしたことも、私は今でもギルバート様にお伝えしていないわ。言えばあの方がどういう行動に出られるか、私はよく知っているからよ。
だけどそれでも、私が主君に対してお伝えする言葉について、偽りを含めるような真似はしない。
だから貴方のそのおっしゃり様は、私の伯爵様への忠誠に対する酷い侮辱だわ」

そしてルイーズはきっぱりと僕を睨み返した。彼女が一向に僕を恐がりもしなければ、許しを乞おうともせず、それどころか僕を子供だと馬鹿にし続けるので、僕はとうとうこの怒りを抑え切ることができなくなった。

「ルイーズ、おまえがそんなふうに偉そうな口をきいているのは、兄さんの女だからだということは分かっているんだ」

僕は言った。

「多少身分があるとは言っても、日頃から売春婦みたいな節操のない身なりをして、尊敬を得られる道理なんかない。それなのに、誰もがおまえに分不相応なほどの敬意を払っている。おまえが誰からも一目置かれているのが、どうしてなのか。

それは、おまえが国内でも力のある伯爵の女だからだ。それも半年やそこらで使い捨てされることのない正真正銘のね。

でも僕がおまえに手を出したらどうなるのかな……？」

僕はルイーズの、相変わらず形のいい赤い唇だけを見ていた。唇の中の彼女の舌の動きが見えるたびに、何度それを塞いでしまいたくなっていたかを僕は思い出していた。

そう、僕は前からこの女が気になって仕方がなかったのだ。兄さんの持ち物だと思えばこそ、仕方なく我慢をしていただけだったのだ。だけど彼女は美しかった。魅力そのものだった。そして僕は眺めるだけでは飽き足らず、常々この生意気な女を征服してやりたいと思っていたのだ。

「アレックス様？　何を言っているの？」

「やっぱりエステルみたいに兄さんの怒りを買って、殺されるのかな」

僕はそう言うと、ルイーズの両手を掴み上げて本棚に押しつけ、強引にルイーズにキスをした。タティにするときとは違う、遠慮のない嫌がらせのようなやり方だった。

いきなり舌を捩じ込んだことにはルイーズもさすがに驚いたようで、身体をよじらせて僕を拒否しようとしたが、女の抵抗なんてあってないようなもので、僕はルイーズの身体を押さえ込み、そのまま無理やりキスを続行した。

第１３４話　罪業（３）

「やめて、アレックス様、何するつもりなの」

もがきながらルイーズが言った。

僕は左手でルイーズの両腕を頭上に押さえ、もう片方の手で彼女の身体の感触を楽しみながら、鼻先をルイーズに押しつけたまま囁いた。

「ルイーズ、どうしてだよ、本当はおまえだってこういうことをして欲しかったんだろう？　いやらしいことをさ。正直に、僕のことが欲しかったって言えよ。前だって、僕のことが好みだって言っていたじゃないか」

「あっ、あれはリップサービスよ。貴方が、いじけていたから……、そんなお世辞も分からないなんて、私は貴方みたいな坊やなんてお断りだわっ」

「ふん、坊やね……、いちいち癪に障ることを言う女だ。まあいいよ。何とでも言ったらいい。僕が本当に坊やか、それともそうじゃないか、これからたっぷり教えてあげるから」

そして僕は服の中に手を入れルイーズの胸元をまさぐった。ほっそりした身体の上をすべり、掴み応えのある大きな乳房に直接触れると、彼女の肌の感触は吸いつくように柔らかい。これは上等の女だということがすぐに分かった。

「嫌よ、離してっ」

胸を掴まれたルイーズが発する悲鳴や弱った態度は、あまり男慣れしている女のものとは思えなかったが、そのギャップがおかしくて

僕は彼女を責めた。可哀想に、彼女は僕にあえなく押さえつけられ、胸をまさぐられていて、身動きが取れないのだ。
首筋に唇を這わせてやると、ルイーズはまるで男を知らない少女のように震えていた。

「優しくしてあげるよ」

僕はルイーズの耳元に囁いた。ルイーズを床に組み伏せ、抵抗をする彼女を嘲笑うように上に伸しかかった。互いの吐息は熱く、もしかして僕を誘惑しているのかと思ってしまうくらいルイーズの渾身の抵抗は無力で、やる気がなかった。僕の身体を押し退けようとする彼女の身体に体重をかけ、細い腕を掴んで床に押しつけてやるだけで、もうどうすることもできないのだ。後はあまり内容のない悲鳴を上げることが精一杯だった。
そして僕はルイーズを嘲りながら、自分が女でなくて本当によかったと思った。こんな哀れな生き物もないだろう。男にとって垂涎ものの魅力的な身体をぶらさげて歩きながら、それを守る腕力さえ持たないとは……、女とは、まさに男の温情や良心に縋らずには生きられない哀れな者たちなのだ。僕の言いなりにされていたタティとのときも思っていたが、子供と侮っていた相手にさえ、やすやすと押し倒されてろくに歯向かえないとは、さぞかし屈辱的なことだろう。
それでも少々混乱状態にあったルイーズが、そろそろ冷静さを取り戻したのか、魔法を唱えようとするのに気づいて慌てて彼女の口許を手で押さえた。
言うことに従わない反抗的な女とは腹立たしいものだ。どうせ腕力で僕に勝てるわけはないんだから、さっさとおとなしくすればいいのに……、彼女は魔術師としての特別な教育を受けた、頭のいい部類の女だと思っていたのだが、どうもそうではないらしかった。
僕はルイーズの顎を掴んで乱暴にキスし、ルイーズが少なくとも呪

文を唱えるために呼吸を整えなくてはならないだけ息を塞いでから、顔をあげて彼女を蔑んだ。
確かに僕は年下かもしれないが、好みだなんて言っていた以上、ルイーズだって本心ではきっと僕のことを憎からず思っているくせに、こんなに嫌がってみせるなんてさすがに往生際が悪いと思ったのだ。

「まったくどうして嫌がるんだ」

憤慨して僕は言った。

「僕のこと、嫌いじゃないってことは分かってるんだ。それなのに、こういうふうに嫌がられると、まるで襲っているみたいで気分が悪いんだよ。僕のことを嫌がるなんて失礼にもほどがあるんだ。乱暴になんかしないって言ってるんだから、おとなしく言うことを聞けよ、勝手な女だな」

「かっ、勝手なのはどっちですの？　貴方、この状況でそれはどんな理論よっ。

ねえ、お願い落ち着いて。こんなこと、許されることじゃないわ。絶対に許されることじゃない。

アレックス様、貴方はこんなことができるような子ではないはずよ。お願いだからこんなことはやめて……」

「煩い、おまえは男をみくびるからこうなるんだ。こんなことをされるのは、全部おまえが悪いからだ。誰が坊やだ、夜中に男を部屋に上げた時点でこうなることくらい分かれよ。

ルイーズ、おまえは兄さんの女のくせにこんなことも分からないのか？　これだから女は頭が弱いって言うんだ。じゃあ僕が教えてやる」

「ああ、本当に……、お願いだから冷静になって頂戴。

貴方自分が何をやっているか分かっているの？　どんな馬鹿なことをやっているか」

ルイーズは僕の頭を手で押さえ、顔を近づける僕の口づけを拒みながら生意気な口をきいた。
その手を払い除けて、僕は言った。

「分かってるさ」
「いいえ全然分かっていないわよ、ねえ、お願いだからこんなことはやめて、私――」
「知ってるさ、おまえは兄さんの大事な女なんだろう。だけど僕のタティは魔力をなくし肺病に罹った。きっと今頃泣いているんだ。でももう治らない。後は死ぬのを待つだけだ。おまえはそれを知っていたのに、僕にタティを抱くようにけしかけたんだ。おまえは酷い女だよルイーズ、兄さんの命令なら無実の死刑執行さえ厭わないジェシカよりも更に酷い。僕のタティはもう死んでしまうのに……兄さんの女であるおまえが無事なんて不公平だ。だから僕はおまえのことも滅茶苦茶にしてやるんだ。僕が決めたんだぞ。だから言うことを聞くべきだ」

僕はそう言ってまたルイーズの唇を無理やり奪った。何しろ嫌がる女に覆い被さり、唇や舌を絡めてやる卑猥な感触がたまらなかった。無礼にも僕を拒否しているものを押さえつけ、無理やりこうしてやるのが。
右手をルイーズの肢体に這わせ、彼女の脚の隙間に腕を差し込んで、その太股を押し上げ強引に僕の胴を割り込ませた。するとルイーズは小さく悲鳴を上げ、性懲りもなくまた僕を押し退けようとしていたので、僕はルイーズの腰に手をまわして引き寄せ、もっと僕に下半身を密着させてやった。それでルイーズは酷いショックを受けたようだったが、僕はそうじゃなかった。僕に逆らうなんて、そんなことはできないことだと思い知らせてやるのはひたすら愉快なこと

だった。

しかし、行為をするには最低でも服をずらさなければならないのだが、押さえつけることをやめるとまたルイーズが抵抗をするだろうからどうしてやろうかと考えた。ルイーズが分を弁えないで、素直に僕の言うことを聞かないせいで、僕はいつも彼女の唇の動きに注意して、いつでも手で押さえるか、キスで塞ぐかしていないといけないのだ。只の女じゃない、魔法を扱える女というのは、非常に厄介だった。

でも僕は、自分の女を僕に寝取られたことを知ったら兄さんがどんな顔をするか、想像するだけで興奮した。きっと殴られるのでは済まないような制裁があるだろうが、僕は何もかももうどうでもよかったのだ。ルイーズが嫌がれば嫌がるほど、僕はたまらなく興奮していたのだ。この女を僕の女にする必要があったのだ。ルイーズの気持ちを考慮するつもりなどまったくなかった。

第135話　罪業（4）

唇を離すと、ルイーズの綺麗な顔が見えた。
視界に入ればうっとり見入ってしまう彼女の甘い造作は完全に僕の好みだった。度重なるキスのために唇は濡れ、怒りのためか、それとも僕のキスに感じたのか、頬は少し熱を帯びていて情欲をそそった。この女が兄さんに抱かれるたびにどんな顔をするのか興味があった。勿論それを覗きたいわけじゃない、僕が抱いてやるのだ。

「感じさせてあげるよ」

実際にはどうすればいいか自信はないが、僕は言った。
ルイーズは、もう抵抗しても無駄だと悟ったのか、僕の下でしどけない格好のまま、媚薬を含んだような眼差しを僕に向けた。

「もう感じたわ」

今度は僕を非難するでもなければ叫び声をあげるでもなく、意外にもぞくぞくするように囁いた。

「貴方は思ったよりキスがお上手なのね」
「へえ、本当？　初めて言われたよ。じゃあ、僕らはきっと相性がいいんだ」
「それはそうよ。貴方と私は相性がいいわ。それは決まってる」
「それって僕を……、好きだったってこと？」

僕は何も無関係の女にこんなことをしようと思う悪い男じゃない。
こんなことをしているのは、前からルイーズは僕を好きじゃないかと思っていたからなのだが、つい期待を込めて言うと、ルイーズは

確かに頷いた。

「ええ。好きだったわ。私は貴方のこと、最初から愛してたわよ」

「カイトより？」

「ええ」

「兄さんよりも？」

「ええそうね、ある意味では……、ギルバート様なんて目じゃなかったわ」

「そうか……、おまえは僕を愛してたのか」

「そうよ」

「じゃあなんで嫌がるんだ。僕を愛してるなら」

ルイーズは息を吐いて、また僕の髪に手を伸ばした。

「本当に、貴方はなんて愛すべきおバカさんなの」

「僕は馬鹿じゃない。坊やでもないし」

「どうしても私を抱きたいの？」

ルイーズが僕をみつめて囁いた。

「そうだよ。おまえを僕の女にするんだ。もう決めたことだ。タティを奪ったんだからおまえが身代わりになれ」

「私を逃がすつもりはないのね」

「ないよ」

「そう。じゃあ、私は逃げられないわね……、いいわ。そんなに言うならお相手をして差し上げましょう。まったくどなたに似たのやらと言いたくもなるけれど……、きっとこういうのも悪くないでしょうから」

「やっぱりそういう女だったか」

「ええ、狼さん。どうとでも、お好きにおっしゃるといいわ。でも、

その前にひとつだけお話をさせて。
貴方……、私と寝るなんて、そんなことをすればきっと後悔しますわよ」
「何だよそれ、脅しのつもりか？」
「いいえ。事実よ。神経の細い貴方じゃ罪の意識に苛まれて、二度と立ち直れないかもしれない。だってこれ、相当濃い近親相姦ですもの」
「近……」
近親相姦と言われ、僕が絶句するのを見ると、ルイーズはいつもの調子を取り戻したように妖しく微笑んだ。
「近親相姦って、それはどういうことだよ……」
「鈍い狼さんね。貴方、私の目を見て何か感じたことはありませんの？」
「何かって、何をだ……」
「貴方は私たちの瞳の色が、他人の空似とは思えないくらいまったく同じ色合いをしていることを、一度も疑問にお感じになったことはないんですの？　血縁があるからに決まっているじゃありませんか」
「け、血縁って……!?　待ってくれ、そんな話は聞いたことがない。そんな、だって、だって、青い目なんて……」
「それでもよ。私たち、間違いなく血が繋がっているわ」
取り乱して慌てる僕を脅かすように、ルイーズは言った。
「じゃあルイーズ、おまえはまさか僕の……、僕の母上だって言うのか……？」
兄さんの女を略奪する快感を味わおうと思っただけなのに、まさか

実の母親と本気で舌を絡ませてしまったのかと、一転して眩暈がするような背徳感に慄き僕は震えた。そんな僕を見て、ルイーズは一瞬鼻に皺を寄せてから、こう言った。

「いいえ、残念ながら私は貴方のお母さんじゃないわ。私は貴方の母親の実の妹。
でもそれでも、こんなことをすれば女の私は死罪だけど、貴方も只では済まないわ」
「叔母……？」

僕が呆然と繰り返すと、ルイーズは頷いた。

「ええ、そう。叔母。貴方を生んだのは私の姉さんですもの。
ああ、とうとう知られるときが来ちゃったわね。でも貴方がまさかこんな真似ができる方だとは思わなかったのよ。
だから、こうなったからには全部教えてあげるけど、貴方のお母さんである私の姉は名前をアレクシスと言って……、貴方によく似た、内気で繊細な娘だったわ。そしてギルバート様の忘れられない初恋の女でもある」

それでも血の繋がった親族に性交渉をしようとしていた僕は愕然とし、僕にはもうルイーズを押さえつけておくだけの力が身体に入らなかった。その隙に、ルイーズは素早く僕から離れて乱れた衣服を整えた。

「つまり貴方は紛れもないギルバート様の実子よ。そして私の姉さんのアレクシスの子供でもある。貴方、自分の父親を殺そうなんて無茶をしでかすつもりなの？」

僕が兄さんの子供であるということについては、ずっと以前から、

もしかしたらそうではないかと思っていたことだったので、今更驚かされることはなかった。だけど真実の母親の存在を教えられた僕は動揺していて、発する言葉は震えていた。

「アレクシス……」

「ええそう、貴方は正真正銘アレクシスと、ギルバート様の子供よ。貴方が生まれたのは、ギルバート様が十二歳の冬だったわ。寒い日だった。でも、悪い日じゃなかった。あの頃はまだ、私たちは幸せだったから。

私たちは幼くて、私はまだ赤ん坊がどうやったら出来るのか、具体的には何も知らない子供だった。それから先に何が起こるかなんて知らなかった。勿論、それまでにもいろいろなことがあったわ。でもあの日はとても幸福な日だった。姉さんは死にかかったけど、でも死ななかったから」

「……」

「貴方はとても可愛い赤ちゃんだったわ。そして、今でも貴方だけがギルバート様の拠り所。初恋の女との子供である貴方だけが彼のすべて。

だから私が彼の女だったことはこれまでに一度もないわ。……残念ながら、只の一度もない。

私が特権的に扱われていると貴方が感じているとしたら、それは私があの方の秘密を知る身近な人間だからだわ。そして同じ悲しみを共有してきた戦友だからよ」

「アレクシスという人は……、どうしてここにいないんだ？　兄さんに生命力を吸い取られて死んだのか？」

「お知りになりたいの？　涙の物語を。知ったら貴方、もう二度と……暢気で幸せな子供時代には戻れなくなるわよ」

「タティが死んでしまうっ……、魔術師なら何とかしろ！」

混乱する気持ちを抑えきれずに僕は叫んだ。

「そんなにギルバート様が憎くていらっしゃるの？　領民の人生を守るために、貴方を守るために必死に戦っていらしたあの方を？」

ルイーズは再び毅然とした顔で僕に寄って、僕の肩に触れ、うなだれる僕の顔を覗き込んだ。

「しっかりしなさい。貴方はもう、子供じゃない。一人前の男なのよ」

第１３６話　涙の物語（１）

ルイーズが跪く僕の胸に手を当てて間もなく、僕の心の中に何かの映像が広がり始めた。それがルイーズの魔法であることは僕にも分かっていた。

間もなく、広がり始めた世界の中に、黒髪の利発そうな少年が現れ、僕はその少年の顔つきからしてそれが兄さんであることを理解した。兄さんは年齢よりも随分大人びているように思えたが、彼はこのとき十一歳だとルイーズは言った。これは過去の出来事だとルイーズが僕の耳元で注釈を入れた。

「話をするより、ご自分の目でご覧になったほうが理解もしやすいでしょう？」

ルイーズは相変わらず媚薬のように囁いていた。

ほどなくして僕は、完全にその世界の中に入り込んだ。僕の目の前を、子供の兄さんが勝気に、そして明るく笑って、何人もの少年たちを引き連れたガキ大将のように振る舞っているのが間近で繰り広げられていた。見渡すと、そこは居城内の見慣れた風景だった。内装は今と少し違っているところもあるのだが、ほとんど変わっているところはなかった。

兄さんは昔から人を顎で使うのが上手かったことが面白かった。ルイーズの心境が反映されているのだろうか、そのとき世界は懐かしい幸福感にあふれ、十名ほどの少年たちは誰もが兄さんの言うことに従っていたが、その顔ぶれのほとんどは今でも兄さんの側に仕えている軍属の家柄の騎士たちだった。今では僕を可愛がってくれたり、真面目にしている大人連中が、皆子供の姿をしているのは奇妙なことだった。

彼らが兄さんを慕っているのは、その忠誠が恐怖によってではなく、

信頼によってであることも楽しげな表情から見て取れた。兄さんは幼い頃から強いリーダーシップを持っていたのだ。その一群の中にはジェシカも混じっていたが、彼女が時折兄さんのことをぼうっとして見ているのも僕には分かった。この当時から彼女は兄さんを慕っていたのだろう。

やがて場面が変わって、そこは兄さんの私室のようだった。ほどなく長い金髪の少女が、兄さんの側に駆け寄って彼を出迎えた。それはルイーズだとすぐに分かった。彼女は確かに金髪をしていて、顔を覗き込むと、ルイーズは本当に美しい少女だった。現在のような艶かしい色気はないが、大人びた髪留めをしていたり、ピアスをしていたりして、その年齢の子供としては何となくお洒落な感じにしているのが分かった。子供の頃の彼女は活発に笑う元気な性格のようだった。でも兄さんの腕に飛びついて、なれなれしくしているのは今と変わらなかった。

それから、おっとりした様子でもう一人、長い金色の髪の少女が兄さんに歩み寄る様子を見つけることができた。彼女は雰囲気がとても清楚で、僕は彼女を知らなかった。ルイーズに似ているのだが、表情はもっとずっと内向的な感じがした。瞳の色はブルーグレイをしていた。ルイーズと違って兄さんに絡みついたり、冗談を言って笑わせるようなことはしなかったが、ルイーズに劣らない素晴らしい美貌だと僕は思った。

兄さんが、それまで笑ってふざけていたルイーズから視線を離し、吸い込まれるような顔をして彼女を見ているのが僕には分かった。子供の頃のことであるとはいえ、兄さんが女性を見てあんな顔をするなんて、僕にとっては意外なことだった。

「ただいまアレクシス」

兄さんはその少女に歩み寄り、とても優しく微笑みかけた。

「お帰りなさい、ギルバート様」

アレクシスと呼ばれた少女が言うと、兄さんははにかんで頷いた。横でルイーズが自分は邪魔者なのねと頬をふくらませていた。でも本当に腹を立てているわけではなく、二人のことを祝福しているような気持ちが伝わっていた。

兄さんは子供の頃から身体が大きく、どうやら二歳年上らしいアレクシスよりもその当時既に背丈が大きかった。

それから、また風景が変わって、兄さんはたぶんそんなことは好きではないのだろうが、ルイーズとアレクシスにつきあって人形遊びをしたり、花摘みを手伝わされている姿が見えた。

「お花屋さんだと……ううっ、なんてことだ。武器商人では駄目なのか」

おさげの人形を持ったまま、兄さんが情けない顔でぼやいていた。でもすぐにルイーズとアレクシスに却下されていた。

「軍部の武器を横流しする地下組織で、仮の姿がお花屋さんでは駄目か。店主は元特殊部隊、店の裏側にはそのコネクションから特殊部隊御用達の軍刀専門店があって……」

「駄目よ。どうしてそう発想が野蛮なのかしら」

ルイーズが言うと、兄さんは首を横に振った。

「駄目だ。そうでなければ私は一抜けさせて貰うぞ。この私が女の言うことなんか聞いていられるか。相手をして欲しければ、おまえが私に従え」

「普通のお花屋さんでお願いします」

でもアレクシスが言うと、兄さんは即座に首を縦に振った。

「分かった。美しいおまえがそう言うなら……、私は花屋だろうが機織りだろうが、どんな役柄でも演じてやるぞ。だからそんなに悲しそうな顔をしないでおくれ。アレクシス、私はおまえの笑顔のためならばどんなことでもしよう」

「その露骨な態度の違いは何よ。ギルバート様のバカッ」

第137話　涙の物語（2）

「アレクシス、私は……、ああ、どう言ったらいいのか分からないな」

そよ風に乗って、微かな兄さんの囁き声がしていた。

見ると、ルイーズは黒板のある部屋の中で魔術の勉強をさせられていた。教室には年老いた教師と、生徒であるルイーズの二人きり。

黒板には、白いチョークで魔法陣が幾つか描かれていた。床には分厚い魔術書が積み重ねられていて、黒板を取り囲むように居並ぶイーゼルにも魔法陣。いったい何の魔法かは僕には分からないが、あれが精霊文字だということだけは理解できた。

これはどうやら生まれついて魔力が強く、才能の高いルイーズのための特別授業のようだった。アディンセル伯爵領において代々魔術師を輩出しているカティス家の紋章入りの上着を着た、恐らく先代当主と思われる老人が、わざわざルイーズのためだけに出張授業をしているその光景のようだ。

「参りましたね、なんと素晴らしいことでしょう」

感動に打ち震えているという態度で、老魔術師はルイーズに微笑みかけた。

「ルイーズ、貴方ときたら、お教えした魔法という魔法を、あっと言う間にマスターしてしまうのですから素晴らしい。

通常は、魔法を一度見ただけでそれを解析なんてできないのですよ。じっくり本を読み、噛み砕いて、呪文を理解し、魔法を深く理解しないことにはね。

それなのにルイーズ、君ときたら、見ただけで！　見ただけでこの

老人がお教えした魔法を次々再現できてしまう。感覚の次元で魔法に触れているのでしょうが、こんなに素晴らしい才能があるでしょうか？
君は本当に天才なのでしょう。君は魔法使いになるために、大きな使命を持って、この時代に生まれていらしたお嬢さんに違いないのです。貴方はとてもじゃないが、儂のような者に教えられる生徒じゃない。優秀すぎて。儂が教わりたいくらいなんだ」

白髭の老人は、明るい口調と笑顔で、少々興奮した様子でルイーズを褒めちぎっていた。

「先生、それならどうして私だけ余計に勉強しなければならないのですか？」

しかし褒められたルイーズは椅子に座ったまま、不満そうに唇を尖らせていた。長い金髪を、そのときは可愛い髪飾りを巻き込んだみつあみにして、背中に垂らしていた。

「姉さんだって、ギルバート様の魔術師なんですよ。なのにいつもいつも私だけ集中講義。いろんな先生が、入れ替わり立ち替わり」
「それは君が優秀だからに他なりません。君のような魔術師を従えることは、将来のアディンセル家の当主様にとって、非常に利益になることでしょう。ですから儂がこうして特別授業を。でもアレクシスはそうじゃない」
「そんなことありません。姉さんは私なんかよりずっと……」
「いいえルイーズ、残念ですが君のお姉さんは、魔法使いとしてはそれほど優れた方ではないのです。血筋はいいのでしょうが……、君とは違う。
それに引き換えルイーズ、貴方は期待の星です。貴方にはあふれんばかりの才能があり、しかも、とても心の強い女の子です。儂が知

っているほとんどの魔術師よりも筋がいい。許されるなら、是非とも我が息子と縁組させたいほどです」

それからも教師の絶賛は続いていたが、ルイーズの気持ちは浮かないようだった。

彼女の耳には、教師の賛美よりは別の会話が鳴り響いているようだった。ルイーズは憂鬱に息を吐き、やがてカンニングでもするようにこっそり呪文を呟いた。すると彼女の意識は風になって空間を飛び、瞬時にその会話の発生源に辿り着いた。

「アレクシス、……一生おまえを大切にすると言ったらどうする？」

光になってルイーズが飛び込んだのは居城内の見慣れた庭園だった。これが千里眼の魔法というやつなのだろうか、あの美しい庭園の中で、兄さんとアレクシスが、二人で過ごしている睦まじい姿やその会話までを、僕もルイーズと同じように、間近で観ているかのように知ることができた。

「将来のことだ。私と結婚してくれ」

兄さんはアレクシスの目を見て、きっぱり言った。

「えっ…？」

「断るか？　私たち二人の将来の話だ。私は真面目な話をしている」

兄さんが真剣な顔をしてアレクシスの顔を覗き込むと、アレクシスは恥じらって、それから当惑したように兄さんを見た。長い金髪が風に揺れ、彼女のブルーグレイの瞳は恋しさと不安に揺らいでいた。

「でも、ギルバート様……、わたしは、貴方の魔術師です……。

それに出来が悪くて、頑張っても思うようにできない、駄目な魔法使いなんです……。
誰にも期待されていないし、ルイーズの足ばかり引っ張ってしまって、役立たずなんです……」
「アレクシス。そんなことは、私の妻になる条件にとって何の関係もないことだ。
駄目な魔法使い？　結構じゃないか、私はおまえには私の妻になって貰いたい。魔術師なんてものは、ルイーズひとりもいれば十分なのだからね。あいつに任せておいたらいい」
兄さんは、庭園の木陰でアレクシスの手を握った。
「でも……」
「アレクシス、私を好きか？」
兄さんはまっすぐアレクシスを見た。
アレクシスは頬をふんわりと染め、遠慮がちに頷いた。
兄さんは安心したように微笑った。
「私もだよ。ならば約束してくれ、将来、私の妻になることを。私はまだ若いが、必ずおまえのいい夫になると約束する。
しかし不本意ながら、アレクシスは私より年が上だからな……、だからこの辺りのことは、今のうちにきっちり約束しておきたい。妙な男がおまえに目をつけては困るから」
「ギルバート様、でも、わたしでは、貴方の妻になるには身分が不確かです。
ギルバート様には、いいお家のきちんとしたお姫様が相応しいって、皆そう言っています……」
アレクシスが深刻な顔をして言うと、兄さんはそんなことは大した

ことではないというように明るく笑い飛ばした。

「他人の意見なんかどうでもいいだろう。アディンセル家の男子たる私が、おまえがいいと言っているのだから、それがすべてだよ。アレクシス、これはそう不安な顔をしなくてもいいことだ。それとも私の気持ちが信じられないか？」

「ギルバート様……、いいえ、わたしはいつだって貴方を信じています」

「だったら、そこは笑顔で信じられると答えねばならんところだろう？

まったくアレクシス、おまえは可愛くて……、危なっかしくて……、本当に困った奴だ。しかしもっと困ったことは、私はおまえに何より弱いってことだよ。

いったいどうしたら私のこの気持ちをおまえに分かって貰えるのだろう。うん……、そうだな、そんなに不安なら、手っ取り早くいい方法がないこともないが……。

アレクシス、おまえには近いうち指輪を贈ろう。それを二人の約束の証に。

確か、誕生石はムーンストーンだったね？」

手を繋いで幸せに微笑みあう兄さんとアレクシスの姿が、吹き上がる風が上空にのぼって行くように、やがて徐々に視界から遠ざかって行った。

気がつくと黒板前の椅子に座って、ため息を吐いているルイーズが見えた。

でも彼女はすぐに唇を微笑みの形にして、教師に言った。

「先生、これも人生……、そうなのですね。
何より愛しいギルバート様と姉さんを、私が生涯魔法で護るの……、
これが私の役まわり」

老魔術師は飄々と頷いた。

「ええ、そうですとも。しかしそれも、きっと悪くない。儂はそう思いますよ。
人間には、運命というものには……、各々にひとつずつ、用意された役割というものがあるのです」

第１３８話　涙の物語（３）

それから季節がひとつ過ぎ去った頃、兄さんとアレクシスの仲が、深まったことが問題になっていた。

年老いてはいるが、身体の大きな父上の姿が見えた。父上は、ルイーズとアレクシスの母親である兄さんの乳母と、その問題について長い時間話し合っていた。お懐かしい父上のお元気だった頃の姿が見えて、僕は泣きそうになった。

テーブルを挟んで父上と向かい合う姉妹の母親は美しかったが、姉妹ほど美貌というわけではなかった。潔癖なほど身なりを整えていて、いかにも厳格そうな教師風の女性だった。

何かの催しなんかの際、僕も何度かは会ったことがある人物なのだが、彼女が随分若いので、僕は歳月の経過というものの奇妙さを今まさに体感しているところだった。

先刻の老魔術師、僕は彼とは一度も会ったことがない……、父上もそうだが、ルイーズの記憶の中には、今では死んでしまっている多くの人たちが、今では何処にも存在していないはずの消え去った懐かしい人々が、古い召使い、名もない昔の衛兵たち、父上の周囲に仕えていた前世代の貴族たち……、誰もが実に生き生きと存在していた。これは今から二十年前、僕がまだこの世に生まれて来る以前の風景なのだ。そして兄さんの乳母は名前をティファニーと言った。当時の彼女は今より若くて、二十代後半から、三十歳くらいのようだった。僕の目から見ても十分に魅力的だった。兄さんの乳母である彼女は高い教養を備えた才女であり、兄さんの教師の一人でもあるはずだった。そのときは、何よりもアレクシスのお腹に子供が出来たことを問題にしているようだった。

この場にはルイーズがいないのに、どうしてこの場面が僕の心に展開されているのだろうと不思議に思って部屋を見まわすと、ルイーズは例の千里眼の魔法ではなく、ドアの隙間から直接盗み聞きをし

ていることに僕は気がついた。見るからに子供じみた行動だが、彼女はどうやら僕が思っていたよりもずっとやんちゃで行動力のあるお嬢さんだったようだった。

「歴史は繰り返すと申しますが……、閣下、わたくしはこのようなことになってしまったことを……、小娘だったわたくしの過ちが、また……」

ティファニーは陰鬱な表情で、慙愧に堪えないという言葉を父上に繰り返していた。要は兄さんがアレクシスに手を出し、アレクシスを妊娠させてしまったということなのだ。

僕が十一歳のとき、そんなことを思いつく頭があったかどうかすら怪しかったというのに、何という早熟ぶりかと思うが、兄さんらしいと言えばらしいことだった。

しかしこれは、どう考えても兄さんのほうからアレクシスに迫ったに違いないのだが、こういう場合、悪者にされるのはいつでも身分の低い人間だ。ましてアレクシスは年上なので、責めは免れ得ない……、母親としては、娘が主人をたぶらかし、婚前交渉を行うような淫乱扱いされてしまうことを恐れているのだろう。ティファニーはしきりに謝罪を口にしていたが、そのことを悔やんで、目に涙さえ浮かべていた。

「血は争えないと、どうぞお笑いになってください伯爵様。あの日、貞潔を軽んじたわたくしの罪が――、何よりも消し去りたい過去だったのに……、わたくしの娘の一人に受け継がれてしまったのです……」

ティファニーは傍目にも分かるほど絶望していた。

しかし父上の反応は、ティファニーが恐れているであろうものとは違っていた。

父上は終始、優しくこの若い母親をなだめるだけだった。

「ティファニー、そう自分を恥じてはいけない。貴方もアレクシスも、何ひとつ悪かったことなどないのだから。私はそれをよく分かっている。アレクシスが誘惑したのではないことも、私はよく承知している。

ギルバートは……、素晴らしいリーダーシップと意志の強さの半面、他者の感情に無頓着なところがある。あれはこのバランスを学ぶ必要がある子供なのだ……、己が好意を寄せるアレクシスを取り上げられてはなるまいと、あれなりに先手を打ったつもりなのかもしれん。ルイーズを正魔術師としたことで、アレクシスはいずれ時期を見て縁談を結ばせる話を、何処かから聞きつけたのかもしれぬ。それにしてもいったい誰に似たものか、あやつの負けず嫌いにも困ったものだが……」

そして話し合いは、兄さんとアレクシスがお互い愛情を持っていることもあり、最終的に結婚を許そうという方向で決着したようだった。

使用人と結婚ということはあまり外聞がよくないことと、兄さんがあまりに若すぎるので、体裁のためにもう何年かは正式な婚姻という形を取ることはできないことを父上がおっしゃり、兄さんの乳母は恭順を尽くした態度でそれを了解していた。

父上は、一存で抹殺することもできる僕のことを、始末しろなどということをとうとう一言もおっしゃらなかった。話し合いのほとんどは、授かった大切な生命をいかにして生かしていくか、件のアディンセル家に纏わる業の話と、そして母体の維持に関する話し合いだったのだ。

父上は、まだ胎児だった僕に深い愛情を持ってくださっているようだった。思い描いていた通りの、温和でお優しい父上のお姿だった。

彼が生きていて、話をして、ときどき浮かべるその微笑みを、僕は

できるだけ胸に刻み込もうと父上のお顔をみつめていた。
たとえ僕が彼の記憶を持たなくても、彼はこうして確かに存在していて、兄さんや僕を深く愛してくださっていた――、そのことを思うだけで、僕は何度も涙ににじむ目をこすらなければならなかった。

そしてまた場面が変わり、ある冬の朝に僕が生まれたということが分かった。
アレクシスが妊娠したことは、ごく限られた人間の間にしか知らされていなかったことで、ましてや兄さんの子供であるということは、厳重な秘密によって守られていたことだとルイーズが僕の耳元で教えてくれた。
その朝報せを受けた兄さんは浮き足立ち、出産準備と療養のために実家に帰っていたアレクシスのもとに、ルイーズをともなって飛んで行った。
アディンセル家の子供を身ごもったアレクシスは、十月十日の間必死で闘い続け、何度も死にかけることがあったようだった。しかし彼女の母親や、父上の魔術師が総力をあわせ、その助けを得てどうにか生命を落とすには至らなかったことを兄さんは知らされていた。

「二度はない、分かってる……、私はアレクシスを死なせるつもりはなかった」

神妙な面持ちで、兄さんはティファニーと話していた。

「子供は男子か、父上がお喜びになるだろう……、ここはでかした

と言ってやるべきなのだろうな。
だが、子供が生まれたということは、私には何も実感がないことだ。
今はとにかくアレクシスが死なないでくれたことが嬉しい。
もう妊娠はさせない。アレクシスを失いたくないから……、これからは彼女をより大事に扱って、無理をさせないようにし、とにかくアレクシスを大切にすることを約束する。
性交渉を持たなければ、傍に置いても、アレクシスが弱ることはないんだな？」

第１３９話　涙の物語（４）

兄さんとアレクシスは伯爵である父上によって近い将来結婚することを許され、幾つかの小さな問題はあったにしても、そのまま幸福な時間が流れて行くかに思えた。
産後のアレクシスは僕のことを抱けないほど弱っていたが、僕は非常に健康な赤ん坊だったようだった。
揺りかごの中にいる赤ん坊の僕をつついて、ルイーズがにやけている姿が見えた。自分で言うのも何だが、まるまるした色つやのいい赤ん坊だと思った。

「やだ、可愛い。私のことじっと見てるのよ。これが運命の恋だったりしてね」

先刻無理やりルイーズを襲おうとした出来事の後では、何とも気まずい気持ちにさせてくれる言葉を記憶の中の子供のルイーズが言っていた。
ルイーズは乳児の僕に向かって言った。

「でも私のこと、叔母さんなんて呼ばせないわよ。ねえギルバート様、どうにかこの子のお姉さんのふりはできないかしら。そうだわ、赤ちゃんにお名前はなんてつけるのですか？」

ルイーズが彼女の後方にいる兄さんを振り返ると、兄さんは非常に困惑した顔をしていた。
彼は僕がいる揺りかごを遠巻きにするばかりで近寄ろうとせず、とにかくひたすら混乱しているという様子が伝わって来た。

「信じられん、赤ん坊というのはこうもあっさり出来るものなのか

？　父上の話によると、私はかなり大変なことのように考えていたのだが……」

やがて絞り出すような声で、兄さんが言った。
ルイーズは肩を竦めた。

「いつもの強気はどうしたのですか？　こんなに小さな赤ちゃん相手に、態度が変よ」
「煩い、考えてもみろ、この……、おい、そいつは私を何だと思っていると思う」
「さあ、どうかしら。赤ちゃんって、お母さんのことはすごくよく分かるって言うけど……、言われてみれば、お父さんのことってどうなのかしらね。どうやって分かるのかしら」
「何でもいいが、私がそいつの父親であることを、そいつにきっちり刷り込ませたい。この社会の秩序というものを分からせるのだ。こういうことは、最初が肝心だ。私は父親として、その小さい奴に、断じてなめられるわけにはいかん」
「刷り込ませるって……、動物じゃないんですから……。そうね、まずお母さんかそうじゃないかを判断するのは、おっぱいをくれる人か、そうじゃないかだと思うんだけど。ギルバート様、あげてみたら？」
「そんなことを私に期待されても困る！」

どう見てもルイーズは兄さんをからかったのだが、そのときの兄さんに余裕はなく、彼は大真面目に答えた。
ルイーズは理解するように何度か頷いた。

「ギルバート様が若いから、呪いが弱くてよかったと母様は言ってたわ。でも、十二歳しか違わないから、この赤ちゃんはまるで兄様みたいな人が父様なのね。

若いうちに子供を作るとアディンセル家の業っていうのを軽くするのに有効だとすると、彼も十二歳になったら子供を作るのかしら？
　でもそうするとギルバート様は二十四歳でお祖父さんになっちゃうわね」
「くだらん心配をするな。馬鹿馬鹿しい。
しかしそいつをどうするかというのは、今後の課題だな。いったいどうすればいいか私には皆目分からん。言葉も通じなければ……、一人で食事も取れない。いろいろ手間のかかる生物のようだ」
「生物って。ギルバート様の赤ちゃんよ」
「分かっている。……アレクシスが死ななかったから笑い話にもなるが、私自身が子供だというのに、文字通り子供が子供を持ってしまった……」
「あら、うふふ、貴方のジョークにしては面白いわ。でもよく聞く言葉ですけど。
それで、お名前はどうするの？」
「ルイーズ、私は冗談を言っているわけじゃまったくないぞ……。そうだな、名前については父上にもご相談を申し上げたのだが、ファーストネームは私の好きにしていいということになった。だから、そいつはアレックスだ。アレックス・ギルバート・パリス。呼びやすいな」

兄さんは悦に入ったように笑った。

「アレックス？　そんな、安易すぎですよ。一人息子なのに」
「いい。呼びやすいから……」
「本当にそうかしら？　本当に？」
「……、ああ、そうだよ、アレクシスとおそろいだからさ！　私とアレクシスの名前が並ぶからだよ！　もういいだろ？　恥ずかしいんだよ、このての話題は」

兄さんが、やや頬を赤くして声を大きくすると、ルイーズはいっそう楽しげな声で笑った。この頃の兄さんは、子供であるのだから当然なのだが僕が知っている兄さんよりも幾らか子供っぽく、陽気で、表情はずっと明るかった。

そうだ、僕がとにかく何に驚いたかと言ったら、兄さんが今からは考えられないくらい表情が豊かで、しかも明るいということだったのだ。貴族の子弟を従えているときも、アレクシスの傍にいるときも、彼はいつも、まるで別人みたいに生き生きしていた。

勿論カイトのように無駄にしゃべって煩くするわけではないのだが、常に周りを明るくする雰囲気とか、特に照れて慌てているときの様子なんかは、思い出してみるとこれは確かにカイトに通じるものがあったかもしれないと思った。

「あーあ、ほんと姉さんにぞっこんなんだから。イヤになっちゃう。でもそんなの嫌ですよね、アレックス様？　あら…、この子笑ったわ。気に入ったのかしら。それとも私へのお愛想？　彼って意外とチャラチャラした女たらしになるかも」

「おい、馬鹿を言うな、この私の息子に限ってそれはない」

兄さんは澄まして言った。

ルイーズはそれを見て呆れた。

「どうかしら、貴方は女たらしの素質、結構あると思うけど。実際手が早くていらっしゃるし。

ねえ、赤ちゃんがどうやって出来るか、ギルバート様はもうご存知だったのね。私、母様に聞いてびっくりしたわ」

「あ？　ああ……」

「大きくなったアレクシスのお腹をいつナイフで切り裂くのかと思って、ベッドの横ですっごく心配していたらね、まさかあんな」

「ルル」

「瞳の色は私と同じね。そう言えば、この子に乳母をつけないっていうのは本当ですか？　アレクシスが自分で赤ちゃんの面倒をみたいっていうのを、お許しになるって」

「ああ、そうだ。私のせいで、アレクシスは一人しか子供を持てないから……身近に置いてやりたい。今は乳をやらねばならんから産後の女を見繕ったが……、それにそいつはどうせ魔術師をつけなくても呪術を弾けるくらい魔力があるらしいからな、当面はティファニーとおまえで護ってやってくれ。専用の魔術師はそれなりに成長してから選んでも遅くはないだろう。

とにかく乳母やその子供がうろついていたのでは、人見知りのアレクシスの邪魔になる。身体が弱っているというのに他人がでしゃばるのでは、アレクシスのためにならんからな。

私はアレクシスの居心地のいいようにしてやりたいのだ。アレクシスは人形遊びが好きだから、そいつを存分に独占もしたいだろうしな」

「そいつって。ちゃんとお名前で呼んであげたら？」

「そのチビのことだ。分かるだろう」

「アレックス・ギルバート・パリスちゃんよ」

「まったくおまえは、口の減らない奴だ。可愛げのない。少しはアレクシスを見習え」

「せっかくアレックスって名づけるんだもの、呼んであげたらいいのに」

「煩い。いいんだよ、男は厳しく躾けねばならん。乳飲み子だからとて甘い顔はできん」

「うふふ、照れちゃって。アレックスちゃんの魔力が強いのは、うちの家系に似たんだわ。将来私が貴方の魔法の先生になってあげまちゅからね！」

第１４０話　涙の物語（５）

けれども翌年早々アディンセル伯爵家で催されたパーティーの場面で、ルイーズがあまりにも残酷な運命の足音を聴きつけることになった。当時のルイーズはその男の正体を知らなかったようだが、大人である僕には見覚えのある顔だった。

会場では弦楽器による古典音楽が流れていた。今とは少しだけ流行の違うドレス姿の女の人たちや男の人たちが、今と変わらないパーティースタイルを楽しんでいた。

ルイーズは長い金髪を丁寧に編み上げ、年齢より少し大人びたドレスを着ていたが、その表情は青ざめていた。彼女は賑わうパーティーの片隅で彼が父上にとんでもないことを要求しているのを見つけ、震えていた。

この無邪気な少女の好奇心が、彼女に悲劇の始まりをいち早く知らせてしまうことになったようだった。これはルイーズが、固唾を飲んで聞いていた会話だった。

そのときルイーズはまだ子供だったが、姉であるアレクシスよりもずっと魔術師としての能力が高いと評されていた彼女には、遠く離れた距離にある他人の会話を聞き取ることなど、何でもないことのようにできることだったのだ。

「構わないだろう、伯爵」

賑わう宴を背景に、まだ青年のウィシャート公爵は、その整った顔を悪意と期待に歪めて父上に迫っていた。

惚れ惚れするような長身の美青年公爵は現在の兄さんと同等かそれ以上の華麗さで、たくさんの女性たちが彼を取り巻いているのだが、女性に対する扱いは兄さんとは比べ物にならないほど傲岸不遜だった。たまたま行く手を遮っている女の身体を、その逞しい腕で蹴散

らしてしまう横暴さだったのだ。
しかし、それでもなお女性たちは健気に彼に追い縋っていた。床に押し退けられた女性でさえも、彼に腹を立てるどころか、ウィシャート公爵の名前を呼び彼を慕っていた。男も所詮は顔なのかと、そう思いかけてから、彼女らがこう言っていることに僕は気づいた。

「ああ、なんてご立派な未来の国王様！」

この当時、現王陛下にはフェリア王女という十代前半の姫君しかおられなかった。この頃にはまだ王妃様も健在であり、弟のフレデリック王子殿下は、御生まれになっていなかったのだ。
だから王弟の息子であるトバイア様の戴冠を阻む者はなく、トバイア様は美貌の青年公爵というだけじゃない、彼こそが次の国王とほぼ目されている、とんでもない権力への期待を集めている立場にあったのだ。

「アムブローズ、いいではないか。あの美しい娘を私に寄越せ」

父上に近寄った公爵が言うその娘というのが、ルイーズのことであることは僕にもすぐに分かった。

「田舎娘としては考えられん器量のよさだ。だから悪いようにはせんよ。可愛がってやると言っているのではないか」

彼女は本当に、王都でもそう見かけないほどの華やかな容姿をしていたから、その日のパーティーで目立ってしまい、来訪していたウィシャート公爵に目をつけられたということのようだった。

「一晩、ということですか？」
「一晩じゃない」

「では、妻にご所望をなさっているのですか？」

困惑気味に父上がたずねると、公爵は年長の父上を嘲笑った。

「おいおい、我が慰み者にするに決まっているではないか。私は次の国王になる男だぞ。望めばあのフェリア王女とて我が掌中に収められるのに、何が悲しくて田舎貴族の娘を妻にする必要があると言うのだ」

「閣下……」

「おい、でないとおまえ、このアディンセル家が大変なことになるとは思わないか？　陛下の御不興を買い落ちぶれたこの伯爵家から、所領の幾つかを取り上げてしまおうという案だって、出ているのだ。今日はその目的でおまえの鉱山を視察させて貰ったが、あの鉱山は良質だな、この間も陛下とお話したとき、陛下はたかだか伯爵が豊富に鉄鉱を生み出す山を所有していることを疑問に感じておいでだったよ。

アムブローズ、私の言い分はおかしいかな。次の国王となるこの私を敵にまわすなんて、とんでもないことだ。しかも私はおまえを救ってやろうと言っているんだよ。

私の魔術師が言うには、おまえの倅はなかなか良質な星に恵まれているとのこと。それに二百年前にアディンセル家に降嫁したオーロラ王女の血が濃いのだそうだ。

おまえごとき年寄りの凡才では話にもならんが、あいつは育てば逸材らしい。王たる私の手下と据えるにも不足がないと言うから、こうして目をかけてやろうと持ちかけてやっているんじゃないか。

だがそんなことをしていると、老い耄れのおまえが死んだ後、右も左も分からない子供のギルバート、あの小倅が、さぞかし苦労することになるんじゃないかな」

公爵は、アディンセル家に圧力をかけ、潰すこともできると脅しを

かけていた。そして地方領主である父上には、国王の甥でもある公爵から持ちかけられたその話を、受け入れるより他にはないということも僕には分かっていた。
父上がその話を承諾すると、ウィシャート公爵は嗤った。

「楽しみだ。久々の上玉だ、腕が鳴る。本日は頭の堅いアークランドの奴が一緒なので引き取れないが――、近いうちに貰い受けに来るよ」

第１４１話　涙の物語（６）

父上が、僕が考えていたお優しいだけの方でなかったことを、僕ははじめて知らされることになった。
魔術師として非常に有能で、将来有望なルイーズの代わりに、アレクシスをウィシャート公に引き渡すことを、父上は律儀にもきちんと兄さんにお話されていた。
ルイーズの魔法使いとしての才能は、単に魔法が得意な女の子というレベルのものではなく――、そうそう発掘されるような才能ではなかったのだ。売春婦まがいのことをさせて人生を終わらせても構わないような、そんな路傍の存在ではなかった。
そして公爵にとっては他愛ない一時の快楽のためであるとしても、この問題はアディンセル家にとって、一門の浮沈に係る大問題だった。
次期国王が女を所望したとなれば、それがたとえアディンセル家の姫であったとしても、こちらにはもはや献上する以外に道はないのだが……、能力の高い魔術師を従えることは、主君を魔術的な面で守護するだけでなく、戦場において一騎当千の戦力を持つことをも意味している。そして十二歳のルイーズにはそれに値する可能性があったのだ。
これは父上の側近たちを交えて話し合いが持たれるほどのものだったようだが、ルイーズを献上することは父上の側近たちも明確に反対を表明するほどだった。先刻のカティス家の老魔術師は、資産の喪失とまで言い切っていた。誰もがルイーズを有用だと認めて彼女を庇っていたのだ。
これはとても劇的な一場面だった。幾らかの魔力を持つ僕の視覚に頼らない感想を言うとすれば、何か見えない力が働いて、全力で彼女を守っていたと言ってもいいだろう……、多くの生者でない者たちの手が、ルイーズをこの危機的な状況から護るために必死になっ

て伸ばされているような、奇妙な気配を僕は感じたのだ。
そして誰もがアレクシスが兄さんの子供を生んだことなど知らなかった……、アレクシスとは多くの人々にとって、只の能力の劣ったルイーズの姉に過ぎなかった。
間もなく決定は下さることになった。その無情な決定をされたのは父上だ。ルイーズのほうが魔力が強く、気丈で機知があり、兄さんを護り補佐するために欠かせない人材であること。そして一方アディンセル家の子供を生んだアレクシスは、もうどうせ長くないということを、だから彼女のことは諦めてしまうことが肝要であり大多数の利益となることを、父上は切々と兄さんに伝えていた。

「トバイア様の悪趣味は有名だ。ほうぼうからさらった若い娘を切り刻んで遊ぶのが彼のご趣味だというのだから呆れ果てるが、どうせ殺されてしまう運命にあるものなら、可哀想だがアレクシスを献上したほうがこちらの被害はずっと少ないのだ。あの姉妹は年頃も、姿かたちも似ているから、恐らくひと目見ただけの公爵には気づかれない。ようやく産後の身体が癒え始めたところを、哀れだとは思うが……分かるなギルバート、この私の言っていることが」

しかし当然のごとく少年の兄さんは怒り狂い、父上のことを責め立てていた。

「そんな惨いことをなさろうなど、貴方は正気なのですか！」

何処かで聞いたことのあるような台詞を、そのときは兄さんが叫んでいた。

「アレクシスは私の魔術師というだけじゃない、私の妻になるのです！　そう決まっているはずだ。それに彼女は私の子供を生んでいるんだ、将来を誓った仲なのです、父上！

それを、大切な未来の伯爵妃を売り渡すとはいかなることか……」

大きな身体を持て余し気味にした父上は、安楽椅子に座ったまま静かに兄さんを見ていた。そのお顔の色は悪く、僕はご高齢の父上がそれから二年としないうちに老衰されてしまうことを分かっていたが、父上の具合の悪そうなご様子はとても心配だった。

父上は切なく兄さんに視線を投げかけながら、しわがれた声でおっしゃった。

「許しておくれギルバート、しかしこれも老い先短い私が死んだ後、我が所領の民たちと、おまえの行く末を思ってのことだ。トバイア様は、容姿は美しいが確かに大層残忍な目をされていた。逆らえば、何をするかさえ分からぬ種類の男だろう。だが味方につければ彼ほど心強い男もない。彼は王位継承権第一位を持つ、次期国王となられるお方なのだよ。そして彼はおまえを見込んでいらっしゃるのだ。陛下は、そしてサンセリウス王宮はそうそう甘い場所ではない。もし跡目のおまえに見込みがないと判断されていれば、今頃は有無を言わさずにこの家は取り潰され、すべての領地を召し上げられているところだろう。

ところが公爵は、現在宮廷にて見捨てられている我がアディンセル伯爵家を、再び引き立て、陛下に執り成してくださることもお約束くださったのだ。これが何を意味するか、我らにチャンスが与えられたということが、おまえにも分かるだろう」

「彼がそれを守るとでも？」

「それでも私はそれに縋るしかない。この老いさらばえた身体では、もはや王宮に出仕することさえも叶わぬのだから」

「アレクシスをその不確かな賭けのための生贄にしようとおっしゃるのか……」

「ギルバート、おまえとて分かるであろう。領主が何よりも優先すべきものが何か。私事よりも、守るべきものが何か。

おまえはまだ若いが、その聡明さを私は買っている。幼いおまえには過酷すぎる人生の幕開けが迫っていることを感じているが、私はおまえが上手く切り抜けてくれることを信じている。ギルバート、神は乗り越えられない試練を人に与えたりはしないもの。おまえがその若さで子供を授かったことも、愛を知ったことも、そして年老いた私の子供として生を受けたことさえも、すべては――、天上におわす聖なる父がおまえならばすべてを善良で豊かで幸福な方向へ導いて行くことができると確信されたからだ。

おまえを信じ、おまえの助けを必要としている者たちがこの先の人生にきっと多くその姿を現すだろう、おまえはそのすべてに、最善を与えてやれるよう、よき領主であるよう、過ごしていかなければならない。

そしてそのためには、悲しい犠牲がつきものだということを知らなければならないのだ。

ここは万人の微笑む天の王国ではなく、領主とは時に非情な選択を迫られる者であることを。ギルバート、我々は搾取奴隷を囲う支配者ではない。多くの領民の人生を双肩に預かっている守護者なのだ」

「でも、それでも私にはアレクシスが必要なのです！　私が、彼女が何をしたと言うんだ……、この分からず屋の老い耄れめ！」

兄さんは父上を説得することに見切りをつけた様子だった。

マントを翻して廊下に飛び出し、扉に耳をつけてそれぞれが聞き耳を立てていたのを、慌てて姿勢を正したばかりのジェシカとルイーズの顔を代わる代わる見た。

第１４２話　涙の物語（７）

「ギルバート様、姉さんは……、ウィシャート公爵に売られるのですか！？
私の、身代わりになって……」

泣きそうになりながらのルイーズの質問に、兄さんは怒りを収めきれない顔で頷いた。

「そんなっ…！」
「私は父上と話をしながら二つのことを考えていた。
ひとつはアレクシスを連れて出奔するか、それともアレクシスだけを逃がすか」
「どう…されるおつもりなのです？」

ジェシカがたずねた。ジェシカはその頃兄さんの騎士として側に仕え始めたばかりであるようだった。彼女が少しでも早く兄さんの右腕となるべく、兄さんの役に立ちたいと考えていることが伝わって来た。
兄さんは答えた。

「結論はこうだ、私はアレクシスを殺すことにした。
何故ならば、私があれを連れて逃げても、まだ身体の弱っているアレクシスでは思うように動けない。アレクシスに不安や苦しい思いをさせるだけだということ、そしてここでは父上のご意向がすべてだ。だから所領内の誰もが、彼女の冷血の母親でさえ、アレクシスを公爵に差し出そうとするだろう。私の年齢と体力を考えても、到底逃げ切れない。
と言ってアレクシス一人では、もっと無理だろう。

口惜しいが、あの汚らわしいウィシャート公、次の国王である奴に逆らえば、地方領主など破滅するしかないことは私にも分かっている。アディンセル家は陛下に疎まれているから、他の領主の調停も助力も得られないことは分かっている。

だから、薄汚い男に陵辱されることを思えば、アレクシスも……、分かってくれるだろう……」

兄さんの苦しげな言葉が途切れるのを待たず、ルイーズが口を挟んだ。

「待ってよギルバート様、そんなに簡単に……、もっとよく考えてみましょう、ここにいる三人で、知恵を絞りましょう！　姉さんを助けて、なおかつ公爵様も諦めさせる、誰も犠牲にならないで済む何かいい方法が思いつくかもしれないわ。

それなのに、考えもしないうちから諦めてしまうなんて、そんなの、あんまり合理的すぎます！

確かに貴方のおっしゃることは正論なのかもしれないだけどっ、姉さんは、命懸けで貴方の赤ちゃんを生んでくれたのよ！」

すると兄さんは大きな声でそれに反論した。

「死んで構わないわけがないだろう、誰がそんなことを言った！

だが汚されるよりはましだと言っている！

アレクシスが死んでいいわけがないだろう、だが私に他にどうしろと言うのだ。私は無力な子供なのだ。私は幼く、耐え難いほどに未熟で、そうする以外に思いつかない……！

他に何か超法規的な手段があるなら言ってみろ、何か、奇跡的な魔法のようなもので何もかもを解決できるのであれば私もそれに従う。

だが、そんなものはないんだ！

我が母上はもう春までお生命が持たないと言われている。その上に

父上までも近頃はお身体が弱り、散歩さえもままならない状態だ。お年なのだ。日々の天候が厳しくないことを神に祈らねばならぬようなご体調なのだ、ルイーズ、おまえの親は若いから、私のこんな気持ちがおまえには分からないのだろう、両親が二人ともいなくなってしまう私の泣きたくなるほどの不安な気持ちが、だが、私はそうではないんだ！

私はこれから乳飲み子を抱えて、私がやっていかなければならないんだ。何でも私が一人でやっていかなければならない。私ほどいま自分が大人であったらと痛切に考えている者もいないだろう。だが私が幾つか知っているか、まだ十三の誕生日さえ迎えていないんだ！いったいどうしたら納得するって言うんだ、ルイーズ、アレクシスが、あの汚らわしい公爵に好きなようにされることを防ぐために、他に何ができる。それともおまえが奴のところに行くとでも言うのか！？」

兄さんに怒鳴りつけられたルイーズは、一瞬戸惑いを見せたが、やがて毅然とした顔をし、兄さんを見て首を縦に振った。

「勿論だわ！」

「ルイーズ」

「私が……、私がウィシャート公爵様の慰み者になります！姉さんではそんなこと、絶対耐えられないわ……、でも私なら、我慢すればきっと……」

しかしそれと同時にジェシカが驚いてルイーズを叱責した。

「ルイーズ、おまえは何を言っている！　おまえはギルバート様をお護りする任務を放棄するつもりかっ！」

「ジェシカ様……、だって、もともと私が目をつけられたのよ。だったら私が行くのが筋というものだわっ。

ましてや姉さんにはアレックスちゃんがいるのに、そんなことさせられない！
それに姉さんは、ギルバート様とアレックスちゃんの大事な人なの……、でも、でも私はそうじゃないものっ……！」
「甘いことを言うな、おまえは誰の魔術師だっ！」
ジェシカは憤慨した顔で、涙をこぼしているルイーズを更に怒鳴った。

「貴様はその立場にある者としての自覚を持て！　貴様の代わりこそ他にはいないのだ！
私は着任して日が浅いが、おまえとは今後数十年間ギルバート様配下として仕える仲間となることを前提として、ここははっきりと意見させて貰う。
残酷な話ではあるが、アディンセル伯爵家にとっておまえのほうが姉より重要だと、アディンセル家の重鎮方や他でもない伯爵様がご判断されたのだ。
そして今の我らが考えるべきことは、ギルバート様のご意向に従うこの一点に尽きる。ギルバート様が苦しい気持ちを堪え、覚悟を決められてこう仰せになられているのに、おまえが困らせるようなことを言うものではない！　ましてやギルバート様から配慮を期待するような言動をするとはっ！
その些細な甘えが致命傷となるのだ。我々は将来の伯爵閣下の側近なのだ。おまえは自分の立場の重さを認識し、もっとプロ意識を持て。女であるという甘えを捨てろ。馬鹿のようにいちいち自分の都合や感情を持ち出すなっ。何があろうと、ここでは自分の泣き事など通じぬことを教わらなかったかっ！」
「でもっ、でも姉さんがっ……、アレクシスがっ……。
これ以外にどうしたらいいの、いったいどうしたらっ……！」
「クソッ！」

兄さんは近くの壁を蹴りつけ、しばらくの間沈黙が続いた。
やがて兄さんは深呼吸ともため息ともつかない呼吸をし、ジェシカに言った。

「ジェシカ、急のことではあるが、この中でアレクシスと唯一親密な関係がないのはおまえだ。おまえがやってくれるな。アレクシスを」

「はっ、承知致しました……」

殺人を命じられた少女のジェシカは頼りなく震えていたが、表情だけは勇ましい顔をして、恭しく一礼をした。
それから兄さんはルイーズを見た。

「ルイーズ、泣いている暇があったら、おまえは髪を切れ。当分は目立たないようにしろ。
そんな格好でいれば、あいつはおまえのことをまたすぐに所望するだろう。
そのときには、もう、庇いようがないんだぞ……」

第１４３話　涙の物語（８）

「けれども私たちはしくじったの」

ルイーズが、僕の傍らで悲しげに囁いた。

「ジェシカ様は幼少より騎士としての訓練こそ積んでいらしたとはいえ、無抵抗な少女を殺すなんてことをしたことがなかったから、彼女だって本当は、可哀想なくらい動転していたわ。騎士は女子供を護るためのもので、殺すものじゃないって、彼女なりの信念があったのに、ギルバート様のもとに着任した最初の殺人任務がこれだったから……。

それでも姉さんを殺させるために私が実家に手引きして、ジェシカ様は姉さんの寝室に入って行った。そして確かにアレクシスを仕留めたと言って、血まみれになって彼女は出て来たのだけど、私の母は一枚上手で、予定より早く、もう既にアレクシスは公爵様のところへ送り届けられた後だった。先代伯爵様と私の母が、利発なギルバート様が取るであろう行動を予測していたのね。

ジェシカ様が殺したのは、私の実家で使っていた小間使いの少女だったの。私の母がその小間使いをアレクシスに化けさせて、アレクシスの寝室に寝かせていたことを、だいぶ後になってから知らされたわ」

「ジェシカは今でも、自分が僕を生んだ人を殺したと思っているみたいだった」

僕が言うと、ルイーズは頷いた。

「あのとき身代わりを用立てられていたことを、ジェシカ様には教えなかったの。そうすれば、彼女はきっと自分のせいでアレクシス

を持っていかれたと気に病むでしょう？
真実を知れば、あのとき寝室に寝ていたのがアレクシスじゃないと気がつくことができてさえいたなら、もしかしたら追いかければまだ間に合ったかもしれないというふうに、あの方は自分を責める方だわ。
だからアレクシスが無事に死んで、陵辱の憂き目になんかあわなかったと信じさせてあげるべきだと、ギルバート様と話し合ったの。こういう言い方は他人行儀かもしれないけれど、当時の彼女は、私たちの問題にとって完全に部外者だったんですもの。
何より……愛するアレクシスの不名誉を、ギルバート様も私も、誰にも教えたくなかった……。
もっともジェシカ様は、それからギルバート様の代わりに何人もの人間を処刑したり、酷い場面をたくさん潜って来ているわ。だからもう、秘密にするほどの秘密でもなくなっているかもしれないけれど、当時はね……」

そして再び僕の心の中に映像が広がった。
アレクシスを公爵に没収されて、少し経った頃のことのようだった。父上がお隠れになり、兄さんは十五歳の若さで伯爵となっていた。美少年伯爵だと、兄さんが宮廷でたくさんの女の人たちから誉めそやされている光景が見えた。その様子から、ウィシャート公爵が父上にした約束は確かに履行され、その執り成しによってアディンセル伯爵家の先の大戦での失態が許され、その待遇は格段によくなっていることが分かった。その理屈は簡単で、どんなに素晴らしい美青年だろうと、陛下の覚えの悪い者を、王宮の女たちがそんなふうに讃えたりはしないからだ。
勿論、公爵が善良な考えばかりでそうした施しをしてくれたとは思わなかった。兄さん自身の能力の高さを買って、若い彼を飼い慣らそうという意図は当然あっただろうし、もしかすると宮廷で上手く立ちまわって、兄さんがご自分で陛下に評価を頂いたということも

あったのだろう。それともその頃はその最中であったのかもしれない。

そして相変わらず年齢よりも体格がよくすらりと大人びていた兄さんは、その当時から女性にとても人気があったようだった。

しかしその表情は何処か暗く、もうアレクシスが傍に居た頃のような、わくわくするような明るい顔をすることはなくなっていた。と言って今のような自信にあふれた顔つきでもなく、どんなにちやほやされていても、いつも神経質そうに顔を歪めているばかりの少年だった。

彼はとても頭がよく、弁が立ち、責任感の強い性格ではあったが、今の僕よりずっと若くて、体格がいいとは言ってもまだとても頼りなかった。それなのに子供の彼が赤ん坊の僕を抱え、独りぼっちでどれほど心細い思いをしていたかを思うと、二十歳にもなってまだ甘やかされて安穏と暮らしている僕は、申し訳なさで胸が詰まった。

ふと、王宮を歩く兄さんが、当時まだ御健康でいらっしゃったフェリア王女の姿を眩しく眺める姿が見えた。兄さんの後ろについて歩いているルイーズは見事な金髪を少年のようにばっさり切り落とし、黒く染め、兄さんに言われた通りの地味な服装をして控えていた。

他方、フェリア王女は長い金髪を背中に揺らしたまさに絶世の美少女で、あのフレデリック王子の姉姫様であることが頷けるだけの輝きを持っていた。

大勢の従者に囲まれ、守られて、幸せそうに微笑んでいる王女様の御姿を、遠くからぼんやりと寂しく眺めている兄さんが、皮肉にもアレクシスと背格好の似た彼女に誰を重ねているかは、語るべくもなかっただろう。

「ギルバート」

兄さんの前に若かりし日のウィシャート公爵が現れ、公爵は従妹の王女の美しさについて、また彼女を自分の妃にする予定であること

を一通り兄さんに自慢した後、こう言って微笑みかけた。

「今日は久しぶりに、私の別荘に遊びに来ないか」

第１４４話　涙の物語（９）

そして場面が変わった。それは本当に酷い場面だった。
ここは「飼育場」と、ウィシャート公爵周辺の貴族たちからは呼ばれている場所だとルイーズが僕の耳元で解説した。
公爵が所有する数え切れない別荘のうちのひとつ、特に目立った特徴もない建物の中に、公爵に連れられて兄さんとルイーズは入って行った。
長い低木の道を抜け、洗練された建物の中には小劇場のようになっている部屋があり、兄さんたちはそこに通された。部屋の中央に舞台があって、その周りを取り巻くように五十席か六十席ほどの観客席があった。
室内には兄さん以外にもウィシャート公爵の配下と思われる者たちが十数名いて、浮かない顔をしている者もいれば、ニヤニヤと下卑た笑いを浮かべている者もいた。
兄さんとルイーズは舞台のすぐ前の席に座るように指示された。中央の特等席だった。周囲のざわめきから、本日の犠牲者は美少年伯爵か、などという揶揄が聞き取れた。
それからほどなくして、兄さんはウィシャート公爵によってある特別のショーを見せられることになった。
少年だった兄さんの前で何が行われたか――、その不穏さのために心臓が爆発するほどの酷い情景を、僕は目の当たりにすることになった。
ウィシャート公爵が、金髪の少女を……、まさに奴隷のように縄をかけられ、舞台の上に引きずり出された全裸も同然のアレクシスが、兄さんとルイーズの視界の中に入った。
ウィシャート公爵は狂ったような顔をして兄さんに視線をやってから、ショーの始まりだと言って兄さんの目の前でアレクシスに覆い被さり、いたいけな彼女を襲い始めた。アレクシスは泣き叫んでい

た。これは、乱交なんてものよりももっと酷い代物だと、僕が理解するには数秒かかった。乱交は少なくとも合意の上でのものなのかもしれないが、ここではアレクシスに意思があることさえ、誰も信じていないからだ。

「地獄ってこういうことを言うのよ」

僕の傍でルイーズが再び注釈を入れた。

「招待されるのはウィシャート公爵の配下。彼は自分の手下である者たちの前で、その縁者だった女を犯すの。私に目をつけたのも、私がギルバート様の乳姉妹であることを予め分かった上でのことだったのね。

でも彼は自分への忠誠が揺るがないために人質としてそうしているという側面もあるけれど、公開で泣き叫ぶ女を犯すのが趣味なのよ」

兄さんは、伯爵になってから何度も繰り返しアレクシスがそうされるのを見せられていたことを僕は知った。アレクシスが兄さんの名前を呼び、兄さんの目の前で狂ったようになっていくのを、歯向かうことも許されずに黙って見続けていなければならなかったことを。その残虐な出来事を一通り僕に見せ終わると、ルイーズが悲しげに目元を拭った。

僕は怒りのために身体が震える思いだったが、実際にあれを何度も見せられた兄さんは、もっとだっただろう。

「私が行けばよかったと、何度も思ったものだったわ」

掠れた声でルイーズは囁いた。

「恐ろしすぎて、そんな綺麗事が、到底できはしないことだと分か

ってはいたわ。でも、私はあそこへ連れて行かれたのが、私でなかったことに安堵をしている自分の感情さえも許せなかった。
可哀想に、姉さんはあんなに気が弱いのに、どんなに恐ろしかったか、どんなに悲しかったか……、しかも彼女はあんな目にあわされるのが、妹の私でなかったことを、神に感謝するような人だったの。物静かで、優しくて……、だからきっとそうだったに違いないわ。目で私にね、今すぐ逃げなさいと訴えていたんですもの……、自分のほうが、ずっと酷い目にあっているのにも係わらず、彼女は正気のある限り、妹の私を守ろうとしたのよ」
「兄さんは何故……、傍観を続けていたんだ、足でも縛られていたのか……？」
僕の質問にルイーズは答えた。
「いいえ、ご自分の意志でよ。勿論飛び出して行って、助ける自由は与えられていたわ。でもその後どういう目にあうかは、アレックス様にもお分かりでしょう。
これは、あの下劣な公爵が手下を試すための踏み絵でもあった……この悪意に満ちた非道な定期公演を、ギルバート様はとうとう耐え切ったわ。私は耐えられずに泣き叫んだものだった。でも彼は、絶対に泣いたり喚いたりしなかった。
だって、最初の約束では、五年もしたらアレクシスを解放してくれるということだったんですもの。約束通り、五年間このショーを観覧することを耐えさえすれば。
でも約束を守ったのに返してくれなかった……。当たり前よね、子供騙しの約束だもの。人質を手放すなんてこと、あの公爵がするわけがなかったの。
しかもアレクシスはあんな過酷な状況の中でも美しく成長して、やがて本格的にウィシャート公のお気に入りになってしまった。それに……、よりにもよってその約束の年に、彼の子供を産んだのよ…

…、ああ、アレックス様、こんなこと、あんまり酷すぎると思うわね？

そのときは私、ギルバート様になんて言葉をかけていいかさえ分からなかったわ！

私が死んですべてがもとに戻るのなら、喜んでそうしたかった。私があのとき大人ぶって、着飾ってパーティーに出さえしなかったら、どんなに悪いように物事が転がったとしたって、きっとこれほど酷いことにはならなかったに違いないんですもの！

私は、私こそがギルバート様から恋人を取り上げてしまった張本人なの。アレックス様、私は貴方からは両親を奪ってしまったの、そして、そして姉さんからは人生そのものをよ……！」

ルイーズは少しの間興奮して、泣き出していた。僕はルイーズに向かって、君のせいじゃないと何度か繰り返した。

「それを知らされてからよ。ギルバート様が、本格的に壊れてしまったのは」

やがて鼻をすすりながらルイーズは続けた。

「彼は今でも苛々していると、このショーのことを思い出して、アレクシスの身代わりの恋人たちや、アレクシスに似たような女を連れてきて犯しているわ。初夜権、あれはまさに鬱憤晴らしの八つ当たりよ。

彼は……、ええ、彼は完全に狂っているわ！　それまでは間違っても弱い者苛めを手を叩いて喜ぶような、そんな方ではなかったのに……、きっとアレクシスを返して貰えると信じて、健気にそのことを信じて耐えている誰よりも心の強い方だった。でもアレクシスが公爵の子供を産み……、若い私たちはこの世界に神などいないことを知ったの。そして正義感の強いお優しいギルバート様は、もう何

処にもいなくなってしまった……」

ルイーズは囁いた。

「公爵様に逆らって、アレクシスを取り返すことはできたわ。でも、そうすれば様々な面で手酷い報復をされることは明らかだった。莫大な犠牲を払わなければならないことは分かっていた。若い伯爵に選択できる道は限られていた。

所領の安寧を維持し、民の人生を護るために働くあの方が、領民を苦しめるような選択はできないことだった。あの方が先代様の言いつけ通り、基本的には人々から慕われるよい領主であることを、貴方は知っているでしょう。

彼は愛するアレクシス一人のことよりも、領主としての立場を選んだのよ」

「……ルイーズ、アレクシスは……、つまり今はトバイア様の愛人ということなのか、だからここにいない……。

でも、公爵の愛人となれば……、公式の場所では無理でも、私的なパーティーなんかに姿を現すこともあるだろう。現に僕はトバイア様が細君でない女を連れて歩いているのを見たことがある。

つまり僕は、彼女に……、会えるということはあるんだろうか……」

「いいえ、会えないわ」

ルイーズは悲しくかぶりを振った。

「それは何故……、生んですぐ手放した僕のことなんか、忘れて……」

「アレックス様……、アレクシスは、気が狂ってしまったの。もう、正気ではなくなってしまったのよ……。

だから貴方と会っても貴方が誰かなんて、今のアレクシスにはまず分からないでしょう。

今では姉さんは、子供のような顔をして童謡を歌っているか、泣いているか、悲鳴を上げているか……、何年か前にね、公爵様の気まぐれで少しだけ面会を許されたことがあるの。でも、私が誰かすら分からない様子だった。アレクシスは暗い部屋の片隅で震えていた。私の姿を認めると、お姉さんはどなたですかって……、怯えた顔で聞かれたわ」

ルイーズの声は嘆きに震えていた。

「でもどうかアレクシスを責めないであげて……、アレクシスは貴方を捨てたわけではなかったのよ。だって、愛情のない男に抱かれてダメージを受けない女なんかいないものだわ……。まして女の中には、たった一度で魂が殺されてしまう弱い者もあるの。あんな状況は、正気でいるには過酷すぎたのよ。繊細でか弱いアレクシスには、トバイア様を憎み続けたり、戦うということはできなかったの……、狂ってしまうことでしか自分を守ることができなかったの……。

でもアレクシスは今でもとても美しくて……、気が狂ってなお解放して貰えない……」

「そんな…、そんなことって……」

僕は堪らずに両手で顔を覆った。

「どうして……、こんなに重大な話を秘密にしていたんだ、僕はもう子供じゃないのに」

「ギルバート様は、貴方にアレクシスを重ねて見ているところがあるのよ。だから貴方もきっとアレクシスと同じくらいか弱くて、純粋で、繊細だって信じてる。実際の貴方は、さっきの行いといい、必ずしもそうじゃないって、私にはよく分かるわ。

でもギルバート様にとっては……、あの方の心の中では貴方はいつ

までも小さな赤ちゃんのままなのよ。揺りかごの中にいた、アレクシスが彼の傍にいた頃の、あの可愛くて小さな貴方のままなの。だから……、貴方がこんなことには耐えられないと思ったのよ。だからこんな残酷な事情を知らせるわけにはいかなかったの。それに何より、貴方だけは汚らわしいものの一切から、守りたかったのよ。だって貴方は彼がアレクシスと幸せな時代を過ごした証拠なんですもの。ギルバート様にとって、貴方はアレクシスそのものなんですもの。

愛するアレクシスと同じ名前をつけたほどに、彼は貴方を愛しているの、アレックスって、彼がその名前を他の人よりもずっと多く呼んでいること、意味もなく呼んでいること……気がついていらっしゃらない？

彼は貴方を愛しているのよ、アレックス様」

第１４５話　独白

それから僕はいろいろなことを考えた。

ルイーズは自分のせいで兄さんとアレクシスが引き裂かれたと思い、その贖罪のためだけに残りの人生を生きようとしているように感じたが、たぶん、僕が見たところでは、ウィシャート公爵があいう本性を持っているのなら、彼はまず何としても兄さんの身近の女を手に入れようとしただろう。

そして兄さんの周りには、腹違いの姉妹だとか、従姉妹だとかがいなかった以上、兄さんを操れるほどの影響を持つ女は乳姉妹である彼女たちしかいなかった。だからいずれどちらかが持っていかれただろうと僕は思った。もし僕が女子だったら、僕が持っていかれたかもしれない可能性もあった。

そう、紛れもない兄さんの実子でありながら、僕を兄さんの子供ではなく、父上の正式の子供としたことも、名家であるアディンセル家の当主の嫡子ともなれば、そうそう手出しができないことを見越してのことだったのだろう。

兄さんはアレクシスととうとう結婚できなかったから、そうなると僕は、本来であればアレクシスの私生児となってしまうのだ。我が国の体質から言えば、兄さんから実子の認知を貰ったとしても、世間的な信用の面から言えばどうしても欠損が生じてしまう。でも前当主夫妻の晩年の遺児ともなれば、周囲からの同情と関心、それに尊重を勝ち取るのは容易いことだった。

僕のことを、当時肺病患者であったギゼル妃の実子としたことについては、いろいろ難しいところなのだが、医者や魔術師等の環境と本人の状態によっては不可能と言い切れることではないと、権威を使って主張することくらいはできるだろう。また幸いだったことは、如何なる運命の悪戯か、僕は兄さんでもなければアレクシスでもなく、兄さんの母上であるギゼル妃にいちばん顔が似ていたことだっ

た。

だから成長してからも僕が父上と母上の子供であることを、ほとんど疑われずに受け入れられたのだと思った。

初恋のアレクシスを、権力者の気まぐれな慰み目的で没収されたこと。これは、これだけでも死にたくなるような悲劇だった。しかし神は能力の高い者にこそ次々と試練をお与えになるという話を引用するならば、それで終わらないのが兄さんの人生なのだ。

兄さんはウィシャート公爵の身近な配下として、父上から譲り受けたアディンセル伯爵領を守るために、あの男の手下として人生の多くの時間を割かなければならなかったのだ。

腹の中は煮えたぎっていただろうに、兄さんはそんな感情を露ほども面に出さず、公爵に傅き爽やかな笑顔で接していることがどれほどの屈辱だっただろう。

またあの公爵の性格からいって、アレクシスがベッドの上でどうであるかという卑猥な話を聞かされないはずがなく、それからも兄さんがどれほど酷い思いをさせられ続けたかということは、想像するに難くなかった。

その結果、手当たり次第に金髪女に手を出して、何とかその焦燥を癒そうともがいていたのだろうことを、僕はようやく理解できるに至った。

もっとも、だからと言って僕は兄さんの人格や、これまでやっていらしたことのすべてを許容することができる考えに至っているわけではなかった。彼が行ってきたことの中には、当然糾弾されて然るべき残虐行為がひとつやふたつでは収まらないし、愛する人を失って、心が壊れてしまったというルイーズの兄さんに対する評価はたぶん正しいのだろう。彼は壊れているし、ある意味では狂っていた。だけど兄さんが背負ってきた苦しみについて知ってしまった今となってはもう、僕は子供じみた綺麗事を振りかざし、自分だけが安全な場所に立って、兄さんを批判するということができなくなった。

兄さんがときに領民の生命など虫けらのようにしか思わない側面が

あることを知っているが、それでも領主が領民の生殺与奪を自由にできることは、我が王国において通常のことであり、陛下が領主に許している権限のひとつであって、何も兄さんだけが特別に残酷であるわけじゃない。僕はある時期そのことを理解することができなかったが、もっと酷い人間は幾らでもいて、不当な収奪、残虐な拷問について話題にもならないほど枚挙に暇がない。

ウィシャート公爵がやっていたことすら、冷静になってみれば、たぶん何処にでも転がっている他愛のない話だろう。対象が貴族の娘、しかも自分の母親だったから僕はとんでもないショックを受けているが、農民の娘をさらって来て悪逆を尽くすなんてことを、少し残忍性を持っている貴族なら、そんなことは取るにも足らない趣味の範疇だ。

それに領主として、兄さんというのはとても優秀な存在だった。行政にたずさわるようになって初めて分かったことだが、意外にも彼の中には世の中に対する高い理想というものがあり、それは慈悲心とは少し違った欲求であるにせよ、結果として領民の利益に適う豊かな社会整備に強い関心を持っていた。

僕が中でも感心したことは、彼が自分の代になってから領主権限において平民階級の子供にさえ強制的な教育期間というものを設け始めたということだったが、教師を集めるだけの政治力と、資金源のあるという好条件が揃っているとはいえ、これは他の多くの領主が未だ実践していない大変優れた政策だった。

教育を施すということは、莫大な金がかかる上に結果がすぐに出ることもないので、どうしても後まわしにされがちなのだが、貧困に対抗するために教育というものは不可欠で、例を挙げるなら字の読み書きができないばかりに損害を被ったり人に騙されるという悲劇を、領民の人生から撲滅させることができるということなのだ。基本的な教育、これはかけがえのない財産であり、人生において更なる発展を獲得し、知識欲を満たす幸福を得るための強力なコネクションを、彼らの人生にもたらすということだ。

実際、兄さんの所領における若年層の識字率は国内でも非常に高かった。都市部では字を読めない若者を探すことのほうが難しいくらいだろう。兄さんが領主になって今年で十九年、政策の結果が出始めていたのだ。

そしてこのことが示しているのは、僕の兄さんは領民から搾取することばかり考えている領主ではない、それどころか、彼は僕が考えていたよりもずっと領民のために働く領主であるということだった。実際、彼は領民に法外な徴税を強いることもなかったし、様々の嘆願にも応じていた。

彼は平民でも意欲や才能のある人間を積極的に騎士団に採用し、治安維持には特に積極的だった。女性蔑視は確かに激しいと思うが、それでも彼は口で言うほどには女性を駆逐するようなことはしていなかった。

相対的に見て、僕の兄さんは非常にバランスの取れた優れた領主だったことを、僕は今更ながらに思い直していた。よき領主となれという晩年の父上の言いつけを、兄さんは父上のことをときどき辛辣に罵りながらもきちんと守っていたのだ。

そして僕は確かにルイーズの言う通り、兄さんのこうしたよい面を見ようとせず、兄さんがときどきやらかす少々人道的にはずれた行いばかりを近視眼的に固執して腹を立て、冷静さを欠き、遂には彼を殺そうと思い立ったのだ。

だけど世の中を俯瞰してみれば、兄さんの判断には常に大義があった。

兄さんはアレクシスがウィシャート公爵に奴隷のように扱われているのを知っていてなお、もうずっと長い間酷い精神状態に違いなかったのに、冷静さを失わず、自分を見失わずに、冷徹なまでに全体の利益を優先してきたのだ。

アレクシスを助けるために、それ以外の多くの人たちの人生を台無しにするべきではないと、きっとつらい気持ちを堪えて、彼は判断してきた。

それなのに僕は兄さんがとうに世間に出て、大変な思いを味わっていらした年齢になっても、兄さんの庇護のもとでぬくぬくと安心して暮らしていた。好きな本を読み、うっとり季節を楽しんだり、散歩をして暮らしていられたのだ。

それならばせめて兄さんの精神的な助けになれていたかと言えば、僕は兄さんの苦悩を知ろうともせず、彼の力になろうと心を砕くこともなかった。

武官の家柄に生まれながら、騎士としての務めを苦手だからという理由で放棄し、日々兄さんの機嫌を伺い、さもなければ彼のやり方を批判し、自分の中の小さな世界を守ることだけに必死になっていた。

そんな僕が兄さんに敵うわけもなかったし、自分が彼よりも正しいなんてことを、無知な子供のように主張できるはずもなかった。

僕はもう、兄さんのことを憎むことができなかった。もう誰を憎んでいいのかさえ分からない。

本当は僕は、タティが死んでしまったら、僕も死のうと思っていたんだ。

だけどそれすらも、世間知らずの子供が選びがちな自己愛的発想な気がして、僕はただ疲れ果てていた。

第１４６話　冬の終わり（１）

冬の終わり、僕はカイトとシエラを連れて兄さんの執務室前にいた。執務室には先客があるようなので、僕らはそのまま話し込んで待っていたのだ。

他愛のない世間話をしているようにみえて、カイトが僕にもシエラにも気を遣っているのが、今の僕にはよく理解できた。彼は周りの人間に、本当によく気を配っているのだ。僕やシエラがあまり社交的な人間でないということもあるだろう。

どちらかでも会話から脱落したり、気分を悪くしてはいないか。誤解を招きそうなことをどちらかが言えば、彼は素早くその注釈的な言葉を入れたり、自分を悪者にするかして、その場を円滑にした。

確かに口数は多いほうなのだが、よくよく注意して聞いていると、彼は余計なことは一切言っていない。兄さんが彼を買っているのがなるほどと思える、実に模範的な姿勢だった。これを煩いとだけ思って切り捨てていた僕の心の狭さのほうが、かなり問題があったのではないかというほどに、彼は常に神経を遣っているのだ。

僕は、唯一の同年代の同性の友人であるカイトに対しては、いろいろと思うところがあるのだが、それはまた別の機会に考察しようと思う。

その頃の僕の毎日は、そして人生は無情に続いて行く、という何かの小説の印象的な台詞を、そのまま地で行っている心境だった。心は相変わらず真冬のように塞いでいるのだが、無情なことに廊下の窓から差し込む日中の日差しが、もう真冬のそれとは違っている。

タティの病状はよくないと聞いていた。

人間には生まれ持った生命力と言うものがあり、タティは生まれつきそれがそれほど強い人間ではないとルイーズが言っていた。同じ病に罹った若い娘でも、ギゼル様のように数年生き長らえることができる者もいれば、一年も持たずして死んでしまう者もあると。

「ランベリー領では果物が美味しいの。林檎の実が特産なのよ」

ふと、僕の横にいるシエラが言った。彼女の故郷の話をしていたのだ。彼女の頬は健康的な薔薇色で、彼女の美しさをよりあでやかに引き立たせていた。睫毛の長い目元ときたら、まるで妖精が宿っているようだったし、彼女の青く深い色をした眼差しは、人々の間でよく宝石のようだと褒め讃えられていた。そこにいるだけで人の目を楽しませてしまうシエラのような女性を、美貌と言うのだろう。僕としても、ふとした拍子に、思わず視線がシエラに向いてしまう。目があうと、シエラは恥ずかしそうに微笑んだ。

彼女は割と人見知りをする性格のようなのだが、最近ではさすがに僕とカイトには慣れてきてくれたようで、それは有難いことだった。休日なんかも、あまり用がなくても僕の視界に入っていることが多くなっていた。タティがいなくなったので、僕の部屋に近寄り易くなったということもあるのかもしれない。ときには甲斐甲斐しく紅茶を淹れてくれることもあった。ウィスラーナ家の秘密のお茶の淹れ方だと言って、魔法でもかけるようにシエラが淹れてくれたお茶は、なかなか美味しかった。美少女がいる風景というものは、率直に言って悪いものではない。

悪いものではないのだが……、彼女は今日もまた青い長衣に、髪にはエメラルドの髪飾りをしていた。そして香水はオールドローズ。別に不満はないのだが、よくよく観察するまでもなく、誰に憧れているんだと、言うまでもないような出で立ちだった。

「林檎？」

「ええ。お兄様の好物だったの。それに林檎のお酒とか、紅茶とか、デザートとか。美味しいの。お兄様、大好きだったのよ。アレックス様も、是非召し上がって」

「そうだね」

「本当よ」
「うん」
「アレックス様は、お酒は召し上がるの？」
「いや、最近は……、あまり飲まないよ。飲んでもいいことないからね」
「真面目なのですね」
「真面目？」

シエラが僕を褒めたような気がしたので、僕はちょっと調子に乗りそうになった。でもたったいま隣にいる大事な友人が心密かに想いを寄せる女性に、あんまり不用意な反応はできない。僕はカイトに話を振った。

「ねえ、僕って真面目かい。自分ではあんまり……確かに最近、僕ってすごく健全な生き方をしているって思うけど。努めてまっとうな人間になろうって気持ちは持っているかな。でも健全って言ったらどうしたって君だよね」
「健全？」

カイトは自分を指差した。それから、自虐的な顔をして僕を見返した。

「確かに、俺ほど善良で健全な男もないでしょう……」
「言えてる」

僕は自分で言っておきながら納得した。

「ひどい」
「うふふ」

ふとシエラが口許を押さえて笑った。彼女がここまで楽しそうな様子を見せるのは珍しいことなので、僕もカイトもシエラに注目した。

「おや、面白かったですか？」

カイトがシエラにたずねた。

シエラは頷いた。

「ええ、だって、何だかお二人って、とっても仲よしなんですもの。見ていたら、私まで楽しくなってしまったの」

「仲よしだって」

僕はカイトを見た。

「そりゃ、我々は仲よしグループですもん」

カイトは親指で自分を示して言った。

「カイト、君、いつの間に僕の仲間になったんだ？」

「ん、八年くらい前から？」

「いや、そうじゃないよ。僕としてはここ最近ようやくだな。ようやく顔見知りの域を脱したと言うか」

「アレックス様、俺のこと親友って言ったの憶えてます？」

ふとシエラが言った。

「私も仲間に入れて欲しいです」

僕たちは再びシエラに注目した。

「仲間？」

僕は思わずたずね返した。何故なら僕には仲間という概念がいまいち掴めていないからだ。カイトのことはさすがに友人とは思っているが、今の話だって只の言葉遊びのつもりだったのに、シエラが何かいいものをみつけたような、憧れたような顔をしているので、どう対応していいのか分からなかった。

そもそも仲よしグループとやらだって、兄さんが勝手に制定したものなのだ。

「いいですよ」

でもカイトが愛想よく勝手に応えた。

「シエラ様なら大歓迎」

「よかった。あっ、でも、この仲間には、アレックス様とカイトさんの他に、誰か仲のいい人はいらっしゃったり……、するのでしょうか？」

「そうですねえ、誰かいますか？」

本当は分かり切っているくせに、カイトは僕の面子のためか、わざわざ僕にたずねた。

僕は首を横に振った。

「いや、特にはいないよ」

「嬉しい」

シエラは手を合わせて明るく微笑んだ。

「では、私が三人目の仲間なのですね」

第147話　冬の終わり（2）

と、不意に楓の紋章の刻まれた扉が開いた。
用事を終えた客人が出て来るものと思って、僕は扉に注目した。兄さんの執務室前に詰めている騎士らも同様だった。でも出て来たのはジャスティン・サヴィルだった。

「アレックス様、どうぞいらしてください」

ジャスティンが、僕らに近づきながらそう言った。金色の短髪に、額には金のサークレットを嵌めている。何処か彫像のように冷たい感じがするのは、顔立ちのせいか、その表情が厳しいからだろうか。全身に壮年前期の男特有の活力があり、そして鍛錬を欠かさない優れた騎士たちの多くがそうであるように、彼もまた鍛え上げられた贅肉のない身体つきをしていた。
サヴィル家はアディンセル家に仕える武門の家柄で、彼はその嫡男だった。彼は注意深く、少し声を潜めていた。サヴィル家もまだウェブスター家同様当主が現役なのだが、彼は兄さんの幼友だちであることから既に側近の一人に加えられている。
アディンセル伯爵家の当主である兄さんの周囲には、たくさんの人間が仕えている。当然のことなのだが、僕のように、基本はカイトだけというようなことはないのだ。
ジャスティンは兄さんと同じ三十代前半、子供の頃から兄さんに顎で使われている連中の一人だった。以前ルイーズが見せてくれた兄さんの子供の頃の遊び仲間のうち、大半は今でもこうして兄さんを取り巻いて働いている。
これは不本意な話なのであまり触れたくないのだが、遊び相手として集められた貴族の子弟たちを統率することができず、逆によってたかって苛められてしまった僕のようなケースのほうが、実は稀と

言えるのだ。もっとも僕は当主ではないということもあるし、僕のときに集められた連中は、その質がほとんどチンピラ並みに非常に劣悪だったということも大いにあるので、まったく少しも僕のせいではないのだが。

「ウィシャート公爵家から客人がみえているのでは」

カイトが不審そうな顔をしてジャスティンにたずねた。

ジャスティンはそれを認めた。

「そうだ。だが入るようにと、閣下が仰せだ。おまえも」

ジャスティンは、僕に向けていたのとは打って変わった冷やかな視線をカイトに向けた。

年の近い連中ほどあからさまではなかったが、カイトの平民の血に対する冷遇が垣間見える瞬間だった。

「カイトをそんな軽蔑的な目で見るな。彼は平民じゃない」

僕は文句をつけた。

ジャスティンは苦笑いをし、無骨ながらすぐに態度を正した。

「申し訳ありません。これは失礼を致しました」

「立場はサヴィル家嫡男のおまえと変わらないはずだ。ちゃんと扱え」

「閣下もそうおっしゃいます。肝に銘じます」

ジャスティンはカイトに改めて視線を向けた。

「現在執務室内にはアディンセル家の重臣方が数名連ねている。が、

突然の来訪者のため少々人手が足りない。これからこの中で起ることに立ち会うは、おまえがそのうちの一人に加わってもよいという閣下の特段の思し召しである。この意味が分かるか」

「はい」

カイトは神妙に頷いた。

「よろしい、ついて来なさい。どうぞアレックス様、こちらへ」

ふとジャスティンは振り返って、シエラに向かって左のてのひらを突き出した。

「姫君は、こちらにはおいでになれません。貴方はどうぞご自分のお部屋にお引き取りを」

「どうしてですか？」

シエラは不満そうにジャスティンを見上げた。

「私はアレックス様の魔術師です」

ジャスティンは丁寧だが冷徹に応えた。

「だがそれは正式のものではない。伯爵様のご許可のない者を、この場所に立ち入らせることはできません。ここから先は神聖なる政治の場。女の出入りは無用です」

「けれど、ジェシカさんがいらっしゃるわ。それに、ルイーズさんも。

私、アレックス様と結婚を予定している者でもあるし、ウィスラーナ侯爵家の人間でもあります。それに仲間ですし……、だから貴方の指図は受けないわ。私に対する無礼な態度は許しません」

そしてシエラは前に踏み出そうとしたが、ジャスティンはかざしている分厚い手を更に高圧的にシエラに向けた。

「姫君、どうぞお聞きわけを。こちらも遊びでやっているのではない――、では言い方を変えましょう。この場に子供は立ち入れません」

「私はもう子供ではありません。私は十八ですっ」

「シエラ、部屋に戻っていて」

僕はさすがにジャスティンがちょっと出過ぎていると思ったので、彼とシエラの間に入った。彼の手を払い、シエラに向き直った。

「アレックス様までそんなことをおっしゃるの？」

「たぶん今は兄さんのご機嫌が悪いんだと思う。君は部屋に戻って、とっておきの紅茶を淹れておいてよ。林檎の香りのするやつ。後で飲みに行くから」

「まあ。アレックス様が、私のお部屋に来てくださるのですか？」

「うん、カイトも一緒に」

「カイトさんも一緒……、二人きりではないのね……。アレックス様、いつ私とデートをしてくださるの？」

シエラはまるで焦がれるように僕をみつめた。

「今度」

「今度では嫌です。今度なんて、そんなの……、ちゃんとお約束をしてくれなければ、私はここを動きません」

「じゃあ今週末、予定が入らなければ……」

「先週もそうおっしゃったわ。そして金曜日に予定が入ったの」

「今度は絶対。約束する。シエラの言う通りにするから。後で一緒

に、何して過ごすか決めようよ」
「分かりました……、きっとですよ」
そして僕らはシエラと別れ、ジャスティンについて兄さんの執務室に入った。

第１４８話　冬の終わり（３）

広い執務室内に入ってすぐ、僕らはその場の緊迫した状況に立ち会うことになった。
シエラの立ち入りを阻んだジャスティンの判断が正しいと言わざるを得ない、まるで針で素肌を刺されるかのような、ピリピリとした嫌な空気が場に満ちていた。
正面中央にある執務机にいる兄さんは、いつもの通り葉巻でも燻らせかねないような、悠然とした構え方をしているのだが、その周りにいるジェシカやルイーズ、それに何人かの伯爵の側近たちが、皆殺気立っている様子なのが分かった。ジャスティンの父親であるヘイゲン・サヴィルやビル・ミラン、オード・バインド、それにデイビッド・ウェブスターの姿もあった。
兄さんと対面しているのは、ウィシャート公爵家直属の貴族たちとその護衛たちのようだった。わざわざパブリックスペースで待たせておくべき護衛までを、伯爵執務室内に通さざるを得なかったのは、彼らがウィシャート公爵の名前でやって来ている使いであるためだろう。ざっと数える限り、全部で二十名以上いた。
僕らの入室にあたって、彼らのうちの何名かが、確認するようにこちらを振り返る。笑顔どころか会釈が発生する素振りもない。執務机の兄さんもまた僕の顔を一瞥し、それから何事もなかったように客人に視線を戻した。
少し会話を聞いているだけで、兄さんと彼らが対立しているということが分かった。彼らは兄さんを面と向かって侮辱し、裏切り者と罵っていた。そのために兄さんに忠誠を誓う者たちが、その憤りを隠さないというそういう場面だったのだ。
この使者団の代表らしき男が、兄さんよりも格下であることも当然あるだろう。

「アディンセル伯、貴様はそれでも騎士なのか……、我らが閣下が長い間特に便宜を図ってやっていた大恩を、よもや忘れたと、こういうことなのか！」

声を張り上げているのはウィシャート公爵配下のゲイリー伯爵だ。伯爵と言っても厳密には兄さんとは立場が違う。彼は広大なウィシャート公爵家の領地管理の一部を与る従属領主と言えばいいだろうか。子爵の権限を少し大きくしたようなもので、アディンセル家ほど様々の自治権を認められてはいない下級伯爵だ。彼は確かトバイア様の最側近の一人だ。公爵と同年代、四十代後半の男だった。

「寄る瀬のない少年伯爵が、よもや実力であの王宮を渡り歩けたと驕っているのでもあるまいに。すべてはトバイア様の強力なる後ろ盾あってのことではないか！

閣下に対して、いろいろと言いたいこともあるだろう。我らが閣下はとかく直情的なところがおありの方、貴公としても苦い思いを味わわされたこともおありだろう。それは我らとて分かっている――、だが、だがそれでも彼が貴公に与えたものの大きさを考えられよ。宮廷における立場の確保、彼は常にアディンセル家の温情あふれる協力者だった、そして貴公を弟のように可愛がっていらっしゃった……、そうではなかったか？　そうではなかったかね？」

ゲイリー伯爵は、どうやら兄さんを説得している様子だった。懸命さを通り越し、必死さが窺えるのは、僕の気のせいではなかっただろう。

「しかし閣下は彼らを拒否するおつもりなのですね」

カイトがジャスティンに言った。

ジャスティンは無言で頷いた。

「僕はなんで呼ばれたんだ？　取り込んでいるみたいだけど」

僕の質問に、ジャスティンはさっきカイトに向けたものよりも、もっと鋭い眼光を僕に向けた。

「貴方にもそろそろ慣れて頂きたいとの仰せです」

ゲイリー伯爵の話は続いていた。

「それを形勢不利と見るや意図も容易く見限るような真似をするなど何たる傲慢！
伯爵、貴様は確かトバイア閣下に女を取られている者の一人であったな」

ゲイリー伯爵の不意の言葉に、兄さんの眉が微かに動いた。

「そうだ、そう、あれは大層いい女だな。名前は何と言ったか、淡雪のごとき柔肌に、美しき金の髪……、トバイア様は大抵の女は飽きれば下請けに放るか殺してしまうが、今なおご自身で飼っていらっしゃるとはさぞかしあちらの具合がよろしいのであろう。
そうそう、思い出した……、あの娘は凌辱に耐え切れずに、早々に気が狂ってしまったのだったな。堪え性のない女だった。それでいつだったか、気が狂った娘が子を孕んだと、あのときのトバイア様は随分興奮をしていらした。母親の頭がおかしいと、生まれて来る子供はどうなるのか実験するのだとおっしゃってな。ぼて腹の彼女は妙にそそったよ、白痴美とは言ったものだが――」

「言いたいことはそれだけか」

兄さんがいつもより低い声で言った。

「貴様は身の程を知れということだ、ギルバート卿」

ゲイリーが兄さんを牽制した。

「貴様は所詮、サンセリウス王に仕える臣下の一人に過ぎん。こんなふうに手下をはべらせていても、私と同じ、所詮は地方領主でしかないということだ。王宮で傅かれる存在には、なり得んということなのだ。

他方でトバイア様は、建国王セリウスの由緒正しき血を受けし者だ。今は一時的にドブネズミの王子が幅を利かせているが、本来老王陛下の正当なる後継は彼だ。

聡明と評判の伯爵ならば、もはや私の言いたいことはお分かりだろう。身の程を弁えられよ。個人的な恨み事で、大事を見失ってはいかんのだ。どうした、先ほどまでの余裕の薄笑いが消えたではないか。年長の私にはよく見えるぞ、貴公は何のために女を閣下に献上したか、よくよく思い出してみるがいい。

彼女を生贄に差し出したのは、いったい何のためだった？　泣き叫ぶ彼女を見殺しにし続けたのは何のためだ？　すべてはトバイア様に取り入るためだったのではなかったか。

あの方を支持し、彼に縋ることで、貴公はアディンセル伯爵家の生き残りを図ったのだ。重大な決断だった。勇気ある決断だったよ。

少年の身でありながら、凍るような無表情でいたいけな少女を見殺しにする貴公の残酷さと精神力は、我々の間ではちょっとした英雄だったのだ。そう、貴公はまさにダークヒーローだった。若い人間は大抵、目前に展開される悲劇と良心の呵責に耐えられない。泣き叫ぶか、酷い者は女を助けようと我を忘れて舞台に飛び出してしまうのに」

「……」

「トバイア様はまだ死んではいない。彼には意識があり、再起を図

ろうとなさっているのだ。トバイア様が復帰されれば、相手は下賤腹のひ弱な王子だ。まだまだ戦うことはできるもの。そのとき貴公の裏切りを知れば、彼はいったい何をするだろうかね。貴公はこれまでの人生を棒に振るつもりか？　彼女が可哀想だとは思わないか？哀れにも、冷酷な貴公の本性を彼女は最後までまったく知らない様子だった。ギルバート様と泣きながら、それでも貴公が助けに入ってくれることを信じて、とうとう見殺しにされたあの娘の犠牲が完全に無駄になるぞ？　万事にもっと慎重になることだ。

よろしいか伯爵、これは脅かしではない。ここは我ら一門にとって正念場なのだ。我らも本気なのだということを理解されよ。貴様が大恩ある我らがトバイア様を支持せず！　生まれながらの売春婦を母に持つ、妾腹生まれの王子を支持すると言うならばだ！

若造の過ぎたる驕慢はいつの時代も重篤な生命取りとなること、とくと自覚されるがよろしかろうぞ！」

ゲイリー伯爵の言い分に、執務机の前にいる数名の貴族たちは一斉に賛意を示した。

兄さんは頷き、やがて静かに一同を見渡した。

第１４９話　冬の終わり（４）

「なるほど」

兄さんはご自分がこんなふうに責め立てられていることはとても心外で、戸惑っているということを、友好的な態度で彼らに示した。軽く両手を上げ、だが油断のない視線をゲイリー伯爵にやった。

「確かに、私が間違っていたのかもしれません。トバイア様に長年の恩義がありながら、王子派に寝返ろうなどということは騎士道に反する行い……」

「その通りだ。誇り高いはずの名門アディンセル家の当主ともあろう者が、あの畜生腹の王子に与し、あまつさえ血筋の卑しい王子の番犬に成り下がりたいとは笑止なこと。

私はトバイア様ほど悪趣味で猟奇的な男ではないつもりだ、だから貴公の抱える苦悩はよく分かる。だが過去の些細なわだかまりなど、この際置いておくべきだ。

王子派につけば貴公には侯爵の椅子が用意されていると言うが、トバイア様とて同等のご用意はあるものだ。あの方が、貴公を高く買っていることを知らぬわけではあるまい。それだけではない、あの方がいずれ国王となられれば、貴公にはそれ以上の恩賞を与えもなさろう。侯爵位は無論、領地の拡張、軍隊における格式、当代一の美貌を誇る姫君を、妻にしたいと言うならそれも通るだろう……」

「確かに。私はトバイア様のお力添えがなかったならば、現在の地位にあることはできなかった」

「ならば、貴公はフレデリック王子よりトバイア様を推すが筋というもの……、是非ともウィシャート公爵家の此度の窮地の脱却に尽力頂きたい。これぞかつてアディンセル家の窮地を救った我らがトバイア様に、その大恩を返す時ではないか。これは、騎士たるもの

の真髄に他なるまい。これは私の言葉ではない、筆頭公爵閣下の貴きお言葉だ」

「分かりました」

「おお、分かってくださったか」

そしてゲイリー伯爵は兄さんに握手を求めた。兄さんは手を差し出し、その握手に応じるかに思えたのだが、そうではなかった。兄さんは握手に応じる振りをしたかと思うとゲイリー伯爵の手首を掴んだ。それを執務机に押しつけ、もう片方の手に握られていた羽根ペンを、いきなりゲイリー伯爵の手の甲に突き刺した。

ゲイリー伯爵が身体をのけ反らせて絶叫を上げた。兄さんに物凄い力で手首を押さえられているために、身動きが取れないためだ。それと同時にジェシカが滑るように彼に近寄って、彼の背中から胸にめがけて剣を突き刺した。肋骨をすり抜けて胴体を貫通させ、手際よく心臓だけを潰したわけだ。

僕の横でカイトが軽く指を鳴らした。技術の高さに感心したのだろう。

絶命したゲイリー伯爵の背中に足をかけて剣を引き抜くと、ジェシカは既に混戦状態になり始めている執務机前に立って兄さんを守る位置を取った。

兄さんがゲイリーに羽根ペンを突き刺したことがひとつの合図だったのだ。

兄さんの傍らにいたルイーズが、すかさずてのひらを掲げ、魔法力による対決を競り勝ちゲイリーの魔術師の首を風の刃で飛ばしたのも見えた。相手の魔術師を生かしておくのとおかないのとでは、戦況はまったく違うことになる。彼女もまた兄さんの兵隊としての訓練が行き届いているのだ。その意味で、アレクシスを切り捨てた父上の判断は正しいと言えるのかもしれない。気持ちの優しいアレクシスでは、そうしなければ自分が傷つけられてしまう場合であろうとも、到底人を殺すなんてことに魔法は使えなかっただろうから…

…。

アディンセル家側の不意打ちによって、あちこちで血が噴き上がったので、僕は眩暈を起こして倒れかかったが、ジャスティンの怒鳴り声でかろうじてそうならなかった。

「気を張ってアレックス様！　この程度で気を失うなど女の真似事ですか！

これが我が家ならば、もし弟たちがそんな失態をしでかせば、顔面殴打も辞さぬことです！　こんなことは場数を踏めば何でもない！

貴方も騎士なら恥を知りなさい！」

ジャスティンが、意識が遠のきそうな僕のことを、延々揺すりながら言った。

「皆殺しにしろ！　我らが若き王子殿下に仇なす逆賊トバイアに忠誠を誓う背徳者どもを生きて逃がすな！」

怒号と悲鳴、剣のぶつかる金属音に混じって、兄さんのはずむような命令が聞こえていた。

脱出口の確保目的だろう。三、四人の使者団護衛騎士が、扉付近にいる僕らのほうに向かって走って来た。どの騎士も手練そうな上に、殺意に満ちた顔でこちらに迫って来たのだ。

それなのにジャスティンはカイトの背中を乱暴に押し、一人で始末して見せろと命令した。

「デイビッド卿の前で手柄を立てる機会を譲ってやる。抜かるな」

考える時間も与えられず、カイトが剣を抜き放った。カイトの基本武器は刀身の長い片手剣だ。彼は僕の護衛としての役割をよく果たした。先頭一人目の剣を弾いて胸を裂き、手首をかえしてすぐ突っ

込んで来た二人目の腹を横腹から斬り上げた。その動きは正確で迅速、裂け目は深く、腹膜から大量の血液と内臓がこぼれ出したのが見えたので、僕は慌てて顔をそらした。

するとジャスティンが、僕が気を失ったと思ったのか、僕の頬を平手で打った。兄さんに許可されてのことなのだろうが、僕はこれはかなり頭に来た。僕は生まれてこのかた兄さんにも顔を殴られたことなんてないからだ。

そうしている間にもカイトは三人目の男の突撃を上体でかわし、その背中に剣を突き立てながら、後ろから来る四人目の男の顔面にまわし蹴りを入れていた。一連の動きがまるで一節の美しい舞を舞っているかのようだった。憎いほどに高い身体能力を活かした、実に華麗な動作だった。

しかし蹴られた男の身体は勢いよく吹っ飛んで、兄さんのコレクションである高価な酒瓶の並んだガラスケースを突き破ってしまった。男は全身にガラスが刺さって無惨な血まみれになり、カイトは砕け散ったガラスケースの中身を心配して慌てたが、ジャスティンはこの場の熱気に興奮をしているような、容認の声を上げていた。

「閣下は舶来物の酒よりもおまえの生命を重んじてくださることだろう！　月給から天引きだがな！」

「げえっ、そんなっ！」

「そんなことよりとどめを刺せ」

ジャスティンに冷たく促され、カイトはサイドボードに突っ込んだ男の髪を掴み上げると、速やかにその頸動脈を切断した。

血飛沫が上がり、僕は頭がくらくらして、気を失わないために庭園の花のことを考えていた。

第１５０話　冬の終わり（５）

庭園には久しぶりにシェアがいた。
こんな血生臭い場面にそぐわないあの美しい女性は、いつもの通り僕に近寄りながら微笑んでいた。シェアは僕の名前を呼び、摘みたての白い花を、そっとお日様の光にかざして見せた。金色の長い髪がそよ風に揺れ、僕はうっとりとシェアの指先に目をやった。彼女は何かを示していた。
それはお日様ではなく、魔法の光だった。僕の意識は一瞬にしてまたあの血生臭い虐殺会場に引き戻されて、魔法を使うとき、術者の魔力が高まる現象の一部を捉えていたのだ。
だがこれは魔力を持たない者には気づくのが難しい。視覚で捉えられる性質のエネルギーではないからだ。この不逞の客人たちの中には、ゲイリー伯爵の側近以外に、隠れてもう一人魔術師がいたのだ……、でもそれにしてはその高まり方がおかしかった。大した魔力の持ち主でもないのに増幅の仕方が異様だったので、僕は懐に手を入れて銃を探した。何かよからぬ魔法に違いないと後から思うとそうなのだが、そのときは頭で考えていたのではなく、ほとんど反射的なことだった。
僕は、僕を揺すっているジャスティンを左手で押し退けると、悪夢のように殺人が行われている血みどろの執務室内に視線を動かし、仲間の死体に埋もれているその魔術師の頭を撃った。弾ははずれて床に当たったが、近くにいたデイビッドがその男の頭に剣を垂直に落として頭を潰したことで事なきを得た。顔に剣を深々と突き刺された男の右手には鉛筆のような小さい杖が握られており、それは兄さんのいる執務机の方向を向いていた。

「エクセレントでございますな！」

デイビッドが振り返って僕に微笑んだ。どうでもいいが、とどめを刺すのに彼はわざと意識のある敵の眉間を狙って突き刺したように思えたのだが、養子虐めをするような男の残酷さとしては通常行為なのだろう。

それから僕は少し記憶が途切れかけて、気がついたときには騒ぎはあらかた終わっていた。

僕は壁に背中を預けて座っていて、風を送っているつもりなのか、カイトが僕の顔の前で手をひらひら動かしていた。

「アレックス様、気がつかれました？　お怪我はありませんか？」

「うん、大丈夫だ……」

僕は熱を持っているような頭痛を感じながら、静かに頷いた。生臭い血の匂いが室内に充満していて、今にも死にそうなのだが、僕はもう弱い男でいることはやめることにしたのだ。

「すごいじゃないですか、閣下を狙った魔術師をみつけるなんて。敢闘賞ですね」

カイトは僕を褒め称えた。彼はおしゃべりをしたいらしく、僕にたたみかけた。

「俺は正直、アレックス様があんな行動に出られるとは思いませんでしたよ。心を入れ替えたなんて、近頃はよくおっしゃっていましたけど。こういうことだったんですね。頑張りましたね」

「別に。僕がみつけなくたって、どうせルイーズが庇っただろう」

「でも、何か自爆みたいな魔法だったそうですよ。自分の死と引き換えに毒蛇の呪いをかけるとか何とか。成功していたら、自分が守護をかけていない閣下と貴方以外の者が被害を受けていただろうってルイーズ様が。貴方のおかげで全員が助かりました」

カイトがあんまり僕を褒めるので、僕は居心地の悪さを感じて肩を竦めた。どう見ても、今回ばかりはカイトのほうが活躍をしていたし、実際彼は素晴らしく腕がいい。優れた身体能力と剣術の才、そして血まみれの人間より主君のコレクションの安否を心配できる図太い神経を兼ね備えているのだから、まさに騎士業は天職と言えるだろう。

それなのに小さなことで僕を持ち上げるカイトの態度が邪魔臭かったし、少しは申し訳ない気もした。

「カイト、君はさっきから大袈裟だよ。それだとまるで、これまでの僕が馬鹿だったみたいじゃないか……。

それに、どうせまたこうやって倒れたよ。僕はひ弱だ。ヴァレリアが言っていた通り、救い難いお坊ちゃま君さ。とても褒められる内容じゃなかった。目の前で内臓ぶちまける君の丸太のような神経についていけずに」

「でも心がけの違いは分かりますよ」

カイトは僕の目を見て言った。

「今はしっかりしようって顔してる」

「……」

「それにしてもアレックス様、銃を持ち歩いていらしたんですね。それ、悪くないアイデアかもしれませんね。飛び道具は貴方向きな気がします。本格的に射撃訓練をされるといいかもしれない」

「護身用にいいかと思ってね。騎士としては邪道だけど」

「でもカッコイイですよ」

「そうかな……、そう思う？」

「ええ！」

死体の転がった凄惨な光景の中で、ウィシャート公爵家に対する今後の対応を心配する談議が展開されていたのは少しのことだ。

ウィシャート公爵家は当主が再起不能で、十六歳の若い公子がこの度暫定的に全権委譲されたものの、当然少年の公子様があのトバイア様につき随っていた一筋縄でいかない連中を、いきなり掌握できるはずはないことだ。またオーウェル公子の日頃の人を人とも思わない傲慢な態度も、こんなとき、彼の味方になろうとする人間の数を、とことんまで減らしてしまうことに作用したことだろう。

摂政に名乗りを上げる周辺貴族たちの争いも起こり、思惑による派閥ができあがって、あそこはいまや公領統治でさえ混迷状態にあるそうだ。

そしてそれに乗じる形で、我がアディンセル家は本格的にウィシャート公爵家から離反する方針となったようだった。今はジェシカとジャスティンがまた本棚が駄目になったとか、またラグを替えなければという話を始めていた。

他の人間たちもだいたい同様の対応だった。お互いの活躍を労いあっている。年配者たちが、腰痛の話をしているのが聞こえていた。

誰ひとりとして足下に転がる二十を超える死体に注視していないのが冗談のようだったが、騎士である彼らはこうしたことに慣れているのだ……、そして僕に必要なのは、こうした鈍感さなのだろう。

間もなく室内に清掃係や死体処理係がやって来たが、彼らですらいつものことだという反応をしているのだから。

もっとも兄さんを見ていると、それもさすがに程度問題である気がするが。

血の海の真ん中に立って、血塗られた剣を片手に黒いマントを翻し、ルイーズ相手にさも決め台詞のようなことを言っていた。彼はこの突然の虐殺劇の指揮命令を行ったことに、罪の意識などかけらもない。

「ふっ、ゲイリーめ。蛇の道は蛇と思っていたが、あの程度の安い

演説で私を動かせたと思い込むのは小物たる所以か。これではトバイアも程度が知れる。馬鹿は纏めて死ぬがいい」

「下位とはいえ伯爵を名乗る方をバッサリいっちゃって、陛下への申し開きはどうなさるおつもりですの？」

「ルイーズ、トバイア直属の奴は切羽詰まって私を殺しに来た。これは正当防衛だよ。そうだったろう？　確かに奴のほうから、私に刃を向けたのだ。違うかね？

私は正義の名の許に生命と名誉を防衛したにすぎん」

「あら素敵。言うことがまさに悪役ね」

「私はいつだって愛と正義のためにこの生命を捧げる敬虔なる騎士だよ」

「おまけにすごい嘘つきですこと」

そして兄さんは呆れるルイーズから、壁際の僕に目を移した。

僕は兄さんを見返して、何度か首を縦に振った。声は出さなかった。返事をしたら、ちょっと胃の中の物が逆流してしまいそうだったので。

第１５１話　萌芽

最近は僕が心を入れ替えたなんて、皆が思い始めているのが分かった。それは僕が自分でそう言ったのを、カイトのようにちゃんと信じてくれた人間もいたし、僕のその発言に少なくとも反しない行動を見てから、やっとそうなのかと思い始めた人間もいるだろう。大半は後者だっただろう。幾ら身分があるからと言って、それまで散々怠けていた若者の口先だけの言葉を、内容のある大人たちがそうそう信用することはないものだ。

騎士業をサボっていた僕に対する風当たりが、当たり障りのない愛想笑いにはなっても、目に見える批判の形となってこれまで僕に吹き込まなかったのは当然ながら兄さんという大きな風除けがあったからだ。兄さんが周りに睨みをきかせていたということもあるかもしれないが、近頃の僕が知る限り、世間とはもう少しシビアなものだ。要は家督継承者には優秀なギルバート卿がいるから大目に見て貰えていた。僕が次男ということもあったのだ。

サンセリウスが男系社会なのは言うまでもないことだが、ここは更に長子相続が原則となっている社会だ。だから兄さんがある限り、ルイーズが言っていたように、僕はスペアとみなされる。兄さんが家族を持って、息子を持ったら当然僕の継承順位は下がるし、将来は何処か領地を貰うなりして、引っ込んで暮らすのが順当と思われる立場だから見逃されていた面もあったのだろう。

だがもし僕が確実に責任を課せられる長男だったら――、実は紛れもない長男だったわけだが、戸籍上そうではないので次男と言い張っているわけだが――、僕は今頃誰にも相手にもされないだらしない男として、アディンセル家の領内だけじゃない、下手をすると僕の最低な評判は中央にまで流れてしまったに違いない。

何せ成人した武官の出の男子が武芸の修練を拒み、しかも実家が騎士団を持っているのにそこに参加しないということは、誰が聞いて

も愛国心に欠く不忠義な臆病者として、侮蔑の対象とされてしまうことだった。そんな男のことはまず誰も信用しない。

陰でお坊ちゃま君呼ばわりされるだけで済まされていたことが、奇跡的なほどの大失態だったのだ。

そして確かに僕はあの夜を境に心を入れ替えていた。

勿論、実際のところそうした決心は、何も劇的に僕の人格を改変できるほどの効力を持つものじゃない。二十年間に渡って培われてきたアレックス・アディンセルという男の人格基盤は、既に出来上がっているものだ。

それでも強烈な上に無惨で救い様のない過去の出来事を知って以降、ルイーズの宣言通り、僕はもうそれまでの暢気な子供ではいられなくなった。

だから思い切ってきっぱりと心を入れ替えたと公言した僕だったが、後からその見切り発車的自らの軽率な発言を、幾らか後悔することも多かった。

心を入れ替えたことでまず僕が取り組むべきは、やはり騎士としての務めだっただろう。僕がお坊ちゃま君呼ばわりされる理由は内向的な性格とか、人づきあいがないとかいうそういうことではない。騎士のくせに騎士業を怠けていたというこの一点に尽きるからだ。

しかしこれがきつかった。何せ僕が正統剣術を授業という形でしぶしぶ学んでいたのは、成人するまで、つまりもう二年以上も前までなのだ。それもアディンセル家の財力に物を言わせて雇った高名な剣術師範の授業、騎士を志す若者たちが垂涎ものの優れた教師をつけて貰っていたのに、僕は剣を振るうよりは懐中時計を気にしていた。

だから時間を開けて久しぶりに武芸の稽古をすれば、その夕方には足腰が酷い筋肉痛に見舞われて、翌日は木彫りの人形のような有様になった。疲れが取れないので執務机で寝てしまったり、たちまち頭脳労働の方面に支障が出てしまう日も続いた。その頃は真冬の寒さもあって、脚が攣ってもがいていることもよくあった。そして脚

が攣ってもがいている僕の脚を触りに、兄さんが湧いて来ることもあった。

「やめて、やめてって」

兄さんはカイトに命じて僕を無理やり椅子に拘束し、僕の足元にしゃがみ込んで、スラックスをたくしあげ、嫌がる僕の脚を触って喜んでいた。僕が自発的に剣術に取り組んでいることが、彼にしてみると余程嬉しかったようなのだが、弟とはいえ男の身体に触るというのはいかがなものか。

「ふふふ……、いいではないか。観念しろ。アレックス、おまえは私の持ち物なのだぞ。無駄な抵抗はするものではない。まったくきめの細かい、罪深いほど白い肌をしおって……」

それはたぶん、アレクシスのことを思い出して言ったんだと思うのだが、僕が逃げられないのをいいことに、まるで女を相手にしているときのような頭のおかしいことを言うので、そんなときは本当に、心の底から心を入れ替えなければよかったと思った。

「あいつは変態だ」

僕は、僕の脚を一通り撫でまわしてから兄さんが帰った後、怒って言った。

兄さんの言うことを聞いて、主人である僕を椅子に押さえつけたカイトにも腹を立てていた。

「絶対やばい奴だ。手つきがいやらしいんだ……」

「いや、さっきのは筋肉をほぐすストレッチだったんですよ。貴方

を心配して、わざわざいらしてくださったんじゃないですか。楽になったでしょ？　閣下に直々に脚をさすって貰えるなんて、そりゃすごいことですよ。

ま、でも罪深いほど白い肌って発言は……、何なんでしょう。ちょっぴりホラーでしたね。あれって閣下流のジョークなんでしょうかね。一部でつまらないと評判の。それとも……、ははは、まさかね。なんてねっ」

そしてカイトは明るい笑顔でおちゃらけたが、僕はまったく笑えず真面目に血の気が引いていた。

「カイト、僕は男だよね。どう見ても」

「ええ。でも金髪っぽいですけども」

「僕は男だよね」

「でも結構な色白ですが」

「好きでそうなわけじゃない。笑えないよ！」

「いいじゃないですか。愛があれば。閣下はにやにやしてて楽しそうだったなあ。やっぱり弟が可愛いんですよ。俺にしてみりゃ、ああやって心配してくれる家族がいるなんて、本当に羨ましい限りです」

「じゃあ君にあげるよ。抱いて貰え」

僕は厳しく言った。

「いや結構。俺は断然女がいいので」

カイトは拒否した。

「誰だってそうだ！　僕だって！」

第１５２話　楓の執務室

そしてあの夜からひと月もする頃には、僕は更に優秀になった。
アディンセル家に仕える小領主たち同様、僕はこれまではできるだけ寄りつきたくなかった兄さんの執務室に、呼ばれもしないのに自分から出向いて行くようになっていた。僕にもいろいろとやることがあって、武芸を磨くことを日課とまではいかないものの、一週間のうちで必ず半分は時間を取るようにしていたし、赤楓騎士団の各拠点の視察について行ったりもした。
はっきり言って今でも騎士業は嫌いなのだが、それを行うことで心の負担が軽くなっていることにも気がついた。僕は自分で言うのも何だが不真面目な性格ではないため、本音のところでは嫌なことから逃げて、義務を怠り、怠惰でいる自分に嫌気がさしていたのかもしれない。
剣の稽古で汗を掻くことは、まるで土と埃にまみれた道端の労働者のようで好きではないし、生傷はできるが、逃げまわっていた苦役を果たしたと言うか、背負っていた莫大な債務を返済したような清々しい爽快感はあった。
それに兄さんが機嫌がいいときはチェスの相手をすることもあった。僕は頭脳を使うゲームに関しては、かなり強かったので、実力では兄さんにも負けていなかった。しかも僕は常に大人だった。ゲームで負けても潔くそれを受け入れるからだ。
一方兄さんはご自分が勝つと得意になって戦績を語り出すし、僕が勝ちそうになると説教を始めるので、その辺僕は嫌なのだが。
近いうちに側近を二名増員すると通告されて、気持ちが何となく落ち込んだりもした。カイトと二人で上手くやっているから、人が増えるのは望まないことを伝えたのだが、兄さんは決定事項だと言った。

「娘をアレックスの秘書に？　却下だ」
「何故です。サヴィル家の者を新たにアレックス様につけるのなら、当然ウェブスター家からもそうして然るべきではありますまいか」
「既にカイトがいるだろう」
「是非に娘を」
「駄目だ。何度も言っているように、あれは使えん。それに気性難すぎる」
「なんと手酷い。我が娘は馬ではないですぞ……」

また別のとき、暇な時間にときどき執務机を挟んで展開される、兄さんとデイビッド卿のやり取りを、ジェシカは恒例行事と評した。

「彼は本当に懲りないと言うか、粘着質と言いますか、とにかくしつこい男なのです」

そう言って僕に説明をするジェシカは明らかに呆れていた。
そのとき室内には他にジャスティンとビルがいた。ビルは白髪混じりの黒髪をした四十代半ばの男だ。現在では恰幅がよく、額が少々上がっているが、温厚そうな容姿のせいか近寄り難い雰囲気はない。ミラン子爵は最近は何かとよく顔を出しているようだ。彼は僕とジェシカが話している辺りとは、真逆の壁際に直立していた。彼は僕やジェシカのおしゃべりとも、一線を画していたのだ。前から当然分かり切っていることではあるけれども、真なる所領政治の場では、兄さんですら若造という、そういう認識なのだということを、この執務室に出入りする人間の年齢層の高さから、僕は肌で感じるに至っていた。

「彼は娘をカイトと婚約させると言ったんじゃなかったのか？」
「諦め切れないのですよ」

僕の質問に対し、他人事そのものというようにジェシカが応じた。

「平民の血を直系に入れれば何かと問題がある。それも女を見初めて娶るというのならばまだしも、平民の血に汚染された傍系を引き入れるというのだから、卿にしてみれば大惨事だろうね」

やがて近くにいたジャスティンも、執務机でのやり取りを横目で見ながら、幾らか小声で会話に加わって来た。彼はビルよりはジェシカと親しいようだった。

「大事な娘御を平民などに盗られては、まさに人生のすべてを奪われるようなもの……、ですから、何とかアレックス様と親密にさせたいのでしょう。彼は下手に出てでも物事をごり押しするのが常套」

「無駄なことを。あの男の娘は、何かと騒がしい娘のようだが、率直に言ってアレックス様には不釣り合いだ。あの娘ごときがシエラ様を差し置けるわけがない」

言いながら、ジェシカは失笑した。

それに対し、ジャスティンはヴァレリアをフォローした。

「しかしヴァレリア嬢も、界隈の社交界ではなかなか目立つ存在ではあるようだけれどね」

「目立つ？　アディンセル家に女主人や姫がいないのをいいことに、でしゃばる浅はかな女どもの一人ではないか。アディンセル家に対する忠誠心に欠ける者だ」

「これは手酷い。若い娘に嫉妬ですか？」

ジャスティンは先刻のデイビッドの仕草を真似してジェシカをからかった。

ジェシカはジャスティンを睨んだ。

「貴公こそ。常日頃忠節に重きを置き、女に隷従を期待し、淑やかな妻をなお怯えさせる冷酷な男が、何故そこでウェブスター家の娘の肩を持つのだ？　あのお転婆娘の？」
「いや、肩を持ってはいない」
ジャスティンは即座に首を振った。
「俺は太陽神の古い教義に従う敬虔な神の信徒であり、妻をこよなく愛する忠実な夫だ。根も葉もない言いがかりはやめて欲しいね」
「言いがかり？　私は何も、言いがかりをつけてなどいないが……、まあ、何でもいいが」
ジェシカは不審そうな顔をしてジャスティンを見た。
ジャスティンは不意に僕に笑った。
「無論私とて、シエラ姫様は地方男爵の娘など問題にならぬ美しい方と思いますよ。彼女はそう、白百合か、木蓮のように清楚で上品。私も彼女を初めて拝見したときには思わず見入ってしまった。あれは一国の王女と言っても差し支えないでしょう。
だが惜しむらくは保護者に恵まれなかったということか。十八歳と言えば、十分王子殿下の花嫁となれる年齢だ。あれほどの美貌ならば、低く見積もっても有力公爵家に嫁がせることが可能だったろうに、無能な兄を持って哀れとしか言い様がない」
しかしジャスティンの言い分に、ジェシカはいきなり表情を険しくして彼を睨んだ。
「それはアレックス様に対する侮辱か？」
「とんでもない。……やれやれまったくジェシカ女史には敵わんよ」

ジャスティンは少々嫌味混じりの謙譲を、しなやかにジェシカに示した。
ジェシカは息を吐いた。
「とは言えだ、その件に関しては、少々面倒な話が聞こえているな。私としては、シエラ様のように貞淑な方がアレックス様の花嫁となり、アディンセル家に入ってくださるのなら、言うことはないと思っているのだが」
ジャスティンは頷いた。
「しかし報告は確かだよ。俺が請け負う。諜報は我が家の得意分野だ」
「何か、まずいことでもあるのか？」
僕は、二人の表情がそろって芳しくない理由をたずねた。
「ええ、大した内容でないと言えばないのですがね」
ジェシカは僕を見て言った。
「最終的にはギルバート様のご判断ということになります。現段階では我々が不用意な憶測。追って沙汰があるかと存じますので」
「気になるじゃないか」
「どうぞお許しを」

第153話　姫君の理想の王子様（1）

ある午前、シエラが不満そうに僕を見上げていた。
デートの約束をしていたその週末が、母上の命日だったためだ。
となれば僕らはデートよりも、当然祈りの列に加わらなければならない。シエラは朝からきちんとそのような場面に相応しい、慎ましやかなドレスを着ていた。だからデートが駄目になったことをちゃんと理解してくれていると思うが、顔が怒っていた。

「わざとじゃないよ、わざとじゃ……」
「……」
「母上の命日を忘れるわけがないって思われるかもしれないけど、僕の場合は、母上は僕が生まれてすぐにお亡くなりになったので、なんて言うか……、ある意味ではあまり身近ではないんだ。どんな人か、本当のことを言うとよく知らないし……。
だから、デートを週末って言ったのはあのときってつまりほら、ジャスティンが睨んでいたし……、彼って恐いだろう。見るからに。兄さんのお仲間だけあって。
ほんと、ああいう人たちって、普段どんな会話をするんだろうね。税金の話かな。労働者を締め上げる方法。それとも誰かを処刑する相談でもするのかな。
あっ、そんな怖がらないで。今のは全部冗談……」
「……」
「……、そうだ、シエラは虫は好き？　虫じゃなくても蝙蝠とか、ミミズなんてどう？
ほら、庭の石を剥がすとさ、びっしりと……、ああ、言わなくても分かったよ。いいんだ、気にしないで。僕は理解があるから……」
僕は本当にわざとではなかったのだが、シエラは何だかむくれてし

まい、彼女のご機嫌ななめはしばらく直らなかった。
ここのところシエラはよく僕に懐いていた。しかし年下の人間に懐かれた経験のない僕は、その対応に戸惑うばかりだった。どういう態度を取ったらいいのか、まったく分からないからだ。
僕には下に兄弟がいないどころか、これまでの二十年間の人生で、自分より年下の人間と係わったことがなかった。まして女となれば、自分の経験や思考を踏まえることも難しく、こんなふうに機嫌を損ねられると、もういったいどうしていいのかすら分からない。
シエラはたぶん、年上の男という分類をもって僕を見ているだろうと思うのだが、その分類は実は非常に恐ろしいものだ。自分より年上の男性が、自分より物を知らないわけがないし、自分より物事を上手くできないわけがないし、人物さえ優れていて当然だと、僕らはそういう期待をもって彼らを見てしまう……、少なくとも僕はそうだ。そして年上の男が自分より駄目だったりすると、その失望感たるや計り知れない。勝手に期待したのはこちらなのだが、ときに酷いショックを受けてしまうのだ。
僕の兄さんは幸いと僕のそうした高い期待を一切裏切らない優れた人物だったわけだが、それだけに僕は、どうやらその高いハードルをクリアしなければ男ではないというある種の自己暗示のようなものを、自分にも課してしまっているきらいがあるように思う。
優秀に違いないと信じていた年上男が無能だったときのあの冷めるような失望感を、シエラに抱かれるのは本意ではない。
女性というものは、生育環境においてもっとも身近にいた異性を、将来自分の異性選びの基準にする傾向があると読んだことがある。多くの場合、それは父親だ。駄目な父親を見て育った娘が、それを反面教師にすることができればいいが、かなりの割合で同じような駄目男を選んでしまうことにも深い理由があったりする。
彼女たちは自分が大人になるまで生きられた環境を、適正だと思ってしまうのだ。どれほど酷い環境だろうと、出産可能年齢まで自分が生存することができた環境を与えてくれた男が、本能のレベルで

正しいと思ってしまうらしい。
それはしばしばその後の痛ましい人生を、女性にもたらしてしまうことになる。安定した人生を約束してくれる誠実で勤勉な男より、ギャンブル好きの怠惰な男を愛してしまうようなのは、ひとつのよくある例だが、必ずしも女性の育ちが悪いから、では片づけられない深刻な生物学的理由が潜んでいたりするわけだ。
しかしそれは逆に考えることもできる。シエラのように裕福な家庭で何不自由なく育った姫君は、そのような環境を自分に与えてくれた男が、男として当然であると考えるわけだ。優れた父親の許で育った彼女たちの目は高く、その最低基準自体が天より高い。一握りの男以外は、その最低基準さえ満たすことができずに門前払いを食らうことになることだろう。
懐かれるということは、今のところ、僕はシエラのお眼鏡に適っているように思うが……、シエラが多分に幻想を交えて僕を見ているのではないかということを、僕は密かに恐れていた。
恋愛感情の問題ではない、これは男としてのプライドの問題なのだ。女性に、それも自分よりも若い女性に、駄目な自分を見せるなんて、そういうことは男として、ちょっと考えられない恥辱なのだ。はっきり言うと僕は女性に支持されたいし、いつでも称賛されたいのだ。男らしいと思われていたいし、慕われていたいし、立派だと尊敬されたい。願わくば憧れの対象であり続けたい。
そしてそのためならば、多少の無理もするのだ。これは親が子供の前で自分の愚かさを見せまいと振る舞うことに似ているかもしれない。とにかく僕は常に兄さんのようにいなければならないのだ。初夜権とか以外のことでは。
城内の墓地に向かうための人々が集まり始めている居城の玄関前の二階廊下まで、シエラはずっと僕の真後ろをぴったりくっついて歩いていたが、不意に僕の服を引っ張った。
彼女が時折見せる子供のような態度には戸惑うばかりだが、僕はシエラに向き直った。

するとそれまでにも何度かデートをはぐらかしてきた僕に対する怒りを、シエラは無言で僕に訴えかけているような様子だった。上目遣いで僕を見ている。抗議しているのだ。

しかし何が気に入らないのかを言わない。ヴァレリアのように何かと不満を訴えて来る女というのも、それはそれで面倒なのだが、これではこっちも怒る以外に手の施しようがないかのように思われる……、だが兄さんは女を相手に本気で怒ったりはしない。

兄さんならこんなときどうする？

そう、彼なら薔薇を差し出すだろう。

第１５４話　姫君の理想の王子様（２）

「怒ってるの？」

僕はできるだけ優しくシエラにたずねた。

シエラは大きな瞳を僕に向けたまま、小さく頷いた。

「それは、どうしてかな？」

「……」

「デートが駄目になったから？」

シエラは頷いた。

「そうか、ごめんよシエラ、本当にね、わざとではなかったんだ。君とのデートを、僕は本当に楽しみにしていたし、きっと楽しい時間が過ごせると思って、この週末が来るのを指折り数えていたんだよ。

こんなことになってしまって、また約束を駄目にしてしまったことを、シエラは怒っていると思うけど……」

僕に抗議を向けるシエラの瞳は、少しタティを思い出させた。顔に影が差しているとき、シエラの瞳の色はもっと深くなって、タティの瑠璃色に近い色になって見えていた。でもタティは僕の服を引っ張るなんてことで、自分に関心を向けさせようなんてことはできない女の子だったのだが。

タティは僕に文句を言いたいことがあっても、黙って耐えていたのだろうかとふと思った。

彼女は立場上、僕にこんなふうに不満をぶつけることなんてできなかった。たまには喧嘩になることもあったが、それも成長と同時に

少なくなっていった。大抵、タティの抗議方法は泣くしかなかった。反抗したり、こんなふうに拗ねてみせるなんて、タティの身分では許されることではなかったからだ。
でもきっと本当はたくさん文句が言いたかっただろう。
マリーシアのことやエステルのことで、おまけに最後には病気にさせられて、死ぬほど僕を罵りたい気分でいるに違いない……。

「悪気はなかったんだ……、僕はいつも……。いつもいろんなことを、いろんな重要なことを、後から気づいてばかりなんだけど……」

するとそれまで頬をふくらませていたシエラがまばたきをして、戸惑った顔をしたので、僕は我に返ってそのままたたみかけた。

「君さえ嫌でなければ、デートはまた日を改めては貰えないかな？今日はデートできないんだけど、できればシエラには笑顔でいて欲しいな。そんなふうにしていると、みんながおかしく思うよ。それに、君は笑顔でなくても可愛いけど、笑顔だともっと可愛いって知ってた？　だからもし機嫌を直してくれるなら、嬉しいんだけど……」

僕はそう言って、シエラの髪に手を伸ばした。拒否されたらどうしようかと内心では動揺していたが、幸いなことにシエラは抵抗はしなかった。こんな表現をするといけないかもしれないが、僕は動物を手懐ける心境で、シエラの頭を撫でた。
これは乗馬するとき、不安がっている馬を安心させるときに、彼らを撫でてやる要領だ。できるだけ、僕が恐れていることを知られないように。それを知られると馬はもっと不安になるから、僕はいつもよく気をつける。そしてそれはたぶん上手くいった。

「アレックス様……」

シエラは頬を染めて、目に見えて嬉しそうな顔をしていた。
僕に撫でられた頭に触れ、やがて僕に微笑んだ。

「貴方ってお兄様みたい」
「お兄様？」
「ええ」

シエラは僕を見上げて言った。

「ロベルト様もシエラの頭を……、こうやって撫でてくれていたんだね」
「ええ」

シエラの返事に涙が混じった。

「まるで私のお兄様が、いてくださるみたい……」
「僕は彼に似ている？」
「ええ」
「どんなところが似ているの？」
「優しくて、物静かなところ。背が高いところ……」

シエラは僕を懐かしそうにみつめていたが、それはすぐに泣き顔になった。
僕は女性を泣かせてしまったかと焦ったが、どうすることもできなかった。

「少し気弱なところも、貴方はまるで、私のお兄様みたい……」

そしてシエラは少しの間うつむいていた。

やがて目をこすり、また僕を見た。

「ごめんなさい、私……」

シエラは長い乳茶色の髪を揺らし、僕に微笑んだ。

「貴方を見ているとお兄様を思い出してしまって。私のばらばらになってしまった家族のことも。
それに貴方はまるで、私の理想が現実になったみたいな人なの」

「えっ、理想？」

「ええ」

シエラは頷いた。

「私のお兄様はね、本当に、とても内気な人でした。うんと年下のフレデリック様に、情けない、しっかりしろって、怒られてしまうくらい。
私のお兄様はまるで心細いお姫様みたいな人だったの。頼りにできる側近もいなくて、いつも臣下たちに馬鹿にされていて、それにとても繊細で……、心がガラス細工みたいに傷つきやすい人だった。
だから私、いつも思っていました。どうして私が男の子に生まれることができなかったのかしらって。そうすれば、泣き虫のお兄様のことを守ってあげられたのにって。
男の子に生まれることができたら、きっと恐いものなんて今の半分になって、その代わりに強い心と身体を持てるわ。だからお兄様の代わりに、お兄様を悲しませる全部と、戦ってあげることができるのにって……」

シエラは懐かしむように切ない微笑みで、僕を見上げた。

「アレックス様はね、貴方は……、お兄様がせめてこうあってくださったらって、私がずっと願っていた通りの人なの。
私、お兄様には強くなって欲しかったけれど、それほどものすごく強くなって欲しかったわけではないのよ。だって、そんなふうになってしまったら、お兄様のいいところや、素敵なところが消えてしまうでしょう。乱暴でがさつな人は嫌い。優しくて、ロマンティックな人が好き。だから……」

シエラは目元を拭い、再び僕をみつめた。

「貴方は私にとって、最高に理想の王子様なの。
妹はどんなに頑張ってもお兄様のお嫁さんになれないって知ったとき、とてもとても悲しかったわ。私、とってもたくさん泣いたのよ。神様にそれを取り消してって、何度も何度もお願いしたの。でも叶わなかった。
けれど……、今ならその意味が分かります。
神様は貴方に出会うことを私に用意していてくださったんだって。お兄様に似てるけど、でももうちょっと理想的な貴方に出会うことを。
私、やっとね、その意味が分かったの……」

第１５５話　祈念

居城の敷地内の霊園に、祈りの一群が訪れる光景があった。
雪解けの頃が母上の命日なのだ。
でも僕は僕の母上のことをほとんど知らなかった。
母上を思うとき、僕がまず抱く感情は疎外感だ。前から彼女は兄さんばかりを愛しているのではないか、僕のことなんてどうでもいいのではないかという気持ちで母上を思っていたが、でもそれはもっともだった。
母上は僕を生んだわけではなかったし、たぶん僕の存在も知らされていなかったのだろう。
たった一人の、彼女がこの世に生きた証のような幼い息子が、乳姉妹に手をつけて子供を生ませたなんて話を、死の床にある母上に伝えたとは到底思えない。
だから僕という存在は、母上の世界には最後まで存在しない子供だった。
僕は別に悲しいわけじゃない。
僕は母上のことを知らないからだ。

「手を……」

ふと、シエラが僕を見上げて言った。

「手を繋ぎましょう。私がずっと繋いでいてあげる……」

シエラが僕を気遣ってくれているのが、よく伝わって来た。彼女は育ちがいいだけでなく、多くの人々に称賛される美人というだけでなく、とても気持ちの優しい娘だった。

「大丈夫だよ」

僕は言った。

「でも、とてもつらそうにしていらっしゃるわ」

シエラは少し僕の気持ちを見抜いていた。

祈りの一群にはカイトの姿もあったので、僕はそうするのを躊躇った。

でもカイトは目敏くそれに気づいたのか、軽く右手を上げてみせた。

応じたらと、言っているのが分かった。

左手を差し出して、シエラと手を繋いだ。細くて頼りない手をしていた。

「私も寂しかったの」

シエラは囁いた。

「いつも寂しかった……」

母上は兄さんが十三歳になる直前に亡くなられた。しかし便宜上、僕を産み落とすには間に合ったわけだ。彼女は後世に大きな功績を残したことになっていた。家系に取りついた奇怪な呪いのために、アディンセル家は下手をすると兄弟ができない代もあるようだ。もっとも家系図を見ると異母兄弟という手段を取っていることもあるが、それは十数年後には骨肉の家督争いに発展してしまう可能性を含んでいて、実際そのようなことが過去には起こっていたようだ。また妻の身分がずっと高かったりすると、そういうことは難しくなる。妻の父親が黙っていないからだ。異母兄弟とはとかく揉め事を引き起こしやすいのだ。そんな中、お一人で男子を二人ももうけら

れたことになっている彼女は讃えられ、実家のマイヤーズ家はその功績により新たな土地を与えられた。僕が母上の実子であることを、内外に証明するためのデモンストレーション的な意味もある褒賞だったのだろう。

兄さんは、母上の亡くなられた春先には毎年神妙な顔をして、大勢部下を引き連れて、サンメープル城内の霊園へと足を運ぶ。彼が母上の短い人生に何を思っているのか、僕には計り知れない。

父上が後妻を取ることを渋ってばかりいたのには、何も妻たちが目の前で次々死んでしまうことを怖がっていただけではなかったという。父上は最初のお妃様だけを生涯愛していたのだと、家令がぽつりと漏らしたことがあった。父上の頃に家令をしていた自分の父親に聞いた話だと言って。彼女の誕生日には、今でも墓前に赤い薔薇が捧げられる。父上の遺言のひとつなのだ。そして兄さんは、それをお許しになっているのだと言った。

幾つもの哀しい人生の交錯を感じていた。悲しく寂しかったのは僕だけではなかった。

泣かないからといって兄さんが悲しくないなんて、傷ついていないなんて、どうしてそんな残酷な決めつけができていたのか……。

こんなときだけ駆り出される司祭を先頭に、礼服に身を包み、厳かな行列が静かな祈りのひと時を過ごす。居城のはずれにある雪に覆われていた霊園は、伯爵の訪問のために予め綺麗に整えられて磨かれていた。

今はひとときの静寂が僕たちの人生を満たしていた。

祈りの時間が終わると、ルイーズがさっそく、スカートのスリットが深すぎるとジェシカに叱られているのが笑えた。ルイーズは笑顔でそれを誤魔化し、兄さんの背中に隠れる。ジェシカは態度が不真面目だと言って、もっと憤慨する。じゃれているのだ。彼女たちは昔から、そういう関係なのだろう。そして兄さんはそれを静かに見ている。

ルイーズは素晴らしいムードメーカーだった。あの三人はあれから

ずっとチームを組んでやって来たに違いないが、陰鬱できつい局面にあってもあのように明るい笑顔を振りまく性格の人間が一人いると、それだけでその場がとても救われるものだ。

ジェシカは大雑把な兄さんの細かいフォローをするのに欠かせなかったことだろう。兄さんにもルイーズにも、常に常識を押さえた観点からの意見を口にできる人間が必要なのだ。彼女は僕へのフォローにとっても不可欠だった。

兄さんがどちらにも手を出さなかったのは、せめて幼年期からあるこの親しくも距離感のある特別な関係を、壊したくなかったからなのだろうか。

彼にとって彼女たちとは、家族だったのかもしれない……。

それは春めいてはいるが、まだ少し肌寒い日だった。重たい曇天から陽光が差し込み、その光は祝福の兆しのように輝き、美しい光を世界に投げかけていたが、足下の煉瓦道には泥の混じった汚れた雪が残っていた。

吐く息は白く、僕は異国の詩の一節を呟く。憧れの美しい詩人の言葉だ。外国の言葉で書かれた詩なので、僕はその短い言葉に込められた正確な意味を把握している自信はなかったが、ちょうどこんな風景のことを哀しく謳った詩の一節だった。

もしタティが天国に召される日が来るときは、こんなふうに悲しくも荘厳な光の中なのではないかと思い、ふと胸の中に悲しみと諦観がよぎる。

感傷的な午後だ。鳥の囀りが何処か遠い。

いつもの年なら春が来ることを待ち遠しく思うのに、今はそうじゃなかった。

僕はこれ以上、時間が進まなければいいのにと思う。

いつも思う。このまま季節など、移らなければいい。

そうすれば、タティはずっと生きているのに。

この切なる祈念を受けとめてくれる神が存在しているなら、僕はその人に言いたかった。

この地上を生きるすべての哀しい人生を背負う人々を代表して言いたかった。
どうか時間を戻してと。

第１５６話　ブランデータイム（１）

随分暖かい日が続くようになり、ときどきカイトと飲む夜もあった。照明を抑えた窓際の特等席では、春の星座を読み取るには至らないものの、満天の星空を眺めることができた。結構ロマンティックな夜だろう。

最近シエラに星空の話を聞かせたら、この話はどうやらかなり女性に受けがいいらしく、彼女は瞳を星みたいに輝かせて、さっそく観に行きたいと僕にせがんだ。だけど女性と二人きりで夜を過ごすなんて、間違いを起こすつもりもないのにそんなことはどうしたってできない相談だった。

女性を襲うなんて真似は天地神明に誓ってしないと、以前の僕なら胸を張って宣言できたことだろう。でも今の僕は前科持ちだ。そしてシエラはとても魅力的な女の子だ。その上僕に好意を持っているような様子も見える。いつ何時理性が吹き飛ぶか分からない恐さがあって、僕にはできなかった。

自分が信用ならないなんて、こんなことはまったくお笑いだったが、用心に越したことはない。二度と間違いをしでかさないためには、最初から変な可能性のあることには、全然触らないことだ。

先日兄さんの集めていた舶来物の酒を、サイドボードごと大破させた代価のことで、打たれ強いさすがのカイトもしばらくの間落ち込んでいた。

デイビッドはカイトが破壊した一式の代金くらい、払うのに問題ない財産を持っているくせに、奴の問題だと言ってびた一文肩代わりをしようとしなかったし、ジャスティンが兄さんに命じられたと言って、本当にカイトに支払いを取り立てに来たこともあるだろう。立派な体格をした威圧感のある三十男が金を支払えと迫り来るというのは、かなり悪質な嫌がらせめいていて、側にいた僕が思わず小切手を切った。するとジャスティンはそれを無言で破り捨てた。そ

れでは通らないと彼の目が言っていて、僕らは結構恐い思いをすることになったのだ。
結局後から兄さんは冗談を言っただけと判明して、カイトはすべての取り立てと債務から解放されることになったのだが、ジャスティンはあんまり冗談の通じない性格のようだった。
もっとも兄さんの冗談は、いったい何が冗談なのか判別がつかないことも、しばしばあるのだが……。

「あいつ横暴だし、恐いから嫌だよ」

僕らはそのときの感想を言いあった。

「兄さんには服従するくせに、僕のことは殴ったんだよ。どさくさで」
「ううむ、あれは完全に長男脳なんでしょうね……、年下の奴なんてぶちのめしてやる的な。
でもあのくらいの脅しでびびってちゃいけません。ああいう人間もいるものだと思って、受け流さないとね。でもアレックス様にはかなり敬意を払ってますよ」
「そうかな。それでも酷い奴だ。僕、あいつが身内じゃなくてよかったな」
「閣下は貴方に甘いですからね」
「いや、それほどでもないよ。でもはした金で嫌がらせに来ることはないからね。ジャスティンより器は上さ。
まあ、兄さんはケチじゃないからね……、頼めばお金をくれるタイプだ」
「そりゃ貴方だからでしょ」

曲がりなりにも八年のつきあいになる僕らだが、こんなふうに深夜に酒を酌み交わすような親密な友情関係を持つことになろうとは、

少し前までは想像してみることもなかったことだ。
僕は日が暮れると定時に夕食を済ませ、部屋に戻って一人で読書をするか、タティと一緒に編み物をしたりする、非常に地味な青春を過ごしているばかりだった。
でも僕はそれを不幸だと思ったことはなくて、僕には居心地のいい時間の過ごし方だった。行動からしておっとりしているタティと、人形の服を作ったり、明日のおやつの相談をしていた頃のことを、今でも懐かしく思い出す。
だけど今の僕ときたら、まるで暖炉の前でブランデーを傾ける憧れだった兄さんのようではないだろうか？
僕らはその夜、居城の小広間で、召使いにブランデーを用意させ、ひたすら話し込んでいた。盛り上がるのはやっぱり何と言っても女の素肌についての話だが、そのときはルイーズにしてしまったことの罪悪感が拭えずに、そのての話題は避けるようにしていた。
暦の上では春とはいえ、まだ暖炉が必要な冷え込む宵だ。やがて僕らは最初にいた近くのテーブル席から移動して、暖炉の前の毛皮の敷かれた床に座った。
今夜は兄さんの上等の酒を飲んでいることだし、シエラのことをどう思っているのか、打ち明けてくれないだろうかと少し期待していたが、カイトもまたその話題を避けているのかもしれない。いつまでもその話が会話にのぼることはなかった。
正直に言えば、そのことについては僕は少し混乱をしていた。たぶん、シエラみたいな美人に理想の男だと言われて悪い気分がする男はいないだろうと思うが、僕もそのうちの一人だった。
シエラのことはジェシカやジャスティンも評価をしていたし、何より兄さんが僕の花嫁だと言って押しつけるくらいだから、彼女の清純や貞淑は折り紙つきだろう。
このままいくと、僕はシエラと結婚するような流れになってしまうんじゃないかと思うのだが、そうなる前にこの話を一度きちんとカイトと話し合いたかった。

シエラは自分の物だと宣言するなりして、カイトを追っ払いたいと思わないのは、僕はシエラは綺麗だと思うけど、それだけだと思っているからに他ならない。

でもあんなすごい美人に好かれた経験なんてなかったから、やっぱりちょっと鼻が高いのも本当だった。兄さんではなく僕を選ぶところも、彼女はかなり目が高いと言えるだろう。僕を王子様なんて口に出して言ってしまうあたり、いかに世間知らずの純真な娘かということもよく分かる。悪くない相手なのだ。差し当たって欠点が見当たらない。

自己主張の仕方も可愛いものだし、性格も可愛いし、顔も可愛いし、あれは絶対赤ん坊はキャベツ畑になると思っている口だろう。お兄様と結婚できると思い込んでいたなんて、そしてそれが駄目だと知ったら悲しくて泣いてしまうなんて、どれだけお姫様なのかと呆れてしまうほどの純粋さだった。と言って教養はそれなりに身についていて、家柄もいいわけだから、妻にするのにはもってこいのタイプだろう。

だから、カイトのお嫁さんになってくれたら、いいと思うのだが……。

「ゲイリー伯の件、あれやっぱり結局お咎めなしだったんですってね。陛下にしてみりゃ、伯爵同士が決闘したくらいの些細な認識なのかもしれませんが。

でもひとつ報告の仕方を誤ると、生命を落としかねないことですからね。上手いこと、ウィシャート公爵一派からの離反の手土産にでもなさったんでしょうかね」

カイトは僕の気も知らず、慣れた手つきでグラスを傾けていた。

「てことは、閣下は本気で王子様側についたわけですよね」

「そうなるね」

僕は頷いた。

「じゃあ、そのうち王子様の私的なパーティーなんかにも呼ばれるんでしょうか。閣下はよく、ウィシャート公の私用にも呼ばれていらしたようだし」

「たぶんね。気に入られれば、個人的なつきあいだって持つことになるだろう。まあパーティーなんてものを、殿下が好む御性格かどうかは分からないけど。

でも相手がどんな方だろうと、必要があるなら兄さんはたぶん上手に取り入るだろうさ。

それより君、ちょっと言いたいことがあるんだけど」

僕はカイトがまたどうでもいい話題に移行する前に、話を切り出すことにした。

第157話　ブランデータイム（2）

「何でしょう？」
「これは親切心から言うわけだから、気を悪くしないで貰いたいんだけど、君は僕が見る限り、ちょっとがさつなところがあるな。乱暴ではないけどがさつ。
確かにかなり丁寧にしているけど、深いところまで身についてないと言うか。それでは駄目だよ」
「そうですか？　結構、気をつけているつもりなんですけど。特にどの辺がお気に障ります？」

カイトは服装のことだと思ったのか、しきりに自分の着ている服を引っ張り始めた。しかし僕は頭を横に振った。カイトの日頃の真面目ぶった服装は、言うまでもなく完璧だったからだ。
彼は頭の天辺からつま先まで、僕なんかよりずっとお坊ちゃま君なのだ。オーソドックスで古き善き良家のお坊ちゃん風の外見を徹底している。平民だと言われるのを気にしているのだろうが、下手をすると、ちょっと浮いてしまうくらいそうだった。しかしシエラが言ったのは、たぶん内面的なことなのだ。

「いや、服装は気には障らないけど……、僕は寛大だから。数少ない君の理解者だからね。でもとにかく君、今の自分がお姫様と釣り合うとでも思っているのか？」
「思ってませんよ」

カイトはあっさり言った。

「どう見ても釣り合うわけがない」
「じゃあ、気をつけたら？」

僕はカイトに注意した。

「何をです？」

「だから……、がさつなのが嫌いだって言ってたから……、その辺をだよ。もっと感性を高めるような趣味を持つとか。もっと好かれるようにするんだ」

「好かれるって、誰にですか？」

「だからそれは……、自分の胸に聞いてみるといいよ」

僕はカイトのシエラへの気持ちや、でも僕に仕えているという彼の難しい立場を分かっているので、優しく言い含めるように言った。

「胸に手を当てて、よく考えてみて。君の恋する人のこと」

「何なんですか」

するとカイトは随分居心地が悪そうな顔をした。

「胸に手を当てろなんて。変なことを……、ああ、さては貴方酔ってらっしゃるんで」

「違う。酔ってない。僕は恋について語っているんだ。そして人生について。

これでも君の幸いのために言っているんだよ。兄さんが本格的に馬鹿言い出す前に、ちゃんと彼女を掴まえないと、手を打っておかないとさ、僕のお嫁さんになっちゃうんだぞ……」

「よく、意味が分からないんですが……」

カイトは微妙な表情のまま頭を振った。

「君も案外頑固だな。往生際が悪いと言うか」

「何の話なんです」
「じゃあ聞くけど、君は最近、どう？」
「どうって？」
「つまり、ヴァレリアと。上手くいってるのか？」
するとカイトは少し苦笑いをした。
「いや、お嬢様とはだいぶ会ってないですからね、今頃どうされているのやら。上手くいくも何もないですね。これまで通りです」
「君の心の中に、彼女への愛はある？」
大事なポイントなので、僕は真剣に彼にたずねた。
カイトは昨今の立場上明言をしなかったが、ヴァレリアの話をしているときの表情がまったく嬉しそうじゃないのが、すべてを物語っていただろう。
僕は理解した。
「ないんだね。分かり切ってたけど。だったら」
「アレックス様はどうなんですか？　シエラ様」
しかし思わぬカイトの切り返しに、僕は慌てた。
「えっ、なんでそこで君がそれを言うんだ……、それは違うだろう。どういうつもりだよ。いやっ、僕は彼女には何もしてないよ。大丈夫、指一本、触れてない。安心して。手を繋いだのはあれはお墓だったからムードも何もないし、あのとき僕、ほとんどシエラと口聞いてなかったし、頭は撫でたけど気分は馬だったし、それだけ」
「馬？」
「いや、何でもないよ。とにかく僕はシエラに何もしてないということ」

「あらら、本当に？　なんでまた」
「なんでって……」

何故かまた僕が質問される側になっていることに戸惑いつつ、僕はすぐ隣にいるカイトの心情を思って彼を見た。
カイトはいつも通り、僕を親しげに見ていた。

「なんでって……、なんでかな……、君、当ててみたら？」
「そりゃ、相手はお姫様ですし、そこらの女のようにはいかないってことかな？
それにそう、やっぱりタティのことがあるからじゃないですか。貴方はすぐに次って切り替えのできる性格ではないし」

僕は頷いた。

「うん、そう……、そうなんだけど、なんて言うか、僕の人生もいろいろと複雑になってきてね。人生が単純だった頃の思考では、処理が追いつかないと言うのかな。
でも僕はまだ捨て切れないんだ。いろんなことを。兄さんのようにならなくてはと、思っているんだけど……」

ぼんやりと、暖炉の爆ぜる火を見ていた。

「まだ起きていらっしゃるの？」

ふんわり可愛いタティの気配がして、間もなく彼女は僕の顔を覗き

込んだ。相変わらずの分厚い眼鏡。その眼鏡の奥の、瑠璃色の瞳が僕は恋しい。

「そう。いろいろ考え事をね。大人の男には、悩みが尽きないから」

僕は暖炉前の安楽椅子に腰かけたまま、少し気取って答えた。

「君は先に休んでいて。身体に障るといけない」

「でも、アレックス様は？」

「僕はまだ起きてるよ」

「眠れないのですか？」

「うん、少し」

「チョコレートを？」

「それはタティが食べていいよ」

「じゃあ、ホットミルクをお持ちしましょうか。アレックス様はホットミルク、お好きでしたものね。きっと気持ちが安らぎます」

「いや、それは子供が飲む物だ。僕はこれ」

僕は手に持っていたブランデーグラスを持ち上げて、タティに見せた。

するとタティは微笑む。僕を尊敬したのだ。

「アレックス様ったら、すっかり大人」

僕も微笑む。

「うん、そうなんだ」

「最近は本当にご立派になって、見違えるみたい」

「うん」

「アレックス様が、お元気みたいなので安心しました。わたしがい

なくても、ちゃんとしっかりやっていらっしゃるんですもの。貴方はきっと、もう一人でも大丈夫なんだわ」

「そんなことないよ。僕は、君がいなくて寂しいんだ……」

僕はふと思いついて、タティのお腹に手を伸ばした。何だか会話の雲行きがおかしくなって来たので、ここで急遽頭の中の設定を新婚に変更したからだ。

「あっ、赤ちゃんが動きました」

タティが大きなお腹を押さえて、再び無邪気な笑顔になる。

「早く生まれて来ないかな」

僕はすっかり彼女の夫のつもりになって、タティのお腹に触って、わくわくしてはしゃいだ。

しかし僕の手の先に触れているものの感触から、それがカイトの脇腹だと気がつくのに時間はかからなかった。かくして現実に引き戻された僕は、最高に居心地の悪い愛想笑いを浮かべることになった。

「……妄想？」

彼は彼で何か物想いに耽っていたらしいカイトが、酒を飲みながらこちらに目を向け、幾分冷やかに言うので、僕は頷いた。

カイトも理解したようにゆっくり頷いた。

「そりゃよかった。

念のためにお伝えしておきますと、さすってくださっても、俺の腹からは何にも生まれませんよ」

「知ってる。うん、よく腹筋を鍛えてる。いい感じだ」

「どうも」

第１５８話　真夜中のコンポート

小広間の掛け時計の針は、そろそろ深夜の十二時を示していた。
カイトは上質の毛皮の手触りが好きだと言って、尻の下の毛皮をやたらと撫でていた。
しばらく会話は途切れていた。酒が入っていたし、せっかくのブランデータイムは僕にはまだそぐわなかったらしい。そのうち腹が空いてきて時間外に夜食を運ばせ、今は腹を満たしたところだった。
カイトは兄さんの酒を喜んで飲んでいたが、ちゃっかり夜食にもつきあった。そして僕はブランデーよりも、つい今しがた食べた甘いコンポートのほうが口にあっていた。召使いが窓際のテーブル席から食器を下げているのが見える。

「十二時になると魔法が解けるんだ」

暖炉の前で、僕はカイトにとある古いお伽話を話した。

「さいですか」

大して興味なさそうにカイトが言った。

「お伽話って、お姫様を助ける話って、多いと思わないか？」
「そうですねえ」
「囚われたお姫様を見殺しにする王子様って、ほとんどいないね」
「見殺しにしたらそこで物語が終わるでしょうに。王子様は彼女を諦めて、他の美女を見繕うことにしましたってな展開になったら。読んでる子供は泣きますよ」
「でも実際は、物語は続いてる」

僕は兄さんとアレクシスのことを思って言った。

「王子様は……」

それから僕とタティのことを一瞬思った。

「何事もなかった顔をして暮らしている。まるで最初から彼女が存在しなかったみたいに、日々は続いているんだ……。ある王子様は残虐さを身につけて、精力的に野心を遂げているし」

僕はカイトを見た。

「それって間違ってる？　それとも、大人として正しい？」

カイトは首を振った。

「分かりません」

「そうするしかなかったとしたら？」

「貴方が何をおっしゃっているのか分かりませんが、一概には言えない。その立場にならなければ。人生とは常に相対的なものです。もしタティのことをおっしゃっているのなら、彼女のことはどうしようもなかったと言うより他にありません。肺病では……」

「うん……。最近はね、よくタティのことを考えるんだ。さっきみたいな、都合のいい妄想だけじゃなくてね。これでいいのかって、ずっと自問している」

カイトは頷いた。

「でも僕は結局タティを遠ざけている。兄さんに逆らうのが恐いからというわけではないし、タティがどうでもよくなったわけでもな

い。自分が病気に罹りたくないからでもないよ、確かに肺病になったらどうしようって気持ちがないわけじゃないけど、僕は病気を伝染されては困る立場だからだ。

僕は個人的な問題のために兄さんの方針に背くことはできない。彼は僕の主君だ。だから、彼の意見は絶対なんだ。気持ちが揺らぐことはあるけど……、僕は一貫してこの考え方を優先させなければいけないって気づいたんだ。父上だってそうおっしゃっていた。甘い方だと言われていた父上ですらそうだった……。

例えば思い出してみてよ、兄さんは僕との関係にとって障害になると判断すると、即刻エステルを処刑させた。目障りな女だっていうこともあっただろう、でも僕との兄弟仲が悪くなれば、アディンセル家にとって都合が悪いと判断したからだ。だから排除した。女の生命なんて、彼にとってはその程度のものなんだ」

「至って経営者の思考です」

カイトはまるでそれが当然であるように解説した。

「冷酷ですが、色恋を優先するような人間は、指導者としては不適格」

「たとえそれがいちばん愛している女でも」

「でしょうね」

「だから僕もそうできなくては……」

「でもアレックス様、心を入れ替えられたとは言っても、あまり気負って臨みすぎるのもどうかと。貴方は閣下ではない。閣下のようにできる人間はそう多くはない」

「タティのことが試金石だと思ったんだ。兄さんのようになるために、まず大事な女を見殺しにできるかどうか……」

僕はカイトの言い分を遮って言った。

「ええ」

「兄さんなら迷わず切り捨てるだろう。それは分かってるんだ。彼は本当に……、兄さんはタティを生かしておくことはアディンセル家にとって何の利益にもならないと言った。タティを捨てることを前提で僕に話をしていたし、タティがいるのにシエラと結婚しろなんて言うくらいだ。しかも男子を産ませろって……、シエラの意思すらお構いなし」

「アレックス様は、その通りにできそうなのですか？」

「……できそうじゃない。やるしかないんだ。僕の気持ちがどうこうじゃない……、そんなことはまったく問題じゃないんだ。シエラのことはともかく、僕はタティに見切りをつけなくては……。気持ちに区切りをつけないと……」

カイトは静かに頷いた。

「でも僕はまだタティを諦められなくて……、考えてしまうんだ。いつもいつも。忘れようとすればするほど、昔タティと一緒に過ごした日々のこととか、タティと結婚した後のこととかを……、タティが僕に微笑みかけるところを……。

でも何よりもきついのは、ねえ、こんなことって信じられるかい？

僕がタティを切り捨てると切り捨てないとに係らず、どっちにしてもタティは死んでしまうってことなんだ……。

それなのにこの人生は続いて行くんだよ……、暗い夜みたいな人生が……」

第１５９話　少女魔術師

「大事な女が身近にいては、かえって足枷となる……。含蓄がありますね」

カイトが暖炉に小枝をくべながら呟いていた。

「しかし、確かにそうかも……、俺には守るべき家族がいないから、身軽なんですよね。いつ何処で死んでも構わない身軽さがあるんです。いざ自分に何かあっても誰にも迷惑がかからないし、悲しむ人間もいないから」

「そんなこと言うなよ……。君、意外と考えていることが暗いな。ひと晩眠れば嫌なことは全部忘れるタイプだと思っていたのに……」

カイトは僕に背中を向けたまま笑った。

「勿論、そういう俺が主体ですよ。嫌なことは忘れて、明るく過ごしたほうが絶対いい。恨み事言ったって始まらない。俺は明るくて元気が取り柄。でもま、人間は一面的じゃないってことですな」

「悲しむ人間ならここにいるよ。馬鹿なこと言うのはやめてくれ。カイトまでいなくなったら、僕はどうすればいいんだ……」

ふと、夜の静寂の中に物音が聞こえた。

「風精霊がこっちだと言っています」

女性同士の交わす声がして、間もなく僕らのいる小広間に、金髪の少女が姿を現した。

僕は彼女のことを知らなかったので、こんな深夜に子供が居城をう

ろついているということに純粋に驚いた。蜂蜜色のふんわりした髪をおさげにして、白いフレアワンピースにブーツを履いていた。使用人の服装にしては上等なもののようだ。年齢はどんなに高く見積もっても十五歳くらいだろうか。

その少女に続いて、いったい何事なのか、ルイーズが部屋に入って来た。黒を基調にした、相変わらずの色気過剰なドレス姿だ。少女もかなり可愛い部類だとは思ったが、ルイーズが部屋に入ると美貌のレベルが違うことを一瞬で周囲に分からせるだけの魅力がルイーズにはあった。しかも胸が強調されていて、僕にはもはや目の毒だった。ルイーズは僕らをみつけると、さっそくお調子者の笑顔で僕らに投げキッスをした。

「よかった、アレックス様を発見ね。あらん、カイト様もいらしたのね。今夜もなんてセクシーなの。ねえ、これって運命かしら？」

「どうでしょうね。だといいですね」

同じくお調子者が、朗らかな笑顔で言った。

「あらつれない」

それからルイーズは色っぽい声で僕に微笑んだ。

「こんばんは、アレックス様。真夜中ですけれど、今夜は星の運行も、大気の流れもよく、しかもとても日がいいので、貴方にご紹介をしたい方がおりますの。まだ起きていてくださってよかったわ」

「あ、ああ、うん……」

僕は大人の男なので、周りの人間におかしく思われないようできるだけ平静を装ったが、あんな狼藉をはたらいてしまった以上、とてもではないがルイーズの顔をまともに見られなかった。

勿論、何よりも重要なのが、あわせる顔がない。
だから僕は静かに顔を伏せ、早く彼女が立ち去ってくれることだけを待ち望んだ。ルイーズが誰か紹介したいなんて言っているが、そういう問題じゃないからだ。

「何ですかその変な反応？」

だが空気を読めないカイトが怪訝そうな声で僕をつついた。

「なんでいきなり、そんなに下向いて。首の角度が思いっきり不自然ですよ。もしかして、ルイーズ様を避けてます？　それとも自分のおっぱいが気になる？」
「ば馬鹿っ、そんなんじゃないよっ」

僕はカイトを手で払った。

「でも、貴方にお話があるということですし、顔をあげないと。首の筋が違っちゃったんですか？」
「煩いぞ」
「困ったわねえ。まあいいわ。アレックス様はお耳で聞いていてくだされば。
あのね、とっても急のお話なのですけれど、貴方に新しい魔術師をつけることになったのよ。このお話自体は前から挙がっていることではあったし、伯爵様から事前にお話があったかと思いますけれど。
貴方に側近を増やすお話。
でもここのところ拠点移動の手配なんかで、目がまわるように忙しかったでしょう。ギルバート様が今夜のことを、貴方に言うのを忘れていたのですって。
それで、こちらのこの可愛らしいハリエット様が、今後生涯に渡って貴方の専属魔術師になることになったの。

暦の上では、今夜は一年の中でも呪術契約を締結するのにもとてもいい日なので、さっきまで幾つかの契約の儀式をしていたのですけれど、アレックス様にも参加して頂く必要があるので、後でちょっとお時間を頂くわね」

「新しい魔術師！？」

僕は思わず顔をあげた。目の前にはブロンドの見慣れない少女がいて、ハリエットというのはどうやらこの娘のことのようだった。

彼女はどう見ても未成年者だし、見るからにどう取り扱っていいのか分からない幼さがあり、緊張をしているのか、多少強張った顔をして僕を見ていた。と、視界にはルイーズの姿も入ったので、僕はあの夜のことが脳裏をかすめ、どうにも泣きたい気持ちになって、慌ててまた下を向いた。

僕はあの晩ルイーズに諭され、闇に葬られた僕の出生に纏わる話を聞いた。そして冷静さを取り戻すに至ったわけだが、それと同時に、自分のしたことが信じられなかったのだ。僕は人として野蛮で最低の人間だと、ルイーズを見るたびこれでもかと思い知らされて苦しかった。

あれからもルイーズはいつも通りにするばかりで、あの夜のことを兄さんに訴えることもしなければ、ほんの少しだって僕を咎めもしていなかった。だけどそういう、まるで聖人君子みたいな出来た態度が、僕をますます自責と罪悪の沼に落とし込めていた。

それまでルイーズとは僕好みの顔をして、その気もないのに僕の気持ちを掻き乱す、腹立たしくも魅惑の女性だった。けれどもちょっと前までは密かに僕の憧れだった美しい彼女の微笑みは、僕にとってはいまや懲戒のいばらと同じだった。しかも悪いことに彼女は僕の三親等、立派な近親者だったのだ。

あの晩はその意味でも頭の中が真っ白になったし、もう僕としてはこの場で胸倉を掴まれて、洗い浚い罪状を突きつけられ、変態呼ばわりされたほうがまだましだった。

「あ、ああ、そうだったよ、側近の話は……、でもシエラはどうするの……」
「シエラ様は貴方の魔術師ではないでしょう。契約の儀式もしていないし。一応、花嫁という立ち位置なのではなくて」
「そうだけど……、その子がそうなの？」
「ええ」
「僕の専属魔術師？」
「そう。可愛いでしょう？　お肌がぴかぴかなの。十代って羨ましくって」

ルイーズはそう言いながら、少女の頬を愛でるように撫でまわした。
少女は迷惑そうにしたが、されるがままになっていた。

「いや、そんな。僕は君のほうが美しいと思うよ……。他の女なんて目に入らない。君は絶世の美女だ。結局は造作の美しさが物を言うんだ。僕は君の信奉者」
「あら嬉しいわね。ぐっときちゃった。
それはともかく、この子が貴方の新しい魔術師になるので、どうぞよろしく。まだお勉強中の見習いさんではあるけれど、才能は私が保証するわ。仲よくしてあげてね」
「本当に綺麗だと思ってるよ」
「ええ。嬉しいわ」
「本当に……」
「ええ、ありがとう」
「その子だけど、思ってたよりなんて言うかその……、ちょっと若すぎると思うんだけど……」
「そのうちなじんで、貴方にちょうどよくなるわ」
「そらまた意味深な」

カイトが呟き、ルイーズが喜んだ。

「ああ、カイト様とは絶対に話があうと思っていたわ。楽しくお話できそう。ねえ、どうかしら。これからバスタブで」

そこでこほんと可愛らしい咳払いがして、金髪少女がルイーズのこの上なくくだらない無駄話を遮った。

「ルイーズ様！　わたし、貴方のことは魔術師としてすごく尊敬していますけど、そういう下品なお話をするときの貴方のことはその限りではないわ。男性との会話でバスタブなんて単語を持ち出すなんて、あんまり無節操です！」

「あら、とっても大切なコミュニケーションよ。ハリエット様にはまだ分からないのね。可愛いわね」

「かっ、可愛いじゃありません。そういうことを言って貰っては困ります。アレックス様にお仕えするにあたっての、わたしのこれからの立ち位置っていうものがあるんですから。ちゃんと一人前に扱って頂かないと」

「うふふ、おませさん」

ルイーズが口許に軽く手を添えて微笑むと、ハリエットと呼ばれた少女は両手を握りしめ、小鳥の囀りのように愛らしい声で、むきになって怒った。

「違いますっ。おませさんじゃありませんっ。だいたい、さすがは女とみれば誰でもいいって噂のエロ伯爵様の弟だけあるわ。何が他の女は目に入らない、何が僕は君の信奉者よ。誰にでも適当なことばっかり言って！」

ハリエットはそう言うと、何故かいきなり僕を睨んだ。

「えっ？」

「わたし、貴方のような女ったらしっていちばん許せない性質なの」

ハリエットはあり得ないことに、兄さんと僕をいっしょくたにしていた。

「ここは階級社会なんだから、身分がある人間は下の人間の人生なんてどうだっていい、ええ、そうよね。分かるわ。でも。さすがに二十年連れ添った幼なじみを切り捨てておいて、それはないでしょう！

でも貴方がどれほどご自分を正当化しようと、わたしだけは貴方がタティにした酷い仕打ちを忘れたりしないし、ずっとタティの味方なんだから。

この世の中は悪行をなかったことには絶対にできないってこと、それを忘れないでっ！」

第１６０話　我らは主を永劫に讃えん

「んじゃ、俺は先に休みますね。魔力とやらが俺にもあれば、契約儀式を覗いてみたい気もしますけど。
せめて千里眼だけでも使えるといいんですが。男の魔術師はあれ絶対悪用してますよね」

壁の燭台が橙色に咲きこぼれる深夜の廊下。
一足先に自分の宿舎に帰るカイトが、僕らに向かって朗らかに手を振った。

「彼は最低ね、スケベを恥ずかしいと思っていないなんて。どういう脳みそしているのかしら」

ハリエットが呟くと、ルイーズがそれを見て優しく笑った。

「そんなこと言わないの。カイト様はアレックス様の腹心よ。これからは、彼とも仲よくやっていかなくてはいけないんですもの。
今のは彼は、場を和ませるために言ったのよ。あれですごく気を遣う人なの。
それに私の知る限り、カイト様は誰よりも女性に誠実よ」
「でもスケベだわ。スケベ発言では和みません」
「魔力持ちの女と結婚したら、カイトの子供が魔力持ちになるかもしれないよ」

僕はカイトの背中に声をかけた。シエラのことを匂わせたつもりだったが、カイトは後ろ手に手を振るばかりだった。あれはどう考えても、色恋より立場や役目を取っているのだ。

「さて」

やがてカイトが廊下の向こう側に遠ざかってしまうと、ルイーズは色っぽい仕草をして、僕とハリエットを代わる代わる見た。

「それでは始めると致しましょうか。心の準備はよろしい？」

そして僕はルイーズとハリエットと一緒に、件の呪術契約に臨むことになった。

呪術契約とはつまりは呪いだ。魔術師自身に自らの生命を担保にした呪いをかけることを言う。そしてそれが成功に終わることで、ハリエットは以後いかなる手段をもってしても僕の生命を脅かす行動を取ることができなくなるわけだ。

魔術師を縛る古く強力な呪いは、いかに強大な力を生まれ持とうと主権は常に権力者にあるというための戒めだ。魔力を持っていても肝心の魔法の知識が与えられなくては、それは即ち宝の持ち腐れとなる。うっかり戦場に紛れ込み、うっかり被弾した魔法攻撃が、かすり傷で済んでしまう程度の恩恵はあるかもしれないが。或いはせっかく高い知能を生まれ持っても、不遇と貧しさによって教育を受けられず、人生をどうにもできないまま一生が靴磨きで終わる男のようなものだ。

主人に対する反抗を試みれば、呪い返しで魔術師がそれを食らって死ぬ。本人が死してなお苦しみ続けるばかりでなく、縁者や子孫にも係る悪質な呪いなので、敢えてそれをやろうとする者はまずいない。反抗心も度が過ぎればペナルティがある。でもいいこともある。それまで禁じられていた魔法に関する知識が解禁されるし、出身階

級が低くても主人に準じた生活ができる。もっともあんまり低い階級の人間を自分の魔術師にしたがる貴族はいないのだが。
ただ僕は、少し疑問が湧いた。

「ねえ、どうしてかな」

闇夜の儀式の部屋で、僕はルイーズの描いた青白く明滅する魔法陣の真ん中に座ったまま呟いた。部屋は暗く、室内が夜空のように美しかった。
ハリエットは呪いを受け入れるための苦痛と戦っていた。僕の膝の先で蹲って、細い身体を震わせ、とても会話ができる状態ではなかった。沸騰した岩を体内に入れているような状態だとルイーズが説明をした。勿論実際にそんなものを飲み込んだわけではなく、苦痛を表す比喩だ。苦しむハリエットが可哀想で見ていられないのだが、過ぎれば何ともなくなるので気にするなと言われた。魔術師はある部分では自分に隷従する道具だと思う必要があるからだ。

「何がですの？」

ルイーズが僕に聞いた。

「サンセリウスは太陽神の娘が天から舞い降り……、その子供たちが繋いだ神聖な王国のはずなのに……」

僕の視線の先で、細い指で床に爪を立てて苦しみもがくハリエットを見ながら言った。

「聖なる父の加護のあるこの王国で、何故、こんなにも呪いが身近に用いられているんだろうか……？
魔術師の儀式にも、それに、そもそも僕らが魔術師をつけることの

目的には、他人からの呪いや悪意から身を守るためというのがある……、アディンセル家に呪いがかかっていて、そのために犠牲者が出続けているのもあまりに奇妙だ。

サンセリウスでは宗教勢力が著しく力を持たない、それは分かっている。かつて近親相姦を神に近づく行為として王家に受け入れさせた責任を取らされたからだ。でも、今でも我が国は太陽神に連なる王家が治める神聖王国で、国教が太陽神であることは変わりがないのに、どうして呪いのような手段が常用されるに至っているんだろうね。人々の信心深さに反比例するかのように、神の敵対者の手段が採用されているのは何故なんだ？

これは盗みをはたらき、殺して奪い去る、人を貶めることを生業とする邪悪な者たちの……」

僕はハリエットが喉を押さえ、掻き毟り、罠にかけられた獣のようにのたうちまわって苦しむさまを見ながら呟いた。

「まるで拷問だ……。神のお与えくださる所業とは思えない……」

ルイーズはしばらくの沈黙の後、囁くように言った。

「アレックス様。貴方はそこに触れてはならないわ。それは考えてはならない……」

「何故？」

「誰にも答えが分からないからよ。どうしてなのかなんて……」

「君も、考えてみたことはあるんだね。調べてみたことは？」

「アレックス様、そこに触れてはならないわ」

ルイーズは咳き込むハリエットの背中をさすりながら、厳しい声で繰り返した。

「どうして」
「やめなさい。貴方はそこに触れてはいけない。疑問を持つのもいけない。
それを識るには我々はあまりに無力すぎるの。半端に足を踏み入れれば、生命を取られて終わるだけ」

第１６１話　諦めるのが人生だから（１）

僕の人生に賑やかな人物が飛び込んで来たことを、歓迎すべきかそうでないか……、思案している時間はなかった。
僕はあれから確かに呪術契約というものを締結し、晴れてハリエット・カティス嬢は僕の正魔術師となった。
昨夜は見ている僕の心臓が脅かされるくらい、恐ろしげな叫び声をあげてもがきまわっていたハリエットだったが、一通り儀式を終えると、けろっとしてまたそれまでのこまっしゃくれた少女に戻った。さっそくルイーズから魔法の本を貸し出され、勉強熱心ねと褒められて、ほくほくしていた。
ハリエットは見た目が随分子供っぽく見えるのだが、意外にも年齢は十六歳、しかも今年十七歳になるそうだ。つまり童顔なのだ。童顔と言えばタティのことが思い出されるが、カティス家はタティのお祖母さんの実家で、つまりタティとハリエットは再従姉妹ということになるらしい。
タティの魔力はそもそもこのお祖母さんから貰ったものだったそうなのだが、彼女の属していたカティス男爵家は、確かに代々優秀な魔術師を輩出している家柄だった。そしてハリエットはそこの令嬢。父親のダグラスは兄さんに仕えている。本来彼か、彼の子供の誰か辺りがアディンセル伯の正魔術師となっているところが順当だが、ルイーズの能力がずば抜けて高すぎて、現在彼らはちょっと冷や飯を食っている状態だった。
ルイーズはディアス家という、こちらも魔術師の能力を持つ家系ではあるのだが、本来であればカティス家の補佐としての役割となることが多い、表舞台に立つこともあまりないような、補助的な家系だった。
そういう背景があるので、当主専属という名誉職から弾かれたカティス家出の魔術師が、誰かしら僕のところに来るのは、当然と言え

ば当然の流れとも言えた。

「ハリエット・ダグラス・カティスです。以後お見知り置きを」

翌日、正式着任の挨拶に僕の執務室にやって来たハリエットは、最初からやたらと挑戦的に瞳を輝かせていた。

「正式にアレックス様の魔術師となった感想はどうです？　やっぱり何か世界がこれまでと変わって見えるとか、おありですか」

そのとき室内にはカイトがいて、カイトは愛想よくハリエットに挨拶した。

「ええ、そうね。重い責任を感じています」

「責任ですか、それは頼もしい。ときに、アディンセル家の持つ特別な魔法には、千里眼の他にどんなものがあるんですか？」

「千里眼って、貴方昨夜もおかしなことをおっしゃっていたわね。でもあれは戦争のときにもっとも活躍する魔法なのよ。索敵に欠かせないものなの。

ですから軽々しくおかしなことを考えるのは感心しないわ。女性の下着を見るための魔法だと思ったら大間違いよ」

「やあ、これは手厳しいな。ともあれどうぞよろしく」

そしてカイトは握手の手を差し出した。しかしハリエットはどういうわけかそれを握らなかった。

「おや、手が汚かったですか？」

カイトが自分の手を見ると、ハリエットはきっぱり言った。

「結婚前の処女に気安く触れようなんて、とても失礼なことだわ。わたしは簡単に男に気を許す尻の軽い女ではないの」

カイトは頭を掻いた。ハリエットの言い分はもっともなのだが、ハリエットは僕の目から見ても幼くて、胸の辺りなんかも女と言うよりは子供だったし、そんな主張をするには全然色気がたりなかったからだ。

しかしハリエットはまるで自分が痺れるようないい女であるかのように腕組みをし、ちょっと偉そうな様子でカイトを見上げて言った。

「言っておきますけど、わたしはおたくの意地悪ヴァレリアと違って、貴方が平民出だからって馬鹿にしているわけじゃないから、そこのところは分かってくださいね。カイトさんは分かってくれると信じてますけど。あのイカレ女と一緒にされては、迷惑だわ」

カイトは小さなレディを相手に、ちょっと笑った。

「これはこれは、ご丁寧に。了解しました」

「アレックス様、だからわたしは貴方とも握手なんてしないわ。でもそれを礼儀知らずだなんて受け取らないでください。愛想がないとか、冷たい奴だとも思わないで。わたしは単に淑女として当然のことをしているだけなんですから」

「う、うん。分かったよ。よろしく。君って、随分しっかりしているんだね。

えっと君、十六歳だっけね。まだ勉強があるだろうに、お役目大変だね。まあ、よっぽどのことがないときは、君のことは呼びつけないから。君は実家で、今後もちゃんと授業を受けるといいよ。未成年者の本分は、勉強だからね。

君は女子なのにちゃんと教師をつけて貰えるのは、すごくいい親に恵まれたということだよ。理解のない親は、女の子に教育は不必要

と言って、早いうちに切り上げてしまったりするから――」

ハリエットはどういうつもりなのか、まばたきもせずにじっと僕のことを見ていた。真顔で、笑いもしない。年下の女性は異国人だが、年齢が下がるにつれてその度合いは酷くなる気がする。十八歳のシエラで手を焼くのに、十六歳の童顔娘が相手では、僕はもうお手上げだった。

「魔術師としての勉強もあるだろうし……、忙しいね。大変だ」

僕はぎこちなく愛想笑いをした。

「君、お菓子は好き？　キャンディ持ってるんだけど、あげようね……、いや、これはおやつで君をつろうってことじゃないから……」

「貴方のことは前からよく知っていますわ。思っていたより、ずっと美青年なので驚いているけど。

貴方はタティお姉様のお手紙によく出てきますから。本当に、イライラするくらいたっぷりと」

ハリエットは、僕の差し出したキャンディの包みには目もくれずに、小鳥の囀りのような可愛い声で生意気を言った。

「えっ、タティの手紙……？」

「ええ」

第162話　諦めるのが人生だから（2）

ハリエットはまるで自分はキャンディなんかには興味がない一人前の淑女のように、澄まして応じた。

「わたしと彼女は再従姉妹同士ですし、ペンフレンドですから」

「ペンフレンド……、じゃあ、君はタティと今も文通をしているのかい？」

するとハリエットは声を荒立てた。

「勿論だわ！　わたしが肺病だからと言ってタティを切り捨てるような真似をする人でなしだなんて思わないでください！　ほんと、これだから男って最低。気弱なふりして、やることがえげつないんだから。タティに手まで出しておきながら、シエラなんて人と結婚するなんて、貴方随分ひどいことをなさるじゃない。タティの気持ちを、ほんの小指の先くらいだって考えたことがあるなら、そんなこと、できるわけがないのに」

「ハリエット、でもそれは……」

「言い訳はいいわ」

そしてハリエットは、主人である僕をぴしゃりとやった。

「タティはお手紙の中で、いつも魔力が消えてしまったことをすごくすごく悔やんでいたわ。魔力が消えたせいで、彼女は何処にも居場所がなくなってしまったように感じていたのよ。タティの性格では、はっきりとは言わないけど……、タティの居場所はずっと貴方だった。それなのに、それなのにシエラですって？

貴方は今タティがどんな気持ちがしているか、考えたことがおありなの？
あればそんなふうに平然と暮らしているなんて真似はできないと思うけど」

ハリエットは、まさに恐れ知らずと言っていい態度を取っていた。身分を弁えない、ほとんど懲罰対象となるような生意気な態度だ。しかし彼女はまだ子供じみた線の細さの残る、幼い感じの少女なため、文句を言われても僕はこの無礼への怒りよりは、ただただ唖然としていた。
そして僕のこんな反応に、ハリエットがますますむっとしているのも分かった。子供扱いされて頭に来る気持ちは、僕にもよく分かることだった。兄さんに何を訴えてもまともに話も聞いて貰えずに、半人前扱いで片づけられるあの虚しさは、ときに筆舌に尽くし難いものがある。でもどうしようもない、十六歳だって色気のある娘はいると思うが、ハリエットは見るからに乳臭かったのだ。たぶん十四歳と言っても通用するだろう。

「だいたい貴方がタティの味方にならなかったら、誰もが彼女を軽く見てしまうって、どうしてそういうことがお分かりにならないのかしら」

ハリエットは少女の愛くるしい声で、また腕組みをして怒っていた。

「貴方がタティに惚れ込んでいて仕方ないって態度をもっと分かりやすく取っていてくださったら、誰も彼女を軽蔑する目で見ることなんてなかったし、ああこれは将来絶対結婚する気だなって、みんながもっとタティを大事にしたはずよ。貴方の態度が浮ついているから、タティはお妾なんて通りの扱いをされちゃったんじゃありませんか。

タティにはこれまでにだって、幾つも縁談があったのよ！」

ハリエットは叫んだ。

「彼女に結婚を申し込む人だっていたのよ。だけどタティはアレックス様が好きだから、じっと待っていたんじゃない。タティはそんなこと言わないけど、手紙の中身は昔から貴方のことばっかりだもの。わたしにだってよく分かるわ。

貴方がいつか振り向いてくれるかもって、そしてやっとその願いが叶ったと思ったら、病気に罹って……、貴方はその身代わりのように現れた変な女と結婚しちゃう！

タティが肺病になったのは貴方のせいではないけど、でもやっぱり貴方のせいよ。タティが死ぬのは貴方がタティを守らなかったからだわ。そうでしょう！？

貴方さえもっとタティを大事にしてくれていれば……、そうすればタティだって精神的に参ることだってなかったはずだし、気持ちが元気だったら病気にだってならなかったかもしれないのに！　貴方がいけないのよ！」

「うん、君の言う通りだ……」

僕はハリエットが、見かけよりとても頭のいい、聡明な女の子だと気づいてそれを認めた。

「全部僕が悪い」

するとハリエットは何かを期待するように、僕のことを見上げていた。タティのために怒りを感じ、タティの悲しみを代弁する彼女が僕に何を期待しているかは分かっていた。

彼女とは、少し昔の僕が生きていた世界を現在生きている純粋な人間なのだろう。利害のない、純粋な友情のために親身になって義憤

を感じている正義感あるティーンエイジャーで、しかもそれを声に出して訴えることができるとても勇気ある女の子なのだ。

「それなら貴方はタティを見殺しにするようなことをしないで。そんなふうに何事もなかったみたいに日々を過ごしていないで、お願いだからもっとタティのために動いてよ！彼女は冷酷な伯爵様によって、絶望の牢獄に閉じ込められているの。そして貴方が助け出してくれるのを待っているわ。タティにとって、貴方は世界のすべてなの。分かっているんでしょう？　だったらお願いよ、貴方は伯爵様に逆らって。彼女は病気だけどまだ生きているの！そんなこと手紙には書いていないけど、わたしには、分かるもの……」

「でも僕はその期待に応えることはできない。タティには、会わないよ」

「どうして！？　タティより、シエラって人のことが大切だからっ！？」

僕は答えた。

「……それが大人というものだから」

第１６３話　赦し（１）

頑なで拒絶的で決して本心を明かさないのが大人の男というものだ。たまにカイトのような明るいのもいるが、彼だってあれで誰よりも本心は隠している。

あれからハリエットは延々僕を睨み続けているが、僕は気にしない。大人だからだ。大人は子供の怒りになど無関心だ。何故なら彼らは弱くて無力だが、僕はそうではない。僕は知的で裕福で力がある。

この二週間ほど、僕は兄さんに従ってアディンセル家の州領全体と国家における影響力を知る機会に触れ、権力と金の使い方について学んだ。兄さんたちの勧めで葉巻を吸い込んだときには呼吸が苦しくて吐き出しもしたが、上流貴族の成年男子という選ばれし特権階級の仲間入りを果たしつつあった。

そして季節は無情に巡り、凍える季節は過ぎ去って、いつしか世界は暖かな光のあふれる本格的な春を迎えていた。

窓から降り注ぐ輝く日差しは生命の息吹にあふれ、永遠に続くかと思われたあの暗く白い冬景色は、あっけないほど劇的に遠い過去に流れ去った。

悲劇に立ち止まらず前進を続ける兄さんのような強い性格の子供を持てたことは、二十年前当時のアディンセル家にとって、最高の僥倖だったことだろう。彼の性質は大人になって失われるどころかより強化され、彼の代で侯爵位を勝ち取るまでになった。アディンセル家では来たる侯爵位の叙爵に備え、明け渡された北西部国境ランベリー領と拠点ホリーホックに居を移すための様々の手続きや厄介事に追われていた。領主の変更に先んじて、ウィスラーナ家に仕えていた取り巻き連中の生き残りをかけた無様な擦り寄りも目撃したが、兄さんは彼らのほとんどを重用することはないだろう。

ロベルト候は実に一年以上も前から王宮に顔を出すということをせず、代理さえ立てられずに、信用を失った彼に代わって国境防衛に

は中央軍から派遣された者たちがかなりの割合を担っていたということを知った。

侯爵領の防衛はガタガタで、もしかしたら、新侯就任早々にフォイン王国との直接対決があるのではないかと危惧していた僕は、当面はその必要がないということを聞いて安堵した。それなのに兄さんはしばらく悩みの多い表情で日々を過ごされていたが、その理由を僕に明かすことはしなかった。

そして近頃の僕は身辺の整理に忙しく、通常業務に加えて必要最低限の荷作りに追われる日々を過ごしていた。来月より、王都への赴任が決まったからだ。そう、元ウィシャート公爵派の主だった貴族の子弟が、体裁と裏切り防止のために一定期間王都に集められることになったわけだが、こんなとき真っ先に人質に取られる子供が、兄さんにはいなかった。よって弟の僕が行くことになったのだ。とはいえ成人男子の僕はいいところの子弟たちにありがちな優雅な遊学生活ではなく、仕官という形になるようだ。

僕はあまり物を収集する趣味を持たないので、かさばる荷物と言えば書籍くらいのものだが、これが厄介だった。

何しろ僕はこれまでの人生の大半を、部屋に閉じこもって本と空想を友人にする生活を送って来たのに、突如としてそれに別れを告げなくてはならなくなったのだ。お気に入りの大量の本の中でも、特に手放したくないものを選び出すのには一苦労だ。

これは人生の転機だと、後になって自分の生涯を振り返るとき、この頃のことをそんなふうに思い出すだろう。将来のことは分からないが、それまでからは考えられない人生が始まろうとしていることは確かだった。

新しい人生に踏み出すことは、特別楽しみだと感じるわけではなかった。幸運なことに、僕は独立にあたってなお金銭的に困窮するという憂き目にあうことがない暮らしが約束されている若い貴族だった。だけどそれでも、生まれ育った土地を離れて暮らさなければならないことには、不安のほうが大きかった。

でもちょうどよかったような気もしているのだ。
現実とは斯くも無情なものかと天を恨みたくもなるが、かつて父上がおっしゃっていたように、ここは万人の微笑む天の王国でもなければ、どんな夢も魔法のように叶ってしまうお伽の国でもない。タティは肺病を患って死んでいく。これはどうしても覆らない現実だ。
ある種の物語ではこんなとき、危機的な状況を打破するための救いの魔法使いとか、妖精とかが現れて、何か特別の、彼女を助けるための知恵くらいは与えてくれる展開が広がって行くのだろう。
でも兄さんがアレクシスを失ったとき同様に、僕の前にもとうとうそうした夢のある人々は現れなかった。魔法使いは周りに何人かいるが、国内でも能力のある魔術師のうちに数えられているルイーズですら、肺病に関してはお手上げだと首を振るばかりだった。

「ウィスラーナ家にないかと思って、シエラ様にたずねてみたの。病気を治す魔法か、それに関する知識のことよ。シエラ様は姫君ですけれど、魔術を扱える方ですし、このタイミングでアディンセル家に身を置いていらっしゃるでしょう。だから、もしかしたらと思って……、でもなかなかそう都合よくはいかないものね」

その話をしたとき、ルイーズはまったく普段と変わらない態度だったが、僕は相変わらずそうじゃなかった。
あの真冬の真夜中に僕がしでかしたことが原因で、僕は随分長い間、彼女に対してとても気まずい気持ちを持ち続けることになった。
ルイーズはまるで何事もなかったかのように、叔母として相応しい態度で接してくれていた。これまでと変わらない明るくはたらきかけるような態度、一見するとあんなことがあったなんて他からは分からないような、ともすれば母親に準じるような態度だ。
でも僕は、どうしてもルイーズの目を見ることができなかった。
綺麗事を言っているかもしれないが、もはや自分を許せなかったか

らだ。
冷静になればなるほど明確にその残虐さ重大さが分かって死にたくなる。
アレクシスがトバイアにされたこととまったく同じことをこの僕が、無抵抗な女性に、してしまった……。

「タティのことでは、彼女が苦しまないように最後まで私が最善を尽くすわ。痛覚を弱めるためのお薬と魔法を併用すれば、そうそう苦しい思いはせずに済むはず。
ハリエット様にはこれから突貫工事で学んで貰わなくてはならないことがたくさんありますし、シエラ様は、やっぱりタティの面倒をみるなんて……難しいでしょうし」
「うん、ありがとう」
「いいのよ。そう、ハリエット様との関係は上手くいっているかしら。あの子はとても賢くて勉強熱心だけれど、ちょっとお口が達者なところがあるでしょう。
アレックス様、たじたじになっていないかしら」
「なってる」

ルイーズは微笑み、僕はうつむき加減のまま深刻に頷いた。

「彼女はあまり僕のことを好きにはなれないみたいだ。いつも何処か喧嘩腰と言うか……、それに警戒されているのが伝わる。
でも思い当たることがありすぎるからね、何も言えない」

僕は先日もハリエットにタティのことで激しく責められたことを思い、詰まりそうになる胸を一度深呼吸をして整えた。僕はハリエットの主張には、ここのところとても傷つけられていた。彼女は感情的には非常に正しいことを言っていて、友人をいたわる彼女の言い分は僕の心を打つものだからだ。

しかし正義感と気骨あふれるティーンエイジャーの言論の刃はまったく容赦がない。
僕は、かつて僕の怒りに対して兄さんが行っていた軽くいなしたり、あしらうなんて高等なことはできなかったし、かと言って正面から向き合って、ハリエットの怒りを収めさせるだけの大人の器量も持ち合わせていなかった。
と言って年下の女を相手に本気で怒るわけにもいかない。泣かれたら収拾がつかないし、もし口喧嘩みたいなことになってしまったら、挑発に乗って同じレベルになってしまうことを思うとあまりに格好悪すぎる。

「正直に言ってどうつきあっていいか、分からないよ」

僕はため息を吐いた。

「優しく接してあげて。彼女はあれで深窓の令嬢ですもの。これまで学校に通ったこともなくて、外の世界にはまともに触れたことがない……、初めて社会に出たばかりなの。
だからまず男性に免疫がないわ。見ていて思ったけれど、彼女は見かけによらず本当はとても臆病な子かもしれない。
女性は多かれ少なかれみんなそうなのだけど、彼女たちは貴方が思っているよりもずっと小さなことで不安や恐怖を感じやすいのよ。貴方やカイト様のおしゃべりや笑い声ひとつにしたって、場合によっては恐怖の対象になってしまうでしょう。
だから努めて優しく紳士にね。彼女は慣れていないのよ。戸惑っているの。あんまり素直な反応はしないかもしれないけれど、でも気持ちはちゃんと分かる子だわ」

第１６４話　赦し（２）

僕は同意した。

「気持ちが分かるっていうのは、よく分かるよ。ハリエットは弱者の味方だ。羨ましい正義感の持ち主だよ。タティの再従姉妹なんだ。それで……、彼女はタティの味方だから、僕を非難している……」

「そう……」

「ハリエットはきっと、僕のことを大人の身勝手さや横暴さの権化みたいに思っているんだ。僕がそういう兄さんを、軽蔑していたのと同じ目で僕を見ている。たまらないよ、僕はいまやあれほど軽蔑していた汚い大人の仲間として彼女に見られているんだ」

ルイーズは静かに頷いた。

「でもそれしかないだろう、大人になっているしか。タティをどうにか助けたいと思う気持ちは僕だって同じだけど、方法がないんだから。僕が悪意でタティを見殺しにしていると思われているのがつらいんだ。

大人のくせに、その力がある大人なのに、わざと見捨てていると思われているのが……、そうじゃない、僕は只の無力な弱い男だと言えないのが……」

「分かるわ」

「子供って残酷なんだ。自分だけが正しい、自分だけがつらいと思い込んで、周りを攻撃する」

「ええ、そうね」

「……愚痴ってしまった」

「いいのよ。残念だけど、私も今の貴方と同じ気持ちなの。何とか貴方の苦悩を救ってあげたいけれど、私は無力でその方法を貴方に

提供してあげることができない」
「分かっている。君を責めているわけじゃないんだ」
「ええ」

ルイーズは慰めるように僕の肩に手を置いた。
でもやっぱり僕は顔をあげて、彼女を見ることはできなかった。
あの晩のことを、いっそ激しく罵ってくれたほうが気が楽になるのに、ルイーズは一言も僕を責めようとしないから、罪の意識はふくらむばかりだった。
僕はハリエットのように純粋に徹することもできなければ、ルイーズのように自分の感情をコントロールすることもできずにいた。
沈黙が続き、やがてそれを打ち消すように明るい声でルイーズが言った。

「ハリエット様はね、ほら昔、私に魔法をご指導くださっていたコネリー様の末孫に当たるのよ」

コネリー様と言うのは、ルイーズの記憶の中で、少女だった彼女に魔法の授業をしていたカティス家の年老いた魔法使いのことだろう。
僕は実際には会ったことはないのだが、そう言われると僕もまた何処か昔を懐かしむような気持ちになった。

「ハリエット様は、カティス家の中でも何代かに一人という優秀な魔法使いなの。だからまだ若いけど、貴方の魔術師に抜擢されたのよ。彼が生きていらしたら、泣いて喜んだような魔力を持って生まれて来た子なのよ。
才能を見込まれてアディンセル家から招集がかかったとき、彼女には二つ選択肢があったの。
ひとつはそれを断って、普通の女の子たちが夢見ている通りの人生を送ること。結婚して、旦那様と子供と幸せに暮らす人生よ。

もうひとつは、いま彼女が貴方の魔術師になったこちらの人生。これは、彼女が自分の意思で選択したことなの。彼女なりの強い使命感を持って。貴方を非難したいがために、ある意味で一生を違えてしまうような選択をするほど、彼女は愚かじゃないわ。タティのように最初から側にいたのではない分、情に流されてとか、そういう判断要素は彼女にはないはずだし……、ハリエット様は自分から、貴方の下で働くことを希望してやって来たのよ。だから、今はまだ感情的な処理ができないのかもしれない。今はまだそうではないとしても、いずれすべてをきちんと理解してくれるときはやって来るわ。貴方がそうであったように。ハリエット様だって、きっと同じよ。必ず貴方の強い味方になってくれるときは来るはずだから」

「そうだろうか……」

「ええ、そうよ」

僕は自信が持てずに息を吐いた。ハリエットは基本的に僕の話なんて聞かない。一方的にタティを切ったと僕を非難するばかりだった。僕は男としてこうした戸惑いを態度には出さないつもりだし、彼女につらく当たることもないが、理由が何であれ自分を非難する人間を好ましく思うことはできない。できればお近づきにはなりたくないとは思っていた。兄さんとルイーズの関係のように、私生活でまで親しくしようとは思わない。

そんな僕の心情を察したのだろう。やがてルイーズは観念したような声で言った。

「壊滅的だとは気づいていたわ。ハリエット様は……鼻っ柱が強くって。貴方も、負けず嫌いなところがあるし」

ルイーズは少し考えていたようだったが、やがて言った。

「では、そう……、アレックス様が分かりやすいように、もうひとつ論理的に、この人事に関する大人の事情を説明しましょう。
そもそも貴方と相性が悪い者を貴方の魔術師にはしないのよ。ご存知のように魔術師とは、主人を守護することが大きな務め。それには魂の波長が合わなくては都合が悪いの。
魔術師の選別には、単に魔法の才能というだけではなくて、そうした要素も大いに取り入れられるから、ハリエット様は実は素晴らしく貴方と合うの。
しかもそれだけじゃない。彼女の場合は完全に……、星の配置が貴方の妻なのよ」
「妻……？」
ルイーズは頷いた。
「そう。妻よ。だから彼女は絶対貴方が好きになる。貴方と結びつき、貴方に従うことを潜在的に望む配置なの。だから精神的に貴方から離れられない。そしてうっかり恋に落ちたら最後、裏切りすら起こしようがない、そういう星を持っているのよ。
ハリエット様には、ちょっと可哀想だけど……。彼女が殊更に貴方に反発しているのは、貴方に対して既に恋愛感情があるからよ。これは隠し要素だけど、実はこの人事にとってとても重要な条件だったの。ハリエット様は貴方の魅力に抗えない。少女が初めての恋に戸惑い、そんな気持ちに屈するまいともがいている。
そう思ったら、彼女の反抗的な態度も、少しは可愛らしいと思わない？　貴方を嫌いだなんて態度を取っていても、心ではどうしようもなく貴方に惹かれている。あの子の頭の中は貴方のことでいっぱいよ。タティのことすら、ともすれば貴方に会うための理由になってしまっている」
僕は顔を顰めた。

「好かれてる実感はまったくないけど……。それって……、兄さんの差し金？」

ルイーズはそれを認めた。

「酷いことをするね」

「貴方を愛しているからよ。人の上に立つ者は、人間の心理くらい利用できるようにならなくてはいけないの。悲しいことだけど。特に恋愛に関しては、ギルバート様は大得意だわ。そして恋愛感情というものは、それを利用しない手はないくらい、主人を護る強い動機になるのよ。大丈夫。世間には同性の魔術師をつけている方だっていらっしゃるし、絶対そちらの方向に発展するとは限らないから。男の貴方さえしっかりしていれば、大親友になれる相性なのよ。ギルバート様と私を見れば、それでも十分成立するって、お分かりになるでしょう？そういうわけだから、あの子が子供じみたことを言って貴方を困らせるとしても、貴方は大きな心で。ともかく、彼女は人並み以上の覚悟を持ってここに来ているわ。魔力の強さでは貴方にも負けていない、優秀な魔法使いなんですもの」

「ハリエットの魔力を……、僕と比較するの？」

僕が言うと、ルイーズはマスカラに囲まれた空色の瞳を僕に向けた。

僕は驚いて目をそらした。

ルイーズは小さく微笑った。

「だって……、貴方は生まれつき、割と魔力がお強いのよ。だからもったいないの。

姉さんより、強いかもしれないわね……、貴方、姉さんより優秀なのよ。皮肉なことに」

「そうか……」

第１６５話　赦し（３）

ハリエットとどうつきあっていいか分からないことと同じかそれ以上に、僕はルイーズにどう接していいか分からないでいた。ルイーズがそのようにしている通り、何事もなかった顔で接すればいいのか。でも僕はルイーズが、本当は僕なんかよりショックを受けていないなんて思うほど、自分勝手な人間ではないつもりだった。でも僕は何と言ってルイーズに詫びたらいいのか分からずにいたのだ。僕は酷いことをしてしまった。とてもとても酷いことだ。いつか初夜権だと言って女性をさらって来ている兄さんを目の当たりにしたとき、僕はああいうことだけはするまいと自分に何度も確認をしていたし、絶対にしないだろうという自負もあったのに。ハリエットが日頃僕に向ける非難の視線は、僕のタティに対する仕打ちに抗議してのものだ。ハリエットはタティのことで怒っている。ルイーズとのことを、ハリエットはまったく知らないだろう。だけど僕にはそれさえも非難されているように思えていた。実際根っこは同じだった。女性を軽く扱ったという非難の眼差しだからだ。穢れを知らない少女であるハリエットに、まっすぐな強い眼差しでそれを訴えられているのが、僕の罪悪感をまるで首を絞めるような強烈さで締め上げていた。

ルイーズの至って冷静な態度もそうだった。感情的になって喚き散らして欲しいのに、口汚く僕を責めて、僕に謝罪を要求するくらいのことをしてくれれば僕だって救われるのに、彼女が何を優先しているかと言えば、たった今だって罪悪感に苦しんでいる僕の気持ちを守ることを優先しているのだ。

彼女だってアレクシスのことでは、心に少なからず傷を抱えているはずなのだ。自分がそうされたわけではないにしろ、実姉があんな酷い目にあうところを、目の前で見せられ続けたルイーズの精神は確実に参っているはずだったし、男性恐怖症に陥っていたとしても

おかしくないレベルのダメージを受けているだろう。
それなのにこんな思いやりがあるだろうか？　彼女は自分が味わった恐怖や僕にされたことに対する怒りや嫌悪感を僕に向けるより、僕への配慮を優先している。
責められても、守られても僕は苦しかった。
僕にはまったく何をどうしていいのかすら、分からなくて泣きたかった。あんなことを本気でしたいと思っていたわけじゃなかったし、女性の尊厳を踏み躙っていいと思っている男でもないことを言いたいのだが、そんな話をしてどうしてルイーズがそれを信じてくれるだろうか？
ハリエットが僕を非難しているのは、多感な少女が僕の内側にそういう野蛮なものをみいだして、それでそういうふうに僕を憎んでいるからなのではないのだろうか？
ハリエットが僕に対して抱いている残酷な男になりきることもできなければ、ルイーズが僕を責めないのをいいことに、何事もなかった顔をして暮らせる厚顔さも僕にはなかった。

「アレックス様……、ねえ、もう許してあげるわ」

ふと、繊細ぶっていて実は誰よりも独善的なナルシストに過ぎなかった青年の頭上にルイーズが言った。
僕はルイーズの顔を見ることもできずに、彼女の手を肩に乗せたまま、うなだれていた。

「未遂だったし。だからそう、私を見るたび泣きそうな顔をするのはおやめになって。
未遂なら許されるということでもないけれど……、貴方が死ぬほど反省しているのは理解しているわ。できれば暗黙で調子をあわせて、なかったことにしたかったのだけど……、貴方、そういうことができないタイプだったわね。

同情する点を挙げるとすれば、あれはタティの死の宣告を聞いた晩のことだった。それに……、頭が普通じゃなかったんですものね」

僕は身体を小さくし、迷子の子供のように情けない気持ちで頷いた。こんなふうに物事に理解や同情を示せる寛大な女性が、悲鳴をあげて嫌がることをしようとした僕は、結局オーウェル公子にゴミと罵られても仕方がない人間だったのではないかと、そんなふうに思えたのだ。

ルイーズは続けた。

「だからもう、ここではっきり終わらせておきましょう。貴方が二度としないと誓ってくれるなら、あの夜のことを水に流してあげるわ。今日限りで、この話は永久におしまい。

ねえ貴方、もう少し背筋をぴんと伸ばして。もっと胸を張って歩いてご覧なさい。ちょっと猫背になっているけど、そうすると、それだけで随分違うから。

貴方さえその気になれば、今だっていい感じの貴公子なのよ。背丈もあるし、ちょっとギルバート様に似ているところもあるし」

「兄さんに似ている？　本当かな……」

ルイーズは頷いた。

「ええ。そっくりだわ。だから貴方はもっと自分に自信を持っていい」

「うん……、ルイーズ……」

「じゃあ、これでこの話はおしまいね。私たちの間には、何もなかったの」

そしてルイーズは僕に微笑みかけた。

でも僕は、そんなふうによくして貰えるような男ではなかったのだ。

「僕はとても酷いことをしたんだ……、とても許して貰えないようなことを」

僕はうつむいたまま呟いた。

「許してあげるわ」

「僕は君を襲おうとしたんだ」

「許してあげる。だって貴方は私を襲えなかった。そうでしょう？」

「君は大人だから、口ではそう言うだろうけど、きっと心の傷は一生消えないだろう……？

君はこれから一生僕を憎むだろう。アレクシスのことと、僕が君にしたことはまったく同じことなんだ。君はこれから一生僕に対する汚泥のような嫌悪感を拭えない。

分かってるんだ、僕は本当に悪魔のようなことを……、あいつと同じことを……」

そして僕は再びうなだれた。

するとルイーズは僕の頭に触れ、黙り込む僕の首を撫でた。

「アレックス様……、……じゃあこうしましょう。ここは許してあげると言っている私を信用して頂戴。

許しを自分の中に受け入れるにはとても勇気がいることだわ。だから貴方はまだご自分を許せないかもしれないけれど、自分を許す勇気も……ときには必要なものなのよ。すぐには無理でも……、だから今は私が貴方を許すと言っている言葉を信じる勇気を持って欲しい。

私は私の愛する甥を今この瞬間だって憎む気持ちはないし、私が貴方に抱いている感想はひとつよ。貴方が分かってくれてよかったわ。正道を見失わず、父親殺しを思いとどまってくれて」

「本気で僕を許してくれるって言うのか……？
君はいったい、どういう博愛主義者なんだ？　聖職者？　奉仕者？
いや、ほとんど無償の愛だ。まるでお母さんだよ！
君は僕を見ても平気で笑顔になるし、僕を罵りもしない。僕は君に」
「許してあげる。そう言っているわ。そして貴方はそれを信じるの」

ルイーズは僕に目をあわせて優しく言った。

「貴方は私にとっても子供のようなものよ。自分の子供を本気で憎む母親がいて？　母親なら、泣いて帰って来た子供に手を上げるような真似はできないわ。それがどんな悪ガキであれ、ひと通りお説教をしたら、お家に入って一緒におやつを食べるのよ。違うかしら？
だとしても、それが私の夢だったの。だから私はそうするのよ。貴方はそれを信じなさい」
「ごめんなさい……、ごめんね……、ごめんね……」
「ええ、許してあげるわ。もう大丈夫よ。大丈夫。赦してあげるわ
……」

第１６６話　花の嗜好

「タティの手紙って……、どんなことが書いてあるの？」

僕の執務室の窓際で、朝から手紙を広げているハリエットに、僕はめずらしく自分から声をかけてみた。

僕のほうからも、ハリエットのほうからも、個人的な話題が発生することはあまりないことだった。ハリエットはおしゃべりな女の子だが、確実に僕を嫌っているし、僕としてもわざわざ嫌われている相手に話しかけて不愉快な反応をされようなんて自虐的な真似をしたいと思う趣味はない。

ルイーズによればハリエットは僕に好意を持っているそうだが、現状とてもそんなふうには思えない……、そんな解釈は何かの間違いだとしか思えないくらい、彼女は僕に反抗的だった。

そして何より重要なことは、僕はハリエットにまったく興味がない。彼女の私生活についても、異性としても、何ひとつ関心が持てなかった。

理由を挙げるとするなら、前から言っているように、僕は性格の優しい女が好きだからだ。でもこういう何くれと文句を言う気の強い性格の女を奥さんに貰ったら、たぶん結婚生活はきついと思うので、僕は断然おとなしい女がいいと思うのだ。

それに、外見が子供っぽすぎる。年齢的にはたぶんマリーシアと同じくらいだと思うけど、ハリエットはマリーシアよりなんて言うか……、いろいろと魅力がなかった。魅力がないと言うと語弊があるかもしれないが、なんて言うか、僕は何も女性の胸の大きさにこだわろうなんてエロい男ではないのだが、さすがに幼い少年のような胸元は、眺める楽しみがないと思う。僕は断じてスケベじゃないし、僕はカイトと違って、いつもそんなところばかり眺めているわけじゃないのだが。

ハリエットの胸はまだ育っていないのかもしれない。だが年齢より若く見えるというのも、ルイーズくらいの年になると素晴らしい利点だと思うが、ハリエットの年齢では結構不利だと思った。

勿論、世の中には幼い少女を愛でたいタイプの男もいるだろうが、僕はどっちかと言うと扱いに困るので、どうせ女性魔術師がつくなら、年齢は僕より少し年上くらいだとよかったと思う。そうすると我侭を言わないと思うし、煩くないだろうし、僕に優しくすると思うからだ。

わざわざ朝から僕の執務室に来ておきながら、これ見よがしに僕の前で手紙を広げるなんて邪魔臭い行動は取らないで、タティから手紙が来たという話を、優しく僕にしてくれただろう。

タティはどうしているだろうかと僕が言うと、彼女は気遣わしく僕にたずねる。

「アレックス様、お寂しいのですか？」

彼女の髪は黒か茶色だ。二十歳すぎて金髪だったりするとまず兄さんの餌食になる危険性があるから、それで……僕は悲しく頷く。

「寂しいんだ。いつも……」

すると彼女は僕に優しく同情する。

「ああ、なんてお可哀想に。貴方がこれまでどんなにつらいお気持ちを抱えていらしたか、どんなに毎日頑張っていらしたか、わたしはよく知っているわ。だって、わたしは貴方の魔術師ですもの。どうかそんなふうに悲しまないで。わたしでよろしかったら、どうぞいらして……」

そしてシェアみたいに僕に手を伸ばして、そっと僕を抱きしめるの

だ……。服装は清楚で、胸は大きいタイプ……。

「あら、お知りになりたいの？」

ハリエットの可愛いが子供っぽい声が、僕の妄想を打ち消した。
僕が慌てて頷くと、朝の光の中にいるハリエットは、横目でちらりと僕を見た。ハニーブロンドを軽く結わえていて、小さな白いボタンがきっちりと等間隔に並ぶ胸元はまるで洗濯板のようだった。

「そう。ねえ、貴方はタティにお手紙を書いたりはなさらないの？」
「書いているけど、返事がないんだよ……」
「まあ、それは当然ね。貴方は本当に酷い男なんですもの。嫌われて当然だわ」
「うん…、そうなんだ」
「手紙の内容を知りたいのね」
「うん」
「それはどうして？」
「それは、だから……、タティの様子が心配だし……」
「それから？」
「心配なんだ」
「ねえ、まさかそれだけ？　貴方、それだけなの？」

ハリエットは僕に向き直り、それでは不満だと言わんばかりに僕に歩み寄った。
僕は、まるで僕を操ろうとしているかのようなハリエットの対応に、少しむっときた。

「心配なことの、いったい何が不満なんだい。
今のはまるで、何か違う言葉を僕から引き出したいみたいに聞こえたけど、僕はそれを君には言わないよ。言う機会があるならタティ

に直接言う。そういう大事な言葉は」
「それって、じゃあ貴方、タティのことを今でもちゃんと想ってるってことなの？」
「それは……」

第１６７話　両手に花とはいかなくて

そこにノックがして、笑顔のシエラが室内に入って来た。

「おはようございますアレックス様。私、今日はね……」

彼女は相変わらず人目を惹く美しさだった。流れるように長い髪を揺らして、たおやかで清純な、育ちのいい少女の気配。

シエラは美しい少女だった。譬えるなら静かな雨上がりの庭のような風情があった。水滴を帯びた木蓮の花のような気品があった。上等の素敵なドレスを身につけていないときでも、品のよさは常に彼女と共にあって、僕のような男の目を惹きつけた。

しかもそれが、どうしたことか僕に好意を抱いている。女性に好かれているとなれば、男としては当然悪い気はしない。そればかりかこんな美人が僕なんかでいいんだろうかと、光栄すぎて怖くなってしまうほどだった。

となればその綺麗な顔を見るために、僕は抵抗もままならず思わずそっちに目が行ってしまう。これはもう習性のようなものだ。ついでに言うと、シエラの胸元はふっくらとしていてなかなか悪くないこともあった。ハリエットがぴくりと眉を動かした気がしたが、それは僕にとっては物の数に入らない。すぐに視界の端に流れて行ってしまった。

「おはようシエラ」

しかし弾むようだったシエラの笑顔が、間もなく少し引っ込んだ。それは執務室に、ハリエットの姿があるのをみつけたからに他ならなかっただろう。

僕は、自分にすら一人しか友だちがいない有様なので、女の子同士

の人間関係がどんなふうかなんてことを、詳しく把握できないのだが、この二人は年齢が近い割に、どうも、あんまり友だちじゃないような感じだった。

シエラとハリエットは明らかにお互いを見たのだが、彼女たちはとうとうお互いに朝の挨拶を言わなかった。

シエラは再び僕に顔を向け、すぐ執務机のところに立っている僕の側に近寄って来た。甘い香水の香りがする。それから僕を見上げて微笑んだ。

「今日ね、アレックス様がお暇だったら、一緒に髪飾りを選んで頂きたいの。ギルバート様が私にプレゼントしてくださるんですって。一昨日、お夕食をご一緒したときにお約束したでしょう。それで、午後から宝石商を呼んでくださるって。そのとき、アレックスも呼ぶといいって」

「ああ、そうなの？　いいよ」

「無駄遣いね」

ハリエットが、窓際で腕組みをしながらいきなり言った。

「領民が汗水たらして納めた税金を何だと思っているのかしら。貴方の髪飾りのために働いているわけじゃないのよ」

「ギルバート様は鉱山をお持ちなのよね」

しかしシエラはハリエットには応えず、また僕に微笑んだ。

「女性に贈り物をするのがお好きなんですって……」

「うん、そうなんだ……、兄さんは結構そんなタイプ……」

「あらそう元候女様は、小領主の娘なんかとは口をきかないってわけなのね。プライドだけは一人前。いい度胸じゃない。すごい性悪」

するとシエラは僕の服の袖をぎゅっと掴んで、怯えた顔で囁いた。

「なぜ彼女は私に意地悪なの……？

貴方に仕えている人が、どうして私にあんな意地悪を言うの……？」

「えっ？　いや、きっとあの、ハリエットは……、そう、疲れてるんだ。つまり勉強が忙しくて。普通の教養課程以外に魔術の勉強してるから……、悪気はないんだよ。たぶんそういう年頃って言うか……。

君がハリエットと仲よくしてくれたら助かるんだけど……」

「……それは難しいです。だって、彼女は私のことがお嫌いみたいなんですもの」

「いや、そんなことないよ。あれって緊張してるだけじゃないかな」

「それに、もともとは私がアレックス様とカイトさんの仲間なのに……。

姫君にいつまでも労働をさせるわけにはいかないって、ギルバート様が自由な時間をくださったのは嬉しかったわ。花嫁修業をするのはとても有意義な時間よ。感謝だってしています。でも、後から来たあの人が、ここで大きな顔をしているのは何だかちょっと悔しいの。

彼女はまるで光の王女様を邪魔者にして、お城から追い出そうとしている闇の魔女みたい……。

ですからアレックス様、お願いよ、私よりハリエットさんと仲よくなったりしないでくださいね」

「ああ、うん」

「アレックス様もそうじゃありません？　女性に贈り物をするのがお好きなの」

僕の背中の向こう側で、ハリエットが一転して妙に好意的な声で言った。

僕は慌ててハリエットを振り返って、彼女に笑顔を作った。

この何とも居心地のよろしくない状況を、どう対処したらいいか分からないのだが、僕はとにかくそうしなければならなかったからだ。

「ああ、うん、まあ、嫌いじゃないかな。ハリエットにも好きなの買ってあげるよ。二人とも、一緒に来たらいい。ねえ、なんて言うか二人とも今からちょっとそう、一緒におやつでも食べて来たら。そうすればきっと」

しかしハリエットは僕の言葉には応えず、またシエラを見ながら言った。

「でも彼、大切な女性にはまず指輪を贈るのよ。ご存知だったかしら。それがアレックス様の愛する女性に対する厳格なルール。どうでもいい女には、そうではないと思うけど。なのに何処かの誰かさんは、頭の中がお花畑で本当に羨ましいわ。いつだって自分のことしか考えてないんだから、呆れて物も言えない」

するとシエラが困った顔をして、ハリエットではなくまた僕の腕を引いて言った。

「そうなのですか？」

「えっ？　いやっ、えっと……」

「私は自分のことばかり考えているかしら。それに貴方にとって、私はどうでもいい女なのですか……？」

「そ、そんなことないよ。シエラは……」

「大切？」

「う、うん、まあ」

シエラは笑顔になった。

「よかった。では、私にもちゃんと指輪を買ってください。後で一緒に、選んでくださいね。

私、二人のおそろいの指輪が欲しかったの。いいですか？」

「えっ、ああ、そうだね……、いいよ……」

「嬉しい」

「何よそれ……、そんなのってっ！」

ハリエットが、いきなり背中のほうから金切り声で叫んだ。

「えっ？」

「不埒者っ！　最低っ！　優柔不断っ！　アレックス様、貴方って史上最低だわっ！」

そしてブロンドの髪を揺らし、大股で執務室を出て行ってしまった。

「待ってよハリエット、君も指輪を買って欲しかったのか……！？高いやつ……」

第１６８話　勢力図の刷新（１）

反省点はどっちにも平等にするという大原則を破ったことだ。妹を二人持っていたカイトが言うには、もし女の子同士がつまらないことで争っていたとしても、絶対にどちらかの肩を持っては駄目だということだった。

恐らくあれは、僕とシエラがおそろいの指輪を買うのではなく、シエラとハリエットにおそろいの指輪を買ってあげるという話に持って行くべき場面だったに違いない。それが模範解答であり、模範的な男の採る選択肢だったのだろう。何故なら女性はお金が好きだからだ。おそろいの値の張る指輪をあげれば二人とも嬉しくなって仲直りしたかもしれないのに、僕はつい焦って、ちょっと失敗してしまったようだった。

そして僕は少し疲れて、朝から執務机に伏していた。

こんな面倒なことに巻き込まれたことと言うのも、このての問題処理係のカイトがいないからなのだ……。と言っても、彼も適当な仲裁を入れるのがやっとのようなのだが。

僕にはそもそもシエラとハリエットの折り合いが悪い理由がよく分からない。勿論、タティのことで怒っているハリエットが、シエラを気に入らない理由は当然分かっているが、でもそれは八つ当たりのようなものだし、シエラがハリエットと仲よくしないのは意味が分からない。

二人とも魔法を扱えるから共通の話題だってあるだろうし、女の子なんだし、女の人はあんまりいがみあうのは似合わないと思うので、仲よくすればいいのだ。

「王都への出向の準備はいかがですか」

不意に朝から書類を届けに来たジェシカが、僕にたずねた。

僕は机から上体を起こしながら応えた。

「うん、まあ。荷物のほうは何とかね。もっとも配属先がまだ不確かなので、心の準備はできていないんだけど」

「急にお話が動きましたものね」

「そう。僕が都会でやっていけるかなと思ってね」

僕は頬杖をついた。

「大丈夫ですよ。ギルバート様が住まいから生活全般、使用人、王宮における立場まで、アレックス様のために何もかもきちんと手配してくださいます。貴方様は何もご心配されることはありません。ご自身の個人的な荷物以外のことは」

心得顔でジェシカが言った。

僕は軽く肩を竦めた。

「王宮での立場については、有難いことこの上ないけどね……。ねえ、住まいって、それってつまり王都の伯爵邸に住めってことだよね？　自分の目の届くところに」

「そうです」

「ときどき僕が王都に行くとき使ってる部屋を使うのかな」

「あのお部屋は言わば子供部屋です。一人前の成年貴族である貴方が本格的に拠点とされるには、内装も規模としても少々不釣り合いと存じますので、現在別のお部屋を修繕させています。今回、アレックス様は伯爵様の名代として王都に赴かれるわけですから。貴方様も今後はいよいよ責任あるお立場になられるのですよ。国王陛下にお仕えするのです」

「責任か……」

「そうです。私はその言葉が大好きです」

ジェシカは微笑を浮かべた。

「ですからどうぞご安心を。ギルバート様に申し上げるほどではなくとも、何か小さな疑問点、お困りの点があれば何なりと私にお申しつけください」

「君が僕の問題を片づけてくれるって？」

「はい。伯爵様にはそのように申しつかっておりますので」

僕は何となく頭を抱えた。そんな責任ある立場の成年貴族である僕が、何もかも兄さんたちに手配して貰うのでは、何だか少々話がおかしくないのだろうか。兄さんはきっと僕を寝かせておく揺りかごまで準備してくれるつもりに違いない。

「シエラ様とはいかがです」

唐突にジェシカは言った。

「え？　ああ、まあ、普通に仲よくしてるけど」

僕が視線を上げると、ジェシカは曖昧に頷いた。だがよく見ると、赤いルージュの口元が笑っていない。

厳格な彼女のことだ、もしかするとエステルの件で僕を見損なったままなのかもしれないと思い、僕は慌てて言った。

「何もしてないよ。だってほら、僕って真面目だし、それに幾ら結婚相手と言っても、初夜まで何もしないのが高貴な女性への礼儀であり、暗黙のルールだろう。

シエラは由緒正しいウィスラーナ家の令嬢だし、僕はそんな……反モラル的なことは一切。花嫁の処女性は重要だからね」

ジェシカはまた頷いた。

「左様です。高貴な方に捧げられる女の処女性はとても重要。貴方様が堅実なお考えの持ち主で、それはようございました。これは伯爵様も一安心なさいましょう」

「兄さんが？」

そこへ、慌ただしくフィエール・マイヤーズが僕の執務室にやって来た。

彼は入室と同時に敬礼し、それからやや慌てたような素振りが、ジェシカに対して向けられたのだが、彼女はそんなフィエールに親しみを向けることはなかった。

それまで僕に向けていた穏やかな態度とは一転して冷徹に彼をひと睨みし、小言を言った。僕に対して粗相のないようにしろとか、そういう内容のことのようだ。そして僕にだけ敬礼してそのまま退室して行った。

フィエールは小さくため息を吐いてから、僕のところにやって来て改めて礼をした。

彼は現在留守にしているカイトの代理の秘書官だった。マイヤーズ家は代々フィーロービッシャー家に仕えている家柄なので、フィエールにとってジェシカは直属の上司となる。

マイヤーズ家は現在母上の……、ギゼル様の兄が当主をしている。彼に爵位はないのだが、この度の昇格人事及び新規叙爵が行われる際、アディンセル家の当主である兄さんにとって親族であるマイヤーズ家は男爵位を授けられることが内定している。

フィエールはそこの次男だ。現在二十八歳、兄さんの母方の従弟に当たる。でも身分の差がありすぎること、それにマイヤーズ家がフィーロービッシャー家に遠慮していることもあり、親戚づきあいはほとんどない。僕は伯父上以外のマイヤーズ家の面々をほとんど知

らなかったくらいだ。

「おはようございます」

フィエールが実直に言った。黒髪の精悍そうな男だ。もっとも容貌的には平凡だった。兄さんのように妖艶な美貌の男という片鱗もないし、兄さんのように愛想もよくない。

それどころか、振る舞いが何処となく大胆と言えばいいのか、端的に言うと頭に寝癖をつけていても平気な性格のようだ。今も髪が変な方向に立っている。大雑把さは兄さんと共通項かもしれないが、こちらはかなり物ぐさな大雑把さと言うのか。だから黒髪というところ以外は兄さんにはあんまり似ていない。

僕の視線が自分の寝癖を捉えていることに気がついたのだろう。フィエールは髪の毛のはねた頭を押さえながら、僕に苦笑いした。僕の目の前で、朝からジェシカに説教を食らってしまったこともあっただろう。

「ジェシカはきっとその寝癖が頭に来たんだと思うよ。一応ここってアディンセル家の城だから」

「はい、すみません。……私はさっそく減点でしょうか」

「いや、僕はどっちでも。兄さんも基本的に男の身なりなんて見てないと思うし、どうでもいいと思うけどね。中には気にする人もいるって話」

「私はどうにも無精者で、鎧を着込んでおく以外の服装が、どうすればいいのか分からずで。お恥ずかしながらジェシカ様には連日叱責を。ここはさすがに身なりをきちんとされた方が多く、肩身が狭いです」

「フィーロービッシャー家ではどんな任務についていたの」

「最初は父について見習い仕事をしていたのですが、ここ何年かは街道警備を。治安維持要員の一人として、各地を定期巡回していま

した。賊を狩るのです」
「街道警備？」
「はい」

フィエールは頷いた。

「ああ、そうか。君が隊を率いていたんだね？」
「いえ、違います」
「違う？　それじゃあ思いっきり下っ端仕事だ。少なくともマイヤーズ家の人間にさせる仕事じゃないだろう。街道警備なんて。それは酷いな、伯父上の命令なのか？」
「いえ、クライド様の命令です。彼には父も逆らえません」
「クライドの？　何か大失敗したの？」
「いや、失敗なのか……、もともと私は彼に疎まれているのです」

フィエールは何とも言い様のない表情でかぶりを振った。

「クライドはかなりお洒落だから、寝癖が許せなかったのかな……」

僕は呟いた。もっと話を聞きたかったが、フィエールはそうではなかったらしく、話がそこでいきなり終わったからだ。彼はあまり口数の多い人間ではないらしい。

第１６９話　勢力図の刷新（２）

それからフィエールは咳払いをして、幾らか緊張した様子で手帳を取り出した。

「本日の日程を申し上げます」

一応は従兄弟同士なんだからそんなに畏まらなくてもいいのにと、僕は何度か彼に話をしているが、彼は聞き入れなかった。

身分社会における序列とは絶対なのだ。僕は今のところ身分だけが取り柄の、若くて経験が無いに等しいほど浅い者だが、それでも何か、少しくらいは何か内容があるかのようにしていなければならない。

僕はフィエールを、兄さんが部下にやるように偉そうに促した。フィエールはそれに応じた。初々しいと僕が言うのもどうかと思うが、とにかく緊張が添えられながらも単調に読み上げられる彼の手帳の中身を聞きながら、僕は執務室の机についていつものように目の前に用意されている数社の新聞に目を通した。

カイトはここ二週間ほど、ローブフレッドを留守にしていた。彼はデイビッドについて、ウェブスター家に出かけていた。

実家に帰るという言い方は、カイトの場合は相応しくないだろう。本人もあそこは自分の家じゃないと言い切っていたし、だから出張中だ。

「それで、じゃあ向こうで簡略に婚約だけ済ませると。婚約式とかはなしなんだね。指輪って君が買ったの？　婚約指輪」

「ええ、まあ、ルビーのやつを」

カイトの出立直前、僕らはそんな会話をした。

「へえ、ルビーか。なんかヴァレリアっぽい誕生石だね。そう思わない？　なんかヴァレリアのイメージにぴったりだ」
「俺が思うことは、ダイヤモンドじゃなくてよかったってことですかね」
「彼女にだけ指輪を贈る？　それとも君も一緒にするの？」
カイトは微妙な顔をして答えた。
「一緒」
「すごい。おそろいの指輪か。じゃあ世間公認の婚約ってわけだね」
「高くついちまってもう……」
「有り金全部はたいた？」
「安物を買われても困ると男爵様に言われていましたので、まあ……」
いつもなら内心の気持ちをそう表情に出したりしないカイトなのだが、そのときは会話も滞りがちで、顔面蒼白に近いような感じだった。彼としてはかなりの金額を使ってしまったということもあるだろうが、自分が婚約するというのに、笑顔が一切出ない人間を僕は初めて見た気がする。
「何だよ、それじゃあまるで罠に嵌められたみたいじゃないか」
せめて励ましてあげようと思った僕は、笑って、上手いジョークを言ったつもりだったが、カイトはじっとり僕を見ただけだった。
そのまま蒼い顔をして出立していくカイトを見送るとき、僕は彼の背中を目で追いながら心の中でこう思ったのだ。生きて帰って来いと。勿論それは冗談だ。本当は、青ざめるほどヴァレリアと結婚するのが嫌なら、もうシエラのことが好きだと大声で言ってしまうべ

きだと思った。
言えないのがつらいところだということは分かっている。
これを機会にヴァレリアが正式にカイトの婚約者という位置づけになるようだ。それでも相変わらず彼女には虐げられることだろうが、確実に季節は変わっていたのだ。

「鉄の値段が上がっているのはいいことだね」

新聞の相場欄を見ながら僕は言った。

「アディンセル家の資産が増える」
「鉄ですか。きな臭いことがなければいいのですが」
「戦争の話は聞かないよ。貯め込みすぎないで内需を拡大するといい。領内に金をまわすんだ。ああ、南部の金鉱は結局陛下が押さえられたそうだね。旧バルフォア王国の。ほら、ウィシャート公爵が独占していた。あそこは直轄領からは遠いのに……」
「旧バルフォア王国と言えば、今もって独立運動が盛んだそうですね。辺境へ追いやった彼らの自治権を潰したのがトバイア公だったのでしたね」
「そうだ。でもそれは仕方がないんだ……、占領されてなお、連中はサンセリウスに反抗的だ。
トバイアは彼らを三等市民扱いしていたそうだが、僕はあの公爵のことは吐き気がするくらいに思うが、それについては仕方がないことだよ。我らが陛下に忠誠を誓わない連中を、サンセリウス人と同等に扱うことはできない。サンセリウス王の権威を否定する者たちに人権を認める必要もない」

フィエールは僕を見た。
僕は微笑した。

「酷いことを言ってるって、思うかい。でも意外と僕はこういう考え方をする人間だったんだよ……。
名門貴族の男子として、知らず知らずにそういうふうに教育されて来たんだから当然なんだけど、本当の僕は……、平民の生命なんか虫けらだと思うことに努力なんか要らない人間だったんだ。まして敵性国家の人間ともなればね。だからこれから先もこのやり方で行けると思ってる」

フィエールは静かに僕に賛意を示した。

「貴方様は面差しは私の叔母である母君様に、そしてご性格は父君様にそっくりだと言われておりましたが……、こうしてお話をしていますと、やはりギルバート様にいちばん似ていらっしゃるのかもしれませんね」
「それって僕が、残酷だってこと？」
「いえ……、でも誰かがその判断を下さねばならないものです。心を配って優しさを振りまくことだけが、正しいこととは限らない」

少し間があって、フィエールが話題を変えた。

「ウィシャート公爵家の件は、とても驚きました。
ギルバート様配下の諜報関係者の間では、オーウェル公子や周辺の詮索が本格的に始まっていたそうです。十六歳の公子様を陥落するための。
しかし、ギルバート様は身内にすらぎりぎりまでこの情報を明かさなかったようですね。本当に、大した方です」
「うん、そうだね……」

僕はそう言って、再び新聞に視線を戻した。
そこには最近連日のように新聞紙面を賑わせているフレデリック王

子の十七回目の生誕を讃える記事と、ウィスラーナ侯爵の処刑関連、それに不幸にもウィシャート公爵がその息子の手によって殺害された記事があった。それを静かに読みながら、一見するとまったく無関係にも思えるこれらの出来事が、すべて繋がっていたことを感じていた。

第１７０話　勢力図の刷新（３）

すべてのことは最初から、これから先延々と我が子の政敵となりうる甥のトバイア公が目障りでならず、フレデリック王子の地位の保証を将来に向かって磐石にしたい国王陛下の思し召しだったのだ。
陛下は正当性を巡って互いに反目を続けるフレデリック王子派の勢力を強め、ウィシャート公爵派の力を殺ぐために、公の配下の中でも有用な人間を新たに王子陣営に引き入れることをお考えになった。根こそぎ抹殺するという選択もあるのだろうが、殿下は若く、陛下は既に御高齢で、内乱に突入しかねない情勢を突破しきれるだけの力と時間が足りなかったのだ。
それに血筋の確かな壮年のウィシャート公爵と、妾腹の少年王子とでは、最終的に人々がどちらを新たな王として戴くかについても確信が持てなかった。そして兄さんをはじめとする諸侯はそれぞれが老獪だった。
だから陛下は待遇を約束する代わりに彼らにトバイアからの離反を工作し、兄さんたちは陛下からの要請と買収に応じて、もう随分前からウィシャート公爵を見限るその話を水面下で進めていたそうだ。
ウィシャート公爵に親族の娘だの、乳姉妹だのを取られていた経緯のある者は、当然ながら国王陛下からの呼びかけをひとつの機会と思ったことだろう。フレデリック王子の母方の血筋の悪さを承服しかねるという考えから公爵派の立場を取っていた者も、陛下の御意思を知った以上、最終的にはこのまま公爵側にいても利することがないと判断したようだ。
そしてそこで巻き込まれたと言ってもいいのが、西部国境のウィスラーナ侯爵だった。彼は国境領主としては残念ながら大変使えない男であったが、不幸なことに彼の名代となれる男兄弟がおらず、後継の男子を成してもいなかった。
臆病者と評判の侯爵本人の人格に対する国王陛下の個人的な心証、

少年王子の即位後の対外情勢への不安もあり、もとから早期挿げ替えが検討されてはいたのだそうだが、ここで陛下は奇策を思いつかれたのだ。

ウィシャート公爵派の主だった領主である兄さんたちを王子支持に引き入れ、その報酬として分配するための領地の多くを、陛下は御自分の直轄領を切り売りするのではなく、かねてより使えないと思っていたウィスラーナ侯爵を体よく排除し、ウィスラーナ家が所有していた土地を召し上げることで捻り出した。

けれどもそうしてウィシャート公爵派の諸侯に明確な恩賞が与えられてしまうと、発生する問題というのが、最初からフレデリック王子を支持していた諸侯が不満を抱くということになる。

これこそが政略と言ってしまえばそれまでなのかもしれないが、ウィシャート公爵を支持していた者たちのほうがかえって得をするというのであれば、当初より王子派であった人々の心に、後々禍根を残すことにもなるだろう。

そこで陛下は更に一計を案じられた。いや、それこそが今回の一連の問題における最大目的であったのかもしれないが、春先、ウィシャート公爵が突然殺害されたのだ。

つい先日、一国を揺るがした筆頭公爵家、その跡目のオーウェル公子による尊属殺害事件である。

父系を重んじる我が国では、父親殺しは主君殺しに次ぐ大罪であり、本人の処刑ばかりでなく他に後継者がいたとしても家自体が取り潰されてしまう事態となる。当主殺しと父親殺し、二重の意味のあるこの殺人を犯してしまったオーウェル公子は直ちに犯罪人として投獄され、ウィシャート公爵家は以後存続することが許されなくなり、断絶を余儀なくされることになった。

そしてこの件によって消滅することになったウィシャート公爵家の所有していた三十からなる領地は、すべて国家によって召し上げられた後、その一部が陛下の御意思によってフレデリック王子派、ウィシャート公爵派の主だった諸侯に分配されることとなった！

フレデリック王子とトバイア公による王位継承を睨んだ角の突き合わせ、それによる国内騒乱の予兆は、大多数が納得をする形でこうして一応の幕引きとなったのである。

しかしウィシャート公爵は表向きには、不幸にも父親に歯向かった未成年の公子の手によって突発的に殺害されたことになっているが、それ以前に一度誰かによる暗殺未遂が起こっている通り、すべては仕組まれていることなのだと思う。

だからたぶんオーウェル公子は父親殺しなどしていないような気が僕はしているが、彼は父公殺害の被告として処刑されるその期日が決まったことを、今朝の朝刊が伝えていた。

我らがハーキュリーズ王健在なり、これはそのことを諸侯に知らしめる大事でもあった。

その件について話をするべく、僕が新聞を持って兄さんの執務室を訪れると、春の日差しのように晴れやかな顔で兄さんは微笑んだ。

「ああ、恐ろしいことだねアレックス。父親殺しなどと……、あの公子様ならばいつかこのようなことをやりかねないとは思っていたが。残念だよ」

その口調に幾らか白々しさを感じるのは、僕だけではなかったろう。その証拠に、執務机の左側に立っていたジェシカが、一瞬苦笑いを浮かべたような気がする。もっとも僕としても、兄さんの本性はもう知っているから、今更無理して誠実そうにされても、もう昔のように清らかには思えなくなってしまっただけなのかもしれなかったが。

けれども人格形成の段階で両親を失い、六州の統治と領民の人生という重責を背負わされ、愛する女性は没収され、多感な年齢で悪意と陰謀の王宮に出入りするはめになったのだ。

当然だが、親なしの伯爵に過ぎない兄さんを庇護してくれる者はなく、若いことで信用されずに嘲笑される状況もあったことだろう。

それだけ酷い不安と重圧を受け続けていれば、どんな優等生でも性根が歪んでしまうという、典型例のような気がするが、それを誰が責めることができるだろうか？　少なくとも僕にはその資格はなかったのだ。

第171話　勢力図の刷新（4）

「オーウェル公子のことは……、彼は本当にトバイア様を手にかけたのでしょうか？」
「何故、そのようなことを思うんだねアレックス？」
兄さんがふと僕の目を見て真意を探りたい様子だったので、僕は主君である兄さんに対し、姿勢を正して真摯に応じた。
「いえ、僕は彼のことはよく知らないのですが、でも少なくともっと計算高そうな印象があったものですから。父親を殺せばどういうことになるか、そのくらいのことが……、見えなくなってしまうような事情でも、あったということなのでしょうか……」
僕は言いながら、しかし僕もまた極めて私情によって兄さんを殺そうと彼の寝室に向かった夜のことが思い出され、語尾が少し弱くなった。
兄さんは軽く肩を聳やかした。
「思春期男子の破壊衝動たるや激しく、ときに未成熟な理性を食い破るものだ。彼は気性が激しいからな、抑え切れないものがあったのだろう。……と、私も表向きには語っているが、ここはおまえにも話しておくか。
実際はおまえの推測通り、彼は国家によって排斥されることが決定したのだよ。公子の肩を持つならば、奸計に陥れられたというわけだ」
「陛下が、オーウェル公子を切り捨てられたということなのですか？」
「そうだよ」

涼しい顔で兄さんは言った。

「無実の父親殺しの嫌疑をかけられたと？」

「それは違う」

「では……？」

「アレックス。奸計に陥れられたと言ったので、おまえは勘違いをしてしまったようだね。しかしオーウェルは実際にその手で父親を殺害してしまったのだよ。

愚かな彼は……、残念なことにくだらん計略にあっさり引っかかった。君権によりウィシャート家が潰されると聞きつけ、父親の首を差し出して陛下に許しを乞おうとしたのだ。愚かなことだよ。謀反人を処罰して陛下に首を献上することとは訳が違う。父親殺しは我が国の根底思想を揺るがしかねない大罪ということも判断できん、可哀想な子供だったということだ。

そんなことをするくらいなら、まだフレデリック殿下の靴の裏でも舐めて見せたほうが、ましだっただろうな。全体を一言で言い表すとすれば、只それだけのことだ」

「兄さんは、それを知っていて彼を助けなかったのですか？」

僕が言うと、兄さんは意外そうな顔で僕を見たが、すぐに表情を戻した。

「そうだよ。アレックス、私は陛下に仕える臣下の一人だ。だから陛下に疎ましく思われている者の味方をすれば、その累を被るはめになる。

かつて我がアディンセル家が同じような立場にあったとき、ほとんどの領主は我らに背を向けた。不幸を伝染されてはなるまいという態度を取った。だがそれを責めることはできないのだ。我々はそれぞれが、多くの領民の命運を与りし守護者なのだ。誰かの失態の道

ずれにされるなどという間抜けなことに、巻き込まれるわけにはいかないのだよ。
オーウェル公子のことは私とて勿論哀れに思う、誰よりも哀れと思うが――、私には彼を助けられるだけの権力がない。かつて老王と親しく意見を戦わせることができた伯父と甥の関係、トバイア公のポジションにある者は今はない。
フレデリック王子もまた、出自の問題で未だ陛下の御前に伏するばかりの御可哀想な立場なのだ。これは、仕方がなかったと言う他はないのだよ」
「そうでしたか……」
兄さんは優しい顔で頷いた。
「すみません、僕は、兄さんのお心も知らず、オーウェル公子を助けなかったのかなんて、責めるようなことを言ってしまって……。兄さんだって、未成年の公子様を救えないことで、きっととてもおつらかったはずなのに……」
「構わないよ。アレックス。おまえは優しい子だな……」
「い、いえ、そんなことはないですけど……」
そして兄さんは僕を見て笑い、その眼差しに慈しみがあることを知って僕は少し目が潤んだ。兄さんはいつでもこういう目で僕を見ていたのだ。僕が兄さんに文句を言っているときも、鬱陶しいと思って邪魔にしているときも。
それを誤魔化すために僕は慌てて話を変えた。
「そうだ、兄さんは、来月にも侯爵ですね」
「ああ、そうだよ。我がアディンセル家の領地はこれで七つになる」
兄さんは頷いた。

「だからこれから忙しくなる。おまえも心しておきなさい。ウィシャート公爵家と運命を共にしなくとも済んだとはいえ、我らには未だ反王子派のレッテルが貼られている。陛下の信任を確かにするまで、しばらくの間はかなり厳しい状況に立たされることになったのだ」

「はい」

ウィスラーナ侯爵の失脚とそれによる領地分配の際、アディンセル家はウィスラーナ家が領有していたうちのもっとも重要な領地、つまり国境を新たに授けられることになった。

それによって兄さんはこの度新しく西部国境ランベリー領に付随する侯爵位を射止めることになったのである。

けれども兄さんは確かに国境を与えられ、そのために侯爵となることになった一見すると今回の一連の出来事におけるいちばんの受益者であり栄転にも見えるのだが、ひとつ見方を変えると、これは資源や資金の消耗の激しい国境という難所を、体よく押しつけられたということでもあった。

隣国フォインは長年の敵対王国であり、国民性は獰猛なことで知られていた。アディンセル家が反王子派だったことを理由に、監視のためという名目で引き続き中央軍の長期駐留があることも予想される。

そんな状況で、兄さんは昇格という大きな栄誉に見合うだけの忠誠心と、領地運営と国境防衛の両立という、高度な統治能力を衆人環視の中で延々と試されることになったというわけだ。

親から受け継いだのではない土地、しかも国境を与るということがどれほど過大な重責となるか、僕には想像もつかないが、戦時ではないと言って安穏としていられるこれまでの生活とは、一線を画する生活になるということだけは確かだった。

国王陛下はお髭を蓄えた只の老人ではなく、昔の時代を輝いていた

過ぎ去りし日の英雄ではなく、我が子を守るためならばなりふりの構わないことを、優雅にやってのける老練なる策士だった。
陛下が相手となるや、あのトバイア公もあえなく血の海に沈んで行った。
これらの一連の出来事において、誰が真に勝利者であったかについては、後世の歴史家の意見を待つまでもなく僕にも分かるような気がしたが、そうでなければとても国家君主など務まらないのだろうと思った。

第172話　大人になるということ

トバイアが死んだんだから、アレクシスを助けに行ってはどうか。
僕は兄さんと顔をあわせるとき、何度かこの言葉が喉まで出かかったが、どう考えても兄さんが僕に秘密にしようとしているアレクシスのことを、いきなり僕に言われるのには戸惑うだろう。
誰に聞いたと怒り出す可能性も高い。アレクシスが単に誰かの愛人になっているとしたって、誇り高い兄さんが自分以外の誰かに女を横取りされたなんて、かなり面白くないことだろうに、実際は……口に出すのも憚られるほど酷いことになってる。
ルイーズだって、あの夜僕が無茶なことをしようとしなかったら、このことはやっぱり一生口には出さなかったことだろう。アレクシスの名誉に係ることだ。
それでも、ここはやっぱり言うべきじゃないかとも思ったのだ。ウィシャート公爵家の領地だった場所は、現在無断で入り込みやすいことになっているだろうし、何処かの別荘に閉じ込められているであろう愛人が何人いるのやら知らないが、虱潰しに当たってみるくらいのことをしてもいいはずだ。
だから春風の流れ込む兄さんの執務室前の廊下を、逡巡と歩きまわったりしたが、会いたくもないときに限って後ろから追いかけて来るくせに、こういうときに限ってなかなか兄さんと出くわさなかった。それと言うのも彼が新たに拠点とすることになったウィスラーナ家の国境要塞ホリーホックに行っているからなのだったが。
兄さんはとても忙しいのだ。新たに増える役目や厄介事に、忙殺されているのだ。
それなのに僕があんまり用事に使われないのは、兄さんが留守にしているときに居城の責任者になるのは僕だからだ。僕は今だって兄さんの執務室に常駐して、当主の執政代行をしているのだ。という側面もあるが、現実には僕に臨機の対応を求められる役目や前線を

任せるのには、不安があるということもありそうだ。
ウィスラーナ家に仕えていた者たちの中には、アディンセル伯がロベルト卿を陥れたと恨みを持っているのもいるのだろうし、表向きの仕事以外にもやるべきことは山積だ。現に兄さんがジャスティンを含む十数名の騎士たちに、誰々の一族郎党に言いがかりをつけて罪科を課せとか、逃亡した誰それを指名手配しろとか、物騒なことを指示しているのも聞いた。
そういうのは、恐らくウィスラーナ家に特に忠誠の高かった者たちなのだと思う。言いがかりで罪を着せた後に兄さんが何をするつもりなのか、僕にだってだいたい想像はつくのだが、兄さんはどうも僕がまだそういうのに耐えられないと思っているらしい。それで、どうせ僕はもうじき王都に行くので、その準備でもして引っ込んでいろということになっていた。
兄さんが全然戻って来ないということは、ルイーズもまず城内に見当たらなくて当然で、アレクシスのことを知る当事者が二人ともいないとなると、僕は廊下に座り込むしかないのだった。
執務室前には警備の騎士が詰めているので、僕はそこから少し離れた廊下の壁に背をつけて、静かに息を吐いた。荷物の準備はだいたい終わっている。廊下の隅には春の花々が飾られ、そこここの開け放たれた窓から吹き込む豊かな春風が心地いい。
カイトがいればいろいろ相談ができるのに、友だちが少ないのはこういうときだけはちょっと困ったことだった。
たまにハリエットが僕のところに来ることはあるが、男と握手も拒むようなのに、アレクシスの話なんかできるわけがない。もしハリエットにそんな話を受けとめられる器量があったとしても、友だちじゃないので打ち明けるはずはないのだが。
友だちだとしたって、やっぱりあんなことは言えないだろう。僕はカイトにもあれは話すことはできない。
そう思って、ふと気がつく。兄さんたちがアレクシスの存在を僕に隠しているのも当然だと、改めて問題の難しさにため息が漏れた。

僕はアレクシスが最初からいなかったようなことになっていることには、最初は幾らか疑問を感じてもいたのだ。兄さんの周辺の者たちは、当然ルイーズに姉がいたことを知っているはずなのに、彼女についてはタブーのように語られることがなかった。

だいたいの人の間では、アレクシスがジェシカに処刑されたことになっているのかもしれない。それとも公爵に没収されたところまで内情を知っている者もいるのかもしれないが、どっちにしたって結構重要なことのはずなのに、少なくとも僕の前で話題にされたことは一切ない。

売られた挙句に誰からも存在しなかったことにされているアレクシスが、不憫すぎると思っていた……。

でも僕にアレクシスがいた話をするのは、考えてみればとても大変なことだ。「おまえの母親はアレクシスと言うが、彼女はもう死んでしまった」という作り話で通すことだって、便宜上弟としている僕に話すとなれば子供相手のことだ、いろいろ混乱をきたしたことだろう。僕は間違いなくアレクシスについて知ろうとしただろうし、となればお墓がないと騒ぎ出すのは時間の問題だ。

何よりもし僕が兄さんの立場なら、自分の子供にあんな悲劇なんか死んでも打ち明けないだろう。これは、もはや名誉以前の問題なのだ。

でももし僕なら、忙しいのを縫ってでも、きっと愛する女を助けに行くのに――、なんて、居城内の離宮にいるタティのことすら救えない僕が？　子供じゃあるまいし、綺麗事は大概にするべきだ。

トバイアの愛人なんて、あの汚らわしい公爵が死んだ時点で、抹殺されているのが関の山だ。兄さんはきっとそうご判断されたのだろう。何せ夫人や公子が、そのまま女たちを生かしてはおかないだろう。彼らにしてみれば、アレクシスたちなんていうのは、それまで夫や父親を誘惑し、散々妻子である自分たちを苦しめてきた憎い女どもということになる。

世の中は、勧善懲悪とはいかないものだ。相手が神の敵対者でもな

い限りは。
そしてこんな立派な考え方ができる自分に、僕は密やかな誇りを感じていた。つまり、男の強さを感じていたのだ。どんな場合でもアレクシスより領主としての仕事や立場を優先する兄さんを正しいと感じ、僕の選択していることもまた、間違いではないのだと確かめた。
兄さんのやることに間違いなんてないのだ。
だから僕は尊敬する彼の模倣をして、一人前の男としての生き方を、少しでも早く身につけていかなくてはならない。
男とは、こうでなくてはならないのだ。
だからアレクシスを優先しろとか、二度も彼女を見捨てる気かとか、あんたは自分の力だけで成功を勝ち取ったつもりなのかとか、女を見殺しにするなんてそもそも人でなしのすることだとか、兄さんに歯向かって、ろくに周りを見渡しもせず感情だけで女々しいことを言うなんて、弱虫のすることだ。
廊下の向こうからジェシカと、引き連れられているフィエールの姿が見えた。
ジェシカは僕に気がつくと、慣れた動作で敬礼をしてから僕に執務室に戻るように言った。ジェシカは滅多に僕に意見はしないが、伯爵様の代理がこんなところで何をのんびりしているのか、という彼女の厳しい意見がその視線から感じ取れた。そして急ぎ足で兄さんの執務室に入って行ってしまった。
急き立てられたフィエールは、すぐにその後を追おうとしたが、ふと、足を止めて僕のところに戻って来た。
頭の寝癖や服のしわには気がつかなくても対応は律義なこの男は、僕に敬礼をし忘れたのを、やり直そうとしたのだろうと思ったのだが、彼は屈み込んで僕に言った。

「大丈夫ですか？　目が死んでいらっしゃいますけど」

第173話　君のいない人生（1）

いったい何が不満なんだと、世の中の男たちは言うだろう。
僕だって当事者でなかったならば言っただろう。
目の前にいるのは素晴らしい美人だ、気がつかないようにしていても、シエラが歩けばかなりの確率で男たちが振り返る。シエラに注目し、羨望と妬みの眼差しを僕に向ける。ぽかんとだらしなく口を開ける者もいる。こういう体験は兄さんで散々味わっているのだが、その男版は非常に胸がスカッとする。どの年代の男もシエラには特に親切だ。棒切れを持って外で遊んでいるような少年たちですらシエラには見惚れているし、年配者たちもシエラをみつけると嬉しそうにする。兄さんは着せたら似合うだろうなんて言ってシエラに宝飾品や衣装を買ってあげているし、となればその周辺の奴らだって言わずもがなだ。赤楓騎士団内には、シエラのファンクラブが発足されたなんて話まで聞こえて来ている。
そして彼らが思っていることは手に取るように分かる。いったいどうやってこんな美人を手に入れたんだ？　上手くやったな。そのとき僕は大抵とても鼻が高い。連れている女で男の価値を測る人間は多いからだ。僕は上等な姫君を自分の女にしている上等な男と思われるので気分がいい。
不満があるわけじゃないのだ。
僕はシエラを断れるような、そんな贅沢が言えるような顔をしてるわけじゃない。これ以上の女は自分の人生には望めないだろうと、急いで掴まえておこうと思う心情だって分からないわけじゃない。
僕は執務机に頬杖をついた。僕の机より数段年季が入った重厚な机だった。慣れない机の上は片づいていて、今は特に物珍しい物は何もない。
間もなく横にいたシエラが同じようにして、頬杖をついて僕に微笑んだ。彼女は別の場所から椅子を持って来て、机の横のところに座

っていた。

「お暇ですね？」

「うん、まあそんな日もあるよ。今日は雨だし」

僕らはその日も兄さんの執務室にいた。広く、そして重々しい部屋だ。かつてお懐かしい父上が使い、その前の伯爵が使い、というように代々のアディンセル家の当主が使っている部屋だが、何と言っても目に焼きついているのは先日のゲイリー一味の虐殺現場としてである。

この部屋はしょっちゅう、ああいう兄さんの横暴の犠牲者たちが死んだり血だらけになっている場所かと思うと、ちょっと具合が悪くなるのだが、意外にも室内の空気は清浄だった。ルイーズは魔術師でありながら神聖魔法を扱える。怨念に対する魔法による排除行動の中でも上級の手段、エクソシストのような仕事ができるというわけだ。

机の引出しにラブレターの類でも入っていないだろうかと、調べてみたい気がしていたが、人の机の中身を見るのはちょっと気が引けるのでやめておいた。

兄さんの主要な部下たちは出払うか、ホリーホックに行っているので、今は室内には特に誰もいない。僕に意見したり、怒る人間が誰もいないから、シエラが遊びに来るというようなことになっているのだが。

窓の外には、春雨がしとしとと降っている。

兄さんが……、赤の他人が生まれ育ったホリーホック城に出入りしている気持ちはどうか、なんて聞けるはずもなく、僕らは指輪の話をした。先日、おそろいの指輪は結局宝石商の用意がなくて買わなかったのだが、シエラはどうもそういうのが欲しいようだ。

指輪が欲しいなら何個でも買ってあげることは構わないが、おそろいというのが少し躊躇われた。

恋人や夫婦でもないと、おそろいの指輪なんてしないものだ。

「シエラは誕生石はトパーズ……、だっけね」

「ええ。でも私、本当はエメラルドがいちばん好きなの。だから……、守護石にできなくて残念」

「したらいい。何でも好きなのを買ってあげるよ」

「嬉しい。そうだわ、ねえ、アレックス様はどの宝石がいちばんお好きですか？　ギルバート様は、ムーンストーンがいちばんお好きなんですって」

「ムーンストーン？」

「意外だったわ、だって、ギルバート様はやっぱりダイヤモンドだと思ったの。ゴージャスな彼にはいちばん似合いますし」

「へえ、兄さんが……、そんなこと、彼はとっくに忘れてると思ったのに」

「何をですか？」

「いや、何でもないよ。僕もそうかな、ムーンストーンがいちばん好き……」

「まあ。アディンセル家の男性は、ムーンストーンがお好きなのね」

シエラは少し考え深げにして、それからまた微笑んだ。

「ムーンストーンは旅人を護る石なんです。それにムーンストーンには、遠く離れた恋人を結びつける力があるって言われているんですよ。愛する人に持たせておくと、お月様が二人を引きあわせてくれるの」

今回の国内騒乱の一端として、実の兄を処刑されたばかりのシエラだが、日中、その振る舞いは僕が心配していたよりもずっと元気だった。

きっと彼女なりに周りに気を遣っているのだと思う。ロベルト候が

その地位を追われ、処刑されてしまったことによって、彼女は侯爵家の姫君という身分を失ってしまった。

だからと言ってここでのシエラの扱いは僕の婚約者待遇なので、暮らしに別段変化があるわけではなかったが、生まれてこのかた姫君として生きて来た彼女にとっては、候女でなくなってしまったということは、自分の中の大切な人格の一部をもぎ取られてしまったような、酷い喪失感があるに違いない。

そして何より実兄を失ったダメージは、想像を絶するものだっただろう……、だからきっと痩せ我慢をしても、毎晩ベッドの中で泣いているに違いないと思うが、僕はシエラの寝室に押しかけてまで彼女を慰めたいとは思わなかった。

何処に連れて歩いても自慢できる美しいシエラのことを、妻に迎えること自体にそれほど抵抗があるわけじゃない。

それが主君である兄さんのご意思だと言うなら、僕はそれに逆らうつもりはなかった。でも自発的にこの関係を進める気持ちにはなれない。

まず何よりもタティのことがいつも胸の中にあって、他の女と楽しくやっていこうなんて気持ちには到底なれなかった。ルイーズはアレクシスから人生を奪ってしまったと言って、その後の自分の人生に自分で大きな制約をかけてしまう暮らしをしていた。それが人として正しい行いだとするなら、僕もまた、そうするべきではないのかと……。

それにカイトがシエラを好きだということも、いつも頭の隅っこに引っかかっていた。カイトは僕に遠慮して、気持ちさえ打ち明けようとはしないのだが、好きな女が他の男の物になるのを目の前で見せつけられる苦痛とは、どれほど計り知れないものだろうか？

僕はそうした苦痛をカイトに与えるのは嫌だった。トバイアがやっていた凌虐と、同じことではないとしても、同義に語られていい範疇の横暴ではないだろうか。

第１７４話　君のいない人生（２）

そもそもこの結婚とは、国境ランベリー州に住まう貴族や民衆が支持しているであろうウィスラーナ家のシエラをアディンセル家に迎えることで、新領統治にとって利益があるかもしれないという打算によるものだ。

とは言えシエラが当主の妻として迎えられないという時点で、アディンセル家における彼女の扱いが軽いということに、少し頭のまわる者なら気づいてしまうだろう。シエラは言わばいれば政略の足しになる程度だった。

ろくに侍従や魔術師も連れずにアディンセル家に放り込まれた時点で、そして僕の秘書官なんてさせられていた時点で、ロベルト候の人望のなさ、そして彼女が大した政治的影響力を持たない姫であることはよく分かる。

オーウェル公子の持論ではないが、要はシエラは兄さんに子産みを期待されたということなのだ。我が兄ながらやることがいちいち冷酷でそろそろ感想も出ないほどだが、彼女は明確に血筋と美貌だけを買われた姫なのだ。兄さんがその点を評価しなかったら、ロベルト候失脚の時点で、今頃はシエラはもう少し扱いが悲惨になっていたかもしれない。

それを思えばシエラが僕に懐いているのは、そうした我が身の危さを、彼女としても薄々感じ取っているのかもしれないなどと思うのは穿った見方だろうか。

この国では父親や夫、せめて男兄弟がいない姫君が落ちぶれるために労力はかからない。

でもシエラの無邪気な微笑みを見ると、すぐにやっぱりそんな暗い計算はないようにも思えた。

今日の彼女は裾に刺繍のある可愛い空色のチュニック姿だった。もしそうなら、それでも全然構わない気持ちでよく青い服を着るのは

フレデリック王子のファンなのかなんて聞いてみると、シエラはにっこり笑ってこう言った。

「ええ、フレデリック様の格好を真似るのは、ちょっとお洒落な人たちの間で流行していることだから」

「そうなの？」

シエラはしたり顔で頷いた。

「だって、ローズウッド王家の方は本当に見目麗しいでしょう。フェリア様のときは、国中の女の子が彼女のスタイルを真似たのよ。王女様に嫉妬する、一部の高い位の方たち以外はね。フレデリック様は王子様だけど、やっぱりそういう意味で人気があるみたいです。彼は気位の高い公女様方にも、割と好かれているみたい。

それにフレデリック様は、ある種の男の人にももてるんですって」

「ある種の男の人？　あ、ああ、なるほど……、それは殿下も大変……」

「それに勇気を貰いたくて」

「勇気？」

シエラは頷いた。

「フレデリック様は、絶対弱音を吐かない強い人だから。私、お兄様が陛下に蟄居を命じられて、アディンセル家に行かなくてはいけなくなったとき、どうしていいか分からない気持ちだったの。本当に……、泣きたい気持ちで……、貴方がいるって知らなかったときのことよ。

だから……、フレデリック様みたいになれたらいいと思ったの。だって彼は強くて、凛々しいでしょう。だからあんなふうに私もでき

たらって……」

それから少しフレデリック王子の話題になった。シエラがどうも殿下と面識があるらしいということは、何となく察していることだったのだが、憧れの王子様との交流の自慢でも飛び出すかと思いきや、意外にもシエラの返事は芳しくなかった。

「いいえ、全然親しいわけじゃないわ」

シエラは少し眉を寄せ、殿下と親しいのかという何気ない質問に対するものとしては、随分頑なな反応をした。

「以前に、ちょっとお会いしたことがあるだけ」

「ロベルト様が怒られたって、前に言っていたね」

「それは……、ほんの一度だけです。

フレデリック様は、お兄様のことを思って叱ってくださった……、でも彼はいつだって完璧な優等生だからなのよ」

「ふうん、やっぱりフレデリック様って優等生なのか。そんな雰囲気はあったけど」

「彼は教科書みたいに完璧なの。嫌味みたいに」

シエラは呟き、それからそれをすぐに自分で否定した。

「……いいえ、完全無欠、……でありたい人なの。

でもそれでも彼は完璧よ。理想が高すぎるのよ。フレデリック様はどんなことでも人よりよくお出来になるの。いつだって、国王陛下が望む通りの、強くて完璧な王子様だわ。

それなのに思い上がりなんて全然ないし、私、彼のことが大好きだった……」

「人格者？」

「ええ、そうです。フレデリック様は絵に描いたような、お手本みたいな人格者。
彼は私より年下だけど、本当にしっかりしているの。私のことも、誰のことも、全員纏めて頼って来いって、そういう御性格の方です。私、彼を見ていると自分がとても恥ずかしくなるわ。
彼は出来がよすぎて、理解者ができないのかもしれない。いつも強くて、何でも自分で抱え込むからよ。そして私は彼を理解してあげられなかったの。
彼が気持ちの弱い、すぐに挫けてしまう弱くて優しい人間のことを、理解できなかったように……」
「彼と何か、あったの？」
シエラの表情や顔色が、いつもと比べるとまったくおかしかったので、僕はたずねた。
「いいえ。何もないわ、何も……」
するとシエラは今度は突然明るい声を出した。
「フレデリック様はね、いつも私を年下みたいに扱おうとするの。まるで私の保護者みたいに。おかしいの。まだ私より背が低いときからそうよ。それによく気取るのよ。仕草とか」
「ああ、そう言われてみれば去年の夜会でも、気取っている感じはあったような気がするな。
でもそれってたぶん、殿下は背伸びしたいんじゃないかな。僕にも昔、そういう時期はあったものだよ。自分は大人だって何とかして主張したくてさ。彼はまだ若いんだね。それともしかして君に」
「ねえ、もうこの話題は嫌だわ。フレデリック様のことなんて」
不意にシエラが言った。

「ああ、うん……」
「もっと違う話をしましょう。私たちの将来のこととか」

第175話　君のいない人生（3）

「将来？」
「私、結婚をしたら男の子を二人と、女の子を一人は欲しいの」
「えっ、ああ、そうなの……？」

いきなり言うので、僕は面食らった。
シエラは勿論純粋な意味で言っただけに違いないのだが、そんなことを言われるとどうしても未来の家庭像よりは、その作業工程を思ってしまうどうしようもなさは、長年カイトの下ネタ話を聞かされ続けた条件反射に違いない。

「それは賑やかだね」

僕は愛想笑いをした。
それからアディンセル家に纏わる呪いについての話を、そういうことをする前にシエラにしておかなくてはならないだろうと思った。
子供はたぶん一人しか望めないし、生んだら君は死ぬか、確実に寿命を縮めることになると。
シエラはそれを受け入れてくれるだろうか？　それとも言わないほうが、シエラの精神衛生上いいのかもしれない。
そして僕はこうやって、結局女性を不幸にする生き方しかできない悪い男なのだ……。

「私のお兄様もアレックス様も背が高いから、きっと男の子は背が高くなるわ」

思えば僕はタティとこんなふうに子供の話なんてしたことがなかった。

僕らに求められていたのはとにかく男子誕生限定だったし、タティは男子を生むのだと一生懸命になっていたことが思い出されてつらくなった。ほとんどの人たちが、タティがいつ妊娠するかなんて下世話なことに興味津々だっただろうし、領主に男子を産めと命令されたも同然の環境下で、酷いプレッシャーがかかっていただろう。それなのに、僕はそういうことも理解してあげていなかったのだ。子供が出来たら楽しみだなんて、単純に気楽に考えていたが、それでなくても女性にとってお産は生命がけのことだった。実際に生命を落とす女性も少なくない。タティの性格では、それ自体をどれほど恐れていたことか。

「アレックス様？」

僕の優しさはいつも上辺ばかりだった。

「私の話、つまらなかったですか？」

気がつくと、シエラが不安そうに僕の顔を覗き込んでいた。
僕は急いで言い訳をした。

「いや、そんなことないよ。ただ子供の話って、ちょっと突飛で……、ほら、僕はまだ子供を持ったことなかったし。想像がつかなくて」

「いいえ、私、今はカイトさんの婚約者のお話をしていたのよ。この間、彼女が私のことを恐い顔をして睨んだことを話していたの……」

「えっ、そうだったっけ……」

「アレックス様、私のお話、聞いてくださっていなかったの……？」

シエラは不満そうに僕を見ていた。

僕は笑って誤魔化した。

「そうじゃないよ。えっと、彼女はヴァレリアって言うんだ。知ってるかもしれないけど。彼女はカイトの義理の妹で、今度から正式に結婚相手になったのかな。きつい性格しているし、最悪に自分中心だけど、悪い娘じゃないんだ。何処が悪い娘じゃないかって言うと、つまり……、今はちょっと思いつかないんだけど、黙っていれば外見はキュートだし、それに、たぶんそれほど悪人ではないはず……」

「誰か他の女性のこと……、思い出していらっしゃったの……？　タティさんのこと……、思っていらっしゃるのかしらって……」

シエラはうつむき、頼りなく微かな囁き声で言った。

「えっ、どうして？　そんなことないよ。全然そんなことない。僕は今、ずっとシエラのこと考えてた。夢中だよ。君があんまり美しいから」

僕は自分で我が耳を疑うような、すごい出まかせを言ってしまったことにはっとした。

確かにシエラは文句なく美人だし、ふとした瞬間に見惚れてしまうことを否定はしないが、今は完全にタティに焦点がいっていたのに、これではまるでデート中に別の女を口説くためのプランを立てている何処かの節操なしのようではないか。

「まあ、それは本当ですか？」

「勿論だよ。まさに美貌っていう言葉がぴったり。だからヴァレリアが君を睨んだのだって、たぶんその線じゃないかな？　つまりカイトがそう、君にその、見惚れてしまうんじゃないかって心配にな

ったんだよ」
「まあ。ヴァレリアさんはそんなことを思っていらしたのね……」
「美しいって罪だね」
「嬉しい」

でもシエラがたちまち機嫌を直して笑ってくれたので、よしとした。どうやら女性は外見を褒められることが、僕が思っている以上に好きなのだろう。それともシエラには、やっぱり自分が選ばれた美人だっていう自覚があるのかもしれない。
それは別にどっちでもよかったが、僕はシエラが思った以上に喜んでくれることに気がついて、それからずっと彼女を褒めた。

「君はとっても綺麗だね。一緒にいると、僕なんかじゃ釣り合わない気がするくらい」
「そんなこと。アレックス様はお世辞が上手すぎます」
「本当のことだよ。シエラはとても可愛い」

僕が言うと、シエラは嬉しそうに両手で頬を押さえて恥じらった。僕はその様子を笑顔で眺めていた。特に楽しくはない……、わけでもない。彼女はとても純粋だったし、やっぱり美人の女性を見ているのは楽しいことだからだ。
でも本当に僕が彼女のことでいちばん気に入っていたのは、外見の美しさとか、そのまだ何処かあどけない様子とか、可愛らしい性格なんかではなくて、名前だった。
シエラは、シェアと名前の響きが似ていた。だから僕はその名前を口にするとき、少しだけときめいた。
僕は男なので、手の届く範囲にこんな美人がいるのなら、本音を言えばやっぱり多少は下心めいたことを思うこともある。僕が今ここでシエラにキスしたら、このうぶな少女はいったいどんな反応をするだろうかと、そんなことを考えてみる瞬間があることを否定はし

ない。

シエラは悪い選択肢じゃない。僕らが結婚したら、清純な彼女はきっと素敵な良妻賢母になってくれるだろう。生まれて来る子供は、きっと綺麗な顔をしているだろう。政略婚とはいえ僕に好意を持ってくれている彼女は、恐らく僕を大事にしてくれるだろう。だから僕はたぶん、申し分のない家庭を持てるはずだ。

それでも僕は恐れていた。歳月を経て年を取り、ずっと後になってから、僕が本当に欲しかった女性は彼女ではなかったことに気がついて、途方に暮れる瞬間があるのではないか――。

そして今なら何となく理解することができる。

幼い時代の幸福な思い出だけで生きていくには十分だと言って、何が何でも結婚から逃げまわっている兄さんの心境を……。

第176話　夕暮れロマンティシズム（1）

雨が上がった後陽が差し、それから夜の帳が降り始める時刻となった。

四月の日の長さは、まるで真冬の頃とは別の国にでも滞在しているかのような錯覚を覚えた。

元ウィシャート公爵家の領地は広く、全州合わせると軽くそれなりの体裁を保つ一国に相当する面積を誇っている。トバイアの発言力、また、彼の力だけで旧バルフォア王国の反乱を捻じ伏せることができていたのは、そこいらの小国以上の税収、人的資源、軍事力をあの公爵は持っていたからだ。

その何処かにある別荘となると、僕が無断で入り込んでアレクシスを探しに行くには、随分時間を要しそうだ。ハリエットを足に使うとして、何ヶ月かかるか分からない。僕は来月から王都で陛下に仕える身なのにそんな時間の猶予はない。そして兄さんの許可がなければルイーズも使えない。

兄さんは今夜は女と過ごすため、僕とは夕食を取らないそうだ。ウィシャート公爵夫人が夫の愛人を生かしておくお人好しとも思えず、アレクシスが無事でいるとは僕だって思っていない。だけどそれをきちんと確かめるということをしないまま、別の女と逢瀬をする神経が僕にはどうしても分からない。

たとえアレクシスの誕生石を憶えていたとして、結局彼は人でなしだ。そう思っていたのに、ふとみかけたその晩のデート相手と思しき女の後ろ姿が、可憐な美しい金色の髪をしているのを見て、僕は何となく理解できた気がした。

今の僕にはもう、この不誠実だが孤独で哀しい男の人生を責めることはできない。

彼はきっと今夜もアレクシスと出逢うのだ。彼女に似たような女に贅沢をさせて、微笑みかけ、愛を囁く。大人びていたとはいえ、さ

すがに子供だった当時の彼にはしてやれなかった極上のエスコートを、彼は罪の清算のように想像のアレクシスに与え続ける。清楚で従順なアレクシス。中にはその振りをしているだけの女もあるだろうが、そこは兄さんとしても織り込み済みだろう。

アレクシスとは合理主義者の彼の中に混在するロマンティシズムだ。彼はこうしてアレクシスと何度も何度も出逢いを繰り返す。虚しい行いだと自分でも分かっているだろうし、その無意味さに気がついて自嘲する朝もあるだろう。

それでも、世の女たちを惑わせるアディンセル伯爵が、実は金色の髪のアレクシスの幻影に惑わされ続けているのだ。

皮肉にも彼の人生は今でもアレクシスに支配され、たったひとりの愛する女を求め続けるさすらいの人生でもある。美しく優雅な伯爵。もし歯車が狂わなかったら、今頃はこの城内に彼の求め続ける人生が存在していたのだろうか。

ルイーズによって見せられたあの過去の不運な出来事が、もしうまい具合に何ひとつ起こらなかったなら、今頃はどうだっただろう。父上の年齢は仕方がない、兄さんはいずれにしても若い頃から重責を背負うことにはなっただろうが、それでももし、いつでも彼の傍にアレクシスが微笑んでいてくれたとしたら。何事もなく、伯爵妃となった彼女が傍で兄さんを支えてくれていたとしたら。

何となく、今の兄さんからは想像もつかないような誠実な男がいるような気も、しないでもなかったのだ。生涯アレクシスひとりでいいなんてことを、きっぱり騎士仲間たちに公言してしまうような恥ずかしい男が、今夜も愛する妻と二人きりのディナーを楽しんでいたかもしれない。

お母さんがいるというのは、いったいどんな感じなのだろう……。

もしアレクシスが今ここにいたとしたら、ルイーズみたいなのが僕のお母さんということになるのだ。性格はだいぶ違うと思うが、まだとても若いから、僕はドキドキしてしまうかもしれない。

そしてうっかり二人きりのディナーに近づいて、僕は兄さんに威嚇

されるのだ。そんな有り触れた日常の様子が、僕には想像することができた。

「いいかアレックス」

テーブルに近づいた僕を追い払うべく、兄さんが怒り出す。

「おまえが子供のうちは、仕方がないからアレクシスをおまえに貸してやっただけなのだ。だがもうそうじゃない。二十歳にもなってまだ甘えようとはいい度胸だ。受けて立つぞ」

僕は当然抗議する。

「何だよ、そうやって何でもかんでも勝負しようとするなよ。僕の母上だぞ」

「その前に私の妻だ。おまえはおまけだ」

「違うよ」

「煩いぞ。おまえも男ならたまには外食のひとつもして来い。夫婦の時間を邪魔するな」

「けちだな。僕もまぜればいいのに。僕もお腹がすいたんだ。僕が可愛くないのか？」

「アレクシスの次に可愛いぞ。だがデートが優先だ。向こうへ行っていなさい」

痺れを切らした兄さんが、僕を追い払うべく手を振る。僕は兄さんの態度に腹を立て、アレクシスの席へ行って……、その辺りは上手く想像できなかった。お母さんなんて、いったいどういう反応をくれるものなのか、僕には分からないからだ。アレクシスのこともよく知らない。ルイーズの記憶の中ではとても内気な様子だったが、僕にどんな言葉をくれるのか、想像することはできなかった。

だからそこは思い切って飛ばす。僕はアレクシスのお皿から果物か何かを貰って、兄さんに勝ち誇ってみせるのだ。挑発に乗って、兄さんは追いかけて来るかもしれない。それを見てアレクシスは笑っているだろう。

家族が誰も欠けていない、至って平和な日常。

そんなふうに、きっと他愛ない毎日、だが今よりもう少しだけ幸福な毎日が、続いていたに違いない。

すべてはもはやどうしようもない、取り返しようもない未来ではあったが、そういうことを……、もしかしたら兄さんも夢見ているのかもしれない。ひととき泡沫のごとき甘い夢を、アレクシスに似た女の向こう側を眺めながら。どんなに大変でも、アレクシスが傍にいてさえくれたら彼女と築いていけるはずだった幸福な未来を。

もっとも、いつも誰か別の女の身代わりにされている女の哀れさを、まったく考慮しないのは兄さんらしいと言えばらしいのだが。

僕は息を吐いて頬杖をついた。

カイトが留守なので、僕には他に遊ぶ相手もいないし、夕暮れ時に自分の執務机についたままぼんやり過ごしていた。

今はシエラと二人で夕食を過ごしたい気分じゃない。それに今日は随分一緒にいたので、解放されたいという気持ちが強かった。

彼女は可愛いし、純粋で、優しくて、しかも美人だ。そんな娘が無邪気に僕に甘えてくれるのは嬉しいけれども、僕は上手く安らぎを感じることができない。だから何か口実を作って夕食の時間を避けようと思うのだが、上手い言い訳が思い浮かばない。

婚約者としては完全に失格だが、それでも構わないのだ。僕はそうでありたかった。シエラに好かれないようにするための努力なら、その逆よりも僕はきっと喜んで取り組むだろう。

徐々に暗くなって行くオレンジ色の窓の外に目をやりながら、少しのあいだ感傷に耽った。

若い僕は、思い出して胸が痛くなるような歳月の経過など味わったこともないのだが、大人たちがしばしば瞳に覗かせるそうした切な

い情景を、僕も既に胸の奥に持っているかのように、静かに暮れなずむ春の景色を眺めていた。

僕はまだ、誰にも何処にも行かないで欲しいと思うのに、人生は変化していく。

僕の人生に登場する人々のうち、これから先もずっと変わらずに僕と係わってくれる人が、いったいどれだけ存在しているだろう。

僕には最初から両親がいなかった。祖父母もなく、家族は兄さんだけだ。兄さんだって世間で言えばまだ若い。三十代前半の彼には、さすがに老いの兆候は見られない。家族が年老いていく悲しみを、僕は味わったことがなかった。でもいつか兄さんが年を取ったら、それとも年を取ってしまう前に、何かの事情で死んでしまうことがあったら。

僕はいったい誰を頼って生きていったらいいのだろう。兄さんが引き受けているすべての責任を、果たして僕に引き受けることができるだろうか？

ルイーズは以前、僕のことを兄さんのスペアだと言った。それは何も、長兄がより重要で価値があるという意味だけではなかったのかもしれない。

いざというとき、僕はいつでも兄さんの代わりができるようになっていなければならなかったのだ。二十歳の男なら、全部は無理でも、もう彼の補佐くらいはできていてもおかしくはない年だったのに、僕はまるで姫君のように無責任で、無条件に保護され、兄さんに頼りきった暮らしをしていた。

自立しようなんて思ってもみなかった。自立できていると思い込んでいたからだ。世の中のことをだいたいは分かっているつもりになっていた。そして周りの人間は誰もが僕より頭が悪いと思っていた。

しばらく何となくそうしていると、ノックがして、既に人のいない室内に誰かがやって来た。クライドだった。

彼は人懐っこく笑って、もしお暇でしたらと前置きした上で、僕を夕食に誘った。

第177話　夕暮れロマンティシズム（2）

クライドは僕の王都赴任にあたって、まだ決定ではなかったが、僕について来ることになるような話になっていた。
しかし僕に仕えるというのは、赴任先が王都であるとはいえ、アディンセル家的には当主から離れる左遷扱いになる。だから何処の家の当主も、それを敬遠したい空気だった。
自分が陛下にお目通りできる立場になるわけでもない、所詮は見知らぬ土地で、ろくに部下もいない状態で、ひたすら若い次男の裏方に徹する仕事に過ぎないからだ。
だが自分が行くのは嫌だが兄さんが可愛がる僕に自分の子弟なり手下なりをつけて点数を稼ぎたい動きは大いにあって、その辺、牽制みたいなことが何度も行われていた。
で、結局フィーロービッシャー家のクライドということになりそうなのだった。彼は子爵家の次期当主だが、姉が兄さんの腹心をやっているため、隠居している老子爵に代わって現状誰もが彼よりジェシカを優先して話を通す。最初はクライドもまた若くて信用されないという面もあったのかもしれないが、それにしたって今となってはそれほどでもない。いつまでも姉の手下扱いさせられる彼に対する配慮もあったのだろう。
クライドは人当たりが良好で、僕の補佐をする体裁上の身分もあり、ほどほどの経験もあって、まあ押しつけられたのが結局なのだが、そういう話だった。
水たまりの残るサウスメープル市のメインストリートを歩きながら、僕の後ろを数名の騎士がついて来ることに、彼は感心していた。

「子供の頃は二十名以上ついて来たんですか」
「そう。ぞろぞろと、蟻みたいにね」

それから僕は、カイト以外に友だちがいないとは言わなかったが、同年齢の奴らが苦手だという話をすると、クライドもそれに同意した。

でも本当は大して同じ意見ではなさそうだと思った。僕は彼が社交的な人物だと知っていたし、彼の話題にはいろいろな人間がひっきりなしに登場するのに事欠かないからだ。

でも他愛のない話をしているうちに、彼のコンプレックスは何となく読み取れた。ジェシカに対するコンプレックスが……、彼女は正妻の娘とはいえ女だ。クライドは愛人が生んだ息子。男子だからフィーローイビッシャー家の実権はいずれ彼に譲り渡されることになる。それでも、ジェシカは十三歳のときから兄さんに仕えていた。

ジェシカはその年齢帯のすべての名家の男子を抑えて、アディンセル家の嫡男である兄さんの側近に抜擢されるくらい優秀だったのだ。年齢が上がるにつれて、男子より明確に体力面が劣ってしまう女騎士が登用されるには、家柄と武芸に加えて何か付加価値が要求されることが多い。これはもう、彼女がいかに優秀だったかが分かる話だろう。

しかしクライドは、その前の世代に起こったこと、つまりフィーローイビッシャー家の部下であるマイヤーズ家のギゼル様をアディンセル家に差し出した見返りとして、ジェシカが採用されたのだというようなことを匂わせていた。ジェシカの働きぶりからすると、必ずしもコネクション採用ではないと僕は思うのだが、彼はそう思いたいのだ。

クライドは今でも人生の様々の場面で、女のジェシカにはっきりと劣っていると、突きつけられ続けていることに腹を立てているように思えた。

でも彼はそれを表に出さないのだ。穏やかな笑顔で本心を隠してしまう。

それでも表情の片隅に、彼の話す言葉の僅かな隙間に、それが見え隠れしている。僕にはそれが何となく分かった。クライドは、見か

けほど好青年ではないのかもしれない。
例えば彼は女性を見下すような発言をほとんどしない男だった。多くの男たちが非公式の場で、内輪の軽口で、平然と女を馬鹿にする言葉やジョークを好む中で、彼は進んでそれを窘めるような立場を取る男だ。
それでも、陽が落ちた飲食店通りを、平民女が道を歩いているのを見て、彼は彼女に親切に道を譲ってやってから、やがて気分を悪くしたような顔をした。
女が道の真ん中を歩くなんて許されないことだ。これはサンセリウスの常識だ。僕もそう思っている。貴族だろうが平民だろうが、そもそも女が一人で夜道を歩いている時点で、その育ちが知れるというものだ。だけどそれをはっきり言わない――、そう、僕らは単に、そういう種類の人間であるだけのことなのだ。
誰もが当然思っていることを、僕らもまた例外なく、思っている。
その後貴族専門のレストランで食事をし、兄さんのことや、ジェシカのことを話題にしていた流れで、カイトの話になった。彼が婚約をしたという話についてだ。

「おめでたいことではあるのですが、彼には悪いことをしたかもしれませんね。
あの結婚はもっと先のはずだったのではないかと、姉上は言っていました。血筋の保証がないカイト殿がウェブスター家周辺の者たちの信任を得るには、年齢と実績を重ねる必要があるだろうとね。
姉上の分析が正しいとは限りませんが、恐らく私の魂胆のせいで、デイビッド殿を警戒させてしまって……、時期が早まってしまったことは事実のようです」
照れ臭そうにクライドは笑った。

「しかし私に悪気はなかったのです。カイト殿の不遇を助けてあげ

たいという親切心があったことは信じてください。
私は養子でこそありませんが、当家では扱いは似たようなものでした。引き取られた愛人の子供が本妻に冷遇されることなど、よくあることではありますが……」
「冷遇か。どんなことをされるんだい」
「小さなことです。感謝祭の贈り物に、実子の姉上と差をつけられたり、靴を隠されたりね。姉上の髪は梳いているのに私には触りもしない。……、日常の細々とした、実に些細なことです。誰かに話しても大して同情もされないような。ある種の女の陰湿さは、外からは非常に分かり難くて巧妙……、おっと、少し愚痴が過ぎたでしょうか？」
僕は首を横に振った。
「ジェシカはその虐めに参加してた？」
クライドは苦笑いした。
「彼女はそういう人間ではないんですよ。こちらが頭に来るくらい、私に無関心でした。
でも義母が私の靴を隠していることを知ったときには、私に代わりの靴を買ってくれました。窃盗をはたらくとは恥を知れ、貴方は神の敵対者なのかと、姉上は泣いている私の味方になって、継子虐めをする自分の母親を非難もしてくれた。
今から思うと私のためではなく、若い正義感ゆえだったのかもしれませんが、それでも家族で私にそうした施しをしてくれる者は彼女だけでした」
「いい姉じゃないか」
「でも好意からではないんですよ。彼女は良識を実践しただけなんです。父上が彼女のそうした性格を褒めるからでもあったでしょう。

正義感と、潔白さ。この子が男子でさえあったらというのが口癖で……、姉上の欠点は、まさに男子でないということだけだったのです。おかげで私はいつも惨めでしたよ。だから私は彼女の関心を自分に向かせようと、躍起になっていた……。

しかしカイト殿は、こんな私の経験が吹き飛んでしまうほど酷かったようですね。彼は多くを語りませんが、ヴァレリア嬢が義兄に靴を舐めさせる話は、密かに語り草です」

「カイトは親兄弟を殺されているんだ。デイビッドに」

僕はテーブルの上に運ばれて来た、鶏のグリルを見ながら言った。

「それはひどい」

クライドは少々大仰に同情を示した。でも彼はそんな事情はとっくに知っているというような様子でもあった。知らない振りをして、たぶん僕を立てたのだ。

こういう機微が、僕とクライドの違いであり、僕が大人になり切れていない所以なのだろう。

第178話　夕暮れロマンティシズム（3）

でも僕は年を取っても、兄さんのようにはできないかもしれないが、クライドのようにはできるようになるかもしれないと思っていた。自分というものを知るのは恐いことだが、今の僕はそれに向き合おうとしていた。

率直に言ってクライドは誰か強い人間の補佐に向いているという男だ、彼本人には外貌にも振る舞いにも迫力がない。性格は温和だし、話し方も丁寧だ。相対する人間に恐さを与えないから、人からは好かれるだろうが、その分甘く見られる。殊に重要な局面で、男が甘く見られることはつらいことだ――、彼が優しい男かどうかは知らないが、少なくともそのようには分類されるタイプだろう。

僕は子供の頃、いつかは自分も兄さんのようになりたかったが、あのての人間はそもそも最初から僕とは出来が違うのだ……、リーダーシップというものが人間に備わっている素質のひとつであるとするなら、僕には明らかにそれが欠損していた。身分や財力がそれを補ってくれる場合もあるが、根本的に僕には大勢の人間を統率し得るだけの強力な何かがない。

それは身につけようと思っても、そうそう容易く身につけられるものじゃない。

少年の頃、僕は自分がもう少し万能であると信じていたが、成人をしてしばらくもすると、無惨な現実というものに直面するのだ。僕は他の多くの人々と同じだった。人より優れている面を、探すことのほうが難しいような、有り触れた男に過ぎないのだろう。

僕はかつて勉強ができる自分を誇っていた。確かに僕は学術のほとんどの分野において、人よりよくできる部類の人間だろう。

でも僕は学問を突き詰める研究者ではない。そのための訓練をしていたわけでもないし、何十年とその道を歩いている学者と呼ばれている人たちと比較して、突出した一つの分野というものを持たない

のだ。つまり、所詮は人より少し物を知っている程度のことに過ぎない。

名門アディンセル家の一員ではあるが、僕は武人として一流になれる器ではない。

血を見ることが恐いし、武芸に適性がない。僕は肉体労働と言って騎士業を馬鹿にしているところがあった、でもそれは、実はそれだけではなかったのだ。僕は騎士として、戦闘要員としての能力が、極めて凡庸でしかないと、剣術を習い始めてすぐに悟っていた。努力をしても伸びしろが少ないことを。

なまじ勉強ができただけに、才能がないことを続けるのは苦痛だった。そんなことは、僕の自尊心が許さなかったのだ。

それには側近と言って側に置かれたカイトが、非常に才能が高かったことも、僕の逃避行動に拍車をかけただろう。僕よりも下の人間であるはずのカイトが、僕には頑張っても身につかないことが、彼には最初から……、彼は呼吸をするように剣を操ることができる。悔しいから僕は滅多に彼を褒めてやらなかったが、カイトはあんな性格だが剣捌きは芸術的で、彼は僕の教師だった国内でも高名な剣術師範に、天質ありと言わしめていた。しかも彼は努力を惜しまない。やらなくても充分にできることを、更に磨こうという姿勢が、僕には密かに眩しくもあった。

しかもカイトは自分が天才だとひけらかすような真似をしないどころか、自分がそうだとは露ほども思っていない奴なのだ。僕は自分が頭がいいと、勉強が得意で、語学だ数学だ何とかかんとか、ときどき頭の中で、ときには声に出してでも鼻にかけていたのに、彼はいつでも謙虚だった。

こんなことは到底信じたくないことだが、実はときどき図々しい奴だと馬鹿にして、何かとちょっと自分より下に見ていたカイトに、実は僕のほうが様々のことで……、取り分け人間性が完全に劣っていたことを、今更自覚して苦笑した。

客観的に見ると彼は謙虚で勤勉で有能な騎士だったのだ。剣術の腕

前は勿論、配慮や気遣いも素晴らしい。忠誠心も高い。出自とか、いろいろなことで馬鹿にされても泣いたり屈したりせずに、常に笑顔でいられる精神的強さは並大抵のことではないだろう。それなのに多くの人々が身分という色眼鏡で彼を過小評価する側の目線で、僕は友だちを見ていた。

世間知らずとは言ったもので、こんなことを一つとってみても、僕は本当にこれまでの自分の行いを振り返るたびに、胸の中がにがい思いでいっぱいになった。

「私もね、そうなんですよ」

テーブルの向こう側のクライドが言った。

僕は慌てて我に返った。

「ごめん、聞いていなかったよ」

白ワインのグラスを手に、クライドは頷いた。

「幼稚な自分に頭を抱えたくなる」

考えを読まれた僕は驚いてクライドを見て、また苦笑した。

「よく分かるね……」

「私もそうですから」

「君も？　昔、そうだったことがあるのか？」

クライドは居心地悪いように広い肩を竦めた。

「とんでもない。今もですよ。今もずっと」

「今も？　でも君は、大人じゃないか」

僕が言うと、クライドは少し自虐的に笑った。

「確かに。貴方からご覧になれば、私はもう立派に大人ですね。でも、未だにその日あったことを思い出しては、至らない自分にがっかりすることの繰り返しです。……、残念ながらね」

第１７９話　名も無き悲恋だとしても（１）

別の日、僕はタティの母親であるコンチータのところに挨拶に行った。

僕はこれから王都に赴任することになることを報告しに、それにタティの病状についても……、娘のタティが僕の慰み者にされた挙句に死んでしまうとあっては、コンチータがどんな気分でいるだろうかと思うと、足取りは重くなった。母親のいない僕を大切に育ててやった恩を、仇で返されたと恨んでいるに違いない。

当然、僕は頭を下げるつもりでいた。この期に及んでは、もはやタティと結婚するなど可能性さえ模索できうることではなかった。だからせめてタティを健康に戻して実家に帰してやりたかったが、それも叶わず……、彼女が家族のもとへ戻って来るときには、遺体が焼かれた後のことになる。

ノーマン家は爵位のない貴族としては暮らしぶりのいい家庭だった。地方都市の緑に囲まれた屋敷に住み、使用人を使って暮らしている。コンチータが僕の乳母に、そしてタティが僕の乳姉妹になったことで、ノーマン家の序列が上がったこともあるだろう。

タティの実家にシエラを連れて行くのは気が引けたが、シエラは自分は僕の魔術師だからと言って引き下がらなかった。

「それに、私もご挨拶をしておきたいの」

シエラは大きな瞳を僕に向けて、主張した。

「アレックス様を育ててくださった方にお礼を申し上げたいの。そしてこれからは、私がアレックス様を傍で支えるということも、彼女にお伝えしたい。

そしてできれば、私のことをコンチータさんにも認めて頂きたいの

……、祝福して欲しいとは、言えないけれど、私の気持ちを分かって貰いたくて」

「うん、そうか……」

この外出日、ハリエットが僕のところに来なかったことは幸いだっただろう。シエラとハリエットが鉢合ったときの混乱っぷりは、僕には対処ができない。ハリエットは男に生まれていたら、きっと威勢のいい若い騎士だったのではないかと思う。彼女の血の気の多さと物怖じのない積極性は、僕が羨むべき特質だ。

屋敷の門をくぐると、僕はノーマン家の総出で出迎えられた。タティの父親は出仕しているので留守なのだが、数十名もの人々と、この屋敷の女主人であるコンチータが僕を歓迎した。

「ああ、アレックス様！　お懐かしゅうございます」

コンチータは長い黒髪を結わえ、四十代の女性としては地味な、相変わらずほとんど老婆の着るような服装をしていた。とはいえ僕の乳母をしていた頃に比べると、当然ながら年齢を重ねたことを覆い隠すことはできない。目尻にはしわが、髪には白いものが混じっている。だがまだ美しさ自体が損なわれたわけではなく、ずっと前に兄さんが言っていた通り、彼女は美人の部類に入る女性だった。人のよさそうなところは、タティに似ていた。コンチータは眼鏡をしていないので、顔立ちがいいことがはっきり分かった。タティと同じ瑠璃色の瞳をしている。

兄さんは以前、タティの視力について難癖をつけていたことがあったが、母親が眼鏡をしていないならそれほど重篤な遺伝的問題ということにはならないじゃないかと、今頃反論を思いついて苦笑した。

コンチータは僕の腕にくっついているシエラを見て、少し瞬きをしてから、シエラのことも笑顔で歓迎した。彼女が何者かということを、当然ながら知っているのだろうが、コンチータはその笑顔を崩

すことはなかった。
そのまま屋敷内の廊下を案内された。先導するコンチータと僕らの周りを、遠巻きに人だかりができていたが、領主の弟を見たかったのか、それともシエラの美しさがめあてだったのかはよく分からない。
コンチータは歩きながらしきりにタティの兄の話をしていた。シエラに気を遣って、タティの話題を出さないようにしてくれていたのだろう。タティに兄弟がいるなんて、あんまり考えてみたことがなかったが、言われてみれば別に不思議なことはない。

「彼は眼鏡を？」
「いえ、していないのですよ。眼鏡は……、わたしの夫がしていますわ」
「タティはお父さんに似たんだね」
「ええ、そう、そうですわ。娘は父親に似ると言いますものね。あまり一緒に過ごさせたことはないのですが、言われてみればあの子は……、父親によく似ています」
「そうか、タティはずっと僕のところにいたから家族と住んでいないのか……」
「あの子はアレックス様の乳姉妹。貴方様の家族にさせて頂いておりましたもの。楽しく暮らせていましたわ。アレックス様とタティは気もあって、……仲のいい姉弟でした」
「うん……」

ここはタティの実家だが、タティは生まれてすぐ僕のところに奉公に出たため、ここで生活したことはなかったのだ。たまに帰省することはあったが、人生のほとんどの時間を僕の側で過ごしていた……。余程貧しいとか、何か特別の事情がなければ、貴族の娘は大抵、生まれた城や屋敷の中が世界のすべてだ。いつか花嫁になって誰かに連れ出して貰うその日まで、彼女たちは夢のまどろみのような少

女時代を過ごす。教育も家庭教師が主流だ。だから世間知らずさは、男の僕の場合は洒落にならないが、彼女たちに限っては育ちのよさの証明ともなる。

タティは僕の乳姉妹として、僕の部屋で一緒に育った。寝室は早い時期から別だったが、幼い頃は寝食を共にし、勉強もある時点までは一緒にしていた。遊ぶのは勿論そう。

タティは母親以外の家族と暮らしたことがなく、サンメープル城内の僕の部屋の中が人生のすべてだった。タティにとって僕が世界だったと主張していたハリエットの言葉が、地味に突き刺さる。

「小さな可愛いお屋敷ね」

シエラが僕の服の袖を掴んだまま、窓の外を見て言った。

「ホリーホック城はとても広くて、ときどき迷子になりそうだったわ。お城の中に市街があるの」

第１８０話　名も無き悲恋だとしても（２）

僕とシエラは屋敷内のしつらえのいい客間に通され、僕たちは旧交を温めた。
もっともそれからもコンチータの話は、タティの話ではなく、僕の側を退官する以前の、僕についての昔話がほとんどだった。
僕は幼い頃から自分の中に特別な規則を作る子供で、厳しく躾けなくても何事にもモラルが高かったのだとコンチータは懐かしそうに目を細めた。

「ギルバート様はわたしの教え方がいいのだととても高く評価をくださっていたのです。親のないアレックス様を、とてもいい子に躾けてくれているとね。
でも本当のことを申し上げると、貴方は最初からそういう方だったのよ。おはようのご挨拶、絵本のお片づけ、お散歩から帰ったら手を洗うとか、一度これこれこうするのよとお教えしますと、貴方はそれからは本当にきちんとしないとお気が済まなかったの。
小さな紳士だと、当時の使用人たちはいつもお話していたわ。いつもお行儀がよくって、お兄様が知らない女の人を連れていると怒ってしまって……、でも、それはお寂しくて怒っていらっしゃるだけではないのよ。不誠実だって、貴方はそうおっしゃるの。昨日の女の人と違うってね。
こういうお話がありますね。人間はあるとき突然母親の腹に発生するものではなく、天国と地上を行ったり来たりする存在なのだと。人間はそうやって何度も何度も生まれ変わるものだから、人間の性格というものも、しばしば最初からその人間に身についているものだと……。アレックス様の厳格なところは、きっと貴方の特性なんですわ」
「神学の、輪廻転生だね」

僕が言い、コンチータは静かに頷いた。

「ええ」

それからコンチータは兄さんの侯爵昇格を何よりも讃えた。

「先代様の想いやギゼル様のご無念が、ギルバート様の強運を後押しなさったのだと、ティファニー様はおっしゃっていましたわ。彼の栄光はそうなるべくして与えられたものであると。でも彼女は不安なこともあると言っていたわ。ギルバート様は幼い頃から優秀で、心がとってもお強くて、とても、ご優秀すぎて……、そのお強いところがかえって悪いものに気に入られ、魅入られてしまいはしないかと……、あの方には正道を重んじるプリンセス・オーロラの加護があると言っても、それも限界があるとね。たぶん、それはきっとウィシャート公爵様に係わり過ぎてしまったことをおっしゃっていたのだと思うけれど……、憶えておいでかしら、ギルバート様の乳母様のこと」

「ええ、感謝祭などで見かけたことは……、彼女は最近はどうされているのですか」

「ディアス様とお暮しよ。でもご高齢の旦那様ですから、この頃では何かとご心配もあるみたいですわ。私生児を抱える自分などを妻に迎えてくれたと言って、とても尽くしていらっしゃるもの」

「私生児？　それは何のことです？」

「あら……」

コンチータは少し躊躇った顔をしたが、やがて伏し目がちに話をした。

「ギルバート様の乳母であるティファニー様は、お勉強のできる方

でね。お若い頃に王都に魔法のお勉強をしにいらしてて……、そこで恋をされたのよ。お相手はトワイニング様と言って……、ええ、現在のトワイニング公のことですわ。ティファニー様はその方と恋をされたの……。

やがて彼女は彼のお子を身ごもられて……、結局恋は破れ、若い身空で赤ん坊を抱えて故郷に帰っていらしたわ。彼女はまだ十代だった。とてもやつれて、悲しそうだった。二人は結婚を許して貰えなかったのよ。身分が違いすぎて、彼には他に結婚相手が。

でもそれから二人目のお子がお腹にあると分かってね、あの気の強い彼女が泣いて生むと聞かなくて……、二人も私生児があっては只の間違いだと世間に言い訳すら立たない、人生が終わってしまうと周囲は大反対をしたのだけど……、ティファニー様は彼を愛していたのよ。

だから、結局、そうされたの……、遠い昔のお話よ」

「ルイーズとアレクシス……？」

「ええ、そうですわ……」

僕が呟き、コンチータは頷いた。

トワイニング公と言えば、今では数ある傍系公爵家のひとつに過ぎなかったが、セリウスが生きている時代に創設されたローズウッド王家に並ぶ古い公爵家だった。現当主は確か五十代の紳士のはずだが、ルイーズの父親であってもおかしくはない年齢だった。

ルイーズとアレクシスがもし本当に不義の末の私生児であるなら、幾ら何でもアディンセル伯爵家の嫡男の魔術師に採用されるには問題があることだった。結婚を経ずに子供を産んだ女も、父親に見放されたその子供も、淫乱の血だの、背徳の家系だのといって世間ではまず間違いなく白眼視される存在になるからだ。

でもその父親が公爵となれば話は違って来るのだろうか……、それともティファニー母子に責任を感じ、その行く末を慮ったトワイニング公が、密かに母子の救済を父上に打診したのかもしれない。僕

が生まれる以前に起こった知らなかった裏事情だが、ルイーズの待遇のよさや、彼女の顔の綺麗さを思うと、妙に信憑性はあることだった。

「では、ルイーズとアレクシスは、トワイニング公の子供だということなのですか？
世が世なら、その結婚が叶っていたなら彼女たちは公爵家の姫ということ……？」

僕がたずねると、コンチータは首を横に振った。

「それは今となっては分かりません。そうはならなかったのですから」

第１８１話　名も無き悲恋だとしても（３）

それからも幾つか昔話をした。コンチータの話してくれる昔話は、純粋に懐かしく、少し面白かった。

例えば幼い頃、僕らはお姫様のアレックスとみすぼらしい侍女のタティだったと、コンチータは可笑しそうに教えてくれた。従者が主人より地味でなければならないのは勿論だが、タティは幼い頃から度の強い眼鏡をかけなくてはいけなかった上に、本人があの通りあまり身なりに構わない性格だったし、一方僕は当時白くて細い、金髪碧眼の美少女っぽかったためだ。男らしい今となっては考えられないが、幼いときは傍から見ると、僕はアレクシスに結構似ていたのかもしれない。

だから僕は来客なんかに姫君に間違われて、よく声をかけられていたそうだ。そしてそのたびに兄さんが過剰にピリピリしていたなんて話を聞いたときには、傍から見れば微笑ましい場面でも、今から思うと彼のトラウマを刺激しまくることだったのかもしれないと思うのだが。

滞りなく報告は終わり、帰途につく時刻となった。

タティは徐々に衰弱をしている。穏やかな今の季節はいいが、じきに訪れる夏や、寒い冬を乗り切れるかどうかは分からないという話をするときは心苦しかった。

コンチータは終始怒り出すこともなければ僕を責めることもなく、乳母が子供に接するような態度が崩れることはなかった。目もとに悲しみを湛えながら、静かに我が子の不幸を受け入れていたのだ。

こんなはずではなかったとコンチータに言うのは、彼女への気遣いではなく僕の気持ちを軽くしたいがためのことだろう。

だけど言わずにはいられなかった。日が傾きかけた帰り際、シエラが他所を見ている隙に、僕はコンチータに近寄った。そして深く頭を下げた。コンチータは驚いて僕の腕に触れ、僕の顔を上げさせよ

うとしたが、僕は顔を上げることなんてできなかった。

「アレックス様、いけません、ああどうか。どうかわたしのような者に頭を下げるなどおやめください。アディンセル家の方が頭を下げられるなど、もったいのうございます、どうか」

「許してくださいコンチータ。タティがこんなことになってしまったのは、全部僕のせいです……！」

「そんなことはありません、そんなことはありませんよ」

「だから本当はどんなことをしてでもタティを助けたいって言いたいけど、方法がないんだ……、調べてみてもどうにもならなくて、日々弱っていっているタティをどうしても助けてあげられない……！　彼女を病気にしたのも、殺すのもこの僕です！」

「タティが病を患ってしまったことが、どうしてアレックス様のせいになるのでしょう。誰もそんなことを思ってなどいないのよ。タティは運が悪かった。

それにね、すぐに熱を出したり、病気がちとまではいかなかったけれど、タティは最初からそれほど強い子でもなかったんです。ですから貴方が責任を感じる必要などないわ」

「コンチータ、それは違う……、違うんだ。そうじゃないんだよ。この話には重大な裏があって、責任は全部僕にあるんだ。僕がタティに……」

「それを言うなら、すべてのことは母親であるわたしの責任です」

ふと、コンチータが切実な声色で言った。

その涙の混じる声に戸惑い、僕が恐る恐る彼女を見ると、コンチータは思っていたよりずっと悲痛な眼差しをしていた。彼女はその瑠璃色の瞳で僕をみつめ、悲しく繰り返した。

「……すべてのことは、タティを……、こうして貴方様にご心配をおかけせずに済むような、頑丈な身体に生んであげられなかったわ

たしの責任なのです」
「コンチータ……」
「アレックス様、実を言いますとね、わたしはタティを妊娠しているとき、体調を崩してしまったの。そのせいで流産をしかけて、結局流れはしなかったもののあの子は随分早産になってしまったのです。
親類縁者からはそれは責められましたわ。子供に何かあれば弁解の余地なくすべて母親の責任にされてしまうのが世の常ですが、わたしはそれだけのことをあの子にしてしまったのですもの。顕著なのが、タティの視力のことです。
父親に似たにしても、あの子の視力がずっと落ちてしまったことは、まずそのせいだろうとお医者様もおっしゃったわ。眼鏡でどうにか矯正することはできましたが、それでもタティにはきっとわたしたちのように鮮明には世界が見えていないのです。若いうちはまだそれでやっていかれるでしょうが、年を取ったらどのようなことになるかと……。
だから、すべての責任はわたしにあるのです。タティが物がよく見えなくて不自由していることも、あの子があまり生命の強い子ではないことも。母親のわたしが十月十日を持ち堪えることができなかったからなのです。
もしわたしが、あのときせめてもうひと月長くあの子をお腹の中にとどめておいてやれたら、視力だって、きっと肺病に罹ることだってなかったでしょう。だから少しもアレックス様のせいなどではないのですよ。
ですからどうぞお顔を上げてください、お願いですから。そんなことをなさらないで」
「コンチータ、それでも……、やっぱり僕のせいなんだよ。僕が……。
でも僕はタティを弄ぼうと思ったんじゃないんだ、兄さんが何と言っても僕はタティと結婚するつもりだった。

決して貴方の大切なお嬢さんを慰み者にするつもりはなかった……！」

「ええ、分かっています」

「僕はタティを……」

「……分かっていますわ」

「アレックス様……！？」

やがて間もなくシエラに気づかれてその場は少し混乱した。

「アレックス様、そんな、嫌だわ。どうして……」

テーブルについている僕の目の前に、湯気を上げたカップが置かれた。子供の頃のように、ホットミルクを出されたのだ。僕は結局コンチータに慰められて、落ち着きを取り戻した。

その間、シエラはずっと僕の服の端を握っていた。シエラがあまりおおっぴらに不愉快だということを表現しないおとなしい性格でも、彼女が内心で面白くないことは分かっている。どの辺が面白くないかは分からないが、表情からして、たぶん全体的に面白くないだろう。

「ごめんなさい」

僕は目の前の椅子に腰かけたコンチータに言った。

「何故、そんなに謝られてばかりなのです」

コンチータは母親の顔で優しく微笑した。
僕はかぶりを振った。

「僕を恨まないの。恨むでしょう。いや、恨んでくれていいんだ……、僕だって自分が憎い。
僕は昔から人より一段上に立って、他人の醜態を軽蔑半分に見ているところのある嫌な子供だった。ところが気がつくと自分が誰よりも馬鹿ばかりやって、我ながらやることなすこと酷いものだよ。もし時間を巻き戻せるなら、僕が生まれたときから全部やり直したい……、どっちかって言うと、もっと前から……」
「恨みませんわ」

コンチータは静かに答えた。

「だけど恨んで欲しいんだ。僕がタティの親ならそうする。いや、ふざけた男はこの手で殺しに行く」
「アレックス様……」

コンチータは僕の横にいるシエラを気にしている様子だった。僕はそれに気がつき、それ以上言うのを自重した。

「アレックス様……、わたしは貴方をお恨み申し上げたりはしません。貴方は何か勘違いをされているようだけれど、わたしがそんなことを思うはずがあるでしょうか。だって、タティは幸せだったはずです。
愛する貴方と時間を過ごすことが出来たのです。生涯寄り添うことだけが愛情のすべてではありません……、ですからどうぞあの子のことはお気に病まれませぬよう。
人間には、生まれたときから各々神様に与えられた役割というものがあるのです。タティは、アレックス様の幼なじみとして育つこと

が役割だったのであって、貴方様の妻になる役割ではなかったというだけのこと……。

それに時間の長さなんて、あの子にとってはきっと大した問題ではなかったはず。ひと時でも恋が叶ったあの子の幸せな気持ちが、わたしには手に取るように分かります。

アレックス様、女とは一度心から深く愛した人のことを二度と忘れることはありません。そしてその幸福な記憶があれば、残りの人生を生きていくことができるのです」

第１８２話　重要機密（１）

「アレックス様、来月から中央に出仕するって話は、本当なんですか！？」

ある午後、執務机に頬杖をついて、春のうららかな日差しをぼんやりと感じていた僕に、カイトが慌ただしく質問して来た。

デイビッドについてしばらく僕のところを留守にしていたのが、やっと戻って来たのだ。

当然、単なる婚約お披露目で二週間以上空けていたというわけじゃない。デイビッドの持つ荘園で暴動があったとかで、その鎮圧に参加していたということだ。

この時期に暴動なんて起こされて、兄さんは結構デイビッドに怒っていた。デイビッドは汚れ仕事にかけてプロフェッショナルらしく、穴は大きかったのだ。赤楓騎士団はほとんど貸し出せないから、デイビッドは自分の私兵だけでやり過ごしたらしい。何をしたかについては、少なくとも穏便な労使交渉のようなことではないということだが――、ジャスティンが血塗られた婚約だとか、神意に背くことだから農民の血が流れたとか、言っていたのを覚えている。

「ああ、人質の話か」

僕は頬杖をついたまま言った。

こうしたことは、確かに多少ショックを受けないことはないが、僕はすぐに気絶してしまうようなか弱い姫君じゃないわけだし、だんだんと不感症になって来るものだ。カイトを責めるところでもない。

そしてこれは僕にとって些細な問題だ。

そんなことより重要なのは、ここのところの僕は孤独で、人生が苦悩に蝕まれ、しかも冴えなかったということだ。だから僕は内心で

友だちが戻ってくれたことを嬉しく思っていたが、いざ顔をあわせるとそれを上手く言い出すことができなかった。
寂しかったなんて絶対言えないし、僕は別にカイトがいなくて寂しかったわけじゃないが、かと言って寂しくなかったと言えば嘘になる。こういう気分は何と表現していいのか分からずむずがゆい。
カイトの態度は出立のときの見るに堪えない顔面蒼白ではなく、普段通りの朗らかで明るいものだった。
今度の帰省では、ウェブスター家の親戚一同に取り囲まれるなんて事態くらいは当然あっただろうし、ヴァレリアのご機嫌を取ったり、労働者制圧に駆り出されたりで、胸中を察するばかりだが、何事もなかったかのように振る舞っているのはさすがだった。

「うん、どうやら僕はあの薔薇と陰謀の王宮の住人になりそうだよ。陛下はウィシャート公爵派の者たちが必ずしもフレデリック王子に叛意を持っていたわけではないことを、御理解くださったと聞いている。
それにアディンセル家は建国時からの重臣だ。領地の没収も厳罰も特にはなかった……、でもアディンセル家はウィシャート公爵家と係わりが深かった。だから他への示しと言うか、体裁のために、兄さんにとって唯一の身内と言っていい僕がね、王都に行くことになりそう。兄さんが謀反を起こさないように、人質になりに。
これはアディンセル家だけに取られる措置じゃないし、暫定的なことだ。大騒ぎするようなことでもないんだけどね」
「げえっ、じゃあ、本当なんですね……」
僕は苦笑いを浮かべた。

「僕もまさかこんな事態になるとは思わなかったんだけどさ。人質と言っても、牢屋に閉じ込められるとかそういうことじゃないから心配しないでいいよ。

ただ僕は誰かに仕えたことがないのに……、これからは国王陛下にお仕えしなくちゃならなくなる。まあ、王都には立派な王立図書館があるから、休日の慰めはあるよね。あのキャバレーにも、暇を見て行ってみたりね……」

「それ、俺は連れて行って貰えるんですか？」

僕は日差しに浮かぶ埃を目で追いながら適当に答えた。

「どうかな。たぶん大丈夫だと思うけど、兄さんのお考えこそが僕の意見だから。

君、ついて来たいならその旨を兄さんに申請しておいたほうがいいね」

僕は少し考え、カイトに目をやった。

「そんなこと言って、君は結婚はどうする気なんだ？」

常日頃金欠を訴えていたカイトの左手の薬指には、いまや割と高価な指輪が嵌められていた。台座にルビーが飾られているのは、ヴァレリアの誕生石だからしい。

「奴隷の手枷ですね」

カイトはそれに気がついて左手を翳し、特に感慨もなく言った。

僕は肩を聳やかし、話を続けた。

「僕としては勿論、君が来てくれるものとは思っているけど、でもよく考えてみたら結婚するのに、その辺どうなってるんだ？　僕はもう来月から王都に行くんだよ。人質だから当分は自由に故郷に帰ることができないと思うし。

まあ結婚は、兄さんとデイビッドで勝手に証書にサインされるだろうけど、新妻を置いて王都に赴任する気なのか？　それともヴァレリアごと一緒に王都で新婚生活？」

するとカイトはほとんど他人事のように答えた。

「いえ、新婚生活なんてものは、この結婚にはないんじゃないでしょうかね。

まずお嬢様が王都にっていうのは、男爵様が許さないでしょう。俺は基本的に信用されてないですし、そんな男に娘を預けたりはしないですよ。

まあ、今年の後半に一度帰って式だけ挙げて、俺だけまたとんぼ返りかな？

何せ結婚なんて言ってもお互い好きでするわけでもない。前にも話したかもしれませんが、形だけのものです。お嬢様とは側で暮らす理由もないですから」

「理由がないって、大ありだろう？　新婚って理由は」

「いや…、まあねえ」

「ヴァレリアより、僕の側がいいって？」

「そりゃもう」

「そんなに僕が好きなの？」

僕が冗談を言うと、カイトは笑顔になって頷いた。

「結婚を控えている相手よりも、愛されてるってわけか、嬉しいねえ……」

僕はそう言ってから、こう続けた。

「まあ、真面目な話をすると、所属先が何処になるかはまだ分から

ないけど、僕は陛下にお仕えするということになる」
「ふむ」
「だから……、つまり君、何にしても僕らは都会で暮らすんだ。一応、兄さんには王都の伯爵邸に住むようには言われているけど、それは実はちょっと考えている。あそこは兄さんの女が出入りするし、兄さん自体も出入りするから、今と変わらないってほどじゃないと思うけど、でもどうも独立した感じがしないだろう。兄さんの快楽の館、王都出張所って言うのかな。
何となく、理由をつけて兄さんに入り浸られたり、監視を置かれそうだしさ。だから僕、内緒で家を借りようかと思ってるんだ……」
僕は声を潜めてこの重要機密をカイトに打ち明けた。
「家を？」
「うん。自立をしようと思ってね。普通、次男なんて独立するものだし……、親から土地を分けて貰えなかったら、難儀する立場だ。最悪、自分で働いて食べていかないといけなくなるものだろうし。それで、召使いも自分で雇うんだ。いい考えだろう？」
カイトは自分の顎を触って、何やら兄貴ぶったような評論をした。
「ふむ。まあ、普通であればそのくらいのことはお考えになるお年なのかもしれませんね。
でも貴方の場合は何と言っても閣下が全部ご用意くださるでしょうに、あんまり無茶はされないほうがよろしいのでは。独立心を持たれるなんて素晴らしいことですが、やはり貴方は名門出です。体面的なこともありますし。
ギルバート卿の弟とあっては、何かと注目もされるかもしれません。これまでと違って、名門男子である貴方は振る舞いや行動に体裁というものが必要になるんですよ。暮らしぶりとか、態度とかもそう

です」

「分かってるよ。そんなにおかしな家は借りないよ。兄さんや、アディンセル家の体面が傷つくような家は。でも、せっかくローブフレッドを離れて独立っぽくなるんだから、自由を満喫したいじゃないか。

まったく君は保守的だな。若者はそんなじゃ駄目だよ。それとも君はあれだ、ヴァレリアとの結婚が決まったことで、とうとう人生をすべて放り出してしまったんだな。前から物事に諦観気味だとは思っていたけど、可哀想な奴だ。遂に人生を諦め切った老人、いや仙人の域に達してしまったらしい」

「仙人ですか。これは言われてしまいましたね」

カイトは拳を口許にやって笑った。

第１８３話　重要機密（２）

「家を借りたらきっと楽しいよ。表向き伯爵邸に住んでることにするから、僕の家には邪魔臭い奴は誰も押しかけて来ないはずだ」
「閣下にも秘密にするんですか？」
「そうだよ。だって僕は大人の男だからね。兄さんは子供は私の言うことを聞いていればいいって、何かというとそれだろう。さっきだって言われたよ。でも、最近思ったんだけど、それ僕が三十になっても言いそうで恐いっていうのかな」
「まあ、うん……、言いそう。たぶん、言うでしょうな」
「だから僕がなんて言うかこう、自立した一個人だってことをね、兄さんに分からせる必要があると思うんだ。揺りかごにいる赤ん坊じゃないってことを、そろそろ分かって貰わないとね。だから暮らす場所くらい、自分で決めるんだ」
「でもルイーズ様が魔法でみつけちまうかも」
「ルイーズのことは何とかして抱き込むよ。彼女は兄さんと違って、少しは話の分かる人間だと思うから。そうすれば誰にもみつからない。きっとヴァレリアも嫌がらせに来られないだろうな」
「あっ、それ素晴らしい。俺も一緒に住んでいいですか？」
カイトが急に身を乗り出して、乗り気になって執務机についている僕に近づいた。
「いいよ。カイトは料理はできるの？」
「まあ、簡単なもんなら。何でも自分でやらなきゃいけない時期が長かったですからね、結構家事は得意です」
「そうか。僕も料理は嫌いじゃないから、じゃあたまに自炊したりして楽しめるね」
「おっ、そりゃ楽しみじゃないですか！」

カイトは指を鳴らしてはしゃいだ。
彼の楽しい雰囲気に、僕もつられて思わず笑顔になった。

「いいね。何だか楽しみになってきた。
ねえ、召使いはやっぱり若い女の人がいいかな。身の周りのことをしてくれる人は……、この城で僕が使っているのを、連れて行こうかとも思ったんだけど。そのほうが気心も知れているし、でも……、タティのことを思い出してしまうから……」
「それなら、新しい人を雇うのもいいかもしれませんね」

カイトは言った。

「そうか」

僕は気を取り直した。

「そうだね。じゃあ、その方向で検討しよう」
「新生活ですからね」
「うん」
「家を探すのに、アレックス様ご希望の条件を教えてくだされば、俺が予め物件を当たっておいてもいいですが……、ああ、でも」

カイトはふと室内を見まわして、他に誰もいないことを確認してから僕に言った。

「シエラ様はどうするんですか？」

僕はその言葉を聞いて、一瞬カイトを見入った。
僕は彼がシエラを想っていることを知っているからだ。でもカイト

がそれを知られたくないと思っていることも分かっていた。きっと僕との関係を悪くするのを恐れて、遠慮をしているのに違いないのだ。

正直に打ち明けてくれたなら、僕は何とかしてシエラをカイトに譲ることだって考えるというのに、まったく彼の謙虚さときたら度が過ぎて、彼の人生に損害をきたすレベルなのだ。

僕は小さく息を吐き、すぐに彼の想いに気がつかなかった素振りで、首を横に振って話を続けた。

「分からない。シエラについては。そもそもおかしいのが、僕の結婚相手だなんて言っていた割には、兄さんはその後何にも言わないんだよ。結構横暴なやり方でシエラと結婚しろなんて言ってたくせにさ、なんでか正式に婚約って運びにならない。

もしかして、兄さんがシエラを気に入ったのかなとも思ったんだけど、でも彼のシエラに対する態度は妹を可愛がるような態度で、口説いてる様子もないし……、何考えてるのかよく分からないよ。まあ主君命令だから、彼女とは何となく上手くやっているけどね。

国境ランベリーに古くから住む貴族や民衆のアディンセル家への求心力のために、旧候の妹姫であるシエラをアディンセル家に迎えるという話だったと思うんだけど、僕が赴任するからと言ってシエラが外に出ちゃうのはどうなんだろう？」

「そうですねえ、んじゃ、閣下のご判断次第となるでしょうか」

「もっとも君の判断も、介入の余地があるかもしれないけどね。君が心を開けば」

僕はふと、心理学者のような正確さで、カイトの気持ちを見透かして言った。

カイトはゆっくりと僕を見た。

それからどういうわけか、彼はあたかも話が分からないとでも言うように首を振って、僕に聞き返した。

「何です？」
「何ですって、だからつまり、自分の胸に手を当ててご覧」
「自分の胸に手を当ててって、自分のおっぱい揉めってことですか？」
「くだらないこと言ってないで、素直になればいいんだ。何か、僕に打ち明けるべきことがあるんじゃないか？」
「打ち明けるべきこと？　いや、ないですよ。貴方最近どうも胸に手を当ててとか妙なこと言って、もしかしてまた見当はずれなこと思ってやしないですか」
「そんなことない。僕は鋭いから。これでも兄さんと同じ血を引いてるんだぞ、こういうことは普通の連中より鋭い」
「そうですか」
「うん」
「正直に言うと」
「うん」
「俺は女の胸を揉みたいんですが。自分のじゃなくて」

カイトは自分の胸の辺りをもぞもぞと触りながら言った。
僕はむっとした。

「なんでそこでふざけるんだ」
「いや、ふざけてないですけども」

第１８４話　辞令（１）

幾年月を経て、とうとう男としての度量を試されるときが、やってきたのだ。
大人になっても僕はあのつらく苦しい経験を忘れたことはない。アディンセル家の男子である僕を、将来自分たちの生活も人生もいかようにでも攻撃出来得ることになる権力者となるこの僕をだ、無礼にも苛めまくったあの狂犬どもに対峙することになる日が来ることを、僕は覚悟もしていた。
よってたかって小突かれ、こけにされ、膝小僧に土をつけられたあの日、僕は予感したのだ。僕を囲んで騒いでいるこの馬鹿どもを、いつかこの手で根絶やしにする日が来るのではないかと……。
僕には分かっていたのだ、僕の中には怒りがあり、猛り狂うような獰猛性があると。僕はそれをひた隠して穏便な男を演じているが、心は荒々しい山賊のような益荒男なのだ。火がついたら誰にも止められない、攻撃的で恐れ知らず、果敢で勇猛でスリリングな暴れ者だ。
しかし一方で僕は紳士だから、礼儀や良識のある者、正しい者、弱い者を攻撃したりはしない。ルイーズにしようとしたことは不本意ながら人生の汚点だが、弱者を痛めつけることの罪深さと後悔をしかと僕の人生に刻み込むことにもなった。僕はあれを戒めとして魂に刻印し、今でもとても悔いている。相手がか弱い女だからだ。
そう――、ここで言う弱者とは、飽くまでも女子供限定だ。弱者と言っても相手が男なら、痛めつけたって罪の意識なんて湧いてくるはずがない。身分的に弱者かもしれないが、それはそいつの運が悪かったのだ。僕は断固やるつもりだった。今こそ正義の鉄槌を振り下ろすときなのだ。戦の火蓋は切って落とされ、反撃の狼煙が上がった。風が強い。決戦の時は来た。大気には嵐が吹き荒れ、いかづちが渦巻き、僕は絶対に奴を生かしてはおかないつもりでいるのだ。

くしくも神の敵対者たちが、轟音の暗い嵐に乗って僕の燃え盛る勇気に喝采を送っているのが見える。牙の生えた残忍な連中が口許をほころばせ、爪の長い手を叩き、あの無法者に裁きを下してやれと囃しているのが。

僕はやるときはやる男だ――！

「アレックス」

ふと、兄さんの苦笑混じりの声がした。

「アレックス、緊張をしているのか？　おまえの人見知りにも困ったものだな」

見ると、兄さんが本当に苦笑しながら僕を見ている。兄さんの執務室でぼんやりしても笑って許されるのは僕くらいのものだが、それで、僕は我に返った。

僕はさっきから兄さんの執務室にいた。

嵐とけたたましい悪魔の笑い声に満ちていた激しい幻想の世界とは対照的に、その場所は一見和やかさを保っているかに思えた。目の前の執務机には兄さんがいる。機嫌はかなりいいようだ。相変わらず偉そうにしているが、そういう姿勢が彼には似合っている。

横には、秘書のようにメモ帳を持って直立しているジェシカがいる。その向こう側の開け放たれた窓からは、木立が覗き鳥の囀りが聞こえている。そしてもう一人、若い男が僕のすぐ横に同じようにして立っている。

「サヴィル家のオニール。オニール・ヘイゲン・サヴィルだ」

兄さんは執務机について指を組んだまま、僕のやや右側後方に直立している男に視線をやった。

僕はそれに促され、人の形をした悪魔のことを見た。
彼は忘れもしない昨年末、ヴァレリアお嬢様の夜会のエスコートをしていた男だ。鼻にかけるつもりは大いにあるが、僕のほうが背が高い。
そして、僕をよってたかって苛めたメンバーの一人でもあったのだ。名前まではいちいち覚えていなかったが、招かれざる客というものがこの世にあるとするなら、彼はまさしくそのうちの一人であると言えた。

「おまえの腹心その二だな。おまえとカイトに欠けている部分を補う。仲よしグループの新しいメンバー。アレックスの新しい友だちだな」

兄さんは子供に語りかけるように僕に言った。いつものことながら、まるで自分が僕のためにいいことをしたというような、得意気な表情をしている。彼は自分のやることが絶対に正しいと思っているので、いつでも自信満々だが、僕に言わせればそのうちの結構な割合が、何とも的外れの独り善がりだ。
だから僕は疑心に震えながら兄さんを見た。雨に濡れた仔うさぎの哀れさで。
僕の右側にいるのは昔僕を苦しめた狼藉者だ、それなのにこんな酷い人選があるだろうか？　他に人材は幾らでもいるんじゃないか？　これは、兄さんはやっぱり僕を愛していないんじゃないかと疑ってしまうほどの考えられない人選だった。
この男が今後僕の側近になるとしたら、僕の毎日はとても耐えられないような不愉快さに覆われてしまいそうな気がして、僕は戦慄していた。
春先からこっち、大人にならなければならないという僕の確固たる決心は、今にも瓦解しかけていた。人間無理は続くものじゃない。嫌いなピクルスを食べたら気分が悪いから僕は今でも食べないが、

それでも人生はまわっている。それこそが、世界の真実なのではないか。人間には向き不向きというものもある。要はこんな奴嫌だよと今にも口をついて出そうだった。カイトは僕を助けてくれるだろうか？

「サヴィル家の者とは聞いていましたが、僕はてっきり、つまりもっと年長の……」

僕は救いを求めて兄さんを見た。

「次男は現在逃走中だ。ジャスティンと折り合いが悪いそうでな」

「逃走中……」

兄さんは頷いた。あのジャスティンが兄では兄弟仲が荒みそうだと、兄さんも思っているような顔をしている。

兄さんはまた僕を見た。

「どうしたアレックス。表情が暗いが、緊張をしているのか？」

「いえ……」

僕は呟き、うつむいた。さすがにオニールが恐いとは、言い出せなかったのだ。

僕が何を恐れているか気づかないなんて、それでも親かと言いたくなるが、彼には分からないのだ。何故なら兄さんはどう考えても苛めっ子を蹴散らすリーダータイプの子供だったから、苛められっ子の痛みなんて思いつきもしないのだ。彼にとってはまったく悩むような問題じゃないから。

「さてアレックス、分かっているだろうが、おまえの王都赴任が決定した。これまでおまえにはろくに独り立ちをさせなかったから、

私としてもこれは非常に心配なことではあるのだが、おまえも一人前の成人男子だ、ここはおまえの裁量を信用する以外にはない」

「はい」

「おまえの配属は内務卿アークランド公爵配下の内務局政務官だ。幾つかの内政部局を統括する上位機関だな。知っての通り、アークランド公は王子擁立派の代表格であり、此度の件で王位継承権第二位に繰り上がった。今後の成り行き次第では、宰相職を兼任も噂されている有力者である。

そしてもうひとつ任務がある。現在御聡明なる我らがフレデリック殿下は、行政を学ばれているそうだ。おまえは当面その補佐も任されることになった」

「……と言いますと？」

「フレデリック殿下の執政を学ぶに当たっての特別補佐官だ。簡単に言えば彼の勉強を助ける係りだ。言っておくがこれは家庭教師ということではない。そういう大役は国内トップクラスの学者が担うからな。

だがそうした連中の中には、理論構築には優れていても、教育者としては非常に不向きなのがいる。子供相手に専門用語を羅列するようなのが。おまえも実感としては分かるだろう。

だからおまえの役目はそれを噛み砕いて殿下に御教授差し上げるということだろう。必要に応じておまえの知りうることを丁寧に教えて差し上げなさい。

もっとも殿下はそのような救済措置が必要な愚か者ではない気もするのだがね、何しろ世継ぎの王子には学ばねばならんことが山積で、専門書をゆっくり読むような御時間はないのだろう。おまえが勉強ができるという話がまことしやかに王宮に流れたらしい。殿下は名指しでおまえを御指名下されたそうだよ。

よって、実質的にはおまえは当面、内務卿配下の政務官よりはフレデリック王子の特別補佐官を優先するということになるだろう。

おまえの教師であった連中の推薦状もそろい、後日おまえの学力を

試験する場が設けられるそうだ。ざっと見たところ、まあ名門男子であればクリアできて当然の試験内容だった。私が見てもおまえは賢い子供だからな、欠格となることはないだろうが、行って来なさい」

「はい。政務官に、フレデリック王子の補佐官ですか……」

僕は意外な展開に顔をあげた。

「内務卿直下の政務官は、これは紛れもないエリート職だ。州領爵以上の子弟しか就けない暗黙の慣例がある。しかもおまえのような若い者が就くことはかなりの異例だ。だから、おまえの人生の幕開けとしては悪くはない。

さて、頭のいいおまえに今更説明をする必要はないとは思うが、王宮においてはおまえは周辺に持ち上げて貰える主家の子供ではない。これまでとは立場が違うということは肝に銘じなさい」

「はい」

「繰り返す。アディンセル家のアレックスを、殿下直々に御指名下されたそうだ。

次期国王に名を憶えられていたことは、私としてもおまえを誇りに思うぞ。アレックス、この栄誉に報いるため、おまえは誠心誠意王子殿下に忠誠を尽くせ」

「はっ」

僕は姿勢を正して兄さんに敬礼した。

それを見て、兄さんは少し笑った。

第185話　辞令（2）

「さてアレックス。しかして王子殿下によれば、おまえには何名か部下を連れて馳せ参じることを御許可くださるそうだ。
そこで、ここにいるオニールが今後新たにおまえの手足となって働く有能な側近となる。騎士ではあるが、事務と諜報も得意分野だ。就任が今日まで遅れたのは、別の任務に当たっていたためだ。これまでヘイゲンの下で働いていたのだが、サヴィル家の三男坊だ」

兄さんが言うと、オニールは僕に対して慇懃無礼な会釈をした。どうにも無愛想な雰囲気は、ヘイゲン卿や長兄譲りだと思った。ジャスティンほど迫って来るような迫力はないが。
それはたぶん、他の人間からしてみれば単なる普通の会釈だったのかもしれないが、僕にはそうは思えなかった。
彼に対する心証は現時点で最悪なので、子供の頃のように条件反射的に逃げ出すような真似はしないものの、好意的に見ることなどとてもできないのだ。

「ところで兄さん、僕の王都赴任にあたって、シエラはどうなるのですか。僕は彼女を王都へ連れて行くべきでしょうか」

僕はオニールの挨拶に応じたくなかったので、すぐに兄さんに話題を向けた。
兄さんは執務机の上に両手を組み合わせて、神妙な顔をした。

「うむ、それなんだが――、実はな、シエラがフレデリック王子と既知ということは、おまえも知っていると思うのだが」
「ええ、そうみたいですね」
「おまえは話を聞いているかもしれないが、短期間、二人は学友の

ような関係だったことがあるらしい」
「学友ですか」
「魔術クラス、恐らくマスター・カタリーナの特別クラスのことだろう。魔力のある良家の子弟の招待制度がある。王子と姫は年齢が近いし、顔見知りとなれば、おまえが殿下との関係を円滑に持って行くために使えそうなことは確実だ。だから、一緒に連れて行きなさい。ただ」
兄さんは少し声を潜めた。
「婚約はなしだ」
「えっ？」
「おまえとシエラの結婚の予定は只今をもって白紙撤回とする。彼女とは性的な接触も持つな。繰り返すが二人は年頃が近い、そしてこれは非公式の情報なのだが、どうも王子がシエラに気があるらしい」
「気があるって……」
「ここが問題なのだ。現在進行形の話ではないが、かつてそのような素振りが見られたということだ。かつてと言っても、ほんの数年前の話だ。幼い王子が、クラスメイトのシエラを女として意識していたということだろう」
第三者として聞いているだけでも何とも気恥ずかしいような気がする誰かの恋の噂を、兄さんは真顔で、極めてシビアな実務口調で言った。
「他愛ない話ではあるが、こうした色恋沙汰というものは、実は想像以上に人間から平常心を奪い、判断を狂わせるものだ。扱いを誤れば、刃傷沙汰になることさえある。よっておまえが王子に仕官することになった以上、捨て置ける内容ではないと判断した。

率直に言ってシエラ姫はあれは上玉だ、私が知る限り、国内でも指折りの美姫であることに間違いない。となれば若い王子が食いつくかもしれん。だからシエラのことは餌に使う」

「餌、ですか？」

兄さんは頷いた。

「分かりやすく言えば、王子に彼女を献上するということだ。王子に女をあてがって、おまえの立場をより待遇のよいものにする。分かるなアレックス、私の言っていることが」

「それは、シエラをフレデリック王子の愛人に差し出せということですか？」

「私はおまえの立場を心配しているのだ」

兄さんは僕の言葉に被せるように言った。

「万が一王子殿下にシエラへの執着が燻っていれば、彼女を娶るおまえに対する心証が悪くなることは請け合いだ。殿下がそれを表に出す人間かどうかは分からないが、おまえとシエラが結婚することで、もはや我らには得られるものよりは失うもののほうが多いことは分かるな。

過去にも臣下が妻だの婚約者だのを、王に取られたという事例は幾つもある。だがその多くが、その後の人生冷や飯を食わされるなり、抹殺されるなり、ろくな末路は辿っていない。相手は世継ぎの王子なのだ。

それに比較すれば、ランベリー領の地元民の心情などもはやどうでもいい。あれは道具と思って、適当な場面で最大限有効に使うことだ」

「でもそれはあまりに……、……いえ。分かりました」

「そうだよ。花嫁となるはずだったシエラを差し出すということは、

おまえとしては納得ができないかもしれないが、これも経験だ。
そしてこのようにあらゆる場面で時勢を読むことは王子の補佐官として非常に大事な資質だ。これまでのようにぼうっとしていてはいかん。状況は刻一刻と変化をしている。
シエラのことは諦めなさい。おまえの花嫁はまた私がみつけてやる。いいね」

僕は黙って頷いた。侯爵令嬢との結婚さえ兄さんの一言で覆ってしまうとなると、コンチータのところに挨拶に行ったり、ここのところの自分の将来を思っての僕の動揺や混乱は、いったい何だったのかと思わないではなかったが……、それに僕の花嫁をこれからも兄さんが決める気でいるのもあれなのだが……、これが大人の世界であり、政略なのだろう。

「いずれにしても、人見知りのおまえには大変な環境かもしれない。なじむのには時間がかかるかもしれないが、上手くやりなさい。
オニール、おまえはアレックスに対する絶対服従と生涯の忠誠を誓いなさい。
おまえの生命は以後アレックスの利益のためにのみ使われることになる。以前のような立場を弁えぬ乱暴狼藉がないようにな。今後誰がおまえの手綱を握る主であるかを肝に銘じよ」
「はっ」

第１８６話　夜の庭園（１）

実際のところ、僕は完全にほっとしていた。

シエラと結婚しないことになって僕が感じたのは、残念だとか、がっかりだとか、そういう未練めいた感情ではなくて、苦難だとか試練だとかが目前に迫っていて、だけど幸いにもそれに見舞われずに済んだ人間が感じるような、ひたすらな、脱力するみたいな安堵感だった。

僕はシエラを美しいとは思うけれども、まったく気持ちが惹かれてはいなかったのだ。美人だから他人に対する自慢になるとは思っても、それが所詮はいい服を着るとかいい馬を持つとかそういうようなことであることには気がついていたが、まさかこれほど……、気持ちが楽になるとは思わなかった。

だからこれまでシエラと夜のデートだけは極力避けていた僕だったが、その晩は誘われるまま居城内の夜の庭園を散策していた。微妙な距離を保ったまま。心の負担はできるだけ早めに片づけておいたほうがいい。つまり婚約解消になった話を、僕の口から今日のうちに打ち明けてしまおうと思ったのだ。

距離を保って歩いているのは、言うまでもなく僕だった。シエラはさっきから何とか手を繋ごうとしているのだが、僕はもうそれに応じるわけにはいかないので、シエラが白い手を伸ばすたびに頭を触ったり、その辺の木の枝を触ったりした。

彼女は本日の午後をもって僕の結婚予定者ではなく、王子殿下の愛人となることが決まった娘だからだ。高貴な方に献上する女に、手なんか触れられるわけがなかった。

季節が春めいてきた頃から、庭園の草木は一斉に芽吹き、香り立つように花を開かせた。庭師が出入りし、花壇には咲き零れるほどの花々がひしめいていた。

でもこの世界は何とも醜悪だ。少なくとも兄さんがこれまで生きて

いらした世の中は。それは一度は結婚相手だと決まっていた女さえ、状況によっては上司となる人間に差し出すことが当然の非情な世界だったのだ。

僕はシエラに対してあまりそうした特別な感情を持っていないから、この決定を苦痛とは思わなかった。フレデリック王子はとても美しい方だし、人格が悪いという話も聞かない。それに殿下とシエラが知り合いだと言うなら、これは女性としてもそんなに悪い話ではないのだろうと、納得するための材料は多かったからだ。

でももし僕がシエラを愛していたなら――、これは身を切られるような過酷な決断を、自分に強制しなくてはならない状況なのだろう。かつて兄さんが初恋のアレクシスを、トバイア公の身勝手によって没収されたことと同じように。

僕の隣を歩くシエラは、今夜もとても可愛かった。彼女は本当に、劇場の女優なんてものが色褪せるくらい素敵な美人だった。

王子のことをどう思っているのか、そんな話を切り出してみようかと考えていた。彼女を政略の道具にするために、できるだけ高く彼女を殿下に売り込むための方法を、講じるために。

シエラはそんな嫌な世界を知らない、少女のあどけなさを持っているのに……。

僕はもう、シエラのことをそういうふうな目で、品物を見るような目で、値踏みしている自分に気がついてちょっと呆れた。

僕はこれまであれほど嫌っていた汚い大人に、軽蔑していた兄さんのような考え方をする大人に、いつの間にかちゃんとなっていたのだ。それでもこうやってまだ割り切れていないだけましなのか、それともさっさと割り切って、慣れてしまったほうがいいのかは分からない。

恋愛事など、権力を持ち、所領や国家に影響力を持つ兄さんのような人間にとって、所詮はこの程度の優先順位なのだと改めて思い知った日でもあった。彼は理想とか、愛する女のために生命を捧げるようなことを愚行と認識する大人という人種だった。理想や革命に

身を投じて死に急ぎたがる若い感傷で損失を被るような真似はしない、けれど彼は憎むべき人間では決してない。彼は模範的な指導者なのだ。アレクシスのために感傷に浸るようなことなんて、今の兄さんにはないのかもしれない。

お姫様育ちのシエラは、僕のそうした逡巡など知らない無邪気な笑顔だった。

可愛いシエラに素直に恋していたら、今夜は王権に引き裂かれる悲恋の恋人のごとく、ドラマチックな人生の一瞬を過ごしていたのだろうか――。

「アレックス様はときどき何処か別の場所にいらっしゃるみたい」

シエラは僕を見上げて言った。

「ああ、ごめん」

僕は我に返って隣を歩くシエラを見た。

「考え事をするのが癖なんだ」

「ロマンチストね」

シエラは微笑んだ。

「夢をご覧になるの？」

シエラは僕にたずねた。花の庭園の石畳の上を歩く可憐な少女、月の光に照らされた彼女の肌はますます白く、結い上げられた長い髪には微かに月の光が躍って、とても神秘的に思えた。僕は笑った。

「白昼夢ってわけじゃないよ。つい考えてしまうだけなんだ」

僕はシエラと結婚しなくて済むことになってはじめて、気楽な気持ちでシエラと話していた。

「どんなことを？」

「うん、いろいろなこと。そのときどきで」

「哲学者みたい」

「ありがとう」

「フレデリック様は夢を見るのですって」

僕は一瞬、動揺してシエラを見た。

「へ、へえ、フレデリック様が？　そう、どんな夢を？」

「分からないわ。過去や未来のことを見るのですって」

「予知夢とか、かな？」

「でも、あまりいいことじゃないそうよ。つらい夢ばかりだとおっしゃっていたわ。そのお話を伺ったのは、もう随分前のことになるけれど。あの方がめずらしく弱気なことをおっしゃったので、憶えているの」

「彼が心配？」

僕がたずねると、シエラは微笑んできっぱり首を横に振った。

「フレデリック様はお強いから一人で平気よ。それより私は貴方の傍にいたいの」

まずい雰囲気を察したのは言うまでもない。シエラは僕の腕に腕を絡めようと手を伸ばしかけていた。僕は逃げようとしたが、女の手をぞんざいに払い除けるわけにもいかず、僕は掴まった。

「アレックス様、お願いがあるの」

シエラは満足そうにして僕の腕にしがみつき、それから何処か潤んだ眼差しを、うっとりと僕に向けた。今が昼間ならばまず起こり得ないであろう会話の続きを予見して、僕は焦った。

「私ね、まだ一度もキスをしたことがなくて……」

「あっ、そ、そうなの」

「だから……」

シエラは恥ずかしそうに睫毛を伏せて、僕に囁いた。

「キス……、してください」

第187話　夜の庭園（2）

腕を引いてキスのおねだりなんて、そんなラブリーな誘惑をされたことがなかった僕は、思わず言葉を失っていた。
これは腕利きの殺し屋も真っ青の、何という必殺殺し文句であろうか！？
君は王子様の女になるのでできません、なんてこんな場面でどうして言えるだろうか！？

「えっ、いやっ、そんな、駄目だよ」

僕は慌てふためいて言った。

「どうしてですか？」

シエラは上気した顔で、僕の腕を両手で掴んだまま、少し不満そうな顔をした。

「いや、ほら、だってあの――、そう、そうだ、いいところのお姫様がそんな、結婚前にそんなことしたら駄目だよ。シエラは知らないかもしれないけど、そういうのはね、あばずれのすることなんだ。だからそういうことは、結婚してからにしないと」
「でも、私たち結婚するでしょう」

その話は立ち消えなんだと、僕はシエラに厳しく言った。頭の中で。

「十八にもなってキスもしたことないなんて、恥ずかしいの……」
「そんなことないよ。全然恥ずかしいことない。寧ろそれっていいことだよ、十八歳なんて、ちっとも恥ずかしくないことだ。だって

僕なんて十九までしたことなかったし」

僕はそれほどまずいことを言ったか、分からなかったのだが、間もなくシエラの笑顔が萎んだ。

「えっ？」

「タティさんとなさったの……？」

シエラの表情がたちまち悲しげな、しかも憮然としたものになったのだが、それが、あまりに見たことがないほど不機嫌そうな様子だったので、僕は慌てて取り繕った。

「いや、それはタティじゃない。あの、別の人……」

するとシエラが不機嫌を通り越して泣きそうになり始めたので、僕は更につけたした。

「でももう死んだ」

「いいんです、無理に嘘を吐かないで。タティさんとキスしたのでしょう？」

「いや、本当だよ」

「私なんて、きっとタティさんより魅力がないということなのでしょう？」

「違うよ、魅力とか、そういうことじゃなくて……」

もうそういう次元の話じゃなくて、君は王子様の女になるから政治的にだよ、という言葉を僕は飲み込んだ。それを言うために今夜はこうしてシエラと歩いていたはずだが、僕は夜と、庭園の花々の甘い香りと、それにシエラの可愛らしさにやられかけていた。

こんなとき、兄さんならいったいどうやって事態を切り抜けるだろ

うか？
兄さんなら熱いキスでもして黙らせそうだが、僕は律義な男なので、それだけはやってはいけないのだ！　良識のある紳士なら、その選択肢はないものだ！

「いいんです、そんなふうにおっしゃらないで」

シエラは囁いた。

「シエラ、あのね、つまり」

と思いきや、不意にシエラが僕の腕を引いた。いきなりだったのでちょっと姿勢を崩し、シエラは僕の唇の下に唇を押しつけた。
何が起こったのか分からない一瞬の白い間を置いて、僕はすべてを理解し青ざめた。
シエラは無理やり僕にキスをするという手段を敢行したのだが、運よく背がちょっと届かなかったのだった。

「だっ……、駄目だって、ああ、自分からこんなことするなんて！？」

僕はさすがに顔が熱くなって、うろたえた。
僕は王子様への献上品を傷物にしたらまずいのだということを第一に考えたのだが、シエラはそうではなかった。彼女はまるで今この瞬間を恋する表情で、僕を見ていた。

「はずしてしまいました……。ファーストキス、したかったのに」

シエラは真っ赤な顔で僕に言い訳した。

「アレックス様は、背が高いから……」

その恥じらう様子がかなり可愛く、僕は別の意味でまずいと思って目をそらした。この関係は本日をもって強制終了のはずなのに、今更この変なムードは何なのか。これが暗闇における男女の法則というやつか。

ともあれシエラの外見の美しさが、完全に物を言う状況だった。男の視覚に訴える強烈な魅力は、シエラのような選ばれた美人の強みだ。キスされたくらいで妙な気分になるなんて、僕は自分が考えていた以上に、非常に単純な男だったのだ。

「もう夜も遅いから」

しかし僕は理性あふれる常識的な男なので、ともすればシエラの唇に目がいってしまいそうなこの呆れた動揺をひた隠し、何とか冷静になって言った。

「そんな、もっと二人でいたいわ」

シエラは僕を見上げて拗ねた声を出した。

「怒って、しまわれたの……？」

「そうじゃないよ。でも今夜は本当にもう遅い」

「私、遅くてもいいわ」

「駄目だよ。聞き分けて。残念だけどもうおしまいなんだ。もう寝なきゃ」

「アレックス様、でも……」

「駄目だよ」

「……はい」

シエラはしゅんとして、僕の言うことを聞いた。
僕の言うことを、僕が兄さんに従うみたいに聞くなんて、可愛いにもほどがあるのだが、残念ながら本当にもうこの関係はおしまいなのだ。
人生とは世知辛い。朝になったら忘れるとしても。
結婚が取り消しになったことを伝えるのは、やっぱりまた後日にしよう。
それとも僕の口から言うのは混乱を招きそうなので、ここは兄さんがシエラに言ってしまうのを、待ったほうがいいかもしれない。

「おやすみなさい、アレックス様」

何も知らないシエラが、立ち去り際聞き分けよく可愛く手を振った。
ファーストキス未遂。少女が恋の始まりを確信するのには、十分に刺激的な出来事だったに違いない。
しかし実はもう全部終わっていることを、無邪気な彼女はまだ知らない。

「おやすみ。いい夢を」

第１８８話　探求と秘密主義

僕は悪い男だ。女に不意打ちのキスをされても動揺ひとつしない。こんな場面にいちいち狼狽しない。女関係が乱れているのはいつものことだからだ……、という妄想をすると、僕は見た目がニヒルなので結構絵になる場面かもしれないと思った。

明日辺り、シエラは兄さんに呼び出されて、結婚がなかったことになったことを知らされるだろう。

それですべては完全に白紙だ。危ないところだったが、殿下への献上品を傷物にしないで済んだことだし、シエラも頭を冷やせば王子様のほうが顔がいいってことに気がついたりして、僕のことはすぐ忘れるだろう。

彼女はきっと年下の子供なんて相手にできないとか思っているのかもしれないし、殿下のロベルトお兄様に似ていない快活な性格に戸惑うのかもしれないが、近いうちギルバート卿にとって代わる王宮一の貴公子になるであろうフレデリック様の魅力と、国家の支配者に愛されるというファンタジックな自分の人生に夢中になるはずだ。光のお姫様とか魔女とか言ってるお伽話が好きなシエラは絶対そういうのに酔うタイプだと思うし、まあそれはそれでちょっと癪ではあるのだが。

とそこへ、夜の庭園の闇の中から、浮かび上がるようにしてカイトが現れた。

「あ、カイト」

カイトは暗い低木の茂みの中から前に踏み出し、両脚についた葉っぱを払い落しながら言った。

「時間なのでお迎えに上がりましたら、いい雰囲気だからつい隠れ

ちまった。
アレックス様、憶えてます？　今夜は剣術の稽古の日なんです。貴方が俺に頼み込んで、俺が貴方の先生をやるんですよ。もしかして、俺には夜の予定がないみたいに思われているかもしれませんが、まあデートの予定なんてないですけども」
「いや、そんなこと思ってないけど……」
僕はカイトがシエラのことを好きだということに気づいていたから、今のキスについて、何とも言い様がなくうつむいた。
おまけに彼女を王子殿下に売り渡すことになりそうだなんて話をしたら、シエラに恋する彼からすれば発狂ものだろう。
「美形だと、人生にはそういうイベントが目白押しなんですね」
カイトは腕組みし、恨みがましく文句を言った。
「俺は生まれてこのかた女と手を繋いだこともないのに」
「いっそ清々しいじゃないか」
僕は言った。
もっとも最近では、カイトが言うそのての自虐話は、果たして何処までが本当なのやら分からないと、思っていたりするのだが。
するとカイトは両手で顔を覆って、例のごとく泣き真似を始めた。
「……でも本当は手ぐらい繋いだことあるんだろう？　幾ら何でもさ」
僕は横目でカイトを見ながら呟いた。
当然、僕はカイトのことを疑っていた。僕はこれまでカイトの私生活になんか一切興味はなかったし、今だって特にはないのだが、何

しろこれだけ社交能力があるおしゃべりな男が、女と手を繋いだこともないなんてことが、あるはずがなかったからだ。

「ぐすん、ぐすんっ」

カイトは鬱陶しい泣き真似を続けていた。

「どうも嘘臭いんだよね。君みたいに女に物怖じしない男が、それは絶対変だよ」

「ぐすん、ぐすんっ」

「君さ…、どうせほんとは経験豊富だったりするんだろう？もてないなんて言って、引っ込みがつかないだけで、実際はちゃっかりやることやっている気がするっていうのかな。どう考えても…、君って自分で言うほど悪くないよ。別によくもないけど、少なくとも女に敬遠される要素はないよ。身分もあるし、身長もあるし、腕も立つんじゃ……、ルイーズは君のことセクシーだって言ってたしさ。セクシーって、つまり性的魅力が高いってことだよ。僕にはその辺の彼女の感性はまったく理解不能だけど、女からするとそうなのかも。マニアだけかもしれないけど。だからどっちかって言うともてるんじゃないのか？

まあ兄さんみたいにとはいかないだろうけど、僕の予想では五人くらいかな……、童貞だとかハーレムだとか適当なこと言ってたのは、あれは内向的な僕と打ち解けたいがための嘘。違うかい？　そのての連帯感っていうのは、大切だからね」

「ぐすん、ぐすんっ」

「悪いけど分析させて貰ったよ。それで君は割と面食いなんじゃないかな」

「ぐっ……」

「だから好きな女はたぶん……、かなりの美女だろうね。悪いが君じゃ手が届かないようないい女だ。最初はルイーズかと思ったけど、

どうも違うらしい。違うって気づいたのは、別の人物と接見した君の態度があからさまに動揺していたからだったんだけど」

「……」

カイトの泣き真似の声が止まったので、僕はやはりビンゴかと思って、言葉を続けた。

「まあいいや。つまり君、本当はシエラに気があったんだろう」

僕は言った。

「知ってるんだ。本当は随分前からね。でも、悪いが彼女のことは諦めて欲しい。

僕としても、できればヴァレリアよりはシエラを君の花嫁にしてやりたいと思う気持ちはあったんだ。君さえ打ち明けてくれるなら、シエラを君にあげてもいいと……君の幸いを心から願う親友としては。でも状況が変わってしまった」

「ええ？」

するとカイトは顔を上げて、ぽかんとして僕を見た。

「いえいえ、シエラ様に気なんてないですよ」

彼は真顔になって手を振った。

「えっ？　そうなのか？」

「ええ」

「でも君、急に彼女に対して態度が変わったことがあっただろう？　確か年末までは全然そうでもなかったのにさ、年明けからかな、急にシエラにちやほやしてたから」

カイトは少しの間考え、それから僕に笑いかけた。

「ああ、そうでしたね。そうそう」

「だから好きなのかと思っていた」

カイトはかぶりを振った。

「違いますよ。あれはね、びびっちゃってたんです。ある日突然あれは侯爵家の令嬢だって聞かされて。それにアレックス様の花嫁だって閣下に教えられてね。ちやほやするしかないでしょう？　そんないいところの姫君相手じゃ。普通なら、俺なんか口も聞いて貰えないような家柄なんですよ」

「君は自分を過小評価しすぎだ」

僕は呟いた。

カイトはそれに、しみじみと同意するように頷いた。

「そら、奴隷根性ってやつなんですかねえ。閣下にも注意を受けることなんですが、どうにも性根に染みついちゃっているんですよ。卑屈さが……、自分でも自覚はあるんですけど、これがなかなか取り除くのは難しくて」

「じゃあシエラが好きってわけじゃなかったのか」

「ま、あれほどの美人に好かれているのは正直妬ましいですけど。シエラ様は、さすがに俺には高嶺の花だってことは、常識的に言って分かりきっていますしね。

だいたいあの姫君の目には、俺みたいな下々の者はまったく異性として映ってないですよ。あれはお世辞抜きで育ちがいい。育ちがよすぎて側にいるだけで卑屈になっちまうくらい。それに彼女は最初からアレックス様しか見ちゃいなかったです」

「本当かな？　無理してない？」

カイトが強がりを言っていると思って、僕が顔を覗き込むと、カイトは顔色なんか読ませまいと思ったのか過剰におちゃらけ出した。
それから、また真面目な顔に戻ってこう答えた。

「神に誓って、違いますよ。そいつは貴方の勘違いです」
「ふうん、じゃあ誰が好きなんだ？」
「それは言えませんな」
「なんでだよ。婚約してもまったく嬉しそうじゃないとなると、ヴァレリアに惚れてるようには見えないし……、僕にも言えないのか？　僕らは親友だろう？
相手の女がどんな人なのかだけでもいいから。何だか見ていてつらいよ。他に好きな女がありながらヴァレリアと結婚しても、君は、それにヴァレリアだって幸せにはなれそうにない気がしてさ。
だから可能な限り軌道修正の手伝いをしてあげたいんだ。
確かに僕は頼りないだろうが、でも君が思っているほどじゃない。
僕には人事の決定権はないけれども、兄さんに意見を言うことはできる。僕が何か条件を飲むことで、君の結婚相手を換える許可を貰うことはできるだろう……、前ならこんな考え方は思いつかなかったけど、兄さんはたぶん、こういうやり方なら聞く耳を持ってくれるはず。
相手の女性が独身なら、まだ何とかなるかもしれないじゃないか。
必要なら、兄さんの立場を利用したっていい。そうすれば、大抵の相手とは渡りがつけられるはずなんだ」
「いいんですって」
「なんでだよ。諦めるのはカイトの悪い癖だ」

僕が食い下がると、カイトは再びおちゃらけた挙句に強引に話を終わらせた。

「だって……、それにそんなことを口にしたら、もう一回逢いたいって願いが叶わなくなっちまうかもしれないでしょ。願掛けの邪魔をしちゃ駄目ですよ。だから絶対言いません。だから秘密、秘密っ」

第189話　梟の謎

その夜は奇跡の前兆のように外が明るかった。
僕は子供の頃、夜の暗闇を恐れたものだ。そこに魔物が潜んでいるような気がして、小さな遮蔽物の影が蠢き揺らぐ様を想像しては、身体を小さくしていた。随分大きくなるまで、夜間用を足すのに、コンチータのつき添いは欠かせなかったし、さすがに乳母につき添って貰うのが恥ずかしい年齢になっても、僕はいつも、かなり痩せ我慢をしていた。
だがその日は足下の暗い茂みにさえ微笑みを投げかけられるほどだった。

「ご機嫌ですな」

カイトが僕を見て言った。

「そうだね。なんでかな、さっきから気持ちが軽くて……」

シエラと結婚しないことになったことが、僕はそんなにまで嬉しかったのだろうか。それにしたって引き換えのようにオニールとか言う馬鹿の登場が確約され、それはかなり憂鬱の種だったし、あんまり気持ちが高揚するはずはないのだが。
それから連れ立って夜の廊下を歩きながら、僕はもう一度シエラのことをカイトに確認した。

「じゃあつまりシエラのことは、特に何とも思っていないんだね？」
「ええ」
「後からそうじゃなかったなんて言うなよ。やっぱり好きだったとか。そういうことは、今ちゃんと言ってくれ。ここは遠慮なんかす

べき場面じゃない。でないと、取り返しのつかないことになるから」
「取り返しのつかないことって？」
カイトに訊ね返され、僕は重く答えた。
「もう手が届かなくなるっていうこと」
「アレックス様との結婚が、いよいよ正式になったんですか？」
「違う。そうじゃなくて……、それどころか、僕とシエラの結婚は白紙だ」
「えっ？　そりゃまたなんでなんです？」
「シエラはフレデリック王子と学友だったらしいんだ」
僕は罪悪感を押し込める作り笑顔でカイトに言った。
「だから……、兄さんはそれを利用しろとおっしゃった。政略に」
「政略って……」
「シエラをフレデリック王子の愛人にすることで、僕の立場を確保しろということだよ。昼間のことだけどね、彼女を王子に献上しろという話になったんだ。
王子様がね、どうも前からシエラがお好きらしいんだってさ。だから、王子様の好きな女と結婚なんかしたら、アディンセル家に対するペナルティたるや向こう数十年間とんでもないことになる。殿下が王位に就かれたらそれこそ、お考えひとつでウィスラーナ家みたいなことにだって、なりかねない。
だから、早めに手を打っておくんだ。シエラは王子様に献上して、こちらは危険回避と同時に殿下の点数を稼ぐ。シエラは殿下の玩具にされて、いずれ飽きられたり、御子なんか孕んだりしたらたぶん消されるけど、こっちは安泰ってわけだ。すごいだろう、兄さんって。血も涙もないよね。結構シエラのこと可愛がっていたのにさ、いきなりバッサリ切り捨てるんだから」

「アレックス様……」
「でも僕もその方法でいいと思った。シエラを殿下に売り渡すことには賛成している」
カイトは驚いたような表情を隠さなかった。
「アディンセル家のためだよ」
僕は両手を広げて続け様に自己弁護した。
「僕は、アディンセル家と与る領地を守らなければならない。これは多くの領民の人生に関わることだ。それに何より兄さんをお助けするためなんだ。兄さんは国境領主として、これから非常に大事でデリケートな局面を迎えることになる。次期国王の信頼を勝ち取らなければならないんだ。
だからそのためには、僕は女ひとりくらい、売り渡すくらいのことができなければ駄目なんだ。僕は何を置いても兄さんの利益のために動かなければ」
僕は自分の意向をカイトに伝え、その理解を求めるべくカイトをみつめた。
有難いことにカイトはすぐに驚いた顔を引き締め、僕の意見に賛同した。
「分かります。そのお考えは州領主の弟として、非常に正しいです。俺は全面的にアレックス様のお考えを支持します」
「カイト……」
「アレックス様が、そのようなお考えを持つに至ったこと、長らくお仕えした者として嬉しく思います。
……何つうか、俺としてもね、寧ろアレックス様はそういう知略方

面が得意になられるだろうなっていう予感はあったんですよ。頭がいいから。いろんな知識を持っている分、思わぬところで思考の幅も広くなるでしょうしね。だからいつも思っていた。もう少し、貴方が女子供の考え方を捨てることができればと。ただ……、疑問が」

カイトは少々不審そうな眼差しで僕を見た。

「何？」

「なんでまた、シエラ様をフレデリック殿下にその……、献上しようなんて話になったんですかね？　閣下がおっしゃったにしろ、どうも話が唐突すぎる気がするんですが、どういう経緯で？」

それで僕は、まだ事の経緯をカイトに知らせていなかったことを思い出した。

「大事なことを君に話すのを忘れていたよ」

僕は照れて微笑んだ。

「実は僕、フレデリック王子の部下になることになったんだよ」

「ええっ！？」

するとカイトがいきなり大声をあげて、僕に縋りつかんばかりに近寄った。僕の両腕を掴んで、問いただすように僕を揺すったので、僕も同じくらい慌てふためいてしまった。

「フレデリック様の！？　何ですか、そりゃ！？」

「えっ、な、何が？」

「だ、だから、王子様の部下って……」

「ああ、うん、今日のことなんだけどね、兄さんから正式に辞令が

下ったんだ。僕、今度から王都でフレデリック様にお仕えすることになったんだよ。内務卿の下に所属する政務官、それに臨時で王子殿下の特別補佐官。期間限定な分、たぶん殿下のほうを優先するっていう話だったと思う」

「補佐官……ですか」

「うん」

「補佐官って……、何するんです？　もしかして一日中べったり？」

「そうだね、いや、まだ分からないけど。殿下に呼ばれたときは、たぶん」

僕はこれまでのカイトやシエラの仕事ぶりを思い出し、肩を竦めた。

「フレデリック様の内務のお勉強の補佐官なのかな？　僕が教える立場になるわけじゃないみたいなんだけど、高名な先生の通訳みたいな感じでお呼びがかかったみたい。武官の出なのに思いっきり文官仕事だけど、栄誉ではあるよ。得意分野なので無理することもないだろうし、ほっとしてもいる。とにかく彼の勉強を助けるんだ」

「すごい……、勉強ができるって、本当に出世に繋がるんですね」

「出世かどうかは分からないけどね。でも、とにかくこれからは僕が、君みたいに王子殿下の側に直立していなきゃならないのかも。ずっと姿勢を正していないといけないかと思うと、かなりプレッシャーだよ。

夜会のとき、ちょっとお話した印象からすると、割とお優しい御性格じゃないかとは思うんだけど、でも何か気合いが入っていたような気もするからね。

率直に言って、若い王子を相手にするなんて、どうしたらいいかとは思っているんだ。何か共通の話題でもあればいいんだけど。僕が十七歳のときって、何に興味があったかなって思い返していたんだよ。

王子様の御趣味って、ちょっと僕には想像つかないんだけど、いろ

いろ話題の引き出しの準備だけはしておこうと……、お菓子作りとはいかなくても、虫が好きだといいんだけど……、あれ、君、僕の話聞いてる？」

カイトは両手を口許に当てて、何とも表現しようのない表情をして、まばたきをして僕のことをただ見ていた。

「どうしたんだ？　何だその変な反応？」

第１９０話　希望の使者（１）

夜半をまわる頃、居城内の赤楓騎士団の訓練場を出た僕は、外が明るいことに気がついて天頂を仰いだ。
僕はここのところ、カイトに武芸の訓練を頼んでいたのだ。本当はそんなことに時間を使いたくないのだが、戦争の専門家とも言える侯爵家の男子が騎士として無能だと、ロベルト侯のように誰からも相手にもされないことになるのは目に見えているので仕方なくのことだった。
訓練場は夜遅くまで賑わっており、熱心な若い騎士たちが木刀をもって手合わせをする音が建物の外に出ても聞こえているほどだった。資金源のあるアディンセル家では、緊急時にのみ騎士や兵士を掻き集めるのではなく、平時から多くの志のある者たちを養うという形を取っている。生活の片手間に武芸を身につけるのではなく、日頃から戦闘訓練をすることで高い給金が支払われる職業軍人たちを大勢雇っているのだ。
こうした試みの拡大を図ったのも、兄さんの代から始められたことだ。父上は戦闘行為に対して消極的な思想の持ち主だったが、ギルバート卿はそうではなかった。彼はアディンセル家を立て直すためにどんなことでもやった。
最初、僕がこの場所に夜な夜な現れることに好奇の目を向けている連中もいたのだが、何夜もすると誰も僕のことを気にすることはなくなった。僕も彼らと同じ目的をもって、必死になっている姿を認めて貰えたのかもしれなかった。

「腕は悪くないんです、やっぱり血筋ってあるんでしょうね。少しずつ、目に見えて上達をしていますよ。
アレックス様の難点っていうのは、いちいち頭で理解しようとするところでしょうかね。だからどうも反応が遅くなる。まあこれは貴

方の癖なんでしょうけど」

訓練帰り、城内の高い石壁沿いを歩きながら、カイトはその日の反省を僕に話していた。

「他者を攻撃するってことに、意外とためらいがないのもいい。これは本来の性格が出ます。

後は一度実戦に参加されると、人を斬るってことの感覚が分かると思うんですけど。鉱山周辺の賊狩りは定期的に行われていますから、それは丁度いい練習になると思うなあ。今のうちに、一度経験しておくといいかもしれない。

でも血を見たらどうなるかってのが、懸案ではありますね。思い出しますよ、自分で足をちょっと切っちゃって、ぶっ倒れたときのこと。閣下が血相変えて飛び込んで来て、あんときゃ俺は自分の生命はもうないなって覚悟したもので……っと、アレックス様、聞いてますか？」

春の夜風を頬に感じながら、僕は顔を空に向けたまま、カイトに肩を叩かれてようやく彼に目を向けた。

「何を見ているんです？」

僕は夜空を指差した。

「ん？　やあ、綺麗な月ですね」

カイトは微笑んで答えた。

「春の宵の……なんて歌がありましたね」

「タティは元気かな……、いや、病気なんだから元気なはずはない

んだけど、僕は月を見ると彼女を思い出すんだ。誕生石が、ムーンストーンだからかな」

「いや、雰囲気も似ているんじゃないですか。決して出すぎず、ほんわかしてて」

カイトの言葉に、僕は頷いた。その通りだと思ったからだった。

「タティがこの城の離れで暮らしているのは、本当は兄さんの策略だよね。あの離れはそこそこいい建物だし、伯爵妃と同じ待遇だなんて、二十年僕に仕えてくれたタティに対する格段の温情のようにも見せかけているけど……、タティを実家に帰したりすれば、僕が勝手に会いに行くと思って、兄さんはそれを阻止するために幽閉したんだろう」

僕が呟くと、カイトは肯定するでも否定するでもなく黙っていたが、幾らか不自然な態度から、おおよそその推測が当たっていることを読み取ることができた。

僕はふとたまらなくなって、感情を吐露した。

「兄さんは、本当にとんでもないよ。僕は彼には敵わない。こんなことになるなら、兄さんがタティを妾にするなんて言い出した時点で、彼女に暇を出してあげればよかったよ。いや、コンチータが退官するときにでも、一緒に……、どうせ魔力は消えちゃってたんだから、僕に仕えてる意味なんてその頃にはもうなかったんだ。僕が我侭を言ったせいで、僕なんかに係わったせいで、とんだことになってしまったよ……」

カイトは僕の話を、黙ったまま聞いていた。

僕はタティがサンメープル城の離宮に移されてから、もうかれこれ三か月、彼女と会っていなかった。ときどき手紙は書いているが、

返事が返って来たことはなかった。
彼女はマリーシアに浮かれていたり、馬鹿をやった僕のことを、今でもきっと怒っているんだろう。当たり前だ。振りまわすだけ振りまわして、やっぱり君が好きだったなんて言ったところで、誰がそんな言葉を信じる気持ちになれるだろう。
僕は、女の人の生命力を奪うなんて恐ろしい業を背負っていて、タティは僕のせいで死んでいくんだ。

「僕が守ってあげるって、約束したのに破ってしまったよ」

僕が言うと、カイトは理解を示すように静かに頷いた。

「タティはね、可愛いお嫁さんになるのが夢だって言ってたんだ。でも女の人が可愛いお嫁さんでいるには、誰かが本当に守ってあげなくちゃ無理だ。
タティみたいな女の子は、強い、それこそ太陽みたいなタイプの男に護られていないと生きていけないんだろうなって、思ったりするよ。
例えば君みたいに。兄さんみたいに。積極的で、能動的な男のほうがあっているんだろうって。それにタティは陽気な男が好みなんだ。だからカイト……、もし君がタティのことが好きだって言うなら、今の僕にしてみればそれは願ったりのことだよ。
君の手で、彼女をあそこから連れ出してあげて欲しいと頼むのに……」

僕が言うと、カイトは不思議そうな顔をして僕に言った。

「では、貴方がそうしてはいかがです。それで、貴方が彼女の太陽になったら?」

僕は小さく笑った。

「無理だよ。僕に駆け落ちでもしろって言うのか？」

「それもひとつ」

カイトは言った。

「駆け落ちね。まるで君のご先祖だ。駆け落ち三男。貴族の息子を狂わせる、余程の美人がいたんだろうね。うん、そういうのも、悪くないね。君お得意の妄想か、夢物語なら」

僕は暗い夜の足下を見ながら呟いた。

「僕は勇敢な旅の騎士。剣を天に掲げ、塔に閉じ込められたお姫様のタティを助けるんだ……。いいね、僕、そういうの嫌いじゃなかったよ。お伽話としてなら。でもそれは極めて非現実的な逃避行動だ。寝室に逃げ込むのとは次元が違う。常識のあるまともな男の採る行動じゃない。カイト、僕はもう、責任を投げ出すことはできないんだよ。一人前の男なんだ。僕はもう、それまでの僕とは違う――」

「けれどもお姫様には呪いがかけられていて、このままでは遠からず死んでしまう」

カイトはまるで何か物語でもなぞらえているように言った。

「残念なことに、彼女にかかった呪いを解く方法を、旅の騎士は知らなかった。でも彼はそれを知っている可能性のある人物と、コネクションはないこともない。最近できたばかりのコネクションだが、信頼できる筋だ」

「何言ってるんだ？」

「頭使えってことですよ」

カイトは自分のこめかみをつつきながら言った。

「タティを助けるための最後にして最大のチャンスが、幸運にも信じられないタイミングで、貴方の前に転がり込んで来たことに気がつきませんか？」

僕は分からずに、首を横に振りながらカイトを見た。

カイトは言った。

「フレデリック王子と、コネクションができたってことを忘れていませんか？

世継ぎの王子なら、ローズウッド王家が抱え込んでいる秘密の魔法を識り得る立場ではないですか。神族に連なる家系なんでしょ。肺病くらい、治してしまえる魔法があるかもしれない。延命の措置くらいはできるかも。とにかく頼み込んでみる価値はある。彼の教師のような役目につくなら、確実に話は聞いて貰えるはず」

第１９１話　希望の使者（２）

僕は一瞬、カイトの話が理解できずに思考停止した。

「カイト！」

そして僕はこの思いもかけない素晴らしい提案に、飛びあがるほど感激して彼を見た。

それはこの世界のどんな知恵者の返答かと崇拝の念を抱いてしまうほどの、まさに世紀の名案だったのだ。

僕は興奮し、思わず叫んだ。

「すごい！　そうか、そうだよ、その手があるじゃないかっ！　全然思いつかなかったけど、フレデリック様に頼むって手段が……、ああっ、君ってなんて……悪知恵が働くんだ！」

「悪知恵じゃなく、機転と言ってくださいよ」

「どっちでもいい！　そうだよ、フレデリック様なら事情をきちんとお話すれば、タティを助けてくださるかもしれないっ！」

カイトは頷いた。

「ええ、率直に言ってそういう御性格じゃないかと俺も思います。これが成人されている大人の王子なら、世迷言を申すなと、突っ撥ねられるところかもしれません。しかしこんな言い方は無礼を承知で言えば、彼はあのとき若い正義感を口にされていた。だから話の持って行き方によっては、意外とすんなり理解を得られるかもしれない……。

だって、彼は世継ぎの王子でありながら、平民の俺に触れたんですよ。そして地べたに這い蹲る俺を薄汚いと罵るのではなく、助けて

やると……。只の従者を相手にです。口ではどんな綺麗事を言えても、あんなことは、なかなかできることじゃないんです。
だから、俺みたいな者を助けてくださると言うなら、女のタティのことはなおさら、きっと助けてくださるのではないかと」
「そうだ、あの方は金髪翠眼のセリウスと同じ姿を持っている。となれば彼はきっと、地上に降誕された救い主に違いない。あの方なら、話せばきっと、もしかしたら……！」

暖かな春が巡ろうと、これまであの冬空を覆う黒雲のように、悲愴な感情が僕の心中から立ち去ることはなかった。
タティがいないからだ。僕は生まれて初めて真に責任というものを自覚し、権利にはそれ相応の義務がつき纏うことを改めて学び直している日々の中で、男としての誇りを取り戻しつつある毎日を送っていた。
兄さんの執務室にいて、何かにつけ自分の若さと実力不足を痛感すること。大人連中の話題には何かとついていけなかったし、彼らも誰ひとりとして僕を一人前とは扱わない。兄さんの弟だから下にも置かない扱いだが、同僚とはみなしてくれない屈辱感。僕以外に頼る人間がいないシエラを、家と州領の利益のために殿下に売り渡す決心をすること。そしてあれだけ理由をつけて逃げまわっていた剣術の訓練にも取り組んでいた。
どれも惨愴たる内容だった。僕という人物の輪郭を表すのに、あまりに的確過ぎて笑ってしまうような内容だった。僕は未熟なお坊ちゃまだった。でもそれでも、前進をしている手応えはあった。こうあるべき自分の姿というものに、それまでよりもずっと近づけている喜びがあったのだ。
けれどもそれは同時に、自分の部屋に帰っても出迎えてくれるタティがいないことに、落胆する毎日でもあった。僕がその一日をどれだけ頑張ったか、何を失敗したか、タティに話して聞かせたい夜には特にそうだった。

だから僕はずっと黒雲の下の暗闇の中にいたのだ。死の塔に閉じ込められた彼女を救うことができない自分の無力を嘆きながら。タティの死亡宣告がなされたあの日から、僕はずっと頭を抱え、髪を掻き毟って夜の中に蹲っていた。

でも突然、人生に光が差した。

冬は続かない。そんな言葉がある。苦しい状況にある人々が、ときどきそうやって自分を奮い立たせ、慰めて、つらい心に涙をこぼしながらそれでも未来の希望を信じようとするとき、しばしば用いられている美しい言葉だ。

僕らは季節が巡ることを知っている。

夜が終わり、必ず朝の光がやって来ることも。

それでも自分が暗闇の中にいるとき、そんな当然のことさえ思い出せない状況に陥れられてしまうのだ。少なくとも僕はそうだ。未来を信じられなくなり、気持ちが落ち込み、理不尽な思いをさせられて、とても立ってなどいられない。

だから僕は本当はずっと泣きたかったことに気がつかない振りをして過ごしていた。そうすることが正しいかのように。それを思い出してしまったら、泣いてしまうことを分かっていたから。兄さんの胸倉を掴んで何とかしてと喚いても、どうにもならない現実を理解できない子供ではなかったから。

不当で残酷な仕打ちが続いていた。ここは天の王国ではなく、善良で誠実で親愛なる市民は日々の糧にも苦しみ、他人を欺き、盗みをはたらく人々こそが満面の笑みを浮かべて暮らす世の中だ。

そしてアレクシスとか、タティのようなか弱くて清純な者たちが、真っ先に犠牲になってしまう地獄でもあった。

そして僕はずっと暗闇の中にいた。

でも僕は心密かにずっとそれを信じて来た……、その言葉を。冬は続かない。続きはしないのだと。

僕は今にも泣きそうになって、思わずカイトを抱きしめていた。

「アレックス様……」
「ありがとうカイト。そんなこと、全然思いつかなかったよ……、君が気がついてくれなかったら、僕はこのままタティを失ってしまうところだった……。心に蓋をして、彼女のことを諦めてしまおうとしていたんだ。本当はそんなの嫌だったのに。
大人になるにはそうするしかないと、それが成年貴族の採る選択だと、僕はずっと自分に言い聞かせていたんだ。でも違うって思ってもいたんだ、それは僕が望むやり方じゃないって。そのうち本当に大人になって、他のどんなことに妥協をすることはできても、でもタティのことだけは、諦めるのは嫌だって……。君の機転のおかげで、目の前が開けた気がするよ……」

カイトは頷いた。

「いいんです。こういうのが貴方の腹心たる者に課せられた役割だし、俺としても……。タティが死んでしまうなんてさすがに忍びなかった。彼女はとてもいい子です。何とか助けてやりたいと思っていた。
ただ、自分で提案しておきながらあれですが、やはり今のところ絶対ではないから……」
「そうだね、でも、前にルイーズとその話をしたときの言い方では、可能性がないこともないような感触がしたんだ。ただそれを識る手段がないというだけで、何処かにはそんな魔法があるということなのかもしれないと。だって彼女は魔法学者みたいだろう？　きっとあるかもしれないってことは、知っていたんだと思う」
「そうだったら、それは本当に素晴らしいことです。
運命って、ひとつ扉が開くと、意外と次々転がって、扉が開いて行ったりしますからね。善くも悪くも。これが良い方向に転がってくれることを祈ります」
「うん」

そして僕はしばらく友愛を込めてカイトを抱きしめていた。その間、カイトは僕の背中を優しく叩いてくれていた。僕はカイトにこんなことをするのは初めてだった。

僕はどんなに兄貴風を吹かされても彼のことを兄さんとは思わないが、でも本当はずっと前から頼もしいとは思っていた。

その晩は、本当に美しい夜だった。

夜空には月が輝き、僕の心には久しぶりに希望の光が灯っていた。僕はもう一度愛しいタティの手を取るための道を、それはまだ頼りなく、月の光のように淡い希望だが、暗闇の中にみいだすことができ、喜びの涙を流していた。

第１９２話　主張交差

今朝の僕を見たら、タティはきっと素敵って、言ってくれただろう。
僕は朝からいつもより時間をかけて身支度をし、いい服を着て、今は廊下を歩いていた。鞄を持っているのは、王宮へ学力試験を受けに行くためだ。
王子様の教師の補佐官になるための試験を受けに王宮に行くなんて、さぞかし緊張して、吐くんじゃないかと思っていたが、当日になると緊張はしているけど意外と僕は落ち着いていた。
あの月夜の晩もそうだが、確固たる根拠がないのに、その朝もまた何となく、物事が上手く運びそうな予感がしていたのだ。風の精霊と相性のいい魔術師は、何くれと彼らが事前に起こることを教えてくれたりするのを読み取ることができるそうだが、僕には実はそんな才能があったのかもしれない。精霊の姿なんて見えやしないので、今となってはどうにもならないのだが。
僕の後方にはカイトと、快適な朝を台無しにするオニールがつき随っていた。特にこれといって魅力もない安い男。オニール。胸糞の悪い響きだ。
両側に部下を従えるなんてまるで重要人物みたいだ、しかもカイトもオニールも容姿自体あんまり優しそうな感じではないから、たぶん嫌な威圧感はある。若い男でも束になっていると迫力が出るのだ。町の不良が群れていると、連中が頭が悪いってことを分かっていても、何となくこちらが気押されてしまうように。
もっとも奴ら特有の、何をしでかすか分からない信用できない恐怖感は、いかにも安っぽいのであんまり欲しくなかったが。
いつかは僕単体でも、人を威圧してみたいものだ……。両側にジェシカルイーズでも強そうだし格好がつく、おまけに華やか、そういう男が理想的だ。

「今日の試験はクリアできそうですか？」
カイトが不意に僕に言った。
「あっ、うん、たぶん。自分で言うのも何だけど、勉強だけが僕の取り柄だろう？　兄さんが僕のことでまともに評価をくれるのも、現状これだけだ。これが駄目なら僕は駄目男だ。でも僕は駄目男じゃないから大丈夫」
「それは頼もしい」
カイトは笑って頷いた。
「まったくだ。お坊ちゃま君ときたら、言動がいちいち甘ったれてて聞いてられないぜ」
「魔法で王宮に飛ぶのに所要時間はどのくらいだろう。ハリエットの腕だと、ルイーズみたいな瞬間移転の魔法はできないよね」
「いや、本日はハリエット殿じゃありません。パブリックホールでダグラス様とクライド様が待っています」
「ハリエットじゃないの？」
「野郎、僕を無視するな」
「ええ、ダグラス様はやはり年の功と言いますか、王宮に出入りもされているので建物内部に明るいらしいです。
それに、本人を前に言ってはあれですが、王宮の行政区域に入場するのにハリエット殿ではちょっとね。おおまけに見てもせいぜい十三、四に見えますからね。今日のような日に連れている魔術師としては少々印象がよくない。才能はあるんでしょうが、それだけでは通用しない場所もありますから」
「そう。まあ、僕もダグラスのほうが気が楽なんだよね。ここだけの話、どうも年下の女って苦手でさ。だってちょっとでも怒ったら泣くかもしれないし、なんか猫とかを相手にしてるみたいで。落ち

着かないんだ」
「猫ですか。まあ、娘のハリエット殿より魔力が弱いと言っても、彼には知識があるでしょうしね。やはり魔術師として、安定感はありますよな」
「ハリエットって、あのハリエット嬢だよな。カティス家のお転婆娘。この間もヴァレリアとやりあってた。あいつもスタメン入りなのか……、ははは、こりゃあいい。
僕にカイトにハリエットか、地元のお騒がせメンバーが、だいぶ顔をそろえているじゃないか。となるとそのうちヴァレリアが湧いて来るかもしれないぞ。自分も仲間に入れろって言ってな」
オニールが縁起でもないことを言い、カイトが少し迷惑そうな息を吐いた。
「アレックス様！」
そこへ廊下の向こうから、今にも泣き出しそうな顔をしたシエラが現れた。
彼女は僕をみつけると、考えられないことだがドレスの裾を持ち、今にも躓きそうになりながら危なっかしく走ってこちらにやって来た。廊下を走るなんて、日頃慎み深いはずの侯爵令嬢としては驚くべき作法違反だったし、シエラという人間を知っていればそれはなおさらのことで、僕は唖然とした。
彼女は小走りになって僕の側まで来ると、悲痛で、耐えられないといった感情を隠しもしないで僕に訴えかけた。
「アレックス様、聞いて。大変よ」
「どうしたの？」
「たった今ギルバート様が、結婚のお話はなかったことにするっておっしゃったの！

アレックス様と私の結婚を、取りやめにするって……、それなのにどうしてなのか、理由を教えてくださらないの。それは女の預かり知るところではないと言って……」

来たかと、僕は深呼吸した。

「そう、それはつまり……」

「今から一緒にいらして。一緒にギルバート様に説明をして貰いましょう。だって、事情が変わったとしか教えてくださらなくて。こんなのおかしいわ」

シエラは僕に近づき、僕の腕を引いた。

でも僕はその手を掴んで、僕から丁寧に離させた。シエラの顔に失望が浮かんだが、僕はそれを受け止めず、愛想笑いで誤魔化した。

「シエラごめん。今ちょっと急いでるんだ。これから王宮に行かないといけなくてさ。試験なんだ。時間厳守なんだよ。話したと思うけど、僕は王都に出向するので」

「アレックス様っ。でも、でも、私たちの将来のことよ」

「分からないんだ、悪いけど……、知ってると思うけど、僕のことは兄さんが何でも決めるから。食べる物、つきあう人間、僕の下着の色まで全部」

「そんな、真面目に私のお話を聞いて」

「うん、また今度ね。そう、そのうち気が向いたら」

僕は、邪魔臭いと正直に言う代わりに、ほとんど逃げるように廊下を歩き出した。もう話は決まってしまったことで、議論の余地はなかったし、ここで泣かれても困るのだ。これは僕の力ではどうしようもない。兄さんと、王子様との取り決めだからだ。僕がどうこう言えるような顔ぶれじゃなかった。それにこれから僕はタティを助

けるという我が侭を通す分、他のことにはよりシビアでなくてはならない。
何より今は、速やかに王宮に試験を受けに行かなくてはならないのだ。

「もったいない。すごい美人なのにこれからは王子の専属売春婦ってわけか。いや、ロイヤルダッチワイフってところかな」

背中でカイトとオニールの会話が聞こえる。

「なんつう表現だ」
「だってまさにそうだろう。そして毎晩王子に性奴隷にされてるってことが、全国民に知られまくるわけだ。興味津々。何せ馬鹿な兄貴のせいで、ウィスラーナ家の末姫の行く末には、少なからず関心も集まるだろうからな。あの美少女っぷりからして、カイト君みたいな変態な奴にはまずオカズにされまくるだろうし、さすがに同情するぜ」
「おたくも同類のくせに」
「だっ、誰がだねっ、平民と一緒にするな、失敬なっ」

第１９３話　ファンタスティック！（１）

きっとすべてはいい方向に向かっている。
苦しい状況が続いているとき、そう思うことはとても大変で、エネルギーがいることだ。
でもタティが助かるかもしれない。そのことを考えるだけで、僕は人生に輝く光が戻って来たことを感じていた。
世界は一転して希望の光にあふれ、希望の心は新たなる希望を引き寄せもする。先日カイトが運命の扉について話をしていたが、まるでそれを証明するような出来事が、すぐに現実に起こりもした。
その出来事は、この何ヶ月間かにおいて、夢見る少年期を過ぎてもなお夢を抱え込んで生きていた僕が徹底的に叩きのめされ、打ちのめされて、突きつけられた現実や、受け入れさせられた大人の価値観というものを、ある意味では根底からひっくり返すような出来事だった。
大人になってまで夢を見続けるなんて、人生の落後者、逃避者、妄動者、或いは性格破綻者の烙印を押されかねないことだというのに――、それでも諦めずにお伽話を愛好する間抜けたロマンチストたちが、それでもいつか自分の人生に起こることを待ち望んで夢想している、とても非常識な、しかし夢のあるひとつの出来事だった。

フレデリック王子の補佐官に就任するために必要な学力試験を受けた帰り、僕は王宮にて、内務卿アークランド公と会うことになった。
本当は、一刻も早くフレデリック王子に謁見の御時間を頂きたいところなのだが、世継ぎの王子様が、そうそう目下の者とお会いにな

ることはないのだ。名門出とは言え当主ではなく、友人でもない僕と、殿下がすぐにお会いくださることはない。州領主の弟である僕が、面会を希望する領民の要請に即日応対することがないように。僕が王都へ赴任すれば、自動的にフレデリック様と顔をあわせることにはなるが、まだいつから授業に呼ばれるのかも分からないし、個人的な話ができるだけの雰囲気を作れるかも自信がない。そもそも殿下にお仕えする話だって本決まりというわけではなかったので、少しでも早くタティを助けたい一心で、現在はそれとは別に一度、謁見の機会を設けて頂く申請をしている段階だった。

内務卿ハワード・アークランド公爵は、五十歳ほどの金髪男だった。彼の人柄についての噂は、主に厳格だとか、気難しいといったものだが、実際に顔を合わせてみる限りではそれほどそういった特徴が顕著というわけでもない。やはり容姿がとても美しいのだ。しかし仕事ができそうな有能な男だろうとは、目つきの厳しさと雰囲気で感じ取れた。

トバイアとは年が近く、若い頃から何かと火花を散らす仲だったらしいが、そのおかげでこの有能な男がフレデリック王子の肩を持つなんてことになったとも言われている。往年の貴公子同士の個人的な不仲の対決が、トバイアのような男の野望から、くしくも若年のフレデリック王子とサンセリウスの命運を救ったという側面もあるのかもしれない。

もっとも今度のことで王位継承権第二位となった彼自身が、王位継承の射程位置に入ったことが、気にはなる。

王子側としてはそれを避けるためにアークランド公のご息女を妃に迎えることで決着するのではないかと兄さんは言っていた。それで擁立の恩を返せるし、アークランド公としてもトバイアのように下手に反感を買ったり陛下に潰されることよりは、自分の娘を王子に嫁がせ男子を生ませ、次の次の国王の外祖父となる道が、権力に近づくいちばん安全な方策ではあるだろう。

「サンセリウス王宮へようこそアレックス。君の学力の高さには、学者連中もさっそく感心をしていたよ。もっとも今後偏屈な彼らとの意思疎通は、なかなか大変だろうがね」
「それは、採用ということですか？」
「左様」
「ありがとうございます」
「王子殿下に御相談申し上げ、詳細は追って知らせる形となる」
「はい」

それから僕は、王宮内の彼の執務室で思いがけない人物を紹介されることになった。
僕が通された内務卿のための立派な執務室には予め客人があったのだ。彼はすらりと背の高い、白髪混じりの金髪の紳士だった。アークランド公より幾らか年長であるようだ。その何処かおっとりしたスカイブルーの眼差しを見たとき、僕はすぐさまルイーズを連想したのだが、思った通りだった。

「彼はトワイニング公リドリー卿、私の古くからの友人だ。知っているとは思うが、トワイニング家は聖王女ステラに連なり、古くはサンセリウスが祭祀を担っていた特殊な家系。まあ、古くは我が国の宗教活動の本家というところだね。
リドリー殿、彼はアレックス。アディンセル伯爵家の次男だが、来月から私の下で働いて貰うことになっているのだ」
「アディンセル……、ああ、そうですか。ではギルバート卿の弟君ですね」

トワイニング公に握手を求められ、僕は慌てて両手を差し出した。
優しく微笑む彼の顔にさして見覚えはないはずなのに、何故か胸の中が熱くなるのを感じていた。
もしコンチータの言っていたことが真実なのであれば、彼は僕の母

方の祖父に当たる人物――、そう思うだけでたまらなくなったのだ。僕は本当に、何故だかたまらなくなった。まるで天国にいらっしゃる父上に対するような咽び泣きたくなるような郷愁が、このほとんど面識もない紳士に対してあふれ出しそうになった。

「この度は侯爵昇格おめでとうと、兄君によろしくお伝えください」

トワイニング公は優しく僕に言った。

「リドリー殿、どうせ来月にも叙爵式があるではないか。そのときにでも、直接言えばよろしいのでは」

「ああ、そうでしたそうでした。ふふふ、私も随分年を取り、どうも頭がぼやけてしまっていけません」

「何をおっしゃる。まだまだお若いではありませんか」

アークランド公と対照的に、トワイニング公はとても穏やかで温厚な人物だった。話し方が丁寧で優しい、美しい初老の紳士。貴族的な風貌からは知性がにじみ出ていて、そこにいるだけで人を惹きつける魅力のある人物だった。

第１９４話　ファンタスティック！（２）

それから僕は執務室内の別室に通され、そこで寛ぎながら今後の大まかな政府方針について、フレデリック王子への称賛、それにトワイニング公の家族の話題を少し聞いた。彼には妻と息子が二人いて、上の息子の妻がもうじき初孫をもたらしてくれそうであると嬉しそうに話す彼に、僕は心の中にふくらんでいた彼への親しみや思慕にも似た親愛の気持ちが、急速に萎んでいくのを感じた。

僕は彼の人生にとってまったくの部外者だと理解したからだ。僕の感じていた親しみは、僕の一方的な想いに過ぎず、公にとっては僕は単に通りすがっただけの、赤の他人に過ぎないことを、思い知らされた気がしたのだ。

「女の子を望んでいます」

トワイニング公は僕に打ち明けた。

「私には息子しかありませんでしたから……、最初は女の子をと」

「そうですか」

結婚もせずに捨ててしまえる田舎貴族の娘に産ませたルイーズとアレクシスのことなど、所詮は眼中にないのかと、そう心の中で呟きかけたとき、彼はぽつりと言った。

「でも実は…、私は女の子を持っていたのです」

トワイニング公は言った。すると隣に腰かけていたアークランド公が、まるで気を利かせたように席を立った。

その背中が僕らのいる応接用のソファ席から後方、重厚な扉の向こ

うに消えていくのを確認すると、トワイニング公は続けた。

「そう……、アレクシスという女の子です。妻と結婚する前に、私にはとても結婚をしたかったお嬢さんがいたのです。彼女はティファニーという、笑顔になることさえ不器用な女性でね、いつもつんけんして、勉強の邪魔をしないでと、私は彼女によく怒られた。でもそこがよかったんです。私は彼女を好きになり、彼女のいる図書館の席に日参して、一生懸命口説きました。彼女との日々は、陳腐な言葉になりますが、私の青春そのものでした。

デートの場所はいつも図書館の奥深く。サンドイッチを持ち込んで、いろいろなことを語りあいました。最古の公爵家の古めかしい環境で育った私には、彼女の何もかもが新鮮だった。心から彼女と結婚をしたかったのです。だから彼女とはそのつもりで交際を深め、娘を授かり、そのまま三人で家庭の真似事のような暮らしもしましたが、でもできなかった……。

あの頃は私の人生にも様々の問題が起こりました。我がトワイニング家には厳格な決まりがあり、しかし……。

結局私はティファニーと小さなアレクシスを故郷に帰す選択をしました。それに身分の問題は当時の私が考えていたより重く、アディンセル伯爵領のローブフレッド州が、つまり貴方の兄君の所領こそが、ティファニーの故郷なのですが……」

トワイニング公は、僕の目を強くみつめて言った。

「恥を忍んで伺いたい、貴方はアレクシスをご存知ないですか。私と同じ金の髪に、ブルーグレイの眼をした、可愛い……、もう三十年以上前のことになりますが、小さな女の子でした。生まれて来た彼女を初めて見たとき、そのあまりに美しく清らかな魂を感じ、私はこれは天使に違いないと確信しました。

向こうでギルバート卿の魔術師に採用されたと聞いたのに、実際に会ってみると彼の魔術師は別人だったので、いつか誰かにこのことをたずねたかった。だが卿も彼の魔術師も笑うだけで何も教えてくれない……、心配で心配で、禁を破り、魔術を使ってアディンセル家の城を幾つか覗いたこともありましたが、何処にもそれらしき娘の姿は見当たらず……。

それでもずっと気がかりだったのです。私の娘のことが。私の小さなアレクシスのことが。あの子のことを、片時も忘れたことはありませんでした。もうじき息子の妻に子供が生まれる、それは女の子かもしれない、そう思うだけでいてもたってもいられずに……。私も年を取りました。けれども私は一度たりともティファニーと、手放してしまった小さな娘のことを忘れたときはなかった。今頃どうしているのか、父親がいないことで寂しい思いをしてはいないか、悲しい思いをしてはいないか」

感情が高ぶってしまったのだろう。トワイニング公の目には、涙が浮かんでいた。

「貴方は何か、知りませんか……、ティファニーとアレクシスのことを」

僕は何も言うことができなかった。この国では女性にとって、父親の護りほど大きいものはない。社会的地位のある公爵家の男子である貴方がもし、せめて別れ際にでも実子の認知をしてくれてさえいたなら、トバイアもさすがにアレクシスに手は出せなかっただろうと怒りが湧いた瞬間もあったが、それを伝えたところで今更どうにかなるわけでもない。

アレクシスがその後どんな目に遭い、そして今どうなっているかを、この老齢に差しかかった父親に伝えて、それを責めたところで何になるだろうか？　彼の老後を後悔の地獄に落とし込めても、誰も救

われることはないのだ。
まさかティファニーとアレクシスを故郷に帰した後に、ティファニーがルイーズを生んだなどということも、今となっては彼を苦しめるだけの不要な情報だろう。

「知りません」

僕はきっぱり答えた。

「すみませんが、三十年以上前となると、僕はさすがに……」
「そうですか……、そうですね、確かに貴方はまだお若い……、貴方はこれから希望あふれる若い時代を生きる方だ。
二人が元気に、幸せにいてくれればいいのですが……」

トワイニング公は寂しそうに微笑んだ。

第１９５話　ファンタスティック！（３）

ドアの開く音に、僕は畏まった。

「君には頼みたいことがある」

トワイニング公が退室された後、入れ替わりのように戻っていらしたアークランド公が、数枚の書類を手に僕の前にやって来た。彼はトワイニング公の立ち去ったドアを注意深く振り返り、彼がいないことを確認し、それから僕の正面ソファに腰かけて、それを僕に手渡した。見るように促され、僕は書類に目を落とした。

「これは……」

「トバイア公が囲っていた女のリストだ。彼が性奴隷にしていた女性たちだ。

彼というのは少年の時分から非常に女性が好きでね、とにかく女が好物で――、私はいつも辟易して見ていた。公の中年の姿しか知らない君には少々想像がつかないかもしれないが、あれでも若い時分には素晴らしい貴公子だったのだよ。長身の金髪貴公子。自信家で、彼の立ち振る舞いには国中の娘たちが熱狂していて、その人気ぶりは現行君の兄上よりもすごかったかな、まさに入れ食い状態だった。毎晩相手が違うなどという戯けたことを、まあ彼が独身者のうちには、私も目をつぶっていた。だが彼は自分に群がる娘たちを相手に、派手に女遊びをする一方で、そのうちこう、自分に関心を向けない女を征服することを楽しみとするようになりだした。自分の命令であればどんなことであれ、服を脱いでみせるようなことであれ喜んでする女を相手にするのに、飽きてしまったんだろうな。

で、わざと他に決まった男のいる娘なんかを、権力に物を言わせて無理やりというのを楽しんでいたのだが、やがてその対象が王女に

移ったことがあった。フェリア王女だ。

彼女はトバイアよりもずっと若い姫君だった。二人は従兄妹同士だが、確か十四歳違ったのかな。だが聖女と謳われる王女の美貌にトバイアは一時期入れ上げて、熱心に求愛に通うほどだった。当時まだ十三とか十四とかのフェリア王女に、三十男が這い蹲って関心を得ようと必死になっていた。

しかしこれがまた痛快なことに、フェリア殿下とは非常に毅然としたところのある姫君でね、トバイアの行状を知っていたのか何なのか、延々と突っぱね続けた。年端のいかない小娘など、簡単に落とせると思っていたのだろうな、トバイアは随分とプライドを傷つけられたようだったよ。

フェリア王女は十九で病死されるまで生涯独身でいらしたが――、結局トバイアは彼女を落とせなかった。知っての通りフェリア殿下は生来御身体が丈夫でなく、十六を数える頃にもなると、御体調を崩しがちになってしまった。すると身体の弱い女に興味はないとばかりに、奴め見切りをつけてしまったのだ。まあそこには女に拒まれ続けるということに、奴のプライドが許さなかったという面もあったろうが、根性なしの、情なしだと私は思ったよ。

殿下はあれほどの美貌を持ちながら、そのお年までとうとう誰とも縁づかれず、御結婚をされずにいらしたのは、実は女好きのトバイアが、いつか落ち着いてまともになるのを、待っていらしたのではなんてお話も、あるくらいだからね。

しかしトバイアはあっさり別の女と結婚をした。現ギース公妹アナベル姫がそうだ。だが二人は上手くいかなかった。

アナベル姫のことは私もよく知っているが、少々気の強い娘でね。甘やかされた、世間を知らない娘にありがちな生意気な言動を取るのだが、トバイアにはそれを慈しむだけの器がなかった。少なくともアナベル姫のほうには、トバイアに対する憧れや、恋心があった結婚だったのだが、二人とも意地を張るような性格だからか、結婚生活はすぐに破綻した。そしてだ、そこにあるようなことがいよい

よ本格化した」

アークランド公は、僕が手にしている書類を指差した。

「通常、こうしたことは捨て置かれるものだ。しかしこの件の場合、一国の方向性のかかった問題でもあり、また対象にはさすがに見過ごせない良家の姫君が紛れていたこともあって、我が配下の公安主導による本格的な介入とあいなった。

結局、捕縛したトバイア公の部下、使用人の証言、そして遺体の所持品等を照合し、そのリストにあるのは少なくとも名前と出身地の明らかになった女性たちだ」

リストには二十八名の女性の名前が連ねてあった。名前、出身地、所持品、身体的特徴……、ファーストネームだけの者もちらほら見受けられた。そしてそのリストの中に、僕はすぐにアレクシスの名前をみつけた。アレクシス。でもアレクシスはそれほどめずらしい名前ではない。これ自体は割とよくある人名だ。そして書類に記載されているのはファーストネームだけだから、別人かもと思いたかったのだが、身体的特徴に金髪碧眼、そして何より出身地がアディンセル伯爵領となっている……。

「あの……」

僕は戸惑ってアークランド公の顔を見た。

そのリストのいちばん上部には、死亡者リストと記されてあるからだ。

「そう。先刻リドリー殿が話していたアレクシスという娘が載っている。出身地がアディンセル伯爵領ということで、私もすぐにピンと来た。

恐らくアディンセル伯が、トバイアに差し出したのだろう。年代からすると前伯だろうかね。似たような事例は他にも幾つかあった。だが父上や兄上を責めないでやってくれ、当時はトバイアこそが実質世継ぎの王子だったのだ。そしてあの傲慢な性格だ、彼に逆らっては、何をされたことか。

確かに女を火の粉を払うための生贄に差し出すなど、人道に反する、まして騎士としてあるまじき行いである。私はそうしたことが反吐が出るほど嫌いな男の一人だよ。しかし地方領主としては、生き延びる手がそれしかなかったのだろう。

いちばん悲惨だったのは、実の妹を持って行かれたのだったがね。その男は、当時まだ君と変わらんような年頃だったが、後に自殺している。

まあいずれにせよリドリー卿にはこの顛末はさすがに言えなかった。気の毒すぎてね」

アークランド公は飲み物を口に含みながら事務的に言った。

「……、この情報は、私の兄には……」

「無論。既に伝えてある。一ヶ月近くも前だったかな。アナベル姫が、トバイアの死の直後、夫の愛人を残らず惨殺したことと一緒にね。

私が頼みたいのは、この話をリドリー殿には言わないでやって欲しいということなのだ。

君はこれから彼と会う機会もあるだろうが、あれも哀れな男なのだ。彼は孫が生まれるなんて喜んでいるふりをしているが、家庭生活は円満とはいっていない。

彼は真面目な男だからな。件のことでは生涯責任を感じてもいたろうし、内心では、あれは……、彼は若い日に手放してしまった最初の恋人と、アレクシスという幼いひとり娘のことを、想い続けた人生だった。

私は古い友人として、何処かできっと幸せにやっていると、信じさせておいてやりたい」

「分かりました……」

第196話　ファンタスティック！（4）

国家要人との張り詰めた時間が終わった。
きっとそうだろう、そうなるだろうと分かっていたこととはいえ、アレクシスが既に死亡しているという決定的な失意の情報を仕入れて落胆するこの気持ちをどうしていいか分からず、ため息と共に廊下に出る。
人間の一生というものは、かくも容易く、かくも儚いものなのか……。
そして人生とは、これほどまでに残酷で厳しく、救いのないものなのか……。
一度も会ったことがない実の母親。その死を知らされたからと言って、僕の目から涙がこぼれることはなかった。トワイニング公のようにアレクシスを想って泣くことはない。僕は切なく、迷子のようにいたたまれないが、何処か他人事でもあり、気持ちはそぞろだった。僕は自分の心や感情を把握することができず、ひたすらに当惑していた。
悲しい気持ちはそれほど強くない。
たぶん会ったことが、なかったから……。
それにしても、やはり問題なのは兄さんだ。兄さんはこんな報告をとうに知りながら、特に態度を変えずに僕や部下たちに接し、ランベリーの整備に精力的に取りかかり、女遊びをし、仲間と酒を酌み交わし、たまに僕を可愛がったり、チェスで勝って喜んでいたのだ。
まさに鋼の神経としか言い様がない。
それとも本当にもうアレクシスのことなんて忘れてしまっているということなのだろうか。
兄さんは女を手に入れるのに特に苦労も要らないタイプの人間だったし、あまりに数をこなしすぎて、所詮は女なんてどれも全部おんなじだとか、思ってしまっているのだろうか……。

爛れている。僕は苦笑した。
そして気持ちの整理はつかないが、取り敢えず、別室に待たせているカイトたちと合流しようと思って、王宮の慣れない廊下を歩き始める。
僕は男だから、簡単に泣いたりしないのだ。

「こんにちは」

と、肩を落として歩く僕の目と鼻の先に、いきなり人が立っていたので僕はもう少しで彼とぶつかりそうになった。もし僕と彼にそれほど身長差がなかったら、今頃はキスをするはめになっていただろう。彼は本当に、いきなりそこに湧いて出たみたいに、僕の歩行動線のすぐ先にいたのだ。
見ると僕に声をかけたのは、鳥の巣みたいな頭をした、あんまり身なりのよくない若者だった。痩せっぽちの身体に古着のような服、絵具で汚れた布鞄を肩からかけ、やはり使い古しのくたびれたストールを首に巻いている。まるで王都の劇場前辺りを陣取って、通行人の似顔絵を描いて日銭を稼ぐような人々のようだ。
本来であればこのての人間は、僕が相手にするような人間ではない。だが、彼は非常に好意的に僕を見ているし、あまりにも親しげに僕に微笑んでいるので、追い払うのに気が引けた。それに、何処かで確かに見たことがある顔だと思って、記憶の糸を手繰り、少しして僕は彼を思い出した。

「確か、画家……？」

彼はにっこり微笑んだ。

「あっ、嬉しいな。僕のこと、憶えていてくれたんですね」

そう、彼はたぶん昨年末の夜会のとき、フレデリック王子に纏わりついていた宮廷画家だった。あのときはマリーシアのことで頭がいっぱいだったので、あんまりよく憶えていないが、王子様に随分なれなれしくしていたので、存在くらいは認識していた。

「ええ、確かえっと、名前は……」

「ゴーシュです」

「あっ、そうそう。ゴーシュさん、でしたね」

すると彼は両手を胸に当てて、殊更感激したように身体をくねらせた。まるで恋の予感に身を投じる乙女のように。

仮にも成人男が、この異様な人懐っこさは何なのか。女の人ならこういうのも可愛いと思うが、悪いけどよく知りもしない男にこんなふうに懐かれても気色悪い。だがフレデリック様と随分親しげな様子だったことを思えば、無下にすることもできない。

「あの、それで画家さんが僕に何か？」

「貴方にお礼がまだだったと思って」

画家は僕に碧い目を向けて言った。その美しい瞳に僕は一瞬で意識を吸い込まれ、晴天の高い空が垣間見えた。意識は飛んで豊穣の雲海の上を流れ、水平線の彼方では空と紺碧の海とが溶け合う。天空が赤く染まり、ガーネットのような夕日が西の彼方にこぼれて夜になると、夜空には満天の星々が夢のように煌めいた。僕は慌てて目をこすった。

僕と彼はだいぶ身長差があったので、彼は僕のことを少し見上げていた。

「お礼？」

「ええ。そう、お礼です！」

彼は少年のように無邪気に両手を広げた。

「いったい何の？」

「それは勿論……」

画家はふと横を見た。つられて僕もそちらを見ると、まるで示し合わせたみたいなタイミングで、カイトが一人で宮殿の廊下をこちらに近づいて来る姿があった。

たぶん彼はアークランド公爵と僕の話が終わったかどうか、ときどき様子を見て来いとでも言われたのだろう。クライドやダグラスが使いっ走りをするわけがないし、となればカイトかオニールがその役目になるだろうが、まああのメンバーではカイトがそうなるのが順当な気がした。

王家の薔薇の紋章つきの、随分洒落た身なりの衛兵や、政府関係者が行き交う瀟洒な行政区の廊下。国家の財力を示すように廊下のあちこちには金の装飾が施され、薔薇や天使の乙女像が並び、天上には建国王と聖女の慈しみあう場面が描かれている。

季節は春。深く鮮やかな色彩だ。二人の周囲には薔薇の花びらと赤ん坊の天使たちが舞い飛び、光の欠けることのない、思わず息を飲む芸術が満ちた廊下だった。

ふと、台座の上の翼を持つ石像の乙女たちが、突如生命の精彩を得て動き出し、次々と軽快な足取りで廊下の中央に躍り出た。彼女たちは春のようなフリルの裾を可憐に揺らし、色とりどりの花や祝福の歌声を、カイトをはじめとする道行く人々に向かって投げ始める――、その場はどうしたことか、あっと言う間に異国のカーニバルの様相を呈した。

一人の娘が僕にも近づいて来て、そっと微笑みと、薔薇の花を手渡す。

「ねえ貴方。今って建国何年ですかしら。三百年？　四百年？」
「えっ、いや、今は六九六年だよ……」
「まあ素敵！　それじゃあここはもうじき七百年祭ですのね！
星の千年祭は、それは盛大だったそうよ！
ダンスのお相手は決まっていらっしゃるの？」
「いや、あの……」

僕を上目遣いに見るその女性の胸元が、大きく開いているのだが、更にドレスの生地が透けているっていうところに気がついてしまった僕は、慌ててまた目をこすった。女の人の胸の形がはっきり分かってしまうなんて、何かの間違いかと思ったのだ。
するとゴーシュが大きく手を振って、カイトに愛嬌を振り撒いているところだった。

「こんにちはっ！　こんにちはカイトさんっ！　僕だよっ！」

見ると廊下の石像の有翼乙女たちは、どれひとつとして動き出してなどいない。花びらが深秋の雑木林のように舞っていたはずの廊下は整然と厳かで、紙くず一つ落ちておらず、台座の上の乙女たちは美しいオブジェのままだ。僕は軽く自嘲した。
やはり自分ではそうと思っていなくても、きっとアレクシスのことがショックすぎて、僕は疲れてしまったに違いない。

第197話　ファンタスティック！（5）

「おやまあ、これあのときの画家さんじゃないですか。うん、貴方確かサンセリウス王宮一の宮廷画家さんでしたね。フレデリック殿下が腕前を褒めてた。おたくは名前はゴーシュさんでしたっけね」

側までやって来たカイトが飄々と言った。

どうでもいい人間のことまでよく記憶している彼には感心したいところだが、今はちょっとそれどころじゃない。気分が落ち込んでいるのに、石像の胸もとにすら目が行った自分というのが、どうも繊細さとかけ離れている気がして納得がいかなかったのだ。

兄さんだって僕は繊細で美しいと言ったくらいだから、まさか僕がそんなところを見ているなんて思う人間は誰もいないはずなので、黙っていれば分からないと思うが、最低でも今だけはそこを見るべきじゃなかったのになんてことだろうか。

その間もカイトと画家の会話が進行していた。

「わあっ！　僕のことそこまで憶えててくれたんですか！？　感激だなぁっ！」

「うん、いや、職務上どうしてもね」

ゴーシュは子供のように飛び跳ねてカイトを歓待し、ゴーシュのあまりに無邪気で好意的な態度に、カイトが愛想笑いをした。

「あのときの絵の具は落ちましたか？」

「ああ、いや、落ちなかったので服は廃棄を」

「新しい服を買ったんですね。僕、あの服とっても素敵だと思ったのに。すごく似合ってました。とっても格好よかったです。なのに本当にごめんなさい」

「そう思うなら、もうちょっと注意して欲しいなあ、ええ」
「ねえところでカイトさんは、運命って感じるほうですか？」
「おたくにはまったく感じないですよ」
「えええっ！？　僕って、あんまり人の印象に残らないみたいなんです。
それなのに僕のこと、そんなによく憶えていてくれる人って、滅多にいないんだけどなぁ。
僕に関心を持ったのでは？」
「冗談は顔だけにしてくださいよ」
「ゴーシュさん、あの、悪いんだけど僕は今あまり気分がよくないんだ。あの、個人的なことなんだけど、内務卿閣下から結構ショックなことを聞いてしまって、とにかくすごく元気がないんだ、つまり女の人の胸もととかも全然見ないくらい。だから、もしカイトに用事があるんだったら、彼は置いて行くから僕はちょっと休んでいいかな」

すると画家は慌ててカイトから離れて僕に向き直った。

「あっ、いいえ、ごめんなさい。僕は今、カイトさんより貴方に用事があります。
僕はね、貴方に……お礼をしなくちゃって思って。そしてたぶん今が、貴方にお礼をするのに絶好のタイミングだから」

画家はふと無邪気な笑顔を収め、まるで指先にかかった糸でもほどこうとするような動作をした。それと同時に僕の視界に水の波紋が広がり、一瞬少しだけ世界に青い色がかかったように思えた。
それで僕はたったいま見えた訳の分からない幻覚を思い出し、そのことについて聞こうと思ったのだが、見ると画家のゴーシュがそれまでとはまるで人が変わったような落ち着いた相好になっていたので、出かかった言葉を飲み込んだ。

彼は物憂げになり、黎明の静かな声で僕に囁いた。

「アレクシスさんはひと月前に虐殺されました」

「えっ、何……？」

「ウィシャート公爵夫人が、夫の死後、隠されていた彼の愛人たちを全員捕え、拷問したんです。凄絶な拷問です。彼女たちは鞭を打たれ、生きたまま手足を切断され、一人残らずなぶり殺しにされました。

でもね……、これはとても無意味なことです。何の意味もなかった。無意味な上に、それを行ったアナベルさん自身すらも今では生き地獄です。彼女は夫の浮気に苦しんでいる可哀想な女性だったのです。皆の憧れの美しいトバイア公と結婚することができたのに、愛して貰えず、十七年間泣き暮らすはめになってしまった、可哀想なお姫様でした。

彼女は囚われた女性たちを、無傷で開放するべきでした……。アナベルさんは彼女たちもまた自分と同じだということに、気づいていたのです。

だから……、貴方のその意思により、過去を改変することができます」

僕は、まさに頭の可哀想な人に対して軽蔑を顔に出すべきじゃないという紳士としての振る舞いを行うのに、少々苦心した。

「君の言う意味が分からないが……」

僕は髪を撫でつけた。

「要点を言うと、つまり僕はアレクシスさんが死んだ事を過去に遡及して取り消すことができると言っています」

「それって都会のジョーク？」

僕は笑いかけたが、画家は首を横に振った。

「そもそもなんで君、アレクシスのことを知ってるんだ？」

画家はまた首を横に振った。

「でもこれは秘密にしてください。時間を遡って歴史に手を加えることは、禁じられているんです。たくさんの、本当にたくさんの人たちの運命に対し、あまりに影響が大きすぎるからです。ほとんどの時間魔法は、天界の法律によって禁呪指定されているものなのです。だから、僕もこれを貴方に切り出すべきかどうか、何度か頭の中で精査しました。何処かに出てはいけない悪い影響が出ないか、時の歪みが発生しないか、何度も」

「へえ、君、天界の法律に従って生きてるの？　すごいね」

「ええ、僕の出身地は天の王国ですから」

第１９８話　ファンタスティック！（６）

悪気はないが、僕は思わず笑い出さずにはいられなかった。

「あはは、それってすごいジョーク。だって天の王国なんて、そんなの実在するかどうかも分からないのに」

「ありますよ。本当です」

「また、またそんな。じゃあそこに僕の父上はいらっしゃるのか？」

「いえ、そこは天国とはまた違う世界です」

「誰か王様が治めているの？」

「いいえ、俗称として天の王国と呼ばれてはいますが、治めているのは王様ではありません。評議会議長が統治します。統治形態としては共和制が採用されています。

地上でも幾つかの国々で共和制が見られますが、ほとんどの国ではそれは未成熟なものです。人間のレベルが低いために、聞こえのいい体裁の裏側に、結局は社会に階級が生まれてしまうのです。人種、性別、門地による絶望的な差別が……、権力や富の集中が起こり、搾取する側とされる側という二極化が起こります。

でも天空に浮かぶ僕の故郷は、そうではありません。すべてのことは合議制をもって決定されるのですが、そこには必ず愛という要素が介入します。そこではすべての人々の幸福と利益が守られます。誰一人として見捨てられることはありません。

人々は平和で、基本行動は愛です。あそこでは夜でも鍵をかける必要がありません。卑劣な行動を取る波動の低い人間は、天の王国には住めないから」

「君はきっと素晴らしいストーリーテラーになれる。作家になるといい……」

僕は画家の痩せっぽちの姿を見ながら笑顔を作った。

「じゃあ、聖女様はどうされているの。太陽神の娘、セリウスの妻、星の名前と光の翼を持つ……」
「イシュタル様は天界にいらっしゃいます。サンセリウスでは太陽神以外の神々が重視されていませんが、あの方はそのお名前の通り、そもそも星を司る神なのです」
「ねえ、気を悪くしないでね。君、正気？」
「いいえ」

画家は僕を見上げて笑った。

「もう随分長い間、僕は正気ではありません。
僕はずっと暗闇の中にあって、大切な人たちが死んでいくのをたくさんたくさん見て来ました。この世界はとても残酷で劣悪、清らかな優しい人ほど上手く生きることができず、深く傷つけられてしまうひどい場所なのです。
ずっと長い間、愛しい人に出会うこともありませんでした。でもつい最近……、僕は初めて愛しいという感情を覚える相手と出会いました。
これはね、僕の愛しい家族のための物語でもあるんです。だから……」

画家は僕らの側に控えているカイトに目をやった。どういうわけか、カイトは先ほどから僕らの一連の会話を聞いていないようだった。すぐ側に立っているのに、まるで待ち合わせの相手が来るのを待っているような、僕らが目の前にいることを忘れてしまったかのような顔で、そこに立っている。まるで僕らとは完全に世界を隔てられているかのようだ。
ゴーシュはもう一度僕を見た。

「アレクシスさんは血を分けた妹のようには魔術の才に恵まれず、それゆえに家族から見放され、運に見放され、心が弱く、一人では生きられないほど無力……、こういう女性は人々から理不尽に軽く見られたり、軽く扱われたりして、本当に哀れなんです。だから彼女はその生死さえ誰の歴史にも影響しないほど儚いけれど、僕は彼女のような存在こそが、本当はとても大きくて、神聖で、本当は皆の心を守るのに、何よりも大きな役割を発揮できる存在だと考えます。この地上の人々が忘れている、せわしい人生の中で、ともすれば極めて優先順位の低い価値のないものだとみなしてしまうことを、愛を……、だからわずかでも力を持っている僕らはそれを全力で庇って、護ってあげなければならない存在だと考えます。本当は、トバイア公の魔の手にかかったそうした女性全員を助けたい。正義の剣で……、人生の時間を巻き戻して……、悲しい事を全部なかったことにしてあげたい。でも今の僕にはもうその力がありません。アレクシスさんを十四歳のいたいけな少女に戻して、人生自体を救済してあげることができません、でも……、生命を助けて愛しい人と再会をさせてあげることはできます」

「愛しい人と……」

「そうです、愛しい人です」

ゴーシュは感傷的な囁き声で繰り返した。

彼は僕が明らかに懐疑的であったことを、少しも怒っている様子がなかった。

「人生はね、本当は苦しみを味わう場所ではないんです。本当は、僕らは苦しみや悲しみを味わうために生まれて来るのではないんです。

僕らは幸いや温かさや愛を知るために存在しているんです。それがなかったら人生には何の意味もない。世界のありとあらゆる教師、哲学者、求道者、宗教家たちによって言い尽くされている言葉かも

しれません、でも、僕らの本質は愛なんです。
僕らは愛しい人たちと再会するためにここに来ているんです。幸いとは何かを味わうために。そしてアレクシスさんは今こそ貴方の助けを必要としています」
「アレクシスの愛しい人は、ギルバート・アディンセル……？」
「ええ」
「僕が彼女を兄さんと会わせることができる……」
「ええ、そうです。貴方の決断が、彼女を無惨で悲劇的な人生の連鎖から救い出します。アレクシスさんが人生の最初で愛によって生み出した、貴方がです。
地獄のさなかに手を差し入れて、強引に彼女の運命軌道を引っ張り上げることですから、手段は善行とはいきません。貴方はある種の負債を背負うでしょう。
しかし貴方は結果として何人かの人々の人生の悲劇的な一幕を終わらせ、大きな果実を得るでしょう……」
ゴーシュは静かに僕に手を差し出した。
僕は躊躇いながら、ほとんど流されるままに彼の手を取った。
ゴーシュはそれを強く握り返し、僕をみつめた。
「……愛はね、ときには自分の手を血で汚すことなんです。
大天使地上監視部隊にみつかってはいけないから、チャンスは一度きり。行きますよ。これが今の僕にできるぎりぎりです。一ヶ月前にダイブします」
ゴーシュが言い、右手を宙にかざした。呪文の詠唱もなしにいきなり巨大で精密な青い魔法陣が空間に浮かび、爆風が吹いた。
「さっきから変だと思ったら、君、実は魔法使いだったのかっ！？」

彼は唖然とする僕の手を引きその中心に飛び込んだ。夏の小川をたゆたうような冷たく気持ちのいい感覚がした。去年の夏、タティと居城裏の森の小川でずぶ濡れになったときのような気持ちのいい感覚、僕らはまるで輝く青い水の中にいるようだった。

ふとゴーシュを見ると、そこには鳥の巣頭の華奢な男ではなく、もっと別の何かがいた。それは最初美しい男の姿をしているようでもあったが、その姿は次第に溶解し、巨大な躯体と聖なる翼を持ち、神聖に輝く美しい何かに変貌を遂げていく。

あれは、あれはまるで経典に登場する古代聖竜だ――――！

だがよく観察する間もなく、すぐに眩い光が頭上に閃いて僕らは何処かの部屋の中にいた。

窓のない、一転して視界の暗い部屋だ。それなりに広さのある室内には女物の調度品と、寝台がひとつ。

以前ルイーズが、彼女の記憶の中の過去の世界を見せてくれたことを思い出したが、そう思ったと同時にゴーシュが言った。

「これは記憶の世界ではありません。時間の砂に埋もれた過ぎ去った日々ではなく、現在と並列に存在している過去なのです。時間の解釈については諸説ありますが、実は時間には現在も過去も未来もないという側面があります。そもそも時間とは人間が勝手に定義した至極曖昧な概念に過ぎません……」

第１９９話　ファンタスティック！（７）

ゴーシュが室内のある方向を指差した。見ると、二名の手下を従えた女が何かを叫んでいるのが聞こえ始めた。金髪を結い上げた四十代、あれはウィシャート公爵夫人だ。淫乱売春婦とか、あばずれとか、あらんばかりの罵詈雑言を口にしているのだ。

そして夫人が従えているのは、恐らくは拷問吏だろう。何故なら彼らは腰斬刑用の斧を手にしているからだ。あれは十字架を模した胴体を真っ二つにするための処刑用の斧なのだが、この刑罰は通常の斬首刑等より余程酷い処刑方法だった。人間は胴を真っ二つにされてもすぐには死なないことがあり、胴体を切断された後にまだ意識があるという酷い状態を、罪人に味わわせるためのものなのだ。斧には神の免罪の御言葉が刻まれている。

その足下に、長い金色の髪を伸び放題にした女がいる。彼女は蹲った姿勢のまま、正体なく揺らめいて震えている。着ている衣服は白く飾り気のないワンピースが一枚きり、しかも背中には血がにじんでいる。夫人に鞭を打たれたのだろうか、恐らく皮膚が破れているのだ。しかも様子からして正気がない。僕は彼女を知らなかったが、たぶんアレクシスなのだろう。

夫人が拷問吏たちに何かを命じている。目の前の女の殺害を命じている。先刻ゴーシュの言っていた通り、まずは生きながら手足を斬り落とせと言っているのだ。

僕は自分が何をしているのかが分からないのだが、とにかく、どうすればいいかと思ってゴーシュを振り返ると、彼は胸を押さえてしゃがみ込んでいた。顔色がよくない。苦悶に顔を歪めている。息ができずに苦しいと言って、今にも倒れてしまいそうな様子だった。

「息ができないって、どういうこと？　君、身体が弱いのか？」

「いいえ、そうじゃ、ありません……」

ゴーシュはまるで毒ガスの池にでも沈められた人のようにもがいている。

だがそうしている間にも、処刑斧を持つ二名の男がアレクシスに迫っている。

迅速な決断と対応が僕一人に求められていた。これは夢だ。僕は自分に言い聞かせて気持ちを奮い立たせ、剣ではなく、懐の銃を取り出した。筋肉が盛り上がった二人もの男に突進できるほど、僕は自分の剣術の腕を信じてない。それに斬りつけたとして、血飛沫を浴びなければならないほど間近で流血された後、上手く平常心を保っていられるものか自分に信用が置けない。

深呼吸して息を止め、狙いをつけて引き金を引くと、運よく一人の眉間に命中し、血が噴き上がって彼は倒れた。武器選択は正解。僕がこの手で人を殺した。しかし公爵夫人ともう一人が、僕らがこの暗がりの部屋の中にいることに気づいてしまった。

「誰なの！」

公爵夫人が怒鳴った。たぶん初見ではなかったが、僕はこれまでトバイアの細君と間近で会う機会なんて何度もなかったから、彼女に持っている印象としては綺麗なドレスを着た高貴なご婦人というイメージしかなかった。しかも十七年間泣き暮らしたアナベル姫なんて言うから、どれほど可憐な細君かと思ったのに、よくよく見ると随分苛烈な性格、しかも美しくはあるが大層冷血な風貌の女だ。オーウェル公子はどうやら断然母親似だったようだ。

「そこにいるのは誰！」

僕はその質問に答えなかった。返答の代わりに、銃を構える。こっちは自分の生命だけじゃない、一人でアレクシスまでも護り切らな

ければいけないのだ。
僕の銃に薬莢は全部で六発込めてある。だからまだ五発弾はある。とにかく男を倒してしまわないことには、手負いの女と小男しかいないこっちが不利だ。僕はこちらに近づいて来ようとするもう一人の拷問吏に、狙いをつけて発砲したが、はずれてしまった。
貴重な弾を一発無駄にしてしまったことに、僕はショックを受ける。侵入者は銃を持っているから注意しろということを、夫人が拷問吏に命じた。彼女は銃声に驚いて震えてしまうような、気の優しい女ではないらしい。そうしているうちにも拷問吏は僕ににじり寄り、あっと言う間に距離を縮められてしまった。
アレクシスの手足を切断するための嫌らしい刃を持った男が、今はその重斧の切っ先を僕に向けたまま容赦なく突っ込んで来る。突撃は加速し、僕は少年の頃に習った剣術師範以外には、これまで一度だって木刀以外の武器を持つ人間と構えたことがなかったのに、本当に僕に襲いかかって来るなんて嘘みたいなことで、頭がどうにかなりそうだった。
こんな危険な仕事は上流貴族である僕の役目じゃない！
だいたいが、僕を斬ろうとするとか、まともな人間のすることじゃないだろう！
従ってこんな奴は殺されて当然だと思うわけだが、人間を骨ごと切断するためのいかにも重量がありそうな斧を持っているのにも係らずその動きは素早く、僕は泣きそうになりながら振り下ろされる斧をぎりぎりのところでかわすのがやっとだった。まるで下男のようにみっともなく膝をつき、床を這ってそれを逃れる。すぐに重い斧が後ろの壁に激突する音がする。
でもその一撃を逃れたはいいが、僕には身を隠す場所も、逃げる場所もない。近くには華奢な造りの棚しかなく、幾ら何でも僕が一人で戦闘の矢面に立つなんて冗談じゃない、ギャグにもならない悪夢だが、ゴーシュは部屋の隅にしゃがんでいるばかりで役に立ちそうにない。

僕は手が震えて、この危機的な状況が怖くてたまらず、心臓が痛いほど脈打っていたが、とにかく僕以外にまともな攻撃手がいないとなれば腹をくくるしかない。そう自分に言い聞かせ、壁から斧を引き抜いたばかりの拷問吏をめがけて、急いでもう一度銃を撃った。が、慌てていたことで狙いがさだまらず、拷問吏にはかすりもせずに、今度も弾がはずれてしまった。何処か想定外のところに命中したらしい、陶器か何かの砕けるような音が聞こえる。

またしても失敗したことで、僕はもう、思わず銃を取り落としそうになるくらい、更に精神的に深いダメージを被った。残る弾は三発。それなのに誰の背中にも隠れられない。兄さんも、護衛してくれるカイトもいないから、自分で全部対処しなければならないことは大きな精神的負担だった。

ゴーシュはどうせならカイトも一緒に連れて来てくれたらいいのに、なんでアディンセル家の男子である僕がこんな汚れ仕事に巻き込まれなければならないんだと思うが、恨み事を言って逃避している場合じゃない。

拷問吏は体勢を整え、再び僕に襲いかかって来た。まるでその体力のみで押し切ってやろうとするみたいに。銃を携帯している僕を恐れる感情がないのか、それほどに僕の腕前を既にみくびっているのか、さもなければ、奴にもそうせざるを得ない何か逼迫した理由があるのだろう。

銃撃戦のセオリーは分からないが、僕は出来る限り間合いを引きつけて、標的を大きくすることにした。もう弾は無駄にできない。拷問吏が突進して来る。退路を目の端で確認し、これで駄目なら自信はないけど剣で戦うしかないと思いながら思い切って引き金を引く。今度は男の胸部に命中した。もう手が届きそうなほど近づいて来ていたので、的が大きかったのがよかったようだ。

突撃を寸断されねじ切れるようにして鍛え上げられた男の肉体が後方に倒れて行く。だが呻き声が途切れない。これではたぶん死んでない。僕は銃を構えたまま慌てて近づき、そいつの頭蓋にもう一発

撃ち込んだ。

これは咄嗟の判断だが、以前ジャスティンがとどめを刺せと言った言葉が、警鐘のように頭の中に鳴ったのだ。それにデイビッドが生きている男の額に躊躇いなく剣を突き立てたことを、思い出しもした。

第２００話　ファンタスティック！（８）

率直に言って拳銃の殺傷能力に僕は完全に救われていた。
この手でどうにか二名を殺害した僕を、人殺しだと非難する公爵夫人。どっちがだと言いたかったが、こんなとき、指示を出してくれる兄さんがいないから、僕はこれからどうしていいか分からない。
すると、当然の判断だが夫人は自分で僕に向かって来るのではなく、人を呼んだ。

「誰かっ！　誰か来て頂戴、人殺しがいるわ！　賊が侵入していてよっ！」

そして自分は部屋の外に逃げ出そうと、僕の様子を窺いながら後退りを始めていた。

「待って」

僕は思わず言った。
だが夫人は敵意ある微笑を僕に返した。

「ほほほほ、待つわけがないでしょう、賊が……。おまえはおおかたウィシャート公爵家の混乱に乗じて、女を盗みにでも来たのでしょう？　この館には娼館や見世物小屋に叩き売るのに都合のいい売女どもが、わんさと蠢いているから。いいわ、その銃を収めて、幾らでもいいのを連れて行きなさい。でもね、そこの女は駄目。そいつはね、人の夫と通じただけでは飽き足らず、子供まで産んだ極悪の売春婦なのよ。だからわたくしこの女には、この手で制裁を加えてやりたいのよ。唾棄すべき不倫女。汚らわしい淫売」

「でもそれは、トバイア公が無理やり……」
「無理やり!?　はっ、人の夫と肉体関係を持ちながら、あれは無理やりだったなんて言い訳が通るとでもっ!?」
夫人はいきなり興奮して声を荒らげた。
「わたくしはね、ギース公爵家の公女よ!　そこらの思い上がった女どもとは、最初から価値が違うのよ!
わたくしは選ばれた姫君よ、美しさでは常に誰にも負けなかった。わたくしはこの国でいちばんの美少女だったわ、無力で!　繊細で!　美しくて!　あどけなくて!　清純!
誰もがその幸福な未来を無条件に歓待したくなるようなときめく美姫、聖女、誰からも絶賛され愛される姫君の中の姫君!
それが見て、こんな薄汚い雌豚に、夫を寝取られたの。挙句に一人息子が夫を殺害、わたくしはあえなく未亡人となり実家に出戻り。
こんな酷すぎる未来があるかしら!
こんなことを、これ以上黙って見過ごせるとでもお思い?　冗談じゃないわよっ!」
「だからって八つ当たりすることないじゃないか」
「八つ当たりではないわ。不倫女どもに制裁を加えているのよ」
「違う。誘拐されて、こんなところに閉じ込められている被害者だ。人の夫を誘惑した不倫女じゃない、暴力の被害者だ。彼女の意思じゃないのは明白だ」
「だったらどうだと言うのよ!　だったらどうだと言うの、そんな女の都合なんか知るもんですか、だってトバイア様はわたくしの夫なのよっ!?
彼はわたくしが少女の頃から憧れ続けた方だった。結婚して貰えたときにはまるで夢を見ているみたいだった。彼と幸せな家庭を築くことがわたくしのたったひとつの、生涯の夢だったのよっ!
なのに、わたくしがどれほど血の涙を流して来たかも知らず、この

淫乱な雌豚どもがすべてを台無しにしたっ……！
こんなことになったのも、すべては節操なしの女どものせい。あの方を誘惑した、堕落した女どものせい！
それを今更になって被害者面なんて許しはしないわっ！
わたくしがどれほどつらい人生を歩んで来たか、おまえは知らないでしょうね。ええ、想像もつかないでしょうとも。死ぬ思いをしてやっと生んだ我が子が、セリウスの直系たるに相応しからぬ黒髪だったことで、トバイア様に冷たく舌打ちをされたあの日から、わたくしがどれほど……、……待って。おまえ、何処かで見たことがある……」

夫人はふと、目を凝らして僕の顔を見た。

「……おまえ、もしかしてギルバートのところの坊やじゃないの？
そうだわ、確かに見たことがある。おまえは確かあのろくでなしの弟……。そうよ、確かアレックスと言ったわよね。
おまえはここでいったい、こんなところに入り込んで何をしているわけ？　このことをわたくしの兄上に申し上げれば、おまえもろともあのろくでなしに社会的制裁を加え」

語尾が切れる前に、僕は夫人を撃った。
僕がここにいるなんてことを、誰かに知られては困るからだ。
乾いた銃声がして、胸から血を噴いた夫人があっけないほど簡単に仰向けに倒れる。
それから何秒かして、僕は自分がした世にも非情な判断に気がつき眩暈がした。一瞬、まるで自分に兄さんがそのまま乗り移ったみたいじゃなかったか！？
僕は焦って、足もとの拷問吏の死体を飛び越えて公爵夫人に駆け寄った。どうも銃弾が心臓を一発貫通したらしい。床に倒れた彼女のドレスの胸元は血に染まり、胴体を中心に、床にどんどん血が広が

っていく。もうとどめを刺す必要はなさそうだ。
僕は自分のしたことに改めて震えた。
だが、仕方がない……。アレクシスを護るためには。
先刻ゴーシュが言った様々の言葉の意味が、今は何となく腑に落ちた気もした。
念のため、聞こえてないと思うけど僕は夫人に言っておいた。

「い、言っておくけど僕は全然悪くないから。総合的に見て、そっちが悪いんだ。だからこれはそう、正当防衛だ」

その刹那、絹を裂くような悲鳴がして、僕はまた動揺した。アレクシスだった。すぐそこにいるアレクシスが僕を見て、自分を傷つける悪い奴だと思ったらしかった。
一難去ってまた一難。彼女は全身を哀れなほどに震わせて、まるで僕が自分を虐める悪い男だと言わんばかりに恐がっていた。仮にも息子である僕が分からないのか？　まるで暴漢を見るような目で僕を見ている。
でも確かに人は殺したけど、僕は悪いことはしていない。だって僕はアディンセル家の男子だから、拷問吏程度を殺すのに言い訳なんて必要ないのだ。僕は言わば害獣を屠殺しただけ。それに、今のは誰が見てもあっちが悪い。殺されて当然のことをした。僕のお母さんを殺そうとしたからだ。
でもそれを言っても正気がなく、怯えるアレクシスには話が通じない。泣かれるだけだった。これだから女というのは論理的な話が通じなくて困る。おまけに夫人の呼び声か、それとも銃声を聞いたらしい誰かが、こちらに駆けつけて来る足音がする。僕はアレクシスを連れて逃げようと思うのだが、手を伸ばしたら彼女は細い手を振りまわして必死でそれに抵抗する。泣きながら……。勿論女を押さえ込むのはわけないが、トバイアは彼女にどんな仕打ちをしたんだと怒りが込み上げてくる。そう、彼女は僕が嫌いなんじゃなくて、

きっと僕をトバイアと勘違いしているのだ。こんな場合、どうすればいい。もう弾は一発だって残っていないし、これは酷い混迷状態だ。それに拷問吏どもはともかく、筆頭公爵の夫人を殺害したら、僕はさすがにやばいんじゃないか、考えてみたら正当防衛なんて言い訳は通用しないんじゃないかと思ったが、大丈夫。落ち着いて。これは全部夢なのだ。そう。これは夢だ。何故なら僕が血を見ても、血の臭いを嗅いでも、全然倒れていない――。

第２０１話　ファンタスティック！（９）

ドアの開く音に、僕は畏まった。

「君には頼みたいことがある」

トワイニング公が退室された後、入れ替わりのように戻っていらしたアークランド公が、数枚の書類を手に僕の前にやって来た。彼はリドリー卿の立ち去ったドアを注意深く振り返り、彼がいないことを確認し、それから僕の正面ソファに腰かけて、それを僕に手渡した。見るように促され、僕は書類に目を落とした。

「これは……」

「トバイア公が囲っていた女のリストだ。彼が性奴隷にしていた女性たちだ。

彼というのは少年の時分から非常に女性が好きでね、とにかく女が好物で――、私はいつも辟易して見ていた。公の中年の姿しか知らない君には少々想像がつかないかもしれないが、あれでも若い時分には素晴らしい貴公子だったのだよ。長身の金髪貴公子。自信家で、彼の立ち振る舞いには国中の娘たちが熱狂していて、その人気ぶりは現行君の兄上よりもすごかったかな、まさに入れ食い状態だった――」

アークランド公は、トバイアに対する懐かしみとも、恨み事とも取れる話をした。

僕は話を聞きながら書類を読んでいた。死亡者リストと銘打たれたその十六名のリストを、穴が開くほど繰り返し確認したが、アレクシスの名前はない。

「このリストにない女性というのは、あるのですか」
「身元不明の女の遺体なら数え切れない。そこに挙がっているのは少なくともウィシャート公爵側についていた諸侯の縁者だ。それなりの身元の保証のある娘たちだよ。
で、話というのはだね、現在一名、我々が保護している女性がいる。閉じ込められていた部屋のグレードから言って、そのリストに加えられていていい身分のお嬢さんだが、運よく胴体や手足をバラバラにされるのを免れたのが。だがなにぶん気がふれていて正体がないのだよ。
私の配下の公安局が、救出作戦を展開していたその当日は何しろハチャメチャだった。アナベル姫が偶然入り込んだ賊に銃殺されるという事件が起こったりしてね、現場は犯人追跡に大混乱、トバイアの末路に相応しい、呪わしい事件だったよ。
だがまあ結局トバイアはアナベル姫を愛していて、彼女を一緒に連れて行ったっていうことなのではないかなんて、皮肉が飛んでいるよ。少なくとも、アナベル姫には本望だったろうってね。ハハハハ。まあ、今となってはそれはどうでもいいことだ。
アレクシス？　そう、いま話題にしているのはその名前の娘だよ。先刻リドリー卿が君に話していた彼の娘で間違いない。
アディンセル家からの上納品で、名前がアレクシス、金髪碧眼に、年代からしてもまずそのはずだ。ところがギルバート卿に言ってもなかなか引き取りに来ないので、どうしたものかと思ってね、だから君にこうして話をしているわけだ。
他の生存女性らは先週までにだいたい家族かその使いの迎えが来て、各々故郷に帰って行ったのだが、当該女性の場合、何しろ精神がやられているからな。気の狂った娘をいきなりトワイニング家へというわけにもいかんだろう？
なのにアディンセル伯が取りに来ない。国境を任されることになった卿が忙しい事情は、私としても分かっているのだがね。だから君、何とかしてくれるかね」

混乱する頭でアークランド公の王宮執務室を出ると、画家のゴーシュが近寄って来た。

「こんにちは」

僕は得も言われぬ感情が湧き上がって、今にもゴーシュを胸に抱きしめたいほどの気持ちで、思わず涙のにじむ目を彼に向けた。僕はこの夢のある存在と奇跡的な出来事に、感動感服してあまりある気持ちだったのだ。

「君が……、やってくれたんだね？」

僕は深い感謝を込めてゴーシュに言った。
しかしゴーシュは不思議そうに首を傾げた。

「僕、何かしましたっけ？」
「とぼけなくていいよ。このことは、誰にも言ったりしないから。君が実はすごい魔法使いで、しかもサンセリウス建国時代にいたっていう守護聖竜でさ！
特別の、掟破りの魔法を使って時間を遡って、僕を、そしてアレクシスを助けてくれたって！
今でも考えただけで興奮するよ。自分に秘められていた狙撃の才能も然ることながら。
僕ってすごく理性的な大人だし、常識的な男なんだけど、やっぱり実際のところ内心ではこういうのを、待っていたっていうのかな！」

だがゴーシュは更に首をこてんと傾げた。

「何のお話か、よく分からないですけど……」

「何言ってるんだ、すっかり未来が変わってるじゃないか！だって、内務卿の話では、最初は死んでいたはずのアレクシスが、やっぱり生きてるってことになってるんだよ！」

ゴーシュは分からないというように、真顔で首を横に振った。

「ちょっと待って、それどういう反応？　それじゃあまるで僕が夢でも見て、妄想を口走ってる頭のおかしい人みたいじゃないか。でもそれってどっちかって言うと君の領分だろう？ついさっきのことだ、よく思い出してみてよ。ほら君、出身地は何処だ？　天の王国だろう！？」

ゴーシュは目を丸くして、それから優しい笑顔になった。

「僕は、この王都で育ちました。孤児院にいたんですけど、その頃によくそんなことを想像していたなぁ。僕の本当のお父さんとお母さんが天の王国にいて、いつか僕を迎えに来てくれるって。僕はこの世界の誰よりも特別な子供だってね」

「ちょっと待て、君、僕のこと頭がおかしいって思ってるのか？」

想定外の反応に、僕は慌てた。

「いやだなぁ、思ってませんってば」

「じゃあなんでここでとぼけるんだ」

「とぼけてないですよ。ただ僕、貴方の言っていることが分からなくって。

アレックスさんって、とってもロマンチストなんですね。とってもすてき。よくそう言われませんか？」
「えっ、まあ、僕はロマンの分かる男なんだけど……。かなり素敵だと思うし……」
「あっ、カイトさんだ！」
ゴーシュが廊下の向こうから歩いて来るカイトをみつけて騒ぎ出した。
「こんにちはっ！　こんにちはカイトさんっ！　僕だよっ！」
ゴーシュがはしゃいで大きく手を振る。カイトがぎょっとして、それからさっきと同様当惑気味に手を振り返す。
ゴーシュはカイトが側まで来ると、さっそくカイトに纏わりついて、纏わりつかれたカイトは迷惑そうな視線を僕に向けた。
僕は納得がいかなかったので、それからしつこくゴーシュに聞いたのだが、彼は僕にそんな話を打ち明けるつもりなんてないのだろう。埒が明かなかった。
「ねえ、君っていったいどういう人なの？　絶対変だよね。さっきのことが本当のことだとしたら、最低でも、君ってとんでもない腕利きの魔法使いってことなんじゃないのか。悪用すれば、世界を支配だってできるよ」
「僕は、普通の絵描きさんです」
「いや、そうじゃないよ」
「じゃあ、愉快な絵描きさんです」
「そんなことない」
「えええぇ、じゃあ、夢見る絵描きさん」
だがゴーシュは意地でも口を割らず、子供のように澄んだ目を僕に

向けるばかりだった。
やがて僕は、何となく脱力した。
と、そこでまたゴーシュはいきなり大袈裟に両手を振りだした。ほとんど突拍子のない子供のようなタイミングで、たった今カイトが歩いて来た有翼乙女たちの居並ぶ廊下の方だ。

「フレデリック様、フレデリック様、ちょっとお願いがあるんですっ」

予想していなかった名前が連呼されたことで、今度はそろってぎょっとした僕とカイトが、同時にそっちのほうを見た。
廊下の交差のところでは、確かにフレデリック王子御本人が、何人かの部下を連れてこちらを見ている。
彼は白い衣装に青いマントを着ていた。相変わらず、見ているこちらが畏怖を覚えるほどの素晴らしい美貌だった。あまり機嫌がよさそうでないのが気になったが、そのせいか夜会の頃より幾分大人びた様子にも思える。僕は慌てて廊下に片膝をついた。カイトもそれに従う。
それなのにゴーシュときたら、世継ぎの王子を相手に、引き続き普通の友人を相手にするかのような遠慮のない態度で言った。

「フレデリック様ってば、ちょっと聞いてくださいよう」
「ゴーシュ、おまえはそこで何をしている」
「あのね、アレックスさんが、貴方に是非お願いしたいことがあるんですって。とっても急ぐことなんですって。でも、なかなか謁見の申請が通らないみたいなんです。だから、今から時間を貰えますか？」

王子様の御予定に割り込もうなんて、何を言うんだと、僕は言えずに立ち尽くしたが、それ以前に僕はひとつの重大な問題に気がつい

た。
僕が殿下に謁見の申請をしていることなんて、僕はゴーシュに一言も話していない……。
フレデリック様は僕を見て、それから少し考え、もう一度宝石のような双眸を僕に向けた。
「私はこれから出る。おまえは謁見希望を出していたか」
僕は恭順を崩さずに頷いた。
「だが話が来ていない。バンナード、握り潰したか？」
殿下はすぐ横に控えていた長身の若い騎士を見た。
騎士はしれっと言った。
「いえ、そのようなお話はこちらに届いておりません。恐らく何処かで手違いがあったものと思われます」
「そうか」
「フレデリック様。僭越ながら未成年者の貴方様に言上仕ります。そのような下位者たちの前で僕を叱責することは感心致しかねます。公爵家の出である僕の名誉に係わります」
「お願いフレデリック様、できるだけ早く会ってあげて。彼の大切な人のことで、とても困っているみたい。でも貴方の助けさえあれば、とっても簡単なことなんです」
両方から要求を向けられたフレデリック様は、特に判断に迷うこともなくすぐにおっしゃった。
「そうか、ではよし。アレックス・アディンセルは三日後午後二時に私の部屋に来い。話を聞く。以上だ」

そしてフレデリック様は気取って金色巻き毛を掻き上げ、先を急がれた。
バンナードとやらが、立ち止まったまま面目を潰されたと言わんばかりの鋭い目を僕らに向けていたが、やがて他の人々を追いかけ殿下に随行した。
フレデリック様御一行が完全に立ち去ってしまわれた後、ようやく声を出して僕は慌てた。

「ねえ、今、部屋っておっしゃった!?
ゴーシュ、部屋って、僕が殿下の私室に呼ばれたってこと?
それも三日後に来いって、殿下への謁見希望が即日通ったってことっ!?」
「フレデリック様は、頼られたら嫌とは言えないタイプなんです」
「それにしたって君、ああっ、今日は何だか、奇跡みたいなことばかりだよっ!」

するとゴーシュはにっこり僕に微笑みかけた。

「人生とは、そうでなくっちゃ。ファンタスティック!」

第２０２話　憧憬の先に

愛とは世界を覆う絶望の暗闇を、煌々と照らし出す光のようなものだ。

それは微かな月明かりかもしれないし、燦然と君臨する太陽かもしれないし、燭台の灯りかもしれないが、とにかくそのように僕は思った。

その本質を僕はまだよく分からなかったが、これは僕に限っての話であって、若い人間のすべてがそれを知らないと思っている大人がいるとしたらそれは大間違いというものだろう。

つらい人生に垂らされた一筋の救いの糸のように、少女だった彼女はきっとそれを信じていたはずだ。何処かの合理主義者があっさりそれをハサミで切って捨てたために、アレクシスはすべてに絶望して、頭がおかしくなってしまうなんてことに、なってしまった一因にはなっただろう。希望のない、見捨てられた人生に耐えられずに。泣きながら僕を恐れるアレクシスの姿が、目に焼きついている。

メイクひとつしていなくても、彼女とは本当に、なんて素晴らしい美女だと誰もが思うような美しい女だった。それなのにアレクシスのこれまでの二十年間には、同じ年頃の女性たちが当然に味わって来た楽しさなんて、ひとつもなかっただろう。恐らくろくに化粧もできず、お洒落も楽しめない。錠つきの牢獄に、囚人もさながらに閉じ込められて、ときどき巡回して来る凶悪な支配者によって、強制的な性交渉だけが延々行われる人生。

ルイーズの記憶の中での傲岸な様子を思うと、トバイアは女のことを平気で殴りそうに思えるし、あの忌まわしい別荘の舞台で見世物にされただろうし、正気がなくなった後には子供まで産まされるし、もはや地獄以外の何物でもなかったはずだ。

そんなアレクシスの人生を見て、兄さんは果たして自分が彼女にした仕打ちの酷さを、たとえ仕方がなかったという理由があるにして

も、肯定できるものだろうか。自分が手を離しさえしなければ、これほどむごいことにはならなかったという自覚があるのだろうか。だが目の前で肉料理を楽しむ兄さんに、そういった感傷は一切ない。彼は女が欲しければ幾らでも女を抱くし、上等な衣装で身を包み、いつだって好き勝手に振る舞うのだ。

僕はその晩居城に戻り、兄さんと二人きりの食卓についていたが、世界が大きく変化をしたにも係わらず、彼はいつも通りだった。アレクシスが生きているというそれまでとは異なった人生軌道に移った今、兄さんがいったいどんな顔をして彼女のことを思っているのか、僕は城に帰り着くまでは幾らかの感傷を期待していた。が、兄さんは特にそれまでと変化がない。どっちかと言うとそれまでよりもずっと薄情だと言わざるを得ない態度、つまり彼女のことなんて知らん顔だ。

公安に保護されているアレクシスを、迎えに行こうなんて気はないようだったし、それどころか、僕に彼女の存在を打ち明ける素振りもない。

確かに兄さんは幼い頃の初恋なんてものにしがみついているタイプには思えないが、もう愛なんて冷めてしまったのか、それともそもそも最初からそんなものは兄さんにあったのだろうか？

ませた少年の興味本位で、何でも自分の言いなりになる気弱な少女を、単純に弄んだ程度のことだったのではなかったか。利発なルイーズだと後からごちゃごちゃ言われそうだが、アレクシスならいかにも泣き寝入りしそうだったからではなかったか。子供が出来たから父上やティファニーを巻き込むようなことになったものの、そうでなかったら彼はいかにも……。つまり僕のときは初犯だから、若かったから、さすがに妊娠した女を処分するなんて冷酷な手段を思いつかなかっただけだったのではないのか。

確かにそれくらいでないと、領主なんてものは務まらないのかもしれない。

だが、そうだとしたって、ここはもう、男の僕が出て行かなければ

ならない状況だろう。アレクシスは僕のお母さんだ。だからお母さんを虐める人間には無条件に腹が立つし、あんなふうになってしまうほどにお母さんを見殺しにした兄さんに対する怒りが、僕はどうしても湧いてきてならなかった。

しかし僕はただちに胸を張って「貴方が見殺しにしたアレクシスを、この僕が助けたのだ」とは、兄さんに主張できない事情があった。確かに僕が人を殺したことには違いなく、そういう記憶があるわけだし、拳銃の弾だってすっかり空になっていた。僕は確かに血みどろの現場に居合わせ、アレクシスを襲う死と戦ったのだ。そして見事、拷問吏と公爵夫人に化けた死を退けた。だから今更「僕は人殺しなんてできない、僕は兄さんとは違うんだ」なんて寝言を言うつもりは毛頭ない。ここは是非とも昼間起こったことと僕の活躍を兄さんに言って聞かせたいのだったが、厄介なことは、どうにもゴーシュがあの一件を認めようとしないということだった。

あの場面にいた人間のうち、上述三名は僕が殺してしまったし、アレクシスは正気がないわけだから、この話の一部始終は後は残りの当事者である僕とゴーシュ以外には知りえないことなのに、ゴーシュはとぼけるのを最後まで撤回しなかった。

となると、一連の奇跡的な出来事は、僕が見た夢ということになる……。

どう考えてもあれは絶対にゴーシュの魔法と、僕の勇気ある、果敢で英雄的行動によって未来が改変されたということのはずなのだが、それ自体が正史となってしまい、アレクシスは運よく虐殺を免れたということになってしまっている現在、ひとりとして証人がいない以上、不本意なことだが世間的にはこれは僕の妄言ということになってしまうのだ。

「僕が時間を遡って過去に戻って、アレクシスを護った。ついでにウィシャート公爵夫人を殺して来た」……客観的に見ると、確かにちょっと頭が変な人々が、言っていそうなほらという印象は拭えない。

そして死んだはずのアレクシスは確かに生きていて、公安局に保護されていた。

僕はあれからその足で王宮内の一室にいるアレクシスに面会に行ったが、彼女は確かに生きていたのだ。男性を恐がり、ときには男性を見るだけで悲鳴を上げて錯乱するそうなので、彼女の周りには女性の職員や召使いばかりが配置されていた。

サンセリウスにおいていまや兄さんは力のある貴族の一人であるため、彼女はアディンセル家の姫というような特別の待遇で扱われていた。もっともアレクシスの実父が誰であるかを思えばこれは当然の待遇ではあったし、実際、別の伯爵家の姫が同じような目にあって紛れていた先例があったので、公安局側としては将来的な軋轢を避けるための用心のためということもあるだろうが。

でもとにかくそういう事情のため、僕はあまりアレクシスの側に寄ることができなかったし、お母さんに拒否されるなんて、心情的に少なからずつらいものもあり、僕は結局連れ帰ることができなかったのだ。

そして今はいったいどうやって話を兄さんに切り出そうかと、悩んでいるところだった。

僕はやっぱり兄さんほどには冷徹に物事を見ることができないし、だからできればアレクシスを代弁して、若い義憤のまま怒りをぶつけてやりたいのだが、テーブルの向かい側にいる兄さんと相対するとどうしても気後れしてしまうのは、これは子供の頃の悪い癖なのだろう。

しかし、僕は理性的な大人になる必要があったのだが、それは断じて冷酷な人間になるということとイコールではなかったのだ。

だから兄さんがアレクシスを見捨てたことや、アレクシスが生きているのに彼女を迎えに行く様子がないこの恐ろしいほどの冷血ぶりには、今こそガツンと言ってやらなければならない。

そう、僕はいまや自分を猫だと思っている虎だと自覚しなければならないのだ。

「アレックス、食べないのか。好き嫌いは許さんぞ」

兄さんが僕の無言の憤慨に気づいたのか、じろりと僕を見て釘を刺した。

……やっぱりそれはちょっと言いすぎかもしれない。

自分を仔うさぎだと思っている、大うさぎくらいかもしれない。

しかし大うさぎだって大したものだ。畑の作物を食い荒らす荒くれ者だし、もぐらくらいには勝てるはずだから。バッタや蟻を踏み潰すのだ。

第２０３話　伯爵の饗宴（１）

「あの、兄さん」

どうやったら思惑通り話を進められるか。僕が主導権を持って兄さんに物を言えたためしはないのだが、脳内での試行錯誤の挙句、結局他愛ない世間話から始めることにした。だが僕のこうした態度を腰抜けと馬鹿にしてはいけない。これは横暴な交渉相手に有能な外交官たちが使う、高度な外交テクニックでもあるのだ。

僕は兄さんの機嫌が悪くないことをちゃんと確認してから、恐る恐る切り出した。

「……あの、今日試験に行って来ました」

「首尾はどうだったね」

兄さんは、分厚い牛肉の香草焼きに年代物の赤ワインという、好物の夕食内容に満足しながらの笑顔で言った。僕は別に兄さんが恐いわけじゃないけど、兄さんの機嫌がいいと、やっぱり多少ほっとする。

テーブルの上には金の燭台が灯り、今夜は少し夕食のメニューが……、豪華と言うよりはやたら肉料理が多くなっていた。テーブルの上は何処もかしこも、肉料理ばかりが盛りつけられている。僕の試験のことで、ごちそうを出せとでも言われたのであろう厨房としては、兄さんの好みに従ったのだろう。無難で利口な選択だ。ここではとにかく兄さんの機嫌を取ってさえおけば間違いがない。そのせいで、たった一品あるトマト料理でさえ、肉が山ほど煮込まれている。僕はデザートに期待するしかなさそうだ。

「ええ、よかったです。採用試験がこんなに簡単でいいのかと思う

くらい。それも、一日で済むなんて……、何か裏がありそうで恐いな」
「どうかな」
兄さんは含みのあるようなないような微笑をした。
「それで、アークランド公にちょっと依頼されたことがあって」
兄さんは赤ワインを優雅に飲みながら、余裕の笑みで僕の話を聞いた。
「ほう、驚いたな。さっそく何か命令を受けたのか」
「ええ」
「それは想定外だ。やったな。それで私に相談を？」
誇らしげに兄さんは言った。
僕は気まずく頷いた。
僕が遠慮がちであることの理由を、恐らく見当違いに受け取ったであろう兄さんは、ますます親身になって聞こうとした。で、僕は言った。
「……アレクシスを迎えに来いって。ギルバート卿が引き取りに来ないから、何とかしてくれって言われました。試験の後、内務卿の部屋に呼ばれて、いつまでも誰も来ない彼女が可哀想だろうってお話」
がたんと音がして、僕が見ると、兄さんが席を立ったところだった。
「えっ？」

考えられないことに兄さんは、食べかけの食事を残し、ワイングラスを手に持ったまま、夕食のテーブルを中座し立ち去ろうとしていたのだ。僕はまだこれから兄さんに説教的なことを言おうと思って、頭の中に文章を作っていたその矢先にである。

「兄さんちょっと待って、アレクシスの話だよ！」

僕は慌てて呼び止めた。

すると兄さんはまるで僕が我が侭を言って煩わしいとでも言わないばかりに、上からじろっと僕を見た。

「アレックス。新しいガールフレンドの話なら、また今度にしなさい。今はそんな気分ではない」

「いや、ガールフレンドじゃ」

「もっともそんな話は、聞くまでもないがね。おまえが自分で連れて来るのはろくな女ではないからな。おまえは女を見る目がない。外づらがいいのにころっと引っかかって、この間もそうだったな、典型的な馬鹿女を引っ張って来た。連中は目標をさだめると簡単に股を開くが、それでおまえのようなのは逃げられなくなる。はめたつもりがはめられたというわけだな。ふっ、今のはおもしろいな。笑ってもいいぞ。

とにかくアレックス、女を選定するときには、よく注意することが必要だ。考えが卑しく手癖の悪い女、道徳や貞操観念がない女などを掴もうものなら、こちらが一生を棒に振るはめになるからな。この間のような女は論外だぞ、あのての女は狡猾で、自分を取り繕うのが非常に上手い。そのうち自分すらも騙して、いつしか自分が清楚で純粋だと平気でそのように思い込んでしまうから性質が悪い。そんな毒婦に照準を合わせられては、おまえのような単細胞では、食い物にされるのがおちだ。

そろそろ新しい妾を一人あてがっておくか。何せおまえは若い独身

の上位貴族だ、王都に出たら、女どもが目の色を変えて群がって来るぞ。幾ら飢えていると言っても、ハリエットにはまだ手を出すな。あれは勉強中の身だ。年端のいかない少女が恋愛に狂うと、只でさえ周りが見えていないのが、相手の男以外がまったく見えなくなるからな。しかし現状あの娘は代理がきかないから、扱いは当分慎重にしろ」

「兄さん、あの」

兄さんは僕の話を聞かずに更に捲し立てた。

「アレックス。もしかするとおまえは、金髪なら何でもいいと思っているのではないのかね。この間の女もそうだったろう。だがそれは愚かなことだ。確かに金髪女はいい。が、そんなことだけで女を選んではいけない。金髪女の魅力に騙されるな」

「金髪好きなのは貴方でしょう……。僕はタティがいいんだ……」

「アレックス、タティじゃない。おまえを可愛がってくれた優しい乳母に似た娘に執着したい気持ちは分かるが、いい加減タティは卒業だ。

おまえは私が選ぶのを、素直に受け取っておくのがいちばんいいのだ。そうすれば少なくともあばずれには当たらずに済む。やはりそろそろ専用の妾が要るかな。いつまでもタティ、タティと言っているのでは」

「兄さん、だから、アレクシスのことだよ！」

「ほう、おまえの新しい女はアレクシスと言うのかね……。いや、結構。紹介はいらんよ……」

そして兄さんは僕にてのひらを向け、飽くまでも気取って歩き出したが、そのまま自分が座っていた席のすぐ右横の椅子に躓いた。

第２０４話　伯爵の饗宴（２）

華麗な身のこなしに定評のある兄さんが、軸足を椅子に引っかけ、よそ見をしながらつんのめり、手に持っているグラスのワインが跳ねて袖にかかる。

「兄さん、大丈夫ですか？」

僕は慌てて声をかけた。

「何がだね」

しかし襟を引っ張って姿勢を正した兄さんは、何事もなかったかのような澄まし顔で言った。まさか椅子に引っかかって転びそうになったなんて間抜けなことを、認めるつもりはないらしい。

「何がって、だから……」

僕は染まった彼の袖口をそっと指差した。

「あっ、くそっ」

それを見て、兄さんはやっと自分の失態に気がついた。

ワインがこぼれたことにも気づかないなんて、表情にこそおくびにも出しはしないが、やっぱり彼は僕がガールフレンドの話をしているわけじゃないことを最初からちゃんと分かっているし、そのことで明らかに動揺をしていたのだ。

それで僕は、今夜の兄さんの機嫌がもうあまりよくないことにもなったことだし、やっぱりこれ以上は話をするのをやめることにした。

僕が何を言いたいか最低限のことは十分伝わっただろうし、だから後はもう服にワインを浴びた彼を刺激しないように、可愛くするに限るからだ。

「兄さん、お忙しいところあれだけど、とにかくそういうことだから。伝えたよ」

「アレックス、いいか、それは……」

だが気分を悪くした兄さんは、僕を逃がす気はないようだった。

「おまえ、いま何と言った。アレクシスだと？　まったく！　ああくそっ、なんで私に言わず子供に……」

兄さんはまだ混乱していたが、ガールフレンドがどうのと言って話を誤魔化し切れないということに、ようやく気がついたのだろう。今度は開き直ったかのように怒り出し、少したりとも罪悪感を覗かせるどころか、まるで僕が悪いことをしたかのような懲罰的な物言いで話を運んだ。

「何を聞いた」

「えっ、何って？」

「内務卿に何を聞いたと聞いている。答えなさい」

「だから、アレクシスを迎えに来いって。彼女はトバイアに渡した人質だったのでしょう。内務卿閣下は兄さんを責めるなと言われました。

あっ、トワイニング公とも今日お会いしたんですが、彼は三十年以上前に生き別れた娘のアレクシスが何処にいるか知らないかって、涙ながらに僕に相談して……、考えてみるとそこからしてすごい偶然が重なってるな。何なんだ……」

「それだけか？」

兄さんはテーブルをまわって、向かい側の席に座っている僕に近づいて来た。
でかい図体な上に恐い顔をして近づいて来るとか、それだけでも嫌がらせのようなものなのに、彼は側まで来ると手を伸ばし、強引に僕の顎を掴むと、顔を近づけて僕に確かめた。
僕は怖々頷いた。
すると、兄さんは僕を突き放した。

「ならばいい。一応おまえにも教えてやろう。そう、アレクシスとはルイーズの姉だ、二人は私の乳姉妹だった。ルイーズがディアス家の養女であることは話したことがあったか？」

僕は首を横に振った。

「まあとにかくそうなのだ。それで、当初姉妹は父親の認知さえない、淫乱女が産んだ私生児というやつだったのだが、妹のほうが生来異常に魔力が強く、優秀な魔術師になると見込まれたためにだ、男寡だったジャーマン・ディアスにティファニーを娶らせ、彼に姉妹の後見人をさせることで体裁を持たせて採用した。
だがそれもそのはず、姉妹とはリドリー・トワイニングの若かりし日の火遊びの結果というやつだよ。留学していたティファニーに彼が目をつけ、ときどき夜の相手をさせていたということのようだな。トワイニング家は聖王女ステラの家系だ、魔術師と言うよりは、かつて優れた聖職者を多く輩出していた神官家系だ。ルイーズは一族の典型的な天才児だったわけだ。不義の子なので存在すら表沙汰にならぬまま、母親ごと遺棄されたがね。
だがステラの血筋は誤魔化せぬ。あの家系は代々、特に女の容姿が直系王族に批准する格段に美しいものとなるようだが、そのせいでトバイアが所望したので片方くれてやったのだ。容姿しか取り柄の

ない、無能な姉のほうをな。もう随分昔のことだ。
その話、おまえは後でルイーズにしてやれ。ルイーズはずっとそのことで苦悩していた。姉を身代わりにしてしまったと言ってな。彼女は姉の解放を泣いて喜ぶだろう。
後日、おまえたち二人でアレクシスを引き取りに行き、そうだな、上等の別荘を一つ用意する。そこで楽に暮らせるようにして……」
「アレクシスは僕の母上だと聞いたんですが」
僕は、兄さんが随分冷血なことを言うので、ちょっとむっとして言った。
「何…？」
兄さんが気色ばんだのが分かった。
兄さんは通常なら僕を相手にそうそう怒りを露わにすることなんてないのに、その瞬間はかなり本気だった。怒りを帯びた兄さんの視線の鋭いことと言ったら半端ではなく、だから僕は恐かったが、でもここは負けてはならない場面だと思って、頑張った。
「なんで彼女がまるで只の乳姉妹だったみたいな言い方をされるんですか？　それも、ものすごくどうでもいい存在であるみたいな言い方だ。ほとんどルイーズのおまけだと言わんばかり。どうしてなんです？　彼女は僕を生んだ人でしょう。
彼女と結婚しようとさえしていたのに……、なんでそんなに冷たい言い方を？
迎えに行くなら、貴方が行けばいい。いや、貴方こそが行くべきでしょう、父上」
僕の挑発によって兄さんの美しい顔がいよいよこわばり、間もなく兄さんが、再び僕の顎を掴んで顔を近づけた。

僕は兄さんに掴まれた顎が握り潰されそうで涙目になった。

第２０５話　約束までの距離（１）

兄さんが僕の父上で、アレクシスが僕の母上。なんでそのことを僕が知っているかということについては、これは、もう説明するのも面倒臭いのと、ルイーズが真実を僕にしゃべったとなると、兄さんの怒りがルイーズに向くのは予想がついていたし、僕がルイーズにしようとしたことを知られるのも嫌なので、アークランド公から打ち明けられたことにした。彼は察しのいい聡明な人物だと言って。どう考えても囚われたアレクシスがその前に子供を生んでいて、その生んだ子供が僕だなんて話を、公が分かるわけがないのだったが、兄さんはその晩随分取り乱していて、僕がもっともらしく内務卿配下の諜報機関名を出したりして、理屈っぽくその作り話をすると、何となくそれを信用した。勝手に勘違いした兄さんが悪いので、僕はその上に話を乗っけて、そのまま押し通した。

「貴方は酷い人だ。貴方はアレクシスを迎えに行くべきだ。なんで行かないんですか？
貴方には彼女を迎えに行かなければならない義務があるはずだ。僕を生ませた女じゃないですか。若年での出産は通常だって死亡リスクが跳ね上がるっていうのに、更にアディンセル家の呪いなんて酷いことに係わりを持たされて。
だいたい十一歳で子供を作るとか、話を聞いたときにはどう解釈していいか分からなかったよ。普通は女の下着を見るのもドキドキする年頃だ。僕もカイトもずっとそうだったんだぞ。僕らは何年もそんなことばっかり言ってたんだ。はっきり言って今でも言ってる！それなのに、その若さで女に手を出すとか、兄さん貴方、エロすぎなんだ！」
「エロくて何が悪い。生んでやったんだから感謝して貰おう」

兄さんは居直った。

「貴方が生んだんじゃないでしょうが！　なんでそこで威張るんだ。なんでそんなに態度がでかいんです、ここまで話して全然反省もなければ、アレクシスを心配すらしない貴方の態度は僕には理解できないことだ。

本当にね、アレクシスは死ぬ思いをして生んでくれたんですよ。貴方出産の痛みって分かってるんですか？」

「それはおまえも分からんだろう」

「そうだけど、でも、西瓜を鼻の穴から出すより酷いって話。僕ほんと女じゃなくてよかったって思ったんだ」

「よくしゃべる子供だな」

「それくらい大変な思いをして、僕を生んでくれたってことだよ！　しかもトバイアに生贄に差し出したわけでしょう。そこまでやっておきながら、彼女のつらい思いに報いもせずに放置とか、兄さん貴方は人でなしにもほどがある！」

兄さんと僕は、夕食を中断し、テーブルのわきに立って延々話し合いを続けていた。話し合いと言うか、もはや再会するために何ひとつ障害のないアレクシスを、今もって迎えに行かないなんて訳の分からないことを言う兄さんの強情を、僕が徹底的に改心させてやる必要があったのだ。

しかし兄さんは先刻置いた赤ワインのグラスを手に取り、暇つぶしのような仕草でそれを飲んだ。

彼は最初、僕に二十年間隠し通して来た出生の秘密とか、アレクシスの存在とかを知られたと知って、多少は当惑した様子を見せていたのだ。が、それもほんの少しのことだった。もしかすると内心ではまだ動揺があるかもしれないが、恐ろしいことに、彼はそういう心情的な弱みを一切顔に出さないで会話ができる才の持ち主だった。これは兄さんが心臓が強いから幾らかはったりをかませるというこ

とか、生まれ持ったポーカーフェイスとでも言うのか、それともそろそろ中年だから経験値によってできる技なのかは分からない。しかし、今ではそれ自体がまったく大したことがないというような顔をしているのは、見事の一言に尽きた。相手が持つ有効であるはずのカードを、あたかも無意味なものであるかのように印象操作できるということだからだ。

もっとも今は相手が僕だから、そういう印象操作をしたってどうしようもないのだが。兄さんのやっていることは所詮悪あがきだった。僕は意地でも兄さんにアレクシスを迎えに行かせたいだけなので、これは高尚な会話や駆け引きじゃないし、議論自体には負けたとしてもその辺はどうでもいい。いつものことだが、このてのことで兄さんに負けても僕のプライドは別に傷つかない。だからごり押しするのみだった。

「まったく煩い。迎えに行け迎えに行けと……、たかだか使用人を何故この私が迎えに行く必要がある。ああ、人でなしで結構だね。それが何だと言うのだ、そんなことは最初から百も承知だよ。わざわざおまえに分かり切ったことをご説教頂かなくてもだ。

とにかく、おまえは少し落ち着きなさいアレックス。男が感情的になるなどみっともないぞ。それにだ、私を誰だと思っているのだね。おまえごとき子供に命令されるいわれはない。

分かったらおまえは素直に私の言うことに従い、おまえが明日にでもアレクシスを迎えに行って来るのだ。アレックスのお母さんなんだろう？　私はよく知らないが、どうもそういうことらしい。だったらおまえが行って来い。それができなければ只ではおかんぞ」

「只でおかない？　ふん、じゃあどうするんですか。僕を殺すって？」

「その短絡的で生意気な口を封じるためにできることは幾らでもあるということだ。アレックス、私には考えひとつでおまえなどどうとでもすることができるのだぞ」

「いつもそれだ。脅して言うことを聞かせるとか、兄さんは無茶苦茶なんだよ」
「従わないおまえが悪い。私に口答えをして許されると思っているおまえの根性が気に入らない。私の温情につけ込んで物事が通ると思っているその甘ったれた根性がだ」
「論旨をそらそうったって駄目だ。僕の根性なんて今はどうでもいいんだ。兄さんはアレクシスを迎えに行ってよ。貴方が行かなきゃ駄目なんだ」
「煩いぞ。大人には大人の事情というものがあるのだ。アレクシスの息子ならばおまえが行って来い。それが道理というものだ」
「何が道理ですか、寝言を言うんじゃないんだ」
「アレックス、私の寛大さにも限界がある。誰に向かって口を聞いているのか、おまえはよくよく考えてみるがいい」
「父上です」
「……」

兄さんは少しぼんやりと僕の顔をみつめて、それからはっとしたように顔を引き締めた。

「馬鹿、父上じゃない」
「あっ、もしかして今ちょっと照れた?」
「違う」
「いや、そうだよ。兄さん貴方父上って言われて嬉しかったんだ」
「アレックス」
「父上」
「……」

兄さんが、また言葉に詰まるのを見て、僕はこの見たこともないような光景がおかしくてたまらなかった。僕が兄さんをこれほど簡単に言い負かせるなんて、それはまるで魔法の言葉だった。

「何だよ、つまらないことでそんな反応するなんて、兄さんらしくないな」
「おまえのような子供に何が分かる」
兄さんは憤慨した。
「いいだろう。この上私に反抗をするというのであれば、ただちにおまえ名義の小切手の発行を停止し、小遣いもなしにしてやるぞ」
それはちょっと困るので僕は黙った。これから王都で暮らすとなると、何かと物いりだろう。しかし僕が自分で働くことで取る給金なんて、兄さんから貰うお金に比べると、たぶんたかが知れている。まさかの金欠生活を強いられては、独立も何もあったものではないからだ。
「何だよ、卑怯だぞ」
僕は怒って言った。
「権力の使い方を教えたまでだ。感謝しろ」
それから兄さんは二度ほど軽く手を叩いた。間もなく兄さんの傍らの空間に魔法陣が浮かび、ルイーズが広間に現れる。
「お呼びですか」
腕利きの魔術師といえども、いつも千里眼を張り巡らせて監視状態でいるわけではないらしい。もっとも兄さんと僕がいがみあっている理由が、通常、大抵は取るに足らないことなせいかもしれないが、

どうもまだ事の成り行きを掌握していないらしいルイーズが、自分の赤い爪を見ながら暢気に言った。彼女のセクシードレスは本日は真紅だった。体型の分かるぴったりした赤いドレスの裾や胸元に、チャコールのレースが覗いている。
兄さんはそんなルイーズを見て、気まずく言った。

「この子供に全部ばれた」
「あら、何がですの」
「アレクシスのことだ」
「あらっ、な、何がですの？」

第２０６話　約束までの距離（２）

腕組みをして兄さんは言った。

「今日、アレックスが試験を受けに王宮に行ったろう。そこでアークランド公が、アレクシスのことを話してしまったらしい。アレクシスに纏わることを洗いざらい全部だ。これは私を父上などと言って、まったく、あの公爵はろくでもないことを……」

ルイーズは黙ったまま僕を見た。僕は何とか口裏をあわせて欲しいという念を込めて、ルイーズを見返した。

「あら、まあ……、あの公爵様は勘がよろしそうよ。フレデリック王子の味方をなさるくらいですもの、先見の明がおありになるの。それに、アレックス様だってもう小さな子供ではないのだし、そう秘密にしておくことも……。貴方が父親だと知った当日でさえこの落ち着きぶりですもの。私たちが思っているより、もうずっと大人になられているのよ」

「それだといいがね」

兄さんはやがて何かを察したらしく、疑うように目を細めてルイーズを見た。

ルイーズはお得意の笑顔で、にっこり笑って誤魔化した。

「アレックス様はご聡明だから。最近はしっかりしてらっしゃるの」

「この生意気な半人前がご聡明かね。なるほど物は言い様だ、このお調子者め。おまえは女の分際で余計なことをべらべらとしゃべりおって……」

「仕方がなかったの」

「なるほど？　よろしい。では口の軽いお調子者の魔女に、この私から寛大なる三十秒間の申し開きの機会をくれてやる。何故そんなことに至ったか、心して自白せよ」
「それはつまり、成り行きということですの」
「せめて三十秒を使え、馬鹿者」

僕は、兄さんがルイーズをかなり怒るんじゃないかと思って、万が一のときは身体を張って止めに入ろうと身構えていたのだ。しかし二人の関係は非常にこなれていて、ルイーズは他の者たちなら脅迫と受け取りかねない兄さんの意地悪な言い方を、さらっとかわすのが上手かった。
結局、兄さんは息を吐いただけだった。

「……もういい。一度知られてしまっては、もはや取り繕いようがない」

その判断は兄さん大雑把でしょう、何のために二十年も僕に秘密にしていたんだと言いそうになったが、そこに気づかれるとまた面倒臭いので、僕は黙っておいた。

「それでだ、おまえをここに呼んだのは言うまでもない。明日おまえはアレックスを連れて、アレクシスを引き取りに行って来てくれ。そろそろ催促が来るだろうとは思っていたが……。とにかく幾らこの子供に言って聞かせても埒が明かない。自分の母親を迎えに行かないと強情を張るのだ。まったく誰に似たのか、腹立たしくてならん」
「貴方じゃないかしらね」

ルイーズは理解するように頷いた。

「馬鹿を言え。私はもっと素直な子供だったものだ。主君たる父上には常に絶対服従だった。私は口答えひとつしなかった。どんなに腹の立つことを言われようと、私は常に礼を尽くしていたものだよ。それがこの子供はどうだ。私が甘いのをいいことに図に乗って、つけ上がって、我侭放題だ」

「いや、そうじゃないよ」

「煩いぞ。子供は黙っていなさい。それでだ、とにかくルイーズ、おまえはアレックスと一緒に行って、アレクシスを連れて帰ってくれ。宰相を任されるとの話すらある男の催促を、無視するわけにはいかないのでな」

「やっとその気になってくださったのね。いつまでアレクシスを放置しておくおつもりかと、内心で気を揉んでいたの。ご自分でいらっしゃらないの？」

「だから、私は忙しい身だと言っている。おまえはよく知っているだろう」

「あら、でも。そんなに時間のかかることではないと思うわ。姉さんだって私なんかよりはきっと愛しいギルバート様に、迎えに来て欲しいって、思っているはず……」

「ルイーズ。おまえもその子供と同じような戯言を言うのかね」

「なんでそんなに冷たいんだ」

僕は横からまた文句を言った。

「冷たいのではない。忙しいだけだ」

兄さんは僕に念を押した。

「私の予定表は空白がないほどだぞ。何せ、生意気な口ばかりきく何処かの子供が一人前に機能しないからだ」

「いや、もうちゃんと名代で事務処理くらいできますよ」

「だから、そんな時間を取ることができない。分かるな」
「分からないよ。僕にだって伯爵の代理はできます。任せてくださ
い。実際やっていたでしょう。兄さんの留守を預かってた。何時間
もかかることじゃないんだ」
「そうか、分からないか？　仕方のない奴だ。ではもう一度言うぞ。
アレックス、私は忙しい。だからおまえが代理で行って来い」
「この分からず屋」
「結構だ。アレックス、おまえは未熟者で、男の生き方というもの
が理解できない浅はかな子供なのだ」
「つまりアレクシスが汚されたから、もう要らないっていうことな
の？」

僕はたぶん、誰もが言い出せないでいたであろう核心を突いた。

「汚らわしい女とは手を切りたいっていうこと？　兄さんが、遊び
飽きた貴方の恋人たちにしているように。
それとも精神が狂ってしまった女なんて、そんな負債を抱え込むの
が嫌なの？
そうなら、いいよ。僕が行って来る。僕はそういうふうに思う人に、
お母さんと会って貰いたくないし。
僕にとっては血の繋がった家族だから、僕は絶対アレクシスを見捨
てない。ルイーズと二人で迎えに行って来る」

そして僕は兄さんをみつめた。

「兄さんがアレクシスを汚らわしいと思っていると言うなら」

ルイーズも、彼女の立場では言い出せなかったのだろうが、どうや
らその点を知りたかったようで、切ない表情で兄さんをみつめた。
兄さんは僕ら二人にある意味で責めるような目を向けられ、非常に

不愉快そうにして黙り込んでいたが、やがて何度か息を吐き出して、苛立ちを混じりに呟いた。

「同じような目をして私を責めるな、まったく馬鹿どもが。……あわせる顔がない。あわせる顔が。そうだろう、会えるわけがない。私は以前の私ではない。私はもう別人だ、アレクシスが好いてくれた頃の純粋な少年ではないからだ。

他者を謀略に嵌め、殺す程度のことは茶飯事だ。私はこの地位を築くためにできることは何でもやって来た。汚れ仕事も厭わない。他人の不幸や涙さえ、今の私にとっては何でもないことだ。この手を血で汚し、実の息子に人でなしと罵られても平然としていられる鉄の心臓を手に入れたよ。

しかも私は彼女を切り捨てた。この選択を間違っていたとは思わないし、私は正しいことをしたと今でも確信を持って言える。私は正しいことをした。

だがそれでも、あわせる顔はないよ。……だから行けない」

第２０７話　聖女の愛しい伯爵

結局兄さんは強情を張って、アレクシスを迎えに行こうとしないので、翌日僕とルイーズでアレクシスを迎えに行った。

ルイーズが主張するアレクシスの安全面への配慮、また兄さんの乳姉妹である彼女たちが育ったのは、実質実家ではなくこの居城内だったということから、アレクシスは当分は別荘ではなくサンメープル城内に置くべきだということになった。

昔アレクシスがこの城に住んでいたときの部屋を、彼女の好きな花や人形で飾って、アレクシスのために兄さんづきの古株の召使いたちが改めて配置されることにもなった。できるだけアレクシスの居心地がいいようにという兄さんの特段の配慮だというルイーズの言葉を信じるなら、昔のアレクシスを知っている人々のうち、まだここに仕えていた人々が彼女のために掻き集められたわけだ。

だがその昔、中庭で無邪気に花摘みをしていたアレクシスはもういない。

僕は憧れのお母さんを手に入れたい気持ちもあって、最初、彼女は単なる一時的な記憶喪失なのではないかと、そんなことを期待していた部分もあった。彼女の部屋をうろうろしていたら、やがてアレクシスが僕をみつけて、微笑っておいでおいでをしてくれやしないかと……、しかし現実はそこまで都合よくはいかなかった。長年の虐待によってアレクシスの精神は思っていたよりずっと衰弱し、大袈裟な表現などでは決してなく、完全に気がふれていた。

彼女は一日の大半を意識も保てないような状態で、起きているときには室内に誰か男がいるというだけで悲鳴をあげたが、それは僕に対しても例外ではなく、彼女は僕が誰であるかを、認識することができなかった。

もし二十年前に赤ん坊を生んだことを記憶の何処かにとどめていたとしても、それと目の前の二十歳の男とが同一人物だなんてことを、

結びつけることは今のアレクシスには無理なのだ……。

彼女の心がせめて安らぎを取り戻すためには、虐待を受けた年月と同じ年月か、それ以上の年月がかかるだろうと医師たちは説明してくれた。それでも心が癒されることはないかもしれないということだった。

兄さんがどのようなお考えでいらっしゃるにしても、僕が一生貴方の面倒を見るから、安心してと、僕は深い眠りにつくアレクシスに誓った。

思えば彼女の人生とは、惨憺たる裏切りの人生だったのだ。幼くして父親に切り捨てられ、恋人であるはずの男からは一度ならず二度までも、切り捨てられた。ゴーシュが救いの手を差し伸べてくれなかったら、あれは今となっては僕の見た夢だったのか、自分でもよく判断がつかないところだが――、アレクシスは今頃報われるということがないままに、その人生の終幕を迎えているところだった。だからせめて息子である僕だけは、彼女を切り捨てるようなことをしてはならないし、しないということを……、本当は起きているときに言いたいのだが、起きているときに僕の姿なんて見ようものなら、絶叫を上げられてしまって僕もいたたまれないので、寝ているときにこっそり寝室に行って、そんなことを心の中で呟くのだった。

不義の娘という理由からルイーズ、アレクシス姉妹を支えてくれる親族はおらず、アレクシスの帰還を聞いて駆けつけて来たのは結局二人の実母であるティファニーだけだった。

ティファニーは若い頃にしでかしたことで、彼女の実家からは縁切りをされているそうだ。と言って、婚家であるディアス家の面々としても、単なる後妻の連れ子に過ぎない姉妹のことを親身に思う者はいないようだった。

ルイーズとアレクシスには義理の父親の他に、五十過ぎの義理の兄がいたのだが、老いた義父に代わって家の実権を持つこの男がまた曲者だった。後日、体裁のために形だけ義妹の見舞いにやって来た彼は、所詮ダグラスの下で働く三下に過ぎないくせに、ルイーズや

アレクシスに対する態度があまりにも高圧的で、売春婦と罵らんばかりだったのだ。
眠っているアレクシスの顔を見ながら、忌々しそうに彼は吐き捨てた。

「まったく汚らわしい。男になぶられた肉体をまあ、おめおめとどの面下げて……。生きて戻るとは、おまえもしぶといことだ。この売女。血は争えんものだよ。
ウィシャート公の肉奴隷にされた女が我が一族の名を名乗っているとは、こんな恥辱もないものだ」
「義兄様、どうかそんな言い方をされないで。事情をお分かりでしょう。アレクシスはそんな女ではありません。誹りなら私が受けるわ」
「当然だルイーズ。おまえも所詮は伯爵閣下の肉奴隷ではないか。この盛りのついた淫乱姉妹が。
ギルバート様とおまえが只の主従関係と思っている者など界隈に誰もおらん。女の魔術師が主人と性的関係を結んでいることは、そう珍しいことでもない。ましてやおまえはあの淫乱情婦を母親に持っているわけだからな。
未婚の身で男と通じ、結婚はおろか認知すらも貰えぬ子を産んだ筋金入りの売女の血筋だ――、母と姉が売春婦であるからには、おまえとて素質は十分。おまえももっと積極的に伯爵様を悦ばせ、せっせとお慰めすることだ。おまえたち母娘はそれが得意だろう。見事あの方の子を孕んでくれたなら、こちらとしても大金星だ」

それから彼は部屋に僕がいることに気がついた。睨んでやると、弟君様におかれましてはご機嫌麗しゅうなんて、一転して美辞麗句を並べ立て、慌てて逃げて行ったのだが。
彼は自分よりも年の若い後妻のティファニーを今でも憎く思っているし、また易々と当主専属となったルイーズの才能に嫉妬をして、

何かとつらく当たるというような、何だか非常に荒んだディアス家の内情を垣間見たのだった。

ルイーズは女子だから今後も彼の立場を脅かすようなことはないのだが、連れ子であるルイーズは、常にディアス家の面々に無視され、居場所がなかったことを、アレクシスの見舞客が他に誰もいないこととあわせて、彼女は居心地悪そうに僕に打ち明けた。だから年末年始にも、いつもサンメープル城にいたのだと。

「恥ずかしいところを見られちゃったわね」

特別にしつらえた、花畑のような寝台で寝息を立てるアレクシスの側で、僕らは話をした。

「そういう身上だから、お見舞いはないのよ……、ディアス家の一族も、お友だちも……、私生児とは、まともなお嬢様たちはつきあわないの。仕方がないことだけど、悪い友だちを持つと、評判が下がってしまうから。女の場合、結婚にすら影響してしまうものね。だからこれは、姉さんがということじゃなくて、私が敬遠されているということなのよ」

「君を慕う人は、君が思ってるよりいると思うよ」

僕は慰めた。

「僕もいるし。あいつとっちめる？」

「いいわね」

ルイーズが笑った。

「天の王国では、生まれとか性別とかの差別もないんだって」

僕はふと窓から見える雲を指差して言った。

「共和制を敷いている、平和で立派な社会だそうだ。まあ僕は血統主義を完全に無くしてしまう必要はないって思うけど。結構、いいところみたいだよ。聞いたところでは、理想郷みたいな印象を受けたんだ。神様の御膝元だからかな。でもそこは、その社会の水準にあう人々しか住めないようなことを言ってた。良識やモラルのない人間は、はなからお断りってことなんだろう。君は天の王国の存在を信じてる？」

「さあ、どうかしら」

ルイーズは優しく微笑んだ。

「でも、すごく興味深いお話ね。どなたがそんなことを言っていらしたの？」

「それは言えない。しゃべらない約束だから」

「そう。あるなら是非行ってみたいものね。旅行でもいいから」

「そうだね」

「そういうことなら、私では、住めるかどうか分からないし。そんな理想郷があるなら是非とも観光だけでも」

「君は住めそうな気がするけどね」

「あら嬉しいわね。でも、もしそんな場所に行ける人間がいるとするなら、それは真っ先に姉さんだと思うわ。彼女は本当に、天使みたいだったのよ。性格がいいどころのお話じゃなかったの。純粋で、人の言うことを簡単に信じてしまって。

人を疑ったり、ましてや攻撃するなんて思いつきもしない。自分が傷つけられても、相手を傷つけるということができないの。誰かに私生児だなんて意地悪言われても、笑顔でいてね、でも微笑みながら、ぽろぽろ泣くの。だからそういうときは私が騎士になって、いつもそういう奴らから姉さんを守ってた。純粋で、優しくて、おっ

とりしてて、妹ながら、いつも目が離せなかった。
でもいつの間にかその役目を、ギルバート様に取られちゃってたわ……。でも私に守られるより、ずっと安心している姉さんを見ているとね、私も見惚れてしまうくらい綺麗だったの。妬ましいなんて気持ちは湧いて来ないくらい、本当に美しかった。
アレクシスは彼に恋していたの。
アレクシスの魂が誰よりも清らかなこと、ギルバート様もちゃんと嗅ぎつけてた。二人は間違いなく運命の恋人だった。二人は幸福になるはずだったの。
それなのに、こんな可哀想なことになってしまった……」

ルイーズは言って、アレクシスの髪に手を伸ばし、それを優しく整えて額にキスした。

「結局私が姉さんに守って貰っていたのよね。いつも、私が内気な姉さんを守ってあげている気になっていたけれど、でも本当のところでは、いつも私のほうこそ……、いつでもアレクシスに守られていたの……」

そのときノックもなしにいきなり部屋の扉が開いたので、僕はまたあの義兄の奴が戻って来たのかと、警戒して振り向いた。
しかし扉のところには兄さんが立っていた。只でさえ威圧感のある大柄な身体の上に、黒い衣装にブーツにマントまで全部黒い。しかもマントの裏地は赤いという、悪役もさながらの出で立ちだった。
僕は今頃やって来た兄さんを、当然冷めた目で睨む。何せそのときはアレクシスがサンメープル城に帰って来て、二日も経っていたその夕方だったからだ。

「さしずめ聖女アレクシスを狙う悪魔伯爵のご登場というところですね。いいご身分だ」

「……起きているか？」

兄さんは僕の嫌味を意に介さず、ルイーズに言った。さすがに幾らかは、気まずそうに。

「いいえ、眠っているところよ」

兄さんは安堵したように頷き、部屋の中に入って来た。

「今日も忙しかった」

言い訳がましく言いながら、兄さんはずかずかと女の寝室を闊歩し、ベッドの前までやって来た。そしてアレクシスの横にいた僕の前に、ずいっと割り込む。

「退きなさい。邪魔だよ」

「何だよ、今頃来てその態度なのか」

「煩いぞアレックス。静かにしなさい。病人を起こすつもりか」

「なんで僕が怒られるんだ」

僕は文句を言おうとしたが、それ以上はルイーズに諫められた。主君に向ける口のきき方ではないというわけだ。

「やっと逢いにいらしたの」

僕らが見守る中、兄さんはアレクシスの眠る寝台に寄り、片膝をついた。そして少し躊躇った後、恐る恐るという表現がぴったりの動作で、右手を彼女の額に伸ばした。さっきルイーズが整えてくれた髪にそっと手を置き、大きな手で、いたわるように優しく撫でた。夕方の染まりかかった光が窓辺のレース越しに柔らかく差し込んで

いた。
しばらくそうしていると、深い眠りについているはずの閉じられたアレクシスの目から、涙の粒があふれてきた。それは後から後から、あふれてはつたっていった。たとえ意識がなくても、正気がなくても、やっと兄さんが逢いに来て、彼が傍にいることを感じて、アレクシスが涙をこぼしたのだ。
あまりのことに僕は思わず目の前がにじんだ。こんな姿になってしまってなお、彼女は兄さんを愛している。自分を二度も見殺しにした兄さんのことを、恨んだって許されるだけのことをされているのに、アレクシスは……！
僕の横で、ルイーズも涙を拭っているのが見えた。
それなのに、兄さんはそんなアレクシスのことを尻目に、無表情のまま立ちあがって、そのまま何事もなかったように寝室を出て行こうとした。
この哀しい女性の涙を見てなお一片の揺らぎもないとは何という冷酷かと、今度という今度は思ったが、兄さんは突然踵を返し、一度は取り残されたアレクシスに取り縋り、彼女のことを胸に掻き抱いた。
戻って来たその表情は苦悩と悲しみにかき曇っていた。ほどなく兄さんの赤褐色の目に大粒の涙が浮かび、堪えていた感情を吐き出すように声を上げて泣いた。

「すまなかった……、アレクシス……、アレクシス……！」

まさか兄さんがそんなふうに泣くなんて、僕はどうしていいか分からなかったが、取り敢えず、そのときは気分に飲まれて僕も盛大に大泣きをした。と、肘をルイーズに引っ張られて、即座にその場を強制退場となった。

第２０８話　プリンセス症候群（１）

約束の三日後午前。

四月も終わりが近づくその日、僕は約束通り王城のフレデリック王子のお部屋を訪れるべく、サンメープル城の廊下を急いでいた。朝に幾つかの執務を済ませて、これから王都に飛ぶためだ。

最善とはいかないまでも、すべてのことが順調に、恐いほど順調に上手くいきつつあった。

たとえば兄さんとアレクシスのことがそうだ。アレクシスは正気がなく、意識の覚醒が危うくて、夢とうつつをたゆたうような生活を送っている。彼女が人生を取り戻すことは、現状難しいだろうと言っていい。誰か男の存在を察知しただけで怯えて震えてしまうのも、見ていられないほど不憫だった。

でも穏やかな気持ちでいるとき、彼女の心は暴行をされる以前の十代前半の少女に戻っているように僕には思えた。何故ならルイーズのことをお姉さんと呼んで慕っているし、まるで母親の庇護を求める幼い娘のように甘えているからだ。ルイーズはその期待に応えて完全に母親役をやっていた。ティファニーは娘たちに特に厳しかったそうで、だから姉さんは甘えることが必要なのだと言って。頭を撫でて貰ったり、髪を梳いて貰うのが、とても好きなようだった。

そして僕のことと言えば、やっぱり姿を見せるだけで泣いて恐がった。男性に関しては、その全般が本当に見ていられないほどの恐怖の対象になってしまっていて、これは非常にデリケートで繊細な配慮が欠かせないことだった。

でも不思議と兄さんのことだけはそうではなくて、彼女は起きているときでも兄さんの気配だけは恐がろうとしなかった。兄さんがベッドのすぐ傍にいて、アレクシスの手を握っていることに気がついても、彼女は幼い子供のような顔をして、夢を見ているみたいに微笑むのだった。

魂が結ばれている相手は分かるのだろうと、ルイーズが言っていたが、僕もその通りだろうと思う。ハッピーエンドとはいかないが、アレクシスが虐殺されてしまう未来があったことを知っている僕としては、こうして兄さんのところに帰って来て、少女の頃に過ごしていた親しみのある安らかな環境で、微笑みを浮かべていられる現在は、かなりましな未来なのではないかと思う。

つらい出来事から自分を守るためにああなってしまったのだとするなら、そのことは一生有耶無耶なまま、子供の心のままで過ごしていても、いいのではないかと僕は思っていた。わざわざ現実に立ち返る必要なんてない。そんな現実には何の価値もないだろう。それで僕のことが誰だか分からなかったとしても、寝室周りをうろうろしている得体の知れないお兄さんだとしても、たぶんそれはそれでよかったのだ。

そしてたとえば小生意気なハリエットとの関係がそうだ。

「きっと分かってくれると思ってた」

ハリエットが僕を見上げて微笑んでいた。

彼女がこんなふうに僕に親しみを向けてくれるのは初めてのことだった。

「信じていたわ。貴方はきっと分かってくれるって。タティのために、動いてくれるって。

貴方とタティはね、本当に、特別だから」

「特別？」

ハリエットは頷いた。小さな両手を広げ、一生懸命なほど僕に語りかけた。

「そうよ。二人はお互いを夫と妻として惹かれる相性なの。貴方と

タティは天空の星々に、この世に生を受けたその瞬間から、伴侶だと祝福されている……、そういう星を持っているの。
これって、そうあることじゃないのよ。タティなんて、早産になってでもその日その時間に生まれたんだから。半端じゃなく貴方を愛してる。
そんな二人が人生の最初から出会ったのよ。運命に決まっているじゃない。
それなのに、結婚もしないうちに病気なんかで隔てられる関係じゃないって、わたし、星読みは得意っていうほどじゃないけど、そう読んでいたの。
タティは生命力が強くないわ。だから、何度か生命は危うくなるけど……、きっと死が約束されているわけじゃなかったのよ。だからわたし、貴方に動いて欲しかった」
「ハリエット、でも……」
僕が言いかけたことを察したようにハリエットは言った。
「ルイーズ様が、たぶん変な言い方をしたんじゃないかと思ってた。だって貴方、ある時点からわたしのこと妙に避けてたでしょ？
でもそうじゃないのよ。わたしは一方的に貴方を慕う星。貴方から見れば、わたしは妻でも何でもない。わたしが勝手に、一方的に妻の座標を持っているだけ。これは、典型的な片想いの配置なの。だからタティに対するように、貴方がわたしに強く惹かれるものなんてないはずよ。
運命って用意周到って言うか、残酷って言うか。貴方の魔術師になったことも、つまりわたしはタティの代替品ということ。最初からそういう運命なの。生まれたときから」
ハリエットはうつむき、それから僕を見た。

「魔術師は結婚も難しいの、分かっていてこのお役目についたの。それは、タティがお手紙に書いているアレックス様って方のことが、どんな人なのか興味があったなんてことじゃないのよ。わたしね、世界に立ち会いたいと思ったのよ。適当な相手と結婚して、終わって行くだけの人生なんて……、ヴァレリアのことは嫌いだけど、彼女が言ってることには内心共感しているところもあるの。女だからって道具みたいにされて、意思もなく夢もなく生きるなんて、悔しすぎるじゃない。貴方にくっついて歩けば、世界の中心に導かれるって、星を読んだの。当たってたわ、薔薇君様から御声がかかった」

「そんなことも分かるのか」

「今のところ、まだ精度は悪いけどね。でもわたしは田舎のお嬢様で終わりたくなかったの。わたしにも、わたしだからこそ必要とされる居場所が欲しくて。それは必ずしも運命の恋人とは限らないでしょう。お役目だって構わないのよ。だから、何処まで行けるか分からないけど、これからも貴方の部下として全力を尽くすつもり」

そして僕らは廊下を歩いた。カイトとオニールが後ろをついて来ている。いつもの通りくだらない軽口を叩きあっている。僕はカイトが一方的な階級差別の被害者だろうと思っていたのだが、意外やオニールと渡り合っているから、ちょっと戸惑ってもいた。まあ確かにカイトは全然内気な性格じゃないし、図太いっていう意味でもかなりのものだ。でもそれでもヴァレリアとの関係を見ていると、いつも一方的にこれでもかと侮辱されているわけだから、オニールみたいな貴族出の苛めっ子が恐くないのかって、前にちょっと聞いてみたのだが、カイトはそれほどでもないと答えた。

「そんな酷いのは閣下が貴方の側近に採用しませんって。オニール

はまあ、今どきの若者と言うか、尊大さが見えるところはありますが、彼は何つうか可愛げがあるほうですよ。ジャスティン様みたいな兄もいるわけですから、成長過程でそれなりに踏み潰されて来たってのが分かると思います。

閣下はたぶん、アレックス様に普通の友だちを作らせたいんですよ。俺みたいなのじゃなくて、血統がよくて、きちんとした家庭で育って、貴族階級にちゃんと属している、同じ価値観や思想観で世界や将来を語れるような、そういう同年代の友だちをね。互いに子供時代を知っているなら、ゼロからの他人じゃないわけでしょう。きっといい関係を作れるはず」

「友だちはカイトで間に合ってる」

「それは嬉しいな。でも、彼が貴方に対して昔どんなだったかは知りませんが、アレックス様もそろそろコミュニケーションを図られてもよろしいかと。例えばオニールの朝の挨拶に応じるとか。挨拶は人間関係の構築に欠かせないですよ」

「嫌だよ。僕はデリケートなんだ」

「ですよな。分かります」

第２０９話　プリンセス症候群（２）

僕らは連れ立って幾つかの廊下のアーチを抜け、適当な場所からテラスに出た。ハリエットの魔法でひとっ飛びして、フレデリック様のおわす王城に参上するためだ。

移動魔法にも幾つか種類があって、空間を歪めて点と点を結ぶように瞬間移動する、ルイーズが常用するようなのが本来非常に楽なのだが、あれは高度で、失敗のリスクが高いため、それほど才能が高くない者や、勉強中の若い魔術師は、空を飛んで移動する比較的難易度の低い魔法を使用する。

何せ瞬間移動のやつは、失敗すると術者ごと肉片になって飛び散るなんてことになりかねないからだ。勿論、上空から落下するのも恐い物だが、風の精霊を操れるなら失敗時の保険をかけておくことができる。万が一の場合、被術者の落下速度を下げて、怪我や死亡リスクを低減するわけだ。

でも前者の魔法は一瞬ですべてが決まるのでそういうことはできない。だから僕としては念のため、ミンチになるのは嫌なので、ハリエットには後十年か、二十年くらいはよく勉強してからにして貰いたいと思うのだ。

僕らは眺めのいい居城三階のテラスに臨む。サンメープル城より北部に位置する王都に向かうため、当然出たのは北側のテラスだ。城の裏側に広がる森の緑が美しい。初夏の訪れを感じる眩しい風には、思わず身を任せたくなるほどだ。

「王子様のお部屋にご招待とか。くそ、ケチのつけようのないビップ待遇じゃないか。

シエラたんみたいな美少女に何故か好かれるわ、こないだは内務卿と会談するわ、僕のほうがあらゆる能力が高いし、しかもイケメンだというのに、家柄だけでこうまで待遇に差をつけられるとは理不

尽だぜ」

「フレデリック王子って、どんな方かしら。わたしと同い年なのよ」

ハリエットの問いかけに、僕が応じた。

「綺麗な人だよ。綺麗な人って言うと語弊があるかもしれないけどね。

でも、外見は綺麗でも、存在感はやっぱりか弱い姫君のそれじゃない。かつてコルヴァールのサウステイルを陥落した老王陛下の血は伊達じゃないよ、こちらが圧倒される強さがあるんだ」

やや表情を夢見るように輝かせて、ハリエットは僕を見た。

「薔薇君様は絶世の美少年だって言うから、お会いするのを楽しみにしているの。まかり間違って、わたしに恋してくれないかしら、なんてね。灰かぶりが一転して王子様の恋人になるの」

「いいかも。ハリエットなら、殿下と似合うよ」

僕は言った。

するとハリエットは少女らしく素直に喜ぶでもなく、かえって疑わしいような、微妙な顔をして僕を見上げた。

彼女のこういうところは、魔術師として重要な機転や聡明さゆえなのだろうが、可愛げがないとも言えるものだ。

「ほんとにそう思ってるの？」

「えっ、まあ」

僕の返答がお気に召さなかったようで、ハリエットはますます眉を顰めた。

「貴方、どうせわたしが年より子供っぽいって思ってるんでしょ？」
「あっ、気にしてるのか……、気づいてないと思ってた」
「気づいてる。気づいてるに決まってるじゃない。毎朝鏡を見るたび、これでもかと自分にがっかりしてる」
「それほどじゃないよ。たぶん、たまに十五歳くらいに見えるだけ」
「嘘。十四歳とは思ってるはず。だって貴方最初だって、わたしにキャンディをくれようとしたくらいだものね」
「十四歳だって立派な大人だよ」
「違う。キャンディでご機嫌取れると貴方に思われるくらいガキっぽいってことよ。おまえじゃ相手にされるわけないって、思ってるくせに。いいの。自分で分かってるもの。これでも身の程は知っているわ。
わたしは皆に注目して貰ったり、ましてや王子様に見初めて貰えるような、ヒロインにはなれないってことくらい。
わたしはいつも、選ばれて幸せになる誰かを眺めているだけの引き立て役なの」
「そんなふうに、自分で決めつけない方がいいと思うけど」
「アレックス様」

そこで背後からシエラの声がしたので、僕らの会話は中断となった。
僕はシエラがテラスに現れたのが分かったので、振り向いて、彼女に応じようとしたその僕の腕を、頑なになったハリエットが急に引いた。

「急ぎましょう。彼女に構っている時間はないわ」
「待って、皆さんでどちらにいらっしゃるの？　ハリエットさんまで、一緒なんて……」
「貴方、何を疑っているの？　魔術師は外出時には同行をするものよ」

ハリエットは心外だというようにシエラを見た。

「私も一緒に行きます」

「駄目よ」

僕らに身を寄せようとするシエラに、ハリエットがぴしゃりと言った。

「一緒に来られては困るわ」

「どうしてですか？」

シエラは僕を見上げて言った。ハリエットはまた自分が無視されたので、苛立ったような仕草をしたが、すぐに深呼吸した。

ハリエットはめげずにシエラに言った。

「わたしたち、これからタティを助けるために行動をするのよ」

「タティさん……、を？」

「ええ、そうよ。タティ、元気になるかもしれないの。フレデリック王子殿下に、タティを助けてくださるようお願いに上がるの」

するとシエラは悲しく僕を見上げた。

「何故、そんなことをなさるのですか……？　そんなことをしては、タティさんが可哀想よ……」

「えっ、何が可哀想？」

分からなかった僕が聞くと、シエラはとても冗談を言っているとは思えない、真剣な表情をして僕に言った。

「だって、貴方は私と結婚をするのに。それとも、貴方は結婚をしてからもお妾さんを持ちたいと思っていらっしゃるの？」
「えっ、いや、だって、君との結婚はなしになったわけだし……」
「そんなことありません」
シエラは囁いた。
「確かにギルバート様は、変なことをおっしゃったわ。アレックス様との結婚を取りやめにするだなんて、でも私、あれからよく考えてみたの。そして気がついたんです。たとえどんなことがあったとしても、そんなことにはならないって」
シエラは何をもってそんな前向きなことを思いついたのか、僕には分からなかったが、シエラは続けた。
「だって、光のお姫様はね、最後には王子様と結婚をするんだもの。お姫様はいつだって、最後には王子様と幸せになるものなの。確かに、愛しあう二人の間には幾多の困難や、障害が立ちはだかるわ。それに闇の魔女が一度は光のお姫様の持っているものを、全部奪い取ってしまう。恋人、お城、身分、すべてよ。でも……、でもねアレックス様、それは二人の愛の試練なの。だから最後には、私たちは最高の愛によって永遠に結ばれるわ。そして、私たちだけじゃなく、この世界をも救うの。私たちの愛の光で、この世界を満たすからよ。
アレックス様と私、二人の愛はね……、この世界のどんな恋人たちのものより、とっても強くて、崇高で、特別なものなの！
だって、アレックス様と私は他の人たちよりずっと特別だもの。他のどんな人たちより。だから世界中の人たちが、私たちによって幸せになり、最後には皆が私たちの結婚を祝福してくれるわ」

第２１０話　プリンセス症候群（３）

「貴方、何言ってるの？」

ハリエットがしらけた顔でシエラに言った。

「言ってることがあまりに馬鹿すぎて、本気で呆れたわ。頭がおかしいんじゃないの？」

「いいえ」

「おかしいわよ。だって何それ、もしかして自分が選ばれた世界でいちばんのお姫様だとでも言いたいの？　それとも自分こそが、星の聖女様を名乗りたいとか？

私は光のお姫様って、前から貴方、そういうこと言ってたけど……、しかもわたしを闇の魔女だとか言って。それって、こっちとしてもすごくむかついてたんだけど」

「貴方は闇の魔女の手先だわ」

シエラはハリエットを見て囁いた。

「闇の魔女は、私から王子様を横取りしようとするタティさんだから」

「何それ？」

ハリエットは頭を振った。

「タティが、アレックス様を貴方から横取りするですって？」

「そうよ」

「ちょっと馬鹿言わないで、アレックス様と最初に結婚するはずだったのはタティよ。それは、ここにいる誰もがよく知ってる」

ハリエットは振り返って、僕やカイトやオニールに同意を求めた。
それで僕は驚いて、僕のやや後方にいるカイトを見た。カイトも僕を見ていて、僕らはどちらの味方をすることもできずに、なんとなくこれが嫌な展開であることを確認しあった。
僕は女というものをまるで分かっていないのかもしれないが、この二人はいつもいつも、どうして同じ女の子同士なのに仲よくできないんだと頭を抱えるばかりだった。

「おいおい、シエラたんは何をとち狂ってお坊ちゃま君を王子様なんて言ってるんだよ……。僕のほうがすさまじくイケメンだというのに……」

ハリエットは続けた。

「なのに貴方は後から出て来たくせに何言ってるの？
よく考えてみなさいよ、貴方がアレックス様の秘書だか何だかやってるとき、タティはアレックス様と既に結婚前提の関係だった。二人は幼い頃からずっと一緒だったのよ、貴方が存在もしていない頃からね。
なのにそれってどういう主張なのよ。その論法で言うなら、アレックス様と最高に愛しあっているのはタティであって、悪者はどう見ても貴方よ、貴方。現状をご覧なさいよ、可哀想に、恋人を横取りされて泣いてるのはまさにタティじゃないの。醜い闇の魔女は貴方だわ」
「違うわ！　私は闇の魔女じゃない。私は光のお姫様よ」
「だから、いったい何処が？　何を根拠に？　貴方の言うことは全部、幼稚で自己中心的でくだらない妄想以外の何物でもないわ。
それをよくもまあ、自分に都合よく物事を曲解して、図々しいことが言えるものね。呆れて物も言えないったら。

貴方が自分を光のお姫様だとか思うのは勝手だけど。それが妄想なら周りはつきあいきれないし、もし本気で言っているなら世にも傲慢な考え方であることくらいは理解しておくことね。
どちらにしても、そういうのは自分の頭の中だけにしておいて欲しいわ。どうせ他の人たちは誰ひとりとして、そんな戯言に同意しないんだから。
ほんと、馬鹿みたい。いい年して、本気で馬鹿なんじゃないの？」

ハリエットはやはり性格が強く、頭も口もよくまわって、シエラみたいな女の子は喧嘩の相手にもなっていないようだった。シエラは上手く言い返せずに泣きそうになっていて、僕はどうするべきか分からずに何となく前髪を触った。
確かにシエラの言っていることはちょっとおかしいかもしれないとも思うが、でも誰かを侮辱するというような有害なものではない。シエラが温室で大切に育てられた育ちのいい姫君であるということも、よく伝わって来る。
そしてハリエットは明らかにシエラの言い分に過剰反応していた。シエラのお伽話好きくらいつきあって、貴方がいちばんのお姫様だねとでも適当に相槌を打ってあげれば、何となく済む話ではないかと思うのだが、何やら許し難い天敵とばかりにシエラを睨んでいる。でもハリエットがタティのために怒ってくれているのはよく分かるので、僕としてはどちらの味方もできず、肩を竦めて成り行きを見守った。

「貴方みたいな頭の可哀想な人を相手にしていても仕方がないわ」

やがてハリエットは自分を落ち着かせるように深呼吸した。

「馬鹿のことなんて。馬鹿は死ななきゃ治らないものなの」

そしてハリエットは僕を振り返った。

「わたしたちは王城へ行きましょう。薔薇君様のところに」

「フレデリック様は誰かを助けてなんてくださらないわ」

するとその背中に向かって、シエラは随分否定的なことを言った。

「あの方は、誰かを助けてなんてくださらない。彼はそんなに優しい人ではないのよ。あの綺麗な御顔に騙されては駄目。フレデリック様はね、本当はとても心の冷たい人よ。とても残酷な人なの。愛や思いやりなんて知らない……。

私、彼のことを皆さんよりよく知っているからはっきり言えるの。だからこそ彼のことを、好きにはなれないんですもの。あんなに冷血な人はいないわ」

それに対し、それを上まわる否定的な調子でハリエットが返した。

「あらそう。だとしても、わたしたちは行くわ。だって、貴方がタティのことで本当のことを言うとは思えないもの。それは全部嘘かもしれない」

「そんなっ。本当です！」

「どっちでもいいわ。ただ、わたしの見立てがもし間違っていたらごめんなさい、でも、フレデリック様がどんな方か、確かにわたしは知らないけど。貴方が見かけより自分勝手な人だってことは知っているつもりよ。

貴方のそれが、何のことを言っているのかは知らないわ。でも、仮にも世継ぎの王子様に対して、こんな誰が聞き耳を立てているかも分からない場所においてよ、批判めいた言動を口にできる不遜な貴方が、まともな人間であるとは到底思えない。

シエラさん、貴方って、自分がもてなされなければ気が済まない馬

鹿女の臭いがぷんぷんするの。幼稚で、すごく自分本位の考え方をする人だなって、前から思っていたわ。今の王子様批判ひとつにしたって、いい証拠よ。それに貴方の日頃の言動にも、それがときどき表れているわね。

ちやほやされるのが当然の環境で育った上流のお姫様って、実際は、その自覚さえない自己中ばかりだって話はよく聞くけど、貴方はもう候女様ではないんだから。自分が選ばれたお姫様だなんて、そんな振る舞いでいては、人から距離を置かれるわよ。

アレックス様はこの通り鈍いから、全然気づいてないみたいだけどわたしはそうじゃない。

本当は誰よりも狡猾なくせに、貴方のその純情ぶった態度が全部演技だってことも、わたしにはすべてお見通しよ。これからは、簡単に彼を騙せるとは思わないでね。

でも今はそんなことどうだっていいの。わたしたちはこれから王子様にお会いして、そしてタティを助けて貰うんですもの」

ハリエットは言って、僕の袖を強引に掴んだ。

「行きましょう」

「あっ、うん」

「待ってっ」

「待たないわ！」

ハリエットは振り返って、またシエラをぴしゃりとやった。

「この際だからはっきりさせておくけど、貴方あんまりおつむの出来がいい方じゃないみたい。だから、よく分かっていないみたいだから現実を教えてあげるけど、アレックス様が結婚したいのはタティなの！」

ハリエットは僕の服の袖を握ったまま、まるで自分のことのように威張って、一歩前に踏み出してシエラに言った。

「アレックス様はタティが好きなの。貴方じゃなくて、タティを愛してる。

分かってるでしょ、アレックス様は貴方なんて興味がないの。だから貴方と結婚なんてしない。だって、タティがいるのにそんなことするわけがないわ。彼はタティが大好きなんですもの。

貴方もアレックス様が好きなら気がついていると思うけど、ここ最近の彼の目の輝きに気がついているかしら？　タティの病気が治るかもしれないと分かってから、彼の顔つきが劇的に変化していることに？

これまでは生気のない、まるで歩く屍か、ゾンビか何かのようだった表情が、明るく輝いていることに？

これが愛の力なのよ。貴方と一緒にいたって、彼はちっとも幸せそうじゃなかったのに、タティといられるかもしれないと思うだけでこれよ。輝いてる。男って、単純だから。特にこういう分かりやすい男って、ときどき残酷よね」

「そんなこと信じない！　アレックス様は私を愛してるもの！」

「そう思うのは貴方の勝手よ。これを信じたくなければどうぞ、勝手にしたらいいわ。

でも彼が愛してるのはタティよ。これは貴方の浅はかで可哀想な妄想と違って、世界の真実だから」

遂にハリエットはシエラを指差した。

「だから覚えておいて。貴方は絶対にタティに勝てないわ！」

第２１０話　プリンセス症候群（３）（後書き）

◇女の子の読者様に注意事項◇

自分をお姫様だと思うことは、まったく悪いことではなく、素敵なことです。

ハリエットはシエラに対して腹を立てているから（自分も本当はお姫様でありたいという気持ちもあって）、意地悪を言っているのです。

お姫様と思うことはいいことです。よろしくね。

第２１１話　薔薇色の人生（１）

ハリエットにきつくやり込められ、今にも泣き出しそうだったシエラのことを、そのまま放置して来てしまったことには多少の罪悪感はあった。
でも実際のところ、僕は今ひとつシエラに惹かれるものがない。
勿論、シエラはそこら辺の美人と言われている人たちとすらちょっと水準が違っているすごい美人だ。連れて歩けば僕の鼻がどれだけ高く伸びることか分からない。
だからその点だけは、惜しい気がしているのを否定はしないのだが。
でも僕にはタティがいるので、可哀想だけど仕方がない。
僕はもしかすると、ちょっと悪いことをしたのかもしれないが、でも正直に言って殿下に御不興を買ってまで、或いは殿下と対決してまでシエラが欲しいとは思わない。シエラはすごく可愛いと思うし、シエラが僕に白馬の王子様役を期待していることは知っているが、そのために何もかも投げ出すみたいなことは、ちょっとできそうにない。
兄さんみたいに女にもてたいもてたいと思っていた割に、いざもてると、自分でも驚くような堅実な判断をしている僕は、やはり真面目で一途な男なのだと思う。ニヒルさもあり、最近はそれなりに剣術も頑張っているし、これは男としてかなりいい線いっているのではないだろうか。
タティは元気になったら、僕がシエラよりタティを選んだことを、ちゃんと分かるようにするといいと思う。

「見たか取り残されたシエラたんの潤んだ眼差し。見てるだけで胸がきゅんっとしちゃったよ。僕が代わりに抱きしめてやりたかったぜ。お坊ちゃま君は結構淡白ってか薄情だよね」

王都に到着してさっそく、無責任なことをオニールが言っていた。
王城にはマスター・カタリーナの魔法防壁が張られているので、無許可の魔術師がその中に飛び込むことはできない。だから僕らはいったん王都の広場などに降り立ち、そこから街中を歩いて王城に向かうのだが、その道すがらの無駄話だ。
噴水の飛沫の上がる広場を抜け、僕らはローズガーデンの洒落た街路を行く。陽気はよく、すれ違う人々の足取りも軽い。通りの向こう側は、高級店が立ち並ぶゴールドローズアベニューだ。あちこちの背の高い建物の窓からは、フレデリック王子殿下万歳なんていうカラフルな幕が垂らされているのが見える。
平民階級の中間層から富裕層、それに貴族階級の下層において、フレデリック王子の人気は絶大なのだ。要するに殿下の母親の出身階級より少し下位の人々が、フレデリック王子のメイン支持層ということだ。彼らは大して力を持たない人々だが、その絶対数の多さは強みと言えるだろう。たった十七歳に過ぎない少年相手に建国王を重ね合わせ、まるで仲間内から救世主が現れた的な過大な期待と熱狂を寄せている危うさは、否めないが。

「殿下は死ぬほどプレッシャーだろうね。彼らには、殿下は弱者の味方って言うか、権力者側じゃない考え方をする方だっていう期待があるんだよね？　王族の傲慢さを見せたりしたら、あっと言う間に裏切り者に仕立て上げられそうで気の毒だ」
僕は隣を歩くカイトに言った。
「想像しただけで胃が痛くなりますな」
カイトは苦笑した。
「アークランド公が味方についたら、だいぶ楽になるとは思うけど

ね。でもそのための前提が、政略結婚なんだよね。殿下の人生に逃げ場なしだ。他人事だけど、王子なのに結婚も思い通りにならないなんて、なんか人生自体が嫌になるな」

「その王子様の花嫁候補の姫君って、どんな方なんです？」

僕は首を振った。

「よく知らない。その姫君は、確かまだ結構若いはず。すぐ結婚ってならないのは、姫君が幼いからってこともあるのかも。ただ噂だとかなりお転婆姫らしいんだ」

「お妃の話はどうなります？」

「シエラのこと？　どうかな、取り敢えず、お妃となられる方との初夜のための練習台みたいな感じなのかな……、よく分からないけど」

「練習台でシエラ様レベルの女なんですかい……」

「だってほら、後ろ盾となってくれるアークランド公の娘のことは、それは、殿下としたって宝物みたいに扱わないと駄目だろうから。ところでねえカイト、王子様って、ベッドではご奉仕される立場なんだってね。ふんぞり返って女を服従させて、女に性奉仕させるのが基本らしい」

僕は、久しぶりに僕らお気に入りの楽しい話題を振った。

「なっ、なんと！？」

カイトは概ね僕の期待通りの反応で、僕の話に乗った。

「そりゃつまり、選りすぐりの美女が自分から積極的にご奉仕してくれるってことですか？」

「ね、いいよね。すごくわくわくする感じ。寝てればいいのかな」

「そりゃ、奉仕してくれると言うならそうでしょう。きっと大の字になっていればいいんですよ」
「それで、女に注文つけたり？」
「そうです」
「すごくエッチな命令」
「ありでしょう」
「ああ。きっといい匂いがするんだろうな。肌も柔らかくて」
「なんて贅沢な……」

カイトは静かに目を閉じた。

「君がいま何想像したか分かったよ」
「んん」

ちなみにかなりどうでもいい情報なので、こんなことは省略すべきことなのだが、僕らの後ろを歩くオニールという男は見た目からして軽い。服装もそうだし、発言の適当さから察しがつく通り、愛想はいいけど人間が薄っぺらい馬鹿の典型だ。
頭髪は明るい茶色で、男のくせに髪が長めだが、長髪は兄さんのような美男がやってこそ絵になるのであって、オニール程度のひと山幾らの奴がやったところで、その身の程知らずの自己顕示欲に、見ているほうは辟易することこの上ない。
おまけにその性格。僕はこれまでカイトが軽薄だと思っていたが、オニールの奴の性格はそんなものじゃない。カイトが軽薄じゃないとは言わないが、軽薄にも二種類あって、我慢できる軽薄さと、我慢できない軽薄さがあるということだ。オニールは後者。僕に気も遣わないし、僕を尊敬もしない。それどころか、隙あらば僕みたいな真面目な人間をからかって笑い者にしてやろうみたいな、そういうことをいつでも探している邪悪な姿勢がとにかく気に入らない。

第２１２話　薔薇色の人生（２）

「オニールさん、馬鹿言わないで。アレックス様はタティのものなの。あのぶりっ子にほだされていい顔していたら、あのてのお花畑は一瞬でいいように勘違いして、収拾がつかなくなるでしょう！？」

僕とカイトが話をしているやや後方では、ちょうどハリエットがイラついた調子でオニールに応じているところだった。

「あいつったら、ほんと信じられないノータリンなんだから！」

「お嬢ちゃんは、完全にタティの応援団ってわけか。でもさ、あの眼鏡って、確かあれだろ。おまえの家の傍系って言っていいような奴だろう。

本家の男爵令嬢が従者で、傍系の下級貴族の娘ごときが花嫁って、何かおかしくない？　もしそれが実現しちゃったら、カティス本家の皆さん的には、それかなり屈辱なんじゃないの？

眼鏡の実家もまともな神経してたら、仮に求婚されたって、そこは辞退するところだろうと思うけどな」

「辞退なんかできるわけないでしょ！？　既にお妾にされちゃってるのに、結婚を辞退なんかしたら、タティは婚前交渉した恥さらしの娘っていうのが確定しちゃうのよ！　アレックス様には絶対タティと結婚して貰わないと困るの」

「でも本来ならお嬢ちゃんと眼鏡はポジション真逆だったかもしれないのに、はっきり言って眼鏡の魔力が消えたせいでこうなっちゃったんじゃん。

おかげでお嬢ちゃんはその若さで残りの人生が決まっちゃったわけで、お嬢ちゃん的にはかなり眼鏡に迷惑かけられて、割食った形だろうに、なんでそこまで肩入れしてるのかなって思ってさ。おまえがアレックス様の嫁かよって、腹は立たないわけ？」

「別に。腹なんて立たない」
「なんで？」
「決まっているじゃない、友だちだからよ。それも只の友だちじゃない、タティは大事な友だち。大事な友だちの恋の味方をするのは、人間として当り前のことだわ。それにわたしは別にアレックス様になんて興味ないし。全然興味ない。だから特に羨ましいとも思わないわ。
何よりアレックス様の魔術師になったおかげで、お父様だって読んだことがない特別な魔術の本を読める立場になれたの。ルイーズ様にも親しくして貰ってる。かえって人生は開けたと感じているほどよ。だからわたしの人生は、まあまあ上手く行ってるわ。今のところ、特に問題もなく」
「なるほどね」

オニールは頷いた。

「お嬢ちゃん本人がそう思ってるなら、いいけどよ。
まあ、僕がとにかく思うのは、お坊ちゃま君の趣味がまったく理解不能だってことだな。だってさ、言いたくないけど率直な話、見劣りしてるじゃん。あの眼鏡。僕だったらタティは捨てて、シエラたんを選ぶけどなあ」
「これだから男は馬鹿だと言うの。シエラが自己中だって分からないの？　ああいうのがもし友だちだったら、こっちは疲れるばかりで全然やっていられないってタイプよ。と言うかあれは同性の友だちなんて絶対できないタイプ。
恋人だってきっと、よっぽど心が寛くて、精神的に大人な男じゃないと受けとめきれないんじゃないかしら。でもそういうまともな男性は、ああいうノータリンは選ばないと思うけど」
「そうかなあ。そんなに悪し様に言わなくたって、シエラたん可愛いじゃん。要するに彼女は純粋すぎるんだよな。ほわっとしててさ、

守ってあげたい感じ」

ハリエットは息を吐いた。

「男受けが抜群にいいのも、同性に嫌われる理由のひとつよ」

「お嬢ちゃんは、妙にませてんのな。それが十六歳の女の子の言うことかよ。あんまりシエラたんを僻むなって。

なんでそんなに気に入らないわけ？　さっきも、きつい言い方してたよな。ヴァレリアも何かシエラたんには切れてたし、他の女も結構そんな感じなんだけどさ。

シエラたんはそんな人に嫌われるような性格ってしてないと思うし、特に彼女にはこれからいろいろと大変なこともあるんだろうしさ、あんまり苛めてやるなって。

要するにおまえらは、シエラたんが自分より可愛いから気に入らないんだろ？」

「これはそんな単純なお話じゃないのよ」

「そりゃあ飛び抜けた美人とは、誰だって友だちになんかなりたくないよなあ。だって自分が完全にお姫様の引き立て役になっちゃうんだから、面白くないわな」

「貴方ねえっ！」

「お嬢ちゃんは僻むより、自分のいいとこを自覚しなよ。童顔ラブリーなんていい素材じゃん。特に声が可愛いよね。彼氏とかいるの？」

「ろくに親しくもない女性に対してそんなことを聞くなんて、なんて無作法な人かしら。貴方、本物の変態だわ！」

「こんなの普通の会話だって。だって僕ら同僚だろ？

ああそっか、お嬢ちゃんはませてる割に男に免疫ないんだな。これは彼氏どころか、お父様しか大人の男性と話したこともないクチだな。そんなのが友だちの恋の味方とか、偉そうなこと言っちゃって、カワイイヤツ。そこでキャンディ買ってやろうか？」

「変態！」

「まあまあ二人ともね。これから何処に行くのかを考えてですね……」

そのまま僕らはつつがなく王城に到着し、殿下に拝謁するお約束の確認と幾つかの手続きを済ませ、華麗なる廊下を歩き、約束の時間が来るまで客人のための広間に通された。

天上の高い洒落た室内に、大人数が座れるテーブルと椅子が並べてある。壁には王家の紋章と勇ましい甲冑が並び、壁紙はえんじ色で、薔薇と金の装飾品が多い。賓客用の部屋ではないだろうが、十分に上等な部屋だった。

そしてそれ以外には壁一面に、フェリア王女の肖像画ばかりが随分多く飾られていた。金色の髪の美しい少女の絵だ。大領主の中には一国に相当する領地を持つ者もあるから、大国サンセリウス王家の姫君となれば、それはまさしく選ばれし姫君ということになるのだが、それにしてもその数があまりに多い。ひとつひとつ立派な額縁に入れられ、やっと手の届くような高さのところにまで、何処もフェリア様の絵ばかりだ。

十五年も前に亡くなられた王女様のことだから、どのような方だったのか、僕くらいの年代になるとよくは知らないのだが……、陛下はたったひとりの王女様を宝玉とばかりに溺愛して、この美しい王女様の姿をたくさん宮廷画家たちに描かせたそうだ。年齢がいってから、ようやく王妃様との間にもうけられた姫君は、陛下の輝く夢だったのだろう。一方フレデリック王子への接し方の落差は、王子が気の毒になるほどだそうなのだが、それはともかく絵の中のフェリア王女の大半が、やはりマリーシアにかなり似ているので、僕は内心の戸惑いを誰にも気づかれまいとするのに少し神経を遣った。

オーウェル公子の魔術師であるマリーシアが、その後どうなったのか僕は知らない。

トバイアも夫人も死んで、公子は死刑囚が収監されている檻の中に

あるとなれば、彼の魔術師であるマリーシアも恐らくは、同様の罪状をかけられている可能性は高いだろう。公子の父親殺しを幇助、公子と姦淫、反政府思想、何でも罪をなすりつけ放題だ。

しかし何処かの名家の出でもない一介の魔術師がどうなったかなんてことは、新聞に報じられることもないし、僕としても積極的に調べようとは思わなかった。知ったところで僕がどうにかできる問題ではないからだ。

マリーシアのことは、ずっと心に引っかかってはいるが……、フェリア王女の面影があるというほどの素晴らしい美少女なわけだから、年齢的に言ってそろそろトバイアの毒牙にはかかっていなかったのだろうかとか、いろいろと心配なことは思い浮かぶが……。

第２１３話　薔薇色の人生（３）

「見てください、この絵」

カイトが暖炉のすぐ上にかけられている肖像画を指差して、僕に声をかけた。

それは一対の男女が寄り添うようにしている、つまり女性が椅子に腰かけ男性が横に立っているという、よくある構図の絵画だった。しかし描かれている人物に僕は思わず注視する。それは青色のドレスを御召しの麗しのフェリア王女と、そしてその隣で貴公子然としているのが、若い頃のトバイアだったのだ。

僕がルイーズの記憶の中で見た、まだ口髭をはやしていない頃の奴の姿が、そのまま切り取ったようにしてそこにあった。

自らの地位と美貌に驕り、根性は腐り切っていたが、不本意ながらあの男の若い頃の姿は、確かに文句のつけようのない美青年だ。そしてその絵の中の金髪貴公子は、椅子に腰かけた王女様に寄り添い優雅にその御手を取っている。あどけない王女様はきっとトバイアの本性など知りもしなかったのだろう、椅子に腰かけ、優しく微笑んでいらっしゃる。癖のない美しい金髪、瞳の色はやや緑の強いはしばみ色、そして頬は薔薇色だった。少し物憂げで、清楚な雰囲気の美少女だ。

この一対はどちらもとても美しく、華やかで、一見すると睦まじい恋人同士のようにも、夫婦のようにも思えた。

「こんな絵が残っているということは、やはり当初には、王女殿下と公爵様が、結婚される御予定があったんでしょうか？」

カイトが言った。

「さあね。只の従兄妹同士ってつもりの絵かも」
「でも、やっぱりちょっと噂が立っていただけあって、お似合いだったんですねえ。王女様がお美しいのは勿論ですけど、ウィシャート公爵様は、これまたいい男で……。
俺はこの公爵様ってのは、とにかくお髭のダンディってイメージが強かったんですが、お若い頃って、それこそまるで白馬の王子みたいじゃないですか。
考えてみれば誰しも若い頃があるって、当り前なんですけど。俺もこんな顔が欲しかった。そうすりゃ……、はあ」
「こんな顔してたら、何たくらんでるんだ？」
僕は横目でカイトを見た。

「いやね」
「君の脳内ハーレムを実現？　そうなら、僕はそういう考えは最低だと思うな。イケメンだからってすべての女に愛されるなんてことはないんだからさ」
「んん、何やら不機嫌？」
「そうじゃないけど。とにかくね、こいつはクズだよ」
僕は、とにかくアレクシスに乱暴していたトバイアの鬼畜っぷりを到底許せる気持ちにはなれなかったので、悪態をついた。

「クズって、アレックス様、この白馬のイケメン公爵様のことで？」
何も知らないカイトは、驚いたように僕を見た。
でも僕はそれを訂正しようとは思わなかった。

「そう。何か問題でもあるかい。これからは輝けるフレデリック王子殿下の時代なんだ。だから雑魚の傍系公爵に敬意なんか払う気に

はなれないね。
奴はオーウェル公子による暴力の被害者として、幾らかの同情をともなって表舞台から退場することができたことを、陛下に感謝するべきだよ。本当なら、とてもそんな待遇を受けられるような男じゃないんだ」
「ふむ」
カイトは頷いた。
「意外とドライなんですな。何だかんだ言ってアレックス様には結構、お声をかけてくださったり、親切にしてくださった公爵様なのに。
いや、状況に応じて頭の切り替えがおできになるというのは、人を従える者として大変いいことです。でね、思ったんですけど」
「うん」
「似ていると思いませんか」
カイトは再び絵画を示した。
「この王女様、やたらとマリーシアに。マリーシアが王女殿下に似ていると言ったほうが正しいかもしれませんけど。
この部屋に飾られているどの絵もそうですけど、画家のタッチの問題じゃなくて、ちょっとびっくりするくらい似ているんですね」
「そうだね……」
僕は素直にそれを認めた。
「なんでなんだろう。僕も今、ちょっとだけそれを考えてた。いや、ほんのちょっとだけで、マリーシアが今どうしているか、心配しているほどじゃないんだけど。何か、因縁でもあるんだろうか」

「そうですね、現実的に言って思いつくところでは、実は二人の間には、血縁関係があるとかですかね。たとえばマリーシアは、ウィシャート公が愛人に産ませた隠し子とかだったりして。それなら王女様からするとマリーシアは従兄の子供。第五親等、つまり二人が似ていても別段おかしいことはない……なんてねっ」

そしてカイトは冗談めかしたのだが、僕ははっとして、思わずカイトを見た。

それからカイトが実に勘のいい奴だと、しみじみ思った。

「その件は、あんまり深く考えたくない。けど、その線だろう、たぶん……」

僕は推定されるマリーシアという少女を取り巻くすべての事柄に、そのときようやく気がついてしまったのだ。夜会でのマリーシアの可憐な様子が、絵の中の王女様だけではなく、そう言えばルイーズやアレクシスが少女の頃に、あまりに似ていたことに気がついてしまった。

あの美しい少女は僕の、血の繋がった妹だ……。

「彼女は本当にウィシャート公の愛人の子供なんですか？」

僕はしばらく押し黙った。

そして人生の皮肉とにがさを今まさに噛みしめながら、やがて静かに首を振った。

「さあ…、どうかな。真実は藪の中さ。

父親殺しをした男の魔術師では、まずろくな裁判も行われないで、オーウェル公子と同罪を受け、処刑されるのは規定事項だろうし。

それで彼女は最初から存在しなかったことになる。罪を裁かれるこ

とで……、彼女はこの世に生まれて来たこと自体が罪――、そう、カイト、最初からマリーシアなんて人間は、この世に存在しなかったんだよ。
きっとこの世界の誰ひとりとして、彼女の誕生を祝福しなかった。あったのは母親の苦痛と絶望の涙、周りの嘆きと憎しみだけだ。だから、それでいいんだ……」
「ふうむ」

それから飲み物を運んで来た老いた侍従が、熱心に王女の肖像画を鑑賞する僕らに気がつき、フェリア王女の話をしてくれた。
それによると御身体の弱いフェリア王女は、おいたわしいことにその短い人生の最後の三年ほどを、寝室で寝たきりの状態で過ごされることになってしまったため、明るく微笑む肖像画に残されている彼女の姿は、十六歳頃までのものしかないのだそうだ。そのために、幼くあどけない微笑みが、よりいっそうマリーシアを思わせるのだろう。

第２１４話　夢の陰謀

数ある亡き王女の肖像画群を見上げながら、オニールがまた何やら訳知り顔で馬鹿らしいことを語ることもあった。頭のおかしいことに、僕が虎視眈々と懲戒処分にしてやろうと狙っていることも知らず、この男はどうも自分がこの中でも重要人物であると思い込んでいるようだった。

「もったいない。こんな絶世の美少女が早死にとはね」

オニールは言った。

「でもフェリア王女が御病弱って言うけどさ。実は王弟であるハロルド・ウィシャート公も、結構な夭折だったんだよな。ティーンエイジャーの王女の悲劇に隠れているけど、前公も確か三十歳前に逝っちゃってるんだよ。そんなだからトバイア公は若いうちから実権持つようになっちゃって、好き勝手やってたんだろ？　押さえつける父親がいないもんだから。

誰もがなかなかはっきり言わないんだけど、僕が思うに、王家直系には短命が出やすいんだよ。過去の近親相姦の影響か何かで。

王家の家系図を辿るとさ、七十過ぎまで御健在のハーキュリーズ五世陛下がどっちかと言うと例外的で、八割方は早死にしてるんだよね。

まあ一世紀、二世紀前の王家の方々の人生がどうだったかなんて、興味がない奴が大半なんだけど。僕は勉強家だからな」

「つまり、王家は病弱短命の家系ってことか？」

「簡単に言うとな」

カイトの質問に、オニールはまるで学者先生みたいな偉そうな顔を

した。

カイトはあんな奴の話になんかつきあってやることはないのに、また気をまわして僕とオニールの調停役をやろうとしているのが鬱陶しいことだった。だが僕はオニールとはどうしたってうまが合わない。彼は所謂僕みたいな誠実にやってる人間を、嘲笑ったり、傷つける側の人間だとひと目で分かるような奴だからだ。軽そうな見た目もそうだし、子供の頃の素行がすべてを物語っている。

お茶が出されたのをいいことに、そこのテーブルについて遠慮なく持参のお菓子をかじっているハリエットのほうが、まだましな態度というものだ。

「隠しているけどまずそうだろうと僕は睨んでる。極端な近親婚をやめた後も、重篤な遺伝疾患が、残っちゃったんじゃないかね。昨年末の夜会のときにも思ったんだけどさ、フレデリック王子が美形だってところに大多数の注目が集まっていたけど、僕はどうも彼が青白くて細いのが気になってね、どう見てもヤバい雰囲気しないか。

ここだけの話、王女の侍女に生ませたっていうのも、怪しいと思ってさ。本当は、老王が王女自身に手を出した結果なんじゃないかと睨んでるわけ。体裁上侍女が生んだとするしかなかったような、こう、陰鬱で独特の陰謀の臭いがするんだよな。

根拠なら勿論あるよ。陛下のフェリア王女への溺愛っぷりは未だに語り草だし、何よりフェリア王女とフレデリック王子は、実に十七歳、年が離れている」

「十七歳……」

「そっ。十七歳差の姉弟だ。十分親子に成り得る年齢差だよ。おまけにご丁寧にも王女様は死ぬ前の三年寝込んでるって、それもう怪しいなんてもんじゃない。病気とか言ってるけど、どうせ最初は病気じゃなくて妊娠だったんだろ。出産して知らん顔で表舞台に戻るつもりが、もともと身体が弱くはあったから、分娩に失敗して身体

壊してそのまま起き上がれなくなったんだ」

「ふむ」

「そうすると王子殿下が、フェリア王女より美しいなんて言われちゃってる理由も説明がつくしね。たかだか侍女に産ませたはずの王子が、常識的に考えて、血統のいい代々の王子や王女たちの中でも優れて美人だと言われていたフェリア王女よりもっと美貌なんてことが起こりうるか？

しかも陛下は待望の男子を上げたその侍女とやらを取り立てたわけでもない。世継ぎの王子を生むなんてとんでもない手柄を上げたはずの女の存在が、どうしたことかまったく何処にも見えないんだ。本人は勿論、この十七年間というもの、女の一族が利権目当てにでしゃばって来たとか、援軍を得るためにどさまわりしてるって話も一切ない。

単なるやり捨ての結果なはずの王子を、長年可愛がっていた弟の忘れ形見を潰してまで優先したことも。フェリア王女が、幾ら身体が弱いと言っても十代で伏せってそのまま死んでしまったなんてこともさ、王家づきの魔術師や、医学の権威どもはいったい何をしていたんだよって話。

どう考えても単なる病弱じゃない、父親との姦淫、更には禁忌の子供の出産のショックで心身ともに壊したんじゃないかと、そう仮定するといろんなことにいちいち説明がつくんだよ。

まだあるぞ。例えばトバイア公の件だ。トバイア公が王女に懸想していたのは有名な話だが、彼だってあるとき突然別の女と結婚した。確かに彼はプレイボーイだったようだが、若年の王女に粘着して、何年も尻を追いかけまわしていたわけだし、それが仮にフェリア王女を妃とすれば、ハーキュリーズ王の治世の継承の表明となり、自分が国王となった後の批判的勢力をかわせるって政治的青写真に基づいていた事だとするならなおさら彼が王女から手を引く選択肢なんかはないわけだ。なのに、いきなりそれだよ。

巷に流れる王女の身体が弱いから結婚はやめたなんていう説は、所

詮馬鹿げた子供騙しさ。
重要だったのは、フェリア王女には高い国民人気があり、ローズウッド王朝の英雄王の娘という栄光、トロフィーの役割があったってことだ。言うまでもないが彼女は聖女イメージが強い。だから、遊び人の傍系ウィシャート公にいまいち欠けていた正統さ、誠実さを補うのにこの上ない配偶者だった。
なのに、それをいきなり投げ出すなんて、甚だ不自然だと思わないか。身体の弱い王女を妻にしたとなればある種の美談にすらなるのに、絶対おかしい。鼻先にぶらさがった美貌の王女とそれに付随する権益を何故諦める必要が？
そこには不承不承そうせざるを得ない、何か強力な、あの傍若無人と名高いトバイア公を王女から引き下がらせるような何かとんでもない理由が存在したに違いない。
つまりだカイト君、それこそが先刻話した王女の妊娠だったんだよ――！」
オニールは大衆劇の名探偵か何かみたいに、得意になって声を強めた。
「つまり僕はこう考えたんだ。陛下はトバイア公が王女に懸想しているのを知り、それを機にトバイア公のことを可愛い甥ではなく、恋敵として見るようになってしまった。娘の心を奪った男への嫉妬の炎は燃え上がり、嫉妬の狂気は王の中に燻っていた美しい王女への自制心の箍をはずした。彼は娘の寝室へ行き、密かな恋をはぐくんでいた想いあう二人の仲を永久に裂いた――。
その結果生まれたフレデリック王子とは、あれはまさに、どうしても世継ぎが欲しかった、それも特別な選ばれた王子欲しさの老王の暴挙の結果だ。
晩節になって、ますます神族に連なるローズウッド王家を特別視し、その選民性に固執するあまり、彼は王子の母親になるべきは傍系の

娘程度では相応しくなく、直系王女でなければ駄目だと考えるようになったんだ。かつて圧倒的な才知と美とを欲しいままにしていた王族が君臨する時代を、懐古する価値観が陛下にもあったんだよ。そしてその価値観に突き動かされた挙句の、危険な配合ですってね。これぞ、懐古主義的超絶インブリード王子の誕生秘話だ。親子で交配とか、どんなアウトローだ。キティレベル」

しかし自画自賛して盛り上がるオニールと対照的に、カイトは首を傾げた。

「オニール……、何つうか、その話は確かなのか？　確証は？　幾ら何でも父親が娘に手を出すっつうのは……。幾ら国王陛下がフェリア王女を溺愛していたっても、それはさすがに違和感がありますよ」

「何だって？」

「それだったら日頃の素行からしても、普通に考えて、トバイア公が王女様に手を出しちまったってのが妥当なのではないですか。それで公爵様の結婚後になって、王女様の妊娠発覚とか。

そもそも公爵様が王女様を狙ってたってのは事実なんでしょう。だったら、そっちのほうがだいぶ現実的ですよ。王子様とオーウェル公子様が同い年っていうのが、公爵様のたらしっぷりと、当時の混乱を如実に物語っている気がしませんか。

王女様が御倒れになったことだって、好きな男が他の女と結婚しちまって、もう生きる気力がなくなってしまったとか」

「待て待て、カイト君、カイト君。なに可愛げのないこと言ってんだ、小悧巧な平民が、一丁前に推理すんなよ。素人はこれだから嫌なんだ。そんなくだらねーことが真実なわけないじゃん。

その辺のことは勿論僕だって考えたさ。でもトバイア公こそが実は王子の父親とか、そんなのちょっと深夜の社交界に繰り出せばな、普通に流れまくってる、誰でも思いつくような浅いことなんだよ。

おまえらみたいな素人が、飲み屋で国士気取りで国家を語ってる場合があるだろ、あれと一緒。事情通ぶりたい奴らがまず思いつくようなこと。だいたい公爵は王女激ラブだったんだから、一回くらいお願いしたかもってそんな単純な図式は誰でも思いつくようなことさ」

「下品だぞ」

オニールの場所を考えない言葉の使い方に、品位ある僕は注意を発した。

「でもな、真実とはそう生易しくはない。僕は一応プロなんだぜ。そして僕の考えは考察に考察が重ねられた深いものだ。王子の容姿も微妙に不健康そうな感じも、あれは言うなれば禁忌の血量。超近親交配による因果の顕在。

とにかく、フレデリック王子はフェリア王女が生んだ、老王陛下の子供だよ。単純計算で四分の三、自分の血を引く王子だぜ。そりゃあ王位を継がせるために、甥もぶっ殺すさ。間違いない」

そしてオニールは場所を考えないでくだらない妄想を延々偉そうに語り、やがて先刻の侍従に思いっきり睨まれたのだった。

それから時間ぴったりに女官が迎えに来て、僕らは四人とも殿下の私室に通された。僕は、最初から僕一人きりで殿下とお会いすることになるんだったらどうしようと思っていたので、カイトたちが一緒に部屋まで通して貰えると分かって、内心いちばん安堵していたかもしれない。

幾つかのアーチや薔薇の紋章をくぐり抜けた先に辿り着いた殿下の私室はとても広く、白と青い色調で統一された部屋だった。壁にはサンセリウス国旗、王家の薔薇の紋章、白薔薇騎士団の紋章、剣と盾、戦乱の英雄を描き出したタペストリー等、世継ぎの王子たるに相応しい勇猛果敢を表す品々がかけられ、また調度品から椅子にソ

ファ、天上のシャンデリアに至るまで、何もかもが豪奢だった。それに部屋の中には使用人にしておくのが惜しいような、上品で見た目のいい女官や召使いたちがうじゃうじゃいる。故郷では使用人に傅かれている立場の名家の娘たちが選抜され、作法と箔をつけに集まっているのだろう。

そして居間の中央、大人数が腰かけられそうな大きなソファのところに、フレデリック王子がいらっしゃる。周囲に光の靄がかかったかのような不可思議な印象、ちょっと同じ人間とは思えないくらい圧倒的な美を誇る薔薇の王子が。

殿下の周りには、三十代の身なりのいい紳士がいて、何事か話している。その側には淑やかそうな黒髪の女性、それに十七、八歳と思われる女性がいる。

少し離れた柱のところには、バンナードと呼ばれていた騎士の姿もあった。

第２１５話　優等生スタープリンス（１）

「よく来た」

フレデリック王子殿下は僕らの訪問を、快活な笑顔で迎えた。
金糸の刺繍の入った青い衣装に青いマント。洗練された王族の立ち振る舞い。彼はわざわざ腰かけていたソファを立ち、殿下御自ら僕らのほうに歩み寄ってくださった。
しかし僕はその不意打ちの親しげな歓待に対し、何とも対応を取ることができずに、ただただ息を飲む。
それと言うのもとにかく殿下は顔立ちが秀麗すぎて、相対する度に唖然としてしまうからだ。金色巻き毛が頬にかかり、睫毛が長く、色が白い。その美貌はまるで神がその御手で細工した精巧な人形のように完璧だ。誰もが心を奪われずにはいられない、絶世の、麗しの、薔薇のような……王子様なのだ。残念なことだが、こうして近くに寄るとよく分かる。彼の男らしい雰囲気、もっと言えば男特有のあの側に近寄られるだけでイライラする雰囲気が。
殿下のこのまぎらわしい見た目のおかげで、僕は毎回引っかかりかけているのだが、毎回見惚れた直後にこの詐欺のような違和感に気がつき、猛烈にがっかり感が襲って来てしょうがなかった。このキラキラ王子に責任はないのだが、僕は今度も心の中でげんなりした。
ともあれ僕は華麗なるフレデリック王子殿下に、恭しく最上級の礼をした。
それから王子殿下に対する御挨拶の口上を述べ、一同を代表する形で一人殿下の御側に近づき、跪いて、その御手を取る。崇拝と服従の接吻をするためだ。
直系王族の御身体に触れるなんて、そうそう許されることではないので、僕は些細な失敗もないよう、厳重に所作を正しくする。緊張のあまりに手と膝が震えている気がした。

何せ男爵令嬢の婚外子という殿下の生まれのことで、諸侯、取り分けトバイア陣営の人々の間では、一時期散々下賤腹なんて叩かれていたものだったのだ。僕としても実際のところ、ある時点までは州領主よりも身分の低い女が母親の王子なんて、いまいち得心がいかないという気持ちが無きにしも非ずだった。

しかし結局フレデリック王子は王統に属する者として陛下が公認され、トバイアこそが陛下に疎まれて舞台から排除された今、こうなると、世継ぎの王子様に対して、そんな考えを持っていたこと自体が恐れ多くてたまらない。

「待っていたよ、先生」

しかしそんな僕の頭の中など知る由もなかったのだろう。キスを済ませ、僕が立ち上がると同時に、殿下は随分親しげな調子で仰せになった。

「せ、先生でございますか」

「そう呼ばれるのは嫌か？」

「い、いえ、とんでもございません。すべては輝けるフレデリック王子殿下の御心のままに……。

あの、殿下におかれましては御機嫌麗しく……、不肖ながら、殿下のお役に立てればいいのですが……」

しかし僕がしどろもどろになると、フレデリック様は真顔になってきっぱり言った。

「無論だ。当然お役には立って貰うよ。そのつもりで仕官するわけだろう。こちらとしても、そのためにおまえを採用した。能力は如何なく発揮してくれ。期待している」

おおよそ想定通りのことだが、フレデリック様はその甘い容姿に反して、まったく内気な様子がない。眼差しは強く、眉目凛々しく、いかにも物怖じのない完全無欠の優等生な感じがしていて、僕はその意味でも完全に対応に戸惑うことになった。

出来のいい年下の奴なんて、考えてみたら厄介なものだ。冷静になってみると不出来な町の不良や、年下の女以上にどうしていいか分からない。

だから僕はただフレデリック様の御顔をみつめていた。何か僕からお話を切り出すべきだろうか、それとも殿下が何か仰せになられるのを従順に待つべきか。

彼が微笑んでいないとき、その白い横顔は確かに神による芸術品のようであり、僕はちょうどあのことを思い出していた。王城の廊下に確かに居並ぶ、あの有翼乙女たちの像のことだ。彼女らは人の形をしていながら人ではない。そして石像には、生命も宿らない。

と、そのエメラルドの双眸が、いきなり僕のほうに動いた。

「美しい、グリーンアイズは、セリウス王の祝福と申しますね……」

僕は絞り出すように言い、殿下は頷いた。

「緑色は真なる太陽の色、と言われているな。ある学説によると、太陽の光は緑色なのだとか。かの聖イシュタルはセリウスの翡翠の眼差しを深く愛したそうだ。

実際……、この眼は少し特別でね。太陽を正視できる。万物を見通す神の眼、とはいかないかもしれないが」

「左様でございますか。見えないものが視えるというようなこともおありですか」

「いや、神秘的な視力に関してはそうでもない。そうだな、せいぜい真っ昼間に飛ばしてしまった凧を探すのには便利というくらいだ。太陽の光が視界を遮らないから。便利だよ」

すると何処からか咳払いが聞こえた。見ると、ずっと向こうの柱のところにいるバンナードという青年が、こちらを厳しく睨んでいる。フレデリック様は笑って軽く両手を上げた。

「あの、彼は何かお気に召さないことでも。以前も彼には何か、失礼をしてしまったのかと思っていたのです」

「気にしなくていい。バンナードは、いつも大抵のことが気に入らない。

最初は誰でもそうなのだが、おまえもそう緊張をされては困るな。これは飽くまでも私的な会談だ、リラックスしてくれ。

まずはここにいる私の部下を紹介しよう。彼は私の諮問官ファン・サウスオール卿、現行私のブレーンというやつだ。ファンはかつて姉上の……、姉上の乳兄弟だった。この知的な風貌からしてお分かりのように、彼は学者であり優れた魔術師でもある。それから医師のナタリー・ライズ。ナタリーは直轄領の子爵令嬢だが、同じく頭脳明晰な彼女は姉上の侍女から医師へと華麗な転身を遂げた」

殿下が仰せになると、紹介された両名は、僕に正式の堅い挨拶をした。女の医師というだけでもめずらしいことなのだが、高齢の陛下の御側にならばともかく、何故十七歳の若い王子の側に日中から医者がついているのか僕は疑問を感じた。が、それについて考えている間もなく殿下の紹介は続いた。僕は慌ててそれに従う。僕はフレデリック王子の一言一句を逃してはならない立場だった。

「そして私の魔術師のマデリン・スペルマン」

次にフレデリック殿下は傍らにいる若い女性を指示した。見るからに活発な性格が想像できる、明るい雰囲気の女性だ。彼女は動作が元気で軽やかで、ちょっときゃぴきゃぴしている感じだ。

見たところ、フレデリック様と同じ年くらいだと思うので、普通に考えれば彼の乳姉妹だと思うところなのだが、スペルマンという名前が気にかかる。

「スペルマンと言うと、かのカタリーナ師の血縁か何かでいらっしゃるのでしょうか」

「娘だよ。マデリンはカタリーナの娘」

フレデリック様に紹介され、マデリンと呼ばれた女性は短いスカートの端を持って僕に挨拶をした。あまり見るわけにはいかないのだが、彼女はスカートの丈がかなり短い。王子付きの魔術師が、いいのだろうかと思うほどだ。

また彼女はつややかな茶色の髪を、随分細工が派手な髪留めで片側に結っていた。それに服装も化粧も洗練された都会仕様のもので、この女性もルイーズ同様、かなりこだわりのお洒落があるような感じだった。

「フレデリック様、わたしも発言をしてもよろしいですか？」

と、マデリン魔術師が殿下に伺いを立てた。話し方は案の定明るく楽しげで、わくわくしているような声だった。

「構わないよマデリン」

殿下は華麗な動作で許可をする。

「アディンセル先生は魔力をお持ちですね」

すかさず、マデリンは僕を見て言った。

「それも割かし強い魔力。でも幼少時に精霊と契約をなさらなかったのですね」
「ええ」
「それはもったいなかったわ。貴方は努力次第で、一流になれたかもしれないのに。でも貴方は神聖魔法に適性がおありよ。そうでしょう？」
マデリンは親しげな笑顔で僕に返答を求めたが、魔法使いになる訓練なんてしていない僕には、その辺はよく分からないので曖昧に首を振った。
「遠慮深い方。ハンサムだし。嫌いじゃないわ」
マデリンは微笑んだ。
そして僕に向かいながら、横にいるフレデリック様に視線だけを向けた。
「彼はきっと、貴方のお役に立ってくれるでしょう……。ねえ殿下」
フレデリック様は同意した。
「そうだろうね。そのために呼んだ以上は」
マデリンは左手を頬に添え、また僕を見上げた。
「ところでアディンセル先生は独身ですか？」
「えっ？　ええ……」
「よかった！　それって何より。だってイケメンさんが既婚者ってことくらい、気分が悪いこともないものね」
「あちらの紳士は？」

「彼も独身よ。まだ一度も結婚されたことはないらしいわ。まあね、幼い頃からフェリア様ほどお美しい方を間近で見てお育ちになったんだから、他の女なんて目に入らないのかも。その意味ではファン様は、哀しい犠牲者ね」

「なるほど」

第２１６話　優等生スタープリンス（２）

「そうそうフレデリック様、先生にバンナード様をご紹介しなくちゃ」

マデリンは切り替え早く、再び僕に話をしだした。

「あそこに立っている方。アディンセル先生、彼はフレデリック様の、側近って言っていいのかしら。彼も貴方と一緒で、神聖魔法が得意なんですよ」

そう言って、マデリンは室内のずっと離れた柱のところにいるバンナードという青年を、笑顔で手招きした。彼はすらっとした長身の、なかなか見栄えのいい男のようで、華やかな金髪王子の引き立て役としても申し分ないだろう。

「バンナード様、こちらにいらっしゃって」

ところがバンナードとやらはずっと向こうの柱に背中を預けたまま、憮然とするばかりでマデリンに応じない。それはほとんど、断固と言っていいような態度だ。

おまけに彼は僕と目があうと、腕組みをして、露骨に僕のことを睨む始末だった。一応、ぱっと見の風貌は温厚そうな感じなのに、さっきからどうにも態度がよくなかった。人を威嚇するのが趣味なのだろうか？

「バンナード、こちらへ来い」

殿下が仰せになると、さすがに彼は言葉では応じた。

「お断りします。僕はそんな男の採用を認めたわけではありませんから。ファン卿もどうかしているのです。
フレデリック様はその者を今後御側に置くと仰せになるなら、その前にどうぞ僕を罷免してからにしてください。ええ、どうぞ。そうなさればいいんです。フレデリック様に誠心誠意お仕えしてきたこの僕を無下にして、切り捨てるほどそのアディンセル某が重要であると仰せなら。僕の忠誠心をそうまで軽んじられるのであれば。どうぞそうなさればいい。僕がここにいる意味もない」
「バンナード。誰もおまえを切り捨てるなんて言っていないだろう」
「同義です」
「それがいい年した男の取る態度か。私を困らせるな」
「その御言葉、そのままそっくり殿下に返上仕ります」
「そうか、分かった。おまえの言葉、肝に銘じよう。だからおまえは今すぐこちらに来い。アレックスたちにおまえを紹介する」
「その必要はありません」

彼は頑なに言い張り、やがて殿下は嘆息と共に首を振った。
マデリンが少々悪くなった場を執り成すように、わざとらしいほどの笑顔で殿下や僕をみまわし、はしゃいでみせた。

「それにしてもバンナード様と先生、お二人って何だか、似ている気がするわ。だってお二人ったら、会った瞬間から呼吸があってる！　すっごく気が合いそうな予感がするんです。きっと、すっごく、二人は仲よしになりそうっ。ねっ、アディンセル先生？」
「えっ？　いや、あの……、ええ、僕はあんまりこういう状況に慣れていないので……」
「ねえ殿下もそうお思いになりませんか？　アディンセル先生って、前にお見かけしたときから誰かに似ているって思っていたんですけれど、分かったわ。バンナード様に似ているのよ」

「そうか？　言うほど似ているかな？」

マデリンに話を振られたフレデリック様は僕を眺め、それから分からないというように首を傾げた。

「似ていますよ。そりゃあ、双子みたいにそっくりとはいかないけど、兄弟だと言ってもきっと皆が信じるくらいには。それに魔力の質が似ているんですよ。一概に魔力って言っても、やっぱり系統みたいなのはあるんです」

「そうか。まあ、細かいことはどうでもいいのだけれども」

「バンナード様のあの態度は、きっとご自分の立場がおびやかされると思って、それで怒っていらっしゃるのよね。

実はねアディンセル先生、先日先生が受けた試験に、彼も参加していたのよ。何人か候補者が参加していたと思うけど、バンナード様はそういう人たちを採用させないために参加したの。彼はすごくお勉強ができるし、自信満々でね。でも答案採点でアディンセル先生が勝っちゃったんですって。

だから、彼は設問の学者先生たちに無理を言って参加した手前、ちょっと立場がなかったわけ。だから、ライバル意識で火花がバチバチバチって……。

でもバンナード様には、そんなに悪気はないのよ。ただそのなんて言うか、彼ってこれまでの人生、負け知らずのエリートだから。男の沽券とか言うやつに、ちょっと係わっちゃったみたい」

「なるほど……」

しばらく間があった。どうにもならない間だ。対人関係が不得手な僕としては、こういうのは他人事ではない部分があるのだが、今回は誰がどう見てもバンナードという男が輪を乱しているということは確かだった。

それによって、僕はフレデリック様が不機嫌にならないかをまず心

配した。タティのことをお願いに上がったのに、殿下にそんな気分でないと言われてしまうと、それで話は完全終了となってしまう。と、マデリンが僕を見ている。何とかできそう？　というようなことを視線で僕に聞いているようだ。しかし僕はすかさず首を横に振った。そんな問題解決能力は、僕にはないのだ。

「バンナード、むくれればいいというものではないぞ」

フレデリック様が、バンナードとやらに対して小言を言い始めている。

「おまえらしくもない。客人の前だ、分かっているか。人一倍体裁を重んじるおまえともあろう男が」

「何故そこでアディンセルを庇うのです」

「庇っていない。庇っていないが、おまえは今の状況を客観的に見てみろ」

「ところでアディンセル先生は、アディンセル伯爵家の出なのだから、勿論騎士でもいらっしゃるのよね」

そしてマデリンは空気を読まずにまた僕に話しかけた。

「え、ええ、そうです」

「騎士の称号はお幾つで取得されたの？　もしかして、バンナード様と同じ十歳とか？

バンナード様のときってね、ちょっと伝説みたいになっているんです。年端のいかない少年が、手練の試験官たちをあっと言わせたんですよ。彼は子供の頃から長身ではあったにしても、体力面が覚束ない少年が、大人の騎士たちを何人も負かせるっていうことは、とんでもないセンスが必要になるでしょう？」

「マデリン」

するとフレデリック様が、眉を顰めておっしゃった。

「何ですか？」

「女のおまえには他人事かもしれないが、名門男子にとって騎士称号の叙勲時期というのは、それこそ面子に深く係わる。微妙な話題なのだ。この話題で、和やかな晩餐会に紛争が起こることもある。少なくとも、初対面の人間に無理やり聞き出す事ではない。ましてやバンナードの話を持ち出して聞き出すというのは、大抵の人間に気まずい思いをさせることになる」

「あら、そんなにこだわることないでしょう。仲間になるんだもの。それにアディンセル先生は試験でバンナード様に勝ったんだし、これでおあいこですわ。

それで、アディンセル先生は？　貴方もきっとお早いんじゃないかしら。見かけによらず、すごい使い手な気がするの」

そして殿下とマデリン、やや後方にいるファン・サウスオール卿たちの注目が僕に集まった。僕としては、やはり王子殿下の前で自分の有能でない部分を晒したくはなかったし、特にマデリンがやたら期待のこもった目で僕を見上げるので、言いづらかったのだが、嘘を吐いたところでどうせ発覚することなので、ここは正直に言った。

「いえ、十八になってからです……、僕は武芸は得意ではないので、下駄を履かせて貰ってやっと。兄が騎士団を所有していなければ、今だって騎士になんてなれたかどうか」

「あらら」

マデリンは軽く肩を聳やかした。

「じゃあこの分野では、やっぱりバンナード様の圧勝のようですね。

彼は天才剣士。聖騎士の称号も持っているのよ。彼は最強の腕前なんです」

「聖騎士ですか……、それはすごい」

僕は素直に感心した。何故なら聖騎士の称号とは、国王陛下しか認定することができない特級の騎士称号だからだ。

そこに神聖魔法を操れる才能まで持ったバンナードとやらは、お世辞でなく現行最強クラスの騎士ということになるのだろう。

「アレックスの役職に私の身辺警護や騎士役は入っていないから、その比較に何等意味はない。重要なことは、各々が得意な分野で活躍をしてくれることだ」

とは言えやっぱり男としては、聖騎士というのは羨むべきステータスであり、勉強が出来るっていうことよりもずっと派手で格好いい気がする。女の人にも文句なしに好印象だろうし、しかも彼の場合はその勉強だって出来るわけで、内心で僕が消沈したのが分かってしまったのだろうか。フレデリック様が冷静に執り成した。

第２１７話　優等生スタープリンス（３）

それから僕は、殿下に僕の部下たちの紹介を一通り済ませた。
そして部屋の中央部分にある、低いテーブルを囲むようにして四方に配置された樫の飾りつきのソファにはさすがに僕だけが招かれ、フレデリック王子殿下の間近でしばらく時間を過ごした。

「殿下はその、青がお好きだそうですね。シエラが言っていました……」

ソファに腰かけ、二人きりのような形で向かい合うフレデリック様の顔を、正視できないまま僕は言った。
フレデリック様の容姿が妙に気になるのを除外して考えても、僕はこれまでの人生で、自分より年下の奴と関わったことなんてなかったので、ましてや王子様相手にどうしていいのか、適切な対応の仕方がよく分からなかったのだ。
そこへ召使いが紅茶を持って来たので、僕はしばらく救われたような気持ちで彼女の作法を眺める。薔薇の刺繍の入った衣装。十七、八歳の若い侍女だ。世継ぎの王子に配置されているからには、実家はかなりいいところのお嬢様のはずだ。
彼女が殿下に憧れて、ちらちらと王子様の顔を盗み見ているのが分かる。フレデリック様はそれに気がつくと、迷うことなく彼女に微笑みかけた。ありがとうなんて、爽やかに声までかけている。白い歯が、今にも光るんじゃないかと僕は思った。
するとたちまち侍女の背中がびくんとして、頬が赤らみ、それからしばらく時が止まる。たぶん、彼女の頭の中では流行の恋の歌でも流れていることだろう。
僕だってこれでも結構いい男のはずなのに、見向きもされないのは面白くない。兄さんのせいでこういう役まわりには耐性があるが、

別のお菓子を持って来た召使いも、やっぱりフレデリック様の御顔を惚れ惚れと眺めるばかりだった。
やがてお茶が出来上がり、殿下と、僕にもそれが振る舞われた。
フレデリック様は気取った動作で香りを楽しみ、それを一口飲んだ。
美しい所作だった。

「青はね、姉上がお好きだった。私が特別好きというわけではないが、私が姉上をお慕いしているという、ポーズを取る必要があった。妾腹の私が正妻の姫を陥れたと言いがかりをつける者がいるからね、それで……」

フレデリック様はカップを前のテーブルに置き、巻き毛を軽く撫でられた。いかにも優男らしい、気障な動作だが、美しい彼にはそれらのことが恐ろしいくらい様になっている。

「フェリア王女を慕うけなげな弟王子という、分かりやすい構図を示すという意味で……、今ではまあ、私も青は好きかな。青は姉上の色だし、私は姉上をお慕い申し上げているからね。シエラは……」

フレデリック様は一瞬言葉を切って、躊躇い、それからもう一度同じ言葉を繰り返した。

「シエラは元気にしている？」

シエラの名前が殿下の唇から紡がれたので、僕はひとつの正念場であることに気がつき、慌てて背筋を伸ばした。

「勿論、勿論でございます」
「うん、ならばいいんだ」

フレデリック様は頷いた。

「シエラはあまり気丈な娘ではないから、気にかけていた」

「アディンセル家では、不自由なく過ごしていると思います。それに兄がドレスをたくさん買い与え……いえ、プレゼントしているので、毎日着飾るのを楽しんだりもしているみたいで。彼女は紅茶を淹れるのが上手なんですね。いえ、僕は全然親しくないんですけど」

「私はシエラを愛妾に迎える気はない」

ふと、フレデリック様はきっぱり言った。

「実はギルバート卿から、そういう打診が来ているのだが。シエラを私に差し出したいという話がね。彼がシエラの身元を引き受けることになった当初は、そういう話はなかったはずだが、昨今のアディンセル伯は私に取り入りたいことを隠さない。ある意味では潔い。しかし私の見解はこうだ。もしシエラがアディンセル家に居場所がないのなら、彼女の身柄はこちらで引き取っても構わないとは思っている。シエラに肩身の狭い、可哀想な思いをさせたくはないからね。しかし私にそのつもりは毛頭ないことを伯爵に言ってくれ。仮にシエラを私のところに寄越すとしても、あたかも寵姫になるかのような外堀固めをしてくれるなとね。

それにつけ加えておくと、私に女を献上しようとしているのは、何もアディンセル伯ばかりではない。現在、有力諸侯から少なくとも十数件はそうした類の話が来ている」

「十数件もですか？」

「そうだ。若い王子に対して威力を発揮する、典型的な上納品というわけだ。私の王位継承の目が明らかとなった途端に、物凄いてのひら返しを何度も見たからな。今更女の献上話くらいでは驚かないが。調子に乗って全員採用したら、あっと言う間に特上の後宮が出

来上がる」

そしてフレデリック様は苦笑された。

一瞬だけ間を置いて、どうやら殿下は御冗談をおっしゃったようだと気がついた僕は、慌ててそれに同調した。

「しかし青いことを言えば、私は妾という慣例自体気が知れない」

フレデリック様は僕に仰せられた。

「我が国の体質から言って、そんなことをさせれば、娘本人がそのような淫らな性質の女であるとみなされるだけではなく、その一族自体、そういう家系だとみなされることになる。以後後世にまで妾を輩出した家系だということを、忘れられることはあるまい。何代かはまともに扱われないであろうし、敬虔な者たちの怒りを買い、そうでない者たちの間では、恰好の物笑いの種となる……、これは、私の母がそうだった。たかだか侍女が国王の召し上げを拒否できるはずもなかったであろうに、誰も彼女の嘆きを理解しない。好きこのんで妾に身を落としたがる女など、いないということを理解しない。

私の母は、言われているような毒婦などではなかった。忠実で貞淑で、善良な誇るべきサンセリウス人であり、そしていつも暗い悲しみをその眼に湛えた女だった。言い訳ひとつもせず……、私に尽くしてくれた。息子の私を敬称で呼び、この私に跪いていたのだ、私の足許に額をこすりつけて……、その細い背中はいつも私に赦しを乞うているかのようだった。実際に泣いていることもあっただろう。母を母と呼んでやれない自分が、せめてその悲しみや苦悩から助け出してやれない自分自身の無力が、幼い私はいつも本当に申し訳がなく、苦しかった……。

しかし世間というものは、どんなに母が心根の優しい女であったと

ころで、結局のところ神聖な結婚に違反し、男に身体を許したという事実だけを見る。相手が高貴な男であろうと、本質部分の認識には大差ない。

だから陛下は私と母の関係性を希薄にし、私が王統に属する者であることを知らしめるために、私には母を下女として扱うように命じられた。侍女ではなく、下女だ。多くの人々の前で、母をひれ伏せさせ、決別を徹底させた。子供の頃の私は、陛下の思し召しが理解できず、なんと冷徹な御方かと陛下を恐れたものだった。だがそれほどのことをしてでも私から切り離さなければならぬほど、妾というものは人々の心の内側において、潜在的に見下される存在ということなのだ。

そして私の母は、陛下をたぶらかした稀代の淫乱女と袋叩きにされ、神聖なる陛下の結婚と、王妃の愛に仇なす者とされ、罵声を浴びせられて死んでいった」

フレデリック様は、僅かに眉を顰められた。

「私の母は、私のために、私を生かすために黙って犠牲になってくれたのだ。私を生んだ頃、彼女は王女に仕える、王女と同年代の少女にすぎなかった。母には恐らくいろいろな夢があっただろう。少女たちが当たり前に夢見るように、甘い恋や、幸福な結婚を夢見ていたことだろう。王宮ですれ違う若い貴公子たちに、胸をときめかせていたかもしれない。少なくとも妻のある男の性玩具にされることを望んだわけでは、なかったであろうに」

フレデリック様はしばらく沈黙した。

僕はそのお話をお聞きしている間、僕の母上、ギゼル様のことを少し思い出していた。

殿下はやがて息を吐き、彼は表情を戻した。

「すまない。話が脱線した」
「いえ、とんでもございません……」
「そういうわけで、私は妾というものに対して、まったくよい印象がないのだ。彼女たちの弱い立場を、どうしても私の母と重ねてしまうから」
「分かります」
「とは言え、前ウィスラーナ候ロベルトの妹というのは、今は何処でも扱いに困る存在ではあるだろう。
アディンセル伯爵家はランベリーを付与されるゆえに、シエラの嫁ぎ先として悪くないと思っていたが、伯爵とすればウィスラーナ家の娘を妻に迎えることで得られる利得は少ないと判断したようだな。年齢差がありすぎますなどと言って誤魔化していたが、彼は当初から自身がシエラを妻にすることには否定的だった。
確かに、ギルバートは彼自身が大変魅力的な男で、カリスマ性がある。壮年の美しい独身貴族は今もって国中の婦人たちの垂涎の的であることだろう。昨年末のことを思えば、王子であるこの私よりも女性人気が高いのは説明の必要もないな。私と伯爵とは世代が違うとはいえ、あのときは少々妬ましい気分になったものだ……、せめてあと鉛筆一本分私に身長があれば、あの黒いワルツの貴公子に張り合えただろうかとね」

フレデリック様は御自分の頭上にてのひらを添え、それから自嘲するように小さく息を吐いた。

「ともあれロベルトの失政、国境領主らしからぬ数々の振る舞いに、特にランベリーの国境付近の人々は、いつ土地が戦火に巻かれるかと怯えていたような状態での新しい領主の就任だ。もともとが人気の高いアディンセル伯は当地においても概ね歓迎すべき存在であり、わざわざ評判の失墜したウィスラーナの末姫を妻にする必要はないということだろう。

伯爵がシエラを持て余しているという状況は見て取れる。零落したとは言え、名門ウィスラーナ家の令嬢だ。まさか下働きをさせるわけにもいかないだろうからな。

だから彼には私が客人としてならいつでもシエラを引き取る意思があると伝えてくれ。本当は最初からそうしたかったのだ。ロベルトの蟄居が決まった時点で。だが妾にはしない。

シエラに限らず、私のために用立てられる娘は、どの娘も、きっと選りすぐりの美人ぞろいだろう。しかし私はどの娘も傍に置くつもりはない。

そこらに配置されている召使いの娘たちもそうだ。最近やたらと年齢の若い娘が増えているが、私を陥れるための罠か、それとも功名の手がかりのためか知らないけれども、断じてそのようにはしない。シエラにはこの話はしなくていいが、私が……、気が多いなんて思われたくはないから、でももしおまえが……」

殿下はちらっと僕を見て、視線を膝に落とした。

「話したいと思うなら……、私についての話をシエラにしたいときがあるとすれば、私が愛人を持つような男ではないことを、話をするのは悪いことではない」

「勿論です。殿下はそんな方ではないと、僕も思います。兄には戻り次第、殿下の御意向をすぐに伝えます」

「頼む」

フレデリック様は頷いた。それから言った。

「私はとてもシエラを心配している。おまえも知っているだろうと思うが、彼女はあまりに純粋で、汚れを知らない。まるで天国から降りて来たばかりの、夢見る天使のようだからな。

今度のことでは、ロベルトのことや、いろいろなことで、可哀想に

どれほど動揺していることか……。

シエラはウィスラーナ家の娘として、きっと気丈に振る舞おうとしていると思うが、あれは弱い娘だ。心の中では震えて泣いているだろう。私が彼女の助けになれればいいのだが、シエラは私を拒否するかもしれない。だが現在の情勢を考えて、やはりシエラは私が引き取って、後見をしてやるのがいちばんいいと思っている……。魔法の勉強か、それとも何か好きな芸術でもやらせて、私がそれを見守ってやれたらと」

第２１８話　優等生スタープリンス（４）

それから殿下への陳情が許され、僕はアディンセル家に纏わる呪いの話、それによって僕の家族にどんな悲劇が起こりうるのか、タティが現在どんな状況にあり、また過去に実際に起こった事例等、知る限りのことを殿下に申し上げた。
彼は僕の話をとても真剣な眼差しをして聞いてくれていた。
僕がどんなにタティを大切に思っているかということも、殿下にとっては些細な問題であるはずの話を、彼はまるで自分の問題そのものであるかのように聞いてくれた。
その上で、フレデリック様は僕におっしゃった。

「まず最初におまえに言っておかなくてはならないことが、私は妾腹であるということだ。
おまえには信じて貰えないかもしれないが、私は随分長い間、王家の正式な一員として扱われたことはなかった。ローズウッド王家の秘宝と言うべき神の知識に触れることを、私はまだ許されていない」

フレデリック様は、深刻な表情で仰せになった。
その思わしくない苦悩の影に、僕はタティを救う手段がないのだということを告げられることを感じていて、心の中には暗い絶望が侵食し始めていた。
しかしフレデリック様は、気を取り直したような明るい口調でこう続けられた。

「だがこうして勇気ある嘆願を向けられた以上、私はこの国の王子として、でき得ることをしてやりたい。だから非公式の魔法になる」

フレデリック様はそう言うと、不意に後ろを振り返った。

僕らが話をしているうちに、いつの間にか殿下のすぐ後方に来ていたらしい。殿下がおいでのソファ席の真後ろにいたバンナードとやらが、呼応するように少々当惑したような顔色を浮かべる。悪戯者を咎める教師のような反応だった。彼はいかにも折り目の正しい美青年だった。

「まさか」

彼は頭を振った。

「教えてやってくれバンナード。いつの間にかそうして私の側に寄っている以上、興味はあったのだろう。

肺病とはサンセリウス旧領西部全域にかかる風土病のことだと思うが、その程度の病なら、あれを使えば一発で回復するのではないか」

「しかしですね、フレデリック様。重大知識の漏洩及び拡散は、国内法を根拠とした禁止事項となっております。それにあれは……」

「では魔法を教えず、魔法はかけてやるだけでいい。病気の娘に」

「特例を認めればきりがありません」

「出し惜しみする理由はないのだろう。問題なのは知識の漏洩であって、救済行為自体ではないはずだ。おまえはたった今そう言ったではないか」

「しかし、それはまさしく贔屓というものでしょう。フレデリック王子が身内に甘いと、悪い評判が立ちかねない。

フレデリック様、貴方はいつも僕を口煩い守役だと警戒して、真意を酌んではくださいませんが、僕は貴方の評判のことを心配しているのですよ。こうして小言を申し上げるのは、それが現在の僕の役割だからです。陛下より、未成年の貴方様の兄役を仰せつかっているからです。僕は貴方様より少しは世間、世情を知っているつもりです。貴方の死んだ乳兄弟の代役を務めているからなのです。僕ほど貴方のことを親身になって考えている者はいないのですよ」

「それは分かっているよ。おまえにはいつも感謝をしている。おまえがどれほど私のために尽くしてくれているか、私はちゃんと分かっているつもりだよ」

フレデリック様はソファ越しにバンナードとやらを見上げて言った。

「頼りにしている」

「それならば、どうしてそのようにいつもいつも僕の進言を拒否するかのようなことを仰せになられるのです。前はそうではなかったのに、ここ最近の貴方様は少しおかしい。このアディンセル殿といい、彼程度の者がいったい何だと言うのですか？　こんな、何処にでもいるようなこんな男が、この僕より重要だとでもおっしゃりたいんですか？　このいかにも……」

バンナードとやらは僕を値踏みするように見た。

「まだ少年のような顔をした取るに足らない男が。教師役を仰せつかるにはさすがに年齢が若すぎるでしょう。秀才ですって？　だとしても、このレベルの者なら我が国の有望な駆け出しの学者たちの中には他にも何人だっているはずです。石にかじりついて勉学に励んでいるような者たちのほうが彼よりずっと優秀ですよ。向学心もある。

しかもフレデリック様、彼の人生は果たして貴方に何を教えますか。二十歳やそこらの彼から、貴方は何を学べますか。僕に言わせれば、これは先生ではなく、貴方の遊び友だちになりかねない」

「遊び友だちか……、そうだな。それも悪くない。もうオーウェルとは、遊べないのだ」

「あの者は貴方様にとって悪影響しか及ぼさない者の筆頭です」

バンナードとやらは殊更に声色と表情を厳しくした。

「性格は傲慢にして残忍、冷酷、攻撃的でしかもあの呆れ果てた選民思想。救い難い男です。いったいどういう育てられ方をしたのやら」

「そう言うな……、オーウェルは単に孤独だっただけだよ。単純に両親に愛されたかっただけだ。でもトバイアは息子につらく当たりすぎた。母君については詳しくないが、日頃のオーウェルの言い分からすると、似たようなものだったのだろう。

オーウェルはそういう行き場のない思いを、いつも心に抱えていたのだ」

「何をおっしゃいます。つらく当たられると言うならば、それは貴方様こそが誰よりもそうだったでしょう。陛下は貴方様を雑巾同然の目で見ていたではありませんか。こうして役に立つと分かるまで、貴方様は末席の王女よりも粗末な扱いを受け、父親であるはずの方に温かい言葉ひとつ、微笑みひとつ投げかけられることなく、諸侯の面前で血が卑しいと事あるごとに笑い者にされ――」

「だが私はそれに耐えられる。しかし人間には、各々が神に与えられし心の強さというものがある。これは荷物にたとえると分かりやすい。ある重さに耐えられる者もいれば、同じ重圧に耐え切れずに、潰れてしまう者もいる。

オーウェルは……、そんなに弱い者だとは私は思わないが、彼には人の親切や愛を受け取る能力が致命的に欠損しているように私には思えた。本来ならば両親がそれに気づいてやるべきところだったろうが、二人とも恐らくオーウェルの内面にまでは関心がまわらなかった。だから私はその助けになろうと、極力彼の愛情深い兄として接していたつもりだった。孤独を抱え込むにも、結局は気持ちの強さが必要になる。彼はその気持ちが……」

「メンタルが弱いのも、指導者の資質として重大な欠格事項です。貴方は彼に甘いのです。女でもあるまいし、自己責任の領域でしょう。

彼は自らの爆発的な破壊衝動とは相反する脆弱な心の持ち主だった。だから父親を殺すなどという、あのようなことになったのですよ」

するとフレデリック様の穏やかな表情が、やや抗議の色を帯びた。友人を侮辱するなと、その眼が言っているのが部外者の僕にはよく分かった。彼は口には出さなかったが。

バンナードとやらは、さすがに自重したのか、荒らげかけていた声のトーンを落とした。

「話を戻しましょう。とにかく、彼にばかり便宜を図っては、いささか公平性に欠くのではありませんかと申し上げたいのです。それに、患者は彼の家族というのでもない。死の病に罹った者を救うなど、神の摂理にも反しましょう」

「かもしれない。だがそれでも、大事な幼なじみが死にかかっているという話を聞いて、それを見過ごすことはできないよ。ましして結婚するつもりだった相手と言っているのではないか。幼なじみで結婚相手だ。彼にとって、その娘はいったいどれほど大切な存在か。いてもたってもいられずに、私に助けを求めて来たことを、おまえなら察することはできるだろう。

少なくとも、幼なじみに死なれた私のつらさはおまえだって知っているはずだ。そうだろう。私はあいつを守ってやれなかった。いつも私の傍にいて愛らしい笑顔を向けてくれた儚い者のために、私にできることと言えば泣くことだけだった。その後悔のことだよ。消去法で考えたとしても、私にはその娘を見過ごさなければならない理由がない。そして彼は私に救いを求めている。

バンナード、私は……、それでも私の手で助けてやれる者は、すべて助けてやりたいのだ。

神の摂理を言うならば、彼が今日ここに来たこと自体、それこそが神の思し召しなのではないだろうか。私はそのように感じたよ」

第２１９話　優等生スタープリンス（５）

殿下に命令された彼は、不承不承といった顔をしてソファに座る僕を見下ろしていた。

「アレックス、彼は私の側近のバンナード・トワイニングだ。トワイニング公爵家の次男だ。文武に長け、魔術にも心得がある。先刻マデリンが言った通り、何でもよくできるエリートだよ」

殿下に紹介を受け、僕は立ち上がって頭を下げた。

トワイニング家の次男ということは、バンナードとやらはトワイニング公がティファニーと別れた後、結婚した相手との間にもうけた二人の息子のうちの下の息子ということになるのだろうか。思わず世間は狭いと呟きそうになる。

見たところ、彼は僕と同世代のようだが、一応叔父にも当たるわけだ。ルイーズとアレクシスの、異母弟ということになるわけだから。複雑な気分で、僕はバンナード公子の顔を見た。彼はブルーグレイの瞳をしていた。

暗褐色の髪と、整った顔をしているが、ルイーズたちほど視線をとめたくなるようなつやめく美貌というほどではない。特に親近感も湧かないし、そもそもこの男の母親がティファニーを追い出して、彼女の人生を不幸のどん底に陥れたところから、一族の悲劇の連鎖が始まったのだろうかと思うと、バンナード公子に責任はないことは言え、僕は胸がつかえるような思いがした。

他方バンナード公子は僕とは別件で不服そうだったが、殿下の仰せとあれば仕方がなく、今回だけ特別なのだと前置きをした上で、自分がこれから同行をしてタティに魔法をかけると言った。

「本当に、助けてくださるのですか？」

たずねると、バンナード公子は白けた顔で左手を差し出し、殿下に聞けという仕草をした。
先日もそうだったが、彼はどうも僕を見下している感があり、先刻の発言からして明らかに好意的には思っていないようだ。僕の中の苦手意識が胸の中に湧き上がる。彼のような同年代の人間の拒絶的雰囲気は、地味に堪える。僕の心はにわかに曇った。
それで恐る恐るもう一度その旨殿下に申し上げると、フレデリック様は公子とは対照的に、明るく微笑んだ。

「いいとも。心置きなく施術されてくれ。この魔法は結構効く。少々きついが……、生命には代えられないと、そうだなバンナード」

殿下に問われ、バンナード公子は憮然とした顔のまま同意した。

「麗しき我が君の仰せとあらば何なりと」
「ありがとう。それでこそ私が慕ういつものバンナードだ。
アレックス、本当なら私がこの手で助けてやりたいところだが、今回はバンナードがその娘に魔法をかける。私では、病に苦しむその娘が目覚めたとき、うっかり私に運命を感じてしまうかもしれないからね」

そして殿下は微笑った。
僕は臣下らしく、それにあわせて愛想笑いをした。が、勿論、内心では笑えたものではない。何せフレデリック様は反則のような美貌の主なのだ。悪質な冗談はやめてくれと思うばかりだった。
バンナード公子が抗議の声を上げたが、殿下は手をかざしてそれを制した。

「その代わりと言っては何だが……」

フレデリック様はふと僕に近づき、神妙な顔をした。

「何でございましょう……」

「うむ。勉強のほうは、くれぐれもお手柔らかに頼むね。私はおまえのように学者連中に称賛されるような、秀才ではないからさ」

そして殿下は僕に親しみを込めてまた微笑みかけた。

そのはたらきかけるような気さくな笑顔に、僕も今度は思わず微笑みがこぼれた。バンナード公子は堂々と勉強の便宜を図れと言う殿下を睨んでいたが、僕はこの方の許でなら上手くやっていけそうな気がして、本当に気持ちが軽くなる思いがしていた。彼はまだ若いが、寛大な父親のように周囲を安心させる術を心得ていた。楽しい毎日が想像できるほどだったからだ。

とそのとき、突然背後で部屋の扉が開く音がした。脊髄反射のような律義な素早さで、何事かとバンナード公子が言う。振り返ると、シエラが飛び込んで来たところだった。

当惑顔の召使いが、必死で室内の女官長に言い訳を始めている。彼女はシエラを案内して来たようだったが、なんとシエラは殿下に対応を伺いに来た召使いの後をつけ、彼女を押しやって、勝手に部屋の中に入って来てしまったようだ。

シエラは先刻ハリエットになじられたときと同じ思いつめた顔をしており、僕はこれから繰り広げられるであろう厄介な展開を予感して驚愕した。そうしている間にも彼女はフレデリック様の前まで走って来て叫んだ。

「フレデリック様、お願いですっ、タティさんを助けるようなことをしないで。私から愛する人を二度も取り上げるようなことをしないでっ！」

「シエラ……！？　おい、いったい、どうしたというのだ」

「無礼な！」

ソファの裏側にいたバンナード公子が、無許可の侵入者に対する対処を取ろうと、ひらりとソファを飛び越え殿下を庇う位置を取った。
そして腰の帯剣に手をかける。
それを、殿下が立ち上がって慌てて制した。

「フレデリック様！」
「バンナード、いい、大丈夫だ。相手は女だ、乱暴する必要はない。
それにシエラは私の大事な友人だ。彼女の話を聞く」
「貴方はこの娘に甘すぎるのです。いったい何度振りまわされ、馬鹿を見せられれば気が御済みですか」
「フレデリック様、聞いて。アレックス様が貴方に助けて欲しいと言っているのは、彼のお妾の女性なのよ。私と結婚するまでお相手をするだけの女性に、彼は優しいから、情が移ってしまっただけなの。
でも彼はそれを恋と勘違いしているの。それが私に対してどんなひどい仕打ちをしていることか、何も分かっていないのよ。
フレデリック様、私、ずっと悩んでいたの。アレックス様が彼女のことを想って、私を見てくれないことを、ずっとずっと悲しんでいたわ。
最近ね、やっとアレックス様と二人きりの時間を持てるようになったの、だからっ……、タティさんには可哀想だけど、どうかあの人を助けるようなことをしないで欲しいの。だって、彼女が元気になってしまったら、アレックス様はまたタティがタティがって言い出すに決まっているわ。私のことなんてそっちのけで、タティさんのことばかりになってしまう。
フレデリック様、私、アレックス様が好きなの」

シエラは、さすがに戸惑いを隠せない様子のフレデリック様に言っ

た。

「今度こそ、これがきっと本物の恋なの……、だから私、タティさんの存在が嫌だった。あの人がアレックス様の関心を独り占めしていて、私、ずっと苦しかったのに……、これからも一生タティさんに嫉妬し続けなければいけない人生なんて、想像しただけで死んでしまいそうよ。

フレデリック様、私、彼を愛しているの……！」

シエラの告白に、フレデリック様は悲しげに瞳を翳らせた。

「そう、彼を……」

「そうよ。私はアレックス様を愛してる。ねえフレデリック様、貴方はタティさんより、私の味方をしてくださるでしょう……？」

いったい何が起こっているのか、状況の把握もままならない僕だったが、これだけははっきり理解することができていた。

フレデリック様はシエラに惚れている、その情報を裏づけるように、彼はシエラを切なくみつめていた。

そして僕は今まさに身体中の血管という血管に、破滅という名の冷たい水がゆっくりと確実に循環していくような気分だということだ。

「そうだ。私はいつでもシエラの味方をする」

「では絶対にタティさんを助けないとお約束して。私のために、アレックス様の頼みを拒んで」

「……分かった。美しいおまえがそれを望むのであれば」

第２２０話　招かざる者（１）

サンセリウスの名門と言われている大領主の家庭では何処でもそうだと思うが、男子がある程度大きくなると、将来彼に仕える人間を選抜する意味でも、直属の家庭から遊び相手が選択される。
そうすることで部下を従えるリーダーシップ、立ち位置、責任、統率力なんかを子供のうちから学ばせるのだ。だから僕にも最初、オニールとか、一応いいところの坊ちゃん連中が集められたのだが、僕は彼らとなじめなかった。何故なら連中は乱暴で野蛮で身勝手で軽率、しかも意地悪ですべての行動は悪意に満ち――、というのは当時の僕の見解だが、それは今から思い返してみても、だいたい合っていると思う。
僕はタティとお飯事やお裁縫をするほうが好きだったし、楽しかった。女の人は大概虫なんかを怖がるから、虫を手掴みできる僕はそこでは勇者だった。皆が僕をそのように褒めてくれるし、ミミズや芋虫を掴めばタティも、ジェシカも、召使いたちも驚いたり、恐がってくれた。
だがあの連中はそんなことで僕を褒めてくれなかった。
兄さんですら、カブト虫を見せに行ったりすると、大きいのが取れたなと言って褒めてくれたのにだ！
男の世界はシビアだったのだ――、今でこそ幼い子供が団子になって群れているような現場を、他愛のないものとして眺めることができる。今の僕なら十二歳とかそこら辺の子供を蹴散らすのは体力的に造作がないから、心の傷を抉られないために防衛線を張ることはできるからだ。
しかし外側から見ると何と言うことはないあの場所は、一度立ち位置を間違ってしまうと、二度と這い上がれない地獄の戦場と化してしまう。大人の目があるときはそうじゃないが、大人が何処かに行ってしまうと、たちまち階級差別なんて屁でもないほどの理不尽な

力関係、鉄の掟が横行し、拳こそがすべてを決める修羅の世界と成り果てる。

いったいどうして僕は彼らの仲間になれなかったのか、本当のことを言うとそれは今でもよく分からない。

僕はいつだって上手くやろうと思っていたし、頑張ってもいたつもりだった。伯爵家の子供だと偉ぶったりしないで、彼らに親切にしているつもりだった。みんなで好きなことを共有できたらいいと思っていたし、本当のことを言えばタティとしか遊ばない自分は、心の何処かで恥ずかしい奴だと思っていたから、同性の友だちだって欲しかった。

連中が僕を仲間はずれにするためにわざと教えてくれなかった秘密基地とやらにだって、本当は、一緒に連れて行って欲しいとだって思っていたのだ。

でも上手くいかなかった。僕が他の子供と何かが決定的に違っていたのか、それとも只単に生物として弱い個体が他の結束の為の生贄の羊にされてしまったのか、判然としないのだが、とにかく僕は駄目だったのだ。

それでも僕には当時から連中を従わせられる権力があったのだが、子供は大人よりも権力について鈍感だった。そのうち進退極まった僕は、兄さんに言いつけてやると言うのが決め台詞のようになり、でもそれを言うと余計に馬鹿にされたり、ぶたれるはめになった。結局耐えられなくなって、ある日本当に兄さんに言いつけたら、阿鼻叫喚の地獄絵図だったと後にオニールが証言しているようなことになったのだが。

僕に泣きつかれた兄さんは、烈火の如く怒り狂って、僕の遊び相手らとその父親を即日全員出頭させた。そして一体何の容疑で出頭させられたか分からずにいる父親たちに減俸、降格を言い渡したらしい。たかだか子供の喧嘩ではないかと、若い伯爵の横暴に批判を口にした者は、ただちに斬首、領地の没収までやったそうだ。一見やりすぎのように思えるが、我が国の階級制度とは絶対のものであり、

州を治める伯爵家の者にそれ以下の者たちが狼藉をはたらくということは、家系断絶が相当の重罪なのである。先日僕がフレデリック王子の御機嫌を必死で気にしていたのも、つまりはそういうことなのだ……、そして残った子供たちにはその場で全員が尻叩き百回。伯爵によって想像を絶する恐怖と階級制度の厳しさというものを見せつけられ、泣き喚いていた子供らは各々身体を持ち上げられ、兄さんの目前でその刑が執行された。

その当日をもって僕の遊び相手の任からは全員が解かれ――、後から思うとその後の兄さんの僕に対する軍務の免除なんかも、これによって僕が集団生活ができないと判断されたゆえだったんじゃないかと思うが、いずれにしてもアレクシスが残した一人息子への過保護に拍車がかかった事件には違いない。

僕の言い分を全面的に支持した兄さんは、僕を囲い込んだ。僕と同年代の男子を持たない伯爵の取り巻きたちは、弟のことになると少々冷静さが飛んでしまう伯爵のこの意向を利益と取って歓迎した。結局各人様々の思惑から、以後それまで以上に可愛いアレックス様をそのように扱うようになった。

そして、その後数日は椅子に座れなかったとオニールは文句を言った。

「言うまでもないが、それで済んだ奴は少ないと思うぜ」

事情通を自称するオニールは、訳知り顔で語った。

「子供の喧嘩に対するものとしては、閣下はアホほどのキレっぷりで、そのときは恐ろしくて誰も彼と目をあわせられなかったって。まあ当時は閣下だって二十四とか五とかそんなんだから、今より若くて熱かったんだろうけどさ。

減俸と降格を食らったうちの親父は、見せしめの意味でももう僕を締めるしかないわけだよ。何せ同僚が三人ほど、処刑されて身ぐる

み剥がれたわけだからな。きょうび山賊だってそこまでしない。そんなわけだからアディンセル家への忠誠心を叩き込んでやると言って、家に帰った途端に鉄拳制裁だった。サヴィル家を断絶の危機にさらした愚か者め、歯を食い縛れと言われて、拳骨で十発は殴られたかな。恐怖の一日だったよ。あの日のことは今でも僕の人生史上最悪の一日。初めて殺人を見たのもこのときだったし、何人もの大人に説教は食らうわ、親父には死ぬほど殴られるわ、あの日はもう肉体精神の限界だった。

それまでは僕は家ではよく勉強の出来る、いい子の末っ子だったからな。荒くれ者の上二人の殴り合いを、隠れて見ている両親の特別な末弟だったのに、その一件以降、兄貴たちに劣らぬ悪ガキ認定されちゃったんだぜ。

おまけに途中から暴君ジャスティン様も参加して来て、彼はわざと僕のケツを狙って蹴り上げたよ。上の兄貴は自分の嫁にすら手を上げるような奴だから、弟になんか容赦がない。地獄っていうのは、こういう環境のことを言うんだぜ」

「おまえが全部悪いからだろ」

僕はむっとして言った。

「おまえのなんか、地獄のうちに入るか。軽々しい。大した苦労でもないくせに、すべてが薄っぺらいんだよ。でも僕は毎日苛められていた」

「そんなの大したことないだろう。ガキの喧嘩なんか」

「喧嘩じゃない。大勢で一人を虐めることは喧嘩じゃない」

「細かいな、でもこっちだって一応遠慮してたんだぜ、何せアレックス様は見た目マジで女みたいな奴だったから。落とし穴につき落とすときも、女かもって不安になってる奴もいたし」

「じゃあつき落とすなよ！」

「もういいじゃん、昔のことだろ？　そんなに熱くなるなって。な

っ？」

「違う。虐められた側にとっては、全然昔のことになんかならない。どんなことだってそうだけど、被害者側はいつまでだって苦しみ続けるんだ。おまえのは犯罪者の論理だ。加害者の野蛮な思考だ。自分が悪いことをしたくせにもう時効だ忘れろなんて、人間性を疑うクズの言い分だ。こういう痛みは自分が被害者になって初めて分かる種類のものだ。言っておくけど時効になんかならないからな」

「細かいぜ」

オニールは小馬鹿にしたように両手を上げた。

「これだから苛められっ子は鬱陶しい。根暗なんだよ。ネチネチネチネチ、そんなだから苛められるんだ。男ならさっぱりしろって。嫌ならやり返せばよかったんだ。女の腐ったみたいなこと言ってたら、いつまで経ってももてないぞ」

「やり返したら、皆で十倍にして返したくせに……」

「まあ、そうだけどさ。でも、そうさせないようにするのが、指導者の器量ってもんだろ」

「もう帰れよ」

僕はオニールを睨んだ。

僕がどんなに大人になろうとしたところで、相性は最低最悪、こいつは身分を弁えることもなく、謙虚さのかけらもない。あまつさえさっきから自分のことは棚上げで、この僕を批判しているのだ。

主人を批判したりけなしたりするなんて、もし僕が少しでも気の荒い男だったら、もしくは絶対に周りに軽視されることが許されない、多くの人々を束ねるような大領主の立場であったなら、こいつのやっていることは今頃は首を刎ねられていたって当然の無作法なことなのだ。

こんな、声を聞くのも苛立たしい人間が僕の部下だなんて、こんな

話は土台からして間違っていることなのだ。

第２２１話　招かざる者（２）

オニールはしばらく僕の顔を見て、やがてあの憎たらしい苛めっ子たちが僕を馬鹿にするときそのもののような嘲りの顔をした。

「何かこう……プルプル震えんなって。そんなに悔しかったのか？」

「その口を閉じろ。僕を馬鹿にするな。僕には今ここでおまえを懲戒処分にすることだってできるんだ。はっきり言ってやる、おまえは僕より下なんだ。それに友だちじゃない。まるで友だちみたいな態度はやめろ。勘違いするな」

「分かった分かった、ったくしょうがない……、じゃあ、今回、近いうちアレックス様に女を紹介してやるからさ、もうそれで手を打ってくれよ。僕が悪かった。当時の悪ガキ全員を代表して、僕が謝るよ。どうもゴメンなさい。だから、そうやって僕を警戒すんなって。

そうやってびびった目で相手を見るな。僕が言うのも何だけどさ、ガキってのは弱い奴にはとことんつけ込むって言うかな。そういうところがあるから、やられたくなかったらガチではったりかますしかないんだよ。仮にからかわれてもいちいち傷つくな。寧ろそれを笑いにしろ、もっとこうマッチョになれ。それか、もう野郎は取り敢えず全員ぶっ殺すくらいの勢いでいい。少なくともうちじゃそうだ。サヴィル家じゃ、母上以外の家族は全員、殺るか殺られるかだからな。

閣下を見ろよ、誰も閣下に挑戦しようなんて思わないだろ？　それは身体がでかいからってこともあるけど、やったら絶対殺られるってことが分かるからだ。あの人は殺人へのハードルが低すぎるからな。お坊ちゃま君は自分が弱っちいってことを、もっと隠すべきだな」

そしてオニールは僕に近づき、勝手に二の腕を触った。

「何だよっ、触るなっ」

僕は即座にオニールの汚い手を振り払った。

「もっと飯を多く食ったほうがいいな。ひょろいから」

「余計な御世話だ！　おまえだって人のこと言えないだろっ」

「僕はいいんだよ。そうじゃなくて、これはマジな話だ。お坊ちゃま君は一応表舞台の人間なんだぜ。アディンセルの名前がある以上、何処でもその他大勢とはならないわけだから、そのなんて言うか侮れそうな弱そうな態度とかって、シャレになんないわけ。だからお勧めなのが筋力強化だな。そうすると、自分に自信もつくはずだし。外見だけでも強そうにすると、何処でも一目置かれる。サンセリウス王宮も例外じゃない。国王陛下は軍人がお好きなんだそうだ。強い男が。逆に弱っちい男はそれだけで目をつけられるとも言うしな。

アレックス様は王子の側に仕えるなら、陛下の目につくことだってあるだろうから、その辺も気を遣ったほうがいいよ。

ほら、シエラたんの兄候いるだろ、あいつも結構ひょろい奴だったらしい。で、軍事演習中に落馬したんだかで急逝した四十代の父親の跡を継いだとき、ロベルト・ウィスラーナは十八だったのかな。とにかく少年だった。そして王宮に出向いた彼に陛下はこう言ったんだそうだ。爵位の継承記念に軍務卿と馬上試合をし、勝利せよと。薔薇の王宮の洗礼というやつだよ。新しく大領主になった奴らは何かしらで老王に手酷い仕打ちを受けるのが慣例らしいんだが、彼の場合はいきなり軍務卿と対決しろと言われた。

恐ろしい手練相手と勝負しろと言われ、ロベルト・ウィスラーナは怯えきっていて、自分はまだ若く、未熟で、そんなことはできませんと言った。でも、本当は負けてもいいから挑むべきだったんだ。

陛下は国境を預かる若い侯爵の腕前ではなく、度胸を試していたからだ。しかし彼は身体を震わせて陛下に生命乞いをした。陛下は髭を撫で、軍務卿配下の若い騎士との対決に格下げをしてくれた。そして、ロベルト・ウィスラーナは敗けた。諸侯の面前で。……陛下の心証はその時点で最悪だったそうだ。情けを受けたからには、勝たなければならない場面だったから」

オニールは僕を見た。

「アレックス様は、閣下がいて運がよかったとしか言い様がない奴だよな。そうでなかったら今頃とっくに潰れてる。絶対ロベルト・ウィスラーナと同類だ。彼の場合、下手こいたおかげで尾びれのついたロベルト軟弱列伝が流れまくっちゃってて気の毒な部分はあるんだけど、それでも奴はやっぱ弱かったんだよ。肉体的にも、精神的にも指導者の器じゃなかった。お坊ちゃま君と同類項。僕は直接彼を見たことないけど、直感がそう言ってる」

「何だよ」

「ま、違うのは責任の軽い次男ってところだな。閣下がいる限り、不得手な役目も重責もまわっては来ない。それどころか何かっていうと庇われて、猫可愛がりされてる。

前から思っていたけど、閣下のあれは何なのかね？　自分にも他人にも厳しいのに、何故かアレックス様にだけは激甘という……。年の差があるって言ったって、兄貴ってのは普通、弟に厳しいもんだろ。うちのジャスティン様は、末弟のことを足蹴にはしても、可愛がったことなんかなかったぜ」

「それはおまえが生意気だからだ。生意気で可愛げがない弟を持って、ジャスティンには心から同情するよ」

僕は嫌味を言った。

それなのになんという図々しさだろう、オニールはそれを逆手に取

って自画自賛した。

「そうなんだよな。上の兄貴は明らかに将来を見据えて弟を邪魔に思い始めている。僕の素質に恐れをなしているんだ。それって言うのも僕が優秀でイケメンだからなんだけどな。父上としても、本当はこの僕に家督を継がせたいんだよ」

「何を根拠に言っているんだ。寝言なのか？」

「優男、金も力も無かりけり、とは言うが、三男の僕が受け取った財産は、所詮この顔のよさだけだと思っていたけど、案外そうじゃなかったんだよな。このあふれんばかりの才能……、しかも美男とくれば、これは自分が恐いほどだ」

そしてオニールは髪を掻き上げた。自分でも言っている通り、オニールは見た目からして全然大したことがない、何処にでもいるような浅はかでくだらない男だった。

優男って言ったら少なくとも顔のよさだけは誰もが感心できるくらいの水準がないとならないが、こいつは全然そんな上等なものじゃない。オニールが優男な部分は、主に顔面以外ということだ。

武芸の腕前を買われたわけじゃないと本人が言っている通りで、相対していて威圧される感じもない。

人のことは言えないがあんまり迫力のある風貌でもなく、それどころかチャラチャラしていて、何をするにも鼻につく。長めの髪が、時折女みたいに顎にかかっていて見ていて鬱陶しい。しかも女の人がつけてるような、耳元で揺れるピアスを片方の耳にだけしているという、僕のような硬派な男の不快指数を跳ね上げる不良じみたファッションセンス。軽薄で無責任な笑顔。実際全然そんなことないのに、どういうわけか自分をイケメンと思い込んでいる言動が散見されるのも実にイライラする。

身の程知らずの人間は大抵自己評価が過大なものだが、こいつの場合は現実との乖離が尋常でないから傍から見ると失笑レベルだった。

「なんで慣れてくんないのかね」

オニールはやがて、執務机の左側にいるカイトに同意を求めた。
そのとき執務室には僕とカイトとオニールがいて、僕らは無駄話をくっちゃべっていたのだ。何とも不毛で無意味な時間の使い方だが、執務時間中だったのでしょうがない。

「努力しているのに、毛嫌いされてる。でも十年も前のことをぐちぐち言われて敵意向けられたってさー。だってお互い鼻水たらしてたような頃のことなんだぜ。僕は味方なんだって分かって貰わないといけないのに」
「俺にはおたくの口のきき方が信じられませんけどもね」
「細かいことはいいんだよ。てかカイト君の態度がでかいことのほうが、僕には信じられないけどな。だって平民がさ、何かおかしくないか。ヴァレリアの邸じゃ、もっとずっと情けない感じだったのにな。なのにここじゃあ、いっぱしに腹心気取り。笑っちゃうね」

オニールは髪に手を入れてそれを掻き流し、根性の悪い顔でカイトを見た。

「……」
「ま、そこには今は触れないでおいてやるけどね。ヴァレリアの家のみすぼらしい下男のカイト君も、いまや成人男。いっぱしに、安いプライドはあるんだろうからさ。ここじゃあんまり当時の醜態をばらされたくはないだろうし？」
「別に……、おたくに何と言われても俺は気にしませんよ」
「そういう態度が、こっちは余計にカチンと来るんだよ。おまえのその無駄にプライドの高いところがな。
あーあ、閣下もなんだっておまえなんかを抜擢したのか。まあ武芸

の腕前だけは認めてやるよ、でもそれなら単なるボディガードでいいんだしさ」

「そんなことは俺が知るわけない」

「それで、クライドって奴はいつ来るのかね。あのいい男気取って、ちょっとスカした奴」

オニールが言った。

第２２２話　招かざる者（３）

「あいつジェシカ女史の弟って言っても、妾腹だそうじゃん。幾ら正妻の子供で年上って言ってもさ、ジェシカ女史は女なのに、未だに女より評価されないなんて、悲惨だよな。あれやっぱ妾腹ってことが三十近くなっても響いてるんだろうな。

過酷なことを言うようだが、実際フィーロービッシャー子爵は、妾の子は家系を繋ぐための種馬としか思ってないんだろう。実質はこれからもジェシカ女史で……、なまじ彼女が有能だから、奴は要らない子なんだろうな。

ヴァレリアがあんなで、よかったなカイト君は。そのおかげでヴァレリアの父上は、しょうがないからおまえを使わないといけないから」

「うちだって男爵様の後継ぎは実質お嬢様ですよ。俺は名前だけの入り婿」

「ああやだやだ、つまりここにはまともな貴族は僕だけで、あとは女子供と素性のおかしな奴ばっかってことか。お坊ちゃま君付きは言わばお遊びの二軍だ、仕方ないけど」

「なんて失礼な奴だよ」

僕はむかっとして言った。僕を苛めたことをまるで反省していないどころか、あれは単なる冗談だったと言わんばかりのオニールの態度に、僕は腹を据えかねていた。

僕は真剣にずっと苦しんでいたのに、こいつらのせいで人づきあいが何もかも嫌になったと言っても過言じゃないくらいなのに、他方苛めた奴らは楽しく青春を謳歌し、年齢相応に身につけるものは身につけて、しかも頭に来るのが、女を紹介してやるなんて台詞を吐けるほど女の知り合いもたくさんいる人生だなんて！

こんな馬鹿がなんで僕より幸せそうなのか、へらへらして、昔のこ

とだから忘れろなんて、あまりに理不尽すぎる。

「どうせ領地の継承も怪しい三男の分際で偉そうに……。将来的にカイトもクライドも爵位を持てるけど、おまえだけはそうじゃないくせにね。おまえは何処まで行っても三流だ」

「おっ、なんだ、それを言うのかお坊ちゃま君は。嫌な奴だな。僕は傷ついたぜ」

「勝手に傷つけよ。もう昔のようにはいかないからな。僕を苛めた奴らには、絶対復讐してやるんだ」

「復讐ならもう達成されてんじゃん。おまえ、八人のうち三人はあのとき何もかも閣下に没収食らって、平民になっちゃったよ」

「えっ？」

「そいつらの親父が余計な反論をして手討ちになったから、家も財産も貴族籍も接収されちゃってさ。親父はぶっ殺されてるから、稼ぎ手もいなくて、そいつらの人生なんて悲惨なもんだぜ。あと別の一人は、別件で十代のうちに死んでるし。お坊ちゃま君は自分が権力持ってるって自覚しとけよ、おまえのチクリひとつで何人の人生が狂ったと思ってんの」

「で、でもともとはおまえらが悪い。人を苦しめた因果応報だ、僕が傷つくことじゃない」

「まあな」

意外にもオニールは同意した。

「八人のうち、十年後には半分脱落、まあよくあることだよ。ここはそういう世界だからな。奴らは運が悪かった。普通に考えて伯爵家の奴をどつきまわすなんて、僕らもちょっと非常識だったしな。因果応報かと言えば、まあそうなるんだろう。ってことでもういいじゃん。僕は運がいいからここに返り咲いたけどな」

「おまえも落ちぶれろ」

「そんなに嫌うなよ。きっと縁があるんだって」
「嫌だよ」
「タティがね、タティがさ、さっきタティが、タティタティ、大好きだよおー」
オニールが、何の脈絡もなく喚って口をとがらせたかと思うと、無礼を言って僕を怒らせた。
「何だよそれっ！」
「ここ最近のお坊ちゃま君の口癖。朝からまあ、タティがタティがタティが。うぜーうぜー、タティはおまえのママかっ！　でもこれ結構似てるだろ？」
オニールは笑って自分を指差し、カイトに同意を求めた。
「形態模写には自信があるんだぜ。ちなみに得意なのはガーゴイル像」
「う、うーん、何とやら」
「クズめ！」
僕は憤慨して言った。
「おいおい、今なんて言った？　僕ちんは存在がアメージングじゃないか？」
「アメーバの間違いだろう！」
「あっ、今の二人のやり取りちょっと笑っちまいました。ナイス」
どう考えてもおべっか丸出しの調子で、カイトが指を鳴らしてはしゃいだ。

「全然面白くない」
僕はむっとした。
「すみません」
「てかカイト君は、そのヴァレリアがいないと露骨に生き生きしてるのはなんでなんだ。僕はカイト君が笑ったり、冗談言ってるの初めて見たときはひっくり返りそうになったぜ」
「カイトはもともとこういう性格だよ。無駄に明るい。変なポーズ取ったりしてさ。それによく無意味なことしゃべってるし」
「いや、無意味ではないでしょうに……」
「いやいや、性格根暗だろ？　言うこと理屈っぽいし、ふざけてもはずしてること多いし。ヴァレリアん家では、いっつも死んだような顔してやがったし。昔から、あんまり無駄口きいてるとこも見たことなかったよ」
「じゃあ、今は無理して明るくしてるのか？」
僕は心配になって聞いた。
「そういうわけではないですよ」
「根は暗いはずだ。そうだろ？」
「そういうわけでもない。何でしょうねえ、じゃあ閣下に拾って頂いて、性格が変わったのかな」
オニールは頷いた。
「確かに、閣下のおかげってのはあるのかもな。僕の考えでは、あの方はあれで案外、救済機関として機能する人っぽいんだよ。本人は意図してやってるのかどうかは不明だが、政策だとか事業だとか、それ割と社会的弱者への恩恵として作用してるだろ。占星術

師じゃないが、陰謀やアンダーグラウンドを探求する者としては、運命ってやつを否定するわけにはいかない……、本人が望むと望まざるとに係わらず、そういう星まわりの奴ってのはいるからな。今のところ、足枷にしかなんない駄目な弟を背負っちゃってんのもそのひとつなんじゃねー？」

「な、なるほど」

「もっとも本人は嬉々としてお坊ちゃま君を構ってるから、いいんだろうけどさ」

「まあ、確かに」

カイトが何故か思い当たるような顔をした。

オニールは続けた。

「だってもう目が違うじゃん。お坊ちゃま君を見るときの目が。可愛くて仕方ないみたいな、赤ん坊に話しかけるようなさ、もうあちゃーって感じ。

閣下は親がいないってことでご自分が親代わりになろうとされたんだろうけどさ、弟をまるで姫君を育てるような育て方したんだよね、要するに。

だからそのせいでお坊ちゃま君は何かこう、頼りないって言うか、覇気がないって言うか。それに僕が見たところ、カイト君にも精神的に依存している感があるし……」

カイトはそこは否定すべきなのに、何故かどうとも言わずに、オニールから視線をそらして顔を撫でた。

「あまつさえカイト君は依存されるのが嫌いじゃないときてる。おまえヴァレリアには素っ気ないくせに、お坊ちゃま君に頼られて居心地よくなっちゃってんじゃねーぞ。それだとヴァレリアが立つ瀬ないだろう、他の女ならいざ知らず、アレックス様に負けるとか

どんだけ嫌われてるんだよ。それともおまえはゲイなのか？」
「何です！？」
「おまえについては未亡人に身体を売ってるとか、変な噂を聞いたことはあるけどさ。本当は男に身体売ってたんじゃないの？だっておかしいよ、ずっとヴァレリアのこと無視してる。おまえに冷たくされて、ヴァレリアだってあれですごく傷ついてるんだよ。確かにヴァレリアはおまえを苛めたかもしれないし、僕としたらそれはちょっとやりすぎだって、そう思うことはあったよ。でも婚約までしたのに、まだ一度もデートもなければ、好きだとかいう言葉だって、言ってやっていないんだって？」
「……」
「おまえからの婚約指輪、すんごい喜んでるよ。彼女はそんなこと言わないけど、僕には見てたら分かる。なのに、ヴァレリアよりアレックス様にあれこれ世話焼いてちやほやしてんのは、まるでホモみたいだって言ってんの。傍から見ると。自覚ないのか？
あーあ、ホモなんて都市伝説だとばかり思っていたのによ、身近にいるとかあり得ねー。男に興奮されるとか恐すぎるわ。一応言っておくけど、僕のことはターゲットにしないでくれな」
「冗談じゃないですよ……」
「だいたいおまえしっかりしろみたいなことは、アレックス様に言わないわけ？　女みたいに甘えんなって」

なんでこうも会う人間会う人間が、僕を甘えていると評価するんだろうかと、最近の僕はこのことにもイライラしていた。
確かに少し前までの僕は多少そうだったかもしれないが、今はそうじゃないというのに、騎士として、逃げまくっていた剣の稽古すらやっているのに、前までの評価が僕という人間に対する先入観なり、固定観念なりになってしまっているのが実に面白くない。
カイトは言った。

「アレックス様は甘えているわけではないですよ。別に……。これは只の性格の問題でしょう。単純に、俺が俺がってことはされないから、誤解して取られてしまうと言うか。
それに同性のご兄弟ですから、どうしても何事においても閣下と比較されてしまいますからね、それで不必要に頼りないと取られてしまう」
「いいや。だとしても、ここには奇妙な依存関係が成立しているように僕には思えるね。
話を聞く限りでは、閣下はカイト君を信用しているみたいだけど、カイト君だって人間だからな。浅ましい平民ってことを除外して考えたって、いつ何を思いつくかは分からない。こういううんこたれのお坊ちゃまを操ることは、口達者でさかしいおまえには簡単のはず」
「そんなことしたら俺が閣下に消されるっての」
「だからリスクを考える意味でも、そろそろ僕のことも信用して貰わないと。今後は戦略的発展的関係が必要なんだ」

第２２３話　恋しい君のために（１）

あの四月の終わり、ハイパーお姫様育ちのノータリンシエラが、僕たち公衆の面前で、王子殿下より僕が好きだなんて頭のおかしいことをきっぱり言ってしまったことはまだ記憶に新しい。

あのときのシエラは所謂「好きな男以外のことが見えなくなっている」状態だったのだと推察する。

彼女はうぶで純情な箱入りの姫君らしく、生まれてこのかた無菌状態で兄候のもとにいたのだ。それから実家が傾くようなことになり、預けられた先で突然結婚相手だと言われた僕に、のめり込んでしまうというのは語弊があるだろうが、白馬の王子様だとか、運命の人だとか思い込んでしまったとしても無理はない……のかもしれない。しかしできれば少しくらいは場所と相手を考えて欲しかったというのが、正直な僕の感想ではある。シエラの行動は自分勝手な請求であり、身分を弁えない暴挙であった。

これが世間知らずの女の計り知れない恐ろしさで、一国の王子、それも次期国王相手になんて、僕らは一言発言をすることすらも憚られるのが通常なのだ。名門公爵家の当主級でもそうだろう。彼はサンセリウス王になられる方だ。年齢が若いからという気軽な接し方は許されない。僕らは殿下が一日中片足で立っていろと言えば立っているし、靴を舐めろと言ったら舐めるのだ。それを、彼をふるなんて、ましてや僕を愛しているからだなんて馬鹿な理由で――！

当然、僕は愕然とした。そんなことは、絶対あってはならないことだったからだ。

そのおかげでバンナード公子は言うまでもないが、近くに配置されていた召使いの少女たちや、マデリンまでも、そのときはシエラに対して憤りを覚えたかのような表情をしていた。たぶん彼らも分かっていたのだ、殿下がシエラをどう思っているのかを。

だが肝心のシエラはそうした諸々の空気を読めていない。

「嬉しい。私、少しは貴方に怒られてしまうかと思ったわ……」

フレデリック様がシエラのお願いを了解すると、シエラは安心したように両手をあわせた。

そしてあのときフレデリック様は、そんな鈍いシエラに不平を言う代わりに、無言でじっとりした目で僕を見ていた。

私はこいつに負けたのかと、口には出さないとしても、彼はそう言わんばかりだった。当たり前だ。僕は臣下で、彼は次期国王なのだから。それなのにシエラは僕がいいなんて寝言を言うものだから、僕は冷や汗が滝のように背中を流れていた。

バンナード公子たちの敵意の視線が、僕にまで注がれ始めていたし、僕は数分前までこんな厳しい状況を予想すらしていなかった。なんてことだ。かくして一瞬にして世継ぎの王子の恋敵にされてしまった僕は、自分の首と胴体が永遠に泣き別れになるところを想像して、立ち尽くしていた。

僕はシエラのことを何とも思っていませんなんて、そんなことは勿論言えない。殿下が想いを寄せる特別な女を、あたかも価値がないかのように言うなんてことは。

「それでね」

「うん」

シエラが語りかけると、フレデリック王子の眼差しが再びシエラに注がれる。

彼のシエラを見る目は飽くまで優しく、それに何と表現するべきか、ちょうど年上のお姉さんに、理不尽なことを言い含められた弟のような哀れさがあった。

「もうひとつフレデリック様にお願いしたいことがあるの」

「何だろうか」
「フレデリック様にお願いしたいことは、私たちのこと、貴方に認めて頂きたいということなの。味方をするだけではなくて。だって、ギルバート様が二人を反対しているから」

あまつさえこんなときに兄さんの名前まで持ち出して、殿下が僕だけじゃなくて、アディンセル家自体に不快感を持つようなことになってしまったらどうしてくれるんだ、もうやめてくれ、もっと相手を考えてと僕は頭を押さえて喚きそうだったが、殿下の許しがなくては僕には発言の権利さえない。

「ギルバート……」
「そうよ、私、とても困っているの……。ギルバート様はお優しいけれど、私のことはまったく子供扱いなさるので、お話を聞いて貰えないのよ。アレックス様と私が愛しあっていること、世界でいちばん大切なことなのに、ギルバート様はあまり重要なことだと思っていらっしゃらないの。
私のこと、なんて美しいって、言ってくださっていたのに……。だけど未来のお義兄様ですもの、私、ギルバート様とも上手くやっていきたいの。だからあの方には私の気持ちを何とか分かって頂きたくて、何度もお話をしようとしたのよ。だけどはぐらかされてばかり。お洋服のお話は楽しいわ。あの方、女性のお洒落に私よりもっと詳しいのよ。でも、肝心なことは駄目なの。だからフレデリック様、助けてくださる？」
「うん……、いいよ。それではギルバートには私から手紙を書こうか。そう、これからもシエラをアレックスの傍に置いてやれと命令をして、少し彼を脅かしてやろう。それでいいかい」
「嬉しい！」

そしてシエラは無邪気な笑顔でフレデリック様に微笑み、微笑みか

けられたフレデリック様は戸惑って頬を染めた。殿下にとってまったく面白くも何ともないお願いだというのに、シエラに頼られたというその一点によって、どうにも喜びみたいなのが窺えるのが、少年というものの誰しもが内包する単純さと言うか、悲しさと言うより他にない。

結局フレデリック王子は最後まで僕を非難することはなく、声を荒立てることもなく、最後には極めて物分かりのいい態度で「二人を祝福する」とまで言って、シエラのお願いを全面的に認めてしまわれた。

しかしそれでもさすがに完全には動揺を隠しきれない様子で、彼は明らかに無理をしている引き攣った笑顔でそう言って、それからふらっとして椅子に座り込んでしまい、医者が慌てて脈を取るというちょっと緊迫した場面に移行した。

「アディンセル先生」

どっちかと言うと、明るくて、軽い感じすらあったマデリン魔術師が、ソファのところに割り込んで来て、厳しく僕を睨みつけた。

「誠実なイケメンさんかと思ったら、貴方って見かけによらず、すっごくいい度胸してる。貴方やることふざけすぎ。その幼なじみの女の子と結婚するつもりだったなんて言うから、殿下もわたしもころっと騙されちゃったけど、要するにその人のことは遊びって言うか、過去のことで、今の貴方って、シエラ姫とそういう関係っていうことなんだよね！？

てっきりその人のこと好きなのかと思ったのに、わたしもまだまだ自分が甘ちゃんだって痛感しちゃった。しかも相手がシエラ・ウィスラーナって何！？　こういうのって、ちょっと聞いたことないっ！」

「いえっ、それは全然違いますっ、それは」

第２２４話　恋しい君のために（２）

「言い訳は結構ですっ！　それにシエラ姫っ！」

マデリンは、僕の後ろにささっと逃げ込もうとするシエラを呼びとめた。

「貴方は都合のいいときだけフレデリック様に甘えるの、もういい加減にして！
そういう、まるで殿下の好意を利用するみたいな……、貴方っていっつもそう。フレデリック様に何かして貰うことばかり期待して、彼の気持ちも知らないでっ！」

睨まれたシエラは、下を向いてもじもじする。

「でも、困ったことがあったら、何でも相談していいって、フレデリック様がおっしゃったの……」
「それは当り前だよっ。もうっ、そういうこと、なんで分からないの。貴方って、いちいち鈍すぎっ！」

マデリンはシエラを叱っても埒が明かないと判断したのか、イライラしたようにまた僕を見上げた。

「まったく……、本当はいろいろと言いたいことはあるけど、フレデリック様には名誉というものがあるし、わたしも権威ある方の魔術師だから、ここは冷静に、今はひとつだけ忠告しておくね。
殿下は物事に私情を挿まれるような方じゃない。でも先生はもうその方を連れて帰って、二度とここに連れて来ないでください。貴方が彼女を得たいならそれはそれで構わない、でも今後はそういうお

馬鹿さんを連れて来て、フレデリック様に御迷惑をおかけするようなことは、金輪際しないようにして」

「いえ、僕は」

「フレデリック様は、陛下がおさだめあそばされた方を愛されます！そちらのウィスラーナ家の方など、フレデリック様には最初から相応しくなかったわ。だから彼女は不要だから伯爵家のご次男に払い下げられただけ。決して勘違いしないことよ」

マデリンの口調は怒りに満ちて結構きつかったが、それは当然の話だった。

そして僕たちはシエラごとフレデリック王子のお部屋から、翻弄され打ち捨てられる粗大ごみ同然の対応で廊下に摘まみ出されることになった。バンナード公子が僕とシエラを掴み、ソファ席からカイトたちが控えるずっと向こう、部屋の入り口辺りにまで連行して、その中にシエラを押しやり、僕に至っては力ずくでそこに突き飛ばした。

よろけて背中から倒れそうになる僕をカイトが受けとめ、公子はすかさず射るように命令を発する。

「衛兵！　この慮外者どもを今すぐ部屋から叩き出せ！　代筆！　今から僕の言うことを書きとめろ。アディンセル伯に苦情を入れます！」

間を置かずに気鋭の近衛兵たちがなだれ込んで僕らを包囲し、僕は生まれて初めて眼前に矛先を突きつけられた。

「バンナード公子、貴方は少し落ちついて」

「ファン卿、貴方こそ猛省をされるべきでしょう。貴方はあんな人間が本当に役に立つとお思いですか？　だいたいギルバート・アディンセルと言えば、ウィシャート公爵の子飼いだった上に、公に劣

らぬ好色ですよ。王宮の貴公子などと片腹痛い、要は無節操に遊び歩いている評判の色男だ。となればその弟も同様、どうせろくなものではないと、僕が杞憂した通りだった！」

「公子、貴方が彼を気に食わないのはよく分かりました。しかし、とにかく私の話を聞いてください」

かくして僕らは両脇を拘束されて部屋の外に引きずられ、口論するバンナード公子とファン・サウスオール卿の声が徐々に遠ざかり、背中の向こうで重い扉が閉ざされる音がした。

それは希望の扉がまたしても閉ざされたかのようだった。青い芝生の庭が急速に枯れて行く様を、目の当たりにしたかのようだった。物事はもっと慎重にするべきだった。廊下に放り出された僕は途方に暮れ、全身の血の気が引いて、これから先のことを考えると、ちょっと立っていられないくらいだった。殿下は僕を責めなかったが、側近たちの態度を見れば、確実に心証が悪くなったことくらいは想像できる。

これはつまり、こういうことだ。もし仮にタティがオニールを愛してるのとか、そういう馬鹿を言ったとしたら？　僕は間違いなくオニールをぶっ飛ばすだろう！

そして今後二度とオニールの顔を見ないで済むために、彼の人生が落伍するために打てる手は全部打つ。全力でむかつくオニールのことを潰す。そしてタティのことは罰として部屋に閉じ込める。

「ああー…」

僕は放り出された絢爛な廊下をふらふらと少し歩き、それから頭を抱えてしゃがみ込んだ。大失態。これは僕の人生史上最低最悪の大失態だった。シエラにはなんてことをしてくれたんだと、さすがに怒りたい気持ちもしたが、今はとにかく脱力して力が入らない。これでタティは助からない。アディンセル家も傾くだろう。だって殿

下は僕と兄さんにも御立腹だ。

「まずったね。王子はシエラたんにマジ惚れっぽかった」

オニールがしゃがんでいる僕の頭上で言った。

「それに部屋にいる連中を見たかよ。美人に対する嫉妬もだろうけど、シエラたんが部屋に突入した途端、若い侍女の八割方が殺気立って、空気がえらいことになってた。

ここはそのうちお妃様とかが入ったら、もう血を見るかも分からんな。まあその前に僕らが血だらけになるかも分からんが」

「そう思うなら、もうちょっと深刻になったらどうなんです。おまえはときどき言動が軽すぎる。礼儀にも欠いているし」

「カイト君こそその悲観主義を人に押しつけんな。育ちが不幸な奴はこれだから嫌だぜ。閣下の懸念はそこじゃないかな。アレックス様がおまえに影響されすぎるとヤバいって思ったっぽいぞ」

「慎重派と言ってくださいよ」

シエラも僕らと一緒に衛兵によって放り出されたので、彼女も僕らとひとかたまりになって一緒にいたのだが、すぐ横でさっそくハリエットに罵倒されていた。しかしそのときの僕はそれを止めようという気持ちには、なれなかった。

また殿下の部屋から出て来た数人の若い侍女たちが、クスクス笑いながら話しているのが、こんなときに限って聞こえたりする。オニールの指摘通りと言っていいのか、彼女たちは悪意をもって、シエラがそこにいるのを、分かっていて聞こえるように言っているのだ。

第２２５話　恋しい君のために（３）

「ねえ、シエラ・ウィスラーナを連れて来たのは誰なの。あの落ちぶれた女のこと」

「彼女、最低ね……、何様のつもりなの？　あの人を助けないで、ですって。まるでご自分が天下のヒロイン気取りよ。彼女が言っていたあの人って、誰の事だか知りませんけど、その子が可哀想」

「だいたいあの女はフレデリック様の何なの？　それで今度はフレデリック様とアディンセル様の、板挟みってわけ？　何故いつも彼女なのよ。落ちぶれた侯爵の妹に、いったい何の価値があるって言うの？」

「彼女に価値なんかないわ。馬鹿言わないでよシャーリー。今では直轄領出身のわたしたちのほうが、プリンセスとして格上だって言うのに」

「彼女がフレデリック様の愛妾にならないのは残念ね。ここにいらしたら、わたしたちでたっぷりいびって、死にたくなるくらいに苛めて差し上げるのに。彼女に仕える従順な召使いのふりをして。シエラ・ウィスラーナのことは、前から鼻についていたのよ」

「同感。大嫌いだわ、あの女。田舎者のくせに、わたしたちのフレデリック様に特別扱いされて。それも王子様にあの態度って、いったい何様！？」

「彼女はすごく自信家で、ご自分が聖女様だとでも思っていらっしゃるのよ」

「うふふ、貴方たちって人が悪いわね。聞こえているんじゃないかしら」

「あら、貴方もよ」

彼女たちが行ってしまった後、シエラは唇を噛んでうつむいた。

ハリエットが腕組みをして、シエラにたたみかける。

「やっぱりね。やっぱり貴方って、みんなの嫌われ者。もっとも薔薇君様に対してあんな図々しい態度では、反感買いそうだって、予想はついていたけど。
タティのこと、いったいどうしてくれるのよ！
タティがもしこのまま死ぬようなことにでもなってご覧なさい、わたし、貴方のこと、絶対一生許さないからっ！」

カイトが気を遣って、二人を執り成した。

「ま、まあまあね。何やらここは、えらい殺伐として……、ま、年の近い女の方が大勢集まれば、多少のグループができてっていうのは普通にあること……、シエラ様も、通りがかりの厭味なんか気にすることはないですよ。誰にだって気が合わない人間ってのは、いるものですし……。
俺なんてもう、しょっちゅう、ほうぼうから叩かれているんですよ。平民がアレックス様の側に仕えるのは生意気だ、やれ発言が、やれ態度がって」
「ありがとうカイトさん。でもいいの。私は平気よ。私は他の人たちと違っているから、誰にも理解なんてされないの。だって、こんなこと、いつものことだもの……」

と、そのとき再び殿下のお部屋の方向から、バンナード公子が飛び出して来た。彼は周辺の廊下を見まわして、やがて僕らをみつけると、マントを揺らして大股でこちらに近づいて来てこう言った。

「今から同行して、その幼なじみの娘を回復させます」
「えっ、しかし……」

シエラが王子殿下に嘆願し、それが通ったというのに、部下である

公子がタティの肺病を治すということは、フレデリック王子の意向に反することなのではないか――、という僕の言葉が発せられる前に、バンナード公子はシエラを睨んだ。

「よろしいですねシエラ姫。断っておきますがこれは僕の独断によるものです。

ファン卿が言うには、この話は何と取るにたらない、どうやらアディンセル殿を巡る女の戦いだそうなのですが、貴方のやり方は少々姑息です。恋敵の娘を消極的に処刑しろと、そういうずるいお願いを王子になさったわけでしたからね。僭越にも、苦しい選択をフレデリック様に迫ったのです。貴方はあれ以来ずっとフレデリック様を恨んでいらっしゃるようですが、逆恨みにも、ほどがあるでしょう。

だから殿下とは別の個人的考えとして、僕は悪いがこの際貴方でないほうを支持しようと思いまして。

僕の家系はもともと神に仕える神官家ですから、どうしても、立場が弱いほうに味方をしたくなる性分なんですよ」

「フレデリック様が、そうおっしゃったの？」

「いいえ、これは僕の意思です」

慌ててフレデリック様のお部屋にとって返そうとするシエラの腕を、バンナード公子が掴んだ。

「お待ちなさい。越権行為です」

「離してください。何故邪魔をするの。貴方は本当に嫌な性格だわ。バンナード様が私の邪魔をするのをやめさせてって、フレデリック様にもう一度お願いしなくては」

「なりません。これは警告ですシエラ姫。おとなしく引き下がらなければ、僕はフレデリック王子殿下の御名の許にシエラ・ウィスラーナの生存権を今この場をもって剥奪する。

フレデリック様が貴方に甘いからと言って、誰もがそれと同じ意見だとは思わないことですよ。たかだか侯爵の妹風情が、調子に乗るのも大概になさい」

「本当は、フレデリック様が貴方に命令したのですね？　そうなんでしょう」

「だったらどうだと言うのです」

「なんて酷い嘘つきなの……。あの方は女との約束なんて、破っても構わないと思っている不届き者よ。私がアレックス様を好きだと言ったから、タティさんを元気にして、私に仕返ししようとなさっているんだわ。だからフレデリック様は大嫌い。いつも、いつも私の気持ちなんてお構いなし」

「黙りなさい。何が仕返しですか。フレデリック様が貴方のためにどれほど心を砕いてくださっているか、貴方は考えもしないのですか。

本当ならば貴方など、ロベルト・ウィスラーナが死んだ時点で待遇は地に落ちていて当然だったんですよ。二年前のあの時点で、国王陛下はウィスラーナ家のことなど既に眼中になかったのです。貴方が今もそうしていられるのは、ひとえにフレデリック様が貴方の行く末を案じて、貴方を庇ってくださったからですよ。

それを、ここまでして頂いてまだそのような善がりを言うとは、まったく世間知らずはこれだから……、貴方のような愚かな女に仕返しなど、フレデリック様がそんなせせこましい考え方をされる方だと思いますか！」

結局フレデリック様はバンナード公子が独断でやったことにして、タティを助けてくれようとしたわけなのだった。

つまり殿下としては、バンナード公子を使うことでシエラの我侭と僕の嘆願の両方を立てる、そういうふうにしてくれようとしたのだと思う。が、バンナード公子の動き方があからさまだったと言うか、どうも彼にはシエラに気を遣って行動するというつもりがなかった

ためにいきなりばれてしまった。
この件は全体として見ると、年下のハリエットの挑発に、負けてなるものかとなったシエラが、でも自分では口喧嘩に勝てないから、殿下に自分の味方をしてと、突発的にそういうお願いをしたという、そういうことだったのだろう。
それによるいちばんの被害者は、あわや生命を落としかけたタティだったが、どうやら最悪の事態だけはこれで回避できそうだと、シエラを叱るバンナード公子を見ながら僕は思った。

第２２６話　恋しい君のために（４）

それからバンナード公子は本当にサンメープル城に同行し、僕らは帰還のその足でタティのいる城内離宮まで彼を案内した。
バンナード公子は上背があり、血統のよさを窺わせる上品さと洗練された礼儀正しさを備えた美青年なのだが、勉強ができてなおかつ聖騎士の称号なんていうものを与えられてしまうほどの武芸の才があり、容姿がよく身分もある、おおよそ欠点なしの人間にはつきもののプライドの高さと、近寄り難さみたいなものがあった。
マデリンが性格が穏やかだみたいなことを言っていたが、とてもそうとは思えない。全然友好的じゃない。お高くとまっている雰囲気を本人は分かっているのかどうか知らないが、オーウェル公子みたいに攻撃して来ないだけで、無愛想と排他的、拒絶的な感じは共通する気がした。

「フレデリック殿下は僕に御怒りでしたか……？」

それでもこのことだけは把握をしておこうと、僕がたずねると、離宮に続く小道を歩くバンナード公子は碧灰色の眼差しを僕に向け、冷ややかに応じた。
立ち振る舞いが妙に格好いいせいか、僕のやや後方を歩くハリエットが魔法の杖を握り締め、口を開けて公子を見ている。その後ろを歩くカイトやオニールと比較すると、ひと山幾らの彼らがあまりに薄汚れていて可哀想なくらいにはイケメンだが、格好よさで言うと、たぶん僕の次くらいだろう。

「殿下は御聡明な御方です。そして神族直系であらせられる尊き御方。貴方やシエラ姫のような、有象無象のくだらない人種に惑わされるような、低次元の場所に生きる方ではありません。

シエラ姫はどうやら貴方に好意を持っている様子でしたが、僕が申し上げておきたいのはあの娘が二度とフレデリック様の前に姿を現さないように、適切に管理して頂きたいということだけです」

「いえっ、それは大きな誤解なんです！　このことは、是非、バンナード様のほうから殿下にどうか言上頂きたいのが、僕はシエラ姫とはまったくその、勘繰られるような関係ではないんです。僕が自分で申し開きができればいいのですがフレデリック様は」

「いずれにしても、お好きになさればいいのです」

バンナード公子は僕を遮って言った。

「えっ、何を……」

「率直に言って貴方がシエラ姫と貴方の幼なじみですか、そのどちらを好いていようと、どちらを選ぼうと、知ったことではありません。それはフレデリック様も同じ御気持ちでしょう。ですから、何も言い訳の必要などありません。

それどころか、貴方はどちらかを選んで、今年にでも結婚をなさればいい。僕は是非ともそれをお勧めしますよ。そうなさったほうが、貴方自身も責任を得て、少しは落ちつかれるのではないかと思いますし――」

公子は僕をやや嘲笑うかのように見た。

「何より貴方の素行不良を、フレデリック様に伝染させて頂きたくはないのです。僕はたった今、申し上げましたね。フレデリック様は、そんな低次元の場所に生きる方ではないと。

だいたい我らが王子殿下に、女のことで煩っている時間が、あるとでもお思いですか？　国王陛下は頑健な御方ですが、既に齢七十を越えていらっしゃる。大国の王子には、これからまだまだ学ばねばならないこと、やらねばならないことが山のようにあるのです。殿

下もそれはよく御理解なさっている。御自分の立ち位置や、与えられた使命というものをね。よって女の問題は、当面は二の次です。勿論、世継ぎを作ることはできるだけ早く取りかかって頂く必要がありますが。しかし恋愛ごっこなどをして、いちいち女の機嫌を窺っている暇はないので、女の相手などはいずれ義務的なもので結構。とにかく女というものは、いちいちフレデリック様の御気持ちを大事なことからそらせ、あつかましくも普通の男に求めるような愛と献身を要求し、さもなければ惑わせる苛立たしい存在でしかありませんから。

何処の誰が妃となるにせよ、フレデリック様の夫婦関係は飽くまで形だけのもので構わないのです。そうは思いませんか」

「え、ええ……」

「お分かりですかアディンセル殿」

「随分……、殿下を御尊敬申し上げていらっしゃるんですね。僕も同じ気持ちではありますが……」

「当然です。あの方は神に連なりし御方ですよ」

バンナード公子は不意に声に情熱を込めた。

「七百年という歳月の間に、ローズウッド王家の血は確かに薄まり、太陽を正視できるというような特質は、近年では顕在し得なかったことなのです。それは、陛下におかれてさえもそうなのです。しかしフレデリック様、あの美しい方には、その特異な能力が備わっている！

これが何を示しているかお分かりですか？　つまりあの方は明確なる先祖返りなのです」

「先祖返り……」

「ええ。だから見てお分かりのようにその御姿は神聖で神々しく、能力も最初から桁が違う。あの方は細身ですが、僕は既に腕力で敵いません。神の血が濃いのですよ。フレデリック様とは、近年の王

族や僕のような卑小な傍系とは遥かに異なる、太陽神及び聖イシュタルにとても近い存在なのです。御本人は謙遜なさいますが、僕はそのように信じております。
だからこそ、僕はあの美しい方の導かれるまま、往かれるままに、何処までもついてゆくのです！」

そしてバンナード公子は鼻息荒く、殿下を激しく崇拝する気持ちと、自分こそが殿下の第一の従者であり、唯一の右腕であることなどを……、要するに自分こそが殿下にもっとも必要な人間なのだということを、念入りに熱狂的に自信満々に語った。
またタティを助けるなんて嫌だと言っていたシエラは、僕も公子もそれに応じないと分かると、怒ってさっさと自分の部屋に戻ってしまっていたが、立ち去り際に、まるで僕がシエラを苛めたみたいな非難の目を無言でじっと向けられるというのは、何かがおかしいと思うのは、また後で考えてみることにする。
やがていよいよタティの暮らす離宮に着くと、兄さんの特命を受けた連中が相変わらず離宮を囲んでタティとの面会を阻んでいたが、僕はそのときばかりはいつもの小隊長を離宮の柵のところまで呼びつけて、王子命令により道を開けるよう話して聞かせた。
バンナード公子はトワイニング公爵家の名前と紋章を提示し、僕は彼が王子殿下が派遣した王子の側近であることを重ねて保証した。
すると女だてらに鎧を着込んで剣を携帯し、小隊を率いていたバインド家の二十代半ばの令嬢は、この話に戸惑いを見せたが、僕に言った。

「お話は分かりました。しかし、それでもわたくしどもはここを退くわけにはいかないのです。この時期に、こんな生ぬるい任務さえまともに達成できないとあれば、わたくしは二度と騎士として登用されることはないでしょう。差し出がましいながら、王子殿下の書状なりを提示して頂かなければ……。

トワイニング公爵家はアディンセル伯爵家の上司ではありません。両家は階級的優劣があるとしても主従関係ではない。アレックス様のおっしゃる通り、こちらの方がその公子様であるということが事実であるにせよ、彼が王子殿下の命令で動いていることについて確認を取る必要があります。

ここでの権限者はアディンセル伯爵ギルバート閣下であり、それを覆せる命令権を貴方も、こちらの公子様も有していません。よって、ここをお通しするわけには参りません」

バンナード公子はそれに同意した。

「その通りです。僕にはこちらの所領及び城内において何の権限もない。しかし、王子命令でもなければ、見たこともない下級貴族の娘を救済する理由は僕にはありません」

「それはわたくしどもには係わりのない事情です」

バインド家の令嬢は毅然として、柵の鉄扉越しにバンナード公子を見上げた。

「騎士とは常に主の命令に従い、任務遂行あるのみです。些事かどうかは問題ではありません。それはわたくしの判断するところではないですから。

どうしても当該者に面会をご要請されるならば、どうぞ規定の段取りを。相応の証明書簡か、伯爵閣下の許可をお取りつけください」

「そんな面倒なことをどうしていつもいつもおまえに命令されないといけないんだ。退いたらいいだろう。今日は力づくでも退いて貰うよ。タティに会うのを邪魔するって言うなら」

僕はこれまでにも何度もこの離宮には来ていたのだが、その度にいつもタティとの面会を率先して妨害するこの騎士にはちょっと頭に

来ていたこともあって、強く言った。
小隊長は応えた。

「その場合はわたくしどもも実力行使せざるを得ません。わたくしは常時四十名の隊員を率いております。伯爵閣下より、この離宮敷地内への侵入者対処として、アレックス様以外の人間の殺害許可が出ております。
アレックス様がもし貴方の魔術師に魔法行使を命じられれば、我々は全滅をしかねませんが、下級貴族の娘一人のために、同胞であり、代々身を挺してアディンセル伯爵家に仕えている善良にして将来有望な赤楓騎士団の若い騎士たちを虐殺した十字架が、あの離宮の中にいる娘本人にも一生涯課せられることになることはお忘れなく」
「可愛い顔して相変わらずむかつく言い方するな。オードはどういう教育しているんだ」
「こういう話になっていると知っていれば、書状のひとつもフレデリック様は御用意くださったことでしょう。もっとも僕ならわざわざ伯爵に逆らってまでと、強く進言したところですが。
いずれにしても、僕としてはこんなつまらない話に何時間もかけるつもりはありません」

バンナード公子が僕を遮って言った。

第227話　恋しい君のために（5）

「バインド令嬢でしたか。貴方はとても優秀な門番ですが、杓子定規で融通がきかない。そんなやり方ではいつまでも安全な城内の門番扱いですよ。こんな任務も遂行できないほどに、軍人としての才能がないのですから」

そう言うと、バンナード公子は呪文を唱え、眠りの魔法を目の前にいる小生意気な小隊長と、彼女の率いる一個小隊にかけたのだった。それによって、離宮敷地内に姿が見える騎士たちはばたばたと眠りに落ち、僕とタティの間をいつも妨害していた目障りな連中はあっさり片づいた。

目の前にいる小隊長も眩暈を起こしたようにしゃがみ込んだかと思うと、そのまま倒れ込んで地面の上で寝息を立て始めた。

柵の扉を開けて、僕らは離宮の敷地内に入った。

「エロい尻してんな……」

通りがかる際、オニールが、それを見下ろしてぼそっと言った。それで僕とカイトがすかさずそれに注目する。小隊長は胸当てこそ金属製だったが、腰の部分は鎧で覆っておらず、くびれた腰から脚にかけての曲線ラインがなかなかよかった。

だからそれには僕も同意だったが、でもこんなときにまでそんなところを見ているなんてことは、僕は口では言わない。紳士だから。

「こいつも女だてらのなんちゃって騎士だよ。別に女は引っ込んでろとは思わないけど、ヴァレリアといい、なんでいいとこの娘が騎士になりたがるのか理解できないな。食うにも困らないし家を背負う義務があるわけじゃないし、何が目的？　っていっつも思う。流

行のファッションなのかね？」

オニールの言葉に、カイトが首を振った。

「女がこうして一個小隊を任されているわけですから、なんちゃってではないと思いますけどもね……。危険任務はオード卿がさせないんでしょう」

「たぶん、ジェシカ様みたいになりたいのよ」

ハリエットが会話に割り込んだ。

「ジェシカ・フィーロービッシャーは赤楓騎士団の女性たちにとって憧れなんですって。身分があると言っても、女がこの分野で中枢にまで食い込めるなんてそうないことだから。

それに女性騎士が軍隊にいて、部下を率いてるって、確かに絵になるし、やっぱり断然格好いいものね。でもそれは男性並みにやってるってことだから、失う物も多いと思うけど……。

わたしあの方って、もっと女っぽい格好したらいいのにって思うわ。せっかくお洒落が許されるくらいの地位にいるのに、男装みたいな格好がほとんどでしょう。ルイーズ様は、たまにやりすぎだと思うけど」

「ジェシカ女史は、たぶんチャラチャラ出来ない人だろ。だってうちのジャスティン様と対等にしゃべれる恐い人だぜ。パーティードレス姿なら見たことあるけど。

余計なお世話だけど嫁には行かないのかね。界隈古参の金持ち子爵令嬢って特典があるから、三十過ぎても結構縁談があるっていうのは全然納得できるけどよ。閣下が好きだからその縁談ぶった切りしてるみたいな話を聞いたことあるけど、そうだとしたってどうせ相手にされてないんだろ。てか閣下の好みに染まろうという努力もしてないし、いい加減にしておいたらいいと思うんだけどね」

「兄さんの好みは清純、純情、従順だぞ。お淑やかで、自分の言うこと聞く女が好きなんだよ。基本的に恋人に有能さは求めてないと思う」

「ああ、何かそんな感じよね」

ハリエットが分かったような顔で頷いた。

「僕が思うに、閣下は自分が美形っていう要素を持ってるから、寧ろ筋肉むきむきのごっつい女と結婚したほうが、子孫に期待できると思うけどな。主に男子限定だけど。

顔以外いいとこがないような女とくっつくのは、体格とか才能とかが次世代に伝わらないで終わる可能性があるから、もったいないぜ。アディンセル家の繁栄のために、閣下は女を容姿だけで選んじゃイカンだろ。僕なら配合相手は母の父を重視して」

「おたくはくだらないこと言ってるんじゃないですよ」

「だからもしジェシカがそうしようと思ったら、とても騎士業なんてやっていられないけど、でもジェシカは立場上、そんなお姫様チックな女にはなれないんだよ。一応、子爵代理で家名を背負っているわけだから」

僕が言うと、カイトが同意した。

「そら確かに、誰が女に生命を預けるかって話ですからね。ましてや男の保護を要するような女に、自分の生命やら、家族の運命やら預けようとは思わないですからなあ。

下っ端で、女の子の習い事の延長で騎士やってるようなのはともかく、部下の生命を預かる下士官級ともなれば、やはりジェシカ様くらい自分に厳しくしていないと」

「でも本当はジェシカは可愛いとこあるんだよ。なんか、前はそうだった。僕には本当の性格を見せてたと思ったけど……」

「いんや、あれは生まれついての鉄仮面ゴリラ女だろ。僕の態度がなってないって、前も廊下で怒られたんだよね。それで背筋を伸ばせ、髪は結ぶか切れって、まるでうちの親父みたいな言い草。閣下だって、そんな恐い女はごめんなんだよ。僕が閣下でも、ジェシカ女史よりは、断然ルイーズたんだな」

オニールが、俄然テンションを上げた。

「ルイーズたんはいいな。優しいし明るいし、お高くとまってないし。クンクンしたらイイ匂いするんだよ」

「クンクン？」

僕はイラッとした。

「こないだも僕のこと、あらオニール様、だってさ。へへっ。なにげにすげー美女なんだよね。今でも十分可愛いけど、できればもう十年前にお目にかかりたかったぜ。僕と同世代だったらなあ。少女時代なんか、その可愛さたるや神がかり的だったんじゃないかな。

まあ、どっちにしても閣下の女って話だから、びびってなかなか誘えないわけだけど」

するとハリエットが頬をふくらませた。

「オニールさん、貴方って最低。女を年齢で判断してる上に、勝手に愛人認定して。ルイーズ様はそんな女じゃないわよ。失礼な人！女性の魔術師って、主人が異性だと、絶対そういう関係だという目で見られるのはすごく心外だわ。すごく失礼。絶対そうなるわけじゃないのに」

「いや、全部はどうか知らないが、ルイーズたんに限っては閣下の

女だよ。あの二人の親しげな様子からして、どう見たって絶対肉体関係あるだろう。仮に本人たちが否定していようが、ほら、閣下が椅子に座ってるところに平気で寄りかかるとかさ、関係持ってない女のできることじゃないぜ。

その証拠に父上たちもルイーズたんのこと、微妙に特別扱いじゃないけど、まるで身分がある人みたいになんか敬意を払ってるところあるし。単なる美人に対する特別扱いとは違う、特別扱いって言うのかな。あれは権力者の女、閣下の女だからこそそうするんだよ。それが大人の世界のルール」

「そんなことないわよ……、彼女はそんな最低で破廉恥な人じゃないわ……」

「お嬢ちゃんにはまだ、大人の世界ってものが何にも分かっていないようだな。だが残念ながら、そうなんだ。

それはそうと、お嬢ちゃんの場合はどうなんだ？　アレックス様とは」

「申し訳ないですが」

そこでバンナード公子が、イライラした様子で話を遮った。

「くだらない無駄話は後にして頂けますか。僕は早急に用事を片づけて、フレデリック様の御許に戻らなければなりませんので。貴方がたのように暇ではないんですよ」

第２２８話　恋しい君のために（６）

敷地内で一個小隊が高いびきを掻いているのをすり抜け、バンナード公子を加えた僕ら五人は、タティのいる離宮内に足を踏み入れた。ここはかつて母上が死ぬまで暮らした隔離施設……、内部は玄関の扉口を入った途端に、ごく小さめの住宅のような内装だった。玄関が吹き抜けていて、一階にも二階にも幾つかの部屋があるようだ。廊下には花が飾られ、常時二名の侍女が常駐して病床のタティの世話をしていた。タティと同室で暮らすわけではないだろうが、看病を命令された以上、彼女たちとしても感染は覚悟の上だったろう。医者も何日かに一度ここへ往診に来ていたようだ。

かつては伯爵夫人が暮らした場所だから、内装も調度品も大抵の物は上等で、日当たりも風通しもいい建物ではあったが、僕の気持ちは何となく塞いだ。

母上はここから生きて出られることはなかったのだ。結局母上は僕の存在を知らず、僕も母上を知らないのだが、それでも自分の母親だと思ってお慕いしていた方が、何年もお住まいになっていた場所だったのだ。実際は母上は僕の祖母だったというだけで、僕の家族には違いない。

タティの部屋は小さな離宮内の木製階段を上がった二階にあった。当番の侍女が何事かと慌てていたが、僕は彼女を掴まえて、感傷に浸る間もなくさっそくタティの部屋に案内させた。

タティの部屋の扉の前で、バンナード公子は僕らを振り返り、魔法の内容は公開できないと言った。僕は納得し、公子は僕らが立ち会うのを重ねて拒否した上で、部屋の中に入ると扉を閉ざした。

僕は扉の前でひたすらその時を待った。

フレデリック王子が治せるとおっしゃった以上、もうだいたいすべてが上手くいくことは分かっていたのだが、それでも祈るような気持ちで……。

半刻ほどしてドアが開き、バンナード公子がよろめくように部屋から出てきた。彼は部屋の前で待ち構えていた僕を見ると、精根尽き果てたではないが、非常に疲労した顔をしていたが、それでも愛想もなくタティは治ったと言った。

「本当に!?」

公子は頷いた。

「タティが、元気に?」

「そうです」

「あの、ありがとうございます。貴方にはなんてお礼を申し上げたらいいのか……」

「僕がアディンセル殿に申し上げられることは、此度の事、フレデリック王子殿下に対する大恩を忘れず、なおいっそうの忠義心をもって殿下に御奉仕するようにということです」

僕が感謝の意を伝えようとする声に、まさに被せる形で、バンナード公子は冷やかに言った。彼は僕の礼を受け取るつもりなどないというように、無愛想な表情のままだった。

公子は続けた。

「それがたとえどのような代償を支払うことであろうと、貴方自身の生命を削ることであろうと。貴方はフレデリック様の御為にすべてを差し出すことを心しなさい。

我らがフレデリック様は貴方にそれだけを期待しておいででしょう……、勉強の助けなどではなくね。
輝けるフレデリック王子殿下の尊き御生命の前には、貴方程度の人間は、そんな価値しかないということです。
貴方の女をお救いくださった我らが慈悲深きフレデリック様のために、貴方ごときが、身を惜しむようなことをしては許されないのです」
「何か、比喩表現ではなさそうですが……」
カイトが呟いた。
するとバンナード公子が、神経に障ったという顔でカイトを睨みつけた。たかが従者が公爵家の人間に口を聞くとはどういうつもりだというわけだった。
「何ですか貴方は。無礼な男ですね。見たところ、この僕に意見を言えるだけの身分的背景を持つ者ではないように見受けられますが。階級制度を分からないとは……。
アディンセル殿自身といい、先程の小隊長といい、アディンセル伯爵家は全般的に教育不行き届きであるとフレデリック様に報告します」
カイトがひれ伏し、公子はマントを翻してそのまま立ち去った。
「何だあいつ。嫌な野郎だな」
その背中に向かって、オニールが悪態をつく。
「本当にそうね。わたしたちを馬鹿にしているんだわ。タティを助けてくれたから、あんまり言いたくないけど、最初からアレックス様を目の仇にして嫌な感じ。

カイトさんも気にすることないわよ。ああいう上流育ちは、嫌な奴なのが相場なのよ。だって育ちがいいって、裏を返せば皆に可愛がられてばかりの苦労知らずってことでもあるんだから。ほらよく上流の姫君ほど純粋で清らかだと思われるものだけど、それって大間違いだからね。実際は清貧育ちの町娘のほうが、よっぽど心が清らかで愛情深かったりするのよ。でもああいう人種は、所詮薄っぺら。本当の意味での人の痛みなんて分からないの。

女のシエラですらああなんだから、男なんて、よっぽど周りに持ち上げられて、傲慢になってるに決まってるんだから。どうせ親の権力を自分の力だと勘違いしているバカよ」

「お嬢ちゃんも、大概ややこしい性格だな。まあ成育環境の複雑さからして、その性格は理解はできるが、可愛げはないぞ。ティーンの女の子が」

「馬鹿ね、魔術師に可愛げは要らないわよ。調べたわけ？」

「それが僕ちんのお仕事よ。でも上流育ちって言えばそれ、お坊ちゃま君にも言えることだよな」

「だったら何！？」

「いや、事実確認をだね……」

「あのねえ、前から言おう言おうとは思っていたんだけど、アレックス様はわたしと貴方の主人でしょ！？　貴方は何にしても彼の味方につかなくてどうするのよ！

貴方ってすぐアレックス様をからかったり、批判的なことばっかり言ってる気がするけど、それがもしわたしの気のせいじゃないなら、あまりにも常識がなってなさすぎ！

口を開けばお坊ちゃま君お坊ちゃま君って、馬鹿じゃないの！？

そもそもアレックス様は目下の人間にああいう対応は取らないわ。弱者虐めもしないし、威張り散らさない。びっくりするくらいまともよ。貴族として、そこは立派なところ」

「そうかもしれないけどさ」

「そう思うなら、貴方はそろそろ輪を乱すような発言は慎んで。ア

レックス様を世間知らずのお坊ちゃまだなんて、貴方は絶対言えないわよ！　貴方どう見ても同類同族のお坊ちゃまなんだから！」

「うそーん、マジでー！？」

「自分で気づきなさいよ！」

僕はこの先のことを思い、フレデリック様への申し開きはどうすればいいか、それにどうしてもバンナード公子とは上手くやれない気がして、気持ちが落ち込みかけていた。

でもタティが治ったというのだから、今は気を取り直すことにした。

第２２９話　恋しい君のために（７）

そして僕とハリエットが、ほとんど同時にタティの部屋に飛び込もうとした。しかし女の寝室であることと、僕にはタティをこんな目にあわせてしまったという多少の気おくれがある分、ハリエットのほうが素早かった。

深呼吸をし、やや遅れて寝室に入ると、タティのベッドに寄り添って、ハリエットがもうタティの手を取っていた。

柔らかい午後の光の中、タティは上半身を起こし、背中のクッションに身体を預けていた。

黒い巻き毛がほつれている。少し痩せていたが、顔色はよかった。

「ハリエット様……、わたし、本当に病気が治ったの？」

タティの懐かしい声がしていた。

たった今までオニールを叱りつけていたハリエットが、年齢相応の少女の顔をしてはしゃいでいる。

「ええ、そうよ。そうよタティ！

バンナード公子、とにかくさっきの方が治してくれたの。あの方、トワイニング家っていう偉い家系の方でね、性格はちょっと嫌な感じだけど、神聖魔法が優れた家系なんですって、だから、すごい魔法を使って貴方を特別によ。

それって言うのも、アレックス様がね、なんと薔薇君様にタティを助けて欲しいって、王城にまでお願いに上がったからよ。ええ、そうよタティ、貴方のために！」

「さっきの方……、アレックス様に少し感じが似ていたので、最初はわたし、アレックス様かと思ってしまったの。

アレックス様がここにいらっしゃるなんて、夢かと思って……。で

もアレックス様ってお呼びしたら、人違いですよって言われて……」
「えっ、似ている？　そうね……、そう言われてみれば、何となくはそうかも。でもわたしは断然、バンナード公子のほうがハンサムだと思ったけど！」
「ハリエット様ったら」
「あら、本当のことだわ。あの方すごく格好いいでしょう。それに、アレックス様はタティの恋人だもの。だから余計にそう感じるのよ。つまりわたしって、売約済みの男性には一切興味を感じないタイプだから」
「ハリエット様は、実際に会っても、アレックス様を素敵だと思わなかったのですか？」
タティの質問に、ハリエットは得意顔で、饒舌にその理由を語った。
「勿論よ。勿論。どうして。それは、伯爵家の若い貴公子よ、アレックス様にだって、会うまでは多少期待していた部分もあったけど、でも実際会ったら全然。
だって彼ってなんて言うか優柔不断だし。基本が気弱なのよ、だから、わたしが引っ張ってあげなきゃって思わされるって言うのかしら。
それに聞いてタティ、しかも彼ってお役目の初日にキャンディを渡そうとするし。キャンディよ、信じられる？　それってどういうこと？　キャンディってっ！？
彼ってどうやらわたしを子供だと思ったみたいなの。だからそれでわたしのことを手懐けようと思ったみたいよ。失礼しちゃう。だって、十六歳のきちんとしたレディに向かってよ？　信じられないことだわ。だからそういう失礼な男は、悪いけどわたしの趣味じゃあないわ。本当よ。誓って、彼はわたしの趣味じゃない。
とにかくタティ、貴方にはたくさんお話したいことがあるのよ。すごくいろんなこと。でもその前に貴方は服を着替えなくちゃ。熱の

せいで、寝汗を掻いているわ。それに、お腹いっぱい美味しい物を食べるの」

「美味しい物？」

「そうよ。タティの好きなケーキや、プディングや、それにチョコレートクリームをたくさん！」

「ハリエット様も一緒に」

「わあっ、それって最高にいい考え！」

そしてタティとハリエットは微笑みあった。

彼女たちは文通をする間柄の再従姉妹同士なのだが、実際随分仲がいいようだった。

ハリエットがこきおろすとまではいかないにしても、僕に対する評価がかなり散々なものであることを知ったのは、ちょっとショックではあったが、女の子同士の仲のいい様子は、純粋に見ていて好ましい。

タティはハリエットと久しぶりのおしゃべりを楽しみながら、ときどきぎこちなく僕のほうを見ていた。でも僕はタティに何と言ってあげていいか分からず、結局部屋の中で突っ立っていた。よかったとか、元気になったんだとか、ありふれた言葉は思い浮かんだがそれだってどれもしらじらしい。だって僕がタティを病気にしたようなものだったからだ。

僕は駄目な男だ。タティが元気になってくれて嬉しいのに、こういうとき、タティに喜んで貰えるような感動的な言葉を思いつかなかった。タティが生涯二度と忘れないような、男らしい、恋人らしい、僕の愛を象徴するような、そういう素敵な言葉を。

でもタティが元気になって笑ってる……。

瓶底みたいなレンズの嵌まった眼鏡をしているタティがそこにいることを、ほとんどの男は気がつかずに通りすぎるけど、僕は彼女がどんなに可愛いかよく知っている幸運な男の一人だ。

つらい思いをさせてごめん、もう二度と病気にさせない。

もう泣かさない。
今度こそちゃんと君の手を取りたい。

「お嬢ちゃん、そろそろ空気読めって」

ずっと立ち尽くす僕に代わって、意外にもオニールが言った。
言われたハリエットははっと気がつき、タティの手を離すと、慌ててベッドサイドから僕らがいるドアのほうに、小走りに戻って来る。

「ごめんなさい。まずは、そうよね」

カイトが何も言わずに僕の肩を叩いて部屋を出て行き、ハリエットとオニールが連れ立ってそれに続いた。
背中でドアが閉まったのを確認してから、僕はタティを見た。
タティも僕を見ている。

「アレックス様……」
「タティ……、最近どう？　僕はまあまあ。あの……」

上手いことを言ってコミュニケーションを図ろうと思ったものの、僕をみつめるタティを前にして言葉は続かなかった。
気持ちは昂って、何かすごくいいことを言いたいのに、どうしてもそれが纏まらない。僕はずっと内面の世界に親しんで生きていた割には、やっぱり肝心なときには自分の感情を把握することができなかった。衝動に突き動かされるままに、それでも拒絶される気配がないことをちゃんと確認してから、僕はタティのベッドのところまで近づいて、恐る恐るタティの身体を抱きしめた。
タティの感触と匂いが懐かしい……。

「会いたかった……」

そのときは結局気の利いた言葉なんて何ひとつ言えず、僕はただずっとそうしていた。

こういうのは、まるで三日前の兄さんとアレクシスみたいだと思ったが、僕が兄さんより男らしかったところは、泣きはしなかったというところだ。

その後常駐医を引っ張って来て、診察を受けさせると、彼もまたタティは健康であると当惑した顔をした。

肺病は罹ったら最後、死を待つだけの不治の病だというのが定説であるため、治るというのが考えられないことであるから、これは最初から診断ミスだったのではないかと、最後には数名の関連医師たちが、始末書を誰が書くかということで揉めるようなことになっていた。

バンナード公子がいつの間にか帰ってしまっていることに気づいたのは夕方遅くだったが、何せあのときの僕はタティのことで忙しかったのだ。

第２３０話　恋しい君のために（８）

それから日が暮れて、兄さんが居城に戻って来た。
勿論僕は喜び勇んで伯爵執務室に飛び込み、タティが元気になったこの素晴らしい朗報を報告する。が、兄さんはタティなんて、そんなことはどうでもいいとばかりに僕を遮って、勝手に殿下に謁見した僕のスタンドプレイにまず釘を刺した。どうやら何処からかその情報が、もう兄さんの耳に入ってしまっていたらしい。
仏頂面の彼が僕に言う。

「しかも先刻、フレデリック王子より直接の書簡が届いた」

声色は音楽的だが、顔がどうしたって不機嫌だ。

「愛人の件でな。御叱りの内容だった。前からシエラを献上したいという話は通していたのだが、どうしたことか、それを今になって殿下側から断って来たよ」

兄さんはご自分の思惑通りに事が運ばなかったのが面白くないのかもしれない、結構イライラしていたので、僕は下を向いた。
しかもいつもジェシカがいるポジションには、そんなときに限ってジェシカがおらず、助け船も期待できない。

「兄さん、ジェシカはどうしたんですか？」

僕は言った。

「ジェシカは欠勤だよ」
「休んでいるんですか？」

「風邪をこじらせたそうだ。日頃這ってでも出て来るジェシカが休むなど、これはめずらしいことだが、まあそんなときもあるだろう。寝込んで起き上がれんそうだ。
クライドがそこにいるが、用事があるのか？」

そして兄さんは執務室のずっと端の書類棚のところにいる数人を示した。只の文官たちかと思っていたら、そこにクライドらしい背中がある。彼は中肉で体格にそれほど特徴はないが、何となく洒落た衣装なのでそうだろう。

「彼は使える？」
「ふっ、子供が偉そうに。そうだな、おまえよりはね」
「そうだ、ルイーズは何してるの？」
「さあな」
「兄さんは最近、調子はどう？」
「ここにいる子供を叱ろうとしているよ」
「アレクシスの調子はどう？」
「アレックス。おまえは私が話しているのを誤魔化そうとしても駄目だ」

兄さんが僕を睨んだので、仕方なく僕は話を戻し、自分で兄さんに聞いた。

「……つまりそれは、やっぱりシエラと結婚しろってことなんでしょうか？
フレデリック様は、僕にそれを命じていらっしゃるということですか？」

兄さんが軽く手を叩くと、クライドを含む室内にいた何人かの部下たちが、一斉に一礼をして出口に向かっていった。人払いをしたの

だ。兄さんは機嫌悪く応えた。

「暗にはそう言いたいのかもしれんが、彼の立場で州領主の家の結婚を強制はできんよ。その権限は殿下にはない。もしあったとしても、そうはいかん。

シエラの扱いについては、殿下が何をおっしゃろうと、当面様子見とするだけだ。馬鹿馬鹿しい、こんなことで何も変わらん。おまえは何と言われようと、引き続き手はつけるな。

シエラをアレックスの傍に置いてやって欲しいなどと、支配階級の訳の分からん感傷を鵜呑みにはするなよ。後になって気まぐれに撤回されるのがおちだ。

今回の件で収穫があったとすれば只一つ。それは殿下に、シエラのためにこうして即日手紙を寄越すほど執着があるということが、判明したということだよ。これはシエラがカードとして有効であるということを意味している」

兄さんは厳しい実務口調で言った。

「カード……」

どんなに年が若くても、それが小さな子供でも、人を愛する気持ちが軽いとは限らない。フレデリック王子のシエラへの気持ちは、そんなに簡単なものではなかったような印象があったのだが、何処までも合理的な考えをする兄さんにとっては、所詮政治材料になるかならないかという視点からのものでしかないのだろう。

「それにしてもアレックス、あの王子は意外とつまらん男だよ」

兄さんは殿下から受け取ったらしい手紙を指の間に挟んで、それを振って見せた。

「この殿下よりの手紙曰く、卿にはもっと女を品物としてではなく、人格として意識するよう希望するなどと書き添えてあった。ふっ、アレックス聞いたかね。この私が十七の子供に説教をされるとは」

「兄さん、フレデリック様は……、誰も愛人になどなさらないと仰せでした。これは、シエラだけのお話ではなくて、他の誰のこともそうはしないと、殿下は直接僕にそう仰せになられたんです。だから各方面から、最近若い女を周りに配置されていることにも、ちょっと戸惑っていらっしゃると。殿下は、あんまりそういうことがお好きではないみたいです。誠実な方なのだと思います」

「女の肉体の味を知った後も、そのように高尚な生き方を実践おできになれるのであれば、多少は信じても構わないのだがね」

兄さんは言った。

「私としても、フレデリック殿下が胸中を忖度しているつもりだよ。若き王子は確かに本心をおっしゃっているのだろう。妾の子だと嘲笑われ、散々苦しい思いをなさった殿下のことだ。妾を持つということ自体をよく思われていないというのは、想像がつく。それは純真な少年の本心だろう。だが結局のところ、殿下は母親の血が悪い……」

兄さんは目を細めた。

「おまえは、あの王子に淫靡な色気があることを感じたか？　それまで愛妻家と名高かったあの老王陛下を籠絡しおおせた稀代の淫売の血を引いている以上、一度女の肌を知れば、現在の潔癖な誓いを守り通せる可能性は低かろうよ。血とはそういうものだ。或いは巷に囁かれる低俗な噂通り、快楽の館で女どもを飼育してい

たかの外道某の子であるというのが仮に真相であるとするなら、なおさらのことそんな誠意は小指の爪の先ほども期待できなかろうし」

「兄さん、そんなご発言は……」

その日フレデリック王子のことを、いろいろと言っていた兄さんだったが、口では皮肉めいたことを言っていながら、僕が目にしていたその態度には、いつものアディンセル伯爵らしい余裕がなかった。だから実際のところ、殿下のおっしゃっていた脅かしというのが、少なからず兄さんに対して効果があったということではないだろうかと、兄さんの話を聞きながら僕は思った。

妾腹生まれの未成年であれ、世継ぎの王子の権力はやはり強かったのだ。

さしもの兄さんも、シエラを献上する件を王子殿下に直々に差し止められてしまったのでは、当面はこの話を保留にする以外なかったようだ。

だがそれは同時に、紆余曲折を経てようやく取り戻した僕とタティの平穏な日常生活に、決定的な混乱を招くということでもあった。

世継ぎの王子という絶大な支援役を得てしまったシエラは、これまでの「ウィスラーナ候の妹姫」という立場に加えて、「次期国王の客人」という身分を手に入れたことになる。

国王が寵愛する女には、内心はどうあれ我々臣下は最高の礼と待遇をもって接しなくてはならないわけだが、まだその段階ではないとしたって殿下がシエラに好意を持っているのが明らかな以上、兄さんも僕も、それまで以上にシエラを丁重に扱わなければならなくなったということは、もはや議論の余地がない。

シエラがこういう政治的な事情を勘案した上で、利益になると踏んでああした行動に出たかどうかについては、彼女の無邪気な性格や世間知らずっぷりからして、ほぼ何も考えずに動いてしまっただけだろうという想像はつく。言ってはあれだがシエラはよく言えば純真無垢、悪く言えばあまり深く物事を考察するということはない女だろう。それが彼女の可愛いところであり、お姫様育ち特有の迷惑さとも言える部分だ。

しかしフレデリック様が二人を祝福するなんて保証してしまったせいで、僕は表向きシエラを拒絶することができないのだ。

でもアディンセル家としては、絶対にシエラに手をつけるわけにはいかない。王子の女を傷物にしたら、アディンセル家の浮沈に係わってしまうからだ。

だからここのところの僕は、あちらを立てればこちらが立たず、感情から政略から、いろいろなしがらみを一度に突きつけられて、なんと言うか、ちょっと困っていた……。

第２３１話　タティとシエラ（１）

「お帰りなさいっ、アレックス様っ」

はじける笑顔――、僕が私室の居間に入るや、ドレスの裾を掴んで走って来て僕をお出迎えしてくれたのが、タティじゃないことくらいは見たら分かる。

乳茶色の長い髪を揺らして僕の前にやって来た美しい少女に対し、僕は思わず苦笑いを浮かべる。

「……ただいま、シエラ」

服装は主にピンクだ。スカートの丈が膝より上だ。でも衣装にはシックな赤や茶色も使ってあるのでそれほど品がない印象はない。良家のお姫様のお転婆スタイルといった感じだ。スカートからは白い太股が覗いている。脚には、膝が隠れる長いブーツをはいている。長い髪がおろされていて、シエラの髪色と衣装の色がよくあっていた。

特に飾らなくても無条件に可愛いのがこの年代の女の子だが、更に周囲の目を惹くような美少女が、僕に甘えているかのような態度を取っているわけだから、最初は苦笑いだった僕の気分は、当然よくなる。

「それ、すごく可愛い服だね。すごく似合ってる」

「嬉しい！　私、この後ろの赤いリボンが気に入っているのよ。大きめに結んで、ひらひらさせると可愛いの」

「青はやめたの？　青い服」

「それはフレデリック様のカラーだから。今はあまり着たくないわ。私、アレックス様の好きなお色を伺っていなかったわ」

「好きな色？　うーん、特には……」

先日の謁見の日から、一週間が経過していた。僕はもう一週間後から王都で暮らすことになるため、今は兄さんの下請け的な仕事――、まあもとからそうだったが、あまり長期にかからない事務仕事を淡々とこなしつつ、割と時間的には余裕を持って暮らしていた。すぐに必要ない荷物ももうあらかた伯爵邸に送ってある。独立先の物件はまだ決めていないが、決めたらすぐ運び出せるように、向こうの召使いには荷物を開けないように言いつけてもいる。だから日が暮れたら特にすることはないのだが、それが問題だった。

僕には今、何でもいいから非常にするべきことが欲しかった。さもないと、こうして自分の部屋に戻らなくてはならないはめになるからだ。

僕は何の気なしを装って、ゆっくりと自分の居間に視線を巡らせる。僕の目の前で可愛くしているシエラのずっと向こう、窓辺の辺りに、しょんぼりしているタティがいる。

タティも僕にお帰りなさいと言いたかったのかもしれないが、いまいち機敏な動作という物に縁遠い運動音痴のタティは、シエラに先を越されてしまったのだろうか。

それともさすがに生まれながらの上流階級、侯爵令嬢と張り合おうなんて気概は、身分的な負い目もあって、タティには持てないのかもしれない。

そして僕はタティとシエラの板挟みになって、喘いでいた。

言っておきたいのが、心情的には断然タティだ。シエラみたいに容姿のいい女は確かに魅力的だし連れて歩けば気分がいい、しかも彼女は僕にすごく好意を寄せてくれるからそりゃあ本音を言えば僕としてもシエラのことは可愛いと思う。美人が嫌いな男はいないだろうが、彼女が自分を好きならそれはもっとだ。

でも、気心の知れた幼なじみというのもまた、僕にはかけがえのない特別さなのだ。だから僕はタティが好きだし、だからタティと結

婚するつもりでいるし、タティが大事じゃなかったらわざわざ御不興を買うリスクを負って王子様に助けを求めたりなんかしない。しかし今の僕は現実問題としてシエラを邪険にすることができないのだ。別にシエラの見た目の可愛さについついいい顔をしてしまうからじゃなく。シエラの後ろ盾が強大すぎて。兄さんですら手紙ひとつで脅かされていた相手なのだからもうどうしようもない。誰もが先日の事態をはっきり言葉にする度胸はないが、要するに殿下はシエラによって公衆の面前で女に振られるなんて赤っ恥を掻かされたわけで、今は相当ナーバスになっているだろうし……、だから当面は、殿下をこれ以上刺激しないためにも、シエラのことは保留として様子見するべきという兄さんの判断は、やっぱり正しいと思うのだ。

「私、いい子にしていたのよ」

シエラは僕に言った。

「うん。召使いたちはよくしてくれた？」

「ええ、とっても。だって、アレックス様の花嫁になるんですもの」

「いやっ、それは、どうだろう。つまり……」

僕は言って、褒められたがっているシエラのもうちょっと奥にいる、黒い巻き毛の娘に目をやった。すると、タティはふいっと顔を背ける。

僕は慌てて、タティの関心を引こうと彼女に向かって手を振ってみせた。

「ただいま、タティ！」

ちょっとカイトを頭の中で意識して、彼のように無節操に明るくそ

う言ってみたが、タティは野暮ったいスカートの両端を持って、つんとご挨拶するだけだった。
するとシエラが僕の腕に手を触れて、僕を引っ張った。

「タティさんばかりずるいわ。私にも、もっとただいまって、おっしゃってください」
「えっ、ああ、そうだね。ただいま」
「お帰りなさいっ」

そしてシエラは僕の腕にぎゅっとくっついた。
その仕草の可愛さと感触に、僕は思わず気持ちが浮かれる。周知の通り、僕は非常に誠実、歩く誠実と言って過言でないほどの男なのだが、タティが死んでしまうという自責と悲嘆の中で生きていたこれまでの精神不安がすっかり解消してしまうと、やはりどうしても、ときにはシエラも可愛いじゃないかなんて思える心の余裕が生まれるものなのだ。
これはたぶん、大人の男の余裕と言うやつだと思うのだが、タティがこれ以後もきっちり僕の手許にあると思うと、勿論シエラは殿下の物だが、こちらで預かっている限りは、別にシエラに冷たくする必要はない、まあ好きにさせておいたらいいかなという、まさしく器の大きい考えも、ちらほらと頭をもたげてきたりするものなのである。
僕はタティが大事だが、それは何もシエラを人生から完全排除する理由にはならない。たとえば何かにつけ、僕を批判したりギャーギャー文句ばかり言って来るような煩い女ならこれは男の沽券にも係わるし、とっととご退場願いたい気持ちにもなるが、シエラは別にそうじゃない。
そればかりか、シエラは前から僕に懐いてはいたのだが、それでもこれまではせいぜい後をついて歩いて来るとか、服の裾を可愛く引っ張る程度のもので、こんなに積極的にくっつくなんてことはして

こなかった。でも、なんと言うか、こうやってぎゅっと女に好かれるというのは、これは実に気分がいい……。

しかし僕ははっとする。そういうことをタティの前でやるっていうのは、タティのご機嫌がよくなることなので、できればやめておいて欲しいと思ったのだ。でもそれを言うと、きっとシエラのご機嫌が悪くなる。シエラのご機嫌が悪くなると、僕だけじゃなくアディンセル家自体にとって問題なので、僕は上手く言い出せなかった。

だが僕はすぐに新たな問題に気がつく。あろうことか、シエラの胸が僕の腕に当たっている！　でももしそれを言うと、胸が腕に当たっているっていうことを、過剰に意識している女に不慣れな情けない奴と思われそうで、やっぱり僕は何も言えなかった。

だって僕は大人の男だからだ。大人の男は女をはべらかしても余裕なのだ。だから女の胸の感触くらいで動揺しない。でも困ったことに、本当はシエラの胸が当たっているのが、気になってしょうがない。

第２３２話　タティとシエラ（２）

「仲よくしたらいいと思うよ……」

僕は、基本的にタティとシエラ、どちらとの衝突も避けたかったので、どちらに向けるでもなく、うわ言のように言った。

「女の人は、仲よくしたほうが可愛いと思うし……。二人でさ、何か共通の趣味をみつけたりとか」

僕は理想的な住環境のために頭をしぼって提案した。

「一緒にランチを取るとかどう。何でも食べたい物を作らせてもいいし、取り寄せてもいいし。

そうだ、おそろいのドレスを新調するのはどう？　タティとシエラ、二人でおそろい。色違いとかにしてさ、僕が二人にプレゼントするよ」

そして僕は目の前のシエラと、向こうにいるタティ、両方のご機嫌をいっぺんに取るべく二人のことを見たが、驚くべきことにどちらも反応がない。女の人の、このての対応の恐さが男性諸氏には分かるだろうか？　絶対に僕の話が聞こえていたはずなのに、提案に乗るでもなく、嫌だと言うでもなく、無表情だ。恐ろしいまでの無反応……。

「じゃ、じゃあ、三人で虫取りに行く……？」

恐らくものすごく気まずい虫取りになりそうだが、僕は精一杯の譲歩をして提案した。

「草をさ、手で掻くとバッタがいっぱい飛ぶんだよね。小さいのから大きいのから。僕ね、あれわくわくするんだ」

と、シエラがまた僕の腕を引く。

見ると、シエラがじっと僕を見ている。

「ど、どうしたの？」

僕が聞くと、シエラは上目遣いにはにかんだ。

「私ね、お帰りなさいのキスがしたいの。妻になるんだもの」

「うん、……ええっ！？　いやっ、でもそういうことは、人前でしないほうがいいよ」

「私のお父様とお母様は、家族の前でしていらしたわ」

「それは、シエラのお父様とお母様は、夫婦だからだよ。でも僕は……」

タティがいるし、僕はタティと結婚するんだというのは、もはやまったくシエラには言えないことなので、僕は返答に詰まった。

と、シエラは言った。

「フレデリック様が、二人を祝福してくださるっておっしゃったの……」

「いや、それは、そうなんだけど……」

「では、貴方の花嫁にキスをしてください」

「う、うーん……」

僕は、僕の腕にくっついたままじっと僕のキスを待つシエラを振り払うこともできずに困惑した。それよりバッタの話はいったいどう

なったのか聞きたいが、何となく拒否された気がするので言い出せない。シエラはときどき目を閉じて、本気でキスを要求している。だがすぐ同じ室内にはタティがいる。

取り敢えず、額にでもしておけばシエラも納得するのではないかと思うので、ここはタティには現状を理解して貰うしかない。これは高度な政治問題でもあるからだ。そこで僕がそのための目配せをしようとタティを見ると、しかしタティはこっちを見ていない。

「タティ」

慌てて声をかけると、分厚い眼鏡の奥が光の加減で分からないながらも、タティの返事には明らかに不服が潜んでいた。

「お帰りなさいませアレックス様」

それが怒っているときの投げやりな早口だったので、僕は更に慌てた。タティは長くて野暮ったいスカートの裾を持ってそのままこちらに近づいてくる。僕はもうこの際、ビンタのひとつでも食らっておいたら、いいかなと思ったのだが、タティはそのまま僕らの横をすり抜けてしまった。

「いやっ、タティ、ちょっと待って。それって誤解だって」

「どうせわたしは人前ですから。人前でキスするのは、お嫌なんでしょう」

「タティ、そうじゃないよ」

「ロビンさん」

タティは足を止め、僕を振り返らずにうつむいた。

「本当は、侯爵家のお姫様だったんですものね。わたしったら、何

も知らなくて……。こんなに美人で当然だわ、だって、正真正銘、本物のお姫様なんですもの……。

なのにわたしはこんなにみすぼらしくて、鏡を見るたびに泣きたくなっちゃう……！

ハリエット様ったら、お手紙で何も教えてくれないんですもの。病気だったわたしに気を遣ってくれて……、でも、アレックス様にはこういう女性がいるんだって、はっきり教えてくれていたら、心の準備ができていたのに……」

僕は泡を食った。

「いやっ、心の準備って、タティ、あのね……」

「王子様の命令には、従わなくてはならないわ」

シエラが僕にひっついたまま言った。

「タティさんも、私もよ。ねえタティさん、私ね、こう思うのよ。タティさんは、病気を治して貰ったのだから、もう身を引くべきだと思うの。

だって、フレデリック様はアレックス様と私を祝福するとおっしゃったのよ。王子様の意見には、ギルバート様だって従うの」

これはシエラの長所なのか短所なのか、侯爵家の姫君としての教育の賜物か、自分の主張をはっきりと物怖じなく、しかも皮肉を込めずに言えるところは大したものだった。

「心配しないで。私、貴方よりも彼を愛しているの。だから、貴方よりもアレックス様を幸せにできると思うの」

タティは僕らを見ることもなく、何も言わずにかぶりを振った。

シエラはたたみかける。

「タティさん、私ね、お家も取り潰されて、正式にはもう侯爵家の娘ではないのよ。両親もお兄様も死んでしまったの。お姉様はいるけれど、もうお嫁に行っていらっしゃるから、頼ることもできないし、私は独りぼっちよ。私にはもう、アレックス様しかいないの。でもタティさん、貴方には家族がいらっしゃるじゃない。だからお願いよ、アレックス様を、私から奪うようなひどいことをしないで欲しいの」

「……」

「私ね、アレックス様を好きな気持ちだけは誰にも負けないわ。タティさんにも負けないわ。出会ったのは貴方が先でも、彼への愛の深さは私だから。彼のこと、一生大切にするって貴方に約束するわ」

「タティ、待って、これは話すと長いんだけど」

「お願いよタティさん、貴方は自分勝手な我侭を言って愛しあう二人の仲を裂かないで。それは悪い魔女のすることよ。とてもとても恥ずべきことだわ。

私たち、深く愛しあっているの。貴方がご病気でいる間に、愛を育んでしまったの。

それにね、アレックス様と私は運命の相手だから、赤い糸が二人の小指に絡んでいるから、離れられないのよ。運命の二人は出会った瞬間に魂が結ばれるの」

「いやっ、シエラ、そんな話は」

「……さよならっ」

タティが両手で顔を覆うや、走って部屋のドアをくぐり抜けて行く。

第２３３話　タティの可愛い独占欲

……わけはないのだ。両手で顔を覆っていたら。

タティは一度ドアに頭からぶつかり、派手な音を立てた。それからよろよろとして今度は確かにドアを手で開けてから部屋から出て行った。僕はタティが今ので眼鏡を割ったんじゃないかと思って心配したが、両手で顔を覆っていたから眼鏡はどうやら大丈夫だったようだ。

タティは昔からそうなのだが、今のは空間把握能力や状況判断能力にも問題があったような気がする。これは果たしてドジという範疇で片づけていいのやら、まさかあんなおとなしい女の子がドアに激突するとは思わなかった僕とシエラは驚き、その隙に僕はタティを追いかけ、幸いタティは足が遅いので、部屋を出たすぐその先であっさり腕を掴まえた。

本人としては全力疾走のつもりか知らないが、傍目にはどう見てももたもたしていたので、ちょうどとろいバッタを押さえるような感じだ。

「離してっ」

タティは僕の手を振り切ろうとしたが、僕は手を離さなかった。

「待って、タティ、これにはいろいろと事情があるんだよ。何度も言っていると思うけど、頼むから分かって欲しいんだ」

「分かっていますっ。もう分かりましたから、手を離してくださいっ」

「いや、分かってない」

「分かっていますったら」

「じゃあ何が分かったの？」

「アレックス様が、シエラ様を選ぶことです……」
「そうじゃないんだって……、ただ今は事情が許さないんだ、タティにはちょっとそれを分かって貰いたいんだ。これは、僕個人の考えではどうにもならないんだよ。王子様の気が変わってやっぱりシエラを引き取るか、どうにかしてくれないと。状況が変わらないとさ」
「だから、分かりましたっ」
「いや、分かってないよ」
「離してくださいっ」
「嫌だよ。僕はタティと結婚するんだ」

タティは振り返って僕を見上げ、かぶりを振った。その目は涙ににじんでいた。

「そんなこと……、本気で言っていらっしゃるんですか？　わたしなんて、いいところなんてひとつもないのに……。わたしなんて全然美人じゃないし、何だかすらっとしてないし、魔力もなくて、お荷物で、おまけに年だってシエラ様より二つも上なの。シエラ様どころか、わたしなんて、アレックス様よりもお姉さんですもの。年上の女なんて、いい笑い者。もう、いいとこなしなんです」

毎度のことながら、僕はタティが何をそんなに自分を卑下するのかが分からなかった。
僕に言わせればタティがシエラより劣っていることなんて、家柄くらいのものだ。でもそれは僕と結婚したらいいことだし、美人かどうかなんて、それは人の好みにだって左右されるものだし、確かにシエラは兄さんが上玉だなんて言うくらい上等な美人かもしれないが、でもそれだけと言うか、それ以外には特にシエラに惹かれるものはないのだ。

でも僕はタティと一緒にいたいと思う。年齢のことだって、言わなければ十八歳も二十歳もそんなに見た目の違いはないような気はする。兄さんなんか僕とカイトを一緒くたに扱うのだ、大人からすると、そのくらいどうでもいいことなのではなかろうか。

「タティは童顔なんだし、シエラと同じ十八歳で通るよ」

僕は言った。

「そんなこと気にしてたの？　タティはずっと？」

「だって、わたしなんてちっとも取り柄がなくて……。アレックス様、女って、やっぱり若さがいちばんの武器なんですよ。それだけは、どんな女の子にも、誰にでも平等にある取り柄なんです。逆に言えば家柄がいいわけでも、特別美人でもなく、魔法使いにもなれなかったわたしには、それしかなかった。でも、最近ではもうそれすら……。全部持っているあの方を見ていると、自分がひたすらみじめで……」

「タティ、二十歳でそんなこと言ってたら、ジェシカやルイーズはどうなるんだ。怒られるよ」

「それは、そうですけどっ……」

「年なんて関係ないって言うか、タティ、僕と同い年じゃないか。大事なのは見た目だよ」

「見た目……」

「いや、つまりタティは若く見えるってこと。って言うか男がみんな年下好きと思うのもどうかと思うんだけど。年下の女にもいろいろあるんだよ。身体目当ての男なら、女は年下の女ってなりがちだろうけど、僕は女性とそれだけの関係って望んでいないし、そうなるとやっぱり年齢より気の強い女がちょっと苦手だしさ。一生のパートナーにするのって結局は、大事なのって内面なんじゃないかな」

僕はたたみかけた。

「ねえタティ、病気が治って嬉しくない？　僕は嬉しいよ。タティが元気になって、こうやって前みたいに、毎日会えるなんて」

タティは下を向いたまま頷いた。

「タティにしてみたら、毎日のようにああしてシエラが部屋に来るのって、面白くないとは思うけど……」

「面白くないだなんて、ただ、赤楓騎士団にプリンセスシエラ・ファンクラブがあるなんてお話を聞いてしまうと、もう格の違いって言うか、そういうのを……。

わたしなんて彼女と張り合えるわけないのに、アレックス様、わたし、上手く言えませんけど、前はね、いつか貴方に相応しい人が現れたら、わたしは素直に身を引こうって、そういうふうに思っていたんですよ。だってわたし、きっと誰が見たって、明らかに貴方に釣り合っていないんですもの。

だけどいざそういう方が現れると、貴方を諦めたくないって思ってしまいました……。アレックス様を諦めたくないって。負けたくないって。

自分で思っていたよりわたしって、ずっと強欲で、嫉妬深くて、嫌な女だったんです。

そしてそんな自分の中にあるすごく嫌な感情が、ますます貴方に相応しくないって思えてきて、もう、どうしていいか……」

タティは両手で頬を抑えて、か弱く、今にも泣き出しそうな顔で震えていた。

僕はそれをじっと見て、もっと表情をよく見るためにちょっとその瓶底みたいな眼鏡を取りたい気持ちだったが、余計なことしてタティが怒ると嫌なので、それは我慢しておいた。

「シエラ様のおっしゃる通り、わたしが身を引くべきだって分かっているんです」

深刻にタティは言った。

「身分の低い女が、身分の高い方の好きな人を想うなんて……、そんなの非常識だって分かってます。先に出会ったのはわたしでも、この状況ではもうわたしが邪魔者だって、ちゃんと分かっているんです。

でも、わたしには貴方が運命の人なんです……。

素直でいい子のタティって、子供の頃から決して美人だとは言われたことがなくても、それだけはおまえのいいところだって、お母様やお父様やみんなに、褒めて貰えていたのに……、だけど本当のわたしは内面さえぐちゃぐちゃです……」

僕は、タティが訴えるほどこの問題について深刻になっていなかったというのが正直なところだった。勿論簡単な問題じゃないとは思っていたし、どうしていいか目処も立たない。対処法もないという八方塞がりの状況ではあった。

でも僕の感触としては、謁見のときのフレデリック王子はどうもシエラのことを何年も好きだった様子だった。だから今は八方塞がりでも、兄さんもおっしゃっていた通り、いずれ殿下の気が変わってくれれば、また風向きが違ってくるのではないかという希望観測はあった。

それに僕は幸せを噛みしめていたのだ。死んでしまうはずだったタティが、僕の目の前にいて元気にしている。しかも僕に他の女が好意を寄せているのを、嫉妬して怒っているのだ。タティが僕に嫉妬して不満を訴えている。つまり僕が好きだからなのだ。こんなに嬉しいことがあるだろうか？

タティは怒っていても可愛かった。
しかも今はすごくいいことを言ったので、僕は思わず浮かれてしまった。
だからそのまま不意をついてタティにキスした。一瞬だけ唇が触れる。
タティが、唇を押さえて唖然として僕を見上げた。

「アレックス様っ……」

それから顔を赤くし、何故こんなときに、廊下には人がいるのにそんなことをとわたわたし始める。
僕はにやけて言った。

「だって、タティがそんなに嫉妬するなんてすごい。初めて見たよ。やった！」
「やったって……、アレックス様、わたし、真面目に話しているんですよっ」
「うん」

僕は言って、タティの手をそっと取った。

「でも、そんなに嫉妬するなんて初めて見た。いいね、女の人に嫉妬されるって。そういうタティも、可愛いよ」
「アレックス様ったら……」
「ねえ、これ夢じゃないんだよ。タティ。タティが病気になってから、いろいろあって……、もう駄目かもって何度も思ったけど、でも今はこうして一緒にいられる」
「わたしももう何度も駄目かと思いました。きっと、もう駄目だって。もう会えないって。
わたしは子供の頃から、不幸ではなかったけれど、でもいつも幸せ

には届かないような気がしていたから……」

僕はタティの顔を覗き込んだ。

「幸せに届かない……？」

タティは哀しく呟いた。

「だってわたし、こんなだから。髪だってこんな。眼鏡で、鈍臭くて。だけどシエラ様はすごく綺麗。欠点なんて何処にもなくて、本当にお姫様そのもの。全然敵わないもの……」

「またあ、なんでそこで落ち込むかな」

「だって……」

「タティ、僕が好き？」

僕は言って、また顔を近づけた。

「アレックス様、あっ……」

タティは身じろぎをしたが、僕がそのまま唇を塞ぐと僕に従った。どうせ廊下にいるのは用事のために通りかかった召使いと衛兵で、僕らの関係を分かっている人々ばかりな上に、この城は僕の家なのだ。家の中でキスをするのは、街角や路上でキスをする道徳知らずの淫乱破廉恥とは訳が違う。

やがて唇を離すと、深呼吸をして、タティが僕を見上げた。

「何だか、前より慣れていませんか……？　まるで伯爵様みたい……」

「えっ？　キスが？」

タティは赤い顔でうつむいた。

「持ち込み方が、自然すぎです……」

「そうかな？　まあね、僕は男らしいからね」

「……」

「タティ、僕が運命の人だって思ってるの？」

「そ、そうですよ……」

タティは目をそらして言った。

「いけませんか……？」

「いいよ」

「いいよって……」

「いいことだよって意味。いい考えってこと」

「それは、分かってます……」

「タティ、タティは何か勘違いしているかもしれないんだけど」

「何ですか……？」

「男って別に世界でいちばん綺麗な女が欲しいわけじゃないんだよ。女の人がこだわっているほど、化粧も好きじゃないしさ。まあ中には顔さえよければ何でもいいって奴もいるかもしれないけど、僕はタティがいいよ」

「アレックス様、でも……」

「僕はタティがいい」

僕はタティをみつめて繰り返した。

「で、でもっ、わたしにはシエラ様よりいいところって、ないんです……」

「そんなことないよ。タティには、シエラに負けないいいところがあるよ」

「わたしの、いいところ……？」

タティは僕の言葉を確かめるように、そっと僕を見上げた。

「そうだよ。自信を持っていい」

そして僕とタティはみつめあった。

それはお互いの存在を、久しぶりにちゃんと認識しあった瞬間だった。

そうとも、僕は、タティと引き裂かれそうになっても僕はずっと、こういう瞬間を待っていたのだ。

随分時間はかかってしまったし、今もいろいろと邪魔は入っているけど、僕らは本来こうだったのだ。

僕はこの愛の歓びを伝えるべく、タティに微笑みかけた。

「タティはね、胸がいいんだ。僕、タティのおっぱい最高に好きだよ！」

しかし何故かタティはわあっと泣き出してしまった。

「えっ？」

僕は訳が分からず立ち尽くす。

第２３４話　シエラのいけない提案（１）

おっぱいを褒めたら泣かれるなんて、どういうわけなのか分からず、僕はその夜、逡巡とそのことを考えていた。僕はよかれと思って言ったんだし、タティのおっぱいは素晴らしいのに、なんであそこで泣く必要があるのか僕にはまったく分からなかったのだ。

タティが気落ちしている原因は、シエラがああして僕らの間に割り込もうとするからなのだということは僕としても分かっている。

困ったことだが、シエラはあれでなかなか負けず嫌いなのかもしれない。特にタティに意地悪を言うとかはないのだが、殿下という後ろ盾を得たことで、自分が僕の花嫁なのだと率先して主張するようになってしまった。シエラが花嫁ということは、タティはお妾のままというのが話の前提になっていることもあり、そのためにタティはいささか情緒不安定になってしまっている。

タティはハリエットやらヴァレリアやらみたいな野性味あふれる性格じゃないから、シエラに対して面と向かって抗議なんてできないのだ。言いたいことを自分の中にため込んで、だんだん卑屈になってしまっているのは、可哀想なことをしていると思っている。

確かに、ここは僕が、はっきりとシエラに本心を言ってしまうのがいいのかもしれないとは思うのだ。

しかしそれをやると、シエラの性格からして恐らく再びフレデリック様に泣きつくであろう……、だが二度もそんなことをされたのでは、さすがに僕の立場がない。何より今後のアディンセル家自体にも影響が出かねない。世継ぎの王子の顔色は、常に最優先で窺っておくべきなのだ。

そんなわけで、僕は不用意に明確な意思表示ができず……。

こういうときはあれなのだ、性交渉をするっていうのがいい方法なんじゃないかとは思うのだ。少なくとも兄さんを見ている限りでは。

御機嫌斜めの女をなだめるのに、良質の性交渉は、たぶん、いい方

法なんじゃないかと思うのだが……、ここでまた大いなる問題が立ちはだかる。
それと言うのも、アディンセル家に属する僕には、アディンセル家の呪いなんていう訳の分からない呪いがかかっていて、抱いた女の生命力を奪うなんて訳の分からないことが起こってしまうのだ。
バンナード公子の特別の魔法によって、肺病に罹っていたタティは奇跡的な回復を遂げている。殿下に謁見したあの日から、まだ一週間しか経過していないのに、タティは病身どころか、もう走ることができるくらいに回復を見せていた。
しかし、慎重でありかつ良識派である僕としては、タティが元気になったからと言って、ほいほい彼女に伸しかかるという愚を繰り返すことができない。二度と大事なタティを死にかけさせるようなわけにはいかないから、この訳の分からない呪いを何とかするまでは、断じてタティを抱くわけにはいかないのだ。
そしてどうやったらこの呪いを解除できるか目処は立っておらず、したがって今のところ僕は不貞寝をする以外にない。
僕はタティの肌の温もりが恋しく、布団にくるまって、悲しくタティを想いながら眠った。
タティを僕のベッドで寝かせると、シエラが嫉妬して邪魔するというのもそうなのだが、何より僕が我慢できないと思うので、寝室は分けている。
僕は良識的な紳士だ。物事の道理を分かってる。
欲望のままに突っ走ることの愚かさも。
だけど僕はタティが恋しい。
それに、タティの胸はいいのだ。
てのひらに吸いつくようだったのだ。
なのにそうすることができず、今週は僕の頭の中はそればかりで、僕はあまりにも忍耐を強いられていた。
僕もタティもまだ若いし、時間はたくさんあるけれども、この問題は少なくとも僕にとって非常に深刻な問題なので、取り敢えず王都

に移ったら、休日にでも王立図書館にこもったりして、調べるなりしようと思っている。もしかして王家に何か知恵があるかもしれないから、フレデリック様にまた御力を貸して頂けるように、誠心誠意、お仕えしようとも思ってる。

そう、当然の話だが、僕は先日のタティ救済の御礼と、あのシエラの無礼についての謝罪の手紙をその日のうちに殿下に届けさせたのだ。

すると今のところ、ファン・サウスオール卿名義で「殿下のことを慮ってくださるのなら、これ以後、件のことにはあまり触れられないように」とのアドバイスと、打ち合わせの日程表が届いた。打ち合わせと言うのは、殿下の学業についての打ち合わせということだ。それに招かれるということは、僕の仕官話は立ち消えにはならないということだろうし、フレデリック様もそれほどには怒っておられないということなのかもしれない。少なくともそのように振る舞う分別が、殿下にはあるということだろう。殿下の面子を潰したのは確かだから、多少冷遇されることはあるのかもしれないが、いずれにしても僕に与えられた選択肢は、誠実に、粛々と日々御仕えをして、すべての誤解を解くということだけだ。先生役をやらせて頂けるのであれば、シエラとはまったく無関係だと、直接殿下に申し開きをするチャンスはあるだろう。

やがて僕はうとうとと眠りにつく。間もなく指先の感触に懐かしさを感じて、ちょっとの間それを触っていた。とても柔らかい。これはタティの胸の感触だ。僕はもぞもぞと手を伸ばして、本格的にそれを掴む。信じられないほど柔らかいのに、適度に弾力があるのが素晴らしい。

女のおっぱいは本来赤ん坊のためにあるということになっているが、真実を言えば、これは男のためにあるのだ。

そう言えば、どんなに胸の大きい女も、そのままでは乳は出ないようだ。少なくともタティの胸からは乳は出ない。赤ん坊が出来て、はじめて母乳が出るらしいのだが、それはいったいどんな味なのだ

ろうか？

そして僕は左手の先の胸の感触を楽しみ続ける。しかしやがて、それがどうもタティより小ぶりであることを奇妙に思い始める。それからそもそもタティがここにいるわけがないということに、気がつくことになった。何せおっぱいを褒めたら泣かれた挙句に、恥ずかしいのか何なのか、何となく機嫌を損ねられたその晩のことなのだから。

僕は戦慄し、はっとして目を開ける。布団の中は暗闇だが、ベッドサイドのランプの明かりが、僅かに布団の中に差し込んでいる。僕の布団の中に、僕以外の人間の息づかいがする。これは夢じゃない。明らかに僕のベッドの中に誰かいる。

まさかオニールの罠か……！？　焦って布団を跳ね上げると、僕のベッドにどうしたことかシエラがいる。

シエラは顔を真っ赤にして、無防備に僕のベッドに横たわっていた。僕が触った胸はシエラの胸だったようだ。僕は過去の過ちを思い出し、脊髄反射でシエラの衣服を確認する。特に乱れている様子はない。僕は別にシエラの服に手を突っ込んでおっぱいを触っていたわけじゃないし、シエラはベルトもしているままだ。スカートもめくれていないし、僕自身にも特にそういうことをした衣服の乱れや形跡はなく、僕は胸を撫で下ろす。

しかし、黙って胸を揉まれているほうもどうかと思うのだ。

「なんでここに、ごめん胸さわっ……」

僕は思わず大声を上げそうなほどびっくりしたし、腰が引けた。何せ、行為をしていないとしたって、同意のない女と同衾するなんて、ルイーズの件が脳裏に甦って僕の罪悪感を呼び起こして、もはやトラウマものなのだ。僕は嫌がる女にだけは絶対指一本触れないと心に決めているのだ！

「あっ、私……」

シエラは上気した顔のまま、よく分からないが、小声で言い訳らしきことを言ったようだ。

だが僕はそんな話は聞いていられなかった。後退り、慌ててベッドから転がり落ちると、急いで靴を履く。

「待って、アレックス様どちらにいらっしゃるの？」

「うん、あの、逃げるんだ」

「えっ、逃げる……？　駄目っ」

しゃがんで靴紐を結ぶのに手間取る僕の背中に、間もなく柔らかい感触が覆い被さった。

「駄目ですっ。逃がさないわ。アレックス様は今夜私と結ばれてくださいっ！」

「いやっ、それは……」

「勝手にお部屋に入ってごめんなさい。ベッドに入ってごめんなさい。でも、でも、嫌いにならないで。出て行かないで。私がどんなに貴方を好きか、分かって貰うにはこれしかなかったの」

「いや、あの……」

「私、アレックス様が好きよ。いちばん好き」

シエラは僕の背中に半ば乗りかかって、かたつむりのようにへばりついていた。そのけなげな訴えと、背中からシエラの感触と体温が伝わって、僕は思わず動揺する。

シエラの行動はなんと言うかいちいち危なっかしく、無防備すぎて、僕はときどきどうしていいか分からなくなる。しかしそんなことをして、男は狼なんだよと、この場合は言ってもたぶん意味がないだろう。彼女はまさにそのことを僕に要求しているわけだから。

「お願い、私にもキスしてください」

シエラは僕の背中から囁いた。

「夕方タティさんにしたみたいに、私にも。私もアレックス様とキスがしたいわ。貴方が私以外の女の人とあんなことをするなんて、これ以上耐えられません……！

だから、これからは毎日私にキスしてください。私なら、あんなふうに我侭な態度で貴方を困らせたりしないわ。アレックス様にキスして貰ったら、きっと嬉しくて、天国に届いてしまうくらい飛び上がって喜ぶわ。

貴方にキスして貰ったのに、あんなふうに拗ねるなんて、タティさんは本当に、本当にずるいです……」

「見てたのか……、いや、あれはたぶん何か僕の言葉がたりなくて……」

シエラは僕の背中に抱きつく腕にぎゅっと力を込めた。

「タティさんの話なんてやめて。貴方の口から彼女の名前なんて聞きたくありません」

「シエラ、でもシエラは」

「アレックス様、私を抱いてください。私と結婚しましょう。そうすれば、全部上手くいくの。フレデリック様だって、二人を祝福してくださるって言ってくださったのよ」

「でもあの、あれは無理してたよ、シエラ……、殿下はどう見ても」

「私ね、そのためにいいことを思いついたの。とってもすてきなことよ。赤ちゃんが出来ればいいの」

眩暈がするようなことを、シエラは提案してきた。

「ええっ！？　君っ、言うに事欠いて何を言うんだ」
「そうすればいいの。ねえ、アレックス様、二人の赤ちゃんを作りましょう」
「赤ちゃんって……、いやっ、それは駄目だよ」
「どうしてですか？　タティさんとは作ろうとしたのに……」
「そ、そういう問題じゃないよ……」
「タティさんに赤ちゃんが出来なかったのは、二人が本物ではないからよ。
赤ちゃんはね、生まれる前からお父様とお母様になる人を、決めて来るのですって。だから、きっと赤ちゃんはタティさんをお母様にしたくなかったのだわ。でも私なら出来るかもしれません。
私に赤ちゃんが出来たら、タティさんもきっとご自分がどんなに我侭だったか気がついて、私たちのことを分かってくれると思うの。だからお願い……、私、アレックス様の赤ちゃんが欲しいのっ……」
「え、えっ……」

キャパシティ超えとはまさにこれで、この過激な申し出に、僕は一瞬思考が停止した。
赤ちゃんが欲しいなんて……、それは僕とエロいことがしたいと……。
赤ん坊ができるくらいに、エロいことをして欲しいと――！？
そんなことを言われた日には、過激な妄想が数十人は踊り狂う真夏の夜の火炎祭りに燃料油を投下して、爆発するバーニングフレアの熱い衝動に今にも身を任せそうになるのだ。僕は断じてエロいわけじゃないが、今はとても忍耐を強いられているから。
でもそれを紳士の理性でどうにか掻き消して、僕は男らしく冷静になるようにした。ここでもたげた欲望のままシエラに覆い被さったりしたら、それこそ後の祭りだ。
背中に乗ったまま訳の分からないことを言うシエラが、引き下がる

気配がなかったので、僕は取り敢えずそのまま靴を履き、それからへばりついている彼女の腕を持って寝台の端に座らせた。

「分かった。落ち着いて。とにかく落ち着いて話をしよう。いいね」

シエラは大きな瞳を僕に向け、こくんと頷く。

その隙に僕は背中を向け走って逃げた……が、素早く腕に飛びつかれて目論見は失敗した。

第２３５話　シエラのいけない提案（２）

「だって君ね、赤ちゃんって……、どうやって作るか知ってるの？」

あっさり捕まった僕は混乱気味に、そしてやや盛り下がり気味に言った。

年下の女の扱いなんて今もってどうしていいか分からないのだが、彼女らはよく赤ちゃんを作ればいいとかいうことを友だち同士の話題にしたり、思いつく人種なのだろうか？

それは僕は女性が好きだし、女と性交渉することは大好きだと思うが、赤ちゃんを作りましょうなんてそんなことを無邪気に言われて、いったいどうしていいやら分からないではないか。

しかもシエラの言い分を一通り聞いている限り、シエラは確実に僕を誘っているのだが、しかし信じ難いことにシエラ本人は、自分の言動がどういうことを意味しているかが分かってない。

赤ちゃんが欲しいなんて……、その言葉は男にとっては「私にものすごくエロいことをして」と同義な部分が、やっぱりあったりするわけだ……。決して言い訳をしたいわけじゃないが、僕が特別エロいからではなく、そんなことを言われれば、誰が聞いたってそう思うものだと思ったのだが……。しかし女の頭からするとこれはそっちとは全然関係なかったりするのが厄介だ……。

「分かっています。いけないことをするの」

そう言ってシエラは恥じらうが、彼女の話を聞く限り、どの辺が恥じらうポイントなのかが僕にはいまいち分からなかった。

「まずね、愛しあう二人がベッドで横になるの」

「うん」

「さっきの私たちみたいに。じっとして、そのまま朝まで一緒にいるとね、女の子のお腹に赤ちゃんが出来るんです」
「えっ、それだけ？」
「ええ」
「服を脱いだり、とかはないの？」
「しません」

シエラは大真面目に首を振った。

「一緒に並んで寝るだけで出来るの？」
「そうよ」
「君…、それ分かってるのは最初と最後だけじゃないのかな？」
「本当よ。私、そう習ったの」
「ああ、そう……。つまりそれ、じゃあどの辺がいけないことなの？」

僕が聞くと、シエラは更に真面目に主張した。

「そんな、いけないことです。男の人と二人きりでひと晩過ごすなんて」
「それは、確かにそうだけど……。まあ、そうかも……」

僕は頭を掻いた。いいところの娘には、その無知さや純粋さを男が愉しむために、或いは性的な知識を持つことは処女でない証明と夫にみなされてしまうのを避けるために、敢えて具体的な性行為の内容を教えないでおく場合はあるそうだ。
しかし、具体的な行為の詳細はともかく、どうやったら赤ん坊ができるかくらいのことは、知っているかと思ったら、一緒に並んで寝るだけとは……、シエラの予想以上のあまりの純粋さに、僕は危うく立ち眩みがするところだった。

「じゃあ……、つまり君、さっき勝手に僕の横に寝てたけど、勝手に子供作ろうとしたってこと？」

するとシエラはそこを指摘されたくなかったのだろう。かあっと顔を赤くした。

僕はまた頭を掻いた。

「それはそうだ。いけないよね、そんなことしたら」

そして僕は手を振り、そのままどさくさで寝室を出ようとしたが、またシエラにぎゅっと飛びつかれた。

前から思ってはいたのだが、シエラは男の気を引くのが上手いと思う。気を引くと言うか、間合いの取り方と言うか、甘え方とでも言うのだろうか。気の優しいお兄様がいたからだろう、男性に対する過剰な警戒感が少ないのも、功を奏していると言えた。

タティのことを助けないでと、彼女がフレデリック様に言ったことに関しては、僕はさすがにシエラに対して憤慨を抱かずにはいられなかったものだが、こうして落ち着いてみると分かる。シエラには、どうも基本的に悪気はないのだ。

侯爵令嬢にとって下級貴族の娘は大抵の場合には使用人の身分でしかない。だから僕が日頃召使いたちの人格を気にしないことと同じように、シエラとしても彼女らを自分と対等に考慮する必要はないという、そういう階級社会における躾の成果もあるだろう。

シエラは本当に無邪気なまま純粋なまま育ってしまったお姫様だったのだ。

「じゃあ、ひと晩抱きあったら赤ちゃんが出来るんだね？」

僕は言った。

「ええ！　ねえ、抱いてくださる？」
「その言い方は何かと誤解を招くと思うよ……」

シエラは僕の腕を引き、上目遣いに僕を見るのだが、これも計算ではなく、天然でやっているということなのか……、しかし、こんな美少女とひと晩ベッドで抱き合っていようものなら、僕は男なので、いろいろと不都合なことが起こらないとも言えないわけなのだ。
それは、こんなうぶな娘に知られてしまうと、非常にまずい。幻滅され、泣かれかねないことかもしれない。
幾らシエラがそれを望んでいるからと言って、赤ん坊はキャベツ畑になると本気で思っている無邪気な娘に、男の欲望のままそういうことをするというのは、人道的に果たして許されることなのだろうか？
彼女の言う通り横に寝ているだけで赤ん坊が出来るなら、世の中えらいことだ。いったい誰がこの非論理的な妄言を吹き込んだのか知らないが、それならもう男同士でも何でもありではないかってほど無茶苦茶なことを本気で信じている。
もしこんな娘をだまくらかして美味しい思いを味わったりしたら、それはきっと楽しい時間になると思うけど、僕の人間性は間違いなく犯罪者レベルだろう。
僕は、僕を逃がすまいとして、腕にがっちりしがみついているシエラをしばらく見ていたが、やがて彼女の膝に手をまわし、身体を両腕に持ち上げた。女の身体の感触が実によかったが、今はそこに執着してはいけない。
これまで煩悩に従ったことで、よかったことなんて一度としてなかったものだ。タティのときも、エステルのときも、形は違えどだいたい破滅の一歩手前に転がり落ちるのがパターンだった。だから僕はシエラの唇やら胸もとやら脚やらを見ないようにして、そのまま寝台へと運び、そこへ横たわらせる。

そして有無を言わさず顔を近づけシエラをみつめ、そっと囁く。

「じゃあ、いいんだね？」

シエラは僕をみつめ返し、遠慮がちに頷く。

「赤ちゃんが出来たら、もう後戻りはできないんだよ。心の準備はできてる？」

「ド、ドキドキします。私…、どうなってしまうのかしらって」

「そうだよね。じゃあ、目をつぶって深呼吸しようか」

「はい……」

シエラは素直に僕に従った。

女とは、他愛ないものだ……。確かにこんなアンポンタンな生き物に自由に外出させたり、まして外に放逐しようものなら、えらいことになる。善くも悪くも、やはり女とは生涯に渡って男が保護しておかないと、何かとまずい生き物なのだ。僕は頷いた。

それから布団に体重をかけないように、物音を立てないようにベッドから離れ、踵を返すと全力ダッシュで自分の部屋から逃走する。すれ違いざまの召使いにぶつかりそうになったが、身をかわしてとにかく走った。シエラはすぐに気がつくだろうが、男の足には追いつけないだろう。

そのまま、僕は急いで居城を出ることにした。居城内にいるのは得策じゃない。あの様子では、シエラはどうあっても僕を探すだろうからだ。

今夜はやはりシエラが滅多に思いつかないような場所に、身を隠すのがベターだろうと思う。
サンメープル城正面玄関を出ると、空には月も星もなく、外は真っ暗だった。多すぎるくらいの衛兵が灯りを持ってそこかしこを巡回しているので、不気味さはなかったが。
正面広間を抜け、階段を降りる僕の後ろを、例によって護衛が何人かついて来始めたようだ。
だが僕は今夜城の外に出るつもりはない。もう時刻も遅いし、いろいろあって精神的にも疲れていた。だから僕は寝床を移すだけに他ならない。
城内に設置された夜灯の光から暗く重い影の伸びる石壁の横を歩き、赤楓騎士団の宿舎の集まっている区域に向かう。その中で、唯一立ち入ったことがある建物に僕は入って行く。
前に来たときの記憶を辿り、相変わらず蝋燭をケチった貧乏臭い廊下を抜け、階段をのぼって辿り着いた部屋のドアを躊躇いなくノックする。
ドアの隙間からは住人がまだ起きていることを示す部屋の灯りが漏れているが、漏れていなくても僕は躊躇なくノックをしただろう。
間もなくドアが開いて、目をこすったカイトが出て来る。
僕は言った。

「今晩泊めてくれ」

第２３６話　模範的倒錯（１）

「どうぞ」

夜更けに約束もなしにいきなり訪問されたのでは、普通なら追い返したくなるだろうが、身分制度というものは実に結構なものだ。カイトは僕をもてなす以外の選択肢がない。扉は開かれ、僕は大きな顔で彼の部屋の中に入った。

この部屋に前に来たのは、確か去年、エステルとのときだったろうか。その後の顛末の後味の悪さを思うと、あれはろくな思い出じゃない。彼女にはすまないことをしたと思う気持ちもあるが、向こうも僕に対するそれなりの薄情をひそめていたのだから、あれはなるべくしてなった結果であるとも言える。若気の至りとしては、随分な結末ではあったが。

あの晩は酔っていたのであんまり部屋の中なんて物色しなかったのだが、今日の僕は冴えている。

見まわすまでもなく、カイトの部屋はとにかく狭かった。テーブルの上のランプひとつで室内の灯りが事足りる。天上には蜘蛛の巣が張っているし、一言で言うと人間が暮らす部屋じゃない。ベッドがひとつと、テーブル兼机のようなもの、椅子は二つあるようだが、折りたたみ式の椅子で、ひとつは壁に立てかけてある。部屋が狭いから、椅子を二つも置くと邪魔になるようだ。

ここで食事を取ることもあるだろうに、洋服棚らしきものまで一緒くたにひとつの部屋に置いてあるのは、部屋が一部屋しかないからだろう。はっきり言って僕の衣裳部屋より狭い。部屋の中の物はどれもが安物で、あまりの質素な生活ぶりには人間としての尊厳があるように思えず、目を覆わんばかりだ。一言で言えば、住所が牢獄じゃないというだけで、ほとんど囚人の独房だ。有機ごみはないから、変な臭いとかはしなかったが。

だが感心すべきこともあった。ひとつしかない本棚には、本がぎっしり詰まっている。入り切らない本がうずたかく床に積んであるのはいただけないが、彼は思ったより勉強をしているらしい。ほとんど古本みたいだが、ときどき部屋に不釣り合いの立派な装丁の本もある。兄さんに読めと課されたものかもしれない。経済学の基礎的な本、それに都市計画概論とか、明らかに兄さんに読まされた本だと分かるようなのが。

ウェブスター家から兄さんのところに引っ張り出されるまでは、初歩的な算術すら学ばせて貰えなかったような奴が、こういう本を読むようになるまでには、相当の努力がいったんじゃないかと思う。そして思うことは、この通りカイトは驚くほど努力を惜しまないということだ。どんなに境遇に恵まれなくても、不平を言って拗ねたり、投げたりしない性根と言うか、魂の根底部分にある誠実さは、彼の優れた美徳と言ってもいいのではないだろうか。

「なんかお気に召さないようで」

居心地悪くカイトが言った。

「すみませんね、本が乱雑になってて。アレックス様は整理整頓が上手いですから、雑然とした部屋は苦手でしょう」

「いや、そうじゃないんだけど……。勉強頑張ってるんだなって感心したんだ。

それに君は剣の稽古だって絶対欠かしてないだろう。身体動かした後で、よく頭に入るよね。僕は剣の稽古をやったら、その後なんてベッドに直行だよ」

「慣れです、慣れ。俺に言わせれば、何ヶ国もの外国語の本を読める貴方のほうが、ずっとすごいと思いますけどもね」

「まあね。でも一流の教師を金に物を言わせて雇ったからだよ」

「それだって、やる気と素養がなけりゃ、到底身につきませんって。

俺もできればもっと早くから勉強がしたかった」
「そうなんだ」
「貴方やオニールの会話にね、ときどきついていけない。俺には文学だとか哲学だとか、芸術だとか、そういう贅沢な学科を身につける時間はなかったですからね。必要最低限に絞り込んで、遅れた分を集中講義って感じでしたので」
「じゃあ僕が先生をしてあげようか？　でも芸術関係は……、絵を習いたいなら先生を雇おうか。せっかく王都に住むんだし」
「いや、年齢的に言って、新しく勉強を始めるにはもう遅いでしょうね。もう二十三ですよ。そんな暇もないし」
「そんなこと言うなって」

僕は呟いた。

「それより最近、調子はどう？」
「今日だってさっき会ったばかりでしょ。実にいつも通りですよ」

カイトは笑った。

「それはいいね」
「タティの様子はいかがです？」
「うん、元気だよ」

僕は頷いた。

「君のおかげでタティが元気になった。また怒らせちゃったけど、僕はタティが生きていてくれるだけで嬉しい。怒ってても。だから君には感謝してる」
「俺は何もしてないですよ。タティを救ったのは王子様と、あのお偉いさんでしょ」

「でもカイトが言ってくれなかったら、思いつかなかった。殿下にお願いしろなんて、そんなの僕には思いつかなかったと思うから」
「やあ、貴方に面と向かって感謝して貰うなんて、気恥ずかしいですねえ」

カイトは後ろ頭に手をやって、照れ隠しのように明るく微笑んだ。

「きっといいことあるよ。巡り巡ってカイトのところにいいことが戻って来る。因果応報って言ってね、世界を支配している見えない法則があるんだよ。
天は人間の行いを必ず見ている。だから、君はタティの生命を救うための一連の流れを作ったんだから、きっと特大のいいことがあるはずさ」
「本当に？　だったらいいなあ。でも、バンナード・トワイニング様でしたっけね。あのお偉いさんの魔法で、不治の病が治っちまうんだから、世の中には奇跡ってものがある……と言いたいところですが、実際は王侯貴族による知識の独占ってのが、まごうことなき事実だって見せつけられたってのがねえ。
いろいろと政治的軍事的理由があるんでしょうけど、俺はあのての癒しの魔法は、一般に開放されるべきだと思いましたよ。本当なら救える生命が見殺しにされるっていうのは、どうにも気分がよくない。タティのことは、本当によかったと思いますけど」
「それには同感だけど、どうしようもないよ。それを決められるのは国王だけなんだ。フレデリック様の時代になったら、少しは規制が緩くなるといいけど」
「あの王子様は、出来た御仁ですね。終始笑顔で感じもよかったですし。外見の先入観で想像していたのとは、やっぱりだいぶ違っていましたけど」
「確かにね。僕も正直、最初は戸惑ったよ。でも意外とシャイな感じもあったりして。シエラと話しただけで赤くなっちゃってさ。絶

世の美少年ときて、中身まで完璧超人だったらどうしようかと思ってたんだけど、そんなこともなさそうでよかったよ」

「そら、十七歳ですからねえ。そこら辺はまあ、十七歳なりの反応と言いますか」

「それより厄介なのはバンナード公子だよ。打ち解けようって気がないだけじゃなくて、確かに僕のこと目障りって思ってる感じなんだよね」

僕はバンナード公子の、何処か僕を馬鹿にしたような態度を思い出して言った。僕は何か彼の気に障るようなことをしたんだろうかと思わされるのだ。おまけに公爵家の男子である彼ほうがやはり社会的地位が高いし、しかも殿下に幾らでも話ができるという彼の立場は掛け値なしに強いから、僕はどうしても弱気な気持ちになってしまう。

第２３７話　模範的倒錯（２）

「僕のこと、嫌いなのかも」

僕は呟いた。

「んん、嫌いって……、まあ、確かに相手が相手ですから、そんな状態が続くようであれば、何も起こらないうちに根まわしを、取り敢えず閣下に対処を相談したほうがいいかもしれませんね。面倒事に巻き込まれては困りますから」

カイトが僕を慰めた。

「あの方はたぶん、貴方を競合相手と思っているんじゃないかと思うんですけどね」

「競合相手？」

「ええ。何かほら、魔法の能力がどうとか、勉強の成績がどうとか言ってたでしょう。得意分野で能力が被るのを、向こうさんは余計に気にしていらっしゃるんじゃないでしょうかね……。あのお偉いさんのほうがたぶん、アレックス様より年が上みたいだったから。何せ、王子様の先生役を取られたってのは、屈辱だったんじゃないでしょうか。公爵家の方では、プライドもそりゃあお高いでしょうし。

しかしあのお偉いさんは直情タイプではないでしょう。厭味を言ってはいましたが、貴方への対応を見ている限り、そこまで怒り心頭というわけでもなさそうだったので……、取り敢えずは様子を見るのがいいのではないかと。

嫌っているって意味で言えば、貴方よりは、数倍シエラ様を目の仇にしてましたからね。あれは大人げないくらいの態度で、ありゃ何

なのか……」
「僕、彼と上手くやっていけると思う？」
「うーん、でもまあ重要なのは王子様であって、あのお偉いさんとは業務上はあんまり接点ないんじゃないですか？　貴方のお役目は、家庭教師みたいなものでしょう。とにかく王子様と上手くやってさえいれば、問題ないと思いますよ」
「そう、そうだよね……」
「それより俺は、あのファン・サウスオールって人のほうが気になったんですけどね」

カイトは言った。

「ファン卿？　なんで？」
「フェリア王女殿下の乳兄弟が、なんで王子様の側近にいるのかってね。しかもブレーンってことは、まさに王子様の立ち位置から広報から、何から何まで王子様の利益を計算して物事を動かす腹心中の腹心ってことですよ。よっぽど優秀な方なんでしょうけど、その立場にいるためには、王子様に絶対の信頼を受けていないとならない。
しかしフェリア王女とフレデリック王子は異母姉弟、大雑把に言えば母親同士が敵対関係にあったわけでしょう。少なくとも王妃様サイドの人間は、フレデリック王子のことを今でも許してはいないでしょうし。なのにフェリア王女殿下の最側近だったような方がね、王子様の最側近みたいな立場にいるってのはちょっと、なんでかなーってね。
王子様は妾腹の王子ということで、周りには信用の置ける人間というのが少なかったのかもしれませんし、ましてやあの通りお若いから、これは所謂親切な顔で近づいて来る信用してはならない人物を、簡単に信用してしまっている可能性もあるなと」
「ふうん。僕はそんなこと考えてもみなかったよ。じゃあ今度会っ

たらファン卿に聞いてみるよ」

僕は言った。

「ん、本人に直接聞いちゃうんで！？」

カイトは慌てた。

「悪いかな？」

「いや……、うん、いいと思います。かえってそのほうが」

カイトはよく分からない返事の仕方をした。

「何だよその、何か含みがあるような反応は」

「いえね、二十歳ったら、そうですよなって思って」

「何が？」

「そういう若気の無邪気さは、大いに利用したほうがいいなと。そういう必殺技を使えるのって、今のうちだけでしょうからね。無礼にならないよう注意する必要はありますが、そこさえ押さえておけばアレックス様の身分だとまあ怒られることもないかも。俺も同席していいですか？　不意打ちの質問で本心も覗けるかもしれない」

僕は頭を振った。

「意味が分からない」

「貴方はまだ若いってことですよ」

カイトは言った。

「君も若いじゃないか」

「まあ、それもどうなんだろうって言うね。俺にはアレックス様みたいなこう、可愛らしさはないですからな。ラブリーさと言うか」
「そう？　カイトは可愛いよ」

僕は言った。
すると何故かカイトが真顔になって身を乗り出してきた。

「それ、俺を愛してるってことですか」
「いや、そうじゃないよ」

僕は断った。
しかしカイトが追い縋った。

「んじゃ、たとえば俺の何処が可愛いですか？」
「いやっ、特に思いつかないけど。やっぱり可愛いことはないんじゃないか。人間って、心にもないことをつい言っちゃうことってあるよね」
「じゃあ、俺が可愛いとすると何処です？」
「えっ、何この会話？」
「たとえば……、顔ですかね？　貴方が俺を可愛いと思うとすれば」
「えっ？」
「それとも他に、俺に可愛い部分ってあるんですか？　いや、ほんの……、あれっ、アレックス様引いてます？」

「でっ、何でしたっけ、魔術師のマデリン様ってどんな方でした？」

カイトはたった今の話は何かの間違いだとでもいうように、まるでマデリンの話のほうが重要な話で、痺れを切らしたような、そっちを急いでいるとでも言いたいような言い草をした。

「えっ、何だよマデリンって……」

「何者です？」

「彼女はマスター・カタリーナの娘だって言ってたじゃないか。何言ってるんだよ」

「そ、そうでしたけど……。じゃ、じゃあ、マスター・カタリーナってどんな方なんですか？」

「どんなって、つまりカタリーナっていうのは」

「いやっ、意地悪言わないで教えてくださいよマスター・カタリーナのこと。アレックス様なら頭がいいから、いろいろ詳しいでしょ。俺なんかより、いろんなことをご存知だから。アレックス様は、博識ですからね」

「えっ、博識？」

カイトはいいことを言った。

第２３８話　模範的倒錯（３）

「まあね。よく言われるよ」

事実なので、僕は機嫌よく頷いた。

「マスター・カタリーナ・スペルマンっていうのは、知ってると思うけど、サンセリウスでいちばん実力のある魔術師であり、かつ陛下の専属でもある。

代々優秀な魔術師を輩出しているスペルマン伯爵家の出身だけど、中でもカタリーナ師は昔から天才の名を欲しいままにしていたみたいだね。でもその名声が知れ渡ったのは、やっぱり先の南北戦線での活躍が大きいだろう。彼女の爆炎魔法でコルヴァール兵数千騎を焼き払ったっていうのは有名だよ。昔から天才カタリーナが歩いた後には、焦土しか残らないなんて伝説めいた話まで流れたくらいの天才魔術師。敵方の王太子の首を飛ばしたときのことだよ。英雄ハーキュリーズ五世にカタリーナありって言われてる。

戦争になれば泥を被るどころの話じゃない、虐殺を請け負わないといけないから、鋼鉄の神経を持っていないと、とてもじゃないけど権力者の魔術師は務まらないって言うけど、女の人でもやれる人はやれるんだよね。それに魔術師は公的女房役だからね。だから王妃様は生前、カタリーナ師に大層嫉妬していらしたって。

あと、知ってるだろうけど、マスターの称号を名乗れると、魔術師業界では大物ってことになるらしいね。娘のマデリンはまだ名乗ってなかったね」

「マスターを持ってる魔術師なんて、他にいましたっけ？　ルイーズ様も名乗ってないですよね」

「トバイアの魔術師が名乗ってたよ。ほら、あの長身痩躯の不気味な感じの」

カイトは少し考え、手を叩いた。

「憶えています。ウィシャート公に影のように寄り添っていましたね。最近だと昨年末の夜会で見ました」

「うん。あいつが確かマスターのはず。確か名前を……、何だったかな、あの不気味な外見に似合わない名前……、そう、マスター・シリウスって言ってたよ。僕あいつの声が嫌いなんだ。子供心に、恐いって印象が強くて」

さっきから何か話が脱線して、かなりどうでもいい話題になりつつあったし、大して興味もなかったので、僕はそろそろ話をそらしたかった。

「トバイア公が亡くなってしまいましたが、そうすると専属契約をしていた魔術師ってどうなるんですかね？　契約の儀式をしていなければ、単なるお役御免でいいんでしょうけど、契約を済ませていた場合って何かしらのペナルティはあるんですか？　従属契約不履行、つまり主人を守り切れなかったわけでしょう」

「単純明快な話さ。契約をしていたら、主人の心臓が止まったら自分も死ぬ。主人を埋葬する猶予くらいはあるかもしれないけど、自分に呪術をかけてるんだから、自由放免とはならない。だから魔術師は自分の生命を護るごとくに主人を護る必要があるんだよ。マスター・シリウスは、もう何処かで死んだかもね」

「なるほど……」

カイトは考え深げに腕組みをした。まだ彼の好奇心の火は尽きていないようだ。それどころか、次に何を僕に質問しようかと考えを纏めている気配がする。カイトはおしゃべりが鬱陶しいが、そう言えば好奇心旺盛なのも鬱陶しい奴だった。

「これ何？」

そこで僕は、適当にテーブルの隅を指差した。テーブルの上に、ちょうど便箋のような紙が放り投げてあったのに気づいたからだ。とにかく会話を変える必要があったのだ。僕は知識をひけらかすのは好きだが、こんな夜遅くに、延々こんな話を解説し続けるというのはさすがに面倒臭い。こういう話は昼間にでもハリエットに聞いて欲しいものだ。

「あっ、これはですね」

僕が近づいて便箋を手に取ろうとするより先に、カイトは慌てた身のこなしでそれを掴んで後ろに隠した。
しかし鋭敏なる僕は鋭く言った。

「督促状だな。字が見えた」
「いえ、あのー」
「何の借金？　貸してご覧」
「いや、いいんですよ。何でもないです」
「もしかしてヴァレリアに買った婚約指輪とか？」
「ご名答」

カイトはすぐに認めた。
僕は呆れた。

「借金してまで指輪買うなよ。愛してもない女のためにさ。君をいたわってくれるわけでもない、顔を見ると文句をつけたり、下男呼ばわりするような女だぞ」
「でも俺には親から受け継いだ代々の指輪みたいなのってないです

し、こういうことは、きちんとしておきたいから。金なら後になれば稼げるようになるかもしれないし。でも結婚は人生で一回きりでしょう」

カイトは督促状の紙をポケットに押し込みながら言った。

「ヴァレリアのためにそこまで考えてるの？」

「まあ、政略婚っても、縁あってのことでしょうしね。ウェブスター家のお嬢様なんて、普通は俺みたいな男は、どうあったって嫁に貰えないわけですから……。

俺と結婚することで、お嬢様には確かに嫌な思いをさせることにはなるでしょう。平民の妻だ何だとね。階級社会で白い目を向けられることの怖さは俺がよく知ってる。一生屈辱がついてまわるんです。でもお嬢様は、もし本人にその素養があればですが、貴方や、閣下と結婚することだってできるくらいの家柄の娘なんですよ。明らかにこの結婚は、彼女にとって不服で、不幸なものなんです。だからせめて大事にしないと」

「君、なんていい奴だよ……」

「逆の立場なら、やっぱり嫌だろうと思うだけですよ。男爵令嬢の自分が、周りには幾らでも独身の貴公子がいるっていうのに、どうしてこんな男とってね。だから俺はお嬢様を失望させないように、精一杯大事にしないと……」

「そう。そうか、じゃあそれ、僕が君に無償で融資するよ。その借金は取り敢えず僕が払うから。変な高利貸しとかから金を借りたら、大変なことになるんだよ」

「いえ、大丈夫です。これは自分で」

カイトは僕の目を見てきっぱり言った。

「自分の結婚のことですから、俺が自分でちゃんとしたい。男の責

任として」
「でもさ、これから結婚指輪も買うんだろう？」
「何とかしますよ」
「じゃあ、僕にできることは？」
カイトは首を横に振る。
「じゃあせめて、君の給金を上げるように兄さんにかけあうよ」
カイトは笑った。
「それは有難いです。是非」
それから僕は席についた。おもてなしを受けるためだ。しかし小さいテーブルの上に出されたのは妙に濃い色をした飲み物だった。使い古したカップ、それは構わない。僕は寛大な人間だ。あんまり他人の生活ぶりにガタガタ言わない。男の一人暮らしに食器まで期待しない。
が、出されたカップの中にやかんから注がれた液体が問題だ。
「これ何？」
僕がカップを覗きながら聞くと、カイトは平然と言った。
「お茶ですけど」
「濁ってる……。冷めてるし」
「三日前に淹れたんですよ。やかんに」
カイトはテーブル机の上に無造作に置かれたやかんを持ち上げて、振って見せた。

「……大丈夫なのか？」
「まだ夏じゃないですからね。腐ってないですよ。三日くらいならいけるはず」
「これヴァレリアに出さないほうがいいよ……」
「ですかねえ」

僕は、カップの中の濁ったお茶をみつめた。まるで森の中の澱んだ池の水のようだと思うのだが、ここには小さな生き物は棲んでいるのだろうか？　飛び込んでみると、お伽の国に行けるかもしれない。

「平気ですって、さっき飲みましたし」
「頑健な君と繊細な僕を一緒にしないでくれ……」
「じゃあ、何か厨房で貰って来ます」

カイトは特に気を悪くした様子はなかったが、気を遣ったのだろう。部屋を出て行こうとしたので、僕はそれを制した。

「いい、悪かった。僕は今夜の寝床を提供して貰えるだけでいいんだ」

第２３９話　無頓着な夜

テーブルに置かれた細工物のランプのもと、深夜に友人と向かい合って語りあうのは悪くないものだ。

「で、さっきシエラ様が突撃して来たって？」

カイトが椅子に座り直し言うので、僕は頷いた。さっきのことを、軽く話したのだ。

「そうなんだ。困っちゃってさ。赤ちゃんを作りましょうなんて言われちゃって」

僕が言うと、カイトが噴き出した。

「あ、赤ちゃん？」

「そう。赤ちゃんが出来たら結婚ってなると思ってるんだよ。女って単純だよね、でも話を聞いてみると、何だかね……、つまりシエラもキャベツ畑の住人だった」

「キャベツ畑の住人？」

「祈るだけでコウノトリが来ると思い込んでるってこと。赤ちゃんを作りましょうなんて言うから、誘ってるのかと思ったら、そうじゃないんだよ。彼女はお伽話の国の住人で、服も脱がないで抱き合うだけで赤ん坊が出来ると、したり顔で僕に教えてくれたよ。彼女の国の常識によると、男女が同じベッドで一晩眠ると、朝には何故か女の腹に赤ん坊が発生するということらしい。お触りしなくてもね。そんな概念はシエラにはないんだ」

「そらまた……。じゃあシエラ様の頭の中じゃ、娼館は何のために存在していることになっているんでしょうね？」

「シエラなんか、そんなのあるってことすら知らないかもよ。知ってても、変態男が趣味で行く場所って感じじゃないか」
「ある意味、当たってますが……」
僕は椅子の背もたれに背中を預け、手足を伸ばした。
「かと言って甘え上手と言うか、彼女は僕の人生にまったくいなかったタイプだから、可愛いんだけどどうしていいか分からなくてね。あの無邪気さと言うか天真爛漫さは、育ちのよさなんだろうと思うんだけど。
シエラがアンポンタンで助かったって思ってるところさ。もし悪知恵の働く女なら、フレデリック様の好意を利用するなりして、かなり権勢を振るえそうな気がするんだよね。
僕に対してだって、何もベッドに潜り込まなくたってさ、たとえば自分と結婚しないとアディンセル家にとってためにならないと、脅迫するとかね。まあやりすぎるといろいろとあれだけど、徐々に、王子様の陰に隠れてさ、かなり蜜を吸えそう。
それを思いつかないのが、シエラが世間知らずってことなんだろうけど。はっきり言ってその点は助かってる」
「確かにねえ。と言うかそんなことを考えられる女なら、ロベルト候の補佐とまではいかなくても、彼の助けにはなれたかもしれませんが」
「ロベルト様か……、そう言えば、彼の噂は何だかよく聞こえて来るね。兄さんがランベリー州を貰うってこともあるだろうけど、最近は誰かしらが彼のことを話してる気がするよ。ロベルト、ロベルトって」
「ふむ、そいつは共時性ってやつですかねえ」
カイトは腕を組んだ。

「神秘学かい？」
「ええ、まあ。それは処刑されてなお妹を心配する彼が、そういうメッセージを貴方に送っているってことなのかも。シエラ様のことを託したい的な」
僕は眉を顰めた。
「あんまりそういうこと言うなよ、責任感じるじゃないか。おまえはどっちの味方だよ。タティとシエラ」
「それは、タティですよ。それはそうなんですけど……、何やら、シエラ様の立場もつらいもんがあるでしょう。お兄様が処刑されて家が取り潰されてですよ、王子様の妾になれってな話はまあ本人に通知はなされていないとは言え、薄々感じてはいるでしょうし……、本当なら泣き暮らしているような心境なんじゃないかなとね。彼女を取り巻く状況は、女が一人で背負うには、重荷すぎるだろうに。それを傍から見て、けなげにまあよくやっていると思うんですよ。周りに当たり散らしたりだとかもなくて、貴方にも文句ひとつ、不満ひとつぶつけない。それどころか、必ず微笑みかけてくれるでしょう。あれはいい子ですよ。彼女は本当に、育ちがいいって言うか、心根がいい子なんでしょうねえ。
それだけに、タティが戻った辺りからはこう、いよいよ精神状態が危ういなと感じることもあったりして、不憫っつうか……。
それにシエラ様のところの兄弟構成って、どうやら長男の下に妹が二人でしょ。死んだ妹たちに重ねているわけでもないんですけど、何かねえ、やり切れないなってね」
カイトは頬杖をついた。
「どうにか、万事解決するような方向に持って行ってあげられればいいんですけど」

「でも僕はシエラと結婚とかって考えられない。タティと結婚するんだし。仮にタティがいなかったとしても、殿下の関心があった時点でもう駄目。どんなに美人でも、性格が可愛くてもね。そんなリスクは取れないよ。アディンセル家が第一だ」

「まあ、そらそうです」

「そんなに心配はいらないよ。シエラって夢見る女の子だから、そのうち新しい恋に目覚めるよ。だって僕を王子様とか思っちゃうような子なんだよ。だったら、フレデリック様が年下っぽい外見じゃなくなってご覧って。きっとシエラは瞳に星を宿らせて「運命の人に子供の頃から出会っていたのに気づかなかった」っていう感じの展開になるのが目に見えてる」

「そうですか？　女ってそんな簡単ですかね？」

「シエラに限ってはそうだよ。タティはとろいしシエラは天然だし、女って他愛ない。

シエラなんて権力者に気に入られてるんだから、あとは自分の決断ひとつで努力もなしに簡単に人生整っちゃうんだよ。羨ましい限りさ」

カイトは息を吐いた。

「でもお妃様になるって目は、ないわけでしょうからねえ。仮にお兄様のことがなかったとしても、王家と侯爵家じゃ貴賤婚ですから、おいそれと結婚は認められないでしょうし。

王子様のところに行くとなったら、結局のところみじめな立場でしょうよ。愛妾だの寵姫だのと、耳触りのいい呼ばれ方したって要するに日陰者ってことですから」

「日陰者か……」

「そう。世の中のお妾さんは、ほぼ例外なく後ろ指さされて生きてるんですよ。たとえ贅沢な暮らしをさせてくれる男の愛人と言ったって、サンセリウスは制度的に一夫一婦制が確立していますからね。

宗教的な観点もあり、妻と妾とでは立場がまったく違っていて、妾は第二夫人ではなく、言うなれば妻と永遠の誓いを立てた妻帯男を姦淫の罪に誘い込む毒蛇ってポジションです。
世の中の多くの良識ある人たちは、不倫や浮気に寛容ではないでしょう。特に妻っていう立場にある大半の女性たちは、妻の立場を脅かす愛人女を脊髄反射的に憎悪するでしょうしね。人より一段下に見られる人生ってのは、つらいもんがありますよ。
しかも次期国王の愛妾っていうのは、只のお妾さんとは違って国中の人間がその存在と、お役目の内容を知っているっていう、まあオニールなんかは専属売春婦だダッチワイフだ言ってましたけどね、あいつの言い分は、実際中傷と言うよりはある意味正直な感想で、どうしてもそういうふうな目で見てしまう男は多い。
だから辱めじゃないですけど、王子様の愛人なんていう立ち位置ってのは、余程タフな女でもないと、なかなか務まらないことですよ。シエラ様じゃ無理。王子様もそうしたくないとおっしゃっていたわけですし」
「まあ、確かにね……」
僕も頬杖をついた。
「殿下の場合はお若い公女様と結婚するまでの、練習台みたいな感じだとも言うしね」
「そうですよ」
「じゃあ、他にいい方法ないかな。別に殿下じゃなくたって、誰だっていいんだよ。シエラが僕以外の誰かに興味を持って、要するに僕から興味が離れるなら。シエラが僕のことを諦めてくれさえしたら、そうすれば、全部丸く収まるのに。
せっかくタティの肺病が治ったのに、何だか状況は半年前より後退しているって感じでさ。どうしたらいいか……」

するとカイトは言った。

「まあ、女に嫌われる方法なら幾らでもありますよ。世の中の男たちの多くが簡単に体現している通り。性格が悪いとか乱暴だとかいうのが嫌われるのなら分かりますけど、食事の仕方ひとつで嫌われますからね。そう、中にはその容姿だけで女を寄せつけないバリアを張れるエキスパートも。連中は女に不快感を抱かせるプロフェッショナルですよ。

女には俺たちには分からない独自の評価基準があって、それに違反すると二度と恋愛対象とは見てくれないってわけです」

「じゃあ、どうすればいいだろう」

「取り敢えず貴方の場合は、女にとって無条件で評価がつく点が幾つかあるんですよ。身分、財力、イケメン高身長って辺り。勉強ができるってのも、これは一般的に言ってかなりポイントが高いはず。だからそれを潰すくらいのことをしなくちゃいけません。

いっそ今夜、抱いてくれなんつって突撃して来たシエラ様に、貴方のエロい本性を見せてやればよかったのに。そうすれば驚かれて、速攻で嫌われたかも」

「嫌われなかったらどうする。喜ばれたら」

僕は言った。

「おや、貴方にそんな腕がおありとは」

カイトがからかうように目を細めた。

「みくびるな」

僕は主張した。

「まあ、彼女はアレックス様に惚れてるんだから、そう乱暴にしなきゃ嫌われないか……。結構、受け入れちまって、そのまま溺れちゃったりするのかな」

カイトは再びテーブルに頬杖をついた。

「もう貴方なしではいられないとか言われちゃったりして。いいなあ。いいなあ。はあ」

「そうだよ。そんなことをしたら、もっと僕を好きになるかも」

「そうですか」

「僕は夜の帝王と呼ばれてもいいくらいなんだぞ」

「その発想は、どっから持っていらしたんで」

「にじみ出る男の魅力」

「なるほど。ま、今夜はよく眠って明日また考えましょう。ほら時計を見てください」

カイトが取り出した懐中時計の針は、午前二時を指していた。

僕は頷いた。

「じゃあベッドを借りるよ。悪いね」

「どうぞ。俺は床で寝ますんで」

第２４０話　翌朝の危機

翌朝、僕はこそこそして自分の部屋に戻った。
僕はすごく繊細な質だから、カイトの部屋の安物のベッドでは寝つけるかどうか不安だったものの、意外なことに爆睡してしまい、まだ薄暗いうちに部屋に戻ろうと思ったのに起きたらとうに朝日が昇っている時刻だった。
こうなると、タティはきっと僕を起こしに寝室に来ているだろうし、朝帰りというのがどうにもきまりが悪かった。別に悪いことをしたわけではないのだが、昨晩シエラにあんなふうに迫られたことを思うと、やっぱりちょっとばつが悪い。
だから最初は、そのまま執務室に直行しようかと思ったのだが、でも昨日と同じ服を着るというのは、やっぱり名門貴族として考えられないことだ。やっぱり風呂に入りたいし、衣装は毎日違うものを着なくては。
だが赤楓騎士団の大浴場と称した大勢で使う風呂場には、まさかこの僕が入れるわけがない。身分が下の奴らが先に使った場所を僕が使うなんて考えられないことだし、僕は裸を他人に見られるのは好きじゃない。だいたい他人が使った浴場なんて清潔であるとは思えない。特に汗臭い連中と共用なんて許容範囲の逸脱も甚だしいことだ。お湯の中にはどんな不純物が浮いているか分からないし、連中が風呂の中で何かをしたかもしれない。床に汗と汚れがこびりついていそうで足を踏み入れるのもぞっとする。かえって身体を汚しそうな場所なのだ。
それにカイトの服を借りようにも、彼の服は何か形が古臭い。あの昔の若者という感じの服装は、実際のところ年配者受けはいいのだが、僕はそういうのはださいと思うので、できれば着たくない。
だから寝ぐせのついた頭のまま、一端カイトに別れを告げて、自分の部屋に帰ったのだが……。

そっと部屋のドアを開けて居間を見まわすと、召使いたちがいつも通りに整列しているのが見える。タティは見当たらない。まだ来ていなかったようだ。

僕はほっと胸を撫でおろし、ドアを開けて堂々と自分の部屋に入った。使用人たちがこぞって僕に朝の挨拶をする。寝室からではなく、廊下から入って来る僕に驚いた顔をする者もあったが、全員頭を垂れて僕に敬意を払う。何しろ僕はこのアディンセル伯爵家で二番目に偉いから、尊敬される存在なのだ。いい気分でそれを適当に受け流しながら、奥の僕専用の清潔な浴室に向かう。

僕の入浴や着替えを手伝う係の召使いが数名、僕の後をついて来た。僕はふと思いついて、その召使い女たちに聞いた。

「タティは今朝は、まだ寝てるんだよね？　寝坊かな、それだったら、寝かせといてあげて。病み上がりだから休ませてあげたいんだ。それと、後で朝食を運んであげてくれ。パンにつけるジャムを多く、あとチョコレートのケーキとかがあればそれも」

「あっ、いえ、もういらしていますわ……」

年配の召使いが、戸惑った口調で応じたので、勘のいい僕はぴたりと歩く足を止めた。

僕は振り返って、今一度たずねる。

「来てる？」

「え、ええ」

髪をきっちりと後ろに纏めた年配の召使いが、僕を見上げておくれ毛を耳にかけ、いかにも言い難いことがあるという愛想笑いを浮かべた。

僕は重ねて彼女に聞いた。

「ところでさ……、シエラは帰った？」
「いっ、いいえ、それは存じ上げません……」
「それシエラが来てたのを、存じ上げないって意味？　それとも帰ったのを、存じ上げないって意味？」
「そ、そうです。後者ですわ」
年配の召使いは言いながら、横にいる二十代前半の召使いの肩に触れた。
すると彼女は僕の寝室を一瞬指差して、お愛想のまばたきをしながら肩を竦めた。
「さっき、タティ様があちらに。それで、シエラ様も昨晩からあちらに」
「それで、二人が帰ったっていうのを見た人は？」
僕は笑顔を作って彼女たちに聞いた。
「どっちかだけでも、いいんだけど」
僕は寝室のドアの取っ手に手を置いたまま、しばらく思い悩んだ。
どの程度のことになっているか、ドアを開けるのが恐かったからだ。
タティが僕が寝ていると思って、いつも通り僕を起こしに寝室に行くと、僕の部屋の僕のベッドで何故かシエラが寝ているという、そういう状況があったんだろうなという、だいたいそういう感じだ。
もしタティの部屋に行ってタティのベッドに他の男が寝ていたら、僕なら男を殺すと思うけど、タティは武器なんて持ってないからシ

エラをなじるかもしれない。
でもシエラは僕が自分の結婚相手だと思っているから、自分の結婚相手の寝室に朝から別の女が来たら、イラッとくるかもしれない。それで、今はその両方が同時に起こっている――、今ドアを一枚隔てた向こう側で起こっていることを、一言で説明するとするならだいたいこういうことなんだろう。
しかし僕は別に悪いことをしたわけじゃない。二股をかけているわけでもないし、昨晩だって何ひとつ後ろめたいことはしていない。シエラに迫られたけど僕は誘惑に負けなかった。紳士的に振る舞い、後腐れなく、シエラとさよならした。それからカイトの部屋に押しかけて、ベッドを奪って寝ただけだ。僕には完璧なアリバイがある。アリバイの証人もいる。彼は鬱陶しいけど頭は切れる奴だ、いざとなったら、的確に僕に有益な証言をしてくれるだろう。
それに酩酊状態になってエステルを抱いたときのような失敗どころか、飲酒すらしていない。結局、カイト特製の訳の分からない、たぶん腐りかけのお茶を一口飲んだだけだ。
だから僕は何も責められるようなことはしていないのだ。タティにも、シエラにも。これは、冷静になれば誰だって分かる話だ。僕は潔白で、誠実な男であって、誰にも怒られるようなことをしていないってことに。

「私、アレックス様の赤ちゃんが出来たかもしれないのよ」

だがドアを開けたと同時に飛び込んで来たシエラの宣言に、僕は卒倒しそうになった。

第２４１話　優柔不断な男の魅力で（１）

僕はドアを開けてしまってから、なんで今すぐこの問題に飛び込む必要があったのか、なんで今は素通りをしなかったのかという冷静な考えが浮かんだが、開けてしまったからにはもう遅い。

「昨日の夜、私たちはこのベッドにいたから」

純粋なのは結構だが、シエラのあの可愛らしい勘違いも、そのうち誰かが正してあげないといけないのだろうと思う。紛争を招きかねないので、僕はやめておくが、彼女を初めて抱く男は幸せ者だ。手取り足取り、楽しめる。

室内にはタティとシエラがいて、どうやら予想通りの展開だったようだ。僕のベッドの横に立って、二人が対峙していたのだ。どっちもそう気の強い女ではないから、鋭利なナイフのような暴言が飛び交っていたり、掴みあいになるっていうほどの迫力ではなかったが、空気だけは言い表し様がないくらい険悪であり、僕はドアを閉じてただちにまわれ右をしたい気分だった。

「アレックス様！」

しかし、できれば気がつかないで欲しかったのに、僕がドアを開けたことに二人は気づいた。僕をみつけて、シエラがほっとしたような笑顔を浮かべる。

「アレックス様、貴方からも言ってあげて。私たちは、もう夫婦も同然の仲だって。
それなのに昨晩のこと、タティさんにお話しているのに、タティさんが信じてくれないの」

「さ、昨晩？　昨晩のことって……？」

僕は冷や汗を流しながらも笑顔を作ったが声が上擦った。タティが、軽蔑しているような目で僕を見ているせいだ。まずいことなんて何ひとつしていないのに、これではまるで何かがあったみたいに思われてしまう。でもなんて言ったらいいんだろうか？　僕はもがいた。

「昨日の夜、ここで二人きりで過ごしたことよ」

「す、過ごし……」

二人きりで過ごしていたか過ごしていないかと言われれば、それは、過ごしていたとなるだろう。でも「夜に二人きりで過ごした」と聞いて、大半の人が連想するような過ごし方は、断じてしていないはずだ。

「私、初めてよ」

だがシエラは頬を赤らめて、僕にはにかんだ。

「男の人に胸を触られたのも……、お姫様抱っこも。ドキドキしたけど、嬉しかった」

「シッ、シエラ、君っ、それはっ……」

確かにシエラの胸を掴んだ憶えはあるので、シエラの言うことに虚偽はないのだ。僕はたちまち動揺する。あれはタティの胸と間違えたんだと、言い訳したかったが、それは言ってもたぶん言い訳以下にしかならないだろう。だって僕は胸を揉んだのだ。手の中に柔らかいシエラのおっぱいの感触は残っている。

「私、貴方の可愛い花嫁さんになるわね」

シエラは長い髪を揺らし、ぴょこんと跳ねて、僕を見上げた。

「シ、シエラ、シエラは知らないかもしれないけど、女の胸を触ることなんて、別にその……、それほど特別なことじゃないんだ」

僕はタティの様子をチラチラと窺いながら、どうにか世間知らずのシエラを丸め込もうと思って頑張った。

「そう、だってほら、シエラだって身体洗うとき、おっぱいを……」

僕がつい、自分の胸の辺りを掴む手つきをしたせいか、タティの視線が左頬に突き刺さったので、僕は慌てて言い直した。

「つ、つまりねっ、つまり僕が言いたいのは、そんなことで結婚相手を決めるのは、すごく軽率なことだと思うんだ。胸を揉まれたくらいのことで。初めて胸を揉んだ相手が運命の相手とは限ら」

「揉んだんですか！？」

いきなり横からタティが叫んだ。

「えっ？」

「そうよ」

シエラが恥じらって頷く。

「昨日の夜、そこのアレックス様のベッドの中でね。最初はびっくりしたし、恥ずかしかったけど、私、アレックス様ならって……思ったの」

「そんなっ、アレックス様っ……！」

「いやっ、タティ、タティ、落ちついて。いいかい、つまり……、つまりこれは、そんなに大袈裟なことじゃないと思うんだ。だってほら、おっぱいってその、揉むためにあるんだし」
「違いますっ！」
タティは即座に主張した。
「アレックス様、そんな考えっておかしいわ。女の身体はオモチャじゃないんですよ。おっぱいは赤ちゃんに、お乳を飲ませてあげるためにあるのよ……」
「タティ、それは違うよ。いや、女の身体がオモチャじゃないっていうことには同意だけど、女のおっぱいは赤ちゃんの物じゃない。赤ちゃんには、貸すだけだよ。食べ物が他にないときだけ」
僕は主張した。
「おっぱいは揉むためのもの」
「それってつまり、シエラ様の言っていることって、本当のことなんですね……？」
「えっ？　いや、だからつまりおっぱいっていうのは、揉む……」
「アレックス様、一緒に私たちの赤ちゃんのお名前を考えましょう」
右横からシエラが言った。
「いやっ、シエラ、赤ちゃんなんて出来てないよ」
「そんなこと分からないわ。だって私、神様にお祈りしたのよ。早くアレックス様の赤ちゃんが出来ますようにって」
「だって、昨日は赤ちゃん作ってない」
「……よく、分かりました」

タティが憮然として言った。

「えっ？」

僕は翻弄されるままタティを振り向く。

「アレックス様のエッチッ！　やっぱり貴方は、伯爵様にそっくりよ。前から気づいていたもの、貴方は気が多いって」

「タティ、タティ。それは違うよ。次元が。向こうはプロだよ。女をたぶらかすことの。女は気がついたら服を脱がされてる感じ」

「いいえ、ちっとも違いませんっ。アレックス様はご自分が思っているよりもずっとずっと、女の子が大好きなの」

「タティ、でもさ、僕が男が大好きだったら気持ち悪いと思うよ？　タティより男が好きなんてなったらどうするの？　それこそ発狂ものじゃない？　考えてご覧。そんな無茶苦茶な展開、目も当てられないって」

「浮気したのに訳分からないこと言って、誤魔化さないでくださいっ！」

「タ、タティ、違うんだ。誤解だよ。浮気なんてしてないって。僕がそんな男に見える！？」

タティはうつむき、小声でエステルとか、マリーシアとか、呟いた。

「タティ……、まだ根に持ってたのか。でもあれはどっちも間違いだったんだって。だいたいマリーシアなんてそれ以前のことだよ。話だってしたことないんだし、それに結局彼女、僕の何だったと思う？」

「何なんですか？」

「それは後で教えてあげるよ、間抜けすぎて、タティが笑うような結末だから。

それに、あのときは僕はまだガキだったんだ。でも僕はこの何ヶ月かで、なんて言うかすごく男として……、成熟したって言うのかな。成熟した大人の男の魅力っていう感じの雰囲気、タティは感じてない？」

「感じませんっ」

「そ、そう……、まあタティは病み上がりだから、まだ見分けがついてないのかも。とにかくタティは何も分かってないよ」

「いいえ、分かってますっ」

「いや、そうじゃないよ」

「分かっていますっ。わたしは貴方の好きな女の子の条件に、何ひとつ当てはまらないってことも、全部っ！」

「タティ、タティ……」

「でもシエラ様を見て。シエラ様は、ほとんど貴方の理想通りです！　だから、貴方がシエラ様を好きになったって、不思議じゃないって思ってました！

だけどまさかシエラ様ともうそういうことまで……、それならそれで、別に認めたらよろしいのに、わたしに負い目なんか感じなくたって、貴方は女なんて簡単に切り捨てられるご身分なんだから。どうせお妾になった時点で、わたしは世間的にも、貴方の中でも、その程度の扱いだって、分かっていたもの。なのに貴方は口当たりのいい言葉で、そうじゃないって言い続けるの。でも実際はこれだもの。

でももう花嫁さんがみつかったのなら、わたしにはお暇をくださいっ」

「……お暇貰ったら、どうするの？」

「それは、後で考えますっ」

「僕はタティが好きだよ。出て行かないで」

僕は言った。

すると一瞬、タティの表情が緩んだので、ほっとしたのも束の間、

すかさずシエラが僕に言った。

「タティさんばかりずるいわ。私にも好きって、おっしゃってください」

「えっ？　す、好きだよシエラ」

「嬉しい！」

シエラが喜び、機嫌が直ったと思ったタティがまた怒った。

第２４２話　優柔不断な男の魅力で（２）

タティは頑なになって、僕から顔を背けた。

「やっぱり伯爵様と一緒で、誰にでもそういうこと、言っているのね……。それならもう、いいですからっ。何だかわたし、馬鹿みたい。アレックス様はやっぱり伯爵様とおんなじ、女なら誰でもいいのよ。だったら、どうぞ、シエラ様とご結婚なさったらいいじゃないですか。美人だし、お姫様だし、おっぱいまで揉んだんですからちょうどいいわ。わたしはお暇を頂きますっ！」

「タティ、落ちついてって。あまりヒステリー起こさないで。可愛い顔が台無しだよ」

「ヒステリーじゃ、ありませんっ。それにわたしなんて可愛くもないですからっ」

「タティ、とにかく感情的にならないで。妾になった挙句に出て行っちゃったんじゃ、タティは一生外を歩けなくなっちゃうよ。ちょっと落ちついて、冷静になったほうがいいと思うんだけど……」

「そんなのっ、だって、貴方がいけないんじゃないですか。アレックス様の浮気者って言いたいけど、でも、実際にはわたしが浮気相手なんだから、もう、嫌になっちゃうっ……、とにかくお暇をくださいっ」

「駄目だよ」

僕は言った。

「それは駄目」

僕はタティが怒って寝室を出て行こうとする気配を感じたので、それを阻止するために先手を打ってゆく手を塞ぎ、ドアを閉じてそこ

に背中を押しつけた。
何となくだが、そのまま自分の部屋に飛び込んで、実家に帰るための荷物を纏めそうな、そういう気配がしたのだ。
タティは僕の前に来て、僕を見上げて文句を言った。

「退いてください！」
「駄目」

僕は首を横に振った。

「それはできない」
「どうしてですかっ」
「だって、タティのことは何でも僕が決めるんだ。タティは僕の物なんだ。だからタティがタティのことで決められることは何ひとつない」
「そんなの、横暴すぎますっ」
「そうだけど、でも駄目だよ。タティはここから出さない」
「身勝手ですっ」
「アレックス様っ」

シエラも、僕の前に来て訴えた。

「私、貴方に他の女の人がいるなんて嫌ですっ。タティさんと別れてください」

僕は首を横に振った。

「いや、それも駄目」
「どうしてですか？」
「だって……」

僕は、僕のことをそれぞれがじっと見上げるタティとシエラを、どうにか上手いこと言いくるめる方法はないものかと、頭を巡らせた。困ったものだ。いろいろ言いたいことがあるのは分かるけど、二人ともどうして僕の言うことを聞いてくれないんだろうか？

タティとシエラは二人ともおとなしいタイプだし、男の趣味まで一致しているんだったら、親友になればいいと思うのだが……。

僕はこの二人が仲違いしているところはあまり見たくない。タティもシエラもいい子だというのは僕がよく知っているし、二人とも可愛いんだから、仲よく僕を好きになればいいと思う。

一瞬、差し込む光のように、ハーレムという言葉が思い浮かんだ。

そうだ、そうとも、そもそもこの国の婚姻制度にこそ、根本的な問題があったのだ。ヴァレリアじゃないが、確かにサンセリウスは女の地位が低い国なのだ。それなのに、なんで結婚だけ一夫一婦制なんてものを施行しているんだろうか？　宗教的な問題だということは勿論分かっているのだが、でもこの際一夫多妻制というものを導入してみたらどうなのだろう。

男が複数の妻を持てるという条件下なのであれば、女の人はわざわざ苦労することが目に見えているような男を選ぶ必要がない。財産を持っていて、見た目や性格も比較的いい男を、ある程度選ぶっていうことができることになるんじゃないだろうか。貧乏しないで暮らせるくらいの金を稼げる能力を持つ、健康で、容姿のいい男の子供を、安心して生み育てることができるという、極めて有効ないい人生を送れるんじゃないか。

これは男側も同様で、欲しい女を全部物にできるのは結構嬉しいだろう。世間に非難もされずに公然と複数の女と楽しめるのは。家に帰れば可愛い女が何人も笑顔でお出迎えしてくれて、ちやほやしてくれて、今夜の相手は誰にしようかなって選ぶのもワクワクするだろうし、制度や社会通念的にそうなっているのであれば、女たちだって納得して、いま僕の目の前にいるタティやシエラのようには、

険悪にならないかもしれないし……、実は一夫一婦制よりも、こっちのほうがよっぽど社会が幸せになれるんじゃないか――。

もっとも一夫多妻のハーレム制度は一握りの男だけしか交配権を持たないという諸刃の剣、要するに兄さんのような優秀で美形で経済力のある男が好きなだけ女を独占してしまうために、その他大勢の男はお楽しみどころか、一生子孫も残せないという、実は血も涙もない悲惨な制度だったりもするのだが……。

すると僕はきっと兄さんのおこぼれを期待するか、それとも兄さんが僕のために、僕が自力で女を確保できないのを心配して、女を世話してくれるのかもしれない。「アレックス、これがおまえ専用の女だ」とか言って、となると今と大して違いがない……。

ひとつ確かなことは、ここはもはや、弱気になっては駄目な場面ということだ。

そう、こういうときは、とにかく兄さんを見習うのだ。横暴でもいい、我侭でも、身勝手でも筋が通らなくてもいい、取り敢えず強気になって威張ることが重要なのだ。

「とにかく僕は男だから、君たちは僕の言うことに従うんだ」

僕は主張した。

「なんでって、それは、サンセリウスではそういうことになってるから。女は男の言うことに従うんだ。そりゃあ母上とか姉上ってなるとちょっと事情が違って来るかもしれないけど、君たちはそうじゃないんだし」

「タティさん、どうして分かってくれないのですか？」

シエラがタティに言った。

「私たちは心から愛しあっているのに、貴方は何故そうまで邪魔を

するの？
貴方はアレックス様に対して、あんまり恋人気取りが過ぎると思うわ。何故貴方がアレックス様を責めるようなことをおっしゃれるの？　彼を責める資格なんて、タティさんにはないはずよ」
「……」
「それなのに、貴方は何故いつもアレックス様を責めるのですか？　拗ねたり、怒ったり……、彼が困っていることが分からないのですか？」
「わたしっ、責めてなんかっ……」
「そうでしょうか。私、貴方の態度には毎日疑問を感じます……。何故、貴方がそんなふうに……、まるで……、貴方はまるで闇の魔女みたい。どうしてお妾さんの貴方が、ヒロインみたいな振る舞いをなさるの？」
「……」
「貴方はアレックス様にも、私にもひどいことをしていることに早く気がついて。貴方は自分勝手な思い込みで、私を不幸にしようとしている罪の重さを知ってください。
私、貴方がそんな方だなんて思いたくない。タティさんは、アレックス様と一緒にお育ちになったのなら、きっといい方だって分かるもの」
シエラは長い睫毛をしばたたかせ、タティを真面目な表情で見据えた。
「貴方はきっといい方だって。私、貴方がきちんと分別を持ってくれると信じているわ。
タティさん、貴方は勿論、そうしてくださるでしょう？」
「そんなっ……、わたしはっ……」
「可哀想だけど、貴方はアレックス様の妻にはなれないのよ。だって、貴方はお妾さんでしょう？

タティさん、お妾さんには、お妾さんなりの生き方というものがあるのよ。
貴方は一度お妾さんになって、それが世間に知れてしまったのだから、貴方がアレックス様の花嫁さんになることは、アレックス様のお名前や体面を、とても傷つけることであることを分かってください。
貴方はもしかして、アレックス様と結婚できると思っているかもしれないけれど、そういうことにはならないわ。だって、アレックス様は大領主のお家の方なの。
ねえタティさん、タティさんが我侭を通したら、アレックス様だけじゃない、ギルバート様にまで恥を掻かせてしまうことになるのよ」
「だって……、それは……」
「お妾さんがアレックス様の花嫁さんになるなんておかしいわ……」
「……、でもわたし、好きでお妾になったわけじゃありません……。好きでこの立場になったわけじゃ……」

第２４３話　優柔不断な男の魅力で（３）

「お願いタティさん、そんなふうに我侭を言うのは今日でおしまいにして。貴方はちゃんと、ご自分の立場を弁えて。私、こんなこと、あまり言いたくなかったけれど……、アレックス様の花嫁になるのは私です。貴方ではないわ。

なのに貴方の態度はまるでアレックス様の婚約者か、花嫁さんみたい。少なくとも、お妾さんの取る態度ではないわ。貴方の態度は出すぎていると思います。とても非常識よ。どうか分別を持って、タティさん」

「でもわたし、好きでお妾さんになったわけじゃありません。アレックス様に言い寄ったりして、この立場になったわけじゃありません。そんなふうに、あんまりお妾さんと馬鹿にしないでください……」

「私、お妾さんを馬鹿になんてしていないわ。そうならざるを得なかった方たちを馬鹿になんてしません。貴方こそ私を侮辱しないでください。

タティさんがご自分が馬鹿にされていると感じるのは、誰よりも貴方ご自身がそういうお考えをお持ちだからではないかしら。

貴方だって本心では分かっているのよ……、ご自分が人として間違ったことをしているって。でも貴方はとてもずるくて、絶対に私に謝ることはしたくないから、自分は悪くないって、そういうふうに言い張るの。私には、全部お見通しよ」

「それにっ、アレックス様はわたしを好きだって言ってくれていますっ……！

でもシエラ様は……、貴方は伯爵様が連れて来た方です。それまでアレックス様とはお知り合いですらなかったでしょう。だから貴方はアレックス様がいなくたって、これからも生きて行くのは平気なはずです。

でもわたしは生まれたときからずっとアレックス様のお傍にいたんです。わたしのこれまでの人生は、アレックス様なしには語れないものです。一日だって、一秒だって。なのに貴方はそれを引き離すようなことを、おっしゃらないで……！」

「そんな、ひどいわ……。貴方に私の何が分かるの……」

「それに、それにわたし……、アレックス様から指輪を頂いたんです。婚約指輪だよって、今でも大切に持っています。だから……」

「だから、何がおっしゃりたいのですか……？」

シエラの表情がにわかに曇り、女の子同士が対峙する不穏な空気に、僕は息を飲んだ。

「そんなことを言って……、私を傷つけるのはもうやめてくださいっ」

シエラは両手を握りしめてタティに怒った。

「貴方は何故そんなことを言うの？　貴方は何故そんなに意地悪なの……？

お願いですから、もうこんなことを続けないで。こんな仕打ちはもうやめてっ。もうこれ以上、アレックス様につき纏わないでっ。

タティさん、私、本当に苦しんでいるのよ。貴方に苦しめられているのよ。朝起きると、今日も貴方がいると思うと私……。

タティさん、私、本当に迷惑しているんです。本当に本当によ。こんなことが続くのでは、貴方を憎みたくなるほどなの。お願いよ……。

お願い、もう彼と別れて。彼の気持ちをちゃんと聞き分けて。アレックス様は優しいから、本当はタティさんと別れたいのに、貴方と別れるって言えなくて、困っていらっしゃるのよ」

「そんな……」

「タティさん、お妾さんというものは、隠れて暮らしているものです。仕方なくその立場になられたのだとしても、慎みを知る女性なら、ご自分が妾であることを恥じて暮らすものです。妻である私に遠慮をするものです」

シエラは僕を見上げた。

「お願いアレックス様、タティさんに、私たちのことをはっきり言ってあげてください。私のことを愛してるって。

私は、フレデリック様の前で誓った通りの気持ちよ。貴方も私のこと……、本気で愛してくださっている？」

シエラは僕をみつめた。

「正直に、答えてください」

僕は困り果て、タティとシエラを代わる代わる見た。

どっちも切実な顔をして、僕の返答を待っている。

勿論、僕にはこの状態をどうにかできる社交能力などないことは知っての通りだ。こんな場面は見たことも立ち会ったこともなかったし、両方から袖を引っ張られて今にも目がまわりそうだ。

確かに僕としても、タティとシエラの仲がいいとは思っていなかった。二人がまともに会話しているところを見たことがなかったし、彼女たちが同じ部屋にいるときには、何とも言いようのない居心地の悪い空気で満たされる。

でもどっちも優しい性格だと思うから、そのうち慣れて、仲よくしてくれるんじゃないかなっていう、そこはかとない期待は持っていた。

だが、もしかして僕の気づかないところで、この一週間というものタティとシエラは仲がよくないどころか、こうやってずっと対決を

していたとでも言わんばかりの展開なのだが、いったい何がどうしてここまでこじれてしまっているのか。
僕には分からなかった。だって、女なんて喧嘩をするものじゃないのに、僕を独占したい気持ちは分かるけど、どうして二人とも仲よくできないのだろう……。
どっちかの言い分が極端に間違っているとか、意地悪だとか、それとも我を忘れて殴りあってくれるのならまだ止めに入って、どさくさで片方を引きずって撤退とかそういう切り抜け方を考えることもできるのだ。が、タティもシエラもそうじゃないし、それどころか二人とも、下手なことを言えばたぶん、絶対泣くようなタイプで、今も二人して目がうるうるきてるような有様だ。二人とも、これ以上ちょっとでも刺激を食らったら泣き出しかねないぎりぎりのラインなのだろう。
それじゃあ僕としては、女を泣かせるわけにもいかないし、泣かれたら困るから強気に出るわけにもいかないし、こういうのはもう、本当にどうしていいか分からない。
だから僕は悩み、取り敢えずの混乱の収拾を決意し、やがてやんわりと応えた。

「……シエラのことは愛してるよ。可愛いと思ってる」
「本当に私を愛してる？」
「うん、まあね。だからさ、もうこういう」
「タティさんよりも？」
「えっ！？　まあ、うん……」
「嬉しい！」

シエラが笑顔で僕の腕に飛びついて頬を寄せる。

「私もアレックス様をいちばん愛してるっ」

第２４４話　佳客（１）

平穏と秩序を愛し、社交的活動にできるだけ背を向けていたい僕は、あまり広範な人間関係を必要としない人間だ。人づきあいはとても苦手な分野で、友人知人を増やすということには相変わらず煩わしさを覚えるばかりで、楽しさを見い出すことはできない。

だがそんな僕ですら、歓迎すべき客人と言える相手があるとすれば、今回のような方のことを言うのだろう。

別の日、兄さんの執務室に呼ばれた僕は、然る人物と再会を果たすことになった。

衛兵の敬礼を受け、ノックをして楓の執務室に入ると、人一倍上背のある兄さんが、執務机の前に直立しているのが見える。その向かいには身なりのいい客人があって、二人はそこで対話しているところのようだった。客人が連れている従者が数名、僕をみつけるなり頭を下げるが、彼らはひと目見て分かるくらいに全員僕より年齢が上だったし、社会的立場もそう低くはない人々であるようだ。全体として品がよく、穏やかな集団だった。

一方兄さんはその抜け目のない強い眼差しで僕を捉えながら、さっそく僕を手招きして側に招き寄せ、子供に言い聞かせるような小声で言った。

「アレックス、仲よしグループはどうした」

「煩いから置いて来たよ。呼びに戻ったほうがいいですか？」

「いや、いい機会だから連中にトワイニング家の面々の顔を憶えさせようと思ったが、まあいい」

それから兄さんは僕の背中に手を添え、少々大仰な手振りで客人に向き直った。

「公爵、こちらが弟のアレックスです。アレックス、こちらの公爵様が、おまえと会いたいと仰せなのだよ。ご挨拶をしなさい。以前アークランド公の宮殿内執務室でお会いしたそうだね」

兄さんは快活にそう言って、兄さんと向かい合う初老の紳士と僕を交互に紹介した。そこにいらっしゃるのは確かに見覚えのある温和な風貌、六十歳近い白髪まじりの彼は間違いなくトワイニング公爵ご本人だった。

トワイニング公爵家は当然ながら、アディンセル伯爵家よりも序列が上だ。従ってそこの当主を迎えるのに、兄さんはいつものように偉そうにふんぞり返っているわけにはいかなかったのだろう。道理で兄さん自身もその客人に謙譲を示し、きちんと起立しているわけだった。

僕を優しくみつめる公爵様の碧い瞳に、またしても深い懐かしさを感じた僕だったが、すぐに慌てて姿勢を正し、それから礼をした。

「お久しぶりですね、アレックス殿。お元気そうで何よりです」

トワイニング公爵は上品に微笑んだ。

「はい、お久しぶりでございます」

「いま伯爵と貴方について話をしていたのですが、貴方のお名前は、アレックス・アムブローズ・パリスと言うそうですね。アレックス、アレックス……、いいお名前です」

「ありがとうございます」

「名前というものには、各々に深い意味とこだわりというものが込められているものなのです。ですから決して軽んじてはいけない……。

パリスというのは、きっとアムブローズ卿は、ご先祖のパリス・アディンセル伯爵からお名前を頂いたのでしょうね。彼はとても勤勉

な領主だったそうです。
しかし彼が何よりも有名なことは、初めて王女を母親に持った伯爵であるということです。
当時はまだ王女が臣下に嫁ぐというのが、選択肢としてある話ではなかった。ですからこれはとても古い時代の話です。確かそうですね」
「はい、その通りです」
兄さんは同意した。
公爵様は頷き、また僕に目を移した。
「アレックス殿。聞きましたよ、貴方をお生みになってすぐに、貴方の母君様は亡くなられてしまったのだそうですね。その後、ご高齢だったアムブローズ卿も亡くなられ、幼い貴方は父親も母親も知らずに育ったとか……。
幼い我が子を手放さなければならなかったご両親様のそのご無念、そのお嘆きは、いかばかりだったでしょうか。貴方のお名前には、どれもきっとご両親様の深い願いが込められているのでしょう。可愛い我が子を手放すこと以上につらいことはないのです……」
そしてトワイニング公爵は、僕を見ながら涙ぐんだ。
場を取り繕うように、兄さんが公爵様に話題を提供した。僕が今度から王子殿下に仕えるとか、そっちの湿っぽくない、そして社交辞令的な話のことだ。兄さんは見惚れてしまうくらい丁寧で麗しい、それは模範的な当主の態度だったが、その紹介自体はとても簡潔だった。
これは想像のことだが、兄さんとしてはあまり彼と僕を近づけたくないということなのかもしれない。
また、兄さんの執務机の脇に控えている顔ぶれが、その日はジェシカ、ルイーズではなくクライド、ルイーズに変わっている。それに

ルイーズが、何だかいたたまれないような様子をしている。表情は特にいつも通り、微笑んで愛嬌を振りまくほどなのだが、それでも居心地が悪いような、悲しいとも取れるような、そわそわした気分の変動が垣間見えた。それは、彼女はトワイニング公が彼女の実父だということを知っているからなのだろう。

けれども公はルイーズのことは存在すら知らない。

そしてこのことをトワイニング公に知らせるつもりは、兄さんにはないようだった。

トワイニング公は本日、アレクシスに面会に来たということだった。公爵様は側近らしい部下を数名と、それにひと際服装のいい三十歳くらいの男を一名この場に連れていた。

その男というのが、同年代の兄さんと比較して、あんまり生彩を欠く容姿だったので、ちょっといい服装をしているだけの護衛の騎士か何かと僕は思ったが、間もなく彼はトワイニング公爵家の第一公子である、ルイス公子だと紹介があったので、僕は思わずちょっと声を出しそうになった。

しかし僕が兄さんの顔を見ると、兄さんは僕を一瞥するだけだった。兄さんはいつも通り、特に表情も動かさないのだが、それから読み取れたことは、兄さんはこの公爵様に心を許してなどいないということだ。

「とうとう侯爵様になられるとは、ギルバート卿はお若い頃から本当に頑張っていて、ご立派ですね。僕は感心します」

やや太めのルイス公子が兄さんに言った。

トワイニング公もバンナード公子も長身で、少なくとも容姿はかなり整っているのに、彼は何だってこんなに落差があるのかというくらい、見るからに大したことがなかった。背も低めだし、顔つきからして愚鈍そうで、腹が出ている。

だから背が高くて見栄えがよくて服装にも隙がない兄さんと並ぶと、

悲惨なくらいだった。

「お褒めに預かり光栄に存じます、公子」

「ギルバート卿は、そのように堅苦しくしないでください。僕らは年も近いですし、きっといいお友だちになれるって思うんですよ。ピーナッツみたいに。

僕にアレクシスっていうお姉さんがいるって聞いたときは驚きました。トワイニング家では、この話でいま持ち切りなんです」

「左様ですか」

「トバイア公は本当に、実に鬼畜です。彼は僕のこともよく馬鹿にする嫌な男でした。このウスノロって言って、会う度に馬鹿にするんです……。でも貴方は僕を馬鹿扱いしないから好きですよ」

ルイス公子は、おっとりと言うよりは、随分間延びしたような話し方で、暢気に兄さんを褒めていた。それから僕を見た。

「彼が弟君のアレックスですか？　僕にもバンナードっていう弟がいるんですけどね。誰に似たのか、すごく優秀で頑張り屋の弟なんですけど……。

彼は何処となくバンナードに……、いやそれより父上だ、彼は僕の父上の若い頃に、似ているような、いないような……？」

ルイス公子がこれが意外に鋭く、僕の顔を不思議そうに見だしたので、僕はどうしていいか分からずまごまごした。

「公子、それは貴方様の気のせいでしょう」

兄さんがそれを遮って言った。

「申し上げました通りアレックスは、これの母親に顔が似ていると

もっぱらなのです。これを生んですぐに死んだ、我々の母にです」
「そうですか……、それはお気の毒に。でも肖像画にある父上がお若い頃って、本当にこんな感じだったんですよ。人畜無害そうな、ちょっとほっとけない感じの若者。
それでお祖母様がそんな父上を手放したがらなくて、父上はずっと彼女の操り人形だったんですって。ほら、何だかこう、あれっ、見てくださいアレックスの目の色が父上に。ほらここの光彩の」
「貴方も細かい方だ。気のせいですよ」

兄さんは僕の肩を押して公子から引き離すと、説明するのが面倒臭くなったのか、自分がルイス公子に顔を近づけ念を押した。

第２４５話　佳客（２）

それから兄さんと公爵様の会話は進み、それで僕が分かったことは、とにかくアークランド公が、とうとうトワイニング公に探し求めた彼の娘の居場所を打ち明けたので、彼は息せき切ってアディンセル家の居城に駆けつけたということのようだった。

しかし、それがほとんど突発的な訪問だったために、まさか年配の公爵本人を追い返すわけにもいかず、兄さんは本日の予定に急遽このトワイニング公爵との会見をねじ込まざるを得ず、時間が押して、それであまり歓迎していない感じになっているということなのかもしれない。

しかしそんなアディンセル伯爵側の都合などお構いなしに、トワイニング公は今にも涙を流しかねない表情で、アレクシスがこれまで長い間、トバイアにどんな仕打ちを受けていたかを知り、嗚咽を漏らして泣いたことを延々兄さんに打ち明けていた。

それによって、この方はとても温和でお優しい方なのかもしれないが、僕の目から見ても少し世俗から離れているような気質の方なのだろうということが、何となく見て取れた。

それは、先日ほとんど見ず知らずの僕に、泣きながらアレクシスのことをたずねたこともそうだし、今だって初対面ではないにしても、息子くらいの年齢の、地位も低い兄さんを相手に、そんな弱みになるようなことまですっかり話してしまうことからしてもそうだ。

これはたとえばそう、まさに聖職者――、神殿の奥で生きている高位の聖職者のような、聖なる父に心身を捧げ、人を信じるということに疑問を感じない……、悪く言えば、少々危ういタイプだ。

女であればそうした気質も純真無垢とか優しいとかいうことで済むかもしれないが、仮にも公爵家の当主がこれでは、生命や財産が幾らあってもたりない。この人の好さでは使用人にすら騙されかねないのではないかと、僕が心配になるくらいだった。

これは、リドリー・トワイニングという方は、余程周りに恵まれた方なのだろう。こういう彼の気質を分かって、上手く助けてフォローしてくれる有能な側近たちに。そこには勿論、彼が長い年月積み重ねて来た高い人徳があるのだろう。

トワイニング公の正直すぎる打ち明け話に、兄さんも面食らっている様子だった。

「そう、涙を流されましたか……」

「はい……、とても、とても……」

「僕も泣きましたよ父上。まさか母上の違う姉上がいるなんて、それだけでも信じられないことだったのに、まさかそんなことになっていただなんて……。ねえ父上」

「ええ、ええ、本当に」

「あまりにひどくて、耐えられず、昨晩はデザートの蜂蜜のプディングが食べられなかった。この世に神は存在しないっていうんでしょうか？」

そしてルイス公子は、この父親の気質を更に凝縮して受け継いでいらっしゃるようだった。

やがてリドリー、ルイス親子の涙まじりの話では、埒が明かないという顔を兄さんがしだした頃、公爵の側近らしい一人が、きびきびした話し口調で公が娘に会いたいと思っていることを要約した。

兄さんは救われたような顔をして了解した。

「そのように嘆かれる猊下の事情は重々お察しております。ただアレクシスは、件のことから男性を嫌悪しています。率直に申し上げて、猊下のことを父親と認識することもできないでしょうし、恐らく貴方を泣いて怖がりますが、面会にあたってそれをご承知頂けますか」

「泣いて怖がる……、ああ！　何という仕打ちでしょう。神よ……

！」

遂には大きく十字架の印を切って、両手で顔を覆って泣き出すトワイニング公を、兄さんはしらけた目で見ていた。兄さんはあまり公爵様に同情していないようだった。

貴公がティファニー母子を見捨てれば、当然こうなることは予想できただろうという顔だと僕は思った。己の保身でティファニーをやり捨てにしたばかりか、娘ごと放り出したくせに、というわけだ。しかし公が顔をあげるとすぐに抜群に愛想がいい、心からこの父親に同情しているような顔をするのはさすがだった。

「公爵様は動転をなさっているのです」

リドリー様の別の側近の一人が、見ていられないというように兄さんと僕に再び注釈した。

「今は悲しみが込み上げてきているだけのこと。お優しい方なのです。我が子の生きた道を辿って、苦しみのさなかにおられるのです」

「あの子が正気を失くしているというのは聞き及んでいるのです」

涙を拭いながら、側近のフォローなど物ともせずにトワイニング公は言った。

「すべては若かりし日の私の見通しの甘さが招いたこと。ティファニーは実家に帰れば食べるのに困らない階級だと思って……、女だてらに公費留学をするくらい期待のかけられた、頭のいいお嬢さんでした。彼女は両親の自慢の娘だったはずです。それが、まさか実家にすら縁切りされているなんて……。

ギルバート卿、何故、前伯はそこのところを助けてはくださらなかったのでしょうか？」

「お言葉ですが公爵。結婚もせずに男と姦通したというだけで、女がどれほど評判を落とすことになるかお分かりでしょうか。ましてや子供を抱えていれば、その事実は誤魔化しようがない。特にこの北部では女の貞操観念に対する意識は厳格であり、ひとたびそんなことが起これば本人だけではなく親戚の娘が全員淫乱女の容疑をかけられるのが常でしょう。以後三代はまともな結婚話も来なくなる。みせしめとして、やむを得ない措置です。

我が父は路頭に迷いかけていたティファニー救済に尽力した。寡男と娶せ、批判を黙殺し、各方面の被害を最小限に抑えた我が父の判断は適切であったと考えます。それによって彼女は新たな名誉を得た。妻という立場を」

兄さんの言葉に抑揚はなかったが、その目は多少厳しかった。もっとも僕としては、それを言うなら兄さんは、ご自分が食い散らかした女たちに対してはどう考えているのかという、根底的な疑問が、湧き上がって来るのだが……。

「では、ティファニーは結婚をしたのですね……、今は幸せでいるのでしょうか」

戸惑い気味に、トワイニング公は言った。

「恐らくはそのように思います」

兄さんはしれっと答えた。

トワイニング公はしばらく兄さんをみつめていたが、やがて後悔を吐き出すように再び顔を覆った。

「すべては私の間違った決断のせいです……！」

トワイニング公は再び泣き出し、ルイス公子と、彼の側近たちがおろおろとしてそれを慰めた。

第２４６話　住客（３）

トワイニング公が落ち着くまで、三十分ほど時間を要した。
その間、僕はなぜ自分が呼ばれたのか分からないまま、たまにルイーズと視線を交わしあったりした。兄さんはあんまり機嫌がよくない感じになりつつあったが、相手が相手だけに怒るわけにもいかないということなのだろう。状況が落ち着くのを静観していた。
やがて涙を拭い、何とか悲しみの底から立ち直ったトワイニング公が唐突に言った。

「伯爵、私は聖王女の子孫として、実は、アレクシスにはひとつ試してみたいことがあります」
「試してみたいこと？」
「ええ。私はある方法を用いることで、あの子に人生を取り戻させてやりたいと思うのです。そしてこれまでの分の償いがしたい。そのために、ひとつ考えがあるのです」

これまで愛想のいい笑顔ながら、早く帰れという雰囲気を遠慮なく漂わせていた兄さんが、はじめて自発的にトワイニング公に興味を向けた。

「人生を取り戻す……？」
「父親として、せめてあの子にしてやれることがないか、私はずっと考えていました。生活を整えてやることや、戸籍の問題……、当主となった今の私にはいろいろなことをあの子に与えてやることはできるでしょう。
しかしそれよりも、もっと私にしかできないことがあるのではないか。父親が娘を守ることはごく当たり前のことです。極論を言えば、女にとってもっとも信頼ができる男とは太古の昔から父親のはずで

す。夫は他人ですが父親はそうじゃない。父親だけはいつでも娘を、どんな人生の苦難からも……、私がやらずして、誰があの子を護ってやることができるのか――、私は最初からこのことを最優先に考えるべきだったのです。そうすれば今頃は……」

トワイニング公は再び目を押さえた。白い衣装の側近が手際よく素早くハンカチを差し出し、彼は目もとを拭って続けた。

「とにかく、私が言いたいのは、アレクシスの精神を苦しめるその耐え難い痛みを、取り払ってやることができるかもしれないということです。気がふれてしまったあの子に人生を取り戻させてやるということ……」

「それは、アレクシスは正気に戻る見込みがあるとおっしゃるのですか？」

兄さんが身を乗り出してたずねた。

「まだ断言はできません。トバイア公の魔術師、いや公ご本人さえ、気つけの魔法くらいは当然操ることができたでしょうから、彼らにはアレクシスの気がふれてしまったのを、人為的に戻すことは可能であったはずなのです。

抵抗のできない娘たちを閉じ込めて、十年、二十年という長期間に渡りむごい仕打ちを平気で繰り返せる輩ですから、トバイア公は恐らく……、虐待による傷を行為後治癒させるなどして、娘たちを繰り返し徹底的にいたぶっていたはずなのです。

これは罪人を死なない程度に痛めつけて、失神したら休ませ、再び回復ののち痛めつけるという、つまり拷問刑の基本と同じことです。トバイア公の魔術師マスター・シリウスは殺傷魔法に天分を持つ恐るべき魔術師でしたが、それ以外の分野に関しても相当の知識量を誇る魔術師でしたし、王族であるトバイア公ご自身は神聖魔法を得

意とされていた。
ですから、彼らは恐らく何度もアレクシスを元に戻そうとしたでしょう。某かの禁呪を用いてでも、実際強制的に戻していたはずです。公が泣き叫ぶ女を痛めつけるのが趣味だったというハワード卿の証言が確かなのであれば、愉しむためには女には最低でも正気がある必要がある。小手先の技術程度では、もうアレクシスが正気を維持できないほどの虐待が、あったとみて間違いがないでしょう。先ほど、そこに控えていらっしゃる、伯爵の魔術師の方の説明によれば、アレクシスは気つけの魔法を施しても、正気を維持できずにすぐ気を失ってしまうということですが……」

トワイニング公は兄さんの執務机の脇に控えているルイーズを示し、話を続けた。

「それは魂すら破壊されかねない凄惨な拷問に対し、精神防衛の最終手段を彼女の無意識が採っているということなのだと思います。アレクシスにそれ以上の軽率な施術をしないでくれたアディンセル家の魔術師の方々には、かえってその気遣いに感謝をしなくてはならないでしょう。
しかし……、神は我々にひとつの恵みをお与えくださいました」
「恵みとは……？」

兄さんが言い、ためらいがちにトワイニング公は答えた。

「……実は、アレクシスは、ウィシャート公との間に、子供を一人生んでいるのです。あまりにむごく、許されざる経緯によって生まれた娘ではありますが、私の孫娘です。
その娘は名前をマリーシアと言うのですが、マリーシアは神聖魔法使いとしての才に優れております。きちんと教育をしてやることで、恐らくステラの神官姫、神聖魔法の使い手に育てることができるで

しょう。

マリーシアは己の生まれすら分からぬまま、トバイア公の息子に使われていたようですが、まだ専属呪術契約がなされておらず、その期間が僅かであったことや、十五歳の若年ということ、そしてフェリア殿下に似た面影、何より私の友人であるハワード・アークランド公の尽力によって、今は陛下より特に免罪の恩赦を受け、祖父である私が身柄を預かり受けております。

トワイニング家が、聖王女ステラから連なる特殊な家系であるということはご存知でしょう。まだ国家体制が現在の形に整えられる以前、女も公爵を名乗れた時代に、聖王女が始祖となった成り立ちの家系なのです。男系男子が徹底されるようになったクラウン王の時代に、王子が婿入りして以降、男系相続が遵守されてはおりますが……。

しかし唯一建国王から直接分家されたという意味で、我が家の立ち位置は今でも少々特殊であり、それが証に我が家には聖イシュタルより伝承されし秘宝の杖があります」

「聖杖……」

兄さんが呟いた。

「そうです。聖イシュタルの聖遺物を授かりしは、イシュタルの子供であるクラウン王子が継いだローズウッド王家と、ステラ王女が興したトワイニング公爵家、この二つのみです。

聖イシュタルが天空に還るとき……、演劇などでは愛する人を失った聖女の悲嘆ばかりが注視されがちですが、彼女はセリウス王との間に授かりし勇ましき聖王子には神剣ファム・ファタールを、たおやかな聖王女には聖杖パルファン・コンプリスを残しました。自分がこのサンセリウスの地を去った後も、兄と妹が手を取りあって、愛しい方と暮らしたこの国を守って欲しいと……。

サンセリウス王の代々の継承の証たる神剣については知っての通り

ですが、トワイニング家にも後者が現存します。その杖パルファン・コンプリスには聖イシュタルの祈りと霊力が込められており、魔術を超えた様々の奇跡を起こすことができると言い伝えられております。

但し、パルファン・コンプリスは、ファム・ファタールが代々王位継承者に受け継がれていることとは少々事情が異なり、トワイニング公爵家の当主の家督継承の証明というわけではありません。それは、パルファン・コンプリスを身に帯びることが許されるのは、星の聖女の代理となれる者……すなわち、ステラの一族でもっとも若い姫に限られるからなのです。

我が家では後継ぎの男子以上に、女子の誕生が歓迎されるのはそのためなのですが――、ですから、ティファニーにアレクシスが生まれたとき、私はこれで晴れて結婚が許して貰えると思ったものでしたが……、何という不運でしょう、愛しいアレクシスには魔力がほとんどなかった……。

そのためにアレクシスは杖を操る能力に欠き、一族の者たちには、歓迎どころか救い難い出来損ないなどと罵られ……、ティファニーとの結婚を許して貰えるどころか、最後にはアレクシスが私の娘であるという主張さえ、取り消されてしまったのです……。

トワイニングの直系の娘が魔力なしなど、考えられないことだったからです。これは腹が悪いせいだと、ティファニーも随分責め立てられました。

今から思うとアレクシスがそのように生まれたことには、きっと何か大きな理由があったに違いない……、私は父親として、娘の可能性を信じてやるべきでした。

ですが当時の私は若く、ただただ娘の不運を、そして愛する人と結ばれ得ない我が身の不運を悲しんでいることしかできなかった……。

「あの赤ん坊は、本来生まれてはいけない娘だった。おまえとティファニーの組み合わせは、背徳の組み合わせであったから、聖イシュタルが罰を下したのです」そう母に諭され、愚かにも私はそれを

信じた……」

兄さんが僅かに失笑した。

「すみません、話がそれてしまいました」

リドリー様は目もとを拭い、続けた。

「とにかくトワイニング家の娘は、スタープリンセスと言って……、これはクラウン王子がスタープリンス、ステラ王女がスタープリンセスと言われていたことの名残です。二人は半神であったために、そういう煌びやかな呼ばれ方をしても抜群に絵になったのだそうで……、それでとにかくトワイニング家の娘は、スタープリンセスと言って、二百年前までは、神殿に仕える国内でも王女殿下に次いで権威のある娘であるとされていたのです。

現代に生きる聖女として、杖の力を引き出し、能力の高い娘であれば母なる聖イシュタルそのものと交信すらできると言い伝えられております。

が、姫でなければ、いかに優秀な魔力を持とうともその杖の力を引き出すことはできぬのです。男では、いかにステラの子孫であろうと、ステラの代わりにはなれない――、だがアレクシスはマリーシアを残してくれた。しかもマリーシアは神聖魔法の能力が高いのです！　まるでアレクシスの分までも、聖なる魔法を操る才を注がれたように」

「純粋な疑問ですが、アレクシスが産んだマリーシアというのは……」

兄さんが公爵様に質問を口にした。

「はい」

「あれは女系女子ではないのですか。いかに筆頭公爵家の血を引き、外貌がフェリア王女殿下に似通っているとは申せ、あの娘はそう有難がるような大層な存在なのですか……。
アレクシスならばトワイニング男系女子、トワイニング家に属する娘であるというのは分かるのですが、マリーシアとなるとこれは……、もはや血統は意味をなさないのでは……」

トワイニング公は優しく微笑した。

「その疑問はもっともです。しかしこれは私の推測ですが、聖杖はファム・ファタールが持つ男系継承の法則とは、少々異なる理由から創られたものだったのかもしれません。恐らくイシュタルは、当初は我が国の神殿祭祀を代々ステラの血を引く姫に任せようとされたのかもしれない、つまり女系継承です。
セリウス王の治世の数十年間、今となっては信じられない話ですが、ご存知のようにサンセリウス王国はほとんど男女が同権だった。サンセリウスとはそもそも前王国の極めて不公平な国家制度、ごく一握りの特権階級ばかりが権利と富を独占し、それ以外の人々は人生に自由も楽しみもない、あまつさえ奴隷制度までが横行した悪夢の王国を、若きセリウス率いる反乱勢力が打倒したことで、築き上げた王国です。
けれども息子のクラウン王は父親の理想を引き継がなかった。彼は夢と理想の実現に生涯を捧げた夢想的革命家の父親とは正反対と言ってもいい現実主義者であり、セリウスの見た夢と理想によって社会に生じる歪みや負の部分のほうをよしとしなかった。
だから彼は即位以降、大幅に国家を改造し、奴隷制こそ排除されたもののサンセリウスをそれまでの前王国をこそ踏襲したような王国、つまり現在の形である男系継承を基軸とした封建社会として国家制度的に固めるに至ります。
そしてそれを機に女子の家督継承という概念自体が葬り去られたこ

とで、イシュタルは聖杖の継承の法則を、後から変えざるを得なくなってしまった」

トワイニング公爵は話を続けた。

「よって現在においては、ステラの代理、星の神官姫となれる者……、つまり杖に主として選ばれるのは、代々その時代のトワイニング家の当主から見て、彼の血統内でいちばん年齢の若い娘が選任されるようです。娘というのは、息子の娘でも、娘の娘でも、そこは構わないようです。

つまり現在は、私リドリー・トワイニングが聖杖継承の起点であり、根拠となっているのです。ですから私から見て親族内でいちばん若い姫が、神官姫となる。

もし私に何かあって、ルイスが当主となるときがきたら、そのときはルイスの家族の中から新たに神官姫が選ばれる。その場合は、マリーシアからはその権利が消えるでしょう」

「なるほど」

「私が見たところ、女神イシュタルと交信ができるとまではいかないかもしれませんが、マリーシアは神聖魔法使いとしては私以上の能力を持つ実力者です。

聖杖の力を借りることによって、アレクシスの悲劇的な記憶を完全に封印することは、マリーシアにはできるでしょう」

トワイニング公は表情を引き締めた。

「他人の記憶へ干渉する手段は通常としてもあります。魔法や催眠はその最たるものでしょう。

しかし記憶とは魂に刻まれるものであり、魂とは叡智の存在です。

我々の小手先の技術で、ひととき記憶を忘れたように思わせる手段はあれど、それは表層意識から一時的に取り払われるばかりのこと

で、完全なものではありません。
しかし聖イシュタルの霊力が宿るパルファン・コンプリスを使いこなせれば、星の女神の御力を借りて、忌まわしい記憶の封印を、表層意識だけでなく、魂の奥深くにまで干渉して、完全に仕上げることができましょう。
現在のアレクシスを苦しめているのは心の傷……、出血の止まらないひどい記憶であるはず。それを消します。
つまり監禁された十四歳からつい先日まで、二十年間の悲惨な記憶を、事実上なかったことにしてやることで、新しい人生を歩ませるくらいのことは、できるかもしれません。いえ、マリーシアほどの能力があれば、恐らくそれはできると思います。
とても皮肉な話ですが、マリーシアを介して、私の娘を苦難の人生から救済する奇跡が、実現できるかもしれないのです」
「上手くいきますか」
兄さんが、感銘を受けたように瞳を揺らした。
トワイニング公は力強く頷いた。

「ええ、もし神がこの世に存在しているのなら、必ず。
いと高く、慈悲深き天の御方が、可哀想な小さなアレクシスを、もうこれ以上御見棄てたもうはずがありません。
仮にそれがアレクシスに決められていた宿命であったとしても、それがもし神の壮大なる御計画や御意思に反する罪だとしても、それならばその罪はすべて私が被ればいい。父親である私がすべてを引き受けましょう。我が娘のために」

第２４７話　佳客（４）

面会をしたはいいが、案の定アレクシスに怖がられ、泣く泣く寝室から撤退して来たリドリー様は、一端はご自分の所領へ帰られることになった。

その日、兄さんは前々から謁見予定があったようで、時間が来ると公爵には礼を払った上でルイーズをともない出かけて行った。しかしアレクシスを助けられそうな展開は兄さんとしても思いがけなかったのだろう。かなり後ろ髪を引かれる様子で、公爵様に丁重にするように、僕に言いつけられた。

アレクシスが正気に戻れるというのは、僕にとっても何よりの朗報だった。やっぱりお母さんとは、いろんな話をしてみたい。でも十四歳から先の記憶を完全消去してしまおうというこの計画によって、リドリー様がおっしゃるには、アレクシスの時間はもしかすると十四歳当時に戻ってしまうかもしれないということだった。つまり経過した身体的な時間を巻き戻すことはできないが、記憶やそれに基づく経験、歳月をなかったことにするためで、つまり精神年齢とか、発達段階みたいなことだと思う。

それでは僕のお母さんを期待するのは、難しいだろうと、僕は内心の思いは口にしないでおいた。十四歳の女の子には、赤ん坊を可愛がることはできても、二十歳の男のお母さんはできないことと同じ理屈ということだ。でもそれは仕方がない。

概観としては、アレクシスは十四歳のときに悪い悪魔の魔法にかかって、それ以来ずっと眠り続け、そして次に目覚めたときには二十年の歳月が経過していたというような形にするらしい。アレクシスが傷つかないように、できるだけ優しいお伽話めいた具合に持って行きたいとリドリー様が言い、兄さんが賛成していた。

「目が覚めたら、あの子には父親がいるのです。もうあの瞳を曇ら

せるものは何ひとつないのです。そしてこれまで悲しく心細い思いをさせてしまったことを償います。

ギルバート卿、私はアレクシスをトワイニング公女として我が城に迎えようと思うのです。ルイスも納得してくれていますし、恐らく妻や周辺の者たちも説き伏せることはできるでしょう。妾腹の公女という扱いになりますが……、あの子は男子ではないから、バンナード以下の継承順位に影響が出ることもない。私が希望を強く言えば、それほど反対者は出ないはず。私の評判は傷つくでしょうが、そんなことはあの子の最善の幸福に比べたら些細なことです。

あの子のために素敵な部屋や庭園を用意して、これから先の人生は、本来あるべきだったトワイニングの姫君として、心安らかに暮らせるようにしてやりたいと思うのです。ティファニーと共に暮らすことはもはや叶いませんが、娘のアレクシスと共に暮らすことなら許されるはず。それでアレクシスの不遇や不名誉をすべて払拭できるとは限りませんが、少なくともこれまでよりも格段に、世間のあの子に対する待遇がよくなるでしょう」

「猊下、例の……、聖杖による施術は、いつ頃行うことができますか」

「マリーシアもまた私の手元に来て、まだ日が浅いので、まずはあの子のことをこれからいろいろと教育してやらなくてはなりません。何しろ、マリーシアもまた母親の人生を継承したかのような悲惨な思いをさせられて暮らしていたのです。トバイア公も、さすがに自分の血を引く娘を寝所に連れて行くような真似はしていなかったようですが、女子にはそれ以外に使い道がないとばかり、あの子はなんと、トバイア公の別荘の床磨きをさせられていたそうです！」

「……」

「可哀想に、マリーシアの手はひどく荒れていました……。世が世なら、今頃は華やかに着飾って、人々の称賛や喝采を浴び、血統から言えば十分、フレデリック殿下のお妃になることだって叶う娘がですよ。

それなのにマリーシアは貴族の娘らしい振る舞いも知らず、幸いも知らず、教養も与えられず、いつもおどおどびくびくして……、あの子はね、相手の顔色を必死で窺うのです。内気な性格もあるでしょうが、可哀想に、それは彼女が常にそういう無惨な扱いを受け続けて来たという証左なのです。

私は本当に、女や子供を見捨てるという決断が、後にどのような影響を及ぼすのかということを、身を持って思い知りました……。だからこれから先は私がアレクシスとマリーシアを抱きしめてやらなければ……。家族を守るのもまた父親の仕事なのです。ルイスもバンナードも今では私の手など必要ないほどに大きく逞しくなりましたが、これからはアレクシスとマリーシアが私を頼ってくれるはず」

「なるほど、家族が増えて……、ですか」

「はい。しかしここはマリーシアが頼みの綱ですから、まずはどうにかしてあの子を一人前の神官姫に育ててやることが私の使命だと考えています。現在は神聖魔法について、そして聖杖を扱う心構えや伝統などを教え込む過程にありますが、ひとまずはあの子に杖を持たせ、すぐにでもご連絡を差し上げます。それからもう一度、今度はマリーシアもまじえて話を致しましょう」

「分かりました」

「ええ。それでアレクシスに……、伯爵、私はあの子になんて言葉をかけたらいいでしょう。私は父親でありながら、アレクシスの性格も知らないのです」

「アレクシスは……、内気でしたよ。確かに、いつも周りの顔色を窺っていた。ティファニーの嫁ぎ先では、連れ子などむごい扱いだったようです。おとなしい性格で、気が弱すぎて友人もできず、いつも不安そうにしていたから、私が守ってやると約束をした……」

「そうですか……、それはさぞかしアレクシスも心強かったでしょう。貴方のことをきっと本当の弟のように思っていたことでしょう」

兄さんは曖昧に頷いた。

「アレクシスが私をどう思っていたのかは、今となっては自信はありません。彼女は何かにつけあまり意思表示をしていなかったようにも思うのです。しかし私はこの通りの性格ですから、何でも意見を押しつけていたかもしれない。

アレクシスが目覚めたら……、私は彼女を眠り姫と呼んであげましょう。その後のことは、今はまだ分かりませんが……。

いずれにしても猊下のご配慮の許、今後アレクシスがあの白亜の城の公女として心安らかに暮らせると言うのなら、私に異存はありません」

「かつては弟のようだったギルバート卿が、こんなにご立派になられているのを見たら、アレクシスはさぞかし驚くのでしょうね。年下の少年だったはずの貴方が、目を覚ましたら一人前の大人の男性になっている。まるでお伽話のようですが、二人の再会も楽しみです」

それから出立した兄さんに代わって、僕がリドリー様たちの接待役を務めたのだが、その間アレクシス以外のことで頭の中に渦巻いていたのは、マリーシアのことだった。

マリーシアが父親が異なるにせよ血の繋がった妹である以上、もはや異性として考えるべき相手ではなかったし、僕としてもそういうつもりではあるが、彼女の名前はやはり耳に心地がよく、その無事を知って気持ちは躍った。

それに僕の妹と言うなら、恋愛の対象として見ることはもうできないが、僕も兄として、彼女のためにできることはしてあげたい。

マリーシアがトバイアのことをどのように思っていたかは分からないし、どんな待遇だったかも詳しくは分からない、それでもオーウェル公子と同列に扱って貰っていないことは明らかだったし、今だって全然面識のない家に預けられて、もしかしたら不自由な思いをしているかもしれない。

リドリー様はお人柄からして、可哀想なマリーシアを虐待するような人間には思えないが、たとえ彼がそうであるとしても、彼の細君はどうだろうか？　結婚前に夫が他所の女と関係を持ち、子供を生ませていたというのは面白くないだろう。更にその孫娘を預かるなんて寝耳に水の話だろうし、いかにも邪魔に思うんじゃないだろうか？

それに長男のルイス公子だって、妻帯者とは言っても、彼は男だ。彼の細君は現在妊娠していて、今はとにかく大事にしなければならない身体だろう。夫婦は長らくご無沙汰かもしれない。おまけに言ってはあれだがルイス公子は少々頭が弱そうだ。そうなると、幾らマリーシアとは叔父と姪の関係になるとは言っても、居候の、家族の一員として認識しているわけでもない、立場の弱い美しい少女を見て、果たして欲情しないと断言できるだろうか？

弟のバンナード公子だってそうだ。彼は普段は王城に詰めていると言っても、美少女のマリーシアの話を聞いて突然帰って来るかもしれない。リドリー様の話だと、バンナード公子は二十二歳だそうだ。二十二歳。いかにも盛りがついている年齢ではないだろうか。十五歳のマリーシアからすると、二十歳は素敵なお兄さんだろうが、二十二歳なんて立派なおじさんだ。しかしバンナード公子はロリコンかもしれない。

そしてこんなことをずっと考えている僕はいったい何だ？

廊下には僕と共に、リドリー・トワイニング公爵一行がいる。ルイス公子が親しく僕に話しかけてくれている。彼は思った以上に親しみを込めて僕に接してくれているのだが、会話の内容が延々お菓子の話なのがいただけない。お菓子か、とにかく食べること。たぶん食べ過ぎででっぷりとつき出た腹……、彼の細君は、公爵家の跡取りという以外には、このルイス公子の何処かに惹かれる部分があるんだろうかと、余計なことを考え、それから男は地位と金さえあれば、だいぶ見た目が見劣りしても本来なら見向きもされないような女を、掴まえられるというような話を思い出した。

ルイス公子がせめてお菓子の専門家であれば有難く話を傾聴することができるのだが、しかし彼の口から出て来る話は大して内容のない、幼い子供が言っているような食べた感想ばかりだ。おおよそ中身がない男と、これは判断せざるを得ないほどのなんと言うか……。僕なんてこの人に比べたら全然ボンクラじゃないと自信が持てるくらいの……。

こんな程度でも公爵家の長男として生まれれば、それで一生の安泰が約束され、立場を得るための努力も要らなければ何にも困らない……、当主になったら困ることもあるかもしれないが、愚物でも毒のない性格のようだから、出来のいい弟や、側近が敵対せずに助けてくれていれば、結構何とかなっていきそうな……。

しかし、そういうふうな勝手な推測で彼を見たら、たぶん失礼なのだろう。僕は彼のことをよく知りもしないのに、勝手な見解で他人の内側を決めつけるべきじゃない。もしかして僕がそう感じているのは、若い僕にはまだ人間を見る力というものがなく、僕の見る目の未熟さによって、物事が浅く見えているだけかもしれない。事実、公子はすごく優しい人のようだ。彼の細君は、そんな彼の優しさをすごく愛しているかもしれない。

第２４８話　佳客（５）

またすぐそこでは、白い衣装の年配の魔術師らしき人物が、リドリー様に何かしら苦言を呈しているようだ。性急すぎだとか、保証ができる段階じゃないと話している。六十歳くらいの人が喧々諤々やっているのは、たまに兄さんの執務室でも見る光景だから驚きはしないが、しかしリドリー様は、おっとりした対応であまりそれを取り合っていない。

リドリー様と僕が似ていると、ルイス公子などは言うのだが、僕は彼ほどお人好しじゃない気はしていた。外見だけでなく精神性もまた子孫に遺伝していくものだとすれば、僕はちゃんと兄さん寄りの部分も持っているのかもしれない。僕には人をぶった斬っておいて高笑いできるほどの豪快さはないが。

もっともそれに関しては、僕は同時に納得できないものを感じてはいる。つまり魂とは個々人の個性というものを、生まれたときから有しているのではないかということだ。赤ん坊や幼児にも、既に性格的差異や個性はあるらしい。僕が赤ん坊や子供に触れる機会はないが、自分を思い返してみても、環境や家族の影響だけがすべてではない部分はあるだろう。

そうでなければ、たとえばサヴィル男爵夫人は大変慈悲深い、いい評判しか聞かないような女性なのだが、そんな優しいお母さんがいる羨ましすぎる環境で育ったのに根性悪に育つオニールの説明がつかない……。あいつが最初から嫌な奴という個性因子を持っているから、顔も悪いのに性格も悪いという、どうしようもない人間になったということだ。

しかもお母さんが優しいために、駄目な息子を無駄に甘やかしたり褒めたりして、そのせいでオニールが分不相応に自己評価を上げ、調子に乗ってしまったという悪因果関係さえ導き出せる。

そもそもがあいつはお母さんがいない寂しさや苦しみも知らないで

のうのうと生きている、許し難い奴なのだ。お母さんがちゃんといて、いつでも可愛がって貰える奴が、お母さんがいない僕を苛めていたなんてこんなふざけた話があるだろうか。どう考えても普通は逆なのに。そして結局僕にはお母さんは戻りそうにないのだ……。

「とにかく未来のことを考えましょう。全員が幸福になれる未来の可能性を探るのです」

リドリー様は、言い募る白衣の年配魔術師に言った。

「猊下、そんな大雑把なことより、とにかく私の話を聞いてください。重要なことです。私は伯爵の魔術師が怪しいと思うのです」

「怪しいとは……、いかなる意味でしょう？」

「貴方様もこの際そらとぼけるのはよすべきでしょう。何を素っ頓狂を仰せなのです。彼女には露骨なまでに光の精霊が取り巻いていたではありませんか。怪しいなんてものじゃない。あれは聖典にある聖ステラについて書かれている特徴そのものです。私はあんな壮麗な守護は初めて見ました。精霊たちが彼女の周りに自然と列を成し、手を取りあってワルツを踊っているのですよ。それだけじゃない。あの娘一人を護るためだけに想像を絶するおびただしい数の精霊やら何やらが取り巻いている。

猊下と彼女が同じ部屋に入った途端に、それらがみるみる湧き出して……、あれだけの見えない存在からの守護があれば、彼女はどんな危機に面しても必ず護られてきたでしょう。

断言してもいいですが、我が国に王女殿下がいない以上、彼女は現行もっとも尊い女性であり、しかも聖女と言ってよろしい存在です。あの魔術師はともすると、女神イシュタルと交信できるほどの者かもしれませんぞ。猊下もこの特異さにはお気づきだったでしょう。これは精霊たちが我らに真実を伝えるために、敢えてあのような行動に出たに違いないのです」

「ああ、あの方は随分と才能がおありのようでしたね」
「才能ですって？　才能ですって？　あれは才能どころの話じゃないでしょう！
猊下、もしかすると我々はまだ何か重大な見落としをしているのではないでしょうね？
そもそも最初から、何かが間違っているのではありませんか。あの伯爵はあまり歯切れのいい態度ではなかったし、何かを隠しているようでもあった。
先刻の女性は、我々が探している姫君とは、まったく別人ということはないのですか。年頃といい、魔力の質といい、実はあの魔術師がプリンセス・アレクシスなのでは？　いや、私はほとんど確信に近い形でそれを直感しているのです」
「では貴方は、トバイア・ウィシャートのところに送られたのは、そもそもアレクシスではないと言うのですか？」
「そうです。ええ、そうです！　何故ならアムブローズ・アディンセルはティファニーの子供が誰の子供であるかを承知していたはずです。前伯が義理を知る男なら、身代わりの娘を用立ててくれたのかもしれない。そしてアレクシス姫のことは以降別人の魔術師として仕立てた」
「いえ、それは考えられません。何故なら、私がアレクシスを見間違うわけがないからです。アレクシスは確かに間違いなくあの子でしたよ。貴方はそのような不確かな疑念は収めておきなさい。突然の訪問を受けてくださったアディンセル伯に対しても非礼が過ぎるでしょう」
「まだそんな分からないことを。若者に毛が生えた程度の青二才のことなど、もっとずけずけ問いただしてやればよろしかったのですよ！」
白衣の魔術師はリドリー様を一喝した。

「本来であれば由緒正しき聖王女の血を引きし麗しの公爵令嬢たるアレクシス様をですよ、世が世なら王妃となってさえ間違いがないというほどの高貴で優美で誉れ高き我らが姫を、あの生臭ウィシャートめなどに渡した己の罪を恥じ入り、身が縮むほどに恐縮しているべき伯爵風情が、トワイニング家の当主に対しまあ堂々としおって！！

あれは間違いなく何かを隠蔽し、しかもそれを知られんがためにはったりをかましていたのですよ。だが猊下や私のように視る力のある者にそんなはったりは通るものではない。何度でも言いますが、あの魔術師がアレクシス様ですよ！」

「何ですって？　そんな馬鹿な……」

「馬鹿も何も、そうとしか考えられないでしょう！　しかしながらあの伯爵は猊下が婚外子の姫君のことを公表できなかったのをいいことに、姫君の才能を利用するために彼女を横領し、我々や、姫君自身のことすら騙しているに違いない。あの魔術師の容姿を見たでしょう？」

「ええ、大変に美しいお嬢さんでしたね。凛としたところが、フェリア王女殿下を想起させるようでした。美しいだけではなくて、気高いのです。年頃も、殿下が生きていらっしゃれば、同じくらいだったのではと考えていました」

「注目すべきはそこじゃない、彼女は貴方に顔がそっくりじゃありませんか！」

白衣の魔術師はまた大声を出した。

「目許の辺りに至っては、まさしく貴方様に瓜二つだった。なのに貴方様はいったいどちらに目をつけていらっしゃるやら……、いいですか。と言うのも、あの魔術師が貴方の娘のアレクシス様だからなのですよ。先刻会った娘のほうもなるほど確かに似てはいたが、より貴方に似ているのはどういうわけかあの魔術師です！

つまりですよ、あの魔術師は自分がアレクシス様である記憶や認識を何らかの手法で――、恐らくは催眠術か何かで取り上げられているのでしょう。幼い頃にそれをやられてしまっては、いかなスタープリンセスと言えど抗えなかったに違いない。そしておいたわしいことに、今は適当な名前や記憶を植えつけられているのでしょう。トワイニング家の神官姫を勝手に自分の魔術師に据えるからには、馬鹿でもなければそれなりの偽装工作は行うものです。アレクシス様の記憶に架空の家族や友人、それなりの苦労話や、幼少期のありがちなエピソードを繋ぎあわせた偽の成育歴を上書きしたか、それともいっそ改名をし、最初からアレクシス様としては認識さえさせなかったやもしれない。

何しろアレクシスというお名前は、ティファニーにとってはこの世でいちばん憎い女の名前でしょう。ティファニーを下賤と切り捨て、大勢の前で吊るし上げた猊下の母君様のお名前なのですから。

かつて猊下の母君様は、手塩にかけて愛し育てた息子を育ちの悪い野良犬に盗られたと言って、それはそれは大騒ぎをしてでも貴方様を何とかティファニーと別れさせ、引き戻そうとなさっておられた。憶えておいででしょう。大奥様の決死の妨害を。ティファニーと聞いただけで優しげな顔つきが変わるほどに息子の恋人を憎んでいた。そして結果として母君様とティファニーの戦いにおいては母君様の勝利に終わったわけですから、哀れティファニーは舞台から追い出された。それ以後彼女が辿った転落の人生を想えば、自分の娘をこの世にも憎しみのこもる名前で呼ばなければならないことは、捨てられた女にとっては耐えられるものではなかったかもしれない。

名前を口にするたびに、屈辱の記憶が甦るのです。屈辱の日々の記憶がね……、ティファニーが娘にまったく別の名前をつけなおして育てたとしても、何等不思議なことはありません」

「でも、アレクシスにはあんなに優れた魔力はなかったのです」

「そうは言ってもあれほどの聖杖の資格を見せつけられたのですよ！　彼女が間違いなく当代のステラの聖女ですよ！　猊下は何故分

からないのです！

リドリー様、貴方は先刻、あの伯爵の首を絞めてでも本当のことを吐かせるべきだったのです。それを、まんまと取り逃がして。私は貴方のそのゆったりとした性格が口惜しい。あの男は今のうちに理論武装をし、今後我らを警戒して接することでしょうよ。今だって、ああしてアレクシス様の偽者を我々に掴ませようとしたのです」

「待ってください、ですからあの子は偽者ではないと何度言ったら分かるのです。確かにアレクシスは気のふれていたあの子なのです！　これに間違いはありません。伯爵は我々に嘘は言っていないですよ。

そもそも私はあの子をこの手で抱いて沐浴をさせたことさえあるというのに、私が自分の子供を見間違うわけがないでしょう。魂の匂いも、瞳の色も、ほくろの位置さえ憶えているのですよ。それを、あの子が別人であるわけがない。

では貴方にお聞きしますが、あの魔術師はいったい誰なのですか！？」

「ですからそれは私が猊下にお伺いしたいのです！　あれが神官姫でなかったら何なのかというほど顕著な特徴が出ていたではありませんか！」

「そんなまさか。でもあの魔術師はアレクシスではありません……。そんなはずはないのです。きっと貴方の勘違いでしょう。そんなはずはないのです」

「猊下、とにかくこの件には幾つかの重大な裏があるようです。第一には、アレクシス姫はそもそもトバイア・ウィシャートのところにやられていなかった可能性がある。第二に、幼い姫君に偽の記憶を植えつけ、別人に仕立て上げることで彼女自身を欺いているということ。そして第三には、アレクシス姫は本当は子供を産んでいなかったという可能性です。

それはそうですな、勿論そうです。何故なら聖ステラの聖女の資格は経産婦には宿らないのですから。あれほどはっきりと聖女の資格

が顕れていた以上、伯爵の魔術師に仕立てられし本物のアレクシス様は、やはり私の疑っていた通り、未だ子供を産んだ経験がないということです」

「それは、確かに貴方の言う通りです。でも、アレクシスが子供を産んだことがないなら、それではあの子はいったい……」

第２４９話　佳客（６）

「そうです。ですからすべては最初から、私の言う通りであるということですよ。猊下、貴方は先入観を取り払ってすべての物事をもう一度とくとご覧になってみるべきです。いったいどの時点から事実が捻じ曲げられていたのか。そして誰が当代の聖女の資格を持っているのか。

聖王女ステラは、黎明王クラウンの妹姫です。ですからどうしても当代のフレデリック王子殿下よりステラの聖女たる者が年下であるという先入観を抱きがちです。しかし現実的に考えれば、幾つも世代を経れば、王子よりも神官姫がだいぶ年嵩という組み合わせ、これだって十分起こり得ることなのです。

いずれにしても公爵に捧げられたのが偽者であり、あの魔術師こそが隠されていた本物のアレクシス様であるという現実、これをまず最初に捉えることで、この問題に関する違和感や不可解さの何もかもが見事に解決する話なのです。

猊下、こうなっては、ともかく何としてでもあの魔術師をこちらに取り返さなくてはなりませんよ。彼女がプリンセス・アレクシスなのですから、何も遠慮をされる必要などない。彼女はトワイニング家に属する人間であり、また彼女を所有する権利は父親である猊下にあるのです。あの生意気な青二才に好き勝手をさせておくべきではありません。これは戦争なのです。貴方も父親ならば、我が子のためにここは本気を出してください。内務卿殿に協力を仰ぎましょう。我らが姫君を誘拐、隠匿、監禁した罪で告発できればいいのですが」

「待ってください、何故そう話が飛躍するのですか？　貴方と話していると混乱するばかりです。……とにかく、一度戻りましょう。そして聖杖をマリーシアに持たせてみましょう。そうすれば、きっとパルファン・コンプリスは聖光を帯びて輝き、貴方の疑いがすべ

て間違っていることがはっきりするはずです」
「ああ、リドリーお坊ちゃま！　小さなご主人様のリドリー様！　私は貴方様にお仕えしてはや数十年、猊下のその見事なまでのお分かりにならないご性格にいちいち物事を事細かに説明してきちんと把握させるためだけに、いったいどれほどの余計な時間を費やして来たのでしょうね？　恐らく長期休暇をまるまる十年分は取れるくらいの年月をこの馬鹿げた解説話に費やして来たことでしょうよ！　もはや、そんな無意味なことより、アレクシス様の格好があまりにおいたわしかったことのほうを気にかけるべきでは？　今後は聖女に相応しい清楚な服を着て、公爵の娘として相応しいように髪もきちんと伸ばすように言わなければいけません。化粧も薄くするように言って……、彼女が素直にこうしたことを、聞き入れる性格ならばいいのですがね。アレクシス様は既に思想信条の出来上がった大人の年齢ですから、果たしてこちらの意向に従ってくださるものかどうか」
「あの、マリーシアの……」
リドリー様に、僕は気がつくと声をかけていた。
リドリー様たちが会話を中断して、一斉にこちらを向く。
僕は驚いて咳払いをした。

「実はあのっ、昨年の夜会で彼女とはお会いしたことがあるんです。だからその消息が分かってよかった。すごく綺麗なお嬢さんだったので、気になって……、別に変な意味ではないんです。ただ会ったことがあるからで。
それであの、僕は今月下旬からフレデリック王子殿下にお仕えすることになっているんです。来週からはもう王都に。それで、今はどっちかって言うと結構時間が自由になるって言うか、僕はアディンセル家の人間で、アレクシスのことはあの……つまりすごく彼女ってアディンセル家の所縁の人って言うか、だから僕としてもその責

任を……」

リドリー様は、僕が言わんとするところが、分からないというように首を傾げた。

「責任って？」

リドリー様は柔らかく微笑んで僕に聞いた。

僕は言い直した。

「つまり僕が言いたいのは」

「ええ」

「暇なので……、そうだ、聖イシュタルの聖遺物にすごく興味があるので今度是非見せて頂きたいんです。触ったり、しないので……、聖杖を見せて頂けたらと……。できれば使い手のほうも……」

「ああ」

リドリー様は理解したように人差し指を伸ばした。

「マリーシアに会いたいのですね。分かりますよ、彼女は本当に美しい娘ですから。

先刻伯爵にお話した通り、後日近いうちに、今度はこちらにマリーシアを連れて来るつもりです。そのときに是非、貴方のお時間を頂けたら嬉しく思うのです。

と言うのも、さすがにすぐとはいきませんが、あの子には結婚相手を探してやらなくてはとも思っているのですよ。これからマリーシアには星の神官姫としての特訓をしなければなりませんが、いずれルイスに姫が生まれれば、マリーシアは自由にしてやろうとね。

もう少し私が成長を見守って、それからいずれ相応しい花婿をみつけて、アレクシスの分まで、幸せな結婚をさせてやろうと考えてい

ます。
アディンセル家のご次男なら、あの子の相手として申し分がないです」
リドリー様は、突然言った。
「えっ？」
話の理解ができずに僕が慌てると、リドリー様はにこにこして話を続けた。
「申し分がないですよ。実はこのことを確かめたいために、伯爵には先刻貴方を呼んで貰ったのです。話の成り行き上、言いそびれてしまったのですが。
我が国の法律では、マリーシアをトワイニング公女と名乗らせることはできませんが、それでもあの子は血筋の上では筆頭公爵の娘…、ウィシャート公女ではありますし、私のアレクシスの娘なのです。やはり相手には、それ相応の然るべきお家の方を望みたい。貴方ならぴったりでしょう。だから実を言うと、私のほうもそれを考えていたところです。
勿論当てずっぽうでこんなことを言っているわけではなく、先日ハワード卿のところで貴方とお会いしたとき、私にはぴんと来たのですよ」
「ぴんと来たって……？」
「ああ、これは我々と浅からぬ縁のある青年だとね。魂の縁とでも申しましょうか。
トワイニング公爵家はそもそも神殿を預かる神官家ですから、私はその当主として、直感については自信があります。それで貴方とお話がしたいと思って、伯爵に呼んで貰ったのですよ」
「僕がですか……」

「ええ。貴方が、マリーシアによいお相手かもしれないということを確かめたいために。
マリーシアは内気な娘ですから、やはり、何事にも細やかな配慮のできる心根の優しい男が望ましい。幾ら縁があったとしても、冷淡だったり、横暴にしたり、妻女を怒鳴って言うことを聞かせるような男では、とても耐えられないでしょうから。
しかし貴方は概ね私の期待通りです。何より貴方、若い頃の私を見ているような気がするんですよ……」
「えっ」
「ルイスにもバンナードにも感じる共通点があるような……、不思議な感じがね」

すると横にいたルイス公子が同意した。

「あっ、父上もお感じになられました？　実は僕もなんです。何でしょうか、アレックスには親しみのようなものを感じるんですよね。クッキーやババロアみたいに」
「ええ、ええルイス。その通りですね」

リドリー様はルイス公子を見て、それからまた話を続けた。

「この土地はティファニーとアレクシスを育んでくれた大恩ある土地でもある、その土地の領主のご次男がまさかマリーシアを花嫁に迎えてくれるとなれば……、これは神の仕組んだ祝福の巡りあわせなのでしょう。
貴方ならばアレクシスに纏わるすべての事情を知ってくれておりますし、その上でそのように嫌悪もせずマリーシアを気にかけてくださるとすれば、ああ、これは本当に申し分がない……、是非、貴方を数に入れても構いませんか？　マリーシアの花婿候補にです」
「僕がですか！？」

「ええ」
「つまり、マリーシアが僕の花嫁っ！？」
「そうなりますね」

第２５０話　月と秘匿（１）

これから先の未来において、タティに対して誠実でありたいと思う僕は、その証にではないが、その晩思い切って昼間あったことを全部話した。僕のこうした動揺は、いつもタティを悲しませてしまうことに繋がるから、僕はタティに対する誠意を示すためにも、いっそのこと今後は秘密をタティと共有すべきだと考えたのだ。

シエラがあれこれ言ってなかなか自分の部屋に帰らないので、その間、僕は調べ物に熱中しているふりをして問題をやりすごした。面倒事から逃れるために部屋を出て行こうとすると、少なくともシエラがくっついて来るから結果的にタティだけ遠ざけることになるのでそれはできない。タティとシエラは放っておいても殴り合いになることはないし、最初はちょっと驚いたが、大抵は黙ってじりじりと距離を取りあうか、せいぜい小鳥がぎゃーぎゃー言ってる程度の喧嘩が起こるだけなので、僕は放っておくことにした。

勿論、女が不機嫌でいるときの空気の悪さったらないので、僕は書斎に閉じこもり、さり気なく耳栓を突っ込んで、生物事典を読み返した。タティやシエラのいいところは、僕が悪いという流れには決してならないことだ。すぐ僕に責任の矛先を向けて来るハリエットだとこうはいかない。……タティは怒るとたまになるけど。

ふとゴーシュのことを思い出し、暇つぶしに聖竜について調べたりしてみたが、竜族の中でも聖竜の生態は謎に包まれており、手持ちの資料では竜族の上位種族である程度のことしか分からなかった。生息地は天国なんて無責任なことを書いてある本もあった。伝説上の生物だとする本もある。ぬるい調査や想像を根拠にしたでたらめな内容でも、本は書けるのだ。

聖典によれば、サンセリウス建国当時、天空から舞い降りた女神イシュタルに引き連れられて来た聖竜が、以降国家の鎮守の役に就いたとある。名前はイレロス・ヴァシリオス。しかしイシュタルが天

空に還って以降、その守護聖竜がどうなったかは記されていない。歴史上の数々の戦役にも、聖竜が姿を現したというようなこともなかったはずだ。

我が国家を攻める不逞の外国には、容赦なく牙を剥いて天の裁きを与えてこその守護聖竜ではないかと思うが、その辺のシステムはどうなっているんだろう。今度ゴーシュに会う機会があったら、聖竜イレロス・ヴァシリオスとの相関関係も含めて、彼の思想なり考えなりインタビューしてみたいと思う。

「そう言えばゴーシュは、王家の人間以外には様をつけないんだよね……。神の末裔たる直系王族以外には、人間ごときに忠誠を誓ってないプライドみたいなのを感じるな。潜在的に竜族のほうが上だみたいな意識があるのか。それとも神との契約事項なのかな」

そんな感じで調べ物をしているうちに夜更けになったので、僕の部屋の居間でまだ頑張っていたタティとシエラを夜が遅いからとなだめて一端は平等に解散させた後、しばらくして改めてタティの寝室に忍び込んだのだ。

以前の僕のちょっとした寄り道もあり、マリーシアという名前にタティは敏感で、聞き始めは何だか悲しそうな顔をして僕の話に耳を傾けていた。

でも表向き兄さんの乳姉妹とだけなっているアレクシスが、僕の母上であることを打ち明け、大まかながら彼女の人生の悲劇を話して聞かせると、アレクシスのために涙をこぼして泣いてくれた。他人の悲劇をまるで自分の身内か、さもなければ自分自身のことのように深く想えるタティのこういうところは、僕も見習うべきところだと思う。こういう他者に対する深い思いやりや優しさが、タティのとても好きなところだ。

それから僕とマリーシアの母親が共通していて、それがアレクシスであるということも、順を追って話した。アレクシスは僕を生んだ

後にトバイアに没収され、そこで五年後に再びマリーシアを出産したということだ。こういうのは、まさしく女の美しい容姿が災いした最たる例だと言えるだろう。タティはその話の内容に驚きを隠せないようだったが、話が終わる頃には、だいたいのことを理解してくれた様子だった。

「ではマリーシアさん……、いえ、マリーシア様は、アレックス様の妹さん……だったんですね」

タティは言った。

そのとき僕とタティは、よく整理整頓がされたタティの部屋の寝台の上に腰かけ、向かい合って話していた。

ベッドサイドテーブルの、小さなランプの灯りが柔らかく室内を包んでいる。部屋の棚という棚に可愛らしい小物や、手芸用のビーズや集めた木の実なんかが瓶に入れられて飾られている。壁には手作りのリースが幾つも飾られている。

ベッドにいるだけでいい香りがするのは、ハーブを枕の下に入れているからだろう。タティはこういう細々した可愛いことが大好きなのだ。それなのに何故服装はいつも変なのを着るのか、これはタティの謎なセンスが窺われる部分でもある。

「びっくりだけどね。だから惹かれたのはたぶん、無意識のレベルで彼女が身内だって判ったからなんじゃないかと思う。リドリー様は縁だとおっしゃっていたけど、それは恋愛の縁じゃなくて、たぶん血が呼んだんだね」

「家族だって……？」

「そう。赤ん坊の頃に見たであろう母親の……アレクシスの姿は、ちょうど今のマリーシアくらいの年頃の少女のはずだし。言われてみると、いろいろ納得だったよ。

それから一応言っておくと、タティはこの話、誰にも言ったら駄目

だよ。僕が本当は母上の子供じゃないとなると、いろいろと問題も出て来るんだ。僕の立場もそうだし、今度のマイヤーズ家の昇格の件とかね、だからこれは最重要機密」

「はい、分かりました。心します」

「うん」

「アレックス様、……マリーシア様に、会いたいですか？」

ふと、タティは不安そうに僕に聞いた。

「マリーシア様との縁談、お受けになるおつもりですか……？」

「まさか」

僕は即座にそれを否定した。

「そんなつもりは最初からないよ。あのときは公爵様の手前、マリーシアとは血が繋がってるって言えなかっただけ。成り行き上ね。だって、兄さんが真実を言わないでいるのに、まさか僕がアレクシスの子供だなんて言えないよ。兄さんには何かお考えがあってのことなのかもしれないのに」

「それは伯爵様はきっと……、真実を明かせば貴方までトワイニングの公爵様に取られてしまうと思っていらっしゃるのではないでしょうか。結婚によって築いた家族ではないから、ルイーズ様やアレクシス様は勿論、貴方も本当は伯爵様に属してはいないでしょう。伯爵様の家族を全部、突然現れたお祖父様に持って行かれてしまうのを恐れていらっしゃるんじゃないかしら」

「そうなの？」

「たぶん」

「じゃあ僕って本当はアレックス・トワイニングになるのか。確かに私生児は母方の姓を名乗るのが普通だよね。でもしっくり来ない感じ。でも家格や身分的には上がるね、公爵家なら。

ただ公爵家の娘が結婚もせずに子供を作ったことになるから、あんまり立場はよくないね。何なんだろう、妾じゃないけど不義の子か……。じゃあやっぱりかえって不利になるかな」

「こんなことって信じられない……、でも本当のことなのね……」

タティが僕を見た。

「タティも僕と結婚したら、タティ・トワイニングになるよ」

「そういうことを言っているんじゃありません。アレックス様、アディンセル家を捨てるおつもりなんてないんでしょう？」

「うん、ないよ。ちょっと言ってみただけだよ。たぶんこの問題はそのうち兄さんが上手いことやるから心配はしていないんだ。兄さんは、抜かりないからさ。それより僕の理想の話だけど」

「ええ」

「今日改めて思ったんだけど、僕としては、やっぱり兄さんはアレクシスと結婚して欲しいって思うんだ。お父さんとお母さんが結婚していないのは嫌だよ」

タティは頷いた。

「分かります。お父様とお母様が仲よくしているのは、子供として、幸せな気持ちになるものね」

「ただ……、あの合理主義者が、わざわざ今になってアレクシスを選ぶかなっていうのは疑問なんだ。兄さんって、愛と結婚は別だと考えそうって言うかさ。アレクシスのことは愛してると思うよ。そうでなきゃ、ルイーズが何言ったってこの城内に住まわせたりしないと思うし。でも結婚は微妙だな。

僕は当然結婚するべきだと思うからこのことは割と夕食の話題に出すんだけど、その度にはぐらかすからその気はないのかもしれない。その気があるなら、とっくに彼女の指に指輪を嵌めてるって気もす

るしね……。
兄さんがもし他所の女を選んだとしても、それは彼の選択だから仕方ないとは思うけど……」
「でも、その割に、何だかご機嫌がいいんですね」
タティは首を傾げて言った。
「えっ、そう？」
「ええ。何だか……。何かいいこと、ありました？」
僕は首を横に振った。
「いや、特にないよ」
「マリーシア様と会えるのが、嬉しいんだったりして……。マリーシア様との結婚話、本当は嬉しかったんでしょう」
「そんなことないって」
「本当かしら。だってアレックス様って、気持ちがお顔に出ちゃうんですもの。そのお話、きっとよっぽど嬉しかったに違いないわ」
タティはじとっとした目で僕を見た。
「アレックス様、彼女に夢中だったものね。一回会っただけでぼーっとしちゃうなんて、よっぽど美人だったんでしょう？
ウィシャート公爵様って、昔、すごく美青年だったんですってね」
タティは突然、脈絡のよく分からないことを言い出した。

第２５１話　月と秘匿（２）

「トバイア・ウィシャートのこと？」
「ええ。ウィシャート公爵様は乱心したご子息に殺された、悲劇の公爵という話は聞いたことがありましたけど、実はそんなに酷い方だったなんて、本当になんて言っていいか……。でも、マリーシア様のお父様なんでしょう？　マリーシア様は、ウィシャート公爵様の娘なんでしょう？」
「ああ……」
「そんな方の娘なら、そりゃあ美しくもなりますよね……。生まれたときから絶世の美人になることが約束されていますよね」
「タティ、もしかしてマリーシアに嫉妬してるの？」
「嫉妬なんて。ただ、本当のことを言ってるだけです。アレックス様が、マリーシア様との縁談のこと、すごく嬉しそうに話してるから」
「僕、嬉しそうだった？」
「嬉しそうでしたっ」
「そうかな、そんなことないって。タティは妄想で文句言ったら駄目だよ」
「妄想じゃ……、妄想ですけど……」
「ほら。でも実際問題、どうしたって縁談なんて成立し得ない。マリーシアとは、それは……、正直なところ、会ってみたいとは思うよ。彼女は正真正銘アレクシスの子供で……、……、つまり僕の妹だからね。
でも、気持ちはなんて言うか恋愛対象っていうのとはもう微妙に違っている感じかな。夜会の夜の憧れの美少女が血縁者だなんてがっかりだけど、今はただ妹を心配してる。妹って言ってもいまいち実感はないけど、とにかく血の繋がった目下の幼い人間を配慮してあげたいって言うか。

会っても何を話していいか分からないっていうのが本当のところなんだけど。だって、五歳も年下の女の子なんて、もうほんと、どう接していいかも分からない。ハリエットですら持て余すのに更に下なんだよ。しかも妹なんて。世間の兄妹はどんなことを話しているんだろう」

「分かりません。わたしも、お兄様とはあまり話したことがないから」

タティは首を振った。

「そうか」

「ええ」

「タティのお兄様は眼鏡じゃないんだってね。コンチータが言ってたよ」

タティは笑った。

「ええ」

「どんな人？」

「いい人です。たぶん」

「格好いい？」

「いいえ」

僕はブーツの先を見て苦笑した。

「ハリエット様は、上手くやっていますか？」

「うん、まあまあ。ハリエットは、味方につけば心強い人間かな。ほら、彼女は口が達者だから、僕の迎撃機関として機能しそう。たぶん、僕がオニールが苦手だって気づいてくれたんだろうね。最近は自発的にオニールを牽制してくれるから助かってる」

「ハリエット様はすごくいい子よ。苛められている子をみつけると、普通はみんな、そんなことひどいって思ってもなかなか手を出せないでしょう。自分もそこに巻き込まれるんじゃないかって思って……、でも彼女はそういうのを絶対放っておかないで、率先して守ってあげるの。勇ましいんです」

「へえ」

「それに彼女はね、お家で義理のお母様に随分意地悪をされていたみたいなの。ご飯を貰えないとかそういうこと。お父様がお留守のとき、お邸の使用人に命令して、ハリエット様のお食事をわざと用意させないんですって。

ハリエット様のお家はね、カティス本家は、アディンセル伯爵家に必ず優秀な魔術師を出さないといけないっていう、そういうのがあって……」

タティは言った。

「ハリエット様のお母様は、精霊魔法に強かったのかな、そういう特殊な才能を見込まれて、カティス家に入った方だったんです。線の細い、独特の雰囲気を持っている綺麗な方でした。あまり裕福なお家の娘ではなかったそうだけれど、とにかくカティス家では、優秀な魔法使いを出さないといけないので」

僕は頷いた。魔術系の家系では、確かにそういう暗黙と言うか、プレッシャーみたいなものもあるのだ。だから魔術系の家系同士で婚姻を結んだり、優秀な魔力持ちの娘を引っ張って来たりということが、しばしば行われる。

「でも、ご結婚なさって、ハリエット様を生んでから、ハリエット様のお母様には子供が出来なかったんです。十年間、まったく出来なかったんです。男子を生めなかったんです。だから……」

タティの声が哀しさを帯びた。

「消された？」

タティがその言葉を言えずにいることに気づいて、僕が代わりに言った。タティは哀しげに僕を見た。

「結婚して十年はとても良心的だと誰もが言っていました……。ハリエット様のお母様のご実家は、カティス家に物を言える強い力は持っていなかったから、彼女を守ってくれる人がいなかったんです。新しい奥さんを貰うためには……、それなら離縁ができればいいのにと、わたしのお母様たちは言っていました。この国は本当に女にとってつらい国です。女には、何の権利もないんです。生きる権利すら。ハリエット様は自分が男の子だったら、自分がお母様を守ってあげられたって、お母様は今でも微笑って暮らせていたのにって、泣いていました……。

それで……、後妻さんが新しくカティス家に入ることになりました。その方がどういう方か、わたしは直接知らないんですけれど……、直轄領から輿入れした方なの。王家に仕える幾つかの魔術家系のひとつに連なるご令嬢で、家柄も古くて、いいお家の方よ。だからその方をお妾という立場にするわけにはいかなくて、ハリエット様のお母様はそういうことに……。

それで、その後妻さんは都会育ちの身分が高い出っていうことを、よく鼻にかける嫌な人なんですって。最初から自分はこの家に嫁いで来てやったっていう態度で、特にハリエット様や亡くなったお母様のこと、本当にひどく見下すんですって。そこがすごく頭に来るのって、言ってました。ハリエット様のお母様の肖像画は、全部捨てられたり焼かれたりして……、もう全然ないんですって」

「そう……」

「それでね、その継母さんはいつもハリエット様につらく当たるんですって。子供にご飯をあげないなんてあんまりひどいわ。でもお邸の使用人は前の女主人だったハリエット様のお母様のことを知っているから、今の女主人である義理のお母様の目を盗んで、こっそりお部屋にお菓子を持って来てくれていたんですって。そういうふうに、お父様が何日も戻らないと、ハリエット様はお菓子ばかり食べて過ごすはめになっていたみたい」

「それはひどいな。ダグラスは知らないのか？」

タティは首を振った。

「きっとご存知ないと思います。継母の虐めはいつの時代も陰湿で巧妙ですもの。直接知らない人を悪く言うなんてって思われるかもしれないけれど、ハリエット様は嘘を言うような子じゃないですし。ハリエット様が言うくらいだから、よっぽどひどかったのよ。勿論、義理の子供を可愛がる心の優しい継母さんだっていらっしゃるのよ。子供にちゃんと気配りなさっている優しい方だってちゃんといらっしゃるんだけれど、残念ながらハリエット様のところはそうじゃなかったの。

だから……、ハリエット様はよくお菓子ばかり食べていると思うけど、それはお食事にいい思い出がないからなの。

本当のお母様は星になったの。あれは本当のお母様じゃないから、可愛がってくれなくても気にしないって強がっていたけど、弟も生まれてしまって……、だからもうお家に居場所がなかったのね。だから、早く家を出たかったって」

「それは知らなかった……」

「ハリエット様は強がりだから、つらいことをつらいとなかなか言えないところがあるんです。だからアレックス様、注意してあげてくださいね」

「分かった」

タティは微笑み、それからやや肩を落とした。

「……でも、今はちょっとだけハリエット様が羨ましい。わたしも魔力が消えなければ、今頃は貴方の魔術師になって、いつも一緒にいられたのに」

第２５２話　月と秘匿（３）

「タティ……、でもさ、魔術師が主人と結婚って例はほとんどないから、その意味ではかえってこれでよかったんじゃないかな。タティは僕の魔術師より、僕のお嫁さんのほうがいいよ」

タティは途方に暮れた顔で僕を見た。

「でもそれには赤ちゃんを生まないと……」

「そうなんだけどね。まったく、家長の許可がないと婚姻が成立しないとか、ふざけた制度があったものだよ。おまけに兄さんは結婚証明書の可否を決める領主だし」

僕は腕組みをした。

「でもその件では、兄さんの弱みを握れないかと思ってるんだ。それって言うのはね、ほら、兄さんってあれだけ遊びまわっていたくせしてさ、アレクシスの前だと妙にいい子ぶるんだよ」

「伯爵様が、いい子ぶるんですか？」

タティが意外そうに僕の顔を覗き見た。

僕は笑って頷いた。

「そう、何かね、すごくいつもと違うんだ。不自然なくらい好青年っぽい態度なんだよね。あんな兄さんは初めて見たな。僕がいるといつも通り偉そうなんだけど、ちらっと後から覗き見したことがあってさ。そうしたら何か」

「好青年！？」

「そう。何なんだろう。アレクシスに何種類か花を持って行って、

優しい顔でその花の名前とか聴いてた。悪だくみみたいな政治談議する人にとって、たぶんくだらない会話だよ。普通なら興味ないだろうにね。アレクシスと共通の会話を持とうとしたんだろうけど。まあ、あれが本当の兄さんなのかなってところ。そんなに部屋に通うくらい気になるんだったら、意地張らないで結婚すればいいのに……」

「アレックス様、それが本当のことなら、伯爵様ってお母様に脈あると思います」

タティは言った。

「えっ、ほんと？」

「ええ！　今は、慎重に確かめているだけではないですか？　アレックス様のお母様が、今でもご自分をちゃんと好きかどうか。今はまだ、意思の確認ができないのに勝手に指輪嵌められないって思っていらっしゃるのよ。アレクシス様のこと、そのくらい心から大切にしていらっしゃるってことだと思います」

「そ、そうか。タティはよく分かるね」

「そりゃあ、わたしだって、女ですから……。大丈夫、伯爵様はきっとアレクシス様のことが大好きなはずよ。だって、病室に通うなんて、そんなことって、大好きじゃなかったらしないことだわ。伯爵様がアレックス様の前で彼女に興味なさそうな態度を取るのは、単純に照れくさいからではないでしょうか」

「十一歳のときに子供作った奴が、今更何を恥ずかしがる必要があるって言うんだ……」

「うふふっ。だから、もしかしたら結婚だってありますよ。ちゃんとお考えに入っているって思います！

今はまだ時期を見ていらっしゃるのよ。それにアレクシス様の回復と。でもきっとお二人は結婚されるんじゃないかしら。何だかそんな気がします。よかったですね、アレックス様！」

「ま、まあね。そうしてこそ男の責任ってものだからね……」

僕は、厳しい道徳観をもって言った。

「そうか、結婚はありかあ」

「ええ、きっと」

「えへへ！」

「アレックス様、嬉しそう。よかった。わたしも嬉しい」

「でねっ、僕が見たところ、あれは自分が何股もかけて女と関係持っていたなんていかがわしいことを、絶対彼女に知られたくないんだよ。それに初夜権とか馬鹿言ってさ、自分もトバイアと同じようなことやっていたんだからそれを隠したいのは当然なんだろうけど。まあ人間、悪いことはできないということだよ。

だからそれで上手いこと脅せないかなってね。これまでは、アレクシスが正気でないから、細かいことを上手く誤魔化していられたけどさ。でもさっき話した通り、マリーシアの聖杖の力で、もし、本当に正気が戻ったら……。

これまでのことをアレクシスにばらされたくなかったら、タティとの結婚を許可しろって、これ絶対兄さんに対する脅かしに使えるよね。あっ、タティ、この場合の脅迫は、別に悪いことを要求しているわけじゃないから、悪い脅迫じゃないからね。

とにかくアレクシスの正気が戻ったら、たぶんこれでごり押しできると思うんだ」

そして僕は微笑いかけたのだが、タティは一転して不安そうに僕を見た。

「でもそんなことをして、もし伯爵様のお怒りを買ったら……」

「怒らせておけばいいんだよ。とにかく兄さんはアレクシスに、自分が遊びまくっていたことを知られたくないんだ。僕の予想だとた

ぶん、純愛路線で行きたいんだよ。今更純愛って柄でもないだろうにね、でもそのおかげでアドバンテージは僕らにある」

僕は隣に座るタティの手に、手を乗せた。

「タティ、これからはすべてが上手く運ぶんだ。それに前の僕は頼りなかったかもしれないけど、もうそうじゃない。僕は必要とあらば兄さんだって脅かして、目的を果たす男なんだ」

「アレックス様……」

「タティ、本当だよ。僕は前の僕とは違うんだよ。あっ、もしかして、シエラの件で怒ってるんだろう。僕がシエラをきっぱり断らないから。

でも僕、本当にシエラには興味ないんだ。どうしてかなって自分でも思うんだけど、たぶん性格とかが合わないのかも。上手く言えないけど、シエラは可愛いは可愛いんだけど、彼女といると、世間知らずがひどすぎて、気を遣っちゃうんだと思う。なんて言うか、落ちつかないんだよね。それともマリーシアのことが引っかかってるの？」

「いいえ、そうじゃないんですけど……」

タティはうつむいた。

「じゃあどうしてそんな暗い顔になるの。今すごく未来について盛り上がっていたのに。兄さんとアレクシスが結婚して、僕とタティが結婚する。最高のプランだよ！

何か、問題あった？　それともタティ、もしかして何か悩んでる？」

「……毎晩、夢を見るんです」

「夢？」

「ええ……、すごく嫌な夢。とても恐くて……。

あの人がね、コリンさんが、夢の中に出て来るんです……」

「コリンって誰？」

僕は首を傾げ、それから何秒かして胸のむかつきと同時にそいつが誰であるかを思い出した。

「パーシーか」

タティは頷いた。

「これは、お城の離れにいるときから、ときどき見ていた夢なんです。そのときは、わたしはもうじき肺病で死ぬから、コリンさんが天国からわたしを迎えに来ているんだって思っていたんです。わたしのせいで彼を死なせてしまうことになってしまったから、わたしのことをきっと怒っているんだろうって。

ごめんなさいって、いつも心の中でお祈りしていたけど……でも、コリンさんはわたしのために伯爵様に抗議しただけだったのに、あんなことになるなんて、謝られたって、彼はとても納得できるわけがないんですよね。

でも、病気が治っても、ここのところは毎晩見るんです……。わたしだけが助かったから、彼はもっと怒っているのかもしれない……、そう思うと、気持ちが塞いで……」

「タティ、それは違うよ」

僕は言った。

「あいつは殺されて当然だ。使用人風情が何言ってるんだか。タティ、考えてご覧。伯爵家の男子である僕の女に、厨房で鍋掻きまわしてるうだつの上がらない使用人ごときが気を向けるなんて、おかしくないか。誰だって頭に来ることだよ。悪いのは全部あいつだよ。だいたい兄さんに物を言うなんて、僕ですら怒られることなのに、

知能が低いんだよ。まるでダンゴ虫以下だ。その上未練がましくタティの夢に出て来るなんて、死んでまで図々しい奴。全部あいつが悪い」

「ア、アレックス様……」

「それよりタティは僕の夢を見るようにするといいよ」

僕は言って、自分を指差した。

「そ、そうしたいのはやまやまなんですけど……」

タティはうつむいて、両手を組み合わせてもじもじした。

「タティ、指輪は？」

僕はふと、タティの左手の薬指に指輪が嵌まっていないことを指摘した。

「失くした！？」

「いいえっ」

第２５３話　月と秘匿（４）

するとタティは、自分の服の中に手を入れて、鎖をつけてペンダントにした指輪を服の中から取り出して僕に見せた。

「これ見よがしに指にしていたら、シエラ様が、怒るといけないから……」

「ああ……、そうか。悪いね、気を遣わせて」

僕は息を吐いた。

「タティはそれ、いつも身につけててね」

僕はタティの瑠璃色の瞳を見て言った。

「ムーンストーンって、あれなんだって。旅人を守る石なんだってさ。恋人に持たせておくと、月の加護の力で離れてもまた戻れるとかって。本当かなって、最初その話を聞いたときは思ったんだけど、でも……、それを持たせておいたからタティが病気から戻れたっていうこともあるかもしれない。それに、ムーンストーンにはちょっとした家族の逸話があってね」

「家族の逸話？」

「そう。アレクシスがね、僕のお母さんが、やっぱり誕生石がそれなんだ。それで、ずっと昔に兄さんにたぶん指輪を貰ったのかな？　まだ十代の頃の話だけど。それで、彼女は二十年を経て兄さんのところに戻って来た。

僕がアレクシスに近づくと恐がられるし、今は気がふれているから話を聞いたりはできないけど、もしかするとアレクシスも、ずっと兄さんを信じていて、ムーンストーンを身につけていたのかも。

だからタティもそれ身につけていて。不吉な夢を見ているならなおさら」

「そうすれば、遠く離れてもまた戻れるから……？」

タティは不安そうに眉と唇をへの字にした。

「じゃあ、わたし、またアレックス様と離れるんですか……？」

「いや、離れないよ。離れないけど、でもそういう御守りって持っていたら気が楽にならない？　貸してご覧、僕がタティのために特別の祈りを込めるから」

僕は手を出し、タティから鎖のついたムーンストーンの指輪を受け取った。ルイーズのように守護の魔法は入れられないが、それを両手に閉じ込めて取り敢えず念を込めた。

「アレックス様、なんて祈りを？　わたしが遠くに行かないで、ずっと貴方の傍にいられるように……？」

「いや、傍にいるのは当り前なんだから。指輪よタティの貞操を守り給えって感じ。やっぱり最低限それだけはやって貰わないと。タティは僕の物なんだし」

「ロマンチックじゃないです……」

タティは不平を言った。

「アレックス様はもっとロマンチストだと思っていたのに。もっとこう、繊細で……。でもちょっと変わりましたね、なんて言うか、上手く言えないですけど……」

「男らしい？」

僕はわくわくして聞いた。

タティは僕を見て、妥協的に何度か頷いた。

「……男らしくない？」

「前よりちょっとタフになったかも」

「うん、そうなんだ」

事実なので、僕はそれを認めた。

「でもその分、前より遠くなった気もして……。アレックス様も、いつかは伯爵様みたいになってしまうのかしらって。アレックス様は格好いいもの。背も高くて、きっと女の子が放っておかない。虫を摘まんで見せたりだとか、そういうことをしなくて、あと、引っ込み思案になっていなかったら。シエラ様みたいな美人の子たちが放っておかないような、そういう貴公子になってしまったら、ああ、やっぱりわたしなんかじゃって、思っちゃう……」

「それ買いかぶりすぎ」

僕は肩を竦めた。

「そんなにもてたことないよ。僕なんて、いっつも兄さんの引き立て役になっちゃうんだから。夜会でだって歴然だったよ。注目されるのは、アディンセル伯爵の弟ってことばっかりだったし」

「でも、分かるんです。何だか、前よりそういう感じになって来てるって。伯爵様とはタイプが違うけど、前までとは明らかに何かが違うんです。

わたし、これでも魔法使いの卵だったから、今でもちょっとは勘がいいところって、あるんですよ」

「タティ、僕はタティを裏切ったりしないって」

「……ええ、分かってます。でも、貴方がそう思っていても、もし、

たとえばシエラ様が……」
「タティ、シエラのことなら本当にないんだって。誓ってもいい」
僕はタティの二の腕を掴んで、僕に向き直らせた。
「タティ、この際だからはっきり言っておくね」
タティの瞳をみつめて、ゆっくりと切り出した。
「僕はタティが好きだよ。タティがいちばん好きだ。だからどんなに時間がかかっても、最後にはタティと結婚するつもり。それで、シエラは好きじゃない。だからシエラと結婚する気はまったくない。大事なことだから、憶えておいて。僕は絶対にタティと結婚する」
「アレックス様……」
「でもこれは殿下が絡んでる話だから、今はしょうがないからのらりくらりとシエラが僕に飽きるか、どうにかして離れてくれるのを待ってるんだ。僕がタティよりシエラを愛してるなんてことはないから。今もそうだし、これから先も絶対ない。
一昨日のことだって、シエラを愛してるなんて言ったけど、あれはシエラを納得させるために言った方便さ。僕の本心じゃない。タティは真に受けてたから心配してたけど……、ほら、ベッドルームでのこと」
「方便……？」
タティは意外そうに僕を見た。
「そうさ。嘘も方便って言うだろう。あの場では仕方なかった」
「アレックス様が……、貴方もそんな伯爵様みたいなこと、いつの間にかおできになれるようになったのね……」

「うん、それっていいことだろう？　男が頭が悪かったら、救いがないからね。
だからタティにこの問題の全体的な説明をすると、僕はタティとシエラの板挟みになって鼻の下を伸ばしているわけじゃなくて、要するにこれはフレデリック王子殿下の御機嫌取りのためなんだ。フレデリック王子に気に入られてるシエラのことは、こっちもそのつもりで接待しないと駄目ってこと。シエラは王子様絡みのお客様だから。ただそれだけ。
つまり僕が気にしてるのはシエラのことじゃなくて、本当はフレデリック様のことなんだ。フレデリック様に嫌われないために、僕は必死になってる。未来の国王陛下には、もう必死になって取り入らなきゃ。でないとタティと平穏な結婚生活も送れないだろう？　シエラはそのついでの、只のゲストさ。
シエラは確かに可愛いと思うけど、タティのほうが更に、もっと、ものすごく可愛いと思うから大丈夫。タティはシエラより美人だよ」
「それ、さすがにお世辞っぽくないですか……？」
タティは最初、素直に嬉しそうな顔をしたが、すぐきゅっと眉を寄せて文句を言った。
「みんながシエラ様が美人だと思っていることなんて、わたし、分かってるんです。だって、カイト様とかオニール様とかがお部屋に来たとき、やっぱり露骨にシエラ様のこと見る回数が多かったし……。もしかして、二人ともシエラ様のことが好きなんじゃないかって思うくらい。恋してるみたいに、本当に熱心に見ていらしたのよ」
「あんな変態たちのことはどうだっていいんだよ。あいつらは、物の分からない奴らだから。年中盛ってるから、女なら何でもいいんだ」
「そうかしら……」
「とにかく僕にとってタティはシエラ以上だから。それにシエラっ

てなんて言うか、恋に恋してるって言うのかな。お伽の世界に生きているところがあって、たぶんシエラは僕自身を見ているわけではないんだ。たまたま、彼女の理想の異性像に僕が近かっただけ。彼女の王子様像は、そもそもお兄様がモデルなんだって話してて思ったんだけど」

「でも何だかシエラ様って、アレックス様と似た者同士って感じがしませんか？」

タティは言った。

「二人は似てるの」

「えっ、それどういう意味？」

第２５４話　月と秘匿（５）

「……、夢見がちなところとか……、とにかくすごく、そんな気がします。貴方とシエラ様はなんて言うか、善くも悪くも似ているんです。わたしは間近で見ていてつくづくそう感じていました。縁って、しばしば似た者同士の男女を結び合わせるとも言うでしょう。

でもわたしは彼女のようにはいられなかった……。わたしはそういうふうに……、お姫様のままで生きて来られた彼女の恵まれた環境も羨ましいんです。容姿も、気持ちも、ずっと純粋なままでいられた彼女のすべてが」

「うーん、でも、それも善し悪しな気がするよ。そんなに羨ましがるほどのことじゃない気がするけど。純粋ってそんなにいいこと？

僕は全然羨ましくないし」

「……」

「不安？」

僕はたずね、タティは頷いた。

「困ったね……」

「わたし」

タティは言った。

「うん」

「病気になって離れにいるときに、あまりやることがないから、いろいろ考えていたんです」

「考えていたの？」

「ええ」

「どんなこと？」
「わたしはこのまま死んでしまったら、生まれ変わっても、またアレックス様の傍に来たいなって」
「タティ……」
「そしたら今度はわたし、アレックス様よりずっと年下になるって考えていたんです。シエラ様より年下。今度はもっと美人に生まれて……、誰もが羨むようなすごい美少女になって。綺麗で可愛くて、みんなの憧れの的なんです。今みたいな、ドジで鈍臭いわたしじゃないんですよ。眼鏡もしてなくて、お姫様みたいで、そうしたらアレックス様が、わたしにぞっこんになって、求婚してくれるかも。なんて……」

タティは睫毛を伏せた。

「馬鹿みたいだけど、そんなこと考えてました。今もときどき」
「タティ……」
「別人になったら、タティだって分からないよ」

僕はタティに言った。

「第一それだと、僕って中年になってるんじゃない？」
「でも男の人は、あんまり年齢のこと言われないでしょう。女ほど世間の風当たりだってきつくないし。でも女は駄目。わたし、次の誕生日が来なければいいのにと思うもの。またアレックス様より年上になっちゃうから」
「タティ、年上って言ったって、たった半年じゃないか。すぐ僕も二十一歳になるよ。同じ年に生まれた人間を年上とは言わないし」
「でも、年齢が若いとそれだけで……、周りに愛して貰いやすいから。女は特にそう」

タティは肩を竦め、僕にばつが悪そうな顔をした。

「困らせてごめんなさい。わたし、さっきから何を言っているのかしら。ごめんなさい。全部、只の妄想です。もしそうだったらって。暇だったから」

「ならいいけど……。タティはどうも、陰気と言うか、後ろ向きなんだよね。そういうこと考えてるから落ち込むんだよ。言っておくけど、タティはその眼鏡のせいで、容姿の評価が半分以下になっちゃってるだけなんだって。それがなかったら美人なんだよ。コンチータが美人だって言われてるの知ってるだろう？　瞳の色も深くてすごくいいし、逸材だよ。眼鏡をはずして鏡をよおく見てご覧。自分が可愛い顔してるの分かるから」

「よく分からなくて。眼鏡を取るとぼやけるから」

僕は苦笑した。

「そうだ、じゃあデートしようか」

僕は提案した。

「そうだよ、明日デートしよう。きっと気晴らしになるよ。デートって言っても、本当のところ、何するのかよく分からないんだけど……、取り敢えず何処か行って甘い物食べたりとかさ。タティにドレスと、宝石を買ってあげるよ。あと、えっと、それともタティが行きたいところに行ったりとか」

するとタティはにっこり微笑んだ。

「美味しい物やドレスも宝石もいいですけど、それならわたし、貴方と一緒にお散歩がしたいです」

「お散歩？」

あまりに質素な提案に、僕は訝ってしまった。

何せ、女の人はお洒落と甘い物とお金が好きなはずなのだ。タティはお洒落とお金はともかく、甘い物には目がないはずなのだが。

「前みたいに、裏の森に行って、昔みたいに虫を探したりしたいです」

「でもタティ、虫は恐いんじゃない」

タティは頷いた。

「でも、アレックス様はそのほうが楽しいでしょう。それにわたしは、貴方が楽しい顔をしているのを見ているのがいちばん楽しいですもの。

アレックス様、わたしは、貴方といられるだけで幸せなんです。手を繋いで、貴方が傍にいてくれたら、わたしはそれだけでとっても幸せ。だから……、それに、木苺を集めたりして、後でジャムを作りましょう」

「じゃあ、虫の瓶を用意しなきゃ！　王都に行ったらとても虫採りなんてできないから、持って行きたい。蟻を入れて、机の上で飼うんだ」

「それにジャムの瓶も」

そして僕らは微笑みあった。

「やっぱりタティはいいな」

僕は言った。

「気が楽だよ。一緒にいても余計な神経遣わなくていいから」
「それは、だってわたし、貴方の幼なじみですから」
「うん」

僕は頷いた。

「それにタティは僕のこと、何でも分かってくれてる」
「それは、だってわたし、貴方の幼なじみですから」
「それだけ？　僕が好きだからじゃなくて？」
「それは、好きだから……、です……」

そして僕とタティはみつめあった。
しばらくそうしていると、ベッドの上にもいることだし、しかも夜だし、僕は非常に何と言うかそういうことがしたいと思うのだが、でもそれは駄目なことなので、勇気をもって腰かけていたベッドから立ち上がった。

「じゃ、じゃあタティ。そういうことでね。まだここにいて君と話していたいけど、僕はもう寝ないといけないから行くよ。冷えると悪いから見送りはいらないよ」
「あっ、はい、お休みなさい……」

タティは背筋を伸ばして、ぎこちなく僕に言った。
僕はそのまま毅然とタティに背を向けて、歩を進め、タティの寝室を出ようと思ったが、ドアの取っ手に手を置くほんの少し前に、抗いがたい誘惑が僕を捉えた。僕の身体は引き戻され、寝台に腰かけているタティに半ば倒れかかる。
僕の下で僕をみつめる瑠璃色の瞳が潤んでいる。
でも今はどうしても我慢しないといけない。

「アレックス様、わたし……」
「うん」
タティは泣きそうな目をして僕をみつめた。
「……アレックス様は、もし、伯爵様の立場だったとして……」
「うん」
「もう一度、アレクシス様を愛せると思いますか？　他の男の方に……、不本意でも、触れられた彼女のことを、それまでと同じように……」
僕はまばたきをした。
「それ、どういう意味？」
タティは目をそらした。
「……何でもありません」
「タティ？　まさか、僕の他に誰かいるの！？」
「いいえっ、違いますっ。ただちょっと……、聞いてみただけです……」
「なら、いいんだけど……。変なタティ」
「ええ。わたし、少し変なんです……」
タティは独り言のように囁いた。
「アレックス様、わたしも何か貴方のお役に立ちたいです……。いつも貴方と一緒にいたい。聖なる杖を操れるマリーシア様のような、特別なことはできなくても、わたしも何か、貴方の……」
「分かってる。でも子作りはまだ考えないでいいよ。元気になった

からって調子に乗ったら駄目。今はゆっくり体力を回復させないと。タティ……」

僕はタティに覆い被さったまま、彼女の額を撫でた。

「あんまり自分を卑下しないで。タティは可愛いよ。他の人と自分を比べることなんてないんだよ。誰が何と言おうと、僕にとってのお姫様はタティだ。だから、あんまり自分がダメとか、変なこと考えないで」

「アレックス様……」

「もうちょっとだよ。あともうちょっとで、絶対全部上手くいく。僕はまだ頼りないかもしれないけど、僕を信用して。これでもちょっとはマシになったんだ。

僕は何があっても必ずタティをお嫁さんにする。

僕は王子様じゃないけど、お姫様のタティを守ってあげる。約束するよ」

「アレックス様……」

「うん」

「わたし、いつも貴方の傍にいたいです……」

「いつも傍にいるよ。ちゃんと王都にだって連れて行く」

「離れたくありません……」

タティの大胆な言葉に、僕は思わず照れ笑いした。

「分かってる。でも……、キスだけだよ、今夜はキスだけ。お休みなさいのキスをし忘れたから」

僕はタティにそう断りを入れ、顔を近づけて、彼女にキスした。

第２５５話　悲劇のプリンセス（１）

ドアを閉めて、息を吐く。タティの不安そうな顔が目の奥に残った。
離宮からこっちに戻ってからというもの、僕がタティに手を出さないばかりか、寝室も完全に分けてしまったものだから、タティはきっと自分が捨てられてしまうかもしれないとでも勘違いをしていたのだろう。
あんな顔をさせてしまうくらいなら、本当は今夜はそのままタティの部屋に泊って、じっくりとその心配を解いてあげたいところではあった。が、そういうことをやってしまうと、泊るだけでは済まなくて、何もかもなし崩しになってしまうのは目に見えているからやっぱり今はそうするわけにはいかない。強い決意で、後ろ髪を引かれる気分で部屋を出た。
風が流れたのを頬に感じ、顔を上げると、対角線上の夜の廊下でシエラが立っている。
僕は目を疑い、何かの間違いではないかと目を凝らしてみたが、確かにそれはシエラ本人であるようだ。
サンメープル城は夜間でも灯りを絶やすことがないため、橙色の灯りが、彼女の僅か後方でチラチラと揺れている。言うまでもなく、時間は深夜だ。タティの部屋は専属魔術師として仕えるルイーズのような特別室ではない、ここは主に貴族階級の使用人が使う部屋が並ぶ廊下のひとつだが、さすがにこの時間では廊下を行き交う者の姿もない。
なのにシエラはこんな夜更けにたった一人で、こんな場所で何をしているのだろう。お姫様育ちの彼女は、使用人の暮らす区域になんか日頃は近づくことさえしないはずなのに。
まさかとは思ったが、僕を尾行して、一緒にいるために真夜中にここでずっと待っていたのだろうか？
それともまたタティに直接文句でも言おうと思い立ったのだろうか？

シエラは決して悪い子ではないが、いずれにしても、やはりそろそろ何かシエラが嫌がるようなことをして、彼女が僕を嫌いになるように仕向けることを考えるべき時期か……、こんな美少女に好意を寄せて貰っているのに、それを棒に振るのはもったいないとは思うのだが、単純に僕を好きでいてくれるだけならともかく、こうやってタティと張り合おうとされると、それはちょっと困るのだ。

勿論最善は、シエラが速やかにフレデリック様を好きになることなのだが。

シエラが殿下が少し年下くらいのことは気にせず、遠慮なく殿下の胸に飛び込んでくれたら話は早いのだが……、と言うかフレデリック様も僕に言わせれば意気地がなさすぎなのだ。確かに所作や話し方からして上品そうな王子ではあったが、王子なんだから、気取っていないで少々強引くらいの態度でシエラに迫ってくれればいいのに……、自分だったら明らかに気がなさそうな女を相手にそれができるかと言われると、自信はないけれども。

と、シエラが赤いスカートの裾を持ち、長い髪を揺らして微笑んだ。

「こんばんは、アレックス様」

「ああ……、こんばんは。ここで何してるの？」

シエラは僕のその質問が思いがけなかったようで、戸惑い気味に応じた。

「……私、もっと喜んでくださると思ったのに。ここで私に会えたこと」

「いや、うん……、まだ起きてたの？」

「眠れなくて。だから……、城内を歩いていたの。このお城はとても綺麗ね。夜でも灯りを落とさないなんて、まるで光のお姫様のお城みたい。光のお姫様のお城もね、夜中じゅう輝いているお城なのよ」

「ホリーホックも灯りは落とさないんじゃないのかい」
「ええ。でもホリーホックはここのお城ほどお洒落じゃないの。ねえ、ロマンチックですね」
「ロマンチック？」
「だって、こんな夜更けに偶然こんな場所で出会うなんて、やっぱりアレックス様と私は運命の赤い糸で結ばれているのだわ。私には分かるの」
「君はこんな時間に城内を散歩していて偶然、ここを通ったの？そしてたまたま君がここに来たとき、偶然僕が廊下に出て来た？」
「ええ」
「こんな時間にこんな場所で会うのが偶然だって？」
「ええ」

シエラは頷いた。
僕は苦笑した。

「それはちょっと、納得できないかな……。ほんとは僕のことつけてたんじゃないか？　もしそうなら、あんまり感心できないよ。そりゃあ、城内は間違いなく安全だけど、もし僕が外に出たら、君も後をついて来たってことだろう。夜に一人で女が出歩くのは、作法以前の問題。危ないよ。これはシエラのために言っているんだ。世間知らずで話が通ることと、通らないことがある。女の人はその辺は過剰に慎重なくらいで丁度いいくらいなんだよ。もし、君が剣を使えてもね。魔法が使えても駄目だ、これは僕の経験から言うけど、女の魔法使いは幾ら魔法が強くても、物理的に弱すぎるから距離を詰められたら終わりなんだ。腕力で押さえ込まれると抵抗できないからだよ。なのに相手が知り合いとかだと、警戒しなかったりするから……、たとえばまだ子供だと思ってる相手だとかね。
それにやっぱり後をつけられたら、誰だって気分はよくないよ。幾

ら相手がか弱い女の子でもね」
「いいえ」

シエラは首を横に振った。

「私、つけてなんていません」
「そう？」
「それよりアレックス様こそこちらで何をしていらしたの？　こんなに遅い時間に。ここはタティさんのお部屋のある廊下よ。タティさんと……、会っていらしたの……？」
「うん、ちょっとね……」
「私に言えないことですか？」
「まあ」
「どうしても……？」
「うん」
「そう……。私のお部屋には、まだ来てくださったことはなかったのにタティさんのお部屋には真夜中でもいらっしゃるの……。タティさんはお妾さんなのに、貴方に会うために私の許しを乞わないなんて、なんて非常識な人かしら……。お妾さんは折につけ本妻に頭を下げに来るのが当たり前なのに……。こんな勝手をされて、私が傷つかないとでも思っているの……」

シエラは眉間を寄せた。

「彼女は私が嫌いだから、意地悪して、私を傷つけたくてたまらないのね……」
「シエラ……、タティはそんなこと考えてないよ。今はちょっと僕が話があったから行っただけ。タティが呼んだわけじゃない。君、最近ちょっと様子がおかしいよ」
「……、そんなことありません。私は私だもの」

「いや、前はもっとなんて言うか……、シエラはそんな暗い顔する子じゃなかったよ」
「私、暗くなんてしていないわ。毎日楽しくて幸せよ」
シエラは言うと、途端に楽しげな表情をしてみせた。
「そう。じゃあ……、もう遅いから、部屋に戻ってお休み」
「イヤです」
シエラはかぶりを振った。
「貴方がタティさんと会っていた分だけ、私も貴方と時間を過ごすわ」
「シエラ……」
「私、もう決めたの。タティさんの存在にすごく傷つけられているけど、彼女に腹を立てているだけでは、状況は全然よくならないわ。私には誰も味方はいないけど、貴方を好きな気持ちだけは負けない自信があるもの。
貴方はまだ結婚していない。だから、私はやましいことをしているわけじゃない。タティさんなんて認めない。私はこの恋に私のすべてを賭けているの。頑張っていれば、気持ちは必ず貴方に伝わるわ」
「シエラ、あのね……」
「神様は頑張る女の子を見捨てたりしない。そうでしょう？　正しい者は必ず報われる。光のお姫様を苦しめる闇の魔女は、いずれ罰を受けていなくなる。
心配しないでアレックス様、きっとすぐに元通りになるわ。アレックス様と私、二人だけの時間を取り戻せるようになるわ。
だって、アレックス様と私が運命の恋人であることは、絶対なんだもの。確信があるの。私が貴方の本物だって。それが気に入らないからって、私を虐める闇の魔女は、いずれ必ず滅び去る……、それ

が世界の法則だわ。正義は勝つの。たとえ今は苦しくても。誰も私の味方をしてくれなくても。私が光のお姫様なんだもの。アレックスとシエラが結ばれるのが運命なんだもの」

「シエラ……、できれば……」

僕は少し迷い、切り出した。

「そうやってあんまりタティを追い詰めないであげて欲しい。タティは闇の魔女じゃないよ。僕は別にどっちでもいいけど、たぶんそれって女の子が言われると傷つく言葉なんじゃない？　誰だってヒロインの、光のお姫様になりたいって思う話なんじゃないかな？　タティは君よりなんて言うか、人に話をするのに慣れてないんだ。君は小さい頃からずっと召使いとかに命令をしてきた立場だろうけど、タティは厳密に言うとそうじゃないから。

前もね、僕の部屋付きの召使いに苛められたりとかって、あったみたいなんだ。そういう連中はもう全部はずしたけど、そんなこともあって……、タティって結構気持ちが繊細なんだよ。だから、この間みたいなことになると、何も言えなくなって弱ってしまう。

僕もタティのことは気にしてあげているつもりだけど、一日中ついているわけにはいかないし、今は病み上がりってこともあるしね。だから、気を遣ってあげてとは言わないけど、できればもうちょっとタティに優しくしてあげて欲しい。君に優しさがあるなら、あまりタティが嫌がるようなことをしないであげて。タティは病気だったんだ。そこは、分かってくれるね」

シエラは理解できないというふうに僕を見た。

「みんなに苛められているのは、私よ……？

タティさんはハリエットさんや、貴方のお部屋の召使いたちや、大勢味方にして毎日のように私を攻撃しているわ。みんな私のことが

嫌いなのよ。いつもそう……。みんな私のことが嫌いなの……。
でも私には、誰も味方がいないのよ。毎日のようにみんなに苛められて、誰も私の話さえ聞いてくれないのに、貴方まで……」

第２５６話　悲劇のプリンセス（２）

「いや、それは違う。誰もシエラを苛めようなんて思っていないよ」
僕は言った。
「それは君の勘違い。タティはそんなことしないって」
「いいえ、本当よ。本当なのよ。弱々しい態度を取りながら、彼女が陰で私に何をしているか……。どんなに私を苦しめているか……」
「だからそれは」
「タティさんを庇わないでっ」
シエラは両手を握って、可愛らしく僕に抗議した。
「ねえアレックス様、私は独りぼっちよ。いつも独りぼっちよ。でも私は貴方さえ私の味方になってくれたら、タティさんなんて気にしないわ。タティさんがどうであろうと、私をどう思っていようと。いちばん苦しいのは貴方がほんの少しでも彼女を気にかけることです。タティさんが戻ったら私が要らなくなったみたいな貴方の態度は、とても傷つきます……。
私は都合のいいアクセサリーじゃないわ。私は感情のない人形ではないから、他の人の小さな機微だって、ちゃんと感じる心があるの。いつも貴方を見ているから、貴方のことはなおさら敏感に感じるの……」
「シエラ……」
「貴方が望むなら、私、どんなことでもします。何でも貴方の言う通りにします。
だからお願いよ、私を要らなくなった玩具みたいに放り出さないで。私はタティさんの身代わりではないのよ。私にも心はあるの。お願

い、私に冷たくしないで……」
「冷たくしているつもりは、ないよ……」
「いいえ、貴方はタティさんが戻った日から、あまりにもはっきりと態度が変わってしまいました。彼女が戻ったあのときから、二人の関係はおかしくなって……。彼女が私たちの仲に割り込んだせいで、貴方はまるで別人になってしまったの。まるで醜い闇の魔女にたぶらかされた王子様そのものみたいに……。
貴方はもうずっとタティさんばかりよ……。キスだって……。
貴方は優しいけど……、その優しさが私以外の女の子に向けられるのは苦しいの……」

それからシエラは一度暗い顔をして塞ぎ込みかけ、僕は泣かせたかと思って焦ったのだが、一転して声を明るくした。

「私ね、さっき不思議な人に会ったのよ」

そのあまりに突然すぎる感情と話題の変更に僕は面食らったが、このままタティの話題を続けて、怒り出されたり泣かれたりしては困るので、とにかくシエラにあわせたほうがいいと思ってすぐに調子をあわせて聞き返した。
このときは、さすがに僕としてもシエラの中に深刻な情緒不安定を感じたが……、それに気づいたからと言って僕にはタティがいる。シエラを抱きしめてやることは、できなかったのだ。

「不思議な人？」
「ええ。たぶん、霊魂だと思うわ。彼女はずっとこのお城に住んでいるんですって。ちょっと気取って、アディンセル伯爵妃だっておっしゃったわ。金色の髪の綺麗な方だったわ」
「何それ！？」

シエラは首を横に振った。

「知らないわ……。最初ね、恐い顔をして、おまえは伯爵様の恋人かと聞かれたから、いいえ違いますって答えたの。それでも恐かったから、ギルバート様はとても素敵って、思いつく限り彼のこと褒めておいたのよ」

「そ、それで？」

「彼女はちょっと気をよくして、彼はわたしの夫なのって言ったわ。普段、アディンセル家の各お城を点検して歩いているんですって。伯爵様はお忙しいから、妻として、及ばずながらお仕事をお手伝いしているんですって。

彼女は手にレイピアを持っていたわ。自分はファム・ファタールを持つことができないけれど、この正義のレイピアで悪い女をやっつけるって。伯爵様は彼女に内緒で、ときどき恋人を隠しているんですって。でも結婚している者が妻以外の女を求めるのは神に反する大罪だから、妻である彼女が制裁を加えても構わないそうよ。

でも私、ギルバート様は独身だと思ったのだけど、それを言ったら恐いことになりそうだったから、言わなかったの。彼女とね、たった今まで一緒にお城を歩いたのよ」

「えっ、それたった今の話なの！？」

「ええ。お年はたぶん、私と同じくらいよ。お転婆姫って感じの方だったわ。ドレスのお話と、香水のお話をしたわ。でも彼女のお話が随分古いから、ちょっと違和感があったの。自分が死んでいることは知らないみたいだったわ。彼女はわたしたちは気があうわねって、微笑って言ってくれたの」

シエラは何処か誇らしそうにして、続けた。

「それでね、ギルバート様のこと世界一愛しているけど、今はギルバート様がすごく浮気ばかりするから頭に来ているんですって。結

婚して以来、彼の浮気癖にはずっと悩まされているんですって。最悪って言って、本当に怒ってたわ。自分はこんなに若くて美しいのに、何故他所の女に興味を示すと思う？　って言うの。

私、そういうタイプの男の人のことはよく知らないって言ったの。だって、お父様もお兄様もそういうタイプではなかったから。そしたら「おまえは本当に伯爵様に興味がないのね、よかった」って。それでね、私たちすっかり気があって……、彼女には赤ちゃんがいるってお話になったの。男の子で、とっても可愛いんですって。ギルバート様の赤ちゃんなんですって。パリスちゃんって言うんですって。得意なお顔で、特別に見せてあげるって言われて、ついて来たら、ここに来たのよ。彼女は廊下に出て来た貴方に走り寄って指差して、消えちゃったわ」

「君は何やってるの……」

僕は脱帽しながらシエラを見た。

「そんなの見たら普通倒れるだろう……。そういうことは、しょっちゅうあるの？」

シエラはかぶりを振った。

「そうでもないわ。でもうちの家系はときどき視える人が出るの。お母様の、母方の家系のことよ。ウォーベック家は昔、神殿巫女を輩出していた魔術家系なのですって。だからお兄様や私は生まれつき強めの魔力があったのよ。兄弟ではお姉様だけあんまりそういうのがなかったわ。ギルバート様は前にお妃様がいらしたのですか？」

「いや、いないはずだけど。結婚したがる女は山ほどいただろうけど、彼のお眼鏡に適うほどの女はいなかったはず……。だから結婚したことはないはずだよ。

ねえ、それ執念深い女の残像思念か何かだろうか……。名前は聞い

た？」

「いいえ、彼女は当然知ってるでしょっていうことを言っていたわ。このお城の女主人だからっていう感じのニュアンスよ。とてもお洒落で、ちょっと気位が高い感じの人よ。使う言葉がときどき、今と少し違っていて……」

「兄さんを夫呼ばわりとは……、何様だろう、危ない女だな。死んでまでこの城に居座った挙句、兄さんの妻気取りだなんて」

「もしかして出身が王家の方かも……。だってね、王女様なら、伯爵様をご主人様というニュアンスでは呼ばないはずだから。伯爵様のこと好きだけど、彼女のほうが地位が上な感じがしたの」

「えっ、その……それは、自分が王女様だってそう言ってたの！？」

「いいえ、でも、何となく。フレデリック様が使うのと同じ言葉の発音を使っていたから」

「……最後に王女が降嫁されたのって二百年くらい前のオーロラ王女のはずだけど、その方かな。夜中に剣を持って巡回してるって、なんでだか、よく分からないな……、しかも僕を自分の赤ちゃんとか……、とにかくシエラ、教えてくれてありがとう。後でルイーズに教えとかなきゃ」

「いいえ。ただ、私とお友だちみたいに親しくしてくれたから嬉しかったの……」

第257話　スイートホーム

朝、虫を入れる瓶を手に持ち、髪を少し気にしながら部屋を出て、執務室に行きがかりの廊下で、遠目に兄さんとフィエールが話しているのを見た。めずらしくフィエールの頭に寝ぐせがついていない。たぶん、あまり穏やかな歓談ではなさそうな様子だ。

兄さんは大抵いつも温厚とは言い難いが、随分と冷淡な顔をしているのが印象的だった。白いブラウスに金糸刺繍の黒いベストといったいでたち。胸ポケットにタンポポか何かの花が刺さっている。朝食を取ったときにでもアレクシスがくれたのかもしれない。ただの冷たい男なら容姿だけで広範囲の女にあれほど好かれたりはすまい、彼はこのように女のペースにあわせる許容能力が高いということなのだろう。それにしたってエプロンスカートの少女じゃあるまいし、厚い胸板にタンポポはちょっと間抜けで笑えるのだが。背中を向けているフィエールの表情は見えなかったが、何かを訴えているような様子でもある。

たぶん朝から兄さんを廊下で捉まえるほどのことと言えば、ジェシカのことではないかと思ったので、僕もジェシカのことは気にかかっていたところだし、何を話しているのか立ち聞きしようと思って、使用人の背中や廊下の装飾の物陰づたいに近づくことにした。しかし動きが怪しかったか、割とすぐ二人に僕の存在を見られてしまい、それで兄さんが僕に興味を移してしまった。

「アレックスか」

それが待ってましたとばかりの食いつき方なのは分かっていた。

「待ちなさい。おまえは王都の伯爵邸に暮らすからと、そうそう自由にできるとは思うな。分かっていると思うが、子供の夜間の外出

は禁止だ。歓楽街に行くことも禁止だぞ。あそこは不良と退廃と悪徳の巣窟だ。

そうだ、ちょっとこの辺りの話をおまえにしておかなければいかんな。でないとおまえはすぐ調子に乗って羽根を伸ばそうとする。女をよく分かりもしないまま、相応しくない女に引っかかった前例もあることだし、間違いがあってはいけない」

兄さんが、横にいるフィエールを押し退ける勢いで僕に近づいて来たので、話を中断されたフィエールが一礼して向こうに行ってしまった。

でも僕は、朝から兄さんに延々説教されるのは嫌だったし、その中でも王都の伯爵邸で暮らす絡みの話っていうのはまずくて、何せ勝手に家を借りて独立する件のことが読み取られないとも限らないので、ここは逃げることにした。幸い、兄さんがいる場所と僕のいる場所の間には結構距離があったので、今回は逃げるのは楽勝と思われた。しかし兄さんがすぐアレックスを捕まえろと手を叩いたせいで、城内を警備するために階に配置されている衛兵のうちの二名が突撃して来てなんと二人がかりでアディンセル家の男子である僕を確保した。

「あっ、何だよ、無礼だぞ。離せよ」

両方の腕を押さえられ、僕はもがいて彼らに命令したが、それを打ち消すようにすぐ兄さんが指示した。

「駄目だアレックスを離すな。離したら懲罰だけでは済まないと思え」

伯爵である兄さんの命令のほうが僕の命令よりも強制力が強いため、それで衛兵たちは僕を押さえる力を遠慮なく強め、僕の言葉を完全

に無視するようになってしまった。
その後、兄さんが小気味よさそうな表情を浮かべながらでかい身体で悠然と僕に近づいて、僕の二の腕を掴んで拘束し、衛兵たちは僕の身柄を兄さんに引き渡すことで兄さんに褒められ、まるでいい仕事をしたとばかりに誇らしげに敬礼をして退いた。奴らは伯爵の機嫌を取れれば僕のことはどうでもいいと思っているらしい。
僕は兄さんを見た。兄さんと僕とでは背の高さならあまり違わないものの、ウエイトが違うので、一度捕まるとそうそう逃げられないのは分かっていた。大柄でしかも鍛えている男の腕力や握力は、並大抵のものではなかったのだ。

「卑怯だぞ」
「ふっ、アレックス。そう何度も逃げられる私ではないよ」

そして兄さんは、僕の頭や顔を、でかい手で勝手に撫でまわした。僕はそれを払おうと思ったが、たぶんそれをしてもやめないことは分かっていたので、仕方なく撫でられた。そのほうが早く気が済むだろうから。撫でられながら、これはたぶん相手が無力なのをいいことに、迷惑などお構いなしで触りたいときだけ犬とかを撫でまわすのと同じような感じだと思った。

「まったくどうしておまえは私に寄りつかないんだ。食事のときも生返事、相変わらず呼ばなければ顔も見せに来ないというのは、どういうわけなんだね。うん?」

僕の頭に手を乗せて兄さんが言った。

「最近は兄さんが僕とあまり食事を取らないんじゃないか。アレクシスと一緒に食べてるんだったらそれで満足していればいいんだ」
「うん?　私をお母さんに取られて悔しいのかアレックスは。まっ

たく」
「そんなこと言ってない」
「それよりもだ、いい子なら、この城を出るならばもっと私と話をすることがあるだろう？　もっと私に相談することはないのか？　心配事だとか、王都の地理的なことだとか、何かあるだろう？」
「兄さんに相談するほどのことはないよ。細かいことはカイトと相談するから」
「いいや、あるはずだよ」
兄さんは決めつけた。
「ああ、おまえがこの城を出て暮らすとは……、ついこの間まで人形遊びをしていたようなのが。こんな頼りないなりをして大丈夫なのか？　今度ばかりは心配だな……」
「衛兵に命令して僕を捕まえろっていうのは、心配する人間のすることなのか？」
僕の皮肉に気分を害したか、兄さんは一瞬厳しい顔になって首を横に振った。
「アレックス、その反抗的な態度は何だ。私に反抗は許さんぞ。可愛がられたいなら素直に可愛がられたいと言いなさい。何故おまえはそうなんだ。反抗することが格好いいと思っているのではないだろうね？
……やはり、母親がいなかったせいで、情緒面に問題が出てしまったのだろうか。男親だけではやはり何かと細かい気配りが行き届かないものだからな。その分、おまえを甘えさせることで補ってきたつもりだったが」
「仕事してるか遊びまわってて、甘えさせたことなんてなかったくせに」

「ふっ、ほら見ろ、そんな恨み事が出るということは、やはり私に甘えたいのではないか。本音が出たな。素直になれアレックス。そうか、おまえは私が好きでたまらないか。仕方のない奴だ」

兄さんは得意そうに笑って言った。

「なんでそうなるんだ」

「アレックス、ところで提案だが」

「何ですか？」

「私も伯爵邸に居を移すとまではいかないが、当面の間は三日に一度は泊るようにしようかな。おまえが殿下と上手くやれているかも知らなければならない。そうだな。そうすれば、おまえも何かにつけ心配がないだろう。

この私も忙しいのだがね、おまえがどうしてもと言うなら、夜だけでもそうしてやらないこともないよ」

「えっ、いいよ……」

兄さんが頻繁に伯爵邸に顔を出したのでは、僕の独立計画が頓挫してしまいかねないと思い、僕は慌てた。

「兄さんがわざわざいらっしゃることないよ。大丈夫、上手くやるよ」

「いや、アレックス、何せおまえは世間に出たことがないだろう。私の許で公務の手伝いをするのとはわけが違うのだよ。これまでは何かあれば私が責任を取るという条件下での役目だったが、これからはそうじゃない。アレックスの初めての冒険だ。分かっていると思うが、今後おまえの行動はおまえ自身と、私と、アディンセル伯爵家そのものにも反映するようになる」

「それくらい分かっています。言われなくたって慎重にやるよ、殿下のご機嫌には最大限注意を払うし」

「そうか。……だがなアレックス、でもしばらくは心配だろう。私の助けが必要になるかもしれない」
「もしかして、兄さんは僕と離れて暮らしたくないの？」
僕は兄さんを見て言った。
すると兄さんは長めの黒髪を掻き上げ、その端整な顔を静かに顰めた。

「いや…、そうではない。これは飽くまでもおまえがという話だよ。何を言っているのだ。おまえの心配をしてやっているのだよ。私はおまえがそうなんじゃないかと言ってやっているのだ」
「いいよ、大丈夫」
「いや、大丈夫ではないだろう。そうやって何でも自分の判断が正当と思うな。おまえはもっと素直さを持ちなさい。それともまだ反抗期なのか？」
「嫌だよ」
「駄目だ」

途中から訳の分からない問答になった挙句、そのまま兄さんが風紀関係の訓示を三十分ほど始めたせいで、僕は朝からその廊下の見世物になった。

第２５８話　招いてない煩客（１）

朝からとんだ妨害が入ったが、僕は時間より早めに行動していたので、兄さんに絡まれた時間はデートの致命的な遅刻にはならずによかった。

そう、昨晩タティとデートの約束をしたので、僕は今朝は執務室に顔だけ出すことにしていた。どうせ来週から王都に行くし、もうやることは大した仕事でもないから、後のことはカイトに任せるつもりで、指示だけしておこうと思ったのだ。

もしかするとこれから何年かは王都暮らしになるかもしれないので、故郷での思い出をタティと一緒に刻んでおきたい。もっとも帰ろうと思えば、ハリエットを使えばすぐ戻って来ることはできるのだが、それでも住まいを変えるのは、僕もタティも生まれて初めてのことなのだ。

デートをシエラにみつかったら面倒なので、タティとは厨房前で待ち合わせしている。厨房にランチやかごを用意させるからだ。お姫様育ちのシエラは、基本的に使用人やら業者やらが出入りしているような区域には行かないし、逆にタティはちょこちょこ趣味のために厨房辺りをうろついているから、さすがにそこでデートの待ち合わせをしているなんてことは、シエラは気づかないだろう。

僕がタティを部屋に迎えに行ったり、執務室にタティを来させるなんてことをすると、怪しまれるのは明らかなので、それはしない。

僕らは子供の頃にしていたみたいに、虫の瓶や木苺のかごを持って、厨房に昼食のバスケットを作らせて、二人きりでピクニックをするという算段だった。

ところがそんな日に限って、またしても、兄さんに輪をかけて非常に鬱陶しい人物が、朝から執務室を陣取っていたりするものなのである。

「おほほほほっ！　ご機嫌ようアレックス様。いい朝ですことね」
「ああ、おはようヴァレリア……、何か用？」

朝から立て続けての二度目の妨害は、さすがに僕を疲弊した気分にさせた。
呼びもしないのに勝手に湧いたヴァレリアは、僕の執務机の前で、相変わらずの高飛車な態度だった。わざわざ本人に言うつもりはないが、黙っていれば結構美人である。きつい感じがする顔つきは微妙にカイトに似ているのだが、そんなことを言うと激怒されそうだから、細かいことはいちいち言わない。
それにしても、ヴァレリアには実に惚れ惚れするような風格みたいなものがある。風格なんて、普通は若いうちにはそうそう身につかないものだと思うのに、若い頃からこれを持っているっていうのは、彼女は確かに生まれながらの貴族というやつなのかもしれない。
今のところ、やりすぎて高慢ちきになってしまっている感はあるが、彼女は上品ではあるのだ。我を適切に抑えるということを学んだなら、界隈に右に出る者のないというくらいの貴婦人として、結構大成するんじゃないかというくらい……、と、僕に礼儀を払うでもなく、ヴァレリアは勝手に怒り出した。

「ちょっと！　朝の挨拶もなしにいきなり何か用っていうのは失礼じゃなくて！？　まるでわたくしが邪魔みたいじゃないの！」
「いや、邪魔ってわけじゃないんだけど……。挨拶したんだけど、聞こえなかった？」
「こっちはこれほどの美女よ。貴方も男なら、もっと気を遣って欲しいわね」

ヴァレリアは長い黒髪に手を入れて、それを払ってみせた。

「う、うん」

僕は頷いた。

「当然でございましょう、美女を見たら、挨拶代わりに褒めるのは」

それからヴァレリアは腕組みをして僕を睨んだ。

「えっ？」

「わたくしを褒めろって、言っているんでしてよ。貴方も空気を読んで」

「ああ……、君は相変わらず美人だね。また綺麗になった？」

催促されたので僕が言うと、ヴァレリアは例によって手を口許に添え、得意げに笑った。

ちなみにその薬指には、赤いルビーが光っている。僕は宝石の目利きができるわけじゃないが、これはカイトは結構頑張ったんじゃないかと思えるような品物だった。だからヴァレリアはわざと見せているのかもしれなかったが、この上に自慢を聞かされるのも何だか面倒臭いので、触れないでおいた。

「おほほほほ、嫌だわアレックス様、貴方ってなんて正直な方。あんまり正直すぎるのも困ったものよ、わたくしがいかに絶世の美女だからと言って！

平均以下のブスのくせに、ファンクラブなんてくだらないものにいい気になっている何処かの下品な馬鹿女と違って、わたくしの美しさは正真正銘本物だから！

あんな売女もさながらのあばずれよりも、わたくしのほうが何千億倍も清純で純粋で素直で控え目で可愛くて美しいのよ！　そうでしょうっ！」

ヴァレリアが僕をギッと睨んだので、僕は慌ててその通りだと同意した。

「当然よ！」

ヴァレリアは足を踏み鳴らした。

「でもさすが、貴方は生粋の名門貴族だわ。女性に対する礼儀を知ってらっしゃるもの。何処かのケチな下男とは大違い。それに引き換えあの下男は、わたくしを美しいなんて言ったことがないんだから。頭に来るわ。あの野蛮人は、自分の立場が全然分かっていないのよ。平民は貴族様を崇拝すべきだということが。ましてやこんな美女よ」

今日のヴァレリアは、いつにもまして、妙に容姿のことについてこだわっているように感じつつ、僕は執務室内を見まわした。室内には他にカイトとハリエットとオニールがいる。ハリエットはヴァレリアに、部外者は早く帰りなさいみたいなことを厳しく言っている。ヴァレリアはまったく取り合っていないようだが、このお嬢様に対して物怖じもせずにそんな口をきけるとは、ハリエットは度胸がある奴だと僕は密かに彼女を見直した。

目があうと、ハリエットが両手を軽く上げて僕に言う。

「どっちも最低であるにしても、ヴァレリアのほうが人間性はまだマシだと思うけどね」

「何の話？」

また別のところでは、例によってカイトが部屋の隅で置物のようになっている。ヴァレリアが聞えよがしにカイトを批判しているが、彼は反論は一切しない。

日頃あんまり本心を顔に出さないカイトだが、ヴァレリアが近くにいると、彼女のことが苦手でしょうがないという雰囲気を醸し出すことがある。彼は滅多に嫌な顔とかはしないし、誰かに何かを言われても、飄々と受け流す男なのだが、そんなカイトにも実は人並みに感情機構ってものが備わっているんだなというのが垣間見える瞬間なわけだ。

特に冬頃、結婚が決まった直後なんかは、かなりヴァレリアが嫌そうだった気がしたのを憶えている。でも今は開き直ったのか、それとも観念したのか、もうそれほどでもなかった。と言ってヴァレリアと婚約者らしくするということもなく、壁際にただ立っている。そんなわけで、これまで僕の執務室に我が物顔で居座っていたヴァレリアと、親しく談笑をしていたのはオニールだったようだ。

「閣下もケチだよな。ヴァレリアも使ってやればいいのに。アレックス様、確かにヴァレリアは我侭ではあるけど、結構剣術も上手なんだよ。それに行動力がある。その辺の女みたいにすぐにめそめそしないし、使いどころはあると思うんだけどな」

ヴァレリアと一緒になって、勝手に執務机前を陣取っていたオニールが言った。

この間はヴァレリアのことをなんちゃって騎士とか言っていたくせに、今日はどういうわけか、随分と言うことが違うようである。所詮はオニールなんていうのは、口八丁の小物ということは分かっているのだが。

逆にヴァレリアには人を従え慣れた者が持つ風格、それに変なカリスマ性みたいなものがあったりする。したがってオニールみたいな小物のカスは、こういうボス的な雰囲気の相手に、引きずられる傾向にあるに違いない。

ちなみに僕はと言えば、さしずめ一匹狼といったところだろう。孤高とニヒルさを持つ男には相応しい表現だ。だから友だちはいない

んじゃなくて、特に必要としない。寧ろそんなものは、真の男にとって煩わしいものなのだ。

かつては友だちが一人もいないと思って泣いた日々もあったが、それは大いに間違っていた。僕は既に、それを必要としないレベルの人間だったのだ。もっともカイトだけはどうしてもと言うから、最近は友だちにしてやっているけど。

「おほほほ、それは勿論よ。女の見苦しいところっていうのは、そうやってすぐ弱者になりたがるってところなんだから」

ヴァレリアがオニールの言い分を元に、彼女のいつもの見解を口にした。

「どいつもこいつも男どもと戦おうとせず、媚びたがるのよ。しかも根性の図太い何処かの馬鹿女みたいなのに限って、自分は純情可憐だって演技をより完璧にしてみせるもんだから始末に負えない。それに本来はまともな女たちだって、男社会にすっかり騙されて、男に媚びて弱者のふりをすること自体が何ともプライドのない、ずるいことこの上ない思考回路なんだって自覚すらもない。まあもっとも、いちばん悪いのは男であり、この男社会なんだけど。女が馬鹿であるように仕向けているから。男に頼らないと生きられない社会の不平等な仕組みもそうだし、そういう弱い女こそが賛美されて、それこそが女らしいっていうそういう指標が作られているからこそ、馬鹿な女たちはもっと弱く、もっと馬鹿になろうとするわけ。

そして男側としても、必死で男の機嫌を窺って、馬鹿になってへらへらしている駄目な女ばかりのほうが、そりゃあ幾らだって見下せて、何か都合の悪い問題が起これば女が悪い、女が馬鹿だってことで全部片づけられるし、気分はいいって寸法よ」

「うーん。まあヴァレリアが言ってることは分からなくはないんだ

けど。男っていっしょくたにされても、考え方はいろいろなんだけどな」

「おまえはそうでも、だいたいの男は女を馬鹿にしていれば済むと思っている奴らばっかりなのよオニール！」

お嬢様はオニールを叱りつけた。

「オニール、おまえは意外とわたくしの言うことが理解できる男、これは知っているけど。

わたくしのお父様にしたって、伯爵様にしたって、ここにいるアレックス様にしたって、男っていうのはね、息をするように女を馬鹿にして、差別する連中なんだから！」

「でもヴァレリア、おまえが面白くないのは重々分かるけどさ、それがここでの常識って言うかさ。ヴァレリアも本気で騎士をやりたいなら、そこはそろそろ踏まえておいたほうがいいのかも。だからさっきも擦り合わせの話をしたんじゃん。おまえが論理を振りかざしたって社会が変わるわけじゃない。それに実際女が前に出ても、事が上手くまわらないんだよ。いちいち角が立つんだよね。

これは何重もの意味で、すごく根深い問題なんだけど、女っていうのは女からも差別される存在なんだよ。その証拠に、ヴァレリアだって女に命令されたら意外とむかつくんじゃないの。想像してみ、ましてそれが自分より若い女だったらどうよ」

「煩いわねっ！　だから、それは、男がそういう社会を作って、そういう風潮にしちゃってるからじゃないのよ！」

第259話　招いてない煩客（2）

「まあ、ヴァレリアの剣術の腕前については認めている僕なわけだけど、こういう諸々の素質と言うか、考え方からすると、やっぱりヴァレリアは騎士をやるんじゃなくて、かえって実家で遊んで暮らしてたほうがいい気もするなあ」

オニールは言った。

「結婚するんだしさ、方向転換するのにはいい機会かもよ。それは、僕は友だちだから、ヴァレリアが出て来るって言うならそれは歓迎だけどさ。

今はアレックス様とそんな議論をしに来たわけじゃないだろ？　それを吹っかけてアレックス様がおまえに好感持って、使ってくれると思ってるとしたらそれはちょっと違うんだな。外の世界でそうやってぎゃあぎゃあ言っても、ヴァレリアん家の使用人みたいには、誰も話とか聞いてくれないと思うよ。不満なことがあるなら、家の中で威張り散らして、カイト君締め上げてるのがいちばん性にあってるんじゃないか」

「それじゃ駄目よ！」

「そう。そうなんだよな」

ヴァレリアが声を張り上げると同時に、オニールは素早く言い分を引っ込め、彼女の考えに同調した。

「わたくしはウェブスター家の頭領娘ですもの！　いつまでも燻って、表舞台に登場しないでどうすると言うのよ！　わたくしが戦わなくて、誰がウェブスター家を背負うのよ！

わたくしは家の中で妻帯者の所有物みたいにして、家の事だとか、

編み物だとか、愚にもつかないようなつまらないことをやってよ、外の世界も知らないまま、年だけとって一生を終えるなんて生き方だけはしたくないのよ！
だってそれって、人生に何にもないじゃないのっ！
生まれて来て、大して物も分からないうちに結婚して大事な身体を男にくれてやってよ、世間知らずのままババアになって、ただ死ぬだけってこれほどみじめで砂を噛むような人生があるわけ！？
女は男の世話をする奴隷になるために生まれて来たわけじゃないの！
生まれて来たからには、何か大きなことをやりたいのよ、分かるでしょうっ！？」
「分かる！」
オニールは頷いた。
「ヴァレリアの言うことは正しいよ！　僕だったら自分の人生が全部他人次第とか、そんなん我慢できねーから結婚即日夫をぶっ殺して自由になるしかねーと思う！
下着にジャックナイフ仕込んどいて、戦闘開始と同時に暗殺完了みたいな特殊部隊さながらの切り抜け方が理想だな！」
「それちょっとふざけすぎ」
ヴァレリアは腕組みをしてオニールを睨んだ。
「でもだいたいはその通りよ！　女の人生をあてがわれそうになったら、普通の人間なら、それくらい考えて当然なのよ！
なのにおまえときたら、今日はやたらとわたくしの考えに反証するようなことばかり言って、おまえにはがっかりよオニール。何でも分かりあえる友だちだと思っていたのに、おまえはカイトに尽くせみたいな頭の悪い意見を言うなんて！」
「ええーっ、僕いまそんなこと言った！？」

「言ったわ！」
「なんで僕に突っかかるんだよー、だってそんなこと口に出すからおまえ使って貰えないんだぞ？　差別だって思ってても取り敢えず最初は黙っとけって、教えてやってるだけなのに……。僕ちんだって本当はしょっちゅうジャスティンのくそったれとか言いたいけど、言ったら半殺しにされるから言わないんだ。ヴァレリアは女だから、手加減して貰えるっていう、そういうこと利用してる部分もあるんじゃねーか」
「何ですって！？　女を利用してる！？」

オニールの一言に、ヴァレリアが殺気立った。

「……オニール、おまえそれ、もしかして女であることを利用して、つまりわたくしがぶりっ子して、女を売り物にして、男に媚びてるってそういう意味よね？
でもそれわたくし反吐が出るくらい大嫌いなことなんですけどっっっ！？」
「だからあ、そうじゃなくて。あー、もー、人の話を聞かないのは、ヴァレリアの悪いところだぞ」
「あら、いつだってぶれないのは、ヴァレリアのいいところじゃない」

と、いったいどういう風の吹きまわしか、そこで何故かハリエットがヴァレリアに加勢するようなことを言った。
彼女はのしのしと執務机前にいるヴァレリアの近くに歩み寄り、同じような対決姿勢でオニールに向き直る。

「ヴァレリアは、今ってひとつも間違ったことなんか言ってないと思うわ。女だって当然自分の人生を生きるべきなのよ。誰だって自分の力で自立したいと思っているし、男に頼らないと生きられない

自分の立場はみじめだと感じてる。子供のうちはまだいいわ。だけど、いい大人になっても保護者が父親から夫に変わるだけみたいな人生って、果たして自分の人生を生きているって言えるのか疑問だわ。ぞっとしない？　ある日我に返って叫びたくならないかしら？

大人になっても常に自分以外の誰かが、自分以上に自分の人生に対して影響力を持っているなんてこと。わたしやヴァレリアは変わっているのかもしれないけど……。

でも、何だか違う気がするの。それって何だか、何かが違う気がする。

なのに相変わらずこういう意見を押さえ込めと言うオニールさんや、この社会のほうが間違ってる。

でもそれでもヴァレリアはいつも問題意識を持って、それを提起し続けてる。まさに男に媚びたりしないのよ。その点はすごく偉いと思うわ。

だって、女の権利については、誰かが大声出して言い続けていないと。たとえそれが男どもの気に障って、生意気だって叩かれたって、それは大局的には正しいことなのよ。誰かがそれをやらないと、教育を受けることすらできなかった女たちは問題にすら気づけず、女の人生は永遠に汚泥を這いずる虫けらのまま。現状の劣悪な社会ではどんなに機知に富み、親切で誠実でも、無能なルーザー男にさえ腕力で屈服させられるのが女なの。老婆が死ぬ間際に神様に生まれ変わったら女だけは嫌ですと泣きながら懇願するような社会は、続いてはならないのよ。腕力のある人間がイコールすべての権益を牛耳るような文化程度の低い社会にあっては、女は必ずと言っていいほど社会的地位が低いっていうのが」

「おいおい、待て待て。ここはディベートの場でもなければ、猛女が治める原始アマゾネス王国でもねーぞおまえら」

オニールが、両腕を振ってハリエットの話を遮った。

「最初しおらしい少女の考察かと思って聞いてたら、お嬢ちゃんもそっち系か。なんでちょっと利口な女はすぐそういう方向に話を持ってくのよ。それに僕ちんはおまえらの憎むべき男尊女卑主義じゃねーって。そういうふうに何でも被害受けたみたいな方向に持ってくなって。

だいたい、もっとこうおおらかな、別の見方をしろよ。サンセリウスはなんて言うか、古き善き郷愁と、規律と礼節を重んじてる国柄なんだよ。つまりこれは、文化であり、美学なんだよ。分かる？」

「煩いオニールッ。ちょっと、いま意外にもハリエットが超いいこと言ってんじゃないの！」

ヴァレリアがオニールを押し退け、感心した顔でハリエットに向き直った。

「ああハリエット、ハリエット、ほんとに意外だわ。おまえがそんなナイスな考えを持っている女だったなんて」

すると、ハリエットは頬を染め、ヴァレリアに対して殊更にえへんと胸を張った。

「そんなの、当り前でしょう！？　わたしだってずっとこのことには怒りを覚えていたの。女だというだけで下位に位置づけられて、見下されて当然っていうこの社会に対してよ。

ここは想像を絶する不平等社会よ。女は何をするにも必ず父親か夫っていう保証人が必要だって思い知らされるんだもの。それか主のアレックス様か。わたしなんて、誰かの所有物扱いにすぎないのよ。法律自体、女は誰かの所有物であることが前提だしね。姦通罪とか、そういうの読んでも。人格じゃなくて動産扱いなのよ。ここではいつも本当に屈辱的な思いをさせられてる。

一方で男に生まれさえすれば、馬鹿でもボンクラでも尊重されて、

尊敬すらされて、自動的に高く評価されるんだから頭に来るわ。男じゃない、貴族じゃない、若いっていう三重苦要件のうち、一つ当てはまっていたら半人前、二つ当てはまっていたらもう人間扱いされない社会なんだから」

僕は指を折って、自分が若いだけ当てはまるな、と思った。

「まったく許せないわ！　女を劣等扱いする社会は滅びるべき！」

思わぬところで仲間を得たと思ったのだろう。ヴァレリアが興奮し、両手を握り締めて叫んだ。

ハリエットも同調して叫ぶ。

「その通りよ！　セリウス王は革新的で偉大だったのに馬鹿息子がすべてを台無しにしたの！

もう一度革命が起こるべき！　そして家督継承権はわたしたち女の子にも同等に付与されるべき！　あと、財産権とかそういうのも」

「いいえハリエット、それじゃぬるいわ！　すべての権益は女だけが独占すべきよ！　これまでずっと男だけがそうして来たんだから、向こう何百年かは女が権力を握るべき！

それから後に、平等云々の話をすればいいのよ。男どもはあまりにも自分らが女からあらゆるものを奪い取って、女に対してどれほどの仕打ちをしてきたかを知らなすぎるわ。それがどれほど残酷なことだったか、身をもって味わってみないと痛みが分からないのよ。被害者ぶってるとか、よくもそんな人を馬鹿にしたことが言えるものだわ。そんなのちゃんちゃらおかしいわよ。ぶってるんじゃない、だって厳然とした被害者なんだから！　この世の中は女に対してあまりに不当すぎるんだから！」

ヴァレリアは引き続き熱く演説した。

「何せ女は何処に行っても信用されず、女であることを根拠に馬鹿にされ、見下され、笑われるわ。女であることに懺悔を求められるのよ。教育だって満足に受けさせて貰えないし、結婚相手も勝手に決められて、自分の意思と関係なく性奉仕を強制され子供を産まされ、何の権利も財産も持ってないから必死になって這い蹲って、自分をそんな酷い目にあわせる男性様にプライドを捨ててお縋りしないとご飯も食べられない。

夫との仲が険悪になれば、女は殴られたり、殺されることさえあるのよ！？　離婚ができないから、新しく別の女と結婚するためには、妻が死なないと駄目だからっ！

でも大抵そんなことをしても殺人罪でしょっぴかれることはないわ。男は自分の評判を守るために何とかして事故を装うし、最悪ばれても妻は男の所有物だから社会的には微罪で済むのよ。妻の実家に余程権力がなければ、妻を殴り殺したところで簡単に逃げおおせられる。わたくしたち女は持たざる者だから。生存権さえ男に握られているからっ！！」

ハリエットが僅かに瞳を潤ませて、大きく頷いた。

「ええ、そうね。本当にそうだわヴァレリア……」

「かと言ってそんな悪夢みたいな生活から逃げるにも、家を借りるにも女名義では借りられない、同一労働をしても賃金はせいぜいで男の半分、しかも仕事するにも何人もの身許保証人が必要という、女の身ではほぼ自活ができない仕組みになってる。物乞いか売春以外には生計を立てる手段がない状況に追い込まれる女のいかに多いことか！

それに、悲劇はそれだけじゃなくてよ。それまではまともに暮らしていられたとしたって、それは夫がいる間だけ。もし夫が先に死んだら年老いた女たちの多くは貧乏暮らしに転落よ。養ってくれる心

優しい息子がいればいいけど、息子が冷たかったり、もし娘しかいなかったら最悪ね。家も財産も女には相続権がないから、老婆たちは夫の死と同時にすべてを失って路頭に迷うってわけ。すごいでしょう、お金どころか家すらなくなってしまうんだから。息子とか親戚に頭を下げて生活させて貰うにしたって、女は老人になってなお肩身の狭い思いをして生きなくちゃならない、本当にむごすぎる扱いだわ。この国の仕組みは男にはとことん手厚く、弱者の女にはとことん厳しいのよ。この国の男どもの女に対する悪意と暴力って、これほどのことよ。

ここは地獄かっていうほど行き場のない無茶すぎる酷い社会よ。女の人生の利益についてはほとんど何も考慮されていない。そういうみじめな状態に、女たちは何百年も何千年も貶められていたのよ。だから、男も同じだけその屈辱と生き地獄を味わうべきっ！

でなきゃ女がどうとか、駄目だとか馬鹿だとか、いろいろ偉そうなことを論じる資格なんか男にはないはずよ。だって女たちはすべからく、男のようには褒めて貰えない、盛り立てて貰えない、教育もたりない、大事にされない、待遇も悪いって状況で、ほとんどの場合腕力で抵抗することができないから主義主張も封じ込められて、必死で媚びながら生きる以外に選択肢がないことを強制されてきているんだから。

幼い頃から男は自分の人生に集中して夢を追い活躍することを、女は自分の人生は二の次で自分よりもまず男を助け、従属することを教え込まれるのよ。女というだけで格下扱い！　女というだけで叩かれる！　生意気だと頭を押さえつけられる！　たとえ正論を語っても女の言う話だとか言って聞いて貰えない！　女の知能と精神は十代前半で止まるとか、女は二十五歳を過ぎたらババアだとか廃棄物だとか、侮蔑的な表現待遇には事欠かない！　なんて不平等なのよっ！

だからこれまで女がずっとそうだったように、手足と自尊心をもがれた状態で女性様に傅いて生きるってことを取り敢えず、一万年く

らいは男どもにも経験して貰わないと！」
「そうね、まったくその通りだわ！　それで女が権力を独占するなんてそれ最高！」

ハリエットが笑顔になって、諸手を挙げてヴァレリアに賛成した。

「男はすぐ争いたがるし、野蛮で傲慢で嘘つきで怠け者で馬鹿ばかり。そんな連中が作った今の社会は、当然男だけに都合のいいことばっかり。
だったら、その逆の社会を女の手で作ったほうがずっといいかも！」
「いやぁ、女が権力握るのはよくないと思うぜ。たぶん」

と、そこで馬鹿のオニールが果敢に会話に割り込んだ。ハリエットとヴァレリアなんて、どっちも口が達者な上に気が強くて好戦的という条件がそろっている女を相手にするよりは、ここは黙っておいて、取り敢えず話を終わらせればいいのに……。

「はあっ！？」
「オニールさん、何？」

ハリエットとヴァレリアが案の定、挑戦的な物言いでオニールに食ってかかる。
ちなみに僕はハリエットとヴァレリアがタッグを組んでいるようなひどい場面に、敢えて自分の考えを言うのは恐いと思うので、自重している。僕の考えとしては、女は可愛くしていればいいので、だいたい今のままでいいと思う感じだが、言ったら袋叩きにされかねない空気だったのだ。
今は恐いので黙っておくが、女たちは男ばかり恵まれていると言って気がつきもしないけれども、この社会は何も男にとって楽園というわけじゃないことを、心の声を大にして言っておきたい。男は男

で大変だってことを、女は理解するべきだと思う。何が大変かって、この社会はとにかく男に要求されるハードルが高すぎるのだ。肉体的に、精神的に、知的に、ものすごく高い水準設定がなされていて、そこに届かないとたちまち落第点をつけられてしまう恐怖が女たちに分かるだろうか？

その意味では女は楽だ。肉体的に弱いのは周知のことだし、精神的にもまあ弱くても大丈夫。頭も大してよくなくていい――、つまり勉強を頑張らなくても許されるという意味で、愚かであるほうが好まれるくらいだ。女が社会に要求されるのは、おおよそ容姿の美しさだけ……。

後のことは、サンセリウスは男が女の面倒を見たり助けることは義務であり、美徳になっているから、父親や夫に一生面倒をみて貰えばいいのだから。

しかし男、特に貴族階級の男はそれではまったく通らない。男が顔しか取り柄がなかったらどういうことになるかは誰もが想像する通りだ。

それに男社会には乱暴を好む野蛮人が普通にごろごろいるから、いつ何処から批判的暴言を吐かれるか分からず、常に精神的にもタフでないとならない。

体格はいいにこしたことがなく、少なくとも、若い年代では喧嘩が強いことが何故か重視され、人間関係の序列に決定的な影響力を持つため、平和を好む気の優しい男や、筋肉がついていない男はなめられ、まともに扱われない可能性が高い。

でも男が全員そんなつらい世界でやっていけるほど大雑把で無神経なわけじゃない。オニールの家庭のようにしょっちゅう兄弟で殴り合いが発生する、これは極端だと思うが、そういう男同士が強さの誇示をしあわないといられないような社会は、僕のような繊細な男にとって非常に生きづらいものだ。だから取り敢えず、男同士ももっといろいろつきあい方とかを丁寧に、相手を傷つけないように配慮するべきだと思う。かと言って女のように格下に扱われたいわけ

じゃないのだが、気が強くて自分に自信があり、かつ無神経なタイプの男は基本荒々しい乱暴さが大好きで「女々しいことを言う奴は即タマを取って女になれ」的な流れになるのが……。

第２６０話　招いてない煩客（３）

「何、オニールはわたくしの意見に逆らう気！？」

そんなことを僕が考えている間にも、ヴァレリアが一歩踏み出しオニールに凄んだ。

「いや、逆らうって言うかさ、だって……。女が権力なんか無理だって。重荷過ぎて無理だよ絶対。絶対世の中無茶苦茶になる。想像つくもん。不安すぎて絶対任せたいと思わない。おまえだってそうだろ？　女が政治の根幹握ったらどういうことになるか」

「何が！」

「女は自分で責任取るってことをやらないし、悪者になるってこともやらないし、泣けば許されると思ってるから無理だって。若いとか若くないとか、気が強いとか気が弱いとかに係わらず、性格的に人の上に立てる女の奴って、全体の一割だろ。あとの奴は無理だよ。だっておまえら見てたら分かるじゃん。だから権力なんて到底無理。絶対組織に好き嫌いとか私情を入れるし話にならない。絶対愛だ恋だにうつつを抜かすし」

「男にだって私情入れる奴はいるでしょうよ！　恋愛に走る奴も！」

「そうだけど、絶対女のほうが多いって」

「だからそれが女を見下してるっていうことだし、それが差別だって言ってるんじゃないのよ！　やらせてみたこともないくせになんで決めつけてるのよ！」

「だって分かるもん。歴史を見たって、責務を優先して恋愛を切り捨てた立派な女王とかなんか数えるほどしかいないじゃん。だいたい、男の影がちらついて身を崩すかしちゃうじゃん」

「なんで女の場合だけ恋愛を捨てなきゃいけない議論になるのよ！　歴史上、男だって結婚しなかった権力者のほうが少ないんじゃな

いの？　ほとんど絶対女を獲得してるじゃないの！」

「でも男で恋人に支配されたがる奴はまずいないし。自分の女に支配権を渡したいと思う男はいないだろ。男には恋愛優先にして、州なり国家なりの運営を後まわしにするような馬鹿な真似をする奴はいないからだよ。軍隊だってそうだし、首長クラスになれば色恋優先する奴なんかいないよ。

だいたい女なんかと恋愛ごっこなんか、男が本気でやると思ってんの？　男が女に優しくするのは、単純にやりたいからさ。正直おまえらほど深く考えてねーよ。権力者ともなれば、なおさらそうさ。愛とかそんなうざいことに人生の重点置く奴いないから。

だって女なんかめんどくせー奴ばっかじゃん。何かって言うと愛だ恋だ、正直、男の友だちと遊んだほうが数倍は楽しいよ。女は話も面白くないし、こっちがもてなしてやんないと場が持たないし機嫌損ねる奴までいるしマジでかなりうざいよ？　ま、可愛い子なら、いるだけでいいけど。睨むなって、ま、まあ、ヴァレリアとお嬢ちゃんは別格としてもさ……」

オニールは迫り来るハリエットとヴァレリアの顔色を見て、両手をかざした。

「でも女は、立場によってプライオリティが変わるってことを理解できない奴が多すぎるから言われるんだ。男とは違って、恋愛至上主義者だらけなんだよ。でもある立場になればそれは子供時代のお飯事並みにくだらないことなんだ。もしそれを手放したくないなら、でしゃばろうとしないで、おとなしく家庭に納まっとけって話。逆に手放せるならどんどん進出すればいい。そういう女なら、少なくとも僕ちんは歓迎する。むさ苦しい男ばっか集まってるよりは、場には女がいたほうがいいに決まってんだから。言ってるだろ、僕は全然男尊女卑じゃないって。女の進出には大賛成とはいかないけど、まあ賛成なほうだよ。だけど、多くの女は世界観が自分中心で

狭いんだよ。ヴァレリアみたいな骨のある、主体性のある奴でさえね」

「だからって、女が馬鹿だってことにはならないでしょう。だってそれは、女は恋愛至上主義にならざるを得ないのよ、いい夫を掴まえる以外に生きる手段がないし、そうなるように洗脳されているんだから。

お伽話を見なさいよ、ほとんどの女児向けお伽話は何故かヒロインは王子様かそれに準ずる権力者に見初められて、それで幸せになりましたでハッピーエンド！　自分で戦ったり努力して困難を何とかするみたいな向上心自体が最初からない！　仮にあってもすぐ王子様的な奴が出て来てヒロインを助けて、ヒロインはそいつとの恋愛に狂う！　こういう物語には、湧いて出た王子をぶん殴って退場させるとか、男に頼らず頑張ろうみたいな教訓はないのよ。そういうのがあってもポーズだけで結局最後にはとにかく男に助けて貰う！　男に守って貰う！　これが大前提。これが大目標。そのためには？　当然エッチで男を落とす！

ヒロインの容姿が美しいっていうことはイコール、性的魅力の高さなのよ。つまりヒロインはどいつもこいつもエッチで見初められてエロいご奉仕で男に生活の面倒みて貰おうって話！

そしてそんな卑屈でみじめな生き方こそが正しいって、いたいけな幼い女の子たちに刷り込んでいるのよ！

人間としての誇りや尊厳さえない奴隷階級になるための間違った生き方を、あたかもロマンチックな夢として抱くように、洗脳しているのよ！

そしてその目論見は成功し、結婚を地上の楽園か何かのように勘違いするように誘導は完了、今では世間の大半の女性たちがその悪質な陰謀の犠牲者よっ！！」

「えええー、そうなん？　そういうことだったんっ？」

「そうよ！」

「知らなかったーっっ」

「だから悲劇が何世代にも渡って繰り返されているのよ。女たちはもうずっと同じ過ちを繰り返してる。男に依存して男の言いなりになることが幸せかのように勘違いして、男の機嫌や顔色を気にすることが最優先事項になってしまってる。男次第の人生が、本当はどれほど自分の誇りや尊厳を殺す行為か、自分を大事にしていないみじめな選択であるか考えようともしない。

人間としての幸福の感覚を麻痺させられて、洗脳されているから、わたくしのお母様のように自分の娘にも自分と同じ人生を要求する者さえいる。すっかり男社会に騙されて、よかれと思って奴隷になる道を勧めているのよ。お母様も子供の頃には洗脳されているんだから、もう誰も正常な判断なんか下せないのよ。

でも本来人間っていうものは、誰かに従属して生きるべきものじゃないはずよ！」

「まあ、確かになー。そこら辺の解釈はいろいろあるだろうが、そういう意見も、一理ないことはないかもしれないけどよ。でもなんて言うか、余計なお世話なんじゃねーの……。

そうしたいって奴がいるなら、いいじゃん別に。本人が楽しければ。ほっとけばいいんだよ。お伽話にまでキレてどうするんだよ」

僕は鼻の奥がむずむずしたのだが、人前なので指を突っ込むわけにもいかず、何度か鼻をこすった。

「だから、女は物心ついたときからこういうふうになれって教えられているんだから、その呪いを解くのは難しいんだから女を責めるなって言ってるのよ！」

「別に責めてないし。ただ女が権力者になるのは向いてないから、やれる奴は少ないだろうし、実際やるにしても男からも女からも足を引っ張られる機会が多すぎて人生難易度高すぎだから、それは現実的じゃないって僕ちんは現実論を言ってるだけ。よく言えば、ほとんどの女はか弱いから無理という話だよ。

何でも被害っぽく受け取んないで、もっと軽く考えればいいじゃん。そういうお伽話にしたって、女児たちには、要するに王子様をパシリに使えって教訓してるんだなってね。そっちのほうが楽しいし、これはこれでなるほどって頷ける話だろ？

つか、おまえは何でもかんでも噛みつきすぎ。喧嘩吹っ掛けすぎ。なんて言うかな、何でも男と争おうとしないで、もっと女ってことを利用することも覚えたらどうだよ。男と女は何でも同じようにはできないんだから、たりないところをお互い補いあえばいいんだ。何でも同じように競ったってしょうがねーだろ。

体力じゃどうしたって敵わない上に生理があるんだから、男並みの連続労働、強行軍なんかできゃしないんだしよ。しかも女に無理な肉体労働させ続けると簡単に死ぬらしいじゃねーか、させられるかそんなこと？　出産でだって死にまくるのに、させらんねーよどう考えても。消費財じゃねーんだから。

男と女には、それぞれ向いている性役割ってのがあるんだって。おまえとかジェシカ女史みたいな、負けん気の強い一部の女を基準でやってたら弱い女たちはついていけずに死に絶えるよ」

「議論のすり替えでしょう！　わたくしはそういう話をしていたんじゃないわ。女の待遇や権利が低すぎると言っているのよ！」

「そうだとしたって過激なんだよおまえの言い方は。言いたいことは分かるけど、それじゃ世間には聞いて貰えないんだってば」

「わたくしは、男がこれまで女に対してやってきたのと同じようにしているだけよ！

わたくしの態度、これを不愉快だと感じるとするなら、これはこれまで男たちが女に対して、こういう横暴で喧嘩腰の態度で、反論の余地なく、まくし立てるように無理やり何もかもを押しつけ強制して来たってこと！

わたくしはこれ、やられた通りにしているだけなんですもの。おまえたちは日頃こうして女にこれほどのストレスを加えているのよ。これを不愉快に感じて素直に受けられないなら、これからその不快

感の報いを男どもは受けるべきだわね！」
「百歩譲ってそうだとしてもさ……」
オニールは息を吐いた。
「過去に女を虐げるひどい時代があったにしてもだ、おまえはその時代に生きていたわけじゃないんだし、僕もその時代の野蛮な男の一員だったわけじゃないんだから、積年の恨みみたいなことをいま僕に言われても正直困るぜ。憎しみの連鎖は断ち切らないと。女がこれまで散々奴隷扱いされたからって、今度はじゃあ同じだけ男をそうしてやろうなんてやってたら、永久に諍いは終わらないだろ」
「わたくしは、今の話をしているのよオニール。分かっていて？　今は、そんな過去を、総括するようなことを言えるほど先進的な時代なのかしら？　今も昔も女が格下って状況に大して違いはないじゃないのよっ！
今と昔で何にも変わっていないじゃないの、わたくしが家督を継いで、男爵になれて？　わたくしが自由に生き方を選択できて？　わたくし自身の名前だけで、女だと小馬鹿にもされずに世間にきちんと一人前の人間として遇されて？　おまえの言い分は所詮は欺瞞よっ！
わたくしが怒りを感じているのは、男が女から人生の選択肢から未来の可能性まですべてを奪い取っている張本人の犯罪者なのに、その償いをしないばかりか、女を見下して、馬鹿にしてよ、偉そうにしているのが当然だって顔をしていることよ！　そして女たちが置かれている状況をさも大したことないみたいに言っちゃうその残酷さ！　いったいどういう根性の悪さなのよ！　当り前でしょう、赤ん坊のときから奴隷になれって育てられた人間が男と同じように勝負できないのは！
それを、鎖で繋がれて苦しんでる奴隷を嘲笑しながら更に侮辱して

いるのが男って下等な存在なわけ！
女を見下したり、罰しているときの自分の品性のクズっぷりに気づきなさいよ！
オニールごときが男の代表みたいな顔して偉そうなこと言ってるんじゃないわよ！」
「極端だぜ！　サンセリウスは女を奴隷扱いしてないだろ、結婚だって一夫一婦制だし、そんな酷くねーって！　寧ろこの国は先進的！　十分開かれてるって！」
「いいえ、女は家の奴隷扱いよ。わたくしだって家のために結婚させられるわ」
「おまえ全然結婚嫌がってねーじゃねーかっ」
「そんなことないわよっ、こっちは毎日嫌で嫌で死にそうなくらいよっ！」
「嘘つけよ、嬉しくてしょうがない結婚のくせによ。そろそろ素直になっちゃえよ。いつまでも見えない敵と戦ってんじゃねーぞ」
「ちょっと、おまえは人が真面目な話をしているときにうざいこと言って話をそらすんじゃないわよっ！　なんでわたくしが下男との結婚を喜んでるのよっ！」

第２６１話　招いてない煩客（４）

「バレバレだってば。カイト君が好きなんだからおとなしく結婚してガキ産んでろっての」
「そっ、そんな屈辱的なことになるくらいなら死んだほうがましよっ！！
冗談じゃないわ、あいつの子供なんて、あいつの子供なんて、汚らしい汚物同然だって言ってあるでしょうっ！！」
「そりゃ平民のガキなんか産んだらおまえ、平民にやられた女ってことだからまー、外歩くのも勇気いるなってくらい悲惨な状況になるのは同意するぜ。北部は差別がきついからなっ。平民なんかと結婚したら、結婚したはずなのに何故か世間じゃ下男に凌辱されたような印象になるのはまあしょうがないだろ。
でもま、いいじゃん、いいじゃん、だってそれって女の夢だろ？
つまり結婚して、子供を産むってやつ。だっておまえらはその目的のために必死こいて男あさりしてるんだからよ」
「今の発言は、さすがに許し難いわ。警告もの」

そこでハリエットが、ヴァレリアの援護射撃をするべく前に出た。

「オニールさんの率直さはかなりの確率で露骨に不愉快。貴方って他人に対してちょっと無神経すぎじゃないの？　ヴァレリアにも失礼だし、カイトさんだって本人がそこにいるのに、自分がそれを言われたらどう思うか考えて！」
「なんで貴族様が平民の顔色いちいち窺って発言しなきゃならんのよ」
「ヴァレリア、所詮自分には降りかからない火の粉だから、男の人に何を言ったって駄目よ。こんな問題は男の人には一生関係ないし、女は今のままにしておいたほうが男には都合がいいんだから。男性

がそうやすやすとこの話に耳を傾けて、せっかくの既得権益を手放すような真似をするわけがないわ。完全に平等になんかしたら、男の中の何割かは、今まで簡単に手に入れていた権利と地位を手放すことになるし、明らかに女より無能なことが露見するはめになるんだから。

この社会では女がすべてにおいて男よりも劣っていることになっているけど、彼らは本当は知っているのよ。女の中にだって、よっぽど男より優秀な者が一定数いることを。

だから勉強の機会を奪って、知性を奪って、思考や視野を狭いままにさせておく。従属を教え、男は無条件で偉いんだって、優れているんだって、幼い頃から教え込む。真実に気づかれては何重もの意味で都合が悪いからよ。女ってことだけでわたしたちを見下して叩ける現在の風潮自体が、実は偉い人たちが説く道徳や倫理、思いやりや愛情、更には太陽神の教義にさえ反していることに気づかれては困るの。男が暴力者であり、掠奪者であり、正義に対する明白な違反者であり、圧倒的に間違っていることに気づかれるのがね。だからそれを押さえ込むためには何だってしているのよ。

聖イシュタルのことだって、決して星神とは言わないで、セリウスの妻とか、神の娘って言ってる。そうやって女神様のことさえ男の従属物として矮小化させ下位なんだって印象づけて、思考停止させているの。女にとって最悪のサイクルよ。

ほらアレックス様のぼけっとした他人事のような顔を見てよ。あんな性格的に優しい人ですら、この問題に関しては男はこうよ」

僕のことは巻き込まないで欲しいのに、ハリエットが僕を指差して言った。

「アレックス様は別に優しいわけじゃないけどね」

ヴァレリアがまるでどうしようもない奴を見るような目で僕を見て、

毒づく。

「攻撃的な性格じゃないだけ。考え方は十分男尊女卑だわよ。ぼけっとしているように見えて、あれで自分は男だから子供を産まないとか子供の面倒は見ないとか偉そうに言ってたし。あんな頼りないくせに偉そうに。まあそれでも軽くないだけオニールよりかはましだけど。オニールなんて、チャラチャラして、いざとなったら妻子を放り投げて逃げそうだものね」

「そんなだから女に教育が要らないって言われるんだよ」

オニールが嘆いた。

「おまえらはそうやって男をやり込めて楽しいか？　女こそ思いやりがなさすぎだろ、クラウン王は先見性があったから、おまえらみたいな悪質な女が育たないようにしたんだよ。彼は女は躾けるべきだってことを分かってた。

セリウスが悪いんだよ。ぬるい理想論掲げて、半端に平等みたいなのを最初に敷いちゃったから、そこがおまえらみたいなギャングが育つ温床になってる」

「何がギャングよボンクラ二号のくせに」

「それにしても、オニールさんて最低だったのね。彼が何をどう言ってもこの社会が、女性の地位が低い社会であることは動かし難い事実なのに、これだけ話してもまだヴァレリアの揚げ足取るみたいな反論するばっかりで、話さえちゃんと聞かないなんて。オニールさんの女性蔑視はこの三人の中でダントツね」

それでオニールはやはり一人では分の悪さを感じたらしく、最初カイトを、次に僕を見た。ヴァレリアひとりでも手こずるのに、ハリエットまで参戦しているのでは、確かにこれを一人で言い負かすには厳しいものがあるかもしれない。何しろ二人ともが恐ろしい速さ

で口がまわるのだ。だからオニールが助けろと言っているのが分かるのだが、でも僕は、それには応じず自分の指先を見た。
ヴァレリアたちの言い分に対しては言いたいこともあるが、でも今はちょっと指にささくれがあって、これらの話よりはそっちのほうが重要だったのだ。
カイトも要請に応じず、オニールは援軍を得るのを諦めた。

「おいおい、何馬鹿言ってんだよお嬢ちゃん。僕ちんなんかびっくりするぐらい中道な考えの持ち主だよ？」

それでオニールの奴は、ヴァレリアたちに取り入るような姿勢を取り始めた。

「何せ家には先に生まれたってだけで偉そうにしているのが二人もいて、連中のご機嫌取りをしながら生きるのが、いかに理不尽で大変かを知っているからな。ひどいもんだよ。常に俺様が正しいって態度だからな。あいつら弟のことなんかそれこそパシリだと思ってんだ。
だから、虐げられる女の気持ちはよーく分かる男だよ。根っからの男尊女卑なお坊ちゃま君やカイト君に比べたら、僕なんて全然女寄りだぜ。
一方あいつらときたら、とんでもねー差別主義者だ。言動聞いてれば分かると思うけど、あいつらガチで女を格下だと思ってるから。おまえらの真の敵はあいつらだよ。おまえらは僕ちんじゃなくて、あの二人を叩くべきだよ。
いや、寧ろあいつらをやっちゃってくださいよヴァレリアさん！女を馬鹿にするなんて、同じ人間だって言うのにとんでもない話だ。なんて傲慢さだ。
そうだよ、リンチだ！　界隈の縄張り抗争の常勝チャンピオンであるヴァレリアさんに逆らう生意気な奴は、いつも通りリンチにする

しかないぜ！」

ヴァレリアは長い黒髪を背中に流し、微妙に偉そうに首を振った。

「いいえ、アレックス様なんかどうせ何でも伯爵様の真似するのが格好いいと思ってる只のアホだから、リンチしたってやめやしないでしょうし、伯爵様に言いつけられたら後が面倒だわ。かと言ってカイトなんかの主義主張なんかは、最初から聞く気にはなれないわね。馬鹿馬鹿しい。平民の意見なんか、こっちはどうだっていいのよ。平民は家畜なんだから、どうせろくに物事を理解だってできてないんでしょうし。あいつが頭がいいなんて話をときどき聞くけど、どうせアレックス様が要所要所でカンニングでもさせてるんでしょう。体のいい家来を失いたくないから。ああ最悪！　そんな下男が夫だなんてみっともない。あいつはわたくしに何の影響力もないわ！」

「ヴァレリアも口を慎みなさいよ……。本人の前じゃない……。平民って言葉を、女って言葉に置き換えれば、彼が受けた待遇の理不尽さが少しは分かるはずよ……」

「いいえハリエット、それとこれとは全然別だから！　平民ごときに遠慮してどうするのよ、カイトはどっちが上かを思い知るべき。平民に生まれたあいつが悪いのよ。だからわたくしはちっとも悪くなくてよ！」

「なんかおまえらはあれだ、日頃もてないばっかりに、男ってものに何かよっぽど悪い印象を持っていて、それで何かと理由をつけて男を叩きたいわけなんだな？」

オニールが言った。

「でもそんなことをしたって、何の意味もないんだぜ。おまえらが

思ってるような最低な男ばっかりじゃないんだから。
おまえらの周りに叩きたくなるようなしょうもない男しかいないとしたら、それはおまえらがしょうもない女だからなんだよ。だからしょうもない男の、しょうもない部分ばかりが目につくんだ。男女ってのは鏡だからな。いい女には、それなりの理想的な男がくっつくもんなんだ。よく言うだろ、男女は所詮同レベルの相手としか結ばれないって。文句言いたくなるような、くだらねークソみたいな男にしか縁がないのは、おまえらがそれにお似合いのくだらねーうんこ女だからなんだよ」

「その台詞、おまえにそのままそっくりお返ししてよっっ！だいたい、日頃些細なことで女を叩いたり罰したりしているのは、圧倒的に男じゃないのよ！」

「じゃあ、男も女も性格いい奴も悪い奴もいるってことでいいじゃんもう……。

そもそも、なんでおまえらがいきなり意気投合してんだ。おまえらパーティー会場で挨拶代わりにメンチ切るくらい殺伐とした関係だったじゃん。実は似た者同士だったってことか！？」

「煩いわね！　わたくしは基本的に女の味方なのよ。だから友だちだって大勢いるんだし。

ハリエットとは確かに気はあわないけど、この意見の一致は大きいわ。だから今は一時休戦」

「適当なんだから、もー」

オニールは二人の女に睨まれて、降参と言うように軽く両手を上げた。

「いいよいいよ、そうやって男を責めてればいいさ。面倒臭いからもうおまえらの勝ちでいいよ。どうもゴメンなさい」

ところがヴァレリアは不承認だとばかりに首を横に振った。

「駄目。謝り方に誠意がないわ。それ女を小馬鹿にした謝り方だわね。男の定番よ、口先だけで内心では舌出してるみたいな。分からないとでも思ってるわけ？」
「細かいぜ」
「なめてるのかしら？　じゃあもうおまえをわたくし関係のパーティーには呼ばないから。おまえがいま口説こうとしてる娘には、おまえがスケベで傲慢で足が臭いって言っとくわ」

オニールは即座にひれ伏した。

「ヴァレリアさん、僕が悪かったです。ごめんなさい。すみませんでした」
「誠意がたりない」
「ヴァレリアさんってなんて優しくていい女なんだろー！」
「ええ、その通りね。それに寛容だしね」
「それならその寛容さをカイト君にも見せたらどうよ。苛めてばっかいないでさ」
「何がよ」

第２６２話　招いてない煩客（５）

「だいたい今日だってここに来たのって、アレックス様に使ってくれって言いに来たのと、ファンクラブとかでおまえより目立っちゃったシエラたんにヤキ入れに来たのと、あとどうせカイト君の顔見に来たってこともあるんだろ？　なのにまた喧嘩腰でやらかして、カイト君びびらせちゃって、馬鹿だよヴァレリアは。女なら可愛く甘えろって。

カイト君ってさ、ああ見えて、なんて言うかな、たぶん亭主関白じゃん。女に足蹴にされるのって絶対嫌いだと思うんだよね。アイツあれだよ、プライド高いよ。夫にするなんて絶対面倒臭い奴。まあよく言えば女に頼られたい奴だよ。僕の見立てではね。閣下が猫っ可愛がりしている甘ったれのアレックス様と相性いいのがその証拠。だからさおまえはカイト君の性格をもっと見極めてさ、女を馬鹿にしてるとかいつまでも意地張ってないで、素直に甘えたらそれでいいんだって言ってんのに、何無理やりこじらせてんだ」

「はあっっ！？　甘えるって何よ！　今のってわたくしの聞き間違い！？

それってカイトごとき卑しい下男に、従属の意思を示せっていうことじゃないのっ！

冗談じゃないわ、何が亭主関白よ下男のくせに！　ひとつも素敵だと思えるところのない反抗的なばかりの下男との結婚が、どれほどわたくしに精神的苦痛と損害と怒りを与えているか想像してご覧なさいって言うのよ！

ああ、何だか腕が痒いわ。きっと蕁麻疹ね。あいつと同じ部屋にいるだけで、拒絶反応で蕁麻疹が出るくらい嫌なことなのにおまえはいったい何言ってるのよ！　カイトはまるで巨大なダニだわよ！

カイトなんて、あんなみっともない男、結婚してやるだけでも腹立たしくて死にそうなのに、わたくしに人間としての誇りまで捨てろ

って言うのかしら！？」
「うーん」

オニールは首を傾げた。
ヴァレリアはオニールに向けて人差し指を突きつける。

「いいことオニール、よく考えて。わたくしはあいつより上の人間よ。立場が上なの。人間としての格も上。それは結婚してからも一生変わらない。そしてあれは奴隷よ、わたくしとあいつは決して対等じゃないの。
あんな臭くて汚らわしい男を相手に、わたくしがそんなことできるわけないでしょうっ！？」
「それ、わざとカイト君に聞こえるように言ってる？」
「何が！」
「なあヴァレリア、おまえって根本的に間違ってるよ。僕が思うにたぶんおまえって、こんなに拒否して逃げるアタシをそれでも追いかけて掴まえてっていう頭なんだと思うんだけど、それが成立するのはもうちょっとなんてか、男側が本気でべた惚れ状態じゃないと。そうじゃねーのにそれやっちゃったら、男ってのは基本さ……、もう好かれる気まったくないだろ？　そうじゃなかったら、つくづく、馬鹿……」
「いいえわたくしは馬鹿じゃないわ、その反対よっ！」
「ヴァレリアって、不思議なヤツだよなあ。なんであれだけ勇ましく女の権利声高に叫んどいて、そこだけ思考が乙女なんだよ？　それが例の洗脳のせいなん？　それにしたっておまえいろいろとややこしいってか、矛盾してねーか？　どっちかにしろよ」
「煩い馬鹿！」
「あー、こりゃあれだな。なんかヴァレリアにでかいピンチでもあったりしないと、これもうおまえら纏まりそうにないな。悪い男がヴァレリアを連れ去るくらいのことでもないと」

「はん、馬鹿言わないで、わたくしこれでも騎士の称号を持っていてよ！　カイトごときの助けなんか借りるまでもないわ。そんな悪者なんか、当然自分の手で倒してみせるわよ！」

「馬鹿、だから自力で脱出できるところを敢えて男に助けて貰うのがだなあ……、ときには弱者のふりすんだよ。賢くなれよ。そうやって喧嘩腰で挑戦されたら、挑戦に受けて立っちゃうのが男なんだからさー。カイト君だから反発してんじゃん。あいつ下男言われて尻尾振るようなマゾタイプじゃねーんだから、それじゃ良好な関係に発展しようがねーだろ。このままじゃ、新婚早々仮面夫婦まっしぐらだよ。おまえはやっちゃいけないことばっかやってるんだって」

「ええ、そうよね。女にも男と同じように感情と、誇りがあってよ」

僕は、ヴァレリアとオニールの内輪もめに興味がないので、執務机から少し離れた壁際にいるカイトに近づいた。

大変だねという意味で目配せすると、カイトは少し首を動かしてそれに応じた。

「それにしても毎度のことながら頭に来る奴。カイトをダニ呼ばわりだなんて。男に対する尊敬がなさすぎるよ。あれと結婚したら、いったい家ではどうなるんだ？」

「家じゃあの十倍は暴れますよ。男爵様も実の娘にだけは甘いですからね」

「僕なら何とかして結婚やめるよ」

僕はかなり本音を言った。

「ま、昔からのことなんで慣れてますよ」

カイトは息を吐いた。

「ねえ、婚約しちゃって本当に後悔してないのか？　ヴァレリアに、何処か好きになれそうなところってあるのか？」
「好きになれそうなところ？　うーん、財力？」

カイトの返答に、僕はつい、ちょっと笑ってしまった。女を褒めるんだから、お世辞でも容姿だとか何とか言うだろうと思ったので。

「友人の意見として言わせて貰うけど、探せば女なんて他に幾らでもいるだろう？　結婚っていうのはさ、やっぱり相手をよく見ないとね。妻を選び損なうと、男は地獄だって言うじゃないか。可愛くておとなしくて、家庭的でさ、ちゃんと君に尽くしてくれる女にしたほうがいいよ」
「つっても、選択権は俺にはない事ですし、もうここまで来たらジタバタしてもしょうがないでしょ。世間に婚約発表もしちゃっていますし今更ねえ。
それに辛辣な言い方をすれば、お嬢様との結婚は、俺にもいろいろとメリットがないわけじゃない。冷静に考えてみれば、そう悪い話ではないわけでね」
「財力？」

僕が言い、カイトは笑った。

「そうです。やっぱり貧乏と手を切れるのは大きいかな。それに、ウェブスター男爵家って肩書きがないと、アレックス様にこうやって仕えていることもできないんですよ」
「それはそうかもしれないけどさ。だって相手がさ。あんな凶暴な女、滅多にいないよ。男に平気で食ってかかるなんてさ。あれ以上の暴れ馬は、探したっていないと思うよ」
「ふむう」
「そう言えば、例の好きな女はどうなったの？　願掛けしてるとか

って言って、教えてくれなかった話のこと。彼女とはあれから会えたりしたの？」

僕はカイトの顔を少々気遣いながら覗き込んだ。彼がその相手にこそ真剣であると知っているからだ。

そもそも心が別の女にあるのに、違う女と結婚というのは、今でもティファニーに未練があるように見えたリドリー様じゃないが、どう考えても後悔の人生コースだ。

しかしカイトは予想に反して、何事もなかったかのような顔で言った。

「ああ…、最近忙しくてすっかり忘れていましたよ」

「忘れてたって！？」

「ええ」

「まさか、そんなわけないだろう」

「それが考えないようにしていたら、いつの間にやらすっかりと」

「いや、それは違うよ。願掛けするような相手をそんな簡単に忘れるわけない。第三者の僕でさえ憶えているのに。僕が言うんだから確かだよ」

「どの辺が確かなので？」

「だいたい、なんで相手が誰か僕にまで内緒にするんだよ。僕らは友だちだろう？　実は僕のこと友だちって思ってないのか？　権力者に媚び売ってるの？」

「そんなわけじゃない、ちゃんと友だちって思っていますよ」

「じゃあなんで教えないんだよ。それとも、やっぱり本当はタティが好きとかじゃないだろうね？　でもそれを言ったら僕との関係がおかしくなるから、だから僕に言えないっていうわけじゃないんだろうね！？」

僕はこれで勘がいいからね……。タティは確かに可愛いから気持ちは分かるけど、それなら今すぐ諦めてくれ。あれは僕の女だから」

「いや、そんなわけじゃないですけども……」
「分かった、さてはその女に脈がないのが分かったんだろう。だからダメージ受けないうちに撤退することにしたんだ。忘れたとかって、それ予防線張ったんだよ。もてない奴って、そういう見苦しいところあるよね」
「確かに、そうですよなあ」

僕は反論を誘発するつもりで問い質したつもりだったが、意図を読まれたらしく、カイトはそれ以後この話を受け流した。

「食えないな……。で、君は亭主関白なのか？」

僕は息を吐いた。

「いえいえ、まさか。何を根拠に言ってんだか。あんなの、オニールの言うことなんざ、でたらめもいいとこ」
「僕も猫可愛がりされてないから」

僕は一応言った。

「えっ、どの辺が？」

カイトが驚いてみせた。
僕はむっとした。

「笑えない。僕は日々、横暴で傲慢な兄さんの顔色を見て暮らしてる。昔から、兄さんは僕を可愛がったことなんてない。気の向いたときに、僕で遊ぶだけ」
「確かにそうとも言えますか」

僕は頷いた。

「今日さ、急なんだけどタティとデートするんだ。裏の森でね。だからここ任せていい？」

「デートですか？」

「そう」

「なら俺はついて行かないと」

「なんでだよ。婚約者がああだからって、人の幸せぶち壊すなよ」

「そうじゃなくて、俺の最優先任務は貴方の身辺警護なんですよ。閣下は今のところ、貴方の護衛役を最優先事項として命じています。今のとこ俺の取り柄なんて、そこだけなんですから」

「今日はいいよ。すぐ近くだから。慣れた場所だし、カイトを連れて行かないときも結構あったんだよ」

「駄目ですよ。アディンセル伯爵家の家督継承権第一位っていうお立場は、そんなに軽いものじゃないんですよ。

それに今度からは、御身の重要度は格段に上がるんです。貴方、もし閣下に何かあったら、問答無用で国境領主をやるんですよ。これからはもう州領だけの問題じゃない、国家にとっても係って来るお立場なんです」

「ええ……」

「ですから俺とハリエット殿は最低でも、何処に行くにも連れて歩いてください。それが裏の森でも。大丈夫、エロいことするときは後ろ向いてます」

「声が聞こえるじゃないか……」

「そこはまあ」

「タティをおかずにするのは駄目だぞ」

僕は怒って言った。

「しませんって。だってハリエット殿だっているんですからね」

「ハリエットなんかどうせ何にも分かってないんだから。おまえ、ちらっと見て、憶えて帰る気だろう」
「アレックス様ね、俺は主の女をおかずにするほど無礼者じゃありませんよ。これでもその辺のモラルはあるつもり」
「いや、おかずを確保したと思って、必死で憶えて帰るよ。分かるんだ」
「そんなことを思いつくってことは、アレックス様は日頃そうなんですか？」
「ち、違うっ、僕はそんなことしないんだ」
「ちょっとそこっ、アレックス様っ、貴方何を勝手に話から抜けているのよっ！　わたくしが朝からわざわざこうして出向いているというのに、貴方が聞かなかったら、こんな話をここでしている意味がないじゃないのよっ！」

ヴァレリアが僕の背中に怒鳴ったので、僕はカイトと話すのを中断して、再びヴァレリアたちのほうを向いた。

「何だよ、だって結論は出ているんだし……」
「結論っ！？」

ヴァレリアが両手を腰に当てて凄んだ。
それが相変わらずの迫力なので、僕は恐かったが、でも僕のほうが身分が上なので、僕はできるだけ怯まずに見返した。

「つまり君はカイトと結婚して、お嫁さんになって家で赤ん坊生んだりして暮らす」
「だからっ、あ、貴方ねっ、赤ん坊とか、毎回毎回、そんなおぞましくて絶望的なことをさらっと言うのはやめて頂戴っっっ！」
「でもなんかよくない？　虫みたいで、なんかいいよね。ロマンチックな感じ」

第２６３話　招いてない煩客（６）

僕はたぶんいいことを言ったのだが、ヴァレリアは僕の意見に賛同できないかのようだった。

毎度のことではあるが、両手の拳を握りしめて、ヴァレリアは怒り出した。僕がデリカシーがないとか言って、でもそんなに言うほど嫌でもないんじゃないかと思うのは、左手の薬指にはカイトとおそろいのルビーの指輪が光っているということだ。死ぬほど嫌なら婚約指輪なんかしないだろう。

結婚指輪と違って、婚約指輪はそれほど身につけることに強制力ははたらかないし、下男扱いのカイトはともかく、ヴァレリアには当主の娘という権力がある。婚約指輪なんて、嫌なら幾らだって放っておいたって誰にも怒られないのだ。それなのにちゃんとつけている。

でもそれを言ったら怒られそうだし、怒られたら嫌なので、僕は黙っておいた。

「君はね、なんて言うか極端なんだ……。要はエネルギーが有り余っているんだよね。だから騒ぎたいために、自分で怒りに油を注いでいるんだよ」

「ちょっと、人を猛獣みたいに言わないで頂戴！　虫みたいなんて言われたら、誰だって怒るのは当り前でしょうっ！　あんなっ、何だか分からない、足がいっぱいあって卵を産む、気持ちの悪い」

「そのロマンが分からないかな。想像してご覧よ。彼らの生態をさ。恋に生き、愛に生き。やがて交尾して卵を産む。産卵したら大抵死ぬ。まさに花火のような人生じゃないか。あっ、蟷螂はね、飼ってたら、交尾中にメスがオスを食べてたんだよ」

「だったら何だって言うのよっ！　わたくしが蟷螂だとでも言いた

いわけっ！？」
「そうじゃないけど」
「そんな何の役にも立たない虫の話を偉そうに語って、ほんっと貴方って、鬱陶しい男ですことっ！
アレックス様、貴方、そうやって虫の話を嬉々として語っている貴方が他人にどう思われているか教えて差し上げましょうか。根暗！
気持ち悪い！　これだけよ！」
「何だよ、言い過ぎだぞ」
「煩いわねっ、こっちは虫なんか大嫌いなのよっ！　虫なんて、想像するだけでざわざわするって言うのに。あいつらの存在は、馬鹿で不潔なカイトと同じくらいおぞましいっ！
いいこと、昆虫なんて、ほとんどの女は大嫌いなんだからそれを忘れないで頂戴！
まったくわたくしの周りには、そろいもそろってろくでもない男ばかり！
ああっ、腹立たしい。どうしてわたくしはこんなに不遇なのかしら！　こんなに美人でこんなに心が清らかでこんなに心の優しい純粋な娘は他にいないのに、どうしてこのわたくしに相応しいまともな相手が現れないのよ！
どうせ結婚しなければならないのなら、汚らわしいカイトなんかぶっ飛ばして、わたくしをさらってくれる最高の男がいいのに！」
「それはヴァレリアの本質が平民男と釣り合っちゃう程度のちゃちな女ってことじゃねーか」

オニールが、また面白がってからかい気味に言った。
どうでもいいが、こいつはヴァレリアの子分かと思いきや、話を聞いていると必ずしもヴァレリアの味方をするわけでもなければ、かえってヴァレリアのことすらおちょくることがある。またさっきの男尊女卑の話でも、突然女擁護にまわることにも特に躊躇がなかった。要するに、面白ければ何でもいい奴なのだろう。撹乱するのが

目的でやってるとしか思えない。
僕はこれまでカイトこそ軽薄なお調子者だと思っていたのに、オニールのでたらめさはそんなものじゃないので、最近ではすっかりカイトがまともに思える有様なのだ。とにかくあの鬱陶しい女みたいな髪がイライラする。なんで見るからに大したことない男なのに、時折髪の艶を気にしている仕草をするのかも意味が分からない。

「さっきも言ったけど、男女ってのは鏡だからさ。この辺りの恋愛的引力に、表面的な取り繕いとかは通用しないって言うよ。平民と釣り合うってことは、おまえもつくづく安上がりな女なんだな」

するとヴァレリアがオニールの頭をばしっと叩いた。いきなり頭を叩いたことで、オニールの伸ばし過ぎの髪が宙に舞う。

「冗談じゃないわよっ！　おまえときたらいつも余計なことばっかり言って！
よく見なさいよ、わたくしとカイトごときが釣り合ってるわけないじゃないのっ、わたくしは嫌々結婚させられるだけよっ！　冗談でもそんな無礼な発言は許さなくてよっ！」
「痛いよ、叩くことないじゃん、どの辺が無礼なんだよー。
じゃあ、釣り合ってないんだったらよかったじゃん、別にそれで。じゃあ結婚やめなよ」
「ええ、できるのなら是非ともそうしたいところだけど。でも仕方がないじゃないのよ、これはお父様と伯爵様が決めたことなんですもの！」
「でもまだ結婚はしてないんだから、執行猶予期間ではあるよ。そんなに嫌だって言うなら、いっそ駄目もとで、どっか別の騎士団でも飛び込んでみたらどうよ」
「別の騎士団ですって？」
「そうよ。そりゃあおまえが下男との結婚を嫌うあまりに、他に男

見繕って駆け落ちなんて醜態をさらせばだよ、残されたおまえの哀れな従姉妹たちは何の罪もないのに全員淫乱女の巻き添え食って連帯責任、一生結婚できないって事態になっちゃうだろうけどさ。でもおまえが男連れじゃなく単独で家出を敢行してだ、たとえば中央の赤薔薇騎士団とかに入ったとかってことなら、また話は違って来るんじゃねーか？」

「赤薔薇騎士団って、あの！？」

「そうよ。陛下直属の」

「陛下直属……」

するとヴァレリアが、多少興味がないわけではない顔でオニールを見る。

「つまりおまえはこのわたくしに、栄光ある陛下直属の騎士になれって……？」

「うん。こんなやって不毛なことやってるよりかはいっそ現実的な逃亡方法だろ。まさかそんな根性見せられたら、閣下もヴァレリアの父上も驚くだろうし、もしかしたら、怒りながらもおまえを見直すかもな。地元の騎士団に所属するのが慣例だし、それが忠誠ってものだけど、もしおまえがそこまで最悪な結婚から逃げたいなら越境でも何でもしてみればいい。たとえ閣下に反逆とみなされようと。ヴァレリアがこの結婚にぎゃんぎゃん言ってるのは閣下だって知ってんだし、どうせそんな大事にはならねーよ。

そこら辺のお淑やかな女にはたぶん無理だろうけど、そのくらいおまえは動ける奴だよな。一応、騎士として下地はあるわけだし、入団試験受けてみたらいいじゃん。

叫んじゃうほど「大っ嫌いっ！」な下男との結婚が死ぬほど嫌ならそのくらいの無茶はやってのけられるはず」

「ええ、そうよっ！　当然じゃないの！」

ヴァレリアが鼻息も荒く叫ぶ。

「わたくしならそんなの簡単にパスできるわ！」

「じゃあ、そうやれば？」

「た、確かにね、それは悪くないアイデアとは思うわ……」

「あ、白薔薇は装備も格好いいよな。そっちでもいいかもね」

「待って頂戴、でもそうしたら」

「僕は応援するよっ。こうなったら、どかーんと行って来い！」

「え、ええ……」

オニールはたたみかけた。

「だって、おまえのガキの頃からの夢だもんな、女でありながら騎士として大活躍するってやつ！

だからおまえは頑張って騎士としての修練も積んで来たわけだ。他の女が裁縫とか習う時間を武芸に当てたのは騎士になって活躍する将来の夢のため。女だから無理だって決めつけられたり頭ごなしに可能性の芽を摘まれるその屈辱を、いずれ行動で覆してやろうってそういうことだった、そうだろ！？

そして幸いと、少数だけど先人はいるわけだからこれはやってやれない道じゃない。これは、行動を起こすにはいい契機かもしれないぜ。平民と結婚させられるおまえには同情論もないわけじゃない。おまえほどの女ならきっとできるさ！」

「そ、そうよ、わたくしは騎士になって、たくさん部下を率いて、それで州のため、国家のために剣をふるう。それがわたくしの小さい頃からの夢だった……」

ヴァレリアがふと、悲愴とも取れる切ない表情をした。

「だから頑張って来たわ。すぐに夫だの恋人だのを引き合いに出し

て、そういう連中に頼りきって生きている愚かな女にはならないために……。男に囲われて喜んでる女たちの生き方を否定まではしないけど、そんな立場は人間としてあまりに悲しすぎると思うから、わたくしは主体性を持ち、そんなふうにだけはなるまいと思って……」

「あれっ、どうしたヴァレリア、その割に、だんだん声が小さくなってきたなー!?

そんななのに、もしかしてこの結婚に未練があるとかー?」

オニールが、髪を揺らしてヴァレリアの顔を下から覗き込んだ。

「あららん、その困惑顔はもしかしておまえ、躊躇ってる!?　てことは、下男ごときを本気で好きになっちゃってるのかなー?

それじゃあ、他所になんて行けないよな。好きになっちゃったんなら。カイト君に会えなくなっちゃうんだから。

そっか、ヴァレリアも結局は自分の夢や志より、男を選ぶつまんない女だったか。そっかそっかー」

そしてオニールは歯を見せて嘲笑い、ヴァレリアは怒りながらも徐々に頬を染めた。

僕にはもう、ヴァレリアが何をしたいのかがよく分からないのだが、要するにアホなんだろうと思った。それともどんなに優秀でも、女は男を知ったら終わりみたいなことを兄さんが前に言っていた気がするが、それはもしかするとこういう意味なのかもしれない。

「ったく、分かりやすいなあ。てかおまえもうこの場にいる全員にバレまくってるのによく平気で話していられるな。やることが杜撰と言うか、図太いヤツだぜ……」

「煩いおまえ!　おまえって奴はほんっと性格悪い男ねっ!」

「確かにね」

オニールは素直にそれを認めた。

「でもそれが僕ちんのすべてじゃないことは分かってるだろ。僕はおまえがどっちに気持ちが揺れているかを察して、そんならもうそういう強がった態度は改めて、今のうちからカイト君を大事にしとけって言ってるの。ヴァレリアほどの奴でも、結局は只の女だったのかって思うと、僕としてはちょっと残念な部分もあるけどな。でもまあよ、こうなった以上、しょうがないよな。僕はそれを責めたりはしないぜ。

カイト君の性格は何度も教えてやったろ？　あいつは男を立ててくれる従順な女が好きなんだよ。なのにそんな相手にあんま厳しくやりすぎると、おまえに敵対心持つどころか愛想尽かして他に女作っちゃうぜ。後の祭り状態になる前に、友だちの有難いアドバイスは聞いておくべき」

「ふん、浮気なんか。やれるものならやってみろって言うのよ！」

「そうなったらいちばん困るのはヴァレリアなのになんでそこまで意地張るのよ。

こういうことは、惚れたほうが負けって言うだろ。観念しろよ。好きって言って抱きつけって。それでだいたいのことは解決なんだからよ」

「鬱陶しいわねっ！　だから、わたくしは、カイトなんかこれっぽっちも好きじゃないって何度も言っているじゃないのよっ！

それにね、今ちょっと中央に行くのを躊躇ったのは、それは、それは、そうよ、わたくしは、飽くまで伯爵様に忠誠を誓っているからよっ！

たとえ陛下直属であろうと、だから迷ったのよ、だって……、ウェブスター家は古くからアディンセル家に仕えて来た家柄なんですからっ！

それを、勝手にあれこれ邪推して決めつけないでよねっ、誰がカイ

トなんか！　あんなの最初から問題外なのよ！　あんな卑賤の男をなんでこのわたくしが！？　おほほほほっ、そんなわけがないじゃないのよ、まったくわたくしを誰だと思っているのよ！　だいたいわたくしと貴方がたは年齢だって同じなんだから、頭の内容が説教されなきゃいけないほど違うわけないって言うのに男だってだけでいちいち偉そうにっ！」

「どうしてそこで好きと言えないんだろうかね。これはラブコメじゃないんだよ。僕は情けないぜ」

オニールが両手をあげて首を振る。

「何だよ、君は否定ばっかり、批判ばっかりだ。なんでタティみたいに可愛くできないんだよ。もうお仲間のオニールとでも結婚すればいい。君にはそれがお似合い」

僕は言った。

すると、意外にもオニールが即答した。

「やだよ」

ヴァレリアがすかさず怒る。

「ちょっとオニール、やだってどういう意味よ！」

「ええっ、だってさあ……」

「こんな美人を嫌だなんて言う権利、そのご面相であるとでも思っているのかしら！

もっとも、わたくしこそオニールなんてごめんだけど。三男なんて、将来の保証なんてないんだから。わたくし、貧乏って大っ嫌いなのよね。貧乏人も大っ嫌いだし、平民も大っ嫌い。家が裕福でも領地を貰えない男も大っ嫌い。代がわりしたら貧乏になるから」

「ひどいぜ、好きで三男に生まれたわけじゃないのに。それに僕はイケメン……」
「おほほほ、残念ね！　三男ってだけでおまえは負け組！　スペアのスペアじゃお話にならないわ！
その証拠におまえのところには、お兄様たちのようには良質の縁談なんてなかなか来ないでしょう。何せ、三男なんてもうよっぽど何かないと家督とは縁がない存在なんですから。だからおまえのところに来るのは余り物のブスか格落ちの家柄の娘ばっかり！　しかも格落ちでも美人は来ない。美人は容姿でずっと上狙えるから！」
「ひどいよ！　なんて格差社会だよ！」
「おほほほほっ！」
「カイトも嫌、オニールも嫌って言うんだったら、誰ならいいんだよ」
僕が文句を言うと、ヴァレリアは少し考え、答えた。
「とてもわたくしの理想通りの男性なんていないわね。世界一強くて、世界一頭がよくて、世界一美しいわたくしの次に美しくて、誠実で、わたくしだけを絶対に一生愛してくれる、そういう人だから。できれば一国を所有する立場であって欲しいし、もっと言えば世界で最強の存在であって欲しい。でも、わたくしたちの立場は対等なのよ。そしてわたくしはその素敵な方の唯一の妻として永遠に幸せに暮らすの」
「ぎゃははははっ、おまえ自分をどれほどの女だと思ってんのよヴァレリア。すげえな、王子様の花嫁になりたいとかなら分からんでもないが、世界最強の男って。どんだけ見栄っ張りなんだよ」
「煩いおまえ！」
「ふうん、意外にドリーマーなんだね。シエラみたいだ」
僕は率直な感想を言った。

ヴァレリアはそれを鼻で笑った。

「あんなのと一緒にしないで頂戴よ。馬鹿らしい」

「そうかな、でも同じようなこと言ってたよ。女の子の想像って可愛いよね。エロさより、王子様待望のお伽話ベースだから」

「ちょっと、だから貴方、わたくしの話を他の女の妄想なんかと一緒にしないで頂戴。なんでどいつもこいつもシエラシエラって、なに勝手なこと言ってるのよっ！」

ヴァレリアは、今度は僕の鼻先に人差し指を向けた。

「いいこと、わたくしの場合は想像じゃなくて、事実をもとに言っているのよ。だってそうでしょうっ！？

見ての通りわたくしは超絶美形で世界一可愛くて美しいし、何をやっても完璧で、清純で、愛らしくて、わたくしは他の女と違って特別なんだからっ！」

「せっかくさっきまですごくいいこと言っていたのに。それじゃ、言ってることがシエラとほとんど同じじゃないのよ……」

「お黙りなさいハリエット！」

第２６４話　お姫様たちの怪気炎（１）

僕は手に持っているガラス瓶を眺めながら、蟻のことを考える。僕のてのひらの上で蠢く小さな生き物を眺めるときのあの甘美なひと時のことを。

そのとき僕はとても強く、雄大で、そして万能な存在となる。強くて優しい神のごとく万能の存在に。僕は彼らの世界の万物を司る神であり、同時に親しい観察者なのだ。

だが人間相手は駄目だ……、ここのところ僕は、少々自信を失ってもいた。タティといいシエラといい、僕は女ひとり思い通りに制することができないのだ。ましてやヴァレリアお嬢様相手ではお手上げだ。

彼女は女なのに、どうしてこんなにまで我が強いのか訳が分からないのだが、ともかくヴァレリアは腕組みをして、一同を睨んだ。

「そうね……、そう。つまりシエラ何とかなのよ問題は。話によると、あいつは随分とまあ態度がでかいらしいじゃない」

会話も一段落したのだから、そろそろ帰って欲しいのだが、ヴァレリアはまだまだここに居座るつもりのようで、帰る気配もない。ともあれヴァレリアが既に違う話題に入り始めていた。彼女は明らかにこの場を支配し、さっそくシエラが気に入らないという話の流れが出来上がりつつあった。ヤキを入れに来たとのオニールの証言が確かならば、これは早めにデイビッドを呼びつけて引き取らせるしかないのか――、ヴァレリアは形のいい眉を不満そうに寄せて、イライラしたように爪を噛む。

「あいつ最近じゃ、自分がアディンセル家のプリンセス気取りなんだとか。とても信じられないわ、彼女は下品なあばずれだって、最

近じゃ皆さん口々に言っていてよ。慎み深い淑女の皆様方が、こんなにはっきりとおっしゃるようになるだなんてこれはよっぽどのことですわよ。

おまけにファンクラブとか訳の分からないものまで作っていい気になって。アディンセル家の娘が自分のところの騎士団にファンクラブができるっていうことならまだ納得もするわ。でも厚顔無恥の他所者が他人の家で何をしているのよ。それが貴族階級の淑女のすることなのかしら？

他所者のくせになんで赤楓騎士団にファンクラブだなんて、あんまり無礼じゃないの！　このわたくしに断りもなく！　大したことない女のくせに！

ねえ、アレックス様、幾ら元が侯爵家と言ったって、今はもうそうじゃないわけでしょう。それも実兄が処罰されたようなのを、親戚でも何でもないのに、なんでうちであの女の面倒なんか見ているわけ！？」

「うちでって、僕の城でだよ。君の屋敷じゃない」

僕は遠慮がちに言うが、即座に倍以上になって言葉がはね返って来るのがストレスだった。

男の言うことを聞かずに文句ばかり言うこんなのと一緒に生活したら、男は半年で病気になるんじゃなかろうか。

「煩いわねっ、だから、なんであの女が、ここで未だに名門侯爵令嬢みたいな扱いを受けているのかってことよ！」

ヴァレリアはまた僕に迫った。不意に手を伸ばしたので、何かと思うと、僕の手からガラス瓶を取り上げようとしたので、僕は慌ててそれを背中に隠す。

「寄越しなさいよ！　人が真面目に話しているのに手悪戯するなん

て失礼じゃないの！」
「嫌だよ、これはあとで蟻を入れるんだ」
「蟻ですって？　ああ……」

ヴァレリアは、貴族の娘たちのよくやる動作、片手を上にあげて大袈裟にふらついてみせる動作をした。か弱い娘がやるならともかく、ヴァレリアのような奴がやっても、厭味にしか見えないのは言うまでもない。

「蟻を瓶の中に入れるその行為に、何の意味があるのかしら？」
「飼うんだ」
「蟻を！？」
「うん」
「蟻なんてわざわざ飼わなくたって、地面の何処にでもいるじゃないの！」

ヴァレリアの恐ろしいところは、言いながらダンッと思い切り床を踏むところだ。これの何が恐ろしいかと言うと、彼女の脳内では、絶対に蟻を踏み潰したのだと思う。

「いや、僕これから王都で暮らすから。裏の森の蟻には、分布図を見る限り、王都には生息していない蟻もいるんだよ。それを捕まえようと思ってさ」
「何？　蟻に違いがあるわけ？」
「そうだよ」
「ああもう、うんざり」

ヴァレリアは僕を拒否するように即座に手を払った。

「わたくし、貴方にはもう心底ついていけなくてよ。なんて愚かな

のかしら。貴方も内面が根暗の変わり者じゃなかったら、今頃もう少しくらいはおもてになっているでしょうにね。全身から暗い奴オーラが出てるからそういうしょぼい人生になっているのよ。せっかく運よく芋娘みたいな田舎臭いイモで手を打たなくていいルックスは持っているのに」

「余計なお世話だよ」

僕は首を振った。

「まあいいわ。このわたくしに靡かない以上、貴方もオニールと一緒でホモか、よくて途方もないブス専なんでしょうから」

「どさくさで僕ちんまでホモ呼ばわりすんなよ」

「とにかく、実兄が陛下に逆らったとかなんかで、領地も財産もあらかた没収されたんだったら、あのシエラって馬鹿女の身分は貴族籍があるだけの、下級貴族の貧乏娘と変わらないわけじゃないの。そんな貧乏臭い娘なんて、追い出してしまうか、召使いにでもしてしまえばいいじゃないのよ。そうでしょうハリエット！」

ヴァレリアはそう言って、今度はハリエットを振り返り、同意を求めた。

するとハリエットが引き続きヴァレリアに同調するように、いつにもまして勇敢な表情で首を縦に振った。

「そうね。その意見にはわたしも賛成よ。何故あいつが未だにわたしやタティより上みたいな顔してるのか意味が分からない。ただあいつ薔薇君様に気に入られてるから、なかなか待遇を引き下げられないって事情があるみたいなんだけど。彼に素っ気なかったくせに、その権力にだけは当然の顔して浴してるって根性も気に入らないし……、とにかくシエラの態度はいろいろと目に余るわ。もし良識って言葉を彼女が知っているなら、もう少し謙虚な態度だ

って取るだろうし、わたしたちにだって気を遣うはずだし、もっと肩身が狭そうにして、少なくともあんなふうにアレックス様につき纏ったりもしないでしょうね。自分が居候だって分かっているなら、タティを差し置いていちゃつこうなんてできないはずよ。

でも彼女は最初から図々しいと思っていたけど、最近では増長具合が激しくて、自分はアレックス様の妻だって言って憚らないばかりか、タティを追い払おうとしているのが丸分かり。

男の人は彼女がやってるようなそういう縄張りの主張は気がつかないでしょう。これは女特有のやり方だけど、男の人の前ではとにかく人畜無害ないい子を装って、見えないところでライバルを傷つけるみたいなそういうの。

つまり彼女は最悪でも純粋な自分は悪気がなくて、いろんなことをすごく無邪気な印象で済ませようとしているんだけど、でも絶対そうじゃないのよ。あいつはすべてを分かってやってる。

でも、表立ってやったらさすがに自分の醜さが他の人に気づかれるから、日頃はカムフラージュ的に殊更ああいういい子ぶった態度を取ってるの。彼女は自分のイメージや対外的印象を保つためにはどんな手段だって躊躇わないし、そこにものすごく神経を使って生きているから、生半可なことじゃ太刀打ちできないわ。

自分は可愛くて性格のいいお姫様って図々しい印象を周りに植えつけるためには本当に、何だってやってのけるんだから恐ろしいわ！

わたしが怒鳴ってやっても、あいつったらここぞとばかりに怯えた顔してアレックス様に甘えてかわしちゃうし、そうするとアレックス様もシエラが苛められてるみたいに解釈して、何故かわたしが悪者扱いよ！

まったく、あいつはろくでもない女。それで、タティにこまごました嫌がらせをしてる。

たとえばタティがアレックス様のお部屋に置いておいた私物を、わざわざタティの部屋の前にごっそり運んでくれていたりだとかね。

部屋の模様替えしたからって、本人は言ったそうだけど、ぜったい

わざとなのよ」

すると、オニールが噴き出した。

「おいおいおいお嬢ちゃん、お嬢ちゃん。何かと思えば、それ要するに荷物の場所移動しただけじゃん。昼間やることないから、部屋の模様替えでもしただけで、さすがに悪く取りすぎじゃねーか？　何か物がなくなっていたとかってことでもないんだろ？　考えすぎだって」

「いいえ！　貴方はこれがシエラによる攻撃行動だと理解できないほどお人好しな人間じゃないでしょう！？」

ハリエットが、横から口を出すオニールを睨みつけた。

「これはイジメよ。女の陰湿な虐め！　女の虐めは暴力はともなわないけど、その分嫌がらせとかの精神攻撃は半端なくずるくて巧妙なんだから！

部屋の模様替えは動機じゃない、タティの私物をアレックス様の部屋からすっかり放り出すことと、タティの心を痛めつけるのがあいつの行動の動機よ！」

「本当にそうかどうかなんて分かんないじゃん。憶測だろ？」

「いいえ分かるわよっ！　悪意があったかどうかくらいのことはすぐ分かる。女の直感をなめないで。あいつすぐ人のこと無視するし、世にも汚い女よ」

「大袈裟だな。シエラたんなんか只のアホだろあれ。仮にわざとだとしたって、そんな深く考えず、本能のままやったんだろ。タティが嫌いって自分の感覚主体でさ。謀略巡らすタイプじゃないって。彼女って善くも悪くも天然で、あんま深く物事考えらんないとこあるじゃん。

顔の可愛さだけで人生渡って来た奴に人格まで期待するなよ。ルッ

クスに覚えのある十代後半の美少女なんて爪の先ほどの努力もなしで人生無敵状態だぞ」

「だからその自分勝手さが度が過ぎてて許せないんじゃないのっ！」

ハリエットが大声を張り上げる。

「十八歳にもなってまだ子供みたいな感覚で、自分なら何をしても許されると思ってるノータリン勘違い女を、何故大目に見てやらなければならないのよ！

あいつったら、まるでアレックス様の本妻気取りなのよ。挙句に虐めをやるなんて絶対に許せない。本当に最低だわ！　シエラの味方する気なら、貴方ちょっと黙っててて！」

「だってなんっか些細なことじゃねーか。虐めって、そんな大したことじゃねーじゃん、おまえは美少女を僻むのもいい加減にしろって。それどう見てもおまえのそれは美少女への僻みだよ。

そりゃあな、とても自分じゃ敵わんような美人が目の前にいたら、理由なくむかつく女の心理は分からないではないよ。

でもさ、さすがにほうぼうで女どもがシエラたんを中傷してんのを聞いてると、聞かされてるほうはかえってシエラたんが不憫になって来るよ。彼女はおまえらに何もしてないじゃん。なのに直接知らないはずの奴らまでが、まるでシエラたんが嫌な奴のごとく言ってるんだから。

女ってやつは結局のところいっつもそうなんだよ。あれこれ言い訳を言うけど、結局は常に自分より美人を妬んでるんだよな。だから美人には滅法厳しい。一方、自分よりブスには優しい。基本、自分より下に見てるからな。それシエラたんがもしブスだったらそこまでキレてないだろ実際。正直に答えてみ」

「いいえ、そんなの関係ない。もしその通りなら美人は必ず嫌われ者になってるはずだけど、実際はそうじゃないでしょう！？　シエラがみんなに嫌われる理由は彼女が嫌な奴だからよ！

シエラはやり方が姑息なのよ。自分が周りから非難を浴びないために、自分の評価が落ちないために、言い訳を他に用意して、ぶりっ子しながら周到に悪事をはたらくんだから」

「事実ならスパイの凄腕エージェントみたいだな、シエラたんも、それを見抜くお嬢ちゃんも」

「貴方もう黙って！」

ハリエットはこれ以上議論する気はないとばかり、オニールに拒絶のてのひらを向けた。その瞳は今まさに正義感に輝き、表情には誇りがあふれている。自分の主張の正しさを心から信じていなければ、そんな顔つきはできないものであり、基本が揚げ足取りのオニールの撹乱なんかには、流されないというわけだ。

そしてヴァレリアに向き直る。

第２６５話　お姫様たちの怪気炎（２）

「とにかくヴァレリア、そんな感じで、タティは今日も一方的にズタズタにされてると思うわ。わたしには分かるの。あいつはすんごく嫌な奴だって」
「でしょうね」

するとヴァレリアは引き続き腕組みの姿勢でハリエットを支持した。

「真の悪人は、巧妙に善人の仮面を被るものよ」

ハリエットは重ねて同意した。

「その通りよ。貴方みたいに性格が悪くても、裏表のない女は感情をすぐ漏らしちゃうからまだ分かりやすいのよ。まあそれはそれで問題だけど。
でもあいつは恐ろしい女よ。裏で巧妙にやるから。いい子のふりをする奴は幾らでもいるけど、あいつのあそこまでの化けっぷり、あの完成度は大したものよ。すごく腹黒い。特に男を味方につける手管は天性のものだわ」
「女をむかつかせる才能もね」
「言えてる」

そして二人はそこに友情さえあるかのように頷きあった。
ヴァレリアは続けた。

「まったく何だってあんな女狐がここに暮らしていられるんだか、意味が分からないお話よね。別に何処か他所でやってくれる分にはどうだっていいんだけど、わたくしの縄張りで好き勝手やって貰っ

たんじゃ、こっちは聞きたくもないあの女の賛美を聞かされるはめになるし」

「ここは君の縄張りなのか？　僕の城なのに……」

「ねえハリエット、そもそもあの女はアレックス様の何なの？　タティだってとても相応しいとは思わないけど、あの女は存在自体が憎たらしいのよね。もしかしてシエラ何とかは、アレックス様ともうそういう関係とかって持っているのかしら？」

「持ってないって信じたいわ、わたしは」

ハリエットが横目で僕を、やや疑いを含んだ眼差しで見た。

「でもアレックス様は優柔不断だから、基本タティにもシエラにも、どっちにもいい顔をしたがるの。アレックス様がもっとはっきりしてくれていたら、タティは傷つかずに済んでいるのにね。可哀想に、病気が治ったと思ったら今度は変な女がアレックス様の周りをちょろちょろして、所有権主張しているんじゃ、気の休まる暇もないと思う。

おまけにあいつったら、幾ら教えてあげても自分が嫌な女だって自覚がなくて、何かって言うと自分は正しい光のお姫様よ。

あいつって、とにかく自分だけがよかったらそれでいいの。自分の行動によってどれほど周りが傷つくかは考慮さえしない。あいつを見ていれば分かることだけど、とにかく自分が可愛いってろくでもない人間なのよ。自分と好きな男、これさえよければ他はズタズタになろうがどうでもいいの。

でもいちばん頭にくるのは、そういうゴミみたいな人間のくせに自分が善良だってみせかけようとすることに余念がないこと！　わたしはこれが本当にむかつくのよ。自分の悪事は勿論のこと、自分が性悪の嘘つきであることすら認めないずるい姿勢がね。

それで全面的に自分が悪いくせに何故かタティに謝ってとか言えちゃうあの性格！

信じられる!?　謝ってってどういうこと!?　自分がアレックス様を横取りしようとしている悪者の分際でよ!?
挙句タティを闇の魔女呼ばわり!　どう見たって、本当の悪役魔女はシエラなのにね!」
「嫌だわ、それ、もしかして光のお姫様と闇の魔女って童話の?」
ヴァレリアが、口許に左手のてのひらを当てると大仰に驚いて見せた。
ハリエットがそれに乗って、強く頷く。

「ええ、ええ、そうよ。そんなことを言うからには、わたし、てっきり彼女って十歳くらいだと思っていたのよ。だから赤ちゃんとはどうお話したらいいかって考えていたら、でも実は十八歳なんですって。全然そう見えなかったからびっくりしちゃった」
「なるほど、そういうキャラなのね。それは激しくうざい女ね……、何なの」
「ええ、ヴァレリア、本当に。あいつには本気で困っているのよ。とにかく自分は世界一可愛いお姫様の一点張りで、普通の常識では手に負えないんだから。
ここにいる男どもも結局は他所の男と同じで、シエラに鼻の下を伸ばしてわたしの言うことなんか頭から信じやしないし、ああいう巧妙な嘘つき女の対処はもう、どうしていいか分からないわ。
直接言っても駄目、かと言って誰かに言えば、あいつはたちまち弱った被害者づらして、何故かこっちが加害者扱いされるしでどうしていいのか……、正攻法が通じないなんてあいつ絶対性格最悪なのに、すぐいい子ぶるのがほんと腹立つ!」
「わたくしは基本的に女の味方だけど」
ヴァレリアは言った。

「女同士の暗黙のルールを守らないヤツは、ちょっと生かしておけないわね。女同士は持ちつ持たれつ。一人では生きられない弱い存在だからこそ、お互い傷つけないように気を遣いあって、いたわりあって生きているのよ。なのに……、ときどきいるのよ。そういう女同士の暗黙の優しさにつけ込んで、自分だけが得をしようとする、そういう無法者がね」

「確かに。先日も、シエラは薔薇君様の侍女たちにも露骨に嫌われてたわ。一見すると侍女たちが性格悪いんだろうって思える場面だったし、大勢で一人を叩くっていうの、フェアじゃないからわたしは好きになれないけど、前後のシエラの言動を考えると同情の余地はなかったわ。タティに死ねって言ったも同然だったもの。アレックス様たちは、今ではそのことがまるでなかったことみたいにシエラを許しているけど、わたしは違う。あんな傲慢な発言は一生忘れないわ！　侍女のみんなだって、きっとそれに怒ってくれていたのよ」

ハリエットはいよいよ怒りをにじませて続けた。

「あいつ、自分の恋の成就のために邪魔だからタティを助けないでって王子様に言ったんだから！　タティがいなくなったほうが都合がいいから、タティを助けないでって！

あのときわたしは本当に悔しくて……、今にも飛び出して行って薔薇君様にそうじゃないって訴え出しそうだった。シエラの言い分は違うんだって。

だけどわたしの立場ではそれは許されないことだったから、何も言うこともできないし、とにかくとても悔しくて、どうしていいか分からない泣きたい気持ちを抱えているしかなかったわ。あんなのって、あんまり理不尽よ！

そしてそのとき思ったの。これは子供の頃、愛人女が家に乗り込んで来て、お父様にお母様よりも自分を選べって、迫ったときのよう

な状況だって。その面の厚い愛人は今では継母よ。シエラが薔薇君様に、まるで自分の窮状を訴えているかのような素振りで実は巧妙にタティを切り捨てて欲しいと懇願しているとき、わたしには、これから起こるおぞましい未来を垣間見せられたような気がしたわ。わたしの人生には、それは既に一度起こったことだったからよ。あのときのシエラの奴の弱々しい態度の裏に隠された悪魔みたいな独善性を知ったとき、わたしは身の毛がよだつような何か途方もない悪い予感を感じたのよ。シエラは只の自己中の嘘つき女じゃない、もっと獣のように恐ろしい奴だって気がついたの」

「大袈裟だろって……」

「だからどうかタティは見捨てられませんようにって、お母様のようなことにはなりませんようにって、必死で神様に祈ったの！幸い、シエラの勝手なお願いは却下された形になったからよかったけど、それはたまたま実現しなかっただけのことで、あいつは紛れもなくタティの死を望んだのよ。タティの消滅をね。本当に……、まるでタティの背中を暗い死の淵に押し出すみたいな……、そんなふうにわたしには思えたの！

彼女は本当に、あまりにも残酷なことをしでかしかけたのよ！なのに、あんなにひどいことがあったのに、アレックス様たちが何故あいつをああも簡単に許せているのかまったく理解できないわっ……！

だって、これがしょうがないで許されること？　誰がどう見たって、シエラの奴はあの時点で最低最悪の奴でしょう！？あいつは前から最低だったけど、これは幾ら何でも度を越えているわ！

タティが邪魔だからって、嫌いだからって、普通そこまで残酷なことを思いつけるの！？」

第２６６話　お姫様たちの怪気炎（３）

あのときは殿下が目の前においでだったこともあって、そこまで深く考えていなかったと、僕は心の中で少し言い訳をした。僕はタティが助かったんだからそれでいいかと思っていたのだが、ハリエットとしてはどうやらそれでは収まりがつかなかったらしい。

ハリエットにとってタティは友人であり、血の繋がった親戚でもあるから、これは自分の家族を攻撃されたのに近い憤りがあるのかもしれない。率直なミーティングの不足を感じていた。主人と魔術師の意見が乖離しているのはいいことじゃない。それで僕は言った。

「じゃあ、話しあおうよハリエット。そのことについて」

だがハリエットは賢しげな瞳を僕に向け、断固首を横に振った。

「今更話しあっても、シエラへの好感度が上がることはもうないわ。これまでに何度となくあの女の性格の悪さを見て来たんだから」

「そっかな、シエラたん、性格悪いかー？　頭は悪いだろうけどな。頭が悪いってか、丁度女どもの鼻につく匙加減の天然っぷりという意味で」

「だいたい話しあったところで、貴方がシエラを擁護することは目に見えているし、平行線だわ。もうどんな取り繕いも通用しない。普通の神経持ってる子なら、あんな酷いこと王子様に依頼しないもの。あんな汚い卑怯者！

貴方もせいぜい、シエラを庇うような言動だけは慎んで頂きたいわ。それタティがすごく傷つくから。好きな人がほんのちょっとでも他の女を庇っただけで、女の子は死にそうになるんですからね！」

「庇うって言うか、だって、君も事情は分かるはずだろう……」

僕は困って言った。

「いいえ、分からないわ！」

「まあまあ、お嬢ちゃんは落ちつけって」

「落ちついてなんていられるものですか！　このことは、近いうちに必ず何とかして貰わなくちゃいけないことだったんだもの！　あいつのタティに対する無礼で挑戦的な態度、それだけだって許せないのに、挙句タティを助けないでとか……、恋敵が邪魔だからって、本当に殺そうとするとかあいつ正気を疑うわ！　なのに外づらだけはよくて、男受け抜群のいい子ぶって本性を誤魔化してるっていう話をしているのよ、もう貴方煩いって言っているじゃない！」

「でも本性も何も、そりゃあ侯爵令嬢にとって眼鏡みたいな立場の女の認識なんかはせいぜいそんなもんだろ？　友だちじゃねーんだから、邪魔なら追っ払うわな」

「貴方もう黙って！」

怒れるハリエットは、とうとうオニールを全身で威嚇した。

「いやーんっ、ハリエットちゃんがこわーいっ」

するとオニールが喜んで両手の拳を頬に当て、不気味に身体をくねくねしてみせる。

「もっと僕ちんを構って構って」

しかしハリエットはそれを無視した。

「ヴァレリア、とにかく、あいつは自分の幸せのためにタティを犠牲にすることに何の躊躇もなかったの。タティが傷つこうが死のう

が、彼女は意に介さなかったのよ。もうわたしたちに対して威張っていられる侯爵家の娘なんかじゃないくせに！
アレックス様が本当はタティのものだってこと、認めたくないからって……、そんなことまでやる女よ。
こうやって無力な女の子たちは、権力を持つ自称か弱いお姫様によって、何食わぬ顔で、立場も、夢も、心さえ、いろんな意味で殺され続けているんだろうって思ったわ。これが実態なの」
「事情がよく分からないけど、情景は目に浮かぶようだわね」
ハリエットの言い分に、一方のヴァレリアは熱心に同調する様子だった。
「階級が上がれば上がるほど女の内面の質が落ちるって言う人がいるけどそれ当たってる。ちやほやされて育った女にろくなのはいないのは、歴史的な事実ですもの。わたくしたちみたいな気苦労や困難を知る素直で優しい女と違って、そのての女ってほんと、恩知らずで、無自覚に性格が悪くて、了見が狭くて傲慢で、深く他人を配慮できない、自分のことしか考えられない輩だから」
オニールのじゃあ少なくともおまえらは明らかに後者だなという言葉は掻き消された。
ハリエットは言った。
「その通りよ。シエラはまさしく典型的にそうよ。あの女の自己陶酔と身勝手ぶりには心底イライラする。外づらばかりはご立派だけど、選ばれし光のお姫様の自分が、運命のアレックス王子と愛しあうっていう馬鹿げた妄想のためなら、周りの人間を傷つけまくって平気でいられるんだから！
人を虐めて傷つけても、平気な顔して暮らしていられるなんて、あいつは最低に下劣な女よ！

だから普通に考えて、あんな嫌な性格のあいつのポジションは絶対ヒロインの仇役でしょう！？
なのに頭に来るのは、あいつヒロインみたいな容姿をしてるから、誰もあいつの本性に気づかずに、あいつをヒロイン扱いするのっ！
そのせいで、いつだってあいつがお姫様なのよ。お姫様扱い、お姫様の役まわり……、みんなに注目して貰って、綺麗、可愛いって褒めて貰って、男の人に際限なくちやほやされて、悪いことをしてもお転婆さんがおイタしちゃったで済ませて貰える美味しい役目は全部あいつが一人占め！
他の頑張ってる女の子たちや、タティや……わたしじゃなくて！
いつだってあいつだけ！　シエラだけがいつもいつもいいとこ取りなのっ！」

ハリエットは両手を強く握りしめて訴えた。

「王子様にさえ依怙贔屓されて、いつも最後には報われてばかりで、今まで一度たりともそういうみじめな役まわりで終わったことがないから、あいつはあまりにも人の痛みに無頓着なのよ！　しかも最悪なことに自分では自分が優しいと思ってる！」
「おまえもお姫様になりたいんだったら、なったらいいじゃん。僕がお姫様扱いしてやろうか？」
「その上に後出しの訳の分からない女が、いきなり現れてアレックス様と結婚して自分だけハッピーエンドになろうだなんて、そんな横暴が許されるわけがないわっ！」
「そんなマジで怒らなくたって、お嬢ちゃんが思うほど世間の男はシエラたんに夢中じゃないって。男だって馬鹿じゃないんだから、彼女、重いわ幼稚だわでまともにつきあえなさそうだから僕なんか寧ろ引くし」
「勘違いしないで、これは別に嫉妬をして言っているわけじゃないの、一般的な女の本心のことを言っているだけよ、でも、それでな

くても、シエラみたいなああいういやらしい横入りの女って、わたしは絶対に許せないの！　人間として許せないの！
後から出て来たくせに人のお父様を横取りして……、お母様の人生を壊したあの女とまるで同じよ……、お母様の嘆きや無念なんて知らん顔で、愛人上がりの卑しい女が、今ではお父様の妻になって人生を謳歌してる！
でもわたしに言わせれば、あいつは今でもただの汚い愛人よ！　お父様の前では行儀よくしているけど、あいつの本性はお母様の墓石に唾を吐きかけるようなメンタリティの女よ！」

ハリエットは頬を紅潮させ、自分の母親の話で感極まってしまったのだろう。しまいにはまるで子供のような痛々しい涙目でヴァレリアに問い質した。

「ねえヴァレリア、いったいどっちがヒロインだと思う？　結局ずるがしこく立ちまわって、生き残ったほうがヒロインなの？　お父様を勝ち取ったと、大声で親戚や世間に喧伝できる継母のほうが結局は相応しくて正しいの！？
お母様がいけなかったから、至らなかったから男爵様から罰を受けたんだって、ハリエットは決してお父様に逆らってはいけないよって、泣きながら言っていた母方のお祖父様のそういう解釈が正しいって言うの？　違うわよね、違うわよねっ……！？」
「しょうがないわね、少し落ちつきなさいよ」

ヴァレリアは長い黒髪を背中に流し、さすがにいつもの高慢ちきな表情には多少の同情を乗せて、半泣き顔で興奮するハリエットの細い肩を手で押さえた。

「つまり……、まあ、こういうことね。おまえはタティを死んだ自分の母親に、そしてシエラを意地悪な今の継母に重ねてるってわけ

なのね。それで他人事なのにそんなにいきり立ってシエラ憎しになってるってわけか」

「だったらどうだって言うの！？　別に隠すつもりなんてないわ。構図はほとんど一緒でしょう！？」

「そりゃあ、カティス家の後妻が輿入れするまでの話は有名だから。噂の域は出ないけど、いろいろと話があるのよね。

結婚十年で期限切られたなんて表向きの体裁話だって、男子が産めなかった女が悪いから殺されて当然なんてそんな無茶苦茶な話、誰が納得するかって感じだけど。そもそもそれ自体が言い訳なんじゃないかって、確かに今でもまことしやかに言われているわね」

「その通りよ。あの継母がわたしのお母様を殺したのよ。そしてシエラはうちの継母と同じなの。いちばん重なるところは卑劣な性格の女のくせしていつまでも善玉ヒロインぶってるところや、そのくせあの図々しくて自己中な醜い性格よ！

あいつらは犠牲者の涙なんか考えようともしない……！

他人の夢や人生を潰してもそんなのお構いなしで、まんまとお母様の居場所を乗っ取って、当然のようにお父様に甘えて幸せひけらかし放題！

だからうちの継母がそうしたように、シエラもそのうちタティを傷つけかねないの。だってあいつら同じだもの！　わたしには分かるの！　自分の目的のためなら何でもする奴だって。これは女の直感だし、わたしには実体験があるからよ！

だからわたしは全力でタティを守るし、シエラが降参してアレックス様から離れて行くまであいつを赦すことはないわ。文句あるのっ！？」

「いいえ。でもそんなに熱くならないでよ」

ヴァレリアは息を吐いた。

「まっ、目の前で過去のトラウマと再び同じようなことが起こって

いるなら、今度こそ割って入りたくなるのが人情なのかしらね。それほど母親を失ったおまえの幼少期のトラウマは深いってことか。それじゃどうやらここは、わたくしの出番らしいわね。確かに、おまえの話を聞く限り、シエラって女の根性はいちいち許し難いものがあるわ。ハリエットの継母然り、性悪女って奴はよく善良さや親しみなんかで巧妙に自分を粉飾するから、外野からはそいつの本質が分かりづらかったりするんだけど。

そういうときはその女の行動を見ればいいのよ。ぶりっ子な態度や綺麗事言ってる口先じゃなくて、そいつがやってることをね。そういうの取っぱらって行動だけを見ると、その女の本質が見えて来るから。

恋敵を始末してって権力者に依頼した時点で、シエラ何とかはかなり嫌な奴で確定ですもの。それどう考えても性格のいい女のやることじゃない。

それだけのことをやっているなら、もうすっぱりヒール役の汚名は被るべきなのに、意地でも清純ヒロイン気取りなのが同性としては余計に腹が立つわけよね。自分が可愛いとか特別だと思ってるブスって、いちばん質が悪いのよ。分かる。いいわ。おまえが行ってどうにもならないって言うなら、わたくしがこれから行ってシエラって奴をこの城から追い出してやるわ」

「ヴァレリア……、でも、どうやって？」

ハリエットが涙を手で拭いながら言う。

「あいつはヴァレリアが考えている以上に悪質でしたたかなのよ」

「いつも通りよ。ルール破りの女が、女のコミュニティでどういう目にあうかってことを思い知らせてやるだけ！

女の名誉を傷つける裏切り者の女は、男以上に女の敵ですもの！」

そしてハリエットとヴァレリアはパシンとお互いの手を叩きあった。

ぞっとするほど恐ろしい先制狂犬コンビが、ここに結成されたのである。

第２６７話　お姫様たちの怪気炎（４）

「じゃあアレックス様、手っ取り早くいきましょう。今すぐあの女の部屋にわたくしを案内しなさい！」

ヴァレリアは腰に片手を当て、もう片方の手で僕を指差し命令した。

「こっちはあちこちでファンクラブがどうとか、ブス専の能無し男どもの言う戯言だとしてもあいつの賛美を聞くのはうんざりしてたところだし、とにかく存在自体気持ち悪いから、できれば今すぐあの女を、少なくとも州からは追放して頂きたいんだけど。できないならわたくしがこれから行って追い出して差し上げるわ」

好ましくない話の成り行きになって来たと感じている僕は、できれば今の話に気がつかなかったふりをしたかったのだが、ヴァレリアは僕を逃がすつもりはないようだ。

シエラを立てればハリエットとヴァレリアに罵倒され袋叩きにされるだろう、かと言ってハリエットとヴァレリアを立てればシエラのご機嫌を損ねさせてしまうことは確実。あちらを立てればこちらが立たず、こちらを立てればあちらが立たない。進退極まったということで、僕はちょっと部屋で休もうかと思うのだが、それもヴァレリアが許してくれそうにない。

「えっ」

「えっ、じゃないわよ」

ヴァレリアは顔を険しくして僕に詰め寄った。

「ちょっと何ぼんやりと他人事みたいな顔してるのよ。今のハリエ

ットの切実な訴えを聞いていなかったわけ？」
「いや、聞いていなかったわけじゃないよ……。でも僕のほうが身分が上なんだ」
「だったら何なのよ！？　いいこと、あんなぽっと出の女が最後に旨みをかっさらって行くなんて、そんなアホらしい与太話が通ってたまるもんですか！
それじゃタティが報われなさすぎましてよ。幾らヒロイン役に相応しからぬイモだからって、それはさすがに不憫ってものよ！
芋娘が貴方と結婚してアディンセル家に入る云々の話はこの際横に置いておくとして。どっちも大した女じゃないけど、ここはどっちがマシかと言えばタティなんだから！」
「タティはイモじゃないよ」

僕は言った。

「いいから案内しなさい！」

僕は、ふるふると何度か首を横に振った。
それをやったら、ヴァレリアがシエラを虐めに行くのは明らかすぎるほどに明らかだからだ。まさかお友だちになりましょうなどとは間違ってもならない。即、日頃カイトに向けているような罵声のオンパレードが展開されるはずで、心臓の強いカイトならともかく、果たしてシエラにそれが耐えられるだろうかと考えると、それは耐えられないだろうから、断固案内するわけにはいかない。ヴァレリアが高飛車に笑い、ハリエットが勝ち誇った顔をして、シエラが跪いて泣かされている有様が僕の目には見えるのだ。

「それは、また今度にしようよ。今日は突然すぎるから」

そこで僕は気を遣って、ヴァレリアを執り成した。

「いいえ、今よ！　今すぐ！」

だが勝ち気なヴァレリアは引き下がらない。

「でも僕、今日は予定があるんだ。もう行かないと……」

「タティとハリエットが二人して馬鹿女に超困ってるわけでしょう、だったらそれは貴方の問題じゃないの。なんでそうやって問題から逃げようとするわけ！？　貴方まさかとは思うけど、自然に何となく収まりがついてくれるのを待っているなんて言わないでしょうね？　そんな都合よくいくわけないでしょう！」

ヴァレリアは僕を叱りつけた。

「僕のほうが身分が上なんだ……」

「貴方はあまりにこの問題を過小評価しているみたいだけど、これはとんでもなく重大な病巣よ。警告してあげるけど、このまま放置しておくと、あいつタティを抹殺にかかるわよ。ハリエットの話を聞く限り間違いない。あれは枕を濡らして引き下がるようなけなげなタイプじゃないわ、半端じゃなく図太い！　それに、欲しい物のためなら平気で相手を潰すわ。話を聞く限り、わたくしもそういう性質の女だと思ったのよ。この城に親族でもないのに居座っているなんて、それだけ聞いたってシエラって奴はそりゃあ相当のタマですよ。そういうのはね、何処かの下品なたかり屋と一緒よ」

ヴァレリアは、抜け目なく壁際に立っているカイトを見て、続けた。

「厳しく躾けて立場を分からせてやらないと、そういう輩っていう

のはどんどん増長して、そのうち母屋を取られることにだってなりかねないんだから。わたくしの受けた被害を見ていれば分かるはずよ！」

ヴァレリアは僕に凄んだ。

「なのに貴方は甘いわ、とにかく甘い！　すっかりあいつの演技に騙されて。彼女はきっと表向き善良な態度かもしれないけど、それがまず怪しすぎてよ。

そもそも侯爵令嬢が下級貴族の娘と男を取り合うって状況自体、プライドが許さないはずなんだから。さっきオニールもそれっぽいこと言ってたけど、普通に考えたって、彼女の内心は怒りに震えるほどでしょうよ。たかが召使いみたいな階級の女と同列に扱われて男を奪いあって、しかも自分の分が悪いなんて。

ましてやあの芋みたいなのが相手じゃ、シエラじゃなくたって、自分はこの不細工以下の女なのかって、その意味でももう芋娘の顔を見る度に憤死しそうなくらいでしょう。

もう財産もないような身の上で、貴方を得るかどうかで今後の人生がかかっているような状態なら、シエラは死ぬ気で貴方を奪い取ろうとしているに決まっているじゃありませんか。

いい夫を得るかどうかはいつの時代も女にとって死活問題だけど、貧乏人のシエラには後がないわけだからそりゃあ内心がっつくに決まってるわよ。何せ、そういう生き方がすごくみじめだと感じるわたくしのような高尚な感性は、あの馬鹿女にはないでしょうからねえ。

シエラはおっとりしてるから気にしないとかって、そんな馬鹿なことがあるわけはなくてよ！　貴方はご自分がカモにされていることに気づくべき！」

ヴァレリアは続けた。

「アレックス様、彼女は今の食い扶持を失わないために、内心ではそれはもう必死よ？　貴方、女って、そんなに美化した生き物じゃないのよ。

それにあいつはもともとがちやほやされ慣れてる階級ってことを忘れないで。物心ついたときから大勢に傅かれ、持ち上げられて生活をしてきた女ってことをね。確実に自尊心は雲を突き抜けるほど高いから。

そんなプライドの高い女が貴方、召使いの芋娘に負けることを認めるとでも思って？　名門出の娘って最後のブランドイメージも何もかも失墜することになるのに？　タティごときに負けたりしたら、あのシエラって女には、落ちぶれたブスってことしか残らない！

一時は州を預かる侯爵家の令嬢だった者が、今じゃ召使いのタティのあばら家みたいな実家よりも貧しいなんて……、恋人まで競り負けるなんて……、もう、どんなに控え目に見積もったって、タティをこの世から抹殺したいと考えるに決まっているじゃないのっ！」

「君、よくもそこまですらすらと罵倒言葉が出て来るものだね……」

僕は素直にヴァレリアに感心した。

「でも、君たちが言いたいことは分かるんだけど、それはちょっと違うと思うんだ。どうやらタティのことが気に入らないらしいっていうのは、当たってると思うんだけど。なんて言うか、シエラは君たちほど過激じゃないんだよ。男と平気で議論できる好戦的な君たちははっきり言って特殊な人種だ、でもシエラはそうじゃない。僕を好きだから、タティのことが今は気に入らないだけ。でもそれは今だけのことだよ」

「貴方、なんでそんなに分かったようなこと言ってらっしゃるのよ。って言うか、僕を好きだからって。いつも伯爵様のおまけのくせに、よくもそんな調子に乗った発言ができるわね」

「だって僕はシエラのこと別に……、まあ可愛いとは思うけど、結婚したいとかそういうふうには思ってないから。僕にその気持ちがないんだから、これ以上どうにかなることはないだろう？　男が女に力ずくで押し倒されるってことはないんだし。可能性はゼロだよ。だからそんな角を出してシエラをこき下ろさなくても大丈夫。僕はタティと結婚するんだから。

シエラが殿下にお願いした件も、あれたぶん深く考えてはいないと思うんだよ。確かに取り方によっては悪く取ることもできる行動だったとは思うけど、彼女はときどきやることが幼い女の子そのままって言うかさ。侯爵家の末っ子のお姫様だから、本当に世間知らずなんだ。

だから、タティに対する配慮が欠けているっていうハリエットの言い分とか、殿下にいろいろ申し上げたことも、そんなに悪気があったとかじゃないと思うんだ。物を知らない故の恐れ知らずと言うかさ。そんなに声を荒立てないで、ここは優しく許してあげてよ。ヴァレリアのほうがお姉さんなんだからさ」

「馬鹿な人ねっ、貴方女を過小評価しすぎよっ！」

僕がきちんと話してあげているのに、ヴァレリアが間髪置かずに僕に怒鳴った。

「何を言っているのよ貴方！　これだけ説明してあげてるのにまだ分からないわけ！？

だからシエラは男のそういう甘い解釈を逆手に取って都合よくそれを利用してるって言ってるのよ！　そして目敏く隙を見て貴方を奪い取ることも厭わない女だって！

貴方、女は男が思っているほど愚かじゃなくてよ！

これだからボンクラは嫌いだって言うのよ、どうして男って奴はこうも易々と馬鹿女のぶりっ子演技に騙されるのかしらね！

ハリエットの証言が確かなら、貴方にだってこれまでそれと感じら

れる出来事は幾つもあったはずでしょう？
それなのにまだそうやってシエラの本性が分からない奴は、頭がよっぽど悪いか、それとも女をまったく知らないのか、それか感受性さえよっぽど鈍いかの全部よ！」
「女なら知ってるよ」
僕は女を知らないうぶな男ではないので、その言い草には少々釈然としないものを感じた。

「君は男を知らないだろうけどね。そうだ、君、今日はせっかく来たんだから、カイトとゆっくりお茶でもしたらどう？
考えてみれば、君たちはまだ二人きりで時間を過ごしたことってないんじゃない？　だから行き違いとかも生まれるんだ。婚約までしたのに、まだお互い、気持ちを通わせるっていう作業をしていないから。よければこの城をデートの場に提供するよ。うん、そうしなよ」
「いいから」
だがヴァレリアは不当なほどあっさりと男の僕を鼻であしらう。

「僕はアディンセル家の男子なんだ……」
まるで僕の相手をするのが面倒なときの兄さん並みの勝手なあしらい方なので、僕は文句を言った。

「だから何なのよ！　つまらない話題そらしは結構でしてよ。わたくしはその手には乗らないし。カイトとなんか別に話したくもない。あいつの近くに寄ると臭うから、強い香水でもつけて来ないと」
「じゃあ……、そうだ、それよりなんでハリエットと結託してまで、君がそんなにシエラにいちゃもんつけて嫌ってるの？

ハリエットがシエラをやたらと嫌う理由は、それは、さっきの話で何となく分かった気がするけど、でもヴァレリアにとってはそれこそ他人事だろう？　シエラと直接話したことってあったっけ？　シエラをこき下ろすより、そっちについて話そうよ」

「いいから！」

「いや、だって、幾ら君が無茶苦茶な性格だからって、さすがに何かおかしいじゃないか」

「煩いわねっ、ああ、鬱陶しい。貴方ね、男だと思ってそうやって何でも自分の思い通りになると思ってるんじゃなくてよ！」

「なんで僕が怒られるんだ」

「だって仕方がないでしょうっ！　ハリエットだけじゃないのよ、こういう事例は！」

「ハリエットだけじゃないって？」

「そうよ！」

ヴァレリアは言って、ヒールの靴を踏み鳴らした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1471d/

伯爵の恋人

2011年10月30日02時11分発行